満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

風水師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

【Ｎコード】
Ｎ８１５６Ｐ

【作者名】
風水師

【あらすじ】
ダークシグナー編後、消滅した鬼柳さんがリリカル世界にやってきます。
そして出会うのは満足に飢えた少女たちや騎士たち。
そんな顔してちゃ満足できねぇ。
もっと笑って満足しようぜ！　と鬼柳さんは頑張ります。
現在Ａ's　Ｓの空白期編。

ブルーノやイリアステル、遊星達が時々登場してます。

キャラ崩壊と原作崩壊してます。
それと一部オリジナル設定や設定改変があります。

嫌いな方はブラウザバックか注意してください。
それを踏まえたうえでご覧下さい。

プロローグ「ダークシグナーと少女」（前書き）

初めまして、風水師です。
まずはリリカルなのはの第一話から始まります。
拙いながらも頑張って行きたいと思います。

プロローグ「ダークシグナーと少女」

～サテライト　某所～

「■■■■～～ッ！！」

奇怪な鳴き声を上げて、冥界の王はその姿を消滅させた。
サテライトに集結したシグナーとダークシグナーの最後の闘い。
それは冥界の王と言う存在の消滅を持って終わりを迎えることになった。
敗北し、世界から消えたダークシグナーのメンバーも、その身を世界へと蘇らせる。

だが、何人かのダークシグナーは違ったようだった。
本来蘇るはずの世界に蘇らず、別の世界へとその姿を現すことになる。

それは、そのダークシグナーのうちの一人のお話。

プロローグ　「ダークシグナーと少女」

～海鳴市　某所～

赤い空。黒い森。
周囲の動物の息遣いが聞こえない夜の公園。

そこに、その少年はいた。歳の頃はまだ小学生ほどだろうか。
肩先まで伸びた金色の髪に黒い瞳。着ている服は、何処かの民族衣装を想像させる。

「っ！」

その少年はその公園の中で、荒い息を吐いていた。
チラリと民族衣装から覗く細い腕からは、少量の出血が見られる。

と、そんなとき、彼は何者かの気配を感じた。
慌ててそちらに視線を向ければ、大人の人間ほどの大きさを持つ巨大な怪物。

少年は小さく舌打ちすると、懐から何かを取り出した。
取り出した物は、赤い宝石。少年がそれを構えると、宝石が輝きだす。

赤い宝石から輝き始めたのは薄緑色の光。
それは徐々に魔法陣を形作り、異形の化け物に展開される。

『ッ！』

その少年の行動を危険と判断したのか。少年を見据えていた黒い怪物が動いた。
その巨体を物ともしない速さで、魔法陣を展開している少年に向かう。

一方の少年は、そんな相手の出方に再び舌打ちした。
彼の手元では、先ほどまで展開していた魔法陣が徐々に小さくなっている。

「妙なる響き、光となれ！　赦されざる者を、封印の輪に！」

少年が詠唱を続けると共に、怪物も更に動く。
その巨体を軽々と上空へ飛び上がらせ、上空から少年を見据える。

そして少年の姿を捉えると、黒い怪物は少年に向かって落下してくる。
落下してくるその怪物は、何処か不定形な形をしている。まるで毛糸の塊のようだ。

「ジュエルシード、封印！」

その黒い怪物は少年の目前に着地する。
一方、少年は詠唱が終わったのか。黄緑色の魔法陣が輝く。
少年の目前に着地した黒い怪物は、その魔法陣に飛び込んだ。
瞬間、怪物と少年の魔法陣から激しい輝きが溢れ出す。

『ォオオオオオオッッッ！！！』

黒い怪物の悲鳴のような、唸り声のような野太い声が響き渡る。
暫し魔法陣とぶつかり合っていた怪物だったが、魔法陣の力によってか。吹き飛ばされた。

体中から血液だろうか。赤い液体を撒き散らしながら、怪物は茂みの中に落下する。
魔法陣に吹き飛ばされた黒い怪物は、地面を這いながら少年から距離を取る。

どうやら予想以上に怪物へのダメージが大きいようだ。その姿に、先ほどまでの獰猛さはない。
このまま怪物を追えば、少年は怪物を倒せるだろう。しかし、少年は荒い息を吐きながら地面に手をつく。

「逃がし……ちゃった……」

少年の声からは、苦痛の色が見て取れた。
どうやら先ほどの魔法陣を展開するのに、ほとんどの力を使ってし

まったらしい。

逃げる黒い怪物を、悔しげに見つめながら少年は地面に四つんばいになる。

少年の腕からは、未だ出血が続いている。恐らく、体力も大分消耗しているだろう。

「追いかけ……なく、ちゃ……」

少年は酷い怪我を負いながらも、必死に黒い怪物を追おうとする。

しかし、身体の消耗は確実に少年を追い詰める。腕から力が抜けたのか。

ドサリと、少年は地面に突っ伏した。

手元からは先ほどまで使用していた赤い宝石が、地面に転がり落ちる。

『誰か……僕の声を聞いて……力を貸して……！　魔法の……力を……！』

地面に突っ伏した少年は、ここにいない誰かに向かって語りかける。

しかし、少年のその言葉は少年の口からは、発せられていない。

それだけ頭の中で語りかけると、少年の姿が光に包まれる。

まるで今の少年の状態を表すようなその光。力なく明滅している。

そしてその光が完全に晴れると、そこに先ほどまでの少年の姿はなかった。
いるのは一匹のネズミのような生物。そのネズミは、クタリと力なく横たわっていた。

※

海鳴市内のとある民家、高町家。その一室から軽快なメロディが流れた。
その室内にはベッドに勉強机など、一人部屋には必要なものが揃っている。

「♪～～♪～♪」

そして軽快なメロディはこんもりと盛り上がった布団の中から響いているようだった。
季節は春。未だ肌寒い季節であり、布団の中で眠っている人物も中々起き出そうとはしてこない。

「おい、なのは。起きろ」

「あぅ～……。おはよう、鬼柳さん」

と、中々起きて来ない人物を起こしに来たのだろう。一人の青年が室内に入る。
高い身長に、肩先まで伸びた薄水色の髪。そして顔に施された一本の黄色い線が目を引く。

彼――鬼柳　京介はこんもりと盛り上がっているベッドまで歩み寄ると、呆れた様に呟いた。
彼の視線はベッドの周りに散乱しているカードに注がれている。どうやら夜遅くまでカードを弄っていたらしい。

鬼柳がベッドの周りに散らばるカードを集めていると、こんもりと盛り上がった布団の中から一人の少女が這い出てくる。
肩先まで伸びた栗色の髪は寝乱れてボサボサ。よほど汚い寝方をしたのだろう。パジャマはしわしわになってしまっていた。

「まったく。夜遅くまでデッキを弄るのは止めろと言っただろ」

「うぅ～……。変な夢見ちゃった……。あ、でもでも！　面白そうなコンボを思い付いたんだよ！」

「そうか。だが、その話は着替えて朝食を食べてからだな」

「はーい」

鬼柳は集めたカードを机の上に置くと、呆れた様な視線をなのはへと向ける。
どうやら彼女はカードを使って新たなコンボを生み出したようだ。
しかし、そのせいで寝不足らしい。

相変わらずななのはの様子に鬼柳は嘆息すると、リビングで両親が待っていることを告げて部屋から出る。
なのはも鬼柳のその言葉に返事を返すと、ごそごそと布団の中から這い出てきた。手早くパジャマを脱ぎ捨てる。

なのはの部屋の中には少女らしいものは少なく、部屋の壁にはカードをメインにしたポスターが貼ってある。
この海鳴市。ひいては日本全土で大ブームを巻き起こしているカードゲーム。その名はデュエルモンスターズ。

その人気は凄まじく、各地で頻繁に大会が開かれたり、ニュースで大会の模様が伝えられるほどの人気ぶりだ。
かく言うなのはもデュエルモンスターズのプレイヤーであり、鬼柳や家族とデュエルモンスターズを楽しんでいる。

「っとと。危ない危ない。デッキをケースに入れて……」

なのははパジャマから自身が通う聖祥大附属小学校の制服を身につけると、机の上のカードの束を手に取った。
それを愛用のデッキケースの中に入れると、スカートの周りを走っているベルトにくっつける。これで身支度は完了だ。

「おっはよー」

「あ、なのは。おはよう」

「おはよう、なのは」

洗面所で髪形を整え、両親の待つリビングへとなのはは足を運ぶ。
するとリビングには既に両親が居り、母親である桃子はキッチンで朝ご飯を作っていた。

父親である士郎はイスに腰掛け、難しそうな表情で新聞に目を通している。
その一面を飾っているのはデュエルモンスターズのこと。このカードゲームはここまで浸透している。

なのははトコトコとキッチンで調理をしている母親の元まで歩み寄ると、彼女からお盆とカップを渡された。
これはなのはの日課の一つで、朝起きたらまずはリビングのテーブルにマグカップを運ぶことが仕事の一つである。

「士郎。恭也と美由希に声をかけてきた」

「ん。ありがとう、鬼柳君」

「いや……。世話になってるんだ。これくらいは当然だろ」

「ははっ。世話になっているのはこちらもだけどね」

と、なのはがテーブルにマグカップを並べていると、リビングに鬼柳が現れた。
彼は首元にぶら下げたハーモニカを揺らしながら、リビングに置いてあるソファに腰掛ける。

どうやら彼は自室でデッキを組んでいる兄と姉を呼びに言ってくれたらしい。
本来ならばそれはなのはの仕事なのだが、彼はときおりこうやってなのはを手伝ってくれる。

「そう言えば鬼柳さんと出会ってから大分経つのね」

「あぁ。悪いな、こんなに長い間厄介になって……」

「いやいや。鬼柳君には感謝しているよ」

キッチンからお盆に料理を乗せた桃子が現れ、リビングのテーブルに並べて行く。
そして桃子は数年前の記憶を思い出し、懐かしそうに表情を緩めた。
チラリと見れば、士郎も同様である。

鬼柳と出会ったのは今から数年ほど前。丁度、士郎が仕事で大けがを負って家族が大変な時期だった。
当時を思い出したのか。なのはは複雑そうな表情を浮かべている。
だが、すぐに笑顔を浮かべると鬼柳に近づいた。

「そうだよ、鬼柳さん。わたし、鬼柳さんとあえてすっごく嬉しかった」

「なのは……」

なのはは鬼柳の隣に腰を下ろすと、満面の笑みを浮かべて鬼柳に告げる。

当時の出来事はあまり思い出したくない記憶が多いのだが、鬼柳と出会えたのは別だ。

鬼柳はなのはの言葉に驚いたように目を見開くが、すぐにフッと表情を緩める。

そしてタイミングよくリビングに入ってきた恭也と美由希を視界に捉えると、皆にご飯だと告げた。

※

「サイレント・マジシャンで攻撃！」

「うげっ！　アタシのデーモン・ソルジャーが！」

「そしてダメージステップに手札からオネストを捨てるよ！
手札からオネストを捨てたことにより、相手モンスターの攻撃力分サイレント・マジシャンの攻撃力がアップ！」

「うそぉっ！　ちょ、なのはそれ反則！」

授業の終わった昼休み。なのはは屋上で親友の二人の少女とデュエルをしていた。
屋上では他にもデュエルをしている子供たちの姿があり、教師たちも特に煩く言うことは無い。

そしてなのはが手札から一枚のカードを墓地に捨てたことにより、このデュエルに決着が着いたようだ。
親友の少女――アリサ・バニングスはがっくりと肩を落とし、もう一人の少女――月村　すずかは楽しそうに手を叩いている。

「うぅ～……。相変わらず、なのはは強いわ……」

「にゃはは。私なんかよりも鬼柳さんの方が強いよ。私、一度も勝ったことないもん」

「鬼柳は別よ！　なによ、あのハンドレスコンボって！　手札ゼロからなんであんなに展開できるの！？」

「あれには私も勝てないよぉ……」

アリサは負けて悔しいのか。ガリガリと頭を掻きむしりながら、デ

ッキの調整を始める。
なのはの強さはこの学校でも上位に入るほどで、よほどのことが無い限り負けることはまず無かった。

だが、そんなのはにも苦手な人物が存在する。それは彼女の自宅に居候している青年――鬼柳。
彼は手札をゼロにして発動するハンドレスコンボと言う戦術を使い、不利な状況を一転。有利な状況へと変えるのだ。

以前に何度か彼とデュエルしたことのあるアリサはハンドレスコンボの恐ろしさを思い出したのか。
青空へと向かって大声で吠える。鬼柳に勝てない。なのはにも勝てない。色々とストレスが溜まっているようだ。

「そう言えばなのは。またアレ、借りたいんだけど」

「アレ？　多分、大丈夫だよ。鬼柳さんもあんまり使ってないみたいだし」

一旦デュエルを中止し、なのはたちは持ってきていたお弁当を広げる。
中から出てきたのは色取り取りのお弁当。しかし、会話の中身はデュエルモンスターズである。

そしてパクパクと食事を続けながら「あーでもない、こーでもない」と喋っていると、不意にアリサが話題を変えた。
それになのはは考える素振りを見せるが、すぐにコクリと頷いた。
アリサやなのはの言うアレとは、鬼柳の持つデュエルディスクであ

る。

鬼柳は未だ開発に成功していないデュエルディスクを何故か持っていたのだ。
それもソリッドビジョンにより、モンスターが実体化するデュエリスト垂涎の品。

デュエルテーブルの開発に成功はしているのだが、未だ小型化には漕ぎつけていない。
アリサはときおり鬼柳からデュエルディスクを借りて、デュエルディスクの開発を進めようとしていた。

「それにしても、なんで鬼柳がデュエルディスクを持ってるのかしら」

「う～ん。なんでも鬼柳さんの友達の人が作ったんだって」

「何者よ、その友達って……」

アリサは難しい顔をしながら、パクパクと食事を進める。
考える事は何故、鬼柳が開発に成功していないデュエルディスクを持っているのか。

もしもこれを名のある企業に売れば、かなりの額のお金を受け取ることが出来るだろう。
それほどまでに、デュエルディスクの小型化は難しいのである。と、アリサが嘆息した時、学校のチャイムが鳴った。

※

「♪～～♪～♪」

なのはたちが学校で勉強をしているころ。鬼柳は海鳴市内の公園に居た。
首元からぶら下がっているハーモニカを吹きながら、静かに瞼を閉じて演奏に集中する。

彼、鬼柳　京介は異世界人だった。文字通り、彼はこの世界とは別の世界からやってきた。
彼の脳裏に浮かぶのは、ダークシグナーとなってかつての仲間を叩きのめそうとする己の姿。

しかしかつての仲間――遊星の尽力により、鬼柳は彼と和解。彼とのデュエルに敗北したのだ。
そして鬼柳はその世界から消え去る。ダークシグナーとなった者は、デュエルで負ければ消えるのが定めだ。

だが、冥界の王が遊星達によって消滅したことにより、鬼柳達ダークシグナーも復活した。

しかし、鬼柳は違った。蘇るべき世界に蘇らず、新たな別の世界へと蘇ったのだ。

「（なかなか大変だったな……）」

鬼柳は当時を思い出して、内心で疲れた様に呟いた。この世界に来た当時は大変だった。
ダークシグナーになる以前の記憶が消え失せ、彼はセキュリティに捕まっていたと言う記憶しか無かった。
そこから混乱し、一通り自分の所持品を確認。
ひとまず場所を変えようとしたとき、彼はなのはと出会ったのである。

「……はやてか」

「えへへ。鬼柳兄ちゃん、おはようや」

「あぁ」

と、昔の記憶を思い出していたとき、彼の背後で草むらがガサガサと揺れた。
鬼柳は吹いていたハーモニカから口を離し、チラリと背後に視線を向ける。
するとそこには、車いすに乗った一人の少女がいた。年齢はなのは

とさほど変わらないだろう。
車いすに乗った少女――八神　はやてはキコキコと車いすを動かすと、鬼柳の座るベンチの隣に車いすを付けた。

「相変わらず、鬼柳兄ちゃんはハーモニカが上手やな」

「そうでもないさ。それよりも、今日もやるのか？」

「そらもう！　私、鬼柳兄ちゃんに勝てるようにデッキ組んだんよ！」

「そうか。なら、楽しみだな」

「ふふ。鬼柳兄ちゃんを満足さしたるで！」

「なら……」

「うん！　「デュエル！」」

プロローグ「ダークシグナーと少女」（後書き）

風水師です。
変なところで切ってしまってすみませんｏｒｚ

次回からはデュエル描写も入ると思いますのでよろしくお願いします。

第一話　「異変」（前書き）

頑張ってなんとか書き上げました。
デュエル描写がなかなか出来ない……ｏｒｚ

次回には入ると思いますので、それまでお待ちください。

第一話　「異変」

～海鳴市　某所～

「あぅう～……。また負けてもうた」

「いや。今のはかなり危なかった。大分上手くなってきた様だな」

「ホンマ？　それなら嬉しいわぁ。これで鬼柳さんに勝って満足できる！」

「悪いが、そう簡単に満足させてやるつもりはねぇよ」

「そんなぁ～！」

はやてとのデュエルを終え、鬼柳は場に出していたカードをデッキへと戻していた。

どうやら勝負は鬼柳の勝利で終わったらしい。はやてはグッタリと車いすに寝そべっている。

当初こそ物量で押していたはやてだったが、鬼柳の罠カードによって場を一掃。

その後鬼柳の伝家の宝刀であるハンドレスコンボにより、逆転勝利をもぎ取られてしまったのだ。

「さて。俺はそろそろ翠屋に戻る時間だから行くぜ？」

「うん。ほなら鬼柳兄ちゃん。またデュエルしよな」

「あぁ」

はやてが公園の隅でズーンと暗い雰囲気を醸し出している様子を、鬼柳は呆れながら見つめる。

そして腕時計に視線を向け、そろそろ帰る時刻だとはやてに告げれば、はやても俯かせていた顔を上げた。

はやてもベンチに広げていた自身のカードをデッキケースに収めると、自宅へ戻るために公園の出口へと向かう。

鬼柳はそんなはやての様子に軽く手を振ると、居候になっている士郎と桃子の経営する翠屋へと足を動かし始めた。

「（それにしても。この世界は分からねーことばかりだぜ）」

鬼柳は翠屋への道すがら、内心でこの世界のことを考える。この世界は色々とおかしい。

なにせ、この世界には世界に一枚しか存在しないはずのレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードが存在しているのだ。

本来ならばかつての友であり仲間であるジャック・アトラスの魂のカードが、何故この世界にあるのか。

色々と鬼柳は考えを巡らせてみるのだが、生憎と良い考えは浮かばなかった様だ。思わず深いため息が出てくる。

「やっぱり、ここは異世界ってところか」

鬼柳は深いため息を吐くと、自身を納得させるためにポツリとそう口に出した。

心の中に貯めておけば、いつか溢れだしてきてしまいそうだったから、あえて吐き出した。

そして鬼柳は翠屋へと急ぐため、その場から少し駆け足で翠屋へと向かう。

今日はどんな客が来て、桃子や士郎はその客をどのように満足させるのだろう。

鬼柳は内心でそんなことを考えながら、翠屋への道を急いだ。

※

「今日のドッヂボールのすずか、かっこよかったわよね」

「うんうん。かっこよかったよ！」

「そ、そんなこと無いよ！」

授業を終え、通学路をテクテクと歩いていく三人の少女たち。紛れもないなのは達だ。
既に日は暮れはじめ、歩道や車道は夕暮れの太陽によって徐々に暗くなりはじめている。

しかし三人にはそんなことはお構いなしなようで、ぺちゃくちゃとお喋りに花を咲かせていた。
会話の中心にあるのは、今日の学校の授業で活躍したすずかのこと。
なのはとアリサが褒め、すずかが照れる。

「なに言ってんのよ！　もう少しすずかは自信持ちなさい」

「そうだね。アリサちゃんは自信よりも実力だけどね」

「なんだってー！」

「うにゃあっ！　ひ、ひたいよアリサひゃん！」

アリサは照れて謙遜するすずかの背中をバンバンと叩きながら、彼女に前向きになる様にアドバイスする。
すずかは昔から引っ込み思案で、あまり自分の意見を言わない子供だった。だからせめて、これくらいは自慢して欲しいと思う。

なのはもアリサの言葉に頷くが、うっかり余計なことまで口走って

しまったようだ。
なのはの余計なひと言にアリサの目が妖しく光り、刹那。なのはの背後にアリサが現れ、なのはの頬を引っ張る。

ぐにぐにと伸縮自在ななのはの頬は柔らかく、涙眼で抗議をしてくるなのはの様子がアリサの嗜虐心に火を付ける。
そして更になのはの頬を引っ張ろうとするのだが、すずかの制止の声に、アリサは渋々となのはの頬から手を離した。

「うぅ……。鬼柳さんに言いつけるの」

「そしてまたデュエルでボコボコにされるんだね」

「うるさいうるさいうるさーい！」

なのははアリサから距離を取り、こそこそとすずかの背後に隠れる。
どうやら結構な力で頬を引っ張られていた様で、なのはの頬は赤く染まっていた。

なのははアリサの苦手とする鬼柳に言いつけようとするのだが、それはアリサの怒声で遮られる。
それになのはとすずかは苦笑し、「ごめんごめん」とアリサに謝罪。
アリサは拗ねた様な表情を浮かべながらも、二人の様子を許すのだ。

「あ、こっちこっち」

そしてようやく一息吐いたころ。アリサが公園のわき道に入る道を見つけた。
そのわき道は薄暗く、日中でも好んで入りたいとは思わないほどの不気味さである。

「ここを通ると、塾への近道なんだ」

「そうなの？」

「ちょっと道が悪いけどね」

アリサはそのわき道を覗き込みながら、この道を通った方が早いと二人に説明する。
すずかは首を傾げながらアリサに訊ねると、チラリとわき道に視線を向けた。なのはも覗きこむ。

アリサの言うとおり、見たところ道の状況はあまり良くない。デコボコと歩きにくそうだ。
だが、ここを通れば塾までショートカット出来るらしい。なのははポケットに入れていた携帯電話を取り出す。

今の時刻は午後四時。塾が始まるまであと十分ほど。余計な時間は作りたくない。
なのはとすずかはアリサの提案に乗り、暗いわき道へと足を踏み入れて行く。

「っ！？」

と、アリサとすずか。三人でわき道を歩いていたなのはが、唐突に足を止めた。
ハッと何かに気が付いたように、きょろきょろと周囲に視線を向ける。

「（ここ……夕べ、夢で見た場所？）」

「どうしたの？」

「なのは？」

「あ、うぅん。なんでもない」

それは昨夜、なのはが夢で見た場所と同じだったのだ。
丁度この辺りで、見知らぬ少年が奇怪な怪物と闘っていた。

今朝は鬼柳と新たに考えたコンボに夢中になっていたが、よくよく考えればおかしな話だ。
普通、夢とは突拍子もない展開が良く続くものだと考えられている。
だが、なのはが見たものは違った。

まるでおとぎ話の様な魔法。そして奇怪な怪物と闘う少年。
突拍子もないと言えば突拍子もないのだが、イヤにリアルに感じられた。

『助けて！』

「っ！？」

「？　なのは？」

「……今、なにか聞こえなかった？」

なのははいつの間にか止まっていた足を動かし、すずかたちと合流する。

そして取り留めもない話を続けながら出口を目指して歩き出すのだが、再び奇妙な感覚が襲った。

彼女の脳裏に響いたのは助けを求める声。と、いつの間にか立ち止まっていたなのはを不審に思ったのだろう。

僅かに前を歩いていたアリサとすずかが振り返り、訝しげな視線をなのはへと向けている。なのはは二人に訊ねた。

「なにか？」

「なにか……声、みたいな」

「別に……」

「聞こえなかった、かな。
誰かデュエルでもしてるのかな」

『助けて！』

「っ！」

アリサとすずかは、なのはの問いかけに首を傾げた。どうやら聞こえていない様だ。
だが、なのはには聞こえた様な気がしたのだ。自分を呼ぶ、弱々しい少年の声を。

そしてアリサやすずかが首を傾げる中、再び少年の助けを呼ぶ声が聞こえる。
今度は間違いなく聞いた。なのははいても立っても居られず、声が聞こえた方へと向かう。

後ろから聞こえてくるアリサやすずかの声を無視して、なのはは息を乱しながら駆けた。
そして彼女は見つけた。地面の上にうずくまる、一匹のネズミの様な生き物を。

「どうしたのよなのは！　急に走り出して！」

「あ、見て！　動物……？　怪我してるみたい！」

なのはが肩で息をしながら、地面にうずくまっているネズミの様な生き物に近づく。
地面にうずくまるネズミはピクリとも動かなく、まるで死んでしまっている様だ。

死んでいるのだろうか。なのはがそう考えてネズミを見つめていると、不意にネズミの耳がピクリと動く。
それになのははハッと目を見開いた。生きている。まだ、この小さな命は生きている。

そしてネズミは弱々しくも、首を上げた。するとネズミの首に掛かっている赤い宝石が目に付く。
通常、この様な宝石をネズミの様な動物に付けるのは珍しい。何処かお金持ちの家のペットだろうか。

なのはがそう考えていると、後ろから追いかけてきたのだろう。アリサとすずかが合流する。
アリサは突如なのはが走り出したことを訝しんでいたようだったが、なのはの足元に倒れるネズミを見つけたのだろう。表情を一変させた。

※

「ほぅ。フェレットを助けたのか」

「うん。それでお父さん。うちでそのフェレットさんを預かる訳にはいかないかな？」

場所は変わって夜の帳が下りた高町家のリビング。そこでなのはは家族に説明していた。
説明の内容は勿論、夕方見つけたフェレットのこと。あの後、フェレットを急いで近くの動物病院まで運んだのだ。

病院の獣医によれば、フェレットは極度に衰弱しているが命に別条は無いらしい。
それにホッと安堵の息を吐いた三人だが、新たな問題が待っていた。
フェレットを預かる場所である。

アリサの自宅では犬を飼っており、とてもフェレットを預かれる状況ではない。
それはすずかも同様で、すずかの自宅では猫を大量に飼っていたのだ。二人は預かる事が出来ない。

そこでなのはに白羽の矢が立ち、なのははこうやって両親に預かっても良いか訊ねている真っ最中だった。

「フェレットなぁ……。ところでなんだ、フェレットって？」

「あぅう……」

「いたちの仲間だよ、父さん」

「大分前から、ペットとして人気の動物なんだよ」

「そうなのか。……食用とかじゃ、無いよな」

「鬼柳さん！？」

なのはが恐る恐る士郎に訊ねる。もしも拒否されてしまえば、フェレットを助けることが出来ない。

味方になってくれそうな鬼柳と言えば、静かに食事を続けている。どうやら今回は静観するつもりらしい。

そして腕を組んで考えていた士郎が、不意に組んでいた腕を解いてなのはに訊ねた。思わず机に突っ伏す。

てっきり知っていて考えていたのだと思ったが、まさかフェレットを知らなかったとは。予想外も良いところだった。

恭也や美由希が説明すると、士郎も納得したのか。ほうほうと首を頷かせている。

そんな中、鬼柳は一人だけポツリと場違いな発言をしていた。思わずなのはは目を見開く。

「暫く預かるだけなら、篭に入れておいて。

そして、なのはがちゃんとお世話が出来るなら良いかも。恭也、美由希、どう？」

「俺は……特に依存はないけど」

「私も」

なのはが慌てて鬼柳に思いとどまる様に説得していると、桃子が士

郎に説明を終えていた。
どうやらなのはがキチンとフェレットを管理するようならば、預かることに対して何も言わないらしい。

恭也や美由希に訊ねてみれば、二人とも異存が無い様だ。笑みを浮かべながらコクリと頷く。
そして最後に鬼柳にも訊ねようとするのだが、鬼柳からは「俺に異存なんかあるわけねぇだろ」と言うありがたいお言葉を貰った。

こうして、フェレットの身柄は高町家に預かられることになった。
桃子はパンパンと手を叩くと、皆の視線を集めるとご飯を再開する。

「ふ。なのは、お前、満足そうな顔してるぜ」

「え？　そ、そうかな」

「あぁ。フェレットを助けて満足できたか？」

「えと……うん。これが自己満足かも、しれないけど」

「自己満足でも良いじゃねーか。人間は自己満足の塊みたいなもんだからな」

「にゃはは……」

そして食事が再開されると、鬼柳がなのはに声をかけた。
彼は口元をフッと上げると、なのはが満足そうな顔をしていると告げる。

満足。それは彼のアイデンティティの様なものだった。
一時は満足を忘れて生きようとしていたのだが、高町家の尽力によってそれは成されなかった。

なのはは鬼柳の言葉に照れたように頬を赤らめるが、すぐに表情を一転させる。
もしかしたら、これはただの自分の自己満足かもしれない。なのははそう思っているのだろう。

だが、鬼柳からすればそれは些細なことだった。人間など自己満足の塊だ。
ただ、その自己満足が動物を助けると言う結果的に良い物へと働いただけだ。

鬼柳がそう告げれば、なのはも安堵したように息を吐く。
そして再び箸を動かし始めたなのはを見て、鬼柳は満足そうに笑みを浮かべた。

※

「……ふぅ」

鬼柳は捲っていたカードの束を床の隅に置くと、ゴロリと床の上に背中を預けた。
彼が居る場所は高町家の私有地にある道場。彼はそこに数年前から寝起きをしていた。

出会った当初は自宅で寝起きしても構わないと言っていたのだが、鬼柳はそれを頑なに拒んだ。
大人一人分の生活費が加わり、高町夫妻には多大な苦労をかけているはずなのだ。これ以上苦労をかける訳にいかない。

「今のところ、帰る手掛かりは無し、か」

鬼柳はぼぅっと天井を見つめながら、ポツリと小さな声で呟いた。
それは今の鬼柳が帰るべき場所であるサテライト。かつての仲間たちの顔が浮かぶ。

だが、すぐに鬼柳は思い直したように頭を振った。今さらどの面を下げて会えば良いのだろう。
それに今さら帰ったところで、誰か帰りを待ってくれている人物などいない。自分はそれだけのことをした。

自分はこの土地に骨を埋めれば良いのだろうか。徐々にまどろみに落ちて行く鬼柳はそう考える。
そして徐々に瞼が下りて来た時、彼の耳に高町家の玄関の開く音が聞こえた。寝ころんでいた床から背を離す。

「こんな時間に、誰が何処に用があるってんだ？」

チラリと壁に掛かっている時計に視線を向けると、鬼柳は小さな声で呟いた。

今の時刻は夜中の十一時。外を出歩くにはかなり遅い時間帯だ。

よほどのことがなければ外を出歩くことはしないだろう。ならば誰がどんな理由で出かけるのか。

鬼柳は下ろしていた腰を上げると、道場の扉を僅かに開ける。そして外の様子を伺えば、駆けて行く少女の背が見えた。

「？　なのは……？」

玄関の戸を開け、外へ駆けて行く少女の背中。それは鬼柳にとって、見慣れた少女の背中だった。

鬼柳がなのはが飛び出していったのを捉えて数秒後。鬼柳は弾かれた様に立ち上がり、ハンガーに掛かっていたコートを手に取る。

それを勢いよく羽織り、道場の床に置いてあったデュエルディスクとデッキを手に取ると彼は外へ飛び出す。

もしも外に飛び出したのが恭也や美由希ならばさほど心配はしないが、未だ小学生のなのはが飛び出したとなれば話は別だ。

鬼柳は必要なものを持って外へ出ると、そのまま高町家のガレージへと向かう。そこには一台のＤ－ホイールが停まっていた。

それは鬼柳がダークシグナー時に使用していたＤ－ホイール。どう

言う訳か、彼と一緒にこの世界へと飛ばされたらしい。

「鬼柳君」

「！　士郎」

「なのはを追いかけるんだね？」

「……あぁ。夜中に子供が飛び出していくなんて、よっぽどな事だぜ」

「……なのはを任せても、良いかい？」

「……あぁ。なのはを護れないんじゃ、満足できないぜ」

「頼むよ」

鬼柳がＤ－ホイールからヘルメットを取り出し、頭に被る。
そしてＤ－ホイールのシステムを立ち上げているとき、ガレージに新たな人影が見えた。

人影の正体は自宅にいるはずの士郎。隣には寝間着姿の桃子の姿もある。
どうやら彼らはなのはが飛び出していったのを感じ取っていたらしい。鬼柳は驚いた表情を浮かべる。

そして鬼柳が驚いている最中、士郎は鬼柳になのはを追いかけるのか訊ねた。

鬼柳はそれに頷いて肯定。こんな夜遅くに飛び出していく子供など、平時ではあり得ない。

すると士郎と桃子は鬼柳の返答に、ペコリと頭を下げた。それに鬼柳は目を見開く。

鬼柳は慌てて頭を上げる様に二人に告げるが、二人は頑として頭を上げようとはしなかった。

二人曰く、幼い頃になのはを独りぼっちにした自分たちに追いかける資格など無いと思っているらしい。

鬼柳はそれを否定したいのだが、生憎と時間が無い。鬼柳はD-ホイールに跨ると、グリップを回してエンジンを唸らせた。

※

「はっ、はっ、はっ、はっ……！」

薄暗い夜の街を、動きやすい服装に身を包んだなのはが疾走していく。

彼女の目的地は夕方、怪我をしていたフェレットを預けている動物病院。

つい先ほど、親友の二人にメールを送り眠りに就こうとしていた彼女の脳裏に、昨夜と夕方に聞こえた声が響いたのだ。
それは助けを求める声。幻聴かとも思ったのだが、こう何度も聞いていては幻聴などではあり得ない。

そしてなのはは居ても立ってもいられず、パジャマから服を着替えると夜の海鳴市に飛び出したのだ。
はぁはぁと肩で呼吸をしながら、なのはは内心でしまったと反省する。鬼柳か士郎に一言言ってから出てくれば良かった。

もしも鬼柳に言っていたら、彼のD‐ホイールと言うバイクの様な乗り物に乗せてもらえたのに。
なのはは内心で後悔しながらも、足を必死に動かして動物病院を目指す。しかし内心では満足できていない。

「なのは！」

「はっ、はっ、き、鬼柳さん！？」

「ったく。こんな時間にどこ行こうってんだ」

と、なのはが必死に足を動かしていると、彼女の後方から聞き慣れぬエンジン音が聞こえてきた。
チラリと後ろを振り返れば、あり得ない形状をしたバイクの様な乗り物が迫ってくる。そして乗っている人影。

それは何を隠そう鬼柳だった。彼は愛用のヘルメットを被り、猛ス

ピードでなのはの後を追いかけてくる。
そしてなのはが立ち止まれば、彼はなのはの隣にバイクの様な乗り物――D‐ホイールを停めた。

「え、えぇっとそれは……！　えと、まずは病院に行って！」

「？　病院？」

「えぇっと……夕方、フェレットさんを預けた動物病院！」

「ったく。仕方ねぇな。ほれ」

「わにゃ！」

鬼柳はD‐ホイールをなのはの傍に停車させると、何処へ行くのか彼女に訊ねる。
すると彼女は僅かに逡巡した様子を見せたが、意を決したかのように病院へ向かって欲しいと告げた。

鬼柳としてはなのはと一緒に病院に向かうのは構わない。いくら平和な海鳴市と言えど、変質者がいるかもしれない。
しかし、病院とは何の病院のことなのだろうか。外科専門の病院かもしれないし、内科に消化器科など様々な病院がある。

なのはもそれに気が付いたのだろう。ハッと我に返ると、フェレットを預けた動物病院だと説明した。
鬼柳はそれに眉を顰める。こんな夜中に、夕方拾ったフェレットを預けた動物病院へ向かうとは何事だろう。

しかしなのはの表情を見れば、動物病院へ向かうことを決めている表情だった。
この表情のなのははテコでも動かず、説得に時間がかかる。ならば連れて行って様子を確認した方が早い。

鬼柳はD-ホイールから予備のヘルメットを取り出すと、なのはに向けて放り投げた。
なのははそれを慌ててキャッチ。何度か両手でヘルメットをお手玉したが、落とさなかったので問題は無い。

「いくぜ。しっかり掴まってろよ」

「う、うん！」

なのははヘルメットをかぶり終えると、鬼柳の背中に飛び乗った。
そのまま鬼柳の腰に手を回すと、ギュッと瞼を閉じる。これで準備はオーケーだ。

そして鬼柳の問いかけにコクリと頷くと、D-ホイールのエンジンが唸りを上げて行く。
徐々にD-ホイールの速度が上昇し、なのはと鬼柳を乗せたD-ホイールは疾風の如く駆け去った。

※

「……此処か」

海鳴の街を疾風の如く駆けていた鬼柳のD-ホイールが減速し、やがて停車する。
鬼柳の視界に入るのは、見慣れぬ建物――動物病院だった。彼はヘルメットを脱ぐと、D-ホイール内部に仕舞う。

「それでなのは。ここに何の用が「ッ!?」なのは？　ッ!?　これは一体……」

そして鬼柳はこの場に何の用でやってきたのか、なのはに訊ねようとした。
しかし、それはなのはの苦しげな表情に遮られる。彼は慌ててなのはに駆け寄った。

だが次の瞬間、鬼柳の脳裏を鈍い痛みが通り過ぎて行く。まるで脳を直接殴られた様な感覚だ。
なのはと鬼柳が頭を抑えて頭に響く鈍痛に耐えていると、周囲の景色が変化していく。

周囲の景色から色が抜け落ち、彼らの視界に映るものは黒と灰色だ

けの世界になってしまった。

「くっ……！　……コイツは、一体」

「あれは！」

鬼柳はようやく頭から去った鈍痛に眉を顰めると、周囲の景色を見て表情を歪める。
周囲の景色から色は抜け落ちており、とても自然現象などと過ごせるはずもない。

万が一に備えて鬼柳は腕にデュエルディスクを装着すると、なのはの何かを見つけた声が響く。
なのはが指差した方へと視線を向ければ、身体の至るところに包帯を巻いたフェレットが駆けていた。

慌ててフェレットの元へ近寄ろうとなのはは駈け出すが、それはフェレットの背後から現れた黒い影によって遮られた。
その黒い影は見た目に反して俊敏な動きでフェレットのいる場所へ向けて体当たりを放つ。瞬間、夥しいほどの砂埃が舞った。

「な、なになに!?　一体なに!?」

「来て……くれたの?」

「……喋った!?　鬼柳さん、これデュエルモンスターズの精霊かな!?」

「落ち着けなのは。精霊はカードに宿るもんだ。なのははそいつのカードを持ってるのか？
　と言うか、そもそもそんなモンスターカード、俺は見たことないぜ」

「そ、それもそうだね」

なのはと鬼柳が突然の事態に混乱していると、宙を舞っているフェレットの姿が見て取れた。
どうやら先ほどの黒い影の体当たりをなんとか回避したらしい。そのまま宙に投げ出されたようだ。

なのはは宙に投げ出されたフェレットをなんとかキャッチ。そしてようやく混乱を表に出すことに成功した。
しかしそんななのはの混乱は、あまりに自然に喋ったフェレットのせいで更に深まった。そろそろなのはの頭がオーバーヒートする。

「と。それよりも、まずはここを離れた方が良さそうだな」

「ッ！」

なのはが自身の混乱をなんとか納めていると、鬼柳はヘルメットを被りながらそう呟いた。
慌ててなのはも黒い影に視線を向けてみれば、黒い影は獰猛な瞳でなのはと鬼柳。それにフェレットを見つめている。

まずはこの場を退いて体勢を立て直さなければ。なのはと鬼柳はそう判断すると、どちらからともなくD・ホイールに跨った。

第一話　「異変」（後書き）

今回はここまでです。
次回はようやくデュエルが入ります。

そう言えば、次はなのはの覚醒シーンでしたか。

第二話　「ライディング・デュエル」（前書き）

長かった……。
今回はようやくデュエルです。
しかもライディング……。正直、失敗したかもです。

１月５日　修正
１月２２日　再修正

第二話　「ライディング・デュエル」

～海鳴市　某所～

「なるほど。魔法に資質、か」

「わ。私ってば魔法使いの資質があるの！？」

鬼柳のＤホイールに飛び乗り、なのはたちは海鳴の街を疾走していた。

後ろから例の黒い怪物は追ってくる様子は無く、その間に状況の説明をしてもらっていたのだ。

そして聞かされたのは、なのはにあると言う魔法の資質。

喋るフェレットは、なのはの魔法の資質を貸してほしいと言うのだ。

だが――

「ふ、ふぇえぇ～ん！　わ、わたし魔法の資質は要らないよぉ～！」

「え、えぇ！？」

「魔法よりもデュエルの資質が欲しいよぉ～！」

「でゅ、デュエル……？」

「ハッ！　よく言ったな、なのは！」

悲しいかな。この現代日本において、魔法よりもなのははデュエルの資質を望んだ。
しかも、魔法は使おうと思えばなのはとて使える。主に魔法カードを使うのだが……。

喋るフェレットはなのはの言葉に戸惑っている様だが、鬼柳は満足そうに笑みを浮かべる。
鬼柳はどうやらなのはのデュエルの腕前を認めている様で、将来強敵となるであろう相手がいなくならずに済んでホッとしている。

「――――ッ！　コイツッ！」

「うわぁっ！」

と、鬼柳が安堵の息を吐いたのも束の間、上空から黒い塊が降ってきた。
それは先ほど、フェレットを預けた動物病院でフェレットを攻撃していた黒い怪物。

黒い怪物の落下攻撃を咄嗟に回避すると、鬼柳は更にＤホイールのスピードを上げる。
瞬間、黒い怪物の赤く光る目の様な部分が鬼柳やなのはの乗るＤホイールを捉え、Ｄホイールに接近する。

『デュエルモード・オン。オートパイロット・スタンバイ』

「ッ！？　なに！」

「ど、どうしたの！？」

「スピードワールドが……起動しただと！？」

鬼柳の操るＤホイールの後ろを、黒い怪物が追いかけてくる。
そして徐々に距離を詰めてくる怪物を振り切ろうと鬼柳がアクセルを回した瞬間。

不意に、鬼柳の操るハンドルの下から無機質な男性の声が響いた。
瞬間、鬼柳のＤホイールと追いかけてくる黒い怪物から不可思議な空間が湧きでてくる。

それはスピードワールドと言うフィールド魔法が発動されたことを意味していた。
その事実に鬼柳は驚愕の表情を浮かべる。本来スピードワールドとは、Ｄホイールに搭載されているシステム。

だが、今回は何故か後ろの怪物からも発生している。
あまりにおかしい事態。鬼柳が戸惑うのも無理は無い。

「チィッ！　デュエルで勝たねぇと離してもらえねぇか」

「え、えぇえええっ！？」

「でゅ、デュエルって何！？」

鬼柳はチラリと後方を確認すると、自身の腕に装着されているデッキをホルダーにセットする。
するとセットされたデッキは自動的にシャッフルされ、鬼柳はセットされたデッキから手札を五枚抜き取った。

恐らく、後ろから追いかけてくる怪物が強制的にスピードワールドを起動させたのだろう。
サテライトで何度かセキュリティが犯罪者相手に同じことをやっているのを見たことがある。

鬼柳の背後でなのはやフェレットが驚いているようだったが、鬼柳は静かに手札を見ていた。
相手がデュエルで勝負を挑んでくるのならば、こちらもデュエルで返す。デュエリストならば当然だ。

「落ちつけよ、なのは。俺が負けるとでも思ってんのか？」

「……うぅん！　鬼柳さんは負けないよ！」

「ハッ！　上等だ！　なら――『デュエル！』」

鬼柳ＬＰ４０００　ＶＳ　黒い怪物ＬＰ４０００

「先攻は俺だ。ドロー！」

手札：５→６
スピードカウンター：０→１

「俺は手札から≪インフェルニティ・デーモン≫を攻撃表示で召喚！
リバースカードを一枚セットして、ターンエンドだ」

手札：６→４

インフェルニティ・デーモン
星４／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ１２００
自分の手札が０枚の場合にこのカードをドローした時、
このカードを相手に見せる事で自分フィールド上に特殊召喚する。
また、このカードが特殊召喚に成功した時、自分の手札が０枚の場合、
自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカード１枚を
手札に加える事ができる。

『コチラノターン』

「しゃ、喋った！？　鬼柳さん、怖いよっ！　凄く怖いよ！」

「落ち着けなのは。あれくらいどうってことねぇ」

「ど、どうってことないって……」

「……なんでジュエルシードの暴走体が言葉を……」

鬼柳がモンスターカード、「インフェルニティ・デーモン」を召喚し、ターンを終える。
先ほど召喚した「インフェルニティ・デーモン」は効果は強力だが、手札が０でなければ効果が使えない。

自身の手札と先ほど伏せたリバースカードと相談していると、なのはの怯えた様な声が聞こえた。
手札から視線を外し、チラリと後方を振り返る。するとやはりと言うべきか。なのはの顔色は真っ青だった。

どうやら後ろを追いかけてくる黒い怪物が喋ったことが怖いらしい。ブルブルと身体を恐怖に震わせながら、ピッタリと鬼柳の背中にしがみ付いている。

一方、喋るフェレットと言えば黒い怪物――ジュエルシード暴走体と言うらしい――が喋っているのを驚いている。
どうやら平時ではジュエルシード暴走体と言う存在は喋らない様だ。
しかし鬼柳は気にせずデュエルを続ける。

手札：５→６
鬼柳　スピードカウンター：１→２
謎の怪物　スピードカウンター：０→１

『手札カラモンスターヲセット。
リバースカードヲ二枚伏セテ、ターンエンド』

手札：6→3

「守備重視か……？　俺のターン！」

鬼柳
手札：4→5
鬼柳　スピードカウンター：2→3
謎の怪物　スピードカウンター：1→2

「リバースカードオープン！
≪インフェルニティ・インフェルノ≫！」

インフェルニティ・インフェルノ
通常罠
自分の手札を2枚まで捨て、捨てた枚数分だけ
自分のデッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを墓地へ送る。

「俺は手札を二枚まで捨てて、デッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを捨てた枚数だけ墓地へ送る！
　手札を二枚捨てて……デッキから≪インフェルニティ・ビートル≫と≪インフェルニティ・リベンジャー≫を墓地に落とす！」

手札：5→3

「さらに≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を守備表示で召喚！
バトルだ！　≪インフェルニティ・デーモン≫でセットモンスターに攻撃！」

手札：3→2

インフェルニティ・ネクロマンサー
星3／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ　0／ＤＥＦ２０００
このカードは召喚に成功した時、守備表示になる。
自分の手札が0枚の場合、以下の効果を得る。
1ターンに1度、自分の墓地から「インフェルニティ・ネクロマンサー」以外の
「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

『セットモンスターハ≪ワーム・オペラ≫。
効果ニヨリ「ワーム」ト名ノ付イタ爬虫類族モンスター以外ノモンスター
全テノモンスターノ攻撃力ヲ５００ポイント下ゲル！』

「ワーム？　聞かないカードだな……」

「うん。私も聞いた事ない」

ワーム・オペラ
星2／光属性／爬虫類族／ＡＴＫ４００／ＤＥＦ８００

リバース：「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスター以外のフィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力は５００ポイントダウンする。

ＩＦ・デーモン　ＡＴＫ１８００→１３００

鬼柳の召喚した「インフェルニティ・デーモン」が黒い怪物のセットモンスターを破壊する。
しかし消滅する刹那、セットモンスターである「ワーム・オペラ」が奇怪な光を発し、鬼柳の場に散開した。

Ｄホイールに乗っている鬼柳となのはは訝しげな表情で、先ほど黒い怪物が使っていたカードの名を口にする。
「ワーム」と言うカード群は聞いたことが無く、鬼柳となのはは相手がどんな戦術を使うのか分からない。

「考えていても埒が明かねぇ！　ターンエンドだ」

『コチラノターン！』

手札：３→４
鬼柳　スピードカウンター：３→４
スピードカウンター：２→３

『≪ワーム・グルス≫ヲ召喚！』

ワーム・グルス
星４／光属性／爬虫類族／ＡＴＫ１５００／ＤＥＦ３００
フィールド上に裏側守備表示で存在するモンスターが
リバースする度に、このカードにワームカウンターを１つ置く。
このカードに乗っているワームカウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。

『バトル！　≪ワーム・グルス≫で≪インフェルニティ・デーモン≫を攻撃！』

「くっ！！」

「きゃあっ！」

「う、うわあっ！」

鬼柳ＬＰ４０００→３８００

黒い怪物が新たに召喚した「ワーム・グルス」の攻撃により、「インフェルニティ・デーモン」は破壊された。
しかしここで、鬼柳達を予想外の出来事が襲う。鬼柳のモンスターが破壊された瞬間、彼らを謎の衝撃波が襲ったのだ。

鬼柳が慌てて後方を振り返れば、ソリッドビジョンの
「インフェルニティ・デーモン」をすり抜ける様に相手モンスターの巨大な手が見える。
そして相手モンスターの攻撃は鬼柳達の乗るＤホイールを直撃。Ｄ

ホイールは僅かにバランスを崩すが、鬼柳はなんとか体勢を整える。

「くっ。相手の攻撃は素通りか。しかも実体化のオマケ付き」

「えぇえええっ!?　じ、実体化!?　それじゃ私、さっきアレに殴られたの!?」

なんとかDホイールの体勢を立て直すと、鬼柳は苛立たしげに口走った。

先ほどの映像を見た限りでは、こちらの衝撃波はまず相手に届かないと見て良いだろう。

ならばこのまま、相手の攻撃を受け続けるのは不味い。

今はまだ２００ほどだが、１０００を超えるダメージを受けてはなのはが無事か分からない。

一方なのはと言えば先ほどの恐慌状態から立ち直った様で、

今は「ワーム・グルス」に殴られて気持ち悪そうにしている。

「（どうする？　このままデュエルを続けて良いのか？）」

鬼柳は後方に迫る黒い怪物を視界の端に捉えながら、必死に思考を回転させる。

このままデュエルを続けても、相手が追撃を止めるか分からない。

否、止めるだろう。

なにせ相手はデュエルをしている。ならば敗者は勝者に逆らう様な真似はしない。
ならばもう一つの懸案事項を考える。それは、このままライディング・デュエルを続けても良いのか。

先ほどの攻撃を見る限り、相手の攻撃はすべて物理的に通る様になっている様だ。
自分一人ならば問題は無いのだが、背中にくっついているなのはが耐えられるか分からない。

しかし一度デュエルを受けてしまった手前、Dホイールが故障するなりしないとデュエルを中断できない。
このままデュエルを続けても良いのだろうか。鬼柳はそれを考えながら、自身の手札に視線を落とした。

「ど、どうしよう……。このままじゃ鬼柳さん、怪我しちゃう」

「あの、すみません」

「ふぇ!?　ど、どうしたの？」

「これを使ってください！
これを使えば、相手の攻撃を防ぐことが出来ます！」

「コレ……暖かい」

鬼柳がデュエルを続行するか思案中のとき、喋るフェレットはなのはに声をかけていた。

どうしてジュエルシードの暴走体が言葉を喋っているのか。何故カードゲームをしているのか。

考えることは色々とあるのだが、まずはこの現状を切り抜けるのが先だと判断したようだ。

フェレットは自身の首にぶら下がっている赤い宝石をなのはへと渡す。それをなのはは受け取った。

「それを手に、目を閉じて心を澄ませて。僕の言葉を繰り返して」

「え、えぇっと……！」

なのはが受け取った赤い宝石は、仄かな暖かさを宿していた。

それになのはは驚きの表情を浮かべるが、いかんせん時間が無い。

喋るフェレットの指示に従い、なのはは赤い宝石をギュッと握り込んだ。

そして鬼柳の背にギュッとしがみ付きながら、目を閉じて必死に心を澄ませる。

「いくよ。僕の後に続けて」

「う、うん……」

「我、使命を受けし者なり」

「わ、我、使命を受けし者なり……」

なのはがフェレットの後に続けて言葉を続けると、赤い宝石が輝きを増す。
その輝きは徐々に大きくなっていき、なのはの両手から溢れだそうとしているほどだ。

「契約の元、その力を解き放て」

「えと、契約の元、その力を解き放て」

「風は空に、星は天に」

「風は空に、星は天に」

「そして、不屈の心は……」

「そして、不屈の心は……」

「「この胸に！」」

「「この手に魔法を！　レイジングハート、セットアップ！」」

『スタンバイ・レディ！　セットアップ！』

※

『カードヲ二枚伏セテ、ターンエンド』

「俺のターン！」

手札：２→３
鬼柳　スピードカウンター：４→５
謎の怪物　スピードカウンター：３→４

一方、後ろでなのはが何をしているか知らず、鬼柳はデュエルを続けていた。
減速して何処かでなのはを下ろそうにも、現在の運転はオートパイロット。減速出来ない。

ならばこのデュエル、これ以上ダメージを受けずに勝利する。鬼柳はそう決心すると、カードをドローした。
引いたカードはとある罠カード。これを使えば、一気に手札を０にして鬼柳の伝家の宝刀であるハンドレスコンボを使える。

「リバースカードを一枚セット。新たに≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を召喚して、ターン――なに！？」

『コ、コレハ……！』

鬼柳は先ほど引いたカードをデュエルディスクにセットすると、エンド宣言を宣言しようとした。
だが、それを宣言するよりも早く。鬼柳の背後から桜色の光の奔流が空高く流れ出している。

突然の事態に鬼柳はエンド宣言をすることすら忘れ、後ろを思い切り振りかえった。
すると、視界に飛び込んでくるのは白いコートを羽織ったなのはの姿。

腕にはコートとお揃いの白いデュエルディスクを見に着けている。
その姿はまるで、今の鬼柳と色違いのコートを身に着けている様だった。

「なのは!?」

「鬼柳さん、交代して!
私がデュエルすれば、あの怪物を倒せるよ!」

「なに!?」

鬼柳が突然変わったなのはの姿に驚いていると、なのはが身を乗り出しながら鬼柳に告げる。
それは先ほど、フェレットから聞いた言葉を元にして出たなのはの言葉だった。

あの黒い怪物はジュエルシードと言う宝石が暴走している姿。
それを鎮めるには魔法の力を使って暴走を鎮めなければならない。
しかし、鬼柳は魔法が使える訳では無ければ、魔法を知る人物――
魔導師でもない。
だから鬼柳を助けるためになのははフェレットから宝石を受け取った。そして現れたのはデュエルディスク。

「ダメだ。お前に怪我をさせちゃ、士郎に合わせる顔がねぇ」
「でも、私は鬼柳さんが怪我なんてしたら満足できないよ」
「なのは……」
「大丈夫。勝とう？　勝って、一緒に満足しようよ」
「――――っ！　仕方ねぇ！」

なのはは鬼柳の背後から身を乗り出しながら、自身がデュエルを続行する意思を告げる。
デッキは持っていないが、鬼柳のデッキを使えば勝てるだろう。どんな動きをするかは分かっている。

しかし鬼柳はなのはの言葉に良い表情をしない。士郎に対する責任を感じているのだろう。
だが、なのはとてここで引くつもりは無い。自分は鬼柳から満足することを教わった。このままでは満足できない。

なのはの真剣な眼差しが鬼柳の瞳を貫き、鬼柳は暫し無言でなのはの瞳を見つめる。
そして鬼柳は腹を括ったのだろう。背中のなのはを抱き抱えると、自身の前にスポンと乗せた。

今のなのはは鬼柳に抱き抱えられている状態でDホイールに乗っている。
思わぬ鬼柳の身体の温もりに頬を赤らめながらも、なのははデュエルディスクを取り変えた。

「選手交代だ！」

「これからは……私が相手をするよ！」

『此方ノターン！』

手札：2→3
鬼柳　スピードカウンター：5→6
謎の怪物　スピードカウンター：4→5

『手札カラ≪Sp－エンジェル・バトン≫発動！
効果ニヨリデッキカラカードヲ二枚ドロー！　ソノ後、手札ヲ一枚墓地へ送ル！』

Sp－エンジェル・バトン
通常魔法
自分用スピードカウンターが2つ以上ある場合に発動する事ができ

る。
デッキからカードを2枚ドローし、その後に手札1枚を墓地へ送る。
手札：3→5→4

『場ノ≪ワーム・グルス≫ヲリリースシ、手札から≪ワーム・イーロキン≫ヲアドバンス召喚！』

「上級モンスター……」

「厄介なのが出てきた様だな……」

ワーム・イーロキン
星6／光属性／爬虫類族／ＡＴＫ２４００／ＤＥＦ１２００
このカードは特殊召喚できない。
フィールド上に表側表示で存在する「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

『バトル！　≪ワーム・イーロキン≫で≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫二攻撃！』

ワーム・イーロキンＡＴＫ２４００　ｖｓ　インフェルニティ・ネクロマンサーＤＥＦ２０００

「きゃぁあああああっ！」

「くっ、なのは！　リバースカードを使え！」

「う、うん！　リバースカード、オープン！　≪全弾発射≫！」

全弾発射　通常罠
このカードの発動後、手札を全て墓地へ送る。
墓地に送ったカードの枚数×２００ポイントダメージを相手ライフに与える。

手札：１→０

黒い怪物
ＬＰ４０００→３８００

黒い怪物の召喚した新たな「ワーム」が、プレイヤーの攻撃宣言により攻撃に移る。
その黄緑色の様な、不気味な色をした腕を振りかぶり、鬼柳達の乗るＤホイールに攻撃を仕掛けた。

攻撃対象は防御の固い「インフェルニティ・ネクロマンサー」だったが、モンスターを破壊した余波がなのはを襲う。
悲鳴を上げ、縮こまるなのはを必死に鬼柳は上から庇う。そして攻撃が止んだのを見計らい、鬼柳はなのはに指示を出した。

なのははギュッとＤホイールにしがみ付きながら、新たに取りつけたデュエルディスクを操作する。

すると先ほどまで横を並走していたカードが展開され、そのカードの効果が発動された。

赤い光の球の様なものが一つ、先ほどオープンしたカードの前に凝縮される。

そして赤い球はそのまま後方を追尾してくる黒い怪物に命中。黒い怪物は奇怪な鳴き声をあげた。

「これで……！」

「あぁ！　ハンドレスコンボの完成だ！」

『……コノママターンエンド』

「私のターン！　ドロー！」

手札：0→1
鬼柳　スピードカウンター：6→7
謎の怪物　スピードカウンター：5→6

「私は手札から≪インフェルニティ・ビースト≫を召喚！」

インフェルニティ・ビースト
星3／闇属性／獣族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１２００
自分の手札が0枚の場合、以下の効果を得る。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動する事ができない。

「そして場の≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
手札がゼロのとき、墓地から「インフェルニティ」と名のついたモンスターを召喚する！
お願い！　≪インフェルニティ・ビートル≫を特殊召喚！」

インフェルニティ・ビートル
星２／闇属性／昆虫族／ＡＴＫ１２００／ＤＥＦ０
自分の手札が０枚の場合、
このカードをリリースする事で自分のデッキから
「インフェルニティ・ビートル」を２体まで特殊召喚する。

「場の≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫と
≪インフェルニティ・ビースト≫に≪インフェルニティ・ビートル≫をチューニング！」

なのはは自身が先ほど引いたカードを確認すると、すぐさまそのモンスターを召喚する。
そして流れる様な動作で、墓地から新たにモンスターを一体特殊召喚した。

流れは今までの鬼柳とのデュエルで覚えている。召喚するのは鬼柳のエースモンスター。
見た目は気持ち悪いことこの上ないが、今まで何度も鬼柳の危機を救って来たカード。今は頼れる相棒だ。

そしてなのはが新たな召喚を口にすると、場に居た「インフェルニティ・ビートル」が光の輪となった。
光りの輪は「インフェルニティ・ビースト」と「インフェルニティ・ネクロマンサー」を包み込み、一筋の光の奔流を作りだす。

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！
　シンクロ召喚！　お願い、来て！　《インフェルニティ・デス・ドラゴン》！」

インフェルニティ・デス・ドラゴン
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２４００
闇属性チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分の手札が０枚の場合に相手フィールド上に存在する
モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択した相手モンスターを破壊し、
破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。
この効果を発動するターンこのカードは攻撃する事ができない。

「《インフェルニティ・デス・ドラゴン》の効果発動！
　私の手札が０枚のとき、相手モンスター一体を破壊して破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える！」

三体のモンスターをリリースして召喚されたのは、異様な形相のド

ラゴンだった。
頭部は大脳が露出しており、生理的な嫌悪感が湧きあがってくる。
しかし、今は別だった。

普段の不気味さは成りを潜め、今は頼れる相棒と言う風格が漂っている。
なのはは召喚した「インフェルニティ・デス・ドラゴン」を見て頷くと、効果の発動を宣言した。

なのはが効果の発動を宣言すると、「インフェルニティ・デス・ドラゴン」は口に火炎を溜める。
それをそのまま、相手の場にいる「ワーム・イーロキン」に命中。
奇怪な鳴き声を上げ、「ワーム」は消滅した。

『グゥウウウッッ！！』

ＬＰ３８００→２６００
謎の怪物　スピードカウンター：６→５

「≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫は効果を発動したターン、攻撃できない……。
私はこのままターンエンドだよ！」

『コチラノターン！』

手札：３→４
鬼柳　スピードカウンター：７→８
謎の怪物　スピードカウンター：５→６

『手札カラ≪ワーム・コール≫ヲ発動！
手札カラ「ワーム」と名ノツイタモンスターヲ裏側守備表示デ特殊召喚スル！』

ワーム・コール
永続魔法
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
手札から「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスター1体を
裏側守備表示で特殊召喚する事ができる。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

手札：4→2

「だが、スピードワールドの効果でダメージを受けてもらう！」

『グゥウウウウッッ！！』

黒い怪物
LP2600→600

『シカシ、このターンで決メレバ問題ナイ！

「なんだと！？」

『手札カラ≪ワーム・バルサス≫ヲ召喚！』

手札：2→1

ワーム・バルサス
星３／光属性／爬虫類族／ＡＴＫ１４００／ＤＥＦ１５００
このカードが召喚に成功した時、
フィールド上に守備表示で存在するモンスター１体を表側攻撃表示にする。

『召喚シタ≪ワーム・バルサス≫ノ効果発動！
先ホドセットシタモンスターヲ表側攻撃表示ニスル！』

「えっ！？」

「セットモンスターを攻撃表示！？」

『セットモンスターハ≪ワーム・ヴィクトリー≫！
効果ヲ発動スル！』

ワーム・ヴィクトリー
星７／光属性／爬虫類族／ＡＴＫ０／ＤＥＦ２５００
リバース：「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスター以外のフィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。
このカードの攻撃力は、自分の墓地に存在する
「ワーム」と名のついた爬虫類族モンスターの数×５００ポイントアップする。

『場ノ「ワーム」以外ノモンスターヲ全テ破壊スル！』

「えぇっ！？」

「なんだと！？」

なのはが召喚した鬼柳のエースモンスターに安堵の息を吐いたのも束の間。

新たな危機がなのはと鬼柳を襲っていた。黒い怪物が発動したのは一枚の魔法カード。

そのカードでモンスターをセットし守備を固めたと思ったのだが、予想を超えた展開が待っていた。

黒い怪物は新たな「ワーム」を召喚し、先ほどセットしたモンスターを強制的に表側攻撃表示に変えたのだ。

不可解な相手の行動になのはと鬼柳は戸惑うのだが、ここで予想外の効果が発動される。

セットモンスターである「ワーム・ヴィクトリー」の効果により、なのはと鬼柳の場が一掃されたのだ。

表側攻撃表示になった「ワーム・ヴィクトリー」は複数ある手をなのはたちの場に向け、不気味な色の光線を放つ。

それらは「インフェルニティ・デス・ドラゴン」と「インフェルニティ・ネクロマンサー」を貫き、モンスターを一掃した。

『バトル！　≪ワーム・バルサス≫と≪ワーム・ヴィクトリー≫デ攻撃！』

「きゃぁあああああっっ！！」

「ぐっっうううううっっ！！」

「うわぁあああああっっ！！」

ワーム・ヴィクトリーＡＴＫ０→２０００
鬼柳＆なのはＬＰ　３８００→４００
鬼柳　スピードカウンター：８→５

「くっ！　なんで≪ワーム・ヴィクトリー≫の攻撃力が２０００に……！
　エンジェルバトンの効果で捨ててやがったか！」

身を守るモンスターを一掃され、二体の「ワーム」の攻撃がダイレクトに鬼柳達を襲う。
それぞれの「ワーム」の攻撃は辛うじて運転手である鬼柳を避け、Ｄホイールに命中するに留まった。

しかしそれでもダメージは大きい。激しい衝撃に揺さぶられ、なのはと喋るフェレットは悲鳴をあげる。
鬼柳は口から飛び出そうになる悲鳴を噛み殺しながら、なんとかＤホイールの体勢を立て直していた。

『ターンエンド』

「う、うぅ……！　き、鬼柳さん……」

「……なのは」

黒い怪物はもはや止めを刺したと思ったのだろう。カードを伏せることなくエンド宣言をする。
実際、これは半ば詰みの様な状態だった。こちらは伏せカードすらなく、相手は二体のモンスターを従えている。

正直、勝てる気がしない。なのはがそう思ってしまうのも無理は無い。
自分が出しゃばったから。自分が鬼柳からプレイを交代したから。
なのはの胸中に後悔が浮かぶ。

一体どうやって鬼柳に顔向けしたら良いのだろう。なのはは悔しそうにデュエルディスクを握りしめる。
しかしふと、後ろから鬼柳のなのはの名を呼ぶ声が聞こえた。しかし、今は振り向きたくは無い。

「良いじゃねぇか。これくらいじゃなきゃ、満足できねぇぜ！」

「……え？」

「どうした、なのは。まさかこれくらいで怖気づいた訳じゃねぇだろ？」

「で、でも……」

「良いじゃねぇか、これくらいのピンチ。これを乗り越えて、満足しようぜ？」

「鬼柳さん……。……うん、そうだね！」

なのははジッと俯いたまま、鬼柳がプレイすることを望んでいた。しかし、後ろから聞こえてきたのは笑みを含んだ鬼柳の楽しそうな声。

どうして鬼柳が楽しそうな声をしているのか分からず、なのはは思わず振り返る。

するとそこには、想像通り口元に笑みを浮かべていた鬼柳がいた。

彼はなのはに視線を向けて続ける。

今のデュエルは怖い。負ければ自分や鬼柳がどうなってしまうのか分からない。

けれど、鬼柳の言葉である程度心が救われた。自分のすぐ傍で、鬼柳が見守っていてくれる。

そう思うと、なのはは自然と笑みを浮かべる事が出来た。

なのははデッキホルダーに収まった鬼柳のデッキに手を乗せ、目を閉じる。

この状況を打破するためのカードはあのカードしかない。あのカードを引かなければ、こちらの負けだ。

だからなのはは念じる。どうか、あのカードを引けるようにと。と、そんなとき、なのはの手に暖かな感触が触れた。

薄目を開けて確認してみれば、それは鬼柳の手だった。彼もなのは

と同様、デッキに手を乗せている。
まるで一心同体。今彼らが願うことはただ一つ。この強敵を相手に勝利を収め、自身の心を満足させること。

「「ドロー！」」

手札：0→1
鬼柳　スピードカウンター：5→6
謎の怪物　スピードカウンター：6→7

なのはと鬼柳が同時にデッキからカードをドローした。
目を閉じたまま、なのはは自身の目の前に先ほどドローしたカードを持っていく。

そしてゆっくりと瞼を開き、そこに映るカードの絵柄を確認した。
カードの絵柄を確認し、なのはと鬼柳は満足そうな笑みを浮かべる。

「私は手札から≪インフェルニティ・ミラージュ≫を召喚！」

インフェルニティ・ミラージュ
星1／闇属性／悪魔族／ＡＴＫ0／ＤＥＦ0
このカードは墓地からの特殊召喚はできない。
自分の手札が0枚の場合、このカードをリリースし、
自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついた
モンスター2体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

「≪インフェルニティ・ミラージュ≫の効果発動！
手札０のときにこのカードをリリースして、墓地から「インフェルニティ」モンスターを二体を場に特殊召喚する！」

『ナ、ナニ！？』

「蘇れ！　≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！　≪インフェルニティ・デーモン≫！」

なのはが引いたカードは、鬼柳のデッキに置いて巻き返しの切り札となるべきカードだった。
そのカードを召喚。すぐさまリリースし、場に二体のモンスターを特殊召喚する。

現れたのは先ほど破壊された「インフェルニティ・デス・ドラゴン」と「インフェルニティ・デーモン」。
二体は先ほどやられてしまったためか。獰猛な目つきで相手の場に居る二体の「ワーム」を睨みつけている。

「≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
手札が０のときに特殊召喚に成功した時、「インフェルニティ」と名のついた
カード一枚を手札に加える！　私は≪インフェルニティ・ブレイク≫を選択！
手札に加えた≪インフェルニティ・ブレイク≫を伏せて≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫の効果発動！
相手モンスター一体を選択して破壊する！　止めだよ！　インフ

エルニティ・デス・ブレス！」

なのはは蘇生した「インフェルニティ・デス・ドラゴン」に指示を出す。
この効果が通れば自身の勝ち。通らなければこちらの負け。息を呑む様な勝負である。

「インフェルニティ・デス・ドラゴン」は口の中に火球を溜め、「ワーム・ヴィクトリー」をギロリと睨みつける。
そしてそのまま、「インフェルニティ・デス・ドラゴン」は火球を「ワーム・ヴィクトリー」に向けて吐き出した。

「インフェルニティ・デス・ドラゴン」の効果が解決されるまで、なのはと鬼柳は息を呑んで状況を見守る。
しかし黒い怪物にこの様な妨害系のカードは手札。もしくは場に伏せられていなかったのか。

「ワーム・ヴィクトリー」に「インフェルニティ・デス・ドラゴン」の放った火球は命中。
黒い怪物に「ワーム・ヴィクトリー」の攻撃力の半分のダメージが与えられた。

『グ、グォオオオオッッ！！』

ＬＰ６００→０

第二話　「ライディング・デュエル」（後書き）

いかがでしたでしょうか？
個人的にはまぁまぁの出来ですが……。

気になる点などがあったら感想にてご指摘ください。

第三話　「ユーノ・スクライア」（前書き）

今回から徐々に原作乖離が始まります。
まず最初はユーノの処遇についてですね。

第三話　「ユーノ・スクライア」

～海鳴市　某所～

「ふにゃぁ、疲れたぁ……」

「なのは、まだ満足するには早い様だ」

「え？」

動物病院から今まで追いかけてきた黒い怪物とのデュエルを終えて。
なのはは安堵のため息を漏らしながら、鬼柳のＤホイールに倒れ込んだ。

先ほどのデュエルは今までのデュエルと違い、実際にダメージがプレイヤーに通る。
一歩間違えば大けがどころではすまないかもしれない。なのはは自身と鬼柳が無事で安堵する。

しかしなのはの安堵のため息は、なのはを抱き抱える様にＤホイールに乗っていた鬼柳によって遮られた。
なのはは鬼柳の言葉に不思議そうな表情を浮かべ、視線を鬼柳が向けている方へと向ける。

『オ、オォオオオオ……ッ！』

「にゃ！　さっきの黒いの！」

「様子がおかしいな。……苦しんでるのか？」

鬼柳の視線の先には、陥没した道路の真ん中で苦しげな息を吐いている怪物。
しかし既にその瞳には猛々しい戦意は宿っておらず、疲弊した色がその瞳に伺える。

それになのははビックリした表情を浮かべるが、どうにも相手の様子がおかしい。
黒い怪物は苦しげな息を何度も吐くと、徐々に自身の身体を蒼く発光させる。

あまりの光の量に目を開けていられず、なのはと鬼柳。それにフェレットは目を庇った。
そして徐々に発光が弱まり、なのはたちはソッと庇っていた腕を退ける。

するとそこには一つの蒼い宝石が落ちていた。その宝石は弱々しく青白い光を放っている。

「ジュエルシードが……封印された……」

「さっきの怪物の正体はコイツだったのか……？」

「触らないで！　それは危険な物なんです！」

「ッ！　……分かった」

地面に落ちた蒼い宝石が弱々しく発光している様子に、喋るフェレットは驚愕の表情を浮かべた。
黒い怪物――ジュエルシードの暴走体が喋ったのもそうだが、勝手に封印されたのにもかなり驚かされている。

それに加え、先ほど黒い怪物を相手取ったときのカードバトル。あの衝撃はまさに本物の感触だった。
一体どうしてジュエルシードの暴走体がその様な力を得たのか。考えることは沢山あるが、まずやる事がある。

それはせっかく封印されているジュエルシードを回収する事。鬼柳が触れそうになっていたのをフェレットは止める。
フェレットの言葉に、あと僅かでジュエルシードに触れそうになっていた鬼柳は手を止めた。視線をフェレットへと向ける。

「えと……。さっき渡したレイジングハート……赤い宝石で触れてみてください」

「えと。こう、かな……？」

『シーリング』

鬼柳の視線に晒され、フェレットはどもりながらなのはに封印について説明する。
なのはは鬼柳のDホイールから飛び降りると、Dホイールと一体化

していたデュエルディスクを腕に付けた。

そして鬼柳とジュエルシードの元まで駆け寄ると、腕のデュエルディスクを蒼い宝石に近付ける。

するとデュエルディスクの赤い宝石――鬼柳のデュエルディスクで言う、モーメント部――に宝石が吸い込まれた。

直後、無機質な女性の電子音声が周囲に響き渡る。

その様子にフェレットは安堵の息を漏らし、なのははしげしげと眺めていた。

「……さて。色々と事情を聞きたいんだが、ここじゃ無理みたいだな」

「え？　それは、どう言う……？」

「決まってるだろ。さっきなのはに言ってた魔法、とかについてだ。まずは場所を変えるぞ」

「あ、はい」

ようやく一安心出来たのか。喋るフェレットはホッと安堵の息を吐いている。

そのフェレットに鬼柳が声をかけた。彼となのはの耳に届くのは甲高いサイレンの音。

その音が昔、セキュリティに掴まったときのことを思い出させ、鬼柳は僅かに眉を顰める。

あまりセキュリティや警察関係に良い印象を抱いていない鬼柳からすれば、この場を離れたいと思うのが心情だ。

鬼柳はDホイールに跨りヘルメットを被ると、先ほどなのはが使っていたヘルメットをなのはに投げ渡す。
なのはは飛んできたヘルメットを何度かお手玉するが、なんとか落とさずに済んでホッと安堵の息を吐いた。

そして鬼柳の言葉と聞こえるサイレンの音に不味いものを感じ取ったのか。フェレットもコクリと頷く。
フェレットは怪我であまり動けない身体に鞭打ちながらなんとかDホイールに跨るなのはの肩に飛び乗った。

鬼柳はフェレットがなのはの肩に飛び乗ったのを確認すると、アクセルを回してその場から離脱する。
そしてこの場に残ったのは、凄まじいまでの破壊痕だけだった。

※

「ここまで来れば、一安心だな」

「もう、鬼柳さん！　あんまり無茶な運転はしないでよぉ！」

「？　そんなに無茶な運転か？」

「む、無茶苦茶すぎるよぉ！」

なのはの自宅からさほど離れていない公園内にDホイールを隠した鬼柳は安堵の息を吐いた。
既に先ほどの現場からは大分離れ、耳障りなサイレンの音も聞こえない。鬼柳は満足そうに頷く。

しかし、そんな満足そうな鬼柳に水を差す者がいた。それは鬼柳の背中にくっ付いていたなのは。
彼女は痛そうにお尻を擦りながら、両手をぶんぶんと振り回して鬼柳に抗議している。彼女が怒る理由は一つ。

鬼柳の運転が荒っぽいのである。道路の中央車線や反対車線を通るのは当たり前。
ときには階段を乗り越えたり、ガードレールをDホイールで跳躍して飛び越えたり等など。

なのはでなくても、怒りたくなるのは仕方ないことだった。
しかし、怒られている鬼柳は眉を顰めながら首を傾げている。

鬼柳は鬼柳で、これが荒っぽい運転だとは思っていない。「少々」荒っぽい運転だと思っている。
ダークシグナー時代もビルの二階分ほどの瓦礫の上からDホイールで跳躍したりしている。

Dホイールは頑丈だ。この程度では壊れたり故障したりなどしない。

「あ、あはは……。それよりもなのは、さん？　それと鬼柳さん、でしたか？」

「あ、そうだよ。わたし、高町　なのは。小学校三年生で、デュエリストだよ！」

「俺は鬼柳　京介。なのはの家に居候している」

「でゅ、デュエリスト……？　あ、僕はユーノ・スクライア。スクライアは部族名だから、ユーノが名前です」

「ユーノ君か。可愛い名前だね！」

鬼柳に抗議しているなのはの様子に乾いた笑いをあげながら、フェレットは二人に声をかけた。
いつまでも相手の名前を知らないのは失礼だ。まずは相手のことをよく知るために自己紹介をしよう。

するとまず、最初になのはが自己紹介をした。えへんと胸を張り、ホルダーに入ったデッキを見せる。
次に自己紹介をしたのはようやくなのはの抗議を受け流した様子の鬼柳。彼は静かにフェレットを見つめている。

そして最後に自己紹介したのはフェレット。彼――ユーノはなのはの自己紹介の言葉に首を傾げながら、名前を告げる。
ベンチの上でペコリと頭を下げたユーノの様子に、なのはが楽しそ

うな笑みを浮かべた。その笑みは可愛い動物を見た様な笑顔。

「……すみません。貴方達を……」

「そんなことはどうでも良い。まず答えて欲しいことがある。あの黒い怪物は何だ？　どうしてヤツはお前を狙っていたんだ？」

「どうでも……」

「ダメだよ、鬼柳さん！　ユーノ君、怪我してるんだよ？」

「だが、まずは事情を聴かねぇとな。大分大事になってるらしいからな」

「うにゅ……」

「さて。まずはあの黒い怪物についてだ。知っていることを話してもらう」

「はい。先ほどの怪物――ジュエルシードの暴走体について、お話します。
先ほどの蒼い宝石。あれはジュエルシードと言って、僕らの世界の古代遺産なんだ」

ユーノがなのはの笑顔に居たたまれなくなったのか。ペコリと謝罪を示すために頭を下げた。
まずは巻き込んでしまったことを謝罪しよう。そう思い、謝罪の言葉を口にしようとする。

だが、その言葉は今まで状況を見守っていた鬼柳によって遮られた。
まずはあの黒い怪物についてと現在巻き込まれている事態について知りたいのだろう。

なのはは鬼柳の言葉に反対しようとしたが、鬼柳の言葉に押し黙る。
実際、大事になっているであろう。先ほどのパトカーのサイレンがその証拠だ。

そしてユーノは鬼柳の言葉にコクリと頷くと、黒い怪物や今回の事態の原因――ジュエルシードについて話し始める。
語られるのはジュエルシードの持つ効果や危険性。ユーノの話を鬼柳達は一言一句逃さずに聞いていく。

ジュエルシードとは本来は手にした者の願いを叶える魔法の石だと言う。
しかし、力の発言が不安定で先ほどの様に単体で発動し、暴走する恐れもあるそうだ。

何故その様な危険なものがこの街にあったのか。それは偶然飛来したのがこの街らしい。
ユーノは故郷で遺跡発掘の仕事をしているらしい。そしてある日、ジュエルシードを見つけたのだ。

そのジュエルシードを調査団に依頼し、保管してもらっていたと言う。
しかし、運んでいる途中で時空艦船が事故に遭い二十一個のジュエルシードはこの世界に散らばったと言うのだ。

「……なるほど。つまりお前が狙われていたのは、お前を使用者にしよう、ってところか」

「……はい」

「……と言うことはつまり、だ。
このままお前を家に連れて帰ったら、なのはの家族に危害が加わるかもしれない、って事か」

「いえ、恐らくそれは無いでしょう。
先ほどのジュエルシードは暴走して、近くに居たのがたまたま僕だったから僕を使用者にしようとしたんでしょう」

「そうか」

鬼柳はユーノの説明を聞き、僅かに眉を顰めた。とても先ほどの言葉が真実とは思えない。
しかし、鬼柳とて世界を渡りこの世界にやってきた者だ。その様な世界があるのも不思議ではない。

ユーノの言葉にコクリと頷くと、鬼柳は現在分かっていることを一つ一つ確認していく。
その中には当然、なのはやなのはの家族の安否についても含まれていた。

だが、ユーノの言葉を借りるならばもうユーノがジュエルシードの暴走体に狙われる心配は無いらしい。
どうも、ジュエルシードは暴走した際に近くに居た人物を使用者とする様だ。それに鬼柳はコクリと頷く。

「なのは、どうする？　コイツを家に連れて帰るか？」

「うん！　だって、ユーノ君まだ怪我してるもん」

「そうか。分かった」

「す、すみません……」

「うぅん、気にしないで」

そして今度は視線を、デュエルディスクを起動させて遊んでいるなのはに視線を向ける。

彼女は先ほど変化させたデュエルディスクにカードをセットし、実体化したモンスターと遊んでいた。

現在現れているのは彼女の準エースである「サイレント・マジシャンＬｖ８」である。

実体化した「サイレント・マジシャンＬｖ８」はなのはに触れてビックリした表情を浮かべていた。

鬼柳はサイレント・マジシャンと戯れているなのはを見つめながら、先ほどのライディング・デュエルを思い出す。

先ほどのライディング・デュエルの際、相手モンスターが実体化して鬼柳達に攻撃を仕掛けてきた。

ユーノの話ではあれはジュエルシードに宿った魔法の力が働いているせいだと言う。

なんとも魔法とは便利なものだと思いながら、鬼柳は相変わらず戯れているなのはに声をかけた。

※

「おかえり、なのは。それに鬼柳さん」

「あ、お兄ちゃん！」

「恭也。まだ起きてたのか」

「あぁ。なのはが出て行く音が聞こえたからな」

ガラガラと玄関の門を開け、なのはたちは高町家の敷地内に入る。
鬼柳はまず士郎と桃子になのはが無事帰って来たことを知らせないといけない。

そして玄関の扉を開け、中に入ろうとしたとき、玄関のすぐ傍から聞き慣れた声が聞こえた。
視線を声が聞こえた方へと向ければ、そこには私服に身を包んだ恭也の姿。腰にはデッキホルダーが付いている。

なのはは姿の見えた恭也の姿に嬉しそうな笑みを見せ、鬼柳は微かに驚いたように目を見開いた。
一方恭也は相変わらずのクールさを見せる鬼柳の様子に苦笑しながら、なのはが出て行ったことを知っていたと告げる。

「それでなのは。こんな時間に、何処にお出かけだ？」

「えと、あのね？
そのことについてお話したいことがあるから、お父さんとお母さんを呼んでくれないかな？」

「？　父さんと母さんを？　呼べば、何処に行っていたか教えてくれるのか？」

「うん。ちゃんと話すよ」

「……分かった。少し待っていてくれ」

恭也は一旦鬼柳から視線を離すと、見慣れぬデュエルディスクを腕に着けたなのはに視線を向けた。
鬼柳はデュエルディスクを一個しか持っていないはずだ。それなのにもう一つデュエルディスクがあるのは不自然。

そのことも含めて問い質そうとしたのだが、それは呆気ないなのはの言葉によって消え去った。
どうやらなのはは腕に着けているデュエルディスクのことについても話してくれるらしい。思わず拍子抜けだ。

そしてその条件が両親である士郎と桃子を呼ぶこと。恭也はなのはに確認すると、一旦玄関から中に入る。
なのはが出かけたのを知っていた両親だ。きっと起きているに違いない。

「え、えぇっと……。魔法のこととか、喋っても良いの？」

「え？　うん、良いよ。秘密にしてるのって、とっても居心地悪いし……」

「で、でも。なのはのご両親とかは困らないの？」

「うぅ～ん。……多分、困るかも」

「えぇ！？」

「でもでも！　お父さんやお母さんに言わない方が、私は満足できないよ！」

一方、恭也が家の中に消えたことを確認すると、なのはの肩に乗っているユーノが声をかけた。
彼はどうやら、一般人であるなのはの両親に魔法のことについて喋っても良いのか躊躇っているらしい。

それになのはは困った様な表情を浮かべ、魔法を教えたら士郎や桃子が困るかもしれないと告げた。
当然それを聞いて、ユーノがビックリした声をあげる。しかし、真

実を言わないままではなのはが満足できない。

恐らくなのはに甘い両親のことだ。なのはが魔法――デュエルディスクを持つ事をあまり拒否しないだろう。

だが、怪我をするかもしれない。それも命にかかわる様な大けがを。

その危険性があることだけは、キチンと教えておきたかった。

「満足って……」

「えへへ。これ、鬼柳さんの口癖なんだよ。そしてわたしの口癖でもあるの」

「それはどうし「なのは！」ッ！」

「あ、お父さん、お母さん」

「士郎。いま戻った」

「あぁ。おかえり、鬼柳君」

ユーノはなのはの言葉に含まれていた「満足」と言う言葉に反応する。

そう言えば鬼柳やなのはは、ときおりこの「満足」と言う言葉を使用していた。

もしや自分の知る意味とは違うのだろうか。だが、ユーノの疑問はすぐに消える。

どうやら二人の使う「満足」とはユーノの知っている通りの意味で、

二人の口癖らしい。

それは一体どうしてなのだろう。疑問に思って訊ねようとするが、不意に玄関の扉が開いた。

そこに立っていたのは私服姿に身を包んだ二人の男女――士郎と桃子。二人はなのはが無事な様子に安堵する。

「なのは、大丈夫？
さっきパトカーがサイレンを鳴らして走っていたけれど……事件に巻き込まれたりしてない？」

「え、えぇっと……」

「桃子。そのことについて話がある。まずは皆をリビングに集めてくれ」

「？　え、えぇ。分かったわ」

士郎は鬼柳の言葉にコクリと頷き、桃子はパタパタとなのはの元へ駆け寄る。

その顔に浮かんでいるのは二人の無事を確認できて安堵している様子。

なのはは桃子の様子に嬉しくなるが、その口から飛び出した言葉に冷や汗を流す。

まさか自分がそのパトカーを呼んだ張本人だとは言えない。しかし、言わないと満足できない。

なのはが困った様な表情を浮かべていると、隣に立っていた鬼柳が助け船を出してくれる。
まずは場所を変えてしっかりと事情を説明するらしい。それになのはは内心で安堵の息を漏らす。

言いづらいことを先延ばしにしたのもあるのだが、今は深夜。肌を突き刺すような寒さが身に染みる。
これ以上あまり外に居たくなくて、なのはは桃子の後を追う様に家の中に駆けて行った。

※

「魔法……。それに、ジュエルシード……か」

「正直、信じられないな」

「でも、これは本当のことなんです」

「それはまぁ、理解できるが……」

高町家のリビングへと場所を移した鬼柳達は、早速士郎達に事の次

第を話していた。
まず真っ先に話したのはなのはが保護したと言う喋るフェレット―ユーノについて。
彼が実は喋れること。こことは違う世界からやってきたことを告げ、彼の口からジュエルシードについての説明が入る。
ユーノの説明が進むたびに士郎たちが感嘆の息や驚愕の表情を浮かべ、それを鬼柳となのはは見つめていた。

「うぅ～ん。名前は何にしようかなぁ」

『あ、あの。ま、マスター？』

「うーん。サイレント・マジシャンだからレンちゃん！　とかどう？」

『え、えぇっと……！』

「……なのは。あまりサイレント・マジシャンを困らせるな」

否。なのははジィッと士郎たちに行われる説明を見ていてはいなかった。
彼女の視線はすぐ目前に座る一人の女性――サイレント・マジシャンに注がれている。
今までは鬼柳のデュエルディスクでしか実体化しなかった彼女が、こうやって実体化しているのだ。
思わず嬉しくなって構ってしまうのも無理は無い。そして驚いたこ

とに、このサイレント・マジシャンには自我がある。

どうやらなのはのデュエルディスクとなっている赤い宝石が幾つかのカードに自我を与えた様だ。

自我と言ってもＡＩの様なものだが、お気に入りのカードとお喋りが出来てなのははとても満足そうにしている。

「――ふむ。事情は分かった。それでなのは、なのははどうするんだい？」

「えと。出来ればお手伝いしたいんだけど……。この街にそんな危ないものがあるなんてイヤだし……」

「だけど、デュエルで負ければ死ぬかもしれないんだろう？
それにダメージを受ければその分がプレイヤーに返ってくると言うし……」

「……うん。それは、とっても怖いよ。
でも、この街に住んでいる人がジュエルシードで傷つくのはイヤだ。そんなんじゃ満足できないよ」

「なのは……」

「大丈夫だよ。いざとなったら、鬼柳さんがわたしを護ってくれるから」

と、なのはとサイレント・マジシャンのお喋りの様子を見つめていた鬼柳の耳に、士郎の声が聞こえた。

どうやらユーノからの説明が終わり、なのはの意思確認に移るらしい。士郎はなのはに視線を向け、訊ねる。

なのはは腕に着けていたデュエルディスクからサイレント・マジシャンのカードを抜き取ると、士郎と相対した。
そして自身の胸の内を語る。自身が生まれ育った大切な街。そんな場所に危険な物が放置されているなんて考えたくない。

だからなのははジュエルシードを探すことを決意する。デュエルで負ければ死ぬかもしれない。
じゃあ、勝ち続ければ良いだけの話だ。勝てば誰も怪我をしないし、誰も傷つかないで済む。

依然として士郎が心配そうな視線をなのはに向けてくるが、なのははニコリと笑みを浮かべた。
そう。いざとなったら鬼柳が助けてくれる。鬼柳と過ごしたこの数年が、なのはにそう思わせた。

「あぁ。安心しろ、士郎。なのはのことは俺が守ってやる」

「鬼柳君……」

「俺も正直、この街にそんな危ない物があるなんて満足できないんでな」

「……ふふ。鬼柳君は相変わらず、満足に飢えているようだね」

「あぁ。この程度じゃ俺は、満足なんかできねぇぜ」

なのはの言葉を受けて、今まで事態を見守っていた鬼柳が口を開いた。
負けるつもりは毛頭ないのだが、もしかしたら鬼柳とて負けてしまうかもしれない。
そうなったらなのはだけでも逃がしてやりたい。鬼柳はそう考えて口を開く。
その際になのはの真っ直ぐな視線が目に入る。既に過去の不満足そうな瞳ではない。
それに鬼柳とて、この海鳴市を気に入っている。荒んでいた心を癒すには最適の場所だ。
他にもこの海鳴に住む人たちが傷つくのを見たくない。鬼柳は獰猛な笑みで士郎を見つめる。

「……分かった。ジュエルシードを探すことを許可しよう。
ただし！　デュエルで負けそうになったらサレンダーしても良い。
……無事に家に帰ってきなさい」

「お父さん……。……うん！」

「鬼柳君、済まないが……なのはのこと、よろしく頼むよ」

「あぁ。任せておいてくれ」

士郎は鬼柳の浮かべた獰猛な笑みに苦笑しながら、視線をなのはへと向けた。

現在高町家の中で最強である鬼柳がなのはと共に居てくれる。それほど心強いことは無い。

しかし鬼柳とて人間である。負ける可能性だってあるのだ。
だから士郎はなのはに告げる。負けそうになったら、サレンダーしてでも生きろと。

そして無事に家の門をくぐって欲しいと。
それになのははビックリした表情を浮かべ、真剣な表情でコクリと頷く。

これは父親と交わした大事な約束。これを違えてしまえば、きっと両親を悲しませる。
だから決してなのはは無理はしないと決心する。無理にデュエルを進め、敗北しては元も子もない。

士郎はなのはの様子にコクリと頷くと、続いて鬼柳になのはを頼むことを告げた。
それに鬼柳は頷く。元より強敵となり得る相手。むざむざ死なせるわけにいかない。

こうして、高町家の夜は更けて行った。

※

「ふぁあ……」

「寝不足か？」

「あ、はい。ちょっとカード見てたら面白くなっちゃって……」

昨夜の騒動から一夜明けて、鬼柳は自身が使っている道場で目を覚ました。

そしてまず目に入るのは道場の一角に置かれたテーブルの上に乗っているバスケット。

その中には沢山の毛布が敷かれており、寒い夜でも小動物ならば暖かくして眠れるだろう。

そしてその中で眠っていたのは昨夜、なのはが魔導師（と呼んでいいのか甚だ疑問だが）となる切欠を与えた動物。

その動物――ユーノは眠そうに目を擦りながら、横になっていたバスケットから身体を起こした。

ユーノはどうやらなのはから見せられたデュエルモンスターズのカードに興味を示したらしい。

「ルールは簡単、でもないが。覚えれば対戦も出来る。ユーノもやってみるか？」

「え？　良いんですか？」

「あぁ。デュエリストが一人でも増えれば、その分俺たちも楽しめるからな。
　ユーノもデュエルで一回勝てば、勝利の味を忘れられなくなるかもしれないな」

「そ、そんなに……」

使用した敷布団を片付けながら、鬼柳はバスケットの上のユーノに話しかけた。
デュエルモンスターズのルールは簡単ではないが、一度覚えてしまえば後は簡単だ。

シンクロ召喚など複雑なルールもあるが、デュエルをこなせば自然と覚えて行く事だろう。
ユーノは鬼柳の言葉に首を傾げるが、鬼柳はコクリと頷く。デュエルモンスターズをやるのに資格など必要ない。

昔はそのことを勘違いしてデュエルギャングを根こそぎ排除しようとしていた鬼柳だが、今では間違いに気づいていた。
デュエルをする者に貧富の差など関係ない。カードを持ってデュエルをすれば、皆が皆デュエリストなのだから。

「そう言えば鬼柳さん。鬼柳さんは士郎さんや恭也さんのお友達なんですか？」

「……急にどうしたんだ？」

「え？　いえ。ただ一人だけ道場に住んでるのが気になって……」

ユーノは鬼柳の言葉に目を輝かせながら話を聞いている。
鬼柳達は知らないことだが、ユーノの年齢はなのはと同じくらい。

まだまだ遊びに興味がある年頃で、そんなときにデュエルモンスターズを聞かされたのだ。
興味を持たない方がおかしい。後でなのはから要らないカードを借りようとユーノは内心で思う。

と、不意にユーノは疑問に思ったことを鬼柳に訊ねた。
どうして鬼柳は高町家に住まず、離れた道場で住んでいるのだろうか。

ユーノ自身は鬼柳が預かることを申し出てこの場に住んでいるのだが、鬼柳はどうして？
その様な疑問が浮かび、ユーノは鬼柳に問う。鬼柳はユーノの言葉に僅かに顔を顰めたが、少しずつ話し始めた。

※

『此処は、一体……』

鬼柳がこの世界に現れたのは、まだなのはが小学校に入学するかしないかの時だった。
彼は突如として目の前に広がった光景に茫然、混乱した。なにせ目の前に広がるのはシティの様な光景。

顔にマーカーを付けられた犯罪者である自分がこの場に居れば、ほどなくセキュリティはやってくるだろう。
慌てて周辺に身を隠そうにも、身を隠してもマーカーから発信される信号で隠れる意味は皆無。もはや万事休すか。

そう思い半ばあきらめていた鬼柳だったが、何分経ってもセキュリティはやってこない。
もしや他に大きな事件でも起きたのだろうか。そう思いながら、鬼柳は近くにあったDホイールに手をかける。

『チッ。モーメントが故障でもしたのか？』

Dホイールに跨り、アクセルを回そうとするのだがDホイールはうんともすんとも言わない。
どうやら何かの衝撃によって故障したようだ。思い当るのは遊星との最後のデュエルの際のクラッシュ。

その際にモーメントが故障し、Dホイールが動かなくなったらしい。
このDホイールを譲り受けた際一通りの点検のし方は教わっている。

しかし工具が無ければ話にならない。まずは場所を移動しようと鬼柳はDホイールを押しながら歩き出す。
鬼柳が現れた場所は、どうやらシティの公園の中だったようだ。歩道は整備されており、注意書きなどが書かれている。

「（俺は……）」

鬼柳はDホイールを押しながら、今まで自分がしてきたことを後悔していた。
裏切っていたと思った遊星は無実で、実は自分が勘違いして遊星を憎んでいたこと。

そしてその憎しみのままに遊星や昔の仲間であるジャックやクロウを傷つけ、人々の魂を自縛神の生贄にしたこと。
幸い、遊星に対する憎しみは最後のデュエルで消え去ったが、鬼柳の行ったことは消える訳ではない。

これから自分はどうしたら良いのだろうか。そんなことを想いながら歩いていると、不意に広場に出た。
そこでは数人の子供が楽しそうにデュエルをしており、鬼柳は何ともなしにそのデュエルを見つめる。

しかし、そのデュエルには幾つか不自然な点があった。
広場でデュエルをしている子供たちは腕にデュエルディスクを着けていないのである。

通常、シティに住んでいる人間ならば対して苦労もせずに買えるであろうデュエルディスクを付けていない。

それに違和感を覚えながら、鬼柳は視線を周囲に彷徨わせる。すると、ベンチに座る一人の少女に視線が向いたのだ。

『アイツの目……』

その少女は寂しそうな瞳で、手に持ったデッキに視線を落としている。

時折チラチラとデュエルをしている子供たちに視線を向けているが、すぐに俯いてしまう。

その様子がまるで仲間に入れてもらいたくて。

でも、声をかける勇気が無い。そんな様子に見えてしまった。

そして鬼柳はその様子とは別に、ベンチに座る少女から伝わるとある気配を感じ取っていた。

それはまだ鬼柳がチームサティスファクションを結成する前のこと。

初めて遊星やジャックと出会ったときと同じ気配。

少女から感じ取った気配は遊星やジャックから感じたものと同じ気配――満足に飢えた気配だった。

第三話　「ユーノ・スクライア」（後書き）

鬼柳と謎の少女（と言っても分かるか）の邂逅シーンで終わります。
次回は二個目のジュエルシードですね。またデュエルします。多分。

でもライディング・デュエルではないです。
ライディング・デュエルは書くのがめんどくさいｏｒｚ１

第四話　「鬼柳の過去」（前書き）

今回はちょっと短いかもです。
それと何気にデュエルあり。でも短い。

第四話　「鬼柳の過去」

～海鳴市　高町家～

「その、不満足そうな顔をした女の子は誰なの？」

「そいつがなのはさ。初めて会った時は、今と比べ物にならなかったな」

鬼柳は昔語りを終えると、机の上に出しっ放しにしていた自身のデッキを手に取った。
それを腰に着けているデッキホルダーに入れると、懐かしそうな瞳で木の天井を見つめる。

「初めて会って……俺がデュエルしようって言ったんだ」

「え？　鬼柳さんがそう言ったの？」

「あぁ。なのはのあの顔に見覚えがあったからな」

しばし過去の思い出を思い出しながら、鬼柳は尚もユーノに語って聞かせる。
出会った当初、どうやって独りぼっちのなのはに声をかけようか真剣に悩んだ。

だが、自身が押しているDホイールに気が付くと、簡単に声をかける理由が出来た。
それはデュエルをすること。デュエリストは売られたデュエルは買うのが基本。なのはもそうだった。

普通ならば鬼柳は初めて見かけた相手に此処までの事はしないのだが、なのはだけは別だった。
彼女の当時浮かべていた不満足そうな顔。それを見て過去の思い出を思い出したのだろう。知らず、声をかけていた。

「それでデュエルの結果は？
……って言うか、聞くまでもないのかな？」

ユーノは器用にバスケットに敷かれているタオルを畳みながら、当時のデュエルの勝敗を聞く。
しかし、すぐに勝敗の結果に思い至ったのだろう。タハハと苦笑しながら、先ほどの言葉に訂正を入れた。

何故ならば、なのはが言っていたのだ。今まで一度も鬼柳に勝てた試しが無いと。
その話をしたときのなのはの表情が悔しげで。でも、楽しそうな表情だったのを覚えている。

「そうだな。結果だけ言えば、俺がなのはに勝ったんだ。
当然だ。まだなのはが俺くらいの経験を積んでいるはずが無いからな。
だが……俺はなのはのデュエルに違和感を覚えたんだ」

「？　違和感？」

「あぁ」

鬼柳はユーノの言葉にコクリと頷くと、当時のデュエルを思い出した。
当時まだ小学校に入るか入らないかと言う年齢で鬼柳とデュエルしたのだ。

良くて数ターン持ちこたえるのがやっとと言う年齢。
適当に手加減して相手の不満足の正体を鬼柳は見極めようとしていた。

しかし、不満足の正体を見極めるよりもなのはから漂う違和感を覚えたのだ。
それはまるで、デュエルが詰まらないと言う様な。自分が独りぼっちであることを自覚している様な。
そんな感覚だった。

「アイツは強すぎたんだよ。
当時の年齢にしちゃ、異例って取れるくらい」

「え？　強すぎると、なにか問題があるの？」

「大アリだ。たとえばユーノ。
お前、俺とデュエルしようって言われたらするか？」

「えッ！？　そ、それは無理だよ。
僕デッキ持ってないし、それに鬼柳さんは強くて……あ！」

「そう言うことだ」

鬼柳は当時のなのはの強さを思い出して、深々と嘆息する。
当時まだ小学校に入るか入らないかと言う年齢なのに、大人顔負けのデュエルをする。

幸い持っているカードはそこまで大したカードではなかったのだが、相応のカードを持っていたら。
もしかしたら自分と一歩も引かないデュエルをしていたかもしれない。もしかしたら、自分以上のデュエルを。

ユーノもその可能性に思い至ったのだろう。ハッと大きく目を見開いて驚いた表情を浮かべている。
そう。異質なものを排除しようとするのは人として当然のことだ。
そして当時、なのははそれを知らないでいた。

だから彼女は排除された。強すぎると言うだけの理由。
しかし、それ相応の理由を持って。

「当時のなのはは強さの加減を知らなかったんだろうな。
だから独りぼっちだったんだろう。当時の年齢じゃ、大会にも出れなさそうだ」

「じゃ、じゃあ……。なのはが不満足そうな表情をしてたのって…

…」

「あぁ。本気のデュエルが出来ない。
デュエルを楽しめるほどの強さを持った相手が居なかったんだよ」

洋服箪笥の中から適当な座布団を引っ張り出すと、鬼柳はその座布団に腰を下ろす。
そして机の上に置かれている写真に手を伸ばし、その写真を見つめながらなのはが孤独だった理由を告げた。

もしも手加減を覚えていれば。もしももう少しだけ年齢が上だったならば。
しかし、そんなＩＦは成り立たない。全ては起こるべくして起こった出来事なのだ。

「それにどうやら当時のなのはの家庭環境も影響していたんだが…。
生憎とコイツは軽々しく話せなくてな。悪い」

「……うぅん、気にしないで。
でも、今は満足そうな顔してるよね。それって、鬼柳さんと出会ったから？」

「さぁな。ただ、なのはや士郎たちはそう言っているが……」

鬼柳は持っていた写真から目を離すと、ユーノにこの話は終わりだと言外に告げる。

ユーノに言い出せなかった当時のなのはの家庭環境。それは彼女の父親である士郎の入院。

その入院は予定されていたものではなく、突発的に起こったものらしい。

それによって高町家はバラバラ。なのははこの高町家で独りぼっちの生活を送っていた。

桃子や美由希からは気にしないで遊んでいてと言われたが、当時のなのははそれを自分は要らない子と勘違い。

どうやったら必要としてもらえるのか考えて、デュエルの大会に出て優勝すると言う方法を選択したのだ。

デュエルモンスターズの大会には子供・大人問わず多少なりとも賞金は出る。

なのははその賞金を家に入れて地位の回復に努めようとしたが、年齢が足りずに断念。

それからどうやって家族の役に立とうか考えていた様だが、良い考えが浮かばず。

それに加えて幼いなりにストレスも溜まっていたのだろう。それを吐き出すようにデュエルをしていた様だ。

「なのはも負けたのが初めてだったようでな。
それから俺が公園で寝泊まりしていると、決まってデュエルしに来たよ。毎回デッキを改造して」

「へぇ。で、鬼柳さんはそれを悉く打ち破って行ったと」

「あぁ。当時の俺はデュエルに希望を見出せていなかったんだが……。

なのはとデュエルをしているとな。コイツの満足した顔が見たいって感情が湧き上がっちまった。

そしてデュエルの回数が十回を超えるか超え無いかの時にようやく……アイツは負けて悔しそうに。でも、満足そうに笑ったんだ」

なのはは当時無敗を誇っていた様で、初めての敗北に戸惑いを隠せていない様子だった。

その後、鬼柳はその公園に寝泊まりし、なのははほぼ毎日デッキを改造してやってくる様になった。

徐々に改良されていくなのはのデッキ。しかし、鬼柳から勝利を奪い取ることは限りなく難しかったようだ。

しかし鬼柳とのデュエルが十回を超えようかと言うとき。なのはは全ての力を出し切って組んだデッキで鬼柳に挑み、敗北。

悔しそうな表情を浮かべながらも、全力を出し切って満足そうな笑顔を浮かべたのだ。

それは鬼柳が求めていた満足そうな笑顔。当時はチームサティスファクション時代のことを思い出し、鬼柳も満足そうに笑った。

「その後はなのはの面倒を見ていてくれてありがとうと士郎に礼を言われたりしてな。

その後は色々あって……今は高町家に居候の身だ」

「へぇ。そうなんですか」

「……さて、つまらない過去話はこれで終わりだ。
朝食の準備をするぞ」

「あ、はい」

そしてなのはとデュエルを何度もしていると、ようやく退院した士郎をなのはが連れてきたのだ。
その頃にはすっかりなのはも鬼柳に懐き、鬼柳を自宅に泊めようと必死に両親を説得していた。

流石にそこまで世話にはなれないと鬼柳は断ろうとしたのだが、高町夫妻はなのはの訴えを了承。
慌てて高町夫妻を説得しようとしたのだが、夫妻はなのはの涙眼攻撃によって撃沈。説得は不可能となったのだ。

当時を思い出してゲンナリしたのだろう。鬼柳は深々と嘆息すると、下ろしていた腰を上げる。
そしてユーノの入ったバスケットを片手に持つと、そろそろ朝食の準備を始める高町家へと足を運んだ。

※

「おっはよー！」

朝から元気な様子のなのはは、勢いよく教室の扉を開いた。
するとすぐさま、二人の少女がなのはに詰め寄ってくる。なのはの親友であるアリサとすずかだ。

「なのは、昨日の話聞いた？」

「え？　昨夜って？」

「昨日行った病院一帯で、爆弾が爆発したような形跡があったんだって」

「あのフェレットが無事か心配で……ってなのは、大丈夫？」

なのはが鞄を自分の机の上に置くと、アリサとすずかはなのはにニュースを告げる。
それは昨夜、昨日行った病院の辺り一帯がまるで爆発を起こしたかのような惨状になっていたと言うものだった。

電信柱は根元から折れ、地面は幾つもの陥没した後。家の周りを覆う壁は無残にも打ち砕かれている。
まるでその辺り一帯でテロが発生したような。アリサやすずかでなくても、心配になってしまうのは無理もないことだ。

「え、えぇっと……。うん、大丈夫だよ」

「なら良いんだけど……」

一方、アリサ達から衝撃のニュースを受け取ったなのはは顔に手を当てて項垂れていた。

そうだ。鬼柳が当時言っていたではないか。相手のモンスターは実体化して物理ダメージを与えると。

しかも当時はライディング・デュエルと呼ばれるデュエルを行っており、被害は拡大していることだろう。

迂闊だった。なのはは誰にともなくそう呟きながら、多大な迷惑をかけたであろう警察署員に内心で謝罪する。

「そっか。無事でなのはの家に居るんだ！」

「でも凄い偶然だったね。

鬼柳さんのバイクに乗ってるときに、たまたま逃げ出してたあの子と道でバッタリ会うなんて」

「あ、あはは……」

そして一通り心の中で迷惑をかけた警察官の方に謝罪すると、なのはは慌てて話題をフェレットへと変えた。

このまま同じ話題を続けていたら、ウッカリ変なことまで喋ってしまいそうだ。それだけは是非とも避けたい。

魔法などのことはアリサ達に伏せながら、なのははなんとかフェレットの事まで話題を変える。
本当ならばアリサ達にも魔法のことを喋りたいのだが、喋ったらアリサ達にも危害が及ぶかもしれない。

それがなのはは納得できず、なんとか魔法のことに関しては喋らずに済んだ。
しかし、ジュエルシードを集め終えたらアリサ達に話そうとなのはは思っている。

家族や鬼柳と同じくらい大切な友人。
彼女たちに嘘を吐いて満足など出来る筈もない。

「（そう言えば、ライディング・デュエルってなんだったんだろう？）」

フェレット（ユーノ）のことについてなんとか説明し終えると、ふとなのはの脳裏に疑問が浮かぶ。
それは昨夜、鬼柳が謎の怪物と行ったデュエルについて。バイクで走りながらデュエルするなんて聞いたことない。

鬼柳にそれとなく訊ねてみたのだが、彼は話を逸らすばかり。まるで都合の悪い事だと言っている様な気がした。
なんとか彼から「ライディング・デュエル」と言う名前までは聞き出すことに成功したのだが、その様なデュエルの形式は知らない。

そもそもデュエルディスクの開発にすら成功していないのだ。あのバイク――Dホイールもどの様に設計されたのだろう。

考えれば考えるほど、鬼柳に関する謎が増えて行く。今までは些細な疑問だったのだが、徐々にその疑問は大きさを増していく。

もしや、鬼柳はデュエルモンスターズを設計している会社の関係者なのだろうか。

しかし、それではデュエルディスクの開発が発表されていないのはおかしい。

徐々に疑問が大きくなっていく中、なのはは黙々と授業に集中していった。

※

「なのは！」

「鬼柳さん！」

なのはが学校を終えて通学路に着いた頃。不意になのはを不可思議な感覚が襲った。

それは昨夜、ユーノを拾った動物病院で感じた様な、世界が変わって行く様な不可思議な感覚。

慌てて自宅へ向かおうとしたなのはの視界に、Dホイールに乗った鬼柳が映る。
彼の方にはユーノが飛び乗っており、どうやら彼が鬼柳に異変を教えた様だ。

鬼柳はなのはの名前を叫ぶと、Dホイールの何処からか新たなヘルメットを取り出し、なのはに投げる。
投げられたヘルメットをなのははなんとかキャッチ。急いでヘルメットを被ると、鬼柳の後ろに飛び乗った。

「ユーノ、目的地は何処だ」

「此処からもう少し行った先……ッ！　あそこです！」

「あそこって……神社！？」

なのはがDホイールに飛び乗ったのを確認すると、鬼柳はアクセルを回してその場を後にする。
そして違和感を感じる方へとバイクを走らせながら、鬼柳は違和感の発生源をユーノへと訊ねていた。

なのはとユーノが感じる違和感の発生源は、彼らの視線の先――とある神社から放たれている。
鬼柳はその神社を目視出来たのだろう。キッと目を細めると勢いよくアクセルを回した。

「あにゃにゃにゃにゃにゃにゃ！！」

「ちょちょちょちょちょ、きききききき鬼柳さんッッ！？」

「口を閉じて無いと舌を噛むぞ」

そして神社へと続く長い階段を、鬼柳達の乗ったDホイールが上って行く。

勿論上って行くのは階段の上。激しい震動がなのはやユーノを襲い、鬼柳は口数を少なくする。

階段を一段上る度に聞こえるなのはやユーノの声が意外と面白いと思いつつ、鬼柳達は階段の上へと到着する。

そして見えたのは、神社の境内に倒れる一人の女性。そしてその女性を見下ろしている一匹の犬の様な怪物の姿だった。

「なのは、レイジングハートを！」

「えと、うん！」

なのはとユーノは鬼柳のDホイールから飛び降りると、ユーノは昨夜なのはに渡した宝石を取り出す様に指示を出す。

彼女に与えたのは魔法を使うために必要なデバイスと呼ばれる道具。本来は杖などの形になるのだが、何故かデュエルディスクになる。

「現住生物を取り込んでる……！　気を付けてなのは！

実態がある分、手ごわくなってる！」

「大丈夫だよ！」

「なのは……。なら、レイジングハートの起動を！」

ユーノは何故デバイスがデュエルディスクになるのか首を傾げながら、なのはに指示を出した。
どうやら今回のジュエルシードは現住生物――犬を取り込んでいるようで、昨夜の様には行かないかもしれない。

不安そうな視線でなのはに視線を送るが、なのはからは自信満々な笑みが返ってきた。
どうやら犬相手に負ける気は毛頭ないようで、なのはは犬に視線を向けながらデッキをシャッフル。

「えッ！？　き、起動ってなんだっけ！？」

「わ、我は使命を～から始まる、起動パスワードだよ！」

「あ、あんな長いの、一回で覚えられる訳無いよ！」

と、デッキをシャッフルしていたなのはの手が止まった。
タラタラと冷や汗を流しながら、ユーノに視線を向けている。

どうやら赤い宝石――レイジングハートの起動パスワードを忘れてしまった様だ。

思わぬなのはの答えにユーノは驚いて目を見開き、茫然とした表情を見せる。

一方、なのはやユーノが揉めているのを好機と見たのか。犬の姿をした怪物はなのはへ向けて駆けた。

どう言う訳か知らないが、相手は怪物を相手に余裕そうな態度をしている。ならば不意打ちしても構わないだろう。

「も、もう一回言うから繰り返して！」

「わ、分かった――――ッ！？」

ユーノが慌ててなのはの肩に乗り、もう一度起動パスワードを告げようとする。

しかし、此処に至ってようやく犬の怪物の接近に気が付いたのか。彼らの目が大きく見開かれた。

既に犬の怪物はなのはとユーノを射程距離圏内に捉えており、あとは彼らの喉笛に噛みつくだけだ。

迫りくる怪物に二人は身動きをとることすら出来ず、茫然と怪物の接近を見守るしかない。

――――ガシャッ！

だが、あと僅かでなのはの喉笛に噛みつこうとしていた怪物の接近は突如阻まれた。

それと同時、何か重い金属が地面に放り出される音がなのはの耳に聞こえる。

ハッと我に返り、視線を重い音が聞こえた方へと視線を向けた。
するとそこには、境内に倒れている鬼柳とDホイール。鬼柳の頭部からは出血していた。

「き、りゅう……さん？」

「鬼柳さん！」

「ぐっ……」

頭から血を流しながら倒れている鬼柳を見て、なのはは茫然と鬼柳の名前を呼んだ。
嘘だ。どうして鬼柳が頭から血を流して倒れているの？　なのはの頭はそれらの言葉で一杯だ。

だが、なのはの頭の一部は冷静に状況を判断していた。簡単なことだ。鬼柳がなのはを庇ったのだ。
どうやらなのはと怪物との間にDホイールで割り込んだ様で、怪物の体当たりを受けて吹き飛ばされたらしい。

「なの、は……！　デュエル、だ……！
デュエルをしろ……ッ！」

「き、鬼柳さん！」

「コイツを倒して……満足、するんだろうが！」

「――――ッ！　レイジングハート！」

『スタンバイ・レディ。セットアップ』

「ッ！？」

鬼柳は苦しげに呻きながら、なのはがデュエルすることを望んだ。
自分はなのはの様にジュエルシードを封じることは出来ないが、この様にサポートできる。

なのはは鬼柳の言葉に躊躇していた様だが、ようやく決心したのか。
手に持っていたレイジングハートを握り、レイジングハートの名を叫んだ。

すると瞬間、彼女の握り込んだ赤い宝石が眩いばかりの光を放つ。
それにユーノは驚きに目を見開き、鬼柳は出血した個所を抑えながら起き上った。

「――――さない」

『グゥウウウ……！』

「絶対、絶対許さないんだから！　デュエル！」

なのはＬＰ４０００　ｖｓ　犬の怪物ＬＰ４０００

そして光が晴れたとき、そこには昨夜の白いコートとデュエルディスクを身に付けたなのはが居た。
相変わらず鬼柳と色違いのコートに裾を通し、純白に輝くデュエルディスクには自身のデッキがセットされている。

なのははデッキが自動的にシャッフルされるのを横目に見つめながら、静かに。しかし、はっきりとした声で呟いた。
幼い頃、いつも自分とデュエルをしてくれた大切な人。その人物を目の前で唐突に傷つけられたのだ。激しい怒りがなのはを蝕む。

そして犬の怪物に向けて大声でデュエルの開始を宣言すると、彼女は手札を五枚抜き取った。
それと同時、犬の怪物の周囲にも五枚のカードが浮遊する。どうやらアレが手札の様だ。

手札：5→6

『≪フレムベル・ヘルドッグ≫召喚!!』

フレムベル・ヘルドッグ
星4／炎属性／獣族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ２００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「フレムベル・ヘルドッグ」以外の守備力２００以下の炎属性モンスター1体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

先攻を制したのは全身を黒い影の様なもので覆っている怪物だった。
その怪物は以前の様に喋り、怪物の周りに浮いていたカードを地面にセットする。

すると、全身をマグマの様なもので成形している一体の犬型のモンスターが現れた。
プレイヤーが犬ならば、使役するモンスターも犬なのだろうか。ふとそんなことを考える。

だが、なのははその他愛のない考えを思考の隅に放り投げると、自身の手札に視線を落とした。
今の彼女の手札はかなり良く、上手く回せば1ターンキルをすることも不可能ではない。

『カードヲ二枚伏セテ、ターンエンド』

手札：6→3

「わたしのターン、ドロー！」

手札：5→6

「手札から≪ハリケーン≫を発動！
場の伏せカードを全て手札に戻すよ！」

ハリケーン
通常魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

『（場ノミラーフォーストグレイモヤガ！）』

なのはの発動した「ハリケーン」の効果により、場に伏せられていた魔法・罠カードが手札に戻される。
彼女の予想外のカードの発動に、犬の怪物は内心で驚愕の声を上げた。このままでは大ダメージを受けてしまう。

なにせ相手が「ハリケーン」を発動したと言うことは、手札に起死回生のカードがあると言うこと。
一体どんなカードを使用して自身にダメージを与えてくるのか。犬の怪物は知らず身を低くして構える。

「そして手札から≪太陽の神官≫を特殊召喚！
さらに≪氷結界の紋章≫を発動！」

太陽の神官
星５／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１０００／ＤＥＦ２０００
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキから「赤蟻アスカトル」または「スーパイ」１体を手札に加える事ができる。

氷結界の紋章

通常魔法
自分のデッキから「氷結界」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「手札に加えるのは≪氷結界の風水師≫！
そして手札に加えた≪氷結界の風水師≫を召喚！」

「まさか……なのは、エースを呼ぶ気か？」

「え、エース？」

「あぁ。アイツの誇る、自慢のエースだよ」

氷結界の風水師
チューナー（効果モンスター）
星３／水属性／魔法使い族／ＡＴＫ８００／ＤＥＦ１２００
手札を1枚捨て、属性を1つ宣言して発動する。
宣言した属性のモンスターはこのカードを
攻撃対象に選択する事ができない。
この効果はこのカードがフィールド上に
表側表示で存在する限り1度しか使用できない。

なのはと犬の怪物とのデュエルを見守っていた鬼柳が、驚いた様に目を見開いた。
彼はなのはがどんなモンスターを召喚しようか見当がついている。
それはかつて、鬼柳の仲間が所持していたカード。まさか再びこの

目で拝むことが出来ようとは。
ユーノは鬼柳の言葉に首を傾げるが、鬼柳はただなのはと犬の怪物とのデュエルを見守っている。

しかし、その表情に不安や恐れなどは無い。あるのはただ、そのエースがもたらす絶大なる安心感。
そのエースの召喚に成功すれば、なのははほぼ勝ったも同然だ。心配する事は何もない。

「レベル5≪太陽の神官≫にレベル3≪氷結界の風水師≫をチューニング！」

鬼柳とユーノが見守る先で、なのはがシンクロ召喚に映っていた。
場に出ていた「氷結界の風水師」が奇妙な踊りを踊ると、彼女は姿を緑色のリングに変える。

そして「氷結界の風水師」が変化した緑色のリングを「太陽の神官」がくぐって行く。
すると「太陽の神官」の身体から五つに光る星の様なものが現れた。
それはリングの中で一列に整列する。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／ＡＴＫ３０００／ＤＥＦ２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。
このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、
このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上の
このカード以外のモンスターを全て破壊する。

リングの中で一列に揃った光る星を、一筋の光線が貫いた。次いで、そこから現れるのは王者の力を持つドラゴン。
その荒々しいまでの存在感はレイジングハートの効果により、本物の存在感を確かにそこに知らしめていた。

ユーノはなのはが召喚したエースモンスターの姿に見惚れ、鬼柳はそのモンスターを何処か懐かしげに見つめる。
しかし後ろで彼らが見ているとは知らないなのははデュエルを続ける。彼女は新たなカードを使用しようと、手札に手をかけた。

「さらに手札から≪地砕き≫と≪二重召喚≫を発動！
相手の≪フレムベル・ヘルドッグ≫を破壊してわたしはモンスターをもう一度召喚できる！」

地砕き
通常魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスタ

ー1体を破壊する。

二重召喚
通常魔法
このターン自分は通常召喚を2回まで行う事ができる。

「≪二重召喚≫の効果でわたしは手札から≪魔導戦士ブレイカー≫を召喚！
　効果によって、「ブレイカー」に魔力カウンターが一つ乗るよ！」

魔導戦士ブレイカー
星４／闇属性／魔法使い族／ＡＴＫ１６００／ＤＥＦ１０００
このカードが召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大１つまで）
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。
また、このカードに乗っている魔力カウンターを１つ取り除く事で、
フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を破壊する。

ブレイカーＡＴＫ１６００→１９００

なのはは自身の手札がゼロになるまでデュエルディスクにカードを置いていく。
既に相手の場のモンスターは「地砕き」によって破壊され、相手を護るカードは無い。

それに加え、なのはの場には攻撃力３０００の「レッド・デーモンズ・ドラゴン」に「魔導戦士ブレイカー」が居る。

明らかにオーバーキルな様子に、鬼柳は呆れた様な視線をなのはへと向けていた。

鬼柳も鬼柳で、幼いなのはが此処まで強くなるとは思ってもみなかったのだろう。

対戦している犬の怪物に哀れそうな視線を向けながら、ただデュエルの成り行きを見守る。

「バトル！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫と≪魔導戦士ブレイカー≫で攻撃！」

なのははその瞳に怒りを宿らせながら、未だ相対している犬の怪物をジッと見据える。

元よりある程度抑えて闘おうとしていたのだが、相手が自分の大切な人を傷つけたのなら話は別だ。

なのはは自分の傍に控える二体のモンスターに指示を出す。

指示を出された二体のモンスターは命令に背く事もせず、凄まじい速度で犬の怪物に迫った。

「レッド・デーモンズ・ドラゴン」は片腕に炎を纏わせて、犬の怪物にグッと突き出し。

「魔導戦士ブレイカー」は手に持った剣で茫然とした様子の犬の怪物に斬りかかって行く――――

『ば、バカナバカナァアアアアッッ！！』

犬の怪物ＬＰ４０００→３０００＋１９００＝－９００

第四話　「鬼柳の過去」（後書き）

なのはのエースとは「レッド・デーモンズ・ドラゴン」でした。
果たして他のドラゴンが参戦することはあるのか……。

それと何気に1ターンキルしてしまいました。
……ま、まぁ。多分この一回だけだと思います。

第五話　「異世界のデュエリスト」（前書き）

今回はちょっと短いです。
デュエルは次回辺りまでお休み。

それとタイトルに深い意味は無いです。

第五話　「異世界のデュエリスト」

～海鳴市　某所～

「はぁ、はぁ……！」

荒い息を吐きながら、なのはは目前の犬を取り込んだ怪物に視線を向ける。
なのはの「レッド・デーモンズ・ドラゴン」と「魔導戦士ブレイカー」の攻撃を受けた怪物はピクリとも動かない。
どうやらライフポイントに致命的なダメージを与えた様で、動く事すらままならない様だ。
と、なのはが息を整えようとしている先で、犬を取り込んだ怪物の身体が蒼く発光を始める。

「封印した……！　なのは、大丈夫？」

犬の身体から立ち上る蒼い光は、昨夜なのはが見た光景とまったく同じだった。
そして地面に倒れている犬の身体が一際激しく輝くと、そこに残るのは子犬と小さな蒼い石。

どうやらジュエルシードの封印に成功したようだ。
後ろに控えていたユーノが慌ててなのはの元へと駆け寄る。

「なのは、無事……か？」

「！　き、鬼柳さん！」

ユーノがなのはの肩に飛び乗ってなのはの無事を確認していると、鬼柳が心配そうな瞳でなのはを見つめた。
すると、先ほどまで荒い息を吐いていたなのはがバッと顔を上げる。
その様子に思わず鬼柳は一歩後ずさってしまう。

「っと。どうしたんだ？」

「うにゃ？　わ、分かんないよ……。ただ、身体が凄くダルい……」

「それは多分、魔力を使い過ぎたんだ。
さっきのドラゴンの攻撃にはかなり魔力が籠ってたからね」

と、顔を上げたなのはが慌てて鬼柳の元へと駆け寄ろうとする。彼の無事を確かめる様だ。
しかし駈け出そうとして一歩か二歩ほど進んだとき、不意になのはの身体がグラリと揺れた。

そのまま地面へと倒れ込んでいきそうなのはを鬼柳は慌てて抱きとめる。
抱きとめたなのはの顔色を良く見てみれば、心なしか顔色が優れない様に見えた。

もしや怪我でもしたのだろうか。鬼柳はそんな疑問を抱くが、すぐに彼の疑問は解消される。
どうやらなのはが魔力を使い過ぎた様で、魔力切れ。簡単に言えば貧血の様な状態になっているらしい。

「なのは。あまり無理はするな」

「うぅ～……。って！　わたしよりも鬼柳さんだよ！
大丈夫!?　何処も痛くない？　血、一杯出てない!?」

「うわ！　おい、こら……。なのは！」

鬼柳はユーノの説明にホッと安堵の息を漏らすと、ポンポンと彼女の頭に手を乗せた。
士郎から彼女を預かっていると言うのもあるが、将来の有力なライバル候補。ここで失いたくない。

その言葉になのはは居心地に悪そうな表情を浮かべるが、すぐにパッと表情を一変。
鬼柳の身体に背中を預けながら、ぶんぶんと両腕を振り回して鬼柳の無事を確認しようとする。

ペタペタとなのはが無遠慮に鬼柳の顔や頬に触れ、鬼柳は戸惑った様な声を上げた。
異性。否、他人に顔に触れられると言う体験が皆無に等しい鬼柳にとって、どんな対応をすれば良いのか分からない。

ひとまず疲弊しているであろうなのはを休ませるため、鬼柳は先ほどDホイールで駆け上がってきた階段に腰掛ける。
そしてちゃっかりとなのはは鬼柳の膝の上に頭を乗せている。俗に言う膝枕と言う状況に、照れたのか。なのはは頬を赤く染めた。

「それにしても。あんな力任せなデュエル、何時振りだ?」

「うぅ……。多分、鬼柳さんと会ったとき振りくらい、かな?」

「あぁ……。そう言えば、あの時もそんな感じだったな」

徐々に太陽が沈んでいく様子を見つめながら、鬼柳は膝の上のなのはに訊ねた。
彼女があの様な高攻撃力のモンスターで力任せにデュエルをする様な光景は久しぶりだ。

それはなのはも思っていた様で、彼女はソッポを向きつつ鬼柳の訊ねに答える。
そう。彼女があの様な戦法をとるのは鬼柳と初めて会った頃。まだ小学校に入るか入らないかと言う頃だ。

子供らしく力任せに。それでいて大人の様に周到に相手のモンスターや罠を除去する。
この二つが合わさったなのはは当時無敗を誇り、鬼柳ですら彼女とのデュエルには手を焼いたほどだ。

「あんなデュエルで、お前は満足できるのかよ?」

「あぅう……。で、出来ません……」

「当たり前だ。お前はお前らしいデュエルをすれば良い」

鬼柳は昔の記憶に思いを馳せながら、先ほどのデュエルの感想をなのはに訊ねる。
あの様な1ターンキルのデュエル。はたしてなのはは満足出来るのだろうか。

そして案の定、返ってきたのは満足できないと言う言葉。
それは半ば当たり前だ。自分が得意とする戦術で相手を倒すこと。
これがなのはの満足のアイデンティティである。
これを自ら破ってデュエルを行ったのだ。満足できるはずもない。

「（でもでも。鬼柳さんが心配だったんだけどなぁ～……）」

しかしなのはにとて言い分と言うものはある。
彼女は自身の目前で血を流して倒れる鬼柳を見て、頭が真っ白になったのだ。

幼い頃から自分の傍に居て、自分自身を受け止めてくれる大切な人。
彼と共に生活を送る様になって、自分にも優しい視線を向けてくれる大切な人。

そんな鬼柳が目の前で傷つけられたのだ。それも、茫然と立ち尽く

していた自分を庇って。
鬼柳が無事でよかったと思う反面、なのはは彼に怒りを感じる。もう少し自分の身体を大事にして欲しい。

「あ、そうだ。鬼柳さん、ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「？　聞きたい事？　なんだ？」

「鬼柳さんは、どうしてデュエルディスクを持ってるの？」

と、なのはが鬼柳の無茶振りに内心でヤキモキしていると、不意にある事が浮かんだ。
それは午前中、授業の合間になのはが思い至った鬼柳の謎について。

鬼柳は何故、未だ開発に成功していないデュエルディスクを持っているのだろう。
そしてデュエルディスクに加え、ライディング・デュエルは一体何時開発されたデュエルの方法なのか。

考えれば考えるほど疑問が湧いてくる。この世界においてオーバーテクノロジーな技術。
まるで鬼柳もユーノと同じように異世界。もしくは未来からやってきたのかもしれないな。なのははそう思う。

「そう、だな……。教えても、良いか」

一方。鬼柳はなのはの問いかけに、小さな声で自身に確認を入れていた。
ユーノが異世界からやってきたと言う事実を聞き、なのはも異世界に対する認識を改めているだろう。

ならば話しても大丈夫かもしれない。もしかしたら拒絶されるかもしれないが、嘘を言うよりは満足できる。
そして鬼柳はなのはの頭をゆっくりと撫でながら、自身がこの世界とは違う世界からやってきたことを話し始めた。

勿論、ダークシグナーやシグナーの話などは伏せたが、それ以外は大まかに話して聞かせた。
鬼柳の住む世界ではデュエルディスクが一般的で、鬼柳はとある事件でこの世界へやってきたこと。

昔結成していたチームサティスファクションと言う組織で自身が暴走し、仲間に辛い思いを味あわせてしまったこと。
なのはに語って聞かせるうちに昔のことを思い出してしまったのだろうか。普段よりも饒舌な様子で鬼柳はなのはに語って聞かせる。

「うにゃ……。鬼柳さんが、異世界の人だったなんて……」

「あぁ。だから、当時のなのはの申し出は本当は嬉しかったんだ。
俺にこの世界での拠点は無かったからな」

いつの間にか身体の具合が良くなっていたなのはは名残惜しいものを覚えつつ、鬼柳の膝から頭を離す。
そして鬼柳に聞かされた衝撃の事実に、ポカンとそのくりくりとし

た瞳をまん丸くした。

ユーノに続き、まさか鬼柳までもがこの世界とは違う世界の住人だったとは。

しかもその世界でもデュエルモンスターズは行われており、デュエルディスクの開発に成功していると言う。

そんな世界のデュエリストである鬼柳がこの世界にやってきたのだ。

ならばデュエルディスクを持っていてもおかしくない。

なのはは鬼柳の言葉に納得すると同時、どうして話してくれなかったんだろうと頬を膨らませる。

「仕方が無いだろう。
いきなり俺は異世界人です、なんて言って。信用できると思うのか？」

「うっ！　そ、それは……」

「まぁ、士郎や桃子は俺が異世界人だと知っているがな」

「えッ！　本当！？」

頬を膨らませて拗ねた様な視線を向けるなのはに気が付いたのだろう。

鬼柳は呆れた様な視線をなのはに送りながら、言い出せなかった訳を説明する。

当時はまだ小学校に入る前とは言え、並はずれたデュエルの腕を持

ったなのは。
そんな彼女がいきなり異世界の存在を信じるだろうか。答えは否。
自分だって信じられない。

鬼柳は目を泳がせているなのはから視線を逸らすと、一応士郎と桃子は自身が異世界人だと知っていると告げる。
それになのはは驚いた様な表情を浮かべた。当たり前だ。まさかこんなあり得ない事を両親が知っているとは思わない。

「なのはの家に厄介になる日に、な。
こんな俺でも、泊めて貰って良いのかって聞いたんだ」

「へぇ……」

鬼柳がなのはの家に厄介になる当日、彼は士郎と桃子に事の全てを話していた。
元々この世界については公園で寝泊まりしている間に情報収集を行い、把握していた。

その結果、この世界が鬼柳の住んでいた世界とはまるで違うことを鬼柳は把握していた。
これからずっとこの世界で公園暮らしをすれば良いのか。そう思っていた矢先にこの話である。

鬼柳としては渡りに船だったが、見ず知らずの他人にそこまで甘えて良いのだろうかと言う思いがあった。
だが、なのはや士郎の説得に渋々折れ、鬼柳は高町家に居候することを了承。その際になのはに告げたことと同じことを話した。

鬼柳の話を聞いた士郎と桃子は戸惑っていた様だが、それでも鬼柳を自宅に泊めることを了承。
それに今度は逆に鬼柳が驚いた記憶がある。何故泊めたのか。それを士郎に訊ねると彼は笑ってこう言ったのだ。

『誰かとデュエルをして、あんなに楽しそうに笑える君が悪い人なはずが無い』

士郎のその言葉に鬼柳は居心地が悪い物を感じたが、不思議とイヤな感じはしなかった。
それから高町家と鬼柳は徐々に交流を持ち始め、今では高町家の一員として彼は生活している。

「ほぇえ……。そんなことがあったんだ」

「あぁ。身元を隠して世話になるなんて、満足できねぇからな。
それに、なのはにも何時か言おうと思ってたんだ。それがたまたま今日だったってことだ」

「鬼柳さん……」

鬼柳の昔語りを聞き終え、なのはは感嘆の息を漏らした。まさかそんな事情があったとは知らなかった。
だが、考えればそれもそうかとなのはは納得する。鬼柳は何よりも満足することを第一としている。

そんな彼が身元を隠して誰かの世話になることなど出来ないだろう。
身元を隠して世話になれば、彼はきっと満足できない。だから話したに違いない。

鬼柳は長い間話して疲れたのか。
肩の骨を何度か鳴らすと、腰掛けていた石の階段から腰を上げる。

「さて、つまらない話は終わりだ。帰るぞ」

「あ、待ってー！」

※

「はふぅ……」

鬼柳の知られざる過去を知ってから数日が経った高町家。
その高町家の一室――なのはの私室から、気の抜けた声が聞こえた。
部屋の中には毛布に包まって丸まっている一人の少女。言うまでも

なくなのはである。
そして未だ布団の中から出てこないなのはの様子を、鬼柳は何処か真剣な眼差しで見つめていた。

「（流石のなのはでも、そろそろ限界か……）」

なのはが魔法デュエリストとなってから数日。その間、なのはは絶えずデュエルをしていた。
最初の動物病院での一件こそなのはと鬼柳のタッグだったが、その後はただなのはが頑張っていた。

しかもそのデュエルは毎日行われており、流石のなのはも気力と体力がすっからかんのガス欠状態だ。
今日一日くらいは休ませても良いかもしれない。このまま無理をさせ続けるのも身体に悪いだろう。

「なのは。朝だよ。起きよう？」

「あぅう～……。今日は日曜だし、もう少しお寝坊させて～……」

「あ、なのは！」

鬼柳は今日一日のなのはの休みを決定すると、なのはを起こそうとしているユーノに視線を向ける。
彼の言葉はどうやら、彼女を気遣ってのものらしい。朝食を抜くのは身体に非常に悪いのだ。

しかしなのはもなのはで、日々の疲れやストレスで布団から出るに出られない様だ。
柔らかい枕に顔を埋め、幸せそうな表情で「にゃぁあ〜」と鳴いている。その様子は猫だ。

「ユーノ。それくらいで良いだろう」

「でも、朝ご飯を抜くのは身体に悪いよ」

「おにぎりでも握って持ってくるさ。
それよりもなのは、あまり遅くならないうちに起きろよ。
今日は士郎がコーチを務めるクラブの大会だろ」

なのはが籠っている毛布の上に立ち、必死に起こそうとしているユーノを鬼柳は捕まえる。
そしてひとまず、これ以上なのはの休息を妨げるのは止めようとユーノに告げた。

彼は朝ご飯を抜くことに否定的だったが、鬼柳が後でおにぎりを持ってくると告げれば大人しくなる。
ちなみに鬼柳は料理は出来ないが、なんとかおにぎりは握れる様になっていた。どうやら桃子が頑張った様である。

鬼柳は布団の上のユーノを持ちあげると、なのはの部屋から出て行こうと出口に足を向けた。
何時までもなのはの休息を邪魔しても悪いだろう。と、部屋を出る際に今日の行事をなのはに告げる。

今日はなのはの父親である高町　士郎がデュエルのコーチを務めるデュエル大会が開かれる日だ。
以前から彼女の友人であるアリサ・バニングスや月村　すずかが共に行こうと誘っていたはず。
なのはもそれを思い出したのだろう。
「忘れてたぁあああっ！」と言う掛け声とともに布団から跳ね起きる。

「……？　あ、あの。鬼柳さん？」

「……なぁ、ユーノ」

「？　どうしました？」

なのはがワタワタと慌てて着替えているのを横目に、鬼柳はふと思案顔を浮かべていた。
彼の肩では頬を真っ赤に染めたユーノがなのはを見ない様にしており、二人の様子は滑稽そのもの。

しかし鬼柳は目の前でなのはが着替えているにも関わらず、ユーノに真剣な声音で訊ねていた。
それに思わずユーノも真剣な表情で鬼柳を見る。しかし、なんとか視界に着替え中のなのはを写さない様に。

「俺は……なのはのためになにかやれることは無いか？」

「え？」

「さっきのなのはを見ていて思ったんだ。
このままなのはだけに苦労を強いて良いのか……ってな」

「鬼柳さん……」

「俺たちは仲間であり、家族だ。家族を助けたいと俺は思うんだ」

今の鬼柳に着替え中のなのはは目に映っていない様で、ぼぅっとした視線を前方に向けている。
気づかれたら大変だろうなと思いながらユーノが彼を見つめていると、鬼柳は小さな声でユーノに訊ねた。

それは先ほどまでの疲れている様子のなのはを見て、鬼柳なりに導きだした答えである。
少しでもなのはの疲れを取り除きたい。精神が疲れている状態では、満足にデュエルも出来ないだろう。

ならばどうやってなのはの助けになれば良い？　今から数年前に受けた高町家の恩を、少しでも返しておきたい。
ユーノは鬼柳の言葉にハッと目を見開き、鬼柳の横顔を見つめている。そんなユーノに、鬼柳は苦笑してそう告げた。

「鬼柳さんのエッチ！」

「ぐぁ！」

しかしユーノの言葉は続けられることはなく。
鬼柳はなのはが投げたクッションの直撃を食らい、間抜けな声を上げた。

※

「≪E・HERO　アナザー・ネオス≫を召喚！」

「頑張れ頑張れー！」

「負けるなー！」

中央の会場から聞こえる歓声を耳にしながら、鬼柳はデュエルの会場をくまなく見回っていた。
結局あの後場所を変えてユーノと相談した結果、暴走前のジュエルシードを探そうと言うことになった。

暴走前のジュエルシードならば鬼柳でも見つけることが出来、少しでもなのはを休ませることに繋がる様だ。

ユーノのその提案に鬼柳は了承。彼はなのはが持っていたジュエルシードの形を覚え、同じ物は無いかと会場を見回っている。

ちなみになのはとユーノと言えば、観客席で大会の進行を見守っているだろう。

元よりなのははデュエルに関する勉強を怠らず、ユーノはデュエルに興味がある。この場に居ないのも仕方が無い。

「ふぅ。案外、見つからないもんだな」

そして鬼柳は一通り会場を見回ると、適当なベンチに腰を下ろして休憩を挟んだ。

この会場にあるのかと言う疑問はあるのだが、無いと仮定して探さないよりは十分マシだ。

しかし、絶えず地面を向いて歩いているために視界が悪い。

何度か柄の悪い男子にぶつかったが、鬼柳の風貌に相手は何もせずに逃げて行く。

こんなときマーカーは便利だなと鬼柳が思っていると、不意に視界の端で何かが光った。

なんとも無しに視線をそちらへと向けてみれば、そこには蒼色に光るジュエルシードの姿。

「……まさか、本当にあるなんてな」

鬼柳は誰にともなく呟くと、落ちていた静かにジュエルシードを拾った。
彼もまさか、この場所でジュエルシードを見つけるとは思ってもみなかっただろう。

だが実際に鬼柳はこうしてジュエルシードを発見している。なにか良いことでもあるのだろうか。
しかし、なにはともあれジュエルシードを一個見つけた。今朝の時点でなのはのジュエルシードは五つ。

これで六個目かと思いながら、鬼柳は観客席に居るであろうなのはたちを探しながら歩き回る。
なのはが鬼柳を見つけるのは簡単なのだが、鬼柳がなのはを見つけるのは骨が折れる仕事だった。

「手札から魔法カード≪ラス・オブ・ネオス≫を発動！」

「ＨＥＲＯデッキか。一度は闘ってみてぇな」

なのはを探しつつ、鬼柳は会場の真ん中で行われているデュエルの様子に視線を向ける。
この世界では未だデュエルテーブルが現役で、彼らはテーブルにカードをセットしてデュエルしていた。

そして鬼柳の耳に聞こえてきたのはあまり聞き慣れないカードの名前。
しかし鬼柳はそのカードの名前を知っていた。以前の世界で聞いた事がある。

なんでも世界を救ったデュエリストが持っていたと言う話で、実力は伝説のデュエリスト武藤　遊戯ほどだと言う。
一体どんな相手なのか。未だデュエリストの魂を持っている鬼柳からすれば、是非とも対戦したい相手であった。

「あ、鬼柳さん！」

「！　なのは」

「あぁ～！　鬼柳！」

と、デュエルテーブルに視線を移していると、聞き慣れた少女の声が聞こえた。
視線を声が聞こえた方へと向ければ、嬉しそうにぶんぶんと手を振っているなのはの姿。

しかしなのははそれでは飽き足らないのか。ぴょんと席から立ち上がると、鬼柳の元まで駆けてくる。
そして駆けてきた鬼柳をなんとか抱きとめると、なのはの背後からアリサの怒った様な声が聞こえてきた。

アリサは鬼柳やなのはと何度もデュエルをしているのだが、どちらに対しても勝率が低い。
なのはとは良いところまで戦えているのだが、あと一歩の差でなのはが勝利をもぎ取っている。

大方、またデュエルしろとでも言うつもりなのだろう。

鬼柳はずんずんと足音響かせながらやってくるアリサを見て、人知れずため息を吐いた。

※

なのはが鬼柳から六個目のジュエルシードを受け取って数日が経ったある日の夜。
星の光に照らされたビルの頂上に、その少女は立っていた。

年の頃はなのはと同じくらいだろう。腰まで届く金色の髪をツインテールにしている。
しかし、服装が少女を普通とは無縁だと感じさせた。彼女の身体を覆うのは黒いレオタード。

妙に露出の激しいその姿を漆黒のマントで覆い、腕には漆黒のデュエルディスクを付けている。
彼女はソッと視線を眼下に広がる美しい景色に向けると、誰かに確かめる様にソッと呟いた。

「ロストロギアは、この付近にあるんだね？」

少女はデュエルディスクを着けていない方の手を静かに擦りながら、ポツリと呟く。
と、そんな彼女の言葉に答える様に、「グルル……」と獣が鳴くような声が聞こえた。

少女の立つビルのすぐ傍には、橙色の体毛を生やした狼の様な生物が控えている。
しかし少女に恐怖の色は見えず。否、何処か安堵した様な雰囲気を周囲に漂わせていた。

「形態は蒼い宝石。一般呼称はジュエルシード。
……そうだね。すぐに手に入れるよ」

少女がすぐ傍に控える狼の様な生物に視線を向けながら、確認するように言葉を紡ぐ。
それに狼の様な生物はコクリと頷く。その様子に少女はコクリと頷くと、腕を擦っていた手を止めた。

そして月明かりの元に、少女の腕の様子が露わになる。
未だ幼い少女のその腕には何か――――まるで、翼を模した赤いアザの様なものが浮かんでいた。

第五話　「異世界のデュエリスト」（後書き）

はい、と言う訳であの少女が出現しました。

……それにしても、良いのだろうか。このままだとあの同盟が……。

なにはともあれ、次回をお楽しみに？

第六話　「黒衣の少女」（前書き）

今回デュエルとか言っといてデュエルしなかったｏｒｚ
次回はようやくデュエルですのでどうかお待ちを。

第六話　「黒衣の少女」

～海鳴市　月村家～

「恭也様、なのはお嬢様、鬼柳様、いらっしゃいませ」

海鳴市内から少し離れた場所にある豪勢な一軒家。
その一軒家の玄関に設置されたインターホンを押すと、一人のメイドが出てきた。

彼女の名前はノエル。月村家でメイドの仕事をしている女性の一人である。
他にももう一名ファリンと言うメイドが居るのだが、奥で何かをしているのか出てこない。

「お招きに預かったよ」

「こんにちは」

ノエルが恭也となのは。それに鬼柳に向けてほほ笑むと、二人は揃ってほほ笑んだ。
今日は先日のジュエルシード発見から日が経ち、なのはがすずかにお茶に誘われたのだ。

ちなみにアリサも居るようで、頻りになのはにリベンジをかまそう

と虎視眈々と奥から覗いている。
なのははそんなアリサの視線を感じ取ったのか。「ひゃぅ！」と小さな悲鳴をあげると鬼柳の背に隠れた。

「あらあら。なのはお嬢様、隠れていてはダメですよ」

「なのは、なにもアリサもお前の首を取ろうって訳じゃないんだ」

「ぅう……。でもでも、アリサちゃん負けると怪獣みたいに暴れ出すんだよ？」

「それくらい、いなして見せろ」

「はぁ～い」

ノエルは鬼柳の背中に隠れたなのはを見て、クスクスと笑みを零す。どうやら今のなのはが親猫に隠れる子猫に見えてしまった様で、ノエルの笑いを誘った様だ。

鬼柳もノエルと同様に笑みを零すと、背中に背負ったデュエルディスクの入ったリュックを抱え直した。
このデュエルディスクは月村家に訪れるたびに毎回持ち込んでいる。どうもすずかの姉の忍が興味を持っているらしい。

なんとかなのはの説得に成功すると、なのはたちはノエルを先頭にお茶をしているテラスまで歩き始める。
別段玄関からテラスまではさほど離れておらず、数分もしないうちになのはたちはすずか達がお茶会をしているテラスまでやってきた。

「クスンクスン……」

「あにゃ……」

「なのは……」

「なのはちゃん……」

と、テラスまでやってきたなのは達が見たものは、大量の猫を抱き抱えて泣き崩れているアリサだった。

どうやら先ほどなのはに怯えられて、大分心を痛めてしまったらしい。何とも言えない空気がテラスに集まる。

上から順番になのは、鬼柳、すずかの視線がなのはに向かう。なのはは自分自身を見てガクリと項垂れた。

とりあえずなのははアリサのご機嫌回復に努めるため、アリサの元まで向かう。そして視界に入るのは一人の女性。

「恭也、いらっしゃい」

「あぁ」

その女性はすずかを成長させたような外見で、落ち着いた雰囲気を鬼柳達に与える。

彼女の名は月村　忍。名前から分かる通り、月村　すずかの実の姉

である。

忍は入口付近まで来ていた恋人の恭也の元まで歩み寄ると、親しげにほほ笑んだ。
その笑みに恭也もニコリとほほ笑むのだが、すぐにその初々しい雰囲気は一変してしまう。

「そして鬼柳さん！　デュエルディスクをッ！」

「あ、あぁ……」

「今日こそは……今日こそは解析してみせるッ！」

忍は恭也に見せていた笑みを一変。まるでマッドサイエンティストが浮かべる様な笑みを浮かべた。
そしてキラリとその瞳を光らせると、不釣り合いなリュックを背負った鬼柳を視界に捉える。

鬼柳は襲いかかられてはご免だとばかりに背負っていたリュックを忍に投げ渡した。
それを忍は跳躍して空中でキャッチ。中に入っているのがお目当ての物だと分かると、不気味な笑いを浮かべる。

「忍……」

「恭也、いい加減にどうにかしてくれないか？」

「無理だな……。忍もデュエルディスクに興味があるし……」

何処からかドライバーやペンチなどを取り出す忍を、鬼柳と恭也は遠い目をしながら見つめていた。
思い出すのはなのはの家に居候するようになって数年ほど経った頃の出来事。丁度なのはが小学校に入ったころ。

友達になったすずかと言う少女の家に行った際、鬼柳も二人の後をDホイールで追いかけたのだ。
理由としてはなのはが忘れ物をしたからであるが、その際に忍にDホイールとデュエルディスクを見られてしまった。

そこからが鬼柳と鬼柳のデュエルディスクの地獄の始まりで、月村家を訪れるたびにデュエルディスクを持って来いと脅迫される。
鬼柳は断ろうとしたのだが、その際の忍の瞳が常人のソレではなく。断ったら不味いと察知し、壊さないことを条件に貸し出している。

「はぁ……。忍、部屋で解析しよう」

「うふふふ……！　今日こそはこのモーメント部分を解析して見せる！」

「忍……」

しばし高笑いを浮かべている忍を見つめていた恭也だが、これ以上恋人の醜態を見たくないのか。
ため息を吐きながら、忍を彼女の私室まで連れて行くことにした様

だ。彼女の背中を押しながら移動する。

徐々に遠ざかって行く恭也の背中が煤けている様な気がしたが、鬼柳はそれをなんとかスルー。

そして視線をなのはとアリサへと向ければ、ようやく復活したのだろう。アリサがデッキを握りしめていた。

「あはは……。それにしてもお兄ちゃんと忍さん、相変わらずラブラブだねぇ～」

「うん。お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってからとても幸せそうだよ」

「うちのお兄ちゃんはどうかな……。でも、昔に比べたら優しくなったかな」

そしてアリサにデュエルを申し込まれ、なのははシャカシャカとデッキをシャッフルしている。

しかしその視線はデッキに向けておらず、彼女の視線は徐々に離れてゆく兄と忍の背中に注がれていた。

すずかも二人の背中を目で追いかけながら、嬉しそうにクスクスと笑みを零している。

なんとも和やかな雰囲気。その中で鬼柳はなのはのリュックからユーノを引っ張り出していた。

「ユーノ、腹減ってるか？」

「キュキュ」

「そうか。なら一つやろう」

「キュッ！」

鬼柳はリュックからユーノを引っ張り出すと、自身の膝に乗せてエサを与え始める。

適当に取ったクッキーをユーノに見せ、食べるかどうか訊ねた。それにユーノは首を振って答える。

その中からユーノが食べたいものだけを選ぶと、鬼柳はそれをユーノへと手渡した。

ユーノは鬼柳からクッキーを受け取ると本物のフェレットの様にカジカジと食べ始める。

「恋人かぁ……。良いなぁ」

「アタシたちにはまだ早いでしょーが」

「でも、やっぱり憧れちゃうよ。なのはちゃんは？」

「ほぇ？　う～ん……」

「（やっぱり、随分ませた話をしてるな）」

鬼柳はユーノへクッキーを食べさせながら、こっそりとなのはたちの会話を聞いていた。
彼としては三人の会話を聞く気は無かったのだが、この場に居るのが自分を含め四人なのだから仕方ない。

そしてなんとも小学生らしからぬ会話の内容に、鬼柳は内心で呆れたように呟いた。
小学生のうちから恋人の話とは、なんともませた小学生だ。小学生でこれなら、中学生ではどうなるのだろう。

「鬼柳さんが居れば良いかな」

「え？」

「鬼柳さんとずっと一緒に居て、鬼柳さんとずっと満足するの！」

「……鬼柳」

「ん？　ど、どうした？」

内心でなのはたちの中学生生活に思いを馳せていると、なにやらなのはが言っていた様だ。
生憎と鬼柳は考えに没頭しており、なのはの言葉を聞いていない。
だが、周りの雰囲気が変わっている。

こちらを見つめるアリサとすずかの視線がやけに冷たいのは何故だろう。
そして彼の膝の上でクッキーを食べていたユーノの頬が赤くなって

いるのは何故だ？

「……この、ロリコン」

「ッ！？　な、おい！　アリサ！」

鬼柳が現状を把握できずにオロオロしていると、ポツリとアリサが小さな言葉で言い放った。
アリサのその一言に、鬼柳は何気にショックを受ける。どうして自分がロリコンなのだろうか。

鬼柳はアリサを問い詰めようとするのだが、何処からともなく現れた猫の大群に行く手を遮られる。
そしてこちらに向けられるアリサとすずかの侮蔑を含んだ視線。なにがどうなっているのか分からず、鬼柳はなんだか泣きたくなった。

「？　アリサちゃんもすずかちゃんもどうしたんだろう？」

「キュ、キュー……」

※

「――で、わたしは≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫で≪ジェネラル・デーモン≫に攻撃！」

「うげっ！　と、罠発動！　≪聖なるバリア―ミラーフォース―≫！」

「リバースカード発動！　≪トラップ・スタン≫！　効果でミラーフォースは無効だよ」

「んなぁっ！？」

場所を家の前に移し、鬼柳たちはそこでアリサのリベンジデュエルを観戦していた。
ちなみにアリサの使用しているデッキは【チェスデーモン】。鬼柳にとっては懐かしいカードだ。

しかし今回もなのはの勝利で決着が着いたようで、アリサがガックリとデュエルテーブルに突っ伏している。
主の無様な様子にも関わらず、デーモンたちはただ無機質に前を見据えていた。意思が伴わないとは言え何とも悲しい。

「にゃはは。まだまだアリサちゃんには負けないよ」

「うぅ～……。いい加減に負けなさいよ！　と言うか、アンタ引きがチート過ぎるわよ！」

「えぇ！？　そ、そんなの知らないよ！
それにわざと負けたらアリサちゃんも満足できないよ？　アリサちゃんも山でドローの練習でもしてきたら？」

「くっ！　こうなったらわたしもドローの修業を積むしかないのか……！」

なのははテーブルに出していたカードをデッキに納めると、苦笑いを浮かべながらそう告げる。
まだ彼女は鬼柳に勝てた試しがないのだ。こんなところで負けてはいられない。

アリサに負けろとも言われるが、それはなのはが全力で却下する。
相手に手を抜いて貰って勝利する。それで勝ちを譲ってもらえたプレイヤーは満足出来るのだろうか。

なのはからしてみれば、それは断じて否だ。自分の全力を出し切って勝利を勝ち取る。
それにこそ意味があるのに、負けて勝ちを譲ってもらうなど恥以外の何物でもない。

「そう言えば鬼柳さんも、ドローの練習とかしたの？」

「俺か？　俺はした事は無いな」

と、若干暴走気味のアリサをスルーして、なのはが横で観戦していた鬼柳に訊ねた。
先ほどの一件で僅かに機嫌が悪かったようだが、先ほどの二人のデュエルを見て機嫌を直したらしい。

彼は記憶を思い出す様に視線を上へと向けると、「練習はしていない」となのはに告げた。
なにせドローの練習などしても意味が無い。デッキを信じればカードが応えてくれるのだから。

「しっかし、すずかの家は相変わらず猫で一杯だな」

「えへへ」

「でも、子猫たち可愛いよね」

「うん！　里親が決まってる子もいるから、お別れもしなきゃならないけど……」

「そっか……。ちょっと、寂しいね」

「でも、子猫たちが大きくなっていってくれるのは嬉しいよ」

「そうだね」

鬼柳は昔の仲間を思い出しながら、デッキを信じれば良いとなのはに告げた。

それになのはも満足そうにコクリと頷く。それを見て鬼柳は話題を変えようと周囲の猫達に視線を向けた。

サテライトでは猫など見かけた事が無く、初めて見たとき鬼柳は大層驚いたものだった。

だが、慣れてみれば意外と可愛らしい。足元によってきて甘える様子はなんとも言えない可愛さだ。

「ッ！？」

「？　なのは？」

と、不意になのはがビクリと身体を震わせた。キョロキョロと周囲に視線を向けている。

突然の挙動不審げななのはの様子に、鬼柳は訝しげな視線を向けた。

幸いアリサやすずかたちは猫に夢中でなのはの異変に気がついた様子は見られない。

一体なのははどうしたのだろう。鬼柳が訊ねようとしたとき、彼の肩にユーノが飛び乗った。

「鬼柳さん、ジュエルシードです」

「なに！」

「えっと……。僕がこの場から離れるので、鬼柳さんはこの場の処理をお願いします」

「……分かった。ただしなのは、無理はするんじゃねぇぞ」

ユーノは鬼柳の耳元まで駆け上がると、彼の耳にしか聞こえない様に小さな声で呟いた。
そして聞こえたのはジュエルシードと言う単語。鬼柳もすぐさま真剣な表情を浮かべてユーノを見る。

慌ててジュエルシードを探しに出ようとするのだが、この場を突然離れるだけの理由が思い付かない。
一体どうしたらいいのか。それを考えていると、彼の肩に乗るユーノが案を申し出てきた。

ユーノが突如あらぬ方向へと逃げだすので、なのはが自分を追いかけて来て欲しい。
鬼柳には、なのはが去った後のフォローを頼みたいそうだ。これで何とかなるだろう。

ユーノの提案に鬼柳はコクリと頷くと、危なくなったらサレンダーしろとなのはに注意を促す。
それはなのはも分かっていたのか。彼女がコクリと頷くと、ユーノはこの場から全速力で駆け出した。

※

「発動した！？」

「此処だと人目が……。結界を作らなきゃ！」

ジュエルシードの反応を追い、なのはとユーノは月村家のすぐそばの林の中に居た。
後ろからアリサとすずかが追いかけてくる気配は無く、上手く鬼柳がフォローしているのだろう。

それにホッと安堵の息を吐いたのも束の間、彼らの身体を鈍い衝撃波の様なものが通過する。
なのははその感覚に覚えがあった。初めてジュエルシードの暴走体に遭遇した時に感じたものと同じ物。

「結界？」

「最初に会ったときと同じ空間。
魔法効果の生じている空間と、通常空間の時間信号をずらす物。
僕が少しは、得意な魔法」

ユーノはなのはに結界とは何かと触りの部分だけ教えると、瞼を閉じて集中する。
すると彼らの周りに黄緑色の魔法陣が展開され、周囲の景色が徐々に変化していく。

「あまり広い空間は切り取れないけど……この家の付近くらいなら、なんとか」

視界に映る物が徐々に色を失っていくのを茫然となのはは見送っていた。

そんなとき、彼女の背後から青色の光が立ち上る。慌ててそちらへと視線を向ければ――

「にゃッ！？」

「……キュ？」

なのはとユーノの視界に入りこんだのは、周囲の木々よりも大きくなった子猫の姿だった。

否、子猫と言って良いのか甚だ疑問だが、便宜上子猫と呼ぶことにしようと思う。

その子猫は地上から見上げているなのはとユーノを見下ろすと、「にゃぁ」と一声。

のしのしと地面を僅かに揺らしながら、ご機嫌そうにお散歩をし始めた。

「あ、アレは、多分……。

あの猫の大きくなりたいって言う思いが、正しく叶えられたんじゃないかな？」

「……そ、そっか」

「だけど、このままじゃ危険だから元に戻さないと」

「そ、そうだね。さすがにあのサイズだと、すずかちゃんも困っちゃうだろうし……。

何よりも猫さんが満足できないと思うの！」

「……」

呑気にお散歩をしている子猫を見つめ、ユーノがなんとか冷静になろうと状況判断を始める。

どうやら今回はジュエルシードの暴走は起こらず、小康状態が保たれている様だ。

しかし、このまま大きくなっていても暴走の危険性はある。封印してしまうのが安全だろう。

なのはもそれに気がついたのか。コクリと頷くと、いかに猫が満足できないか熱弁をふるい始めた。

なのはの熱弁を聞きながら、ユーノは内心で思う。

これはある種の熱血病。否、満足病なのかな――――と。

「襲ってくる様子も無さそうだし、ささっと封印を――」

『■■■■～～ッ！』

「え、えぇ！？」

なのはは猫が襲ってくることは無いと判断したのか。
ホッと安堵の息を吐きながらレイジングハートを取り出す。

今のレイジングハートの形態は以前の様な赤い宝石のまま。
しかしなのはが一声かければ、レイジングハートは白いデュエルディスクへと姿を変える。

そしてどのカードで封印処理を行おうか悩み始めたとき、不意になのはの背後から人影が飛び出した。
その人影は木の上をぴょんぴょんと飛び跳ねながら巨大化した猫の元へ向かうと、全力の回し蹴りを食らわせる。

「アレって……≪スピード・ウォリアー≫！？」

スピード・ウォリアー
星２／風属性／戦士族／ＡＴＫ９００／ＤＥＦ４００
このカードの召喚に成功したターンの
バトルフェイズ時にのみ発動する事ができる。
このカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる。

猫に回し蹴りを食らわせた人影は、ザッとなのはの後方へと下がった。

そしてなのはは、先ほど後退した人影に見覚えがある。あれは「スピード・ウォリアー」だ。

「スピード・ウォリアー」は大した効果を持たないカードのはずだが、アレほどの衝撃を与えるとは。

なのはは「スピード・ウォリアー」の攻撃力に驚愕しながら、彼が空を駆けてきた後方へと視線を向ける。

するとそこには、黒い衣服とマントに身を包んだ少女が電柱の上に立っていた。

彼女の腕には黒いデュエルディスクが。そして右腕は怪我をしているのか。包帯が巻いてある。

「≪スピード・ウォリアー≫、もう一回攻撃。ソニック・エッジ」

『■■■■〜〜ッ！』

電柱の上に立つ少女はデュエルディスクを装着した腕で、巨大化した猫を指差した。

それと同時、彼女の指示を受けて「スピード・ウォリアー」が猫に向かって駈け出す。

再度「スピード・ウォリアー」は回し蹴りを食らわせるのだが、先ほどよりも威力が低い。

どうやら「スピード・ウォリアー」の効果が発動したようで、今は貧弱な攻撃しか通らない様だ。

「あ、アレは……？」

「アレは≪スピード・ウォリアー≫って言うモンスターカード！
実体化してるってことは……魔導師！？」

ユーノが攻撃を仕掛ける「スピード・ウォリアー」を見て疑問の声をあげる。
当然だ。何も知らない人が見たら、白い鎧を身に纏った人物だとしか思わないだろう。

なのははユーノにそのモンスターの名前を告げると、慌てて未だ攻撃を受けている猫の元まで駆け出す。
その際にしっかりとドローは欠かさない。そして手札のカードを確認すると、彼女はディスクにカードをセットした。

「≪魔導戦士・ブレイカー≫を召喚！
≪魔導戦士・ブレイカー≫で≪スピード・ウォリアー≫に攻撃！」

『ッ！』

なのはが手札から抜き取ったカードは、「魔導戦士・ブレイカー」のカードだった。
鬼柳の切り込み役が「インフェルニティ・デーモン」ならば、彼女の切り込み役は「魔導戦士・ブレイカー」である。

デュエルディスクと化したレイジングハートにより実体化した「魔導戦士・ブレイカー」は上空へ。

再度猫に攻撃を仕掛けようとしていた「スピード・ウォリアー」の前に割り込むと、その剣でモンスターを叩き斬った。

「！　デュエリスト……！
……≪ジャンク・シンクロン≫召喚。効果で≪スピード・ウォリアー≫を蘇生。そしてシンクロ……」

ジャンク・シンクロン
チューナー（効果モンスター）
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ１３００／ＤＥＦ５００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル２以下のモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

「集いし星が、新たな力を呼び起こす……光さす道となれ！
シンクロ召喚、≪ジャンク・ウォリアー≫！」

「！　≪ジャンク・ウォリアー≫！」

ジャンク・ウォリアー
シンクロ・効果モンスター
星５／闇属性／戦士族／ＡＴＫ２３００／ＤＥＦ１３００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
このカードの攻撃力は自分フィールド上に表側表示で存在する

レベル2以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする。

謎の少女の「スピード・ウォリアー」を倒したのも束の間。
少女は新たな攻撃の手段を用意していた。召喚したのは蒼い鎧を身に纏った戦士。

その戦士――「ジャンク・ウォリアー」は少女の意思のまま、「魔導戦士・ブレイカー」へと攻撃を仕掛ける。
右手に装着したナックルダスターの様な武器を「魔導戦士・ブレイカー」へと振り下ろす。そしてブレイカーは撃破された。

「あぁ！」

「同系のデュエリスト。ロストロギアの探索者か」

なのはの召喚した「魔導戦士・ブレイカー」が破壊され、巨大化した子猫が無防備になる。
その隙を見逃さず、「ジャンク・ウォリアー」は子猫への攻撃を続行。

脇腹に「ジャンク・ウォリアー」の攻撃を受け、子猫は苦しげに身を横たえさせた。
その様子になのはが悲痛な声を上げるが、それは突如接近してきた少女の声に遮られる。

「ッ！」

と、すぐ傍の木の上にやってきた少女の瞳を見たなのはは、大きく目を見開いた。
その少女の瞳は何処か幼い頃の自分に似ていたのだ。寂しげな、誰かの温もりに飢えている様な。
そして――何処か不満足そうなその瞳。

「間違いない、僕と同じ世界の住人。そしてこの子……ジュエルシードの正体を……？」

「バルディッシュと同型のデバイス……インテリジェンス・デバイスかな」

「バル……ディッシュ？」

「ロストロギア・ジュエルシード。申し訳ないけど、頂いていきます」

「っ！　……はい、そうですかって、渡せないよ！　アナタがデュエリストなら、デュエルで決めよう！」

どうやら少女は、ユーノと同じ世界の住人らしい。ユーノが驚いたように口を開いている。
しかしなのはの耳にユーノの言葉は届いていない。彼女の視線に映るのは木の上に立つ少女だけ。

そして少女はユーノをチラリと一瞥すると、自身の腕に装着されているデュエルディスクに目を向けた。
少女と同じように、なのはも自身のデュエルディスクに目を向ける。
このデュエルディスクはレイジングハートだ。

ならばあの少女が腕に着けているデュエルディスクの名前はバルディッシュと言うのだろうか。
と、なのはが内心でそう思考したのも束の間。彼女は手に持ったカードをこちらに突きつけて言い放つ。

あまりにもあまりな物言い。デュエリストの端くれであるなのはとしてはこの言葉は見逃せない。
デュエリストならば、デュエルで勝利して奪い取るのが常識だ。それがレアカードであれ、ジュエルシードであれ。

「ッ！？　……デュエルで勝てば、渡してくれる？」

「うん。それがデュエルのルールだから」

「……分かった」

後ろでユーノが何やら騒いでいる様だが、なのはとしてはそれは些細な事だ。
目の前の少女はなのはの言葉に驚いた様だったが、すぐに冷静さを取り戻して彼女に訊ねる。

なのははそれにコクリと頷く。敗者は勝者に従うのみ。そこに反論の余地はあり得ない。

少女はなのはの言葉に同意したのか。すぐ傍に滞空していた「ジャンク・ウォリアー」を一旦消す。

そしてなのはの目の前まで降り立つと、両者は先ほどの攻防に使用したカードをデッキホルダーに戻す。

すると自動でデッキが高速でシャッフルされた。なのはと謎の少女は互いに手札となる五枚のカードをドロー。

「「デュエル！」」

そして、月村家の中に発生した結界の中で、なのはと少女による負けられないデュエルが始まった。

第六話　「黒衣の少女」（後書き）

今回のお話で幾分フェイトの使うデッキがバレタかも。
まぁ、フェイトに合うデッキがこれでしたから特に違和感は無いです。

第七話　「星屑の龍」（前書き）

ようやくデュエルです。
サブタイで分かるかと思いますが、あの龍が登場。

第七話　「星屑の龍」

～海鳴市　月村家～

「それじゃわたしの先攻から、ドロー！
手札から≪魔導戦士ブレイカー≫を召喚！　カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「わたしのターン、ドロー」

始まったなのはと謎の少女とのデュエル。先攻を制したのはなのはだった。
彼女は先攻を取ると、まず真っ先に自身の切り込み役のモンスターを召喚する。

赤銅色の鎧に身を包み、剣と盾を装備した騎士。
実体化しているせいもあるだろうが、なんとも心強い背中だ。

「わたしは手札からモンスターをセット。
カードを二枚伏せて、ターンエンドだよ」

「わたしのターン、ドロー！」

謎の少女はモンスターをセットすると、伏せカードで自分の場を固める。

デュエルモンスターズでは定石の手。だが、この場においては有効な手であった。

なのははドローしたカードを手札に加えると、真剣な眼差しで伏せカードを見つめる。

果たしてあの伏せカードは攻撃反応型の罠カードなのか。それとも妨害系の罠カードなのか。

「……≪魔導戦士ブレイカー≫の効果発動！

このカードに乗っている魔力カウンターを一つ取り除くことで、相手の場の伏せカード一枚を破壊する！　マナ・ブレイク！」

「ッ！　……伏せカードは≪くず鉄のかかし≫。墓地に送るよ」

「バトル！　≪魔導戦士ブレイカー≫でセットモンスターに攻撃！」

「……セットモンスターは≪ボルト・ヘッジホッグ≫。破壊される」

くず鉄のかかし
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
発動後このカードは墓地に送らず、そのままセットする。

ボルト・ヘッジホッグ
星2／地属性／機械族／ＡＴＫ８００／ＤＥＦ８００
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、
このカードを墓地から特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したこのカードはフィールド上から離れた場合、

ゲームから除外される。

なのははひとまず、一枚でも相手の伏せカードを破壊しようと「ブレイカー」の効果を発動した。
「ブレイカー」はなのはの指示を受け、手に持っていた剣を掲げる。
瞬間、眩い光が周囲に放たれた。

放たれた光は謎の少女の場に浮かんでいた裏側のカード一枚を破壊する。
そのカードに描かれていたのは、くず鉄で作られたかかしの絵だった。

「……カードを一枚伏せて、ターンエンド」

なのはは破壊した伏せカードを確認すると、微かに眉を顰めた。
破壊したカードは相手の攻撃を無効にする防御カード。

もう一枚のカードが分からないので何とも言えないが、少なくともこれでダメージを与えられる。
だが、イヤな予感しかしないのはどうしてだろう。念のためにカードを一枚伏せて場を固めると、ターンを相手に渡す。

次のターンは黒い衣服に身を包んだ少女。彼女はドローしたカードを確認すると、フッと笑みを零す。
彼女は先ほどドローしたカードを手札に加えず、自身のデュエルディスクへとそのカードをセットした。

「わたしのターン、ドロー。≪ジャンク・シンクロン≫召喚。
≪ジャンク・シンクロン≫の効果で≪ボルト・ヘッジホッグ≫を蘇生。そしてシンクロ……」

「ッ！　≪ジャンク・ウォリアー≫！？」

「バトル。≪ジャンク・ウォリアー≫で≪魔導戦士ブレイカー≫を攻撃。スクラップ・フィスト！」

「り、リバースカード、オープン！　≪ディメンション・マジック≫！」

「！」

ディメンション・マジック
速攻魔法
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが
表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、
手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。
その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事ができる。

少女が新たに召喚したのは、先ほどの攻防に使用した蒼い鎧を身に纏った戦士。
その戦士は白いマフラーを靡かせながら、なのはの場に居る「ブレイカー」に殴りかかった。

このままでは不味いと判断したのか。なのはは伏せていた二枚のカードの内、一枚を発動する。
するとなのはの場に、人を模した棺桶の様なものが現れた。その中には「魔導戦士ブレイカー」が納められている。

「わたしは場の≪魔導戦士ブレイカー≫をリリース！
そして手札から≪サイレント・マジシャンＬｖ４≫を特殊召喚！」

「……≪魔導戦士ブレイカー≫よりも、攻撃力が低い？」

「更に≪ディメンション・マジック≫の効果！
場の相手モンスター一体を破壊する！」

「ッ！　≪ジャンク・ウォリアー≫！」

サイレント・マジシャンＬｖ４
星４／光属性／魔法使い族／攻１０００／守１０００
相手がカードをドローする度に、
このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大５つまで）。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。
このカードに乗っている魔力カウンターが５つになった
次の自分のターンのスタンバイフェイズ時、
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを墓地へ送る事で、
自分の手札またはデッキから
「サイレント・マジシャン　ＬＶ８」１体を特殊召喚する。

なのはの場に現れた人型の棺は、ゆっくりとその中身を開いていく。

その棺桶の中に納められていたのは、まだ年端もいかない様な幼い少女。

しかし、その少女の身体を包んでいるのは魔法使いが使用する白いローブの様なもの。

彼女はキッと鋭い視線を「ジャンク・ウォリアー」に向けると、手に持った小さな杖を振るう。

すると、何処からともなく幾つもの鎖が伸びて「ジャンク・ウォリアー」を拘束。

「ジャンク・ウォリアー」は苦悶の声をあげながら、爆散。謎の少女の場から消滅した。

「くっ！　カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドロー！
手札から≪レベルアップ！≫発動！」

レベルアップ！
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する「ＬＶ」を持つモンスター1体を墓地へ送り発動する。
そのカードに記されているモンスターを、召喚条件を無視して手札またはデッキから特殊召喚する。

「効果でデッキから≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫を特殊召喚！」

「ッ！　攻撃力……３５００！？」

サイレント・マジシャンＬｖ８
星８／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ３５００／ＤＥＦ１０００
このカードは通常召喚できない。
「サイレント・マジシャン　Ｌｖ４」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードは相手の魔法カードの効果を受けない。

なのはが手札から一枚の魔法カードを発動すると、場の「サイレント・マジシャンＬｖ４」に変化が訪れた。
「サイレント・マジシャンＬｖ４」の身体を眩いばかりの光が包み込み、次の瞬間には彼女の姿が変わっていたのだ。

先ほどまでは年端もいかない様な少女の姿だったのに、今では大人の女性の様な体躯をしている。
しかし着けているローブや杖は少女のものと同じデザインで、少女がそのまま大きくなった印象を抱かせる。

「バトル！　≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫でダイレクトアタック！
　さらにリバースカードオープン！　≪マジシャンズ・サークル≫！」

マジシャンズ・サークル
通常罠
魔法使い族モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
お互いのプレイヤーは、それぞれ自分のデッキから
攻撃力２０００以下の魔法使い族モンスター１体を表側攻撃表示で

特殊召喚する。

「効果でお互いのプレイヤーはデッキから攻撃力２０００以下のモンスターを特殊召喚するよ！」

「くっ！　デッキから≪エキセントリック・ボーイ≫を特殊召喚！」

「わたしは≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を特殊召喚！
そしてバトル続行！　≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫で≪エキセントリック・ボーイ≫に攻撃！
さらに≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫でダイレクトアタック！」

「リバース発動！　≪ガード・ブロック！≫
効果で≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫のダメージを無効！
更に１枚ドロー」

ガード・ブロック
通常罠
相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。
その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になり、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。

エキセントリック・ボーイ
チューナー（効果モンスター）
星３／風属性／魔法使い族／ＡＴＫ８００／ＤＥＦ２００
このカードをシンクロ素材とする場合、
他のシンクロ素材モンスターは手札のモンスター１体でなければな

らない。
このカードをシンクロ素材としたシンクロモンスターは
効果を発動する事ができず無効化され、
フィールド上から離れた時ゲームから除外される。

クルセイダー・オブ・エンディミオン
デュアルモンスター
星４／光属性／魔法使い族／ＡＴＫ１９００／ＤＥＦ１２００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、
通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして
て再度召喚する事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る
●１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在する
魔力カウンターを置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１
つ置く事ができる。
この効果で魔力カウンターを置いたターンのエンドフェイズ時まで、
このカードの攻撃力は６００ポイントアップする。

謎の少女がデッキから特殊召喚した少年の様なモンスターを、なの
はが特殊召喚したモンスターが破壊する。
一見するとなのはが優勢だが、相手の少女も負けてはいなかった。
罠カードを巧みに使い、自身へのダメージを抑えている。

なかなか相手の少女にダメージを与える事が出来ずになのはは焦る
が、すぐに落ち着いて深呼吸をした。
落ち着きを失っては、相手の思うつぼだ。プレイングミスで勝ちを
逃がすことは是非とも避けたい事態である。

「くぅううッ！！」

謎の少女ＬＰ４０００→２１００

「ターンエンド！」

「わたしのターン、ドロー。……手札から≪ワン・フォー・ワン≫を発動。
　効果で手札から≪スピード・ウォリアー≫を墓地に送って、デッキから≪チューニング・サポーター≫を特殊召喚」

ワン・フォー・ワン
通常魔法
手札からモンスター１体を墓地へ送って発動する。
手札またはデッキからレベル１モンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚する。

チューニング・サポーター
星１／光属性／機械族／ＡＴＫ１００／ＤＥＦ３００
このカードをシンクロ召喚に使用する場合、
このカードはレベル２モンスターとして扱う事ができる。
このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され
墓地へ送られた場合、自分はデッキからカードを１枚ドローする。

「さらに手札から≪戦士の生還≫を発動。墓地の≪ジャンク・シンクロン≫を回収。
　そして≪ジャンク・シンクロン≫を召喚。≪ジャンク・シンクロン≫の効果で≪ボルト・ヘッジホッグ≫を蘇生。
　更に≪ブースト・ウォリアー≫を特殊召喚」

「なんて展開力……。まるで鬼柳さんみたい……」

戦士の生還
通常魔法
自分の墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択して手札に加える。

ブースト・ウォリアー
星1／炎属性／戦士族／ＡＴＫ３００／ＤＥＦ２００
自分フィールド上にチューナーが表側表示で存在する場合、このカードは手札から表側守備表示で特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する戦士族モンスターの攻撃力は３００ポイントアップする。

そしてなのはが少女にターンを渡すと、目前の少女は鬼柳の様な怒涛の展開力を見せてきた。
手札を全て使い切り、少女の場には4体ものモンスターが並んでいる。その様はまさに鬼柳そのもの。

自身の場には伏せカードが無いことに不安を感じながら、なのはは少女のデュエルを見守る。
少女はまるで、お呪いの様に何事か呟いた。そしてキッと視線をなのはへと向けると、シンクロ召喚を宣言する。

「レベル2≪ボルト・ヘッジホッグ≫とレベル2になった≪チューニング・サポーター≫！

さらにレベル1の≪ブースト・ウォリアー≫にレベル3≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！」

「レベルの合計は――8！？」

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！
シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「――ッ！？　なに、このドラゴン……」

「綺麗だ……」

スターダスト・ドラゴン
シンクロ・効果モンスター
星8／風属性／ドラゴン族／攻2500／守2000
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、
このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、
この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

場に現れた3体のモンスターを、緑色のリングが通過。モンスターたちを星へと変える。
そして少女の口上と共に場に現れたのは、周囲に星屑を撒き散らしながらなのはを見据える一体のドラゴン。

その姿はなのはの「レッド・デーモンズ・ドラゴン」とはまるで違う。儚さの中に、確かな力強さを感じさせる。
なのはは召喚された「スターダスト・ドラゴン」に思わず見惚れてしまう。デュエル中だと言うのに、見るのを止められない。

「ッ！　アレって……！」

「光ってる！？」

と、なのはが「スターダスト・ドラゴン」に見惚れてしまっていると、不意に少女の姿が視界に入った。
だが、どうにも様子がおかしい。少女の包帯を巻いている方の腕が、確かに赤く光っているのだ。

その模様はまるで、おとぎ話に出てくる様な天使の羽。
無感情な表情を浮かべる少女とのその模様はあまりにも不釣り合いで、なのはは茫然と見つめる。

「≪チューニング・サポーター≫の効果で1枚ドロー。
そしてリバースカード、オープン。≪シンクロ・ストライク≫」

シンクロ・ストライク
通常罠
シンクロ召喚したモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたモンスターの数×５００ポイントアップする。

「このカードの効果で、スターダストの攻撃力は２０００ポイントアップする」

「攻撃力……４５００ッ！？」

「バトル。スターダスト、≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫に攻撃！

シューティング・ソニック！」

「ッ！　サイレント・マジシャン！」

なのはが茫然としていようが、目前でデュエルをしている少女には関係なかった。

彼女はあらかじめ伏せていたカードを展開。「スターダスト・ドラゴン」の攻撃力を上昇させる。

その攻撃値は、なのはの「サイレント・マジシャンＬｖ８」をも上回る４５００。

思わぬ攻撃力の上昇値に、なのはは驚愕に目を見開いた。

慌てて手札と伏せカードを確認するのだが、「オネスト」や破壊系の伏せカードは無い。

悲痛な表情でなのはがサイレント・マジシャンに視線を向ければ、彼女はニコリとほほ笑んだ。

次いで、「スターダスト・ドラゴン」の攻撃がサイレント。マジシャンに命中する。

彼女は苦悶の声を上げながらも、主に対する恨みを持つことなく、墓地へと送られた。

なのはＬＰ４０００→３０００

「ターンエンド」

「わたしのターン、ドロー！　わたしは手札から≪地砕き≫を発動！
≪スターダスト・ドラゴン≫を破壊するよ！」

なのはは自身へと与えられたダメージに苦悶の表情を浮かべる。
こうやって相手にダメージを与えられたのは、今回が初めての出来事だ。

やはりと言うべきか。身体に与えられるダメージは痛い。思わず目じりに涙が溜まる。
だが、このまま泣き出しても満足できないのは目に見えている。ならば、デュエルを続けよう。

そしてなのはがドローしたカードは、以前のデュエルでも使用した除去カードである「地砕き」。
このカードを使えば、上級モンスターである「スターダスト・ドラゴン」も破壊できるだろう。

「≪スターダスト・ドラゴン≫の効果発動。
自身をリリースすることで、破壊効果を無効にし、破壊する。ヴィクテム・サンクチュアリ」

「？　自ら破壊された……？　でも、チャンス！

≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫でダイレクトアタック！」

「くぅっ！」

謎の少女ＬＰ２１００→２００

なのはが先ほど引いた「地砕き」のカードを発動すると、少女は予想外の行動に出た。

彼女はあろうことか、自らスターダストをリリースすることで破壊効果を無効にしたのだ。

なんとも強力な効果だ。場にミラーフォースや「激流葬」を伏せていたら無効にされていただろう。

だが、肝心の少女を護るドラゴンは居なくなった。これでようやく少女にダメージを与えられる。

なのはが自らのモンスターに指示を出し、エンディミオンが謎の少女へと攻撃を仕掛ける。

彼女は苦悶の声をあげてエンディミオンを見つめるが、依然として不満足そうな瞳をしていた。

「ターンエンドだよ」

「……アナタのエンドフェイズ、効果を発動した≪スターダスト・ドラゴン≫の効果発動。

この効果でリリースされた≪スターダスト・ドラゴン≫を場に特殊召喚する」

「ッ！　そ、そんなッ！」

「わたしのターン、ドロー。……手札から≪スピード・ウォリアー≫を召喚。
　手札から≪進化する人類≫を≪スピード・ウォリアー≫に装備。攻撃力が２４００になる。
　バトル。≪スターダスト・ドラゴン≫でエンディミオンに。≪スピード・ウォリアー≫でダイレクトアタック」

「これじゃ……攻撃力、４８００！？」

進化する人類
装備魔法
自分のライフポイントが相手より下の場合、
装備モンスターの元々の攻撃力は２４００になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、
装備モンスターの元々の攻撃力は１０００になる。

なのはがエンド宣言を行い、次のターンからそう攻めるか戦略を立て始める。
だが、なのはの立て始めた戦略は、あっという間に崩れ去ってしまった。

それは少女の場に特殊召喚されたドラゴンの存在によって。
自らを自己再生出来る効果を持った「スターダスト・ドラゴン」。

己の場が整っていない今、「スターダスト・ドラゴン」が特殊召喚

されるのは不味い。
だが、なのはの想像を上回る不幸が彼女に襲いかかる。召喚されたのは「スピード・ウォリアー」。

一見、「クルセイダー・オブ・エンディミオン」すら破壊出来ない攻撃力を持ったモンスターが。
一枚の装備カードを使うことによって、「クルセイダー・オブ・エンディミオン」よりも高い攻撃力をはじき出した。

「スターダストでエンディミオンに。
≪スピード・ウォリアー≫でプレイヤーにダイレクト……」

「……な、なのは？」

もはや伏せカードすらない状況で、手札には「オネスト」すらない。
完全に詰んでしまった。思いもよらない敗北に、なのはは自身の唇を噛み締める。

そして少女が攻撃宣言をするよりも先に、なのはは自身のデッキの上に手を置いた。
デッキの上に手を乗せる。それはサレンダーと呼ばれており、自ら負けを認める行為であった。

「サレンダー、するよ。
……あっはは。これじゃ、満足できないね……」

「……ごめんね」

「……ねぇ、名前を教えて？　わたしはなのは。高町　なのはだよ」

「……フェイト。フェイト・テスタロッサ」

「ん。フェイトちゃん、か」

謎の少女――フェイトもなのはのサレンダーを認めたのだろう。
すぐ傍で唸り声をあげていた「スターダスト・ドラゴン」や「スピード・ウォリアー」を消滅させる。

その様子になのははホッと安堵の息を漏らすと、悔しげな表情でフェイトを見た。
自分に油断があったとはいえ、同年代の少女に負けると言うのは悔しい。

しかも相手は不満足状態で自分に勝利したのである。とてもではないが、なのはは満足できない。
そして少女がジュエルシードを封印する様子を脇で見ながら、なのははフェイトに彼女の名前を訊ねた。

一度デュエルをして、自分を負かした相手だ。名前くらいは聞いておきたい。
するとなのはの願いが通じたのか。少女は自らの名前を告げ、封印したジュエルシードをデバイスに納める。

そしてもう話す事はないと言わんばかりの様子で、フェイトは空へと飛び立っていった。

※

「……そうか。もう一人のデュエリスト、か……」

「うん。それに≪スターダスト・ドラゴン≫って言うモンスター。とっても強かったよ」

フェイトとのデュエルを終えたなのはは、バスの中で鬼柳にこれまでの経緯を話していた。
ちなみに恭也はこの場に居ない。今日一日だけ、月村家に宿泊する予定だそうだ。

鬼柳はなのはの言葉を真剣に聞きながら、内心でガックリと項垂れていた。
「レッド・デーモンズ・ドラゴン」の次は「スターダスト・ドラゴン」とは。

まるでダークシグナー時代の自身の罪を見せつけられている様で、鬼柳は気が滅入ってしまいそうだ。
だが、こんなところで気を滅入らせている暇は無い。鬼柳はなのはの話を聞いて、フェイトに興味を抱いたのだから。

「それにしても……不満足そうな瞳か。……どうする？　なのは」

「決まってるよ！　私や鬼柳さんとお友達になって……一緒に満足するの！」

「そいつは良い考えだな。実は俺もフェイトってヤツが気になってたところだ」

「じゃあ鬼柳さん！」

「あぁ。まずはフェイトと友達になって、満足しようぜ」

「うん！」

腕を組みながら、鬼柳はなのはに視線を向ける。
するとなのははムンッと気合を入れながら、フェイトと友達になると鬼柳に告げた。

彼女と友達になれば、フェイトがどうして不満足そうな瞳をしているのか分かるかもしれない。
鬼柳もそう思ったのか。ニヤリと口元に笑みを作ると、なのはと拳と拳をぶつけ合った。

そしてバスは走る。鬼柳となのはを乗せて、夕暮れに染まりつつある海鳴市の住宅街へと。

※

夜も深まったとあるマンション。海鳴市から少し離れた遠見市に、その少女は居た。
高層マンションの一室を借りきり、広い室内には少女のほかに一匹の大型犬が存在している。

否、それは犬なのだろうか。犬に似つかわしくないほどの巨大な牙が口元から覗いている。
しかし、少女はその犬の様な生物に微塵の恐怖も抱いていない様だった。優しい手つきで犬を撫でる。

「少し、邪魔が入ったけど……大丈夫だったよ」

「■■■■〜〜」

「でも、もうちょっとだけ、デュエルを続けたかったかな？」

少女――フェイトはクスリと口元に笑みを浮かべると、今日起こった出来事を話し始めた。
ようやく見つけた最初のジュエルシード。難なく捕獲出来ると思っ

たら、現地の魔導師だろうか。邪魔された。

そしてなし崩し的にデュエルに突入。事前に母親からデッキを受け取っており、デュエルが出来ないと言う事態は避けられた。

それにしても――と、フェイトは自身の腕に視線を向ける。そこには依然として、赤い羽根の様な痣が刻まれていた。

「ジュエルシード。……いくつかは、あの子が持ってるのかな」

フェイトはしばし腕の痣に見入っていたが、フッと視線を外した。

思い出すのは今日の相手。

少女――なのははジュエルシードのことを知っている様子だった。

ならば、彼女が集めている可能性が高い。

また、闘うことになるのだろうか。否、闘うことになっても構わない。

また、母から貰ったデッキと「スターダスト・ドラゴン」で相手を倒せばいいのだから。

「また、わたしに力を貸してね。≪スターダスト・ドラゴン≫」

第七話　「星屑の龍」（後書き）

初戦はなのはの敗北で始まりました。
ですが、次回の戦闘はどうなることやら。

……そしてフェイトが不満足病に感染していたり

１月１９日　修正

第八話　「海鳴温泉」（前書き）

今回はようやく温泉です。
ちなみにこの作品ではユーノは淫獣ではないです。

第八話　「海鳴温泉」

～海鳴市　某所～

「うにゃ～……」

「なのは……。アンタ、車の中でまでデッキ組むの止めなさいよ」

「えぇ～!?　わたし、負けっぱなしは性に合わないんだよぅ！」

「あぁ～、はいはい」

なのはが黒衣の少女――フェイトとのデュエルに敗北してから数日後。

彼女たちは喫茶翠屋の従業員やアリサ、すずかを連連れて海鳴温泉を目指していた。

喫茶翠屋では毎年この連休を利用し、海鳴温泉へと家族旅行へと出かけているのである。

もちろん車内には鬼柳も居り、彼もなのはと同様にデッキを弄りながら旅を満喫している様であった。

「あぅ～……。お金が足りないよぉ」

「そりゃ、そんだけ買ったらね……」

なのははは暫し自分のデッキをゴソゴソと弄っていたのだが、不意にへニャッと崩れ落ちた。
そんな彼女の視界に映るのは、開けたばかりの新品のパックの山。
その隣には山の様な数のカード。

今朝海鳴温泉に向かう途中、カードショップに寄ったなのはが有り金を叩いて買って来たものだ。
よほどフェイトに負けたのが悔しいのか。負けてからほぼ毎日、なのはは自身のデッキの調整をしている。

だが、しっくりと来る様な調整が出来ていないのか。なのははため息を吐きながらデッキを見つめた。
自分の理想とするデッキを作るには、まだまだお金が足りない。と言うよりも、お金よりも運の方が大きいかもしれないが。

「お年玉もへそくりも使っちゃったし……。
デュエルモンスターズ、なんて恐ろしいの！」

「だが、無くなったらまた稼げば良いじゃねぇか」

「鬼柳！」

なのははスカートのポケットから、すっからかんになった財布を取り出した。
彼女の顔をデフォルメした様な可愛らしい財布は、今はすっかり薄くなってしまっている。

出かける前まではお札でふっくらしていたのに。相変わらず、デュエルモンスターズは恐ろしい。
と、なのはがデュエルモンスターズの魅力に思わず恐怖していると、助手席から鬼柳が顔を覗かせた。

彼は愛用のインフェルニティのデッキを組み終えたのか。手元にはカードの束が無い。
鬼柳が顔を覗かせたのにアリサが反応し、なのはは鬼柳の言葉に「ふむ」と得心の言った様な表情を浮かべる。

なのはのお小遣いやカード代は、基本的になのはが稼いだお金で賄われている。
そのお金を生み出しているのは時折カードショップで開催されているデュエルモンスターズの大会。

その大会で優勝すれば少なくない金額の賞金を受け取ることが出来る。
なのはは保護者に鬼柳を立て、適度に手加減しながら優勝を独り占めしていたのだ。

その結果、なのはの懐には意外とお金があった。だが、今は無一文である。
ならばどうすれば良いか。簡単だ。大会に出て優勝すれば良い。何のことは無かった。

「そうだね、鬼柳さん。わたし、もっと大会に出て強くなるよ！
そして優勝して、ついでに賞金もゲットなの！」

「止めてなのは！

これ以上強くなったらわたしが泣くわ！」

「アリサちゃん……。頑張って、追いついてね」

「この、裏切り者ォオオオオッ！」

なのはは鬼柳の言葉に力強く頷くと、今よりももっと実力を付けることを決める。

様々な大会に出て実力を付ければ、いつか鬼柳を倒せるかもしれない。それはなのはの悲願である。

鬼柳を倒す事が出来るまで、自分は努力を怠るわけにはいかない。優勝を掻っ攫われる大会関係者には申し訳ないが、出来る限り強い相手を集めて欲しい。

『なのは。この旅行中くらい、ゆっくりしなよ?』

『分かってるよ。大丈夫』

と、なのはがこれから参加するであろう大会に思いを馳せていると。なのはの脳裏に鬼柳の頭に乗ってカードを見ているユーノから念話が届いた。

ユーノは鬼柳の使わないカードを真剣な様子で見つめつつ、器用になのはに念話を送っている。

なんだか微笑ましいその光景。なのはは思わず苦笑しながら、先日のフェイトとのデュエルの様子を思い出していた。

「ガード・ブロック」などの失ったアドバンテージをすぐさま取り返す罠カード。
そして様々な罠カードを駆使してダメージを抑え、ジワジワとライフを奪いに来る戦略。

その戦術はまるで大人のデュエリストを相手にしている様な錯覚をなのはに受けさせた。
そして何よりもなのはの印象に残っているのは、デュエルの終盤で召喚された「スターダスト・ドラゴン」。

まるで星屑が宙を舞っている様な幻想的な光景は、デュエル中だと言うのに思わず見惚れてしまう。
なにも印象に残っているのは外見だけではない。そのモンスター効果も、なのはの脳裏にこびりついていた。

破壊する効果を無効にし、逆にそのカードを破壊する効果。それも、自己再生のオマケ付き。
つまり「スターダスト・ドラゴン」が場にいるとき、除去カードはほぼ意味を成さないことになる。

「（≪スターダスト・ドラゴン≫……。なんて厄介なカードなの）」

単体除去や全体除去を多く搭載しているなのはからすれば、「スターダスト・ドラゴン」は天敵に近かった。
だが、なにも除去カードに頼らなくてもこちらには高攻撃力の「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が居る。

他にも「サイレント・マジシャンＬｖ８」など、「スターダスト・ドラゴン」の攻撃力を超えるモンスターは多い。
ならばフェイトのデッキの攻略プランは決まった。高攻撃力のモンスターで「スターダスト・ドラゴン」を戦闘破壊する。

相手も何かしらの妨害カードを伏せているだろうが、こちらがそのカードを破壊すれば良いだけの話だ。
なのははコクリと頷くと、再度調整したばかりのデッキに目を落とす。その様子に、ユーノがガクリと項垂れていた。

※

「キュ、キュー！」

「うわっ！　ちょっと、ユーノ！」

海鳴温泉へと到着した翠屋一行。そのうちのお子様メンバーは、まず温泉に入ろうとした。
どうやら旅の疲れをまず温泉で流そうと言うことになったらしい。

しかし温泉への入り口である婦人の湯前で、ユーノが突如として喚

きだしたのだ。
その様子はまるで婦人の湯に入りたくない様で。その様子に鬼柳となのはは首を傾げる。

「キュキュキュー！」

「あぁ～……。アリサ。コイツは俺が男湯に連れていく。だからお前たちは先に入れ」

「えぇ～！？　でもぉ～！」

「まぁまぁ、アリサちゃん。ユーノ君も嫌がってるみたいだし」

「うぅ。分かったわよ」

しばし事態を静観していた鬼柳となのはだったが、さすがに居た堪れなくなったのか。
鬼柳がユーノを掴んでいたアリサの手を離し、彼が男湯へと連れて行くためにユーノを拾い上げる。

するとユーノは、傍で見ていて明らかに安堵していた。どうやら女湯は彼にとって鬼門らしい。
ぶつぶつと不満を漏らしているアリサをしり目に、鬼柳はユーノを連れて男湯へと入る。

丁度この時間帯は一般客が入っていない様で、鬼柳としてはマーカーが目立たずに済んでホッとしている。
以前までは危ない仕事をしている人の関係者と間違われ、散々な目

に遭っていたのだ。当時を思い出しながら服を脱ぐ。

「はぁ……。助かりました、鬼柳さん」

「いや、気にする事は無いが……。
それよりもお前、温泉は大丈夫なのか？」

「え？　あ、はい。一応、僕は男ですから」

「なるほど。だからあんだけ暴れて抵抗してたのか」

士郎に以前教わった通りの手順で身体を洗い、鬼柳は少し熱い湯船に浸かった。
そしていつの間にか頭の上に避難していたユーノをポチャンと湯船に浸からせる。

するとユーノは器用にパチャパチャと泳ぎながら、鬼柳に先ほどの出来ごとに対して礼を言った。
それに鬼柳は気にするなと告げ、何故ユーノがなのはたちから逃げ回っていたのかを訊ねた。すると予想外の返答が返ってくる。

どうもユーノは男性（雄なのかは不明）で、女性用の浴槽に入るのを躊躇っていたらしい。
なるほど。男性が女性の風呂に入ることはある意味、死を意味しているのだから当然だろう。

「そう言えばユーノ。お前は幾つくらいなんだ？」

「え？　僕ですか？　僕はなのはたちと同じくらいですね」

「同じってことは……十歳くらいか。
その年からその反応ってことは、なかなか早熟なんだな」

「あはは。そうみたいですね」

ユーノはパチャパチャと湯船の岸まで泳ぎ終えると、ユーノはふぅと安堵したように息を吐いた。
鬼柳はそんなユーノを視界に納めながら、以前から疑問に思っていた事柄を訊ねる。

以前から子供らしい声だと思っていたが、ユーノの年齢は幾つくらいなのだろうか。
先ほどのユーノの証言で、彼が男性だと言うことは分かっている。
そしてユーノの声はまだ高い。

通常、男性は声変わりの時期を終えると、声が自然と低くなる。
ユーノの声はまだ高いので、声変わりを終えていない子供だと推理したのだ。

そして案の定、鬼柳の推測は当たっていた。ユーノはどうやらなのはと同じ年らしい。
このくらいの年齢の子供に比べ、ユーノは随分と早熟な様だ。苦笑しながら鬼柳は視線を空へと向ける。

※

「相変わらず、この浴衣ってのは慣れねーぜ」

しっかりと温泉を楽しんだ鬼柳となのはたちは、旅館の中をうろついていた。
どうもアリサが旅館の中を探検しようと言い出し、なのはたちはそれを了承する。

鬼柳はなのはたちが危ないことに巻き込まれないか監視する監督役で一緒に居るのだ。
鬼柳は前を歩くなのはたちに視線を向けると、自分が着ている浴衣へと視線を落とした。

生まれてからサテライトを出たことのない鬼柳にとって、この浴衣と言う着物は未知の物だった。
初めて着けたときは着方が分からず、士郎や恭也に手伝って貰ったと言う苦い記憶がある。

しかし今では慣れたもので、独りで浴衣を着る事も出来る。
慣れればこの浴衣と言うのも悪くは無かった。

「それにしても、鬼柳に浴衣って結構似合うわね」

「アリサ、どうしたんだ？」

「別に？　アンタが暇なんじゃないかって思っただけよ」

「そうか。……俺は特にそんな風には感じてないな」

と、鬼柳が自分の着ている浴衣に視線を落としていると、不意に声がかかった。

視線をそちらへと向けてみれば、そこには同じように浴衣に袖を通したアリサの姿。

どうやら彼女は鬼柳が自分たちのお守で暇なのではないかと声をかけたらしい。

しかしそれを素直に表に出さないのはアリサと言うところか。鬼柳はフッと笑みを浮かべる。

「それよりも、俺はお前の方が心配だ」

「？　わたし？」

「あぁ。なのはや俺に負け続けて、デュエルが嫌いになるんじゃないか、ってな」

鬼柳はキュッと腰の帯を締めると、少し前を歩くアリサに声をかけた。

なのははすずかとのお喋りに夢中の様で、鬼柳とアリサの様子に気が付いていない。

リラックスした様子のなのはに安堵の笑みを零すと、鬼柳は懸念していた事柄をアリサに訊ねた。

鬼柳が懸念しているのは、アリサがデュエルを嫌いになるのではないかと言う不安だった。

現在アリサはなのはや鬼柳に負け続けで、少なからずストレスを溜めているだろう。

そのうち、デュエルしてもどうせ負ける、などのネガティブな思考に取りつかれないか。鬼柳はそれが心配だった。

「甘く見るんじゃないわよ。アンタらに負けっぱなしは性に合わないの。

何時かアッと言わせてやるわ」

「……そうだな。アリサならそう言うな」

「当然よ！

アタシのデーモンで、アンタらをコテンパンにしてやるわ！」

しかし、どうやら鬼柳の心配は杞憂だったようだ。

アリサはニカッと気持ちの良い笑みを浮かべるとキッパリと言い放つ。

アリサとてデュエリストの端くれ。負けっぱなしは性に合わないのだろう。

鬼柳はそんなアリサの様子に驚いたようだが、すぐにフッと笑みを浮かべる。

こうなったらアリサは強い。きっと何時の日か、自分やなのはを倒す事だろう。

それが何時になるのか分からないが、とても楽しみだと鬼柳は今から胸を躍らせる。

「はぁ～い、おチビちゃんたち♪」

と、鬼柳がアリサの言葉に胸を躍らせていると、聞き慣れぬ声が耳に入った。

声が聞こえた方へと視線を向ければ、前を歩くなのはとすずかの前に立ち塞がる一人の女性。

見た目は鬼柳と同じくらいで、勝気そうな瞳がギラギラとなのはとすずか――とりわけなのはを見つめている。

なのはかすずかの知り合いだろうか。チラリと視線を二人に向けてみるが、二人とも戸惑った様な表情を浮かべていた。

「ふんふん。君かね？　ウチの子をアレしちゃってくれてるのは」

「え？　え？」

「あんま賢そうでも強そうでもなし……。

ただのガキンチョに見えるんだけどねぇ」

「ただのガキンチョって……。
わたしはこれでもデュエルモンスターズの大会で何度も優勝してますよ？」

「そりゃ本当なのかい？」

唐突にその場に現れた女性はジロジロと値踏みするような視線をなのはへと向ける。
どうやら彼女が用があるのはなのはの様だ。なのははオロオロと現れた女性に視線を向ける。

しかし、女性の告げた一言になのはが言葉を返した。なのははキョトンとした視線を女性に向ける。
実際、なのはは何度もデュエルモンスターズの大会で優勝経験がある。自宅にもトロフィーがあるくらいだ。

これでも一応、近所には名が知れている。それなのに自分を子供扱いするとは。
チラ、と女性に視線を向けてみれば、彼女は驚いたように目を見開いていた。

だが、依然として胡散臭そうになのはを見ている。
どうやら本当なのか嘘なのか判断しているところらしい。

「悪いな。……なのは、コイツはお前の知り合いなのか？」

「うぅ～ん……。多分、知らない人」

「だ、そうだが？　お前は誰だ？」

放っておいたら延々と続きそうなこの問答。制したのは鬼柳であった。

彼は女性となのはの前に身体を滑り込ませると、女性に視線を向けながらなのはに訊ねる。

しかし返ってくるのは知らないと言う答え。鬼柳もこんな女性と知り合ったと聞いていない。

そして鬼柳やなのは。アリサたちが訝しげな視線を女性に向ければ、彼女はクスッと笑みを零した。

「あっはははは！　ごめんごめん、人違いだったかな！
知ってる子に良く似てたからさぁ」

「え、えぇっと……」

『今のところは、挨拶だけね』

「「――――ッ！」」

なのはの前に立ち塞がった女性は突如として大声で笑い転げる。

突然の女性の変貌に鬼柳とアリサは眉を顰め、なのはとすずかは戸惑った表情を浮かべる。

そして女性は一通り大笑いを浮かべると、なのはを自分が知る誰かと似ていると告げた。

正直とてつもなく胡散臭いが、嘘だと言えるほどの証拠を鬼柳達は持っていない。

女性はなのはの肩に乗っているユーノを見つけると、「撫でて良いかい？」と訊ね、ユーノを撫でた。
その直後、なのはとユーノの脳裏に聞き慣れぬ女性の念話が届いた。
思わず二人の目がハッと開かれる。

『忠告しとくよ。子供は良い子にして、お家で遊んでなさいな。
おイタが過ぎるとガブッと行くわよ？』

『……でも、わたしはそれじゃ満足できません』

『んん？』

『わたし、どうしてもやりたい事があるから、止めません』

女性はユーノを撫でながら、尚も念話を続けていた。チラリと視線をなのはに向ける。
その際の彼女の瞳は肉食獣のソレと同じで、なのはは何とも言えない恐怖をその瞳に覚えた。

だが、なのはとて言われ放題と言う訳ではない。なのははキッと鋭い視線を女性へと返す。
そう。このまま大人しく引き下がっては満足できない。自分はまだ、自分の目標を達していない。

ジュエルシードをすべて集めること。そして、先日であったフェイ

トと友達になる事。
そのどちら達成していないのに止めることなど、なのはには出来なかった。

もしもここで止めてしまえば、きっと後悔する。とても満足できたものではない。
なのはが真剣な眼差しでそう告げれば、女性は驚いた様に目を見開いていた。

「……さぁて。もう一っ風呂行ってこようっと」

しばし女性は驚いた様になのはを見ていたが、すぐ口元に余裕の笑みを浮かべる。
そして最後にユーノの頭を撫でると、彼女は手を振りながらなのはたちの横を通り過ぎる。

「なのは、どうした？」

「鬼柳さん。……あの人、魔導師かもしれない」

「！　……そうか」

なのはとユーノは徐々に遠ざかって行く女性の後ろ姿を静かに見送る。
と、そんなのはを疑問に思ったのか。鬼柳が彼女に声をかけた。

ちなみにアリサは先ほどの女性の態度に文句があるのか。色々と暴走している。
すずかはそんなアリサを止めるストッパーだ。頑張ってアリサの暴走を抑えている。

なのはは依然として暴走しているアリサに苦笑すると、先ほどの女性について鬼柳に告げた。
念話をしてきたと言うことは、彼女は魔導師なのかもしれない。しかも、こちらに敵意を持つ魔導師。

何故こちらに対して敵意を持つのか分からないが、向かってくるならデュエルで決着を着ける。
なのははそう決意すると、グッと両手で拳を握りしめた。

※

――ポチャン

他に浸かっている人物が誰も居ない浴槽で、先ほどの女性は優雅に温泉を楽しんでいた。
肩甲骨の辺りまで伸びた髪を頭の上部で纏め、身体にバスタオルを巻いてゆったりと寛いでいる。

『あ～、もしもしフェイト？　こちらアルフ』

『……むぅ』

『あ、あれ？　フェイト～？』

『！　ど、どうしたのアルフ』

そして女性――アルフはふんふんと鼻歌を歌いながら、少し離れた場所に居るフェイトに念話を送る。
アルフとフェイトは使い魔と主人の関係。今回アルフが少女――なのはの偵察にやってきていたのである。

先ほどの邂逅を済ませ、主人であるフェイトへアルフは念話で報告を送ろうとする。
だが、返ってきたのはフェイトの不満げな声。思わず心配になって、アルフは聞き返してしまう。

『どうしたのはこっちの台詞だよ。一体どうしたんだい？
怪しい男に追いかけられたのかい？』

『うぅん、そう言うんじゃなくて……。……雪だるまさん、出なかった』

『はぁ？　ゆ、雪だるま？』

『うん。カード名は≪スノーマン・イーター≫って言うらしいけど』

『あぁ……』

アルフがオロオロとフェイトの反応の悪さに不安を覚えていると、予想外の返答が返ってきた。

どうもフェイトは、アルフに内緒でデュエルモンスターズのパックを買っていたらしい。

しかもそのパックでお目当てのカードが出なかった。そのせいでフェイトの機嫌が悪かったらしい。

主人に嫌われなくてアルフはホッと安堵すると同時に、アルフはなんともモヤモヤした不快感の様なものを覚える。

基本的に、フェイト達魔導師は魔法を打ち合って戦闘を行うのが基本的なのだ。

だが、フェイトやフェイトの母親は魔法を打ち合わない。このデュエルモンスターズで決着を付ける。

結果として、フェイトは飛行魔法以外を使うことが出来ない。飛行魔法以外はへっぽこなのだ。

だが逆に、デュエルモンスターズでは大分腕を上げているらしい。

教育係の母親の使い魔を何度か打倒した。

この調子ならばミッドチルダや他の管理外世界でのデュエルモンスターズの大会で優勝できるだろうと言うのは使い魔の談。

果たしてフェイトをこのままデュエルキングにさせて良いものか。

アルフは意外と真剣に悩んでいた。

『雪だるまさん可愛いのに……。もう7パックだけ買ってくる』

『えぇ！？　お、お金は大丈夫なのかい！？』

『要らないカード売ってお金にしたから大丈夫。
ちなみに保護者のところにはアルフの名前を書いておいたから』

『なんて抜け目のない……』

『じゃあ買ってくるね。アルフも無駄遣いしちゃダメだよ』

『それをそっくりそのまま返したいよ……』

アルフが内心でフェイトの将来について真剣に悩んでいると、フェイトの拗ねた声が聞こえる。
どうやら自分の好みをアルフにバカにされたと勘違いしたのだろう。
ビリビリとパックを破る音が聞こえる。

そして一通りパックを破り終えると、フェイトは決意したのだろう。
新たにパックを買うことにしたようだ。
それにアルフは驚いてお金は大丈夫なのかとフェイトに訊ねる。たしかあまり余裕は無かったはず。

だが、意外にもフェイトからはちゃっかりとした答えが返ってきた。
要らないカードを売ってお金に変えるとは、なかなか抜け目が無い様だ。

ちなみに要らないカードと言うのは、フェイトの母親から貰ったカ

ードの束だろう。
フェイトのデッキはそのカードの束から使える物を抜きだして組んでいる。

フェイトとの念話が切れ、アルフはポチャンと湯船に腰を下ろした。
そして深々とため息を吐きながら、視線を空へと向ける。彼女の視界には青々とした青空が広がっていた。

『……魔法の打ち合いが恋しいねぇ』

アルフの悲哀の籠った呟きは、誰にも聞こえることなく空へと消えた。

第八話　「海鳴温泉」（後書き）

次回はなのはとフェイトのデュエル。
もしかしたら鬼柳さんもデュエルするかも？

第九話　「対決　光と闇」（前書き）

今回はアルフと鬼柳さんのデュエルです。
なのはとフェイトのデュエルは次回にお預け。

第九話　「対決　光と闇」

～海鳴市　海鳴温泉旅館内～

「ふぅ……」

「どう？　鬼柳さん」

「あぁ。ようやく寝てくれた。これで明日は大丈夫だろう」

「ふふ。ありがとう」

謎の女性との邂逅から数時間後の海鳴温泉旅館内。
その旅館の一室に、浴衣が姿の鬼柳と桃子の姿があった。

パタンと襖の戸を開けて鬼柳が部屋から出てくると、笑顔の桃子が出迎える。
先ほど鬼柳が出てきたのはなのはたちお子様メンバーが眠る和室。
鬼柳は眠りの番をしていた。

そしてつい先ほど、ようやく全員が寝静まったのを確認して鬼柳が部屋から出てきたのだ。
慣れないことをして凝っている肩をほぐしながら、鬼柳は笑みを浮かべる桃子に答えた。

「鬼柳さんも、一杯どうかしら？」

「……いや、止めておこう。士郎に泣かれそうだ」

「あらあら♪　うふふ」

鬼柳は桃子と二人、居間の和室へと足を運ぶと、敷いてある座布団に腰を下ろす。
床に直に座ると言うことをしない鬼柳にとって、座布団とはやはり違和感を覚えさせるものだ。

座り慣れない座布団に違和感を感じながら腰を下ろしていると、桃子がお酒の入った瓶を持ってくる。
そのお酒は対して高価でもないが、味は良いと評判の洋酒であった。
そのお酒を美しい女性と共に飲む。

男ならば是非ともご一緒したいシチュエーションだが、鬼柳は小さく息を吐きながら断った。
なにせ相手は人妻。しかもどちらも自分の命の恩人である。下手な事をして家庭不和を起こしたくない。

すると鬼柳の気遣いに気がついたのだろうか。桃子はクスッと笑みを浮かべると、今度は急須を取り出した。
お茶ならば良いだろうと言う判断だろうか。鬼柳はそれに首を傾げながらも、桃子からお茶の入ったお椀を受け取る。

「どう？　なのは、無理はしていないかしら」

「……無理、してるみたいだな。

この前のデュエルの試合の時が酷かった」

「あぁ、あの時……」

「最近はそうでもないみたいだ。
負けてリベンジしたいヤツが出来たらしい」

「あら。相手はデュエリスト？」

桃子に入れてもらったお茶を啜っていると、不安そうな眼差しで桃子が訊ねた。
やはり桃子とて子の親なのだろう。自分の子供が無理をしていないか心配している様だ。

鬼柳は桃子の言葉に一瞬思案げな表情を浮かべ、苦い表情で言葉を返す。
今はさほどではないが、少し前まではなのはは無理をしていた。先日の鬼柳がジュエルシードを拾った事件。

その時がなのはの疲労のピークの様で、今は少しばかりだが落ち着いている様に思える。
だが、今度は負けてリベンジしたい相手が現れた。なのはの心に安らぎの時は訪れる余裕はない様だ。

「あぁ。なのはと同年代の女の子で……フェイト、と言ったか」

「あら。鬼柳さんもその子に興味があるの？」

「？　どうして分かったんだ？」

「なんだか興味がありそうな目をしていましたから」

なのはがリベンジしたい相手とは以前なのはが敗北を味わったデュエリスト――フェイト。
なのははフェイトと再びデュエルして勝利し、フェイトと友達になることを新たな目的とした。

デュエリストならば負けっぱなしは性に合わない。それは鬼柳とて同じだ。
そしてなのはが感じ取ったフェイトからの不満足そうな気配。満足することを第一としている鬼柳にとって、見過ごせない存在だ。

一体何故、満足出来ないのか。出来る事ならばその不満足の原因を取り除いて満足させてやりたい。
未だ一度も見た事もない相手だと言うのに、鬼柳はフェイトへの興味を抑えられない。

「……なのはのこと、お願いしますね」

「任せろ。俺はなのはを見捨てたりしねぇ」

「ふふ。心強いですね」

桃子はフェイトへの興味を抑えられない鬼柳の様子に、クスッと笑

みを浮かべた。
そして鬼柳に再びなのはを頼むと告げると、ペコリと頭を下げる。
彼女のそんな真剣な様子に、鬼柳もまた真剣な表情で答えた。
そう。鬼柳は仲間と家族を見捨てたりしない。あんな悲しい事件は沢山だ。
それになのはや高町一家には今まで衣食住を世話してもらっていると言う恩もある。
その恩を少しでも返して、なのはや士郎たちを安心させてやりたい。
鬼柳は心の底からそう思う。
「（それにしても、この世界のガキどもはこんなに満足に飢えてるのか？
……もう一度作るか？　チームサティスファクションを……？）」
「鬼柳さん！」
そして鬼柳の思考は移り、今まで出会った少女たちの顔が思い浮かんだ。
なのはにはやて。二人とも、笑顔を浮かべているのだが瞳は不満足そのものだった。
今まで出会った子供たちの数が少ないので分からないが、何故この世界の子供たちはこうも不満足なのか。
なのはは家族が離れ離れになって独りぼっちで。はやてもはやてで事情があり、満足に飢えていた。

鬼柳が再びチームサティスファクションを結成しようか。そう頭の隅で考えたとき、不意に襖が勢い良く開く。
そこにはいつものオレンジ色のパーカーに身を包んだなのはの姿。
頭にはユーノがちょこんと乗っている。

「なのは、ジュエルシードか？」

「うん！　すぐ近くだよ」

「分かった！」

ただならぬ二人の様子に思いあたる節があり、鬼柳はそれをなのはたちに訊ねる。
するとなのはとユーノ。二人ともコクリと頷いた。どうやらジュエルシードが覚醒したらしい。

鬼柳はなのはの言葉にコクリと頷くと、ハンガーに掛かっていたいつものコートを羽織る。
そして和室の隅に置いてあったリュックサック――デュエルディスクの入った――を肩にかけた。

なのはとユーノが慌てて駆けて行くのを視界に納めながら、鬼柳はチラリと桃子に視線を向ける。
桃子は鬼柳の視線を受けて、コクリと頷いた。それに鬼柳もコクリと頷き返すと、先を行くなのはたちを追いかけた。

※

「うっはー。凄いね、こりゃ」

海鳴温泉旅館から少し離れた場所にある桟橋。そこにフェイトとアルフは居た。
アルフの服装は昼間の浴衣姿ではなく、動きやすそうなノースリーブのシャツに短パン。

彼女は桟橋に腰掛けながら、眼下で発動しているジュエルシードに視線を向ける。
見ているだけで感じられるほどの魔力。一体どうしたらアレだけの量を内包出来るのか。

「えへへ♪」

「って、フェイトー？　いつまでもニヤけてないで封印しようよ」

「！　う、うん。そうだね」

と、アルフが眼下で発動しているジュエルシードを見つめていると、ご機嫌そうなフェイトの姿が目に入る。
チラリと彼女に視線を向ければ、数枚のカードを見て頬をにやけさせているフェイト。

どうやら昼間買ったパックで、ようやくお目当てのカードが入手できたらしい。
昼間からフェイトはご機嫌な様子で、嬉しそうにしながらデッキを組み直していた様だ。

アルフはそんなフェイトに呆れながらも、気を引き締めようと注意する。
ここでヘマをして傷つくのはフェイトなのだ。大事な主を傷つけさせたくない。

「……随分不完全で、不安定な状況だけど」

「アンタのお母さんは、なんであんなものを欲しがるんだろうね……」

「さあ？　分からないけど、理由は関係ないよ。
……母さんが欲しがってる物なら、手に入れないと」

そしてようやく真剣な表情になったフェイトは、アルフと共にジュエルシードを見下ろす。
なんとも不安定な魔力なのだろうか。下手をすれば辺り一帯が無くなってしまう。

だが、そんなものは関係ない。自分は大好きな母親のためにジュエルシードを集めるのだ。
フェイトはアルフの言葉に答えると、待機状態だったバルディッシュをデュエルディスクモードへと移行させる。

すると彼女の左腕に装着される漆黒のデュエルディスク。
モーメント部に設置されたバルディッシュのコア部分がキラリと光る。

「≪スピード・ウォリアー≫を召喚！
アルフ、封印するよ。サポートして」

「へいへい！」

「お願い、≪スピード・ウォリアー≫！　ソニック・エッジ！」

※

「アレは……ッ！」

ジュエルシードの反応を求め、なのはたちがその場にやってきたときには全てが終わっていた。
彼女の視線の先に立つのは、封印されたジュエルシードを手に持った黒き衣に身を包んだ少女――フェイト。

そのすぐ足元には昼間出会った女性も居り、二人が関係者だと言うことがすぐに分かった。
なのはが立ち止まり、ここに来るまでに起動させておいたデュエルディスクを構える。

「子供は良い子でって、言わなかったっけか？」

「……わたしは子供ですけど、「良い子」じゃないです！」

「それを、ジュエルシードをどうする気なんだ！　それは、危険な物なんだ！」

「？　さぁね。答える理由が見当たらないよ。……それにさぁ、アタシ親切に言ったよね？
良い子でないと、ガブッって行くよって……」

なのはがデュエルディスクを構えると、桟橋に腰掛けていた女性がクスッと笑みを浮かべた。
そして彼女から放たれるのは昼間、なのはに告げられた言葉。暗にこの件から手を引けと言う忠告。

しかしなのははその忠告を無視する。自分はもう、皆が求める様な「良い子」の仮面を被らない。

自分はたしかに子供だ。だが、自分にだって満足する権利はある。
まだ満足していないのに、止められない。

昼間の女性はなのはの言葉に僅かに首を傾げるが、すぐに好戦的な表情を浮かべてなのはを見る。
その瞳はまさに獲物を前にした肉食獣そのもの。その視線に、僅かだがなのはの腰が引けた。

「おやぁ？　そっちのアンタはあの時の男だね。
アンタも魔導師なのかい？」

「俺は鬼柳　京介。……デュエリストだ」

「デュエリスト……」

と、昼間の女性が好戦的な視線をなのはへと向けていると、共に来ていた鬼柳に気付いたのだろう。
訝しげな視線を鬼柳へと向ける。それに鬼柳はコクリと頷き、背負っていたリュックからデュエルディスクを取り出した。

鬼柳がデュエルディスクを腕に装着し、デッキをセットすると昼間出会った女性がガクリと落ち込んでいる。
一体どうしたのだろう。思わぬ女性の反応に、鬼柳となのはは思わず面喰ってしまう。

「まぁ言いや。やることやって、とっとと消えなよ！」

『ッ！？』

しばし昼間の女性は橋の上で落ち込んでいた様だが、すぐに気を取り直した様だ。
グッと握り拳を作ると、彼女は自身のその姿を変貌させる。

肩甲骨の辺りまで伸びていた髪は身長以上に長くなり、腕はビキビキと姿を変える。
それは時間にしてほんの一瞬だっただろう。気がついたときには、そこに女性の姿はおらず。

代わりにその場には橙色の体毛を生やした一匹の狼が居た。
女性が変化した狼は「グルル」と唸り、鬼柳となのはをギロリと見つめる。

「あの子の使い魔だ！」

「使い魔だと！？」

「そうさ。アタシはこの子に作ってもらった魔導生命。
製作者の魔力で生きる代わり、命と力の全てをかけて護ってあげるんだ」

鬼柳となのはは、突如女性の姿が変化したことに驚きを隠せない。
ユーノは動揺している二人に説明を行い、狼へと変化した女性が補足する。

「先に帰ってて。すぐに追いつくから」

「うん。無茶しないでね」

狼は一通りの説明を終えると、チラリと背後に控えるフェイトに視線を向けた。

彼女のフェイトを見つめる視線には優しさが含まれており、ただの主従ではないと理解できる。

そしてフェイトが頷くと同時、狼へと変化した女性は空高く駆けあがった。

咄嗟になのはの肩に乗っていたユーノが飛び出し、防御魔法を展開しようとする。

ところが――――。

「……おい」

「……ねぇ」

「「え？」」

「デュエリストなら……デュエルしろよ」

「デュエリストなら……デュエルしようよ」

いざユーノへ飛びかかろうとしていた狼は、突如向けられた鋭い視線にギョッとする。
慌てて視線が飛んできた方向へと向ければ、そこには先ほどの自分に勝るとも劣らない視線の二人。

その二人とは紛れもない鬼柳となのはで、二人ともデュエルディスクを構えて準備は万端に整っている。
さぁ、今からドンパチと魔法戦を繰り広げようとしていたアルフやユーノは呆気に取られる。

「……って、フェイト!?　なにデュエルしようとしてるんだい!?」

「えと。デュエリストならデュエルは受けないといけないって母さんとリニスが言ってたよ、アルフ」

「なにもこんなときにしなくても良いじゃないか!」

「えと……。郷に入っては郷に従えって」

「あぁもう!　面倒くさいねぇ!」

そして橋の上でポカーンとしていたアルフの視界に、デュエルディスクを構えたフェイトが映る。
彼女は既にデッキのシャッフルを終えていた様で、彼女もまた鬼柳やなのはと同様に準備万端だった。

狼に姿を変えた女性――アルフはそんな主人の様子に目玉が飛び出

さんばかりに驚く。
やっと二個目のジュエルシードを手に入れたと言うのに。何故こんなところで道草しなければいけないのか。

「……それで、どうするの？」

「決まってるよ。デュエルしよう。
お互いのジュエルシードを、一個ずつ賭けて！」

「！　アンティデュエル……」

「な――――ッ！？　ほ、本気で言ってるのかい！？」

「本気だよ！　フェイトちゃんが勝ったら、ジュエルシードはあげる。
それでもし、わたしが勝ったら……フェイトちゃんの友達になりたい！」

「――――ッ！？　とも、だち……？」

「わたし、フェイトちゃんと友達になりたい！　友達になって、満足したい！」

アルフがフェイトのすぐ前方に飛び退り、その姿を再び人の形へと変える。
そして何処からかデュエルディスクを取り出し、腕にセット。デッキがシャッフルされる。

アルフのデッキシャッフルが終了したのを確認すると、フェイトが訊ねる様になのはに告げた。
それになのはは戸惑うことすらなくデュエルをしようと告げる。互いに一個のジュエルシードを賭けて。

なのはのその宣言にアルフは驚いているようだが、なのはとしてはこれは本気以外の何物でもない。
自分は負けてやるつもりはない。勝ってフェイトと友達になる。そしてフェイトと沢山満足したいのだ。

だからなのははデュエルで自分の思いをフェイトに届ける。自分勝手だと非難されるのも良い。
だが、誰かが不満足そうな顔をしているのを放っておけるほど、なのはは人間が出来ていなかった。

「「――――デュエル！」」

※

「あちゃあ。ホントに始まっちゃったよ……」

目の前で始まった二人の少女によるアンティデュエル。
その光景に、アルフはガックリと項垂れながらため息を吐いた。

フェイトは以前からデュエルに対してこだわりを持っており、売られたデュエルは買う主義だ。
今回はどうか買わないで欲しいと思っていたが、どうやらアルフの願いは聞き届けられなかったらしい。

「さて。お前の相手は俺だ」

「はぁ……。ま、仕方ないね」

「「デュエル！」」

そしてアルフがため息を吐きつつ視線を前方へと向ければ、デュエルディスクを構えた鬼柳の姿。
どうやらフェイトはなのはと。そして自分は鬼柳とデュエルしなければならない様だ。

それに内心で悪態を吐きながらも、アルフは自前のデュエルディスクを構える。
一応フェイトと渡り合えるくらいのデッキだ。そう簡単には負けないだろう。

「先攻は俺だ。ドロー。≪インフェルニティ・ビースト≫を召喚。
カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

「アタシのターン、ドローだよ」

互いにデッキから手札を五枚ドローし、同時に宣言することでデュエルが開始される。
まず先手を取ったのは鬼柳。彼はデッキからカードを一枚ドローすると、「ＩＦビースト」を召喚する。

「手札から≪Ｅ・エマージェンシーコール≫発動。
デッキから≪Ｅ・ＨＥＲＯエアーマン≫を手札に加えるよ」

Ｅ・エマージェンシーコール
通常魔法
自分のデッキから「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター1体を手札に加える。

「（……ヒーローか？）」

「そして≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を召喚。
バトル！　≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫で≪インフェルニティ・ビースト≫に攻撃！」

「ぐっ！」

鬼柳ＬＰ４０００→３７００

鬼柳は様子を見るために、まず「ＩＦビースト」を召喚する。

「ＩＦビースト」は攻撃力は低いが、様子を見るためには最適なモンスターだ。

そして相手が使うデッキタイプを見極めようと、鬼柳は視線をアルフへと向ける。

そして使用されたカードを見てデッキの種類を見極めようとするが、そう上手くは行かない。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド。

……それにしても、そのデュエルディスクはソリッドビジョンかい？

攻撃が素通りした様に見えたけど」

「あぁ。悪いが俺は魔導師でも無くてな。

それと、エンドフェイズ時に伏せカードオープン。≪サイクロン≫で伏せカードを破壊する」

「ちぃっ！　≪月の書≫が破壊されちまった」

サイクロン
速攻魔法
フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する

月の書
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択し、裏側守備表示にする。

「俺のターン、ドロー。メインフェイズに伏せカードオープン。≪インフェルニティ・インフェルノ≫。
効果によって手札の≪ネクロ・ガードナー≫と≪インフェルニティ・デーモン≫を墓地に送る。
さらに捨てた手札の枚数だけデッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを墓地に送る……。
効果で俺は≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫と≪インフェルニティ・リベンジャー≫を墓地に送るぜ」

「凄いスピードで墓地肥やすね。狙いは1ターンキルかい？」

「さて、な」

鬼柳は自らのターンに入ると、あらかじめ伏せていたカードを発動させた。
この「インフェルニティ・インフェルノ」と言うカードは鬼柳のデッキのキーカードと言っても過言ではない。

効果で手札のモンスターや魔法を主力である「インフェルニティ」モンスターに変えることが出来るのだ。
これで墓地に落とされた「インフェルニティ」モンスターは4体。
十分すぎるほど、鬼柳の墓地は肥えている。

「手札から魔法カード発動！　≪インフェルニティガン≫！」

インフェルニティガン
永続魔法

1ターンに1度、手札から「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送る事ができる。
また、自分の手札が0枚の場合、フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事で、自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついたモンスターを2体まで選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

「永続魔法カードかい？」

「一応聞いておく。チェーンはあるか？」

「（……仕方ないねぇ）伏せカードオープン！　≪デュアルスパーク≫！
効果で≪インフェルニティガン≫を破壊するよ！」

「なっ！」

デュアルスパーク
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するレベル4のデュアルモンスター1体をリリースし、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。選択したカードを破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

鬼柳が発動した「インフェルニティガン」は、アルフの発動したカードによって破壊された。
まさか鬼柳も「インフェルニティガン」を破壊されるとは思わなかっただろう。

視線の先でアルフが「デュアルスパーク」の効果によってドローしているのを視界に納め。
鬼柳はアルフのデッキタイプの特定を進める。そして辿りついたアルフのデッキタイプ。それは「光デュアル」

「（不味いな……。光デュアルは相性が悪い……）」

「どうしたんだい？　アンタのターンだよ」

「くっ！　手札から≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を召喚だ！
≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果により、ネクロマンサーは守備表示になる」

「光デュアル」とは、レベル４以下の光属性デュアル効果を持ったカードでビートダウンするデッキである。
主に使用されるのは先ほど使用された「エンディミオン」や「デュアルスパーク」。鬼柳の「インフェルニティ」とは相性が悪い。

こちらがいくら大量展開しようが、相手は単体除去カードを使って召喚したモンスターを破壊してくる。
それに加え、「デュアルスパーク」によるアドバンテージの回復もある。１ターンで勝負を決めなければ危うい。

「≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
手札が０枚のとき、墓地から「インフェルニティ」と名のついた

モンスター一体を蘇生する！
蘇れ、≪インフェルニティ・デーモン≫！」

鬼柳はまず場を固めようと、「ＩＦネクロマンサー」の効果で墓地の「ＩＦデーモン」を蘇生する。
「ＩＦネクロマンサー」の隣に次元の輪の様な空間が広がり、そこから「ＩＦデーモン」が攻撃表示で現れた。

「手札が０枚の時に特殊召喚された≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから「インフェルニティ」と名のついたカード一枚を手札に加える」

「んなっ！？　も、モンスターだけじゃないのかい！？」

「悪ぃな。コイツは魔法や罠も加えられる……。
俺は≪インフェルニティ・フォース≫を手札に加え、すぐに伏せる。
そしてバトル！　≪インフェルニティ・デーモン≫でダイレクトアタック！　ヘル・プレッシャー！」

「ッ！　くぅううっ！」

アルフＬＰ４０００→２２００

「ＩＦデーモン」の特殊召喚に成功し、鬼柳はとある罠カードを手札に加えた。

それは相手モンスターの攻撃対象にされた「インフェルニティ」モンスターを護る罠カード。

他にも加えるべき罠カードはあったのだが、そのカードを加えるのは今ではない。

鬼柳は加えた罠カードをすぐさまデュエルディスクに伏せると、「ＩＦデーモン」で攻撃する。

鬼柳の命を受けた「ＩＦデーモン」はギョロリと幾つもの瞳を輝かせると、大仰に両腕を広げた。

すると鬼柳とアルフの上空に紫色の魔法陣が展開される。下級モンスターの攻撃とは思えない攻撃方法だ。

そして鬼柳とアルフの上空に展開された紫色の魔法陣から、炎で覆われた巨大な手がアルフを押し潰す。

しかし鬼柳のデュエルディスクはデバイスなどではないので、ソリッドビジョンによる攻撃エフェクトのみだった。

「ターンエンド」

「くぅ、やってくれるね……。ドロー！

アタシは手札から≪サイバー・ドラゴン≫を特殊召喚！

さらにさっき手札に加えた≪Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン≫を召喚！

効果でデッキから≪Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス≫を手札に加えるよ」

「くっ！」

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」

サイバー・ドラゴン
星５／光属性／機械族／ＡＴＫ２１００／ＤＥＦ１６００
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン
星４／風属性／戦士族／ＡＴＫ１８００／ＤＥＦ３００
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
次の効果から１つを選択して発動する事ができる。
●自分フィールド上に存在するこのカード以外の
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数まで、
フィールド上に存在する魔法または罠カードを破壊する事ができる。
●自分のデッキから「ＨＥＲＯ」と名のついた
モンスター１体を手札に加える。

「ＩＦデーモン」の攻撃を受け切ったアルフは、鋭い視線を鬼柳へと向けた。
まさか手札０で発動する効果を持ったモンスターが居るとは。

今まで出会ったことのない相手。アルフはどうやって鬼柳を倒そうか頭を悩ませる。
先ほどの鬼柳の宣言を聞く限り、「インフェルニティ」とは手札０で発動するカード群の様だ。

アルフは手札に視線を落とす。手札にはアルフのデッキのキーカー

ドのうちの一枚があった。
だが、肝心のもう一枚が手札にない。ならばまずは相手の攻勢を少しでも防ぐため、妨害のカードを伏せる。

そしてターンは鬼柳へと移り、鬼柳はデュエルディスクからカードを一枚ドローした。
鬼柳はチラリとドローしたカードを確認すると、そのカードをデュエルディスクにセットする。

「≪インフェルニティ・リローダー≫を召喚！
俺の手札が０枚のとき、≪インフェルニティ・リローダー≫の効果発動。
デッキからカードを一枚ドローし、それがモンスターなら相手に引いたモンスターのレベル×２００のダメージを。
魔法・罠カードならば俺が５００ポイントのダメージを受ける」

「ハッ！　なんだか「インフェルニティ」ってデッキはギャンブルみたいだね」

「あぁ。俺もそう思うぜ……。……ドローだ」

インフェルニティ・リローダー
星１／闇属性／戦士族／攻　９００／守　　０
自分の手札が０枚の場合、
１ターンに１度、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。
この効果でドローしたカードをお互いに確認し、
モンスターカードだった場合、
そのモンスターのレベル×２００ポイントダメージを相手ライフに

与える。
魔法・罠カードだった場合、自分は５００ポイントダメージを受ける。

鬼柳は「ＩＦリローダー」を召喚すると、「ＩＦリローダー」の効果を発動させた。
ダークシグナー時、遊星とのデュエルで使う機会に恵まれなかったカードだ。

それをまさかこんな場所で使うとは。何とも言えない思いを感じながらドローする。
これで高レベルモンスターである「ＩＦデストロイヤー」をドローすれば１２００ポイントのダメージを与えられる。

しかし、鬼柳のドローしたカードはモンスターカードではなく罠カード。
鬼柳の前方に居た「ＩＦリローダー」の銃口が鬼柳の方を向き、その銃口から弾丸が放たれる。

「……引いたカードは≪奈落の落とし穴≫。効果で俺が５００ダメージを受ける」

「自業自得だねぇ」

鬼柳ＬＰ３７００→３２００

奈落の落とし穴
通常罠（準制限カード）

相手が攻撃力１５００以上のモンスターを
召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。
その攻撃力１５００以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

「引いた≪奈落の落とし穴≫を伏せて≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
墓地から≪インフェルニティ・リベンジャー≫を特殊召喚する！」

こちらを向いた「ＩＦリローダー」から銃弾が放たれ、鬼柳の身体を貫いた。
モンスターの映像はソリッドビジョンなのだが、ダメージを受けるのは慣れない。

鬼柳は受けたダメージに僅かに眉を顰め、ドローしたカードをすぐさま伏せた。
手札が１枚でもあれば、鬼柳の伝家の宝刀であるハンドレスコンボは成立しない。

そして再び鬼柳の手札が０枚になると、場の「ＩＦネクロマンサー」の効果を発動した。
先ほどの「ＩＦデーモン」と同じ様に、墓地から「ＩＦリベンジャー」が場に特殊召喚される。

「レベル４≪インフェルニティ・デーモン≫とレベル３≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫に
レベル１≪インフェルニティ・リベンジャー≫をチューニング！」

「レベルの合計は８。……厄介なのが出てくるかねぇ」

「死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！
　シンクロ召喚！　いでよ、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！」

「ッ！」

特殊召喚された「ＩＦリベンジャー」の姿が光り輝き、緑色の光の輪になる。
「ＩＦリベンジャー」の変化した光の輪は、場に居た二体のモンスターを包み込んだ。

そして包み込んだ二体のモンスターから、レベル分の光り輝く星が現れる。
現れた光の星は光の輪の中で一列に整列し、一筋の極太の光の奔流を作りだした。

現れるのは鬼柳のエースモンスターである「ＩＦ・デス・ドラゴン」。

「ＩＦ・デス・ドラゴン」は主人を護る様に、鬼柳の前に飛来。アルフを睨みつける。

「≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫の効果発動！
　手札が０枚のとき、相手モンスター一体を破壊して破壊したモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える！
≪サイバー・ドラゴン≫を破壊する！　インフェルニティ・デス・ブレス！」

「んなっ！　さ、≪サイバー・ドラゴン！≫」

アルフＬＰ２２００→１１５０

鬼柳の召喚した「ＩＦ・デス・ドラゴン」は鬼柳の命を受け、自身の持つ効果を発動させた。

口の中に溢れんばかりの火炎を溜め、それを球状にしてアルフの場の「サイバー・ドラゴン」へ放つ。

「ＩＦ・デス・ドラゴン」の放った火球は「サイバー・ドラゴン」に直撃。

アルフは「サイバー・ドラゴン」を破壊され、「サイバー・ドラゴン」の攻撃力の半分のダメージを受けた。

「ターンエンドだ」

「くっ、アタシのターン、ドロー！

……ふふ♪　コイツはツイてるね。まずは手札から≪Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス≫を召喚！」

「伏せカードオープン！　≪奈落の落とし穴≫だ」

「さらに手札から速攻魔法発動！　≪デュアルスパーク≫！」

「ッ！　ちぃッ！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス

デュアルモンスター
星４／光属性／戦士族／攻１９００／守１３００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードはフィールド上に表側表示で存在する限り、カード名を「Ｅ・ＨＥＲＯ　ネオス」として扱う。

鬼柳はアルフからさらにライフポイントを奪うと、自分のターンを終了する。
鬼柳の場はエースである「ＩＦ・デス・ドラゴン」が居り、伏せカードも二枚存在する。

そう簡単には破られはしないだろう。鬼柳は内心でそう思うのだが、状況が変わった。
アルフはドローしたカードを見てニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべる。なにかキーカードを引いた様だ。

そしてまずは場を整えるためか。わざと「奈落の落とし穴」の効果範囲である「Ｅ－ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス」を召喚する。
「奈落の落とし穴」を発動するべきか。鬼柳は悩むが、「アナザー・ネオス」を除外できるのは大きい。「奈落の落とし穴」を発動する。

だが、鬼柳の発動した罠カードはアルフの二枚目の速攻魔法「デュアルスパーク」により回避されてしまう。
アルフは「デュアルスパーク」の効果で鬼柳のエース「ＩＦ・デス・ドラゴン」を破壊する。これで鬼柳の場のモンスターは消えた。

「効果で1枚ドロー。……さて、鬼柳だっけか。
アタシのエース、見せてあげるよ」

「へぇ。一体どんなモンスターなんだ?」

「それは……コイツさ！　魔法カード≪ミラクル・フュージョン≫
発動！
墓地の≪Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス≫と≪クルセイダー・
オブ・エンディミオン≫を除外融合！」

「ッ！　コイツは……ッ！」

「現れろ！　≪Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング≫！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング
融合・効果モンスター
星８／光属性／戦士族／ＡＴＫ２６００／ＤＥＦ２１００
「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋光属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、ゲームから除外されている
自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数×３００ポイ
ントアップする。
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、
ゲームから除外されている自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついた
モンスターを2体まで選択し、手札に加える事ができる。

「コイツの攻撃力は除外されている「Ｅ・ＨＥＲＯ」の数だけ攻撃

力を３００ポイントアップする！」

ＴＨＥ　シャイニング　ＡＴＫ２６００→２９００

「そしてさっきのデュアルスパークでドローした≪サイクロン≫を発動。

残り一枚の伏せカードを割らせてもらうよ」

「くっ……！」

「バトル！　≪Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング≫で≪インフェルニティ・リローダー≫に攻撃！

オプティカル・ストーム！」

アルフはキーカードである「ミラクル・フュージョン」を発動させる。

彼女の場に居る「Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン」の隣に、一筋の極太の閃光が立ち上った。

そしてその光が晴れたとき、そこには光を象徴する戦士が立っていた。

腕を組み、後光を差しながら鬼柳を見つめるその戦士はまさに光の巨人そのもの。

アルフは「ＴＨＥ　シャイニング」の融合召喚に満足そうな笑みを零すと、無防備な「ＩＦリローダー」へと攻撃宣言。

「ＴＨＥ　シャイニング」はアルフの命に逆らわず、「ＩＦリローダー」へと攻撃を行う。凄まじい光の奔流が「ＩＦリローダー」を襲った。

「ぐぅぁあああっ！」

鬼柳ＬＰ３２００→１２００

「これで止めだよ！　≪Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン≫でダイレクトアタック！」

「ぐっ！　墓地の≪ネクロ・ガードナー≫の効果発動！
一度だけ相手モンスターの攻撃を無効にする！」

「ちっ。通らないかい。ターンエンドだよ」

ネクロ・ガードナー
星３／闇属性／戦士族／ＡＴＫ６００／ＤＥＦ１３００
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を１度だけ無効にする。

「ＴＨＥ　シャイニング」の放った閃光は、鬼柳の場の「ＩＦリローダー」を殲滅する。
そしてソリッドビジョンである「ＩＦリローダー」を通り越してやってきた閃光は鬼柳を襲った。

全身に閃光を浴びながら、鬼柳はどうやって「ＴＨＥ　シャイニング」を破壊するか思考する。
だが、伏せは無い。モンスターも破壊され、鬼柳の場はがら空き。
逆転の手立てはドローしかない。

そして新たな攻撃宣言が鬼柳の耳に聞こえたとき、鬼柳は墓地に眠る「ネクロ・ガードナー」の効果を発動した。
この効果により「E・HERO エアーマン」の攻撃を無効にする。
なんとか敗北と言う事態は免れた。

「(≪E・HERO THE シャイニング≫……。
なかなか厄介なモンスターじゃねぇか)」

鬼柳は蹲っていた身体を起こすと、こちらを見下ろす光の巨人に視線を向けた。
攻撃力は鬼柳の「IF・デス・ドラゴン」に及ばないながらも、攻撃力の上昇効果を持っている。

更に「ミラクル・フュージョン」を引かれて攻撃力を上昇されるのは是非とも避けたい事態だ。
ならばどうするか。決まっている。このドローに全てを賭ける。既に場も追い詰められているのだ。

「……面しれぇじゃねえか。これくらいじゃなきゃ、満足できねぇぜ!」

「ハハッ。でも悪いね。アタシの勝ちでアンタは負けるんだ」

「それはどうかな? ――――ドロー!」

鬼柳は自らが追い詰められている状況にありながらも、嬉しそうに

笑っていた。
ここまで追い詰められている絶望的な状況。この状況を打破してこそ、自分は満足出来るのだ。

アルフはそんな鬼柳の様子に楽しそうな笑みを浮かべる。いつの間にか彼女もデュエルに乗り気になっていた。
勝つか。負けるか。そんなギリギリの緊張感の中、鬼柳は己の運命を託すカードをデッキからドローする。

「……」

「……」

「……俺が引いたカードは、≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫！」

「ッ！　なんだって！？」

「≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を召喚！
効果で≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫は守備表示に表示変更される。
そして≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！　蘇れ、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！」

鬼柳がデッキからカードをドローすると、その周囲に沈黙が下りた。
互いに真剣な表情で、お互いの瞳を見つめ合っている。
気が遠くなる様な沈黙。だが、それは鬼柳の声によって破られた。

彼が引いたのは数ある蘇生カードのうちの一枚。驚愕にアルフの目が開かれる。

「ハハッ、まいったね……。ごめんよ、フェイト。負けちまったよ……」

「……≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫の効果発動。効果対象は「ＴＨＥ　シャイニング」だ。インフェルニティ・デス・ブレス！」

アルフは再び場に特殊召喚された「ＩＦ・デス・ドラゴン」に悔しそうに呟いた。
もう一つジュエルシードを余計に奪えると思っていただけに、この敗北はとてつもなく悔しい。

そして彼女はすぐ傍で戦っているであろう主の様子を心配すると、迫りくる火炎球に視線を向けた。
悔しげな表情を浮かべたアルフを、「ＩＦ・デス・ドラゴン」の放った火炎球が包み込む。

アルフＬＰ１１５０→０

第九話　「対決　光と闇」（後書き）

と言う訳で鬼柳さんがｗｉｎ
次回はなのはとフェイト。少々お待ちください。

第十話　「激突　星屑ｖｓ紅き悪魔」（前書き）

今回はなのはｖｓフェイトです。
微妙に鬼柳さんのキャラ違うかもです……（汗

第十話　「激突　星屑ｖｓ紅き悪魔」

～海鳴市　海鳴温泉某所～

「「デュエル！！」」

鬼柳とアルフがデュエルを行う少し前に、少女たちのデュエルは始まっていた。
互いにシャッフルしたデッキからカードを五枚ドロー。お互いに視線で牽制する。

「わたしの先攻、ドロー！」

まず先攻を制したのは、白いデュエルディスクを身に付けたなのはだった。
彼女は勢いよくデッキからカードを一枚ドローし、引いたカードを手札に加える。

「わたしは今ドローした≪氷結界の紋章≫を発動！
デッキから「氷結界」と名のついたモンスター一体を手札に加えるよ。
わたしはデッキから≪氷結界の風水師≫を手札に加える」

「……氷結界？」

「そして魔導戦士ブレイカーを召喚。ターンエンドだよ」

「わたしのターン、ドロー」

なのはが自身のデッキからモンスターカードを手札に加え、モンスター一体を召喚する。
現れたのはもはや馴染みになりつつある「魔導戦士ブレイカー」。
先攻1ターン目に召喚したため、攻撃力は1900のまま。通常のレベル4モンスターよりも高い。
これならば除去系のカードを使われない限り大丈夫だろうと、なのはは自身の手札に視線を落として考える。

「手札から調律を発動。
デッキから「シンクロン」と名のついたチューナー一体を手札に加える。
わたしはデッキから≪ジャンク・シンクロン≫をサーチ。その後、デッキトップを墓地に送る」

「サーチと墓地肥やしを一瞬で!?」

調律
通常魔法
自分のデッキから「シンクロン」と名のついたチューナー1体を手札に加えてデッキをシャッフルする。
その後、自分のデッキの上からカードを1枚墓地へ送る。

「墓地に落ちたのは≪スピード・ウォリアー≫……。
モンスターをセット。カードを一枚伏せて、ターンエンドだよ」

なのははフェイトの使用した魔法カードに、驚きの声をあげる。
「シンクロン」と言えば、優秀なチューナーが揃っているカード群だ。

その「シンクロン」をサーチし、なお且つ墓地肥やしまで行うことが出来るとは。
幸い、墓地に落ちたのは「スピード・ウォリアー」。アタッカーが一枚だけ消えたことになる。

しかし、油断は出来ない。今彼女が手札に加えたのは「ジャンク・シンクロン」のカード。
このカードで「スピード・ウォリアー」を蘇生され、シンクロ召喚される可能性も残っている。

「……ドロー！　≪魔導戦士ブレイカー≫の効果発動！
このカードに乗っている魔力カウンターを取り除き、魔法・罠カード一枚を破壊する！
マナ・ブレイク！」

「……破壊されたのは≪ガード・ブロック≫だよ」

なのははフェイトの手札に加えられた「ジャンク・シンクロン」を警戒しつつ、場を進める。
今の彼女の手札に「神の警告」などの召喚を無効にする罠カードは

無い。召喚されれば危うい。

「わたしは≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を召喚！
バトル！　≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫でセットモンスターに攻撃！」

「セットモンスターは≪スノーマンイーター≫！
効果で≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を破壊する」

「ッ！」

スノーマンイーター
星３／水属性／水族／ＡＴＫ０／ＤＥＦ１９００
このカードがリバースした時、
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。

まずは壁モンスターを破壊し、フェイトにダメージを与えることにする。
なのはは最初の手札にあった「クルセイダー・オブ・エンディミオン」を召喚。攻撃する。

だが、「エンディミオン」の攻撃はフェイトのセットモンスターによって阻まれてしまう。
フェイトの場に現れたのは雪だるまを模したモンスター。雪だるまの足元から現れた怪物が、「エンディミオン」を破壊する。

「えへへ」

「にゃ？　ふぇ、フェイトちゃん？」

「っ！？　な、なに！？」

「えぇっと……何でもないや」

まさか「クルセイダー・オブ・エンディミオン」が破壊されてしまうとは。

予想外の展開に、なのはは思わず臍を噛む。しかも相手の守備力が「ブレイカー」を上回っている。

仕方が無い。カードを二枚伏せてターンを終えようとしたなのはの耳に、フェイトのにやけた声が聞こえた。

キョトンとした表情を浮かべ、なのはは視線をフェイトへと向けた。するとだらしなく頬を緩ませているフェイトの姿。

彼女の視線は彼女の場の「スノーマンイーター」に注がれており、「スノーマンイーター」が僅かに動くだけでにやけている。

あまりのフェイトのギャップに、なのはは驚いて思わず声をかけてしまう。はたして、今のフェイトは本当にフェイトだったのだろうか。

すると、フェイトはハッと我に返り、以前の様な澄ました態度でデュエルを続行する。

そうか。勘違いか。なのはは釈然としないものを感じつつ、カードを伏せてターンを終了する。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドロー。
手札から≪サイクロン≫を発動。右側のカードを破壊する」

「破壊されたカードは≪マジシャンズ・サークル≫だよ」

「手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚。
効果で≪スピード・ウォリアー≫を墓地から蘇生する」

「ッ！　不味い！」

なのはがカードを伏せてターンを終了すると、ターンは自動的にフェイトへと移った。
彼女は自身のデッキからカードをドローし、引いたカードを見るとニヤリと口元に笑みを浮かべる。

どうやらキーカード。もしくは除去カードを引いたようだ。なにが来るか分からず、なのはは思わず身構える。
そしてまず、最初に発動されたのは除去魔法の定番とも言える「サイクロン」効果により、なのはの伏せカードが破壊される。

「マジシャンズ・サークル」を破壊されたのは痛いのだが、本命のもう一枚のカードが残ったので良しとする。
破壊した伏せカードをフェイトが確認すると、彼女は手札からモンスターを召喚した。先ほど、「調律」によって加えられたカード。

「レベル3≪スノーマンイーター≫とレベル2≪スピード・ウォリアー≫に、

レベル3≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！」

「来る……っ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！
シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「ッ！」

場に現れた「ジャンク・シンクロン」の効果により、墓地から「スピード・ウォリアー」が特殊召喚される。
これにより、場のモンスターのレベルの合計は8となった。イヤな汗がなのはの頬を伝っていく。

そして案の定、場のモンスターを全てシンクロ素材とし、フェイトが自身のエースを呼ぶ。
緑色のリングを二体のモンスターが通過し、モンスターから放たれた星がリングの中で一列に整列。

直後、緑色のリングを一筋の光の奔流が駆け抜けた。そして場に召喚されるのは星屑の龍。
まるで主人を庇うかの様に両の翼を広げ、敵意に満ちた瞳はなのはの場のモンスターに向けられている。

「≪スターダスト・ドラゴン≫で≪魔導戦士ブレイカー≫に攻撃！
響け、シューティング・ソニック！」

「――――～～ッ！」

フェイトは場に「スターダスト・ドラゴン」が召喚されたのを確認すると、攻撃命令を出す。
目標は現在なのはの場に残っている「魔導戦士ブレイカー」。「スターダスト・ドラゴン」の瞳が煌めく。

「スターダスト・ドラゴン」の口腔に空気の塊が集められ、それを一点に集中したブレスが放たれた。
なのはは咄嗟に伏せカードを使おうとするが、頭のどこかが伏せカードを使うことにブレーキをかける。

なのはの場の「魔導戦士ブレイカー」が破壊され、なのはに超過ダメージが与えられた。

なのはＬＰ４０００→３１００

「くぅううっっ！！」

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドロー！」

なのははなんとか超過ダメージを受け切ると、デッキからカードをドローする。
相手に先にエースの召喚を許してしまった。こちらも急いでエースを呼ばなければならない。

先ほどドローしたカードを手札に加え、なのはは視線を手札に落とす。
すでに彼女の手札の中には、エースである「レッド・デーモンズ・ドラゴン」を召喚するための布石が整っている。

「わたしは手札から≪太陽の神官≫を特殊召喚！
そして手札からチューナーモンスター≪氷結界の風水師≫を召喚！」

「ッ！　チューナー！　……来る、シンクロ召喚が！」

「レベル５≪太陽の神官≫にレベル３≪氷結界の風水師≫をチューニング！」

まずはエースを召喚するために、なのはは手札から「太陽の神官」を特殊召喚する。
場に異国の民族衣装を着こんだ神官が現れ、次に踊り子の様な女性モンスターが現れる。

なのはの告げた言葉により、フェイトの表情が険しくなった。
一体どんなシンクロモンスターが呼ばれるか分からないのだろう。
なのはは声高らかに叫ぶ。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

「レッド・デーモンズ・ドラゴン……ッ！」

なのはの叫びに応じる様に、その場に一筋の極太の閃光が放たれた。
そして姿を現すのは荒々しいまでの「力」を感じさせる凶悪なモンスター。

黄金に光る瞳は破壊すべきモンスターである「スターダスト・ドラゴン」を見つめ、煌々と輝いている。
場に召喚されたお互いのエースモンスター。互いのドラゴンが相手のドラゴンに威嚇の咆哮を上げ、周囲が騒がしくなる。

「ッ！？　なに、コレ……！」

「！　あの子にも痣が！？」

と、お互いがお互いのドラゴンを威嚇していると、なのはの腕に違和感が走った。
なんだろうと視線を右腕に落としてみれば、何時の日か見たフェイトと同じように赤く光っている。

その模様はまるで、女性をイメージさせる様な模様。突然の事態に戸惑って、なのははオロオロしてしまう。
一方、なのはの腕に痣が浮かんでいる様子を見て、フェイトが驚いたの声を上げた。

まさかなのはまであの痣が浮かぶとは思いもしなかったのだろう。

それに良く見てみれば、フェイトの右腕からも赤い光が放たれている。天使の羽の様な、模様が。

「なのは！　どうし――ッ！　そいつは！」

「えぇ！？　な、なんだいこりゃ！」

「き、鬼柳さ～ん！　これ何！？」

と、なのはとフェイトがオロオロしていると、デュエルを終えたのだろう。

アルフと鬼柳が駆け寄ってくる。鬼柳はなのはの腕に浮かんだ模様に見覚えがあるのか。

驚いた表情を浮かべ、アルフは二人と同じように混乱している。

このままでは埒が明かないと、鬼柳はなのはにデュエルを続行することを告げた。

赤い痣については心当たりがあると言えば、なのはも渋々引き下がる。

なのはは自身の腕に現れた痣を気にしつつも、デュエルを続行するため手札に目を落とした。

「（≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫のシンクロ召喚には成功した……！

　なら、あとは魔法と罠を駆使して≪スターダスト・ドラゴン≫を戦闘破壊する！）」

なのはの手札には、相手の場の伏せカードを除去するカードが一枚。
残りの二枚は魔法カードだ。
この手札ならばどうにか出来るかもしれない。なのははそう決断すると、場を逆転させるためのカードを使用する。

「手札から速攻魔法≪収縮≫を発動！
≪スターダスト・ドラゴン≫の攻撃力を半分にするよ！」

「！　スターダスト！」

収縮
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

なのはが選択したカードをデュエルディスクにセットすると、場の「スターダスト・ドラゴン」の姿が小さくなる。
それと同時、「スターダスト・ドラゴン」の攻撃力が半分の１２５０まで下がる。これが魔法カード「収縮」の効果である。

「収縮」の効果により、容易に「スターダスト・ドラゴン」を戦闘破壊出来る。
なのははニヤリと笑みを浮かべると、傍に控える「レッド・デーモンズ・ドラゴン」に命を下す。

「≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃――ッ！？」

「な、なに、これは！？」

「赤い……天使？」

攻撃力が半分となった「スターダスト・ドラゴン」に攻撃しようとしたとき、それは起こった。

急遽なのはの瞳とフェイトの瞳が赤く輝きだし、二体のドラゴンの間にノイズの様なものが入り込む。

突然の事態に攻撃宣言も途中のまま、なのはは二体のドラゴンの間に走るノイズに目を奪われた。

そして誰もが息を呑んで見守る中、ノイズの様な隙間から赤い光で構成された人の様な物が現れる。

その赤い光で構成された何かは天使の様な羽を持ち、両腕を目の前で合わせて何かに祈っているように見える。

背中に翼が無ければ、それはまるで巫女の様にも見える。誰が呟いたのかは分からないが、なのははその言葉に同意したい思いだ。

「――くっ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！

クリムゾン・ヘルフレアァアアアアッッ！」

「ッ！　す、スターダスト！」

しばし見惚れていたなのはだが、腕で煌めく痣から痛みが走り、現実に引き戻される。
まずはこのデュエルを終え、鬼柳にこの痣は何なのか問い詰めなければ。

なのははキッと表情を引き締めると、相変わらず威嚇し合っているドラゴンに命を下す。
すると「レッド・デーモンズ・ドラゴン」はなのはの命令を忠実に守った。ドラゴンの右手に炎が集中する。

そして「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が「スターダスト・ドラゴン」に攻撃。
灼熱をその手に宿らせた一撃により、「スターダスト・ドラゴン」は戦闘破壊されてしまう。

フェイトＬＰ４０００→２２５０

「くぅううっ！」

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「わたしのターン、ドロー！」

「スターダスト・ドラゴン」が破壊されたときの余波により、フェイトが苦しげな声をあげる。
なまじ実際にダメージがプレイヤーに与えられるのだ。こればかり

は仕方のないことなのかもしれない。

フェイトはキッと表情を引き締め、自身のデッキからドローする。

その際の瞳は真剣そのもの。なのはは彼女の真剣な様子に、内心で笑みを浮かべる。

「（そうだよ、フェイトちゃん。

デュエルは楽しい……。楽しいから、満足出来るんだよ！）」

「わたしは手札から≪死者蘇生≫を発動！

墓地から≪スターダスト・ドラゴン≫を特殊召喚する！

飛翔せよ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「！　この土壇場で≪死者蘇生≫を引くなんて！」

「さらに伏せカードオープン！　≪シンクロ・ストライカーユニット≫！」

シンクロ・ストライカーユニット

通常罠

効果

発動後このカードは攻撃力１０００ポイントアップの装備カードとなり、

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター１体に装備する。

また、装備モンスターの攻撃力は自分のターンのエンドフェイズ毎に８００ポイントダウンする。

フェイトが真剣にデュエルをしている様子が分かり、なのはは笑みを深くする。

そう。真剣にやればやるほど、勝った時は人一倍嬉しい。負けた時は人一倍悔しい。

けれど、全力を出し切ってデュエルをするのだ。最後に残るのはこれでもかと言うほどの満足感。

なのははその満足感が忘れられない。誰かに押し付ける気は無いが、この気持ちを他の人にも共有して欲しい。

そして状況は、なのはが満足出来る様な状況になってきた。フェイトが引いたカードは「死者蘇生」。

デュエルモンスターズで最もポピュラーなカードであり、汎用性抜群の魔法カードである。

一時期はこのカードで勝敗が決したこともあるほどのカード。このカードを、このタイミングで呼びこんだ。

鬼柳もフェイトの才能を感じ取ったのだろうか。真剣な眼差しでデュエルを続けるフェイトを見つめる。

「バトル！　≪スターダスト・ドラゴン≫で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を攻撃！」

「ダメージ計算時に伏せカードオープン！　≪プライドの咆哮≫！」

「ッ！　そんな……！」

「相手モンスターよりも自分のモンスターの攻撃力が低い場合、お互いのモンスターの攻撃力の差分のライフポイントを払って発動！

ダメージ計算時だけ、わたしのモンスターは差分と３００ポイン

トだけアップするよ！」

スターダストＡＴＫ３５００
レッド・デーモンズＡＴＫ３０００→３８００

なのはＬＰ３１００→２６００

フェイトは「スターダスト・ドラゴン」に罠カードを装備させると、「レッド・デーモンズ・ドラゴン」に攻撃させる。
地力が低い「スターダスト・ドラゴン」では簡単に戦闘破壊されてしまう。ならば多少無理をしてでも破壊したいところだ。

だが、どうやらフェイトは急ぎ過ぎた様だ。なのはの場の伏せカードを破壊せぬまま、バトルに移行する。
そして「スターダスト」に装備されたキャノン砲が火を吹き「レッド・デーモンズ」に命中する寸前。

「レッド・デーモンズ」は巨大な咆哮を上げると、口から灼熱のブレスを吐き出す。
そのブレスは迫っていた砲弾を消し去り、あまつさえ「スターダスト」を迎え撃った。

フェイトＬＰ２２５０→１９５０

「……っ！　カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドロー」

エースである「スターダスト・ドラゴン」を破壊され、万策尽きたのだろう。
フェイトはガクリと項垂れながら、最後の悪あがきだと言わんばかりにカードを伏せる。

だが、あのカードは今まで手札にあったカードだ。使うタイミングがずれたカードなのかもしれない。
しかし、万が一に備えてあの伏せカードを破壊しておく。なのはは手札から「撲滅の使途」を発動。伏せカードを破壊した。

撲滅の使途
通常魔法
セットされた魔法または罠カード1枚を破壊しゲームから除外する。
罠カードだった場合お互いのデッキを確認し、
破壊した罠カードと同名カードを全てゲームから除外する。

「バトル。≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫でフェイトちゃんにダイレクトアタック」

「……ごめんね、母さん。負け、ちゃった……」

フェイトＬＰ１９５０→０

※

なのはとフェイト。鬼柳とアルフのデュエルが終わり、その場には静寂が降り注いだ。
結果はなのはと鬼柳の勝ち。以前負けた相手に勝つことが出来て、なのはは嬉しそうにしている。

一方フェイトと言えば、しょんぼりと肩を落として使い魔に慰められていた。
その様子がまるで大好きなおもちゃを買ってもらえない子供の様で、なんとも微笑ましい光景。

「さって。それじゃフェイトちゃん」

「！　な、なに……？」

「さっきのデュエル、どうだった？」

「……え？」

「え？　って、さっきのデュエルの感想だよぅ！
ドキドキした？　わたしはすっごくドキドキした！」

しばしなのはは嬉しそうにしていると、すぐに表情を切り替えてフ

ェイトの元へ向かう。
フェイトはなのはに声を掛けられてビクリと身体を震わせるが、すぐにキョトンとした表情を浮かべた。
何を言っているのか分からないと言う様な、フェイトの表情になのはは頬を膨らませて抗議する。
曰く、先ほどのデュエルはどうだったか。互いに全力を出し切ってのデュエル。心躍る様なデュエルが出来たか。

「わ、たし……」

フェイトはなのはの言葉に釣られる様に、先ほどのデュエルを思い出していた。
自身のエースを召喚し、相手のエースと互角の闘いを演じた。今思えば、とてもドキドキする。

互いに相手のカードを読みあいながら、相手よりも先にエースを召喚するデュエルタクティクス。
思い出せば思い出すほど胸がドキドキと高鳴り、もう一度全力でデュエルがしたいと心が訴えかけてくる。

勝ちたい。自分のデッキを最高の状態に改造して、そして最高のコンディションでデュエルをしたい。
フェイトがそう自覚すると、フェイトの心は留まる事を知らない。
デュエルがしたい。今の様に、心躍るデュエルが。

「ドキドキ、した……。とっても、とっても楽しかった！」

「ふぇ、フェイト！？」

「あはは。フェイトちゃんも、満足に飢えてたんだね」

フェイトは自身の胸に手を当てながら、先ほどデュエルをしたなのはへと視線を向ける。
言葉では言い表せないほど、デュエルに対する渇望が湧きあがっていた。

デュエルをしたい。全力で相手と戦って、全力の相手を倒して勝利の快感を味わいたい。
いつの間にか、フェイトの心の内が漏れていたのだろう。大声でなのはに向けて叫んでいた。

そんなフェイトらしくない行動に、使い魔のアルフが驚いている。
しかしなのはは逆に、納得したようにフェイトの言葉に頷いていた。

やはり、フェイトは満足に飢えている。
今までデュエルに楽しみを見出せていなかったのかもしれない。

「ねぇ、フェイトちゃん。わたしと鬼柳さんの友達になろう？
そして本気のデュエルをして、満足しようよ」

「とも、だち……？
あ、でも……。わたしはジュエルシードを集めないと」

「……なんで、ジュエルシードが必要なんだ？」

「母さんが、探してるから……」

なのははフェイトの様子に笑みを浮かべると、そっと手を差し出した。
やっぱり、自分はフェイトと友達になりたい。彼女とデュエルをして満足したい。

なのはが手を差し出せば、フェイトがそろそろと手を伸ばす。
だが、不意になにかを思い出したように、フェイトの手は引っ込んでしまった。

どうやら自らがジュエルシードを集める目的を忘れてしまっていたらしい。
何処か残念そうな表情を浮かべるフェイトに、鬼柳が彼女に訊ねた。

「じゃあ、俺たちと一緒に探さないか？」

「え？　い、良いの？」

「あぁ。探すヤツは一人でも多い方が良いからな。
それと……ユーノ」

「あ。な、なんですか？」

「幾つか集めたジュエルシードを、フェイトに渡しても良いか？」

「「「えぇっ！？」」」

しょんぼりとしている様子のフェイトに鬼柳は苦笑すると、一緒に探さないかと彼女を誘う。
正直、三人だけでは探索の限界を感じていたところだ。だが、五人ならばもう少し探索できるかもしれない。

そして鬼柳は後ろを振り返り、今まで空気の様な扱いだったユーノに声をかける。
話す内容はジュエルシードをフェイトに幾つか渡すこと。これにはユーノばかりかフェイトとアルフも驚いた様子だ。

「しょ、正気かい！？
なんでアタシたちにジュエルシードを渡すのさ！？」

「俺たちは既に仲間だからな。
仲間が困ってたら、それを助けるのが俺と」

「わたしなの！」

「は、はは……。アッハハハハハッッ！！」

アルフは驚愕の表情を浮かべ、慌てて鬼柳に詰め寄ってきた。
実際、今のアルフは鬼柳が正気なのか本気で悩んでいる。

なんで今まで敵対していた相手に、いきなりジュエルシードを渡すのか。
先ほどのデュエルで頭がおかしくなったのかもしれない。アルフは

心配になる。

だが、返ってきた答えにアルフは毒気を抜かれてしまった。
いつの間にかアルフとフェイトは鬼柳となのはの友達であり、仲間で。

友達や仲間を助けるならば手を惜しまないのが、なのはと言う少女と鬼柳と言う男性らしい。
今まで複雑に考えていた自分がバカみたいだ。思わず腹を抱えて笑ってしまい、皆から奇異の視線を集める。

「その申し出、ありがたく受けさせてもらうよ。
……でも、良いのかい？　アンタたちが油断した瞬間、ガブッといくかもしれないよ？」

「そうなったら、こっちも全力で応えるだけだ」

「ハハハッ！　一本取られたね、こりゃ」

アルフは暫し笑い転げ、ようやく息を整えると視線を鬼柳へと移した。
もしも自分たちが裏切ったらどうするつもりなのだろう。そんな疑惑を瞳に宿して。

だが、返ってきたのは挑発するような鬼柳の視線だった。
やれるものならばやってみろ。鬼柳の瞳が力強くそう言っている。

アルフは咄嗟に言い返そうとしたのだが、先ほどのデュエルでコテ

ンパンにされてしまった。
そんな自分が言っても説得力が無いだろう。アルフは気持ち良さそうに笑って先ほどの言葉を取り消す。

「えぇと、あの……」

「大丈夫だ。
フェイトの母親がジュエルシードを使い終えたら、ちゃんとお前に返す」

「……分かった。鬼柳さんを信じるよ」

「すまないな」

そして話に混ざるタイミングを逃していたユーノに、鬼柳が静かに説明する。
フェイトの母親が何に使うか知らないが、ジュエルシードを使い終えたらキチンと返す。

これを約束しなければ、自分はとうてい満足できない。鬼柳は自分の言葉に責任感を持ちたい。
鬼柳のそんな真剣な思いが伝わったのか。ユーノは苦笑するとコクリと頷いた。それに鬼柳も苦笑する。

「さて。それじゃまずはフェイトの母親に会ってみるか」

「えぇ!?　な、なんでだい!?」

「なんでって……。一緒に探すんだから、挨拶はキチンとするの」

「……母さん、喜んでくれるかな？」

そしてようやく全員の意思が一つになったのを確認すると、鬼柳がまず最初に告げた。

それはフェイトの母親に会って話をすること。一体何にジュエルシードを使うのか。

それに加え、一緒にジュエルシードを探すことになったことや、なのはとフェイトが友達になったことを教えなければ。

酷くアルフが狼狽しているようだが、一体どうしたのだろう。鬼柳はチラリと、視線をなのはの隣に居るフェイトへと視線を向ける。

今のフェイトはなのはから渡してもらったジュエルシードを胸に抱えて、遠き地に居る母親に思いを馳せているのだろうか。

そうだとしたら、なんとも微笑ましい光景だ。ならば一体、アルフは何に狼狽しているのだろうか。

鬼柳は疑問に思いながらも、ようやく満足そうな笑みを浮かべたフェイトへ視線を向けた。

第十話　「激突　星屑ｖｓ紅き悪魔」（後書き）

次回からは原作乖離します。
いきなりなのはと鬼柳がプレシアさんと邂逅。
果たしてどんな結末になるのやら。

第十一話　「母親との邂逅」（前書き）

原作ぶっとんでプレシアさんとの邂逅です。
果たして、優しいプレシアさんなのか……。それとも病んでいるプレシアさんなのか……

第十一話　「母親との邂逅」

～海鳴市　高町家～

「そう言えば鬼柳さん。
わたしの腕の、この痣って何なの？」

「そう言えば、説明してなかったな……」

海鳴温泉から帰宅し、高町家で荷物の整理をしていると。
鬼柳の使用している高町家の道場に、私服に身を包んだなのはが現れた。

彼女はトコトコと道場の敷地内に入ると、腕に現れた赤い痣に目を落とす。
その痣はまるで、シグナーの証である赤き龍の様な痣。しかし、形状が赤き龍の痣とは違う。

なのはの腕に現れているのはまるで、祈りを捧げている女性の様な痣なのだ。
こればかりは鬼柳にも分からなく、内心で頭を抱える。

「その痣はシグナーの証、だろう」

「？　シグナーの証？　それにだろう？」

「あぁ。俺が知っているのは、痣が赤い龍のヤツなんだが……」

なのはは隅に置いてあった座布団を引っ張り出すと、鬼柳の前に置いて腰を落とす。

この痣は一体何なのだろうか。気になって、昨夜は碌に眠る事が出来なかった。

鬼柳はそんななのはの様子を一瞥すると、「あまり詳しくないが」と前置きをして話し始める。

通常、シグナーの証である痣は万物を司ると言う赤き龍を模した五つの痣のことである。

その五つの痣を持つ人間のことを赤き龍の戦士――シグナーと呼び、彼らはそれぞれ自身の力を引き出す竜を従えている。

赤き竜の力を宿すシグナーの竜は時代を超え、姿を変えて生き続けていた。デュエルモンスターズの五枚のシンクロモンスターになって。

鬼柳の知るシグナーの竜は遊星、ならびにフェイトの持つ「スターダスト・ドラゴン」。

もう一枚はジャック、およびなのはの持つ「レッド・デーモンズ・ドラゴン」。

他にもあるようだが、生憎と鬼柳は知らない。

鬼柳が以上のことを教えれば、なのはは「ほぇえ」と感心したように頷いた。

「うぅ～ん。こっちには赤き竜なんていう伝説は残ってないけど、

赤き巫女って言う伝説なら残ってるよ」

「赤き巫女……だと？」

「うん。昔、まだお父さんが入院する前のお話なんだけどね。お父さんとお母さんに絵本を読んでもらったの」

なのはは鬼柳からシグナー。及び赤き竜の話を聞くと、「うぅ～ん」と頭を抱える。

子供にシグナーや赤き竜の話は難しかったか。鬼柳はそう思うのだが、どうやら違うようだ。

どうもなのはの話によると、こちらには赤き竜の伝説と同じように、赤き巫女と言う伝説が残っているそうだ。

彼女の話によると、大まかな伝説は赤き竜のそれと遜色がないらしい。しかし、シグナーの数が違っていたりする様だ。

主に変わっている点はシグナーの数。赤き竜のシグナーが五人に対し、赤き巫女のシグナーは三人。

そしてどうも、赤き竜と赤き巫女は接点がある様だ。なのはの話を聞いていくうち、鬼柳は内心でそう思う。

「巫女様達はね、遠い遠い世界からやってきたんだって。

その巫女様達は、どんな神様か分からないけれどその神様を崇めてて、力を借りていたらしいの。

で、その神様は別の世界で悪い神様と敵対していたの。神様はとっても強くて悪い神様をコテンパンにやっつけた。

それで神様に負けた悪い神様がこっちの世界にやってきて、神様

の力を借りた巫女様達がこの世界にやっつけに来たの。
　長い闘いの末、ようやく巫女様達はその悪い神様を倒したんだけど、元の世界に戻る力が無くなってこの世界でその命を終えたんだって」

「……なるほどな」

「もしかしたら鬼柳さんの言ってた赤き竜って、巫女様の崇めてた神様だったのかな」

なのはの長い話を聞き終え、鬼柳は納得した。恐らく、なのはの言う神様とは赤き竜だろう。
そして物語の途中に出てきた悪い神様。それは恐らくダークシグナーの操る地縛神のことに違いない。

おそらくダークシグナーの操る地縛神は赤き竜に破れ、こちらの世界に逃げてきたのだろう。
その地縛神を追いかけ、次元の壁を乗り越えて赤き巫女と呼ばれるシグナー達が地縛神を追いかけて。

激しい激闘を終え、地縛神の撃破に成功。だが、元の世界に帰還する手立てがなくなり、この地で生を終えたのだろう。
それがどんな因果か知らないが、現代においてシグナーの力が覚醒したのだろう。そして恐らく、地縛神も何処かに存在しているはず。

「さぁな。
ただ、なのはがシグナーの生まれ変わりだってことは理解したぜ」

「えぇ！？　わ、わたしが巫女様の生まれ変わり！？」

「あぁ。その痣が証拠だ」

「ほぇえ……」

鬼柳の言葉に、なのはは驚いた表情を浮かべる。
なまじ伝説だとばかり思っていた巫女の生まれ変わりが自分だと言われたのだ。

驚くなと言う方が無理だろう。なのはは驚いた様な表情を浮かべて腕に現れた痣を見つめる。
鬼柳はそんななのはの様子を微笑ましそうに見つめていたが、彼の内心は激しい焦燥感が湧きあがっていた。

シグナーの力が覚醒したと言うことは、この世界の何処かにダークシグナーが居るはず。
もしや、また地縛神が現れる様な事態になるのだろうか。自身の過去を思い出し、苦い表情を浮かべる。

「（そうなったら……自分の手でケジメをつけないとな）」

※

「準備は良い？　えと、鬼柳。それに……なのは」

「あぁ。それと、そんなにビクビクされると困るんだが」

「あぅ」

「にゃはは。フェイトちゃん、頑張れ～」

自宅で赤き竜についての話を聞き終えたなのは達は、遠見市のとあるマンションの屋上に立っていた。
そのマンションとはフェイトが部屋を借りているマンションで、地上数十階ほどの高さを持つ高級マンションだ。

一体どれほどの金額を母親から持たされているのだろう。僅かな興味を抱きながら、鬼柳は視線を前に向ける。
彼の視線の先には、黒いフリルのついたワンピースに身を包んだフェイトの姿。傍には人間体のアルフも一緒に居る。

今日は海鳴温泉での決着から約束していたフェイトの母親への挨拶の日。
ユーノも鬼柳の肩に乗り、いつでも母親の住む世界へと移動できる様になっていた。

「こ、コホン。それじゃ、行くよ」

「あぁ」

「うん」

「次元転移、次元座標、”８７６Ｃ４４１９３３……」

フェイトはワタワタと慌てていた様だが、ようやく冷静になれたのだろう。

彼女はコホンとわざとらしく咳払いをすると、首元にぶら下がっていた黄色い三角形の何かを取り出す。

それは彼女のデバイスであり、デュエルディスクでもあるバルディッシュの待機形態。

バルディッシュを起動しデュエルディスクモードへと移行させると、彼女はカードをセットする。

そのカードはデュエルモンスターズのカードではなく、奇妙な文字の様な物が描かれている。

そしてフェイトがデュエルディスクに手を当て詠唱を開始すれば、彼女の足元から黄金色の魔法陣が展開される。

「開け、いざないの扉。時の庭園、テスタロッサの主のもとへ」

彼女の足元に展開された魔法陣は徐々にその大きさを増していき、鬼柳達も魔法陣の中に入る。

そして最後に一言フェイトが唱えれば、空へと向かって一筋の光の

柱が立ち上る。

あまりの光の量の多さに鬼柳やなのはは目を閉じ、移動が終了するのをジッと待つ。
そして少しすると瞼の隙間から入り込む光が弱まり、鬼柳となのはは閉じていた瞼を開いた。

彼らの視界の先にあるのは、ツタが絡みついた古城の様な古ぼけた場所。
恐らくここがフェイトの言う彼女の母親の住む居城――時の庭園なのだろう。

「……魔法ってのは、随分と凄いんだな」

「そうだね。ホントに知らない場所に来たんだ……」

時の庭園へと到着した鬼柳となのはは、キョロキョロと視線を周囲に走らせる。
今まで碌に魔法の発動を見る機会に恵まれなかったせいだろうか。
物珍しそうに周囲を見渡している。

「（それにしても……）」

鬼柳はなのはと同様に周囲を見渡しながら、胸を急かす様な焦燥感を覚えていた。
まるで急いで此処から走りださなければならない様な感覚を覚える。

この感覚は一体。

そしてこの気配はどうも、時の庭園に建てられた古城の様な建物の内部から発せられている。

まるで何かが誘う様な。悪魔が指をくわえて待っている様な。そんなイヤな感覚が脳裏を過って仕方ない。

「（イヤな感じだ……）」

「それじゃ、行こう？」

「……あぁ、そうだな」

鬼柳は自らの身体に走る焦燥感を堪えると、フェイトの言葉に従って歩き出す。

目の前にある入り口をくぐれば、まるで豪華な宮殿の様な廊下に入った。

なのははキョロキョロと物珍しそうに廊下に置かれた調度品を見つめ、鬼柳は周囲に気を配る。

まるで物陰から何かに監視されている様な。そんなイヤな感覚。気のせいであってほしい。鬼柳はそう思う。

そして歩く事数分。彼らの目の前に、巨大な二枚扉が現れた。

どうやらこの奥にフェイトの母親が居るらしい。

「……鬼柳、だっけか」

「？　どうしたんだ」

「もしものときは……フェイトを頼むよ」

「？　もしも？」

「……」

フェイトがその巨大な二枚扉を開け、彼女の後に続いて中に入ろうとしたとき。

中に入るのを躊躇っていたアルフが鬼柳に声をかけた。彼女は顔色を真っ青に変えて。

あまりのアルフの変貌―と言うよりも、怯え様―に、鬼柳は一瞬だけ驚いた表情を浮かべる。

何故、アルフがこんなに怯えているのかが分からない。アルフに事情を訊ねようとするが、彼女は口を閉ざしてしまう。

一体何がこの奥に待っているのだろう。鬼柳が母親の待つ広間へと視線を向け、足を踏み出す。

広間はまるでおとぎ話に聞いたお城の玉座の様だ。そして玉座に座っている人影が鬼柳の視界に入る。

「……っ」

恐らく、玉座に座っているのはフェイトの母親だろう。

その母親から、鬼柳はとてもイヤな感覚を感じ取っていた。

それをあえて言葉で表すならば、それは夥しいほどの闇。漆黒。

彼女からは何処までも続く奈落の様な気配を感じ取っていた。それと同時、この感覚に覚えがある。

「フェイト、どうしたの？　突然来たりして……。ジュエルシードは、順調なの？」

「えと。じゅ、ジュエルシードはもう八個も手に入れたよ。
そ、それでね、今日は一緒にジュエルシードを探してくれる人を紹介に来たんだ」

「あら。まだ一週間も経っていないのに、流石はわたしの娘ね」

「ッ！　う、うん！」

鬼柳達が玉座まで歩み寄ると、玉座に腰掛けていた女性が俯けていた顔を上げた。

まず鬼柳の目に飛び込んでくるのは、腰まで届く漆黒の髪。妙に露出度の高い衣服。

彼女の顔のパーツは悪くなく、街を歩けば男性に声をかけられること間違いなしと言うほどの美しさだ。

しかし、鬼柳はそのどれにも目をくれる事は無い。彼の目を捉えて仕方が無い物。それは、彼女の空虚な瞳だった。

「良い子には、ご褒美をあげなくちゃね」

「え！？　ほ、本当！？」

「えぇ。そこで待っていなさい」

女性は玉座から腰を上げると、玉座の後ろに回り込んで何かをしている。

一体何をしているのか。生憎と、ここからは玉座が影になって良く見る事が出来ない。

鬼柳はそんな女性から視線を外し、母親が何をくれるのか心待ちにしているフェイトに視線を向けた。

今の彼女は母親がくれるご褒美に夢中な年頃の少女にしか見えない。

なのになぜ、アルフはあんなことを言ったのか。

「――ッ！？」

と、鬼柳がしばしフェイトを見つめていると、彼の背筋にゾクリと悪寒が走った。

次いで、本能に従う様に彼は傍らに居たフェイトとなのはを押し倒す。直後、彼の少し上を何かが凪いだ。

「あら。外れちゃったわ」

「――――え？　か、母さん……？」

「せっかくご褒美に■してあげようと思ったのに……。ダメでしょう？」

「ッ！　お前……何者だ」

「おかしなことを言うのね。
わたしはプレシア・テスタロッサ。フェイトの母親で――」

鬼柳はフェイトとなのはが無事なのを確認すると、慌てて背後を振りかえる。
するとそこには、見た事もないモンスターを従えたフェイトの母親――プレシアの姿。

彼女は可愛らしくコテンと首を傾げ、まるで聞き訳のない子供をあやす様な口調で告げる。
だが、今の鬼柳にとってその言葉は寒々しいとしか感じない。まるで人形の様に鬼柳は思う。

そして母親に何をされたのか理解したのだろう。フェイトはハッと大きく目を見開いていた。
彼女の視線は、母親と母親のすぐ傍に控えているモンスターに注がれている。

「――ダークシグナーよ」

「ッ！　その痣は！」

「なに、あの痣……」

茫然としているフェイトを一瞥し、鬼柳は視線をプレシアへと向けた。
彼女は危なっかしい動きをしながら、ゆっくりと右腕を掲げて鬼柳達に見せてくる。

そして飛び込んできた彼女の腕にある痣と、彼女から告げられた言葉に鬼柳は衝撃を受けた。
プレシアの腕に浮かんでいるのは、以前、自らがその腕に刻んでいたものと同じ「巨人」を現す痣。

なのはもその痣を見たのか。
自らの腕に浮かんでいる痣と見比べている。

「フェイト、アナタにもう用は無いわ」

「……え？　か、母さん……？」

「聞こえなかったの？
アナタはもういらないの。何処へなりとも消えなさい」

「――――ッ！？　か、母さんッ！？」

「後はそう。彼――鬼柳が全てやってくれるわ。
ねぇ？　元ダークシグナーの鬼柳　京介」

「えっ！？　鬼柳さんが……ダークシグナー！？」

プレシアは伺う様な視線を向けるフェイトを見て、冷淡にそう吐き捨てた。
大好きな母親から酷い言葉をぶつけられ、フェイトは瞳に大粒の涙を浮かべる。

咄嗟に言い繕ろうとしたのだが、それを冷淡なプレシアの視線が貫いた。
母親の言葉にショックを受け、フェイトがペタンと座り込む。目じりには大粒の涙が溜まっている。

鬼柳はそんなプレシアに咄嗟に言葉を返そうとしたのだが、不意に彼女が視線をこちらへと向けた。
そして放たれた言葉に、鬼柳はハッと息を呑み。なのははプレシアの言葉に、驚いた表情を浮かべる。

「久しいな、鬼柳　京介」

「……地縛神、か……」

「いかにも。またこの地で会うことが出来て嬉しいぞ」

プレシアはゆっくりと腕を下ろすと、虚ろな視線を鬼柳へと向けた。
どうやら自我が封じられているらしく、代わりに彼女の自我を封じている存在が出てくる。

その存在とは地縛神。かつて鬼柳が一度その身をダークシグナーへ

と落とした際に聞いたものだ。
相手も覚えていたのだろう。クツクツと地縛神に操られているプレシアは愉快そうな笑みを浮かべている。

「どうだ、鬼柳　京介。
再び、ダークシグナーとなり世界を破壊せんか？」

「断る。
生憎、今の俺はダークシグナーの誘いに乗る様な願いは持ってない」

「そうか。それは残念だ。ならば……」

プレシアはチラリと鬼柳に視線を向けると、再びダークシグナーにならないか勧誘してきた。
これにはなのはやユーノも驚いている。しかし、鬼柳は地縛神の勧誘を「断る」と斬って捨てた。

すでに復讐する意味もダークシグナーとなって叶えたい願いなど皆無なのだ。
それに鬼柳はこの世界に希望を見出している。むざむざダークシグナーとなり世界を破壊する理由もない。

鬼柳がそう告げれば、操られたプレシアは大仰そうに驚いた表情を浮かべた。
その行動が一々鬼柳の勘に障り、知らず鬼柳の目つきを鋭くさせる。

「そこの少女をダークシグナーにしてしまおう」

「ッ！　フェイトッ！」

「きゃっ！」

しかし鬼柳の目つきがいくら鋭くなろうが、操られたプレシアにとっては些細なことだった。
そしておもむろに彼女は片手を上げると、その腕をフェイトへ向かって振り下ろす。

直後、彼女の傍に控えていた見慣れぬモンスターが脱兎のごとく飛び出し、フェイトに襲いかかった。
咄嗟に鬼柳がフェイトを押し倒すことで致命傷を避けることに成功したのだが、モンスターの追撃は続く。

地面に倒れ込んだ鬼柳とフェイトへ向かって、そのモンスターは鋭い爪を振り下ろした。
それを鬼柳はフェイトを抱き抱えたまま転がって回避。急いで身体を起こし、フェイトを抱き抱える。

「てめぇ……ッ！」

「ふむ。「グレズ」だけではダメか。
ならば……出でよ「ガザス」。逃がすな」

「ッ！　逃げるぞ、なのは！」

「！　う、うん！」

鬼柳は怒りに染まった瞳でプレシアを操っている地縛神を見つめた。
しかし、当の地縛神はどこ吹く風。腕に取りつけたデュエルディスクで新たなモンスターを召喚する。

その姿はまるで昆虫を連想させる様な姿だ。「ガザス」と呼ばれたモンスターは、鬼柳達へと迫りくる。
咄嗟に応戦し様とした鬼柳だったが、生憎と鬼柳のデュエルディスクはただのデュエルディスクだ。

恐らく、プレシアの使用しているデュエルディスクはモンスターを実体化させる機能があるのだろう。
ならば現状、プレシアに対応出来るのはなのはとフェイトのみと言うことになってしまう。

だが、肝心のフェイトと言えば茫然自失と言った表情で操られているプレシアを見つめ。
もう一方のなのははアワアワと鬼柳とプレシアのやり取りを見ているだけ。とても応戦できるものではない。

鬼柳は地面に座り込んでいるなのはを背中に背負うと、脱兎のごとくこの場から逃げ出した。
まずはアルフと合流して地球へと逃げ帰らなければならない。チラリと背後を振り返れば、二体のモンスターが追ってくる。

「うわぁっ！　な、なんだいなんだい！？」

「アルフ！　急いで来い！」

「なに言って――って、うわぁっ！」

徐々に距離を縮めてくるモンスターに焦燥感を抱きながら、鬼柳は目の前の扉を蹴り飛ばした。

すると廊下の隅で縮こまっているアルフの姿が目に入る。廊下の隅で縮こまっているアルフに向け、鬼柳は怒鳴った。

それと同時、アルフがこちらに視線を向ける。すると彼女の瞳はギョッと大きく見開かれた。

そして事態の重要性を理解したのだろう。キッと表情を引き締めると、彼女は鬼柳の後を追いかける。

「なにやったんだい！？」

「さぁな！　それよりも地球に逃げるぞ！　フェイトが不味い！」

「！　合点承知！」

アルフは全力で駆ける鬼柳の隣に追いつくと、後ろを振り返りながら訊ねた。

相変わらず、彼らの背後からは鬼柳達を追いかけて駆けてくる二体のモンスターの姿が。

鬼柳としてはアルフの質問に答えたいところだが、切羽詰まってい

て生憎と時間が無い。
チラリと脇に抱えるフェイトに視線を落とせば、相変わらずフェイトは茫然自失としていた。

アルフもそんなフェイトを確認したのだろう。悔しげな表情を浮かべると、走りながら詠唱を始める。
そして徐々に後ろのモンスターたちの距離が縮み、あと僅かと言うところでアルフの転移魔法の詠唱が完了。

鬼柳達は時の庭園から姿を消すことに成功した。

※

「はふぅ……」

海鳴市内在住の少女、八神　はやては暇を持て余していた。
ソレと言うのも、いつも遊んでくれていた青年がここ数日相手をしてくれないのである。

どうもここ数日、彼は居候になっている少女と共に何やら変なこと

をしているらしい。
一体どんなことをしているのだろう。気にはなるのだが、問い詰めるのは少々面倒くさい。

「最近はデッキの微調整ばかりやし……。
そろそろ鬼柳兄ちゃんと闘いたいなぁ」

はやてはため息を一つ吐き出すと、テーブルの上のカードの束を取り出した。
それは彼女の相棒であるデュエルモンスターズのデッキ。パラパラとカードを捲って行く。

鬼柳が相手をしてくれない日は大抵、はやては自身のデッキの改造に性を出していた。
その成果もあってか、最近は大分良いところまで戦えるようになっている。勝てるのは何時の日か。

「そう言えばこの腕の痣も気になるな。
これ、なんなんやろ？」

一通りデッキに目を通し、修正点がないことを確認するとデッキをテーブルに置いた。
次いで、彼女が視線を向けるのは先日、自身の腕に突如として現れた赤い痣。

まるでなにかを模した様な痣に見えるのだが、これが一体何なのか

はやては知らない。
しばし「うーん」と頭を抱えて考えてみるのだが、生憎と答えは出なかった。お茶でも飲んで一休みしよう。
そうしようとしたとき――――
――――カッ！
「ほぇ？　って、えぇえええええッッ！？」
「アイタタタ……。ちょっと鬼柳、フェイトは大丈夫なのかい？」
「……あぁ。ちゃんと無事だ」
「あ、アルフさん重いです！」
「っと。ごめんよなのは……だっけ」
「な、な、な……ッ！？」
突如はやての目を潰さんばかりの閃光が居間を包み込んだ。
丁度、廊下の方を向いていたはやては突然の閃光に慌てて背後を振り向く。
すると、彼女の視界にあり得ない光景が飛び込んできたのだ。
何故ならば、先ほど自分以外誰も居ないリビングに、突如として四人の男女が現れたのだ。
そのうちの二人にはやては見覚えがある。自分といつも遊んでくれ

る鬼柳と、鬼柳の居候先の娘であるなのは。
残る二人に見覚えは無いが、恐らく二人の知り合いなのだろう。突然はやての家にワープする様な知り合いだとは思わなかったが。

「なんなんや、これはぁあああああッッ！！」

とりあえず今現在の自分の心境を、はやては声を大にして叫ぶのだった。

第十一話　「母親との邂逅」（後書き）

はい、と言う訳で地縛神が出ました。
ただ、この地縛神は本編のとはちょっと違います。

その辺りの詳しいことは次回以降やりたいと思います。

第十二話　「地縛神」（前書き）

ちょっと時間が空いてしまった。
申し訳ないｍ（＿＿）ｍ

第十二話　「地縛神」

～海鳴市　八神家～

「悪かったな、はやて。突然、邪魔したりして」

「うぅん。鬼柳兄ちゃんに会いたかったから、丁度良かったで」

鬼柳達が時の庭園から八神家の居間に転移してから一時間後。
八神家の居間に置いてあるソファに腰掛けながら、鬼柳がそう告げた。

彼の視線の先に居るのは、車いすに乗った幼い少女。丁度なのはと同じ年頃だ。
彼女は慣れた仕草でキコキコと車いすを動かすと、何処からか急須とポットを取り出す。

「それにしても、さっきのは何なん？」

「え？　あぁ……。それはな」

「あ、アルフさん」

はやてはコポコポと茶碗にお茶を注ぐと、コテンと首を傾げながら鬼柳に訊ねた。

突然自宅の居間に現れるなんて、鬼柳はデュエリストではなく手品師だったのだろうか。

そして鬼柳がはやての問いかけに答えようとすると、不意に居間の扉が開かれた。

そこには先ほど、鬼柳達と一緒に現れた長身の女性の姿が。彼女の姿になのはは声をあげる。

「フェイトちゃん、どうでした？」

「それが大分不味い感じなんだよ。
かなり落ち込んでて……。さっき、ようやく寝てくれたんだけど……」

「フェイトちゃん……」

女性――アルフはなのはの姿を捉えると、スタスタと居間に足を運ぶ。

そしてドカリとソファに腰を下ろせば、魂を吐き出さんばかりの深いため息を吐いた。

だが、誰も今の彼女を咎めようとはしない。理由は二階で眠っているフェイトにある。

今から一時間ほど前に、フェイトは実の母親に殺されかけたのだ。

それも明確な殺意を持って。

ショックを受けるなと言う方が無理な話だ。八神家に転移してきたとき、フェイトは酷く混乱していた。

その様子を鬼柳は見かね、はやてに部屋の一室を借りて、そこでフェイトを休ませることを提案。

はやても特に異存を唱える訳でもなく、フェイトは現在八神家の二階の一室で静かに眠っている。

八神家に現れた当初のフェイトの様子を思い出したのか。なのはは悲しげに眉を潜めた。

「それで鬼柳だっけ。
アンタ、ダークシグナーについて何か知ってるみたいだけど」

「……あぁ」

「教えてくれないかい？　ダークシグナーって、何なのさ」

「……少し、長くなるぞ」

アルフも僅かに悲しげに眉を潜めたが、まずは聞きたいことが鬼柳にあった。

それはフェイトの母親であるプレシアが零した「ダークシグナー」についてだ。

アルフの言葉に鬼柳は重く頷き、悔やむ様な表情を浮かべて「ダークシグナー」について語りだす。

そして鬼柳が「ダークシグナー」について語って行くと、なのはやアルフ。それにはやての表情が大きく見開かれた。

ダークシグナーとは、冥界から訪れた闇の番人である。地球の誕生

以来、５０００年周期でシグナーと闘い続けている存在だ。
ダークシグナーは死者であり、強い生への執着心を持ったまま死亡した人間が地縛神に憑依されることにより、ダークシグナーとなる。

ダークシグナーの目的はただ一つ。地縛神によって地上を破壊し尽くし、冥界の王を復活させることである。
もしも冥界の王が復活してしまえば、世界は未曽有の混乱に陥り、大勢の人々が犠牲になるだろう。

ここまで話し終えるのに大分時間を要し、鬼柳はチラリと視線を居間の壁に掛かっている時計に向けた。
時計の針は話し始めた頃よりも大分進んでおり、鬼柳の説明に要した時間は約三十分ほどだった。

「そんな……！」

「それじゃ、プレシアはもう死んでるってのかい！？」

「さあな。ただ、その可能性が極めて高い」

「――っ！」

鬼柳の説明を聞き終え、なのはやアルフ。それにはやてがざわめき出す。
その中でも、アルフが一番動揺が激しかった様だ。掴みかからんばかりの勢いで鬼柳に迫る。

「……ねぇ、鬼柳さん」

「……どうした」

「鬼柳さんも、ダークシグナー……だったんだよね？」

「……」

「……あぁ」

アルフは鬼柳の言葉に、ガクリと膝から力が抜けた様に崩れ落ちた。
その様子を痛ましげに見つめながら、今度は視線をなのはへと向ける。

なのはは伺う様な瞳で鬼柳を見つめ、鬼柳が最も気にしている事柄に触れた。
鬼柳がダークシグナーだった。それは鬼柳の忘れ去りたい過去であり、自身を罰する罪の記憶。

軽蔑されたかもしれない。恐怖の瞳で見つけられるかもしれない。
内心でそんなことを思いながら、再度視線をなのはへと向ける。すると、鬼柳のコートがグッと掴まれた。

「？　なのは？」

「鬼柳さんは……生きてる、よね。
世界を壊そうなんて、しないよね……」

「……あぁ。俺にはもう、護るものも出来た」

「良かったぁ……」

鬼柳のコートを掴んでいたのは、独りになるのを恐れる様な表情を浮かべたなのはだった。
彼女はギュッと鬼柳の身体に身を寄せると、鬼柳の温もりを確かめる。暖かい。ちゃんと生きている。

正直、鬼柳が元ダークシグナーと言われて混乱した。けれど、鬼柳はもうダークシグナーではない。
心の何処かで、なのはは恐れていたのだろう。鬼柳が自分の傍を離れ、何処か遠い場所へ行こうとしているでは、と。

だが、鬼柳は地縛神の誘いを断り、こうして自分の元に居てくれる。
それが何よりも嬉しくて、暖かかった。

「てりゃ」

「？　は、はやて？」

と、なのはが鬼柳の身体に身を寄せていると、なのはの間にはやてが身体を滑り込ませた。
まるでなのはを威嚇している様なはやての鋭い視線に、鬼柳はポカンとした表情を浮かべる。

だが、当のはやてと言えばジィッとなのはを見つめるばかり。なのはもまた、ジィッとはやてを見つめた。
ただ二人は見つめ合っているだけなのに、何故だか空気が重い。ア

ルフは突如として重くなった空気にブルリと身体を震わせる。

「鬼柳兄ちゃん。なんやよう分からへんけど、わたしもシグナーなんやな？」

「あ、あぁ。お前の腕に浮かんでいるのも、赤き巫女……の痣の可能性がある」

しばし居間に重い沈黙が降り、カチコチと時計の針が動く音しか聞こえない。
そして沈黙がようやく壊されたのは、なのはと見つめ合っていたはやてが声を発したから。

はやては「はぁ」と小さく息を零すと、自身の右腕に視線を落としながら鬼柳に訊ねた。
彼女の腕の裾を捲れば、そこには赤い線で描かれた弓矢の様なもの。
恐らく、巫女の持ち物を現すものだろう。

「じゃあ、シグナーの力でフェイトちゃんやったか。
あの子のお母さんを助け出すことは、できへんの？」

「……可能性としては、無くは無い」

「本当なのかい！？」

はやてはジッと自身の腕に浮かび上がった痣を見つめると、鬼柳に

気になることを訊ねた。
それはシグナーと呼ばれる者の力を使い、ダークシグナーとなった者を助けることは出来ないか、と言うもの。
なのはもその言葉が気になったのか。チラリと鬼柳へと視線を向ける。
だが、鬼柳の表情は明るくは無かった。苦虫を噛み潰したかのような表情で告げる。
すると鬼柳のその言葉に、今までソファの上で震えていたアルフが飛びついた。
彼女も彼女で、フェイトの母親のことを心配していたのだろうか。
鬼柳は落ち着く様に告げる。
「プレシアは、良いお母さんだったんだよ。
フェイトと一緒にデュエルして、フェイトも楽しそうにしてたんだ……」
そして落ち着きを取り戻したアルフは、ポツポツと吐き出す様に、プレシアについて語り出した。
話を聞く限り、どうやらプレシアは地縛神に自我を封じられる前は、良い母親を務めていたらしい。
フェイトに手料理を作り、ときどき時の庭園でフェイトと一緒に遊んでいた。そんな何処にでもいる様な母親。
だが、ある日を境にプレシアは変わってしまった。今までの様な優しさは成りを潜め、フェイトに虐待を始めたようだ。

それからは共に食事を作ることや取ることを止め、部屋に閉じこもりがちになってしまった。
アルフはそんなプレシアを問い詰めようとしたのだが、逆に敗北。
ズタボロにやられてしまったらしい。

「それから、プレシアが言ったんだ。ジュエルシードを取ってきて、って。
そうすれば、またあの頃のわたしに戻るって……」

「……そうか。だから、フェイトは……」

「でも、だからってあんまりだよ！
どうして、どうしてプレシアが死んだんだ！　なんでダークシグナーになったりしたんだ！」

アルフは話している間に感極まってしまったのか。ポロポロと涙を零しながら叫ぶ。
なまじ優しい頃のプレシアを知っているせいもあるのだろう。彼女は心の底から悲しんでいた。

そして鬼柳となのはは、フェイトが何故あんなにもジュエルシードを集めるのに必死だったのかを思い知る。
フェイトはただ、元の優しい母親に戻って欲しかっただけなのだ。
以前の様に、自分に笑いかけて欲しかっただけ。

恐らく、それがフェイトの不満足そうな表情の正体だろう。
母親と一緒に笑うことが出来ない。母親と一緒に居られない。だから不満足。

「お願いだよ！
プレシアを……プレシアを元に戻す方法を教えとくれ！」

「……」

「そのためなら……なんだってするからさぁ！」

アルフは涙を零しながら、鬼柳に嘆願する。主人の母親を元に戻したいと。
鬼柳としても、是非ともプレシアをダークシグナーから解放してやりたいと思う。

鬼柳がダークシグナーから解放されたのは、遊星達が冥界の王を倒したおかげだ。可能性はある。
だが、鬼柳が蘇ったのは二人のダークシグナーが命を捧げたからだ。
その結果として、鬼柳は蘇る事は出来た。

しかし、この世界ではどうなるか分からない。下手をすれば、プレシアも塵になって消えてしまうかもしれない。
そう考えると、鬼柳は軽々しく生き返ることが出来るとは言えなかった。下手に希望を持たせ、絶望させる訳にいかない。

「プレシアを元に戻す方法は……あるにはある」

「本当かい！？」

「ただ……その方法を取れば、まず間違いなくプレシアは死ぬだろう」

「な――っ！？」

鬼柳は考えに考え、苦渋に満ちた表情でアルフに告げる。
自分も一度、遊星に敗れることでダークシグナーから解放される事が出来た。

だが、最後に一言残したすぐ後に塵となって遊星の腕の中から消えてしまった。
そして二人のダークシグナーが犠牲になるのを見送った後、鬼柳はこの世界に居たのだ。

なので恐らく、プレシアをデュエルで下せばダークシグナーから解放されることだろう。
しかし、その代償はプレシアの死だ。そうなってしまえば、フェイトに多大な心の傷を与えるだろう。

アルフは鬼柳の言葉に目を見開き、ストンとソファに腰を下ろした。
その目には驚愕が浮かびアルフの身体から力が抜ける。彼女の様子をなのはとはやてが痛ましげに見つめた。

「あ。じゃ、じゃあ、なんで鬼柳さんは生き返ったの？
倒したら、元に戻らないんでしょ？」

「……実際に、俺も一度死んだからな」

「「「えぇっ！？」」」

と、しばし居間に痛ましげな沈黙が木霊した。それを破ったのはなのは。

彼女は「あっ」と何かに気がついた様な声を上げ、視線を鬼柳へと向けて彼に訊ねる。

彼は言ったのだ。ダークシグナーは倒されたら死んでしまうと。ならば何故、鬼柳は生きているのか。

アルフとはやての視線が鬼柳に集まるのを感じながら、なのはも視線を鬼柳へと向ける。そして告げられた言葉に驚いた。

「じゃ、じゃあどうやって生き返ったんだい！？」

「遊星……俺の仲間が地縛神を従える冥界の王と呼ばれる存在を倒したからだ。

そして二人のダークシグナーが命を捧げたことにより、俺は現世に生き返ることが出来た」

「ッ！？」

鬼柳の口から飛び出した「冥界の王」と呼ばれる突拍子もない言葉。それが何なのか分からないが、聞いて愉快になれる話ではないだろう。

そしてその後の話――二人のダークシグナーが命を捧げたと言う言葉に目を見開く。

まさか、そんな。プレシアを救うためには二人の命が必要なのか。
鬼柳の話を聞いていた三人は思う。

「この世界に「冥界の王」や他のダークシグナーが居るか分からない以上、プレシアは死ぬ可能性が高い。
……そう言う事だ」

「そ、そんな……！」

鬼柳は驚愕に目を見開く三人からソッと視線を逸らし、付け加える様にそう告げる。
実際、この世界に「冥界の王」が居るのならば、その存在を倒すことでプレシアは蘇るかもしれない。

しかし、こちらの世界に「冥界の王」が存在しているのか怪しい。
不確かな情報に踊らされたくは無い。
ならば鬼柳達に取れる手段は限られてくる。自分やなのはたちシグナーがプレシアを倒し、ダークシグナーから解放する。

まずプレシアは死んでしまうだろうが、あのままフェイトへ暴言や暴行を加えるよりは大分良いに違いない。
鬼柳は小さくため息を吐くと、自分の前に置かれていた湯呑みを手に取った。中のお茶は冷えて温くなっている。

なんとも言えない沈黙が、八神家のリビングを包み込んだ。

※

「――――ん？」

辺り一面を真っ黒な景色で覆われた場所で、彼女は僅かに意識を覚醒させた。
ぼんやりとした視線を動かしながら、きょろきょろと周囲に視線を向ける。

しかし、辺り一面は真っ暗で目に入る物は何もない。
とりあえず状況を確かめようと腕や足を動かそうとすれば、何かに拘束されているのか。動かなかった。

「此処は一体……。
それに、わたしは確か……」

女性は拘束されている腕や足を訝しげに見つめると、目を覚ます前の記憶を掘り起こそうとする。
そうだ。自分はたしか、娘とデュエルをした後、突然気を失ったのだ。貧血の様に、その場に倒れたはず。

まさか誰かに監禁されたのだろうか。そう思うのだが、頭の片隅でそれは違うと判断する自分が居る。
そしてこれまでのことを思い出そうとする彼女の脳裏に、途切れ途切れだが今までの記憶が蘇ってきた。

『――ご褒美に……あげようと……た、のに……』

『フェ……、アナタ……もう……無いわ』

「――――ッ！」

彼女の脳裏に浮かび上がった記憶は、自身が娘に酷い言葉をかけている場面だった。
自信が言った覚えは無いが、確実にこの口からその言葉を吐いた記憶はある。これは――操られた？

そして彼女の脳裏に、意図して発した訳ではない彼女の酷い言葉によって傷つく愛娘の姿が浮かぶ。
涙眼で彼女に縋る様な。拒絶されるのを恐れる様な。そんな表情で、彼女の愛娘は自分自身のことを見ていた。

「ふぇ、フェイト！　フェイト！」

「ぬ……。自我を取り戻したか」

「ッ！　誰！？」

必死に愛娘の名前を呼びながら、この真っ暗な空間から脱出しようと彼女は足掻く。
早く娘――フェイトに会って先ほどの暴言を謝らなければならない。
彼女は優しい子だ。どれだけ傷ついたかは、考えたくもなかった。
そして自身の四肢に絡みついている何かを取り払おうとしていると、聞き慣れぬ声が響く。

慌てて視線を左右へと向ければ、こちらをジッと見据える巨大な眼が目に入った。
それはあまりにも邪悪で、長い間見つめていたら気が狂ってしまいそうな感覚を覚えさせる。

「眠れ。貴様にはまだ、働いてもらう」

「ウァアアアアッッ！！」

女性が自身を見つめる巨大な眼を見つめていると、またも謎の声が周囲に響いた。
それと同時、彼女の全身に電流が走った様な感覚が走る。大きく目を見開き、彼女は背をのけ反らせた。

こちらを見つめる蒼い線で描かれた巨大な瞳は、大声で悲鳴をあげている女性を静かに見据える。
そして五分ほど電流の様なものを流すと、さすがに女性は気を失ったのだろう。抵抗らしい抵抗を見せる様子は無い。

「そうだ。所詮、貴様はただの駒に変わりない」

そして女性が気を失ったのを確認すると、暗闇に浮かぶ蒼い線で描かれた瞳はそう呟く。
すると徐々に女性の囚われている空間に光が差していき、周囲の状況が確認出来るようになった。

四肢を闇の様なもので拘束されているのは、鬼柳たちが時の庭園で出会った女性――プレシア。
そしてプレシアを見据える蒼い線で描かれた瞳の正体は、鬼柳と並々ならぬ因縁のある相手――地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕの姿だった。

※

「う、うぅん……」

もぞもぞと身じろぎ、少女は眠っていた意識を覚醒させた。
まだ眠っていたいと言う欲求を抑え込みながら、ゆっくりと瞼を開いていく。

すると目に入ったのは見知らぬ天井。木で出来た、暖かな印象を受ける天井だった。
ぼんやりとした視線で木の天井を見つめながら、少女はどうしてここで眠っていたのか思い出す。

「――ッ！」

すると、眠る前の記憶を思い出したのだろう。ハッと表情を強張らせ、ギュッと自分自身を抱き締めた。
脳裏に浮かび上がるのは、路肩に転がる石を見る様な視線の母親。
次いで、告げられた言葉が少女の胸を穿つ。

嘘だ。嘘だ。自分の大好きな母親があんなことを言うなんて、嘘に決まっている。
少女は内心でそう自分自身に言い聞かせながら、なんとか心の安定を図ろうとする。

しかしいくら自分自身に言い聞かせても、彼女の耳の奥に母親の言葉はこびり付いていた。
徐々に視界が歪み、目じりから涙が零れ落ちそうになってくる。
そしてとうとう泣き出してしまう。そんなとき――

「ふぇ？」

不意に、誰かの手が自身の頭に乗せられた。
突然の事態に、情けない声が自身の口から飛び出す。

視線を上にあげて、誰が自分の頭に手を乗せているのか見ようとする。
だが、相手はそんな少女の思惑を見抜いているのか。グシャグシャと乱暴に頭を撫でた。

「わ、わ！」

「起きたか」

「！　……鬼柳」

乱暴に頭を撫でられて、少女は右へ左へと大仰に頭を揺らす。
そして徐々に目が回って布団に倒れ込みそうになったとき、ようやくその人物は手を離してくれた。

未だぐるぐると目が回っている少女の耳に、その人物の落ち着いた声が響く。
その声は数日前から聞く様になっていた男性のもの。少女も気がついたのか、視線を上げた。

そこにいたのは、愛用していると言う灰色のコートに身を包んだ男性――鬼柳の姿。
鬼柳はようやく目覚めた少女――フェイトの様子に、僅かに口元を

綻ばせながら口を開く。

「大分落ち着いたみたいだな」

「あ……」

「（っ。……失言か）」

鬼柳はフェイトの頭から手を離し、彼女に自身の容体を訊ねてみた。しかし、フェイトは鬼柳の言葉で先ほどの記憶を思い出したのだろう。

僅かに顔を俯かせ、その小さな肩を震わせる。その様子に、鬼柳は己の失言を悟った。

重苦しくなってしまったこの空気。変えるにはかなりの労力が必要だろう。

鬼柳は僅かに嘆息すると、布団の上で俯いているフェイトを自身の胸へと抱き寄せた。

フェイトが「わっ」と驚いた声をあげていたが気にしない。無理やり抱き抱え、フェイトに告げる。

「……好きなだけ、泣いちまえよ」

「え？」

「大声でみっともなく、泣いたら良い。

いつまでも胸の内に溜めこんでいるのは、良くないからな」

「……っく。ふぇ……」

フェイトは鬼柳の言葉に驚いた様だが、先ほどの記憶がぶり返してとうとう泣き出してしまう。
なまじ大好きな母親に拒絶されたのだ。泣くなと言う方が無理な話であろう。

鬼柳は腕の中で嗚咽を漏らしながら泣いているフェイトを見つめつつ、昔の記憶に思いを馳せる。
脳裏に浮かんだのは、自分がまだチームサティスファクションを率いていた頃の記憶だ。

彼らは見事サテライト統一を果たし、大きな目的を達成して満足できていた。
だが、その後も鬼柳はチームサティスファクションを率いていた。
彼は怖かったのだ。

サテライト統一と言う巨大な目的を達成し、ようやく出来た仲間――遊星やジャック、クロウと離れ離れになるのが。
だからサテライト統一後も、サテライトの内部に居たデュエルギャングの残党を狩っていた。そうすれば、また一緒に居られたから。

しかし、鬼柳のその行為がチームサティスファクション内部に決定的な亀裂を生んだ。
後に鬼柳はセキュリティに対し爆破テロを行い、セキュリティに拘束、逮捕された。

もしもあのとき、自分が素直に胸の内を吐き出せていたのなら、あんな結末にはならなかっただろう。
自分はすでに失敗した。だからフェイトにはその間違いをしないで欲しい。鬼柳は内心でそう思う。

「（俺も素直に胸の内を吐き出せていれば……。
まだ遊星やジャック、クロウと仲間で居られたのか……）」

らしくない「もしも」を考えて、鬼柳は首を振った。そんなことを考えても埒が明かない。
彼はやるべき事が出来た。この世界に現れたダークシグナーを倒すこと。それを己に使命付けた。

一度ダークシグナーに身を落とした自分だから分かる。あれはこの世にあってはならないものだ。
ダークシグナーと地縛神の力によって「冥界の王」が蘇れば、この世界は破壊や絶望に覆われてしまう。

そんなことはさせない。行く宛てのない自分を迎え入れてくれた高町家や満足に飢えているはやて。
そして腕の中で泣いている少女の生きるこの世界を、そんな混沌に変えたくは無い。

「（地縛神。お前らがこの世界を破壊しようとするなら、俺がそれをぶっ潰す）」

故に鬼柳は決意する。地縛神や「冥界の王」がこの世界を破壊しようとするなら、自身がそれを止める。
それも、ただ止めるだけではない。ダークシグナーと身を落としたもの。彼らも救って、地縛神を倒して見せる。

限りなく難しいことは百も承知している。
だが、誰かがやらねばこの世界が滅んでしまうのだ。

自分はシグナーでは無い。赤き竜や赤き巫女の加護も得られないだろう。
それでも構わない。自分が持てる全ての方法を使って、ダークシグナーとなった者を救う。

「（――俺を、満足させてくれよ？）」

鬼柳は内心でそう決意しながら、ギュッと腕に力を込めた。

第十二話　「地縛神」（後書き）

き、気が付いたら鬼柳さんがフェイトを抱き締めていた。
なにを言っているのか（ｒｙ

鬼柳さんにフラグが立ったようです。（ぇ
２月３日　修正
そう言えば原作でもニコにフラグ立ててた様な。

第十三話　「協力」（前書き）

今回はフェイトの内情中心です。
そして地味にギャグ回かもしれません。

第十三話　「協力」

～海鳴市　八神家～

「え、えぇと……」

一しきり泣き終わり、我に返ったフェイトは頬を赤く染めて戸惑っていた。
理由としては至極簡単で、彼女はとある男性に抱き締められて泣いていたからである。

その男性とは、数日前から共にジュエルシードを探す約束をしていたデュエリスト――鬼柳　京介。
先ほどは訳も分からず泣いてしまった彼女だが、冷静になってみると今の自分の状況はとても恥ずかしい。

今まで他人――それも異性と触れ合う機会に恵まれなかったからだろうか。彼女はこの様な行為に滅法弱い。
見知った仲とは言え、異性の腕の中に居るのだ。思わず恥ずかしがってしまうのも、無理はない話だった。

「（……暖かいな）」

しばし身じろぎしていたフェイトだが、鬼柳は未だ泣いていると思っているのだろう。

フェイトを解放する様子は無い。「むぅ……」と小さく唸りながら、フェイトは鬼柳の胸の中を堪能する。

鬼柳の胸の中は母親やアルフのものとは違い、ゴツゴツと鍛えられた胸板がフェイトの頬に当たる。

次いで、今まで感じたことのない安堵感を覚え、フェイトは僅かに頬を緩ませて鬼柳の胸に顔を埋めた。

「ん。落ち着いたか」

「あぅ」

と、フェイトが鬼柳の胸に顔を埋めると、ようやくフェイトが泣き止んだと思ったのだろう。

鬼柳がフェイトの背に回していた手を解放し、ポンポンと彼女の頭に手を乗せる。

当初フェイトは離れて行った温もりに寂しそうな表情をしていたが、今の自分を確認して一転。

泣き顔を見られまいと、僅かに顔を俯かせた。その様子は、まるで親に怒られている子供のようにも見える。

「それでフェイト。聞きたいことがあるんだが、良いか？」

「えと、うん。良いよ」

「そうか。ならプレシアについて聞きたい」

寂しそうな表情で己を見つめるフェイトに首を傾げながら、鬼柳はフェイトに訊ねた。
訊ねる事柄と言えば、プレシアが何時頃からダークシグナーとなってしまったのかと言うこと。

他にもプレシアがダークシグナーになる様な、なにか執着している様なことがないかフェイトに訊ねる。
するとフェイトも真剣な様子になり、鬼柳の問いかけに静かにだが応えて行った。

プレシアがおかしくなったのは、フェイト達が地球に来る三週間ほど前から。
丁度フェイトと日課のデュエルを終わらせた後から、プレシアの様子が豹変したらしい。

二つ目の疑問については、フェイトにも分からない様だ。彼女とて母親の全てを知っている訳ではない。
フェイトから欲しい情報を聞き出し、鬼柳は顎に手を当てて考える。
分かったことは一つだけあった。

「（フェイトの母親がダークシグナーになったのは、三週間くらい前か）」

それはプレシアがダークシグナーになった時期。その頃からプレシアの性格が変わっていた様だ。
その頃からフェイトはプレシアから度重なる虐待を受けていたらし

い。その様子をアルフが悲しそうに語っていた。

鬼柳は先ほど聞いたアルフの話を思い出し、自身が体験したことと照らし合わせ、疑問を覚えた。
それは現在のプレシアの状況。どうも、プレシアと自分の状況が違い過ぎる様な気がするのだ。

鬼柳がダークシグナーになった際、自我を封じられると言う事態に陥ったことは一度もない。
逆に当時鬼柳が滾らせていた残虐性が増幅され、普段では考えられないほど残酷な性格になっていた。

この様に、ダークシグナーとなった者はその際に抱いていた感情を増幅される傾向にある。
ならば何故、鬼柳が時の庭園でプレシアと再会した際。感情を増幅したプレシアではなく地縛神が現れたのか。

「あ、でも。一回だけ、母さんが元に戻ったんだよ」

「……なに？」

「そのときに大切に持っておきなさいって、
≪スターダスト・ドラゴン≫のカードをくれたんだ」

フェイトの話を聞き終えて鬼柳が頭を捻っていると、何かを思い出したかのようにフェイトが口を開く。
その内容とは、プレシアが一度だけ元に戻ったことがあるらしい。
思わず鬼柳の眉間の皺が深くなる。

何故プレシアはダークシグナーとなってから虐待していたフェイトにカードを。
それも、かなり貴重であるはずの「スターダスト・ドラゴン」のカードを渡したのか。

考えれば考えるほど、謎は深まるばかりだ。
プレシアは一体、どの様な思惑があってダークシグナーとなったのか。

考えても考えても、答えは出ない。
と、そんなとき――

「ぐぅ～」

「あ」

「……腹が減ったのか？」

「うぅ……」

室内に鬼柳のものではない。お腹の鳴る音が聞こえた。
視線をこの部屋に居る唯一の人物に向ければ、フェイトは頬を赤く染めている。

どうやらお腹が鳴ったことを恥ずかしがっているのだろう。鬼柳は僅かに口元を緩める。
そしてはやてに何か作ってもらってくるとフェイトに告げると、静

かに室内から退室した。

「……母さん」

鬼柳が退室した後、フェイトは一しきり頬を赤く染めて布団の上で悶えていた。
家族以外の誰か――それも、異性にお腹の音を聞かれたのだ。恥ずかしくもあろう。

そして一しきり布団の上で身悶えると、フェイトは腰に下げてある自分のデッキホルダーを取り出す。
中から取り出すのは、以前に一度だけ優しい母親に戻った際に手渡された「スターダスト・ドラゴン」のカード。

そのカードは母親が最も大切にしていたカードで、フェイトですら滅多に触れさせては貰えなかった。
しかし、彼女の母親はその大切なカードであるはずの「スターダスト・ドラゴン」をフェイトに渡した。

これは一体どういうことなのだろう。
内心で首を傾げながら、フェイトは「スターダスト・ドラゴン」のカードを見つめる。

――コンコン

「うん？」

「フェイトちゃん？
わたしだよ、なのは。入っても良い？」

「えと……。うん、良いよ」

少しの間、フェイトが「スターダスト・ドラゴン」のカードを見つめていると。
不意にフェイトの寝ている部屋の扉がノックされた。カードから視線を上げ、扉を見つめる。

そして扉の向こうから聞こえたのは、鬼柳よりも少し前に名前を交換し合った少女の声だった。
フェイトは少し迷った素振りを見せたが、すぐになのはを室内に入れることを了承。返事を返す。

するとガチャリと部屋の扉が開き、オレンジ色の私服に身を包んだなのはの姿が現れた。
彼女は「失礼しま～す」と小さな声で呟きながら、トコトコとフェイトの眠る布団の隣まで歩み寄る。

「フェイトちゃん、身体の方はもう良いの？」

「うん。さっき思い切り泣いたら、少しだけスッキリしたよ」

「……そっか」

なのははフェイトの顔を覗き込みながら、疑問に思っていたことを

彼女に訊ねる。
最後になのはが見たフェイトは、まるで恐怖に怯える幼子の様な姿だった。

心配するなと言う方が無理な話だろう。なのはの問いに、フェイトはコクリと頷く。
その際に鬼柳に抱き締められていたことを思い出し、頬を薄っすらと赤く染めてはいたが……。

だが、泣いてスッキリしたと言うのは本当なのだ。当時は混乱していて何が何だか分からなかった。
けれど、鬼柳の胸で泣いて心の整理が出来た。母親にあんなことを言われてとても悲しい。

しかし、アレが母親の本心だとは思いたくなかった。
今まで楽しく遊んだ日々を思い出し、フェイトはそう思う。

「そやそや。泣いてスッキリしたらお腹も空くしな。
たんと食べて元気にしぃ」

「あ、はやてちゃん」

「えぇと……誰？」

と、フェイトの答えになのはが神妙な表情を浮かべていると、再び部屋の扉が開いた。
今度はノックなどで事前に知らされていなかったので、フェイトとなのははビクリと身体を震わせる。

しかし、聞こえた声に聞き覚えがあるのか。なのはは安堵したように扉を開けた人物を見やった。
そこには車いすに乗ったなのはやフェイトと同年代の少女の姿。後ろには土鍋を持った鬼柳の姿もある。

フェイトは少女の姿に見覚えが無いのか。申し訳なさそうにしながらも少女に名前を訊ねた。
すると少女はニカッと気持ちの良い笑みを浮かべながら「わたしの名前は八神　はやてや！　よろしくな」と自己紹介。

車いすに乗っていることから障害者なのだろうが、ソレを感じさせないほどの元気を持っていた。
はやては慣れた動作で車いすを動かし、なのはの隣に車いすを付ける。鬼柳もその隣に腰を下ろした。

「わたしの手料理は絶品や！　沢山食べてな？」

「えと、いただきます……」

鬼柳が腰を下ろすと、彼は持っていた土鍋を脇に置く。中からは美味しそうな匂いが漂っていた。
するともう一度フェイトのお腹が「ぐぅ」と鳴り、フェイトは恥ずかしさから頬を赤らめる。

はやてはそんなフェイトの様子にうんうんと頷くと、土鍋の中身をよそってフェイトに手渡した。
手渡された茶碗の中には、ホカホカと湯気を立てている雑炊の姿。

小さく「いただきます」と告げると、フェイトは雑炊に口を付ける。

「……美味しい」

「よっしゃー！　その一言でわたしは大満足や！
久しぶりやなぁ……この満足感」

「え、えと。はやてちゃん？」

「わたしは……満足に飢えていたんや！」

パクリと口の中に雑炊を放り込めば、暖かながらも優しい味わいが口の中に広がった。
誰かの手料理を食べるのが久しいフェイトのポツリと漏らした一言に、はやてがガッツポーズをとる。

徐々にテンションの上がって行くはやてになのはが声をかけるが、フェイトはそんなことを気にしていない。
雑炊を口に運ぶスピードが徐々に上がり、お腹が膨れて行く様子が感じ取れる。そしていつの間にか、茶碗の中は空になっていた。

もう一杯だけお代わりしようかな。そう考えながら、フェイトは視線を鬼柳へと向ける。
だが、フェイトの視線は鬼柳へと向けられる前に未だどんちゃん騒ぎをしているなのはとはやてへと向けられた。

「今のわたしは、阿修羅すらも凌駕する満足感を得ているんや！」

「何処のガン○ムなの！？
はやてちゃん、ちょっと落ち着いて！」

「満足ぅううううっ！
アンタが好きやぁあああああッ！　満足が欲しいいいいいッ！」

「は、はやてちゃぁあああああんッッ！！」

フェイトの視線の先では、なにか妙なことになっているなのはとはやての姿がある。
二人ともフェイトや鬼柳が居る事を忘れているのか。二人で漫才をしている。

しばしぼんやりとその様子を見つめていたフェイトだが、ふと僅かに自分が笑っているのに気がついた。
僅かながら、口元が緩んでいる。一体どうしてだろう。フェイトは内心で首を傾げるが、すぐにその疑問は消えた。

こうやって誰かと一緒に、笑いながら食事をとることが久しぶりだったからだ。
以前までは母親と使い魔と一緒に食事を取っていたのだが、今では使い魔と二人きり。

心のどこかで寂しがっていたのかもしれない。人肌が恋しくなっていたのだろう。
フェイトがぼんやりとなのはとはやての様子を見つめていると、ぽんと彼女の頭に手が乗せられる。

誰かはもう分かっていた。頭から伝わる温もりに僅かに笑みを浮かべながら、フェイトはソッと瞼を閉じる。
願わくば、この団欒の中に母親がいることを願って。

※

「うん、元気になったみたいやな」

「えと。ご馳走様でした」

「うんうん。少し残したのには目を瞑ろか」

「あぅ」

なのはとはやてのドンチャン騒ぎがようやく終わり、部屋にほのぼのとした空気が満ちる。
先ほどまで激しく動いていたせいか、はやてとなのはは「はぁはぁ」と肩で呼吸をしていた。

そんな二人の様子に鬼柳が呆れた様な視線を向けていると、呼吸を整えたはやてがフェイトに声をかける。

するとフェイトはペコリと頭を下げた。彼女の手には、空になった茶碗が握られている。

どうやら存分に食べた様で、食事の後半からはなのはとフェイトの漫才を鬼柳と共に見つめていた。

だが、土鍋には少量だが雑炊が残っている。しかしはやては食事を残したことを言及することはしなかった。

「それでな、鬼柳兄ちゃん。
ちょい聞きたいことがあるんやけど」

「？　なんだ？」

「鬼柳兄ちゃん達は、どうやってわたしの家に来たん？
扉には鍵が掛かっとったはずなんやけど」

「あぁ、ソレか」

はやての言葉にしょんぼりしているフェイトを一瞥し、鬼柳は視線をはやてへと向ける。

そしてはやてから訊ねられたのは、ほぼ密室と言っても良い八神家のリビングに、彼らがどうやって現れたのか。

そう言えば有耶無耶になったまま、はやてに説明などしていなかった。

鬼柳はチラリとはやての隣に腰掛けるなのはへと視線を向ける。彼女はコクリと頷いた。

「実はな。魔法を使ったんだ」

「まほー？　手品やなくて？」

「いぃや。正真正銘の魔法だ。その証拠に……なのは」

「うん。レンちゃん、出て来て～」

はやての疑問に答えるため、鬼柳はどうやってこの場に現れたのか説明する。

その様子をフェイトが信じられないと言った表情で見ていたが、鬼柳となのははスルーした。

だが、さすがにいきなり魔法の存在をはやてに知らせるのは難しい。

鬼柳は視線をなのはへと向ける。

すると彼女は首元に下げていた赤い宝石――レイジングハートを起動させ、腕にデュエルディスクを装着する。

その後、なのははデッキから五枚のカードを抜きだし、丁度その五枚の中にあったのだろう。

彼女のお気に入りのモンスターである「サイレント・マジシャンＬｖ８」を、その場に召喚する。

「なんや。鬼柳兄ちゃんのデュエルディスクでも借りとるんか？」

『いいえ。はやてさん、わたしはソリッドビジョンなどではありませんよ』

「んなアホな。まさか触れられる言うんやないやろな」

『……えい』

「ッ！？」

すると光の粒子と共に、その場に白いローブの様な衣服に身を包んだ女性が現れる。

その場に召喚されたサイレント・マジシャンはなのはの隣に腰を下ろすと、行儀よく頭を下げた。

ソリッドビジョンの物ならば、モンスターが正座をするということは出来ない。

ある種珍しい光景を眺めながらも、はやては鬼柳やなのはの言葉をイマイチ信用し様としなかった。

それに業を煮やしたのか。なのはの傍らに正座をしているサイレント・マジシャンが動く。

彼女はソッと人差し指を突き出すと、はやての柔らかそうなその頬に自身の人差し指で突っついた。

「……」

『……』

「……ほんまに？

ほ、ほんまに魔法なん……！？」

『えぇ、そうですよ』

ぷにっとはやての頬にサイレント・マジシャンの指が触れる。ソリッドビジョンではない、生の感覚。

はやてもそれが信じられなかったのか。表情を変えぬまま、数秒ほど部屋に変な沈黙が流れる。

そしてそれを打ち破り、はやてが問い質す様にサイレント・マジシャンに訊ねる。彼女はコクリと頷いた。

次いで、バッと顔を鬼柳やなのはに向ける。二人もサイレント・マジシャンと同様にコクリと首を縦に振った。

『はやてさんを抱き抱えたまま、宙に浮く事も出来ます』

「ぎゃぁあああっ！　怖い怖い！　ごっつ怖い！」

『スカイダイビングも可能です』

「あかんあかん！　紐無しバンジーほど怖いもんはあらへん！」

『へそくりも消せます』

「ぎゃぁあああっ！　わたしのへそくりがぁあああっ！」

『ただ、はやてさんの胸は大きく出来ません』

「そんなー！　そんなー！」

そして始まるのは、サイレント・マジシャンとはやてによる即興の漫才の様なもの。
サイレント・マジシャンがはやてを抱き抱えて空を飛べば、はやては彼女に抱き付いて悲鳴を上げる。

その後も続くはやてとサイレント・マジシャンの漫才の様子に、なのはは彼女はこんな性格だったのかとショックを受けた。
てっきり礼儀正しい性格なのかと思っていたが、なかなか愉快な性格の様だ。暇を持て余したら彼女と遊ぶのも良いかもしれない。

そしてチラ、と視線を隣に座る鬼柳へと向ければ、彼は何処からか取り出したリンゴを慣れた手つきで剥いていた。
剥いたリンゴの形を整え、ソレをフェイトに手渡す。フェイトは受け取ったリンゴに僅かに頬を緩めながら、パクリと齧りついた。

「はぁ、はぁ……。と、取り合えずレンちゃんやったか。
彼女が実体化しとるのは理解した」

「あ、あはは。はやてちゃん、お疲れ様」

「ところで、どうやって彼女は実体化しとるん？
それと、なんでなのはちゃんが魔法を使えるようになったんや？」

「えと。それはね――」

仲の良さそうな鬼柳とフェイトの様子にモヤモヤしたものを覚えて

いると、息を乱れさせているはやての声が聞こえた。
視線をそちらへと向ければ、ようやくサイレント・マジシャンとの漫才が終了したのだろう。はやてが疲れた表情をしている。

まさか関西人にも負けないツッコミの才能を持っているはやてをここまで疲れさせることが出来るとは。
もしかしたら、自分の二番目のエースはなかなか大物なのかもしれないな。なのはは内心でそう思う。

そしてはやてはサイレント・マジシャンの手や肩の感触を確かめながら、どうして彼女が実体化しているのかなどを訊ねた。
なのははそれに答えるため、ユーノと出会った時のことを語り始める。思い出せば、アレから様々なことがあった。

魔法と言う名の非日常。鬼柳と共に窮地を脱したライディング・デュエル。ジュエルシードと呼ばれる危険なもの。
最初出会ったときは敵だったが、今ではこうして一緒に過ごしているフェイトとの出会い。思い起こせばなかなか濃密な日々だった。

「ほぇえ……。なんや、すごいことになっとるなぁ」

「あはは。そうだね。とっても凄いことになってたんだ」

なのはの話を聞き終え、はやてが感心した様な声を上げた。
だが、それも仕方のないことかもしれない。ただの少女が魔法少女になってしまったのだから。

しかし、当の魔法少女も腕にデュエルディスクを着けてカードバト

ルをしているのだから締まらない話だ。
世の魔法少女好きが見たり聞いたりしたら、大声で泣いて悔みそうな現実である。

「ねぇ、鬼柳。魔法のことペラペラ喋ってるみたいだけど、良いの？」

「あぁ。はやてにも後で教えておこうと思ってたからな。構わねぇ」

「ふぅん。あ、リンゴもう一個ちょうだい？」

「……ほら」

一方。なのはとはやての話を脇で聞いていたフェイトは、視線を鬼柳へと向けて訊ねた。
基本的に、魔法知識がない世界では魔法のことは秘匿すると言う暗黙のルールがある。

この世界――第９７管理外世界はフェイトの知識によれば、魔法と言うものが存在していないはず。
なのに、その世界の住人に魔法のことを教えても構わないのだろうか。内心で疑問に思いながら鬼柳に訊ねる。

すると鬼柳はフェイトと同じように二人に視線を向けながら、「教えるつもりだった」と言葉にした。
どうやらはやてには隠すことをしないらしい。はたしてどんな基準で教えたり教えなかったりしているのだろう。

フェイトは疑問に思うのだが、訊ねようとはしない。
モグモグとリンゴを咀嚼すると、新たなリンゴを鬼柳にねだる。

「よっしゃ！
ならわたしもフェイトちゃんのお母さんを助けるために協力するで！」

「ふぇ？」

「フェイトちゃん、絶対にお母さん助けような！」

と、鬼柳から新たなリンゴを受け取ると、フェイトは再びモグモグとリンゴに齧りつく。
その様子はまるでヒマワリの種に齧りつくハムスターの様で、僅かに鬼柳が優しい目でそれを見ていた。

そしてモグモグゴクンと咀嚼したリンゴを飲み込むと同時、はやてが元気な声でフェイトに声をかけた。
思わぬはやての大声と、思わぬ言葉の内容にフェイトはポカンとした表情を浮かべる。訳がまったく分からない。

「……はやて。ダークシグナーになったヤツは、その……」

「うん。ダークシグナーになった人の末路はしっとる。
でも、まだ「魔法」と言う奥の手があるやんか！　道はまだ残っとる！」

「！　それは……」

「そりゃ、たしかに鬼柳さんの言うことも分かる。
そやけど、わたしは努力もせんと諦めてまうのは嫌いや」

「……そう、だな」

鬼柳はポカンとしているフェイトを脇に、はやての耳元に顔を寄せる。
一応、フェイトには聞こえないようにし様とする鬼柳なりの気遣いなのだろう。

はやては突如鬼柳の顔が自分のすぐ傍に来て頬を赤く染めたが、すぐに訳を説明する。
ダークシグナーになった人物の末路は知った。けれど、それは鬼柳が魔法を使わなかったから。

だが、この世界にはどう言う訳か、別の世界から流れ込んだ魔法と言う存在がある。
もしかしたら、魔法の力を使ったらフェイトの母親を助けることが出来るのではなかろうか。

はやてはそう考えたのだ。救う方法が無いのなら、他の方法を考える。
鬼柳もはやての言うことを理解したのか。ハッと目を見開いて驚いていた。

「え、あの……。でも、良いの？」

「？　なにがや？」

「だって……。はやてはその、関係ないんだよ？」

「なに言うてるん。関係大アリや」

「……え？」

「もうわたしたちは、同じ釜の飯を食べた仲間なんやで？
仲間のピンチはチームで助ける。それがチームサティスファクションの掟やろ？」

鬼柳ははやての言うとおりだと判断したのか。静かにはやての顔から離れた。
そして次にはやてに声をかけたのは先ほどまで彼らのやり取りを眺めていたフェイト。

彼女は恐る恐ると言う表情で、はやてが関わることを拒絶している。
だが、それにはやてが待ったをかけた。理由は簡単。友達が、仲間がピンチになっている。

ならばそれを助けるのがチームの役目。
鬼柳に以前話してもらったチームサティスファクションのことを思い出す。

「チームサティスファクションは結成してないぞ……」

「ええやん。こない可愛い女の子がチームに入るんやで？
お得やと思うんやけど」

「……まったく」

フェイトがはやての言葉にポカンとしていると、鬼柳が呆れた様な視線をはやてに向けた。
チームサティスファクションは、もう大分前に解散してしまった。
鬼柳が犯した罪によりもう二度とチームは組めないだろう。

しかしはやてはその事を知らない。なのではやては何の気後れする事もなく、鬼柳にチームを作ろうと言葉をかける。
それに鬼柳は嘆息一つ。仕方が無いなと言わんばかりの表情で、はやてを見つめた。

「ほいでフェイトちゃん。
フェイトちゃんはどうする？」

「……え？」

「フェイトちゃんが望むなら、わたしは協力を惜しまないで！」

「わ、わたしも！」

「あぁ」

「はやて、なのは、鬼柳……」

はやては鬼柳に向けてコクリと頷くと、布団の上で茫然としているフェイトに声をかける。
未だ僅かな時間しか触れ合っていないが、フェイトやアルフがどれだけ母親を大切にしているのか理解した。

そんなフェイトやアルフの大切な母親を助けたい。それに何よりも放っておけない。
こんな不満足そうな表情をしたフェイトを、はやてやなのは。それに鬼柳は放っておけなかった。

はやての言葉になのはも頷き、鬼柳もコクリと首を縦に振る。求められれば、協力を惜しまない。
フェイトはその言葉に僅かに目を見開き、チラチラと視線を傍らの鬼柳へと向けた。彼はコクリと頷く。

そして彼女はゆっくりと。だが、静かにコクリと頷いた。

第十三話　「協力」（後書き）

今回は若干ほのぼのしてました。
次回ははやてとフェイトのデュエル。

それが終われば vs 地縛神編。
今から書くのが楽しみです。

第十四話　「黒き旋風」（前書き）

題名で分かる通り、某黒羽の登場です。
使用者は例のあの人……。

第十四話　「黒き旋風」

～海鳴市　八神家～

「うっふふふ。楽しみやなぁ」

「え、えと……」

「にゃはは。フェイトちゃん、頑張れ～」

シャッシャッを小気味いい音を響かせ、はやては自身のデッキをシャッフルした。
そのデッキは彼女が数日前から改造を施していた愛用のデッキ。

彼女の視線の先には戸惑った様子のフェイトがおり、腕には黒いデュエルディスクを付けている。
ソレと言うのも、今日はフェイトと友好を深めるためにはやてがフェイトにデュエルを申し込んだのだ。

フェイトのために協力するとは言え、まだフェイトのことを詳しく知らないはやてである。
ならばデュエルを通じてフェイトのことがもっと分かるかもしれない。そう思い、デュエルを申し込んだ。

「それにしても。こんなにのんびりしてて良いのかい？」

「仕方ないさ。ユーノに調べてもらってはいるが、な……」

「あぁ……」

はやてが一方的にフェイトへ戦意を向けている隣で、鬼柳とアルフがソファに腰掛けていた。

話題は現在ノンビリしていて良いのか、と言う至極当然な物。だが、まだプレシアを助けられると言う確証が無い。

果たして魔法でダークシグナーとなったプレシアを救うことが出来るのか。それをユーノに調べてもらっているのだ。

なんだか当初の目的――ジュエルシード回収――から大分離れてしまった様だが、こちらも放っておけば世界が危ない。

結果として、ユーノはアルフと共同でジュエルシードの探査。並びにダークシグナーについての調査を行っている。

本来はなのはやフェイトもジュエルシードを探すのに同行させたかったが、アルフからは彼女たちと一緒にいさせてくれと言われていた。

「（ま、なんたって初めての友達だしね）」

フェイトにとって、鬼柳やなのは。それにはやては初めての友人である。

今まで時の庭園から碌に出ることの無かったフェイトに友人はおらず、アルフは密かに心配していた。

だが、この地で初めての友達が出来たのだ。暫しの間だけジュエルシードのことを忘れ、友好を深めて欲しい。
アルフは心の中で嬉しそうな笑みを浮かべると、背中をソファの背もたれに預けながら視線をフェイトとはやてに向ける。

「さて。それじゃ――」

「え、えと」

「「――デュエル！」」

そして鬼柳とアルフの見守る視線の先で、二人の少女によるデュエルは始まった。
先攻を取ったのはフェイト。伊達に母親やもう一人の使い魔からデュエルの手解きを受けていないと言うことか。

「わたしの先攻。ドロー。手札から≪増援≫を発動。
デッキからレベル４の戦士族モンスター一体を手札に加える」

増援
通常魔法
自分のデッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加える。

「わたしは効果で≪ジャンク・シンクロン≫を手札に加える。
そしてモンスターをセット。カードを二枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドローや！」

フェイトはモンスターを一枚セットし、カードを一枚伏せてターンを終了する。
先攻では大量展開を得意としていないデッキでは、基本的に壁モンスターをセットする。

それはどうやらフェイトも例外ではない様で、まずは相手のデッキタイプを特定する様だ。
フェイトがキッと視線をはやてに向ければ、彼女は腕のデッキホルダーからカードを一枚ドローする。

「わたしは手札から≪おろかな埋葬≫を発動するで。
デッキから≪ＢＦ－大旆のヴァーユ≫を墓地に送って魔法カード≪黒い旋風≫を発動や」

「ッ！　ブラックフェザー！」

「お、分かるんか？　ならこれからの展開も分かるやろ？」

おろかな埋葬
通常魔法
自分のデッキからモンスター１体を選択して墓地へ送る。

ＢＦ－大旆のヴァーユ
チューナー（効果モンスター）
星１／闇属性／鳥獣族／攻　８００／守　　０

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカードをシンクロ素材とする事はできない。
このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の
「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、
そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついた
シンクロモンスター１体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

黒い旋風
永続魔法
自分フィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが召喚された時、
自分のデッキからそのモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ
「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

「わたしは≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫を召喚！
≪黒い旋風≫の効果でデッキから≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を手札に加えるで！」

「旋風ＢＦ……ッ！　大分、不味いかもしれない……」

「そして手札に加えた≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を特殊召喚！
バトルや！　≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫でセットモンスターに攻撃！」

はやてが召喚したモンスターは、ブラックフェザーと呼ばれるカー

ド群のカード。
このブラックフェザーとは展開力に優れたデッキで、鬼柳のインフェルニティと同等。否、それ以上の展開力を持っている。
なにせはやてがモンスターを召喚したと言うのに、手札が減った様子は無い。
これがブラックフェザーの恐ろしいところで、絶えず手札にモンスターが存在する場合もある。

「セットモンスターは≪ボルト・ヘッジホッグ≫……ッ！」

「相手モンスターを破壊した時、≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫の効果発動！
デッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター一体を特殊召喚する！
来るんや！　≪ＢＦ－月影のカルート≫！」

ＢＦ－蒼炎のシュラ
星４／闇属性／鳥獣族／攻１８００／守１２００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから攻撃力１５００以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。

ＢＦ－疾風のゲイル
チューナー（効果モンスター）
星３／闇属性／鳥獣族／攻１３００／守　４００

自分フィールド上に「ＢＦ－疾風のゲイル」以外の
「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、相手モンスター１体の攻撃力・守備力を半分にする事ができる。

ＢＦ－月影のカルート
星３／闇属性／鳥獣族／攻１４００／守１０００
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが
戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、
そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

「バトルフェイズ中の特殊召喚やから、まだバトル出来る！
≪ＢＦ－月影のカルート≫と≪ＢＦ－疾風のゲイル≫でダイレクトアタックや！」

「くぅううぅっ！」

フェイトＬＰ４０００→１４００－１３００＝１３００

フェイトの場のモンスターを破壊し、はやての猛攻が始まる。
「ＢＦ－蒼炎のシュラ」の効果により特殊召喚された「ＢＦ－月影のカルート」と「ＢＦ－疾風のゲイル」で攻撃する。

フェイトは向かってくる二体のモンスターから視線を外し、自身の

場に伏せてあるカードに視線を向ける。
だが、伏せカードは現在使うことの出来ないカード。シンクロモンスターが居ない今、使用条件を満たすことは出来ない。

「さらにメインフェイズ2に移行！
レベル3≪ＢＦ－月影のカルート≫にレベル3≪ＢＦ－疾風のゲイル≫をチューニング！」

「ッ！　更にシンクロ召喚！？」

「漆黒の力！　大いなる翼に宿りて、神風を巻きおこすんや！
シンクロ召喚！　吹きすさべ、≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫！」

ＢＦ－アームズ・ウィング
シンクロ・効果モンスター
星6／闇属性／鳥獣族／攻２３００／守１０００
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

フェイトへ多大なダメージを与えると、はやては更に場のモンスターを強化する。
その余りの展開力に観戦していたなのはが驚きの声を上げた。それはアルフも同様である。

まさか1ターン目からＬＰを大分削り、シンクロモンスター一体とレベル４モンスター一体が場に並ぶとは。
世界は広いと言う事だろうか。アルフは唸る様な目つきで、フェイトとはやてのデュエルを見守る。

「これでわたしのターンは終了や」

「……わたしのターン、ドロー」

「（……大分、苦しい様だな）」

フェイトが苦い表情でデッキからドローするのを、鬼柳は静かに見守っていた。
何故ならば、鬼柳もはやてのデッキの展開力はイヤと言うほど知っている。

こちらの世界に来る前には以前の仲間――クロウが使っていたカードだからだ。
以前の自分は対抗するのが難しかったが、今の「インフェルニティ」ならばどうにかなる。

しかし、フェイトがはやてのカードに対抗できるかは分からない。
だが勝機があるとするならば、まだはやてが完全に「ＢＦ」を使いきれていないところか。

「わたしは手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！

効果で墓地から≪ボルト・ヘッジホッグ≫を蘇生。そしてチューニング！」

「来るんか、フェイトちゃんのシンクロモンスターが……」

「集いし星が新たな力を呼び起こす。光さす道となれ！
シンクロ召喚！　お願い、≪ジャンク・ウォリアー≫！」

フェイトの場に、全身から光の粒子を撒き散らしながら一人の戦士が現れる。
白いマフラーを靡かせ、フェイトの背後に控える様に降り立ったのは「ジャンク・ウォリアー」。

上級モンスターの召喚に成功したフェイトだが、今の状態では「アームズ・ウィング」と引き分けるだけ。
一体どうするのか。鬼柳やアルフ。なのはが見守る中、フェイトは手札から一枚の装備魔法カードを発動する。

「さらに手札から≪ファイティング・スピリッツ≫を発動！
このカードを≪ジャンク・ウォリアー≫に装備する！」

ファイティング・スピリッツ
装備魔法
装備モンスターの攻撃力は相手フィールド上に存在するモンスター1体につき３００ポイントアップする。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、代わりにこのカードを破壊する事ができる。

ジャンク・ウォリアーＡＴＫ２３００→２９００

「アームズ・ウィングの攻撃力を上回ったやと！？」

「バトル！　≪ジャンク・ウォリアー≫で≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫に攻撃！
スクラップ・フィストォッ！」

「くぅっ！」

はやてＬＰ４０００→３４００

装備魔法カードの効果により、攻撃力が上昇したジャンク・ウォリアーがはやてのカードを破壊する。
ダメージ量こそ大したものではないが、せっかく召喚したシンクロモンスターを破壊されてしまうとは。

だが、手札には失ったアドバンテージを回復させるカードがある。
このカードを使い、フェイトとのデュエルを勝利で終わる。はやては内心でそう決める。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

「わたしのターン、ドローや！」

そしてはやてが呼吸を整えて視線を前方に向けると、カードを伏せ

たフェイトの姿が。
あの伏せカードは一体何なのか。攻撃宣言時に起動する罠カードか。
それとも速攻魔法か。

イマイチフェイトのデッキタイプが特定できず、はやては僅かに眉を顰める。
だが、どんな伏せカードがあろうが自分の操るモンスターで攻撃を通せば良いだけのこと。

「わたしは手札から≪ＢＦ－極北のブリザード≫を召喚！
≪ＢＦ－極北のブリザード≫の効果で墓地からレベル４以下の「ＢＦ」一体を表側守備表示で特殊召喚や！」

「くっ！　これで相手の場のモンスターは三体……っ！」

「レベル４≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫にレベル２≪ＢＦ－極北のブリザード≫をチューニング！
シンクロ召喚！　二体目の≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫を召喚や！」

「そんな……ッ！」

ＢＦ－極北のブリザード
チューナー（効果モンスター）
星２／闇属性／鳥獣族／攻１３００／守　０
このカードは特殊召喚できない。
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「ＢＦ」と名の付いたモンスター１体を

表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「まだわたしのメインフェイズは終了してないで！
墓地の≪ＢＦ－大旆のヴァーユ≫と≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫を除外！」

「墓地シンクロ……！」

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となるんや！
シンクロ召喚！　≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫！」

ＢＦ－アーマード・ウィング
シンクロ・効果モンスター
星７／闇属性／鳥獣族／攻２５００／守１５００
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、
このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードが攻撃したモンスターに
楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。
相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、
楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力を
このターンのエンドフェイズ時まで０にする。

はやての場に新たにシンクロ召喚されたのは、黒い甲冑に身を包んだ翼人の姿。
１ターンで二体も。しかも場の損失がまったくないシンクロ召喚に、

フェイトは苦い顔を浮かべる。

一刻も早く場の「黒い旋風」を破壊しなければならないのに、「サイクロン」が手札に来ない。

ならば一刻も早く自身のエースである「スターダスト・ドラゴン」をシンクロ召喚しなければならない。

「≪ＢＦ－大旆のヴァーユ≫の効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効になる……。やけど！

手札から速攻魔法≪サイクロン≫を発動！　フェイトちゃんの≪ファイティング・スピリッツ≫を破壊！」

「くっ……！」

「バトルや！

≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫で≪ジャンク・ウォリアー≫に攻撃！　ブラック・ハリケーン！」

「伏せカードオープン！　≪シンクロ・ストライク≫！

このカードの効果により、≪ジャンク・ウォリアー≫の攻撃力はシンクロ素材となったモンスターの数×５００ポイントアップする！」

「なっ！？」

ジャンク・ウォリアーＡＴＫ２３００→３３００

「≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫を破壊！」

「くぅっ！」

はやてＬＰ３４００→２６００

自身に迫りくるアーマード・ウィングを見据えながらフェイトは伏せカードを使う。

それは序盤から場に伏せてあった罠カード。攻撃力の低いモンスターを扱うフェイトにとって必要なカード。

その罠カードの効果により、攻撃力が上昇したジャンク・ウォリアーがアーマード・ウィングを破壊する。

予想だにしない伏せカードにより、はやてはギョッと目を見開いた。

だが、はやてはすぐに口元に笑みを浮かべる。

「（くぅううっ！　楽しい……楽しいで！）」

誰かとこうして全力でデュエルが出来ること。はやてはそれが楽しくて仕方が無い。

今まではこの広い家の中で独りぼっちで、する事と言えば読書や掃除などの家事くらい。

当初こそ四苦八苦しながら生活していたはやてだが、何年もしていれば流石に飽きてくる。

暇を持て余し、適当にテレビのコマーシャルを見ていたはやての目に留まったのが、デュエルモンスターズだ。

このデュエルモンスターズは海鳴市。ひいては日本全国で社会現象

となるほど流行しているカードゲーム。
はやては何ともなしにカードを買ってデッキを組んでみたのだが、これが意外と面白い。今ではすっかり夢中になっている。

見ず知らずの他人とデュエルするのが楽しい。デッキに入れるカードによって戦術がまったく変わるのが面白い。
デュエルモンスターズをする様になってから、はやての心の内に溜まっていた心の空虚さは満たされていた。

「わたしはカードを一枚伏せる！　ターンエンドや」

「わたしのターン、ドロー！　手札から≪戦士の生還≫を発動！
墓地から≪ジャンク・シンクロン≫を手札に加えるよ！」

「チューナー……。レベル８のシンクロ、か……」

「≪ジャンク・シンクロン≫を召喚。
効果は発動しないで、レベル５≪ジャンク・ウォリアー≫にチューニング！」

はやてが伏せカード（ゴッドバードアタック）を伏せてターンを終える。
ブラックフェザーデッキを使っているなら、少なくとも一枚はデッキに入っているカード。

その効果は凶悪で、相手のカードを二枚破壊すると言う効果を持っている。
なかなかドロー出来なかったが、今回は運よく手札に舞い込んだ様

だ。はやては勝ちを確信する。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！　シンクロ召喚！
　天駆ける翼となれ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「ッ！　これが……フェイトちゃんがお母さんから貰ったカード……ッ！」

はやてが内心でほくそ笑んでいると、リビングに新たなモンスターがシンクロ召喚される。
現れたのは星屑を身体の周囲に撒き散らしながら飛翔している一体のドラゴン。その様は神々しい。

はやては召喚されたスターダスト・ドラゴンに一瞬見惚れるが、口元に笑みを浮かべる。
このドラゴンが、フェイトと彼女の母親を繋ぐ絆のカードか。なんとも気高き姿である。

「さらに伏せカードオープン！　≪シンクロ・スピリッツ≫！
　効果で墓地の≪ジャンク・ウォリアー≫を除外。そしてシンクロ素材となったモンスターを場に特殊召喚する！」

「ッ！　≪ジャンク・シンクロン≫と≪ボルト・ヘッジホッグ≫！？」

「再び現れよ、≪ジャンク・ウォリアー≫！」

シンクロ・スピリッツ
通常罠
自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体をゲームから除外して発動する。
このモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組を自分の墓地から特殊召喚する。

「バトル！　≪スターダスト・ドラゴン≫で≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫に攻撃！
響け、シューティング・ソニック！」

「伏せカードオープン！　≪ゴッドバードアタック≫や！
場の鳥獣族モンスター一体をリリースし、相手のカードを二枚破壊するで！
わたしは場の≪ＢＦ－月影のカルート≫をリリース！」

「≪スターダスト・ドラゴン≫の効果発動。
自身をリリースすることで破壊効果を無効にする。ヴィクテム・サンクチュアリ！」

「なんやて！？」

ゴッドバードアタック
通常罠
自分フィールド上に存在する鳥獣族モンスター1体をリリースし、フィールド上に存在するカード2枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

はやてが勝ちを確信したのも束の間。戦況は再び五分五分に引き戻されていた。
スターダスト・ドラゴンの攻撃にチェーンし、伏せカードである「ゴッドバードアタック」を発動する。

目標は当然スターダスト・ドラゴンとジャンク・ウォリアー。はやては内心で笑みを浮かべる。
しかし、はやての目論見は外れてしまった。外れた原因は、場のスターダスト・ドラゴンの特殊効果。

対戦相手の情報は極力得ない様にしていたはやてだったが、それがまさかこんなところで仇になってしまうとは。
なんとかアームズ・ウィングを護ることに成功したが、その代償はカード二枚と言う決して少なくない損害である。

「くっ……！」

「わたしは伏せカードを一枚伏せて、ターンエンド。
さらにエンドフェイズ時、自身の効果でリリースした≪スターダスト・ドラゴン≫は場に特殊召喚される」

「わたしのターン、ドローや」

有利な戦況が一変。不利な状況へと変わってしまった。
内心で焦りながら、はやては自身の手札へと視線を向ける。

「（アドバンテージよりも、破壊優先やろ）」

「手札から≪ダーク・バースト≫を発動！
墓地から闇属性で攻撃力１５００以下のモンスター一体を手札に加える！
わたしは墓地から≪ＢＦ－月影のカルート≫を手札に加えるで！」

「カルート……。不味い！」

「≪ＢＦ－アームズ・ウィング≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！
さらにダメージステップ時に手札から≪ＢＦ－月影のカルート≫を捨てる！
これにより場の「ＢＦ」モンスター一体の攻撃力に１４００ポイント加えることが出来る！」

「スターダスト……ッ！　伏せカードオープン！
≪ガード・ブロック≫！　効果によりわたしへの戦闘ダメージは０になる。さらに一枚ドロー」

ダーク・バースト
常魔法
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の闇属性モンスター1体を手札に加える。

はやては場のアドバンテージを稼ぐか。それとも相手のアドバンテージを奪うか。
それを一瞬で思考する。そして選んだのは後者。墓地からとある「ＢＦ」モンスターを回収する。

それはモンスターが攻撃。または攻撃されたときに手札から発動できる効果を持ったモンスター。
その効果は凶悪で、上級の「ＢＦ」モンスターに使えば戦闘で負けることはほぼ無いと言う代物である。

このカードによりフェイトのスターダスト・ドラゴンを破壊する事が出来たが、ダメージを与えることは出来なかった。
なかなかに固い防御力を持つ。一筋縄ではいかないか。はやては内心で思考しながらカードを一枚伏せてターンを終了する。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドや」

「わたしのターン。ドロー！　わたしは今引いたカード≪死者蘇生≫を発動！
墓地から≪スターダスト・ドラゴン≫を特殊召喚する！　飛翔せよ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「うわ……ッ！　これは、キッツイな……」

はやてが伏せたカードは≪聖なるバリアー ミラーフォース ー≫と言う罠カード。
デュエルモンスターズではメジャーなカードで、知名度はかなり高い部類である。

通常ならばこのカードを伏せられれば安堵するのだが、今回ばかりはそうもいかない。
なにせ相手は効果破壊に無効に出来るスターダスト・ドラゴンが居

るのだ。安心できるはずがない。

「（そやけど次のターンで逆転したる！）」

「さらに≪ガード・ブロック≫の効果でドローした二枚目の≪ファイティング・スピリッツ≫を
ジャンク・ウォリアーに装備。バトル。≪スターダスト・ドラゴン≫で≪ＢＦ―アームズ・ウィング≫に攻撃！」

「伏せカードオープン！　≪聖なるバリア－ミラーフォース－≫や！　効果で攻撃表示モンスターを全破壊するで！」

聖なるバリア－ミラーフォース－
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「≪スターダスト・ドラゴン≫の効果発動！　ヴィクテム・サンクチュアリ！」

「くっ！　そやけどこれでダメージは抑えられ「更に伏せカードオープン！　≪コズミック・ブラスト≫！」なんやて！？」

「自分の場のドラゴン族・シンクロモンスターが場を離れたときに発動。
　相手プレイヤーにそのシンクロモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「んな、アホな……」

コズミック・ブラスト
通常罠
自分フィールド上のドラゴン族・シンクロモンスター1体がフィールド上を離れた時に発動する事ができる。
そのシンクロモンスター1体の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。このターン、自分はモンスターを特殊召喚できない。

スターダスト・ドラゴンの攻撃にミラーフォースを発動する。
これで少なくとも、スターダスト・ドラゴンによってアームズ・ウィングは破壊されない。

しかし、フェイトははやての予想だにしない罠カードを伏せていた。
それはコズミック・ブラスト。
自身がドラゴン族のシンクロモンスターを使わないからか、まったくデッキに入れていなかったカード。

それがまさか、こんなところで仇になるとは思わなかった。場にスターダスト・ドラゴンの幻影が現れ、はやてにダメージを与える。

はやてLP2600→100

「さらに≪ジャンク・ウォリアー≫で≪BF－アームズ・ウィング≫に攻撃」

「うぁあああ……！　負けてもうたぁ！」

はやてＬＰ１００→０

自身に与えられるダメージに僅かに顔を顰めながらも、はやては内心で満足していた。

心躍る楽しいデュエルが出来たのだ。悔しいとは思うけれど、全力でデュエルが出来て満足している。

そして車いすに乗るはやてに向けて、ジャンク・ウォリアーの拳が叩きこまれた。

※

「いやぁ。フェイトちゃんはやっぱり強いなぁ」

「えぇ！？　そ、そんなことないよ」

「いやいや。そんなことあらへん！　もっと自信持ったらええ！」

フェイトとのデュエルを終え、はやては満足そうな表情でデュエル

ボードを片付けた。
終始圧倒していたのに負けてしまった。これでは鬼柳に勝てることなど出来る筈もない。

もっとデッキを改造してデュエルタクティクスを磨かなければ。はやては新たな気持ちでそう思う。
そしてチラ、と視線をフェイトへと向ければ、彼女は頬を赤く染めてワタワタと慌てていた。

どうやらこうやって誰かに褒められると言うのが珍しいのかもしれない。
彼女のワタワタとしている様子に、はやては心癒される思いだ。

「そやけど、勝利の決め手がお母さんの大事なカード、か。
……フェイトちゃん、やっぱりお母さんが大好きなんやな」

「……うん。母さんがどうしてダークシグナーになったのかは分からないけれど、
わたしの大好きな母さんに違いないから」

「そか……」

そして一通りフェイトをからかい終えると、はやては神妙な面持ちでフェイトに声をかける。
それはフェイトが母親が好きか、と言うこと。今までの会話で好きだと理解しているが、やはり確認したい。

それにフェイトはクスリと笑みを浮かべてそう答えた。その笑顔は

幸せそのもの。
けれど、今の彼女の笑顔は満面の笑顔ではない。母親に拒絶され、心が傷ついている。

その様子が痛々しくて、はやてはそっと視線を逸らした。はやては下唇を噛み締めながら決意する。
絶対にフェイトの母親を助け出そう。そしてフェイトが満面の笑みを浮かべるのを見て、皆で満足するのだ。

はやてはそう決意すると、顔をあげてフェイトとのお喋りを再開した。

※

「ふっ。はやても満足そうに寝てやがる……」

夜も深まった八神家のとある一室。はやての私室に、鬼柳の姿があった。
彼の視線の先には、一つのベッドで寝ている三人の少女の姿がある。
その少女とは言わずもがな。高町　なのはにフェイト・テスタロッ

サ。それに八神　はやてである。
どうやら今日はお泊まり会の様なノリで一緒に寝ているらしい。今度は鬼柳と一緒に寝ると息巻いていた。
幸せそうに眠る三人の寝顔を横目に、鬼柳は自身のデッキに視線を落とす。
果たして自分は、ダークシグナーとなったフェイトの母親を救い出す事が出来るのだろうか。

「……出来るのか、じゃねぇ。やるしかねぇんだ……！」

『くく。お前ならばそう言うと思っていたよ』

「ッ！　お前……ッ！」

否。自分はダークシグナーとなった人たちを助ける。それが自分に出来る贖罪なのだから。
自身の拳を握り、鬼柳は自らにそう言い聞かせる。だが、その言葉は不意に聞こえた声に遮られた。

その声は以前、時の庭園で鬼柳が耳にしたものと同じ声。慌てて鬼柳は声がした方へと視線を向ける。
するとそこには、空間に浮かぶパソコンのモニターの様なものが浮かんでいた。そこに映るのはフェイトの母。

『鬼柳　京介。わたしとデュエルしないか？
デュエルで勝てば、この女は返してやろう』

「……なにが狙いだ」

『狙い？　そんなもの決まっている。
お前をデュエルで打ち負かし、再びダークシグナーとなってもらう』

「ッ！　なんだと……？」

ウィンドウに映るフェイトの母親はニヤニヤと笑みを浮かべながら、鬼柳へと語りかけた。
その内容とはデュエルをしないか、と言うもの。もしも勝てる事が出来たなら、母親を解放すると言う内容。

なんとも好条件なこの内容。あまりに好条件過ぎて、鬼柳としては胡散臭いことこの上ない。
鬼柳がジロリと視線をフェイトの母親へと向ければ、彼女はニヤリと笑みを浮かべながらそう告げた。

『ちなみに貴様に拒否権は無い。
もしも拒否すればこの女……ひいてはこの世界が無くなってしまうのだからな！』

「……地縛神……ッ！」

『始めるのならば早い方が良い。さぁ来るが良い鬼柳　京介！
この世界の命運をかけたデュエルとしゃれこもうじゃないか！』

フェイトの母親――地縛神は意地の悪い笑みを浮かべると、鬼柳に拒否権は無いとそう告げる。
実際、そうなのだろう。もしも鬼柳が拒否したら、フェイトの母親はおろかこの世界の住人の命すら危ういのだ。

しかし、鬼柳にとって不特定多数の人間の命よりも、見知った数人の命の方が大切だ。
この世界に生きるなのはやフェイト。はやてに士郎。桃子、恭也、美由希。彼らを死なせたくない。

そして鬼柳が真剣な眼差しを向けると同時、宙に浮いていたモニターが消え去る。
恐らく鬼柳を誘っているのだろう。面白い。必ずや地縛神を倒してフェイトの母親を救って見せる。

鬼柳はそう決意すると、恐らく眠っているであろう。アルフの使っている寝室へと足を向けた。

第十四話　「黒き旋風」（後書き）

今回は此処で終わりです。
次回からはｖｓ地縛神編に突入。

……たしか原作だとそろそろ管理局と接触してた様な。

第十五話　「明かされた事実」（前書き）

鬼柳＇ｓＶＳ地縛神です。
一応長くなる予定。多分三話くらいで終了。

第十五話　「明かされた事実」

～海鳴市　八神家～

「……よし」

八神家の家の脇にある駐車場に、鬼柳は愛車のDホイールを停車させた。
高町家から八神家に向かうまでの間に、Dホイールの簡単な点検は済ませた。

これならば、時の庭園で急遽闇のデュエルが行われた場合でも逃げることが可能だろう。
Dホイール――ギガントLから腰を下ろし、そろそろ降りてくるであろう女性――アルフの姿を待つ。

アルフが来るまでの時間を使い、彼は自身の愛用するデッキの調整を終える。
もしかしたら、負けてしまうかもしれない。負けるつもりはないが、準備は入念に行う。

そしてふと、八神家の玄関の扉が開いた。ようやく支度が整ったか。
鬼柳は視線を玄関へと向ける。
しかし、そこにいたのはアルフだけではなかった。アルフの他にももう二人。見慣れた少女の姿が見える。

「ふふん。鬼柳兄ちゃん。一人で行こうたって、そうはいかへんで！」

「そうだよ。わたしだって行くよ！」

「！　なのは……それにはやても！」

見慣れた少女――なのはとはやては何時の間に身支度を整えたのか。
普段の私服姿だ。
いや、なのはに至っては鬼柳とお揃いの白いロングコート――バリアジャケットを身に纏っている。

突然の乱入者に鬼柳は一瞬ポカンとした表情を浮かべ、次に鋭い視線を彼女らの隣に立つアルフへと向けた。
アルフは鬼柳の視線を受けると、ビクリと身体を震わせる。そして取り繕う様に笑みを浮かべると、鬼柳に説明した。

「いやね……？　支度してたらこの子たちが起き出してきてさ……。
……多分、アタシ達の会話、聞こえてたかもしれないよ？」

「っ。俺の責任か……」

アルフの説明に、鬼柳は僅かに舌打ちする。
まさかなのはとはやてが起きているとは思いもしなかった。

一応、フェイトはどうしているのかと問えば、彼女は問題なく眠っているらしい。

それにホッと安堵の息を漏らしながら、鬼柳は彼女たちを説得するために視線を向ける。

「なのは、それにはやて。今すぐ家に戻れ」

「いやや。鬼柳兄ちゃんについてくで」

「わたしもだよ」

「――っ！　お前たち！」

鬼柳は灯りが消えた八神家に視線を向けながら、二人に戻る様に告げる。
若干声が低いのは、鬼柳が少なからず動揺しているせいだろう。
だが、二人はそんな鬼柳の声に怯える様子を見せず、真っ向から抵抗する。
その真っ直ぐな視線で見つめられ、鬼柳は居心地の悪さを覚えた。

「これはお前たちの為でもあるんだ。行けばきっと、怖い思いをする」

「いやや。鬼柳兄ちゃんが一人で悪いヤツと闘いに行くのを待っとるだけなんてできへん！
わたしらは仲間や。そんで友達や！　友達が危険なところに行くのを、黙って見送られへん！」

「はやて……」

「それはわたしも同じだよ。それにね、わたしもフェイトちゃんのお母さんを助けたい。
それに魔法の力でフェイトちゃんのお母さんを助けられるかもしれない……。なら、やっぱりわたしは必要でしょ？」

「なのは……」

鬼柳は以前、自らが行った闇のデュエルを思い出し、必死になのはとはやてを説得する。
闇のデュエルとはダークシグナーとなった者が行える特殊なデュエルのこと。

そのデュエルで与えられたダメージは現実のものとなり、ライフが尽きれば死は免れない。
そんな危険な場所に、この二人の少女を連れて行けなかった。なにせ余りにも危険が大きすぎる。

しかしいくら鬼柳が説得しようとも、二人が折れる様子は無い。
逆に意思が固くなっている様に思える。

「……どうしても、行くんだな？」

「当たり前や。わたしの旋風で鬼柳兄ちゃんを守ったるで」

「わたしも。フェイトちゃんのお母さんを助けて、皆で満足しよう」

「……分かった。そこまで言うなら仕方ねぇ」

何度も説得の言葉をかけたが、どうにも二人の決意を折る事は出来なかった。

逆に鬼柳がとうとう折れてしまい、仕方なく二人の同行を認める。

するとなのはとはやてはパァッと笑みを浮かべ、満面の笑みを浮かべながら鬼柳に抱き付いた。

なのはの抱き付きはなんとか受け止められたが、はやての抱き付きは流石に無理だった。足の脛に車いすが当たる。

「フェイトの母さんを助けて……満足しようじゃねぇか！」

「「おー！」」

足の脛から伝わる痛みに眉を顰めながらも、鬼柳はそれを億尾も出さずに二人の背を叩く。

そして二人がようやく落ち着いたところで、鬼柳は決意を新たにそう宣言を発した。

ダークシグナーとなったフェイトの母親を救い出す。無理でも何でもいい。やり通す。

地縛神をこの世に解き放ってはならない。解き放ってしまえば、きっと深い悲しみが起きる。

そんなことはさせない。

そんな決意を胸に、鬼柳は握り拳をグッと握り込んだ。

「……プレシア。フェイトはとってもいい友達に恵まれたみたいだよ」

そして一方。三人の微笑ましい様子を見つめながら、アルフは嬉しそうに独り言を発した。

独り言の相手はこの場に居ないフェイトの母親に向けてのもの。

彼女は時の庭園に居る時から、フェイトに友達が居ないのをとても心配していた。

なんとか他の子供とコミュニケーションを取らせようとするのだが、フェイトが人見知りで行動に出ない。

どうしたものかとプレシアとアルフ。二人で頭を悩ませていたのだが、こうもあっさり解決してしまうとは。

しかし、これは嬉しいことだ。フェイトに初めて友達が出来た。それも一気に三人も。嬉しくないはずがない。

しかもこの三人は、あまり交流の無いフェイトの母親まで助けようとしている。

友達が悲しんでいるから。仲間が苦しんでいるから。だから助ける。その思いは尊い物だ。

「あとはアンタが元に戻ってくれれば万々歳だ。

……だからプレシア。――絶対に死ぬんじゃないよ」

※

「来たようだな」

「……地縛神」

「くくっ。幼い少女の観客も連れて来たか」

場所と時間は変わり、時の庭園内部。アルフの転移魔法により、鬼柳達は再びこの地を訪れた。
鬼柳達は一度体験しているので慣れているが、はやてだけは初めてで突然周囲の景色に戸惑っていた様だが。

そして転移した先――時の庭園内部の庭の様な場所に、フェイトの母親は笑みを浮かべながら立っていた。
妙に露出の激しいワンピースを身に纏い、背中には一枚のマントの様なものを羽織っている。

「わたしらはただのギャラリーやないで！
鬼柳兄ちゃんと一緒にアンタを倒すんや！」

「ほう……。面白いことを言う。シグナーでもないのに、そんな大口を叩くとは」

「そら当然やろ？　なんてったって、わたしたちは……」

「「シグナーなんだから（なんやからな）！！」」

「！　それは赤き巫女の痣……！　そうか、この地に居たのか……！」

そして嘲る様な視線をはやて達に向けると、呆れた様な声を鬼柳へと投げかけた。

それに真っ先に反応するのははやて。彼女は車いすを動かし、キッとプレシアを睨みつける。

それに再び地縛神に意識を乗っ取られたプレシアが笑みを零すが、次の瞬間。彼女の顔は驚愕に彩られる。

その原因は、はやてとなのはが掲げた腕に描かれている二つのアザ。片や女性の様なアザ。片や弓矢を模したアザ。

それはこの地に伝わると言う赤き巫女に選ばれたシグナーの証。それを見て、地縛神の雰囲気が一変する。

今まで浮かべていた嘲る様子は成りを潜め、仇敵を見つけたかのような獰猛な色がプレシアの瞳に浮かび上がる。

「忘れもしない！　５０００年前、我らを忌まわしい封印へと追いやった憎き巫女！

だが、今回は違う！　５０００年前の屈辱、今ここで晴らしてく

れるわ！」

「な、なんや一気にテンション上がってもうたんやけど……」

「ちょ、ちょっとドン引きなの……」

「さぁ始めようか！　闇のデュエルの始まりだ！」

「ッ！」

その瞳に憎悪を宿し、地縛神は鋭い視線をなのはとはやてに向ける。どうやら地縛神と赤き巫女は並々ならぬ因縁があるらしい。その様子に二人は引いている。

しかし、鬼柳は雰囲気を崩すことなく、真剣な眼差しで地縛神を見つめていた。

恐らく因縁の相手と言うことで、地縛神は手心と言うものは加えないだろう。厳しいデュエルになる。

そして口上を述べ終えたのか。地縛神が勢いよく両腕を天へと掲げた。

瞬間、鬼柳達の足元から青い炎が立ち上り、時の庭園全体を覆っていく。

それは鬼柳にとって見慣れたもの。咄嗟になのはを自身の元へ抱き寄せる。

「にゃ！」と言う奇妙な鳴き声が聞こえたが、それに構っていられない。

この青い炎はプレイヤーにダメージを与える効果を持った特殊な炎。
生身で受けてしまえば、どうなってしまうかは想像に難くない。

「くくく。そちらは三人で来るが良い。何人来ようが、無駄な事だ」

「随分と自信満々だな。……まぁ良い。行くぜなのは、はやて！」

「う、うん！」

「やったるで！」

地面から立ち上った青い炎は鬼柳達を閉じ込め、逃げ出すことを不可能とさせる。
しかし、鬼柳は元よりなのはとはやても逃げ出すことなど毛頭考えていない。

彼らが目指すのはダークシグナーとなったプレシアの解放。その他のことは後回しだ。
そして鬼柳が二人に合図を出せば、彼らは鬼柳の持つＤホイール―ギガントＬに乗り込む。

その際になのはの頬が赤かった様な気がしたが、今の鬼柳はその原因を考えている暇は無い。
シートに腰を下ろし、彼の膝の上に二人の少女をそれぞれ下ろす。
少し重いが、大して気にならない。

そしてなのはが腕に着けていたデュエルディスクを、鬼柳のコックピットにあるデュエルシートに取りつける。

するとそのデュエルディスクは羽の様に展開。ギガントLはデュエルモードへと移行した。

「「「「――デュエル！」」」」

そして四人の掛け声とともに、闇のデュエルは幕を開けた。
掛け声と同時、鬼柳はアクセルを思い切り回す。凄まじい加速で前に出た。

チラ、と後方を確認すれば、ギガントLに負けないほどの速さで空を飛ぶプレシアの姿。
腕には鋼色のデュエルディスクが装備されている。どうやらアレが魔導師のデュエルスタイルの様だ。

「第一コーナーを回った方の先攻だ！」

「くく。……フォトンランサー」

「きゃあッ！」

「な、なんや！？」

両者はぐんぐんとスピードを増していき、目の前に時の庭園のカーブが見える。
闇のデュエルに置いて、先に第一コーナーを回った方が先攻だと言うのは暗黙のルールだ。

どうやら今回も暗黙のルールが適用されたようで、後ろを飛翔する地縛神に異存は無いらしい。
そしてあと僅かでコーナーを回ろうとしたとき、ギガントLを激しい衝撃が襲った。

一体なんだ。煽られて体勢を崩す車体を立て直しながら、鬼柳は後方へと視線を向ける。
するとそこには、こちらに手を掲げている地縛神の姿。地縛神が手に力を込めれば、拳大ほどの光る球が現れる。

「チィッ！　あれも魔法ってヤツか！」

「な、なんでもありやな！」

「先攻はわたしだ。ドロー！」

地縛神　手札５→６

「手札から≪インヴェルズの斥候≫を守備表示で召喚！
カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神：手札６→３
　　場　インヴェルズの斥候　伏せ×２

「くっ。俺のターンだ！」

インヴェルズの斥候

星１／闇属性／悪魔族／攻　２００／守　　０
自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、
自分のメインフェイズ１の開始時にのみ発動する事ができる。
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果を発動するターン、自分はモンスターを特殊召喚する事はできない。
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスターのアドバンス召喚以外のためにはリリースできず、シンクロ素材とする事もできない。

地縛神：ＳＰｃ　０→１
鬼柳：ＳＰｃ　０→１
なのは：ＳＰｃ　０→１
はやて：ＳＰｃ　０→１

「≪インフェルニティ・デーモン≫を召喚！
カードを三枚伏せて、ターンエンドだ！」

鬼柳：手札６→２
　　場　ＩＦデーモン　伏せ×３

「此方のターン。場の≪インヴェルズの斥候≫をリリース！
降臨せよ、≪インヴェルズ・ギラファ≫！」

地縛神：ＳＰｃ　１→２
鬼柳：ＳＰｃ　１→２
なのは：ＳＰｃ　１→２

はやて：ＳＰｃ　１→２

地縛神　手札：３→４

インヴェルズ・ギラファ
星７／闇属性／悪魔族／攻２６００／守　０
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体をリリースして
表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した時、
相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して墓地へ送り、
自分は１０００ライフポイント回復する事ができる。

「相手の場のカード一枚を墓地に送る。
対象は≪インフェルニティ・デーモン≫！」

「くっ！　≪インフェルニティ・デーモン≫！」

前方を飛翔する地縛神が召喚したのは、クワガタの様な姿を模したモンスターだった。
見ているだけで身の毛もよだつ様な、おぞましい感覚を覚える。見ていてイヤなモンスターだ。

そして召喚されたインヴェルズ・ギラファの効果により、鬼柳のＩＦデーモンが墓地に送られる。
咄嗟に伏せカードを発動しようとしたが、それはあくまで攻撃宣言がされたときに使える罠カード。この場では使えない。

「≪インヴェルズ・ギラファ≫の効果により、わたしは１０００ライフを回復。
そしてバトル！　≪インヴェルズ・ギラファ≫で鬼柳　京介にダイレクトアタック！」

「伏せカードオープン！　≪和睦の使者≫！
このカードの効果により、俺が受けるダメージは０になる！」

和睦の使者
通常罠
このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける
全ての戦闘ダメージは０になる。
このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

地縛神ＬＰ１２０００→１３０００

「くっ……！　ターンエンドだ」

「わたしのターン、ドロー！」

地縛神　手札４→３
場　インヴェルズ・ギラファ　伏せ×２

地縛神ＳＰｃ　２→３
鬼柳ＳＰｃ　２→３

なのはＳＰｃ　２→３
はやてＳＰｃ　２→３

「≪太陽の神官≫を特殊召喚！　更に≪氷結界の風水師≫を召喚！」

「早々に来るか……！　忌まわしきシグナーの竜よ！」

「レベル５≪太陽の神官≫にレベル３≪氷結界の風水師≫をチューニング！」

なのはへとターンが渡り、彼女は素早く自身のエースモンスターを召喚する。
本来ならばこの場面ではサイレント・マジシャンを使いたかったが、スピードワールドの効果で断念。

鬼柳から借りたスピードスペル（以下Ｓｐ）があるが、慣れないカードを使うのは困難だ。
そしてなのはが指示を出せば、場に召喚された氷結界の風水師が不思議な舞いを披露する。

「王者の鼓動、今ここに列をなす……！　天地鳴動の力を見せてあげる！
　シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

そして現れた緑色のリング。そのリングを太陽の神官が潜り抜け、

一条の太い閃光が通り過ぎる。
その中から現れたのは、王者の風格を持つドラゴン。獰猛な唸り声を上げ、目前に見える敵を睨みつける。

「バトル！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪インヴェルズ・ギラファ≫に攻撃！
　クリムゾンッ、ヘルフレアァアアアッッ！！」

「ぐぬぅううううっ！」

地縛神ＬＰ１３０００→１２６００

「そしてわたしはカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

なのは　手札６→３
　　場　レッドデーモンズ　伏せ×１

「そちらのターンのエンドフェイズ時、伏せカードオープン！
≪侵略の波紋≫！　ライフを５００ポイント払い、墓地からレベル４以下の「インヴェルズ」を特殊召喚する！
　場に≪インヴェルズの斥候≫を守備表示で特殊召喚！」

侵略の波紋
通常罠
５００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するレベル４以下の「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。

選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。
地縛神ＬＰ１２６００→１２１００

「そしてわたしのターン！
≪インヴェルズを呼ぶ者≫を守備表示で召喚！　ターンエンドだ」

地縛神ＳＰｃ　３→４
鬼柳ＳＰｃ　３→４
なのはＳＰｃ　３→４
はやてＳＰｃ　３→４

地縛神　手札４→３
　場　インヴェルズの斥候　インヴェルズを呼ぶ者　伏せ×１

「わたしのターン、ドローや！」

地縛神ＳＰｃ　５→６
鬼柳ＳＰｃ　４→５
なのはＳＰｃ　４→５
はやてＳＰｃ　４→５

「わたしは手札から≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫を召喚！
さらに手札から≪Ｓｐ－エンジェルバトン≫を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！
その後、手札を一枚捨てる。わたしは手札から≪ＢＦ－大旆のヴァーユ≫を墓地に送るで！」

はやて　手札４→５

「そしてわたしは手札から≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を特殊召喚！
レベル４≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫にレベル３≪ＢＦ－疾風のゲイル≫をチューニング！」

「二体目のシンクロモンスターか……」

「黒き旋風よ、天空へ駆け上がる翼となるんや！
シンクロ召喚！　≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫！」

地縛神はモンスターを召喚するだけに留まった。どうやら上級モンスター召喚の布石を整えているらしい。
シンクロ召喚が普及している現在、アドバンス召喚に目を置いたデッキと言うのは珍しい。

それゆえに、一体どんな戦法を取ればいいのか。鬼柳は目の前で続けられているデュエルを見つめながら考える。
順当にいけば、アドバンス召喚のための素材を破壊すれば良い。しかし、そう易々と破壊させてくれるかどうか分からない。

そして鬼柳が思考に没頭していると、はやての場に黒い鎧を身に纏った翼人が姿を現した。
はやてのデッキのエースモンスターであるＢＦ－アーマード・ウィングである。

「バトルや！
≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫で≪インヴェルズを呼ぶ者≫を攻撃！」

「くっ……！　伏せカードオープン！　≪攻撃の無力化≫！

相手モンスター一体の攻撃を無効にし、バトルフェイズをスキップする！」

攻撃の無力化
カウンター罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「くっ！　カードを二枚伏せて、ターンエンドや！」

はやて　手札5→3
　　場　BF－アーマード・ウィング　伏せ×2

「わたしのターン、ドロー！」

地縛神SPc　5→6
鬼柳SPc　5→6
なのはSPc　5→6
はやてSPc　5→6

地縛神　手札3→4

「くっくく……！」

「？　なにを笑ってやがる！」

「いや、なに。お前たちに面白いものを見せてやろうと思ってな」

「面白い物だと？」

凄まじいスピードで周囲の景色が流れて行く。
平時ならば感嘆の息を漏らしてしまいそうだが、生憎と今は緊急事態だ。

一体地縛神がどんなモンスターを繰り出してくるのか。
その傾向と対策を練るため、鬼柳は片時も地縛神の様子から目を離さない。

と、そんなとき、不意に地縛神がクスクスと笑みを浮かべはじめた。
一体何を笑っているのか。鬼柳の膝に乗っているなのはやはやても不安そうな表情を浮かべる。

「ふふ。このままいけば分かるさ」

「？」

鬼柳が訝しげな視線で地縛神を見やれば、地縛神は意味ありげな視線を鬼柳へと向けた。
一体地縛神は自分たちに何を見せるつもりなのだろうか。鬼柳はざわざわとイヤな胸騒ぎを覚える。

そしてそのまま黙々と時間だけが過ぎて行く。どうやら地縛神はその面白い物を鬼柳達に見せたい様だ。
とあるコーナーを曲がり、時の庭園を一望できる場所まで来る。すると、鬼柳の目が不可思議な物を捉えた。

※

「うにゅ……？」

不意に、傍にあった暖かさが無くなっていたのに気付き、フェイトは意識を覚醒させる。
ぼんやりとした視界で周囲を見渡せば、真っ暗な部屋の様子が目に入った。

ごしごしと目を擦りながら、フェイトは共にベッドで眠っていた二人の少女の姿を探す。
一体何処へ行ったのだろうか。コテンと首を傾げながら、フェイトはベッドから起き出した。

トコトコと軽やかな足音を響かせながら、フェイトは階段を下りてリビングへと向かう。
思いあたる節と言うものでもない。ただ何となく、リビングに誰か人が居る様な気がしたのだ。

「？　アルフ……？」

と、リビングには薄っすらと灯りが灯っており、誰か人が居る様子が見て取れる。

一体誰が何をしているんだろう。僅かな好奇心と共にリビングを覗いてみれば、そこには使い魔の姿。

使い魔はこちらに背を向けており、一心不乱に宙に浮かぶウィンドウに視線を向けている。

一体何を見ているんだろう。疑問に思い、フェイトも宙に浮かぶウィンドウへと視線を向けた。

そして飛び込んできた光景に、ハッと息を呑む。ウィンドウに映っていた人物を見て、我を忘れた。

ウィンドウに映っていたのは、彼女が最も敬愛する母親。しかし、それ以外にも人の姿が見て取れる。

一人は泣き出しそうな自分を不器用ながらも慰めてくれた優しい男性――鬼柳　京介。

一人はこんな自分と友達になり、一緒に笑って満足しようと言ってくれた少女――高町　なのは。

そして最後の一人はこの家の家主で色々と賑やかな少女――八神はやて。

その三人の友達と母親が、ウィンドウの向こう側でデュエルをしていた。それも、青い炎に両脇を囲まれて。

あの炎は一体何なの？　フェイトは疑問に思うが、どうにもイヤな予感しかしない。

『ッ！　あれは！？』

と、フェイトが薄っすらと冷や汗を流しながらウィンドウを見つめていると、鬼柳の驚いた声が響く。
一体どうしたのだろう。疑問に思いながら、フェイトは鬼柳へと視線を向けた。鬼柳はウィンドウの向こうを見ている。

鬼柳は一体何を見たのか。フェイトも鬼柳の見つめている方へと視線を向ければ、鬼柳の見たものが視界に入る。
それは当初、何なのか分からなかった。しかし、徐々に近づいていくとその物体の姿が露わになる。

その物体とは、人が一人ほど入れそうなほどの大きさを持ったシリンダーだった。
中には透明な液体が一杯に詰め込まれ、その内部でふらふらと一人の少女が揺れている。

フェイトと同じ金色の髪。瞳は閉じられてはいるが、開けたらきっとフェイトと同じ赤い瞳が覗くだろう。
さらにその体つきはフェイトと同じくらいで、それは一見。フェイトを模した良く出来た人形と言う印象を抱かせる。

「わた、し……？」

『フェイト？　地縛神！　コイツは一体どういう事だ！』

『分からぬか？　ならば教えてやろう！

フェイト・テスタロッサはプレシア・テスタロッサの実の娘ではない！』

「……え？」

『なんだと？』

フェイトはウィンドウに映る自身を模した人形の様な存在を、食い入る様に見つめる。

どうしてだろう。酷く懐かしい思いを覚える。まるで久しく会っていない旧友を見つけたようだ。

アレは一体何だろう。フェイトが疑問に思っていると、ウィンドウの向こうから鬼柳の声が飛ぶ。

恐らく、鬼柳もシリンダーの中身を確認したのだろう。その声には僅かながらも動揺が含まれている。

そして鬼柳の問いかけに、フェイトの母親――否、地縛神が心底面白そうな声で衝撃の事実を告げた。

自分が母親の実の娘ではない。酷く現実感を伴わぬ言葉に、フェイトはキョトンとした表情を浮かべる。

『本当の娘はそのシリンダーの中で眠っているアリシア・テスタロッサただ一人！

フェイト・テスタロッサはアリシア・テスタロッサを模して造られた模造品、コピーだ！』

『――ッ！？』

だが、次に放たれた地縛神の言葉により、イヤでもフェイトの意識は覚醒してしまう。
自分はコピー。誰かの手によって、人工的に生み出された模造品。
考えて、酷く気分が悪くなった。

嘘だ。嘘だ。心の内で、必死に自身に言い聞かせる。そんな訳ない。あれは地縛神が勝手に言っているだけ。
けれど、フェイトは自身の身体の震えを止められない。それはまるで、言い様のない事実を言い当てられたかの様だ。

縋る様に、ウィンドウに映る母親へと視線を向ける。嘘だと言って欲しい。
性質の悪い冗談だと言って欲しい。しかし次の瞬間、フェイトの目に信じられない光景が飛び込んでくる。

アルフとフェイトが見つめるウィンドウに、新たなウィンドウが表示された。
その中に表示されているのは、シリンダーの中の少女を愛おしそうに撫でる母親の姿。

シリンダーの中の少女を愛おしそうに撫でている母親は優しげな表情を浮かべており、狂気に侵されていないのが分かる。
と言うことはつまり。あのウィンドウに表示されている母親はダークシグナーとなる以前の母親。自分の大好きな母親――。

「――――～～～～ッッ！！」

それを理解した瞬間、フェイトの足から力が抜けた。ペタンとその場に座り込んでしまう。
するとフェイトが座り込んだ音に気がついたのか。アルフが後ろを振り返った。

しかし、今はアルフの様子を気にかけている余裕は無い。必死に自分を抱き締めて、身体の震えを止める。
だが、いくら抱き締めても。力を込めても身体の震えは止まる様子を見せない。そしてウィンドウの画像がイヤでも目に入る。

止めて、止めて、止めて、止めて。誰か嘘だと言って。
必死に心の中で助けを求めるが、誰もその言葉に答える人はいない。

そして声にならぬフェイトの悲鳴が、八神家のリビングに響き渡った。

第十五話　「明かされた事実」（後書き）

一旦ここで終了です。
果たして、鬼柳たちはプレシアを救えるのか。
そしてフェイトの心を救うことが出来るのか。……どうなることやら。

第十六話　「折れた心」

～海鳴市　八神家～

『なんとも哀れな娘よのう？
親からは代わり物の愛を与えられ、本物の愛を与えられず……。
……世界に絶望したのではないかえ？』

ウィンドウの向こう側から、プレシアに憑依したと思われる地縛神の声が聞こえる。
しかし、今のフェイトにその言葉は聞こえている様で彼女の耳には聞こえていなかった。

目じりに大粒の涙を溜めながら、ウィンドウに映る少女の入ったシリンダーを見つめる。
自分そっくりの顔立ちに、自分そっくりの肢体。サラサラと手触りの良さそうな髪までそっくりだ。

ウィンドウに映る少女の裸を見つめながら、フェイトの心をジワジワと恐怖が侵食してくる。
まさか、本当に自分はあの少女――アリシア・テスタロッサのクローンなのだろうか。

嘘だと思いたい。嘘だと言い退けたい。けれど、それを否定するだけの根拠が何処にも無かった。
縋る様にウィンドウに映るプレシアに視線を向けるが、当のプレシアと言えばニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべている。

『どれ。本人の気持でも訊ねてみようか』

『なにをするつもりだ！』

『こうするだけさ……。そら』

「ッ！？」

フェイトが虚ろな視線でウィンドウに映るプレシアを見つめていると、不意に彼女が動いた。

地縛神に憑依されたプレシアはパチンとその場で指を鳴らす。すると次の瞬間、フェイトの足元に魔法陣が浮かんだ。

そして鬼柳の声が聞こえたと同時、彼女の視界は暗転。気がついたときには、彼女は鬼柳の胸に飛び込んでいた。

呆気に取られ、フェイトはポカンとした表情でDホイールの操作を行っている鬼柳に視線を向ける。隣にはなのはとはやてがいた。

「フェイト……ッ！？」

「どうだ？　幼き少女よ……。

母に裏切られ、どれほどの絶望を感じている？」

「ッ！　わ、たしは……！」

「クローン。それ以上でも、以下でもない」

「――――ッ！」

鬼柳は突如として胸元に現れたフェイトに動揺し、僅かに車体を揺らした。
しかしすぐに動揺を抑え込むと、彼女の様子を案じる様な表情でフェイトを見つめる。

だが、それに答えるよりも早く、地縛神が嘲る様な笑みを浮かべながらフェイトに問うた。
それはまるで、弱者をイタぶるかのような表情。咄嗟に反論しようとして、返ってきた答えに顔を俯かせる。

クローン。そうだ、自分はプレシアの実の娘のアリシア・テスタロッサのクローンなのだ。
作られた命。偽りの生。どうして母親は、自分を作ったのだろう。
どうして自分は生まれたのだろう。

「ククククッ。此方のターン」

地縛神ＳＰｃ　６→７
鬼柳ＳＰｃ　６→７
なのはＳＰｃ　６→７
はやてＳＰｃ　６→７

「場の≪インヴェルズを呼ぶもの≫をリリース。
手札から≪インヴェルズ・マディス≫をアドバンス召喚！」

インヴェルズ・マディス
星５／闇属性／悪魔族／攻２２００／守　　０
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した時、
１０００ライフポイントを払う事で、
自分の墓地に存在する「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を
選択して特殊召喚する。

「リリースに使用された≪インヴェルズを呼ぶもの≫の効果発動。
デッキからレベル４以下の「インヴェルズ」モンスター一体を特殊召喚する。
進撃せよ！　≪インヴェルズの先鋭≫！」

インヴェルズの先鋭
星４／闇属性／悪魔族／攻１８５０／守　　０
自分フィールド上に存在するこのカードが墓地へ送られた時、
フィールド上に表側表示で存在する
儀式・融合・シンクロモンスター１体を選択して破壊する。

フェイトが霞がかかったかの様な頭で思考していると、地縛神の声が聞こえた。
視界の隅に映る光景は、ウィンドウで見ていたものと寸分違わないライディング・デュエル。

地縛神の場には新たな上級モンスターがアドバンス召喚され、鬼柳達の表情が歪む。
現状、上級モンスターを召喚出来ているのはなのはとはやてのみ。

そんな中、アドバンス召喚されたのだ。

なにかあるに違いないと思っているのだろう。フェイトも冷静な思考を持っていたのなら、そう考える。

しかし、今のフェイトにとって、他の事柄はどうでも良い事情だった。誰かに肯定して欲しい。自分の存在を。

「さらにアドバンス召喚された≪インヴェルズ・マディス≫の効果発動！

１０００のライフポイントを払い、自分の墓地の「インヴェルズ」モンスター一体を特殊召喚する！」

地縛神ＬＰ１２１００→１１１００

「レベル制限が……ないだと！？」

「は、反則やろー！？　インチキ効果も大概にせぇ！」

「現れよ、≪インヴェルズ・ギラファ≫！」

地縛神　手札５→４

　場　インヴェルズの先鋭　インヴェルズの斥候　インヴェルズ・マディス　インヴェルズ・ギラファ

　伏せ×１

フェイトがギュッと自身の身体を抱き締めながら震えているのを、鬼柳は見逃さなかった。

咄嗟に彼女の身体に手を伸ばそうとするが、現在ライディング・デ

ュエル中なのを思い出して留まる。

果たして、フェイトは本当に地縛神の言っていた通りクローンなのだろうか。

もしもそうならば、プレシアに直に問い質して真偽のほどを確かめないといけない。

「（……いや。なにを問い質す必要があるってんだ）」

と、鬼柳は自らの心の内に現れた感情に、フッと口元を緩めながら心の中で呟いた。

そうだ。フェイトの生まれを問い質す必要があるのだろうか。問い質す、意味があるのだろうか。

既に自分とフェイトは友達であり、仲間で。そこに生まれや育ちも関係ない。遊星やジャックと同じだ。

仮にクローンだとして、これからの付き合いになにか変化がるのだろうか。それならば否だ。そんなものは関係ない。

「（生まれや育ちでどうこう言われるのはサテライトでイヤってくらい理解したさ。

だがな……生まれや育ちがどうであれ、大事なのはソイツの中身なんだよ……ッ！）」

「さらに手札から≪二重召喚≫を発動！

場の≪インヴェルズの先鋭≫、≪インヴェルズの斥候≫、≪インヴェルズ・マディス≫をリリース！」

「ッ！？　さ、三体もリリース！？」

「一体なにが来るんや！？」

「これこそが侵略者「インヴェルズ」の総大将！
行く手を阻むものを粉砕せよ！　≪インヴェルズ・グレズ≫！」

インヴェルズ・グレズ
星１０／闇属性／悪魔族／攻３２００／守　　０
このカードは特殊召喚できない。
このカードを通常召喚する場合、
自分フィールド上に存在する「インヴェルズ」と名のついた
モンスター３体をリリースして召喚しなければならない。
ライフポイントを半分払う事で、
このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

鬼柳が心の内に現れた自らの不安を打ち消し、真剣な眼差しで前を飛ぶ地縛神を見据える。
そうだ。もう迷わない。たとえ生まれがどうであれ、自分たちはフェイトの仲間に違いないのだから。

そして鬼柳が決意を新たにしたとき、地縛神の場に新たな侵略者が姿を現した。
身体中に無数の角の様な物を生やし、腕を組みながらこちらを見下ろす圧倒的な存在。

そのモンスターから発せられる圧力が尋常ではなく、鬼柳だけでな

くなのはやはやても身体を震わせる。
間違いない。あのモンスターこそが、地縛神の使っているデッキの切り札。はたして、どんな効果を持っているのか。

「アドバンス召喚のために墓地に送られた≪インヴェルズの先鋭≫の効果発動！
フィールド上に存在する儀式・融合・シンクロモンスターのうち一体を選択して破壊する！」

「んなっ！？」

「対象は≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫！　破壊し、蹂躙せよ！」

墓地に送られたインヴェルズの先鋭の効果により、はやての場ががら空きになる。
伏せカードを使わなかったところを見ると、どうやらゴッドバードアタックではない様だ。

はやてを護る様に飛翔していたアーマード・ウィングに黒い影が忍び寄り、アーマード・ウィングに絡みつく。
そして一瞬黒い影が光ったと思えば、アーマード・ウィングは破壊されていた。はやては苦々しげな表情を浮かべる。

「さらに≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動！
ライフポイントを半分支払い、場のこのカード以外のカードを破壊する！」

「えぇッ！？」

「くっ！　伏せカード発動！　≪全弾発射≫！
手札を全て捨てることにより、相手に捨てた数×２００のダメージを与える！
俺の手札は二枚！　よってお前に４００ポイントのダメージを与える！」

「ククク。それがどうかしたか？」

地縛神ＬＰ１１１００→５５５０→５１５０

「くっ……！　なにもねぇ……！」

そして発動されたインヴェルズ・グレズの効果により、場のモンスターや伏せカードが一掃される。
咄嗟に鬼柳は伏せカードを発動し手札を全て捨てる事が出来たが、場の全体除去を受けた被害は甚大である。

頼みの綱である伏せカードを失い、手札も０。限りなく絶望的な状況に他ならない。
鬼柳は地縛神の場に当然のごとく仁王立ちしているインヴェルズ・グレズを忌々しげに見つめる。

「バトル！　≪インヴェルズ・グレズ≫で八神　はやてに攻撃！」

「んなっ！？　わ、わたしぃッ！？」

「圧倒的な力の前に絶望せよ！」

インヴェルズ・グレズが振り上げた手が煌めき、そこに強大なエネルギーが充填されているのが分かる。
不味い。鬼柳は直感的にそう悟った。あれが直撃すれば、いかなデュエリストであろうとも大ダメージは免れない。

そしてインヴェルズ・グレズの手から放たれた光球は凄まじいスピードではやてに向けて放たれた。
咄嗟に鬼柳は庇おうとするのだが、なにか不思議な力によって阻まれ、はやてを庇うことが出来ない。

「ぐぎゃぁあああああッッ！！」

はやてＬＰ４０００→８００

はやてＳＰｃ　７→４

そして命中した光球に、はやてが激痛によって絶叫を上げた。目を見開き、ただ悲鳴を上げる。
その様子が余りに痛々しく、はやての反対側に腰掛けていたなのはが慌ててはやてを揺り起そうとする。

「ぁ……ぐ……っ！　き、キッツイ攻撃……やなぁ……ッ！」

「はやて！　大丈夫か！？」

「……く、ふふ……。こないな痛み……全然、痛ないで……」

インヴェルズ・グレズの攻撃の直撃を受け、はやてが大声で絶叫を上げた。
咄嗟に鬼柳となのはがはやてが無事かどうか確かめる。すると、痛みを堪えた声が聞こえた。

どうやら全身に激しい痛みを覚えているらしい。ここが普通のデュエルと闇のデュエルの違いである。
鬼柳は気丈な様子を見せるはやてを見つめながら、内心で必死に思考した。このままではやてが死んでしまう。

だが、状況を打開するためのキーカードは鬼柳の手札には無い。伏せカードすら全破壊されてしまった。
この状況を打破するためには、鬼柳にはインフェルニティ・ミラージュの力が必要だ。だが、そのカードはデッキの中。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド。
ククククッ、さぁ、貴様らのターンだ」

地縛神　手札２→１
　　場　インヴェルズ・グレズ　伏せ×１

「くっ！　俺のターン、ドロー！」

地縛神ＳＰｃ　７→８
鬼柳ＳＰｃ　７→８

なのはＳＰｃ　７→８
はやてＳＰｃ　４→５

「（ダメだ！　これじゃねぇ……ッ！）」

鬼柳のターンに移行し、彼はデッキから勢いよくカードをドローした。
そしてドローしたカードを確認するが、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる。

引いたカードはインフェルニティ・ビートル。レベル２のチューナーモンスターだ。
しかし、チューナーだけではシンクロ召喚出来ない。攻撃力も低く、相手のモンスターも破壊出来ない。

「俺は≪インフェルニティ・ビートル≫を召喚！
さらに手札が０枚のときの≪インフェルニティ・ビートル≫の効果発動！
自身をリリースし、デッキから≪インフェルニティ・ビートル≫を二体まで特殊召喚する事が出来る！」

「ククククッ。それがどうかしたかね？」

「――――ッ。なにもねぇ……。ターンエンドだ」

「ククッ、こちらのターン」

地縛神ＳＰｃ　８→９
鬼柳ＳＰｃ　８→９
なのはＳＰｃ　８→９
はやてＳＰｃ　５→６

地縛神　手札１→２

「≪Ｓｐ－シフト・ダウン≫を発動。
　自分のスピードカウンターを６つ減らし、デッキからカードを二枚ドローする」

Ｓｐ－シフト・ダウン
魔法カード
自分用スピードカウンターを６つ減らして発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

地縛神ＳＰｃ　９→３

地縛神　手札２→１→３

「手札から≪インヴェルズの歩哨≫を召喚。
　そしてバトル！　≪インヴェルズの歩哨≫で≪インフェルニティ・ビートル≫に。
　さらに≪インヴェルズ・グレズ≫でもう一体の≪インフェルニティ・ビートル≫に攻撃！」

「ぐぅううっ！　俺の場は全滅か……！」

インヴェルズの歩哨
星３／闇属性／悪魔族／攻１１００／守　０
このカードがフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する
レベル５以上の特殊召喚されたモンスターは効果を発動する事はできない。

地縛神の召喚した侵略者の攻撃の前に、成す術もなくやられていく鬼柳のモンスター。
相変わらずこちらを見下ろす様に腕を組んでいるその姿は、相変わらず余裕に溢れている。

どうやってこのモンスターを破壊するか。やはり鍵は、自らのデッキに眠るキーカードを引き当てるしかない。
しかし、キーカードを引き当てる確率は低い。一体あとどれほどドローを繰り返したら、キーカードを引き当てるのか。

「そしてこのまま、ターンエンドだ」

「わたしのターン、ドロー！」

地縛神ＳＰｃ　３↓４
鬼柳ＳＰｃ　９↓１０
なのはＳＰｃ　９↓１０
はやてＳＰｃ　６↓７

地縛神　場インヴェルズ・グレズ　インヴェルズの歩哨　伏せ×１
なのは手札　３↓４

「手札から≪Ｓｐ－エンジェル・バトン≫を発動！
デッキからカードを二枚ドローして、手札を一枚捨てる！
わたしは≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫を捨てるよ！」

なのははカードの効果により、デッキからカードを二枚ドローする。
するとドローしたカードを確認し、その可愛らしい顔を僅かに歪めた。

彼女が引いたカードのうち、一枚が彼女の準エースであるサイレント・マジシャンだったのだ。
しかし、今の彼女の手札に進化元であるサイレント・マジシャンＬｖ４のカードは無い。完全に死札だった。

もしもこのカードが魔法、または罠カードだったならば、ブラフとして伏せる事が出来ただろう。
しかし、モンスターカードではブラフとして使えない。しかも再上級モンスター。場に出すことすら難しい。

結果として、なのはは内心で彼女に謝罪しながらサイレント・マジシャンのカードを墓地に送った。
その際に「気にしないでください」と言う彼女のなのはを安心させる様な声が、聞こえた様な気がした。

「わたしは≪魔導戦士　ブレイカー≫を召喚！
効果で場の伏せカード一枚を破壊するよ！　対象は勿論、地縛神！」

「ぐ……ッ！　小娘ぇッ！」

「≪魔導戦士　ブレイカー≫で≪インヴェルズの歩哨≫を攻撃！」

「ぐぅううっ！」

地縛神ＬＰ５１５０→４６５０

「わたしはこのまま、ターンエンド！」

「図に乗るな小娘ッ！　こちらのターン、ドロー！」

地縛神　手札２→３

地縛神ＳＰｃ　４→５
鬼柳ＳＰｃ　１０→１１
なのはＳＰｃ　１０→１１
はやてＳＰｃ　７→８

「≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動！
ライフポイントを半分支払い、≪インヴェルズ・グレズ≫以外のカードを全て破壊する！」

地縛神ＬＰ４６５０→２３２５

「くっ！　≪魔導戦士　ブレイカー≫！」

「さらに手札から≪終末の騎士≫を召喚！
このカードが召喚に成功したとき、デッキから闇属性モンスター

一体を墓地に送る事が出来る。
　デッキから二枚目の≪インヴェルズの斥候≫を墓地に送る」

地縛神の場のインヴェルズ・グレズの効果により、再びフィールドが焼け野原にされてしまう。
しかし、それに呼応するように地縛神のライフポイントもじわじわと減少していく。

なにせインヴェルズ・グレズの効果にはライフポイントの半分を支払うと言う大小が存在する。
そのデメリットにより、今や地縛神のライフポイントは鬼柳やなのはよりも下回っていた。

しかし、その不利を不利と思わせないのが場に出現しているインヴェルズ・グレズである。
早く地砕きなどの除去カードを引かなければ。なのはは焦った表情を浮かべ、自らのデッキを見つめる。

「バトルフェイズ。
　≪インヴェルズ・グレズ≫で高町　なのはにダイレクト・アタック！」

「きゃぁあああああっっ！！」

なのはＬＰ４０００→８００
なのはＳＰｃ　１１→８

そして地縛神による死刑宣告。なのははハッと、自身のデッキから

顔をあげた。
彼女の視界に映るのは、自らに向けて放たれる高魔力の塊。身構えようとするが間に合わない。
その魔力の塊は寸分の違いなくなのはの身体に命中し、身体を引き裂かんばかりの激痛を彼女に与える。
あまりの痛みに視界が滲む。ギュッとすぐ傍にあった鬼柳のコートを掴み、なんとか痛みを堪えた。

「ククククッ。どうだ、哀れな作られし少女。ダークシグナーとなる気になったか？」

「わ、たしは……」

「ダメだよ、フェイトちゃん！　ダークシグナーなんかになっちゃダメ！」

なんとかなのはがダメージによる痛みを堪えると、フェイトをダークシグナーに落とさんと地縛神が声をかける。
それに今まで虚ろな表情で彼らのデュエルを見守っていたフェイトが口を開いた。聞こえてきたのは生気のない言葉。

「でも、わたしは……クローンで……代わりで……」

「フェイトちゃんの代わりなんて居ないよ！
お願いだよフェイトちゃん！　ダークシグナーなんかにならないで！」

「な、んで……？」

「わたし、もっともっとフェイトちゃんのことが知りたい！
フェイトちゃんともっとデュエルをして、フェイトちゃんともっと仲良くなりたい！」

なのははフェイトの生気のない言葉を聞いて、必死に自らの思いの丈を語って聞かせた。
彼女の口から飛び出した言葉は、どれも彼女の嘘偽りのない言葉。
それを必死にフェイトに届ける。

しかし自らがクローンだと公表され、元となった少女を見た直後のフェイトの様子は余りにも酷い。
完全に心は折れ、今にも消えてしまいそうなほどか細い雰囲気を漂わせている。こんなフェイトは見たくない。

「ど、して……クローンの、わたしに……」

「クローンだからって、俺たちのお前に対する態度が変わると思ったら大間違いだぞ、フェイト」

「鬼柳……」

「俺たちは友達であり、仲間だろ？
そんなヤツの生まれが少し変わってたくらいで――――手の平返すほど俺たちの心は狭くねぇッ！」

「そうだよ！」

「せやっ！」

なのはの言葉に心動かされたのか。フェイトの瞳に僅かにだが生気が宿る。

そして彼女は訊ねた。どうしてクローンの自分なんかのために、そこまで言ってくれるのか。

それに答えたのは、今まで沈黙を貫いてきた鬼柳。彼は胸元のフェイトに向けて、はっきりとそう告げる。

生まれや育ちが他人と違うからと言って、自分たちのフェイトに対する態度が変わることなどあり得はしない。

それに鬼柳は決めたのだ。もう二度と、仲間を裏切ったりしないと。自らの心の内を、ちゃんと吐き出すと。

だからなのはの様に、鬼柳もまた本音をさらけ出す。友達の、仲間の生まれが少し変わっていたくらいで、自分は裏切らない。

そしてそれに呼応するかのように、フェイトの両脇に居たなのはとはやてが元気よく頷く。

その様子にフェイトはハッと目を見開き、不安そうな表情で鬼柳やなのは。はやての顔を伺った。

「ククククッ。ならば当の母親に訊ねてみようか。母親は何と言うのだろうなぁ？」

「！　か、母さん……ッ！？」

フェイトが鬼柳やなのは、はやての顔を見渡し、安堵したように表情を崩す。
しかし、それも束の間。今まで面白そうに状況を見守っていた地縛神がニヤリと笑みを浮かべた。

そして鬼柳やなのは。フェイトにはやての視線が自らに集中したのを確認すると、地縛神の周囲に白い靄のようなものが浮かぶ。
しばし眉を顰めて見つめていた鬼柳達だったが、徐々にその靄に浮かんできた映像を見て、ハッと大きく目を見開いた。

靄に映し出されたのは、真っ黒な空間に四肢を拘束されているフェイトの母親――プレシア・テスタロッサの姿。
彼女は十字架に磔にされた様な姿で、ただ悲しげに靄の向こう側から此方側を見ていた。その様子にフェイトの顔が強張る。

『フェイト……！』

「ククククッ。さぁ、プレシア・テスタロッサよ。人形に本当の気持ちをぶつけてやらねばなぁ？」

『――――ッ！』

「フェイト・テスタロッサは貴様の愛娘、アリシア・テスタロッサの代わりの人形。そうだろう？」

『……』

「か、あさん……？」

靄の向こうのプレシアもフェイトの姿を確認し、大きく目を見開かせた。
そして動揺した声でフェイトの名前を告げる。その言葉に、フェイトは複雑な表情を浮かべる。

プレシアが何事か言おうとしたのを遮り、地縛神がプレシアにフェイトに本音をぶつける様に催促した。
それにプレシアは地縛神へ反抗的な視線を向けるが、次に放たれた言葉によって反抗的な態度が一変してしまう。

プレシアは僅かに顔を俯かせ、地縛神の言葉に沈黙した。
その様子が、まるで言い当てられたくないことを言い当てられた様で。

フェイトは母親の変わり様に言いようのない不安を覚え、縋る様に母親に訊ねる。
プレシアは僅かに俯かせていた顔を上げ、フェイトに向けて話し始めた。

『……そう、フェイト。貴方は、わたしがアリシアから作ったクローン……。
……アリシアの……代わりの、お人形さん……なの』

「――――ッ！！」

『わたしの本当の娘は……アリシア・テスタロッサ。……ただ、一

人よ』

プレシアの口から語られた言葉に、フェイトは全身から力が抜けた様に思えた。
だが、実際は違う。彼女の身体はプレシアの言葉により、カタカタと小刻みに震えていた。

嘘だと言って欲しかった。大好きな母親に、そんな事は嘘だと言って欲しかった。
そう言ってもらえれば、自分は疑うことなどせずに母親の言葉を受け入れられたのに。

カタカタと震える身体を抱き抱えながら、フェイトはまるで縋るかのように誰かの温もりを求めた。
そして彼女が触れたのは、Dホイールを操っている鬼柳。彼の灰色のシャツを掴み、自らの身体を寄せる。

『アリシアは、フェイトよりもデュエルが下手だったけれど、とっても楽しそうに笑っていたの』

『アリシアはとっても、≪スターダスト・ドラゴン≫のカードを気に入っていたわ』

『アリシアは嫌いな物も、頑張って食べようとしていた』

『アリシアは――――』

『アリシアは――――』

そして必死に身体の震えを止めようとしているフェイトの耳に、プレシアの独白が届いた。
それはフェイトではなく、アリシアとの思い出を懐かしむ様な声。
その声には嬉しさが含まれている。

亡くなった自らの姉と比べられ、フェイトの頭はこんがらがっていた。しかし、理解している事が一つだけある。
それは母親が、亡くなったアリシアをとても大切にしていたと言うこと。それは明らかに自分よりも、大切にしていた。

やっぱり、自分はアリシアの代わりだったんだ。胸にポッカリと穴が開いた様な感覚を覚え、フェイトは鬼柳に縋る。
また、以前の様に頭を撫でて欲しい。抱き締めて欲しい。良い子にするから。自分を捨てないで欲しい。フェイトはそう思う。

しかし、いくら待っても鬼柳がフェイトの頭を撫でることや、彼女を抱き締めると言うことはしなかった。
やっぱり、自分は要らないのかな。代わりの人形なんていらないのかな。虚ろな視線を鬼柳へと向ける。

鬼柳は鋭い視線を、靄に映し出されているプレシアへと向けていた。

「……なぁ、プレシア・テスタロッサ」

『アナタは……鬼柳　京介、だったかしら。
……なに、フェイトが、欲しいの？』

「んなことはどうでも良い。それよりも聞きたいことが一つある」

『……聞きたい、こと？』

「あぁ。……アンタは、これで満足なのかよ？」

『……？　なにを「アンタは、このままで満足なのかって聞いてんだ」！』

鬼柳は何時になく真剣な表情で、靄に映し出されているプレシアを睨みつけた。

そして返ってきたプレシアの言葉に、瞬間的に頭が沸騰しそうになる。そんなこと、望んじゃいない。

そんな事よりも鬼柳には訊ねたいことがあった。それはプレシアがこれで満足しているのかどうか。

もしも満足していると言うのならば、鬼柳は意地でもプレシアを殴り飛ばす。心の底から、鬼柳はそう思った。

何故ならば――――

「そんな未練がましい――不満足そうな表情で良いのかって、聞いてんだよッ！」

――彼女の表情は、フェイトを傷つけてしまった後悔の色が色濃く浮かんでいたのだから。

第十六話　「折れた心」（後書き）

時間空きました。すみませんｏｒｚ
恐らく地縛神ｖｓ鬼柳'　ｓは次回で終了の予定。
果たしてテスタロッサ一家の命運は……？

第十七話　「救済」（前書き）

ようやく書き終わりました……。
なんだよ、３０Ｋバイトって……。長すぎるだろ。

第十七話　「救済」

～時の庭園　某所～

「そんな未練がましい――不満足そうな表情で良いのかって、聞いてんだよッ！」

「――――ッ！？」

白い靄の様な物体に浮かび上がる男性――鬼柳の言葉に、プレシアは人知れず息を呑んだ。
ばれていたのか。内心で自問し、僅かに動揺を浮かべながら視線を鬼柳へと向ける。

事実、彼女はフェイトに対して未練を感じていた。傷つけてしまったことを後悔していた。
けれど、どうしようもない。ここで自分が突き放してしまわないと、フェイトはもっと傷ついてしまう。

本当は今すぐにでもフェイトを抱き締めて、謝罪の言葉を口にしたい。傷つけてしまった贖罪をしたい。
しかし、そんな権利は何処にもないのだと理解する。なにせ、自分はフェイトがクローンだと言うことを隠していたのだから。

※

事の始まりはプレシアの実の娘――アリシア・テスタロッサが不慮の事故により死亡してしまったことから始まる。
アリシアが亡くなった当初、プレシアは失意のどん底に叩き落とされていた。無理もない。彼女の生きる意味が無くなったのだ。

それから彼女は何かに取りつかれたかのように、アリシアの復活を目指して様々な研究の報告書や伝承を読み漁った。
けれどプレシアの望む結果は見当たらず、ただ無為に時間が過ぎて行った。そしてアリシアが亡くなってから数年、ようやく見つけた。

それは「プロジェクトＦＡＴＥ」、通称「プロジェクトＦ」と呼ばれる人造生命の研究。様はクローンについての研究だ。
当時のプレシアはこの「プロジェクトＦ」に一縷の望みを賭け、アリシアの遺体の細胞から彼女と寸分違わぬ素体を作り出した。

それこそがフェイトの元となった物。プレシアは作成したその素体にアリシアの記憶を転写し、アリシアの復活を目論んだ。
しかし、結果として転写は失敗。アリシアの記憶を転写されたその素体――フェイトは、アリシアの記憶を持つ別人となったのだ。

それにプレシアは絶望。それから何体か記憶を転写したクローンを作成したが、どれも失敗に終わったのだ。
研究に魂を注いでいたと言っても過言ではないプレシアは、続く失

敗によって寝込んでしまう。

頭が霞がかかった様な状態の中、プレシアは作成したクローン――フェイトをどうしようか考えた。

だが、すぐにどうするかを決定する。簡単だ。失敗作は廃棄しなければ。彼女が望むのは完全な成功体だけ。

体調が回復したら、すぐにでもフェイトを破棄しよう。そう思いながらプレシアは、眠気に身を任せたのだ。

そしてあり得ないはずの奇跡が起きる。それは本来の物語では当時、思い出すはずのない愛娘の他愛のない言葉。

『お誕生日、おめでとうアリシア。なにか、欲しい物はない？』

『え？　うぅ～ん……』

『ふふ。あまり急いで決めなくても『あった！』？　アリシア？』

『わたしね、妹が欲しい！　一緒に遊べる妹が欲しい！　一緒に遊んで、一緒にケーキを食べたい！　一杯遊びたいな！』

『い、妹……』

当時の記憶を、プレシアは思い出したのだ。それはアリシアが望んだ何よりも尊いもの。

その翌日、睡眠から目覚めたプレシアは、アリシアの言葉をよく思い出す。そして深く考えた。

当時時の庭園に残っていたアリシアのクローンはフェイトのみ。他の素体は長く生きられなかった。
そんなことをぼんやりと思いながら、プレシアは当時離れて住んでいたフェイトの元へ向かった。理由など無い。

ただ、夢の中でアリシアに言われた事が気になっただけだ。彼女は何よりも妹を望んだ。
ならば、フェイトは彼女にとって妹と言う位置づけになるのだろうか。プレシアは疑問に思う。

そしてその日はただ、フェイトと一緒に一日を過ごした。フェイトの様子を観察し、フェイトと一緒に遊ぶ。
当初フェイトはあまり構ってくれないプレシアの突然の行動に驚いた様だが、すぐに嬉しそうに笑ったのを覚えている。

それから数日、プレシアはフェイトと共に過ごした。共に原っぱで花遊びをしたり、デュエルのルールを教えたり。
そうやって数日を過ごしていると、夢の中にアリシアが度々現れて嬉しそうに笑うのだ。

今日は楽しかったね。フェイトはどんな遊びが得意なのかな。一緒にデュエルがしたいな。
プレシアはアリシアのその言葉に笑みを浮かべながら相槌を打つ。
そして彼女の心に徐々に変化が起きた。

フェイトはただのクローンではない。アリシアの妹であり、自らの娘なのだと言う、意識が芽生え始めたのだ。
そしてフェイトが自分の娘だと意識すれば、どんどんとフェイトに愛着が湧いていくのを実感できた。

ちょっと小食なところが可愛らしい。アリシアは少しだけ食が太かった。

教えた当初、フェイトはデュエルが下手だった。けれど、すぐにデュエルを覚えて行った。

それから幾年の時が過ぎ、すっかりプレシアにとって、フェイトは無くてはならない存在になっていた。

今ならば胸を張って言える。フェイトは自分の娘なんだと。目に入れても痛くない愛娘だと。

そしてある日のこと。フェイトと日課のデュエルを終え、時の庭園の居城に戻ろうとしたとき、彼女の身体に何かが入り込む。

それはあっという間に彼女の頭まで到達し、彼女の意識を奪った。

そして次に目を覚ましたとき、彼女はこの暗い空間に佇んでいたのだ。

『これは、一体……』

『ククククッ。悪いが、貴様には我の人形となってもらう』

『ッ！　な――――ッ！？』

そして身体の自由を奪われ、地縛神と名乗る存在が行うフェイトへの虐待を、プレシアは見ていることしかできなかった。

当然、地縛神へ反抗した。娘を傷つけるなと。身体の自由を返せと。

しかし地縛神の力は強大で、プレシアには太刀打ちできなかった。

しかし反抗を続ける彼女にチャンスが訪れる。それは地縛神がフェ

イトへ終えた虐待の直後のことだった。
地縛神はとある伝手を使って手に入れたロストロギア――ジュエルシードに浮かれていたのだろう。僅かに拘束が緩んでいた。

その隙を突き、プレシアはフェイトへとあるカードを渡したのだ。
そのカードこそ、フェイトのデッキのエースであるスターダスト・ドラゴン。

スターダスト・ドラゴンのカードはアリシアのお気に入りで、彼女の死後プレシアが大切に保管していた。
プレシアはそのカードをフェイトに渡し、時の庭園から離れる様に告げた。もう二度と、フェイトを傷つけない様に。

しかしフェイトはそんなプレシアの言葉に拒絶を示す。イヤだと。
どんなことをされても良いから、プレシアの元へ居たいと。
その言葉を聞いて、プレシアは泣きたくなった。こんなに酷いことをしているのに、フェイトは自分のことを嫌いにならないなんて。

その後、再びプレシアは闇の中へ拘束され、以前よりも固い拘束で捕えられた。
どうやってフェイトを逃がそうか。必死に考えるが、良い案は浮かばず、とうとう地縛神が指示を出す。

それは第97管理外世界に散らばったとされるロストロギア――ジュエルシードの探索だった。
無事、ジュエルシードを回収し終えれば、元の自分に戻るとフェイトをけしかけて。それからは鬼柳の知る通りの結果だ。

※

「――ッ！　じゃあ、なにを言えば良いと言うの!?
　自分の身体が乗っ取られていたとはいえ、フェイトを傷つけたのはわたしなのよ！」

一瞬で過ぎ去った過去の記憶。それを思い出しながら、プレシアは叫んでいた。
事実、彼女は自身の手でフェイトを傷つけた感触をまざまざと覚えている。

何の罪もない娘を傷つけてしまった。自分の意思ではないが、傷つけてしまった。
それがどんなにフェイトを傷つけてしまったのか。それを思い、涙を流さんばかりの思いだ。

「たしかに、フェイトはわたしがアリシアを模して作ったクローンよ……。
　だけど、だけどもうフェイトはクローンじゃないの！　娘なのよ！　わたしの、大事な娘なの！」

『――――ッ！　か、あさん……？』

「そんなフェイトを傷つけて……わたしに何を言えって言うのッ！」

いつの間にか、両の瞳からボロボロと涙が零れていた。自らが辛い訳ではない。

ただ、フェイトのことが心配で堪らなかった。傷ついた心が癒えるのか心配だった。

本当はフェイトを突き離してなのはやはやて、鬼柳にフェイトを任せようとしたが、ダメだった。

いつの間にか冷酷な仮面は打ち砕かれて、素顔を曝け出して本音を叫ぶ。なんて無様なんだろうか。

しかし、そんなプレシアの様子を笑うことなどせず、鬼柳は静かにプレシアの瞳を見つめてくる。

そしてフェイトの茫然とした声が聞こえたとき、鬼柳は口元を僅かに緩めながらプレシアに向けて口を開く。

『簡単だろ。――ごめんなさい、で良いんだよ』

「――――え？」

『お前とフェイトは親子なんだろ？　クローンと創作者じゃないんだ。

だったら、素直に謝って仲直りしろよ。それが……親子ってもんじゃないのか？』

「あ……」

鬼柳の口から飛び出した言葉は、すんなりとプレシアの心に響いた。
あぁ、そうだ。なにを難しく考えていたんだろう。クローンか、そうじゃないか。

そんなことはどうでも良い。ただ、母親である自分が娘にちゃんと謝れるかどうか。
それだけで、以前の様な関係に戻れるのだから。プレシアは鬼柳から視線を逸らして、フェイトへ向ける。

不安の色が浮かんだその瞳は、縋るかのようにプレシアを見つめている。
再び酷い言葉を言われるかもしれない。そんな恐怖が浮かんでいるようだ。

フェイトのそんな表情に、プレシアの胸はチクリと痛む。だが、ここで表情を崩してはいけない。
この痛みはフェイトの感じている痛みなのだ。この痛みから逃げ出して、どうやって娘に謝る事が出来ようか。

そしてプレシアは口を開く。本当の娘と同じくらい、愛おしい存在となった少女に向けて――

「ごめんなさい、フェイト。酷い事を言って……。
アナタは確かにクローンよ。だけど、わたしの掛け替えのない娘……。これだけは、信じて欲しいわ……」

『母さん……』

「大好きよ。わたしの大好きなフェイト」

※

「貴様ァアアアッッ！！！」

地縛神の轟く様な咆哮が、時の庭園に響き渡る。声が聞こえた方へ、鬼柳は視線を向けた。
彼の視線の先には、鬼柳を射殺さんばかりに鋭い視線を向けてくるプレシア。否、地縛神の姿が。

「あと少しでその少女がダークシグナーとなるときに……ッ！　よくもォオオオッ！」

「ハッ！　悪いがお前の思い通りにいくかよ！　お前はここで、俺たちに倒されるんだ！」

「せやッ！　お母さんとフェイトちゃんを、引き離させたりはせん！」

「絶対、絶対助けて見せるッ！」

地縛神はギラギラと憎悪を宿らせた瞳で、鬼柳を睨みつける。鬼柳は僅かに笑い、怒鳴り返してやった。

もうこれ以上、地縛神の思い通りになどさせるものか。ここで地縛神を倒し、この無意味な闘いに終止符を討つ。

そして鬼柳の両隣から、なのはとはやての威勢のいい声が飛び出した。彼女らもまた、地縛神を睨みつける。

どうやら先ほどの鬼柳とプレシアの会話が、二人に火を付けてしまった様だ。鬼柳は目を細めて嬉しそうに笑う。

「だが、ここで貴様は終わりだ！

≪終末の騎士≫で八神　はやてにダイレクトアタック！」

「ッ！　鬼柳兄ちゃん！　絶対、絶対プレシアさん助けてな！」

「はやてッ！」

「アァアァアアッ！！」

はやてＬＰ８００→０

しかし、鬼柳が嬉しそうに笑みを浮かべたのも束の間。地縛神がデュエルを再開させた。

場に残っている二体のモンスターのうち一体。終末の騎士が手に持

った剣ではやてに切りかかる。

その様子にはやてと鬼柳。なのはは慌ててデュエルディスクに視線を向けるが、伏せカードの影は無い。

当たり前だ。先のターン、インヴェルズ・グレズの効果により場が一掃されているのだから。

そしていち早く自らの敗北を悟ったはやては、鬼柳にプレシア達のことを頼むと告げる。

その直後、はやての身体へ終末の騎士が剣を振り下ろす。斬撃を受け、はやての身体がグラリと揺れた。

鬼柳が慌てて手を伸ばし、はやての腕を掴もうとする。しかし僅かに遅く、はやての身体がＤホイールから投げ出された。

はやての軽い身体が地面に落下し、バウンドしながら後方へ流れて行く。その様子を見て、鬼柳は口元を歪めた。

「これで二対一だ。……カードを一枚伏せて、ターンエンド」

地縛神　手札２→１

場　インヴェルズ・グレズ　終末の騎士　伏せ×１

「お前……ッ！　俺のターンだ！」

鬼柳　手札０→１

地縛神ＳＰｃ　５→６

鬼柳ＳＰｃ　１１→１２

なのはＳＰｃ　８→９

「≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を召喚！　効果でコイツは守備表示になる。
そして手札が０枚のとき、≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
墓地から≪インフェルニティ・デーモン≫を特殊召喚する！」

「！　来た！　鬼柳さんの逆転のカード！」

「俺はデッキから≪インフェルニティ・バリア≫を手札に加える。
そして伏せ、≪インフェルニティ・デーモン≫で≪終末の騎士≫に攻撃！」

インフェルニティ・バリア
カウンター罠
自分フィールド上に「インフェルニティ」と名のついたモンスターが表側攻撃表示で存在し、
自分の手札が０枚の場合にのみ発動する事ができる。
相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「伏せカードオープン！　≪デストラクト・ポーション≫！
効果で≪終末の騎士≫を破壊しし、≪終末の騎士≫の攻撃力分、ライフを回復する」

地縛神ＬＰ２３２５→３７２５

「くっ。ターンエンドだ」

「こちらのターン、ドロー」

地縛神　手札1↓2

地縛神ＳＰｃ　6↓7
鬼柳ＳＰｃ　変動無し
なのはＳＰｃ　9↓10

「メインフェイズの開始時、自身の場に伏せカードが無い場合、
墓地から≪インヴェルズの斥候≫は特殊召喚できる！　来い！
≪インヴェルズの斥候≫！」

鬼柳が攻撃を仕掛けるも、地縛神の伏せカードにより攻撃を中断する。
いくらインフェルニティ・バリアと言う強力なカードを伏せても、
伏せたターンは使えない。

それにわざわざ、インフェルニティ・デーモンを破壊されてやるつもりは無いのだ。
その点、モンスター破壊系の罠カードでなくてホッとしている。そしてターンは地縛神へ移る。

「場の≪インヴェルズの斥候≫をリリース！
現れよ、≪インヴェルズ・モース≫！」

インヴェルズ・モース
星6／闇属性／悪魔族／攻2400／守　0

「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した時、
１０００ライフポイントを払う事で、
相手フィールド上に存在するカードを2枚まで
選択して持ち主の手札に戻す。

「≪インヴェルズ・モース≫の効果発動！
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功した場合、
１０００ライフを支払うことで相手フィールド上のカード2枚までをバウンス出来る！」

「なにっ！？　クッ、伏せカードオープン！　≪インフェルニティ・バリア≫！
自分の場に「インフェルニティ」と名のついたモンスターが存在し、手札が０枚の時発動！
相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊する！」

「ククッ。これで≪インヴェルズ・モース≫が破壊されたか……」

地縛神が新たに召喚したのは、非常に強力な効果を持ったモンスターだった。
アドバンス召喚されたインヴェルズ・モースの効果により、場の伏せカードが一掃される。

ここでインフェルニティ・バリアを使うのもどうかと思ったが、モンスターを一体でも減らしたい。
そしてインフェルニティ・バリアの効果発動。効果によりインヴェ

ルズ・モースが破壊されたが、地縛神は余裕の笑みを浮かべている。

「まずは二枚目の≪Ｓｐ－シフト・ダウン≫を発動。
スピードカウンターを六つ取り除き、カードを二枚ドロー」

地縛神　手札１→３
地縛神ＳＰｃ　７→１

「≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動。
ライフを半分支払い、自身を除いた場のカードを全て破壊する」

「くっ！　これで俺の場は再びフィールドレス……ッ！」

「バトル！　≪インヴェルズ・グレズ≫で鬼柳　京介にダイレクトアタックッ！」

「ガァアアアアッ！」

「鬼柳さん！」

鬼柳ＬＰ　４０００→８００

鬼柳ＳＰｃ　１３→１０

地縛神の場のインヴェルズ・グレズの攻撃により、鬼柳のライフポイントが大幅に削られる。
咄嗟に胸元に縋っているフェイトにダメージの余波が行かない様にするが、かなりダメージが大きい。

あまりのダメージ量に、鬼柳の顔が苦痛に歪む。その様子を見て、なのはが悲鳴に近い声を上げた。
それと同時、自身の胸元からも視線が飛んでくる。視線を下へ向けてみれば、フェイトもまた不安そうな表情だ。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

地縛神　手札３→２
場　　インヴェルズ・グレズ　伏せ×１

「わたしのターン、ドロー！」

なのは　手札３→４

地縛神ＳＰｃ　１→２
鬼柳ＳＰｃ　１０→１１
なのはＳＰｃ　１０→１１

「わたしはモンスターをセット、カードを１枚伏せてターンエンド！」

鬼柳が二人を安心させるようにほほ笑むと、視線を前方へと向けた。すると丁度、地縛神がターンを終えようとしている。今度はなのはのターンだ。

なのははデッキからカードを一枚ドローする。そして苦い表情を浮かべた。

彼女がドローしたカードはリビングデッドの呼び声。ほとんどのデッキに入るであろうメジャーなカードだ。

なのははモンスターとリビングデッドの呼び声を伏せ、ターンを終了する。

どうにも状況を好転出来ず、なのはは悔しい思いを感じる。

せめてスターダスト・ドラゴンならば、状況を打破できるのに、と。

なのは手札４→２

場　セットモンスター　伏せ×１

「こちらのターン、ドロー」

地縛神　手札２→３

地縛神ＳＰｃ　２→３

鬼柳ＳＰｃ　１１→１２

なのはＳＰｃ　１１→１２

「メインフェイズの初めに、墓地から≪インヴェルズの斥候≫を特殊召喚！」

「不味い、な……」

「……鬼柳、さん」

「？　なのは……？」

「フェイトちゃんのこと、お願いします！」

「な、なのは！？　まさか……ッ！」

場に特殊召喚されたインヴェルズの斥候に、鬼柳は僅かに眉を顰めた。

このままでは、新たな上級モンスターが召喚されてしまう。そうなってしまえば、逆転は難しい。

と、鬼柳がどうやってこの場を打開しようか頭を悩ませていると、なのはの真剣な声が聞こえた。

どうした？　そう内心で思いながら視線をなのはへと向ければ、ニコリと笑みを浮かべてフェイトを頼むなのは。

腕からは眩いほどの赤い光が溢れ、なのはの姿を神々しく映し出している。そう言えばはやても腕を発光させていた。

一瞬、なのはの入っている言葉の意味が分からず、鬼柳は呆気に取られる。だが、すぐになのはの言葉の意味を理解し、目を見開いた。

「ククッ。理解している様だな。≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動！

ライフを半分支払い、このカード以外のカードを全て破壊する！」

「！　地縛神……ッ！」

「ククッ。≪インヴェルズ・グレズ≫で高町　なのはにダイレクトアタック！」

「キャァアアアアッッ！！」

なのはＬＰ８００→０

「なのはぁあああああっ！」

地縛神はなのはの言葉の意味を理解しているのか。ニヤリと笑みを浮かべると、インヴェルズ・グレズの効果を発動する。

再び場が一掃され、無防備ななのはのフィールドが現れた。そしてなのはに向けて、インヴェルズ・グレズに攻撃宣言する。

眩いばかりの光球が放たれ、なのはに命中。なのはは絶叫を上げながら、鬼柳の操るギガントＬから落下した。

再び腕を伸ばし、なのはの腕を掴もうとするが、鬼柳の手は宙を掻くのみにとどまる。結果として、なのはは地面に落下した。

後方に流れて行くなのはの様子を視界に納めながら、鬼柳は自らの失態を心の中で罵る。

はやてに続き、なのはすら護れないとは。これではとても、士郎や桃子に顔向けできない。

「ククク……。どうする、鬼柳　京介？　この場でサレンダーするか？」

「……なんだと？」

「サレンダーすれば、先に落下したあの二人の少女は助けてやろう」

「なに……？」

「ただし、貴様の命とそこの少女の命は貰うがな！」

と、鬼柳が心の内で自らの失態を罵っていると、地縛神の余裕にまみれた声が聞こえた。

詳しく話を聞いてみれば、どうやら鬼柳がサレンダーすれば、なのはとはやての命は助けてくれるらしい。

しかし、その場合は再び鬼柳がダークシグナーへと身を落とし、さらにはフェイトとプレシアもダークシグナーになる。

それを聞いて、鬼柳は僅かに顔を俯かせた。ここでサレンダーすれば、なのはとはやてが助かる。だが、サレンダーする理由が無い。

「断る！　俺はまだ、諦めちゃいねぇ！」

「ほう？　あくまで抵抗すると？」

「あぁ！　フェイトもプレシアも助けて見せる！」

「ククッ、そうか。ならばせいぜい足掻いて見せろ。……ターン、エンド」

地縛神　場　インヴェルズ・グレズ　伏せ無し

鬼柳は俯けていた顔をあげると、大声で地縛神にそう見栄を切った。

そうだ。まだ鬼柳は諦めてはいない。必死に抵抗し、フェイトもプレシアも救って見せる。

「……鬼柳」

「？　どうした、フェイト」

「どうして、鬼柳たちはわたしたちを助けてくれるの？
鬼柳たちは、なんで関係ないわたしたち「関係、あるだろ」……え？」

「さっきも言ったが、俺たちは仲間だ。
仲間のピンチを、黙って見過ごす訳にいかねぇ……！」

「仲間……」

と、鬼柳が心の内で決意を新たにしていると、彼の膝の上に居たフェイトが声をかけた。
彼女の顔には疑問と戸惑いが浮かんでおり、どうして鬼柳達がここまで自分たちを助けてくれるか分からない様だ。

だが、別に難しい話をしている訳ではない。鬼柳はただ、仲間を。友達を救うために全力を尽くしているに過ぎない。
そこに損得勘定などない。あるのはただ、仲間を救うと言う意識だけ。その言葉に、フェイトがハッと息をのんだ。

「いくぜ、俺のたー「鬼柳、交代して」ッ！？　フェイト！？」

「わたしも助けるよ。鬼柳やなのは、はやてがわたしを助けてくれ様とした様に、わたしも皆を助ける」

「フェイト……」

「だから、交代して。大丈夫、皆がわたしに力をくれてる……！」

「……はは。随分と良い顔する様になったじゃねぇか！」

「わきゃ！」

鬼柳はそんなフェイトを見送ると、再び自分のターンに移ろうとデッキへ手を伸ばす。

しかし、彼のデッキへ伸ばした腕は膝の上から伸びてきた少女――フェイトの手によって止められた。

フェイトの行動の意図が分からず、鬼柳は呆気に取られる。一体何故、自分の行動を妨害するのか。

だが、聞こえてきたフェイトの言葉に、鬼柳は口元を緩める。良い顔をしている。さっきまでの虚ろな表情ではない。

先ほどよりも段違いに良い顔をする様になったフェイトに嬉しさを覚え、彼女の頭をグリグリと撫でまわす。

フェイトが奇妙な声をあげたが気にしない。今のフェイトならば良いだろう。負けてしまっても自分に悔いは無い。

「そう言う訳だ、地縛神。悪いがここからはフェイトが俺の代わり

にプレイするぜ」

「ククッ、構わない。
ただし、スピードカウンターは0、並びにライフは鬼柳　京介。
貴様のものを続けて使用する」

「なッ――！？」

「大丈夫だよ、鬼柳。わたし、負けないよ」

「……そうか。なら、頑張って母さんを助けるぞ！」

「うん……ッ！」

そして地縛神へプレイヤーが交代する旨を伝える。すると案外あっさりと交代が認められた。
ただし、フェイトに課せられたハンデはあまりにも大きい。ライフの継続とスピードカウンターのリセット。

あまりに無茶な内容に、鬼柳が咄嗟に反論しようとする。しかし、それをフェイトが押し止めた。
どうやら勝てる見込みがあるらしい。鬼柳はフェイトの様子に僅かに嘆息すると、彼女にプレイを交代した。

「わたしのターン、ドロー！」

フェイトＳＰｃ　0↓1
地縛神ＳＰｃ　3↓4

フェイト　手札５→６

「――――ッ！　……ふふ。
わたしはレベル・スティーラーを守備表示で召喚！　カードを三枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト　場　レベル・スティーラー　伏せ×３

フェイトはデッキからカードをドローすると、自らの手札に視線を落とした。
さすがに最初の手札５枚は認めてくれたようで、彼女の手札には６枚のカードが握られている。

そしてつい先ほどドローしたカード。それを見て、フェイトは嬉しそうに笑みを浮かべた。
このカードはフェイトのデッキに置いて、重要な役割を持つカードだ。まさか初手に紛れ込むとは。

「こちらのターン、ドロー」

地縛神　手札３→４

地縛神ＳＰｃ　４→５
フェイトＳＰｃ　１→２

「墓地の≪インヴェルズの斥候≫の効果発動。場に二体、特殊召喚される。

そして≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動！　このカード以外の場のカードを全て破壊する！」

「クッ！　フェイト……ッ！」

フェイトが伏せカードを三枚伏せ、モンスターを召喚しターンを終える。

通常のデュエルならば堅実な護りである。しかし、現状では堅実とは言えない。

事実、相手の場にはフィールド上のカードを自身を除き全破壊するインヴェルズ・グレズがいる。

どう足掻いても、相手の効果によって場の伏せカードやモンスターカードが全滅するのは見えている。

だが、フェイトは笑っていた。ニコリと笑みを浮かべ、デュエルディスクを操作する。

「伏せカードオープン！　≪スターライト・ロード≫！」

「なに！？　そのカードは……！」

「自分の場のカードが二枚以上破壊されるときに発動！　その効果を無効にし、破壊する！

さらにエクストラデッキから≪スターダスト・ドラゴン≫を特殊召喚できる！　飛んで、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

スターライト・ロード

通常罠
自分フィールド上に存在するカードを
2枚以上破壊する効果が発動した時に発動する事ができる。
その効果を無効にし破壊する。
その後、「スターダスト・ドラゴン」1体を
エクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「これは……！」

フェイトの伏せていたカードのうちの一枚が表になる。
描かれているのは光の中から飛翔するスターダスト・ドラゴン。

見たことのないカードの登場に鬼柳は僅かに顔を顰めるが、効果を聞いて驚いた。
それは全体除去を得意とする地縛神のデッキを攻略するうえで、欠かせないカード。

フェイトの願いと共に、場にスターダスト・ドラゴンが特殊召喚される。
場に召喚されたスターダスト・ドラゴンはフェイトに視線を送るとコクリと頷いた。

『フェイト、頑張ろう』

「ふぇ？」

「？　どうした、フェイト」

「ん？　な、なにか言った？」

「？　いや、なにも言ってないが……」

「？　？　？」

と、フェイトがこちら視線を向けてきたスターダスト・ドラゴンにコクリと頷くと、聞き慣れぬ声が届く。

それはまるで、幼い少女の様な声。思わずキョトンとした表情を浮かべ、きょろきょろと周囲に視線を走らせた。

しかし、何処にも少女の姿など見えない。当たり前だ。今は鬼柳と共にライディング・デュエルをしているのだから。

一体、先ほどの声は誰のものだったのだろうか。疑問に思いながらも、フェイトは視線を前方へと向ける。

「くっ！　だが……！　場の≪インヴェルズの斥候≫をリリース！　現れよ、≪インヴェルズ・ホーン≫！」

「相手のモンスターが召喚されたとき、手札から≪エフェクト・ヴェーラー≫を手札から捨てる！　これにより、相手のモンスター一体の効果をエンドフェイズまで無効にする！」

「チィッ！　小賢しい真似を！」

インヴェルズ・ホーン

星９／闇属性／悪魔族／攻３０００／守　　０
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した場合、以下の効果を得る。
１０００ライフポイントを払う事で、
フィールド上に存在するモンスター１体を選択して破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

エフェクト・ヴェーラー
チューナー
星１／光属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを手札から墓地へ送り、
相手フィールド上に表側表示で存在する
効果モンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。
この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

「バトルだ！　≪インヴェルズ・ホーン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！」

「伏せカードオープン！　≪くず鉄のかかし≫！
相手モンスター一体の攻撃を一回だけ無効にする！」

「くっ！　ターンエンドだ」

「わたしのターン！」

地縛神　手札４→３
場　インヴェルズ・ホーン　伏せ無し

地縛神のターンを終え、フェイトにターンが渡る。するとフェイトはジッと地縛神の周囲に浮かぶ白い靄に視線を向けた。
そこに映る母親は、心配そうな瞳でフェイトを見ていた。その様子に、フェイトはこんなときだと言うのに嬉しさを覚える。

やっぱり、母さんは自分のことを捨てないで居てくれる。自分の大好きな母さんがそこに居た。
様々な嬉しさがフェイトを駆け抜ける。だが、ここで負けてしまえば母親と共に過ごす事が出来ない。

そんなことは、イヤだった。

「（お願い。力を――――貸してッ！）」

フェイトは自身のデッキに手を乗せて、心の内から祈る。それは鬼柳やなのは、はやてに向けて。
虫が良いことは百も承知している。だけど、今は皆の協力が欲しかった。誰よりも大好きな母を助けるために。

すると、フェイトのデッキに乗せた腕――右腕から赤い光が放たれ始める。それはフェイトにとって見慣れた赤いアザ。
だが、今回は以前の様な発光とは違った。腕の痣から流れ込んでくるのは暖かい気持ち。この気持ちは一体何なのだろうか。

疑問に思いながら、フェイトは静かに瞼を閉じる。
すると瞼の裏に、この場に居ない二人の少女の姿を見た。

『大丈夫だよ、フェイトちゃん！　絶対、絶対助けよう！』

『そやで、フェイトちゃん。諦めたらあかん！　わたしらが力、貸したる！』

『――――ッ！　なのは……それに、はやても……』

『だから……諦めないで！』

『そやから……諦めんで！』

「――――うんっ！」

真っ暗な暗闇の中、フェイトは二人の少女――なのはとはやてと再会する。

二人ともデュエルに破れたと言うのに、ニコニコと笑顔を浮かべている。

その様子に、フェイトも僅かながら肩の荷が下りた様な感覚を覚えた。

自分の思いこみなんかじゃなかった。なのはやはやて、それに鬼柳が力を貸してくれている。

耳の奥に聞こえるなのはとはやての声に頷きながら、フェイトは瞼を開いた。

次いで、視界に飛び込んでくる光景に目を見開く。それは彼女の腕に現れていた。

「コレ……」

「これが、赤き巫女のアザ……なのか？」

フェイトの腕に現れていたのは、翼を広げ、天へ向けて弓矢を掲げる女性のアザだった。
そのアザからは眩いばかりの赤い光が放たれ、鬼柳とフェイトの視線を独り占めしている。

しばしツンツンとアザを突いていたフェイトだが、自らのデッキに起こった変化に気がついた。
デッキの一番上が輝いているのである。まるで、このカードをドローしろと言っている様な、そんな気がする。

一体これは何なのだろう。疑問に思いながらデッキトップのカードに手を乗せれば、先の感覚が蘇った。
なのはのフェイトを励ます声が。はやてのフェイトを叱咤する声が聞こえる。間違いない。彼女たちが力を貸してくれている。

ならば、もう迷わない。

「ドロー！」

フェイトは勢いよく、デッキからカードをドローした。デッキにどんな変化が起こっているのか、と言う不安は無い。
あるのはただ、漠然とした安心感だけ。きっとこのカードを使えば、

母親を助ける事が出来る。心の内からそう思っている。

そして勢いよくドローしたカードに視線を落とした。そして、そこに書かれているテキストを見て笑みを深くする。

ありがとう、と。わたしと母さんのために、此処までしてくれてありがとうと。万感の思いを込めて、そのカードをセットする。

「わたしが引いたカードは――――≪救世竜　セイヴァー・ドラゴン≫！」

「ッ！？　そ、そのカードは！」

「≪救世竜　セイヴァー・ドラゴン≫を召喚！　そして！　場のレベル８≪スターダスト・ドラゴン≫とレベル１≪レベル・スティーラー≫にチューニング！」

救世竜　セイヴァー・ドラゴン
チューナー
星１／光属性／ドラゴン族／攻　　０／守　　０
このカードをシンクロ素材とする場合、
「セイヴァー」と名のついたモンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

鬼柳はフェイトの召喚したモンスターを見て、驚いた表情を浮かべた。

何故ならば、それは遊星が以前、自らに対して使ったカードなのだから。

召喚された救世竜　セイヴァー・ドラゴンは透明になり、スターダスト・ドラゴン。
並びに場のレベル・スティーラーを包み込む。そして一つのリングに合計九つの光が一列に並ぶ。

そして、一筋の閃光がリングを打ち抜いた。

「仲間の想いが、ここに新たな奇跡を作る！　光さす道となれ！
シンクロ召喚！　救済せよ、≪セイヴァー・スター・ドラゴン≫！」

セイヴァー・スター・ドラゴン
星１０／風属性／ドラゴン族／攻３８００／守３０００
「救世竜　セイヴァー・ドラゴン」＋「スターダスト・ドラゴン」＋チューナー以外のモンスター１体
相手が魔法・罠・効果モンスターの効果を発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし、相手フィールド上のカードを全て破壊する。
１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター１体の効果を無効化できる。
また、無効化したモンスターに記された効果をこのカードの効果として１度だけ発動できる。
エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」１体を特殊召喚する。

「バカな！　そのモンスターは……！」

「≪セイヴァー・スター・ドラゴン≫の効果発動！
　１ターンに１度、相手の場のモンスター一体の効果を無効にし、自身の効果として一度だけ使用できる！
　サブリメンション・ドレイン！」

打ち抜かれた一筋の先攻から現れたのは、神々しいまでの美しさを持つ白いドラゴンの姿だった。
全身を鋭角的に進化させたそのドラゴン――セイヴァー・スター・ドラゴンは眼前の敵を睨みつける。

そしてフェイトの指示が飛び、地縛神の場に現れていたインヴェルズ・ホーンの身体が輝きだす。
その輝きは空を飛ぶセイヴァー・スター・ドラゴンに向けて放たれ、そのドラゴンは光を吸収した。

「さらに伏せカードオープン！　≪ゲシュタルト・トラップ≫！
　このカードは発動後、相手モンスターの装備カードとなり、装備モンスターの効果を無効にし、攻撃力と守備力を０にする！」

「な――ッ！？」

インヴェルズ・ホーンＡＴＫ３０００→０

「≪セイヴァー・スター・ドラゴン≫……。アナタが、その名に「セイヴァー」を持つのなら、お願い！
　母さんを――――母さんを助けてぇッ！　≪セイヴァー・スター・ドラゴン≫の攻撃！」

「――――ッ！　おのれ、小娘ぇえええええッッ！！」

「シューティング・ブラスター・ソニックッ！」

セイヴァー・スター・ドラゴンが効果を吸収し終えると、フェイトは伏せカードを発動させた。
そのカードは相手の効果を封じ、攻撃力と守備力を０にすると言う非常に強力なカード。

このカードの効果により、地縛神の場のインヴェルズ・ホーンの攻撃力は０になる。
地縛神の場に伏せカードは存在しない。つまり、攻撃を妨害されないと言うことである。

フェイトの命を受け、セイヴァー・スター・ドラゴンが翼を畳み、一筋の先攻と化す。
そして凄まじいまでのスピードをその身に宿し、相手の場のインヴェルズ・ホーンに特攻。

当然、インヴェルズ・ホーンは攻撃力が０であり、セイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃を受け止めきれない。
インヴェルズ・ホーンはセイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃を受け、爆散。超過ダメージが地縛神へと襲いかかった。

地縛神ＬＰ３７２５→０

第十七話　「救済」（後書き）

と言う訳で、ＶＳ地縛神編一旦終了です。
次は戦闘後の鬼柳さんたちのお話。アルフやユーノも出るよ。

第十八話　「仲直り」（前書き）

今回はちょっとした閑話みたいな話です。
話が進むのは次から。

第十八話　「仲直り」

～時の庭園　某所～

「母さんッ！」

フェイトの召喚したセイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃が、地縛神に命中する。
その姿を光の弾丸と化したセイヴァー・スター・ドラゴンの攻撃を受け、コースは爆発。

濛々と立ち上る土煙の中に、地面に横たわる母親の姿を見つけ、フェイトは居てもたっても居られなくなった。
鬼柳の操るＤホイール――ギガントＬが停車すると同時、彼女は慌てた様子で母親の元へ駆けて行く。

鬼柳もまた、ギガントＬを原っぱの適当な場所に停めると、フェイトの後を追ってプレシアの元へ向かった。
そして見えてくるのは、瞼を閉じて意識を失っているフェイトの母親の姿。幸い、大きな怪我などは無い様だ。

「フェイトの母親は無事か……。
それよりも、なのはとフェイトは……」

地面に横たわるプレシアの容体を確認し、鬼柳はホッと安堵の息を

漏らす。
これならば、最後の瞬間にフェイトが立ち会うことが出来るだろう。
そして視線を外す。

次に鬼柳が向けたのは、今まで彼らがライディング・デュエルを行っていた時の庭園内部の原っぱ。
先のライディング・デュエル中に、仲間である高町　なのはや八神　はやてが敗北したのを思い出したのだ。

幸い、フェイトの尽力によって敗北と言う事態は免れたが、高速で移動するDホイールから落下したのだ。
その際の身体に加わる衝撃は計り知れない。急いでなのはとはやての元へ向かおうと、鬼柳はDホイールに跨る。

「あん？　鬼柳、何処行こうってんだい？」

「なのはとはやてを探しに……って、アルフ！？」

そしてヘルメットを被り、いざエンジンを掛けようとしたとき、彼の耳に女性の声が聞こえた。
鬼柳は女性の声に軽く答えながら、Dホイールのエンジンを掛ける。
しかし、すぐに女性の声に思い当った。

バッと振り返り、女性の姿を確認する。するとそこには、最後に会ったときと変わらない姿のアルフが立っていた。
否、しかもただ立っていた訳ではない。彼女の肩には一人の少女―
―はやてが担がれており、脇にはなのはが抱えられている。

どうしてアルフがこの場にいるのか。それにどうやってなのはとはやてを回収したのか。
色々と聞きたい事があったが、口を吐いて飛び出してくる言葉が無い。

そして鬼柳がアルフを見つめて目を見開いていると、もぞもぞとなのはとはやてが身じろぎした。

「うにゃ？　あ！　鬼柳さん！」

「なのは……ッ！？　無事、なのか？」

「え？　あ、うん。大丈夫だよ。ユーノ君に治してもらったんだ」

「あはは。お疲れ様、鬼柳」

「ユーノ！」

アルフの脇に抱えられていたなのはが身じろぎし、ムクリと身体を起こす。
すると鬼柳の目に飛び込んできたのは、Dホイールから落下しても怪我をした様子のないなのは。

同様にはやても身体を起こし、鬼柳に向けて笑顔とサムズアップを向けてくる。
まさか走行中のDホイールから落下して無事だとは鬼柳も想像もしていなかった。

だが、彼女たちが無事な原因について説明され、アルフの肩に乗る小動物に視線を向ける。
するとそこには、つい最近まで行動を共にしていた異世界の住人――ユーノ・スクライアの姿が。

なのはやはやて、アルフの話を聞き、鬼柳はなのはたちが無事な原因を理解した。
ソレと言うのもフェイトがこの場に強制的に転移させられた後、ユーノを伴ってアルフも時の庭園にやってきたのだ。

だが、視界に入るのは青い炎によって区切られた時の庭園の様子。
ひとまず青い炎を飛び越えて中の様子を確認したらしい。
するとギガントLに乗ってライディング・デュエルを行う鬼柳達の様子が見え、そのまま鬼柳達の後を着いて行った様だ。

そしてデュエル終盤、はやてが落下したのを見てアルフが慌てて彼女を回収。
一度地面でバウンスしたせいか、はやての身体には多大なダメージが残っていたらしい。

大きなダメージを受けたはやてを抱え、アルフは共に来ていたユーノに治療を頼む。
ユーノの本分は結界や治療などのサポートである。これにより、はやては一命を取り留めた。

その後、再び落下したなのはを回収しまたも治療を施す。そしてデュエルを皆で見守っていた。
そしてフェイトがプレシアを乗っ取った地縛神にトドメを刺し、ようやく安心して追いついたらしい。

「そうか……。……ユーノ、済まない。助かった」

「うぅん、気にしないで。僕は僕がやれることをやっただけだから」

「それでも、礼を言う。ありがとう」

鬼柳は事の次第をアルフやなのはから聞き終えると、Dホイールから降りてユーノに礼を言う。
あの時はデュエルを中断する訳にも行かず、心苦しい思いをしていたのだ。

下手をすれば、なのはやはやてが死んでいたかもしれない。そんな二人を助けてもらい、鬼柳はありがたい思いだった。
ペコリと鬼柳が頭を下げれば、ユーノがあわあわと慌てている。そんなユーノの様子に苦笑すると、下げていた頭を鬼柳は上げた。

「くっ……ふふ。やって、くれた……な……」

「！　フェイト、離れろ！」

そして緊張から解き放たれ、ようやく一息吐いたとき、時の庭園にそぐわぬ声が響いた。
声が聞こえたのはフェイトとプレシアの居る場所。その声に聞き覚えがあり、鬼柳は振り向く。

するとそこには、よろよろとおぼつか無い足取りで立ちあがってい

るプレシア――否、地縛神の姿。
鬼柳は咄嗟にフェイトに離れる様に告げると、彼女の前に立って地縛神をキッと見据える。

「案ずるな、鬼柳　京介。結果はこちらの敗北だ。……今回は、な」

「……なんだと？」

「ククッ。これを見るがいい」

鬼柳に鋭い視線を向けられながらも、地縛神は涼しい顔で彼を見据えた。
そして静かに目を閉じ、自身が敗北したと鬼柳に告げる。それに鬼柳は訝しげな表情を浮かべた。

そして地縛神が掲げたのは、自らを象徴する「巨人」のアザが浮かんでいるプレシアの腕。
その腕には未だ「巨人」を象徴するアザが浮かんでいる。しかし、徐々にそのアザが薄れてきたのだ。

「ッ！　アザが……消えるだと！？」

「この女は所詮、人形だ。
次に会い見えるとき、我は本物のダークシグナーを従えているだろう」

「本物……。と言うことは、このアザは偽物か……」

「左様。では、さらばだ。鬼柳　京介」

徐々にプレシアの腕から薄れて行くアザに、鬼柳は戸惑った表情を浮かべた。
通常、ダークシグナーは闇のデュエルに敗北した場合、問答無用で消えてしまう。

勿論、腕のアザだけ先に消え、その後身体が消滅すると言うことは無い。
しかし、今の彼の視界の先ではプレシアの腕のアザが消えて行く。
これはあり得ない。

そして次に告げられた地縛神の言葉に、鬼柳は得心の言った表情を浮かべた。
プレシアはただ、地縛神によって操られていただけだ。「蜘蛛」のアザの効果によるものと同じ様に。

だが、おかしいことが一つある。「巨人」のアザには他人を操る効果は無かったはずなのだ。
これは一体どういうことなのか。鬼柳が内心で訝しんでいる中、プレシアの腕から「巨人」のアザが消えて行く。

「――ッ！　母さん！」

そして完全にプレシアの腕から「巨人」のアザが消えると、プレシアは意識を失い、地面に倒れる。

その様子を見てフェイトが慌ててプレシアの元へ駆けて行く。同様にアルフもプレシアの元へ駆けて行った。

鬼柳もまた、なのはやはやてがやってくるのを待ってから、プレシアの元へ足を進める。

彼の視線の先には地面に仰向けに横たわるプレシア。フェイトの攻撃により薄汚れているが、身体に異常は無い。

闇のデュエルに敗北し、時間が経ったが消える様子は微塵も見られない。その様子に、鬼柳は嬉しそうに拳を握った。

「鬼柳さん、やったね！」

「せや！　フェイトちゃんのお母さん、助けられたで！」

「なのは……。それに、はやても……」

「わたし……とっても満足だよ！」

「わたしも、とってもとっても満足やで！」

と、鬼柳が嬉しそうに拳を握っていると、なのはがその拳をギュッと握った。

次いで、空いている方の手もはやてがギュッと握る。両手をなのはとはやてに握られた。

それに鬼柳は目をパチクリとさせるが、告げられた言葉にニヤッと笑みを浮かべる。

あぁ、そうだ。自分は地縛神を倒すことは出来なかったが、フェイトの母親を救うことが出来た。

ダークシグナーとなった者を救うこと。それが鬼柳の現在の目的である。

それをある種、達成する事が出来た。それを自覚すると、言い様のない満足感が生まれる。

「……あぁ、そうだな」

「鬼柳さん」

「鬼柳兄ちゃん」

「ん……」

鬼柳は緩む頬をなんとか抑えながら、二人の言葉に同意した。

すると、なのはとはやてがグッと拳を突き出してくる。何をしているのだろう。

そう内心で疑問に思うが、すぐにその拳の形に思い至った。

なのはとはやては拳をぶつけ合い、ジィッと鬼柳を見つめている。

拳と拳をぶつけ合う。それはチームサティスファクションで行われている動作だ。

鬼柳はなのはとはやての合わさっている拳と拳の間に自身の拳をコツンとぶつけ合う。

形はまるでアルファベットのTだ。これであと一人入れば十字。いつものマークになる。
だが、もう一人の候補であるフェイトはプレシアの無事を喜んでいる。それを邪魔するのは無粋だろう。

だからまずは、三人だけで満足する。チラッと視線をなのはとはやてへと向ける。
誰もが皆、嬉しそうにニコニコと笑顔を浮かべていた。なんとも満足そうな表情だ。

「なのはとはやて……。
……いや、二代目チームサティスファクション――――さいっこうだぜッ！」

「さいっこうなのッ！」

「さいっこうやぁッ！」

そして掛け声とともに、鬼柳達は突き合わせた拳を天へと伸ばした。

※

「う、うぅん……」

鈍い身体の痛みによって、プレシア・テスタロッサは意識を覚醒させた。
ぼんやりとした彼女の視界に飛び込んでくるのは、見慣れぬ部屋の天井である。

だが、しばし天井を見つめていると、その天井が時の庭園内部のとある一室の物だと思い至った。
どうしてこの部屋で眠っていたのだろうか。ぼんやりと天井を見つめながら考えていると、眠る前の記憶が思い出される。

「――――ッ！　フェイト！」

「静かにしてな。起きちまうぜ」

「！　アナタ……」

プレシアの脳裏に浮かんだ記憶。それは涙を流し、不安そうな表情を浮かべる娘の顔だった。
慌ててベッドから起き出し、フェイトの元へ向かおうとする。そんなプレシアを聞き慣れぬ声が遮った。

一体誰が。一瞬、身体を強張らせ、声が聞こえてきた方へと視線を向ける。

するとそこには、灰色のロングコートを脱いでシャツ一枚と言う薄着姿の男性が居た。

彼はたしか、元ダークシグナーと言っていた鬼柳　京介。彼の手元には脱いだばかりのコートがある。

鬼柳はコートを持ち、プレシアの眠っているベッドまで歩み寄る。

そしてある人物にそのコートを掛けた。

「！　フェイト……」

「此処に運んでから、ずっと看病してたんだ。疲れてる筈なのにな」

「……そう」

そのある人物とは、プレシアの愛娘の妹にして最愛の娘――フェイト。

彼女はベッドに寄りかかる様にして眠っており、すっかり安堵した様な寝顔を浮かべている。

そして鬼柳から告げられた言葉を聞いて、プレシアは申し訳ない様な気持を抱いた。

元はと言えば、自分が悪いのだ。フェイトの出生を隠し、フェイトを拒絶しようとしたから。

だが、こうして自分の元へやってきてくれたのが嬉しい。フェイトには沢山悲しい思いをさせてしまった。

なら、今度は沢山楽しい思い出を作ろう。そうやって、フェイトに対する贖罪をしなければならないのだから。

サラサラと手触りの良いフェイトの髪を撫でながら、プレシアは心の中でそう思う。
まずはゆっくりと休んで疲れを取って欲しい。そうしたら、まずは沢山お話をしよう。

「……良い娘だな」

「……そうね。自慢の……娘だわ」

「……そうか」

しばし室内に沈黙が降りる。だが、その沈黙は居心地が悪い物ではない。
母親が眠っている我が子の寝顔を見つめている様な。何処か暖かさを感じさせる沈黙だ。

そして鬼柳とプレシアが眠っているフェイトを十分ほど見守っていると、フェイトがもぞもぞと身じろぎする。
どうやら眠りから覚めた様だ。ぼんやりとした瞳でキョロキョロと周囲を見渡し、起きているプレシアを見て目を大きくする。

「か、母さん……？」

「えぇ、おはよう。フェイト」

「か、母さんだ……。元の、母さんだ……」

「ふぇ、フェイト……？」

「……っく。ぐす……。う、うわぁあああんっ！」

「きゃ！」

フェイトは起き上がっているプレシアを見て、彼女が本物のプレシアかどうか確かめる。
そしてプレシアが本物のプレシアだと理解したのだろう。そのクリクリとした瞳に、大粒の涙を溜める。

突如泣き出しそうな様子のフェイトにプレシアは慌てるが、当のフェイトは待っていられない。
いつの間にか流れ出してしまった涙を拭うこともせず、プレシアの胸へと飛び込んだ。そして大声で泣く。

プレシアは突然のフェイトの大胆な行動に目を見開いたが、すぐに優しげな笑みを浮かべると彼女の背を撫でた。
悲しい思いをさせてごめんなさいと。助けてくれて、ありがとうと。
二つの思いを込めて、プレシアはゆっくりと撫でる。

その間、鬼柳はただ嬉しそうにプレシアとフェイトの抱擁を見守っていた。と、何処からか視線を感じる。
何処からだろうか。不審に思い、プレシアはフェイトを抱いたまま視線を左右に動かした。すると見つかる６つの瞳。

「（！　アルフ……！）」

「（うんうん。元のプレシアみたいで安心だよぉ～）」

その瞳の中の二つに見覚えがあり、プレシアは念話で覗いている人物へ話しかける。
するとその人物――アルフからはニヤニヤとした嬉しそうな声が返って来た。

アルフの言葉を聞き、プレシアは念話でありがとうと告げる。今までフェイトと共に居てくれて。
きっとフェイト一人では、寂しさのあまり壊れてしまいかねなかった。それを防いだのはアルフなのだ。

するとアルフからは「やめなってば、照れくさい」等と言う言葉が返ってくる。だが所詮、照れ隠しだ。
なんとも素直ではない娘の使い魔の様子にプレシアは苦笑し、よしよしとフェイトの背を撫でて落ち着かせる。

そしてフェイトが泣き出してから五分ほど経過し、ようやくフェイトが落ち着きを取り戻したようだ。

「あぅう……。は、恥ずかしいよ……」

「良いじゃねぇか。俺のことは気にしないでも良いんだぜ？」

「だ、ダメだよ！」

「ふふ」

フェイトは頬を真っ赤に染めて、恥ずかしそうな視線を鬼柳へと向けている。
どうやら、泣いている顔を鬼柳に見られたのが恥ずかしい様だ。なんとも可愛い反応である。

鬼柳はそんなフェイトの反応に笑みを浮かべると、フェイトに自分のことは気にするなと告げる。
しかし、その言葉にフェイトが反論。気にするなと言われても気になってしまうのが人の性と言うものだ。

「……ねぇ、フェイト」

「？　どうしたの、母さん」

「アナタに……言わなければならない事があるの」

しばし鬼柳とフェイトのやり取りを眺めていたプレシアが、意を決したように口を開いた。
彼女が浮かべる表情は、真剣そのもの。彼女のその表情から、真剣な話が始まることを予感させる。

そしてフェイトがコクリと頷き、ベッドの上にチョコンと正座する。
なんとも愛嬌のある姿だ。
プレシアはフェイトのその仕草に内心でグッと来るものを感じながら、フェイトに向けて話し始めた。

それは地縛神と鬼柳のデュエル中、自身が思い出した記憶の全て。
つまるところ、フェイトの出生に関してだ。
当初こそ冷静な様子を見せていたフェイトだが、徐々にその表情が険しくなっていく。プレシアにしても心苦しい。

しかし、プレシアは決めたのだ。ちゃんとフェイトと仲直りしようと。ちゃんと家族になりたいと。
だからこれは、避けては通れない痛み。苦しさ。この辛さを乗り越えた先でフェイトと家族になれるなら、甘んじてその苦痛を受けよう。

「――――これが、アナタに関する全てよ」

「……やっぱり、わたしはクローンなんだね」

「えぇ。だけど、たとえアナタがクローンでもわたしの娘に違いは無いわ」

「母さん……」

フェイトのことについて話し終え、プレシアはジッとフェイトの顔を見つめた。
彼女のその表情は暗い。だが、当たり前か。自分の出生が人のソレとは違っていたのだから。

だが、それの何処が悪いと言うのだろうか。たとえ人と違う生まれをしていても、彼女は自分の娘。
そこに生まれや育ちは関係ない。ここにある事実はただ一つ。まだ

プレシアはフェイトの母親であると言う事だ。

「ごめんなさい、フェイト。
アナタには、辛い思いをさせてしまうわね……」

「……母さん」

「こんな母さんを……許してくれるかしら？」

今にも泣き出してしまいそうなフェイトを抱き締め、プレシアは静かに謝罪する。
自分はフェイトの出生に関して差別などはしない。しかし、他人がどう思うかは別だ。

人間とは、数多くある普通の中に少数の異端が紛れ込むのを極端に嫌がる。
フェイトの出生もまた、少数の異端として扱われるだろう。どんな困難が待っているか分からない。

だからフェイトが自らを責めようと言うのならば、甘んじてそれを受け入れよう。
そうするだけの権利が、彼女にはある。自身を罵倒し、傷つけるだけの理由があるのだから。

「……うん、良いんだよ。母さんが元に戻ってくれただけで……良いんだ」

「フェイト……！」

そして返ってきた答えに、とうとうプレシアの瞳からも大粒の涙が零れる。
こんなにも傷つけて辛い思いをさせてしまったのに、フェイトは自分の無事を喜んでくれる。

それが堪らなく嬉しくて。それが堪らなく申し訳なくて。プレシアはただ、フェイトをギュッと抱きしめた。
フェイトが「苦しいよ、母さん」と慌てているが、止められない。
ただ、プレシアは自分の娘に感謝を知らせたかった。

※

「ん。憑き物が落ちた様な、そんな顔してるね」

「アルフ。心配かけたわね」

「まったくだよ。でも、結果オーライだからね」

「ふふ。ありがとう」

プレシアが泣き出し、フェイトも釣られて泣き出した３０分後。
先ほどまでプレシアが眠っていた部屋には、新たな人影がチラホラと見受けられた。

そのうちの一人――アルフはベッドの脇に腰掛けると、プレシアの顔を覗き込んでくる。
無遠慮なその行動に当初こそ文句を言うプレシアだが、すぐに嬉しそうな表情を浮かべるのだ。

アルフもまた、プレシアの無事を心配していた一人なのだから。
口にこそ出さないが、アルフもプレシアの無事を喜んでいるのだろう。

「それにしても、フェイトも随分懐いたみたいだ」

「そうね。良い傾向だと思うわ」

「……だね」

そして一しきり軽口をたたき合うと、二人の視線は部屋のある場所へと移される。
そこは部屋の隅――洗面台のある場所だ。そこに鬼柳やフェイト、なのはにはやてが居る。

そんなお子様メンバーの集まっている中、鬼柳はフェイトを抱きあげると自身の膝の上に乗せた。

そしてなのはとはやてから洗面器とタオルを受け取ると、洗面器に貯めた水にジャブジャブとタオルを浸す。

「わ！　わ！」

「暴れるなよ？」

「あぅううう……」

「うぅ～……。フェイトちゃん、可愛いの」

「あわあわ慌てとるフェイトちゃん、えぇなぁ」

水に浸したタオルの水気を切ると、鬼柳はフェイトの顔をタオルで無遠慮に拭いた。
フェイトは何処へ行くのか見当もつかないタオルの行動に右往左往している。

そんなフェイトの様子に気がついた鬼柳が一声かければ、フェイトはチョコンと静かになった。
しかし相変わらず声は出ている様で、恥ずかしそうな声をあげている。だが、無理もない話かもしれない。

今のフェイトが居る場所は胡坐を掻いている鬼柳の膝の上。彼女の背中に鬼柳の胸の感触がダイレクトに伝わる。
それに加え、青年とは言え異性に顔を拭かれると言う初めての事態に、フェイトは戸惑いっ放しだ。

「ほら。サッパリしたろ？」

「えと、うん。……ありがとう、鬼柳」

「気にするな」

そして一しきりフェイトの顔を拭き終えると、フェイトの顔からタオルが離れた。
先ほどまで涙と鼻水でグショグショだったフェイトの顔は、今やスッキリとしている。

泣いて赤くなってしまった眼も落ち着いた様だ。上目遣いで鬼柳を見やりながら、フェイトは礼を言う。
そんな様子のフェイトに鬼柳は笑みを浮かべると、ワシャワシャと乱暴にフェイトの頭を撫でた。再びフェイトが慌てる。

「良い顔してるな」

「もぅ。鬼柳ったら……って、え？」

「初めて会った頃より、かなりいい顔をしている。
……今の顔の方が俺は好きだな」

「――――～～ッ！？」

「にゃ！　フェイトちゃんの頭からキノコ雲が！」

「核弾頭クラスの衝撃やと！？」

鬼柳は一しきりフェイトの頭を撫で終わると、彼女の頭から手を離した。
彼の視線の先では、ぶつくさと文句を言いながら髪を整えているフェイトが見える。

今の彼女の表情に以前までの不満足そうな感情は含まれていない。
今はただ、満足している。
鬼柳が内心でそう思っていると、思っていたことが口を着いて出てしまったようだ。それにフェイトは慌てる。

どうしてフェイトが慌てているのか分からないが、また違った様子を見せるフェイトに鬼柳は笑みを浮かべた。
フェイトを満足させるために頑張っていたが、結果としてプレシアまで満足させる結果になってしまった。

しかし、結果として二人の親子は仲直りする事が出来たのだ。なんとも嬉しい誤算である。
もっと、もっと沢山フェイトやなのは。それにはやての満足する顔を見たい。

鬼柳はそう心の中で思うと、挙動不審気味なフェイトに苦笑しながら声を掛けるのであった。

「……初恋が年上って、どうだい？」

「悪くは無いんじゃないかしら？」

「「それはダメ（や）ー！！」」

※

「……ふむ。計画は失敗か……」

時空管理局本局のとある一室。薄暗い室内に、その人物は居た。歳を取っているのか。その人物の顔には深いしわが刻みこまれている。

そして目を引くのが、彼の口元を走る髭だった。硬質ではない。柔らかさを感じさせる。

時空管理局の制服に袖を通したその人物は、腕に宿るアザ――巨人のアザだった――から視線を外す。

「出来れば協力者が欲しかったが、仕方あるまい。計画は今のままで続行しよう」

「巨人」のアザが浮かぶ腕をシャツで隠しながら、その人物は物思いに耽った様に呟いた。
今回の計画が成功していれば、有能な魔導師が二人ほど手に入る予定だった。しかし、失敗した。

不確定要素は消すべきなのだが、生憎と今は自由に動ける暇が無い。
彼の使い魔はとある少女の監視をしているのだから。
無理に使い魔を動かせば、その少女の監視が疎かになってしまう。
そして万が一にも「ある物」の存在が公になったら不味い。

「まずはアリアかロッテに計画の失敗を伝えなければ……」

第十八話　「仲直り」（後書き）

次回は舞台を海鳴に戻します。
プレシアさんも復帰。地球のジュエルシード集めに戻ります。

第十九話　「平穏」（前書き）

今回は閑話的なお話です。
微妙に管理局登場フラグが立ちました。

第十九話　「平穏」

～海鳴市　某所～

「≪サイレント・マジシャンＬｖ８≫で攻撃！
サイレント・バーニング！」

『ハァッ！』

大人の女性の姿となったサイレント・マジシャンが手に持った小さな杖を振るう。
すると杖の先端に禍々しい色の球体が出現。その球体が僅かに帯電すると、前方へと放たれた。

彼女の前方に居るのは、不死鳥をモチーフにしたモンスター――不死之炎鳥。
咄嗟に不死之炎鳥は反撃しようと口を開くが、放たれた攻撃の前に成す術もなくやられてしまう。

『■■■■～～ッ！』

不死之炎鳥が破壊されたことにより、不死之炎鳥を操っていたモンスターのライフが尽きる。
すると不死之炎鳥を操っていたモンスター――ジュエルシード暴走体の身体が薄く発光。封印される。

封印され、青い菱形の宝石が宙に浮かんだ。その様子を見て、なのはがホッとため息を吐く。
そしてすぐに腕に装着されているデュエルディスクをジュエルシードに向けた。ジュエルシードが飛んでくる。

「っとと。これで十六個目、確保なの」

「お疲れ様、なのはさん」

「お疲れ様」

「にゃ。ありがとうございます、プレシアさん。フェイトちゃん」

飛来してきたジュエルシードがデュエルディスクに格納されたのを確認すると、なのはは嬉しそうな笑みを浮かべた。
実体化していたサイレント・マジシャンをその場から消し、彼女は地上へと降り立つ。すると掛けられた二人の女性の声。

二人の女性――プレシアとフェイトは無事、なのはがジュエルシードを封印したのを確認していたのだろう。
どちらも安堵の表情を浮かべながら、なのはの無事を喜んだ。その様子に、なのはも笑みを零す。

先のなのはを含む鬼柳達と地縛神の決着の後、プレシアは意識を取り戻した。
当初はフェイトに対する自身への仕打ちを後悔していた様だが、鬼柳の言葉で立ち直り。

今ではこうして、地球のジュエルシードの回収を手伝ってくれるまでになっている。
なのはやフェイトでは危険なジュエルシードを回収する様だが、現在までその様なジュエルシードには出会っていない。

「ご苦労だな、なのは」

「鬼柳さん！」

なのはが嬉しげにフェイトとハイタッチしていると、彼女のすぐ背後から鬼柳の声が聞こえた。
視線を後ろへと向ければ、ユーノを肩に乗せた鬼柳が現れる。なのはは彼に駆け寄った。

そして鬼柳の元へと駆け寄ると、彼の手を嬉しげに握る。
鬼柳もまた、そんな様子のなのはを優しげに見つめていた。

「あらあら。まるでお父さんね」

「うぅ……。良いなぁ……」

鬼柳がワシャワシャとなのはの頭を撫でているのを見て、プレシアはポツリとそう漏らす。
実際、今の鬼柳は誰が見てもなのはの父親に見えた。年が離れているのも理由の一つかもしれない。

もしもこの状況をなのはの本当の父親が見ていたらどうなるのだろうか。プレシアは心の中でそう考える。
と、プレシアがそんな他愛のないことを考えていると、彼女のすぐ真横から羨ましそうな声が聞こえてきた。

チラ、と視線を下に下ろせば、そこには羨ましそうな表情で鬼柳となのはの様子を見ているフェイト。
どうも先の地縛神戦から鬼柳に懐いたようで、隙あらば鬼柳の周りをチョコチョコ動き回っている様だ。

プレシアはそんな羨ましそうな表情をフェイトを見つめながら、そう言えばととある事を思い出す。
ソレと言うのも、フェイトには父親と呼べる存在が居ない。親と呼べる存在はプレシアだけなのである。

だからこそ、鬼柳と戯れているなのはが羨ましいのかもしれない。
心の中でそう判断すると、プレシアはクスリと笑みを浮かべた。彼女の背を押す。

「いってらっしゃい」

「え？　で、でも……」

「大丈夫よ。鬼柳はアナタのことを邪険にしないわ。ね？　鬼柳」

「あぁ、邪険になんかしない」

「う、うん……」

プレシアがソッとフェイトの背を押せば、彼女は伺う様な視線をプレシアに向ける。
フェイトのそんな視線にプレシアはニコリとほほ笑むと、視線を鬼柳に向けて訊ねた。

彼女の視線の先では、鬼柳がなのはを背負っている。ぶらぶらと揺れるなのはの足が可愛らしい。
そしてプレシアの言葉に鬼柳は振り返ると、僅かに口元を緩ませながらそう返した。それにプレシアは頷く。

そしてフェイトは鬼柳に向かって駈け出す――――

「きりゅー！」

「ッ！？」

ガクリ。フェイトの舌ったらずなその言葉に、鬼柳の膝が崩れ落ちた。
鬼柳の膝が崩れたことにより、彼の背中に居たなのはがぶらぶらと揺れる。

その際にしっかりと首に手をまわしたせいで、鬼柳の首になのはの手が締まっている。
息が出来ず、首に多大な負荷がかかり、今の鬼柳はパニック状態だ。
慌てて体勢を整える。

そして鬼柳が体勢を立て直すのに五分を要した頃。鬼柳はその場でハァハァと息を吐いていた。
危なかった。あと数分でも体勢を整えるのが遅ければ、鬼柳は天へ召されていただろう。本当に危なかった。

「――――～～ッ！　は、鼻血が！」

「か、母さん！　鬼柳が！　鬼柳が大変だよ！？」

「違うわ、フェイト！　鬼柳のことはきりゅーと言うのよ！　忘れたの！？」

「！　そ、そうだった！」

ゲホゲホと咳き込みながら息を整えていると、プレシアの恍惚そうな声が鬼柳の耳に届く。
その内容を聞く限り、どうやら先ほどのフェイトの発言はプレシアの差し金らしい。なんとも迷惑なことだ。

現在も「きりゅー！　きりゅー！」と慌てているフェイトを宥めながら、鬼柳はジトっとした視線をプレシアに向ける。
するとプレシアからはサムズアップが返ってきた。一体何がグッドなのか。さっぱり分からず、鬼柳はハァと小さく嘆息した。

「どうかしら、鬼柳。これが――「萌え」と言うものよ！」

「知るか」

プレシアが拳を握りながら熱弁を振るうのを、鬼柳はジトっとした視線であしらう。
そしてフェイトにそんな舌ったらずな言葉は止めろと告げ、鬼柳は背負っていたなのはを下ろした。

なのはは鬼柳の背中から降りるのを渋ったようだが、なんとか説得に成功して下ろす。
次にフェイトの頭をポンポンと撫でると、フェイトが嬉しそうに笑みを浮かべた。

「鬼柳。さっき凄い音がしたんだけど、どうかしたのかい？」

「プレシアのいつもの病気だ」

「あぁ、なるほど」

「ちょっと！　病気ってを言っているの！」

しばしフェイトの頭をグリグリと撫でまわしていると、森の奥からアルフが現れる。
手には小枝や木の葉が握られており、いつでも焚火を行うことが可能だ。

アルフは焚火に使用する薪を地面に置くと、コテンと首を傾げながら鬼柳に訊ねる。
それに鬼柳は、小さくため息を吐きながら返した。アルフは鬼柳の

言葉に納得した様に頷く。

プレシアはフェイトとの和解の後、タガが外れた様にフェイトを溺愛する様になったのだ。

事あるごとにフェイト、フェイトと口にし、フェイトによからぬ知識を与えようとするのだ。

以前はわざとサイズの大きい服（大人用の服）を着け、裾を引きずりながら歩く等と知識を与えた。

服の裾を引きずりながら走るフェイトの様子は可愛らしく、プレシアとはやてが鼻を抑えていたのを覚えている。

「フェイトの可愛い姿を見て、わたしは満足したいのよ！」

「いや、まぁ……。可愛いっちゃ可愛いんだけどさ……」

プレシアはグッと握り拳を作りながら、いかに自分が満足したいか鬼柳に熱弁を振るう。

最愛の娘――アリシアを失った後、プレシアに残されたのは彼女の妹とも呼べるフェイトだけなのだ。

そんなフェイトの可愛い姿を見たいと言うのは当たり前だろう。分からなくもない感情に、鬼柳は眉を顰める。

チラ、と視線をアルフへと移してみれば、彼女も鬼柳と同様に眉を顰めながらある程度プレシアの言葉に同意した。

「な～んかフェイトが幼児化している様な気がするんだよね」

「そうかしら？」

「この間のお祭りのことなんか酷かっただろ」

「あぁ……。あれは可愛かったわ……」

鬼柳の言葉に、プレシアは再び恍惚とした表情を浮かべる。
話は地縛神との闘いを終えて数日後の時の庭園。そこで今後の話をしたのだ。

無事、ジュエルシードを集め終えたら何をしようか。なのはやはやてと集まり、皆で話し合っていた。
そんな折だ。プレシアがフェイトに余計な知識を与えたのは。結果として、フェイトはお祭りを酷く恐怖してしまったのだ。

『おまつり怖い！　おまつり怖い！』

『ふぇ、フェイト？』

『おまが怖いよ！』

『おまって……』

フェイトはプレシアの吐いた嘘により、お祭りを「おま」と言う生物を釣る事だと勘違いしたらしい。
その時のフェイトの怯え様は余りにも凄まじく、恐怖のあまりトイ

レやお風呂にすら鬼柳を連れ込もうとしたほどだ。

当時のことを思い出し、鬼柳は深々とため息を吐く。プレシアの冗談にも困ったものだ。

こう言うのはクロウの役目と思いながらも、こうして子供たちと遊ぶのも嫌いではない自分が居る。

なんとも矛盾した自身の考えに煮え切らない表情を浮かべながら、鬼柳は視線をアルフへと移した。

すると彼女はコクリと頷き、地面に集めた薪に魔力を使って火を灯す。小さな種火は、徐々に大きくなっていく。

「ま、なんにせよ後は五個なんだ。無事集め終える記念でもしようか」

「賛成です、アルフさん！」

「まったく。気が早いわよ」

「でも、良いじゃねぇか。後の五つは固まってるらしいからな」

「まぁ、それもそうなのだけれど……」

そしてある程度火の勢いが収まると、アルフは用意していた肉や野菜を刺した串を取り出した。

今日は後に残りのジュエルシードを回収するために、英気を養おうと考えたのだ。

その結果、思い至ったのはバーベキューと至極簡単な物。
サテライトではこんな豪勢なバーベキューをした事が無く、鬼柳は内心でハラハラだ。

なのはたちが肉の焼ける良い匂いを嗅いでいるのを尻目に、鬼柳はドカッと近くの木の根元に腰を下ろす。
そしてパチパチと木の焼ける音を聞きながら、鬼柳はジュエルシードを回収し終えた後の未来を想像することにした。

「（……なのはやはやてを誘って、バカ騒ぎするのも悪くないかもしれないな……）」

思い浮かべるのは、サテライトで一番輝いていた時期と言っても過言ではない時間の記憶。
チームサティスファクション。当時の鬼柳の生き甲斐で、当時の鬼柳の全てと言っても過言ではなかった。

その生き甲斐だったと言えるチームサティスファクションを、この地でもう一度再結成する。
悪くない。鬼柳は心の中でそう思った。なのはやはやても未だ現状に満足できている様子は見受けられない。

なら、皆でドでかいことをやって満足しようではないか。今度は過ちを繰り返さない様に。
今度はキチンと心の内を吐き出す。皆と話し合い、今後の活動方針を決める。そして、満足したい。

「なにを考えていたの？」

「……これからに、ついてだ」

「これから？」

「あぁ。ジュエルシードを集め終えたら、なのはやはやてとバカ騒ぎするのも、悪くないって思ってな」

「あら、それは素敵ね」

これからの計画を頭の中で練っていると、ポスンと鬼柳の隣のプレシアが腰を落とした。

膝を崩し、上品な姿勢で鬼柳のことを見下ろす。その姿はまるで絵画に出てくる貴婦人そのものだ。

心の中でこうしていれば美人なのにと思っていると、プレシアがソッと口を開いた。

鬼柳はプレシアの問いかけに静かに答える。未来を想像すれば、それだけでワクワクした。

チラ、と視線を焚火でバーベキューをしているアルフやなのは、フェイトに視線を向ける。

三人とも、誰もが楽しそうな表情でバーベキューを楽しんでいた。

鼻や頬にソースを付けるのは頂けないが。

「現状、まずはなのはとはやてで――」

「あ、なら追加メンバーの発表ね」

「……？　なに？」

「わたしとフェイト。あとついでにアルフも参加よ」

「！」

鬼柳が前方でバーベキューを楽しんでいる三人に視線を向けていると、唐突にプレシアが言葉を遮った。
彼女の言った言葉の意味が理解できず、鬼柳は訝しげな視線をプレシアへと向ける。すると彼女はニコリとほほ笑んだ。

どうせチームを組むのなら、大勢で組んだ方が楽しいに決まっている。それにプレシアとて、まだ満足した訳ではない。
もっとフェイトと仲良くなりたい。もっとフェイトの事を知りたい。
それを実行するのにチームサティスファクションは最適だと思えた。

それにせっかく出来たフェイトの友達。彼女たちをフェイトから引き離すと言うこともしたくは無かった。
ふふんと得意げな表情で鬼柳に視線を向ければ、彼はポカンとした表情を浮かべている。だが、すぐに口元に笑みを浮かべた。

「どうせなら、大勢でやった方が楽しいのではなくて？」

「……あぁ、そうだな。皆でドでかいことをやって――満足しようぜ！」

「決定ね」

鬼柳の決意の言葉に、プレシアは嬉しそうに頷いた。
そして鬼柳もまた、未来で起こす彼らのドでかいことを想像し、ニヤリと獰猛な笑みを浮かべるのだった。

※

次元空間を移動できる次元空間航行艦船アースラ内部。
広々としたブリッジに、一人の女性が足を踏み入れた。

年の頃は二十代ほどだろうか。腰まで届く翡翠の髪に、優しさを感じさせる瞳。
何かの制服のようなものに身を包み、その女性は中央に配置してある艦長席に手を置いた。

「みんな、どう？　今回の旅は、順調？」

「はい。現在、特に異常はありません」

「失礼します。リンディ艦長」

ブリッジ中央に配置されている艦長席に腰掛けながら、女性はクルーに問いかけた。

クルーは目前のディスプレイに視線を向けながら、滞りなく艦長―リンディ・ハラオウン―に応答する。

リンディはそれに満足そうに頷いていると、不意に隣から声が聞こえた。

視線をそちらに向ければ、紅茶の入ったカップを運んできているクルーの一人。

「ありがとね、エイミィ」

「いえいえ」

リンディはカップを運んできたクルー―エイミィ・リミエッタ―に微笑むと、カップを口に運ぶ。

エイミィはそれに微笑むと、自分の持ち場に戻るために艦長席から踵を返す。

遠ざかるエイミィの背中を見送ると、リンディは運んでもらった紅茶を口に含む。

少しばかり甘みが足りないが、飲めないほどではない。だが、やはり角砂糖をもう少し入れたい。

「それにしても、ちょっと厄介なのよね。遺跡から発掘されたロストロギアがばら撒かれたと言う報告もあるし……」

「大丈夫。分かっていますよ、艦長」

ズズズと紅茶を啜りながら、リンディは「はぁ」と嘆息した。
以前に事故でロストロギアをばら撒いたと報告があったが、回収部隊が向かっていない。

現状でアースラが一番その世界に近いという理由もあるのだろう。
そのような理由もあり、リンディたちは第97管理外世界―地球―へと向かっている。

そしてそんなリンディの呟きに答えるように、ブリッジにいた少年が答えた。
年の頃はまだ十代前半だろうか。幼い顔立ちながらも、真剣な様子が見られる。

「僕は、そのためにいるんですから」

「まったく。私の息子ながら、クロノは可愛くない……」

「かあ……艦長！」

その少年は手に持ったカードに視線を向けながら、リンディに向けてそう告げた。

少年が持っているカードは、デバイスと呼ばれるもので、今は待機形態を取っている。

リンディはそんな少年の報告に笑みを浮かべるが、すぐに眉を顰めながら呟いた。
その呟きは少年にしか聞こえないように配慮されており、少年は顔を真っ赤に染める。

そんな少年―クロノ・ハラオウン―の様子を、クルーは「なんだ」と見つめるが、すぐに興味をなくした。
リンディが自分の息子を弄る事はたまにあり、下手に首を突っ込めばクロノの怒りを買ってしまう。

それから暫くの間、アースラのブリッジでクロノは顔を真っ赤にして憤慨していた。

※

「こんにちは、はやてさん」

「あ、いらっしゃい！」

先ほどジュエルシードを封印した森から場所を移し、現在地は海鳴市内の八神家。
プレシアが慣れた様に八神家の扉を開くと、廊下の奥から車いすに乗った少女が顔を覗かせる。

この少女こそがこの八神家の主である少女――八神　はやて。
彼女は慣れた仕草で車いすを動かし、玄関の扉を開けたプレシアの元へ向かう。

「お買い物してきたの。皆で食べましょう？」

「ほんまですか！？　すっごく嬉しいです！」

「うふふ。どういたしまして」

プレシアははやてが近くまで来るのを待ってから、手に提げているビニール袋を掲げて見せた。
その中には大小様々な種類の食材が詰め込まれており、三～四日ほどの食料を買い込んできたのが分かる。

そしてプレシアから告げられた「皆で食べる」と言う単語にはやてが人一倍反応を示した。
パァッと花が咲く様な笑みを浮かべ、歓喜の表情を浮かべている。
その様子にプレシアが笑みを零した。

はやてはプレシアから食材の詰まったビニール袋を受け取ると、いそいそとキッチンへと向かう。

プレシアはキッチンへと消えたはやての様子に、再び口元を緩ませるのだった。

「鬼柳兄ちゃんやなのはちゃん、それにフェイトちゃんはどうしたんです？」

「心配しないでも、三人ともすぐに来るわ。
大方、鬼柳をなのはさんとフェイトが取り合っているのね」

「あはは。想像できます」

キッチンへと辿りついたはやては、いそいそとビニール袋の中の食材を冷蔵庫へ放り込む。
冷蔵庫の中には、以前よりも数多くの食材が詰め込まれていた。中にはビールなどの酒類も入っている。

ソレと言うのも、この冷蔵庫ははやてとプレシア達テスタロッサ一家の兼用使用なのだ。
なにせプレシア達は現在、八神家に居候しているのである。これには鬼柳も驚いた様子だった。

だが、プレシアが訳を話せば鬼柳も納得してくれた。理由としては、はやての保護者にある。
はやては現在両親はおらず、一人でこの家を切り盛りしている。しかし、はやては未だ子供である。

キチンとした保護者が何時の日か必要になるだろう。それまでの間、プレシアがはやての面倒を見ることにしたのだ。

元来からの子供好きの面もあったが、フェイトの友達であり自身を救ってくれた一人である少女を一人きりにさせたくなかった。

その旨をはやてに告げればはやては諸手を挙げて賛成。家族が増えると嬉しそうにはしゃいでいたのだった。

その後、戸籍や身分証明などを偽造で手に入れ、プレシア達は今や晴れて立派な地球人の一人として生活している。

「はやてさんも、争奪戦に参加しなくて良いの？」

「あはは……。なのはちゃんの他にフェイトちゃんも相手したくありません……」

「まぁ、それもそうね」

冷蔵庫に食材を詰め終わり、はやてがパタンと冷蔵庫を閉じた。それと同時に話しかける。

話題は現在、八神家に居ない鬼柳達のこと。それを話題に出すと、はやてが困った様な表情を浮かべた。

出来ればはやても鬼柳を独り占めして沢山甘えたいのだが、なのはの他にフェイトも相手をするのは疲れる。

罠や策略を張り巡らそうにも、子供のうちでは出来る事も限られている。結果として、はやてはこの場で大人しくしているを選んだのだ。

「そう言えば、鬼柳が二代目チームサティスファクションを結成す

るみたいね」

「あ、聞いてます。メンバーはわたしとなのはちゃんだとか……」

「それプラス、私たちもよ。サプライズメンバーね」

「ほ、ホンマですか！？」

はやてがリビングへと移動し、テーブルの上にあった湯呑みを手に取る。

湯呑の中のお茶は冷めており冷たいが、はやてはそれを気にすることなく飲み干した。

と、プレシアの口から飛び出した言葉に、はやてはぴょこんと眉をはね上げた。

その内容とは、鬼柳が二代目チームサティスファクションを結成するとの事である。

これは勿論はやても知っており、真っ先にメンバーへ立候補したのだ。

この狭い世界で一生を終えるのなんて真っ平ごめんだ。仲間とともに何かをやりたい。

そうすると居ても経っても居られず、はやては鬼柳のチームに参加する旨を伝えたのだ。

元より気心の知れているなのはや鬼柳とチームを組むのだ。とても楽しいことが出来るに違いない。

そして現状、鬼柳から聞いていることを口にすると、プレシアから

予想外の言葉が飛び出て来た。
プレシア達も鬼柳の結成するチームに参加するのである。寝耳に水とはまさにこのこと。目が飛び出さんばかりに驚く。

「いよっしゃぁ！　プレシアさんがいれば百人力やで！」

「そこまで嬉しそうにしてくれるなんて……」

「だって、ホンマに嬉しいんですもん！
皆と騒いで、ドンチャン騒ぎとかやりたいですし！」

「……そうね。とっても楽しそうね」

「ホンマです！」

そしてはやてはグッと握り拳を握ると、天高く握り拳を突き出した。
頬は嬉しさによってか、緩んでいる。その様子に、プレシアも笑みを深くした。

自分たちの加入を、まさかここまで喜んでくれるとは思いもしなかったのだろう。
しかし、こうして喜んでくれているのを見ると悪い気はしない。むしろ嬉しさが込み上げてくる。

そしてはやてと共に、これから先どうやって皆とドでかいことをやって満足するのか考える。
皆で遊園地に行って、心行くまで遊び尽くそうか。それとも皆で全国のデュエル大会を踏破するのも面白い。

アレやこれやとプレシアとはやては悩み続け、結局鬼柳達が到着する一時間後までアレコレと頭を悩ませ続けるのだった。

第十九話　「平穏」（後書き）

恐らく、次回で無印は終了になるかと思います。
無印が終了した暁には、閑話を数話挟む予定です。

第二十話　「時空管理局」（前書き）

ようやく無印終了です。
そして新たな物語の予感が……。

第二十話　「時空管理局」

～海鳴市　某所上空～

「皆、整列してちょうだい」

「はーい」

「はーい」

「あいよ」

「はい、問題ありません」

海鳴市内の近辺にある海上上空。そこにプレシア達は滞空していた。
その誰もが腕にデュエルディスクを展開しており、いつでもデュエルが出来る状態だ。

ちなみにこの場に居るのはプレシアとなのは、フェイトにアルフ、ユーノのみ。
鬼柳とはやては海岸で彼女たちの帰りを待っている。彼らは空を飛ぶ事が出来ない。

「うん、準備は良いみたいね」

プレシアは四人から返ってきた言葉に満足そうに頷いた。そして視線を下へ落とす。
すると彼女の視界に飛び込んでくるのは、目が覚める様な青さの海。
泳ぎたくなってくるほどの青さだ。

鬼柳達が集め、プレシアも手伝っているジュエルシード。その残りの五つが下に見える海中に沈んでいるらしい。
どうりで地上を隈なく探しても見つからない訳だ。プレシアは下に見える海上を見つめながら、ふむと腕を組んで考える。

「どうするんだい、プレシア。
まさか魔力をブっ込んで起動させる気じゃないだろうね？」

「最初はそれでも良いかな、とも思ったのよ。
でも、さすがにそれじゃ危険が大きくなってしまうしね」

と、プレシアが下に見える海上をジッと見つめていると、アルフがプレシアに訊ねた。
それはいかにして、海中に落ちているジュエルシードを回収するかどうか。これにはプレシアも悩んだ。

当初はフェイトの持つスターダスト・ドラゴン。なのはの持つレッド・デーモンズ・ドラゴン。
この二龍を使って無理やりジュエルシードを暴走させようかとも考えたが、あまりにも危険が大きい。

結果として無理やりジュエルシードを暴走させる案は廃棄。プレシアは代案を考えていた。

流石に子供がすぐ近くに居るのに、そんな危険を冒せるはずがない。
代案としてある事を考えついた。

「じゃーん。これを使おうと思うの」

「えぇ～と……。コイツは≪深海のディーヴァ≫かい？
……あぁ、なるほど。コイツを使って取って来てもらおうって算段だね？」

「正解よ」

深海のディーヴァ
チューナー
星２／水属性／海竜族／攻　２００／守　４００
このカードが召喚に成功した時、
自分のデッキからレベル３以下の海竜族モンスター１体を
特殊召喚する事ができる。

プレシアが起動しているデュエルディスクから取り出したのは、海中で歌を歌っている人魚の様なモンスターだった。
そう。プレシアが考えついた代案とは、水中に潜ることが出来るモンスターを召喚し、取って来てもらおうと言うもの。

しかもプレシアの持っている深海のディーヴァはその名の通り、深海にまで潜る事が出来る。
これならば少し深いところに落ちていようと、無事にジュエルシードを回収する事が出来るだろう。

アルフは得心が言った様に頷くと、プレシアから三枚の深海のディーヴァのカードを預かる。
それをそれぞれなのはとフェイトに手渡し、それぞれのデュエルディスクにセット。召喚を行う。

『いかがなされた、我が主』

「申し訳ないのだけれど、海中にあるジュエルシードと言う宝石を取ってきてもらいたいの。
形状は菱形の青い宝石。大きさは子供の拳くらいよ」

『心得ました』

それぞれがデュエルディスクにカードをセットすると、光の粒子と共にディーヴァが召喚される。
下半身を深海魚の様な姿に変えた人魚は、プレシアの元へ集まると恭しく頭を垂れた。

なのはやフェイトは明らかに動揺しているが、プレシアは動揺を御くびにも出さずに答える。
すると三体――プレシアの召喚したものも含めれば四体――のディーヴァはトポンと海中へ潜る。

後はただ、彼女たちの帰りを待てばいい。
時間はかかるかもしれないが、これ以上ないほど安全な策だ。

「……」

「……？　なのは、どうしたの？」

「……大きかったの」

「？」

と、プレシアとアルフがそれぞれ肩の力を抜いていると、なのはの奇行が目に入った。

彼女は頬りに自身の胸へと視線を落とすと、手の平でお椀を作る様に胸に手を当てている。

なのはの手により作られたお椀は、丁度先ほど召喚したディーヴァ達の胸と同じくらいの大きさ。

頬りに自身の胸の大きさと比べ、なのはは深々とため息を吐く。フェイトが声を掛けるが気にしない。

自らの胸とディーヴァ達の胸の大きさを比べあっているなのはを見て、プレシアとアルフは人知れず苦笑した。

なんとも早い嫉妬心だろう。今からこれでは、次の学校に入学したときには一体どうなっているのだろうか。

「それにしても、よく≪深海のディーヴァ≫なんてカードを持ってたね。

てっきり捨てたか売ったかはしてたと思ったよ」

「≪深海のディーヴァ≫はレベル、効果ともに優秀だから。

デッキに入れるつもりが無くても、交換用に複数枚は持ってある

わ」

「なんて抜け目のない」

「うふふ、褒め言葉をありがとう」

しばしアルフはなのはの様子に苦笑いを浮かべていると、ふと気になったことをプレシアに訊ねた。
それはプレシアがこの様なカードをどうして持っているのかと言うこと。あまりマイナーではないが気になった。

そして返ってきた言葉に、アルフは「ふぅむ」と鼻を鳴らす。なるほど、納得のいく答えだ。
深海のディーヴァのレベルは2とシンクロ素材にしやすく、自身もチューナーなのがポイントが高い。

それに加え、通常召喚権を使えばデッキからレベル3以下の海竜族モンスター一体を特殊召喚できる。
海竜族はマイナーな種族だが、それでも通常召喚権を使うだけでレベル5のシンクロ召喚を行うことが出来る。

壁モンスターを多用するデッキに投入するか検討できるレベルだ。
たしかにこのカードは交換用としては中々使えるかもしれない。

「他にも≪バトルフェーダー≫や≪ライトロード・ハンター　ライコウ≫とか。
　使えるカードはそれなりの数は揃ってるわね。どう？　なにかトレードする？」

「そうだねぇ……。≪ミラクル・フュージョン≫がちょっと足りないんだ。
一枚持ってないかい？」

「わたしを誰だと思ってるの？
ＤＭミッドチルダ杯ベスト８入賞、プレシア・テスタロッサよ」

「あぁ、はいはい。良く分かってるよ」

プレシアはアルフの言葉に続く様に、デッキから幾つかのカードを取り出した。
取り出したカードはいずれも様々なデッキに投入（出張）が検討できるカード達。

これならば大会などで評価の高いカードを複数枚持っている事だろう。
それならばと、アルフは自身のデッキに足りないカードを持っていないかプレシアに訊ねる。

現在、アルフのデッキに足りないカードと言えば、切り札であるシャイニングを召喚するための融合カード。
「融合」と言うごく初期のカードを持っているアルフだが、そのカードの効果が及ぶ範囲は手札と場のカードだけ。

アルフのデッキの特性上、場にモンスターが残るとは考えにくい。
結果として、ミラクルフュージョンの方が彼女のデッキにおける採用度が上なのだ。

「プレシアさん。ＤＭミッドチルダ杯ってなんですか？」

「あぁ、なのはさんは管理外世界出身者だものね。知らないのも無理は無いわ」

と、プレシアとアルフの会話を聞いていたのか。横からズイッとなのはが顔を挟んだ。

その顔には、見知らぬ地名と大会の名前を聞いて、好奇心を刺激されているなのはの様子が浮かんでいる。

プレシアはなのはの言葉に僅かに首を傾げるが、彼女がここ――第９７管理外世界出身なのを思い出して笑みを零した。

なのははこの世界にとってのイレギュラーの様なもの。ならば時空管理局やその本局のあるミッドチルダを知らないのも頷ける。

そしてプレシアは何度か声の調子を整えるために咳払いを行うと、先ほどの会話に出た大会について説明する。

ＤＭミッドチルダ杯とは、時空管理局が管理する各次元世界から何名かの代表者を募って行う大規模な大会である。

管理局の管理する世界は膨大な数に上り、毎年大勢の参加者が本拠地ミッドチルダに押し寄せるのだ。

しかも集められた参加者はいずれもその次元世界での選考基準を満たした強者ばかり。いつも白熱した戦いが繰り広げられる。

プレシアも以前にその大会に参加し、見事ベスト８入りを果たした経験を持っている。

当時の記憶を思い出してか。プレシアの瞳には懐かしいものを見る

様な色が浮かんでいた。

「ＤＭミッドチルダ杯……。なんだか、とっても面白そうなの！」

「そりゃ、分からんでもないね。毎年大勢の強敵が勢ぞろいするらしいし」

「そんな大規模な大会があったなんて、知りませんでした」

「ユーノはそう言うのに興味薄そうだったもんね」

「あはは。たしかに」

プレシアの思い出話兼説明を聞き、なのはは瞳を爛々と輝かせる。なんと面白そうな大会なのだろうか。未だ見た事もない強敵と闘うことが出来る。

一体どんなモンスターで、どんな戦略を立ててくるのか。今から楽しみでならない。

そうだ。チームサティスファクションのメンバーで出てみよう。そして皆で満足すれば良い。

そうと決まれば話は早い。是非とも鬼柳に話を通し、皆でＤＭミッドチルダ杯に参加しよう。

なのはは武者振るいに震える自身の身体を叱咤しながら、未だ見ぬ強敵を想い、心を躍らせる。

そして一方、今までその様な大会があったとは知らないユーノが、

驚いた声をあげた。
今まで何度かミッドチルダに足を運んだが、その様な大会は見たことも聞いたこともない。

しかし、アルフに告げられた言葉を聞いてそうかもしれないと内心で苦笑した。
少し前の自分は、この様な娯楽に意味を見出さず、ただひたすらに遺跡の発掘に打ち込んでいた。

ならば知らないのも無理は無いかもしれない。今度ミッドチルダに寄ったとき、情報を集めてみようか。
ユーノもまた、ミッドチルダで行われる大規模な大会を思い描き、楽しそうな表情を浮かべた。

「千の呪文の男なんか手ごわかったわね。あとはスキマ妖怪なんか大分苦戦したわ」

「……プレシア。それはなんだか色々と不味い気がするよ」

「あとは装備魔法を多用して「投影開始」とか叫んでる赤い外套を着た男の人とか」

「プレシアァアアアアッ！　ストップッ！
ストップだよ！　これ以上はなんか不味い気がするよ！」

「むぅ。そこまで言うなら仕方ないわね」

プレシアが過去を思い出しながら、自身が対戦した事のある人物の

特徴を挙げて行く。
しかし、特徴を挙げて行けば挙げて行くほど、アルフの顔色が真っ青に変化していった。なにかおかしいことでも言っただろうか。

『主よ。これでよろしいか？』

「あら。……えぇ、これで良いわ。五個、ちゃんとある？」

『勿論。侮られては困ります』

「そう。御苦労さま」

と、なのはやユーノが思い思いの表情でＤＭミッドチルダ杯を想像していると。
不意に海面からチャポンと水の跳ねる音が聞こえた。滞空していた皆の視線が下に下がる。

そして海面から顔を覗かせているのは先ほど、ジュエルシードの回収を命じた深海のディーヴァ達。
どうやらしっかりとジュエルシードを回収したようで、その手には複数の青く光る宝石――ジュエルシードがあった。

プレシアが確かめる様に訊ねれば、四対いる内の一体が頬を膨らませながらそう反論する。
どうやら彼女たちのことを侮り過ぎていた様だ。プレシアは苦笑いを浮かべ、謝罪と同時に彼女たちを労う。

そして彼女たちからジュエルシードを受け取ろうとしたとき、そこ

に聞き慣れぬ少年の声が響いた。

「すまない、時空管理局のクロノ・ハラオウン執務官だ。色々と事情を聞かせてもらえないか？」

「？　時空管理局って？」

恐らく、転移魔法を使用して転移してきたのだろう。黒衣のバリアジャケットを身に纏った少年――クロノが居る。
手には自身の背丈ほどある杖――デバイスを持ち、まだあどけなさの残る幼い顔には、今は真剣な表情が浮かんでいる。

突如転移してきた時空管理局の少年に、プレシアやアルフは驚いた表情を浮かべ。なのはは聞き覚えが無いのか。首を傾げている。
そんな中、時空管理局の少年の姿を捉え、今までプレシアの肩に乗っていたユーノが声を上げた。少年の視線がユーノへと向けられる。

「時空管理局の方ですか？　もしかして、ジュエルシードを回収しに？」

「あぁ。丁度この辺りでロストロギアがばら撒かれたと報告があってね。
たまたま近くに居た僕たちが回収に来たんだ」

「そうなんですか、助かりました。ジュエルシードは全て回収し終えてあります」

ユーノの言葉に、クロノはコクリと頷いた。報告から大分時間が空いてしまったが仕方がない。
なにせ彼らの所属する時空管理局は慢性的な人手不足により、なかなか都合がつかないと言うことが多々あり得るのだ。

今回はたまたま近くに居た自分たちに命令が降りたが、もしも近くに居なかったらもう少し掛かっていただろう。
申し訳ない気持ちになりながらも、クロノはユーノの言葉に返答する。

「そうなのか？　それと、そちらの魔導師の方は……」

「彼女たちは現地での民間協力者です。ジュエルシードの回収を手伝ってもらいました」

「プレシア・テスタロッサよ」

「えと、フェイト・テスタロッサです」

「高町　なのはです」

「アルフだよ」

ユーノから事情を聞いていたクロノの視線が、傍に滞空している彼女たちに向けられる。
それにユーノは淀みなく答えた。事実、彼女たちは自分のために様々な手を尽くしてくれたのだ。

プレシアから順番に自己紹介を行い、最後にアルフが片手を上げながら砕けた様に自己紹介する。
と、プレシアの名を聞いたクロノの眉が僅かに動いた。そして伺う様にプレシアに訊ねる。

「もしかして貴女は、ＤＭミッドチルダ杯ベスト８に入賞したプレシア・テスタロッサか？」

「えぇ、そうよ。でも、今じゃどうなのかしらね」

「それは仕方が無い。あの三体の神を相手に、貴女はよく耐えた方だ」

クロノが先ほどまでプレシア達が話題にしていたＤＭミッドチルダ杯について訊ねれば、プレシアは首を振る。
するとクロノは得心が言ったと言う様に頷くと、プレシアの自嘲する様な言葉にフォローを入れた。

実際、今のプレシアの実力は以前行われたＤＭミッドチルダ杯とは大分変っているだろう。
新たなカードが発売され、カードプールが増えた事も原因の一つなのかもしれない。

「あの、クロノ……君？　三体の神って……？」

「ん？　あぁ……。三体の神と言うのは管理局の誇る最強の三神の

ことだ。
≪極神皇トール≫、≪極神皇ロキ≫。そして最高神である≪極神聖帝オーディン≫の三体」

「ほぇえ……。さ、三体の神様……！」

と、今まで蚊帳の外だったなのはがオズオズとクロノに声を掛ける。
聞き逃せない単語があった。
それは三体の神と呼ばれるもの。一体どんなモンスターなのか。気になってなのははクロノへ質問を投げかけた。

するとクロノは僅かに首を傾げたが、しっかりとなのはに説明してくれる。
それによると、時空管理局と呼ばれる組織がその三体の神を所有しているらしい。

そして出てきた神の名は北欧神話に登場する神様の名前だ。
どうやらその三神はデュエルモンスターズにも登場するらしい。

クロノから管理局の誇る三体の神のことを聞き、なのはは興奮で笑いだしそうだ。
まだまだ世界には、自分の知らないカードが沢山ある。これではしばらく満足できそうにない。

「それはそうと、はい、ユーノ。今まで回収したジュエルシードよ」

「あ、ありがとうございます」

なのはが武者震いで身体を震わせている中、プレシアがユーノへ回収し終えたジュエルシードを返却する。
勿論、その中には先ほど深海のディーヴァ達が回収してきたジュエルシードも含まれている。勿論封印処理は済んでいた。

ユーノはプレシアからジュエルシードを回収すると、クロノへ回収したジュエルシードを渡す。
クロノはユーノから渡されたジュエルシードをデバイスや魔法でチェック。異常が無いかを確かめた。

「うん、異常は感じられない。ジュエルシード計21個の回収を確認した」

「ありがとうございます。これでようやく安心する事が出来ました」

「いや。元はと言えば僕たちがもっと早くに来ていれば良かったんだ。
君が気にすることじゃない」

「あはは……」

「それはそうと、君は元の姿に戻らないのか？
何時までもフェレットの姿のままで苦しくないのか？」

「あぁ。言われてみれば」

無事回収したジュエルシードに異常が無いことを確認し、クロノは

デバイスにジュエルシードを回収する。
そしてようやく、ユーノが深々と安堵の息を漏らした。今までは碌に安堵することなど出来る筈もなかったのだから。

そんなユーノの様子に、クロノが申し訳なさそうな表情で謝罪する。
せめて、もう少し早く来ていれば。
そうすればユーノにここまで苦労をかける事もなかったのに。そう告げれば、ユーノは「あはは」と苦笑した。

そして場の雰囲気を変えようとしたのか。クロノがユーノの姿を指摘する。それになのはは首を傾げた。
一体クロノと言う執務官は何を言っているのだろうか。疑問に思っていると、唐突にユーノの身体が発光を始める。

突然の事態になのははギョッと目を見開き、突然光り出したユーノの姿を見つめている。
ちなみにフェイトも突然のユーノの変化に驚いているようだ。なのはと同じような顔をしている。

「ふぅ。なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」

「ふ、ふぇえええええッッ！？　ゆ、ゆ、ユーノ君が人になった！？」

「……君たちの間に何か、見解の相違でも？」

「あれ？　なのは、僕が最初に会ったとき、僕はこの姿じゃ……？」

「ち、違うよ！　今までずっとフェレットのままだったよ！？」

「……」

そして光が収まったとき、そこには民族衣装の様な服に身を包んだ金髪の少年が居た。
年はなのはやフェイトと離れておらず、その顔立ちはまるで少女の様だ。

しかし、口調や体躯から少女ではなく少年だと言うことが分かる。
まさかフェレットだと思っていたユーノが人間だったとは。目玉が飛び出さんばかりに驚いた。

そしてそんな狼狽しているなのはの様子に気づいたのか。ユーノが首を傾げながら訊ねる。
しかし、返ってきたのは今までずっとフェレットのままだったと言う話。思わずユーノの笑みが固まる。

「（そう言えば温泉じゃ僕のことを女湯に連れて行こうとしたりしてたっけ……。
僕の姿を一度でも見てたらそう言うことはしないはず……。……え？　と、言うことはまさか……！？）」

「もしかして僕、出会ってからずっとフェレットだった……？」

「……うん」

「あ、あぁ～……。その、教え忘れてた。……ごめん」

ユーノは表情を固めたまま、今までの出来事を思い返していた。
そしてまず思い出したのは以前、海鳴温泉に皆で出かけたときのこと。

そう言えばあの時、なのはは自身を女湯へと連れ込もうとしていた。
もしもユーノの本当の姿を知っているならば、決してしない行為である。

それによくよく思い返してみれば、自分が一度でも人の姿を取っていない事を思い出した。
これならば、ユーノが本当は人間だとは思わないだろう。ユーノはだらだらと冷や汗を流しながら謝罪する。

「お互いの疑問が解消出来た様で結構。
それとユーノ……だったか。君から少し事情を聞きたいんだが」

「あ、はい。僕は構いません」

「じゃあ、私となのはさんも一緒に行った方がよさそうね。
事情を聞くのには第三者の人からも聞いた方が良いでしょう？」

「そうだな。そうしてくれるとありがたいんだが」

そしてユーノがぺこぺことなのはに頭を下げ、ようやく一息吐いた頃。
今まで傍観していたクロノが口を開き、ユーノのことを何処かへ連れて行こうとする。

何処に連れて行くのだろうとなのはが首を傾げていれば、彼らの乗る次元航空船だと教えられた。
どうやらその次元航空船とは、次元世界を移動できる船の様なものらしい。とても凄いものではないのだろうか。

なのはが時空管理局の技術に驚いていると、ユーノがクロノの傍に行く。それにプレシアが待ったをかけた。
そしてプレシアの告げた言葉になのはは納得する。ユーノの話からだけでは、詳しい事情が分からないかもしれない。

クロノが伺う様にこちらに視線を向けると、なのはもコクリと頷いた。
どんなことをされるのか分からないが、プレシアが一緒なのだ。下手なことはされまい。

「それじゃあフェイト。貴方とアルフは鬼柳のところへ戻っておいてね。
それと、鬼柳に事情を説明しておいて欲しいのだけれど……」

「うん、分かったよ。母さん」

なのはが同意を示したのを確認すると、プレシアはフェイトに戻る様に告げた。
実際、既にジュエルシードを回収した今、フェイトやアルフがこの場に残る意味は薄い。

ならば鬼柳達の元へ帰還し、プレシア達が帰ってくるのを待った方

が現実的だ。
フェイトも特に異論を示さず、コクリと頷く。そしてアルフを伴い、海岸の鬼柳の元へ飛んだ。

「？　他にも協力者が居るのか？」

「えぇ。だけど、彼は魔導師ではないから」

「なるほど。了解した」

フェイトが現空域を離脱し、その場にクロノになのは、プレシア、ユーノのみとなったとき。
ふと、クロノが訊ねる様にプレシアに聞いた。クロノの質問に、プレシアはコクリと頷いて答える。

実際、鬼柳は魔導師ではない。魔力を有している様だが、魔法を使うデバイスを持っていない状況だ。
そんな彼をこの場に呼んでもどうしようもないだろう。それに鬼柳には悪いが、フェイトのことを護って欲しい。

一方、クロノはプレシアのそんな内心を露知らず。プレシアの言葉に頷くと、足元に巨大な魔法陣を展開する。
その魔法陣は転移を行う際に出現する魔法陣。その魔法陣がクロノ、なのは、ユーノ、プレシアを包み込み、激しい光を放つ。
そして光が晴れたとき、そこにクロノ達の姿は見えなかった。

※

「……時空管理局？　なんだ、そりゃ」

海岸に帰還したフェイトが告げた言葉に、鬼柳は首を傾げながら訊ねた。
彼の隣に居るはやても同様に、コテンと首を傾げている。フェイトは僅かに苦笑すると説明した。

時空管理局とは、無数に存在する次元世界を管理している組織の名称である。
次元世界を管理する傍ら、各次元世界で起こった事件の犯人などの確保なども行っている。

様は次元世界の警察官の様な組織と思って間違いは無いだろう。そう、フェイトは鬼柳に説明する。
するとはやては得心が言った様に頷き、鬼柳は僅かに顔を顰めた。
どうしたんだろう。フェイトは首を傾げる。

「鬼柳、どうしたの？」

「いや……。そう言う組織が苦手なだけだ」

「？　鬼柳兄ちゃん、なにか事件でも起こしたんか？」

鬼柳の表情が気になって、フェイトは鬼柳に訊ねた。すると鬼柳の表情が曇る。

まるで言われたくない事を言われた様なその表情。フェイトは嫌われたかなと心配になる。

しかし、鬼柳の口から出てきた答えにホッと安堵の息を漏らした。どうやら先ほどの話題は鬼柳にとって地雷らしい。今後注意しようとフェイトは思う。

だが、そんなフェイトの思いも束の間。はやてが首を傾げながら鬼柳に訊ねた。

その口調は軽く、鬼柳が大それた事件を起こしたなどとは露とも思っていない様子。

しかし、鬼柳の表情は暗い。

「……あぁ。前に、俺がバカなことをしてな」

「なしてや？　どんなことしたん？」

「は、はやて……！」

鬼柳は視線を空へと向けると、あえて明るくした様な声で答えた。

恐らく、鬼柳なりの気遣いなのだろう。しかし、はやてはあえて一歩踏み込む。

このままでは鬼柳から事件の詳細を聞き出すまで訊ねそうだ。
フェイトはそう判断すると、慌ててはやての口を閉じた。

必死に何でもないよとはやての口を抑えながら告げれば、鬼柳はフッと表情を和らげる。
そして無造作にフェイトとはやての頭に手を乗せると、グシャグシャと乱暴に二人の頭を撫でた。

「そうだ、フェイト。俺をプレシア達のところに連れて行ってくれないか？」

「え？　ど、どうして？」

「そのＤＭミッドチルダ杯って言うのに興味がある。
詳しい参加規程やら何やら、聞いておきたいからな」

「あ、なるほど」

しばし鬼柳に乱暴に頭を撫でられ、フェイトとはやては目を回しそうだ。
だが、鬼柳の手が不意に止まり、二人の頭から離れて行く。フェイトとはやては不満げな表情を浮かべた。

しかし、鬼柳はそんな二人の視線は何のその。視線をフェイトに向けると、プレシア達の元へ連れて行って欲しいと告げた。

理由を訊ねれば、至極最もな答えが返ってくる。たしかに大会に参加するには規定や参加資格を確かめておく必要がある。

これを怠れば、大会に参加する事は出来ない。フェイトは得心が言った様に頷くと、念話で母親に訊ねた。

すると、丁度取り調べが終わったらしい。クロノがこちらに迎えに来る様だ。それに了解の意を伝え、念話を終了する。

「それにしても、ＤＭミッドチルダ杯か……。
どんな強敵が集まってくるんだろうな」

「さぁ。それは分からないよ。でも……優勝したら、とっても楽しいよね？」

「あぁ！　フェイト、はやて。俺達でＤＭミッドチルダ杯に乗り込むぜ？」

「「うん！」」

鬼柳はフェイトから聞いたＤＭミッドチルダ杯の様子に、自身の身体が歓喜に震えているのが分かる。

一体どれほどの強者が集まるのか。一体どれほどの人数が集まるのか。考えれば考えるほど、身体の震えは増す。

だが、鬼柳はその震えをあえて無視する。現状、まずはＤＭミッドチルダ杯に参加する資格や規定を確認する。

無事それらの規定や資格を得ることが出来たならば、残るはＤＭミッドチルダ杯で優勝するだけだ。

様々な世界――次元世界と言うらしい――が注目する大規模な大会。
そこで優勝すれば、この上ない満足感を得られるかもしれない。

「ハハッ……。二代目チームサティスファクション、行くぜッ！！」

「「おぉ～！！」」

鬼柳はグッと握り拳を作ると、勢いよく空へと向けて突き上げた。
その後に続く様に、鬼柳のすぐ傍から二つの拳が天へと伸びている。

その様子に、鬼柳は久しぶりに満足そうな笑顔を浮かべたのだった。

第二十話　「時空管理局」（後書き）

と言う訳で無印終了です。
作中に出てきた千の呪文の男などは某作品とは関係ありません？

次回からはＡ'ｓまでの閑話が数話入る予定です。

閑話　「平穏な日常」（前書き）

今回から数話ほど閑話が入ります。
もしかしたら次回辺り、守護騎士登場かも。

閑話　「平穏な日常」

～海鳴市　八神家～

「はむはむ」

「もむもむ」

「あむあむ」

リビングに少女たちの、朝食を食べる音が聞こえる。
窓ガラスから差し込む太陽の光は暖かく、風の音も聞こえない。

キッチンには恐らく、プレシアが作ったのだろう。沢山のおかずが並んでいる。
味噌汁からは暖かな匂いが零れ、茶碗に盛られたご飯からは暖かさを保証する湯気が立ち上っている。

世間一般から見れば、これはごく一般的な朝食の風景なのだろう。
鬼柳もそう思う。
しかし、鬼柳にとって現状は一般的とは言えなかった。何故ならば――

「……」

「はむはむ」

鬼柳は何度か茶碗に盛られたご飯を口に運ぶと、ソッと視線を下に下ろす。
するとそこには、鬼柳の膝をイスにしてご飯を食べている一人の少女の姿があった。

腰の辺りまで伸ばした金色の髪をツインテールに纏め、彼女の好きな黒いワンピースに身を包む少女。
名をフェイト・テスタロッサと言う。そしてそんな少女と鬼柳の様子を微笑ましげに見つめるのは彼女の母親、

「まさしく、お父さんね」

「……おい、プレシア」

ちょっと待て。鬼柳はプレシアのその言葉に、待ったを掛けたい勢いだった。
ソレと言うのも、フェイトは元々、キッチンに用意された自分の席に座っていたはずなのだ。

それが朝食が始まった途端、トコトコと自分の元まで歩いて来て、チョコンと鬼柳の膝に乗る。
これに面喰った鬼柳が降りる様に言えば、プレシアが少しの間くらい良いじゃないと頬を膨らませて抗議。

結果として、鬼柳は膝の上にフェイトを乗せたまま朝食を取ることになったのだ。

ちなみに、なのはやはやてからフェイトは凄い眼で見られている。
見たら殺されそうな眼だ。

「……鬼柳は、わたしが乗るの……イヤ、かな？」

「イヤと言う訳じゃないんだがな……」

なのはとはやての凄まじい視線に鬼柳が閉口していると、膝の上に乗ったフェイトが訊ねてくる。
瞳の中に僅かに涙を溜めたその瞳は、凄まじく保護欲を刺激する。
まるで飼い主を探している猫の様だ。

だが、別段フェイトが自身の膝の上に乗るのはイヤではない。鬼柳があまり慣れていないだけである。
サテライトに居た時は絶えずクロウが幼い子供たちの面倒を見ており、鬼柳は一度も面倒を見た事が無かった。

なので鬼柳としては、なのはやフェイトくらいの子供とどう接すれば良いのか分からないのである。
うっかり下手な事をして泣かしたりしないか。そんな心配が鬼柳の後を付いて回っていた。

「はむはむ……。鬼柳さん、お風呂は覚悟しておくの。はむはむ」

「あむあむ……。それなら夜は私のベッドで一緒に寝るで。あむあむ」

「……」

と、鬼柳の言葉にフェイトが安堵していると、鬼柳の耳にある種恐ろしい言葉が入ってきた。

チラ、と視線を声が聞こえてきた方――なのはとはやてに向ければ、そこには一心不乱に食事を取る二人。

ハムスターの様に頬にご飯を溜めこんでいる姿は愛らしいのだが、耳に入った言葉が恐ろしい。

まさかまた、一緒にお風呂に入ろうなどと言われるのか。また、一緒の布団で寝ようと言われるのか。

別段、鬼柳としても構わないのだが、そろそろ羞恥心も出てこないのだろうか。食事を取りながら鬼柳は思う。

サテライトでも、このくらいの年頃の子供は一人で風呂に入っているはず。サテライトがおかしいのか。それともこの世界がおかしいのか。

「それにしてもなのは。なんでお前が此処に居るんだ?」

しばしサテライトとこの世界のことについて考えていた鬼柳だが、とうとうその思考を放棄する。

考えるだけ無駄なのだ。ならばいっそのこと、開き直ってしまった方が精神衛生上、大分良いに違いない。

そしてふぅ、と小さなため息を吐くと、視線をなのはに向けて彼女に疑問を投げかけた。

するとなのはは、キョトンとした表情を浮かべて鬼柳を見る。だが、すぐに頬を膨らませた。

「お前の家とはやての家は離れてるんだ。学校に遅れても知らねぇぞ」

「うぅ～……。だって、心配なんだもん」

一体何が心配なのか。鬼柳はなのはの言葉の意味が分からず、僅かに首を傾げる。

現在、鬼柳はここ――八神家にはやての保護者として彼女と一緒に生活を送っていた。

ソレと言うのも、本来はテスタロッサ一家がはやての保護者として共に住む事になっていたのである。

だが、女性ばかりでは安全が心配だと言うプレシアの言を受けて鬼柳も共に住む事を了承。今に至るのである。

女性ばかりの家に男が一人転がりこむのはどうかとも思ったが、プレシアにごり押しされてしまった。

なのはは鬼柳の言葉に僅かに顔を顰めると、何とも言えない表情を浮かべてフェイトに視線を送る。

「心配って……なにが心配なんだ？」

「アナタを取られるかもしれないって、思ってるんじゃないかしら？」

「……俺を取られる？」

と、なのはの言葉に首を傾げていた鬼柳に、プレシアがフォローの言葉を入れた。

するとなのははコクリと首を縦に振る。しかし、その頬は薄っすらと赤く染まっていた。

頬を赤く染めているなのはを一瞥し、鬼柳はプレシアに先ほどの言葉の真意を訊ねる。

果たして、自分が取られるとはどう言う意味だろう。自分は物ではないのだが。

「そう。フェイトやはやてに、アナタを取られるかもって思ってると思うの。

小さい頃から、貴方達は一緒だったんでしょ？」

「……まぁ、そうだな。結構前から、なのはとは一緒だったな」

プレシアの言葉に、鬼柳は何処か納得の行った様な表情を浮かべた。

確かにプレシアの言うとおり、自分となのはは大分前からの付き合いをしている。

そんな長い時間を掛けて共に過ごしてきた人物を、他の誰かに取られたくないのだろう。

その気持ちは分からなくもない。ただし鬼柳の場合は遊星やジャック、クロウと言うことになるが。

以前に鬼柳が味わった気持ちを、なのはが感じているのならばそれは由々しき事態だ。
一体どうすれば良いのか。顎に手を当て、鬼柳は「ふぅむ」と考える。

「まぁ、なのはさんがこの家に来るのに文句を言わなければ良いのよ。
しばらくはこの家で朝ご飯を取って学校に向かえば良いのだし」

「……まぁ、それもそうか」

「そうそう。それに我がままを聞いてあげるのも、年長の務めよ」

どうすればなのはの不安な気持ちを解消できるのか。鬼柳が考えていると、プレシアが口を開いた。
それは至極、当然の言葉。やはりそれしかないのだろうか。鬼柳は内心でそう思いながら、肯定の返事をする。

八神家を出る時間を考えなければならないが、はやて＋テスタロッサ一家の日常に、なのはを加えれば良いだけの話。
怒るほどの理由でもない。鬼柳は内心でそう結論付けると、なのはに対して申し訳ない気持ちになる。さっきまでの考えがバカバカしい。

「そうだな。俺も煩く言い過ぎたか」

「にゃ！？　そ、そんな事ないよ！」

「ありがとよ。これからは何時でも来い」

「……うん」

なのはは鬼柳の言葉に、恥ずかしそうに頷く。けれど表情は満足そうだ。

そんななのはの満足そうな表情に、鬼柳もまた満足そうな表情を浮かべる。

やはり、満足すると言うことは大切なことだ。鬼柳は今一度、その認識を改める。

そして膝の上に乗っているフェイトに適当なおかずを取ってやれば、彼女もまた笑顔を浮かべる。

先ほどまでの雰囲気から和やかな雰囲気に変化した八神家のキッチンで、鬼柳は満足そうに笑みを零した。

※

「……こんなもん、か」

調整を終えたばかりのデッキを、リビングのテーブルに置いて、鬼柳はホッと息を吐いた。
彼が現在調整をしているデッキは、これから行われるであろう大会――DMミッドチルダ杯を念頭に組んだもの。

クロノからDMミッドチルダ杯についての詳しい説明を受けた鬼柳は、デュエリストライセンスを取得。
その後、大会参加資格を得るために各次元世界で行われる選抜大会に参加する予定なのだ。

ちなみに先ほど出てきたデュエリストライセンスとは、各次元世界の大会に参加するために必要な物。
そのライセンスが無ければ大会に参加する事は出来ない。逆に、ライセンスがあれば様々な特典を受けられる。

たとえば各次元世界で行われる大会での優勝が三ケタを超えるほどになれば、ミッドチルダで行われる大会に参加費無しで参加できる。
他にも身分証明の代わりになったり、最新カードの先行販売に参加できると言う、デュエリストならば見逃せない特典が盛り沢山なのだ。

このデュエリストライセンスを取得するための年齢制限は無く、なのはやフェイト。はやても一緒に作ってある。
後は大会で使用するデュエルディスクを作るだけ。こちらは知り合いに腕の良い技師が居ると言うプレシアに頼んである。

「……楽しみだな」

チラ、と視線を八神家のリビングに移しながら、鬼柳はポツリとそう口にした。
プレシアの話では、様々なカードを使用する強敵が勢ぞろいするらしい。

クロノにも歴代のベスト8を見せてもらったが、錚々たる顔ぶれが勢ぞろいしていた。
「だいたい分かった」が口癖のヒーロー使い。幻想郷からやってきたという某フラワーマスター。

自らを悪の魔法使いだと自称している吸血鬼など、様々なメンバーがベスト8入りしている。
それぞれのメンバーの名前に聞き覚えは無いが、入賞時のレシピなども見る事が出来、実力は把握済みだ。

果たして、自分たちがDMミッドチルダ杯に乗り込む時にはどんなメンバーが勢ぞろいしているのか。
鬼柳やなのは、フェイトにはやてなどの二代目チームサティスファクションのメンバーは興奮が冷めることはない。

「えっと。このカードは……要らない、かな」

「ん？」

鬼柳が自らの心の内に湧き上がった興奮を感じていると、ふと、フ

ェイトの声が聞こえた。
視線を声が聞こえた方へと向ければ、鬼柳と同じくデッキの調整を施しているフェイトの姿。

ちなみになのはは学校に行っており、現在八神家にはなのはを除いた全メンバーが勢揃いしている。
否、全メンバーと言うのには誤りがあるだろう。正確には、ユーノを除いた魔導師メンバー全員が集まっている。

ユーノは先の時空管理局との邂逅の後、彼らの船に乗って故郷へと帰って行ったのだ。
簡単にパーティを開き、別れの言葉とともにユーノは自らの故郷へと帰還する。しかし、すぐに会えるだろう。

ユーノもデュエルモンスターズを始めるようで、今度は大会で会いましょうと鬼柳に言っていた。
新たなライバルの登場に、鬼柳も当時は嬉しそうにしていたのだ。

「フェイト、そのカード……」

「あ、これ？　前に買ったパックの余りなんだけど、要らなくて」

「てりゃ」

「あぅ！？」

フェイトの言葉の途中、鬼柳はフェイトの頭にチョップを一撃だけお見舞いする。

するとフェイトが奇妙なうめき声をあげて、痛そうにチョップが当たった場所を擦る。

恨みがましそうに鬼柳を見つめるその視線は、どうやら自分が何か悪いことをしたのかと不安そうだ。

鬼柳は少しだけ涙眼のフェイトの様子に小さく嘆息すると、乱暴にフェイトの頭をワシャワシャと撫でる。

「そんなこと言ってると、俺の昔の仲間がやってくるぞ」

「？　どうして？」

「この世に要らないカードなんて無い。
存在する以上、そのカードは必要とされる……って言うのが、ソイツの理念みたいなもんだからな」

「要らないカードなんて、無い……」

「あぁ」

サテライトでつるんでいた仲間――遊星の顔を思い出しながら、鬼柳はフェイトに告げた。

鬼柳としても遊星の言葉には賛成で、この世に存在するカードに不必要なものなど存在しないと考えている。

事実、鬼柳がサテライトでチームサティスファクションを結成していたときに使用していたデッキ。

あのデッキに使用されていたカードは全て、サテライトで拾ったカ

ードで構成されていたのだ。

勿論それは鬼柳だけでなく、ジャックやクロウも同様。たとえ攻撃力が低くても、そのカードは必要とされる。

要らないカードなど無い。それをフェイトに告げると、フェイトはジィッと手に持った不要なカードの束を見つめる。

「それは人間にも言えるって言ってたな。この世に要らない人間なんて居ない……ってな」

「！　要らない……人間……」

鬼柳は視線をカードの束に移したフェイトの様子に苦笑すると、更に言葉を続けた。

果たして、それは何時遊星が言った言葉だったか。今ではもう、思い出すのも億劫になっている。

鬼柳が要らない人間、と告げたとき、僅かにフェイトの瞳が揺れた。

その瞳に浮かんでいるのは恐怖。

どうやら以前、地縛神に言われた言葉が尾を引いているらしい。鬼柳は僅かに苦笑し、フェイトの頭に手を乗せる。

「あぁ。だから、お前は要らなくなんて無いんだ。お前は必要とされてるんだよ」

「！　……鬼柳」

「ん？」

「……ありがとう」

「……礼なら、遊星に言ってやってくれ」

そして安心させるように、フェイトの頭を撫でながらそう告げた。
そう、人間にも要らない人間なんていない。人は必ず、誰かに必要とされている。

フェイトもまた、鬼柳やプレシア。そしてなのはやはやてに必要とされているのだ。
そこにクローンとして彼女を見ている者はいない。暖かな気持ちに包まれ、フェイトは顔を俯ける。

そうでもしなければ、赤くなった顔を見られていたかもしれないのだから。
そしてフェイトが顔を俯けて、赤くなった頬を隠していると。鬼柳が小さな声で呟いた。

その声がまるで、生きることに絶望している様に聞こえて。
フェイトは思わず、鬼柳の服の裾を掴んだ。

「？　フェイト？」

「あ、その……」

「……どうしたんだ？」

「……鬼柳が、居なくなっちゃうんじゃないかって、思った」

「俺が、居なくなる――？」

フェイトの言葉を聞き、僅かに鬼柳の眉が歪んだ。一体、何を言っているのか。

しかし、フェイトの怯え様は尋常ではない。しっかりと鬼柳の服をつかみ、彼を離さない様にしている。

突然のフェイトの急変に、鬼柳が内心でオロオロとしていると。トントンと廊下から足音が聞こえた。

その足音は真っ直ぐにリビングを目指しており、すぐにリビングの扉が開かれる。そこに居たのはプレシア。

「あら、フェイト。眠くなっちゃったのかしら？」

「母さん……」

プレシアはリビングを一旦見渡すと、鬼柳の服の裾を掴んでいるフェイトに眼を留めた。

そしてまるで、親子の様なスキンシップをしている二人の様子に、微笑ましそうに言葉を告げる。

それに咄嗟にフェイトは口を開くが、何かを言う前に母親の手が彼女の頭に乗せられた。

前からは鬼柳の体温の温もりが心地よくて、頭からは母親の暖かな

手の温もりが感じられる。

子供じゃないと反論しようとしたが、心がすっかり安心しきってしまい、フェイトの瞼が重くなる。

これじゃまるで赤ちゃんみたいだな。内心でフェイトはそう思うが、降りてくる瞼は止められない。静かに瞼が閉じられた。

「あらあら。寝ちゃったわ」

「あぁ。部屋に運ぶか」

「そのままで良いんじゃないかしら？
ぐっすり眠っているフェイトを起こすのは可哀そうだわ」

鬼柳はフェイトを抱き抱えたまま、彼女に宛がわれた私室へ向かおうとするが、それにプレシアが待ったをかける。

確かにプレシアの言うとおり、このままフェイトを眠らせておくのも悪くないかもしれない。穏やかな寝顔は可愛らしい。

しかし、このままの状況と言うのはなんだか落ち着かないのだ。フェイトを抱き抱えたまま、鬼柳は変な顔をする。

そんな鬼柳の様子にプレシアはクスリとほほ笑むと、すぐ傍のソファに腰を下ろした。テーブルの上に散らかったカードを片付ける。

「それで鬼柳。さっき、フェイトが言っていた事なんだけど……」

「……聞いてたのか」

「えぇ。偶然、ね」

「……ハハッ」

カードを片付け終えたプレシアは開口一番、先ほどフェイトが気にしていた言葉を口にする。
それに僅かに鬼柳の表情が強張り、視線をプレシアへと向ける。しかし、プレシアは気にした様子が無い。

そんなプレシアの様子にハァと小さく嘆息しながら、鬼柳は眠っているフェイトを抱き抱えた。
動かした際に、機嫌が僅かに悪くなった様だ。もぞもぞと何かを探す様に、フェイトの手が動きまわる。

「アナタ、元の世界で何をしたの？」

「それ、は……」

「言って御覧なさい。私たちは、チームでしょう？」

「……あぁ、そうだな」

そしてフェイトの手がようやく鬼柳の服を掴んだとき、プレシアが口を開いた。
咄嗟に話題を変えようとするが、プレシアはそんな鬼柳の努力を一蹴する。

縋る様な表情でプレシアに視線を向ければ、彼女はクスリとほほ笑みながらそう告げた。
それに鬼柳は、僅かに救われた気持ちになる。そしてポツポツと、誰にも話した事のない昔話を始めた。

チームサティスファクションを結成し、遊星やジャック、クロウと楽しく毎日を送っていた事を。
そして念願のサテライト統一。その後の自らの暴走っぷりを、鬼柳は何処か嘲る様に喋った。

どうしてこうも饒舌に喋る事が出来るのか。疑問に思ったが、きっと誰かに聞いて欲しかったのだと当たりを付ける。
胸の内に貯め込んでおけば、何時の日かその想いは爆発する。それをさせないために、心が防波堤を崩したのだ。

そしてダークシグナーとなり、遊星とデュエル。そしてそのデュエルに破れこの世界にやってきたと言うことを告げた。
これは罰なのだろうか。自らの思いの丈を吐き出さず、一人、勝手に暴走した己に課せられた罰なのだろうか。

鬼柳が心の内でそう、自問自答していると、不意に暖かな感触が鬼柳を包み込んだ。
ハッと我に返り、視線を周囲に向ける。するとそこには、鬼柳を抱き締めているプレシアの姿。

「な、おい……？　プレシ、ア……？」

「分かった、アナタの事は分かったから……だから、どうか泣かな

いで」

「俺は別に、泣いて……なんか……」

嘘だった。鬼柳の瞳からはポツポツと涙が零れ、彼の視界をぼやけさせている。
そして自らが泣いていると理解した瞬間、止め処ない量の涙が零れ落ちた。

本当は、分かっていたはずなのだ。昔の仲間に悪意は無く、ただ純粋に自分を心配してくれたと言うことくらい。
けれど当時の自分は愚かだった。本当に愚かだった。あそこで少しでも胸の内を吐き出していれば、こうなる事もなかった。

怖かった。寂しかった。また、独りぼっちになるのが。昔の話をして、なのはやフェイトが離れて行くのが。
しかし、話を聞き終えたプレシアは何処へも行かず、ただ鬼柳を抱き締める。彼女の腕の中は、とても暖かかった。

「アナタに泣いている顔なんて似合わないわ。
鬼柳、アナタは満足そうに笑っているのが丁度いいの。
大丈夫。私たちはアナタを見捨てたりしない。だって私たちは――チームですもの」

八神家のリビングに、プレシアの優しげな声が響いた。

閑話　「誕生日」（前書き）

守護騎士登場。微妙にシリアスブレイク。

閑話　「誕生日」

～海鳴市　翠屋～

「久しぶりね、鬼柳」

「アリサか。それにすずかも」

「お久しぶりです、鬼柳さん」

八神家での生活にも一段落した頃。鬼柳はバイト先である翠屋に顔を出していた。
以前から士郎や桃子に話は通していたのだが、やはりずっと顔を出していないと言うのは心苦しい。

それに加え、今日はとあるイベントが待っているのだ。既になのはやフェイトも翠屋で準備をしている。
その準備とは手作りのケーキを作る準備。今日ははやての誕生日。
皆でケーキを作って贈ろうと決めたのだ。

そんな折、唐突に翠屋の扉が開かれる。チリンチリンと鈴の音が響き、二人の少女が顔を出した。
二人とも鬼柳にとっては見慣れた人物であり、戸惑った様子もなく二人の少女に声を掛けながら荷物を置いた。

「まったく。しばらくの間、大分面白そうなことしてたみたいじゃ

ない」

「あぁ……。そう言えば、言ってなかったな」

「チームサティスファクションでしょ？　私も混ぜなさいよー！」

鬼柳が近くのテーブルに置いたのはクリームなどをかき混ぜるのに使用する調理器具（正式名称は鬼柳には分からない）。
それらを静かにテーブルに置くと、ホールの方からアリサの呆れた様な声が聞こえてきた。それに鬼柳は顔を僅かに歪める。

ジュエルシードを回収し終えた後、なかなかアリサとすずかに事情を説明する時間が無かったのである。
なのはが二人に説明しようとしたが、学業を疎かにしていた間に溜まった課題を消化するので忙しく、今まで放ったらかしだったのだ。

そしてつい先日、なのはの課題がようやく消化し終わり、二人に説明する事が出来た。
その説明の中に出てきた単語「チームサティスファクション」に興味を惹かれてやってきたのだろう。

「構わないぜ。人数は多い方が満足できそうだしな」

「あはは。じゃあ、私はサポーターで満足します」

鬼柳の言葉に、すずかが笑みを浮かべながらそう返した。
すずかはアリサほどの実力を持っていない。それを自覚しているの

だろう。

どうせなら実力に囚われないでやれば良いのにと思うのだが、それを強要はしない。

鬼柳はすずかの言葉に「そうか」と返事を返すと、視線をカウンターの奥のキッチンへと向けた。

すると視界に飛び込んでくるのは、パタパタと忙しそうにキッチンの中を走り回る二人の少女。

他にもアルフやプレシアもケーキの作成に勤しんでおり、今やキッチンは戦場の形相をようしていた。

「なのは、アリサとすずかが来たぜ」

「にゃ！　アリサちゃん、それにすずかちゃんも！」

「ヤッホー。ケーキ作りの手伝いとチームサティスファクション入団に来たわ」

「私もだよー」

鬼柳の言葉になのはがこちらを振り返る。

そしてアリサとすずかを確認したのだろう。嬉しそうな表情を浮かべた。

アリサはそんななのはの様子にグッとサムズアップを返すと、エプロンを新たに身に着ける。

それはすずかも同様で、いくら汚れても構わない様にするためだろ

う。二人ともキッチンに突入する。

「あら、なのは。あの娘……」

「あ、うん。私の新しいお友達の……フェイトちゃんだよ！」

キッチンの中に突入し、周囲の状況を確認していたアリサが一人の少女の姿を捉える。
その少女とは先日のジュエルシード回収の際に出会った少女――フェイトだ。なのはも視線を送る。

彼女らの視線の先では、フェイトが鼻の頭に白い粉を付けながらも懸命にケーキを作っているところだった。
こうしてお菓子作りをするのは初めてなのか。フェイトはキッチンの様子に戸惑いながらも、楽しそうに料理をしている。

「あぁ。魔法使いでかなり強いデュエリスト……」

「にゃはは。アリサちゃん、ライバル登場だよ」

「上等じゃない！　フェイトに勝って、アンタにも勝ってやるわ！」

「その意気だぜ、アリサ」

なのはの言葉によりやる気を滾らせているアリサを視界に納めながら、鬼柳は笑みを浮かべた。

やはり、新たなデュエリストが増えると言うのは良い事だ。アリサもそうだが、すずかもフェイトをライバル視している。

こうして皆で楽しくやっていきたいと思いながら、鬼柳はフェイトの元へ歩み寄ると、ハンカチでその鼻の頭を拭う。

フェイトがわたわたと慌てている様だが、気にすることはない。下手に遠慮してしまえば逆に時間がかかってしまうのだから。

「それにしてもフェイト。随分頑張ってるみたいだな」

「わぷっ！　……えと、うん。だって、友達の誕生日って、初めて……だから」

「……そうか」

ゴシゴシと乱暴にフェイトの顔を拭い終えると、鬼柳はフェイトに声を掛けた。

此処まではしゃいでいるフェイトはあまり見た事が無い。珍しい姿に興味を惹かれた。

しかし、彼女の口から出てきた言葉に、鬼柳は納得した様な声を出す。

そう言えばフェイトは、時の庭園から碌に出ることすらなく生活していたのだ。

だから友達と呼べる存在も今まで居なかった。それに遣る瀬無さを覚えると同時、密かに満足感を覚える。

今まで独りぼっちだった少女に友達が出来、毎日満足そうに生活を

している。彼女のそんな顔を見るのが鬼柳は好きだった。

「あ、そうだ。鬼柳、ちょっとコレ、食べてみて欲しいんだけど……」

「？　コイツは……ケーキ、か？」

「えと、うん。初めて作ったから、上手に出来てるか分からないけど……」

と、フェイトの表情に満足そうな顔をしていると、不意に彼女がある物を取り出した。
それはどうやら彼女の手作りのケーキの様で、チョコンとお皿の上に乗っているのが可愛らしい。

大方、上手に出来ているか分からないので鬼柳に味見をして欲しいのだろう。鬼柳はちょっと意外に思う。
通常、この様な場合は母親に訊ねるのが普通だ。しかし、フェイトは鬼柳に頼んでいる。これは一体、どうしたことか。

「はぁはぁ……。フェイトのエプロン姿……ウっ！」

「プレシア。鼻から鼻血が滝の様に流れているよ」

「ふぇ、フェイト萌え……」

「……ハァ」

チラ、と視線をプレシアとアルフへと向けてみれば、鼻血を流しているプレシアの姿が見える。
どうやらエプロンを身につけ、懸命にケーキを作っているフェイトの可愛らしさにやられてしまったらしい。

アルフが呆れた様にため息を吐いている姿を視界に納めながら、鬼柳はなるほどと納得する。
母親があの状態では、迂闊に近寄れば大惨事になってしまうだろう。
フェイトは無事、危機を脱したのだ。

「……分かった。少し、貰うぞ」

「う、うん……」

プレシアの様子に僅かに嘆息すると、鬼柳はフェイトの持った皿からケーキを一つ貰う。
不安そうな表情で鬼柳を見つめるフェイトを横目に、鬼柳はパクリと口の中にケーキを放り込んだ。

口の中に広がるのは、生クリームの甘い味わい。スポンジも上手く焼けている様で、固さなどは感じない。
甘さもそれほど甘すぎる訳ではなく、甘い物がそれほど得意ではない鬼柳でも美味しいと感じるもの。良く言えば美味しかった。

「ん……。上手く出来てるみたいだぜ」

「ホント！？」

「あぁ。満足する味だ……」

「良かったぁ」

鬼柳が口の端についた生クリームを舌で舐め取りながらフェイトに告げる。

ここまで美味しいケーキも珍しい。フェイトにはお菓子作りの才能があるかもしれない。

内心でそんなことを思いながら、視線をフェイトに向ける。するとフェイトは頬を赤く染めて嬉しそうにしていた。

大方、自分の作ったケーキが上手に出来ていてホッとしているのだろう。鬼柳もまた、フッと口元に笑みを浮かべる。

なんとも暖かい空間。そんな二人の雰囲気を、キッチンの隅から見つめる数人の視線があった。

「なのはだけでなく他の幼女まで……！

クッ！　やはりデュエルするしかない……ッ！」

「ちょっと恭ちゃん、止めようよー」

「離せ美由希！

お、俺はなのはを取られる訳に「はいはい、寝言は寝てから言おうね～」離せぇえええッッ！！」

そのうちの二人はなのはの兄と姉である恭也と美由希。恭也はなのはを取られたくないのか。
凄まじい瞳でフェイトとほのぼのとしている鬼柳の背を見つめている。そしてそんな恭也を嗜めるのは美由希。

美由希の手によってズリズリとキッチンから放り出される恭也の姿が、少しだけ哀れに思えてしまう。
ちなみにこのやり取りは某夫婦でも行われており、喫茶翠屋はマスターの事情により数日の間業務が休みになった。

※

『はやて（ちゃん）、お誕生日おめでとう～！！』

パンッ、パンッと小気味いいクラッカーの音が、八神家のキッチンに響き渡った。
キッチンに据えられたテーブルの上座に座るのは、今日が誕生日の少女――八神　はやて。

彼女は突然のクラッカーの音に眼を白黒させていたが、すぐに嬉しそうな表情を浮かべる。
そんなはやての様子に鬼柳達もまた、満足そうな表情を浮かべた。
パンパンとプレシアが手を叩く。

「あはは……。皆、今日はありがとうなぁ」

「うぅん！　それよりもはい、はやてちゃん。誕生日プレゼントだよ！」

「あ、私もあるよ」

「アタシも一応は用意してるけどね」

皆の興奮が収まったところで、はやてがにやける頬をそのままに嬉しそうに口を開く。
今まで鬼柳やなのはに誕生日を祝ってもらったことはあるが、こんなに大勢は初めてだった。

こちらを見つめるプレシアやアルフの視線が、まるで母親と姉の様に思えるのも嬉しさが倍増する原因かもしれない。
はやては自身が浮かべられるであろう、満面の笑みを浮かべる。するとなのはとフェイトが何処からか四角い箱を取り出した。

どうやらアルフも用意している様だが、今はなのはとフェイトのプレゼントが気になって仕方がない。
何だろうと視線を二人が差しだした箱へと向けると、二人は「せーの」の掛け声とともに箱をパカリと開ける。

「ほわぁああ……！　これって……！」

「えへへ。私たちの手作りケーキだよ」

「上手に出来てるみたいだから、食べてみてね」

「ありがとうな、なのはちゃん！　フェイトちゃん！」

箱の中から顔を出したのは、はやての顔をデフォルメした手作りのケーキだった。

このケーキはなのはとフェイト。それにアリサやすずかと共同で制作した自信作である。

ちなみに制作に関与したアリサとすずかと言えば、習い事の関係上、今日来ることは出来なかった。

後日、改めて祝うと聞いていたので、後でまたお祝いすることになるだろう。なんとも友達思いの少女だ。

「……良いもんだな、誕生日ってのは」

「鬼柳は、誕生日に良い思いでって無いのかい？」

「……あまり、無いな」

そんなことをしてくれるヤツもいなかったしな。と、鬼柳は心の中

で呟いた。
彼は両親の顔を見た記憶が無い。ソレと言うのも、鬼柳は物ごころついたときから一人だった。

頼る親は行方不明で、身寄りもなくサテライトを転々とする日々。
誕生日など祝えるはずもない。
一時は自分を置いて何処かへ行ってしまった両親を恨んだりもしたが、その後は満足すると言う目標を持って生活していた。

この狭く、閉鎖されたサテライトでなにか大きなことをやって、満足する。
そしてあわよくば、自身を捨てた両親に会いたい。そんな思いを抱いていた。

「そうかい。なら、これから沢山良い思い出を作ってけば良いよ！」

「？　あ、アルフ……？」

「私たちはチームであり、仲間なんだろ？
だったら、仲間が楽しめるようにするのも仲間の務めってもんじゃないのかい？」

「……そう、なのかな」

「そうだって。ほら、まずは笑って、お祝いしようよ！」

鬼柳が物思いに耽っていると、唐突にアルフに肩を組まされた。慌てて鬼柳は視線を向ける。

するとアルフはニカッと笑みを浮かべながら、これからを楽しもうと鬼柳に告げた。それに鬼柳は僅かに疑問を投げかける。

本当に、それは仲間の務めなのだろうか。自分一人のつまらない思いのために、仲間にソレを強要しても良いのか。

だが、アルフから返ってきたのは笑顔だった。テーブルの上に置いてあったグラスを取り、無理やり鬼柳の口に押し付ける。

突然の事態に鬼柳は面喰い、ゴクゴクと何口かグラスに入った液体――オレンジジュース――を飲んでしまう。

それに満足したのか。アルフは鬼柳の口に押し当てていたグラスを離すと、ガハハと何が楽しいのか。楽しそうに笑った。

「ゲホッ、ゲホッ……。あ、アルフ！」

「辛気臭い顔はアンタにゃ似合わないよ。
皆で楽しくドでかいことをして満足！がモットーだろ？」

「……あぁ、そうだな」

気管支に入ったジュースに咽ていると、アルフの陽気な声が聞こえる。

それは鬼柳がモットーとする言葉。そうだ、自分は皆で楽しく満足したい。

なんだかアルフに良いところを取られた様な気がする。鬼柳はガリガリと頭を掻きながら答えた。

それにアルフは満足そうに頷く。そして手に持ったグラスをグイッ

と煽ったとき、三人の少女の甲高い声が聞こえた。

「「「あぁ～～～～ッ！」」」

「ッ！？　な、何だい！？」

「アルフさん、ちょっと上でお話しよう？」

「アルフ、ちょっと私とお散歩しようか。大丈夫、このムチは使わないよ」

「アルフさん、ちょっと私と狂戦士の魂について語らんか？」

「こ、怖いよ！？　皆、眼がヤンデレみたいな眼になってるよ！？」

アルフと鬼柳の視線が声が聞こえた方へと向かえば、こちらを見つめて大口を開けている三人の少女。

一体どうしたのかと驚いているのも束の間、なのはたちはアルフに取りつくとズリズリと彼女をリビングから引っ張り出していく。

咄嗟に鬼柳は事情を聞こうとしたのだが、三人の少女から発せられる雰囲気が刺々しく、声を掛けるのが躊躇われる。

実際、鬼柳の行動は正しかったのだろう。プレシアは壁際により、我関せずの姿勢を貫いている。鬼柳もまた、アルフを見捨てた。

「うふふ。あの子達ったら……」

「プレシア……。なのはたちは、どうしたんだ？」

「ふふ。ヒントはアルフの使ったグラス、よ」

「？　アルフの使ったグラス……？」

鬼柳が僅かに、アルフを見捨てたことに後悔の様なものを覚えていると。

不意に背後からプレシアの声がかかる。そして誘われるまま、視線をアルフのグラスへと向けた。

一見すれば、何の変哲もないただのグラス。中にオレンジジュースが入っているくらいで、おかしいところは無い。

一体何がおかしいのか。訝しげな視線をプレシアへと向ければ、彼女はハァと嘆息しながらボソリと小さな声で呟いた。

「これは、あの子たちが苦労するわね」と。それに鬼柳は首を傾げる。本当に、何がおかしいのか分からない。

なのはやフェイト、はやてはオレンジジュースが飲みたかったのだろうか。まさか同じグラスを使ったくらいでガタガタ言うまい。

サテライトに居た時には、いつも皆でグラスを回し飲みしていたのだ。何処もおかしくないだろう。

と、鬼柳がアルフの使ったグラスを訝しげな視線でジロジロ見ていると、唐突に家の中の雰囲気が変わった。

何か得体の知れないものが動き出した様な。何か得体の知れないものが家の中に現れた様な。そんな雰囲気。

プレシアもそれに気がついたのか。先ほどまでのお茶らけた雰囲気

を一変。真剣な表情で鬼柳に視線を向ける。

「にゃぁあああああッッ！？」

「こ、これ何！？」

「ッ！　上か！」

「行くわよ、鬼柳！」

「あぁ！」

瞬間、二人の頭上からなのはとフェイトの悲鳴が聞こえた。合図をするでもなく、二人はリビングから飛び出す。

目指すは三人が向かったであろう二階。ドタドタと激しい足音を響かせながら、鬼柳とプレシアは子供たちの姿を探す。

そして階段を一段抜かしで駆け上がり、キョロキョロと視線を周囲に向けた二人の視界に、それは見えた。

廊下にへたり込んだままのなのはとフェイト。それに車いすの上で驚いた表情を浮かべているはやての姿が。

それに加え、アルフが三人の少女を護る様に前に出ている。敵意をむき出しにした視線を、前方――はやての私室に向けている。

そして鬼柳達がはやての私室に視線を向けたとき、そこには見知らぬ女性の姿が見えた。鬼柳とプレシアは警戒した表情を浮かべる。

その女性はアルフや鬼柳と同年代だろう。桜色の髪をポニーテール

で結っており、腰の辺りまで伸ばしている。
更に身体のラインを隠すには布が足りない黒いアンダースーツを身に纏い、戸惑った様な表情でアルフたちを見ていた。

「アルフ！　どうしたの！」

「それがサッパリだね！
なんだかはやての部屋にあった本が光ったと思えば、はやての身体からリンカ―コアが浮かんでたり……！」

「はやてさんの身体から、リンカ―コアですって！？」

鬼柳とプレシアは素早くアルフの元まで近づくと、事情を訊ねる。
その際に部屋の中が少し見る事が出来た。
部屋の中には桜色の髪の女性のほかにも、二人の女性と一人の男性の姿が見える。そのいずれも、警戒した表情だ。

一体彼らは何者なのか。アルフと共に、何時でも応戦できる状態にした鬼柳はアルフとプレシアの会話に耳を傾ける。
するとプレシアは、どう言う訳かはやてにリンカ―コアがあると聞いて、驚いた表情を浮かべていた。

リンカ―コアとは、魔導師が魔法を使用するのに必要な器官の一つである。分かりやすく言えば、魔力の発生源だ。
これが無ければ魔力を生成する事は出来ない。恐らくプレシアは、リンカ―コアを持っていないはずのはやてが何故持っているのか。
それに驚いているのだろう。鬼柳はチラリと背後を一瞥し、目の前

の女性に意識を集中する。
切れ長の目は凛々しく、まるでおとぎ話に聞く侍の様だ。実物を見た訳ではないので、断言できないが。
そして鬼柳とその女性がジッと互いに見つめ合い、出方を伺っていると。

「ぐぅ～……」

「……？」

唐突に、気の抜けた音が聞こえた。僅かに鬼柳の身体から力が抜ける。
そして視線だけ音が聞こえた方へと向ければ、顔を赤らめてお腹を擦っている赤毛の少女。

大方、お腹が空いたのだろう。なるほど、先ほどの音はお腹の鳴る音だったのか。
何とも言えない雰囲気が廊下とはやての私室に広がり、気不味い沈黙が周囲を支配する。
これから一体、どうしたら良いのか。それを鬼柳達が悩んでいると、はやてがある一言を発する。

――とりあえず、ご飯。食べよか、と。

※

「ガツガツガツガツ……！」

「うわぁ……。凄いペースでおかずが減ってくで」

目の前であっという間に消費されていく食べ物に、はやては呆れた様な。感心した様な声を上げた。

彼女の視線の先では、丼を片手にご飯とおかずをかき込んでいる赤毛の少女――ヴィータの姿がある。

そしてテーブルには、ヴィータのほかにも三人の男女の姿があった。

こちらも恐る恐ると言った様子で箸を進めている。

先ほど、はやての部屋の前で鬼柳と睨みあっていたのはシグナムと言う女性。その隣にはシャマルと言う女性の姿もある。

そんな二人の対面の席に座っているのは、頭から獣の耳の様な物を生やした男性――ザフィーラの姿。

なんとも言えない濃いメンツの登場に、はやては笑ったらいいのか。怯えたらいいのか分からなくなった。

「驚いた。これ、闇の書みたい……」

「プレシア、闇の書ってなんだい？」

「噂にしか聞いたことが無いのだけれど……危険なロストロギアらしいわ」

と、はやてがあっという間に減っていくご飯を遠い眼で見つめていると。

はやての私室にあった怪しげな本を見ていたプレシア達の声がはやての耳に入る。

プレシアの口ぶりから察するに、どうやらあの本は闇の書と呼ばれるロストロギアらしい。

危険と言うからには、ジュエルシードと同じくらいなのだろう。どれほど危険なものなのか想像できない。

だが――と、はやては視線をテーブルについて食事をしている四人の男女――守護騎士へと視線を向けた。

どうにも、彼女たちが進んで危険を冒そうとしている様には見えない。何かの間違いではないかと言う気持ちがある。

「あぅ。なんだかお腹、減ってきちゃった」

「わ、私も……」

そしてはやての脇では、あっという間に無くなっていくご飯の様子を見ていた二人の少女の呟きが。

なのはとフェイトは頬を赤らめながら、お腹の辺りを擦っている。

気持ちの良い食べっぷりに、食欲を刺激されたようだ。
そんな二人の様子が可愛らしく、またもやプレシアが鼻血を吹いて倒れてしまっている。
鬼柳はそんなプレシアを一瞥すると、冷蔵庫から適当な料理の余りを取り出し、それを二人に渡した。

「それにしてもプレシアさん。
闇の書って、どんなロストロギアなんです？」

「私も詳しいことは分からないわ。でも、知っていることだけ言えば――」

なのはとフェイトが鬼柳から渡されたご飯を食べているのを一瞥すると、はやてがプレシアに訊ねた。
まずは闇の書と言うロストロギアがどんなものか訊ねなければ。他にも守護騎士とはどんな存在かも気にかかる。

そしてはやてが視線をプレシアへと向ければ、彼女は「あまり詳しくないけれど」と前置きをして話し始める。
闇の書とは、ページの蒐集と言う行為を行うためのデバイスの様な存在である。蒐集を行えば、その魔法を使うことが出来る。

それに加え全てのページに魔力を蓄えると闇の書の主は強大な力が手に入るらしい。
そのため闇の書は、様々な欲望を持つ人の手に渡った。そして幾度も争いの種となってしまった。
時空管理局もこの闇の書を破壊しようと画策したが、闇の書には転

生機能と無限再生機能と言う、二つの機能が搭載されているらしい。

無限再生機能とはその名の通り、本体が破壊されようとも無限に再生する機能のことである。これにより、闇の書の破壊は不可能。

転生機能とはたとえ闇の書の主が死んでしまっても、新たな主の元へ転生する機能の事である。これにより、闇の書の破壊はほぼ不可能。

無限に再生する闇の書は様々な争いを引き起こし、何時しか管理局から一級捜索物として手配されているらしい。

話が壮大になり過ぎて良く分からないが、はやてには理解した事がある。それは――

「うん、守護騎士の皆の面倒は私が見たる！」

「ッ！？　はやてさん、アナタ自分が何を言っているのか分かっているの！？」

守護騎士の面倒は、自分が見る。と言うことである。あまりに突飛な発言に、プレシアは驚いた。

否、驚いているのはプレシアだけではない。今まで食事をしていたヴィータや桜色の髪の女性――シグナム達も同様だ。

「そら、分かっとる。この闇の書は危険な物なんやろ？」

「なら、なんで……」

「そやけど、この子らには何の罪もあらへん。
悪いのは、そんなことにしか使えなかった歴代の闇の書のマスターや！
だったら私が争いのために使わせへん！　ページを蒐集するのもダメや！
皆で楽しく暮らして満足する！　これでええやないですか！」

「はやてさん……」

プレシアは、はやての言葉に何も言えなくなる。本当は、そんな簡単な話ではない。
しかし、闇の書について詳しい事を知らないのもまた事実。もしかしたら、はやての言う通りかもしれない。

闇の書に罪は無く、ただ悪いのは闇の書をそんな事にしか使うことのできなかった歴代の闇の書の主。
しかし、それにも確証は無い。本当に闇の書の主が悪だったのか。
闇の書が諸悪の根源なのか。それは分からない。

咄嗟に反論しようとしたが、はやての必死な顔にプレシアの勢いは殺がれてしまう。
彼女は真っ直ぐとした視線で、プレシアを見つめていた。

「……ふぅ、分かったわ」

「ッ！？　母さん！？」

「ただし、もしも変なことになったらすぐに管理局に連絡する。こ

れは決定事項よ」

それが護る事が出来ないなら、私は時空管理局に今すぐ連絡する。
プレシアは言外にそう言った。
それははやても理解したのだろう。ハッと目を見開くと、すぐに押し黙った。僅かに顔を俯かせる。

「分っかりました！　その条件、呑もか」

「あ、主はやて!?　な、何故……！」

「だって、皆もうページを集める必要なんて無いんやもん。
そやから、もう争いを引き起こす必要もない。皆、楽しく過ごす事が出来る！」

「！」

はやては俯かせていた顔を上げると、元気よくプレシアの条件に了解の意を示した。
それにプレシアは仕方がないとばかりに肩を竦める。はやてはそんなプレシアの様子に笑みを浮かべた。

しかし、そのやり取りを納得できていないものが居る。今まで食事を続けていた守護騎士たちだ。
彼女たちは主であるはやての決定に驚き、何故蒐集を命じ強大な力を得ないのか疑問に思っているらしい。

だが、はやてもはやてで言い分がある。彼女は現在の日常を気に入っている。わざわざこの日常を壊す気は無い。
これからは守護騎士や鬼柳、プレシア達と一緒に楽しく過ごす。そうすれば誰も傷つかない。皆笑顔で満足出来るではないか。

「みんなニコニコ笑って、これから満足しよか！」

はやては嬉しそうに。楽しそうに笑みを浮かべると、グッと握り拳を天井へと掲げるのだった。

閑話　「誕生日」（後書き）

守護騎士登場。次回辺り色々と日常編に戻る予定。
数話日常編を挟んだらＡ'ｓ編へ行く予定ですよ。

閑話　「調整」（前書き）

今回は特に大きなイベントは無し。
地味にリニスやシグナムについて触れてます。

閑話「調整」

～海鳴市　八神家～

「うぅ～ん……」

パラパラ。カサカサ。

「これは～……ビミョー……。こっちも……ビミョー……」

パサリ。ドサドサ。束にしていたカードが崩れ、なのはは僅かに顔を歪めた。
そして今まで捲くっていたカード達をテーブルの上に置くと、崩れたカードを整える。

トントン、とカードを整え、テーブルの上に置くと。彼女の視線は自然と、テーブルの上に向かう。
テーブルの上に置いてあるのは、解体されている彼女のデッキ。モンスター、魔法、罠と三種類に別れている。

「うにゃぁ～……。なんだかピンと来ないよぉ……」

しばしジィッと解体されているデッキを見つめていたなのはだが、

不意にヘニャっとテーブルの上に崩れた。
チラ、とカード達に視線を向けるが、今まで何度も見てきたカード達は効果やイラストが変わっている訳ではない。

将来参加するＤＭミッドチルダ杯。その大会に参加するためにデッキを調整しているのだが、思う様に調整できていない様だ。
プレシアから様々なカードを貰ったのだが、それでもピンと来る調整が出来ない。使い過ぎた頭が、ズキズキと鈍痛を訴えている。

「なのはちゃん、なんや凄い悩んどるみたいやな」

「あ、はやてちゃん」

なのはがテーブルの上に突っ伏していると、リビングに新たな少女と女性が姿を現す。
少女は以前からなのはが交流を持っていたはやて。女性の方は先日、闇の書から現れた女性だ。

はやては車いすの上から、デッキの調整に行き詰っているなのはの様子にクスクスと苦笑する。
はやてとて、デッキの調整に行き詰る事はある。こればっかりは、いくら経験を積んでも慣れるものではない。

はやてが車いすを操作し、お茶の用意を進める。と、そんなとき、テーブルの上をジッと見つめる女性の姿に気がついた。
それは先日、はやてが何故か持っていた闇の書と言うロストロギアから現れた女性――シグナム。彼女はなのはのデッキをジッと見ている。

「にゃ？　シグナムさん？」

「……このカードを、このカードと入れ変えれば良いのではないか？　他にも≪マジシャンズ・サークル≫を一枚抜き、≪紅蓮魔竜の壺≫を入れれば……」

「あ！　そっか！」

シグナムはなのはの解体されているデッキから数枚のカードを抜きだし、新たに入れるカードを指摘する。

それは今まで、なのはが考えていなかった入れ変え。思わぬ助言に、なのはは驚きながらも、嬉しそうにしていた。

そしてシグナムに指摘されたカードをデッキから抜き出し、告げられたカードをデッキに入れて数回、回してみる。

すると思いのほか調子が良い。なるほど。こんな考え方があるなんて知らなかった。新たな発見になのはは僅かに興奮する。

「なんや、シグナムもデュエルモンスターズ、やるん？」

「え？　え、ええ。先代のマスターからデッキを与えられて……。なんでも、魔法に変わる新たな戦闘方法だとか……」

「……なんや、間違ってないんやけどな」

なのはが嬉々としてデッキを組み直している様子に、はやては僅かに驚いた表情を浮かべた。
あの堅物そうなシグナムのこと。デュエルモンスターズに良い感情を抱いているはずがないと思っていた。

だが、告げられた彼女の言葉にはやては何とも言えない表情を浮かべる。
デュエルモンスターズをプレイ出来るのは良い。意外とギャップが可愛らしいのだから。

だが、魔法に変わる新たな戦闘方法かと問われれば首を傾げざるを得ない。
デュエルモンスターズはそこまで他の世界で広まっているのだろうか。自分が知らないだけなのか。

「出来た～！」

「お、出来たんか？
なら、私と調整を兼ねてデュエルせぇへん？」

「良いよ！　よぅし！
私の新しいデッキの力、見せてあげるの！」

はやてがそんな遣る瀬無さを覚えていると、なのはの歓声が上がった。
どうやらデッキをくみ上げ終えたらしい。清々しいと言わんばかりの表情で額を拭っている。

それにはやては興味を覚えた。以前から良い勝負をしていた自らのデッキとなのはのデッキ。
果たして今度の調整で、どの程度まで戦力が引き離されたのか。はやては興味を抱きながら提案する。

それになのはは当然の様に了承。組み終えたばかりのデッキを手に、テーブルの席に着く。
はやてもなのはの対面に移動すると、腰に通っているベルトからデッキを取りだした。互いにシャッフル。

シャッフル、並びにカットを終えると、どちらからともなく初期手札である五枚をドローする。
そしてどちらからともなく、デュエルを開始する合図を高らかに宣言した。

「「デュエル！」」

※

「うん。大分良い感じなの」

「そやな。除去カードの代わりに攻撃力上昇のカードを入れたのが良い感じやね」

はやてとの数回のデュエルを終え、なのははホクホク顔でデッキをケースに仕舞った。
シグナムからの助言もあり、なのはは終始良いペースではやてのブラックフェザーを圧倒。

大量展開に対して単体除去を連発するのではなく、攻撃力を上昇させるカードを入れたのが功を奏したようだ。
はやてもこれが調整だと理解しているのか。特に悔しそうな表情を浮かべるでもなく、なのはのデッキの様子を確かめる。

「≪紅蓮魔竜の壺≫もええ感じや。
やっぱり、ドローソースはあって困らんな」

「だね。前は手札が尽きそうになるのが何回かあったもん」

「それに≪一族の結束≫も大分強いで。
元々パワータイプのなのはちゃんのデッキが、更に強化された感じや」

紅蓮魔竜の壺
通常魔法（アニメ効果）
自分フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

一族の結束
永続魔法
自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
１種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する
その種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。

なのはがパラパラとデッキを確認しながら、デッキの様子を確かめる。
以前までのなのはのデッキには、ドローカードは一枚も入っていなかったのだ。

しかし、これは仕方が無いことである。汎用ドローカードで制限カードは少ない。
強力な効果を持つ強欲な壺などは禁止カードに登録されており、使用することは不可能。

唯一なのはのデッキで使えそうな闇の誘惑も高レートカードであり手が出せず。
仮に手が出たとしても、なのはのデッキに闇属性モンスターが少ないので使うに使えないのだ。

「あとはシンクロモンスターの選択肢も増えれば良いな」

「そうだね。あとでプレシアさんにちょっと頼んでみます」

「あぁ」

なのはが自分のメインデッキを確認している隣で、シグナムがなのはのエクストラデッキを確認する。
彼女のエクストラデッキにはシンクロモンスターがたった三枚しか投入されていない。これは選択肢が少なすぎる。

まず一枚目は彼女のエースであるレッド・デーモンズ・ドラゴン。レベルは8で切り札である。
二枚目はまず誰もが入手できるであろう大地の騎士ガイアナイト。レベルは6だが攻撃力がなかなか高い。

残る一枚はシンクロの準切り札であるアーカナイト・マジシャン。レベルは7でこちらは効果が優秀だ。
レッド・デーモンズ・ドラゴン以外のシンクロモンスターは優秀なのだが、いかんせんカードの数が少なすぎる。

これではいざという時に、相手のモンスターを突破できずに敗北すると言うこともあり得る。
どうにかシンクロモンスターを集める事が出来れば良いのだが、優秀な効果を持ったカードは少ない。

「うにゃ！　これで鬼柳さんに勝てるかもしれない！」

「あはは。その意気やで、なのはちゃん」

「そしてレンちゃんと満足するの！」

なのははメインデッキをテーブルの上に置くと、グッとガッツポーズを取る。

そしてチラリと視線を、テーブルの上に置かれた自身のメインデッキに視線を向けた。

デッキの一番上に置かれているのは、彼女が幼少の頃から使い続けているサイレント・マジシャンのカード。

ふと、視線をキョロキョロとリビングに走らせて彼女の姿を探すのだが、何処にも彼女の姿は無い。当たり前だ。

現在、なのはの所持していたデバイス――レイジングハートは、管理局に没収を命じられているのだ。

理由としては、管理外世界でミッドチルダ魔法に準ずるデバイスを所持させる訳に行かないと言う至極真っ当な物。

もしもレイジングハートを所持し続けるのならば、管理世界の住人となる必要がある。それはあまり好ましくない。

なのはは両親や鬼柳、それに新たにフェイトやプレシアが住むことになったこの地球が大好きなのだ。他の世界に住む事は出来ない。

なのでクロノにレイジングハートを一時的に預けたのだ。何時の日かミッドチルダに赴いた際、返してもらうために。

その折にサイレント・マジシャンであるレンも同時に消滅。何時の日かなのはと共に闘うことを約束し、クロノの元へ行ったのだ。

「（絶対、迎えに行くからね。……だから、待っててて！）」

なのはは密かな決意と共に、デッキの上に置いてあるカードを掴む。

それをギュッと握りしめた。

レンと再会するまでは、プレシアが作成を依頼しているデュエルデ

ィスクで我慢するしかない。

そのデュエルディスクはレンを召喚することは出来るのだが、以前の様にお喋りする事が出来ない。

絶対に彼女と再会し、彼女と共に満足する。これがなのはの胸に建てた、新たな誓いである。

「よーし！　もっとデッキを強化して「はふぅ」……にゃ？」

再び気合を入れ直し、デッキを調整しようとしたとき。リビングに小さなため息が響いた。

なのはとはやて。シグナムの視線がため息が聞こえた方へと向かう。

そこには疲れた様子のフェイトとプレシア。

「良い調子だったわよ、フェイト。
やっぱりデッキを大幅に改良した甲斐があったわね」

「うん。でも、鬼柳に負けたのは悔しいな」

「大丈夫よ。鬼柳のライフをあと１０００まで削れたじゃない」

「……うん。そうだね」

「「――――ッ！？」」

なのはとはやては、自らの耳に飛び込んできた単語に眼を見開いた。

今のプレシアの言葉の中に、どうしても見過ごせないものがあったのだ。

それは鬼柳のライフを、あと１０００と言う値まで削ったと言うこと。

これにはさすがのなのはやはやても驚く。彼女たちはそこまで削った事が無い。

はやてはともかく、なのはのデッキは初動が遅いのだ。そのせいで鬼柳に展開する隙を与えてしまう。

その結果、序盤でアドバンテージを奪われ、そのままフィニッシュされることが多々あるのだ。どうしてもライフを削れない。

だと言うのに、フェイトは鬼柳のライフを残り１０００ほどまで削ったと言うのだ。

しかもプレシアやフェイトの口ぶりから察するに、鬼柳が大量展開した後で削ったらしい。

鬼柳に大量展開された場合、なのはとはやては早々に勝負を諦める。

あの物量を耐え切るのは大分難しい。

なのにフェイトはライフを削った。しばしなのはとはやては互いに沈黙していたが、ふと視線をお互いへと向ける。

「なのはちゃん、私もっとデッキを強化したいんやけど」

「奇遇だね、はやてちゃん。私ももっとデッキを強化したいんだ」

「そか。なら、持ってるカード全部持って私の部屋に集合や！

これ以上フェイトちゃんにポイント稼がれたらあかんでぇッ！！」

「うん！　それに鬼柳さんを一番に倒すのは私なの！」

お互いに同意を示すと、それぞれデッキや使わないカードを持って移動を始める。
鬼柳に仄かな想いを抱いているなのはとはやてにとって、これ以上ポイントを稼がれるのは不味いのだ。

だが、それに加えてある思いが彼女たちの心中を占めている。それはデュエリストならば当然の感情。
それは強敵に対し、自らが勝ちを奪い去りたいと言う、ある種闘争心の様なものだった。

※

「大分苦戦したみたいだね」

「あぁ。フェイトのヤツ、カードの使い方が上手いからな」

「当たり前だよ。なんてったって、アタシのご主人様だからね♪」

フェイトとのデュエルを終えた鬼柳の元に、アルフが飲み物を持って訪れた。
彼女は鬼柳に持ってきた飲み物を渡すと、先のデュエルについての感想を訊ねる。

鬼柳はアルフから受け取った飲み物を口にしながら、コクリと首を縦に振り、同意を示した。
実際、フェイトは強かった。プレシアから貰ったカードや、パックで当てたカードでデッキを強化して。

新たに増やされたギミックにより、フェイトのデッキの選択肢が増えたのだ。それに加え、シンクロモンスターも増加した。
以前まではジャンク・ウォリアーとスターダスト・ドラゴンの二枚だけだったのに、新たに「ジャンク」カードが三枚も増えたのだ。

増えたそのカードの効果は凄まじく、鬼柳の扱うインフェルニティですら手を焼いたほど。
もしもフェイトが新たなデッキに慣れたら。新たにシンクロモンスターが増えたら。次は負けるかもしれない。

「やっぱり、リニスの教育が良かったみたいだよ」

「？　リニス……？　誰だ」

「あ、鬼柳は知らないよね。
えっとリニスってのはね、フェイトにデュエルモンスターズを教えた使い魔なんだ」

「それと同時に、プレシアの使い魔なんだよ」とアルフは付け加える。それに鬼柳は納得した。
誰かにカードの扱い方を教えられたので無ければ、アレほどデッキを上手く動かすことは出来ないだろう。

仮に誰にも教えられずに上手く動かしていると言うのならば、それはまさに天才と呼ぶに相応しい。
ちなみにこれは遊星が当てはまり、それほど強くない効果を持ったモンスターでも上位の相手と互角に戦っていた。

「そのリニスってのは、何処に居るんだ？
俺は見た事がないが……」

「あ～……。リニスはね……ちょっと、他の世界に修行に出てるんだ」

「？　修行？」

「うん」

アルフは鬼柳の言葉に、バツが悪そうに頭を掻いた。そしてリニスについて説明する。
リニスとはフェイトにデュエルモンスターズを教えた使い魔で、アルフも彼女に教えられたらしい。

フェイトとアルフがまだ幼い時は彼女と模擬戦をする事が多く、当時は逆立ちしても勝てなかった。

だが、ある日実力を付けたのか。フェイトがリニスを打倒したのだ。
それにリニスはショックを受けたらしい。

どうやら少なからず自分の実力に自信を持っていた様で、幼いフェイトの成長に嬉しさを覚えると同時、悔しさを覚えたようだ。
その後、彼女はプレシアに掛け合って次元世界へ渡り、武者修行すると言う許可を取ることに成功したらしい。その後、彼女は旅に出た。

実力を付けて、再びフェイトの教師役に戻るために。彼女もある意味、フェイトを溺愛している様だ。
鬼柳はアルフの話を聞いて、リニスに興味を抱く。負けてもそれをバネにして成長しようとしている。それは誰でも出来る訳ではない。

「なるほどな。良い奴じゃねぇか、そのリニスってヤツは」

「まぁね。プレシアがお母さんだったら、リニスはお姉さんみたいな感じだったし」

「もう一回会いたいねぇ」と、アルフは窓から外を覗きながらそう呟く。
どうやら彼女も、リニスに会って話をしたい様だ。家族の絆の様な物を感じる。

「そのうち会えるだろ」

「え？」

「俺たちはこれからドでかい大会に出るんだ。
もしかしたら、そのリニスってヤツも出るかもしれないだろ？」

「……ん。そうだね」

鬼柳はそんなアルフの様子に僅かに笑みを浮かべると、そのうち会えると告げた。
実際、そのうち会うことが出来るだろう。大規模な大会に出れば、イヤでも注目される。

それに家族の絆と言うものは、切って切れる様なものではないだろう。
もしもそんな脆い物ならば、それは絆ではない。ただの思いこみに他ならない。

アルフは鬼柳の言葉にタハハと苦笑すると、ガリガリと頭を乱暴に掻き毟った。
そして少しの間頭を掻き毟ると、清々しい表情を浮かべる。そこに先ほどまでの寂しさは無い。

「よぅっし！
そうと決まればリニスとデュエルするときに備えてデッキを調整しないとね！」

「あぁ。その方がお前らしいじゃねぇか」

「タッハハ！　これじゃ何時かの日と逆だね」

「そうだな」

アルフは鬼柳の言葉に、頬を薄っすらと赤く染めながら苦笑する。
どうやら鬼柳の言葉に照れているらしい。見慣れぬアルフの表情に、鬼柳は僅かに驚く。

だが、それも束の間。アルフはグッとガッツポーズを取ると、足音を響かせながら廊下に出た。
大方リニス打倒に燃えているのだろう。いつもの調子に戻ったアルフの様子に笑みを浮かべながら、鬼柳は飲み物を口に運ぶ。

と、そんな鬼柳の視界に、こちらを見つめる二つの瞳が映った。
ジィッと眼を凝らしてみる。

「？　フェイト、か……？」

「……」

「？　ど、どうした？」

眼を凝らして良く見てみれば、その瞳は赤かった。
そして鬼柳の知る限り、赤い瞳を持った人物はフェイトだけ。

扉の向こうからこちらを見つめるフェイトに声を掛けるが、返ってくるのは沈黙。
一体どうしたのだろうか。僅かにフェイトの気配に気圧されながら、

鬼柳はフェイトに訊ねる。

「アルフ、一週間ご飯抜きだね」

「!?」

フェイトの口から飛び出した言葉に、鬼柳は驚いた表情を浮かべた。
あまりにソレは酷いだろう。咄嗟に反論しようとすると、フェイトが寂しげに呟く。

「鬼柳と仲良くするの、ダメだもん……」

「……」

フェイトの寂しげな呟きに、鬼柳は口から出しかけていた言葉を飲み込んだ。
そう言えば自分は、フェイトから父親の様な存在だと思われていることを思い出したのだ。

そんな自分が、娘（フェイト）に構わずアルフに構っていたのだから、面白くもないだろう。
自分はまだ、恋人もいなければ子供も居ないのになと内心で呟きながら、ポンとフェイトの頭に手を乗せる。

すると先ほどまで寂しげだったフェイトの表情が和らぎ、「えへ」と笑みを浮かべた。それに鬼柳も笑みを浮かべる。

まぁ、良いかもしれないなと。恋人が居なく、結婚もしていないが、子供が居ると言うのは悪くないかもしれないと内心で思う。

「これもある意味……満足出来るかもしれないな」

鬼柳はそう呟くと、フェイトの頭を優しく撫でた。これもある意味、満足出来るだろう。

そして穏やかな日差しの差す八神家のリビングの中で、鬼柳は静かにフェイトの頭を撫で続けた。

だが、鬼柳は知らない。たしかにフェイトは、鬼柳に対して父親の様な感情を抱いている。

しかし、それとは別の想いも抱いている。それが何なのか分かるのは、まだ先のお話――――。

閑話　「調整」（後書き）

次回はきっとフェイトの小学校編入をやると思う。
もしくは海水浴。……どっちの方が嬉しいんだろうか。

閑話　「小学校編入の乱」（前書き）

今回は完全にギャグパートです。
鬼柳さんのキャラ崩壊気味。
こんなの鬼柳さんじゃない！　と言う方はブラウザバックプリーズ。

閑話　「小学校編入の乱」

～海鳴市　八神家～

ドタドタ。激しい足音を廊下に響かせながら、とある人物が部屋の扉を開けた。
その部屋は時折八神家に泊まりにやってくる少女――なのはが使う部屋。勢い良く戸が開く。

「高町なんとか！」

「なのはだよ！」

なのはは乱暴に開けられた扉の方へと視線を向けると、怒鳴り返す様に叫んだ。
彼女の視線の先には、白いTシャツに短パン姿。腰の辺りまで伸びた紅の髪を三つ編みに結っている少女。

その少女――ヴィータは部屋の中になのはの姿を見つけると、ズンズンと足音を響かせて歩み寄る。
そしてヴィータはなのはのすぐ傍まで歩み寄ると、ガシッと彼女の肩を掴んだ。思わずなのはの眼が見開かれる。

「ど、どうしたの？」

「今すぐリビングに来い！
鬼柳とプレシアが大変なんだ！」

「えぇッ！？　き、鬼柳さんが！？」

ヴィータは力強くなのはの肩を掴むと、真剣な眼差しでなのはに懇願した。
彼女のその内容に、なのはは思わず驚いた。鬼柳とプレシアが大変とはどう言う事だろう。

詳しい話を彼女から聞きたいと思うのだが、そんな事はお構いなしとヴィータが引きずる。
恐らく、行き先はヴィータの言っていたリビングだろう。一体何が起こっているのか。イマイチ把握できていない。

そしてヴィータに引きずられるまま、なのははリビングへとやってきた。
すると、リビングの中に人影が視界に入った。思わずそちらに視線を向ける。

「≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫で≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫に攻撃！」

「ぐっ……！
≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫が破壊され墓地へ送られた時、装備されている≪光と闇の竜≫の効果発動！
このカードが破壊された時、私の場のカードを全て破壊する！
更にその後、墓地からモンスター一体を特殊召喚する！

私は≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫を選択！　更にレヴァテインの効果発動！
　このカードが召喚・特殊召喚に成功したとき、≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫以外のドラゴン族モンスター一体を、装備カード扱いとしてこのカードに装備する！　装備する対象は――≪光と闇の竜≫！」

「くっ……！」

ドラグニティアームズ・レヴァテイン
星８／風属性／ドラゴン族／攻２６００／守１２００
このカードは自分フィールド上に表側表示で存在する
「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスター１体をゲームから除外し、
手札または墓地から特殊召喚する事ができる。
このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、
「ドラグニティアームズ－レヴァテイン」以外の
自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター１体を選択し、
装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
このカードが相手のカードの効果によって墓地へ送られた時、
装備カード扱いとしてこのカードに装備されたモンスター１体を特殊召喚する事ができる。

光と闇の竜（ライトアンドダークネスドラゴン）
星８／光属性／ドラゴン族／攻２８００／守２４００
このカードは特殊召喚できない。
このカードの属性は「闇」としても扱う。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にする。

この効果でカードの発動を無効にする度に、
このカードの攻撃力と守備力は５００ポイントダウンする。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。
自分フィールド上のカードを全て破壊する。
選択したモンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する。

「……え？　な、なんで鬼柳さんとシグナムさんがデュエルしてるの？」

なのはは目の前で繰り広げられている激闘に眼をパチクリとさせながら、茫然と呟いた。
おかしい。鬼柳がデュエルをするならば、事前にプレシアかアルフが自分に教えてくれるはず。

なのにどうして連絡が無かったんだろう。疑問に思いながら鬼柳とシグナムから視線を外す。
と、そんななのはの視界にまたもデュエルをしている人物の姿が入った。その人物とは先ほど思い浮かべた二人の女性。

「≪インヴェルズ・グレズ≫の効果発動！
ライフポイントを半分支払い、このカード以外のカードを全て破壊する！」

「あぁ！　あ、アタシのＴＨＥ　シャイニングが！」

「そして≪インヴェルズ・グレズ≫でアルフにダイレクトアタック

ッ！　死になさい！」

「ぎゃぁあああああッッ！！」

プレシアとアルフは、鬼気迫る表情でデュエルをしていた。無意識のうちに後ずさる。

何なんだろうか。一体何故、プレシアやアルフ。それに鬼柳とシグナムはデュエルをしているのだろう。

なのはが目の前の展開について行けずにポカーンとしていると、不意にプレシアが大声で叫んだ。

思わずなのはも視線をそちらに向け、プレシアの言葉に耳を傾ける。

「ダメなのー！
フェイトを……フェイトを学校になんか行かせないのー！」

「ぐっ……！　フェイトには友達や勉強が必要なんだよ！　それを分かれ！」

「アルフの言うことも分かるけど……！　けど、フェイトに変な虫がつくかもしれないのよ！
アナタはそれで良いの！？　フェイトに変な虫が寄ってくるのよ！」

「んなッ！？」

「それが良いと言うのなら……私は――――アナタを討つ！！」

「ッ！？」

あまりの展開の速さについて行けず、なのははフイッと視線を逸らした。
何も聞いていないし見ても居ない。そうだ。自分は少々疲れているだけに違いない。

「くっ……！　フェイトに逆さ磔の刑を受けさせる訳に行かないんだ、シグナム！」

「だから何度も言っているだろう！　学び舎でそんな刑は無い！」

「嘘を吐くなッ！」

「本当だッ！！」

だから鬼柳とシグナムの方から聞こえてくる言葉も、同様に聞こえていないのだ。
あぁ、どうやら自分は大分疲れているみたいだな。ふかふかのお布団でお昼寝したら気持ち良いだろうな。

内心でその様に自分を慰めながら、なのははトコトコと自室へと戻ろうとする。
そんな彼女に待ったをかけたのは此処までなのはを連れてきたヴィータ。

「待ってばっ！　あの二人を止めるのを手伝えッ！」

「ヴィータちゃん、私疲れてるんだよ。幻聴が聞こえ過ぎてて危ないの」

「これは現実だー！　現実から逃げないで現実と闘えー！」

目尻からウルウルと涙の雫を零しながら、ヴィータはなのはの首を前後に振りまくった。

たしかにこの現実から逃げたいと思うのも分かる。だが、ここで逃げてしまえば収拾が付かないのだ。

しばしブンブンとなのはの頭を前後に振っていると、徐々になのはが現実へと帰ってくる。

何処かやさぐれている様にも見えるが、現実と向きあう覚悟をした様なのでそれに触れないでおく。

「……はぁ。それでヴィータちゃん。鬼柳さんとプレシアさんはどうしたの？」

「それがフェイトが学校に行くって言ったらあんな風になっちまったんだ。

どうもプレシアの方はフェイトと離れたくないみたいで、鬼柳は変な知識をプレシアに入れられたらしい」

「……あぁ、なるほど」

ヴィータの言葉に、なのはは何処か納得したように頷いた。どちらの言い分も分かる。
プレシアはフェイトが可愛過ぎて、僅かな時間でも娘と離れたくないのだろう。俗に言う親ばかだ。

そして一方の鬼柳の方と言えば、こちらは鬼柳が学校に通っていなかったのが原因だ。
鬼柳は元の世界で学校に通っておらず、学校に関する知識が欠如しているのだ。

そのせいで学校に関する知識だけは誰かに教えられなければ分からない。
今回はフェイトと離れたくないプレシアが鬼柳に嘘を吹き込んだのだろう。何とも迷惑な話だ。

「プレシアが学校でお弁当を残したら放課後の教室で逆さ磔の刑にされるって言ったら、鬼柳があんな感じに……」

「怖いよ！　そんな学校、わたし入学も編入もしたくないよ！」

「ついでにフェイトも治してくれると助かる」

「ほぇ？　も、もしかして……」

チラ、となのははリビングのとある場所へと向けた。そこはリビングの窓に面したガラス。
その端にはカーテンが纏められており、そこだけコンモリと盛り上がっている。ジッと見つめてみた。

どうやらカーテンの中に誰かが隠れている様で、なのはは足音を立てない様にカーテンの元まで歩み寄る。
そしてソッと、カーテンの隙間を覗き込んでみた。するとそこには、ウサギの人形を抱いて隠れているフェイトの姿が。

彼女はただ一心に「逆さ磔怖い逆さ磔怖い……」と呟いており、彼女もまたプレシアの妄言を信じているらしい。
やっぱり現実は強敵だった。トコトコと自室へ戻ろうと、リビングの中央をなのはは横断する。

「だから待ってば！　現実から逃げるな！」

「無理だよ、ヴィータちゃん。私、現実に疲れちゃった……」

「これが現実だー！」

なのはが心底疲れ切った様な表情で、ヴィータにそう説明する。それにヴィータは必死になのはを説得する。
その後、約三十分ほどの時間でなのはを説得し、鬼柳を相手にシグナム・ヴィータ・なのはの三人で鬼柳の説得に挑んだ。

※

「ぜぇ、ぜぇ……。つ、疲れた……」

「も、もう……やりたくねぇ……」

なのはとヴィータがシグナムとタッグを組み、鬼柳に挑んだ一時間後。

リビングには荒い息を吐く少女たちの姿が二人と一人の女性の姿があった。

なんとかあの後、鬼柳を相手に勝利を収める事が出来、鬼柳の誤解も解く事が出来た。

もしも鬼柳がこちらの言い分を信じてくれなかったらと思うとゾッとする。

「すまないな、なのは。まさかとは思ったが、やっぱりそんな事は無かったか」

「はふぅ、はふぅ……。あ、当たり前だよ！　そんな学校、怖すぎるよ！」

「俺もそう思ったんだがな……」

「えらくプレシアが真剣に言うもんだからついうっかり」と、鬼柳

は居心地が悪そうに告げる。
なのははそんな鬼柳の様子にハァと小さく嘆息した。仕方が無いと分かっているが、やり切れない思いがある。

バフンッとソファに飛び乗り、背中にソファのスプリングの感触を確かめながら、なのはは視線を鬼柳に向ける。
鬼柳は鬼柳なりに、フェイトを心配していたのだろう。そんな鬼柳を優しいと思うと同時、ムカムカと胸の中が苦しくなる。

「（また、フェイトちゃんばっかり……）」

鬼柳がプレシア達とこの家に住むようになってからなのはが心の底で思っていたこと。
それは、鬼柳はフェイトにばかり構っている様に思えるのだ。そんな事は無いと思うが否定できない。

この前のデッキの試運転の時もそうだった。自分とはデュエルせず、フェイトとばかりデュエルしていた。
どうして自分とデュエルしてくれないんだろう。心の中でそんな思いが湧き上がる。これではとても満足できない。

「どうしたんだ、なのは」

「……え？」

「考え込んでる顔、してたぞ」

「あにゃにゃ……」

なのはが自らの心の内に抱えた感情に戸惑っていると、鬼柳が声を掛けた。
てっきりフェイトばかり見ていると思ったのに。自分のことも見てくれていた。

それに嬉しさを覚えると同時、もどかしさを覚える。自分だけ見てくれれば良いのに。
内心でどうしてそんなことを思ったんだろうと疑問に思いながら、なのはは思ったことを口にする。

「えと、ね……？」

「？」

「フェイトちゃんばっかり構ってて、そのぉ～……」

「あぁ……」

頬を赤く染めながら、伺う様に鬼柳に告げる。なんだかとても気恥ずかしい。
けれど、ここで恥ずかしがってしまっては今後も鬼柳はフェイトに構いっ放しになってしまう。

そんなことは耐えられない。それに、自分は決めたのだ。自分のやりたい事をやって満足すると。

なのはが恥ずかしさを覚えながら鬼柳にそう告げると、鬼柳は得心が言ったと言う様に頷く。それに心臓を高鳴らせた。

「悪かったな。一人に付きっきりになっちまうとは……。
こんなんじゃ、満足できねぇよな」

「う、うん……」

「よし。なら、今日は久しぶりにデュエルするか。
なのはの実力もどのくらい上がったのか興味あるしな」

「うん！」

ポンポンと自分の頭に乗せられる鬼柳の手から伝わる暖かさに、なのはは頬を緩ませた。
やっぱり、自分の胸の内に貯めないで吐き出すのが一番だ。我慢せずに言えば、鬼柳が答えてくれる。

なのはは嬉しそうに笑みを浮かべると、ぴょんっと鬼柳の膝の上に飛び乗った。
そして甘える様に彼の胸の中を堪能する。今まで碌に甘えられなかったのだ。これくらい良いだろう。

鬼柳は突然のなのはの行動に戸惑っている様だが、少しした後、なのはの背に手を回した。
そして幼子をあやす様にゆっくりと背中を撫でてくれる。久しぶりに感じた温もりに、なのはは満足げに眼を閉じた。

※

ツンツン。ツンツン。
手に持った木の棒で、フェイトは焼け焦げているアルフを突っついてみる。

鬼柳となのはが一応の和解を果たしたリビングの一角では、アルフが悲惨な状態になっていた。
どうやら先日のフェイトのお仕置き―ご飯一週間抜き―が祟ったのだろう。プレシアとのデュエルに敗北。

しかしその後応援に駆け付けたシャマルとザフィーラの手により、なんとかプレシアを敗北へと追いやることに成功したのだ。
現在、プレシアはリビングの一角ではやてとシグナムからお説教を食らっている真っ最中である。大人の威厳もへったくれもない。

「ふぇ、フェイトちゃん。
アルフさんを木の棒で突っついちゃダメです」

「あぅ。ごめんなさい」

「え！？　い、いえ！　なにもそんなに謝らなくても……！」

と、しばしフェイトが木の棒でアルフを突いていると、今まで見守っていたシャマルが声を掛けた。
どうやらあまりにアルフが哀れだったのだろう。シャマルの眼には哀れみの感情が存在している。

そしてシュンと落ち込んでいるフェイトの様子を一瞥し、視線を説教を受けているプレシアへと向けた。
彼女は渋々ではあるが、フェイトが学校へ行くのに同意を示している。とても先日の女性だとは思えない。

「プレシアさん、フェイトちゃんを信じるんや！
フェイトちゃんはそんな怪しい男の子についていかへん！」

「本当に……？」

「当たり前や！　それにフェイトちゃんはお父さんに夢中やで！
フェイトちゃんはお父さんから鞍替えする様な、安い女の子なんか！？」

「そんな事ないわ！　フェイトは……フェイトは高いわよ！
どうしてもフェイトが欲しいなら私を倒してからにしなさい！」

「その意気や、プレシアさん！」

「フェイトォオオオオッッ！　大好きよぉおおおおおッッ！！」

そしてシャマルが視線を向けている先で、なんだか暑苦しい展開になっていた。
だが、このまま学校へ行くのを渋られても困りものだ。結局、これが落とし所なのだろう。

良い具合にはやてが発破をかけたようだが、掛ける方向性が間違っている様な気がしないでもない。
シャマルは何ともモヤモヤしたものを抱えながら、ハァと小さなため息を吐き出した。

※

それから数週間後。
八神家のリビングに、なのはの通う聖祥大学付属小学校の制服に身を包んだフェイトの姿があった。

普段とは違う白い制服にフェイトは慣れない様子だったが、何処か嬉しそうに制服に袖を通していた。
その際にプレシアが鼻血を垂らしながら発狂。てんやわんやの騒ぎになったのは、御愛嬌と言うものだろう。

鬼柳やアルフもフェイトの制服姿を褒め、フェイトも嬉しそうにしていた。
若干プレシアや鬼柳から離れたくなさそうにしていたが、はやてたちの説得に渋々納得。

時折プレシア、もしくは鬼柳と登校することを条件に、学校へ通うことを了承した。
そして今日。生まれて初めて、フェイトが小学校へ登校する。刻一刻と時間が迫ってきていた。

「さて、それじゃ忘れ物チェックするわね」

「はーい」

八神家のリビングでは、プレシアがフェイトの忘れ物が無いかチェックをしている。
その様子を鬼柳やアルフは何処か穏やかな視線で見つめていた。プレシアが持っていくものを読み上げる。

「スタンガンは持った？」

「えっと。鞄に入ってるよ」

「催涙スプレーは？」

「制服のポケットに入ってる」

「防犯ブザー」

「えと。とりあえず二十個全部着けてるよ」

「腕時計型麻酔銃は？」

「ちゃんと着けてるよ」

「待ってェエエエエッッ！！　ちょ、プレシア！
フェイトをどんな危険地帯に送りこむ予定なのさ！」

プレシアが読み上げる忘れ物の項目に、アルフが大声で待ったをかけた。
キョトンとした表情を浮かべるプレシアとフェイト。二人の様子にズキズキと頭痛がする。

「学校だけど……。なにか変かしら？」

「当たり前だよ！？
何処の世界に完全防護して学校に行く小学生が居るのさ！？」

「此処に居るじゃない」

「言葉遊びしてるんじゃないよ！」

プレシアの元へ詰め寄り、アルフはいかにフェイトの装備が変かを説明する。

だが、プレシアは特におかしいと思っていない様でマトモに取り合ってはくれない。

こうなれば鬼柳にも説得して貰おう。そう願いつつ視線を鬼柳の方へと向ければ。

そこではフェイトに自身の首から下げている物と同じハーモニカを渡している鬼柳の姿が。

フェイトもフェイトで疑問に思っていないらしく、嬉しそうに「ぷーぷー」とハーモニカを鳴らしている。

そのうち、鬼柳の様にハーモニカを吹きながら登校する様になるのでは。ふと、アルフの脳裏にそんな光景が浮かんだ。

「イカしてるぜ、フェイト」

「サムズアップする要素ないからね！
ハーモニカ持って学校に行けないからね！」

「固いこと言うなよアルフ。
ハーモニカを持っていかなきゃ、満足できねぇぜ？」

「ダメなんだってばー！」

だんだんと、この家族に汚染されているのだろう。鬼柳の見当違いな言葉が聞こえた。

ソレと同時にアルフに向けてサムズアップ。某二千の技の男のサムズアップと被って見えた。

「大丈夫……じゃないかもしれません」とか聞こえたが、残念なことにアルフは気が付いていない。
必死に鬼柳やプレシア、フェイトにツッコミを入れて行くが間に合わない。ボケ役が多くて手が回らないのだ。

「チッ、分かったよ。ならお揃いのコートにしておく」

「コートもダメ……じゃあ、無いね……。
けど、なんだろう。釈然としないものを感じるよ……」

「鬼柳とお揃いのコート……？　えへへ、嬉しいな」

「あぁ。フェイトもこのコートを着て、満足しようぜ？」

「うん！」

アルフは既に、ツッコミを入れることを放棄したようだ。ソファの上に不貞寝する。
そして彼女の耳に聞こえてきた何とも穏やかな会話に、もしかしたら間違っているのは自分ではと不安になった。

だが、考えていても埒が明かない。とりあえずはプレシアが持たせたものの大半は没収しようとアルフは決意を固める。
そしてプレシアが持たせた物のうち防犯ブザー一個を除く全てを没収すると、丁度良いタイミングで八神家の玄関の戸が開かれた。

玄関には制服に身を包んだなのはの姿が。どうやらフェイトのことを迎えに来てくれたらしい。

ようやくツッコミを入れてくれる少女の登場に、アルフはホッと安堵の息を漏らした。

「えと、それじゃあ、行ってくるね？」

「あぁ。存分に楽しんでこいよ」

「沢山友達、作ってきとくれよ」

「うんっ」

玄関先で靴を穿くと、フェイトは後ろを振り返る。眼に映るのは鬼柳とアルフ。

プレシアは学校で手続きを終わらせるためにフェイトとなのはと同行する事になっていた。

フェイトと過ごす時間が短くなり、アルフは僅かながらも寂しさを覚える。

けれど、この寂しさがフェイトの成長につながっていると思うと気にならない。

ニカッとアルフは笑みを浮かべると、期待半分。不安半分と言った様子のフェイトを元気に送りだした。

閑話　「小学校編入の乱」（後書き）

次回は海水浴を予定。
恐らく次回の閑話で閑話は終了。

今度からはA-　S編に入ります。

閑話　「海水浴。そして物語は開幕する」（前書き）

今回で閑話はお終いです。
それはそうと総合ＰＶアクセスが１２８，０００超えました。
これも一重に皆さんのおかげ！　感謝です！

閑話　「海水浴。そして物語は開幕する」

～海鳴市　某所の海岸～

「はぁ……」

憂鬱そうな表情で、水着姿のザフィーラはため息を吐いた。
今日は以前より、彼の主であるはやてやその友人であるプレシアが楽しみにしていた海水浴の当日。

以前までならば考えられなかったほどの穏やかさにいつもなら戸惑うのだが、今日ばかりは違っていた。
今日は本当に気が進まない。これならば少し前から始まった新たな主との生活の方が、何倍もマシだった。

何故ならば――――

「鬼柳！　救急車を呼んどくれ！
プレシアが失血死で死にそうなんだ！」

「ふぇ、フェイトの水着……ブハッ！」

「あぁ！　か、母さん！」

眼の前では、海面にうつ伏せでプカプカと浮かんでいる一人の女性

――プレシア。
プレシアは何処か恍惚と、満足そうな表情を浮かべながら、鼻から大量の鼻血を流していた。

そんな彼女を慌てて救助しようとしているのは彼女の娘の使い魔であるアルフ。
アルフは着替えて海岸にやってきた鬼柳に救急車を呼ぶように告げると、プレシアを連れて砂浜へ戻ろうとしている。

そして残るフェイトと言えば、プレシアに買ってもらったばかりの水着を着てオロオロしていた。
幸い彼女の水着に鼻血が付着していない様で、フェイトの水着は綺麗なままだった。

「鬼柳さん。ど、どうですか？　に、似合ってます……？」

「ん？　あぁ、似合ってるぜ」

「えへへ」

一方の鬼柳と言えば、既にプレシアの発作をいつものことと認識しているのか。
トコトコと近づいてきたなのはの水着姿を褒めていた。なのはも満更ではないらしい。

この日のために新調したと言う白い水着にご満悦の様で、ソッと鬼柳の傍に身を寄せている。
これでもしも、どちらかの年齢がもう片方の年齢と同じだったなら

ば、お似合いのカップルと思えただろう。
しかし、なのははまだ小学生。そして片や鬼柳と言えば青年も良いところ。良くて兄妹と言うところか。
ある種の微笑ましさを周囲に振り撒きながら、鬼柳となのはは青々と輝く海面に視線を向けている。

「うむ。良い身体をしているな」

そして海を見つめる鬼柳となのはを後ろから見つめていたシグナムは、満足そうに頷いた。
彼女の視線は水着姿の鬼柳に注がれており、その引き締まった身体を見て感心している様に見える。

ザフィーラもまた、視線をチラリと鬼柳へと向けた。無駄な脂肪の無い、理想的な体つきだ。
喧嘩慣れもしている様で、身体のあちこちには傷が出来ている。酷い物では切り傷や打撲の痕も見えた。

「シグナム。その言い方だといやらしく聞こえるぞ」

「んなっ！？」

と、ザフィーラが鬼柳の肉体に内心で感心していると、後ろからヴィータの声が聞こえた。
彼女は、ニヤニヤと意地の悪そうな笑みを浮かべており、なにか悪

戯を思い付いたように見える。

そして彼女の口から放たれた言葉に、シグナムの顔が真っ赤に染まった。なるほど。たしかにそう取れる。

シグナムもその様な結論に至ったのか。頬を真っ赤に染めて必死に訂正している。それをヴィータはのらりくらりとかわし続ける。

「そ、そんなことがあるかッ！」

「いやいや。今のはそう聞こえても仕方ないだろ？
実際、鬼柳は良い身体してるし」

「ぬ。それは確かに」

「だからシグナムは鬼柳に夜の運動して貰って満足……」

ヴィータが言えたのは、そこまでだった。次の言葉を紡ごうとした口は、真一文字に閉じられている。

彼女の顔色は真っ青に染まっており、ダラダラと冷や汗が滝の様に流れ出ていた。何故ならば、そこには般若がいたのだから。

既にシグナムの瞳に光は無く、並々ならぬ怒気が彼女の周囲を渦巻いている。そして何よりも眼を引くもの。

それはヴィータの目前に振り下ろされている剣だった。それはシグナムの愛用するデバイス――レヴァンティン。

その切っ先がヴィータの鼻先一センチほどまで突きつけられており、膨大な殺気が彼女に叩きつけられているのだ。

一般人は元より、歴戦の勇士ですら逃げ出したくなる様な光景だろう。事実、その様子を眺めていたシャマルは退避している。

「イマ、ナニカイッタカ……？」

「い、いぃいいい言ってない！　何も言ってない！」

「ソウカ。ソレナラバイイ」

「ひぃいいいいいっっ！！」

非殺傷設定を解除しているのだろう。デバイスを突きつけながら、ヴィータに訊ねる。

その様子はまさに殺人鬼と言っても過言ではない。ヴィータは涙眼になりながら必死に否定した。

するとシグナムも怒りを納めたのか。徐々に彼女が周囲に纏っていた怒気も小さくなっていく。

その様子にザフィーラは内心でホッと安堵の息を漏らす。同様にシャマルやヴィータも安堵の息を吐いた。

「シグナムよ。今のはお前の言い方も悪い」

「ぐっ！　す、すまない……」

安堵の息を漏らしながら、ザフィーラはシグナムに忠告した。

実際、先ほどの言い方はそう捉えられても仕方が無い発言だったのだから。

その言葉にシグナムが反省の色を示し、ようやく一息吐けたとき。
他に海水浴客の見えない砂浜を、ズギャギャと高速で移動する物体が見えた。

「鬼柳兄ちゃぁあああああんッッ！！」

「うおっ！？」

砂浜を高速で移動する物体は、対砂浜用に車輪を換装した車いすだった。
その車いすに乗っているのはザフィーラ達守護騎士メンバーの主であるはやて。

彼女は何処からか引っ張り出してきた紺色のスクール水着を着て鬼柳の元へ走る。
その早さは見事の一言。換装した車輪―キャタピラの様な車輪だ―が砂浜を捉えて離さない。

「どやっ！？　どやっ！？　似合うか！？」

「あ、あぁ。はやても似合ってるぜ」

「いよっしゃぁっ！」

はやては鬼柳の元へ駆け寄ると、身に付けたばかりの水着を見せて感想を訊ねる。
鬼柳は咄嗟の事態に動揺したようだが、すぐにいつもの笑みを浮かべるとそう、はやてを褒めた。

するとはやては嬉しそうにガッツポーズ。そんなはやての様子を微笑ましげに見つめながら、鬼柳はその場に腰を下ろした。
それと同時、鬼柳の隣になのはが腰掛ける。その反対側には車いすに座ったままのはやて。どうやら鬼柳の傍から離れる気が無いらしい。

「良いもんだな」

「え？　なにが？」

「この青い海が、だよ。元の世界じゃ、こんな海は見れなかった」

二人の犬の様な行動に苦笑しつつ、鬼柳は目前に広がる透き通る様な青い海に視線を落とした。
サテライトとは違う、青い海。それを見て、自然と鬼柳の口から言葉が漏れた。それに二人が反応する。

鬼柳はチラリとなのはとはやてに視線を向けると、ポツリポツリと自分が居た世界のことについて語りだした。
サテライトの海はゴミなどで汚れ、濁っていた。泳ごうと考える者はあまりいない。てっきり、海はこんなにも汚いものだと思っていた。

だが、その考えはこの世界に来て打ち砕かれた。この世界の海は青い。宝石の様な青。
こんな青い海で泳いだら気持ちが良いのだろうなと思っていた。そして実際に泳ぎ、それを実感した。

それから、鬼柳は毎年海水浴に来るのを楽しみにしていた。頬に施されたマーカーで人目を憚るのだが。
それでも毎年、海水浴に来るのを止めようとはしない。それほどまでに、この青さの広がる海が気に入ったのだ。

「そうなんか。なら、これから毎年、皆で来ような！」

「あぁ。元よりそのつもりだぜ！」

「えへへ。皆でこの海で泳いで、満足するの！」

「これも新しい満足の第一歩やな！」

はやてがグッと、握り拳を空へと掲げる。それに鬼柳はフッと笑みを零した。
そして鬼柳ははやての頭にポンっと手を乗せる。その様子にはやては嬉しげに笑った。

再び遊星やジャック、クロウと出会うのは難しいかもしれない。
けれど、こうして新たな仲間とともに満足していれば、また出会えるかもしれない。

根拠は何処にもないが、そう思った。だからこれからも自分は仲間とともに満足する。
そして遊星やジャック、クロウと再び会うことがあれば、今までのことを謝ろう。そう決意する。

その決心を胸に、鬼柳ははやての言葉に「あぁ！」と力強く言葉を返した。

※

「き、鬼柳……。あ、アタシはもう……ダメ、だよぉ……」

「アルフ！　しっかりしろ！」

砂浜での鬼柳の決意から約十分後。波際からアルフのあまりに弱々しい声が響いた。
視線を声が聞こえた方へと向けてみれば、そこには砂の上に突っ伏しているアルフの姿が。

顔色は何処となく真っ青で、眼の下には大きな隈が出来ている。凄まじいと形容しても良い形相だ。

鬼柳はそんなアルフの変貌にギョッと眼を見開くと、慌ててアルフの元へ駆けて行く。急いで抱き起こした。

「アタシ、もうプレシアのテンションに……付いていけないよぉ……」

「アルフッ！」

抱き起こしたアルフの身体はフルフルと震えており、徐々に体力が抜け落ちて行くのが分かる。
それに鬼柳はどうしようもない遣る瀬無さを覚えながら、視線を後ろへと向けた。するとそこには二人の人物の姿が。

一人は彼女の主であるフェイト。黒い水着に身を包み、プレシアの指示に従って写真にその身を写している。
だが、ポーズが不味い。開脚している写真や妙に色っぽいポーズなど様々な写真を撮らされている。良いのだろうか。

残るプレシアと言えば、鼻血をダラダラと噴き出しながら水着姿のフェイトを必死に写真に収めていた。
勿論微妙に色っぽいポーズを注文している。なるほど。こんな二人の相手をしていれば、アルフに限界も来るだろう。

「あぅう……！　は、恥ずかしいよ母さん！」

「ブハッ！　わ、私のライフはゼロを通り越してマイナスよぉ……」

と、鬼柳がアルフの保護をシャマルに頼んでいると、さすがに恥ずかしくなったのだろう。
フェイトから抗議の声があがる。しかし、プレシアは気にも留めない。鼻血を噴き出してその場に倒れる。

その様子に鬼柳は僅かに嘆息すると、フェイトに「もう良いぞ」と声を掛けた。
するとフェイトはホッと安堵の息を漏らし、次いで、鬼柳の元へ駆け寄ってくる。

その姿はまさに、飼い主を見つけた犬の様だ。
鬼柳は僅かに口元を歪めると、掛けてくるフェイトを抱き止める。

「えへへ。鬼柳は暖かいな」

「そうか？　フェイトも暖かいと思うぜ？」

「ホント？　えへへ。だったら嬉しいな」

フェイトを抱き止めると、フェイトは嬉しそうに口元を緩める。
そんなフェイトの様子に笑みを浮かべながら、鬼柳は言葉を返した。

実際、今のフェイトは暖かかった。海に入らず砂浜にいたせいだろう。
しかし熱中症などを発症している様子も見られない。素肌から直にフェイトの暖かさが伝わる。

「鬼柳のお腹は固いんだね」
「あぁ。これでも鍛えてるからな」
「でも、気持ち良いや」

フェイトはポンポンと鬼柳の腹を叩くと、気持ちが良さそうに顔を埋めた。
異性の腹に顔を埋めるのは初めてなのだが、不思議と恥ずかしくない。逆に気持ちが良いくらいだ。

「えへー」と表情を緩めながらフェイトはふと、鬼柳の身体に残る傷跡に視線を向けた。
鬼柳の身体には大小様々な傷跡が残っており、傍から見たら痛々しいの一言。一体どうしてこんなに傷跡があるのか。

それを訊ねてみるのだが、鬼柳からは「お前にはまだ早い」といつもの返事が返ってくる。
フェイトはその言葉に頬を膨らませた。早くなど無い。自分だって鬼柳の役に立ちたいのだ。

自分が母親から拒絶されて落ち込んでいたとき、慰めて励ましてくれたのは鬼柳なのだから。
だから自分も鬼柳のためになにかしたい。ほんの些細な事でも良い。
鬼柳の力になりたかった。

「（それで、鬼柳のことがもっと分かれば良いなぁ……）」

適当に鬼柳のお腹の感触を楽しむと、砂浜に鬼柳と腰掛けながらフェイトは思う。
自分はまだ、あまり鬼柳のことを知らないのだ。彼がどんな物が好きで、どんな物が嫌いなのか。

彼がこの世界とは違う世界からやってきたと言うのは知っている。
恐らく、次元漂流者と言うものだろう。
だと言うのに彼は、何故か元の世界についての手掛かりを探そうとしていない。帰る理由が無いのだろうか。

他にも元ダークシグナーだったと言うのも彼から話を聞いた。仲間とともに、サテライトと言う場所でチームを組んでいたと言う話も。
それを聞いて、フェイトは何処か羨ましく思う。彼と初めてチームを組んだ初代チームサティスファクションが。一体、どんな人達だろう。

「ねぇ、鬼柳」

「？　なんだ？」

「鬼柳のこと、教えてよ」

「俺の、こと……？」

「うん」

だからフェイトは聞いてみることにした。鬼柳の好きな物や嫌いな物などの些細なことを。
過去については、言いたくないこともあるだろう。それでも良い。少しでも鬼柳のことが知りたかった。

鬼柳はフェイトの言葉に僅かに驚いたようだが、ふぅと嘆息。そして当たり障りのないことを離し始めた。
彼の住んでいたサテライトと言う場所では食べ物にあまり余裕はなく、好き嫌いを言っていられる余裕は無かったこと。

彼が初代チームサティスファクションの仲間と出会うまでは、サテライトの各地で様々なデュエリストとデュエルしていたこと。
ほんの些細な出来事を語って聞かせる。対して面白くもないだろうと思っていた彼だが、予想に反してフェイトは楽しそうに聞いていた。

「そうなんだ。あ、それじゃあ……恋人とか……居た、の？」

「恋人？」

鬼柳の言葉を楽しそうに聞いていたフェイトだったがふと、とある質問を鬼柳に行う。
それは彼に恋人がいたかどうか。理由は良く分からないのだが、不思議と気になって仕方が無い。

それに良く周囲に気を配ってみれば、なのはやはやて。それにプレシアやアルフがこちらに耳を傾けている。
どうやら四人とも先ほどの質問に興味があるようだ。影からフェイ

トに向けてサムズアップが向けられている。

「居ないな」

「え？　そ、そうなの……？」

「あぁ。興味が無かったってのがあるが……そんな暇無かったしな」

そして暫し沈黙が周囲を支配し、フェイトが息苦しさを覚えた頃。
鬼柳が言葉を漏らした。
それは居ないと言う返答。思わず「はぁ」と安堵のため息があちこちから漏れている。フェイトも同様だ。

鬼柳の言葉に安堵を示したフェイトは、鬼柳にどうして恋人がいなかったのか訊ねてみる。
そして返ってきた答えに思わず笑みを浮かべた。なんとも鬼柳らしい返事。心配したのがバカみたいだ。

「でも、なんでそんな事聞くんだ？」

「え！？　え、えぇっと、その……」

「？」

フェイトが鬼柳の言葉に安堵の息を漏らしていると、鬼柳が不思議そうに訊ねてきた。

実際、鬼柳からすれば不思議なのだろう。どうしてフェイトからこんな話題が出てくるのかが。

当然、明確な意思を持って訊ねた訳ではないフェイトは慌ててしまう。頬を赤く染め、しどろもどろだ。

チラチラと周囲に視線を向けて助けを求めるのだが、なのはやはやてはプイッと視線を逸らしていて救援は見込めない。

残るアルフとプレシアと言えば、プレシアはニコニコと楽しそうな表情を浮かべている。だが、何処か怖く感じる。

最後の砦であるアルフは砂浜に設置したビーチチェアにうつ伏せに伏せっていた。パタパタと尻尾で「ガンバレ」とエールを送っている。

「（ふ、ふぇえええええ～～ッ！？）」

まさかの救援が見込めないこの状況に、フェイトは心の中で絶叫を上げた。

友達だと思っていた少女たちに裏切られたのだ。彼女の動揺はどれほどの物だろうか。

必死に何度もアイコンタクトを送って救援を求めるが、返ってくるのは無反応と言う非情な現実。

それにいつまでも鬼柳の疑問を放置しておくわけにもいかない。フェイトはあわあわと慌てる頭で必死に考える。

そして咄嗟に考えた言い訳を、さも真実そうに話すことでなんとか鬼柳の追及の手を緩めることに成功したのだった。

※

「♪」

八神家とテスタロッサ一家。それにプラスαで行われた海水浴から一週間後。

鬼柳は八神家のリビングで何処か嬉しそうな表情を浮かべながら、ソファに腰掛けていた。

彼の視線の先にあるのは真新しさを感じさせるデュエルモンスターズの拡張パック。

今日は日本全土でデュエルモンスターズの最新ブースターが発売される日だったのである。

当然、各地のカードショップでは大混雑が予想されるが、そんなことは鬼柳には関係なかった。

以前に取得したデュエリストライセンスが役に立った様で、順番待ちをする事なくパックを買うことが出来た。

それは当然なのはやフェイト、プレシアにアルフも同様で、現在リ

ビングでは新作パックの開封会が行われているのだ。
早速パックを開けたなのはやフェイトからは、黄色い歓声が上がっている。どうやら中々良いカードが出たらしい。

「見て見て、鬼柳さん！　このカード凄く強そうだよ！」

「コイツは……≪マジックテンペスター≫？」

「魔法使いでバーンダメージ持ちだよ！　これで勝率も上がるの！」

マジックテンペスター
シンクロ・効果モンスター
星６／闇属性／魔法使い族／攻２２００／守１４００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを１つ置く。
１ターンに１度、自分の手札を任意の枚数墓地へ送る事で、
その枚数分だけ魔力カウンターを自分フィールド上に
表側表示で存在するモンスターに置く。
また、フィールド上に存在する魔力カウンターを全て取り除く事で、
その個数×５００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「へぇ、すげぇじゃねぇか」

「わたしは≪ドッペル・ウォリアー≫って言うのが当たったよ」

「こっちはフェイトのデッキと相性が良さそうだな」

ドッペル・ウォリアー

星２／闇属性／戦士族／攻　８００／守　８００
自分の墓地に存在するモンスターが特殊召喚に成功した時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードがシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、
自分フィールド上に「ドッペル・トークン」
（戦士族・闇・星１・攻／守４００）２体を攻撃表示で特殊召喚す
る事ができる。

未だパックを開けない鬼柳を余所に、なのはとフェイトは早速当た
ったカードを鬼柳に見せる。
なのははマジックテンペスターと言うシンクロモンスター。魔法使
い族のシンクロには珍しいバーン持ちである。

手札消費が激しいのが難点だが、追い打ちを掛ける際にこれほど有
効なシンクロモンスターは無いだろう。
大抵、追い打ちを掛ける際は相手のライフが少ない。このカードは
バーンダメージが大きいのでフィニッシャーになれるだろう。

対してフェイトが当たったのは、さほどレア度が高くない効果モン
スター。だが、レア度は強さに直結しないことがある。
今回もそれは当てはまった様でドッペル・ウォリアーと言うカード
の効果は中々のものだった。何よりフェイトのデッキと相性がいい。

「うーん。アタシ的に、今回のパックに欲しいカードは無かったね」

「そうね。私のカードは元々収録される枚数が少ないから、仕方な
いわね」

一方、プレシアやアルフのデッキと相性の良いカードは入っていなかったようだ。
だが、それも仕方がないかもしれない。アルフのデッキはある程度完成され、手の施しようが無いのだ。

せいぜいがデッキを安定させるためにドローソースを数枚入れるくらいだろう。デッキに入るカードは決まっている。
残るプレシアと言えば、彼女のカードはかなり珍しいカードだ。パックに収録される数は大分少ない。

しかし、その様なカードで様々な大会に出場し、優勝を飾ってきたのだからプレシアの実力が伺える。
もしも今後、プレシアの使用する「インヴェルズ」の収録枚数が増えたら。彼女のデッキの選択肢が今以上に増える。

「はやてはどうだ？」

「私もあんま無いんや。
なんや、最近のブラックフェザーは冷遇されとるんか？」

「そうなのか？」

耳に入るアルフとプレシアの会話を聞きながら、鬼柳は車いすの上で開封していたはやてに訊ねた。
ちなみに守護騎士たちも同様にパックを開けている。それぞれ欲しいカードが当たった場合はトレードしている様だ。

そしてはやてから差し出されたカードに、鬼柳は視線を向ける。そこには見慣れた名前のカード達。
はやてからカードを受け取り効果テキストを読み進めてみるがなるほど。優秀な効果を持ったカードが少ない。

しかし、使って使えない事はないだろう。様は工夫をすれば大抵のカードはどうにかなってしまうのだ。
はやてに受け取ったカードを返し、鬼柳は「さて」とテーブルの上に置かれた自分の分のパックに視線を向ける。

どうやら今回のパックには鬼柳の愛用する「インフェルニティ」と名のついたカードが収録されているらしい。
自分が使用しているカード群が収録されるとテンションが上がるのはデュエリストの性だろう。鬼柳は一つ目のパックに手を掛ける。

そして二つ目、三つ目とパックを開けて行く。時折嬉しそうな表情を浮かべ、時折落胆した様な表情を浮かべる。
その十分後には、テーブルの上には大量のパックの山と大量のカードの山。そして少量のカードの山が残されていた。

「当たった「インフェルニティ」はこんなもんか……」

鬼柳はテーブルの上に置いてある少量のカードの山を手に取った。
その山を形成しているのは全て「インフェルニティ」と名のついたカード群。

当たったカードは主に下記のとおりである。
・インフェルニティ・ナイト

・インフェルニティ・ジェネラル
・インフェルニティ・アーチャー
・インフェルニティ・セイジ
・煉獄の釜
・煉獄の鎖

である。いずれも個性的な効果を持ったカード達。
このカード達をデッキに組み込み、どんな風に満足するか。楽しみは尽きない。

そして鬼柳やなのは、フェイトが各々のデッキをデッキケースから取り出したとき。
それは起こった。

――――ドサリ

「ん？」

鬼柳やなのは、フェイトの耳に何かが落ちる音が聞こえた。
何だろうと疑問に思いながら音が聞こえた方へと向ければ、すぐに皆の眼が見開かれる。

床の上には胸を抑え、苦しげに蹲っているはやて。取り出したデッキはバラバラと床に散らばっている。
顔には脂汗が浮かび上がり、痛みが尋常ではない事を伝える。慌ててプレシアが容体をみるが、良く分からないようだ。

そして慌ててやってきたシャマルにはやてを預ける。治癒魔法を使えるシャマルならば何とかなるかもしれないからだ。

シャマルの魔力光である黄緑色の光が八神家のリビングで輝き、皆が一心にはやての様子を見守る。すると治癒魔法が効いてきたのか。

徐々にはやての顔色が良くなってきた。

痛みも和らいだようで、はやても若干苦しげながらも皆に突然倒れたことを謝る。

「なにを言っているの、はやてちゃん。まずは安静にしていなさい」

「はーい……」

だが、はやての謝罪はプレシアによって却下された。まずは身体を治す事が安静だと告げられる。

そんなプレシアの様子にはやては苦笑していたが、シャマルの腕の中で丸くなると眼を閉じる。すると眠気が襲って来た。

こうして、この日はやてを襲った謎の激痛は一旦治まる。

しかし、その激痛はまだ治ってなどいなかった。鬼柳達がそれを知るのは、もう少しだけ後のお話。

――――そして始まる。一冊の魔導書を巡る闘いが。

閑話　「海水浴。そして物語は開幕する」（後書き）

閑話は終了しました。
次回からはＡ'ｓ編に突入します。

だけど大分原作から離れていますのでオリジナル色が濃いです。
苦手な人はご注意ください！

プロローグ　「第二の物語の始動」（前書き）

今回は導入部。
と言ってもシグナムが蒐集しているくらい。
本格的にデュエルするのは次回くらいから。

プロローグ　「第二の物語の始動」

～海鳴市　八神家～

間もなく冬の季節がやってくると言う時期の八神家のリビング。
そこで鬼柳とプレシア、ヴィータはそれぞれ自らのデッキの微調整を行っていた。

鬼柳は先日買ったパックに入っていたカードを、デッキに入れるか入れないか検討している。
しかし、新たに出たカードはやはり効果やレベルが魅力的だ。スペースを空けて入れたいと思うのも心情である。

「ふぁ……」

「ん？　どうしたんだよ、ヴィータ」

と、鬼柳が自らのデッキの調整をしていると、不意にヴィータが欠伸を掻く。
以前から夜更かしなどせずに規則正しい生活をしているヴィータが眠そうにしているのは珍しい。

「別に……。ちょっと夜更かししてただけだ」

そう思い、訊ねてみるのだが。ヴィータはバツが悪そうにガシガシと頭を掻く。
そして手早くテーブルの上に広げていたデッキを集め、ケースに収めるとリビングを出た。

出て行く際の背中は鬼柳やプレシアの干渉を避けている様で。鬼柳は僅かに眉を顰める。
次いで、視線をチラリとリビングの中に居るプレシアに移せば、彼女は難しげな表情をしていた。

「プレシア。ヴィータのヤツはどうしたんだ？」

「……夜中に交代で、何処かへ出かけているみたいなの」

「アナタも気づいているんじゃない？」と、鬼柳はプレシアに訊ねられた。
それに鬼柳はコクリと頷く。今から一週間ほど前から、どうにも守護騎士達の様子がおかしいのだ。

自室で眠るのが好きなはずのシグナムやザフィーラがリビングで寝泊まりする様になった。
それ自体はおかしくは無いのだが、夜中に何処かへ出かけているらしい。それも毎日。交代で。

守護騎士たちが魔法を使え、デュエルの腕が上だと分かっていても、心配な物は心配だ。
鬼柳が夜中に守護騎士たちが外出していることを知っていると告げれば、プレシアが嘆息する。

「どうにも、はやてちゃんが倒れた日と前後しておかしくなっているわ」

「……確かにな。もしかして、アイツらがはやての体調の変化に影響しているのか？」

鬼柳はプレシアに訊ねながら、もしかしたらと想像する。守護騎士たちは人間ではないらしい。

別段、それ自体は構わないのだが彼らの身体を維持しているのがはやての魔力だと言うのだから心配になる。

もしや守護騎士たちの身体を維持するために、はやてから莫大な量の魔力が使用されているのではないか。

デュエルモンスターズで言えば、ライフを多く支払っている様なものだろう。もしもはやてのライフがゼロになれば。

想像して、ブルリと身体を震わせる。そんなことはダメだ。他に方法を探さなければならない。

しかし、プレシアは鬼柳の心配を予感していたのか。僅かに表情を緩めると、「それは無いわ」と否定した。

「彼ら守護騎士たちを維持しているのは、闇の書が覚醒時に使用した魔力。

はやてちゃんから魔力を吸い取って存在を維持しているとは考えられないわ」

「そうなのか？」

「えぇ。だから怪しいのは、闇の書ね」

プレシアの説明を聞き、鬼柳は「ふむ」と頷いた。プレシアが言うのならばそうなのだろう。

デュエルを始める前のプレシアはとある次元世界で、研究者をしていたらしい。ならば魔法知識は相当なものだ。

魔法に関して素人の自分よりも、プレシアの方が何倍も魔法に詳しい。その彼女が言うのならば安心だろう。

だが、次にプレシアが告げた言葉に鬼柳とプレシアは眉を顰めた。

闇の書。これに関してはあまりプレシアも情報が無い。

過去に大規模な災いを巻き起こし、ランダムに転生していると言うことくらいしか知らないのだ。

もしもプレシアが知らない機能が搭載されていたりしたら。そしてそれがはやてに悪影響を与えていたら。

イヤな想像に、プレシアと鬼柳の間に暗い影が落ちる。

「やはり早急に調べるほかないわね」

「アテがあるのか？」

「えぇ。アナタも知っているでしょう？」

リビングに落ちた暗い雰囲気を吹き飛ばす様に、勤めてプレシアが明るく告げた。
僅かに口元に笑みを浮かべながら、とある人物に闇の書について調べてもらうと告げる。
その人物とは――

「ユーノよ。彼ならロストロギアについても調べられるわ」

「そうか！　そう言えばユーノは遺跡の発掘してるって言ってたな」

「そう。だからロストロギアの知識はかなりのものよ」

プレシアが頼ろうと考えた人物は、数カ月ほど前まで鬼柳達と行動を共にしていた少年だ。
彼は先のジュエルシード事件が解決した際、時空管理局の次元航空船に乗って故郷へと帰還した。

通信手段さえどうにかなれば、闇の書についての詳しい情報が手に入るだろう。
鬼柳もプレシアの考えに追いつき、得心が行ったと言う表情を浮かべる。

「私は時の庭園で、ユーノに通信を入れるわ」

「俺も行くぜ」

「いいえ、アナタは残って」

「？　プレシア？」

そしてプレシアは善は急げと言わんばかりに行動を移す。まずは時の庭園に向かうのだ。

時の庭園には、以前鬼柳やなのは、フェイトにはやてのデュエルディスクの作成を頼む際に使用した通信機材がある。

それを使用すれば、ユーノの故郷へ通信を飛ばすことなど簡単だろう。リビングの入口へと向かう。

しかし、プレシアが足を進ませようとしたとき、ソファから鬼柳も腰を上げた。プレシアと共に行くらしい。

だが、プレシアは鬼柳の同行を断った。一人で十分だと言うのもあるが、彼にははやての傍に居て欲しかった。

ほんの些細な変化でも構わない。はやての身体に異変が起こっていないか。それを確かめてもらうためだ。

もしもはやての身体に異変が起こっている様なら、事態は一刻を争うかもしれない。

その旨を鬼柳に告げれば、彼は釈然としない表情ながらもプレシアの言葉に同意の意を示した。

※

「えへへ～」

ご機嫌な様子で、はやては鬼柳の膝に腰掛けた。お尻から暖かな感触が伝わる。
チラリと後ろを伺ってみれば、そこには見慣れた鬼柳の顔が。僅かに口元が綻んでいる。

その様子にはやては一段階機嫌を上げると、チラ、と部屋の中に視線を向けた。
するとリビングには二人の少女の姿が見える。他の誰でもない、なのはとフェイトだ。

二人ともかなり面白くなさそうな表情で、鬼柳の膝の上に乗るはやてに視線を向けている。
その様子はまるで、大好きなお父さんを一人に独占されている様に見える。僅かに優越感を覚えた。

「鬼柳兄ちゃんの膝の上は、久しぶりやな」

「そう言えばそうだな。会って間もない頃……はやてのデッキを調整してた時くらいか」

そしてはやては二人の少女から視線を外すと、鬼柳の膝の座り心地を確かめながら呟いた。
鬼柳の膝の上に乗ったのは、鬼柳と会って間もない頃だった。会って色々とあり、ここまで仲良くなった。

当時は鬼柳もはやてにどう接したら良いのか手探り状態で、何が良くて何が悪いのか分からない状態だった。
だが、それからはやてと接するようになりスキンシップの境界線を知り、今の様な関係に落ち着いたのである。

当然、当時は当然だと思っていた鬼柳の膝に乗ることは無くなり、はやては僅かに寂しい思いをしていた。
しかし、「今日は特別だ」と鬼柳が膝に乗せてくれた。それが堪らなく嬉しくて、はやては表情が崩れるのを隠せない。

「うぅ～……」

「凄く、ムカムカするの……」

と、鬼柳の膝の感触を楽しんでいると、すぐ傍から嫉妬の声が聞こえた。
視線を声が聞こえた方へと向ければ、そこには頬を膨らませているなのはとフェイト。

普段自分よりも鬼柳とベタベタしているのだから良いだろう。はやては内心でそう思う。
そして一際鬼柳と自らを密着させれば、二人は更に機嫌を悪くする。
見ていて微笑ましい。

「あっはは……っ！？」

「！　はやて！」

嫉妬している二人の様子にクスリと笑みを浮かべるが、すぐに笑みは崩れてしまう。
突如はやての胸に激痛が走り、はやては胸を抑えて蹲る。慌てて鬼柳がはやての顔を覗き込んだ。

はやてはなんとか「大丈夫だ」と伝えようとしたのだが、痛みが激しくて口を開く事が出来ない。
そのうち、はやての背中に暖かな感触が触れ、何度か背中を撫でてもらったとき。ようやくはやては一息吐く事が出来た。

「っつぅ～……。ご、ごめんな、鬼柳兄ちゃん」

「謝るな。これは俺が好きでやってるんだからよ」

「……えっへへ。ありがと」

痛みが引いた胸の様子にホッと一息吐き、はやては鬼柳に謝罪の言葉を告げる。
しかし、その言葉はあっさりと拒絶された。相変わらずの優しさに、はやては笑みを浮かべる。

そしてチラ、と視線をなのはとフェイトに向ければ、二人ともはやての様子を心配していた様子だった。
はやてと鬼柳の様子に嫉妬しながらも、はやてが不調な時は心配してくれるらしい。何とも良い友達を持ったものだ。

「もう、大丈夫なのか？」

「……うん、もう大丈夫や。ときどき、すっごく痛くなるけどな」

はやてが内心でなのはやフェイトに感謝の念を抱いていると、はやての顔を覗き込みながら鬼柳が訊ねた。
大方、はやてが痛みを隠して無理に振る舞っているのではと思っているのだろう。はやては思わず苦笑する。

以前までの自分ならば、たしかにそうしただろう。だが、今の自分は違う。
楽しいことや辛いこと。それらを吐き出すことの大切さを鬼柳から学んだのだ。

だから、先ほどのはやての言葉は正真正銘の本音である。今は大丈夫。
だが、ときどき無性に痛くなる。これが堪らなく辛く、泣き出してしまいそうになる。

だけどそんな時に、鬼柳やなのは、フェイトがすぐ傍に居てくれると言うのはとても心強い。
今まではそんなこと気にも留めなかったが、誰かがすぐ傍に居てくれると言うのはとても嬉しい事だ。

「だったら……」

「そやけど！　皆がすぐ傍に居てくれる！　それがとっても嬉しいんや」

「はやて……」

「はやてちゃん……」

鬼柳は心配して声を掛けるが、それを満面の笑顔のはやてが遮る。
自分の偽りない本音を鬼柳やなのは、フェイトにさらけ出す。恥ずかしい思いなど無い。

視線を感じて視線を向けてみれば、なのはとフェイトが笑みを浮かべながらはやてを見ている。
はやてもまた、二人に向けてニッコリとほほ笑んでみせる。その様子に釣られ、二人もまたほほ笑んだ。

「そやからまずは鬼柳さんの膝の上を堪能して嬉しさを感じておくで」

「「それはダメなのー！」」

※

「≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫でダイレクトアタック！」

「ぐぁあああああっっ！！」

シグナムの召喚したモンスターのダイレクトアタックが命中し、相手のプレイヤーは地に膝をついた。
どうやら非殺傷設定でデュエルをしている様で、相手のプレイヤーには魔力ダメージが与えられている。

相手のライフをゼロにしたことを確認すると、シグナムは自身の傍らへ一冊の本を召喚する。
その本は彼女たち守護騎士が現れたロストロギア――闇の書。彼女はそれを手に相手を見据える。

「ぐぅううううッッ……！」

「悪く思うな」

シグナムは眼下で膝を着いているデュエリストを見下ろすと、闇の

書に蒐集を命じた。
すると、闇の書が独りでに自らのページを捲くっていく。そのページの何れもが白紙だ。

そして蹲っているデュエリストの胸の辺りから、光り輝く球状の物体が出現する。
これこそが魔導師の力の源――リンカ―コア。そのデュエリストのコアから光の粒子が立ち上る。

「ぐぁあああああッッ！！」

リンカ―コアから立ち上った光の粒子は、ゆっくりとシグナムの手にある闇の書へ集められる。
すると、白紙だったはずの闇の書のページが凄まじい勢いで一行ずつ埋まっていく。

その様子を、シグナムは何の感慨も浮かばない様な表情で見下ろしていた。そして蒐集が終わる。
すると同時に、リンカ―コアから魔力を蒐集されていたデュエリストが地面に崩れ落ちた。

無理やり魔力を奪われた弊害だろう。幸い、生死に関わるほど深刻なダメージを与えてはいない。
シグナムは地面に倒れ伏した男を一瞥すると、集まったページに視線を落とす。今回は十ページ弱。

「……十ページ弱か。

やはりデュエリストの魔力は一般の魔導師よりも多いな」

蒐集を終えた闇の書に視線を落としながら、シグナムは感心したように呟く。
通常、魔導師から蒐集を行って得られるページの枚数は5～6枚。
多いとは言えない。

だが、デュエリストは平均で十ページから十五ページほど集める事が出来る。
これは恐らく、モンスターによる攻撃や実体化などで普段よりも魔力を消費するためだと思われる。

これにより、デュエリストの総魔力量は一般の魔導師よりも多い。
シグナムにとっては嬉しい事だ。
パタンと闇の書を閉じ、星空が輝く夜空へと飛翔する。すると視界に入るのは見慣れぬ世界のとある都市。

現在シグナムが居るのは、はやてと暮らす地球ではない。地球から少し離れた次元世界である。
そこでシグナムは腕の立つデュエリストとデュエルを行い、勝利すれば闇の書の蒐集を行うことにしていた。

だが、現在までシグナムに勝利したデュエリストは居ない。
僅かな物足りなさを覚えながら、シグナムは空を仰ぐ。脳裏に浮かぶのは主の顔。

「（主はやて……。申し訳ありません。
アナタとの約束を――――破りました）」

脳裏に浮かんだ敬愛する主に向け、シグナムは胸の中で謝罪した。
元より、闇の書の蒐集は彼女たちの主である八神　はやてが望んだものではない。

これは守護騎士総意の元で行われている行為だ。だが、そこに後悔の念は無い。
何故ならば、これは彼女たちのエゴであると理解しているからだ。

闇の書の蒐集を行わなければ、徐々にはやてが闇の書に侵食されていき、最後には死を迎える。
彼女たち守護騎士は、それを良しとしなかった。何よりも大切な主を。何よりも大切な日々を捨てたくなかった。

だから彼女たちははやてに隠れ、蒐集を行う。これは自分たちの我がままだと理解しているから。
出来れば他人に迷惑をかけずに事を済ませたかったが、ここまで事態が悪化してはどうしようもない。

『シグナム。新しいデュエリストを見つけたわ。その場所から丁度八時の方向』

「そうか。了解した」

と、シグナムがこれまでのことを思い出していると、彼女の脳裏にシャマルの声が響く。
どうやら新たなターゲット（デュエリスト）を見つけたらしい。シ

グナムは了解の意を返す。
そして腕に装着していたデバイス――レヴァンティンを剣の状態に変形させると、その身を空へと躍らせる。
次なるターゲットが待つ場所へ、シグナムは高速で己の身体を飛翔させた。

※

「う～ん、う～ん……」

「ふふ。存分に悩みなさい、フェイト」

プレシアがユーノへ闇の書に関しての情報の探索を頼んで数日後。
彼女たちの姿は市内のとあるデパートの中にあった。

デパートの中の携帯電話の物販スペース。そこでフェイトは携帯電話を一心に見つめている。
今日はフェイトに携帯電話を持たせるため、なのはたちが揃ってデパートに足を運んでいるのだ。

現在、フェイトの視線の先にあるのは二色の携帯電話。片方はフェイトの好きな黒色。
もう一つはなのはが勧めてくれた白い携帯電話。どちらの携帯電話のデザインは秀逸で迷うのも無理は無い。

「あ、あぅう～……」

しばし携帯電話を眼の前にしてむぅむぅ唸っていたフェイトだが、考え過ぎて頭が混乱してしまったようだ。
頭からプシューと湯気を立て、クルクルと眼を回している。そのまま後ろへ倒れ込みそうになったのを鬼柳が捕まえた。

「大丈夫か？」

「あぅう……。ど、どれが良いんだろう……？」

「自分の好きなのにしろよ。その方がずっと良い」

「そうだよ。フェイトちゃんの好きなのにして良いんだよ」

クルクルと眼を回しているフェイトを気遣いながら、鬼柳はソッとアドバイスしてみる。
鬼柳は携帯電話を持っていないので分からないが、自分の好きな方にしたら良いと思っている。

買って後で後悔するよりは、自分の好きな方を買った方が満足出来

るからだ。
そしてそれはなのはも同じ様で、無理に自分が勧めた物を推さずにフェイトに判断を委ねる。

すると眼を回していたフェイトはオズオズと身体を起こし、再び二つの携帯電話に視線を移す。
しばし二つの携帯電話の間を行き帰していたフェイトの視線が、とあるカラーの携帯電話に固定される。

その携帯電話の色とは――――。

「黒にするのか」

「うん。やっぱり、私は黒が好きだから」

「そうか」

黒だった。フェイトは黒い携帯電話を手に取ると、嬉しそうに笑みを浮かべる。
その様子にプレシアはニコリとほほ笑むと、フェイトの手から携帯電話を受け取ってカウンターへ向かう。

どうやら契約などの手続きはプレシアが行ってくれるらしい。その間、鬼柳達は携帯電話のエリアを見て回る。
サテライトに居た時には見られない様な品々。鬼柳も携帯電話に興味を持っていたが購入するまでには至らなかった。

もしも携帯電話を購入したとしたら、昔の仲間はどう言うだろうか。

鬼柳はふと、そんなことを思う。
だが、すぐに無意味な想像だと内心で己を嘲笑した。会うことは出来ず、会う気もない。どうしろと言うのか。

「（それにしても、やっぱりシグナム達の様子がおかしい……）」

頭を振ってその考えを頭から弾きだすと、鬼柳は最近の守護騎士たちの行動を思い出す。
日中は普通そのものなのだが、はやてたちが寝静まった深夜にゴソゴソと何かしている様なのだ。

一体何をしているのか。様子を覗こうとした鬼柳だったが、生憎と現場に出くわすことは出来なかった。
守護騎士たちは一体何をしているのか。それがイマイチハッキリせず、鬼柳は僅かに苛立ちを覚える。

「（チッ。らしくない……。やっぱり、後でシグナムに直談判――）」

「フェイト。ちょっと来てくれないかしら？」

「？　なに、母さんー？」

そして心の中でシグナムに直談判を行うことを決定しようと言うとき、プレシアの声がエリアに響いた。
その声に意識を引き戻され、鬼柳は視線をプレシアの元へ向ける。

それと同時、フェイトがプレシアの元へ駈け出した。

フェイトがプレシアの元まで駆け寄ると、プレシアは店員からとある物を受け取る。

それは様々な色の携帯電話のアクセサリー。どうやらフェイトの購入した携帯電話には専用のアクセサリーがあるらしい。

大方、どの色が良いかフェイトに訊ねるために呼んだのだろう。

プレシアはアクセサリーを覗きこんでいるフェイトを微笑ましそうに見ている。

一方フェイトと言えば、再び迫られた選択に「う～ん、う～ん」と頭を悩ませる結果になった。

なのはと鬼柳は、必死に考えているフェイトを穏やかな眼で見ている。フェイトの些細な仕草が可愛らしい。

「そう言えば、なのはの携帯電話は結構古いんだな」

「にゃ？　そうだね。
買ってから大分経つし……。新しいのに買い替えようかなぁ」

このままフェイトの考えている様子を見ているのも良かったが、鬼柳はなのはの相手をすることにした。

今二人が居る場所が携帯電話の販売エリアだからか。自然と話題が携帯電話中心になってしまう。

そして鬼柳は、なのはが持っている携帯電話に視線を落としながら訊ねた。なのはも視線を向ける。

なのはの持つ携帯電話は傷はあまり見当たらないが、機種が二世代ほど古いのだ。機能もあまり少ない。

なのはもそれを理解しているのか。携帯電話を片手で弄びながら、「う～ん」と考える仕草を見せる。

だが、あまり乗り気ではないようだ。多かれ少なかれ、その携帯電話に思い入れがあるのだろう。

「大会で賞金が入ったら新しいの、買おうかな」

「別に、今すぐに決めなくても良いんだぞ？」

「うぅん。この携帯電話も、そろそろお休みして欲しいから。だから鬼柳さん。わたしが新しい携帯電話を買うときは一緒に来てね？」

「あぁ。俺で良いならお安い御用だ」

しばし考え込んでいたなのはだが、やはり新しい携帯電話を買うことに決めたようだ。

なんだか無理やり買うことを迫った様で、鬼柳としては居心地が悪い。だが、なのはは否定する。

なのはは愛おしげに携帯電話を撫でながら、新しい携帯電話を買うときは鬼柳に同行を頼んだ。

それに鬼柳は了承を返す。携帯電話の良し悪しは分からないが、少しでも手助けになれば良いと思っての事だ。

「（えへへ。これで鬼柳さんと二人っきりになれる）」

だが、なのははそうは思っていなかったようだ。
彼女の脳裏では、鬼柳と自分が仲良く肩を並べて携帯電話を見ている。

二人の顔の距離は近く、後少しでも近ければ頬と頬が触れ合ってしまうほど。
そしてそれに気がついたお互いの視線がかち合って――と、なのはの妄想が加速していく。

徐々に顔の下半分から羞恥の赤が上って行き、なのはの頭まで達した時。フェイトと同じように頭から湯気を吹きだした。
どうやらなのはにとって、気になる異性の顔がすぐ傍にあると言うのはかなり過激な事なのだろう。微笑ましいことこの上ない。

「お、おいなのは！？」と鬼柳が慌てている声が聞こえるが、今のなのははそれをスルーする。
鬼柳の声をスルーしたなのはは、更に妄想の続きを行った。互いにお互いの目を見つめ合い、自然と唇と唇が――。

「にゃぁあああああッッ！？！？」

「な、なのは！？」

そこまでが、なのはの妄想の限界だった。鼻からぴゅぅっと鼻血を

噴き出し、なのはは後ろにバタンと倒れる。
鬼柳の慌てている声が聞こえるが、返事をする事は出来なかった。
だが、幸せそうな表情で鼻血を噴き出すのはシュールな事この上ない。

一方、その様子をカウンターで見ていたプレシアは微笑ましいものを見る様に笑みを浮かべ。
フェイトは携帯電話に付属していたアクセサリーで鬼柳のデフォルメされた顔を作るのに夢中になっていた。

プロローグ　「第二の物語の始動」（後書き）

次回予告
シグナムの行動を疑問に思った鬼柳がシグナムを問い詰める。
だが、シグナムからの返事はデュエルで勝てと言う物。

鬼柳はシグナムの言葉を受け、デュエルをすることを了承する。
そして八神家を中心に暗躍する謎の二人組み。彼らの正体と目的とは？

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～　「闇の書」
ライディングデュエル・アクセラレーション！！

……なお、時折上記の予告とは異なる展開になる場合があります。
どうかご了承くださいｍ（＿＿）ｍ

一話　「闇の書」（前書き）

デュエルは今回と次回の二話構成。
物語事態はさっさと終盤に行きたいので駆け足です。

一話　「闇の書」

～海鳴市　聖祥大学付属小学校～

「はふぅ。疲れたぁ……」

午前中の授業を終え、フェイト達は学校の屋上で昼食を取っていた。屋上には幾つものベンチが置いてあり、そのうちの一つに四人で腰掛けている。

四人と言うのはなのはとフェイト、それにアリサとすずかと言う新生チームサティスファクションのメンバーである。

午前の授業を終えてお腹がペコペコだったのだろう。四人とも適当にお喋りをしながら、それぞれのお弁当箱の蓋を開ける。

「あら、フェイトったら随分面白いお弁当なのね」

お弁当箱を開けると、フェイトの表情が綻んだ。

疑問に思い、アリサがフェイトの弁当箱を覗き込む。

するとそこには、ニコニコと笑顔を浮かべた見知らぬ女性の顔がある。

それはフェイトに面影があり、一目で彼女の親族だと分かった。アリサは確信を持ちながら訊ねる。

「あ、ホントだ。これって、フェイトちゃんのお母さん？」

「う、うん。そうだよ」

アリサの声を聞き付けたのか。すずかもフェイトの弁当箱を覗き込んだ。

そしてフェイトに訊ねれば、彼女は頬を赤く染めて頷く。分かりやすい反応だ。

そこから会話の花が咲き、ぺちゃくちゃとお喋りをしながら昼休みの時間を皆で過ごす。

やれ、最近の大会で流行しているデッキは何だ。やれ、サイドデッキではどんなカードを積めば良いか。

とても小学校三年生が交わす様な会話ではない。だが、この学校。否、日本中でこの会話は不自然ではないのだ。

屋上のあちこちではデュエルシートを広げてデュエルを行っている小学生が居る。中にはカード理論を展開している者まで。

「なーんか、最近のカードってパッとしないわよね。
もう少し独特な効果を持ったカードとか出れば良いのに……」

「そうかな？　最近のカードも結構独特だと思うけど……」

アリサはそんな生徒たちを一瞥しながら、ブツクサと文句を垂れる。

フェイトはアリサの言葉を否定すると、頭の中で最近のカードを思

い出す。

中でも印象的なのは先日入手したドッペル・ウォリアーだ。
墓地からの特殊召喚が通常となっている今の環境で、手札から特殊召喚は珍しい。

しかもそれでいて、シンクロ素材にされた場合、ドッペルトークンを二つ場に残すのだ。
これを上手く利用すれば、同時に二体以上のシンクロ召喚を行うことが出来る可能性もある。

だが、アリサはそれでも不満な様だ。頬を膨らませながら理想とするカードの効果を口に出す。

「このカードのダイレクトアタックが成功したとき、マッチに勝利する。とか」

「アリサちゃん。そのカード類は禁止だよ」

「二回攻撃可能、かつ破壊したモンスターを除外、とか」

「そのカードも禁止だよ、アリサちゃん」

アリサの口から飛び出した効果を持つカード、その何れもが禁止カードに指定されていた。
なのはとすずかのツッコミを受け、アリサは顔を俯かせてふるふると震える。

どうやら今の環境に一言物申したい様だ。広げていた弁当箱を横に置き、アリサはベンチから腰を上げる。
そして「すーはー」と大きな深呼吸を数回行い、カッと眼を見開いて大声で叫んだ。

「たまには超強力な効果を持つカードを制限に復帰させなさいよぉおおおおおッッ！！
そんで環境を思いっきり荒らして行きなさいよぉおおおおおッッ！！」

「アリサちゃん、それは無茶だよぅ！」

「現段階で復帰出来そうなのは……≪大嵐≫くらいかな？」

大嵐
通常魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

アリサの叫びを聞き、なのはが首を傾げながらあるカードの名前を口にする。
そのカードはつい先日、禁止カードに指定されてしまった。現段階ではこのカードが有望だ。

他のカードは何れも禁止カードからの制限復帰が不可能なレベル。
環境に戻ってくるのはほぼ不可能だ。
すずかとフェイトが必死にアリサを宥めているが、アリサは尚も吠え続けている。

「うぇえっ！　≪クローン複製≫とか汚いぞ！」

「ッ！」

「へっへーん！　伏せを警戒しないお前が悪い！」

クローン複製
通常罠
相手がモンスターの召喚・反転召喚に成功した時に発動する事ができる。
フィールド上に表側表示で存在するそのモンスターの元々の種族・属性・レベル・攻撃力・守備力を持つ「クローントークン」1体を自分フィールド上に特殊召喚する。
そのモンスターが破壊され墓地へ送られた時、このトークンを破壊する。

アリサの暴走が一段落し、ホッと一息吐いたとき、不意にデュエルをしている男子の声が聞こえた。
その二人の会話を聞いた瞬間、フェイトの身体がビクリと震える。
なのはも声が聞こえた様で、気遣わしげにフェイトを見た。

「？　どうしたのよ、フェイト」

「だ、大丈夫？」

「……え？　あ、う、うん……」

なのはが気遣わしげな視線をフェイトに向けていると、アリサとすずかもフェイトの変調に気付いたようだ。
訝しげな視線をフェイトに向ける。フェイトは二人に心配を掛けまいとしてか、無理に明るく振る舞った。
だが――。

「はい、ストップ」

「ふぇ？」

唐突に、フェイトの声は遮られた。それは他の誰でもないアリサによって。
フェイトは何故アリサに言葉を遮られたのか分からず、キョトンとした表情を浮かべている。

「そんな泣きそうな表情で大丈夫、とか無しよ。
そんな答えじゃ、私は満足できない」

「！　あ、りさ……」

アリサは真剣な眼差しで、フェイトの瞳を貫いた。その視線には、アリサの意思が込められている。

彼女も鬼柳と接した時間を得て、満足する事の大切さ。そして気持ちを吐き出すことの大切さを学んだのだ。

その彼女の目の前で、フェイトが気持ちを吐き出さずに貯め込んだ。それを見過ごすことは出来ない。

フェイトはアリサの言わんことを理解したのか。瞳を動揺に揺らしながら、アリサの視線を受け止めている。

「アリサちゃん、あの……」

「なによ、なのは」

咄嗟になのはがアリサの言葉を制止しようとするが、アリサの一睨みで口を閉じた。

出来ればその話は、フェイトが自分からしてくれるまで待って欲しいと思うのがなのはの思いだ。

フェイトの出生についてはなのはも知っており、非常にデリケートな問題となっている。

今回ばかりは胸の内に貯め込んでおきたい。だが、アリサはニヤッと笑みを浮かべると口を開く。

「私たちは友達よ？　チームなのよ？
そんなヤツののイヤな面を知ったくらいで、ソイツを嫌いになったりなんかしないわ！」

『俺たちは友達であり、仲間だろ？

そんなヤツの生まれが少し変わってたくらいで――――手の平返すほど俺たちの心は狭くねぇッ！』

「――――あ」

同じだ、とフェイトは思った。あの時、プレシアの口から酷い言葉をぶつけられ、絶望しているとき。

そんなときに、鬼柳から告げられた言葉と同じだ、とフェイトは思った。言葉の端々は違うが、本質は同じだ。

彼らは――仲間を裏切らない。友達を――裏切らない。それに気づいたとき、フェイトの眼から涙が零れた。

嗚咽を上げ、両手で顔を覆って泣き崩れる。突然フェイトが泣き出したことでアリサが慌てているが、気にしない。

アリサは自分の出生を知らない。だからもし、自分の出生を知ったらショックを受けるかもしれない。

でも、不思議と確信できる。彼女はきっと、自分のことを受け入れてくれると。普段と変わらず、接してくれると。

だから――――。

「あ、りさ……。ちょっとだけ……待ってて……。

絶対、絶対、アリサに教えるから……だから……！」

ポロポロと涙を零しながら、フェイトはアリサにそう告げる。

すると先ほどまで狼狽していたアリサが一息吐き、ニヤリと笑みを

浮かべた。

「当然！　どんな厄介事だろうとなんだろうと……私はアンタを嫌ったりしないわ！
大好きな友達を……嫌ってたまるもんですか！」

※

「くぅ……くぅ……」

アリサとフェイトが小学校の屋上で誓い合った日の深夜。
鬼柳は傍らで眠るなのはとフェイトを視界の隅に納めながら、腰を上げた。

現在は深夜と言うこともあり、辺りは真っ暗で何も見えない。
鬼柳はしばらく暗闇を見つめて眼を慣らすと、ハンガーにかけていたコートを取り出す。

それをバサリと羽織ると、眠っているなのはとフェイトを起こさぬように部屋を出た。

彼の目的は一つ。夜な夜な外出を行っているシグナム達に、何をしているのか問い詰めるためだ。

「……行くか」

新たに調整を終えたデッキをデュエルディスクにセットし、鬼柳は階段を下りる。
すると、視界の先――リビングから、薄っすらと灯りが漏れているのが見て取れた。

誰かが起きている。それを確信すると、鬼柳は心持早く、足を進めてリビングの戸に手を掛ける。
そしてガチャリと戸を開けば、そこには騎士の身につける甲冑の様な物を着たシグナムの姿があった。

「……シグナム」

「鬼柳か。こんな時間に何をしている」

シグナムは鬼柳の姿に僅かに眼を見開いたが、すぐに動揺を納めると静かに訊ねた。

「それはこっちの台詞だ。騎士甲冑、だったか。それを着て、何処に行くんだ」

「……貴様には、関係ない」

シグナムの問いかけに、鬼柳は鋭い視線を彼女に向けながら返した。
今まで見て見ぬフリをしてきたが、これ以上は見過ごす訳にいかない。

なにせはやての体調の変化に、彼女たちが関わっているかもしれないのだ。
シグナムは咄嗟に視線を逸らして返事をするが、鬼柳はそれを良しとしない。

「関係あるさ。大事な仲間が……家族が苦しんでるんだ。
助けたいと思うのは当然だろ」

「ならば我らのことは放っておいてくれ。
でなければ、主はやては……」

鬼柳の決意の籠った言葉に、僅かにシグナムが動揺した。
咄嗟に放っておいてくれと鬼柳に告げるが、次の瞬間には「しまった」と言う表情をする。

鬼柳もそれに気がついたようで、鋭い視線をシグナムへと向けた。
間違いなく、シグナム達ははやての不調の原因を知っている。シグナムはそれを誤魔化したのだ。

ならば尚のこと、シグナム達へ追及の手を緩める訳に行かない。
鬼柳はシグナムへ向け、僅かに語気を荒くしながら詰め寄る。

「はやての不調の原因を知ってるんだな！」

「ッ！」

「教えてくれ。はやてはなんで体調が悪くなった。どうすれば治る！？」

「……」

シグナムは鬼柳に詰め寄られながらも、沈黙を貫いた。
それに鬼柳は僅かな苛立ちを覚え、シグナムに尚も詰め寄る。

「……主はやては、幸せ者だな」

「？　なに……？」

だが、唐突にシグナムの口から発せられた言葉により、鬼柳の勢いは止まった。
視線をシグナムへと向けてみれば、何処か羨ましそうな表情で苛立ちを現している鬼柳に視線を向けている。

「だからこそ、私は主はやてを助けたい……。
デュエルだ、鬼柳　京介。勝てば主はやての病名を教えてやろう」

「！　デュエル……」

「ただし負ければ、貴様の魔力を貰う。これは対価だ」

そして暫し鬼柳を羨ましそうに見つめていたのも束の間。シグナムの瞳が鋭くなった。

首から下げていたネックレス――待機状態のデバイスを手に取ると、すぐさま復元。デュエルディスクモードへ変形する。

腰から下げていたデッキケースから己のデッキを取り出し、デュエルディスクへセット。自動でシャッフルされる。

鬼柳はシグナムの言葉に驚いたようだが、彼女が本気だと理解すると、彼もまた自らのデッキをディスクへとセットした。

互いのデッキが自動でシャッフルされ、不意にピタリとシャッフルが止まる。

これで後は、デッキから五枚のカードをドローすればデュエルの始まりだ。だが、場所が悪い。

「場所を変えよう。ここでは主はやてが起きてしまう」

「……あぁ」

場所を変える様にシグナムが訊ねれば、鬼柳もまたコクリと頷く。

デュエルに騒音は付き物だ。此処でデュエルすれば、まずはやては起きてくる。

シグナムは鬼柳のその言葉にコクリと頷くと、そのまま自身の身体を夜空へと飛翔させた。
目指すは人気のない公園。鬼柳は空を飛ぶシグナムを見送ると、自らのDホイールの元へ駆けた。

※

そして丁度、鬼柳が八神家のリビングでシグナムと相対していた頃。
傍らにいつもの温もりが無いことに気がついたのか。なのはの眼がパチリと覚めた。

ぼんやりとした表情で、キョロキョロと辺りを見渡す。
だが、何処へ視線を向けようとも彼女の抱き枕兼気になる人物の姿は見えない。

何処へ行ったのだろうか。寝ぼけた頭でコテンと首を傾げていると、ガチャリと戸の開く音が聞こえる。
その音はどうやら一階から聞こえたようだ。戸の音からしてリビングだろうか。それになのはは疑問に思う。

「（こんな真夜中に……誰だろう？）」

パカッと携帯電話で時刻を確認してみれば、既に夜中の一時を回っている。
とてもではないが、あまりに遅い時間。こんな夜中に誰がリビングに居るのだろうか。

もしかしたら泥棒かも――となのははは思うが、それは無いかなと内心で否定した。
何故ならば、この家にはなのはの友人である少女を何よりも大切に思う騎士たちが居るのだ。

その騎士たちがこの家に無断で侵入した泥棒を放っておくはずが無い。それに一階からは物音がしない。
ならば泥棒ではなく、守護騎士。もしくはプレシア達の誰かだろう。
現段階で一番可能性が高いのは鬼柳だが。

「（鬼柳さん、かな……？　何してるんだろう……？）」

そしておぼつか無い足取りで部屋を出て、一階へと向かう。
若干頼りない足取りながらもなんとか一階へ辿りつくと、光の漏れるリビングが見えた。

リビングの扉は少しだけ開いており、ごにょごにょと話声が聞こえる。
声の種類からして男性と女性。しかし、どちらの声もなのははは聞き覚えがあった。

男性の方は普段から聞き慣れている鬼柳のもの。女性の方は少し前から聞く様になったシグナムだ。
一体何を喋っているのだろう。疑問に思い戸に耳を当てると、リビングでの話声が聞こえてくる。

『だからこそ、私は主はやてを助けたい……。
デュエルだ、鬼柳　京介。勝てば主はやての病名を教えてやろう』

「――――っ！？」

耳に飛び込んできた言葉に、なのはの眼は完全に覚めた。
原因不明と言われていたはやての病気。その病名を守護騎士たちは知っているらしい。

どんな病名なのか。治療法はあるのかなのはは知りたかったが、生憎と今の雰囲気では中に入りづらい。
鬼柳とシグナムからは他者を寄せ付けない雰囲気が放たれており、リビングに入ることを躊躇してしまう。

そうこうしている間に鬼柳とシグナムがデュエルをするようで、なのはは慌てて物陰に隠れた。
見つかったら不味いと本能が告げているのだろう。幸い、鬼柳とシグナムに見つかることは無くなのはは安堵の息を漏らした。

しかし――

「聞いたんだな？」

「ッ！？　ヴぃ、ヴィータちゃん！？」

唐突に背後から声を掛けられ、なのはは慌てて背後を振りかえった。
するとそこには、幽鬼の様にこちらを睨みつけている少女――ヴィータの姿が。

彼女の姿が先ほどのシグナムと被ってしまい、なのはの動揺は深まるばかり。
だが、ヴィータはなのはの動揺を知ってか知らずか。踵を返すと、なのはに背を向ける。

「ついてこいよ。
デュエルで勝てば、お前にも教えてやる」

「え？　ヴィータ、ちゃん……？」

「ただし、負ければテメーの魔力は根こそぎ貰う。
干渉もするな。これが絶対条件だ」

そして告げられた言葉に、なのはは僅かに逡巡した。今のヴィータは何かおかしい。
普段の元気な様子は成りを潜め、今は溢れんばかりの闘気が彼女の身体からあふれ出ている。

恐らく、彼女の言っている言葉は本当なのだろう。彼女たちははやての病気の正体を知っている。

もしかしたら、はやての病気を治す方法があるかもしれない。そうと決まれば、なのはに撤退の文字は無かった。

「プレシアさん、デュエルディスク……借ります」

そしてなのははゴソゴソとパジャマのポケットに手を入れ、ある物を取り出す。
それはプレシアから一応持っておきなさいと言われ、受け取ったデュエルディスク。

このデュエルディスクは魔力を使用して実体化や攻撃のダメージを相手に与える仕組みではない。
とある世界で開発された魔力を用いることのない新たなデュエルディスクなのだ。

本来ならば使い慣れたレイジングハートが良いのだが、生憎と今の彼女の手には無い。
なのははプレシアから受け取ったデュエルディスクを展開すると、デッキホルダーに自身のデッキをセット。

自動でシャッフルが終了するのを待って、ヴィータの後を追いかけた。

※

「……行ったか？」

「あぁ」

八神家を出て行く四人の男女の姿を見送り、道路の影から二人の男性が姿を現した。

否、それは男性なのかも怪しい。何故ならば、その人物たちは顔を白い仮面で隠していたのだから。

幸い、声の低さからして男性だと言うことが理解できる。

外見が瓜二つなその男性たちは、揃って八神家を見上げた。

「守護騎士たちは順調に魔力を蒐集している」

「……ならば隙を付いて闇の書と接触し、闇の力を注いでおこう」

「あぁ。まずは様子見だ」

まるで何処かの制服の様な白いスーツに身を包んだ男性は、八神家を見上げながら呟く。

その声は何処か平坦で、感情の様な物を感じさせない。そして互いに顔を合わせ、コクリと頷く。

片方の仮面を付けた男性は鬼柳とシグナムが向かった方へ。
そして残るもう一人の男性はなのはとヴィータが向かった方へと身を躍らせた。

「闇の書の、復活は近い……」

「闇の書が復活した時こそ、我らの悲願は叶う……」

閑静な住宅地に、男性らしいトーンの低い声が響き渡った。

※

「……此処で良い」

「……」

八神家ら大分離れた公園に、鬼柳とシグナムの姿があった。
シグナムは空から地面に降り立つと、背を向けていた鬼柳に振り返

る。

鬼柳もまた、Ｄホイールから下りるとデュエルディスクを展開。
ジィッと鋭い視線でシグナムを見据えた。シグナムもまた、鋭い視線を鬼柳へ向ける。

「……さぁ、始めるか」

「あぁ。そうだな」

「では――――「デュエル！！」」

鬼柳ＬＰ４０００
シグナムＬＰ４０００

「先攻は私が貰う、ドロー！」

シグナム手札５→６

「私は手札から≪竜の渓谷≫を発動！
手札を一枚捨て、デッキからドラゴン族モンスター一体を墓地に送る効果を選択！」

竜の渓谷
フィールド魔法
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に手札を１枚捨てる事で以下の効果から１つを選択して発動する事ができる。

●自分のデッキからレベル４以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター１体を手札に加える。
●自分のデッキからドラゴン族モンスター１体を墓地へ送る。

シグナムが手札から発動したフィールド魔法の効果により、周囲の景色が変化した。
暗く、静かなはずだった公園は今や、竜が住むと言われている切り立った渓谷になっている。

「私は手札の≪ドラグニティ―ファランクス≫を捨て、≪光と闇の竜≫を墓地へ送る！」

シグナム手札６→４

ドラグニティ―ファランクス
チューナー
星２／風属性／ドラゴン族／攻　５００／守１１００
このカードがカードの効果によって
装備カード扱いとして装備されている場合に発動する事ができる。
装備されているこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「そして私は≪ドラグニティ―ドゥクス≫を召喚！
効果で墓地の≪ドラグニティ―ファランクス≫を≪ドラグニティ―ドゥクス≫に装備させる！」

「不味い……ッ！」

シグナム手札４→３

シグナムの召喚したモンスターの効果により、彼女の場には二体のモンスターが並ぶ。
だが、モンスターゾーンに存在するのは実質一枚。だが、この状況は決して良いものとは言えない。

「そして私は自分フィールド上の「ドラグニティ」と名のついたカードを装備したモンスターを除外！
そうすることでこのカードは手札から特殊召喚できる！　出でよ、≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫！！」

シグナム手札３→２

シグナムが手札からデュエルディスクに叩き付けたカード。そのカードを読み込み、新たなモンスターが出現する。
橙色の体躯をした竜が、一振りの剣を携えて鬼柳を見下ろしている。
その威圧感は本物で、鬼柳の額を冷汗が流れた。

「レヴァテインの効果発動！
墓地からレヴァテイン以外のドラゴン族モンスター一体をレヴァテインに装備させる！
対象は勿論、≪光と闇の竜≫！」

「クッ！　必殺のコンボの完成か……！」

「私はこのままターンエンド。さぁ、来るが良い鬼柳！」

シグナム　手札２
　　場　ドラグニティアームズ・レヴァテイン　光と闇の竜
（装備カード扱い）

シグナムがターンを終え、鬼柳のターンへ移る。だが、状況はこれ以上ないほど絶望的だ。
相手の場には破壊してもすぐに復活するレヴァテインがいる。しかもレヴァテインは上級モンスター。

今の鬼柳の手札にレヴァテインと光と闇の竜のコンボを打ち崩すカードは無い。
ならばまずは、少しでも墓地を肥やし、相手の戦術を邪魔する戦略を打ち立てなくてはならない。

「俺のターン、ドロー」

鬼柳手札５→６

「俺は手札から≪インフェルニティ・ナイト≫を守備表示で召喚！
　カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

インフェルニティ・ナイト
星３／闇属性／悪魔族／攻１４００／守　４００
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、

手札を2枚捨てる事でこのカードを墓地から特殊召喚する。

鬼柳　手札6→3
　　場　インフェルニティ・ナイト　伏せ×2

鬼柳の場に現れたのは、先日購入したパックで引き当てた新たな「インフェルニティ」のカード。
実践でどれほど使えるかは分からないが、現状はこのカードに頑張ってもらうしかない。

そして再びターンはシグナムへ移り、彼女はデュエルディスクからカードを一枚ドローする。
横目でそのカードを確認すると、彼女はデュエルディスクにそのカードを挿入した。

「私は手札から≪調和の宝札≫を発動。
　手札の≪ドラグニティ－アキュリス≫を墓地に送り、カードを二枚ドロー」

シグナム手札2→3→3

「行くぞ鬼柳！
　≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫で≪インフェルニティ・ナイト≫を攻撃！」

「ッ！」

「紫電一閃！」

シグナムの指示を受け、レヴァテインが鬼柳の場のＩＦナイトに迫る。
そしてレヴァテインは射程距離圏内にＩＦナイトを納めると、手に持った魔剣を振るった。

レヴァテインの振るった魔剣がＩＦナイトを捉え、ＩＦナイトは堪らず爆散。
濛々と黒煙が立ち上る中、シグナムは静かに鬼柳を見据えていた。

「くっ！　≪インフェルニティ・ナイト≫の効果発動！
　このカードが破壊され墓地へ送られた時、手札を二枚捨てることにより墓地からこのカードを特殊召喚できる！
　来いッ！　≪インフェルニティ・ナイト≫！」

鬼柳手札３→１

だが、このままシグナムに好き勝手されるほど、鬼柳もまた優しくは無い。
彼は破壊されたＩＦナイトの効果により、手札を捨てることで墓地からＩＦナイトを特殊召喚した。

これにより、鬼柳の得意とするハンドレスコンボへの布石が着々と整いつつある。
しかし、それでも尚、光と闇の竜を装備したレヴァテインを対処できる気がしない。

「ふっ。ならば私は≪竜の渓谷≫の効果発動。
手札を一枚捨て、自分のデッキからレベル４以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスター一体を手札に加える。
私は≪ドラグニティ―レギオン≫を手札に加える。さぁ、ターンエンドだ」

シグナム　手札３→２→３
　　場　ドラグニティアームズ・レヴァテイン　光と闇の竜
（装備カード扱い）

シグナムがターンを終えたことにより、再び鬼柳へとターンが回る。
このまま対峙し続けるのも不可能だ。早急に相手のカードを対処できる戦略を考えなければ。

鬼柳は内心でそう決意すると、自らの信じるデッキへと手を掛けた。

一話　「闇の書」（後書き）

次回予告

シグナムの怒涛の猛攻に、鬼柳は必死に耐え凌ぐ。
そしてライフを削られながらもドローしたカード。そのカードこそが逆転の布石？

一方、ヴィータとデュエルする事になったなのはもまた、ピンチに陥る。
ヴィータの操る強力なモンスターを相手に切り札であるレッド・デーモンズを召喚する。

だが、レッド・デーモンズではヴィータのモンスターを対処出来ず――。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「新たな力」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二話　「打ち砕く弓」（前書き）

予告していたタイトルから変更しました。
理由としてはデュエルだけでお話が終わってしまったからですｏｒｚ

二話　「打ち砕く弓」

～海鳴市　某所～

「行くぞ、高町なんとか！」

「なのはだってば！」

静寂が広がる閑静な住宅地の一角。とある山の中に、二人の少女は居た。

一人はなのは。腕には無骨なデュエルディスクを装着し、頬を膨らませて抗議している。

残る一人は八神家で遭遇し、この場でデュエルをすることになった少女――ヴィータ。

彼女はなのはのツッコミに思わず顔を顰めるが、すぐに気を取り直すとデッキからカードを引く。

それを見て、なのはもまたデッキから手札となるカードを五枚、ドローした。

今回のデュエル、なのははどうしても負けられない。何故ならば、友達の命がかかっているのだ。

「（絶対に勝って……お話を聞かせてもらう！）」

脳裏に浮かぶのは八神家のリビングで聞いた言葉。彼女たちははやての病気の原因を知っている。
ならばこのデュエルで勝利し、病名を教えてもらえば良い。もしかしたら、治療方法が分かるかもしれないのだから。

「チッ。行くぞ、高町　なのは！」

「うん、行くよ、ヴィータちゃん！」

「「決闘（デュエル）！！」」

なのはＬＰ４０００
ヴィータＬＰ４０００

そして決して退けない決戦の火蓋が切って落とされた。互いに素早く、手札のカードに視線を落とす。
素早く手札の内容を確認したなのはは、先攻を得ようとデッキに手を伸ばす。だが、僅かばかり遅かった。

「アタシの先攻だ！」

ヴィータ手札５→６

「アタシは手札から≪歯車街≫を発動！
更に手札から≪テラ・フォーミング≫を発動！」

歯車街
フィールド魔法
「アンティーク・ギア」と名のついたモンスターを召喚する場合に必要なリリースを1体少なくする事ができる。
このカードが破壊され墓地に送られた時、自分の手札・デッキ・墓地から
「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

テラ・フォーミング
通常魔法
自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

「≪テラ・フォーミング≫の効果でアタシは二枚目の≪歯車街≫を手札に加える！」

ヴィータが発動したフィールド魔法の効果により、周囲の景色が変化した。
先ほどまでは自然の香りを感じる事が出来る森林が、今では近代的な歯車の街になってしまった。

そしてなのはは相手のデッキタイプを特定し、驚愕に眼を見開く。
相手のデッキはアンティーク・ギアと呼ばれるカード群。効果、攻撃力共に強力なカード達だ。

「ヴィータちゃんのデッキは、アンティーク・ギア！？」

「今さら気づいても遅せぇ！　アタシは二枚目のフィールド魔法をセット！
そしてこの効果で破壊された≪歯車街≫の効果発動！
手札・デッキ・墓地から「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター一体を場に特殊召喚する！」

「まさか……ッ！」

「デッキから現れろ！　≪古代の機械巨竜（アンティーク・ギアドラゴン）≫！！」

古代の機械巨竜
星８／地属性／機械族／攻３０００／守２０００
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。
以下のモンスターを生け贄にして生け贄召喚した場合、
このカードはそれぞれの効果を得る。
●グリーン・ガジェット：このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
●レッド・ガジェット：相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時、相手ライフに４００ポイントダメージを与える。
●イエロー・ガジェット：戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、
相手ライフに６００ポイントダメージを与える。

ヴィータがデュエルディスクにカードをセットすると、その場に全身を歯車で構成した巨大な竜が姿を現す。
何処か不気味さを感じさせるそのモンスターの出現になのはは僅か

に怯えた。だが、すぐに気をひき締め直す。
このまま怯えていては、ヴィータからはやての病気の正体を聞かせてもらうことが出来ない。
なのははグッと怯えを堪えると、上空からこちらを見下ろす巨竜を見上げた。視線がかち合う。

「アタシはモンスターをセット。カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

ヴィータ　手札６→１
場　アンティーク・ギアガジェルドラゴン　セットモンスター　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

なのは手札５→６

「相手フィールド上にだけモンスターが存在するとき、このカードを手札から特殊召喚できる！
来て！　≪太陽の神官≫！！」

手札からデュエルディスクにカードをセットすると、なのはの場に一体のモンスターが現れる。
そのモンスターは何処か異国の神官を思わせる姿をしていた。太陽を模した杖がなのはとヴィータの印象に残る。

「さらに私は手札から≪氷結界の風水師≫を召喚！
そしてレベル５≪太陽の神官≫にレベル３≪氷結界の風水師≫をチューニング！」

「チッ！　早速エースのお出ましかよ……！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす……！　天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

なのはの背後を極太の光の奔流が貫いた。そして現れるのは王者の名を持つ赤きドラゴン。
主を護る様になのはの前に降り立ったドラゴンは、敵意に満ちた視線を相手のドラゴンに向ける。

互いに攻撃力は互角。ならば魔法・罠を駆使して先に相手のモンスターを破った方に勝機が訪れる。
なのはは運良く初手に紛れ込んだ魔法カードを手に取ると、勢い良くデュエルディスクにセットした。

「更に私は≪収縮≫を発動！
このカードの効果で、相手のモンスター一体の攻撃力を半分にする！」

「何っ！？」

収縮
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターの元々の攻撃力はエンドフェイズ時まで半分になる。

「バトル！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪古代の機械巨竜≫に攻撃！
　クリムゾンッ！　ヘルフレアァアアアアアッ！！」

自身が発動した魔法カードの効果により、相手モンスターの攻撃力を半分にする事が出来た。
なのははそれを確認すると、傍らに控える相棒の竜に指示を出す。
すぐさま紅蓮の竜は動き出す。

その手に燃え盛る炎を宿らせ、一撃必殺の攻撃を放とうとする。だが、どうにもイヤな予感がする。
なのはは訳の分からない直感に眉を顰めながら、攻撃の行く末を見守った。そしてレッド・デーモンズの攻撃が炸裂する。

「ぐぅううううっ！！」

ヴィータＬＰ４０００→２５００

無事にレッド・デーモンズの攻撃が古代の機械巨竜に炸裂し、なの

ははホッと安堵の息を漏らす。
だが、うかうかしている暇はない。相手の場にセットしてあるフィールド魔法は二枚目の歯車街なのだ。

すぐさま二体目の古代の機械巨竜を呼ばれてしまうだろう。
レッド・デーモンズを護るため、なのははカードを一枚伏せる。そしてターンをヴィータに渡す。

なのは手札6→2
場　レッド・デーモンズ　伏せ×1

「チッ、アタシのターン。ドロー！」

ヴィータ手札1→2

「アタシはセットしていた≪歯車街≫を発動！
そして手札から≪サイクロン≫を発動し、≪歯車街≫を破壊する！」

「！　また、ガジェルドラゴン……！」

「さらにセットしていたモンスターを反転召喚！
セットモンスターは≪メタモルポッド≫！　効果発動だ！」

メタモルポッド
星2／地属性／岩石族／攻　７００／守　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを5枚ドローす

る。

ヴィータの反転召喚したモンスターの効果により、なのはは手札を補充する事が出来た。
手札が増えたことでなのははホッと息を吐くが気を抜いては居られない。

相手は新たに手札補充を行い、さらなる追撃を仕掛けてくるに違いないのだ。
正直、たった一枚の伏せカードでどうにかなると思っていない。まず間違いなくダメージを食らう。

「（だけど、そのダメージを必要最低限にする！）」

なのはは心の中でそう決意すると、手札を補充し終えたヴィータに視線を向ける。
ヴィータはなのはの視線に気がついたのか。ニヤリと笑みを浮かべ、とあるカードをなのはに見せた。

「アタシはセットしていた≪融合≫を発動！
手札とフィールドから融合素材モンスターを墓地へ送り、融合モンスターをエクストラデッキから特殊召喚する！」

「な――ッ！？　そ、そのデッキで融合召喚は……！！」

「現れろ！　≪古代の機械究極巨人（アンティークギアゴッドレム）≫！！」

ヴィータ手札１↓５
場　古代の機械究極巨人　伏せ×１

古代の機械究極巨人
融合・効果モンスター
星１０／地属性／機械族／攻４４００／守３４００
「古代の機械巨人」＋「アンティーク・ギア」と名のついたモンスター×２
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで
魔法・罠カードを発動する事ができない。
このカードが破壊された場合、自分の墓地に存在する「古代の機械巨人」１体を
召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。

融合
通常魔法
手札・自分フィールド上から、融合モンスターカードによって決められた
融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター１体を
エクストラデッキから特殊召喚する。

ヴィータの場のアンティーク・ギアガジェルドラゴン。
そして手札二枚を代償に現れたのは、山ほどの大きさを持つ歯車で出来た巨人だった。

その大きさは見上げるほどに大きく、圧倒的な存在感をなのはへと与えている。
まさかアルティメットゴーレムの召喚を許してしまうとは。なのはは内心で舌打ちした。

ヴィータがアルティメットゴーレムの召喚を狙っているのに気付かなかったのがそもそもの原因。
デュエルに絶対と言うことは無い。恐らく、無意識のうちにアルティメットゴーレムはデッキに入らないと考えていたのだろう。

自分のその迂闊さを、なのはは呪いたくなった。攻撃力４４００。
あまりに大きすぎるその攻撃力。
一族の結束を数枚使った下級モンスターならば倒せるだろうが、今は相手ターン。手札にもカードはない。

もはや、古代の機械究極巨人を破壊出来る術は無い。
どうしようもないこの現状。なのはは冷や汗を流しながら状況の打破を狙う。

「バトルだ！　≪古代の機械究極巨人≫で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫に攻撃！」

ヴィータの指示を受け、山の様な巨体のゴーレムが攻撃に移る。
幾つもの歯車で出来た巨大な腕を振り被り、それをレッド・デーモンズに振り下ろした。

咄嗟にレッド・デーモンズは反撃しようと腕に炎を纏わせるが、戦

闘力が違いすぎる。
結果として、レッド・デーモンズは振り下ろされたアルティメットゴーレムの腕によって破壊される。

「きゃぁあああああッッ！！」

なのはＬＰ４０００→２６００

あまりに大きなダメージに、なのはへ与えられるダメージの余波が大きくなる。
なんとか一撃死は防ぐことが出来たが、状況は悪化の一途を辿るばかりだ。

そしてそんななのはの耳に、ヴィータによる死刑宣告が告げられる。

「更に伏せカードオープン！　≪デストラクト・ポーション≫！
このカードの効果により、アタシは≪古代の機械究極巨人≫を破壊！　そして攻撃力分のライフを回復する！」

「えッ！？」

デストラクト・ポーション
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを破壊し、破壊したモンスターの
攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。

ヴィータＬＰ４０００→８４００

なのははヴィータの戦略に眼を見開いた。何故、アルティメットゴーレムを破壊するのか。
そのまま場に留まらせておけば、圧倒的な攻撃力で場を支配できるはずなのに。プレイミスだろうか。

「――――ッ！！」

だが、アルティメットゴーレムに記されたテキストを思い出し、なのはは背筋を凍らせた。
違った。ヴィータはプレイミスなどしていなかった。ヴィータはなのはへ止めを刺しに来たのだ。

アルティメットゴーレムには、攻撃時に相手の魔法・罠カードの発動を不可能にする効果。
そして守備モンスターを攻撃した際、超過したダメージ分相手にダメージを与える貫通効果がある。

だが、アルティメットゴーレムが持つ効果はそれだけではない。
残されたもう一つの恐るべき特殊効果。その効果とは――。

「アルティメットゴーレムが，破壊，されたとき、墓地から≪古代の機械巨人≫一体を
召喚条件を無視して場に特殊召喚する事が出来る！　墓地から蘇

れ、≪古代の機械巨人≫！！」

墓地から融合素材となった古代の機械巨人を蘇生させる特殊効果だ。
通常、古代の機械巨人は特殊召喚することが出来ない。だが、古代の機械究極巨人の効果では別だ。

この時ばかりは、古代の機械巨人は特殊召喚する事を許される。そしてこの召喚はバトルフェイズ中に行われるのだ。
これが意味すること。それはつまり、古代の機械巨人でさらなる追撃が可能だと言うことである。

「≪古代の機械巨人≫で、高町　なのはにダイレクトアタック！」

古代の機械巨人
星８／地属性／機械族／攻３０００／守３０００
このカードは特殊召喚できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
このカードの攻撃力が守備表示モンスターの守備力を超えていれば、その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
このカードが攻撃する場合、
相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

なのはは迫りくる歯車で出来た巨人を、どうする事も出来ずに見送る。
なのはの場に伏せカードは無く、彼女を護るべきモンスターも存在しないのだ。

まだまだだった。自分よりも強い相手が、この世界には居ると思い知った。
そして内心で悔しく思う。ヴィータの実力に、自分の実力が追い付いていなかった。

カード達の全力を全て、出し切ってあげる事が出来なかった。不甲斐ない。
なのはは悔しさに、自らの拳をギュッと握りしめる。そしてなのはの身体を古代の機械巨人の手が押しつぶした。

なのはＬＰ２４００→０

※

「俺のターン、ドロー！」

鬼柳手札１→２

「俺は伏せカードを発動させる。
発動する伏せカードは≪インフェルニティ・インフェルノ≫！

効果により俺は手札を二枚捨て、デッキから二枚の「インフェルニティ」と名のついたモンスターを墓地に送る」

「クッ。墓地肥やし、それに手札が0か……」

「俺は手札の≪インフェルニティ・デストロイヤー≫と≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を墓地に送る。
そしてデッキから≪インフェルニティ・ジェネラル≫と≪インフェルニティ・デーモン≫を墓地に送るぜ。
さらに伏せカードオープン！　≪インフェルニティ・ガン≫！」

インフェルニティ・ガン
永続魔法
1ターンに1度、手札から「インフェルニティ」と名のついたモンスター1体を墓地へ送る事ができる。
また、自分の手札が0枚の場合、
フィールド上に存在するこのカードを墓地へ送る事で、
自分の墓地に存在する「インフェルニティ」と名のついたモンスターを2体まで選択して自分フィールド上に特殊召喚する。

鬼柳は前のターンから伏せていた伏せカードを発動し、自らの手札を0にする。
これにより鬼柳お得意のハンドレスコンボが成立。そしてキーカードを発動する。

「墓地から蘇れ、≪インフェルニティ・デーモン≫！
≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫！」

「一枚のカードで二体の完全蘇生……。やはり、侮れんか」

「そして≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから≪インフェルニティ・アーチャー≫を手札に加えるぜ」

鬼柳　手札０
場　ＩＦナイト　ＩＦデーモン　ＩＦネクロマンサー

鬼柳の墓地から、次々とモンスターが蘇生されていく。その様はまさに圧巻の一言。
シグナムもここまで展開力に長けているデッキはあまり見ないのか。苦い表情をしている。

そんなシグナムの様子を一瞥すると、鬼柳は自らのエクストラデッキを確認した。
このままインフェルニティ・デス・ドラゴンをシンクロ召喚するのも良い手ではある。

だが、結局レヴァテインを突破出来る術が無い。難攻不落。そう呼ぶに相応しい壁だ。
そしてふと、鬼柳の視線がエクストラデッキに投入されている二枚目のカードに向けられる。

そのカードはダークシグナーとなってからの付き合いで、出来ればあまりシンクロ召喚したくない。
だが、事態は急を要している。自分の我がままのせいではやてを見捨てることなど、出来る筈もなかった。

鬼柳は腹を決め、そのカードを使うことを決意する。

だが、そのカードを使うのはこのタイミングではない。

「場の≪インフェルニティ・デーモン≫をリリース！
そして手札から≪インフェルニティ・アーチャー≫をアドバンス召喚！」

インフェルニティ・アーチャー
星６／闇属性／戦士族／攻２０００／守１０００
自分の手札が０枚のとき、このカードは相手プレイヤーに直接攻撃できる。

「新たな「インフェルニティ」か……」

「バトル！　≪インフェルニティ・アーチャー≫でシグナムにダイレクトアタックだ！
インフェルニティ・クロスボウ！」

「ぐっ……！」

シグナムＬＰ４０００→２０００

鬼柳の召喚したＩＦアーチャーが、シグナムへクロスボウを向ける。
そして放たれた一本の矢は寸分の違わず、シグナムの胸へと命中した。

いくらソリッドビジョンと言えど、衝撃は無くは無い。シグナムは

苦しげに息を吐く。
だが、すぐに息を整えると再び鬼柳へと視線を向けた。その瞳は戦士の瞳。隙は見当たらない。

「メインフェイズ2に移行し、≪インフェルニティ・ナイト≫を守備表示に変更。
そして≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動。墓地から≪インフェルニティ・デーモン≫を特殊召喚。
≪インフェルニティ・デーモン≫が特殊召喚されたことにより、デッキから≪インフェルニティ・フォース≫を手札に加え、伏せる。
ターンエンドだ」

鬼柳手札0
場　IFアーチャー　IFナイト　IFネクロマンサー　IFデーモン　伏せ×1

「私のターン、ドロー」

シグナム手札3→4

「私は手札から≪ドラグニティ―ミリトゥム≫を召喚。
効果で墓地から「ドラグニティ」と名のついたモンスター一体を場に特殊召喚する。
対象は勿論、≪ドラグニティ―ファランクス≫！」

「ッ！」

シグナムが召喚した女性型モンスターが、ヒラリとその場で手を振

るう。
すると地面に光の輪が出現し、そこから一体の小さなドラゴンが姿を現した。

鬼柳はシグナムの場に現れたモンスターを見て警戒する。明らかにシンクロ召喚を狙っている。
そして鬼柳のその警戒は当たった。シグナムは場のミリトゥムとファランクスをチューニングする。

「渓谷より現れし魔槍よ！　敵を穿ち、我らに勝利をもたらせ！
シンクロ召喚！　刺し穿つ槍――≪ドラグニティナイト―ゲイボルグ≫！！」

ドラグニティナイト―ゲイボルグ
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／ドラゴン族／攻２０００／守１１００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
このカードが戦闘を行うダメージステップ時に１度だけ、
自分の墓地に存在する鳥獣族モンスター１体を
ゲームから除外して発動する事ができる。
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、
ゲームから除外したそのモンスターの攻撃力分アップする。

シグナムの場に召喚されたのは白き竜に跨った亜人のモンスターだった。
手には一振りの槍を携え、穿つ対象である鬼柳のモンスターを睨みつけている。

「さらに手札から≪サイクロン≫を発動！　貴様の伏せカードを破壊する！
　さぁ、バトルだ！　≪ドラグニティナイト―ゲイボルグ≫で≪インフェルニティ・アーチャー≫に攻撃！」

「くっ！！」

「さらにダメージステップ時にゲイボルグの効果発動！
　墓地から鳥獣族モンスター一体をゲームから除外し除外したモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力を上げる！
　私は墓地の≪ドラグニティ―ドゥクス≫を選択！　ドゥクスの攻撃力１５００ポイントゲイボルグの攻撃力が上がる！」

ドラグニティナイト―ゲイボルグ　ＡＴＫ２０００→３５００

「うわぁあああああッッ！！」

鬼柳ＬＰ４０００→２５００

シグナムの操るゲイボルグの攻撃がＩＦアーチャーに炸裂。ＩＦアーチャーが爆散する。
受けたダメージはシグナムほどではないが、鬼柳へのダメージは魔力ダメージが与えられている。

通常のデュエルよりも受ける衝撃やダメージが大きく、鬼柳は思わずタタラを踏んだ。だが、まだ攻撃は残っている。
次に攻撃を迎えるのはシグナムのデッキのエースであるレヴァテイン。手に持った魔剣が場のＩＦネクロマンサーを破壊する。

鬼柳　場　ＩＦナイト　ＩＦデーモン

「私はこのままターンエンドだ」

シグナム手札４→２
場　ドラグニティアームズ・レヴァテイン　光と闇の竜（装備カード扱い）
　　ドラグニティナイト―ゲイボルグ

「俺のターンだ！　ドロー！」

鬼柳へとターンが移り、鬼柳は自身のデッキからカードを一枚ドローする。
そしてドローしたカードを確認するが、そのカードは起死回生のカードではない。

鬼柳は僅かに苦い顔を浮かべると、先ほどドローしたカードを伏せる。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

鬼柳　場　ＩＦナイト　ＩＦデーモン　伏せ×１

「私のターン、ドロー。場の≪竜の渓谷≫の効果発動。
手札を一枚墓地へ送り、デッキからレベル４以下の「ドラグニティ」と名のついたモンスターを手札に加える。

私は≪ドラグニティ－レギオン≫を手札に加え、召喚。効果で≪ドラグニティ－ファランクス≫をレギオンに装備させる」

ドラグニティ－レギオン
星３／風属性／鳥獣族／攻１２００／守　８００
このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地に存在するレベル３以下の
「ドラグニティ」と名のついたドラゴン族モンスター１体を選択し、
装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
自分の魔法＆罠カードゾーンに存在する
「ドラグニティ」と名のついたカード１枚を墓地へ送る事で、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を破壊する。

「そして≪ドラグニティ－レギオン≫の効果発動。
魔法・罠ゾーンに存在する「ドラグニティ」と名のついたモンスターを墓地に送り、相手の表側表示モンスター一体を破壊する。
対象は――インフェルニティ・デーモン！　破壊だ！」

「――――ッ！！」

鬼柳の場のモンスターが破壊され、鬼柳は思わず臍を噛む。
このままでは、確実に負けてしまう。もしも相手の手札にもう一枚のサイクロンがあったら。

だが、鬼柳の懸念していた事態にはならなかった様だ。
シグナムは鬼柳の伏せカードを破壊することなく攻撃を仕掛けてくる。

「行け、≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫！
≪インフェルニティ・ナイト≫を破壊しろ！」

「くっ……！　≪インフェルニティ・ナイト≫が戦闘破壊された時、伏せカードオープン！
≪リビングデッドの呼び声≫！　このカードの効果により、墓地から≪インフェルニティ・デーモン≫を攻撃表示で特殊召喚する！」

「ふっ。粘るか……」

リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「さらに特殊召喚に成功した≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから「インフェルニティ」と名のついたカード一枚を手札に加える。俺は≪インフェルニティ・ミラージュ≫を選択だ」

「ならば≪ドラグニティ・ゲイボルグ≫で≪インフェルニティ・デーモン≫に攻撃！」

「ぐぅううッッ！！」

ＬＰ２５００→２３００

「そして≪ドラグニティ―レギオン≫でダイレクトアタック！」

「がぁあああああッッ！！」

鬼柳ＬＰ２３００→１１００

シグナムの操る怒涛の攻撃に、鬼柳のライフはあっという間に減っていく。

今回は先にレヴァテインで攻撃してくれたおかげで、鬼柳はなんとか持ちこたえる事が出来た。

もしも先にレギオンで攻撃されていたらと思うと、鬼柳は背筋が凍る思いを覚える。

だが、なんとか最悪の事態だけは回避できた。手札には切り札であるインフェルニティ・ミラージュがある。

このカードを使い、シグナムに勝利する。

腹は括った。封印していたあのカードを使う。

「ターンエンドだ」

シグナム　場　レヴァテイン　光と闇の竜（装備カード扱い）　ゲイボルグ　レギオン

「俺のターン、ドロー！」

決意を胸にした鬼柳が、デッキからカードをドローする。
ドローしたカードを横目で確認し、すぐさまドローしたカードを発動する。

「≪おろかな埋葬≫を発動。デッキから墓地へモンスターを一体送る。俺は≪インフェルニティ・リベンジャー≫を選択。
そして手札から≪インフェルニティ・ミラージュ≫を召喚。
効果を発動し、墓地から≪インフェルニティ・デーモン≫と≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を特殊召喚！」

鬼柳　場　ＩＦデーモン　ＩＦネクロマンサー

「そして≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
自分の手札が０枚の時、墓地から「インフェルニティ」と名のついたモンスター一体を特殊召喚できる！
俺は≪インフェルニティ・リベンジャー≫を選択！　来いッ！
≪インフェルニティ・リベンジャー≫！！」

「来るか、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫……」

「レベル４≪インフェルニティ・デーモン≫とレベル３≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫に
レベル１チューナーモンスター≪インフェルニティ・リベンジャー≫をチューニング！」

鬼柳がシンクロ召喚を行い、彼の背後に緑色のリングが一つ出現する。

その中を一列に整列するのは七つの光り輝く球。その光の球を一条の光が駆け抜ける。

シグナムは鬼柳が自身のエースモンスターであるＩＦ・デス・ドラゴンをシンクロ召喚するものだと思っていた。
だが、彼の口から聞こえてきたシンクロ口上はＩＦ・デス・ドラゴンの物ではない。シグナムは思わず眼を見開く。

「地獄と煉獄がゼロへと鎖す時、無限の定めより死神は蘇る！
シンクロ召喚！　その目に映るのは生か死か。いでよ！　≪ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン≫！」

「≪ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン≫だとッ！？」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
闇属性チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター１体以上
１ターンに１度、自分の墓地に存在するレベル６以下の
闇属性の効果モンスター１体をゲームから除外して発動する事ができる。
このカードはこのターンのエンドフェイズ時まで、
この効果を発動するためにゲームから除外した効果モンスターと
同名カードとして扱い、同じ効果を得る。
また、このカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキから「地縛神」と名のついたモンスター１体を手札に加える。

一条の極太の閃光が鬼柳の背後から立ち上る。そして光が晴れたとき、そこに見慣れぬドラゴンが存在していた。
体躯事態は一般的なドラゴンと大差ないのだが、特徴的なのは全身に隈なく存在している幾つもの瞳。

特に胸の中央に存在する眼は禍々しく、見ているこちらの背筋が震えそうになるほどの威圧感を醸し出している。
この様なシンクロモンスター。シグナムは見たことも聞いたこともない。シグナムは動揺を鎮めながら、ドラゴンに視線を移す。

「……鬼柳。そのモンスターは……何だ？」

「……コイツは、元はダークシンクロモンスターだった……。
だが、俺と共にダークシグナーの力から解放された、俺の新たな切り札だ！」

シグナムの問いかけに鬼柳は昔を思い出しながら答える。出来れば召喚はしたくは無かった。
だが、デス・ドラゴンではレヴァテインを破ることは出来ない。それにいつかは使わなくてはならなかった。

鬼柳は自らにそう言い聞かせると、視線を後ろに控えるワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに視線を向ける。
ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンからは以前の様な禍々しさは感じられず、完全にダークシグナーの力から解放されていた。

「ダーク、シグナー……？」

一方。シグナムは鬼柳が口にした「ダークシグナー」と言う単語に興味を惹かれたようだ。
まるで得体の知れない言葉。だが、不思議とその言葉を聞く事を避けたくなる様な感覚に陥る。

「行くぞ！　≪ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン≫の効果発動！
墓地のレベル６以下の闇属性モンスターを除外し、そのモンスターの効果を得る！」

「なんだと！？」

「俺がコピーするのは≪インフェルニティ・アーチャー≫！
コピーしたアーチャーの効果により、このカードは手札が０枚の場合、相手にダイレクトアタックが出来る！」

鬼柳が墓地からインフェルニティ・アーチャーのカードを除外する。
すると鬼柳の場のワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの胸にある大きな瞳が輝いた。

そこに映し出されるのは先ほど除外されたインフェルニティ・アーチャーのもの。
これによりワンハンドレッド・アイ・ドラゴンはインフェルニティ・アーチャーの効果を得た。

「な――ッ！？」

「≪ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン≫でシグナムにダイレクトアタックだ！
　インフィニティ・サイト・ストリーム！！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの口に闇のエネルギーが充填される。
その狙いはシグナム。彼女を護るモンスターを素通りし、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンは攻撃する。

シグナムは迫りくる砲撃に僅かに眼を見開くが、すぐに自らの敗北を受け入れたようだ。
静かに眼を閉じると、彼女は自らへ放たれたブレスを受ける。そして、彼女のライフは底を尽いた。

シグナムＬＰ２０００→０

※

「無茶だよぅ～……。この本の山から資料を探すなんて……」

ユーノは涙眼になりながら、目前にそびえる本の山を見上げた。
そこにあるのは、天へと届くのではないかと言うほど大量に本を納めた本棚。

彼が居るのは無限書庫と呼ばれる書庫で、ここでプレシアに頼まれた「闇の書」についての資料を得ようとしたのだ。
だが、無限書庫はユーノの予想をはるかに超えた本を貯蔵していた。
ここから目的の資料を集めるのにどのくらい時間がかかるのだろう。

考えるだけで憂鬱になり、ユーノはハァとため息を吐く。だが、ここで撤退すると言う選択肢は彼には無い。
何故ならば、彼はここで「闇の書」以外にも調べたい資料があったからだ。その資料とは――――。

「ここ数年の流行デッキとかの資料が欲しいな。そうすれば傾向と対策が分かるし……」

そう。デュエルモンスターズについての資料である。この無限書庫にはありとあらゆる書籍やデータが納められている。
それは勿論、デュエルモンスターズの資料も例外ではない。彼は近年の大会で流行したデッキを調べ、傾向と対策を知ろうと考えている。

そうすれば次の環境でどんなデッキが流行するのか一足早く分かる。
そしてデッキの傾向を調べ、自らのデッキに流用するのだ。
彼は故郷である次元世界に帰ってからはデュエルモンスターズ漬け

で、今では小さな大会でベスト8に入賞するなどの成績を残している。

だが、ユーノが未だ初心者であることは変わらない。彼はデュエルモンスターズの経験値が圧倒的に足りないのだ。
その経験を知識で埋めるため、彼はこの無限書庫にいる。まずは近年の大会の資料を調べようと、ユーノは適当な本棚に近づいた。

そして、気になる資料を発見する。

「なんだ、コレ……。「赤き巫女について」……？」

その資料に記されていたのは、以前地球の海鳴市で聞いた単語である。
彼の脳裏に浮かぶのは僅かな間ながらも共に生活し、デュエルの楽しさを教えてくれた人々。

ユーノは脳裏に浮かんだ記憶をひとまず脇に置くと、パラパラと資料を開いてみた。
そしてその資料に記されているデータを読み込んでいく。思わず無言になってしまった。

「……赤き巫女は、赤き竜を信仰していた……。
そして、赤き巫女は……‘四人’の男女をシグナーにした……」

パラパラとページを捲る音が書庫に響き、ユーノのポツリと漏らし

た呟きが辺りに響く。
その資料によると、どうやら赤き竜と言う存在を信仰し、赤き竜から力を借りうけていたらしい。

そして赤き竜に破れた邪神を追って世界を渡り、そこで四人の男女をシグナーにしたと言う。
だが、ユーノはここで疑問に思う。たしかなのはが言っていたシグナーの数は三人のはず。一人、数が多いのだ。

これは一体どう言う事だろうか。内心で疑問に思うが、考えていても仕方が無い。
この資料は後で良く調べようと脇に抱えると、ユーノは闇の書についての資料を調べることにした。

二話　「打ち砕く弓」（後書き）

次回予告

シグナムとのデュエルに勝利したのも束の間。
鬼柳の耳に火急の知らせが入る。それはなのはの負傷と言うもの。

慌ててなのはの元へ向かえば、そこには地に倒れ伏すなのは。
命に別条はない様だが、なのはは自らの力不足に悔し涙を流す。

そしてフェイトもまた、シグナムとデュエルを行う。
負傷した友のため。そしてはやての病の詳細を聞き出すため。

だが、フェイトもなのはと同様に窮地に陥り――
次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「侵食」
ライディングデュエル、アクセラレーション！

三話　「侵食」（前書き）

ようやくパワーアップイベント行けた……！
超展開だけど気にするな！　遊戯王の恒例行事じゃないか！

三話　「侵食」

～海鳴市　某所～

「負け、か……。久しぶりだな」

鬼柳の召喚したワンハンドレッド・アイ・ドラゴンの攻撃により敗北したシグナム。
彼女は腕に展開していたデュエルディスクを待機状態に戻すと、夜空を仰ぎながらそう零した。

鬼柳はそんな彼女の様子を、静かに見つめる。そしてデュエルディスクから自身のデッキを抜き取った。
鬼柳が自身のデッキを腰に下げていたデッキホルダーに仕舞い、シグナムから事情を訊ねようとしたとき。

不意に、シグナムが視線を鬼柳へ向ける。

「急いで主はやての自宅から近い山中へ向かえ」

「？　なんだと？」

突然シグナムが鬼柳に視線を向けたかと思えば、不意にそんなことを口走った。
シグナムの言葉の意味が分からず、鬼柳は眉を顰める。だが、返っ

てくるのは真剣な眼差し。

「そこで高町がヴィータとのデュエルに敗北し、意識を失っている」

「ッ！？」

そしてシグナムから告げられた言葉を聞き、鬼柳はギョッと眼を見開いた。

何故ここで、なのはの名前が出てくるのか分からない。だが、シグナムの雰囲気から本当の事だろう。

何故なのはが山の中でデュエルをしていたのか。意識を失うほど、酷いダメージを受けたのか。

何が起こったのかは分からないが、とにかく一刻も早くなのはの元へ向かわねばならないことだけは理解できた。

「安心しろ。主はやての家に着けば、キチンと教えてやる」

「……本当だろうな」

「あぁ」

「……」

鬼柳はシグナムの言葉にコクリと頷き返すと、駆け足ですぐ傍に停めてあったＤホイールに向かう。

手早くエンジンに火を入れ、Dホイールが走り出す事が出来る様になると、彼はDホイールを駆って山の方へと向かう。

シグナムの口ぶりから察するに、なのはは山のふもとでデュエルしたのだろう。見つけるのは容易いはずだ。

だが、なのはの身に何が起こったのか分からない。もしかしたら、命に危険がある様な怪我を負ったのかもしれない。

それを想像すると居ても立っても居られなくなり、鬼柳はDホイールのアクセルを勢いよく回した。

そしてそれと連動するように、鬼柳の操るDホイールのスピードが上がっていく。風の如く、その場を駆け抜けた。

「負けは……久しぶりだな」

そして一方。鬼柳がDホイールで走り去った公園で、シグナムは僅かに息を吐き出しながら呟いた。

かれこれ今まで、負けと言う負けを知らないシグナムが今日、負けたのだ。感傷に浸るなと言う方が無理である。

シグナムは今までデュエルをしていた広場から足を動かし、公園内に置いてあるベンチに腰を下ろした。

頭上からは月の光が降り注ぎ、深夜だと言うのにそれほど周囲は暗くは無い。逆に仄かな明るさを覚えるほどだ。

「本当に主はやては……良い仲間を持った」

ベンチの背もたれに背を預け、夜空を見上げながら言葉を零す。その声は何処か羨ましげだ。
彼女の脳裏に浮かぶのは、必死な様子でシグナムとデュエルをしていた青年――鬼柳の様子である。

彼は是が非でもシグナムとのデュエルに勝利し、はやての病名を知ろうと全力を尽くしていた。
たった一人のために。幼い少女のために、あそこまで必死になれる人物を、シグナムは生憎と知らない。

彼がもしも、自分たちの仲間だったらと想像し、シグナムは苦笑交じりに首を横に振った。
そんなＩＦはあり得ない。彼が仲間だったとして、今までの自分たちの行動が良い方向へ向かうかもわからない。

「ふっ、私らしくないな。鬼柳は良い好敵手だった。それで良い」

シグナムは自嘲する様な笑みを浮かべ、先ほどのデュエルで使用した己のカード達に視線を送る。
鬼柳へ自分の戦術は通用していた。足りなかったのは運とカード。
せめてもう少しだけ、デッキに幅が欲しい。

デッキの調整を行いながら、シグナムは今日のデュエルの反省会を一人で行うことにした。
今度はデッキに入れなかったカードを入れて回してみよう。そうすれば新たなデッキの可能性が広がる。

そしてシグナムは深夜の公園で一時間ほど反省会とデッキの改造案を出すことに勤しむのだった。

※

「なのは！」

一方。シグナムと別れた鬼柳は、シグナムの言葉に従い、はやての家からさほど離れていない山中に居た。
かれこれ十五分ほど山中をＤホイールで走り回っただろうか。山の地面にはＤホイールのタイヤ痕が残されている。

だが、なのはの姿を発見するに至ってはいない。もしもまだ、この身を切る様な寒さの山の中に居たら。
それを想像すると、鬼柳の背筋を冷たい物が走る。一刻も早くなのはを見つけ出さなければならない。

そしてそれから鬼柳が五分ほどＤホイールを走らせたときだ。
鬼柳は暗い山の中で、うつ伏せに倒れているなのはの姿を見つけた。

「ッ！　なのは！　おい、大丈夫か！？」

「う、うぅ……！」

「おい、なのは！　おい！」

鬼柳は急いでDホイールを停車させると、慌てて地面に倒れているなのはへ近寄る。
辺りは暗くて良く見えないが、少なくとも呼吸をしていなかったり心臓が止まっていたりはしない様だ。

それにホッと安堵の息を漏らすのだが、状況は予断を許さない。
なのはは胸の辺りを抑えながら、苦しげに呻いているのだ。これはただ事ではない。

何度もなのはに声を掛けるのだが、彼女から返ってくるのは苦しげなうめき声だけ。
鬼柳はなのはを抱き上げると、一刻も早くプレシアに見せようとなのはを抱え、Dホイールに跨る。

「しっかり掴まってろよ……ッ！」

Dホイールに跨ると、鬼柳はすぐさまなのはをおんぶする様に背負った。
とてもではないが、なのはを抱き抱えたまま運転する事は出来るはずもない。

なのはを背負うと、鬼柳は来ていたコートでなのはと自分の身体を固定する。
これで変な道を走らない限り、なのはが落下すると言うことは無いだろう。そしてアクセルを回す。

凄まじい速度で後輪が回転し、鬼柳はその場でアクセルターン。
目的地を八神家に定め、鬼柳は凄まじい速度でDホイールを走らせた。

※

「まったく……。私は研究者でデュエリストだけれど、医者ではないのよ？」

寝起きでイライラしているのか。プレシアがブツクサと文句を垂らしながら鬼柳に視線を向ける。
そんな彼女の傍らではなのはがベッドで静かに眠っていた。既に苦しげな様子は見られず、鬼柳は安堵する。

あの後山中から急いで帰宅した鬼柳は、はやてを起こさぬ様に部屋へと戻ると慌ててプレシアを叩き起こした。

突然の事態にプレシアは慌てて飛び起き、そんな彼女に鬼柳は苦しげに呻いているなのはを見せる。

するとプレシアはすぐさま真剣な表情になり、なのはを部屋へと連れ込んで何やら治療を開始したのだ。

かれこれ一時間は過ぎただろうか。暗闇だった空は薄日が差してきており、もうそろそろ夜が明けようとしている。

「寝不足はお肌の天敵なのに……」

ブツクサと文句を垂らしながらも、治療してくれたのは一重に彼女が子煩悩だからだろう。

穏やかに眠っているなのはの頭を優しく一撫ですると、彼女は視線を鬼柳へと向ける。

「なのはさんのリンカーコア、大分小さくなっているんだけれど。何か、心当たりはある？」

「いや。俺も現場に着いたときには既になのはがさっきの状態だった」

「そう……」

プレシアの問いかけに、鬼柳は先ほどの出来事を思い出しながら答えた。

彼が山中に到着しなのはを発見したとき、既になのはは胸を抑えて

苦しげだった。

一体、誰に何をされたのか。それがサッパリわからずに、鬼柳とプレシアは眉を顰める。
そして二人が顔を突き合わせて考え込んでいると、不意にコンコンとプレシアの部屋の戸がノックされた。

「鬼柳。私だ」

「！　シグナムか」

「すぐに開ける」と扉に向かって告げると、鬼柳は急いで扉の前まで駈け出した。
そしてガチャリと扉を開けると、いつもの普段着に着替えているシグナムの姿がある。

彼女は一度鬼柳から視線を外し、ベッドの上で眠っているなのはを見つけると僅かに眼を伏せた。
その様子を見て、そう言えばと鬼柳は思い出す。シグナムはなのはの異変に気が付いていた。何か知っているかもしれない。

「やはり、か」

「シグナム。お前、なのはの異変を知ってるのか？」

「あぁ。恐らくヴィータが原因だろう」

シグナムを部屋の中に招き入れると、鬼柳はすぐさま彼女に訊ねた。
それにシグナムはコクリと頷き返すと、思いもよらない少女の名を口にする。

その少女とは、常日頃からなのはやフェイトと遊んでいる守護騎士の一人――ヴィータ。
一体何故、ヴィータがこの件に関わっているのか。鬼柳は僅かに疑問を覚える。

「だが、安心してくれて構わない。命に別条はないはずだ」

「それなら安心は出来るが……一体、何をしたんだ？」

「それは……」

シグナムの視線が、鬼柳と共に自らを見つめるプレシアを捉える。
その様子に鬼柳は僅かに疑問を覚えるが、すぐにその行動の理由を思い出した。

「デュエルには俺が勝ったんだから、教えてもらうぜ？」

「……仕方あるまい。悪いがテスタロッサには部屋を出て行ってもらう」

シグナムは僅かに嘆息すると、視線を部屋の中に居るプレシアへと

向ける。
鬼柳にはやての病状を教えることは約束したが、プレシアにはしていないのだから。

「あら、真夜中の寝室に年頃の男女が二人きりなんて……お母さんドキドキしちゃうわ」

「「ッ！？」」

「ゴムは必要「アルフ。起きろ」もう！　釣れないわねぇ……」

だが、プレシアから返ってきた予想外の返答に、シグナムと鬼柳の頬が赤くなる。
そして内心でわたわたと慌てながら、今の状況を確認する。するとどうだろう。これ以上ないほど不味い。

深夜（と言ってももうすぐ夜明け）。
密室（と言っても半ば寝室の様な）に年頃の男女が二人きり（アルフはともかくなのははカウントしない）。

このシチュエーションで想像できることを想像し、シグナムの頬がこれでもかと赤くなった。
不味い、非常に不味い。先ほどまでの真剣さが嘘の様に、シグナムは動揺をこれでもかと前面に押し出す。

一方、鬼柳も鬼柳で頬を赤くしてプレシアの言葉を遮っていた。彼も彼でこの様な話に耐性は無い。
もう一つのベッドで眠っているアルフを起こそうと大声を上げたと

き、プレシアは頬を膨らませて抗議した。

「何か大事な話をするんでしょう？
はやてちゃんが起きないうちに済ませなさい」

一通りプレシアが文句を垂れ流すと、先ほどまでの剥れっぷりから一転。
真剣な眼差しをシグナムに向けながらそう告げた。それにシグナムは眼を見開き、首を縦に振る。

ここでモタモタしていては、朝が早いはやてのことだ。姿の見えないシグナムを不審に思うだろう。
プレシアはひらひらと二人に向けて手を振ると、静かに部屋を出て行く。大方フェイトの元へ向かったのだろう。

「さて。では、手早く済まそう」

「あぁ。そうしてくれ」

プレシアが出て行ったのを確認すると、シグナムがようやく落ち着きを取り戻した。
そして場の雰囲気を引き締めるかのようにコホンと咳払い。はやての病状について語りだす。

はやてが現在侵されているもの。それは闇の書の侵食と言う、非常に厄介な病の様な物だった。

一定期間以内に魔力を蒐集しなければ、闇の書が主のリンカーコアを蝕み、次第に主を弱らせていく。

現在は守護騎士が蒐集を行ってはやての健康状態は保たれているが、もしも蒐集をしていなければ今ごろ入院していただろう。

それも、極端に弱った状態で。はやてを治すには闇の書のページを全て埋める必要がある。そうすれば、はやての病気は完治するのだから。

「そんなことに、なってたのか……」

シグナムの話を聞き終え、鬼柳は苦い顔をして言葉を漏らした。

まさか自分たちの知らぬ間に、そんな大事になっているとは露も知らなかった。

だが、当たり前と言えば当たり前か。闇の書は各地で災いを引き起こしてきたらしい。

その原因がはやてが現在侵されている状態と照らし合わせれば、それは分からなくもない事態だった。

「それで、本当に闇の書のページを集めれば、はやては良くなるのか？」

鬼柳はシグナムの話の中に出てきた、闇の書のページをすべて集めればはやてが治ると言う言葉について訊ねる。

果たして、それは本当のことなのだろうか。もしも歴代の主もはや

ての様な症状を患っていたら、騎士たちに蒐集を命じるだろう。
だが、闇の書は主を変えて転生し、現在はやての元へある。これはどう言う事だろうか。
もしや、今までの歴代の主は蒐集を失敗しているのでは。そんな懸念が鬼柳の中にあった。

「それは確か、なはずだ」

「はず……？」

シグナムは鬼柳の言葉に、真剣な表情でそう返す。だが、気になるワードがあった。
それは彼女が言い切った「はず」と言う言葉。これは確信を含んでいない。僅かに願望が含まれている。

おかしい――鬼柳はそう感じた。もしも歴代の主のこれまでを見てきた彼女たちなら、こんな言葉は出ないはず。
嘘を吐いているのかとも思ったが、彼女の表情を見る限りそれは無さそうだ。ならばこの、違和感の正体はなんだ？　鬼柳は首を傾げる。

「シグナム……。お前、今までの闇の書の主は全部のページを埋めれたのか？」

「……何人かは、埋めれたはずだ」

気になりシグナムを問い質せば、またもや曖昧な答えが返ってきた。
それを咄嗟に問い質そうとするのだが、ガチャリと何処かの部屋の戸が開く音が聞こえた。

少しだけ部屋の戸を開け、外の様子を確認する。すると車いすに乗ったはやてが起き出してきていた。
視線をカーテンの閉められた窓ガラスに向ければ、カーテンの隙間からは薄日が差している。どうやら時間切れらしい。

シグナムは鬼柳に一声かけると、不審に思われない様にはやての後を追いかける。
鬼柳は遠くなっていくシグナムの背を見つめながら、僅かに疑念の表情を浮かべるのだった。

※

「なのは、大丈夫なの！？」

朝食の席でなのはの異変を聞き付けたフェイトは、慌てて彼女の眠る寝室に訪れた。

勢いよく部屋の扉を開ければ、そこには穏やかな表情で眠っているなのはの姿が見える。

そこに苦痛の色は無く、今は異変で疲弊した身体を癒している穏やかな寝顔が浮かんでいる。
なのはのその様子にフェイトはホッと安堵の息を吐くと、トコトコと彼女の眠るベッドまで近づいた。

と、部屋の中に新たな人影を発見する。それは見慣れたコートを着た男性だった。
フェイトはなのはのベッドに歩み寄りながら、その男性に声を掛ける。

「鬼柳」

「フェイト。あまり騒ぐなよ」

「あぅ。ご、ごめん……」

鬼柳から返ってきた言葉に、フェイトはしょんぼりと肩を落とした。
そう言えば部屋に入るとき乱暴に部屋の戸を開けてしまった。他にも先ほどの大声。

どうやら自分はよほど動揺していたらしい。これではいけないと、気を引き締め直す。
鬼柳はなのはの眠るベッドの、すぐ傍に置いたイスに腰掛けており、手には濡れタオルを持っていた。

どうやら自分が来るずっと前からなのはの看病をしていたらしい。

「（ずっと、一緒……）」

何故だろう。今までずっと鬼柳となのはが同じ部屋に居たと聞き、フェイトの心は苛立った。
こんな場合じゃないと思うのだが、フェイトは自分の胸の中に沸き起こったこの苛立ちを抑えきれない。

ひとまず話題を変えようと、フェイトは視線をベッドで眠っているなのはへと向ける。
くぅくぅと穏やかな表情で眠るなのはは可愛らしく、その寝顔が更にフェイトの心を苛立たせた。

「むぅ」

「？　どうしたんだ？」

「……うぅん、何でもない」

「？」

フェイトが苛立ったように鼻を鳴らすと、鬼柳が疑問を投げかけてくる。
それに僅かな嬉しさを覚えながらも、フェイトは彼に「何でもない」と返した。

鬼柳は今までなのはの寝顔を見ていたのだろうか。どんな思いで見ていたのだろうか。
それを想像すると、彼女の心は苛立ちを覚える。だが、さすがにそろそろ気を引き締めなければ。

「それで鬼柳。なのははどうして倒れたの？」

「あぁ。それがな……」

と、鬼柳はフェイトに事情を説明した。それを聞き、フェイトの目が見開かれる。
どうやらなのははやての病名を聞くためにヴィータとデュエルを行い、敗北したそうだ。

その結果、何故か彼女のリンカ―コアが極端に小さくなっており、現在リンカ―コアの回復に努めているらしい。
フェイトはなのはの命に別条がないと知りホッとすると同時、ヴィータの実力の高さに驚いた。そこまで強いとは思わなかった。

常日頃からヴィータと共にデュエルをしたりして遊んでいるのだが、そこまで強いと言う印象を抱かなかった。
まさか実力を抑えていたのだろうか。それとも使うデッキを変えていたのか。想像してみるのだが、どれが正しいのか分からない。

「デュエルで、勝てば……」

「あぁ。デュエルで勝たないと、教えてもらえないらしい」

そして鬼柳から事の顛末を聞き終えたフェイトは、守護騎士たちとデュエルするか考える。
本当はすぐさま鬼柳から問い質したいと言うのが本音だ。だが、それでは自分の気が収まらない。

欲しい物はデュエルで手に入れる。それは決闘者（デュエリスト）にとっては常識の一つ。
それに鬼柳となのはもまた、デュエルをした結果、片方は情報を受け取り、片方は倒れたのだ。

何時か鬼柳と共にチームサティスファクションとして行動するとき、実力不足で鬼柳の足を引っ張りたくない。
フェイトはギュッと拳を握りしめると、守護騎士のメンバーとデュエルをすることに決めた。勝って鬼柳と並ぶのだ。

「私も、デュエル……するよ！」

「そうか」

フェイトはキッと鋭い眼差しを鬼柳に向ける。今は遠いその背中に追いつく事を心に秘めて。
そしてフェイトの真剣な様子に鬼柳は眼を細めて嬉しそうな表情をする。向上心があるのは良い事だ。

だが、肝心の相手は誰が良いだろうか。フェイトをイスに座らせな

がら、鬼柳はフェイトと相談する。
見た目で判断するのならば、まずシャマルが真っ先にターゲットにされるだろう。だが、鬼柳はシャマルとデュエルしたくない。
何故ならば――――。

『相手モンスターの召喚時、伏せカードを発動します！　≪ギフトカード≫発動！
　さらに≪ギフトカード≫を発動！　そして最後に≪シモッチによる副作用≫を発動します！』

ギフトカード
通常罠
相手は３０００ライフポイント回復する。

シモッチによる副作用
永続罠
相手のライフポイントが回復する効果は、
ライフポイントにダメージを与える効果になる。

相手のライフが回復する効果が、ダメージを与える効果になるデッキ。通称、シモッチバーンを使うからだ。
相手の伏せカードを妨害するカードをあまり積まない鬼柳にとって、シャマルはシグナムやヴィータ以上に鬼門である。
もしも先攻で手札を全て伏せられたら。後攻でもシャマルのターンから自分のターンに移ったとき伏せカードを全て発動されたら。

唯一の妨害カードであるインフェルニティ・バリアが無い限り鬼柳の敗北は確定だ。もしかしたら、守護騎士で一番強いかもしれない。

それを聞いたフェイトは驚いた表情をしていたが、なんだか複雑そうな表情をしていた。それも仕方ないことだ。

通常デュエルにおいて、バーンデッキは忌避される傾向にある。何の戦略もないデュエルが嫌われているのだろう。

フェイトはバーンデッキを否定はしないが、進んで相手をしようとは思わない。相性が悪すぎる。

ならばヴィータかシグナムと言いたいところだが、ヴィータは攻撃宣言時に魔法・罠を使えないアンティーク・ギアを。

シグナムはコンボを止められない限り永遠に再生するレヴァテインと光と闇の竜のコンボを使ってくる。

良く良く考えてみれば、なんとも闘いづらい相手が揃ったものだ。

フェイトは守護騎士たちの使うデッキに顔を顰める。

「あれ？　じゃあ、ザフィーラはどんなデッキを使うの？」

「ザフィーラはガーディアンと名のついたカードを使うらしい。≪ガーディアン・エアトス≫や≪ガーディアン・オブ・オーダー≫を使うみたいだな」

「≪ガーディアン・エアトス≫、それに≪ガーディアン・オブ・オーダー≫……」

ガーディアン・エアトス

星８／風属性／天使族／攻２５００／守２０００
自分の墓地にモンスターカードが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、
相手の墓地に存在するモンスターを３枚まで選択し、ゲームから除外する。
この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、
エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

ガーディアン・オブ・オーダー
星８／光属性／戦士族／攻２５００／守１２００
自分フィールド上に光属性モンスターが表側表示で２体以上存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
「ガーディアン・オブ・オーダー」は、
自分フィールド上に１枚しか表側表示で存在できない。

鬼柳の口から飛び出してきた言葉に、フェイトは苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。
ザフィーラが使うのは「ガーディアン」と名のつくカード群の様で、他の三人に比べればテーマ色が濃い。

だが、恐らくザフィーラもシャマル同様に進んで相手をしたくない。
何故ならば、投入されているカードが原因だからだ。
ガーディアン・オブ・オーダーと言うカードは特殊召喚条件が緩く場に出しやすいと言う利点がある。だが、問題はもう一枚だ。

ガーディアン・エアトスは墓地にモンスターカードが存在しない場

合、手札から特殊召喚できる。
結果として、プレイヤーは墓地にモンスターを溜めない様に闘うのが基本だ。そこで、相性が良いカードが二枚ある。

一枚は「次元の裂け目」と言う永続魔法カード。墓地に送られるモンスターを全て除外する魔法カードだ。
そしてもう一枚は「マクロコスモス」。こちらは効果は次元の裂け目と似た様な効果だが、魔法と罠カードまで除外されるのだ。

墓地にモンスターを溜め、蘇生による大量展開を狙うフェイトにとって、ザフィーラのデッキも相性が悪いと言える。
ガーディアン・エアトスと名を聞いたら除外を警戒せよと言うのは、一種の暗黙の了解となっているのだから。

次元の裂け目
永続魔法
墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。

マクロコスモス
永続罠
自分の手札またはデッキから「原始太陽ヘリオス」1体を特殊召喚する事ができる。
また、このカードがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずゲームから除外される。

「……それで、どうする？」

「……」

鬼柳に気の毒そうな表情で見られながら、フェイトは必死に考えた。
現状、自分が相手を出来そうなのはシグナムとヴィータの二人だけだ。残りの二人は相性が悪すぎる。

頭の両脇で括られているツインテールがピコピコと動き、フェイトが必死に考えているのを示した。
そして不意にツインテールが動くのを止める。どうやら大戦をする相手が決まったらしい。その相手とは――。

※

「第９７管理外までもうすぐかしら？」

「はい、艦長」

次元世界を行き来する次元航空間――戦艦アースラのブリッジに年若い女性の声が響いた。
声の主はアースラの艦長であるリンディ・ハラオウン。リンディの問いかけにブリッジのクルーが答えた。

そして視線を前方に展開されている巨大なモニターに移し、予定通り航海が行われているのを確認すると、艦長席に座る。
それと同じくして、リンディの元にお盆を持った女性局員が歩み寄ってきた。その局員はリンディにお盆の上に乗せていた湯呑みを渡す。

「ありがとう、エイミィ」

「いぃえ～」

リンディは女性局員――エイミィ・リミエッタから湯呑みを受け取ると、ゴクリと一口だけ口に運ぶ。
だが、やはりというか甘みが足りない。リンディがエイミィに視線を向ければ、彼女は苦笑しながら白いスティックを取り出す。

「やっぱりコレよね～」

何処となく楽しそうな表情で、リンディは受け取った白いスティックの中身を湯呑の中に全て投入した。
しかし、それだけでリンディは満足しない。エイミィから更に数本のスティックを受け取ると、同様に全て湯呑みに入れる。

その中身は砂糖なのだが、此処まで入れると元の味が分からなくなるほど甘く待ってしまう。
だが、リンディにはこれが丁度良いらしい。相変わらずの艦長の様

子に、ブリッジのクルーは苦笑いを返す。

「それにしても、面白い子ですよね」

「あぁ。前に没収したデバイスだったかしら？」

「はい。何の前触れもなく、私をマスターの元へ返せー！　って騒いで……」

そして場の雰囲気を変える様に、エイミィはリンディにとある話題を振った。

その話題とは、先日第９７世界で二人の少女と一人の魔導師から没収したデバイスのこと。

そのうち二人の少女の使うデバイスが先日、急に保管庫で騒ぎ出したのだ。

内容は一刻も早くマスターの元へ返せと言うもの。何が起きたのか分からず、技術者は首を傾げている。

「レイジングハートとバルディッシュ、だったかしら？」

「はい、そうです」

「……何処も異常はないのよね？」

「はい」

リンディはエイミィに訊ねながら、思わず眉を顰めた。原因がさっぱり分からない。
デバイスのバグかとも思ったが、メンテナンスを行った技術者によればそれは無いとの返事が。
なのでリンディたちは原因を確かめるために二つのデバイスを持ち、第97管理外世界へと向かっているのだ。
デバイスの言うマスターに会えば、なにか事態が掴めるかもしれない。それに無限書庫で干からびていた彼も送り届けなければ。
これからの予定を確認し、リンディはふぅと嘆息する。やることは色々とあるのだから仕方ない。
それに最近、各次元世界で行われているデュエリスト狩りについても捜査を進めなければならない。
誰がどんな目的で行っているのかは分からないが、その犯罪を見過ごすわけにはいかなかった。
そしてふと、この場に居ない彼女の息子が気になった。ブリッジを見渡してみるが、姿が見えない。
「ところでクロノは？」
「クロノ執務官は……」
「？　どうしたの？」
リンディがエイミィに訊ねれば、エイミィは曖昧な笑みを浮かべる。

それは他のクルーも同様だ。
一体どうしたのだろうか。疑問に思い、リンディはエイミィに訊ねてみる。すると予想外の言葉が返ってきた。

「購買です」

「――――は？」

「購買で……デュエルターミナルを、その……」

「……」

エイミィから返ってきた言葉に、リンディはソッと視線を逸らした。
そうか。デュエルターミナルか。
デュエルターミナルとは彼女たちの本拠地ミッドチルダで始まったシミュレータマシンの通称のことである。

お金（世界によってまちまち）を入れることで一枚だけカードが支給され、そのカードと事前に用意されたデッキでデュエルをするのだ。
対戦相手は過去の大会で結果を残したデュエリストのデッキで、闘うだけで相手の戦略や行動パターンを研究できる優れものである。

以前まではカードを支給すると言うことは無かったのだが、せっかくお金を使っているのだからと言うことで実装されたのだ。
今ではデュエルターミナル専用のカード群が存在し、そのカード目当てに子供がデュエルターミナルを回すことも珍しくは無い。

「何でも、アクションデュエルにハマっちゃったみたいで……」

「クロノー！？」

だが、エイミィの口から飛び出してきた単語にリンディが慌てて購買へ駈け出して行った。

遠くなっていくリンディの背中を見送りながら、エイミィは年若い執務官の様子を思い出しため息を零す。

アクションデュエルとは子供むけに開発されたデュエルをしないゲームの様な物だ。

その世界によって実装されているゲームは様々で、全ての種類を数えるのはほぼ不可能だ。

アースラに設置されているデュエルターミナルには、ボタンを連打した分だけモンスターの攻撃が強くなるゲームが実装されている。

これで相手の操るモンスターと戦わせ、勝敗を決めるのだ。そしてクロノが今回、このゲームに大ハマりしているらしい。

「（ま、クロノ君もストレス溜まってるだろうしな～）」

つい先ほど、夢中でボタンを連打する執務官の様子を思い出し、エイミィは苦笑いを浮かべた。

まだ子供と言う年齢でありながら、執務官と言う地位にいるクロノには、向けられるやっかみや嫉妬が多い。

今回のクロノのデュエルターミナルに大ハマりと言う状況も、少なからずやっかみや嫉妬が原因だろう。
貯め込んだストレスは何処かで吐き出さなければならない。今回はたまたま、デュエルターミナルがその役目を負っただけ。

「適度にガス抜きも必要でしょ！」

エイミィはそう結論付けると、ブリッジ内の自分の席へと足を進める。
そしてデッキケースから自身のデッキを取り出し、調整を進めるのだった。

※

「うにゃ……？」

カーテンの隙間から降り注ぐ陽の光が眩しくて、なのはは眼を細めた。
そしてぼんやりとした視界に飛び込んでくるのは、見慣れた木の天

井である。

はて、どうして自分はこんなところに居るんだろうか。学校はどうしたんだっけ。

ぼんやりとした頭でそんなことを考えていると、彼女の視界にとある人物のコートが眼に入る。

そのコートはずっと前から見てきたもので、今では彼以外が着けていると違和感を感じるほどだ。

その男性――鬼柳　京介はベッドの傍らに置いてあるイスに腰掛けて、すぅすぅと穏やかな寝息を立てている。

「鬼柳さん。風邪引くよ――――」

どうして鬼柳がイスに腰掛けて眠っているのだろうか。疑問に思うが、まずは起こさなくてはならない。

ベッドに手をついて身体を起こそうとしたとき、ズキッと胸に痛みが走る。それと同時、どうして眠っていたのか思い出した。

無残に散った切り札――レッド・デーモンズ・ドラゴン。振り下ろされた拳は寸分の狂いなく自らを叩き潰した。

その後、自らの胸から出現した光りの球から何かを吸い取られる様な感覚。その後気分が悪くなり、なのはは気を失ったのだ。

「くぅ……！　……そ、っか……。私、負けたんだ……」

ズキズキと痛みを発する胸を抑えながら、なのはは事実を確認する様にポツリとそう呟いた。
手も足も出なかった。こちらは切り札を召喚し相手の切り札を破壊したと思ったのに。それ以上の切り札が出てきた。
甘かった。心のどこかでヴィータを侮っていた。その結果、自分はデュエルに敗北し、魔力を奪われたのだ。
胸を抑えながら、なのはは視線を傍らで眠る鬼柳へと向ける。彼の手元には若干湿り気を帯びたタオルが握られていた。

「……鬼柳さん、看病してくれて……ありがとう」

どうやら鬼柳はなのはの傍を離れずに看病を続けてくれていたらしい。思わず頬が緩んでしまう。
だが、暖かい気持ちはすぐさま、悔しい気持ちに変わった。負けて悔しい。相手ともう一度闘い、勝ちたい。
そう思うのは、自分がデュエリストだからなのだろう。なのはは掴んだ胸元のパジャマをグッと握りしめる。
だが、どうすれば良い。自らの切り札は相手の圧倒的な切り札の前に、無残にも敗れてしまったのだ。再び叶うとは思えない。

「（勝ち、たいよ……。勝って……ヴィータちゃんからお話を聞きたいよ……！）」

でも、勝ちたいと思ってしまう。負けっぱなしは性に合わないのだ。

もう一度ヴィータとデュエルを行い、勝って彼女からはやての病名を聞き出す。

鬼柳がこの場で看病をしてくれていたと言うことは、彼はシグナムとのデュエルに勝ったと言うこと。

その事実も、なのはの心を燃え盛らせている原因の一つだった。だが、勝つ術が無い。勝てるカードが無い。

「でも、一体どうすれば――！？」

と、なのはが胸の奥でくすぶる悔しさを持て余していると、不意にベッドサイドに置かれたデッキが光を輝き始めた。

その明るさは眼を覆うほどで、なのはは咄嗟に腕で眼を庇う。そして眼を細めながら、光を輝かせているデッキに眼を向けた。

すると、彼女のデッキの中から二枚のカードが宙に浮かぶ。そのカードの絵柄を見たとき、なのはは驚いた表情を浮かべた。

何故ならば、宙に浮かんだカードは彼女の幼少期からの相棒であるサイレント・マジシャン。そのカードが二枚、宙に浮かんでいる。

「レンちゃ――――ッ！？」

何が起こっているのかは分からないが、咄嗟になのはは手を伸ばした。

自分の大切なカードに異変が起きている。それだけはなんとなく理解できたから。

だが、一層激しい光を輝かせ、カードはなのはの手を触れさせまいとする。
そしてなのはが両腕で眼を覆い光が治まるのを待った。光が徐々に弱まっていく。

依然として宙には二枚のカードが浮かんでいた。だが、先ほどのカードとは絵柄が全く違う。
何故、どうしてと言う疑念がなのはの胸中に渦巻き、咄嗟になのはは宙に浮かぶカードを手に取った。

「ッ！　コレ……」

するとカードを通して、なのはの胸にある想いが流れ込んでくる。
負けないで。諦めないで。私はきっと、あなたと共にずっとあるから。そんな想いが。

なのはには、この気持ちが誰のものかすぐに理解できた。それは幼少の頃からの相棒であるカード。
その二枚のカードがなのはの気持ちに応え、自らの在り方まで変化させたのだ。信じられない現象になのはは眼を見開く。

だが、変化した二枚のカードの意思を無碍にする事は出来ない。
なのはは今は居ないサイレント・マジシャンから受け取った二枚のカードを胸に決意を新たにする。

「分かったよ、レンちゃん。私、頑張る！」

なのはは決意を新たに、そう宣言した。
そして視線を下に落とす。そこにある二枚のカード。それは――――

※

「助かったな」

「はぁ、はぁ……」

荒い息を吐きながら、フェイトは視線をシグナムへと向けた。
彼女の場にはシグナムの切り札であるドラグニティアームズ・レヴァテインの姿が。

しかも装備しているカードは光と闇の竜。破壊する事は困難で、フェイトはシグナムに圧倒されていた。
守護騎士と行うデュエルにて、フェイトはシグナムと闘うことを選んだ。鬼柳が出来たのだ。自分も出来るはず。そう思って。

だが、甘かった。相手のモンスターは破壊されず、此方が一方的に

破壊される。
そしてライフも削られ次の攻撃でフェイトの敗北が決定した時、不意にシグナムがそんな事を言ったのだ。

「――グナム～！　何処や～？　お昼ごはんやで～！」

視線をシグナムの向けた方へと向ければ、そこにはシグナムの姿を探して車いすを動かしている少女の姿が。
今回のシグナムとフェイトのデュエルははやてに内緒で行われており、見つかればすぐさま中断するのが暗黙のルールとなっていた。

今回はこの暗黙のルールに助けられた。シグナムは展開していたデュエルディスクを待機状態に戻し、その場を後にする。
そして残されたのは荒い息を吐くフェイトだけ。幸い周囲に人の気配はなく、フェイトはドカッとその場に腰を下ろしたのだった。

「（ダメだった……！　攻撃力が違いすぎる……！）」

フェイトは息を整えながら、腕に装着されたデュエルディスクからカードを一枚取り出した。
そのカードはフェイトのデッキにおける切り札――スターダスト・ドラゴン。そのカードは墓地に置かれていた。

なんとか切り札であるスターダスト・ドラゴンのシンクロ召喚に成功したが、レヴァテインの攻撃力の前に散ったのだ。
シンクロ召喚した当初こそはシンクロ・ストライクで撃破出来たが、

すぐさま再生。

それをスターダストで無効にしたが、二体目のレヴァテインが出現した。

スターダストを上回る攻撃力を持つレヴァテインの前にスターダストは破壊され、敗北寸前だった。

「どうすれば、勝てるの……？」

スターダストを見つめながら、フェイトはポツリと言葉を零した。

スターダスト以外では、レヴァテインのコンボを止めることなど出来はしない。

だが、仮に他のシンクロモンスターをシンクロ召喚しようと、レヴァテインと光と闇の竜のコンボの前に破壊される。

いっそスターダストを抜いたり、デッキを変えれば勝つことは出来るかもしれない。だが、そんな事はしたくなかった。

何故ならば、そのデッキとカードは母親から貰った大切なカード。

代わりは無く、掛け替えのないカードなのだから。

どうしてもスターダストでシグナムに勝ちたい。母親から貰ったこのデッキで、シグナムに勝利したい。フェイトは心の底からそう思う。

そして、そんなフェイトの想いに応える様にフェイトのデッキが光を放ち始める――――。

「な――ッ！？　こ、れは……！？」

突然デッキが輝きだすと言う事態にフェイトが驚いていると、手に持っていたスターダストまで輝き始めた。
それはまるで、フェイトの心の願いに呼応している様で。そしてデュエルディスクからカードが舞い、二枚のカードが宙に浮く。

その二枚のカードとはリニスに相手をしてもらったときから、ずっとデッキに入れているカード。
スピード・ウォリアー。そしてジャンク・ウォリアー。何故この二枚のカードが宙に浮いているのか。

フェイトがそう疑問に思っていると、一際激しい光がフェイトの目を覆う。咄嗟に腕で眼を庇った。
そして徐々に光が晴れて行き、カードの様子を確認出来る。するとフェイトの眼が驚愕に見開かれた。

先ほどまで宙に浮かんでいた二枚のカード。そのカードが別のカードに変化していたからだ。
何処へ行ったと周囲に視線を走らせるが、何処にもスピード・ウォリアーとジャンク・ウォリアーの姿は無い。

急いで探さなくちゃ。
そう思い、宙に浮かぶカードを掴んだとき、二枚のカードから感情が流れ込んできた。

負けるな。自分たちが付いている。道は切り開く。任せろ。そんな想いが流れ込んでくる。
そしてその想いと共に、フェイトの脳裏に光を求めて駆け抜けて行

く二体のウォリアーの姿が浮かび上がる。

「これ……スピード・ウォリアーとジャンク・ウォリアーだ……」

手に持ったカードに視線を落としながら、フェイトはそう呟いた。
断言できる。このカードから流れ込んでくるのは、二体のウォリアーの叫び。

その二体のウォリアーの叫びが、新たな二枚のカードに変化したのだろうか。
もしもそうならば、これほど嬉しいことは無い。カード達が、自分の背中を後押ししてくれている。

「ごめんね、不甲斐ないご主人様で……。でも、頑張るよ。だから……力を貸して……ッ！」

受け取った二体のウォリアーの想いに、知らずフェイトは涙を流す。
通常、涙は悲しい時に零れるものだ。だが、今は悲しくない。心が温かい。

二体のウォリアーが付いててくれてる。母親から受け取ったカード達が、スターダストが付いている。
だから自分は強くなれる。強くなって皆と勝利を分かち合う――――！

「行こう……≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫！」

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫！！」

三話　「侵食」（後書き）

次回予告

新たに得た力――／バスター。
その力を手に、なのはとフェイトは再戦を挑む。

新たな力を得た二体の竜の力にシグナムとヴィータは圧倒。
そして放たれた二つのブレスがシグナムとヴィータを飲み込み――。

一方、海鳴に到着したユーノはプレシアの元へ。
得た情報を元に闇の書の対策を練るが、良い結果は得られず。

そして近づくクリスマス・イブ。
はたして聖夜は血ぬられた聖夜になってしまうのか――？

次回、満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「バスターモード」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

四話　「バスター・モード」（前書き）

フェイト無双の回。
あれ、これって普通オリ主やらクロス主がするんじゃ……。

四話　「バスター・モード」

～海鳴市　八神家～

「ヴィータちゃん！」

「あぁ？」

勢いよく掛けられた声に、ヴィータは不機嫌そうな表情で視線を向けた。

彼女の視線の先には、先日ヴィータとデュエルをした少女――なのはの姿がある。

手には新たに組んだのだろうか。自らのデッキが握られており、決闘（デュエル）をしようと言う意思が込められている。

ヴィータはそんななのはの姿に苛立った様な表情を浮かべた。先日のデュエルで互いに不干渉を誓ったはず。それが破られたのだから。

「何の用だよ」

「もう一度、私とデュエルして！」

「なっ！？」

苛立ったように訊ねれば、返ってきた答えにヴィータは眼を剥いた。

まさか再び、再戦の申し込みがあるとは思ってもみなかったことだからだ。

「テメー、なに言ってるのか分かってんのか？
この前のデュエルで、アタシが勝ったら不干渉だって言ったろ？」

ヴィータはなのはを睨みつけながらそう、言葉を返す。
実際、以前のデュエルでヴィータはなのはの不干渉を条件にしたのだ。

だから今回のなのはからのデュエルに怒っている。これでは先の宣言が意味が無い。
しかし、なのははキッと鋭い表情でヴィータを見つめ返す。そして信じられない言葉を口にした。

「分かってる！
私が負けたら、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫をヴィータちゃんにあげる！」

「な――ッ！？」

なのはの口から飛び出してきた言葉に、ヴィータは思わず眼を見開いた。
レッド・デーモンズ・ドラゴンのカードはレア中のレアであり、持つ者はごく僅かだ。

そんな希少価値の高いカードを、アンティに賭けようと言うのだから驚くのも無理は無い。
咄嗟になのはに言い返そうとするのだが、返ってくるのは真剣な眼差し。ヴィータは押し黙る。

「はやてちゃんを助けるためなら、切り札だって賭ける！
大切な友達を、大切な仲間を私は――――助けたいのっ！」

「――――ッ！」

なのはが叫んだ言葉に、ヴィータは驚いた表情を浮かべた。
たった一人の友達のために、仲間のために大切なカードすら賭けてしまうとは。

口から出まかせかとも思ったが、なのはの真剣な表情がそれを裏切る。
そして真剣な眼差しを浮かべるなのはを見て、ヴィータは心のどこかで羨ましさを覚えた。

友とは、こんなにも強い絆で結ばれているのか。友のためならば、大切なものすら投げ出すのか。
しかしそれでいて、彼女は負けるとは思っていない。勝つことを確信している眼だ。勝って、全てを手に入れる。

ある種の清々しさを覚えながら、ヴィータは自身の口元が緩んでいるのを自覚した。
久しぶりだ、ここまで気持ちの良い心を持って、自分にデュエルを挑んできたデュエリストは久しぶりだ。

「（やべぇ……！　デュエル、したい……っ！）」

自分の心が滾っているのが分かる。真正面からぶつかり合う、力技のデュエルがしたい。
再びなのはから魔力を抜き取るのは不可能だが、それを抜きにしても、もう一度だけデュエルしたかった。

レッド・デーモンズ・ドラゴンと言うアンティカードも気にならない。
眼の前で闘志を燃やしている瞳を持った少女と、ヴィータはデュエルがしたかった。

「良いぜ、来いよ！
アタシがもう一度テメーをブッ倒してやる！」

※

場所は変わり、海鳴市内のとある山中。そこにフェイトとシグナム

は相対していた。
両者の腕に装着されているのは決闘盤（デュエルディスク）。デッキもシャッフルされている。

今回は先日のリベンジマッチと言うところだ。八神家から離れているこの場所なら、はやての邪魔は入らない。
シグナムとフェイトはどちらからともなくデッキから手札を五枚抜き取ると、睨みつける様な視線をお互いへ向けた。

「（良い眼をしている……。なにかあったのか？）」

シグナムはこちらを見つめるフェイトの瞳を見つめながら、内心でボソリと呟いた。
今のフェイトの瞳には、以前見られた慢心が見られない。澄んだ綺麗な瞳をしている。

どうやら以前の敗北を糧に、勝利への道筋を掴んだのかもしれない。
是非ともデュエルしたいとシグナムの心が訴える。そしてシグナムはそれを許容した。

この様な瞳を持つデュエリストとのデュエルならば、さぞかし胸が躍る様なデュエルが出来るだろう。
それに加え、フェイトの持つ魔力量は魅力的。是非ともフェイトを打ち負かし、彼女の魔力を手に入れて見せる。

「では、行くぞ。テスタロッサよ」

「うん、シグナム」
「「――――決闘（デュエル）！！」」
フェイトＬＰ４０００
シグナムＬＰ４０００
「先攻は私から、ドロー！」
フェイト手札５→６
「私はモンスターをセット。カードを二枚伏せて、ターンエンド！」
フェイト手札６→３
場　セットモンスター　伏せ×２
「私のターン、ドロー」
シグナム手札５→６
「手札から≪竜の渓谷≫を発動。
手札の≪ドラグニティ―ファランクス≫を捨て、デッキから≪光と闇の竜≫を墓地に送らせてもらう」
シグナム手札６→４
シグナムが手札から発動したフィールド魔法の効果により、周囲の景色が変化した。
周囲を切り立った崖が囲んでいるが、フェイトは気にせずシグナム

のことを見つめている。

どうやら他の物事に意識を動かすことは無い様だ。

それに笑みを浮かべながら、シグナムは手札からカードを出す。

「そして手札から≪ドラグニティ―レギオン≫を召喚する。

効果で墓地から≪ドラグニティ―ファランクス≫をレギオンに装備」

シグナム手札4→3

「さらに場の≪ドラグニティ―レギオン≫を除外することにより、手札からモンスターを特殊召喚できる！

出でよ！　≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫！！」

シグナム手札3→2

シグナムの場に召喚されたのは、彼女の切り札たるドラゴン族モンスターだった。

彼女の相棒たるデバイスと同じ魔剣を手に持ち、ギラギラと敵意に満ちた視線をフェイトに向けている。

フェイトは目前に降臨したドラゴン族モンスターを視界に捉え、人知れず息を呑んだ。

前回はレヴァテインの攻撃力の壁に破れ、スターダスト・ドラゴンを戦闘破壊されたのだ。

二度とそんな無様な真似をさせたりはしない。

スターダストが居るべき場所は、己のフィールドのみなのだから。

「≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫の効果発動！
このカードの召喚・特殊召喚に成功したとき、墓地の「ドラグニティアームズ・レヴァテイン」以外の
ドラゴン族モンスターをこのカードに装備カード扱いとして装備させる。対象は――――≪光と闇の竜≫！」

「出た……ッ！　シグナムの必殺コンボ……ッ！」

「バトルフェイズ！　レヴァテインでセットモンスターを攻撃！
紫電一閃ッ！」

シグナムの指示を受け、レヴァテインが手に持った魔剣で裏側表示のカードへ向かう。
そして手に持った剣を振り下ろせば、「ぴぎぃっ！」と潰れた様な鳴き声が周囲に響き渡った。

両断されたフェイトのセットカードには薄っすらと雪だるまを模したモンスターが浮かんでいる。
そのセットモンスター――スノーマンイーターは破壊される間際、僅かな抵抗を示す。スノーマンイーターの身体が輝いた。

「スノーマンイーターの効果発動。
このカードがリバースしたとき、相手モンスター一体を破壊出来ます。対象はレヴァテイン！」

「しかし、≪光と闇の龍≫の効果でレヴァテインは復活する。
……≪竜の渓谷≫は破壊されるがな。そして私はこのままターン

エンドだ」

シグナム手札２
場　ドラグニティアームズ・レヴァテイン　光と闇の竜（装備カード扱い）

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札３→４

「私は伏せカード≪リビングデッドの呼び声≫を発動！
墓地から≪スノーマンイーター≫を場に特殊召喚します」

リビングデッドの呼び声
永続罠
自分の墓地からモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「さらに私は墓地からモンスターの特殊召喚に成功したので、手札から≪ドッペル・ウォリアー≫を特殊召喚！」

フェイト手札４→３

フェイトの場に雪だるまを模したモンスターと、手に小さな銃を持った兵士の様なモンスターが現れる。

蘇生するだけで手札から特殊召喚できるモンスター。召喚権は使用しておらず、さらなる召喚が予想される。

そして、その予想は的中した。

「私は≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！
そして場のレベル３≪スノーマンイーター≫とレベル２≪ドッペル・ウォリアー≫に
レベル３チューナーモンスター≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！！」

「レベル合計は８……ッ！　来るか、スターダスト！」

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！
シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

三つのリングを一筋の閃光が打ち抜いた。そして場に降臨するのは星屑の名を持つドラゴン。
周囲に散らばる星屑はドラゴンを引き立たせるように輝き、ドラゴンは敵意に満ちた視線をシグナムへと向ける。

再び場に召喚されたスターダスト・ドラゴン。その効果は厄介そのもので、どうにかして墓地に送りたい。
しかしシグナムの手札には、フェイトの場のスターダスト・ドラゴンを戦闘破壊できるモンスターが存在している。

「シンクロ召喚に使用され、墓地に送られた≪ドッペル・ウォリアー≫の効果発動！
自分のフィールド上にレベル１の「ドッペル・トークン」二体を、攻撃表示特殊召喚します！」

「壁を用意したか……。二体も特殊召喚されると厄介だな」

「更に伏せカードオープン！　≪シンクロ・ストライク≫！
このカードの効果により、スターダストはシンクロ素材にしたモンスター×５００ポイント攻撃力が上昇します！」

スターダストＡＴＫ２５００→４０００

フェイトの発動した伏せカードの効果により、スターダストの攻撃力が飛躍的に上昇する。
既に先ほどの儚さは成りを潜めており、そこにあるのは絶対的な強さを持ったドラゴンがただ一体。

「≪スターダスト・ドラゴン≫で≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫を攻撃！
響け、シューティング・ソニック！」

「ぐっ！！」

シグナムＬＰ４０００→２６００

そしてスターダストの放ったブレスが、シグナムの場のドラゴンに

直撃する。
咄嗟に手に持った魔剣で反撃しようとした様だが、反撃もむなしくドラゴンは爆散。

シグナムのライフポイントに大ダメージを与えることに成功したが、すぐさまドラゴンは復活する。
しかしフェイトもただ、シグナムの従えるドラゴンの攻撃を許すほど甘くは無い。彼女は手札に手を掛ける。

「≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫に装備された≪光と闇の竜≫の効果発動。
自分の場のカードを全て破壊し、墓地からモンスター一体を特殊召喚する。対象はレヴァテイン。
そして特殊召喚に成功した≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫の効果発動。
墓地の「ドラグニティアームズ・レヴァテイン」以外のドラゴン族モンスターをレヴァテインに装備させる。
対象は迷うことは無い。≪光と闇の竜≫だっ！」

「くっ……！　私はカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札２→０
場　スターダスト　ドッペル・トークン×２　リビングデッド　伏せ×２

「私のターン！」

シグナム手札２→３

フェイトはシグナムがドローするのを視界に納めながら、腕に着けている決闘盤（デュエルディスク）に視線を向ける。
ディスクにセットされているのは彼女の母親から譲り受けた星屑の竜。そしてその竜を進化させるための罠カード。

無事に進化させることが出来たのならば、きっとシグナムを打ち倒すことが出来るだろう。
フェイトは期待を込めた視線でセットカードを見つめる。そして視線を再びシグナムへと向けた。

「私は手札から≪ドラグニティ―ドゥクス≫を召喚する。
効果で墓地から≪ドラグニティ―ファランクス≫をドゥクスに装備させる！」

シグナムの場に、背中に翼を背負った翼人の様なモンスターが召喚される。
そして召喚されたモンスターが視線を自らの隣へと向ければ、墓地から蘇る一体のドラゴン。

「さらに≪ドラグニティ―ファランクス≫の効果発動！
装備カード扱いのこのカードを、フィールドに特殊召喚できる！」

「これでレベルの合計は６……！」

「レベル４≪ドラグニティ―ドゥクス≫にレベル２≪ドラグニティ―ファランクス≫をチューニング！

神々の化身たる魔槍よ！　渓谷より来たりて敵を刺し穿て！　シンクロ召喚！　≪ドラグニティナイト―ヴァジュランダ≫！！」

「ヴァジュランダ――ッ！？」

ドラグニティナイト―ヴァジュランダ
シンクロ・効果モンスター
星６／風属性／ドラゴン族／攻１９００／守１２００
ドラゴン族チューナー＋チューナー以外の鳥獣族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
自分の墓地に存在するレベル３以下の「ドラグニティ」と名のついた
ドラゴン族モンスター１体を選択し、
装備カード扱いとしてこのカードに装備する事ができる。
１ターンに１度、このカードに装備された
装備カード１枚を墓地へ送る事で、
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで倍になる。

シグナムの場にシンクロ召喚されたのは、「ドラグニティ」において切り札とも言えるカードだった。
橙色の竜を従えた翼人は竜の背に乗り込み、手に持った槍を油断なく構えている。非常に不味い事態である。

ヴァジュランダは装備したカードを墓地に送り、攻撃力を倍にする効果を持っている。
これにより貧弱な攻撃力は大幅に強化され、敵に大ダメージを与える切り札の役割を得ることになった。

フェイトは伏せたカードを思い出し、唇を噛み締める。不味い。ヴァジュランダを止める術はフェイトに無い。

しかしどうにかせねば、スターダストは再び破壊されて墓地へ送られてしまう。それだけは是非とも避けなくては。

「≪ドラグニティナイト―ヴァジュランダ≫の効果発動！
このカードのシンクロ召喚に成功したとき、自分の墓地に存在するレベル3以下の
「ドラグニティ」モンスター一体を装備カード扱いとしてこのカードに装備する事が出来る！
この効果により、私は墓地の≪ドラグニティ―ファランクス≫をヴァジュランダに装備させる！」

シグナム手札3→2
場　レヴァテイン　光と闇の竜（装備カード扱い）　ヴァジュランダ　ファランクス（装備カード扱い）

「（不味いッ！　確実にスターダストを潰しに来る……！）」

「これで終わりだッ！
≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！」

シグナムの指示により、星屑の竜を穿とうと一体のドラゴンが凄まじい速度で星屑の竜に迫る。
危機を察知したのか。星屑の竜は威嚇の構えを見せる。だが、シグナムにとっては些細な出来事だ。

レヴァテインが手に持った魔剣で星屑の竜を断たんとしたとき、フェイトが伏せカードを発動した。

シグナムはフェイトの伏せカードに僅かに警戒したが、次元幽閉などの除外カードで無いと分かると安堵する。

そして、レヴァテインの持つ魔剣が星屑の竜を両断した。

※

「はいは～い」

ピンポーンとインターホンの音が、八神家のリビングに鳴り響いた。

まず真っ先に腰を上げたのはリビングでモニターと睨めっこしていたプレシア。

先ほどまで見つめていたモニターをあっという間に消すと、スタスタと玄関へ向かう。

ちなみにはやてと言えば、リビングでデッキの改造をしている真っ最中だ。アイデアが閃いたらしい。

「あら」

後ろから聞こえてくるはやての絶叫を聞きながら、プレシアは玄関の扉を少しだけ開けた。
すると彼女の視界に飛び込んできたのは、つい先日、とある次元航空艦で取り調べを受けた少年の姿。

「お久しぶり、になりますか。クロノ・ハラオウン執務官です」

その少年――クロノ・ハラオウンは見慣れぬ私服姿で、プレシアへと友好の笑みを向けた。
プレシアもまた突然のクロノの訪問に虚を突かれた様だが、すぐに笑みを浮かべて彼を中へ招き入れようとする。
だが、クロノはフルフルと首を横に振るばかり。一体どうしたのだろうか。
そうプレシアが内心で疑問に思っていると、彼は脇からとある物体を引っ張り出した。

「あら、これは……」

「無限書庫で干からびているのを見つけた。
アナタの差し金ですね？」

「えぇ。そうよ」

クロノが引っ張り出した干からびた物体とは、カラカラに乾いたユ

ーノの姿だった。
彼は果たして何日間、飲まず食わずで無限書庫に籠っていたのだろう。もはやミイラの域だ。

ミイラ化し掛けているユーノをプレシアへと引き渡すと、クロノはふぅと小さく息を吐いた。
これでプレシアに対する用事の一つは完了した。あとは彼女たちに警告し、二人の少女と出会うだけ。

内心でプレシアへと告げる連絡事項を思い出すと、クロノは彼女に注意を促す。
彼女に伝えれば、自然と彼女の娘や他の少女にも連絡は届くだろう。面倒が無くて助かる。

「ここ最近、この世界の周辺で魔物やデュエリストが襲われると言う被害が多発している。
念のために、注意していてくれ。……と言っても、デバイスが無ければ逃げるのも無理か……」

クロノは先ほど、自らが口に出した言葉に僅かに苦笑した。
彼女たちはデバイスを持っていない。なにせ没収したのは自分なのだから。

念のために、局員に支給されているデバイスを支給しようか考えたが、すぐにその考えを打ち消す。
いくら安全のためとはいえ、一般市民に武器を渡してはダメだろう。
クロノはふぅと小さなため息を漏らす。

「その事件は……」

「ロストロギア、闇の書……。
アナタも聞いたことはあるでしょう？」

「えぇ……」

プレシアが訊ねた質問に、クロノは静かに答える。思い出すのはイヤな記憶だ。
クロノの父親は管理局に務める局員で、とある事件で殉職している。
その事件こそが闇の書事件。

父親の友人であるギル・グレアム提督が父親の最期を見届けたが、釈然としない気持ちは残ったままだ。
それに加え、闇の書はいくら破壊しても転生し、生き延びてしまう。
結局、父親の死は無駄死にだったと言う訳だ。

内心で湧き上がった闇の書への憎しみに胸を燻らせながら、クロノは気持ちを落ち着かせるために深呼吸を行う。
一般人の前で取り乱すのは執務官としてのプライドが許さない。絶えず冷静に、クールに物事を推し進めなくては。

「話は変わるのだが、ユーノ・スクライアに何を依頼していたんだ？
此処までの干からび様は、普通とは考えられないんだが……」

そして気を落ち着かせたクロノは、何をユーノに調べてもらってい

たのか訊ねる。
ユーノの探査魔法は優秀で、是非とも無限書庫で闇の書についての資料を集めて欲しいと思っていたところだ。

彼がいかに優秀かは、無限書庫で干からびていた彼の脇に積まれていた資料の山が物語っている。
クロノですら無限書庫であれだけの資料を集めるには数週間と掛かるはずだ。だが、彼はほんの三日で集めた。

中にはデュエルモンスターズに関する資料もあったが、一個人が調べられる容量と早さを上回っている。
是非とも管理局に勧誘し、無限書庫で働いてもらいたい。無限書庫が使えるようになれば大分手間が無くなる。

「……闇の書について、調べてもらっていたのよ」

「！」

「私の娘の友達が、闇の書の関係者に襲われてしまって、ね……」

プレシアから告げられた言葉に、クロノは息を呑んだ。まさか既に襲われていたとは。
詳しく話を聞きだせば、襲われたのは以前顔を合わせた事のある少女――高町　なのはだと言う。

闇の書の守護騎士とデュエルを行い、敗北。リンカーコアから大量の魔力を奪われてしまった様だ。
だが、幸いにも命に別状は無いらしい。その報告にクロノは安堵の

息を吐く。だが、すぐに己を戒めた。

今回は命に別状が無かったから良かったものの、下手をすれば死んでいたかもしれないのだ。

それに一般人が襲われたのも見過ごせない。早急に守護騎士たちを捕え、事件を収束させねばいけないのだから。

「なら、襲われた友人に合わせて欲しい。事情を聞きたい」

だからクロノは、決意に満ちた表情でプレシアへと視線を向けた。

※

そのドラゴンは、彼女に手渡される以前から、彼女のことを見つめ続けていた。

母親と楽しそうに笑う顔。料理に失敗して、悲しそうに俯く顔。からかわれて怒る顔。

眼を瞑れば、現在のマスターのころころと変わる表情を思い出す事が出来る。

そのマスターである少女が今、決意に満ちた表情で場に伏せていたカードを発動した。

「伏せカードオープン！　≪バスター・モード≫！！」

母親との絆である自分を墓地へ送らせないため。相手に勝ち、友人を蝕む病の正体を掴むため。

目前に迫る橙色の体色をしたドラゴンが、手に持った魔剣を振り被る。素早い斬撃が己に叩きこまれる。

その想いに応える様に、マスターが発動した伏せカードの効力を発動する。

今の己の姿は戦闘に特化した姿ではない。その姿を、カードの力を借りて再構成する。

両手両足には蒼い鎧が装着され、翼は力強く羽を広げる。

そして胸に埋め込まれた蒼い宝石。その宝石から止め処ない力が溢れ出る。

『■■■■～～ッ！！』

全身を戦闘に特化させた姿へと変化させると、そのドラゴンは雄叫びを轟かせた。

今の自分の身体からあふれ出るパワーの量が違う。今の自分ならば、きっとマスターを助けられる。

それを確信したドラゴン――スターダスト・ドラゴン／バスターは、眼前に立ち塞がるドラゴンを睨みつけた。

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫を特殊召喚！！」

※

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫だとッ！？」

突如として場に出現したドラゴンの姿に、シグナムは驚愕の表情を浮かべた。

まったく聞いたことのないカード。そのカードが今、彼女の前に出現している。

その身を蒼い鎧で固めたドラゴンは、敵意に満ちた視線をシグナムのドラゴンへと向けている。

相手のカードの効果によって戦闘が巻き戻され、攻撃はキャンセルされた。シグナムはホッと安堵する。

「（≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫……。一体、どんな効果を……？）」

シグナムが攻撃を躊躇った理由の一つに、相手モンスターのモンスター効果が分からないと言う点があげられる。
スターダスト・ドラゴン事態は以前に何度かデュエルをして効果を把握しているが、／バスターは初めて出会うモンスター。

故に、相手の効果が分からず攻撃を躊躇ったのだ。厄介なモンスター効果を持っていたら不味い。
しかし、現在シグナムの場には彼女の相棒たるレヴァテイン。そして切り札のヴァジュランダが居る。

レヴァテインは戦闘破壊は無効であり、破壊される可能性はヴァジュランダのみ。
ならばヴァジュランダで／バスターを攻撃し、相手モンスターの効果を把握すると決めた。

「ならば、まずは邪魔なトークンを破壊するか。行くぞ、テスタロッサ！
≪ドラグニティアームズ―レヴァテイン≫で≪ドッペル・トークン≫を攻撃！」

「ッ！　トラップ発動！　≪ガード・ブロック≫！
戦闘によるダメージを０にし、デッキからカードを１枚ドロー！」

フェイト手札０↑１

「（攻撃力３０００のモンスターを放置してもおけんか）」

「続けて≪ドラグニティナイト―ヴァジュランダ≫で≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫を攻撃！」

さらに攻撃宣言時、≪収縮≫を発動！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の攻撃力を半分にする！」

「させない！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の効果発動！　自身をリリースすることで魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊する！」

「なっ！？　魔法・罠に続きモンスター効果までッ！？」

スターダスト・ドラゴン／バスター
星１０／風属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
このカードは通常召喚できない。
「バスター・モード」の効果及び
このカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、
このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、
この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、
自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」１体を特殊召喚する事ができる。

フェイトの告げた説明を聞き、シグナムは驚きで眼を見開いた。何だ、その効果は。
魔法・罠の発動と効果を無効にするだけでなく、あまつさえ効果モンスターの効果まで破壊するとは。

姿を変えたスターダストがその場で光の粒子へと立ち上り、それと同時にシグナムが発動した魔法カードが光の粒子へと変わる。
これにより、効果を発動した収縮は無効にされ、破壊。シグナムの場に残されたのは、レヴァテインとヴァジュランダ。

「ならばトークンを破壊する！　ヴァジュランダでドッペル・トークンを攻撃！」

「くぅっ！　う、受けるしかない……！」

フェイトＬＰ４０００→２５００

「私はターンエンドだ！」

「シグナムのエンドフェイズ時、自身の効果でリリースされた≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫は場に舞い戻る！」

キラキラと光りの粒子が、再びスターダスト・ドラゴン／バスターを形作った。
墓地から再びフィールドに舞い戻ったドラゴンは、周囲に轟かんばかりの咆哮をあげる。

シグナムはその様子を苦々しげに見つめていた。攻撃力、そして効

果共に強化されたスターダスト。
破壊するのは並大抵の話ではない。一体どの様にしてスターダスト・ドラゴン／バスターを破壊すれば良いのか。
打開策が見つからず、シグナムはターンを終了するほか無い。

シグナム手札２
場　レヴァテイン　光と闇の竜（装備カード扱い）　ヴァジュランダ　ファランクス（装備カード扱い）

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札１→２

「私は手札から≪調律≫を発動！
デッキから「シンクロン」と名のついたチューナー一体を手札に加える！
私はデッキから≪ジャンク・シンクロン≫を選択！　そしてデッキトップを墓地に送ります！」

フェイトは己のデッキから、愛用しているチューナーモンスターを手札に加える。
そしてデッキトップから墓地に送られたのはボルト・ヘッジホッグ。
思わずフェイトは笑みを浮かべた。

手札、伏せカード、そして場のモンスター。全てが最高のコンディション。
これならば、今度こそシグナムから勝利をもぎ取ることが可能とな

る。

「さらに≪戦士の生還≫を発動！　墓地から戦士族モンスター一体を手札に加えます！
　私は墓地の≪ドッペル・ウォリアー≫を手札へ！」

フェイト手札２

「そして手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！
　効果で墓地から≪ボルト・ヘッジホッグ≫を場に特殊召喚！」

「レベルの合計は５……。
　しかし、テスタロッサの手札には≪ドッペル・ウォリアー≫がある……。これは、不味いな……」

「さらに墓地からの特殊召喚に成功したので、手札から≪ドッペル・ウォリアー≫を特殊召喚！
　そして場のレベル２≪ボルト・ヘッジホッグ≫とレベル２≪ドッペル・ウォリアー≫に
　レベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！」

シグナムの懸念していた予想はあたり、フェイトの場を埋め尽くさんばかりのモンスターが現れる。
場のスターダスト・ドラゴン／バスターを除いても、レベルの最大合計は７。厄介なモンスターが呼ばれるだろう。

しかし、この場合はシグナムの予想が外れた。フェイトは場のドッペル・トークンをシンクロ素材としなかったのだ。

これは何かの意図があるのか。シグナムは僅かな不安を覚えながらも、フェイトの場に現れた三つのリングを睨みつける。

「集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！　光さす道となれ！
シンクロ召喚！　孤高の狩人、≪ジャンク・アーチャー≫！」」

「ジャンク……アーチャー……？」

そして三つのリングを極太の光線が打ち抜き、フェイトの場に新たなモンスターが現れる。
身の丈ほどある大きな弓を手に持ち、全身を橙色の鎧に身を包んだ弓戦士。

ジャンク・アーチャーは主人の前に現れると、鋭い視線をレヴァテインとシグナムに向けた。
モノアイで構成されたその瞳は無機質で、何の感情も読み取ることも出来はしない。

ジャンク・アーチャー
星７／地属性／戦士族／攻２３００／守２０００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、相手フィールド上に存在する
モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターをゲームから除外する。
この効果で除外したモンスターは、
このターンのエンドフェイズ時に同じ表示形式で相手フィールド上に戻る。

「≪ジャンク・アーチャー≫の効果発動！　相手モンスター一体をゲームから除外します！
　ディメンション・シュート！」
「くっ！　ヴァジュランダが……！」

フェイトがジャンク・アーチャーに指示を出すと、ジャンク・アーチャーが弓を構える。
その対象はヴァジュランダ。本来ならばレヴァテインにしたいが、スターダスト／バスターが居なくなってしまう。
それだけは是非とも避けたい事態。なのでフェイトは効果の対象をヴァジュランダに選んだ。
シグナムもフェイトの狙いを理解しているのか。苦々しげな表情でジャンク・アーチャーを見つめる。

「バトル！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫で≪ドラグニティアームズ・レヴァテイン≫に攻撃！
　アサルト・ソニック・バーンッ！」
「くぅううっっ！！　レヴァテイン！！」

シグナムＬＰ２６００→２２００

フェイトの指示を受け、スターダスト・ドラゴン／バスターが攻撃

に移る。
口の中に集められたブレスは以前の比ではなく、口の中から光が漏れ出ている。

そして集められたブレスが一直線にシグナムの場のレヴァテインへと放たれた。
再びレヴァテインはブレスを防ごうと剣を掲げるが、吐き出したブレスの圧力が凄まじく、剣は折れてしまう。

すぐさまレヴァテインに装備された光と闇の竜が効果を発動し復活を果たそうとするが、フェイトはそれを許さない。

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の効果発動！
自身をリリースすることで、魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊します！
対象は墓地の≪光と闇の竜≫！！」

フェイトの場のスターダスト・ドラゴン／バスターが再度リリースされる。
それにより、墓地から復活を果たそうとしていた光と闇の竜の効果が無効にされ、破壊。

結果として光と闇の竜。ならびにドラグニティアームズ・レヴァテインの復活は阻止されてしまった。
得意とするコンボを止められてしまい、シグナムの額に冷や汗が流れ出る。まさか、ここまで一方的とは。

「くっ！　復活を阻止されたか！」

「そして、これで止めです！
≪ジャンク・アーチャー≫でシグナムにダイレクトアタックッ！」

そしてシグナムの場ががら空きになったことを確認すると、フェイトは控えていたもう一体のモンスターに指示を出す。
今か今かと指示を待ち侘びていたジャンク・アーチャーは持っていた弓に矢を番える。そして眼を瞑り、シグナムに狙いを定めた。

自身に向けられる弓矢にシグナムは悔しそうに眉を顰めるが、すぐに敗北を受け入れた様だ。
ガクリと顔を俯かせ、自身へ放たれようとしている矢の一撃を待ち望んでいる。

その様子にフェイトは躊躇いを覚えるが、未だ相手のライフポイントを０にしていないのだ。
この状態でデュエルを中断するのは相手に失礼にあたる。シグナムに対して僅かな罪悪感を覚えながら、彼女は指示を出した。

「スクラップ・アローッ！！」

直後、ジャンク・アーチャーの放った一本の矢が、シグナムの身体を捉えた。

シグナムＬＰ２２００→０

四話　「バスター・モード」（後書き）

ルール指摘があったので修正しました。
また、ジャンク・バーサーカーからアーチャーへと変更しました。
だけどフェイト無双は相変わらず……。

五話　「進みゆく物語」（前書き）

今回はなのはＶＳヴィータです。
こっちも全体的になのは無双な感じがする……。

五話　「進みゆく物語」

～海鳴市　某所～

「行くよ、ヴィータちゃん！」

「あぁ、来いよ！」

フェイトとシグナムが別の場所でデュエルをしていた頃。
なのはとヴィータによるデュエルもまた、別の場所で行われていた。

「――決闘（デュエル）！！」

なのはＬＰ４０００
ヴィータＬＰ４０００

「先攻はアタシだ、ドロー！」

ヴィータ手札５→６

「アタシは手札から≪テラ・フォーミング≫を発動！
デッキからフィールド魔法を一枚、手札に加えさせてもらうぜ！」

テラ・フォーミング
通常魔法

自分のデッキからフィールド魔法カード1枚を手札に加える。

「アタシが手札に加えるのは≪歯車街（ギア・タウン）≫！
そして≪歯車街≫を発動！」

ヴィータが腕に着けている決闘盤へとカードをセットすれば、なのはとヴィータの周囲が変化した。
彼女たちを取り囲むのは大量の機械で構成された町並み。無人の歯車で出来たその街は、何処か不気味さを漂わせる。

「そして手札から≪サイクロン≫を発動！
さっき発動した≪歯車街≫を破壊する！」

「くっ……！
1ターン目から≪古代の機械巨竜≫……！」

「デッキから≪古代の機械巨竜≫を特殊召喚！」

彼女たちを取り囲んだ歯車の街は、ヴィータの魔法カードによりすぐに破壊される。
そして破壊されていく街の中から一体の巨大なドラゴンが姿を現した。

全身を歯車や鉄で構成し、不気味な色を宿らせるその瞳。
これこそがアンティーク・ギアデッキにおける切り札的存在、古代の機械巨竜。

「カードを伏せて、ターンエンドだ！」

ヴィータ手札６→３
場　古代の機械巨竜　伏せ×１

「私のターン、ドロー！」

なのは手札５→６

「私は手札から≪太陽の神官≫を特殊召喚！」

なのはが自身の決闘盤にカードをセットする。現れるのは異国の神官だった。
ヴィータはなのはが召喚したモンスターを確認すると、僅かに口元をニヤリと歪める。

以前はそのモンスターに続き、氷結界の風水師と言うモンスターで彼女の切り札を呼び出した。
今回も恐らくそうなるのだろう。果たして彼女は、いかなる手段で自分のドラゴンを破壊するのか。

ヴィータは僅かな期待を寄せる。

「そして手札から≪氷結界の風水師≫を召喚！
場のレベル５≪太陽の神官≫とレベル３≪氷結界の風水師≫をチューニング！」

なのはの背後を三つのリングが飛び回り、その中心部分を五つの星が整列する。
そして整列したその五つの星たちを、一筋の極太の閃光が打ち抜いた。激しい光が眼を覆う。

しかしヴィータは眼を庇うこと無く、眼の前で相対している少女を見つめていた。
さぁ、彼女の切り札であるレッド・デーモンズ・ドラゴンの召喚を許した。此処からどう逆転するのか。

「王者の鼓動、今ここに列をなす……！　天地鳴動の力を見せてあげる！
　シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

閃光の中から現れたのは、やはり以前と同様のドラゴンだった。
王者の風格を持つそのドラゴンは、眼前にそびえるヴィータのドラゴンを睨みつける。

以前に敗北したことを覚えているのか。
その瞳には並々ならぬ敵対心が現れていた。

「そして私は手札から≪収縮≫を発動！
　ヴィータちゃんの≪古代の機械巨竜≫の攻撃力を半分にするよ！」

「くっ！」

「そしてバトルフェイズ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪古代の機械巨竜≫に攻撃！　クリムゾン、ヘルフレアァアアアアッッ！！」

「≪古代の機械巨竜≫ッ！！」

なのはの発動した魔法カードの効果により、攻撃力が半減したヴィータのドラゴンに紅蓮のドラゴンが迫る。
その手に灼熱の炎を纏わせて、一気に攻撃力の半減したドラゴンを打ち抜いた。瞬間、古代の機械巨竜は破壊される。

破壊された衝撃がヴィータの元まで及ぶが、なのはのデュエルディスクはデバイスではない。
そのため、ヴィータに魔力ダメージは与えられず、ただの衝撃波がヴィータを襲うに留まった。

ヴィータＬＰ４０００→２５００

「さらにメインフェイズ２に移行！　私は手札から≪紅蓮魔竜の壺≫を発動！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫が場に居る時、私はデッキからカードを二枚ドロー出来る！」

なのは手札３→４

自身の発動した魔法カードの効果により、なのははデッキからカードを二枚ドローした。
すると先ほどの手札よりも、一枚だけ手札が多くなる。手札が増えること、それは望むところだった。

以前までは手札がデュエル中に尽きることが多々あり、苦戦を強いられることもあった。
しかし、レッド・デーモンズ・ドラゴン専用のドローソースを入れたことにより、これは解消される。

そして今、ドローしたカード。これこそがレッド・デーモンズ・ドラゴンを新たな姿へと進化させるカードだった。
それに加え、自らの状況を一気に有利にさせるカードすら飛び込んでくる。デッキが応えてくれている。それを実感できた。

「カードを三枚伏せて、ターンエンド！」

なのは手札１
場　レッド・デーモンズ　伏せ×３

「アタシのターン、ドロー！」

ヴィータ手札３↓４

「アタシは手札から≪沼地の魔神王≫を捨て、デッキから≪融合≫を手札に加えさせてもらう！」

沼地の魔神王
星３／水属性／水族／攻　５００／守１１００

このカードを融合素材モンスター1体の代わりにする事ができる。
その際、他の融合素材モンスターは正規のものでなければならない。
また、このカードを手札から墓地へ捨てる事で、
デッキから「融合」魔法カード1枚を手札に加える。

「≪融合≫をサーチされた……！　不味い！」

「さらに伏せカードオープン！　≪リビングデッドの呼び声≫！！
このカードの効果で、アタシの墓地から≪古代の機械巨竜≫を場に特殊召喚！」

ヴィータがバッと、勢いよく腕を振り上げた。それと同時、場に一体のドラゴンが戻る。
依然として不気味な色を宿らせたその瞳は、なのはとレッド・デーモンズ・ドラゴンを見据えていた。

「さぁ、行くぜ！　≪融合≫を発動！
場の≪古代の機械巨竜≫と手札の≪古代の機械巨人≫
≪古代の機械兵士≫を墓地に送り……降臨せよ！　≪古代の機械究極巨人≫！！」

古代の機械兵士
デュアルモンスター
星４／地属性／機械族／攻１８００／守　５００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、
通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとし

て再度召喚する事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●このカードが攻撃する場合、
相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠カードを発動できない。

場と手札。三枚のカードをも消費して場に特殊召喚されたのは、小山ほどもある体躯のゴーレムだった。
全身にある歯車が悲鳴を上げながらも、ゴーレムを動かしている様は暴君そのもの。

圧倒的な存在感を持つモンスターの登場に、なのはは冷や汗が頬を伝うのを感じた。
だが、すぐに弱気になった自分を叱咤する。ここで負ければ、また以前の二の舞いだ。

大切な友達を、仲間を助けるには、このモンスターを破壊するしか道は無い。

「バトルフェイズ「伏せカードオープン！　≪威嚇する咆哮≫！！」な――ッ！？」

威嚇する咆哮
通常罠
このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

そしてバトルフェイズに入ろうとしたヴィータの声を遮り、なのはは伏せていたカードを発動させる。

そのカードはそのターンのみ、相手の攻撃宣言を封じると言う妨害型の罠カード。思わぬカードにヴィータは驚く。

てっきり効果無効化系の速攻魔法カード、または罠カードを使うかと思っていたが、攻撃を妨害するカードだとは。

古代の機械究極巨人の効果で相手の魔法・罠を封じられるのは攻撃するとき。バトルフェイズ以前に発動されれば攻撃できない。

「チッ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

ヴィータ手札０

場　古代の機械究極巨人　伏せ×１

「（アタシが今伏せたカードは≪リミッター解除≫……。攻撃してきたら、テメーの負けだぜ！）」

リミッター解除

速攻魔法

このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。

この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

ヴィータは自身が今伏せたカードを思い起こし、ニヤリと内心でほくそ笑む。

彼女が伏せたカードは、自身の場の機械族モンスター全ての攻撃力を倍にするという強力なカード。

もしも相手が攻撃力の増減カードを使ってきても、このカードによ

り容易に危機を脱却出来る。
果たしてなのははこの罠をどう回避するのか。ヴィータは内心の笑みを表に出さぬよう、必死に表情を固める。

「私のターン、ドロー！」

なのは手札1→2

「ヴィータちゃん、見せてあげるよ」

「あん？」

デッキからカードをドローしたなのはが、キッと真剣な眼差しをヴィータに向ける。
とうとう本命のご登場か。一体どのようなモンスターなのか。ヴィータは内心で興奮を抑える。

「ヴィータちゃんに勝って、私ははやてちゃんを助ける……！
だから、力を貸して！　伏せカードオープン！　≪バスター・モード≫！！」

バスター・モード
通常罠
自分フィールド上に存在する
シンクロモンスター1体をリリースして発動する。
リリースしたシンクロモンスターのカード名が含まれる
「／バスター」と名のついたモンスター1体を

自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

そしてヴィータが視線を向けた先で、なのはが決意する様に小さく言葉を紡いだ。

それと同時に開かれる伏せカード。それはヴィータが初めて見る罠カードの姿だった。

「なっ――――!?」

なのはが発動した罠カードの効果によってか、レッド・デーモンズ・ドラゴンの姿が炎に包まれる。

一体なにを。そうヴィータが内心で思ったとき、天に届きそうなほどの咆哮がなのはの場から上がった。

慌てて咆哮が聞こえた方へと視線を向ければ、そこには姿を大きく変えたレッド・デーモンズの姿が。

あの姿は一体何だ。そう思うと同時、新たな姿のレッド・デーモンズから圧倒的な力を感じる。その圧力はまさに、破壊の権化。

「私は場の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫をリリース！
そしてデッキから≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫を特殊召喚！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター
星１０／闇属性／ドラゴン族／攻３５００／守２５００
このカードは通常召喚できない。

「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが攻撃した場合、ダメージ計算後に
このカード以外のモンスターを全て破壊する。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、
自分の墓地に存在する「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
１体を特殊召喚する事ができる。

「そして私は≪魔導騎士　ディフェンダー≫を召喚！
さらに伏せカード≪ナイトメア・デーモンズ≫を発動！」

魔導騎士　ディフェンダー
星４／光属性／魔法使い族／攻１６００／守２０００
このカードが召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大１つまで）。
フィールド上に表側表示で存在する魔法使い族モンスターが破壊される場合、
代わりに自分フィールド上に存在する魔力カウンターを、
破壊される魔法使い族モンスター１体につき１つ取り除く事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

ナイトメア・デーモンズ
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースして発動する。
相手フィールド上に「ナイトメア・デーモン・トークン」
（悪魔族・闇・星６・攻／守２０００）３体を攻撃表示で特殊召喚する。
「ナイトメア・デーモン・トークン」が破壊された時、

このトークンのコントローラーは1体につき８００ポイントダメージを受ける。

「このカードの効果により、私は≪魔導騎士ディフェンダー≫をリリース！
そしてヴィータちゃんの場に「ナイトメア・デーモン・トークン」3体を攻撃表示で特殊召喚！！」

なのはの発動した罠カードの効果により、ヴィータの場に奇妙な人影を模したトークンが現れる。
その何れも人を小馬鹿にした様な表情を浮かべており、ヴィータとしては苛立ちを覚えるしかないトークンだ。

だが、問題はなのはの場に存在するレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの存在。
攻撃力は元の攻撃力である３０００を超えている。さらに何らかの効果も付与されたはず。

一体どんな効果を持っているのか。
厄介なモンスターの登場に、ヴィータは内心で舌打ちする。

「バトルフェイズ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫で「ナイトメア・デーモン・トークン」を攻撃！」

「ッ！？　自分で召喚したトークンを攻撃だと！？」

「エクストリーム・クリムゾン・フォースッ！」

ヴィータがなのはの謎の行動に戸惑うのも束の間。攻撃の指示を受けたドラゴンが攻撃に移る。
その手に炎を。元の形態よりも倍以上にパワーアップした炎を手に、ドラゴンの攻撃がトークンへ向かう。

その様子を、ヴィータは憎々しげに見つめるしかない。トークンでは、護る事が出来ないからだ。
ヴィータの伏せているリミッター解除の効力は機械族にしか効果が及ばない。悪魔族では、無意味になる。

そしてレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの攻撃がナイトメア・デーモン・トークンに炸裂。
攻撃を受けたナイトメア・デーモン・トークンは炎に包まれ、ヴィータに超過ダメージを与えられる。

「ぐぅううううっっ！！」

ヴィータＬＰ２５００→１０００

「けど、これ以上は！」

超過ダメージにより、ライフが残り僅かに減少したヴィータ。だが、その眼には未だ闘志が宿っている。
相手はトークンを攻撃してチクチクとダメージを与えるつもりだろうが、そうはいかない。

すぐさま古代の機械究極巨人でなのはのレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターを破壊する。
そう思い視線をなのはへと向けるが、返ってくるのはニヤリと口元に笑みを浮かべているなのはの姿。

その様子はまるで、そんな考えなどお見通しだ。と言っている様で。
ヴィータは凄まじい焦燥感を覚える。いけない。このままだと、良くない事が起こる。

そして、それは実現した

「ヴィータちゃん、これで終わりだよ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫の効果発動！
このカードが攻撃したとき、ダメージ計算後にこのカード以外のモンスターを全破壊する！」

「な――ッ！？」

「これが王者の鉄槌！　クリムゾン・ジ・エンドッ！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの口内から、灼熱のブレスが吐き出される。
吐き出されたブレスはヴィータの場のナイトメア・デーモン・トークンと古代の機械究極巨人を消し去った。

まさか。こんな効果が付与されていたとは。ヴィータはがら開きになった自分の場を見てそう思う。

レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果は守備表示モンスターを攻撃した際、守備表示モンスターを全破壊する効果。

だが、／バスターへとモードチェンジしたことにより、効果もまたモードチェンジしたと言うことか。

圧倒的な破壊力。それを実感し、ヴィータは口元を歪める。だが、まだだ。まだ勝機は残っているはず。

「アタシの場の≪古代の機械究極巨人≫が破壊された時、場に≪古代の機械巨人≫を召喚条件を無視して特殊召喚！」

破壊された古代の機械究極巨人を視界に捉えながら、ヴィータはモンスターを特殊召喚する。

そう。まだ自分には古代の機械巨人がいる。まだ、勝機は失われていない。

そしてヴィータの場に古代の機械巨人が現れる。

しかし、なのはは未だ、余裕の表情を崩してはいない。

「ヴィータちゃん。

≪古代の機械巨人≫が特殊召喚された後に、「ナイトメア・デーモン・トークン」の効果処理が入るよ」

「「ナイトメア・デーモン・トークン」の！？」

「そう。「ナイトメア・デーモン・トークン」の効果は破壊された時、

そのトークンのコントローラーに８００ポイントのダメージを与えるの」

「！　と、言うことは……」

「≪古代の機械巨人≫が場に居てもヴィータちゃんの、負けだよ」

ヴィータＬＰ１０００→０

※

「……」

人気のない八神家のとある一室。はやての私室に、その人影はあった。

その身に纏うのは青と白いカラーの何処か制服に見える服。顔を覆うのは白い仮面。

その人影は数週間ほど前からはやての自宅を監視していた者で、今は堂々と室内に侵入している。

実際、この部屋の主である少女はリビングで唸りながらデッキの調

整に勤しんでいる。わざわざそれを狙った。

「……これで……」

仮面を付けた人物は室内にあった目当ての物――闇の書を手に取ると、片方の手を闇の書に向ける。
すると向けた手の平から、黒い粒子が闇の書へと注入されていくのが分かった。その様子を、仮面を付けた人物は見つめる。

これを行えば、闇の書は破壊できると言う。仮面を付けた人物の心情としては納得しづらい物がある。
しかし、彼らにこれを命じた主はこれで闇の書を破壊できると思っているのだ。実際、確証もあるらしい。

彼らの主に力を与えたのは、別の世界からやってきたという自称、神。
その神は彼らの主に力を与え、主の望みを叶えさせようとしている。

だが、胡散臭さが止まらない。神を自称する存在が、無償で他人に施しを与えるだろうか。
もしも他人に無償で力を提供する存在がいるとするならば、それはきっと――悪魔に違いない。仮面を着けた人影はそう思う。

「……ふぅ」

と、考え事をしている間に、闇の書へ光の注入が完了したようだ。

闇の書が鈍い光を放ち、闇の書の力を神が掌握したことを証明する。
これで後は、闇の書を覚醒させるだけ。そうすれば、彼らの望みは成就する。
願わくばあの自称神の言葉が真実であることを願いながら、仮面を付けた人物は室内から姿を消した。

※

「だー！　負けたぁあああああッッ！！！」

なのはとのデュエルを終えたヴィータは、地面に寝転がるとバタバタと暴れ始めた。
両手や両足を無茶苦茶に動かし、自分不機嫌ですと周囲にアピールしている。その姿は子供の癇癪。

地面の上で「うおー！」やら「がおー！」と騒いでいる様子のヴィータに、なのはは苦笑いを禁じえない。
結局、いくら守護騎士と言えども心はデュエリストになってしまった様だ。負けて悔しがるのも無理は無い。

しかし、そろそろ暴れるのを止めてもらわねば。
何時までもヴィータの我がままを許すわけにもいかない。

「えぇっと、それでヴィータちゃん。はやてちゃんのことなんだけれど……」

「ッ。負けちまったからな。仕方ねーか」

なのはの言葉に、ヴィータは舌打ちするとともに起き上がる。負けたのを根に持っているらしい。
だが、どうやらはやての病について話してくれるようで。地面に胡坐を掻きながら、ヴィータは説明を行う。

シャマルの調査により、はやてを蝕んでいるのが闇の書の呪いだと判明した。
その呪いとは、一定期間の間に蒐集が行わなければ、主のリンカーコアを侵食する呪い。

これが原因で、はやての足が原因不明のマヒを起こしていると言う。
ヴィータのその言葉に、なのはは衝撃を受けた。はやての足が動かない原因が、闇の書だったなんて。

「それで、治すにはどうしたら――」

「その前に。そこに隠れてるヤツ、出て来い」

「え！？」

なのははヴィータに迫りながら、はやての治療法を訊ねる。しかし、それは遮られた。
視線をなのはの背後へと向けながら、ヴィータは鋭い視線を向ける。するとガサガサと草が揺れた。

誰かいる。そう思ったなのはは慌てて立ち上がり、腕に装着したデュエルディスクを構える。
そしてなのはとヴィータが臨戦態勢を敷いていると、草むらを揺らしながら一人の少年が顔を出した。

背丈はなのはたちと同じか少し高いくらい。切りそろえられた黒い髪は、寝癖などで乱れてはいない。
なのはは草むらから姿を見せた少年――クロノの姿に心当たりがあった。思い出すのは数カ月ほど前のこと。

海上で遭遇し、集め終えたジュエルシードを預かってもらった時空管理局の執務官。
その執務官がどうしてこんな場所に居るのか。なのはは訳が分からず、眼を白黒させる。

「く、クロノ君!?」

「テメー。盗み聞きとは良い度胸じゃねーか！」

「済まない。聞くつもりは無かったんだ」

ヴィータがクロノを射殺しそうな視線で睨みつける。
しかしクロノもこの様な荒事に慣れているのか。手を上げるだけで遮った。

なのはは二人のやり取りに冷や汗を流すが、場の空気が落ち着いたことに安堵する。
そして何故、この場にクロノが居るのか。それを疑問に思い、彼女はクロノへと訊ねた。

「クロノ君、どうしてここに？」

「君が襲われたと言う、守護騎士の特徴を訊ねに来たんだ。
もっとも、その必要は無くなったみたいだけど……」

「ッ！　ま、待って！」

クロノの鋭い視線が、傍らで胡坐を掻いているヴィータへと向けられる。
ヴィータもまた、鋭い視線をクロノへと向けている。その様子はまさに一触即発。

まず間違いなく危ないことが起こると判断したなのはは、慌てて二人の間に入ると二人を抑える。
するとヴィータは気が削がれたのか。クロノへ向けて舌打ち一つ。
クロノはそんなヴィータを気にとめない。

「それよりも、その話は本当なのか？

一定期間闇の書のページを蒐集しないと、主のリンカーコアが侵食されると言うのは」

「間違いねーはずだぜ。シャマルがそう言ってたからな」

クロノは地面の上で剥れているヴィータに訊ねる。
どうやらヴィータはもう、隠すことを諦めているらしい。

だが、それも仕方のない事だろう。隠していた秘密を知られてしまったのだ。
しかし、それでも本当に隠していること――闇の書の主について喋らないのは流石と言うところか。

クロノはヴィータから事情を訊ねると、難しい顔で顎に手を当てた。
どうやら何事か考え込んでいるらしい。その様子をなのはとヴィータは見つめる。

そして少し時間が経った頃、クロノが俯かせていた顔を上げた。

「なら、急いで闇の書についての資料を集めなければ。
闇の書の主の命がかかっているんだ。時間は少しでも惜しい」

「！　助ける、つもりなのか……？」

「当然だ。闇の書の主には、生きて罪を償ってもらう」

そしてクロノの口から飛び出した言葉に、ヴィータが驚いた表情を

浮かべる。
まさか、闇の書の主を助けようとするとは。てっきり、即逮捕に至ると思っていた。

だが、クロノの言い分を聞いて納得する。罪は生きて償われなくてはならない。
それが罪に対する罰なのだから。しかしヴィータはそれに待ったをかける。悪いのは主ではない。

「な、なら！　逮捕するのはアタシ達にしてくれよ！」

「ヴぃ、ヴィータちゃん？」

「悪いのはアタシ達なんだ！
はや……主の指示も聞かずに、勝手に蒐集をしてるアタシ達なんだ！」

ヴィータはクロノに詰め寄りながら、心の底から訴えた。
そう。今回の蒐集に、彼女たちの主である八神　はやての意思はそこに無い。

ただ、自分たちが勝手に魔力を集めているだけなのだ。はやてに罪は無い。
必死にそうヴィータはクロノに説明するが、クロノは難しい表情を浮かべる。

「それについては、後日改めて捜査、及び聞き取り調査が必要だ。

現段階で、主に罪があるかどうかの判断は、僕には出来ない」

「なら――――！」

「あぁ。まずは一刻も早く、闇の書の主のリンカ―コアへの侵食を抑えなくちゃいけない」

※

「なのはちゃんもフェイトちゃんも、何処行ったんやろなぁ？」

「さぁな。ヴィータやシグナムも一緒だったから、デュエルでもしてるんじゃねぇか？」

八神家のリビングでは、鬼柳とはやてが互いのデッキを調整しながら会話をしていた。

会話の内容は、少し前にはやての自宅を飛び出して行った二人の少女とはやての家族である二人。

鬼柳からの返答に、それもそうかと納得すると、はやては自らのデッキに視線を落とす。

そのデッキは鬼柳との調整を重ね、徐々に勝ち星が増えて行っている自慢のデッキなのだ。

「それにしても、やっぱり「旋風ＢＦ」は潰えてしまったんやろか……」

「新しい制限改訂で、「旋風ＢＦ」は大打撃だからな」

だが、そのメインデッキも改訂によって大打撃を受けた。
まず大会上位で当たる様なデッキと、対等に闘うのは難しいだろう。
旋風ＢＦの生命線とも言える黒い旋風は制限カードに指定され、ＢＦ専用のオネストとも言えるカルートは制限にされた。
これによりＢＦのカード群でのビートダウンが難しくなり、はやての使うブラックフェザーは大幅な弱体化を余儀なくされたのだ。

しかしはやてもただでは転ばない。新たなデッキの可能性として、墓地ＢＦなるデッキを開発した。
それはヴァーユやシロッコなどのモンスターを墓地から除外し、疑似シンクロ召喚するのに特化したデッキ。

これならば黒い旋風やカルートの制限の影響もそれほど受けない。
はやては現在墓地ＢＦへと組みかえるため、カードの相性を試していたのだ。

「ライトロードと混ぜて「ＢＦロード」って言うのもえぇなぁ。相性も悪くないし」

「確かにな。ライトロード各種との相性はかなり良い」

はやてが何ともなしに手を取ったのは、以前から相性を確かめていたカード群。
そのカード群――ライトロードとは、エンドフェイズ時に数枚のカードをデッキトップから墓地に落とす効果がある。

これにより凄まじい速度で墓地が肥えて行き、墓地に落としたシロッコやヴァーユで疑似シンクロするのだ。
他にもライトロードとの共有により、裁きの龍と言うライトロードの切り札とも共存できる。総じて相性は良いのだ。

しかし、弱点もある。ライトロード。並びにＢＦは長期戦に弱いのだ。
前者はデッキ切れ。後者は勢いが止められるせいで。なのでどちらも短期決戦用のデッキである。

果たしてライトロードと混ぜてＢＦロードにするべきか。
それとも王宮の弾圧を積んだ弾圧ＢＦにするか。はやては悩む。

そして――

「ッ！？　ぐ、ぎぃいいいいいッッ！！」

「！　はやて！？　おい、どうした！」

デッキの様子を見ながら、調整をしていたはやてが、唐突に胸を抑えて倒れ込んだ。
その痛がり様は以前の比ではなく、胸を抑えて悲痛な声を上げている。鬼柳は慌ててはやてに駆け寄った。

「鬼柳？　どうし――！！」

「プレシア！　急いで診てくれ！　はやてが不味い！」

そしてリビングでの物音を聞き付けたのだろう。プレシアが顔を覗かせる。
最初こそは不思議そうな顔をしていたが、床に蹲って痛がるはやてを見て表情を一変。

慌ててはやての元へ駆け寄ると、脈拍や呼吸などを確かめる。その手際の良さは感心するほどだ。
だが、良くなる兆しは見えないのか。プレシアは苦い表情を浮かべたまま。そしてはやてを抱き抱え、プレシアは立ち上がる。

「病院へ搬送するわ！
このまま此処に居ても、良くなる可能性は低い……！」

「分かった。なら、急いでDホイールを持ってくる！」

「お願い！」

はやてを抱き抱えたプレシアの頼みを受け、鬼柳はリビングから飛び出した。
はやての自宅には自家用車は無い。あるのは鬼柳の操るDホイールだけ。

鬼柳は脱兎のごとくリビングを飛び出し、Dホイールを停めてある庭へ。
そして慌てて遠ざかる鬼柳の背中を見送りながら、プレシアははやてに必死に声を掛けた。

※

「無事、闇の書と接触することが出来ました」

「ふむ……」

時空管理局提督、ギル・グレアムはモニターから報告される内容に頷いた。
彼が見ているモニターに映っているのは、彼が作成した双子の使い魔のうちの一人。

どうやらグレアムの指示通りに、闇の書へ彼に憑依した神の力を注入する事に成功した様だ。
これで後は、闇の書を覚醒させて闇の書を神の支配下に置く。そうすれば、闇の書の力を操る事が出来る。

そう。支配下に置いた闇の書を破壊する事など簡単なことだ。
一刻も早く闇の書を破壊し、数年前に誓った復讐を成し遂げたい。
グレアムは内心でそう思う。

「あの、父様……」

「？　どうしたね、アリア」

「本当に、闇の書を支配下に置く事など、出来るのでしょうか？」

と、グレアムが思考していると、おずおずと使い魔のアリアが声を掛けてきた。
どうやら無事に闇の書を支配下に置き、封印。または破壊出来るのか疑問に思っているらしい。

何をバカな。グレアムは内心でそう思う。彼が得た力は強大で、闇の書を支配下に置くなど容易いはず。
それに憑依した神が言ったのだ。後の事は全て任せておけと。闇の書を破壊し、彼に希望をもたらしてくれると。

「大丈夫だよ、アリア。私の腕にこのアザがある限り、神はこちらに味方している」

「……ならば、良いのですが」

「何も心配する事は無い。全て上手くいくよ」

グレアムはモニターに映る使い魔に向けてほほ笑むと、静かに右腕を擦った。

彼が触れた自身の右腕。そこには神と契約したとあるアザが刻まれている。

そのアザとは――異世界で鬼柳　京介が己の右腕に刻み、地獄の底から蘇った証。「巨人のアザ」が刻まれているのだった。

五話　「進みゆく物語」（後書き）

次回予告
入院し、寂しいひと時を迎えるはやて。
しかしそんな彼女の元に仲間たちが集合する。

鬼柳やプレシアに弱さを吐き出し、生きたいと願う少女。
果たして彼女の願いは叶うのか。生き伸び、仲間たちとクリスマスを迎えられるのか。

そして物語は終局へ。闇の書を中心に暗躍する謎の二人組。
その二人組が闇の書を覚醒させる。現れるのは闇の書の意思。

果たしてこの事態をどの様に打開するのか。
次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「血塗られた聖夜」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

六話　「血塗られた聖夜」（前書き）

かなり大ボリュームになりました。
だけど話の早さはそれほど早くは無い、はず……。

六話　「血塗られた聖夜」

～海鳴市　海鳴大学病院～

「幸い、はやてちゃんの命に別状は無いようよ」

「そうか」

はやてが入院することとなった病室の前で、プレシアと鬼柳が会話をしている。
内容からして、先日入院を余儀なくされたはやての病状についての様だ。

鬼柳はプレシアのその言葉を聞いてホッと安堵の息を漏らすが、プレシアは深刻な表情を浮かべる。
ソレと言うのも、はやての下半身で発症している麻痺が、徐々に広がりを見せている様なのだ。

もしもこのまま事態を放置すれば、はやてを蝕む麻痺はやがてはやての全身に及ぶ。
そうなってしまえば、はやての命も危うくなる。事態は一刻を争う事態となっているのだ。

「それで、闇の書について何か分かったのか？」

「イマイチ捗っていないわ。

分かった事と言えば、元は夜天の魔導書と呼ばれる物だったと言うこと……」

「元は？」

「えぇ。闇の書は夜天の魔導書と呼ばれるマジックアイテムを何回も改悪して生まれたものなの」

鬼柳の疑問に、プレシアは頷きながら答えた。
ユーノの調査により闇の書について、基本的な知識を得る事が出来た。

それによると夜天の魔導書とは、元々は主と共に旅をして各地の偉大な魔導師の技術を収集し、研究するためのアイテムだったようだ。
しかし歴代の主の何人かがプログラムを改変したため、破壊の力を撒き散らす「闇の書」へと姿を変えてしまったらしい。

ユーノを連れて来てくれたクロノの話によれば、闇の書には転生機能と無限再生機能と呼ばれる機能が付与されているらしい。
転生機能とはたとえ闇の書の主が死んでしまったとしても、新たな主の元へ闇の書を転送させる機能である。
これにより、闇の書の主が絶えることは無い。

次に無限再生機能。此方は闇の書をいくら封印、破壊しようが、無傷な姿へと再生をしてしまうと言う厄介な機能だ。
これにより、闇の書は完全な破壊耐性を得ている。どんな大魔法を用いようとも、闇の書が破壊されることはまずあり得ない。

「――――と言う訳よ」

「厄介な物を作ってくれたな……」

「そうね。でも、夜天の魔導書が闇の書になっていなければ、はやてちゃんは守護騎士たちと出会うことも無かった……。
難しいわね」

「……あぁ」

鬼柳の言葉に苦笑いを浮かべながら、プレシアははやての病室を見つめながら静かに、呟いた。
そう。仮に闇の書が改変などされずに、普通の夜天の魔導書だったならば、はやてと夜天の魔導書は出会わなかった。

それどころか、はやての身体に麻痺は無く、至って健康な生活を送れていたはずなのである。
どうしてもっと早く闇の書を見つけなかったのか。今までの自分を叱りたい思いだ。だが、それは後にする。

まずははやてを治すために、治療法を見つけなければならない。それは闇の書の侵食を食い止めること。
しかし闇の書へ外部からのアプローチは出来ない。どう言う訳か、闇の書が外部からの操作を受け付けないのだ。

以前に闇の書へ外部からアプローチを試したのだが、闇の書が不穏な雰囲気を発したため一時中断。
それから何度もアプローチを施しているのだが、その度に何度もイヤな予感を覚える。なので有効な手段を取れていない。

現時点で分かる事は、恐らく闇の書は外部からの操作を受け付けないと言う事だろう。
無理をすれば受け付けるだろうが、その際の代償が何なのかが分からない。なので触らずに置くのが吉だろう。

「闇の書については、無限書庫をクロノがもう一度洗い直すそうよ。たしか……、知り合いの使い魔にも声を掛けるとか言っていたかしら」

「そうか。随分頼もしいな」

「えぇ。一般の局員よりもかなり頼もしいわ」

そしてクロノが無限書庫と呼ばれる書庫を洗い直すことをプレシアから告げられ、鬼柳は口元を緩めた。
警察関係の人間なのであまり好んで接触したくなかったが、どうやらセキュリティの人間とは大分違うようだ。

そこに闇の書の確保と言う下心があるだろうが、一人の人間のためにそこまで奔走してくれるとは思わなかった。
今度会ったら、気後れせずに話しかけてみようか。鬼柳が内心でそう思っていると、トタトタと廊下を駆ける足音が聞こえた。

「なのは。それにフェイトもか」

視線を足音が聞こえた方へと向ければ、そこには白い制服に身を包んだなのはとフェイトの姿が。
どうやら学校からすぐさま病院へ直行したようで、背中には茶色の鞄を背負っている。

「きりゅーさー……ぁあああああッッ！？」

「うぉっ！？」

そして鬼柳とプレシアの元まで後三歩と言ったところで、なのはが右足で踏み切りながら鬼柳へジャンプ。
しっかりと体重を乗せた右足で、床を力強く蹴り抜く。だが、そこでなのはの右足がツルンと滑ってしまった。

結果として、なのはは前のめりに転びかける。慌てて鬼柳が足を踏み出し、転びかけているなのはを抱き止めた。
慌てて抱き止めてしまったせいで、半ば抱き合っている状態になってしまったが、転ぶ前になのはを捕まえる事が出来た。

そう言えばなのはは運動音痴だったかと、鬼柳はなのはを抱き止めながら思い出す。
今までなのはの運動しているところを見た事が無かったので半信半疑だったが、今回の件で信憑性が出てきた様だ。

「にゃ、にゃ、にゃ、にゃ……！？」

「ん？　あぁ、悪い」

なのはに怪我が無いことを確認しホッと一息吐いていると、なのはの奇妙な声が聞こえた。
視線をチラッと動かし、すぐ隣にあるなのはの顔を覗き込む。するとなのはの顔が真っ赤に染まっていた。

どうやら自分の顔がすぐ傍にあるのに戸惑っている様だ。鬼柳は一言謝罪を告げると、なのはを立たせて離れる。
鬼柳が離れてしばらくはなのはが頬を真っ赤に染めたままフラフラしていたが、その後すぐに元に戻り、顔をぷるぷると左右に振った。

「悪かったな、なのは。だが、廊下で走ると危ねぇぞ」

「え？　あ、う、うん……」

そして正常な思考に戻ったであろう、なのはへと声をかける。
突然抱き締めてしまったことは悪いと思ったが、廊下を走るのはいけない。

なのはも自身の危ない行動に気が付いたのか。しょんぼりと肩を落としている。
そんな様子のなのはを、鬼柳が苦笑しながら慰めた。そして、そんな二人の様子を面白く無さそうな表情で見つめる少女が一人。

「むぅ……」

その可愛らしい頬を膨らませ、拗ねた様な表情を浮かべるのはなのはと共に来ていたフェイト。
仲の良さそうな二人に、幼いながらも嫉妬してしまった様だ。面白く無さそうに二人の様子を見ている。

だが、今日は別なのだ。すぐに自分にそう言い聞かせると、背中に背負っていた鞄を手に取る。
何をしているんだろうと疑問に思っているプレシアを脇に置き、フェイトはガサゴソと鞄の中を漁った。

そして取りだしたのは一通の手紙。それを手にとって、フェイトはジィッとその手紙を見つめる。
果たして鬼柳は、この手紙を読んでどんな反応をするだろうか。喜んでくれるのか。それとも怒ってくれるのか。

「（怒ってくれたら……良いなぁ）」

「ん？　フェイト、どうしたんだ？」

「えっと、あのね……？」

鞄から取り出した一通の手紙を手に考え込んでいると、鬼柳が声をかけた。
どうやら手紙を見つめ、不審な行動をしている自分を心配してくれたらしい。

そんな鬼柳の様子に内心で僅かに嬉しそうな気持ちを覚えながら、

彼に手紙を渡す。
鬼柳に手渡した手紙とは今朝、フェイトの下駄箱に入っていたラブレター。宛名は顔も知らぬ男子。

返事としては断るつもりだけれど、鬼柳の返事が知りたくて此処まで持ってきた。
鬼柳はフェイトから手紙を受け取ると、読んで良いかと確認してから手紙を読み進める。

その様子をフェイトはどきどきと心臓の音を高鳴らせながら待っていた。
そして最後の行まで読み進めたのだろう。鬼柳はふぅと嘆息しながら手紙を折り畳む。

「おもしれぇじゃねぇか。俺の仲間に手を出そうなんざ……許しちゃおけねぇ！」

「！」

そして鬼柳の口から飛び出してきた言葉に、フェイトは思わず眼を見開いた。
まさか、ここまで怒ってくれるとは思わなかった。嬉しさでフェイトの頬が赤くなる。

と、そんな鬼柳の様子をただ事ではないと判断したのか。プレシアが鬼柳の持っていた手紙を奪い取った。
手紙を奪い取ると、プレシアは慌てて手紙を読み進めて行く。すると次第に、プレシアの顔が赤くなっていった。

「ふ、ふふ……！　面白いじゃない！
フェイトに手を出そうなんて、ただじゃ済まさないわ！」

「ま、負けたの……」

グシャリ。手に持ったラブレターを握り潰し、プレシアは怒りに燃える瞳で言い放った。
額のコメカミには青筋が浮かび、得も言われぬオーラが漂っている。
今なら一秒間で二百発のパンチが打てそうだ。

一方、二人の背後でガクリと項垂れているのはなのは。なのははフェイトがラブレターを貰ったのを知っていた。
なのはもまた、鬼柳の反応が知りたいので特に口出しをしなかったが、まさかここまで鬼柳が怒るとは思わなかったのだ。

自分には魅力が足りなかったのだろうか。ドジっ子属性よりも天然属性の方が鬼柳は好きだったのか。
茶色の髪よりも金色の髪の方が好みだったのか。色々な考えが、なのはの頭に浮かび上がっては消えて行く。

「久しぶりに、あの手錠を用意しなくちゃな……」

「ヒャーハッハッハ！！　デュエルよぉ！」

「……なんなんや、これは」

はやての病室の前でテンションを上げたせいか。病室の戸が開き、はやてが顔を覗かせる。
そして鬼柳を見つけると嬉しそうな顔を浮かべるが、すぐさま冷や汗を流しながらツッコミを入れた。

なにせ鬼柳はゴソゴソとコートのポケットを漁り、チームサティスファクション時代に使用していた手錠を探している。
この手錠とは相手と自分のデュエルディスクへ装着し、デュエルすることで負けた方のディスクを破壊する効果を持っているのだ。

そして残るプレシアと言えば、元の顔が分からない様な表情で高笑いを上げている。見ていてとても恐ろしい。
なんだか背後に鬼柳とそっくりな人影を見た様な気がしたが、きっと気のせいだろう。疲れて見えた幻覚に違いない。

「うぅ……。は、はやてちゃぁん……」

「おぅわっ！　な、なのはちゃん!?　し、しっかりせぇ！」

と、はやてが自分の病室に戻って眠ろうとしたとき、はやての背中をグッと誰かが掴んだ。
チラッと後ろを振り返ってみれば、そこにはボロボロと涙を流しながら悔しがっているなのはの姿が。

あまりにも鬼気迫るなのはの表情にはやては小さな悲鳴を上げてしまったが、すぐになのはに声をかける。
しかしなのははは「お～いおい」と泣き喚くだけではやての問いかけ

に答えようとはしてくれない。混沌としている。

「鬼柳さんが……鬼柳さんがフェイトちゃんのこと好きだって～～！！」

「んなアホな……」

そしてようやくなのはを落ちつけて、彼女の口から飛び出してきたのが先ほどの言葉である。

鬼柳がフェイトを好き。まさか、そんな事が。はやては呆れながら、なのはの言葉を否定する。

自らも鬼柳に対してアプローチを仕掛けているので分かるのだが、鬼柳はフェイトに異性に対する好意を寄せている様には見えない。せいぜいが仲間。もしくは妹へ向けられる様な好意だと判断している。そしてそれははやてやなのはも例外ではない。

それにちょっとだけ寂しさを覚えるが、あと十年もしたら見返してやるとはやては息巻いている。

だからこそ、鬼柳がフェイトに異性に向ける好意を送るのはおかしい。

「あ～……、鬼柳さん。なして、そんなに怒ってるんですか？」

はやてはなのはをポンポンとあやしながら、鬼柳に何故怒っているのか訊ねる。

視線をチラリと鬼柳へと向ければ、彼はようやく見つけたのか。紐付きの手錠を持っていた。

「ん？　決まってるじゃねーか。フェイトが喧嘩売られたんだぜ？　売られた喧嘩は買うに決まってるじゃねーか！」

「「「「……ん？」」」」

鬼柳の口から飛び出した言葉に、怒っていたプレシアや泣いていたなのは。
嬉しそうにしていたフェイトの表情が固まる。おかしい。鬼柳は何を言っているのだろう。

はやてはプレシアへなのはを預けると、プレシアから彼女が握りつぶしたラブレターを受け取る。
そしてしわしわになった手紙を真っ直ぐに直しながら、そこに書かれている文章を読み進めて行く。

『フェイトちゃんへ
急な手紙でごめんね。
フェイトちゃんと出会ってからフェイトちゃんの綺麗な笑顔がとても気になっています。
もし良ければ放課後の教室で、誰も居なくなってからフェイトちゃんの色々なお話を聞きたいです』

「（……何処もおかしなところ……あらへんよなぁ？）」

しわしわになったラブレターを読み終え、はやては首を傾げながらそう思う。
そう。ラブレターには何処にもおかしなところは無い。ならば何故、鬼柳は喧嘩を売られたと判断したのか。

「鬼柳さん鬼柳さん。なしてフェイトちゃんが喧嘩売られたんですか？」

「なんでだと？　そんなの、簡単じゃーねか」

鬼柳にラブレターを渡しながら、彼が何故怒っていたのかを鬼柳に訊ねた。
すると取りだした手錠を腰のホルダーに納めながら、鬼柳がはやて達に説明していく。

ソレと言うのも。

綺麗な笑顔が気になっています
↓テメー、目立ってんだよ

放課後の教室で、誰も居なくなってから
↓誰も居ない教室でデュエルで語り合おうぜ

と解読したらしい。なんとも凄まじい勘違いっぷりに、はやてはある種の清々しさを覚える。
まさかこんな読み方をする男性がいるとは思いもしなかった。笑ったらいいのか同情すれば良いのか。はやてには分からない。

そしてそんな鬼柳の説明を聞き、プレシアはお腹を抱えて大笑い。
病院の廊下で転げまわっている。
なのはと言えばホッと安堵の息を吐き、残るフェイトは残念そうな表情をしていた。三者三様の表情を見せている。

「あんな、鬼柳さん。
これは暗号とか仕込まれてへんで？」

「なに、そうなのか？」

「そやそや。読んで字の如しや」

他のメンバーが説明できない状態の中、はやてが鬼柳に特に暗号など仕込まれていないと告げる。
すると鬼柳は驚いた表情を浮かべた。次いで、頬を赤く染めて「最近のヤツらは進んでやがるのか……」と呟く。

どうやら変に穿った見方をしなければ、鬼柳も常識人の様だ。鬼柳がまともな状態に戻り、はやてはホッと安堵する。
そして何故、そんな変な解読方法を身に付けたのか鬼柳に訊ねてみた。すると彼は物思いに耽り、昔の出来事を思い出す。

「前に俺らのアジトにフェイトの貰ったのと同じような手紙が入っててな。
てっきりラブレターだと喜んだんだが、クロウがそれは高度な暗号が――とか言い出して。

……ん？　そう言えば『俺にはフラグが立つ予感が無い……。なら、鬼柳のフラグも折って満足するしかねぇ！』とか呟いてたな」

「……なるほどな。原因はそのクロウって人やな……」

鬼柳の説明を聞き、はやてとプレシアは得心が行ったと言う様に頷いた。
どうやらクロウと言う昔のチームの仲間が、彼に嘘を吹き込んだのだろう。

鬼柳の発言から察するに、鬼柳はチームを組んでいた頃はモテていたのだろう。
そんな鬼柳を妬み、彼に送られるラブレターを全て果たし状と勘違いさせたと言うところか。

更に詳しく話を聞けば、彼がサテライトで闘ったデュエルギャングの7割は女性だったらしい。
一体何人の女性が鬼柳の勘違いのせいでデュエルをさせられたのか。
それを思うと涙が溢れださん思いだ。

「鬼柳さんって、鈍感なんやろか？」

「鈍感と言うよりは素直な感じがするわ。この前の私の嘘も信じていたし……」

「なるほどなぁ……」

鬼柳やなのは、フェイトの傍から離れ、はやてとプレシアはごにょごにょと内緒話を行う。
内容は鬼柳が鈍感か。はたまた天然、もしくは素直なのかどうかと言うこと。

あまりに鬼柳が嘘を信じやすいので、彼女たちとしても色々とやりにくいのだ。
もしかしたら、この世界では赤ん坊はキャベツ畑に生ると言ったら信じてしまうかもしれない。それほどの勢いだ。

そして出た結論――鬼柳が素直なのではないかと言う答えに、はやてとプレシアは同意する。
大人とは思えないほど素直すぎる。そのうち詐欺にでも引っ掛かってしまいそうだ。

「それで鬼柳兄ちゃん的に、フェイトちゃんの交際はオーケーなんやろか？」

はやては出た結論に小さく嘆息すると、気になっていた事柄をプレシアに訊ねる。
視線を背後へと向ければ、なのはを背中におぶり、フェイトを抱っこしている鬼柳の姿が。

その姿はまるでお父さんのよう。はたしてそんな彼が、フェイトの交際をオーケーするのだろうか。
プレシアにチラリと視線を向ければ、彼女もまた背後で親子の様に戯れている三人の様子に視線を向けている。

「……多分、難しいんじゃないかしら？」

「なしてです？」

「彼が、仲間と言うものに固執――依存していると言っても良いからよ」

鬼柳の過去を知っているプレシアは、僅かに哀しみを堪えた様な表情で、はやてに告げた。

彼は元の世界で自身が犯した罪により、仲間に対して並々ならぬ執着――依存の様な物を見せている。

そんな彼が、自身の仲間と判断しているフェイトを手放すとは考えづらい。

恐らくフェイトが貰った手紙に関しては色よい返事を返さないだろう。結果としてフェイトの喜ぶ結果になるが。

「……鬼柳兄ちゃんが？」

「そ。まぁ、はやてちゃんにはまだ早いわね」

「むぅ……」

鬼柳の過去を知らぬはやてはプレシアに訊ねるが、適当にはぐらかされてしまった。

それに釈然としないものを感じるが、追究しても無駄だと判断した

のだろう。ハァと嘆息する。

そしてはやてとプレシア。二人は視線を背後へと向け、楽しそうに廊下で遊んでいる鬼柳達に視線を向ける。

はやては楽しそうに遊んでいる三人に仲間に入れてもらおうと車いすを動かし、プレシアは四人の様子を静かに見つめていた。

※

「そろそろ、頃合か……」

時空管理局の本局。そのとある一室に、年老いた一人の男性局員が腰掛けていた。

彼の眼前に広がっているのは、過去数十年に渡り人々に悲しみを与えてきたロストロギア――闇の書の資料。

今までは対抗策が存在せず、苦汁を飲まされる日々が続いていた。

だが、それももう終わり。

彼――ギル・グレアムは視線を右腕へと向けた。管理局の制服で見えないが、そこには確かな力を感じる。

「地縛神よ……。アナタの力で、闇の書に永遠の終焉を……」

小さく呟きながら腕に刻まれたアザを撫でれば、グレアムの声に応える様にアザが明滅する。
それはまるで、任せろと言っている様で。それはまるで、何も知らぬ人間を罠に誘おうとする誘惑の光の様で。

しかし、グレアムは躊躇わない。ここで尻込みしてしまえば、彼が失った多くの仲間が浮かばれない。
そして視線をチラリと、テーブルの上に置いてある写真立てに視線を向けた。そこには二枚の写真が挟んである。

そのうちの一枚は今から大分以前に送られてきた写真で、写真には一人の少女がニコニコと屈託のない笑顔を浮かべている。
残るもう一枚は、新たに出来た家族に囲まれてとびきりの笑顔を浮かべる少女。どちらも同じ少女で、グレアムが捧げると決めた生贄だ。

「はやて君には、申し訳ないことをすると思う……。
だが、これも必要な犠牲なのだ……。分かってくれ……」

グレアムは写真に写る少女に向けて小さく謝罪すると、眼前に浮かんでいたモニターを消す。
そしてソファに背中を預けてもたれ掛かると、不意に室内に呼び出し音が響く。僅かに眼を見開いた。

再度モニターを表示すれば、そこには微妙な表情を浮かべている彼の使い魔――リーゼアリアの姿が見える。
リーゼアリアとは彼が作成した使い魔で、猫を素体に作られており、アリアの下にはリーゼロッテと言う妹がいる。

グレアムからすれば孫の様な存在。その彼女が、微妙な表情を浮かべてグレアムに通信を繋いでいる。
一体何が起こったのか。グレアムは内心で疑問に思いながらも、モニターに映るリーゼアリアに訊ねた。

「アリア。どうしたんだい？」

『父様。クロノが無限書庫の探索に私たちを使いたいと要請してきています』

「クロノが？」

『はい。なんでも、闇の書の主を特定し、主への侵食を止めるにはどうすれば良いかを調べる様で……』

「！」

リーゼアリアの口から返ってきた返答に、グレアムは驚きで眼を見開いた。
まさかもう、闇の書の主――八神　はやての所在を付き止めたとは思わなかった。

これは非常に不味い事態だ。ここで下手にクロノに嗅ぎ回られてし

まうと、計画が崩れかねない。
それだけは絶対に阻止しなければ。アリアにクロノが何処に居るのかを訊ね、グレアムはいかに危機を回避するか考える。

リーゼアリアによれば、クロノは現在管理局の本局まで出向いているらしい。これは幸いと言うべきか。
適当な用事でクロノを本局に留め、その間に闇の書を起動。地縛神の力を用いて闇の書を完全に滅さねばならない。

グレアムはこれからのプランを決定すると、アリアを地球に送り、現在もはやての監視をしているロッテと合流する様に告げる。
モニターに映るアリアの表情は不安そうだが、グレアムは安心させるようにニコリとほほ笑んだ。そして下ろしていた腰を上げる。

「……悪いがクロノ。少しだけ、年寄りの話に耳を傾けてもらおうじゃないか」

グレアムは管理局の制服を正し、自室を出る間際にそう、小さく呟いた。
そして使い魔が鍛えた小さな弟子を引き止めるため、彼は管理局のロビーへと足を進める。

※

「はふぅ……。
すっごい疲れたでぇ～～……」

病室のベッドの上で、患者服に身を包んだはやてがグッタリと項垂れている。
そんな彼女の周りに置いてあるのは、なのはやフェイトが持ち込んだデュエルモンスターズのカード。

少ないお小遣いをやり繰りして貯めたお金で、はやてへのお見舞いの品としてショップで買い込んだ様だ。
今後は大会に出て、賞金を荒稼ぎすると言っていたのはなのは。今の彼女ならばこの街に敵は居ないだろう。

「そやけど、アリサちゃんとすずかちゃんもまさかカード持ってくるとはなぁ……」

ゴロリとベッドの上を転がりながら、視線をベッドサイドへと向ける。するとそこにも新たなカードの山が。
こちらは先ほど訪れたアリサとすずかが持ち込んだもので、少しでもはやてを元気付けようと買ってきたものだ。

はやてとしても大量のカードを見ればワクワクするのだが、さすがにこの量は食傷気味である。

なんだか漫画が読みたい。カードの見過ぎで若干、カード恐怖症になってしまった様な気がする。

「しかし主はやて。ご友人のご厚意ですので……」

「わ！　≪堕天使ナース‐レフィキュル≫ですって！
このカード凄く高いんですよねー……。ぶるじょわじー」

「……シャマル」

と、そんなはやてに声をかけたのは病室の中で控えていたシグナム達守護騎士メンバー。
現在病室に居るのはシグナムとシャマル。それにヴィータの三人。
ザフィーラは自宅でお留守番である。

ザフィーラの人間時の姿と獣時の姿が余りにも目立ち、病院に入る事が出来なかったのだ。
なので現在、ザフィーラは自宅でなのはの持つデバイス――レイジングハートと遊んでいる。

レイジングハートとフェイトの持つバルディッシュは、一時的にクロノから返還されていた。
護身用と言う側面もあるが、本題は違う。この世界に来る前に見せた二つのデバイスの異常を調べるためだ。

だが、クロノは二人にデバイスを返した後、とんぼ返りの如く時空管理局の本局へと戻ってしまった。
結局デバイスが示した異常については分かっていない。ただ、実体

化したレンがなのはとの再会を泣いて喜んだのは確かだ。

「シャマル。そのカード欲しかったらトレードや。それにしてもなぁ……。
なんや、イメージしてたお見舞いの品とは違ってビックリするんやけど……」

「ま、まぁ……。分からなくも無いですが……」

相変わらずベッドの上を転がりながら、はやては何とも言えない表情を浮かべる。
おかしい。お見舞いと言えばメロンやフルーツを想像する自分は間違っているのだろうか。

だが、カードのお見舞いも嬉しいと言えば嬉しいので、はやてとしては複雑なところである。
しかも何気に高レートカードまでくれるアリサ達。土下座して拝み倒せば良いのだろうか。

「（そう言えばシャマル。あとページはどのくらいだ？）」

「（残りは大分少ないわ。あと六十ページ……！）」

「（そっか）」

一方、シグナムとはやてが微妙な表情で会話をしているのを横目に、

ヴィータがシャマルに訊ねていた。
内容は今までどのくらいの闇の書のページが集まったのか、と言うこと。シャマルの返答にヴィータが頷く。

闇の書のページは全６６６ページ。現在は６０６ページ集まっており、残るは６０ページである。
出来ればクロノやユーノの調査を待ってから全てのページを埋めたかったが、そうも言っていられない。

ヴィータは脳裏に浮かぶ年若き執務官の姿を思い描きながら、カードの山を見ているはやてに視線を向ける。
シグナムもはやても何とも微妙な顔をしている。なんだか気を張っているこちらがバカみたいだ。

そう思い、はやてに声を掛けようとしたヴィータの手が――――止まる。

「――――ッ！？」

「（シャマル、なんだこれは！）」

「（コレ……凄く強い結界みたい！）」

突如室内に突きつけられたのは、正体不明の圧迫感。思わず守護騎士たちの動きが止まる。
はやてに不審がられているが、今は構ってはいられない。何だ。何故、結界を張られた！？

シグナムの指示でシャマルが慌てて、探査魔法を使用する。すると結界の中心点が特定できた。
どうやら結界を張ったのはこの病院の屋上でらしい。一体誰が、何のために。判断は出来ないが油断できない。

「（まさか管理局にバレたのか！？）」

「（可能性としては……低くないわね）」

「（くっ！）」

シャマルから返ってきた返答に、シグナムは苛立ったように舌打ちした。
まさかこんなタイミングで捕捉されるとは思わなかった。一体どうすればいい。

どうやら屋上を起点に張られたこの結界は内部に居る人物を閉じ込めるタイプの結界の様だ。
外から入るのは難しいが、結界を張った魔導師を倒せばこの結界は解かれる。まずは魔導師を倒さねば。

だが、規模がおかしい。結界は海鳴市全体に張られている。
何故こんなにも大規模な結界を張ったのか。理由は分からないが、今は一刻を争う。

そしてシグナムとヴィータは互いに目配せをし、病室から飛び出そうとする。
だが、病室のドアに手を触れたとき、彼女たちの足元に蒼い魔法陣

が展開された。

「な、なんやぁ！？」

「これは！？」

「……ッ！　強制転移魔法！」

「んな――――ッ！？」

足元に展開された魔法陣にはやてが驚いているが、守護騎士たちは更に驚いている。

まさか、自らはおろかヴィータ。果てにはシャマルまで転移させようとはどれほどの実力の持ち主か。

慌ててベッドの上で驚いているはやてに大丈夫だと告げようとするが、それよりも先に強制的に転移させられてしまう。

彼女たちの周囲を一瞬だけ光が包み込み、次に光が晴れたときには何処かの屋上――恐らく病院の屋上だろう――に転移されていた。

一体誰が。内心で警戒しながら、シグナム達は視線を左右へと向ける。すると、怪しい人影を見つけた。

その人影は見慣れぬ制服に身を包み、顔を不気味な仮面で隠している二人組み。間違いない。彼らが転移魔法を発動した。

「貴様ら……何者だ！」

「……答える義理は無い」

「一人ずつは面倒だ。三人同時に掛かってくるが良い」

「な――！」

シグナムが眼の前の仮面を付けた魔導師に向けて吠えるが、魔導師はそれを一蹴。

腕に着けていたデュエルディスクを展開すると、彼女たちにデュエルを持ちかけた。

相手の大胆不敵なその様子に、シグナム達は眼を見開く。まさか複数デュエル。それも二対三を要求された。

騎士を名乗る彼女たちにとって、ハンデを付けられるのは屈辱に等しい。普段は温厚なシャマルすら怒っている。

「良いだろう！　我らを侮ったことを、後悔させてやる！」

「行くぜ、シャマル！　足引っ張るんじゃねーぞ！」

「えぇ！　それじゃ――――」

「「「「「――――決闘（デュエル）！！！！！」」」」」

※

「はふぅ、はふぅ、はふぅ……！　さ、さっきのなに!?」

「分からない。けれど、かなり強い結界だった……！」

自宅でザフィーラと共に遊んでいたなのはとフェイトは、不気味な雰囲気の漂う海鳴市内を駆けていた。
目的地ははやてとプレシア。それに鬼柳が居るであろう海鳴市大学病院。そこまでの道のりは彼女たちには遠い。

それに加え、海鳴市全体に張られた結界が非常に厄介なものだった。
それは完全に閉じ込める結界。
そう。一般人や魔導師の区別なく、結界の中から外へ出すことを禁じる結界だった。これでは空を飛ぶことすらできない。

先に家を出たザフィーラに乗せてもらえば良かったと後悔するが、そんなもしもは意味を成さない。
そしてザフィーラから送れること数十分。二人が肩で息をしていると、不意に病院の自動ドアが開く。

中から出てきたのはプレシア。
腕には展開したデュエルディスクを持ち、警戒した様子を見せている。

「なのはさん、フェイト。無事ね？」

「う、うん。だ、だけど、一体どうしたの……？」

「分からないわ。ただ、かなり強力な結界を仕掛けられたのは間違いないわ」

プレシアは簡単な事情だけを説明すると、なのはを肩に担ぎ、ドタドタと病室へ向けて駆け出す。

どうやら鬼柳は既に、はやての元へ向かったらしい。ならば止まることは無いと、フェイトも足を動かす。

「――――ッ！　なに、これは……」

と、階段を上るフェイトの耳が、何かが破壊される音を捉えた。

そして出来る限り呼吸を静め、先ほど捉えた音の正体を掴もうとする。

しかし、音の発生源から離れてしまっているのか。音の正体は掴めず仕舞いだった。

一体先ほどの破壊音は何だったのか。疑問に思いながらも、はやての病室前へと到着。

勢いよく扉を開け、プレシアと共にフェイトは病室へとなだれ込む。

「はやてさん、大丈夫!?」

「なのはちゃん！　それにフェイトちゃんも！」

室内へ割って入ったプレシアは、いち早くはやての無事を確認する。
するとベッドの上で不安そうな表情を浮かべていたはやてを発見。
思わず安堵する。

はやてもプレシアやなのは、フェイトの姿を見て安堵したのだろう。
僅かに嬉しそうな表情を浮かべ、友達を迎え入れる。なのはとはやては互いに抱き合って、無事を喜んだ。

「プレシア、こいつは一体何だ!?」

「大規模な結界よ。海鳴市全体を覆うくらい、大規模な……」

「海鳴市全体って……」

抱き合って喜んでいる子供たちを横目に、鬼柳がプレシアへと詰め寄る。
彼もまたこの異変に気が付いており、一目散にはやての病室へと駆けつけていた。

そしてプレシアから告げられた内容に、鬼柳は訝しげな表情を浮かべる。
海鳴市全体を覆うほどの結界。なるほど。それはあまりにも大規模

だろう。

だが、一体どんな目的があって街全体にこんな大規模な結界を張ったのか。

考えても考えても、答えは見つからない。イヤな焦燥感だけが鬼柳の頭を突き動かす。

「――――ッ！」

「なぁ――――――!?」

そして鬼柳が思考の海に沈んでいると不意に、病室の中央に仮面を付けた人影が現れた。

その人影の足元には蒼く輝く魔法陣が展開されていたので、恐らくこれは魔導師による仕業だろう。

一体何者なのか。鬼柳やプレシア、フェイトが警戒している最中、突如病室へ現れた人影は視線を室内へ巡らす。

そして目的の人物を捉えたのだろう。人影は視線を鬼柳とはやてに留めると、静かな。男性の様な低い声で言い放った。

「鬼柳　京介。そして八神　はやて。貴様らを特別に招待してやろう」

「招待……だと？」

「そうだ。我らが主に力を与えし神、地縛神による、闇の書を滅す

る歴史的な瞬間に！！」

「んな――――――！？」

仮面を付けた魔導師がそう言い放つと同時、鬼柳やはやての足元に再び蒼い魔法陣が展開される。
それはどうやら転移を目的とした魔法陣の様だ。慌てて抜け出そうとするが、僅かばかり遅かった。

周囲の景色がぶれる様に掻き消え、次の瞬間には見慣れぬビルの屋上に鬼柳とはやては居た。
否、居たのはなにも彼らだけではない。なのはやフェイト、プレシアもまた、共に転移してきた様だ。

「あ、危なかったの……」

「の、乗り遅れるところだった……」

冷や汗を垂らしながら感想を漏らすなのはとフェイト。
どうやら駆けこみ乗車よろしく慌てて魔法陣に飛び乗ったらしい。

なんとも無茶をする。鬼柳がそんな二人を注意しようとしたとき、不意にはやての息を呑む声が聞こえた。
一体何が。視線をはやての方へと向け、彼女が見ている方へと視線を向ける。それを見て、鬼柳もまた息を呑んだ。

「……なに、アレ……」

「シグナムの……服……？」

彼らの視線の先にあるのは、屋上に転がる見慣れた同居人の私服。
それだけならば別段おかしいところは無いのだが、落ちている状態が不自然だ。

まるで服を着ていた人物が消えてしまったかのように、衣服が人の形を取ったまま床に落ちている。
そしてそれはなにもシグナムの服だけに限った話ではない。その少し離れた場所にはシャマルの服が。当然、シャマルは居ない。

「ヒャーハッハッハッ！！」

「ッ！？」

一体何が起こったのか。理解できずに茫然としていると、不意に甲高い笑い声が屋上に響いた。
声が聞こえた方へと視線を向ければ、そこには空中に磔にされているヴィータとザフィーラの姿がある。

咄嗟にはやてが這いずって彼女たちの元へ駆け寄ろうとするが、不意に飛来した何かがはやての歩みを押し止めた。
飛来したのはなのはたちにとって見慣れぬモンスター。しかし鬼柳だけは違う。以前に何度か、見たことのあるモンスターだった。

「≪ブラッド・メフィスト≫!?
それにそっちは≪漆黒のズムウォルト≫だと!?」

「アタリダヨー！　アタリダヨー!!　ギャハハハハッッ!!!」

はやての歩みを押し止めたモンスター。それはかつて、鬼柳が一度見たことのあるモンスターだった。
ザフィーラの傍をふよふよと浮いているのは、青と赤のローブに身を包み、少々派手な杖を持つ漆黒のズムウォルト。

そしてヴィータの周囲をふよふよと浮いているのは、悪魔がシルクハットを被って高笑いを続けるブラッド・メフィストである。
一体何故、あのモンスターが実体化しているのか。鬼柳が驚愕に眼を見開いていると、仮面を付けた魔導師の腕にある決闘盤が目に入る。

どうやらあの魔導師たちが二体のモンスターを実体化させているのだろう。
二人の魔導師は瓜二つの容姿をしており、パッと見ただけではどちらがどちらかは分からない。

「マケタシュゴキシハキエルノサー！　キエルノサー！」

「負けた……？　シグナムとシャマルが!?」

「ヴィータちゃんとザフィーラさんも!?」

そしてブラッド・メフィストにより告げられた事実に、なのはとフェイトが驚きに眼を見開く。
チラ、とプレシアが視線で鬼柳に訊ねてくるが、鬼柳はコクリと頷いた。あの二体は守護騎士にとって相性が悪い。

ブラッド・メフィストは相手のスタンバイフェイズ時、相手フィールド上にあるカード一枚につき相手に３００ポイントのダメージを与える。
加えて相手が魔法・罠カードをセットした際、相手ライフに３００ポイントのバーンダメージを与える効果を持っている。

シャマルにとって、天敵と言っても差し支えない効果だ。恐らくシャマルに対してのメタに違いない。
残る漆黒のズムウォルトと言えば、自らが戦闘破壊耐性を持ちこちらから攻撃を仕掛け、攻撃対象の攻撃力がこのカードよりも高い場合。

攻撃対象のモンスターの攻撃力を、漆黒のズムウォルトと同じ値にする効果を持っている。
さらに戦闘によってズムウォルトが相手モンスターを破壊した場合、相手のデッキトップ三枚を墓地へ送る効果もある。

こちらは全体的にシグナム、ヴィータ、ザフィーラに対するメタだろう。
デッキ切れを狙われた可能性がある。守護騎士が負けたと言うのにも信憑性が出てきた。

「八神　はやて。貴様は……病気なのだ。闇の書の呪いと言う病気

……」

「もう……、治らない」

「な――！」

そして鬼柳が実体化しているモンスターを警戒していると、仮面を付けた魔導師がポツポツと言葉を零す。
それは今まで、守護騎士たちが隠してきた秘密。突然の告白に理解が追い付かず、はやては茫然と言葉に耳を傾ける。

「いけない！　はやてちゃん、惑わされないで――！」

「ギャハハハハッ！　シズカニシテロー！　シズカニシテロー！」

茫然とした様子で仮面の魔導師の言葉を聞いているはやてに気が付いたプレシアは、慌てて彼女を呼び戻そうとする。
しかしそれは、突如として飛来したブラッド・メフィストによって遮られた。どうやらプレシア達を妨害するのが目的らしい。

「哀れなヤツらだ。壊れた機能を、使えると思いこんで……」

「闇の書が完成しても、貴様は助からない……」

「……そんなん、えぇんです。ヴィータを、離してください…

…。

ザフィーラに、何したんですか……？」

仮面の魔導師たちはプレシア達の様子を一瞥すると、心底哀れだと言う感情を込めて告げる。

そう。闇の書の機能は壊れており、闇の書が完成しても主であるはやてが助かることなどありはしない。

しかしそれでいてもなお、はやては自分の身よりも家族の身を案じている。

闇の書の侵食が影響しているのか。胸を苦しそうに抑えながらも、懸命に懇願している。

「これらはもうすでに、壊れてしまっている。既に、ずっと前から……」

「とうの昔に壊された闇の書の機能をまだ使えると思いこみ……無駄な努力を続けていた」

「無駄ってなんや！　なしてそないなこと言える！」

「本当の事だからだ。壊された闇の書では、貴様を治すことは出来ない」

はやては懇願を却下されながらも、必死に仮面の魔導師に反論した。

しかし仮面を付けた魔導師ははやての言葉を一蹴するのみ。そしてお喋りの時間は終わったのか。

彼らの傍らに、新たなモンスターが召喚される。それは残るダークシンクロモンスター。
氷結のフィッツジェラルド、猿魔王ゼーマン、地底のアラクネーの三体。こうしては居られない。

「プレシア、この状態は不味い！
こうなったら俺たちもモンスターを召喚するしかねぇ！」

「えぇ……！　なのはさん、フェイト！　準備を！」

「はい！」

「うん！」

鬼柳の呼びかけにプレシアは応えると、傍らに控えていた二人の少女に指示を出した。
そしてなのはとフェイト。二人の背後に三つの緑色のリングが二つ、現れる。それはシンクロ召喚の特徴。

鬼柳達が何をしようか理解したのか。仮面を付けた魔導師たちが片手を空へ振り上げる。
すると同時、傍らに控えていた三体のダークシンクロモンスターが攻撃の構えに入った。対象はヴィータとザフィーラ。

内心で不味いと焦りながらも、自分ではどうすることも出来ない悔しさに鬼柳は臍を噛む。
そしてなのはとフェイトの背後に現れたリングを五つの光が整列し、

一条の極太の閃光が打ち抜いた。

光の中から現れるのは、彼女たちの象徴ともいえる二体のシンクロモンスター。スターダストと、レッド・デーモンズである。

シンクロ召喚を確認したなのはとフェイトは、慌ててヴィータとザフィーラの傍に控えるモンスターへと攻撃宣言を行う。

しかしスターダストの放ったブレスが。レッド・デーモンズの炎に包まれた拳が到達するのは、僅かばかり遅かった。

三体のダークシンクロモンスターの攻撃が、空中に磔にされていたヴィータに。床に倒れ伏していたザフィーラに命中。

直後、その様子を間近で見ていたはやてが絶叫を上げ、床に蹲っている彼女の足元に、白く輝く魔法陣が展開された。

六話　「血塗られた聖夜」（後書き）

次回予告

とうとう覚醒した闇の書。
はやてを取り込んだ闇の書は破壊の限りを尽くそうとする。

そしてそれに待ったを掛けたのはなのはとフェイト。
デュエルを挑み、闇の書の意思を止めようと奮闘する。

しかし闇の書の意思の使用するカードの力は強大で、二人は敗北してしまう。
そして闇の書内部へと囚われた二人の少女。彼女たちは試練を乗り越え、とある人たちに出会う。

荒ぶる魂を持つ赤き竜の翼を持つシグナー。
シンクロ召喚を超えるシンクロを会得したドラゴンヘッドのアザを持つ青年。

彼らと出会い、彼女たちは何を得るのか――――？
次回、満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「絆の英雄と荒ぶる魂」

ライディングデュエル・アクセラレーション！
※次回は前篇、後篇と分かれる予定です。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　前編」（前書き）

七話は結構長くなるので何話かに分けます。
今回は前編。某絆さんと荒ぶるさんは中編か後編で。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　前編」

～海鳴市　海鳴大学病院屋上～

「――――――～～～～ッッ！！」

声にならぬ叫びが、大学病院の屋上で響いた。
屋上の床に蹲り、足元に魔法陣が展開されている少女の元に、一冊の本が転移する。

それは自宅にあるはずの闇の書。闇の書は少女――はやての元まで転移すると、一言言葉を発した。
その言葉は別の国の言語であり、鬼柳やプレシアは分からない。だが、不穏な気配だけは感じ取ることが出来た。

『Ｆｒｅｉｌａｓｓｕｎｇ』『解放』

「ッ！？　あれは！」

その言葉とともに、はやての足元に広がっていた白い魔法陣が、闇に侵食されていく。
徐々に紫色の基調にした魔力光に変わり、魔法陣の中央で蹲っているはやてにも異変が起こる。

涙を両目から零し、苦しいのか。胸を抑えながら絶叫。瞬間、莫大

な魔力がはやてを中心に爆発した。
突然の事態に鬼柳はおろか、なのはすらマトモに防げない。そんな中、動いたのは鬼柳の隣に居たプレシアだ。

彼女は咄嗟に防御魔法を自分とフェイト、鬼柳、なのはの周囲に展開することで、魔力の放出によるダメージを抑える。
そしてはやてを中心に放出された魔力の塊は天へと上り、はやての身体が天へと上った魔力の中へ押し上げられる。

「はやて！」

「なんて荒々しい魔力……！　これは、不味いわよ！」

鬼柳が魔力の流れの中央に居るはやてに向けて声を上げる。だが、聞こえている様子は無い。
魔力の中に居るはやてはぼんやりとした表情で視線を前方に向けながら、無機質な言葉を口にした。

「我は闇の書の主なり。この手に……、力を……ッ！」

「ッ！」

「封印、解放……ッ！」

瞬間、はやての手に闇の書が転移する。
それと同時、はやての手の中にある闇の書から煙が上がった。

そして煙が上がるのと連動する様に、はやての身体にも異変が起きる。
まるで無理やり身体を成長させられている様な。異常な速度ではやての外見が変わる。

既に外見年齢は元々の年齢である9歳を超え、まず二十代前後にしか見えない体躯をしている。
茶のショートカットだった髪は腰の辺りまで伸び、どう言う訳か髪の色が茶色から銀色へと変わった。

左足と右腕をを幾つもの皮のベルトで拘束し、まるで守護騎士が身に着けている様な騎士甲冑に身を包む。
そして全身に赤い線の様な模様が入り、その姿をはやてからまったく別の何かへと変化させた。

「はやてちゃん！！」

「闇の書にコントロールされてるの……！？
クッ、一体どうすれば……！」

鬼柳の隣でなのはが悲痛な声を上げ、プレシアが苛立たしげな声を発する。
事態の打開策が見当たらない。一体どうやって、はやてを助ければ良いのか皆目見当が付かない。

何もできない自分の無力さに、鬼柳はグッと拳を握る。どうすれば、はやてを助けられる。

魔法に関して素人の自分が必死に考えるが、鬼柳に良い案が出る訳など無い。魔法に関して素人ならば当然だ。

そして鬼柳が己の無力さに打ちひしがれていると、変化を続けていたはやての変化が止まる。

背中に六つの黒い翼を広げ、悲しみに嘆いている様に見えるその顔。

アレが闇の書の意思だと言うのか。

「また、全てが終わってしまった……。

一体幾度、こんな悲しみを繰り返せばいいのだろう……」

「なにを言ってやがる……！　はやてを返しやがれ！」

「我は闇の書。我が力の全ては――――」

鬼柳の叫びなど聞こえていない様に、闇の書の意思は手を宙に掲げた。

すると宙に浮いていた闇の書が無機質な音声で何かの魔法だろうか。

それを告げる。

瞬間、空中で静止していた闇の書が激しい発光を始め、宙に掲げた彼女の手に黒い球体が現れる。

その球体は禍々しい色をしており、傍にある事を忌避してしまいそうだ。プレシアも同様なのだろう。顔を顰めている。

「な――――ッ！？」

「いけない！　みんな、急いで撤退するわ！　急いで！」

そして次の瞬間、手の平大だった大きさの魔力の塊が、人一人を軽く飲み込めるほどの大きさまで膨張する。
さすがに不味いと判断したのか。プレシアの怒声が病院の屋上に響き、なのはとフェイトが慌てて病院の屋上から飛び立っていく。

鬼柳もまたプレシアの背に飛び乗ると、慌ててその場を離れた。
僅かにプレシアが苦しげな声を出したが気にしない。

「主の願いを……そのままに……」

「――――ッ！　空間攻撃魔法……ッ！」

「デアボリック・エミッション……！」

人一人と軽々と飲み込んでしまうほどの球体が、唐突に小さくなっていく。
しかしそれは、球体から莫大な量の魔力が抜けた訳ではない。凝縮され、威力を増している。

プレシアは闇の書の意思の攻撃タイプを特定すると、念話でなのはとフェイトに指示を出した。
すると二人はその場で滞空。すぐさま防御魔法を展開し、闇の書の意思による攻撃に備え、防御する。

そしてそれは、彼女たちの傍らに滞空していた二体のドラゴンも例

外ではない。
二体のドラゴンは主を護る様に前に立ち、翼を広げて主へと攻撃が向かわない様にしている。

「闇に……染まれ！」

そしてその一言で、彼女の手の中にあった球体の魔力は、圧迫から解放された。
その大きさ、威力は凄まじく、病院を丸ごと飲み込んでしまうほどの大きさを持っている。

病院から慌てて患者や医師たちが逃げて行くのを、プレシア達は空から見守ることしかできない。
なのはの前に居るレッド・デーモンズが。フェイトの前に居るスターダストが。そしてプレシアが必死に耐える。

しかしそれでも尚、闇の書の意思が放った空間攻撃魔法――デアボリック・エミッションは規模を拡大させる。
だが、あらかじめ魔導師しか狙わない様に設定されていたのか。一般人に目立った外傷は無く、けが人も出ていないようだ。

「はやてちゃん！」

「はやてー！」

「ッ！　なのはさん！　フェイト！」

なんとか闇の書の意思の攻撃を凌ぎ切ったなのはとフェイトは、屋上に佇む闇の書の意思へと向かう。
目的は一つ。闇の書の意思に身体を乗っ取られたはやてを救うため。
プレシアの制止を振り切り、はやての元へ。

「なのは！　フェイト！　戻れ！」

「大丈夫……！　絶対、はやてちゃんを助ける……！」

「ッ！」

鬼柳もまたなのはとフェイトに向けて叫ぶが、彼女たちの決意に固まった声に押しとどめられた。
アレを止めるのは中々に骨が折れそうだ。だが、止めなければ彼女たちの安全が脅かされる。

こうしては居られないとプレシアに視線を向け、鬼柳達もまた闇の書の意思へと向かう。
だが、僅かに遅かったようだ。なのはとフェイトは闇の書の意思の元へと辿りつき、デュエルディスクを構える。

「闇の書さん！　私とデュエルして！
そして勝ったら、はやてちゃんを返して！」

「……お前もまた、その名で呼ぶのだな」

「――――え？」

なのはは杖状だったレイジングハートをデュエルディスクモードへと変更。
フェイトもまたデバイスをデュエルディスクモードへ変形させると、闇の書の意思へ迫った。

そのときになのはの言った言葉の中に、何か引っかかることがあったのだろう。僅かに悲しそうな顔をする。
それになのはとフェイトは呆気に取られるが、闇の書の意思がデュエルディスクを構えたことで頭の片隅から先の件は掻き消えた。

「面倒だ。二人同時に相手をしてやろう」

「ッ！　舐められてる……！」

「だったら、その余裕を後悔させてあげるよ！」

闇の書の意思はデュエルディスクを携え、無関心な瞳をなのはとフェイトに向ける。
その物言いにムッと来たのか。頭に血が上り、なのはとフェイトもまた、デュエルディスクを構えた。

「「「決闘（デュエル）！！」」」

闇の書の意思ＬＰ４０００

なのはＬＰ４０００
フェイトＬＰ４０００

「先攻は譲ろう」

「舐めてる……！　私の先攻、ドロー！」

フェイト手札５→６

「モンスターをセット。ターンエンド！」

フェイト場　セットモンスター

「此方のターン、ドロー」

闇の書の意思手札５→６

「手札からフィールド魔法≪Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ≫を発動。
このフィールドは私の罪によって支配される……」

Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに発動する事
ができる。
自分のデッキから「Ｓｉｎ」と名のついたカード３枚を選択し、
相手はその中からランダムに１枚選択する。
相手が選択したカード１枚を自分の手札に加え、
残りのカードをデッキに戻してシャッフルする。

闇の書の意思が腕に装着された、漆黒のデュエルディスクにカードをセットする。
すると色あせた様な世界に変化が起きる。結界内部の街の色が、不気味な模様で彩られた。

白い道路に紫色の空。視界に映る山や海は橙色や緑色など、通常ならば考えられない色をしている。
そしてその様子は地上に避難していた一般人たちも確認していた様で、突如変化した街の様子に不安の声が上がっている。

「そして私はデッキから≪青眼の白龍≫をゲームから除外し、手札から≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫を特殊召喚」

「ッ！？　１ターンで上級モンスターを！？」

青眼の白龍
星８／光属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
高い攻撃力を誇る伝説のドラゴン。
どんな相手でも粉砕する、その破壊力は計り知れない。

Ｓｉｎ　青眼の白龍
星８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
このカードは通常召喚できない。
自分のデッキから「青眼の白龍」１体をゲームから除外した場合に特殊召喚できる。
「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側

表示で存在できない。
このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

闇の書の意思のフィールドに、デュエルモンスターズで最も有名なモンスターが召喚される。
その名は青眼の白龍。ブラック・マジシャンと共に、デュエルモンスターズを代表するカードだ。

だが、闇の書の意思のフィールドに召喚された青眼の白龍はその姿が通常の物とは違う。
白いはずのその身体は、まるで罪によって汚れてしまったかのように、黒く染まっていた。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

闇の書の意思　手札２
場　Ｓｉｎ青眼　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

なのは手札５→６

「私は手札から≪太陽の神官≫を特殊召喚！」

「！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫か……」

なのはへとターンが渡り、なのはの場に異国の司祭の様な服に身を包んだ神官が現れる。
その様子に闇の書の意思は僅かに眼を見開いた。どうやらなのはの戦法をしっているらしい。

しかし太陽の神官の攻撃力は１０００。仮に奈落の落とし穴が伏せてあったとしても発動は出来まい。
なのははそう推察すると、更に手札を切る。そして呼び出すのは自身のエースモンスター。紅蓮の悪魔竜が咆哮を上げる。

「さらに≪氷結界の風水師≫を召喚！
そして場のレベル５≪太陽の神官≫にレベル３≪氷結界の風水師≫をチューニング！
王者の鼓動、今ここに列をなす……！　天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊しつくして！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

なのはの場に現れた紅蓮の悪魔竜が、天へと轟かんほどの咆哮を上げた。
そして打ち倒すべき相手――Ｓｉｎ　青眼の白龍へと視線を向ける。
両者睨みあった。

両者のにらみ合いが激しさを増す中、なのはの腕にも変化が訪れる。
それは赤き巫女のアザによる発光。煌々となのはの腕のアザが光り、戦闘態勢を知らせる。

「さらに手札から≪紅蓮魔竜の壺≫を発動！　デッキからカードを二枚ドロー！」

なのは手札３→４

「バトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫に攻撃！
　灼熱のクリムゾン・ヘルフレアァアアアアアッッ！！」

紅蓮の悪魔竜が咆哮を上げ、手に灼熱の炎を宿らせて闇の書の意思の場に存在するドラゴンへと向かう。
なのはの従えるドラゴンに対抗する様に闇の書の意思の場のドラゴンも口の中にブレスを溜め、発射する。

レッド・デーモンズに零距離で放たれたブレスはたしかにレッド・デーモンズを破壊。
しかしその代償として、闇の書の意思のフィールドに存在していたＳｉｎ　青眼の白龍もまた、破壊される。

「私はカードを一枚伏せて、ターンエンド！」

「お前のエンドフェイズ時、伏せカード発動。≪スキルドレイン≫だ」

闇の書の意思ＬＰ４０００→３０００

「あッ！」

スキルドレイン
永続罠
１０００ライフポイントを払って発動する。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化
される。

ターンを終えたなのはとフェイトが、驚きの声を上げた。
その原因とは、闇の書の意思が発動したとある永続罠カード。

このカードは１０００ライフを払うことにより、場のモンスターの
効果を無効にする効果を持っている。
ある一部のモンスターの効果を無効にすることは出来ないが、発動
されればこれ以上ないほど厄介なカードである。

なのはとフェイト。両者のデッキは効果モンスターの効果に頼った
デッキ。
効果を封じられるのはかなり厳しく、早急にスキルドレインを破壊
しなければならない。

「さて。悪いがお前たちに次のターンは訪れない。
私のターン、ドローフェイズ時に≪Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ≫の効果
発動。
通常のドローを放棄し、デッキから三枚の【Ｓｉｎ】と名のつい
たカードから一枚を相手がランダムに選択。
さぁ、一枚選べ」

「くっ……！　真ん中を選択します！」

「残りのカードをデッキに戻し、シャッフル。
そして選択されたカードを手札に加える」

闇の書の意思手札２→３

「不味い……。モンスターをサーチされた！」

「私はエクストラデッキから≪サイバー・エンド・ドラゴン≫を除外。
そして手札から≪Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン≫を特殊召喚させてもらう」

サイバー・エンド・ドラゴン
融合・効果モンスター
星１０／光属性／機械族／攻４０００／守２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン
星１０／闇属性／機械族／攻４０００／守２８００
このカードは通常召喚できない。
自分のエクストラデッキから「サイバー・エンド・ドラゴン」１体をゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。

「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

闇の書の意思の場に新たに特殊召喚されたモンスター。それは三つの首を持った、機械で出来た竜だった。
翼と顔は黒く塗り潰れ、並々ならぬ存在感を現している。その様はまさに帝王（カイザー）そのもの。

なのはは自身の手札、場の伏せカードを確認し、冷や汗を流す。
このままでは、Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃でモンスターを失う。

「（私の伏せカードは≪リビングデッドの呼び声≫と≪突進≫……！　どうしよう！）」

「バトルだ。≪Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン≫で高町　なのはにダイレクトアタック」

「クッ！　伏せカードオープン！　≪リビングデッドの呼び声≫！
このカードの効果で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を特殊召喚！
さらに伏せカード≪突進≫を発動！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫の攻撃力を７００ポイントアップ！」

突進
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力はエンドフェイズ時まで７００ポイントアップする。

迷っては居られないとばかりに、なのはは伏せていたカードを発動する。
そのカードの効果により、切り札であるレッド・デーモンズは墓地から蘇生され、攻撃力が上昇する。

だが、闇の書の意思はなのはの行動を読んでいたと言わんばかりに、口元をニヤリと緩めた。

「手札から速攻魔法≪リミッター解除≫を発動。
≪Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン≫の攻撃力を二倍にする」

「な――――ッ！？」

レッド・デーモンズＡＴＫ３７００　Ｓｉｎサイバー・エンドＡＴＫ８０００

「破壊だ。エターナル・エヴォリューション・バーストッ！」

闇の書の意思の発動したカードの効果により、Ｓｉｎサイバー・エンド・ドラゴンの攻撃力が二倍になる。
これでは到底、レッド・デーモンズ・ドラゴンで戦闘ダメージを抑える事が出来ない。手札に視線を落とし、打開策を探る。

だが、無駄だった。手札には相手の魔法・罠カードを無効にし、破壊すると言う様な妨害カードは無い。
それ以前に、その様な妨害カードの大半は罠カードだ。現在のなのはの手札はモンスターがほとんどを占めている。

「なのは！」

「なのはぁっ！」

「なのはさん！」

Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンの口の中に、膨大なエネルギーが充填されていく。
その様子をなのははただ、見守ることしか出来ない。既にサレンダーする時期を見誤っていた。

背後から聞こえた鬼柳とプレシア。そして隣に滞空しているフェイトの必死な声に、なのははクスリと笑う。
ごめんね、と。感情任せにデュエルしたばかりに、一方的に負けてしまうなんて。デュエリスト失格も良いところだ。

でも、確信している。きっと、鬼柳がどうにかしてくれる。負けた自分を助けてくれる。
そんな予感があった。だからなのはは笑みを浮かべ。だが、負けて悔しそうな笑みを浮かべて、鬼柳に告げる。

「鬼柳さん、ごめんね。負け――――～～～ッッ！！」

なのはＬＰ４０００→０

しかしなのはのその言葉は、最後まで告げる事が出来なかった。
圧倒的な魔力がサイバー・エンド・ドラゴンの三つの口から放たれ、なのはに迫る。

せめて一矢報いようとレッド・デーモンズ・ドラゴンが反撃を行うが、圧倒的な暴力の前に屈する。
そして三つの口から放たれたブレスがなのはを直撃。声にならない悲鳴を上げ、なのはは後方へと吹き飛ばされる。

「なのは！」

「負けたプレイヤーは、消えるのみ……」

「ッ！　鬼柳さ――――――！」

自らの元へ吹き飛ばされるなのはに気が付き、鬼柳は慌てて手を伸ばそうとする。
しかしそんな鬼柳を引き止めたのは闇の書の意思。傍らに浮かんだ闇の書が妖しく光りはじめる。

それと同時、なのはの身体は徐々に光の粒子に変化していく。その様はまるで、世界に拒絶された者の様。
なのはと鬼柳がお互いに向けて手を伸ばすが、あと少しで鬼柳の手になのはの手が触れようとしたとき、なのはが消滅。

光の粒子へと姿を変え、闇の書へと吸収された。
その様子を、鬼柳はただ茫然と、見守ることしか出来ない。

「あ、あぁあ、あぁあああああああああッッッ！！！」

掴めなかった。仲間の助けを求める手を、掴む事が出来なかった。
その事実に思い至った鬼柳は、消えてしまったなのはを掴むように宙に手を伸ばす。

だが、何度宙に手を伸ばしても、なのはを掴むことは出来ない。
鬼柳の必死になのはを掴み取ろうとする哀れな叫びが、その空間に無慈悲に響いた。

※

「なによ……、何なのよ、これは！」

突如として変わってしまった街の様子に、アリサは狼狽した声を上

げる。
彼女のすぐ傍には友人であるすずかの姿が。彼女たちは習い事の帰り、この事件に巻き込まれた、
すぐ傍には一刻も早く情報を集めようと、周りの人間と情報交換を行っている大人たちの姿が。
一体、なにがどうなっているのか。空や海が不気味な色合いに変化し不安を覚え、アリサとすずかは抱き合う。

――――ドォォォォ……！

「ひゃぁっ！」

と、アリサとすずかが互いに抱き合いながら辺りの様子を伺っていると。
不意に遠くの方で、建物が崩れる様な破壊音が聞こえた。皆の視線が一斉に音の発生源へ向かう。
破壊音が聞こえた場所からは、濛々と土煙が上がっていた。そして宙に浮かんでいる三人の人物の姿が目に入る。
生憎と場所が離れており、宙に浮いている人物を特定する事は出来ない。しかし、彼らの傍らに浮いているモンスターに見覚えがあった。

「アレって、≪サイバー・エンド・ドラゴン≫!?」

「それに破壊されたのって……≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫

！？」

未だ健在しているのは機械で出来た三つ首の竜――サイバー・エンド・ドラゴン。
そしてそのモンスターに破壊されたのは、彼女たちの友人が持つエースモンスターだった。

「もしかして、なのはちゃんが闘ってるの！？」

「な――――！？」

空中で行われているデュエルの様子に、すずかがポツリと推測を口にする。
まさかそんな。アリサは咄嗟に言い返そうとしたが、言い返せる材料が少なかった。

なにせレッド・デーモンズ・ドラゴンはこの街ではなのはしか持っているデュエリストは居ない。
レッド・デーモンズ・ドラゴンは希少価値が高く、他人の元へ出回らないのだ。そう易々と手に入れられない。

「無事かい？　アリサに、すずか……だっけ」

「きゃあっ！」

夢中で空中に浮いているサイバー・エンド・ドラゴンを見つめていると、唐突に声がかかった。
すずかが悲鳴とともにアリサに抱き付き、アリサはすずかを抱き止めながら声が聞こえた方へと視線を向ける。
するとそこには、以前にフェイトに紹介された女性――アルフの姿があった。
見知った人物の登場にアリサはホッとため息を吐き、抱き付いているすずかを引き剥がす。

「アルフさん！　これはどう言うことですか！？」

「それがサッパリなんだよ。
街全体に結界が張ってあって、アタシじゃ手出し出来ないんだ」

「結界？」

「そう。魔導師や一般人。その垣根なく、結界の中に居るヤツらを閉じ込める結界。固さは一級品さ」

「な――！？」

アルフの告げた言葉に、アリサは信じられないと言う様な表情を浮かべる。事実、信じられない。
何故こんな結界を張ったのか。張った人物は何を目的として、こんな結界を張ったのか。理由が分からない。
尚もアルフに詰め寄ろうとするアリサだったが、不意にアルフにす

ずかともども抱きあげられてしまう。
思わずキョトンと呆けてしまい、茫然とした視線をアルフへ向けてしまう。するとアルフはニッと笑った。

「とりあえず此処から離れよう。
安全な場所とは言いづらいけど……、アタシ達の家に居ればこっちは安心だ」

「あ、う……。わ、分かりました……」

アルフの言葉に、アリサは渋々と同意を示す。実際、この場に居てもしょうがない。
ならば今回の件に詳しいであろうアルフの保護下にはいるのが得策だ。足を引っ張るつもりもない。

そしてすずかをアルフが抱き抱え、アリサがアルフの背中にくっつく。
アルフは人目が付かない場所まで向かうと、ビルの陰から飛行魔法で八神家へ飛翔する。

アリサはアルフの背中に抱き付きながら、現場で闘っているであろうなのはやフェイトのことを思い浮かべた。

※

「くっ！　私のターン！　ドロー！」

フェイト5→6

「私は手札から≪二重召喚≫を発動！
手札の≪ボルト・ヘッジホッグ≫を召喚し、さらに≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！」

なのはの消滅によって一時混乱していたが、フェイトはすぐさまデュエルに復帰した。
闇の書の意思の場にはモンスターは存在しない。発動したリミッター解除の効果で自壊した。

だが、予断を許さないのが今の状況。相手は高レベルのモンスターを一瞬で召喚する恐ろしい相手だ。
ならば相手が上級モンスターを特殊召喚する前に、こちらが攻め入れば良いだけの話。そしてデュエルに勝ち、なのはを奪還する。

「セットしていた≪スノーマンイーター≫を反転召喚！
そしてレベル3≪スノーマンイーター≫とレベル2≪ボルト・ヘッジホッグ≫に
レベル3チューナーモンスター≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！！」

「来るが良い。私の前では、いかなモンスターも無力に等しい」

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光差す道となれ！
シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ！　≪スターダスト・ドラゴン≫！」

三つのリングを極太の閃光が焼いた。その中から現れるのは、白銀の体躯のドラゴン。
召喚された星屑のドラゴンは主人を護る様に前に立つと、敵意を持った視線を闇の書の意思へと向けている。

どうやら本能で、闇の書の意思を敵だと判断したらしい。
フェイトもまた、敵意を持った視線を闇の書の意思へと向ける。

「バトルフェイズ！　≪スターダスト・ドラゴン≫でダイレクトアタック！」

「来るか。ならば伏せカード≪ドレインシールド≫。
相手モンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のライフを回復する」

ドレインシールド
通常罠
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分の数値だけ自分のライフポイントを回復する。

闇の書の意思ＬＰ３０００→５５００

「くっ！　カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札×２
場　スターダスト　伏せ×１

「此方のターン。場の≪Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ≫の効果発動。
デッキから【Ｓｉｎ】と名のついたカード三枚を選択し、相手がランダムに一枚選ぶ。
さぁ、選べ」

「……真ん中を選択します」

「良いだろう」

闇の書の意思手札１→２

「私はデッキから≪究極宝玉神　レインボー・ドラゴン≫を除外。
そして手札から≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫を場に特殊召喚する」

究極宝玉神　レインボー・ドラゴン
星１０／光属性／ドラゴン族／攻４０００／守　　０
このカードは通常召喚できない。
自分のフィールド上・墓地に「宝玉獣」と名のついたカードが合計７種類存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。
このカードを特殊召喚したターンに以下の効果を発動できない。
●自分フィールド上の「宝玉獣」と名のついたモンスターを全て墓地へ送る事で、

このカードの攻撃力は墓地へ送った数×１０００ポイントアップする。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
●自分の墓地に存在する「宝玉獣」と名のついたモンスターを全てゲームから
除外する事で、フィールド上のカードを全て持ち主のデッキに戻す。

Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン
星１０／闇属性／ドラゴン族／攻４０００／守　　０
このカードは通常召喚できない。
自分の手札・デッキから「究極宝玉神　レインボー・ドラゴン」１体を
ゲームから除外した場合のみ特殊召喚できる。
「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

新たに闇の書の意思の場に特殊召喚されたのは、全身に宝玉を埋め込んだ一体のドラゴン。
しかしそのドラゴンの姿も黒く染まっており、罪に囚われて全身が黒く染まった様にも見える。

攻撃力は先ほどのＳｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンと同じ４０００。
超えるには高すぎる攻撃力の壁に、フェイトは知らず知らずのうちに冷や汗を流す。

「バトルだ。≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃。
　オーバー・ザ・レインボー！」

Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴンの口の中に、夥しいほどの魔力が充填される。
そして臨海寸前まで貯め込まれたブレスが口の中から放たれ、フェイトの場のドラゴンへ向かう。

しかしフェイトもまた、むざむざやられるのを待っている訳ではない。
前のターンに伏せていたカードを発動させ、受けるダメージを最小限に抑える。

「伏せカードオープン！　≪シンクロ・ストライク≫！
効果でスターダストの攻撃力が１５００ポイントアップ！」

「！」

スターダストＡＴＫ２５００→４０００

「ごめんね、スターダスト……。
　迎え撃って！　シューティング・ソニック！」

攻撃力が上昇したスターダストは、フェイトの指示に従い反撃を行

う。
だが、いくら攻撃力を上昇させても、スターダストの攻撃力はＳｉｎ　レインボー・ドラゴンと同じ。
出来ればスターダストを犠牲にしたくは無かったが、ここでスターダストを破壊されればフェイトがピンチに陥る。
母親から受け取った大切なカードを無駄死にさせるのは避けたかったが、ここで負けてしまえばなのはとはやてを救えない。
フェイトは反撃を行っているスターダストに向けて、小さな声で謝罪した。
と、それを分かっていたのか。スターダストはコクリと頷くと、反撃のブレスを放つ。
そして放たれた二つのブレスは、お互いに命中。
激しい爆煙を上げながら、二体のモンスターは破壊される。
「クッ……！　だけど、これで１ターン稼げ――」
「言っただろう？　貴様に次のターンは訪れないと」
「――ッ！？」
「≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫が戦闘破壊された時、ライフを半分支払い手札・墓地からこのカードを特殊召喚できる。
出でよ≪Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン≫」
Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン
星１２／闇属性／ドラゴン族／攻５０００／守５０００

このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴン」以外の
「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターが戦闘またはカードの効果によって破壊された場合、
ライフポイントを半分払う事でのみこのカードを手札または墓地から特殊召喚できる。
「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。
闇の書の意思ＬＰ５５００→２７５０

なんとか相手モンスターの攻撃を受け切り、反撃を行おうとするフェイト。
しかしそんな彼女の目前に、新たに特殊召喚された「Ｓｉｎ」と名のつくドラゴンが現れる。

黄色の体躯に、何処か細長いその身体。しかし見た目とは裏腹に、攻撃力は５０００と言う怪物。
まさか。そんな。攻撃力４０００のモンスターをようやく討ち取ったと思ったら、今度は攻撃力５０００の怪物が出てくるなんて。

冗談も良いところだ。しかも今はバトルフェイズ。
バトルフェイズに特殊召喚されたモンスターは攻撃する権利を持っている。

「母さん、鬼柳。ごめ――――」

フェイトは素早く己の敗北を悟ると、傍らでデュエルを観戦していた母親と鬼柳に視線を向けた。
二人ともまるで夢でも見ているかの様な表情で、フェイトのことを見ている。それにフェイトは笑みを浮かべた。

せっかく鬼柳の結成したチームに参加したのに、自分が鬼柳の足を引っ張るなんて最悪だ。
だから彼女はごめんと謝る。自分の実力が低くて、鬼柳の足を引っ張ってしまうと。

だが、そんな彼女の謝罪の言葉も最後まで言い終える事が出来ない。
背後で闇の書の意思が攻撃宣言を行い、Ｓｉｎ　トゥルース・ドラゴンのブレスがフェイトに炸裂する。

「――――～～ッッ！！」

「フェイト！」

「フェイトォッ！」

凄まじい衝撃に、フェイトはその場から吹き飛ばされた。
咄嗟に鬼柳とプレシアが手を伸ばし、吹き飛ばされた自分を捕まえようとする。

「無駄だと言っている。敗者はただ、消えるのみ……」

しかし鬼柳とプレシア。二人の必死の行動も、無駄に終わってしまう。

闇の書の意思が静かにそう呟くと、フェイトの身体がキラキラと光りの粒子へと変わる。

徐々にこの世界から拒絶され、フェイトの居場所が闇の書の中へと移動していく。

せめて最後に、もう一度だけ母親と鬼柳の手に触れようと、フェイトは手を伸ばした。

けれど、その手が二人の手に届くよりも先に、フェイトは光の粒となって、この世界から消滅した。

「あ、あぁあああああああッッッ！！！」

仲間を。友達を。チームメイトを失い、胸の奥底からあふれ出る怒りと共に、鬼柳は咆哮を上げた。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　前編」（後書き）

中編はまだ執筆していませんので、暫しお待ちを。
それと活動報告でアンケートを取っていますのでご協力ください。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　後編」（前書き）

ようやっと登場出来た……！
ちなみにジャックの性格は若干丸くなってます。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　後編」

～海鳴市　某所～

消える。消えて行く。自分と言う存在が、世界から消えて行くのを高町　なのはは感じていた。
己の身体は光の粒子へと変化を始め、眼前に滞空している女性の持つ本へと己が変化した粒子が誘われている。

必死にそれに抗おうとするのだが、生憎と自分の身体は言うことを聞いてはくれない。
だからせめて、最後にもう一度だけ。大好きな人の顔を見ようと、彼女は身体をよじり、視線を向ける。

すると視界に飛び込んできたのは、信じられない物を見る様な彼――鬼柳の姿だった。
たしかに魔法と言うものを詳しく知らないなのはにとって、自分の身体が光の粒になって消えるのは初めてだ。

だが、まさかここで鬼柳の初めて浮かべる表情を見ることになろうとは思わなかった。
普段のクールさが消え失せ、茫然とした表情を浮かべている彼は年相応の青年にしか見えない。

なのはは新たに垣間見えた彼の表情に僅かに笑みを浮かべると、その世界から姿を消した。
彼女がその世界から消え去るその一瞬、煌々と煌めいていた腕のアザが、より一層激しく輝いたのを知らぬまま。

※

「――――ん？」

何処か近未来さを感じさせる街の一角。周りの建物よりも頭一つ分高い建物の中に、とある青年は居た。
Tシャツの上に白衣を着こみ、特徴的な髪形の下。左の頬には黄色い線――マーカーが施されている。

青年は懐かしい感覚を覚え、俯かせていた顔を上げた。そして視線を己の右腕へと視線を向ける。
するとそこには、着慣れた白衣の袖が見える。だが、彼が見ているのは袖の下に隠れた、己の右腕。

「（赤き竜のアザ……？）」

青年は白衣に包まれた腕に視線を向けながら、内心で首を傾げた。
おかしい。彼の右腕に刻まれていた赤き竜のアザは少し前に消えて

しまったばかり。

それなのに、自分の右腕から赤き竜のアザの気配がするのはどう言うことだろうか。

青年が己の首を傾げて考え込んでいると、不意に窓の外に違和感を覚える。慌てて視線を向けた。

するとそこには――――

「ッ！　赤き竜！」

仲間たちと離れ離れになった際に、姿を消した赤き竜が悠々と大空を飛んでいたのだ。

一体何がどうしたのか。まさか、また大きな事件が起こる前兆なのだろうか。青年は考える。

だが、青年が思考したのも束の間。彼の右腕に懐かしい感覚が走り、彼の腕に見慣れた赤いアザが浮かぶ。

それは彼が見ていた赤き竜のアザの一つ――ドラゴンヘッドの物。

突如として自らの腕にアザが浮かび、青年は驚く。

「なっ！　これは――――！」

青年が驚きの声を上げるが、腕に刻まれたアザは発光を止めない。

光は青年がいる建物の一室を満たし、青年は部屋の中を確認できないほどの光に目を覆う。

そして青年が目を覆うと同時、僅かに彼は浮遊感の様なものを感じた。
それと同時。青年がいる街――ネオ童実野シティから離れた都市において、もう一人の青年もまた、姿を消した。
その二人の青年の名は――不動　遊星とジャック・アトラスである。

※

「グレアム提督。それで、リーゼアリアとリーゼロッテは何処なのです？」
時空管理局の本局のとある一室。その室内にあるソファに腰掛け、クロノは僅かに苛立っていた。
それと言うのも、原因は彼の目前に座る老紳士――ギル・グレアムの応答のせいである。
彼とて何かと眼を掛けてくれた恩人にこの様な想いを抱くのはいかがなものかと思ったが、そうも言っていられない。
何故ならば、彼は使い魔の二人を呼ぶと言ったきり、無意味な話ば

かりを続けてくるのだから、クロノにとっては堪ったものではない。
話の内容とは主に、神とは絶対的な力を持つものである。神は力なき人間に力を与え、世界をより正しい世界へと導こうとしている。等と言う、オカルトも良いところな話ばかり。クロノはグレアムの様子に苛立ちを覚えつつも、彼の様子に違和感を覚えた。
以前の彼ならば、神と言うオカルト的なものは信じないと思っていた。
では、今クロノの前に座っているグレアムは何だ。神と言う存在に心を奪われた信者の様だ。

「……ふむ。そろそろ頃合の様だな」

「？　なにを――」

そしてクロノの言葉にグレアムは我に返ると、視線を室内のモニターに向けた。
一体何をするつもりなのか。そう思い、クロノもまた、視線を室内のモニターに向ける。

「ッ！？　何だ、これは！」

モニターに映る映像を見て、クロノは思わず怒声を上げた。
室内にあるモニターには、とある世界――第９７管理外世界の様子が映し出されている。

平時ならばそれほど気にも留めない映像なのだが、彼が見ている映像は大分異常なものとなっていた。
モニターに映るのはとある街。その街は強固な結界に覆われ、魔導師はおろか一般人すら閉じ込められている。

『クロノ君聞こえる!?　大変なの！　第97管理外世界で無許可での大規模な魔法行使を確認！
街にはかなり強い結界を張られてて――――手出し出来ない！』

「なんだって!?」

モニターに映る映像に気を取られていると、クロノのすぐ傍に新たなモニターが出現する。
画面に映し出されているのは彼と同じ船に乗るクルー――エイミィ・リミエッタ。

彼女もまた突然の事態に面喰っているのか。ドタバタと慌てている様子が見て取れる。
そして彼女の背後では、クロノの母親であるリンディがクルーを急かさせ、出航の準備をしていた。

「なに、問題ないよ。クロノ」

「ぐ、グレアム提督……？」

「アレらは全て必要なことだ。

闇の書を破壊するために、必要な――――」

慌ててモニターに詰め寄ろうとしたクロノを、グレアムの静かな声が制止する。
だが、何処か上の空のその声音に、クロノは思わずグレアムを振りかえった。

そして眼に入ったのは、何処までも続く闇の様な黒。その黒は、グレアムの両目から放たれている。
アレは誰だ。クロノは思わず、自分自身に問い詰めた。あんな顔をする恩人を、あんな顔をするグレアムを自分は知らない。

クロノがグレアムの突然の変貌に驚いている中、件のグレアムと言えば落としていた腰を上げた。
そしてクロノを待つこともなく、自室を出て転送ポートへと向かう。
向かう先はただ一つ。

己の友人を殺し、世界に無意味な死を撒き散らしているロストロギア――闇の書のある場所だ。

「待っているが良い。友の嘆き、ここで晴らさせてもらう」

※

「此処……何処だろう？」

闇の書の意思とのデュエルに敗北した後、フェイト・テスタロッサは見慣れぬ街に居た。
道行く人たちは足早に、フェイトのすぐ傍を去っていく。此処は何処で、一体何が起こったのだろう。

「えと。私の名前はフェイト・テスタロッサ。母さんが一人で、使い魔が一人……」

フェイトはひとまず、混乱しそうになる自分を押し止めるために状況整理を行う。
そして自分に関する基本的な事柄について問題無く思い出せると、ホッと安堵の息を漏らした。

どうやら記憶障害などを併発した様子は無い。ならば、自分が現在いるこの場所は何なのだろうか。
内心でコテンと首を傾げながら、フェイトはキョロキョロと周囲を見渡す。だが、その景色に見覚えは無い。

しばしうーんと考えてみたが、思い出すのはつい先ほど。此処に来る前に行ったデュエルで負けたことだけ。
フェイトはその場に立ち尽くしながら、ポリポリと頭を掻いて反省

する。らしくないデュエルをしてしまった。

相手が自分のデッキに対するメタカードを使って来たのもそうだが、まさかそのカードを破れずに終わるとは。

なんとも情けない自分のデュエルに、彼女は思わずため息を吐きたくなる。やはりまだ、デュエルの腕を鍛えなければ。

「フェイト」

「ふぇ？」

と、フェイトが胸の内で新たな決意を固めていると、唐突に誰かに声を掛けられた。

その声は聞き慣れたもので、この声を出す人物をフェイトは一人しかいない。母親であるプレシアだ。

プレシアが助けに来てくれたのだろうか。そう心の中で思いながら振り返れば、そこにはやはりプレシアの姿が。

だが、彼女から発せられる雰囲気がいつもよりも刺々しい。フェイトの事をまるで、路肩に転がる石の様な眼で見ている。

「母さ――」

「母さん？　バカを言わないで。クローンのくせに」

安堵のあまり、彼女の口から母親を求める声が零れた。

だが、それに対して返ってきたのはプレシアの絶対零度の視線。

思わず息を呑み、フェイトは驚愕に目を見開いた表情でプレシアを見つめた。

するとプレシアはそんなフェイトを鬱陶しそうな表情で一瞥すると、視線を隣に向ける。

「――――!?」

それに釣られるように、フェイトもまた視線をプレシアの隣へと動かした。

するとそこには、自分とそっくりの顔をした一人の少女が立っている。

顔の形や背丈。頭の両脇で括っているツインテールまでなにもかもがそっくりで。

彼女は一体誰なのだろうか。混乱しているフェイトはプレシアの傍らに立つ少女を見つめる。

「アリシア。このクローンはアナタの好きになさい」

「うん、ママ」

「――――!?　か、母さ――!」

プレシアの口にした少女――アリシアの名に、フェイトは驚愕に眼

を見開いた。
アリシアと言えば、自分――フェイトの元となった少女のことである。

それが何故、自分の母親と共に居るのか。訳も分からず、フェイトは母親に詰め寄ろうとする。
だがそんな彼女の足を、プレシアの絶対零度の視線が押し止めた。
そして汚物を見る様な眼で告げる。

「黙れ、クローン」

「ッ！　か、母さ――」

「えい！　えい！」

母親から告げられたあまりの物言いに、フェイトの目尻に涙が溜まる。
そして思わず後ずさったとき、フェイトの身体に何かがぶつかり、ピチャリと濡れた。

緩慢な動作で視線を向ければ、そこには白い卵を手に持ったアリシアの姿が。
アリシアはフェイトが自分を振り返ったのを見ると、上機嫌な様子で卵を投げつけてくる。

咄嗟に回避しようとしたが、身体が動かずにアリシアの投げた卵がフェイトの身体に当たり、中身が飛び出す。
一体何故、と自分の身体へと視線を向ければ、両手足をバインドで

拘束されているのが目に見えた。こんなことを出来るのはこの場で一人。

「どうかしら、偽物。
所詮クローンは偽物なんだから、せめて本物を楽しませなさい？」

「アハハッ！　キャハハッ！！
どんどんぬるぬるになれ～！」

「母さ……」

虚ろな表情でプレシアへと視線を向ければ、彼女は依然として無関心な視線をフェイトに向けている。
そして彼女から告げられた言葉が、フェイトの胸を穿った。所詮、クローンは偽物。やはり、そうなのだろうか。

プレシアの言葉に思わず泣き出してしまいそうになるが、アリシアがそれを許さない。
何処からともなく大量の卵を取り出すと、それを笑いながらフェイトに投げつけて行く。

次第にフェイトに投げつけられた卵の数は数を増やし、いつの間にか、周りを無関心に通り過ぎていた通行人にも卵を投げつけられる。
偽物、と。クローンなど、消えてしまえと。そう、憎悪を宿らせた瞳で睨みつけられる度、フェイトの心は悲鳴をあげて行った。

「う……、あぁ……。き、りゅう……」

徐々にフェイトの心が崩壊しかけ、虚ろな表情で母親ではなく、鬼柳の名を呼ぶようになる。
誰よりも大好きな母親に拒絶されたせいだろうか。力無い仕草で手を動かし、鬼柳の姿を探している。

既にフェイトの足元は割れた卵の中身で汚れ、全身に卵の中身を被っていた。否、卵だけではない。
石や野菜など、ありとあらゆるものを投げつけられ、フェイトの心はボロボロだった。残る拠り所は鬼柳だけ。

ズッ、ズッと地面を這いずりながら、必死に鬼柳の姿を探している。
その様子を、プレシア達は背後で笑うばかり。
どうして。どうしてこんな酷いことをされるのだろうか。壊れかけた心で、フェイトは自らに訊ねる。

「きりゅう……きりゅう……」

やはり、自分がクローンだからいけないのか。自分が偽物だからいけないのか。
もしかして、プレシアも心の底でそう思っていたのかもしれない。
自分のことをクローンだって。

じゃあ、やっぱり消えた方がいいのかな。クローンは、やっぱり消えた方がいいのかな。
心の中でそう自問自答していると、彼女の前にコツコツ、と靴音を響かせながら一人の男性がやってくる。

鬼柳だ。いつもの灰色のコートに身を包み、首の辺りでブラブラとハーモニカを揺らしている。
いつもの鬼柳だ。鬼柳、助けて。言葉にならないながらも必死に言葉にしながら、フェイトは鬼柳に手を伸ばす。
そしてあと少しで鬼柳のコートに手が触れようとしたとき。
彼はコートのポケットから、白い小さな卵を取りだした。それを見て、フェイトの目が強張る。
しかし鬼柳は止まらない。ニヤッと不気味な笑いを浮かべると、手に持った卵を振り被りながら告げた。
――――この、偽物と
その言葉とともに、鬼柳は手に持った卵を投げつけようとする。
フェイトは鬼柳に言われた言葉がショックで、ピクリとも動けないでいる。
そして鬼柳が投げた卵が放物線を描き、フェイトの身体に命中しようとする。
あと五センチ。フェイトは鬼柳に投げられた卵を見つめ、ぼんやりとそんなことを思った。
なんだ。やっぱり鬼柳も自分のことは要らなかったんだ。偽物は必要ないんだ。
じゃあ、偽物はどうすればいいの。クローンは、何処へ行けばいいの。こんがらがりそうな頭で考える。

だが、考えるよりも先に、鬼柳の投げた卵がフェイトに当たりそうになり――――。

――――当たりそうになった卵は、フェイトの後方から放たれたブレスによって掻き消えた。

「……え？」

後方から放たれたブレスは卵だけでは飽き足らず、投げた張本人である鬼柳すらかき消す。

てっきり自分に命中するばかりだと思っていた卵が掻き消え、フェイトは素っ頓狂な声を上げた。

誰だろう。こんな偽物の自分を助けて、どうするつもりなのか。ぼんやりと心の中でそう思う。

そして虚空の様な虚ろな瞳で、フェイトは後ろを振り返った。すると飛び込んできたあまりの光の量に目を覆う。

振り返った先にあったのは、闇を全てかき消す様な力強い光。その中心で、輝いているものが一つある。
左右へと力強く広げられた翼。手に生えた爪は刺々しく、触れた全てを切り裂いてしまいそう。そして特徴的な頭の角。

「すたー……だす、と……」

フェイトはそのドラゴンに見覚えがあった。母親が何よりも大切にし、滅多に触れさせてもらえなかったカード。
だが今は、そのドラゴンはフェイトのメインデッキに組み込まれている。そのドラゴンが何故、ブレスを放ったのか。

フェイトが茫然としている中、スターダストはその場から飛翔し、フェイトの元まで空を駆る。
そしてフェイトのすぐ傍までやってくると、左右に広げていた翼でフェイトを優しく包み込んだ。

それはまるで、家族が家族を抱き締める様な優しさで。壊れかけていたフェイトの心に、その優しさは染み渡る。
このドラゴンには拒絶されていない。それを認識した途端、フェイトの両方の目から涙が零れ落ちる。やっぱり一人は寂しい。

「ッく！　すたー……だすと……！
う、うわぁあああああッッ！！」

そしてフェイトは自分を包み込んでくれている星屑の竜に、抱き付

きながら涙を零した。
何かの温もりが、こんなに暖かかったなんて。誰かと一緒に居るのが、こんなにも嬉しいことだったなんて。

『フェイト、泣かないで。
あのママと私、それに鬼柳は偽物だよ』

「ふぇ……？」

『アレを見て』

フェイトがスターダストに抱き付いて泣いていると、スターダストが優しげな声で告げる。
その言葉の中に気になるものを見つけたが、それを疑問に思うよりも先にフェイトは視線を向けた。

するとそこには、ブレスに打ち抜かれたはずの鬼柳の姿が。彼はピクピクと痙攣していたのも束の間。
身体中から黒い煙を噴き出しながら、まったく別の何かへと変化する。それはまるで、ヘドロの様なものだった。

それにフェイトが驚いていると、さらにスターダストはブレスを放つ。プレシアやアリシア。
そしてフェイトに物を投げつけていた通行人全てに。それら全てはブレスを受けると、鬼柳の様に黒いヘドロの様なものへと変化した。

「ひっ！」

『気を付けて。あれは触れたら危ないよ』

フェイトの周りを縁を描く様に落ちていたヘドロが、一か所へと集まっていく。

その様子にフェイトが小さな悲鳴をあげると、スターダストが優しげな声で注意した。

それにコクリと頷き、一か所に集まっていくヘドロを見守る。するとヘドロは合体し、一つになった。

それはまるで、全身を腐らせた何か。身体を構成しているヘドロはその何かが歩くたびに、ボトッ、ボトッと落下する。

『己……、あと僅かで死に追いやれたものを……』

『私の妹を……死なせたりなんかしない！』

ヘドロで構成された何かは、スターダストへ憎悪にも似た視線を向ける。

それにスターダストは口からブレスを吐いて応戦。ヘドロで構成された何かが吹き飛ぶ。

「妹……？」

一方、スターダストの翼の中で護られているフェイトは、そのドラ

ゴンの言葉に首を傾げた。
おかしい。自分に姉と呼べる存在は居ないはずだ。アリシアかもと思ったが、アリシアは既に死んでしまっている。

では誰が？　疑問に思いながら視線をスターダストへと向けると、依然としてスターダストはヘドロの様な物と交戦していた。
スターダストはブレスを吐いて攻撃するが、ヘドロの様なものはお構いなしにフェイトとスターダストの元へ近づいてくる。

『貴様、何故庇う！　彼奴は貴様から居場所を奪ったクローンだろうが！』

『それがどうしたの！　フェイトはクローンだけど、私の妹だよ！私の願いは、妹が――フェイトが笑って幸せになってくれること！』

『クローンは所詮、偽物に過ぎん。
偽物は大人しく道化にでもなっていれば良い！』

『フェイトの生き方を決めつけるな！
フェイトの人生はフェイトのものだ！』

『ほぅ。それは殊勝な心がけだ。
だがそのせいで、自分が化け物になるのも構わんと言うのかね？
アリシア・テスタロッサ』

『フェイトが笑ってくれるなら私は
――――化け物にだって何にだって、なってやる！』

スターダストはそう叫ぶと、特大のブレスをヘドロの塊にぶつける。
すると多少は効果があった様で、ヘドロの塊はその場でタタラを踏んだ。

そしてフェイトは驚きの表情で、自分を護るスターダストに視線を向ける。
先ほど、ヘドロの怪物はスターダストのことをアリシアと呼んだ。
なら、スターダストはアリシアだと言うのか。

フェイトがスターダストへ視線を向けると、フェイトの視線を感じ取ったのか。
スターダストもまた、フェイトへ視線を向ける。すると、コクリと首を縦に振った。

「あり、しあ……？　本当に、アリシアなの……？」

『そうだよ、フェイト。
フェイトの傍に居たくて、頑張ったんだよ』

フェイトの訊ねる言葉に、スターダスト――アリシアは笑っている様な声で応える。
まさか、そんなことがあるのだろうか。死んだ人間が、カードになって蘇ることなど。

しかし実際に、スターダストは自分をアリシアだと言っている。
こんな自分のために、頑張ったと言っている。それがとんでもなく嬉しくて。でも、申し訳なかった。

『ちぇりゃ！』

「わひゃ！？」

と、考え込んでいるフェイトの頬を、スターダストはそのかぎ爪で引っ張った。

一歩間違えばスプラッタ寸前の光景だが、スターダストが加減しているのか。スプラッタになる様子は無い。

『今、私に対して申し訳ないとか考えたでしょ！』

「え？　え？」

『全然申し訳なくなんかないよー！
妹のために頑張るのは、お姉ちゃんの役目なんだぞ！』

「！　いもう、と……」

頬をムニムニと引っ張られ、赤くなった頬を擦っているとスターダストが抗議する。

その様子はまさに生きている人間そのもの。その人間臭い動きに、フェイトはスターダストがアリシアだと理解した。

そしてスターダストは言いたい事を言えたからなのか。腰に手を当てて「ムンッ！」と胸を張っている。

もしも身体がアリシアならば微笑ましい光景だが、スターダストの姿で行われてはシュールなだけだった。

『フェイトの知ってるママは、フェイトをクローンだからって差別しないよ。
　フェイトの知ってる鬼柳は、フェイトがクローンだからって仲間外れにしないよ』

「……ホント、なのかな」

スターダストの語りかける声に、フェイトは小さな声で訊ねた。
本当に、二人は自分を差別しないでくれるのか。仲間はずれにしないでくれるのか。

必死に心の中で大丈夫だと自分に告げるのだが、先ほど見た二人の顔が脳裏に浮かぶ。
それが恐怖を呼び起こし、素直に大丈夫だと言えなかった。だが、そんなフェイトを見てアリシアは言う。

『そうだよ！　だって、二人ともフェイトのことを「クローンのフェイト」なんて見てないよ！
　二人とも「フェイト」って言う、一人の女の子を見てるんだよ！
　そこに「クローン」って言う前置詞は必要ないよ！』

「……ホントに、必要無いの……？」

『うん！　それに鬼柳の言葉を忘れたの？　鬼柳は言ったよ。

仲間の出生が少し変わってたくらいで、鬼柳は仲間を裏切ったりはしないよ』

「……あはは。そう、だったね。鬼柳は、優しいから……」

アリシアの言葉で、徐々に以前の二人の顔を思い出すことが出来た。自分を見て、鼻血を垂らしながら興奮している大好きな母親。その様子を見て、苦笑している鬼柳。

プレシアが一人でバカ騒ぎをして、それに自分が振り回されて。そして鬼柳と一緒に騒ぎを抜け出して騒ぎを一緒に見る。そんな以前の様子を思い出して、フェイトの目から涙が零れた。戻りたい。こんな世界から抜け出して。自分の大好きな二人の元へ。

『此処から出よう、フェイト。そしてママと、鬼柳に会って存分に甘えよう。

自分はこんなに頑張ったんだって。自分はこれだけ、みんなのことが大好きだって』

「――――うん！」

『さぁ、弱い自分を壊して。ぶつかる壁を壊して。

そうすればフェイトは――今よりも、ずっとずっと、強くなれるから！』

アリシアのその言葉とともに、傍らで自分を護っていたスターダストが両の翼を広げる。

そして翼を広げたスターダストの周りを風が渦巻き始め、スターダストを戦闘態勢へと移行させる。

胸に煌めくのは猛々しいエネルギーを宿した蒼い宝石。胴体を鎧で護り、より攻撃的なフォルムへ移行する。

その姿を戦闘形態――／バスターへと移行させたスターダストは、天へ轟かんばかりの咆哮を上げた。

「そうだよね。弱い自分のままじゃ、鬼柳の邪魔になっちゃう。もう、負けるのはイヤだ。デュエルに勝って、鬼柳と、みんなと一緒に満足したい！」

フェイトの瞳に光が宿る。すでに先ほどの壊れそうな色はその瞳には見えない。

折れた心を再び固め、フェイトは眼前に構えるヘドロの様な怪物を見据える。

するとどうだろう。さきほどまでおどろおどろしいと思っていた怪物が、怖くない。

腕に描かれた赤き巫女のアザが煌々と煌めき、フェイトに未知のエネルギーを送っている。

しかし、そのエネルギーは怖くない。逆に何処か、暖かさを感じさせる。

もう、大丈夫。自分はこれから強くなる。母親と一緒に居たいから。

鬼柳と一緒に居たいから。

だからまずは、あの怪物をやっつける！

「お願い！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫！
あの怪物をやっつけて！　私を、元の世界に戻してッ！」

『うん、いくよ！　フェイト！』

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の攻撃！
アサルト・ソニック・バーン！」

フェイトの出した号令と共に、スターダストの口から溢れんばかりのブレスが飛び出す。
そのブレスの量は今まで見てきた中でも、最高の一撃だった。そのブレスが、真っ直ぐに怪物に向かう。

怪物は咄嗟に腕を振り被って防御しようとするが、ブレスの攻撃力の高さに防御を貫かれる。
そしてブレスは怪物に直撃。怪物は耳障りな断末魔を上げながら身体を蒸発させ、その姿を消滅させる。

「出口？」

そして怪物が消えて行くのと同時、フェイトが閉じ込められていた空間に亀裂が走り、白い光が溢れだす。
ようやく出れるのだろうか。心の中でそう疑問に思いながら、目を細めて見ていると見慣れぬ物体が視界に入った。

まるでバイクの様な乗り物。赤い体色をしており、コックピット部には翼の様な物が生えている。
フェイトはその翼の様な物に、見覚えがあった。あれは鬼柳がDホイールにデュエルディスクを付けたのと同じだ。

ならば、あの乗り物はDホイールなのだろうか。フェイトがそう疑問に思っていると、乗物から一人の人物が降りる。
元よりその乗り物は一人用だったのか。他に乗っている人間の姿は見えない。

乗物から降りた人物はヘルメットを取らぬまま、フェイトに歩み寄る。
フェイトは僅かに警戒した表情を見せたが、謎の人物の言葉によって僅かに警戒を解いた。

「懐かしい仲間の名前を聞いた。アンタは、鬼柳の仲間なのか？」

「！　鬼柳を知っているの？」

「あぁ。俺は元チームサティスファクションメンバー。――――不動　遊星だ」

ヘルメットを被った人物は自分の名――遊星と告げると、被っていた赤いヘルメットを取る。
そしてヘルメットの下から現れた何処までも真っ直ぐな視線に、フェイトは思わず黙り込んでしまった。

※

「あにゃぁ。此処、どこぉ……？」

闇の書の意思とのデュエルに敗北したのち、なのはは見慣れぬ家の中に居た。
あちこち動き回って家の中を探索してみたのだが、生憎と今いる部屋からは出られない。

一体此処は何処で、何がどうなっているのだろう。きっと鬼柳やプレシアが心配しているはず。
そう思うといてもたっても居られないのだが、部屋から出られないので部屋の中をうろうろするばかり。

いい加減、疲れてしまった。やる事もないので不貞寝しようかなとなのはが考えていると、不意に部屋の戸が開く。
誰だろうか。ゴロンと横になっていたソファから顔を上げながら、なのはは入り口を伺った。するとそこには見慣れた男性。

「うにゃ？　お兄ちゃん……？」

「なのは」

その男性――恭也は室内に居たなのはを見つけると、ホッと安堵したように息を吐いた。
はて。一体どうして兄が此処に居るのだろうか。なのはは首を傾げながら、ソファの上で居住まいを正す。

「良い子にしていろと言っただろう？　母さんが心配していたぞ」

「――――え」

恭也の言葉に、なのはは思わず息を呑んだ。今、恭也は何を言った？良い子にしていろと、言ったのだろうか。それはなのはが苦手とする言葉に他ならない。

なのはは咄嗟に恭也に問い詰めようとしたのだが、彼の背後から新たな人影が現れ、中断される。
その人影とは姉である美由希。そして両親である士郎、そして桃子の姿だった。

そして現れた家族はそれぞれが良い子にしていろ。心配をかけさせるなと口々になのはに告げる。
何が何だかわからない。だが、状況が不味いことくらいなのはも承知している。慌てて彼女は口を開いた。

「お、お父さん！　なに言ってるの！？

わ、わたし鬼柳さんとチームサティスファクションを――――」

「バカなことを言っちゃだめだ。
あんな危ない人といさせられないよ。家で大人しくしていなさい」

「――――～～ッ！！」

しかしなのはが口を開いても、士郎の容赦のない言葉がなのはを襲った。
おかしい。父親である士郎が鬼柳に対してこの様な言葉を吐くとは思えない。

そしてあれよあれよとなのははソファに座りなおさせられ、両脇を両親で固定される。
何が何だかわからないなのはは抵抗できるはずもなく、チョコンとソファに座ってしまった。

「ん？　ダメじゃないか、こんな危ないもの。没収だ」

「え？　あ！　わ、私のデッキ！」

「なのはは家で良い子にしていなさい」

「や、止めて！」

なのはがソファに腰掛けていると、腰のデッキホルダーに目がとまったのか。

士郎がなのはのデッキを没収してしまう。咄嗟になのはは取り返そうとするが、大人である士郎には敵わない。

尚も士郎を止めようとするのだが、隣に腰掛けている桃子がなのはを抑え込み、動きを封じる。

そして奪われたデッキは室内にあった灰皿の上に置かれる。イヤな予感を覚え、なのはは必死に拘束を抜け出そうとする。

だが、どう言う訳か桃子の自分を抑える力が強い。まるで岩にしがみ付かれているかの様に、身体が動かせない。

そんななのはが悪戦苦闘していると、士郎はゴソゴソとズボンのポケットを漁る。そして中から取り出したのはライター。

「お、お父さん……？　な、何を……」

「何を？　決まってるじゃないか。なのはが良い子になる様に、燃やすんだよ」

「――――え？」

士郎の言葉の意味が分からない。今、士郎は自分のデッキを燃やすと言っただろうか。

その事実を理解した瞬間、なのはは狂った様に父親を止めようと声を荒げる。

曰く、それはなのはの魂のデッキ。とても大切なカード達で構成された、唯一無二のデッキなのだと。

だがしかし、士郎はなのはの言葉に耳を貸そうとはしない。カチッ

と火を灯し、なのはのデッキケースを炙る。

「や、止めてお父さん！　デッキを燃やさないで！」

「それはダメだ。これがあるから、なのはが良い子じゃ無くなる。だから、燃やすんだよ」

「だったら、だったら良い子になるから！　だから、だから燃やさないで！」

桃子の拘束から抜け出そうと必死に抵抗するが、依然として桃子の拘束は緩まる様子を見せない。
そして士郎の持つなのはのデッキケースの端から黒煙が上がるのを見て、なのはは一層慌ててもがく。

なにせ、あのデッキには命よりも大切なカード達が入っているのだから。
幼い頃から自分と共にあったサイレント・マジシャン。そしてふとした拍子に手に入れたレッド・デーモンズ・ドラゴン。

全てのカードの入手経路を思い出そうとすれば、思い出せるほど思い入れのあるカード達。
それを燃やされる。それはつまり、なのはの命が消えるのと同じ意味である。故に、なのはは必死に抵抗する。

「止めてお父さん！　良い子になる！
良い子にするから……だから、燃やさないでぇ！」

いつの間にかなのはの両目からはボロボロと大粒の涙が零れおち、なりふり構わず父親を止めようとしている。
だが、士郎の持つライターがなのはのデッキケースの傍から離れる様子は無い。そして徐々に黒煙の量が多くなり、炎が燃え移りそうになる。

「痴れ者が！」

そして、あと僅かでなのはのデッキを燃やそうとするその炎は、唐突に飛んできた何者かの蹴りによって鎮火した。
士郎の持つライターに蹴りを放った人物はそのままの勢いで、ライターを片手に持つ士郎を蹴り飛ばす。

その際に士郎が手放したなのはのデッキケースを取り返すのも忘れない。
なのははそんな突然の乱入者に驚いた表情を浮かべながらも、自分のデッキが無事だったことに安堵の息を漏らした。

「デュエリストの命とも言えるデッキを燃やすとは、言語道断だ！」

そして続けざま、乱入者は傍に控えていた恭也と美由希を蹴り飛ばす。
その様子は軽やかで、喧嘩慣れしていることが見て取れた。

そして乱入者はクルリとこちらを振りむき、なのはを拘束している桃子を見据える。
正直家族に手を上げられて心中正常ではないが、デッキを燃やそうとする家族は正気とは思えない。

乱入者はなのはを拘束している桃子を殴り飛ばすと、ふぅと嘆息しながらなのはにデッキを差し出した。
「にゃ！」と慌ててなのはは、デッキが無事かどうか確認する。するとケースの端が燃えただけの様で、デッキは無事だった。

「ホッ。よ、良かったぁ～……」

「デッキは無事の様だな」

「あ、はい。ありがとうございました！」

なのはが安堵のため息を吐き、命の恩人とも言える乱入者に視線を向ける。
まず目に飛び込んできたのは何処までも真っ直ぐなその瞳。しかし、圧倒的な存在感がある。

逆立った髪は金色で、全身を白いライダースーツの様なもので着こ

んでいた。
腕には妙に長いデュエルディスクを装着している。はたして、彼は一体誰なのだろうか。

「それと女。貴様に聞きたいことがある」

「え？　あ、はい。なんでしょう？」

「貴様、鬼柳と縁がある者か？」

なのはが金髪の男性を見て内心で首を傾げていると、不意に声を掛けられた。
思わずどもってしまったが、男性は特に何かを言うでもなく、なのはに訊ねる。

その内容とは鬼柳と縁があるかどうか。それに思わずなのはは首を傾げてしまう。
どうして此処で鬼柳が出てくるのだろう。疑問に思うが、答えない訳にもいかずになのはは答える。

「はい。二代目チームサティスファクションメンバー、高町　なのはです。
　鬼柳さんは二代目チームサティスファクションのリーダーさんですよ」

「！　チームサティスファクション……」

「え、えと。どうかしましたか？」

なのはの言葉に、突然男性が黙り込んだ。なにかいけないことを言ってしまったのだろうか。

沈黙を続ける男性の前でなのはがオロオロしていると、唐突に金髪の男性は大声で笑った。

そんな突然の行動になのはは面喰うが、金髪の男性は意に介した様子は無い。

まるで愉快なものを見た。そう言っている様な表情で、男性は笑みを浮かべている。

「そうか。鬼柳が新たにチームサティスファクションを結成したか」

「！　チームサティスファクションを知ってるんですか？」

「知っているも何も、初代チームサティスファクションのメンバーだ。

――ジャック・アトラス。詳しいことは鬼柳のヤツにでも聞け」

そう言って金髪の男性――ジャック・アトラスは、面白いものを見る様な視線をなのはに向けた。

七話　「絆の英雄と荒ぶる魂　後編」（後書き）

次回予告

闇の書の中で、なのはとフェイトが出会った二人。
彼らはかつて、鬼柳と共にチームを組んでいた仲間だった。

なのはとフェイトは二人に誘われるまま、闇の書内部でデュエルする事に。
二人はそれぞれ切り札である／バスターを召喚するが、二人の青年はさらに上を行く。

シンクロ召喚を超えるシンクロ召喚――アクセルシンクロの使い手。
そして紅蓮の悪魔と交わった末に召喚される荒ぶる魂の結晶。

二人は果たして、二人の青年に勝つ事が出来るのか。
次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

「猛攻！　流星龍＆紅星龍」
ライディングデュエル・アクセラレーション！

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　フェイトｓｉｄｅ」（前書き）

今回はフェイトサイドのお話です。
次回はなのはサイド。そして鬼柳さんサイドと続きます。

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　フェイトｓｉｄｅ」

～海鳴市　某所～

「はぁっ、はぁっ……！　何なんだ、一体！」

結界に包まれ、不気味な様子を見せる海鳴の街を、ユーノはひたすらに駆けていた。
クロノとプレシアの手によって八神家で体調を整えていた彼は、外の様子に気づかなかったのだ。

それと言うのも、不眠不休で資料探しに精を出してしまった様で、先ほどまで泥の様に眠っていた。
そんな彼が目を覚ましてみれば、外の様子がおかしい。慌てて外に出てみれば、正体不明の結界が張ってあった。

まさかプレシアやアルフがこの様な結界を張るとは考えにくい。彼女たちとて許可なしに魔法を行使するバカではないはず。
では誰が――と、ユーノが高速で思考しながら街を走っていると、前方に見慣れた三人組を見つけた。鬼柳、プレシア、アルフである。

「プレシアさ――――」

「離せ、プレシア！　なのはとフェイトを助けないと……！」

「分かっているから、少し落ち着きなさい！」

ユーノは三人に声を掛けようと手を上げたが、三人の様子がおかしいことに気が付いた。
いつもクールな様子で大人びた冷静さを見せる鬼柳が、その冷静さを失い感情的になっている。

まるで親の敵の様な目線を、頭上――宙に浮かぶ一人の魔導師に視線を向けていた。
ここでユーノは、頭上に見慣れぬ魔導師がいることに気づく。どうやらビルの陰で気付かなかったようだ。

「あぁ、ユーノ。丁度いいところに」

アルフは茫然としているユーノを見つけると、苦笑いを浮かべながら彼に声を掛ける。
ユーノは未だ暴れている鬼柳とプレシアから視線を外すと、まずはアルフに事情の説明を願い出た。

「あ、アルフさん？　鬼柳は一体……？」

「なのはとフェイトが闇の書にやられちまってね。
仲間を助けられなかったって、鬼柳が暴れてるのさ」

チラ、と視線を鬼柳へ向けながら、アルフは煮え切らない表情を浮かべる。

どうやら彼女も鬼柳と同じ気持ちの様で、大事な主人であるフェイトを助けられず苛立っている様だ。

だが、ユーノはそんな彼女の様子よりも気になることがある。それは闇の書が起動していると言う事実。
アルフに説明を求めれば、なんと頭上に滞空している女性の魔導師が闇の書の主――八神　はやてだと言うのだ。

しかし、現在はやての意識は闇の書に乗っ取られており、彼女の人格は眠ったままらしい。
一刻も早く闇の書から制御を取り戻したいのだが、取り戻すには闇の書とデュエルして勝つしかない。

ならば何故、鬼柳にデュエルをさせて闇の書を負かさないのか。それは闇の書の使用するデッキとの相性に理由があった。
闇の書が使用するデッキとは、スキルドレインと言う効果モンスターの効果を無効にするカードを主体にしたデッキ。

それでいて自分は相性の良い効果モンスターでデッキを固めており、そのコンボになのはとフェイトは破れたそうだ。
いくら強力な効果を持ったモンスターでも、その効果を封じられればただのバニラモンスターに他ならないと言うところか。

「そう言えばユーノは闇の書について、何か調べてたね。
なにか闇の書についての情報は無いのかい？」

「とりあえず基本的なことは以前に話した通りです。
新しく分かった事は少なくて……」

アルフの言葉に、ユーノは新たに分かった事柄を説明する。と言っても、分かった事は一つだけ。
それは闇の書と言う名前は後から付けられた名前で、本来の名前は夜天の魔導書と言うことだけだった。

さすがにこれだけでは、闇の書を打倒する材料には成りえない。アルフと二人、どうするかと頭を悩ませる。
二人でその場で頭を抱えて悩んでいると、傍らで大声で言い争っている鬼柳とプレシアの会話が聞こえた。思わず耳を澄ませる。

「今のアナタが飛び込んで行っても、なのはさんやフェイトの二の舞いよ！
少しは対策を練りなさい！」

「そんなこと言ってる場合か！
こうしてる間にも、なのはやフェイトが危ねぇかもしれねぇんだ！」

「それは分かっているわ！　だから落ち着きなさい！」

ジタバタと暴れる鬼柳を視界の隅に捉え、やはり鬼柳は落ち着きを失っているとユーノは思う。
彼は仲間に対して思い入れがあるらしいが、生憎とユーノは詳しい事情を知らない。プレシアならば知っているだろうか。

そしてユーノは頭の中で思考を並列処理しながら、鬼柳とプレシアの会話についても考える。

たしかにプレシアの言うことはもっともだ。対策も無しに飛び込んでしまえば、前者の二の舞いだろう。

だが、鬼柳の言い分も分かる。まったく予想の付かない場所になのはとフェイトが囚われているのだ。

彼の慌てぶりも理解できなくもない。だが、ユーノとしてはプレシアの方を支持したい。勇気と無謀は違うのだ。

勇気と無謀をはきちがえれば、全体に迷惑がかかってしまう。そうなればなのはやフェイトにも迷惑がかかるだろう。

鬼柳はきっと、精神的に不安定なのだ。仲間を目の前で失ってしまい、情緒不安定になっている。そんなところだろうか。

「うぅ～……」

そして一方のアルフと言えば、こちらは鬼柳の言い分を支持している。

なにせ大事なご主人様が訳のわからない場所に閉じ込められているのだ。飛び出したくもなるだろう。

一体どうすれば良いのか。答えの出ない袋小路に思考が入り込みそうになったとき。

不意にパシンッと言う乾いた音が響いた。慌てて音が聞こえた方へと視線を向ければ、そこにはプレシアと鬼柳。

プレシアはどうやら、鬼柳に平手打ちを御見舞したようだ。右手を下に振り抜き、鬼柳を見据えている。

片や張り手を貰った鬼柳と言えば、茫然とした様子でプレシアを見

ていた。そしてプレシアは怒涛の攻撃を浴びせる。

「いい加減になさい！
アナタまで闇の書に破れてしまえば、誰があの子たちを助けるの！」

「そ、れは……」

「私だってフェイトやなのはさんの事は心配よ！　今すぐ助けに行きたいわ！
でも、負けたらあの子たちを助けられない！　そうなったら、誰が助けてくれるの！」

プレシアの言葉に、鬼柳の勢いが弱まる。彼の視線は、目の前で叫ぶプレシアに固定されていた。
何故ならば、プレシアは泣いていたのだから。娘が消えて不安で一杯で、それでも懸命に自分を奮い立たせて。

けれど、鬼柳との言い争いで自分を戒めていたタガが外れてしまったらしい。
感情を爆発させて叫ぶ彼女の姿は、まさに子を想う母親そのものだった。

「――――、ちょっと、その辺りで頭を冷やしてくるわ。感情的になっていたみたい」

「あぁ、行っといで。それとついでに、なっていたみたいじゃなく

て、なっていたよ」

「……はぁ。私もまだまだ未熟ね」

プレシアは言いたいことを言い終えると、僅かに嘆息しながらその場から足を動かす。
どうやら気まずさを感じているらしい。アルフもそれが分かっているのか。彼女を引き止める様子は無い。

アルフの言葉で頬を赤く染めたプレシアがいなくなり、その場にはユーノとアルフ。
そして地面に座り込んで顔を俯けている、鬼柳の三人だけが残された。

※

「ちょっと、言い過ぎちゃったわね……」

はぁ、と肩を落としながら、プレシアはビルの陰に座り込んでいた。
自分だってあそこまで強く言うつもりは無かった。ただ、鬼柳の無

謀に苛立っただけだ。

仲間を思いやり、仲間のピンチにはすぐに駆けつけようとするのは鬼柳の美点だろう。

だが、仲間のことで周囲が見えなくなるのは欠点だ。事実彼は、自分が負けた場合のことを考えていない。

やはり彼もまだ子供だと言うことだろうか。今後どうやって鬼柳と接したらいいのか。

プレシアがぼんやりと頭上を見上げながら考えていると、不意に頭上が暗くなった。

「っ！？」

それと同時、プレシアは勢いよく立ちあがり、その場からバックステップで回避する。

その直後、プレシアが座り込んでいた場所に魔力で固められたブレスが直撃する。

慌てて頭上に視線を向けてみれば、そこには無機質な瞳でプレシアを見つめる闇の書の意思。

どうやら自分の居場所がバレてしまったらしい。厄介な自分を消しに来た、と言うところだろうか。

闇の書の意思は奇襲が失敗に終わった事を悟ると、召喚していたモンスターを消滅させる。

そして腕に装着していたデュエルディスクを構えた。あくまでデュエルで決着を付けるつもりらしい。

「はぁ、まったく……。対策を練る時間が欲しかったわ」

「生憎と、その様な時間はやれないのでな。お前は、消えろ」

「悪いけれど、娘とそのお友達を助け出すまで、消えられないのよ」

プレシアもまたデバイスを展開させ、デュエルディスクの中央に自分のデッキをセットする。

先の鬼柳との言い争いで碌に対策を練ることは出来なかったが、相手の使うカードが知れたのだ。

幾分、闘いやすいかもしれない。プレシアは内心でそう自分を励ますと、闇の書の意思と相対した。

シャシャシャと小気味いい音を響かせて、プレシアのデッキが自動でシャッフルされる。そしてシャッフルが終わった。

「「決闘（デュエル）！！」」

※

「準備は良いか？」

「う、うん。大丈夫、です」

「そうか」

フェイトは隣で赤いバイクの様なDホイールに跨る男性――遊星にコクリと頷いて答えた。
遊星のDホイールは既にライディング・デュエルの準備が完了しており、いつでもライディング・デュエルが出来る。

彼女たちはこれから、ライディング・デュエルを行うことになっていた。
その理由としては、フェイトが鬼柳との関係を遊星に話したのが原因だろう。

フェイトが自分を二代目チームサティスファクションのメンバーと告げたところ、遊星がフェイトに興味を持ったのだ。
遊星も遊星で初代チームサティスファクションのメンバーとしての意地がある様で、フェイトの実力を確かめられずにはいられないらしい。

フェイトとしては一刻も早くこの空間を抜け出したかったが、遊星の実力にも興味があった。
初代チームサティスファクションのメンバーの実力とはいかほどのものなのか。フェイトもデュエリストの端くれ。興味はある。

それに加え、この闇の書の内部からの脱出方法を遊星が知っているそうで、勝てば教えてくれるらしい。
ならばデュエルをしない手は無い。フェイトは傍らで準備を終えた遊星に視線を送る。彼もまたコクリと頷いた。

「なら――――」

「「決闘（デュエル）！！」」

遊星ＬＰ４０００
フェイトＬＰ４０００

デュエル開始の合図と共に、二人はその場から走り出した。
遊星の乗るＤホイールの車輪から火花が飛び出し、ロケット花火の様に飛び出していく。

すると周囲の景色が一変。景色が時の庭園の物へと変わり、庭園内部を遊星とフェイトは駆けて行く。
遊星はＤホイールで。フェイトは飛行魔法で、お互いの出方を伺っている。

「俺のターン、ドロー！」

遊星　手札５→６

「俺は≪シールド・ウィング≫を守備表示で召喚！
カードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

シールド・ウィング
星２／風属性／鳥獣族／攻　　０／守　９００
このカードは１ターンに２度まで、戦闘では破壊されない。

遊星　手札６→３
場　シールド・ウィング　伏せ×２

先攻を取ったのは遊星。鳥の様な姿をしたモンスターを召喚し、フェイトの出方を伺う。
一方のフェイトと言えば、遊星が召喚したシールド・ウィングを見て眉を顰めていた。

シールド・ウィングとは１ターンに二回まで戦闘破壊されないと言う効果を持っている。
つまり三回攻撃しなければ、シールド・ウィングは破壊出来ないと言う事だ。非常に厄介である。

「（でも、私のデッキは負けない！）」

「私のターン、ドロー！」

フェイト　手札５→６
フェイトＳｐｃ　０→１
遊星　Ｓｐｃ０→１

「私は手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！
さらに自分の場に【ジャンク】と名のついたカードが表側表示で

存在する場合、
　手札から≪ジャンク・サーバント≫を特殊召喚できる！　来て、≪ジャンク・サーバント≫！！」

ジャンク・サーバント
星４／地属性／戦士族／攻１５００／守１０００
自分フィールド上に「ジャンク」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「そしてレベル４≪ジャンク・サーバント≫にレベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！」

「！　お前も【ジャンク】使いか」

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！
　シンクロ召喚！　暴れ狂え、≪ジャンク・バーサーカー≫！」

ジャンク・バーサーカー
星７／風属性／戦士族／攻２７００／守１８００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
自分の墓地に存在する「ジャンク」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの攻撃力は、除外したモンスターの攻撃力分ダウンする。
また、このカードが守備表示のモンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

フェイトの背後を、一筋の光の筋が打ち抜いた。そして現れるのは赤い鎧を身に纏った狂戦士。
手には背丈をゆうに超える斧の様な大剣を軽々と持ち、凶暴そうな視線を遊星の場に向けている。

「バトルフェイズ！　≪ジャンク・バーサーカー≫で≪シールド・ウィング≫に攻撃！」

「っ！　くっ！」

「≪ジャンク・バーサーカー≫の効果発動！
　このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わずにそのモンスターを破壊します！」

ジャンク・バーサーカーが振り上げた大剣が、シールド・ウィングを両断する。
いくら戦闘破壊に耐性を持っていようと、効果破壊で対処されてしまえばただの下級モンスター。

早々に厄介な壁モンスターを除去でき、フェイトはホッと安堵の息を漏らす。
しかし、まだデュエルは始まったばかり。気を抜いてはいられないとばかりにフェイトは手札に視線を落とす。

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

フェイト手札６→２
場　ジャンク・バーサーカー　伏せ×２

「俺のターン、ドロー！」

遊星手札３→４
遊星Ｓｐｃ　１→２
フェイトＳｐｃ　１→２

「俺は手札から≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動！
自分用スピードカウンターが二つ以上ある場合、デッキからカードを二枚ドローできる！
そしてその後、カードを一枚墓地へ送る。俺はカードを二枚ドローし、手札の≪ボルト・ヘッジホッグ≫を捨てる！」

遊星手札４

「手札交換カード……！　不味い、墓地を肥やされた……！」

「さらに俺は手札から≪デブリ・ドラゴン≫を召喚！
効果で墓地の攻撃力５００以下の≪シールド・ウィング≫を特殊召喚する！
さらに≪ボルト・ヘッジホッグ≫を特殊召喚！　このカードは場にチューナーが存在する場合、特殊召喚できる！」

デブリ・ドラゴン
星４／風属性／ドラゴン族／攻１０００／守２０００
このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を

攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。
このカードをシンクロ素材とする場合、
ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。
また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「レベルの合計は８……！　どんなドラゴン族が来る？」

「レベル２≪シールド・ウィング≫とレベル２≪ボルト・ヘッジホッグ≫に
　レベル４チューナーモンスター≪デブリ・ドラゴン≫をチューニング！」

遊星の場に召喚された小さなドラゴンが、四つの緑色のリングとなる。
その中心を漂うのはボルト・ヘッジホッグとシールド・ウィング。
二体は合計四つの星となる。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！
　シンクロ召喚！　飛翔せよ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「っ！？　≪スターダスト・ドラゴン≫！？」

一列に整列した星を、一筋の閃光が星もろ共リングを打ち抜いた。
その直後、遊星の頭上を飛翔するのはフェイトにとって見慣れた星

屑のドラゴン。
その姿は母親から貰ったカードと瓜二つであり、偽物と言う可能性は限りなく低い。
一体これはどう言う事だろうか。混乱する頭を必死に抑え込みながら、フェイトは視線を向ける。

「バトルだ！　≪スターダスト・ドラゴン≫で≪ジャンク・バーサーカー≫を攻撃！
　響け、シューティング・ソニック！」

「だけど、攻撃力は≪ジャンク・バーサーカー≫の方が上です！」

フェイトは遊星のプレイングに疑問を持った。
明らかにスターダストの攻撃力は、ジャンク・バーサーカーに届いていない。

一体何を狙っているのか。フェイトは前方を走る遊星の後ろ姿に視線を送る。
すると遊星はフェイトの視線に気が付いたのか。僅かに後ろを振り返ると、ニヤリと笑みを浮かべた。

「さらに伏せカードオープン！　≪シンクロ・ストライク≫！
　このカードの効果により、スターダストの攻撃力が１５００ポイントアップする！」

「あっ！」

スターダストＡＴＫ２５００→４０００

「いけ、スターダスト！」

「く、っう……！」

フェイトＬＰ４０００→２７００
フェイトＳｐｃ２→１

スターダストの放った特大のブレスが、フェイトの場のジャンク・バーサーカーを粉砕した。
まさか同じ戦法を使われるとは思ってもみなかった。だが、これは誰かが同じ戦法を使うかもしれないと言う警戒を怠ったフェイトのミス。

フェイトはグッと唇を噛み締めると、手札と場に伏せたカードに視線を向ける。
すでに先の攻撃で、せっかく溜まったスピードカウンターは１に逆戻りしている。

これでは手札交換兼墓地肥やしカードであるエンジェル・バトンを発動できない。
しかし、まだ手は残されている。今はスピードカウンターは１だが、次の自分のターンンは２に増える。

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンドだ。さぁ、お前の力を見せてみろ！」

遊星手札×２
場　スターダスト　伏せ×２

「くっ、私のターン、ドロー！」

フェイト手札２→３
遊星Ｓｐｃ２→３
フェイトＳｐｃ１→２

「私は伏せカード≪シンクロ・スピリッツ≫を発動！
自分の墓地に存在するシンクロモンスターを除外して、
そのモンスターのシンクロ召喚に使用したシンクロ素材が墓地に揃っていれば、そのシンクロ素材を場に特殊召喚できる！」

「！　新たなシンクロ召喚か……」

「場に≪ジャンク・シンクロン≫と≪ジャンク・サーバント≫を特殊召喚！
そして手札から≪レベル・スティーラー≫を召喚！
レベル１≪レベル・スティーラー≫とレベル４≪ジャンク・サーバント≫にレベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！！」

フェイトの場に現れたジャンク・シンクロンが再び３つの緑色のリングへと変化する。
そしてその内側を光り輝く星が整列するが、今回は先ほどのシンクロ召喚よりも一つ多い。

相手がスターダストを召喚し、掛かってくるならばこちらもスター

ダストで応戦するまで。
フェイトはエクストラデッキに眠る切り札兼姉の姿を確認すると、キッと視線を前に向けた。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！」

「っ！　このシンクロ口上は……！」

「シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

そしてフェイトの場にもまた、遊星の場に存在する星屑のドラゴンが召喚された。
二体の星屑のドラゴンは、互いに向けて敵意に満ちた視線を向け合っている。

「驚いたな、お前もスターダストの使い手か！」

「はい！　だけど私のスターダストは、さらに進化します！」

「なに？」

遊星は後ろを飛翔しているフェイトに向けて、笑みを浮かべながら訊ねた。
どうやら何故フェイトがスターダストを持っているのか聞かないらしい。

それにフェイトはコクリと頷くと、1ターン目から伏せていた伏せカードを発動する。
その伏せカードとは、スターダストを戦闘形態である／バスターに進化させる罠カード。

「伏せカードオープン！　≪バスター・モード≫！！」

フェイトが伏せカードを発動すると、彼女の場のスターダストを中心に風が渦巻き始める。
そしてスターダストの胸に蒼い宝石が出現。そこから莫大なエネルギーがスターダストに流れ込む。

流れ込んだエネルギーは、スターダストの身体を戦闘に特化させた形へと姿を変えて行く。
四肢と胴体に纏った強靭な鎧。手に入れたのは全ての魔法・罠・モンスター効果を打ち消す強力な力。

その姿をスターダスト・ドラゴン／バスターへと変化させたドラゴンは、天へ轟かんばかりに咆哮を上げた。

「っ。≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫か」

「スターダストを使うアナタなら、きっと効果を知っているはず！」

フェイトの場に現れたスターダスト・ドラゴン／バスターの様子に、

遊星は顔を顰めた。
スターダスト・ドラゴン／バスターはスターダストの進化の中でも特に強力で、場持ちの良さは一級品である。
それに加え、相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を一度だけ無効に出来る効果を持っているのだ。
つまりフェイトは1ターンに一度だけ、フリーチェーンの魔宮の賄賂と天罰を放つことが出来る。

「バトルフェイズ！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！
アサルト・ソニック・バーン！」

「伏せカードオープン！　≪ジャンク・シールド≫！
一度だけモンスターを戦闘から守り、自分へのダメージを相手プレイヤーに与える！」

「っ！　くそぉっ……！」

フェイトＬＰ２７００→２２００

ジャンク・シールド（漫画版カード）
通常罠
1度だけモンスターを破壊から守り、自分へのダメージを相手に与える。

フェイトは自らに跳ね返ってきた反射ダメージを受け、顔を歪めた。

本当ならばスターダスト・ドラゴン／バスターの効果を発動して無効にしたい。

だが、それはこのデュエルにおいて禁じ手となっている。効果を発動すればやられるのだ。

なにせ相手の場には、破壊する効果を無効にするスターダストがいる。効果を発動すれば、こちらが逆に破壊される。

故にフェイトは、遊星の発動した罠カードの効果を無効には出来ない。

無効にしてしまえば、墓地に眠るスターダストを蘇らせることが出来なくなるからだ。

フェイトは自分のライフばかりが削られて、焦燥感を覚えながら前方を向く。

前方を走る遊星の背中は大きく、自分の超えるべき壁の様にも思える。彼に勝てば、自分は強くなれるだろうか。

「私はカードを伏せて、ターンエンド」

フェイト手札3→1

場　スターダスト／バスター　伏せ×1

「（私の伏せカードは≪聖なるバリア-ミラーフォース-≫。

どれだけ攻撃力を上げられても、これで無効にして見せる……！）」

自身が伏せたカードを確認し、フェイトは僅かに安堵の表情を浮か

べた。
遊星が二枚目のシンクロ・ストライクの様な攻撃力の増減カードを伏せていないとも限らない。
故に盤石の態勢を整えるために、フェイトは防御カードとしては最高の性能を誇るカードを伏せた。
このカードを使えば、相手は効果を無効にするために星屑の竜をリリースするだろう。しなくても良い。どっちみち、破壊されるだけだ。

「俺のターン！」

遊星手札２→３
遊星Ｓｐｃ３→４
フェイトＳｐｃ２→３

「なるほどな。／バスター。それがお前の切り札か」

遊星はデッキからカードをドローすると、自分のターンを進めるでもなくフェイトに声を掛けた。
彼の言葉に含まれているのは納得。どうやらフェイトの使う切り札を見て、何かに納得したらしい。

一体何に納得したのか。フェイトが疑問に思っていると、遊星はチラリと横目でフェイトを捉える。
その瞳は真っ直ぐで、自分の行く末や自分の使うデッキを信じている。その様に、フェイトは思えた。

「たしかにその形もまた、スターダストの進化の形だ。
だが、スターダストの進化の形は／バスターだけじゃない」

「え……？」

「アクセル・シンクロ……。クリアマインドを会得した者が行えるシンクロ召喚。
その先にスターダストの新たな進化の形がある！　それを、お前に見せてやる！」

「アクセル・シンクロ……」

遊星に告げられた言葉に、フェイトは驚いた表情を浮かべた。
／バスター以外にも、スターダストの進化の形があるなんて知らなかった。

一体どんな形なのか。どれほど、スターダストは進化できるのか。
なまじスターダストに思い入れが強いせいだろう。フェイトは気になって仕方ない。

そして遊星はドローしたカードに視線を向けると、力強くカードの発動を宣言した。

「行くぞ！　俺は二枚目の≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動！
デッキからカードを二枚ドローし、手札のカード一枚を墓地へ送る！
俺は≪エフェクト・ヴェーラー≫を墓地に送る！」

遊星手札3→3

「そして手札から≪チューニング・サポーター≫を召喚！
さらに伏せカード≪エンジェル・リフト≫を発動！　墓地から≪エフェクト・ヴェーラー≫を特殊召喚！」

チューニング・サポーター
星1／光属性／機械族／攻　１００／守　３００
このカードをシンクロ召喚に使用する場合、
このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。
このカードがシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され
墓地へ送られた場合、自分はデッキからカードを1枚ドローする。

エンジェル・リフト
永続罠
自分の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターがフィールド上から離れた時このカードを破壊する。

「レベル1≪チューニング・サポーター≫にレベル1≪エフェクト・ヴェーラー≫をチューニング！
集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！　シンクロ召喚！
希望の力、シンクロチューナー、≪フォーミュラ・シンクロン≫！」

「シンクロチューナー！？」

フォーミュラ・シンクロン
シンクロ・チューナー
星２／光属性／機械族／攻　２００／守１５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。
また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する
このカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

遊星の背後から一筋の閃光が煌めき、一つだけ出現した緑色のリングを打ち抜いた。
そこから現れるのは、レーシングカーの様な姿をした下級モンスター。だが、気になる単語をフェイトは聞いた。

それはシンクロチューナーなる単語。通常、シンクロモンスターは「シンクロ」としか表示されない。
なのに先ほど召喚されたフォーミュラ・シンクロンは「シンクロ」のほかに「チューナー」も持っている。

これが意味する事はつまり、フォーミュラ・シンクロンでもシンクロ召喚を行うことが可能だと言うこと。
まさかそんなカードが存在するなんて。フェイトは初めて見るシンクロチューナーの姿に驚きを隠す事が出来ない。

「シンクロ素材になった≪チューニング・サポーター≫と
　シンクロ召喚された≪フォーミュラ・シンクロン≫の効果により、
デッキからカードを二枚ドローする」

遊星手札2↓4

「シンクロ召喚するだけで、1枚ドローするなんて……！」

新たに発動したフォーミュラ・シンクロンの効果。
それはシンクロ召喚に成功したときのみ、カードを一枚ドロー出来ると言うもの。

デュエルモンスターズだけでなく、全てのカードゲームにおいて手札とは重要な役目を持つ。
手札があればあるほど、切れる手札が多くなるのだ。少ないよりは多い方が複数の選択肢を用意出来る。

このフォーミュラ・シンクロンと言うカードはシンクロ召喚するだけでカードをドローする効果を持っている。
今はライディング・デュエル中なのでお互いに使えないが、貪欲な壺などの回収カードを使えば酷いことになりそうだ。

それに加えて、フォーミュラ・シンクロンのレベルは2。
蘇生なども行いやすく、様々なカードの恩恵を受けられる。かなり強力なカードだ。

「行くぞ！　レベル8シンクロモンスター≪スターダスト・ドラゴン≫に

レベル2シンクロチューナー≪フォーミュラ・シンクロン≫をチューニング！！」

「！」

そして遊星がシンクロ召喚を行うことを宣言する。
すると前方を飛んでいたフォーミュラ・シンクロンが二つの緑色のリングとなる。

出現した緑色のリングは遊星の前方に出現し、遊星とスターダスト。
二人の身体を包み込んだ。
遊星はDホイールのアクセルを限界まで回し、スターダストは遅れまいと遊星の後を付いていく。

「集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！」

「っ！　まだ、スピードが上がる……！？」

遊星のDホイールの速度が更にあがり、徐々にフェイトが引き離され始める。
フェイトとて魔導師の訓練により空を飛ぶことは出来るが、それでもこの速度は異常だ。

そして徐々に遠くなっていく遊星の背中を茫然とフェイトが見送っていると、彼はカードを一枚振り抜いた。
振り抜いたカードはシンクロモンスターが描かれる白い枠のカード。
だが、どう言う訳かモンスターの絵柄や効果が描かれていない。

「アクセル・シンクロォオオオオッッ！！」

「嘘、消えた！？」

遊星がカードを振り抜き、そう叫んだ瞬間。
フェイトの前方を駆けていた遊星とスターダストの姿が掻き消える。
それは明らかに異常な光景だ。乗物に乗っただけで、姿が消えるはずが無い。
一体何処へ行った。フェイトがキョロキョロと周囲に視線を向けていると、背後から気配がする。

まさかと思いながらも、フェイトは慌てて後ろを振り返った。すると視界に飛び込んでくるのは赤いバイク形態のDホイール。
さらにその後方には見慣れぬ白いドラゴンが追従している。まさか、あのドラゴンがそうだと言うのだろうか。
フェイトは茫然と、そのドラゴンを見上げる。

「生来せよ、≪シューティング・スター・ドラゴン≫！！」

遊星が背後に控える白いドラゴン――シューディング・スター・ドラゴンの名を叫べば、
彼の背後に控えるシューティング・スター・ドラゴンは主人に答える様に、天へ轟かんばかりの咆哮を上げた。

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　フェイトｓｉｄｅ」（後書き）

遊星ＴＵＥＥＥＥ！！

良いのか、遊星こんなに強くて良いのか！？

……けどまぁ、ここではゲスト的な出演だし良いのか。

どうせそのうちフェイト無双もやるだろうし。

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　なのはｓｉｄｅ」（前書き）

今回はなのはサイド！
次回は鬼柳の方をちょろっとやってＡ'ｓのラスボスと決闘を始めます。

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　なのはｓｉｄｅ」

～海鳴市　某所～

「くそっ……」

プレシアの張り手を食らい、赤くなった頬を鬼柳は擦る。
まずは自分の気持ちを落ちつけようと花壇の植え込みに腰を落とすと、視線を空へ向けた。

彼の視線の先には奇怪な色合いの空が出来上がっている。見ていて不気味な空だ。
そんな不気味な空を見上げながら、鬼柳は静かに目を閉じる。思い出すのはプレシアの言葉。

「（分かってるんだ……。プレシアも心配してるってのは……）」

プレシアがどれほどフェイトやなのはのことを心配しているのか。
それは先ほど彼女が見せた涙で把握している。でなければ涙など流さないだろう。

それにプレシアの言うことも理解できる。しかし、心が納得できないのだ。
なのはやフェイトが危険な目に合っていないか。はやては無事なのか。不安の種は尽きない。

「元気だしなよ。みんな不安がってるとダメな方にしか考えられないよ」

胸中の不安に押しつぶされそうになっていた鬼柳の背中に、不意にアルフの声がかかる。
閉じていた瞼を開き、視線を声が聞こえた方へと向けるとそこには、苦笑いを浮かべたアルフの姿。

どうやら鬼柳が落ち込んでいたのを心配し、声を掛けてくれたらしい。なんとも出来た使い魔だ。
鬼柳はアルフの言葉に笑みと共に言葉を返そうとするが、どうしても元気を取り戻す事が出来ない。

「……分かってる。だけど、不安なんだ。
なのはやフェイト、はやては無事なのか……ってな」

「鬼柳……」

鬼柳はアルフから視線を逸らすと、ポツポツと胸の内を打ち明けた。
このまま不安がっていてはダメなのは百も承知している。だが、どうすれば良い。

対策を練っている時間があれば、闇の書にデュエルを挑んで勝利をもぎ取っている。
しかし、それは無謀な行為だと彼の理性が告げている。相性が悪い

デッキに何の対策も無しに挑むのは無謀だ。

だが、対策を練れば練るほど、なのはやフェイト。はやてが危険に晒されるのではないか。

それを考えると、鬼柳の頭は落ち着かなくなる。考えていた調整用のカードも頭から抜け落ち、頭が真っ白になる。

情けない。仲間が危険な状態だと言うのに、何もできない自分が酷く情けない。

どうしようもない苛立ちを覚え、彼は両手で顔を覆う。そして前髪を力任せに握りしめた。

「もう、イヤなんだ……。仲間を助けられないのは……。仲間を裏切るのは……」

「……」

「独りぼっちは……イヤなんだ……」

ポツリとアルフに聞こえるか聞こえないか。それくらいの声音で鬼柳は呟く。

脳裏に浮かび上がるのは、デュエルに敗北して消えて行くなのはとフェイトの姿。

手を伸ばせば助けられたかもしれないのに、自分は手を伸ばすことが出来なかった。

それが酷く悔しい。自分はまた、仲間を裏切ってしまうのだろうか。

大切な人を裏切るのか。

それとともに、過去の記憶が鬼柳を苛む。それはチームサティスファクションを結成する前の話。
生きるのに必死で仲間を作る余裕など当時の鬼柳には無かった。孤独のままに、彼はサテライトで育った。

だが、彼はチームサティスファクションを結成することで、仲間の温もりを覚えた。
何をするにも一緒で、気の合う仲間たちとの掛け替えのない絆を育んだ。

それから彼は、一人でいることを極力避けた。一人になってしまえば、以前の様な孤独が自分を苛むから。
今、鬼柳を苛んでいるもの。それはサテライトで遊星たちに出会う以前に感じていた孤独への恐怖そのものだった。

「こら、鬼柳！」

「！」

と、徐々に鬼柳の思考がネガティブになっていきそうなとき。
不意に彼の耳元でアルフの大きな声が聞こえた。思わずギクリと身体を動かす。

そして何事だと視線をアルフへと向ければ、そこには腰に手を当てて胡乱気な表情のアルフが。
彼女は半眼で鬼柳を見つめると、「ハンッ」と鼻を一度鳴らす。そ

の様は男らしく、堂々としていた。

「アンタは少しはなのはやフェイトを信用しな！
あの子たちがなにも出来ずに、むざむざ死ぬわけ無いよ！」

「……なんで、それが分か――」

「分かるさ。なんてったって、フェイトはアタシのご主人様。
こんなところで死ぬ様なご主人様じゃない。フェイトはこれから沢山プレシアに甘えるんだ」

アルフに告げられた言葉に、鬼柳は咄嗟に言い返す。だが、それは途中で遮られた。
どうやらアルフは、そう思うことで自分の中の不安を打ち消す方法を取った様だ。先ほどの不安の影は無い。

もしくは情けない鬼柳の様子に活を入れようといったところだろうか。
何はともあれ、アルフは鬼柳の隣にドカッと無遠慮に腰掛けると、鬼柳の背中をバンバン叩く。

「仲間を裏切るのが怖い？　なら裏切らなければ良いだろ！
仲間を助けられないのが悔しい？　なら次に助けられるように努力しろ！
アンタは二代目チームサティスファクションのリーダーなんだろ？　リーダーは胸張って、どーんと落ち着いてな！」

「な――――！　か、簡単に言うじゃねぇか……」

「大丈夫だよ。鬼柳が間違った道に行こうとしてるなら、アタシらが正してやる。
　鬼柳一人じゃ仲間を助けられそうにない時は、アタシらが力を貸してやる。これがチームだろ？」

ニカッと、アルフは笑みを浮かべながらそう告げた。その笑顔に、茫然としていた鬼柳も自然と笑みを浮かべる。
どうやら難しく考え過ぎていた様だ。自分が間違えそうなら、仲間が。アルフ達が正してくれる。何故それに気づかなかったのか。

そして鬼柳はアルフから視線を外し、小さく息を吐いた。するとどうだろう。胸のつかえが取れた様に軽くなる。
これが仲間と言うものだろうか。これもチーム。ひいては仲間と言う一つの形なのだろうか。鬼柳は内心で自問する。

遊星やジャックと組んでいたときはこんなことは無かった。だが、それでも心地よかった。
けれど、アルフの言ってくれた言葉が嬉しかったのも事実だ。自分の間違いを正してくれる仲間たち。

思えば初代チームサティスファクションは、何処か遠慮していたのかもしれない。
仲間の輪を乱すから。仲間との間に変なシコリを残したくないから。だからそんな事が言えなかった。

けど、二代目チームサティスファクションは違う。間違っていることは間違っていると、言ってくれる仲間がいる。

助けを欲すれば、助けてくれる仲間がいる。それがなんだか嬉しくて、鬼柳は知らずのうちにニッと笑みを浮かべていた。

「さぁ、大将。まずは作戦会議だよ。どうやって闇の書のデッキを対策するか。
それになのはやフェイトの命運がかかってるんだ」

「……あぁ、そうだな。らしくない考えをしてたみたいだ。
こんなんじゃ、とてもじゃねぇがアイツらに顔向けできないところだった」

アルフはニヤリと笑みを浮かべながら、隣に腰掛ける鬼柳に訊ねる。すでに先ほどまでの腑抜けた様子は見えない。どうやら決意を固めた様だ。

俯かせていた顔を上げ、視線をアルフへと向ける。そしてアルフを見つけると、ニッと笑みを浮かべた。
それに釣られる様に、アルフもまた笑みを浮かべる。なんとも頼もしい姿じゃないか。これなら大丈夫かと内心で呟く。

――――ドォオオオ……

「ん？　もしかして、プレシアが闘ってるのかい？」

「どーやら、そうみたいだな」

アルフと鬼柳。二人が互いに笑い合っていると、不意に背後から爆発音が響いた。
何事だと背後を振り返れば、そこには先のデュエルで垣間見たモンスターがそびえ立っている。

だが、鬼柳とアルフが見つかった様子は無い。ならば他の人物――プレシアが見つかったのだろう。
その結論に鬼柳とアルフはコクリと頷くと、腰掛けていた花壇の植え込みから腰を上げる。

そして建物の合間から見えるモンスターを見上げた。

「作戦会議は中断だ。いくぜ、アルフ。背中は任せた」

「ハハッ。随分簡単に言ってくれるね」

「当然だろ？　助けが欲しかったら言えって言ったのは、何処のドイツだよ」

「ククククッ。そりゃあ、一本取られたね」

アルフと鬼柳は、互いに軽口をたたき合いながらモンスターが召喚された場所まで歩き出す。
闇の書の意思への対策などはまるで出来ていないが、不思議と恐怖心は無い。心の闇が晴れたからだろうか。

鬼柳とアルフは互いに腕に着けていたデュエルディスクを起動させると、最後にチラッと互いに見つめる。

そしてコクリと頷くと、どちらからともなくプレシアがデュエルしているであろう、場所へと駈け出すのであった。

※

「準備は出来たか？」

「は、はい。大丈夫です」

真っ黒な景色の中、なのはは一人の青年――ジャックと相対していた。

彼の腕に付けられたデュエルディスクは起動しており、いつでもデュエルが出来る状態。

片やなのはの方も腕にデュエルディスクを装着し、起動している。

ちなみに魔法設定は解除していた。

これにより、なのはの使うデュエルディスクはただのデュエルディスクとなっている。魔力ダメージなどは発生しない。

するとなのはと相対していたジャックは満足そうに頷くと、腕のデュエルディスクを操作した。

それと同時に、自動でジャックのデッキがシャッフルされる。なのはもまた、自動でデッキをシャッフルさせた。

「では、行くぞ！」

「「決闘（デュエル）！！」」

なのはＬＰ４０００
ジャックＬＰ４０００

「先攻は私から、ドロー！」

なのは手札５→６

「私は手札から≪魔導騎士　ディフェンダー≫を守備表示で召喚！
さらにカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

なのは　手札３
場　ディフェンダー　伏せ×２

先攻を取ったなのはは、手堅く様子を見るためにディフェンダーを召喚する。
ディフェンダーは召喚成功時に自身に魔力カウンターが一つ乗り、それを取り除くことで魔法使い族の破壊を無効にするのだ。

これならば１ターンは確実に防げる。そしてもう一度自分のターンがくれば、シンクロ召喚で一気に場を制圧する。
そのための布石――氷結界の風水師は彼女の手札の中にあった。さ

ぁ、ジャックはどんなデッキで挑んでくる。なのはは視線を向ける。

「俺のターンッ！」

ジャック手札５→６

「この俺を前に守備を固めたか。確かに先攻１ターン目では堅実な戦法だ」

ジャックは勢いよく引き抜いたカードを手札に納めると、なのはの場を見つめながら一人呟く。

たしかに先攻１ターン目では、よほどデッキが回転しない限りは守備表示でターンを終えるのが基本だ。

だが――と、ジャックはニヤリと口元に笑みを浮かべた。

なのははジャックのその表情にイヤな予感を覚える。本能が警報を鳴らす。

「――だが！　この俺を前にしては無意味だ！

相手の場にのみモンスターが存在するとき、俺は手札から≪バイス・ドラゴン≫を特殊召喚する！」

バイス・ドラゴン

星５／闇属性／ドラゴン族／攻２０００／守２４００

相手フィールド上にモンスターが存在し、

自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、

このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚したこのカードの元々の攻撃力・守備力は半分になる。

「この効果で特殊召喚に成功したとき、≪バイス・ドラゴン≫の能力値は半減する！」

「≪サイバー・ドラゴン≫や≪太陽の神官≫と似たような効果……！」

「さらに俺は、手札から≪ダーク・リゾネーター―≫を召喚！」

ダーク・リゾネーター
チューナー
星３／闇属性／悪魔族／攻１３００／守　３００
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。

「（この戦法……私と同じ！？）」

なのははジャックの場に召喚された二体のモンスターを見て、内心で驚愕した。
召喚するモンスターは違えど、行っていることと同じ。

それに加え、ダーク・リゾネーターはチューナーモンスター。相手はシンクロ召喚を狙っている。
相手の場にはレベル５のバイス・ドラゴンが。そしてレベル３のダーク・リゾネーターが存在する。

これが意味する事は、ジャックがレベル８のシンクロ召喚を狙っていると言うことだった。

「レベル５の≪バイス・ドラゴン≫にレベル３の≪ダーク・リゾネーター≫をチューニング！
王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るが良い！！」

「このシンクロ口上は……！」

「シンクロ召喚！　我が魂、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

三つのリングを一筋の光が打ち抜き、ジャックの背後に紅い体躯のドラゴンが召喚された。
それはなのはが普段から愛用している切り札そのもの。何故。そんな単語がなのはの脳内を支配する。

「バトルだ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪魔導騎士ディフェンダー≫に攻撃！
灼熱のクリムゾン・ヘルフレアァアアアアアッッ！！」

「ッ！　≪魔導騎士ディフェンダー≫！！」

だが、いくら戸惑っていてもジャックとのデュエルは止まらない。
ジャックはレッド・デーモンズに攻撃宣言を下す。
攻撃の命令を受けたレッド・デーモンズ・ドラゴンは、自身の手に

灼熱の炎を纏わせながら、なのはの場のモンスターに攻撃。

咄嗟にディフェンダーは自身の身の丈ほどもある盾を構え、レッド・デーモンズを迎撃する。

一度目の攻撃はディフェンダーの盾によって防がれたが、レッド・デーモンズの追撃は止まることは無い。

「無駄だ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫が守備表示モンスターを攻撃したとき、
　ダメージ計算後、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する！　デモン・メテオ！」

「くぅう……！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果により、なのはを護っていたディフェンダーが破壊される。

やはり破壊されるか。なのはは砕け散ったディフェンダーを見送りながら、心の中で小さく呟いた。

なにせレッド・デーモンズのことについては、自分は他の人間よりも詳しい。伊達に何年も切り札を務めていないのだ。

レッド・デーモンズ・ドラゴンは、守備表示のモンスターには滅法強い。マシュマロンや魂を削る死霊すら壁の役割を果たせない。

それに加え、攻撃力３０００と言う高攻撃力を持っている。戦闘破壊するのはまず無理だろう。

だが、何も戦闘破壊するだけが決闘ではない。魔法や罠を使えば容易に、レッド・デーモンズを破壊できる。

「さらに俺は、≪紅蓮魔竜の壺≫を発動。
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫が場に存在するとき、デッキからカードを二枚ドロー出来る。
そして俺はカードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

ジャック手札３
場　レッド・デーモンズ　伏せ×２

「くっ、私のターン、ドロー！」

なのは手札３→４

「私は手札から≪太陽の神官≫を特殊召喚！」

なのはは場にモンスターを特殊召喚しながら、ジャックの場のレッド・デーモンズを見つめる。
今の自分の手札では、安全にレッド・デーモンズを除去できるアーカナイト・マジシャンをシンクロ召喚出来ない。

だが、手はある。その布石は先攻１ターン目に伏せておいたリバースカード。このカードで窮地を脱する。
自らの場に召喚された太陽の神官の背中を盗み見ながら、なのはは手札に温存しておいたカードを手に取る。

「さらに≪氷結界の風水師≫を召喚！
そしてレベル５の≪太陽の神官≫にレベル３の≪氷結界の風水師

≫をチューニング！」

「ほう！　貴様も俺と同じ戦法を取るか！　面白い！」

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見せてあげる！」

なのはの背後を、ジャックと同じく緑色のリングが三つ飛び回る。
そしてその中を五つの光り輝く星が一列に整列し、一筋の極太の閃光が打ち抜いた。

「シンクロ召喚！　全てを破壊し尽くして、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

「なん……だと！？」

ジャックは閃光を散らしながら出現する、なのはのレッド・デーモンズに目を奪われる。
それは紛れもない、彼の切り札であり魂のカード。だが、何故それをこんな少女が持っている。

疑問に思うが、それよりも不快感が湧き立つ。不快感の正体はこの少女のせいではない。
思い出すのは自分そっくりのデュエルロボとデュエルした時のこと。
相手はレッド・デーモンズを三体も召喚したのだ。

それに加え、デュエルロボが召喚したレッド・デーモンズの体色もジャックを苛立たせる原因の一つ。

ジャックが召喚したレッド・デーモンズ以外、全て青や黄色、紫などと言ったレッド・デーモンズとは名ばかりの体色をしていたのだ。

当時を思い出し、ジャックは僅かに不機嫌になる。だが、このまま苛立ちを覚えたままデュエルをするのも得策ではない。

ジャックは妥協案としてなのはのレッド・デーモンズに小さく舌打ちすると、彼女のデュエルの進行を見守った。

「さらに手札から≪紅蓮魔竜の壺≫を発動！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫が場に存在するのでデッキからカードを二枚ドロー！」

「手札増強カード。やはり貴様も入れていたか」

「そして伏せカード≪バスター・モード≫を発動！！」

「ほう。≪バスター・モード≫とは、また懐かしいカードを使う」

なのはが発動したカードの効果により、なのはのレッド・デーモンズが炎に包まれる。

レッド・デーモンズを炎が包んだ次の瞬間、現れるのは強化装甲を身に付けた紅蓮の悪魔の姿。

腹部にはまるで悪魔の様な鎧を纏い、肩や足、両手にはゴツゴツとしたデザインの鎧を身に着けている。

その姿を完全に戦闘に特化させたレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは、天へ轟かんばかりの咆哮を上げた。

「バトルフェイズ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を攻撃！」

「甘い！　伏せカード≪プライドの咆哮≫を発動！
ダメージ計算時、自分のモンスターの攻撃力が相手モンスターよりも低い場合、
攻撃力の差分のライフを支払って発動！　差分のライフに加え３００ポイント攻撃力を上昇させる！」

ジャックＬＰ４０００→３５００

レッド・デーモンズＡＴＫ３８００　／バスターＡＴＫ３５００

「だけど私は、さらにその上を行きます！」

「なんだと！？」

ジャックの発動したカードにより、窮地に追い立てられたなのは。
だが、彼女は諦めてなどいなかった。咄嗟に伏せていたリバースカードを発動させる。

「伏せカード≪バスター・カウンター≫を発動！
自分の場に「／バスター」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、発動！
相手の魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊

します！」

バスター・カウンター
カウンター罠
自分フィールド上に「／バスター」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

「くっ……！」

「バトル続行！　お願い、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫！
エクストリーム・クリムゾン・フォースッ！」

なのはの指示に従い、レッド・デーモンズ／バスターはジャックのレッド・デーモンズへと肉薄する。
ジャックのレッド・デーモンズは咄嗟に反撃を行おうとするが、攻撃力上昇の恩恵を受けることは出来ない。

結果として、ジャックの場のレッド・デーモンズ・ドラゴンは破壊された。
激しい爆発音が周囲に響き渡り、ジャックの場が濛々とした煙に支配される。

「やるな。考えを改めなければならんかもしれん」

ジャックＬＰ３５００→３０００

「ホントですか？　それなら嬉しいです。
私はカードを一枚伏せて、ターンエンドです」

なのは手札3→2

場　レッド・デーモンズ／バスター　伏せ×1

ジャックの言葉に、なのははこんなときだと言うのに笑みを浮かべる。
今まで、自分の実力をこうして他人に褒められると言うことがあまり無かったせいだろう。
それに加え、鬼柳の昔の仲間からこう言われるのも嬉しい。認めてもらえた様で頬がにやけてしまう。
だが、ジャックはその言葉にキッと視線を上げた。何処までも前を見据えるその瞳に、なのははは思わず息を呑む。

「だが、この程度で鬼柳は満足できんぞ！」

「なっ！」

「ヤツに必要なものは、隣に立って共に歩ける仲間だ。
共に並んで闘える仲間……。貴様の実力では、まだヤツの隣には立てん！」

「――――ッ！」

「故に見せてやろう。このジャック・アトラスの力を！」

ジャックはなのはにそれだけ告げると、勢いよくカードをデッキからドローした。

なのははそんなジャックのデュエルの進行を見守りながら、内心でギュッと唇を噛み締める。

分かっている。自分の実力では、鬼柳の足手まといでしかないと言うことが。

鬼柳は様々な大会で優勝し、満足することを望んでいる。なのに肝心の仲間がこれでは鬼柳は満足できない。

それをジャックも分かっているのだろう。あえてそれをなのはに告げることで、彼女にそれを自覚させた。

今のままじゃいけない。強くなりたい。もっともっと強くなって、鬼柳の隣に立って闘えるようになりたい。

「俺のターンッ！」

ジャック手札3→4

「俺は伏せカード≪ウィキッド・リボーン≫を発動！
ライフを８００支払い、自分の墓地に存在するシンクロモンスターを場に特殊召喚する！
墓地より蘇れ、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

ウィキッド・リボーン
永続罠

８００ライフポイントを払い、自分の墓地に存在するシンクロモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃宣言をする事ができない。
このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

ジャックＬＰ３０００→２２００

ジャックのフィールドに、再びレッド・デーモンズ・ドラゴンが蘇る。
墓地より蘇ったレッド・デーモンズ・ドラゴンは敵意に満ちた視線を／バスターへと向けた。

どうやら先ほど破壊されたことを覚えているらしい。
グルルと喉を鳴らし、レッド・デーモンズ／バスターを威嚇している。

「この効果で特殊召喚されたモンスターの効果は無効化され、このターン攻撃する事はできない。
　しかし、このモンスターをシンクロ素材にし、新たなモンスターをシンクロ召喚する事は可能だ！」

「新たなシンクロ……！」

「俺の場にレベル８以上のシンクロモンスターが存在する場合、手

札からこのカードを特殊召喚出来る！
出でよ、≪クリエイト・リゾネーター≫！！」

クリエイト・リゾネーター
チューナー
星３／風属性／悪魔族／攻　８００／守　６００
自分フィールド上にレベル８以上のシンクロモンスターが表側表示で存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「さらに俺は、手札から≪バリア・リゾネーター≫を召喚！
そして場のレベル８≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫にレベル３≪クリエイト・リゾネーター≫と
レベル１≪バリア・リゾネーター≫をダブルチューニング！！」

バリア・リゾネーター
チューナー
星１／光属性／悪魔族／攻　３００／守　８００
このカードを手札から墓地へ送り、
自分フィールド上に表側表示で存在するチューナー１体を選択して発動する。
選択したモンスターはこのターン戦闘では破壊されず、
選択したモンスターの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「ダブルチューニング！？」

なのはは聞き覚えのない召喚方法に、戸惑った表情を浮かべる。
てっきり、新たなシンクロモンスターを召喚するものだと思っていた。

だが、その予想は覆された。誰が考えるだろう。二体のチューナーを用いたシンクロ召喚など。
なのはが戸惑った表情を浮かべながらも、視線は自然とジャックの場に向けられる。

そこでは、二体のリゾネーターと名のつくモンスターが、四つの炎のリングへと自身を変化させていた。
通常は緑色のリングだと言うのに、この時ばかりは炎に包まれたリング。これがダブルチューニングだと言うのか。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ！
シンクロ召喚！　いでよ、≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫！」

そしてジャックの瞳が煌々と赤く輝き、彼の腕に見慣れぬ赤いアザが浮かび上がる。
なのはがそれらに気を取られそうになったとき、ジャックの背後から猛々しい竜の咆哮が上がった。

慌てて視線を咆哮が聞こえた方へと向ける。
するとそこには、悪魔の様な顔をした、赤と黒の体色をしたドラゴンが屹立していた。

「高町　なのはよ！　鬼柳に追いつきたくば、この荒ぶる魂……バーニング・ソウルを会得しろ！」

※

「眠い……眠い……」

周囲に暗闇が広がる空間。その内部で、八神　はやてはうなされる様に小さな声で呟いていた。
身体はしっかりと休息を取っており、頭もぼんやりとしている。しかし、はやての意識はたしかにあった。

此処は何処なのだろうか。一体何が起こったのか。ぼんやりとした頭では、何も考える事が出来ない。
と、そんなとき、彼女の瞼の後ろから光が差した。一体何なのだろうか。重たい瞼を持ち上げながら、彼女は様子を伺う。

「んぁ……」

するとはやての視界の先に、一人の女性の姿が見えた。
ぼんやりとしていて良く見えなかったが、腰の辺りまで伸びた白銀の髪。血に染まった様な瞳が印象に残る。

顔の良し悪しは分からないが、はやての美的センスがおかしくなければ美しいと表現されるレベルだ。
そんな美女がはやてを見下ろしながら、薄っすらと口元に笑みを浮かべている。平時ならば、思わず眉を顰める行為だ。

だが、不思議と彼女からはイヤな気配がしない。逆に何処か暖かな感じがする。
このまま彼女に身を委ね、眠ってしまいたい。そんな欲求がはやての心の内に現れる。

「そのままお休みを、我が主。アナタの望みは、全て私が叶えます」

「望み……」

「眼を閉じて、心静かに夢を見てください」

銀髪の女性の言葉の通りに、はやては思わず目を瞑ろうとする。
だが、なにか忘れている様な気がした。そう。とても大切な人と交わした、とても大切な約束を。

『俺と一緒に、満足しようぜ』

その言葉を自分に言ってくれたのは誰だっただろうか。
必死に思いだそうとするが、はやての頭は睡眠を欲している。欲求に抗えない。

それでもなんとか、はやては欲求に抗おうとする。そしてそのまま、はやては眼を閉じかけたまま、虚空を見据えた。

八話　「猛攻！　流星龍&紅星龍　なのはｓｉｄｅ」（後書き）

次回予告
遊星とジャック。二人が召喚したモンスターに、なのはとフェイトは窮地に立たされてしまう。
果たして、彼女たちに逆転の手立てはあるのか！？

そして現実世界では、プレシアが闇の書の意思とデュエルを行っている。
闇の書の意思が使うのは、なにもスキルドレインだけではない。はたしてその戦法とは……？

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！」

ライディング・デュエル。アクセラレーション！！

番外編　「季節外れのバレンタイン　フェイトｖｅｒ」（前書き）

注意！　注意！
鬼柳さんのキャラが崩壊気味！
＆ロリコンっぽいです！　苦手な方はブラウザバックプリーズ！

番外編　「季節外れのバレンタイン　フェイトｖｅｒ」

～海鳴市　八神家～

「まったく。フェイトのヤツは何してるんだ……？」

ガリガリと頭を掻きむしりながら、ドカッと鬼柳はソファに腰を下ろした。
今の季節はまだ肌寒い春先。リビングの中も冷え込んでおり、彼はブルリと身体を震わせる。

と、鬼柳が身体を震わせたのが分かったのか。狼形態のザフィーラが無造作に電気ストーブのスイッチを入れた。
僅かばかりブゥゥン……と言う音が響き、次の瞬間には熱風がリビングに染み渡る。だが、まだ暖かいとは言えなかった。

「鬼柳よ。テスタロッサがどうかしたのか？」

「ん、あぁ。キッチンに籠ったまま、出てこねぇんだ」

電気ストーブの前を陣取ったザフィーラが、視線を鬼柳に向けながら訊ねる。
それに鬼柳は先ほどのキッチンでのフェイトの様子を思い出しながら、彼に疑問を投げかける。

先ほどキッチンに飲み物を取りに行った鬼柳は、キッチンで悪戦苦闘しているフェイトを見かけたのだ。
鼻の頭や頭に巻いた三角巾に茶色の液体――チョコだろうか――を付けながら、コトコトと鍋を煮込んでいるフェイト。

料理が苦手な彼女がキッチンに立つことは珍しく、鬼柳はフェイトに何をしているのか、と訊ねたのだ。
だが、返ってきたのは頬を赤く染めたフェイトの姿。慌てて鬼柳をキッチンから締め出すと、「入っちゃダメ」と立ち入り禁止を命じたのだ。

一体何がどうなっているのか。鬼柳にはサッパリ分からず、首を傾げながらザフィーラに話しかける。
それにはザフィーラも「それはおかしな事だ」と頷き、男二人――片方は狼だが――神妙な面持ちを浮かべるのだった。

「ツッコミか、ツッコミ待ちなんか……！」

と、リビングの中央でザフィーラと二人悩みこんでいると、新たな少女の声がリビングに響く。
そちらへ視線を向ければ、車いすの上で頭を抱え込んでいる少女。
この家の家主である八神　はやての姿が。

「？　どうしたんだ、はやて。腹でも痛いのか？」

「ちゃう！　お腹なんて痛くない！」

鬼柳は車いすの上で頭を抱えているはやてに駆け寄ると、心配そうな声を上げた。
もしや悪い病気でも発症したのかもしれない。慌ててプレシアを呼ぼうとするのだが、それは他の誰でもないはやてに遮られた。

その元気にツッコミを入れている様子に、鬼柳とザフィーラはホッと安堵の息を漏らす。
これだけ元気ならば病気などの心配は無いだろう。相変わらず元気な様で二人は安心した。

「あんな鬼柳兄ちゃん！　今日は何月何日や！？」

「今日……？　今日は二月十四日……ッ！　そうか！」

「そや！　今日はバレンタインデーや！」

「ただでチョコが貰える日だな！」

「ちがーーーうッ！！」

何処か嬉しそうな表情を浮かべた鬼柳に、はやての鋭いツッコミが炸裂した。
鼻に幼いと言えども裏拳を食らい、鬼柳は鼻を抑えて蹲る。若干、赤い雫が見えた気がした。

はやては勢いよく振り抜いた手をぷらぷらと左右に振ると、ハァと嘆息しながら鬼柳の背を見つめる。

一体、彼はどの様な教育を受けたのだろうか。バレンタインデーと聞いたら、甘酸っぱい告白とイコールを結び合わせるのに。

「っっ……！　はやて、突然なにしやがる」

「何しやがる、は私の台詞やー！　なしてバレンタインデーがただでチョコを貰える日なんて言うたん！？」

「？　違うのか？　毎年なのはや桃子からチョコ貰ってたぜ？」

「くっ……！　これがリア充のフィール……！」

鬼柳の叫びを華麗にスルーしたはやては、鬼柳に事の次第を問い詰める。

そして返ってきたあながち的外れではない答えに、渋い表情を浮かべてしまう。

そう。バレンタインデーは基本的に、男性が女性からタダでチョコレートを貰う日なのだ。

しかしそこには甘い告白と言うイベントも付属している。だが、鬼柳には縁が無い話なのだ。

なにせ毎年貰うチョコレートはなのは、美由希、桃子、はやてから各一個ずつ。

それぞれ幼女、同年代、人妻、幼女と言う属性を持っている。美由希以外から受け取るのは世間的に厳しい。

故に鬼柳がこの様な変な価値観を持ってしまうのも無理は無いのかもしれない。
毎年ほんのちょっとの期待を込めてチョコレートを渡すはやてからすれば、迷惑極まりない価値観だ。

「あんな、鬼柳兄ちゃん。たしかに根本的にはそれが正解や。
やけどな？　フェイトちゃんはチョコレートと一緒に気持ちを渡そうとしとるんよ」

「気持ち……？」

「そや！　一年に一度、一世一代の恋の告白やーー！」

「そ、そうなのか！」

わー！　っと、はやては車いすの上で、万歳をする様に両手の拳を天井へ向けた。
どうやら一年に一度の行事、バレンタインデーについて色々と物申したかったようだ。

そしてそんなはやての隣では、鬼柳が驚いたように目を見開いている。
バレンタインデーに隠された本当の意味を理解し、驚いているのだろう。

「フェイトちゃんは鬼柳兄ちゃんのことを好いとる！
これは間違いあらへん！」

「なに、そうなのか！？」

「そや！　そやから鬼柳兄ちゃんはフェイトちゃんがチョコを持ってきたら、抱き締めてブチューっとチューをしたらえぇねん！」

はやての説明を聞き、徐々に鬼柳が暴走していく。その様はまさにお祭り騒ぎと言う言葉がぴったりだ。
そして鬼柳はリビングの床に正座しながら、はやての恋愛講座を聞き入る。その姿は勤勉な学生に他ならない。

仮に年が離れすぎている、等と言う反論は鬼柳には無意味だろう。
彼はある種、独特の価値観を持っている。
それは共に居て楽しい。満足出来る相手ならば、それがたとえ幼女であろうと特別な存在として見ると言う歪な価値観。

それは第三者が見れば、歪んでいると言われるだろう。だが、鬼柳にとってはこれが正常なのだ。
一緒に居て楽しい、満足出来る相手とずっと一緒に居る。そうすれば一人ではない。そんな恐怖を持っているのだから。

「おーい、はやてが自爆してるのに気付くまでの賭けやるぞー」

「我は５分後に１００円」

「じゃあ、私は１０分後で」

「私は３０分後だ」

上からヴィータ、ザフィーラ、シャマル、シグナムの順番ではやてが自爆していることに対する賭けが行われる。
実際、はやては自爆しているのだからしょうがない。わざわざ相手に塩を送る辺り、はやてもフェイトを放っておけないのだろう。

はやてはそんな守護騎士たちの様子に気がつく事なく、鬼柳にフェイトに対してどんなモーションをすれば良いのか教える。
その講義は約３０分ほど続き、賭けの勝者はシグナムとなるのだった。

※

「で、出来た～～……」

チョコンとお皿の上に乗る小さなチョコレート。それを見て、フェイトが歓喜の声を上げた。
キッチンの中は使った調理器具でゴチャゴチャしており、どれほど苦労してこのチョコを作り上げたのかを伺わせる。

試しに一つ、とパクリとフェイトはお皿の上に乗っているチョコを

口に運んだ。
するとフェイトの口の中に消えたチョコは、口の中でトロリと溶け、甘い味わいを口の中に残す。

なんとも絶妙な味わい。初めてにしては上出来ではないだろうか。
フェイトは嬉しそうに頬を緩める。
あとはこれを可愛い箱に入れて、鬼柳に渡すだけ。どんな箱に入れようかな、とフェイトはテーブルの上を見る。

「（縞々模様も可愛いな。だけど、こっちのピンクも可愛いな……）」

近くのデパートで買い込んできた色取り取りの箱に、フェイトの目は釘つけになってしまう。
色々な柄が可愛らしく、目移りしてしまうのも無理は無い。あーでもない、こーでもないとフェイトは一人唸る。

「えへ」

適当に手に取った箱の模様を見つめながら、フェイトはだらしなく頬を緩めた。
それと言うのも、自分にとって辛い記憶でありながら嬉しい記憶を思い出したから。

母親に拒絶され、はやての家の部屋で茫然自失な自分を、無理やり抱き締めて泣かせた鬼柳の姿。

色々な気持ちで自分の頭がこんがらがってしまっていたが、冷静になるとすごく恥ずかしいと改めて思う。

異性の胸の中で泣くなんて初めての体験だった。しかも鼻水も涎も垂らして、恥も外聞もなかった。

当時の話をプレシアに話せば、彼女は悲しそうにしながらも、嬉しそうに笑っていたのが印象に残っている。

「ちゃんと責任、取ってね」

えへへと笑いながら、この場に居ない鬼柳に向けてフェイトはそう呟く。

そう。女の子の涙を見るのはいけないのだ。見られてしまったら、その人のお嫁さんにならなければならない。

プレシアが鼻血を垂らしながら力説していたので、本当に違いないだろう。

それにフェイト自身もプレシアの話には賛成だ。あんな恥ずかしい顔、鬼柳以外には見られたくない。

そして納得のいくまでプレゼントに使う箱を選ぶと、彼女は選び取った箱を組み上げ、中にチョコを入れる。

その箱を今度はリボンで可愛らしくデコレーションする。そして会心の出来だと言う様に頷くと、それをテーブルに置いた。

「うん。これを後は鬼柳に渡して――――」

テーブルに置いたチョコの入った箱を前にして、フェイトの言葉がプツリと途切れた。
そして次の瞬間には、彼女の顔の下半分から上に向けて顔が赤くなっていく。

どうやらチョコを鬼柳に渡す際のことを想像し、照れてしまったらしい。
あぅあぅと涙眼になりながら、キッチンの中をうろうろする。大分可愛らしい仕草だ。

「う、うぅ……！　と、とりあえず鬼柳に渡して――「呼んだか？」ぴゃぁあああああッッ！？」

箱を持ってうろうろしていると、彼女の背後から鬼柳の疑問の声が降りかかった。
素っ頓狂な声を上げながら、フェイトはズザザっ、と背後――鬼柳から距離を取る。

彼女の視線の先には、キョトンとした表情の鬼柳の姿が。
大丈夫か。さっきの行動を見られていないか。フェイトは必死に考える。

だが、鬼柳の挙動を見る限り、どうやら鬼柳は先ほどの自分の奇行を見てはいなかったようだ。
それに内心でホッと安堵の息を漏らしつつ、これはチャンスだと鬼柳の方を盗み見る。

「ふぇ、フェイト？　どうしたんだ……？」

「う、うぅん。何でも……ない、よ……？」

「？　そ、そうか」

鬼柳の言葉を最後に、キッチンを沈黙が支配する。
それと同じように、フェイトの顔は真っ赤に染まっていた。

意識しない様にすればするほど、鬼柳とこの場に二人きりと言うのを意識させられる。
反らしていた視線をチラチラと鬼柳に向けながら、フェイトは鬼柳の様子を伺う。

「（私、あそこで泣いたんだ……）」

するとフェイトの視線は鬼柳のとある一点――鬼柳の胸を捉える。
思い出すのは先日の記憶。
背中と頭から暖かい優しい温もりがフェイトを満たし、それに安心して大泣きしてしまったのだ。

あの時の感触や温もりは今でも覚えており、思い出すと度々フェイトの頬が赤くなる。
また、自分が悲しい思いをして泣き出しそうになったら、鬼柳は以前と同じように抱き締めてくれるだろうか。

「（私だけの……場所）」

「おい、フェイト？　大丈夫か？」

「っ！　あ、う、うん！　大丈夫だよ」

と、フェイトが鬼柳の胸の辺りをジィッと見つめていると、鬼柳の心配そうな声がかかる。
それにフェイトはハッと我に返り、なんとか大丈夫だと鬼柳に返した。危ない危ないと内心で反省。

もしもあのまま呆けていたら、鬼柳に変な子だと思われただろう。
そんな事はイヤだ。
とっても大好きな人に、そんな風に思われたくない。可愛い女の子だって、思っていて欲しい。

「……あの、ね。鬼柳……」

「？　どうした」

「こ、コレ……！」

頬が真っ赤になっている。自分から見えていなくても、フェイトにはそれが理解できた。
なにせ自分の頬がカッカカッカと熱くなっているのだから、見えていなくても理解は出来る。

そして鬼柳に結んだばかりのチョコの入った箱を差し出した。ギュッと瞼を閉じ、鬼柳の反応を待つ。
鬼柳は果たして、受け取ってくれるだろうか。それともそんなものは要らないと拒否するだろうか。胸の鼓動が脈打つ。

「フェイト、これ……」

「これ、私の……本命、だよ……」

「！」

フェイトがそう告げると、鬼柳が息を飲む気配が伝わってきた。
どうやら想定外の事態だったようだ。しかしそれでも尚、フェイトは箱を差し出す。

早く鬼柳の一番にならないと。そんな強迫観念に似た何かに、フェイトは急かされる。
なにせ鬼柳の周りには女性が多い。下はなのはやヴィータから、上はシグナムやプレシアなど。

誰がライバルになるか分からないのだ。故に急いで、鬼柳の一番になりたいと切に思う。
そうすればきっと鬼柳は、自分だけを見てくれる。自分だけの鬼柳でいてくれると思うから。

「……そうか、本命……か。……なぁ、フェイト」

「な、なに……？」

「本命がどう言う意味か……知ってるんだよな？」

「う、うん……」

「そうか」

その言葉を最後に、ギシッ、ギシッ、とキッチンの床がきしむ音が聞こえる。

どうやら鬼柳が此方に近づいてきているらしい。フェイトはさらに瞼を強く閉じる。

そしてゆっくりとした歩みで鬼柳はフェイトの元まで歩み寄り、足音がとまった。

フェイトはギュッと瞼を閉じたまま、鬼柳が受け取ってくれるかどうかを祈る。もはや神頼みだ。

「なら、ありがたく頂くぜ」

「――――！」

そして息が詰まる様な沈黙の後、鬼柳は差し出されていたチョコの入った箱を受け取った。

それにフェイトは驚いて。けれども次の瞬間には、嬉しそうな表情を浮かべて鬼柳の顔を見やる。

まさか。自分の告白が受け入れてもらえるなんて思いもしなかった。
鬼柳がパクリと早速チョコを食べているのにも気が付かない。ただただ安堵ばかりが広がっていた。

そして不意に――――フェイトの頬に暖かな何かが触れた。
それと同時、自分の顔のすぐ近くに鬼柳の顔がある。思わず、眼を見開いた。

「――――ッ！？　き、き、き、き、鬼柳……！？
い、い、い、い、一体、何を……！？」

「何をって……印付けたんだよ。フェイトが俺のだって印」

「――――～～～ッッ！？　ぴゃぁあああああッッ！！」

鬼柳の取った行動に、フェイトは顔を真っ赤にさせて抗議する。
一体何故、自分の頬にキスなどをするのか。頭がこんがらがりそうだ。

だが、鬼柳が返す冷静な返答に、フェイトは頭を抱えてゴロゴロと床を転げ回った。
恥ずかしい。もしや、自分の頬には鬼柳の唇の跡が付いているのではないか。想像するとこの上なく恥ずかしかった。

「相手が年下だろうが関係ねえ。俺を本気にさせたんだ。
誰かにフェイトを奪われるなんて満足できねぇ！　俺がお前を、

満足させてやるよ！」

「う、うぅ～～～！！　は、恥ずかしいよ……」

「ははっ。フェイトにはちょっと早かったかもな。
けど、覚悟しておけよ。俺は絶対、お前を離したりなんかしないからな」

「――――～～～～ッッ！！」

真剣な眼差しでそう告げられ、フェイトの頭は爆発寸前だ。
てっきり子供の戯言だと言い退けられると思っていたのに予想外も甚だしい。

けれども、この状況を嬉しいと思っている自分も居る。
子供扱いじゃない。一人の女性として扱ってくれる鬼柳の心根が嬉しい。

「俺と一緒に、満足しようぜ」

そして最後にもう一度。今度は自身の唇を、暖かな何かで塞がれた。

番外編　「季節外れのバレンタイン　フェイトｖｅｒ」（後書き）

……調子に乗った結果がコレだよ！
誰得だよこの話！　顔から火が出そうだ。（フェイトとは違う理由で
かっこわりぃよなぁ……こんなんじゃ、満足……できねぇ、ぜ……
ｏｒｚ

番外編　「季節外れのバレンタイン　シグナムｖｅｒ」（前書き）

番外編の第二弾です。
次回からはようやく本編に戻る予定。

番外編　「季節外れのバレンタイン　シグナムｖｅｒ」

～海鳴市　八神家～

「ん？」

二階の自室から一階の廊下に降りてきたシグナムの元に、甘い匂いが漂って来た。
何処かで嗅いだ様な気がする匂いなのだが、何の匂いなのかは分からなかった。

刺激臭などではないので、薬品などの危険な品物ではないだろう。
ならば一体何が？　内心で疑問に思いながら、シグナムはキッチンの扉を開ける。

「主はやて。それにシャマル、ヴィータも」

「お、シグナムやー」

「よー」

キッチンの中には、私服にエプロン姿の三人の女性の姿があった。
一人はシグナム達守護騎士の現在の主。その彼女が楽しそうに、キッチンの中を動き回っている。

残る二人。シャマルとヴィータと言えば、それぞれテーブルでクッキーなどに使う形で何かを作っている様だった。
何を作っているのだろうか。疑問に思いながら、シグナムはキッチンの中へ入る。そしてシャマルとヴィータの手元を覗き込んだ。

「主はやて。これは……」

「えっへへー、これはチョコレートや。もうすぐバレンタインデーやからな」

「あぁ、なるほど」

はやての言葉に、シグナムは得心が行ったと言う様に頷いた。
チラ、と壁に掛かっているカレンダーに視線を向ければ、もうすぐバレンタインデー。

その日にチョコレートと共に気になる異性に気持ちを送ると言う、地球独特の風習だった。
なるほど。はやても誰かにチョコを贈るつもりなのだろう。楽しそうにしているのが何よりの証拠。

「私は鬼柳兄ちゃんやシグナム達皆の分を作ってるで」

「アタシは老人会の爺さん婆さんにだな」

「そうなのか。シャマルは……ウっ！」

それぞれが誰にチョコを贈るのか訊ねていると、不意に凄まじい臭気を放つ物体を目にする。
それは良く見れば、キッチンの隅に蹲っているシャマルだった。どんよりとした雰囲気を醸し出している。

「良いんです、こんな料理がド下手なうっかりシャマルからチョコを貰っても、皆さんは嬉しくないですよね……」

「……何があったのだ」

「ヒントは料理がド下手」

シャマルに視線を固定しながら、声でヴィータに訊ねる。そして返ってきた答えに納得した。
と言うのも、シャマルは料理を作るのが苦手なのだ。塩と砂糖を入れ間違えるのは良くある出来ごと。

下手をすればポン酢と醤油を入れ間違えたり、酷い時にはコーラの瓶に醤油をドボドボと入れてしまう。
そんなシャマルに付けられたあだ名が「うっかりシャマル」。常日頃からドジを連発している彼女に相応しいあだ名だ。

「ま、あんなシャマルは放っておいて」

「酷いですぅ！」

「シグナムも作るかー？　材料は余ってるぞ」

ヴィータがシャマルから視線を外し、シグナムに訊ねる。
それと同時に、テーブルの上に置いてある材料に目が留まった。

テーブルの上に置いてあるチョコレートはまだ余裕があり、もう一人が作る分には問題なさそうだ。
シグナムはそれに「フム」と考えるが、すぐに考えを棄却する。どうせ作っても渡す相手がいないのだ。

「いえ、私は柄ではないと言うか……」

「ダメやで、シグナム。シグナムも料理できた方が結婚は有利やで！」

「何故そこで結婚まで飛躍するのですか……」

はやてがグッと握り拳を作りながら、シグナムに力説する。
たしかにはやての言うことも一理あるが、何故ここで結婚まで飛躍するのか。

相変わらず突飛な発言をする現在の主の様子に、シグナムは苦笑を禁じ得ない。
と、シグナムがテンションを上げて行くはやてを宥めていると、キッチンに底冷えする様な笑い声が響く。

「うふふ、そうよね。シグナムってば女の子らしくないから、料理作れないもんね……」

「しゃ、シャマル？　どうしたのだ？」

「うふふ。その点、私は下手だけど料理は作れるからお嫁さんポイント高いわよね……。

旦那さんを尻に敷くお嫁さんよりも、旦那さんの一歩後をしずしずと付いていく家庭的なお嫁さんの方がいいわよね……」

「……喧嘩を売っているのか？　そうなのか？」

シャマルの目からハイライトが消え、うふふうふふと不気味な笑い声をあげている。

それでいてシグナムが気にしていることを的確に突いてくるのだから、性質が悪いことこの上ない。

たしかにシグナムの性格上、気になる相手と結婚した場合、旦那を尻に敷くタイプになるだろう。

家事などの家の仕事は旦那に任せ、自分はバリバリのキャリアウーマン。その様な未来が見えなくもない。

だが、そこはシグナムと言えども女性。好きな男性との幸せな未来を描きたいと言う想いも「一応」はある。

故にシャマルの先の発言は癪に障る。それではまるで、剣しか取り柄のない女に聞こえるではないか。

シャマルもシャマルで立ち直った様で、うふふうふふと不気味な笑いでシグナムを見つめる。

それにシグナムは真っ向から立ち向かう。二人の間で激しい火花が飛び散り、物々しい雰囲気が漂い始める。

「なんや、シグナムも料理出来ないの気にしてたんやな」

「そだなー。シグナムも女だし、家事が出来ないといけないって思ってるんだろ」

「別に出来なくてもええのになー」

「そだなー」

そして二人の物々しい雰囲気を余所に、はやてとヴィータのチョコ作りは終わりを迎えている。

溶かしたチョコが再び固まり、様々な形で作ったチョコレートがお皿の上に所狭しと置かれている。

その中から二人は適当に一つを手に取ると、ポイっと口の中に放り込んだ。

口の中でゆっくりと溶けるチョコは甘く、上手に作れたことを物語っている。上出来だ。

「とりあえず鬼柳兄ちゃん呼んどくでー。鬼柳兄ちゃんチョコ好きみたいやし」

「そっかー。ならアタシも適当に鬼柳にやろー」

なんともゆるい感じで、はやてとヴィータはキッチンから出て行くのであった。

※

「おっ、くれるのか？」

「そや。私らの手作りやでー」

「ありがたく食えよな！」

八神家の二階の自室でデッキを調整していた鬼柳の元を、はやてとヴィータは訪れていた。

鬼柳は二人の訪問に驚いた様子だったが、二人が作ったと言うチョコを貰って嬉しそうに笑みを浮かべる。

さっそく二人からチョコを少し貰うと、パクリと口の中に放り込んだ。

口の中を甘い香りと味わいが満たし、何とも言えない感覚に自然と鬼柳の頬が緩む。

サテライトでは碌にチョコレートなどは食べる事が出来ず、食べるのが珍しいものだった。
だが、この世界ならば僅かなお金でチョコを買うことが出来る。なんともありがたい世界だなと鬼柳は思った。

「あぁ、ありがとよ」

「えへへー、その言葉が聞けて私は大満足や。……あ、そやそや。キッチンでシャマルとシグナムもチョコを作っとるんやけどな？」

「シャマルとシグナムもか？」

ポリポリとチョコレートを頬張りながら、鬼柳ははやてに訊ねる。
二人とも料理は苦手で、進んでキッチンに立つことはあまり無いと思っていたが。

「後で二人のチョコも食べてあげてや。
作ったはえぇけど、恥ずかしいからって捨てそうでな～……」

「シグナムはあり得るかもな。けど、シグナムが料理か……」

はやての言葉に笑みを返しながら、鬼柳はシグナムがキッチンに立っている姿を想像する。
いつも凛々しい彼女がキッチンに立っている姿を想像するのは難しいが、なんとか頭を働かせる。

慣れないエプロンを身に付け、不規則な包丁の音がキッチンに響く朝の光景。
手には幾つもの絆創膏を貼りながらも、決して包丁を動かすことは止めようとしない。

そして自分が起きているのに気が付き、頬を赤らめながら振り返るシグナム。
そこまで想像し、鬼柳は「ふむ」と頷いた。普段とのギャップがあまりに違いすぎる。

「なんつーか……良いよな」

「おぉ、鬼柳兄ちゃんも分かるんか！
そやろそやろ？　シグナムのエプロン姿はえぇやろ！？」

鬼柳が羞恥からボソリと呟いた言葉に、はやては貪欲に反応してくる。
だが、はやての言葉を鬼柳は否定する事はなかった。実際、シグナムのエプロン姿は見たい。

竹刀や道着が似合うシグナムが趣を変え、エプロンとお玉装備と言う何とも言えない恰好をするのだ。
普段の姿しか知らない鬼柳からすれば、その姿はとても魅力的に思える。普段は感じない女性らしさと言うところか。

「けど、普段のシグナムも好きだぜ？

やっぱり守護騎士のリーダーは伊達じゃないってな」

「そやな。慣れないこととしとるシグナムもえぇけど、やっぱり普段のシグナムもえぇな」

「あぁ」

だが、鬼柳はそれでいて尚、普段のシグナムも良いと告げる。
別に家事など出来なくても構わない。彼女が満足そうに笑ってくれるだけで良い。

はやてもそれに同感なのか。何度も「うむうむ」と頷いている。
別に彼女の女性らしさを否定する気は無い。だが、普段の姿を否定する気もまた、ない。

「さて。それじゃシャマルとシグナムのチョコを貰いに行ってくるぜ」

「気ぃ付けてなー。シャマルの料理は注意が必要やでー」

「あぁ」

鬼柳は腰掛けていたイスから腰を上げ、部屋の扉をガチャリと開ける。
そして彼は部屋の中のはやてとヴィータに笑みを浮かべながら、キッチンへ向かうのだった。

※

「――――で、どうしたら良いのだ！？」

はやてとヴィータが立ち去ってから数十分後のキッチンで、シグナムが叫んだ。
彼女の手元には、不格好ながらも一応の形はとれているチョコレートの数々。

シャマルと競い合い、何時しか試行錯誤していく中で、中々の出来のチョコを作る事が出来た。
先ほど試しに一つ食べてみたのだが、味は市販のものに劣ってはいない。だが、勝っても居ない。

やはり初心者が作ったチョコレートはこの域が限界なのだろうかとシャマルと二人、悩んだものだ。
そして現在、シグナムは非常に困っている。シャマルと作り上げたチョコの数々。これをどう処理するかで。

「ザフィーラにでもあげます？」

「「似合わぬことをする」と言われるのがオチだろう」

「じゃあ、はやてちゃんは？」

「主はやてにこの様な物を出す訳にいかん……」

じゃあどうするのか、と言わんばかりの表情でシャマルはため息を吐いた。
せっかく作ったチョコレート。誰かに美味しく食べてもらいたいと言うのが彼女の本音だ。

だが、そこをシグナムの羞恥心が邪魔をする。普段から女性らしくない行動をする彼女。
そんな彼女が突然チョコを作ったと言われれば大抵の人間は驚くだろう。もしかしたら笑われるかもしれない。

シグナムはそれを嫌がっているのだ。らしくない自分の行為を他人に見られ、驚かれたり笑われたりするのを。
別にそんなこと無いのにーと、シャマルはチョコを一つ齧りながら心の中でそう思う。

シグナムだって女性なのだ。チョコを作ったり、料理をしたりするのも全然構わないだろうに。
これぱっかりは覚悟の問題かなと内心で思いながら、シャマルはふぅと小さく息を吐いた。

「よぉ」

「あ、鬼柳さん」

「鬼柳か」

と、そんなとき不意にキッチンに思わぬ人物が現れる。
肩先まで伸びた薄水色の髪に、頬に施された黄色い一本線。

年がら年中灰色のコートと言う出で立ちのその人物――鬼柳は微かに笑みを浮かべる。
一体どうしたのか。シャマルとシグナムは内心で訝しみながらも、鬼柳の来訪を歓迎した。

「どうしたのだ？　デッキの調整でもしているのではなかったのか？」

「そうだったんだが、はやてから此処で美味いチョコが食えるって聞いてな」

「ッ！！」

鬼柳のその言葉に、シグナムの表情が凍りつく。大方、先ほどまでの状況を思い出したのだろう。
挙動不審げに鬼柳に言葉を返すと、さり気なくを装ってチョコレートの入った皿を戸棚に仕舞おうとする。

だが、それに目ざとく気がついた鬼柳がシグナムの手からチョコレ

ートの入った皿を奪取。
咄嗟にシグナムは取り返そうとするのだが、鬼柳も鬼柳で取り返されない様にブロックしている。

「か、返せ！」

「断る！
こんなに一杯あるんだから、一つくらい良いだろが！」

「わ、私が作ったものなのだぞ！」

「だからどうした！」

「な――――――!?」

鬼柳との押し問答をしていると、鬼柳の口から思わぬ返答が飛び出してきた。
彼は自分――シグナムが作った料理だと聞いても、顔色一つ変えずにそれがどうしたと返したのだ。

普通ならば、驚くか茫然とするかの二通りだと言うのに。思わぬ鬼柳の返答に、シグナムの動きが僅かに止まる。
そしてその隙を見計らい、鬼柳は皿に盛られたチョコレートの一つをパクリと口に運ぶ。それにシグナムが「あっ」と声を上げた。

「ん、なんだ。やっぱり美味いじゃねーか」

「っ！　ほ、本当にそう思うか……？」

「？　当たり前だろ？　本当のこと言っちゃいけないのかよ」

「そ、そう言うのではなくてだな……」

あっけらかんと「美味しい」と言う鬼柳に、シグナムはおずおずと訊ねる。

無理をして美味しいと言ってはいないか。本当は美味しくないんじゃないか。不安が募る。

だが、返ってきたのは何を言っているんだと言う様な表情の鬼柳の顔。

その顔からは疑問しか浮かんでおらず、彼が嘘を吐いている様には見えなかった。

「その、普段家事など碌にした事のない私が作ったチョコだしな、その……」

「大丈夫だ、自身持てよ。お前の作ったチョコは美味いぜ？」

「――――～～っ！　そ、そうか」

ぼそぼそと言い訳紛いの何かを言っているシグナムを、鬼柳は一刀両断する。

実際、彼女の作ったチョコレートは鬼柳からすれば十分美味しいと言える代物。

これなら毎日食べても飽きないなと内心で思いながら、更にもう一つパクリと口に運ぶ。
するとシグナムは照れたのか。頬を真っ赤に染めながらも、鬼柳からチョコを取り返そうとはしなかった。

「それと」

「？　ど、どうした……？」

「美味しいって言われて、どう思った？」

そして暫しむず痒い沈黙が、キッチンを支配する。
ちなみにシャマルはこのむず痒い沈黙に耐えきれずに脱出した。

そんな中、３つ目のチョコを口の中に放り込んだ鬼柳が唐突にシグナムに訊ねる。
一体何を言っているのか。訳が分からないと思いつつ、鬼柳に美味しいと言われた事を思い出す。

「（――――嬉しかった、な）」

シグナムの心に率直に浮かんできたのは、紛れもない喜びだった。
誰かに自分の作った料理を食べてもらい、美味しいと言われる。それはとても嬉しい。

しかも相手が本心からそう言ってくれているのが分かるので、嬉しさは人一倍である。
知らず知らずのうちにシグナムの頬がにやけ、思わず笑みを浮かべてしまった。

「満足できたか？」

「――――あぁ。満足、出来たぞ」

笑みを浮かべた鬼柳の言葉に、シグナムもまた笑みを浮かべながら言葉を返すのだった。

番外編　「季節外れのバレンタイン　シグナムｖｅｒ」（後書き）

なんだか今回の話は上手く書けた気がする。
けど、どうだろうな。他人がどう思うかは分からないし。

とりあえず一つ言えることは、
鬼柳さんは幼女に対して強気に出ればいいと思うよ。
それでシグナムたち同年代とは親友みたいに接すれば良いと思うよ。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　前編」（前書き）

結構九話は長くなる予定。
恐らく中編と後編が入る予定です。
オーガ・ドラグーンは恐らく後編か中編の最後で登場。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　前編」

～海鳴市　上空～

「エイミィ！　街の様子を出せるか！？」

「今やってるよ！」

アースラへと飛び乗り、クロノ達アースラクルーは急ぎ、地球へとやってきた。
そして海鳴市内に張られた強固な結界を発見。急ぎ現場の確認を行うため、外部モニターを出す。

「そんな……！　なんで一般人が！」

「これも必要なことなのだよ、クロノ」

「ッ！　グレアム提督！」

モニターに映し出されたのは、結界の中から脱出しようと抵抗する街の住人の姿。
だが、どんなに抵抗しようとも強固な結界が破壊される気配は見られない。

クロノはグレアムの言葉に頭に血が上るが、それを理性で抑え込む。

ここで自分が理性を失ってしまったら、結界の中に閉じ込められている人たちを助け出す事が出来ない。

怒りに満ちた視線をグレアムから外し、クロノは視線を中央のモニターに向ける。

するとそこには、結界の外側から結界の解除を試みようとしている管理局の武装隊の姿が。

「……あれ？」

「？　どうしたんだ、エイミィ」

「現場からの連絡なんだけど、結界の中には簡単に入れるみたいなの」

「簡単に……？」

「抵抗も、一切なく」

エイミィの上げた疑問の声に、クロノが訝しげな表情を浮かべた。

おかしい。この様な強固な結界を張るのならば、外から中に入る事も出来ないはず。

だが、実情は違う。外から内部への侵入は簡単に出来、逆に中から外へ出ることは出来ない。

まるで巨大な檻の様だ。クロノは海鳴市内に展開された結界の様子を見て、心の中でそう疑問に思う。

『父様、聞こえますか』

「っ！　リーゼロッテ！　それにリーゼアリアも！？」

と、クロノが展開された結界に疑問を抱いていると、不意に新たなモニターが出現する。
そこに現れたのは彼の魔法と武道の師であるグレアムの使い魔である二人の魔導師。リーゼアリアとリーゼロッテ。

二人の背後には奇怪な色合いの空や街並みが並び、彼女たちが結界の内部に居る事が分かる。
一体彼女たちは何をしているのか。クロノが彼女たちに問い詰めるよりも早く、グレアムが口を開いた。

「闇の書は、どうなっているのかね」

『闇の書は現在、魔導師――プレシア・テスタロッサと交戦中です』

「そうか。ならばプレシア・テスタロッサが敗北したのなら、闇の書を下してくれ。
後は私が全てを終わらせよう」

『はい』

「ッ！　待ってください、グレアム提督！
貴方たちは一体、何をするつもりなんですか！」

まるで最終確認を行っている様なグレアムに、クロノは詰め寄った。
彼は全てを終わらせると言った。と言うことはつまり、闇の書をどうにかする方法を思い付いたのだ。

だが、そのために何故あの結界が必要なのか。何故、一般人を危険に晒す必要があるのだろうか。
クロノの詰問に、グレアムの視線がクロノに向けられる。そして彼は右腕を掲げながら、クロノに告げる。

「決まっている。我が神の力を使い、闇の書を……この世から消滅させるのだ！」

「ッ！　その痣は……！」

「待っているが良い、闇の書。お前の終焉は近い」

グレアムの右腕に刻まれていたのはナスカの地上絵「巨人」を現すアザであった。
そのアザは煌々と鈍い紫色の光を放ち、禍々しい雰囲気を撒き散らしている。

クロノは直感で、それが良く無い物だと理解した。同時に、この世にあっては成らないものだと。
咄嗟にグレアムを拘束する様に局員に指示を出そうとしたが、僅かに遅かったようだ。

「――――ッ！」

グレアムの右腕に施されたアザが煌めき、眩いばかりの光がアースラのブリッジを埋め尽くす。
そして光が弱まっていき、光にやかれた目でクロノは周囲を見渡す。
そして苦々しげに顔を歪めた。

転移魔法を使われた形跡は無い。大方、先ほどの「巨人」のアザが何かしたのだろう。
アースラのブリッジにグレアムの姿は既になく。代わりに市内の様子を映し出すをモニターにグレアムの姿はあった。

※

「先攻は貰うわ、ドロー！」

プレシア手札5→6

「≪インヴェルズの斥候≫を守備表示で召喚！　カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

プレシア手札　４
場　インヴェルズの斥候　伏せ×１

「こちらのターン、ドロー」

闇の書の意思手札５→６

「手札から≪Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ≫を発動。さらにデッキから≪青眼の白龍≫を除外。
≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫を特殊召喚する！」

「くっ……！」

プレシアは闇の書の意思の場に召喚されたモンスターを見て、苦悶の表情を浮かべた。
手札消費すら必要としないで、攻撃力３０００のモンスターが現れるとはどんな悪夢なのか。

眼前に控えるＳｉｎ　青眼の白龍は刺々しいまでの敵意を持ち、プレシアの場のモンスターを睨みつける。
その様子を見て、プレシアは自分が先攻を取れて良かったと思う。
もしも後攻ならば、即座にスキルドレインを発動されていた。

「バトルフェイズ！　≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫で≪インヴェルズの斥候≫を攻撃！
滅びのバースト・ストリーム！」

「くぅうっっ……！」

Ｓｉｎ　青眼の白龍が放ったブレスが、プレシアの場のモンスターを粉砕した。
場のインヴェルズの斥候は守備表示だったためダメージは無いが、衝撃が凄まじい。

迂闊に攻撃表示で出していたならば、ライフと身体に多大なダメージを受けていただろう。
プレシアは頬を流れる冷や汗を乱暴に拭った。この決闘（デュエル）、下手をすれば命を無くすかもしれない。

「カードを三枚伏せて、ターンエンドだ」

闇の書の意思　手札１
場　Ｓｉｎ　青眼　伏せ×３

「私のターン、ドロー！」

プレシア手札４→５

「相手のドローフェイズ時、ライフを１０００払い伏せカード≪スキルドレイン≫を発動」

闇の書の意思ＬＰ４０００→３０００

「――――来たっ！　リバースカードオープン！　≪サンダー・ブレイク≫！」

「！　そのカードは」

「手札を一枚コストで捨て、相手の場のカード一枚を破壊する！
対象は≪スキルドレイン≫！！」

プレシア手札5→4

闇の書の発動した強力なメタカード、スキルドレインを破壊し、プレシアは会心の笑みを浮かべる。
これで効果モンスターの効果を使えないと言う事態から脱出できた。
後はインヴェルズ・グレズでケリを付ける。

そう思い、これからいかにしてインヴェルズ・グレズ召喚のためのモンスターを場に揃えるか。
それを考えていたプレシアの耳に、不安を掻き立てる様な笑い声が響いた。慌てて声の元へ視線を向ける。

「クッ、ククククッッ……」

「……何がおかしいの」

「おかしいに決まっているだろう？
≪スキルドレイン≫は私のデッキの要、一枚しか入れないはずが無い！」

「――――！　まさか」

「さらに伏せカードオープン！
二枚目の≪スキルドレイン≫を発動する！」

闇の書の意思ＬＰ３０００→２０００

迂闊だった。プレシアは苦虫を噛み潰したような表情で闇の書の意思を見やる。
キーカードをデッキに複数枚積むのは基本だが、まさか二枚目のスキルドレインが手札にあったとは。

いかにデッキを４０枚に抑えようと、初手に複数枚キーカードが来ることは稀。
まさかそれを読み違えるとは。自身の迂闊な判断で呼び込んだピンチに、プレシアは焦る。

「くっ、私の場の魔法・罠カードが存在しない場合、墓地の≪インヴェルズの斥候≫は蘇る！」

「それでどうすると言うのだ」

「――――っ！　カードを一枚伏せて、ターンエンドよ」

プレシア手札４→３
場　インヴェルズの斥候　伏せ×１

プレシアはどうする事も出来ない苛立たしさを覚えながら、自らのターンを終えた。
彼女の手札には上級モンスターであるインヴェルズ・ガザス。そしてインヴェルズ・マディスがある。

しかし、相手の場に効果モンスターの効果を無効にするスキルドレインが存在している以上、これらのカードはバニラでしかない。早急にサイクロン。もしくは二枚目のサンダー・ブレイクを手札に呼びこまなければいけない。だが、プレシアをさらなる絶望が襲う。

「貴様のエンドフェイズ時、伏せカード≪マクロコスモス≫を発動する」

マクロコスモス
永続罠
自分の手札またはデッキから「原始太陽ヘリオス」1体を特殊召喚する事ができる。
また、このカードがフィールド上に存在する限り、墓地へ送られるカードは墓地へは行かずゲームから除外される。

「ッ！？　除外ギミックも組み込んでいると言うの！？」

「昔の環境ならばいざ知らず。今の環境は墓地を潰されれば、脆いのでな」

「――――～～っ！」

「此方のターン、ドロー」

闇の書の意思手札1→2

一刻も早く、闇の書の意思の場の罠カード二枚を破壊しなければならない。
闇の書の意思が発動した二枚の罠カードは、プレシア。及び現環境のほとんどのデッキに刺さるカード。

一刻も早く除去しなければ、墓地にいることで真価を発揮するインヴェルズの斥候が無駄になる。
しかし、この状況を打開する魔法カードはプレシアの手札、並びに場に伏せられていない。

「手札から≪アドバンスドロー≫を発動。
場の≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫をリリースし、デッキからカードを二枚ドローする」

アドバンスドロー
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する
レベル８以上のモンスター１体をリリースして発動する。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

闇の書の意思手札２↓１↓３

闇の書の意思の場に存在していたモンスターがリリースされ、墓地へ行かずに除外される。
通常、アドバンスドローはデッキに組み込まれにくいが、闇の書の意思のデッキでは話が別だった。

デッキからカードを一枚除外するだけで、上級モンスターを特殊召

喚できるのだ。
それも手札にアドバンスドローとＳｉｎと名のつくモンスターがある限り、ドロー出来る。

墓地兼除外ゾーン肥やしと手札補充。これほど厄介なコンボはない。
現に先ほど、闇の書の意思はフィールドのアドバンテージを失う代わりに、ハンドアドバンテージを得た。

不味い。これで再びＳｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンなどを呼ばれたら一たまりもない。
そして闇の書の意思はドローしたカードを確認し、口元に僅かな笑みを浮かべる。

「手札から≪Ｄ・Ｄ・Ｒ≫（ディファレンサー）を発動。
手札を一枚捨て、除外されているモンスター一体を場に特殊召喚できる。飛来せよ≪青眼の白龍≫！！」

Ｄ・Ｄ・Ｒ
装備魔法
手札を１枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター１体を選択して
攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

「――――っ！　≪青眼の白龍≫……！」

闇の書の意思手札３→１

結界内部の空間を突き破り、一体の白銀のドラゴンがフィールドに舞い降りた。
フェイトの持つスターダスト・ドラゴンよりもシンプルで力強いその姿。紛れもない青眼の白龍である。

ここまで高攻撃力を持つモンスターがポンポンと出てくると、プレシアも思わず笑い出したくなる。
これほどの攻撃力を持つモンスターを召喚するには、それ相応の召喚条件が必要だと言うのに。

なのに、闇の書の意思の使用するデッキではそれは関係ないと言わんばかりの勢いで出てくる。
一体どうすれば闇の書の意思のカードを打ち破ることが出来るのか。
必死にその方法を模索するが、良い案は出ない。

「さらにエクストラデッキから≪サイバー・エンド・ドラゴン≫を除外。
それにより、手札から≪Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン≫を特殊召喚する！」

「これは……詰んだ、かしら」

新たに闇の書の意思の場に、高攻撃力のモンスターが特殊召喚される。
それは先のデュエルで、フェイトを打ち破ったモンスター。僅かに視線が厳しくなる。

しかしいかな手段を用いても、Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンと青眼の白龍を破壊する手段は無い。
手札には上級モンスターと魔法カードが固まり、相手のモンスターを除去するための罠カードは存在しない。

「バトルフェイズ。≪青眼の白龍≫で≪インヴェルズの斥候≫を攻撃する。
滅びのバースト・ストリームッ！」

「くぅうっっ……！」

「続けて、≪Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴン≫でプレイヤーにダイレクトアタック。
これで――――終わりだ」

Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンの三つの口に、夥しいほどの魔力が集められる。
それを一度に食らえば、いかなプレシアと言えども無事では済まない。だが、回避する手段が無い。

どうしようもない苛立ちを覚えながら、プレシアは眼前にそびえるＳｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンを見つめる。
そして魔力を集め終わったのだろう。Ｓｉｎ　サイバー・エンド・ドラゴンの三つの口から、魔力の奔流が発射され、プレシアを飲み込む。

「あぁあああぁあああっっ！！」

プレシアＬＰ４０００→０

闇の書の意思が従えるドラゴンが発射した魔力の奔流は、寸分の狂いなくプレシアを打ち抜いた。
多大な量の魔力をその身に浴び、プレシアは全身に多大なダメージを抱えながら、後方へと吹き飛ばされる。

この状況は不味い。プレシアは薄れゆく意識の中で、たしかにそう呟いた。
鬼柳やアルフでは闇の書の意思を倒すのは難しく、対策を練ることすら出来なかった。

完敗だった。悔しい気持ちが胸の中に溢れだし、僅かにプレシアの表情が歪む。
そしてデュエルで敗北したプレシアを闇の書へ吸収するためか。闇の書の意思が彼女に向けて手を伸ばした。

「（フェイト……！）」

このまま消えてしまうのか。悔しい気持ちを抱いたまま、プレシアは心の中で呻く。
負けたくない。消えたくない。娘を。フェイトを助け出す事も出来ぬまま、消えることはイヤだ。

だが、現実はプレシアの意思に答えない。闇の書の意思が手を翳し、

徐々にプレシアの身体が光の粒子へと変わっていく。
ごめんね、フェイト。無念を胸に抱きながら、プレシアは静かに目を瞑る。
そして徐々に彼女の姿が消えて行き、闇の書の中へ消える様に吸い込まれた。

※

「プレシア！」
「ッ！」

プレシア・テスタロッサが闇の書の内部へと囚われた直後、その場に二人の男女が駆けつける。
そのうちの男――鬼柳はプレシアが消える瞬間を目撃したのだろう。
苦々しげにガリっと奥歯を噛み締めた。

「お前たちも来たか。丁度いい、お前たちも消えてもらう」

「ハッ！　やれるもんならやってみな！　アタシ達はそう簡単に負けないよ！」

「あぁ……！　なのはやフェイト、はやてにプレシアを返してもらうまで、負けるつもりはねぇ！」

闇の書の意思の何処か見下すような言葉に、アルフは戦意を高め、鬼柳は吠える。
その様子に闇の書の意思は僅かに表情を変えると、先ほどまで展開していたカードをデッキに納めた。

それを見て、鬼柳とアルフも準備を始める。アルフと鬼柳はそれぞれ、腕にデバイス化されたデュエルディスクを構えた。
これならば超過ダメージやダイレクトアタックで、相手に魔力ダメージを与える事が出来る。これで闇の書の意思を無力化するのだ。

「行くぜ、アルフ。もう俺たちには後がねぇ。死ぬ気で勝つぞ」

「当然だろ、大将？」

アルフと鬼柳は互いに目配せすると、それぞれのデッキをデュエルディスクのデッキホルダーへと装填。
シャシャシャと小気味いい音を響かせ、アルフと鬼柳のデッキが自動でシャッフルされる。

「いくぜ、決闘（デュエル）だ！」

闇の書の意思ＬＰ４０００
鬼柳ＬＰ４０００
アルフＬＰ４０００

「俺の先攻、ドロー！」

鬼柳手札５→６

「俺はインフェルニティ・ナイトを守備表示で召喚！
カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

鬼柳手札６→３
場　ＩＦナイト　伏せ×２

「此方のターン、ドロー」

闇の書の意思手札５→６

「手札から≪テラ・フォーミング≫を発動。
デッキからフィールド魔法カード一枚を手札に加える。
デッキから手札に加えるカードは≪Ｓｉｎ　Ｗｏｒｌｄ≫。そして発動だ」

「くっ。フィールド魔法がサーチされちまった……！」

「デッキから≪真紅眼の黒竜≫を除外し、手札から≪Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜≫を特殊召喚！」

Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜
星７／闇属性／ドラゴン族／攻２４００／守２０００
このカードは通常召喚できない。
自分のデッキから「真紅眼の黒竜」１体をゲームから除外した場合に特殊召喚できる。
「Ｓｉｎ」と名のついたモンスターはフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。
このカードが表側表示で存在する限り、自分の他のモンスターは攻撃宣言できない。
フィールド魔法カードが表側表示で存在しない場合このカードを破壊する。

「バトルだ。≪Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜≫で≪インフェルニティ・ナイト≫を攻撃！
黒・炎・弾ッ！」

「ぐぅううッッ！！」

「鬼柳！」

闇の書の意思が召喚した黒竜の攻撃により、鬼柳の場のモンスターが破壊される。
モンスターが守備表示だったためダメージを受けることは無かったが、破壊の余波が凄まじい。

こんなデュエルをしていたのか。鬼柳は過ぎ去った衝撃波を思い出しながら、内心でポツリと呟く。
脳裏に浮かぶのは消えてしまった三人の女性。一体どれほどの恐怖や不安と彼女たちは闘っていたのか。

「≪インフェルニティ・ナイト≫が破壊された場合、手札を二枚捨てることにより蘇生することが出来る。
俺は手札を二枚捨て、墓地から≪インフェルニティ・ナイト≫を特殊召喚！」

鬼柳手札３→１

「ハンドレスへの布石を整えるか……。カードを二枚伏せ、ターンエンドだ」

闇の書の意思手札２
場　Ｓｉｎ　真紅眼　伏せ×２

「アタシのターン、ドローだよ！」

アルフ手札５→６

「（鬼柳は何を伏せたんだい……？）」

アルフは勢いよくデッキからカードをドローすると、鬼柳の場に伏せられたカードを見やる。
先ほどの闇の書の意思による攻撃で発動しなかったことを考えるに、恐らく攻撃反応型の罠ではない。

ならば手札を消費し、同時に墓地肥やしを行うカードか。アルフはそう当たりを付ける。
鬼柳の残りの手札はあと一枚。インフェルニティ・インフェルノに

しろ、全弾発射にしろ手札は0になる。
ならば自分がやることは、蘇生カードを伏せて鬼柳に渡すこと。
いかに高速で墓地を肥やしても、墓地から蘇生するカードが無ければ宝の持ち腐れだ。

「アタシは≪E・HERO　アナザー・ネオス≫を守備表示で召喚！
カードを三枚伏せて、ターンエンドだよ」

アルフ手札6→2
場　アナザー・ネオス　伏せ×3

「此方のターン、ドロー」

闇の書の意思手札2→3

「メインフェイズの初めに、ライフを1000払って≪スキルドレイン≫を発動する」

闇の書の意思LP4000→3000

来た。アルフは闇の書の意思が発動した罠カードを確認し、スッと目を細めた。
現状で最も厄介な罠カードの一つであるスキルドレイン。あれを破壊しなければ、モンスター効果は使えない。

「甘いよ、伏せカード≪デュアル・スパーク≫を発動！

場の≪Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス≫をリリースし、相手のカードを一枚破壊する。
対象は≪スキルドレイン≫！　さらに破壊した後、デッキからアタシはカードを一枚ドローするよ！」

アルフ手札２→３

「くっ、小癪な真似を……！　ならばバトルだ！
≪Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜≫でアルフにダイレクトアタック！」

「くっ……！
（伏せカードは≪リビングデッドの呼び声≫！　使ったら鬼柳が蘇生出来なくなっちまう……！）」

アルフＬＰ４０００→１６００

自らに放たれる黒竜の黒炎。アルフは伏せカードを使うか考えるが、すぐに棄却する。
ここで蘇生してしまっては、鬼柳の墓地に眠るカードを蘇生する事が出来ない。

一枚目のスキルドレインを破壊した今、警戒すべきは二枚目のスキルドレインである。
その二枚目のスキルドレインを発動されるよりも早く、鬼柳のモンスターを展開させなくてはいけない。

それに加え、自分は墓地と場にモンスターが居ればどうにかなるデッキだ。
ならばせっかく伏せたリバースカード。そのカードを鬼柳に預けれ

ば逆転の手数は増える。

「ぐっ……！　きっついねぇ……」

「カードを伏せて、ターンエンドだ」

闇の書の意思手札3→2
場　Ｓｉｎ　真紅眼　伏せ×2

「俺のターン、ドローだ」

鬼柳手札1→2

「メインフェイズ時、伏せカード≪インフェルニティ・インフェルノ≫を発動する。
手札を二枚まで捨て、デッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを捨てた枚数分だけ墓地に送る。
俺は手札の≪インフェルニティ・デーモン≫と≪インフェルニティ・ジェネラル≫を墓地に送り、
≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫と≪インフェルニティ・リベンジャー≫を墓地に送らせてもらう」

鬼柳手札2→0

「ハンドレス……！」

「そして伏せカード≪インフェルニティ・ガン≫を発動！
手札が0枚のとき、このカードを墓地に送ることで墓地から「インフェルニティ」と名のついた

モンスターを二体まで場に特殊召喚することが出来る。
墓地より蘇れ、≪インフェルニティ・デーモン≫！　≪インフェルニティ・ジェネラル≫！」

インフェルニティ・ジェネラル
星７／闇属性／戦士族／攻２７００／守１５００
自分の手札が０枚の時墓地のこのカードを除外する事で
墓地のレベル３以下の「インフェルニティ」と名のついたモンスター２体を効果を無効にして特殊召喚できる。

鬼柳が墓地に送ったインフェルニティ・ガンの効果により、墓地から二体のモンスターが蘇生される。
片や物語に出てくる様な典型的な悪魔をモチーフにしたモンスター。
片や騎士の様な鎧に身を包んだモンスター。

両極端な姿をしているにも関わらず、効果は「インフェルニティ」に共通する手札が０の時に発動する。
なかなか厄介なモンスターだ。闇の書の意思は場に特殊召喚された二体のモンスターを見つめ、顔を顰める。

「特殊召喚に成功した≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから「インフェルニティ」と名のついたカード一枚を手札に加える。
俺は≪インフェルニティ・アーチャー≫を手札に加え、場の≪インフェルニティ・デーモン≫をリリース！
現れろ、≪インフェルニティ・アーチャー≫！！」

「くっ！　厄介な効果を持つ……！」

「バトルだ！　手札が0枚の時、≪インフェルニティ・アーチャー≫はプレイヤーにダイレクトアタックする事が出来る！
　インフェルニティ・クロスボウ！」

鬼柳の召喚したインフェルニティ・アーチャーが、手に携えた弓に矢を番える。
その狙いはモンスターではなくプレイヤーである闇の書の意思。

そして限界まで引き絞られた弦はピンと張りつめ、次の瞬間に番えられた矢を発射する。
凄まじい早さで放たれた矢は、闇の書の意思を直撃。凄まじい爆発を起こし、ダメージを与える。

「くっ……！　今のはなかなか堪えたぞ」

闇の書の意思ＬＰ３０００→１０００

「さらに≪Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜≫を破壊する！
≪インフェルニティ・ジェネラル≫で≪Ｓｉｎ　真紅眼の黒竜≫を攻撃！
　煉獄断殺（インフェルノブレイド）ッ！」

「それは許可できない！　伏せカード≪ドレインシールド≫を発動！
相手モンスターの攻撃を無効にし、無効にしたモンスターの攻撃力分、ライフを回復する！」

闇の書の意思ＬＰ１０００→３７００

「チィッ、一筋縄じゃいかねぇか。俺はこのままターンを終了する（これで闇の書の注意がアルフから俺に向いてくれればいいんだが……）」

鬼柳手札０
場　ＩＦジェネラル　ＩＦアーチャー

鬼柳は自らのターンを終えながら、アルフの場に存在するカードを視界の隅に捉える。
アルフの場には二枚の伏せカードがある。そのうちの一枚は自分を気遣ってか、発動していない。

残るもう一枚は緊急時の保険と言うところか。
攻撃してきたモンスターを除外する事の出来るカード、次元幽閉を伏せている。

これならば最悪二体のモンスターを止める事が出来るだろう。
だが、もしも三体目。もしくは高攻撃力のモンスターが後続で出てきたら耐えきれない可能性がある。

油断は出来ない。パートナーの不利は己の不利でもある。
出来る限り、闇の書の意思が自分に注意を向けてくれれば。鬼柳はそう願うのだった。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　前編」（後書き）

次回は鬼柳サイドをちょろっとやって
なのは＆フェイトサイドをやる予定です。

ちなみにキーカードがオーガ・ドラグーンのくせにあのカードで止めを刺す予定。
良いのか、オーガ・ドラグーンが踏み台になるぞ！

大丈夫だ、問題ない。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　後編」（前書き）

今回でオーガ・ドラグーン編は終了。
次回でＶＳ闇の書の意思戦を終了させます。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　後編」

～？？？　？？？～

足りない。とある道具に囚われた二人のシグナー。
その様子に、その存在は呟いた。足りない。力が足りないと。

元々、三人のシグナーでは力不足だったのだ。それが今回の事件で浮き彫りになった。
三人では足りない。三人では、有事の際に危機を打破することが出来ない。どうしたら良い。

――――簡単だ。足りないのならば、増やせばいい。
三人で足りないのならば四人に。四人で足りないのならば五人に。

だが、それは簡単なことではない。半ば神格化されている存在――己の力を受け継ぐに足りる器。
それが必要となる。今の三人は良い。器が出来ている。我らの力を全身で受け止めている。

しかし、他の人間はそうはいかない。膨大な量の力の奔流。
それらを受け入れて、身体が。精神が壊れない人間は決して多いとは言えない。

だが、ゆっくりとしている暇は無い。時間が経てば経つほど、道具に囚われたシグナーに危機が迫る。
事態は急を要する。急ぎ四人目。ならびに五人目のシグナーたりえる人間を探し出し、力を授けなければ。

眼下に見える一人の女性――闇の書の意思。彼女を見つめながら、
その存在はそう、ひとりごちた。

※

「私のターン、ドロー」

闇の書の意思手札２→３

「これ以上、ダメージを受け続けるのは不味いのでな。
二枚目の伏せカード≪スキルドレイン≫を発動させてもらう」

闇の書の意思ＬＰ３７００→２７００

「くっ！　止める手段がねぇ……！」

「鬼柳、踏ん張りな！　此処が正念場だよ！」

「あぁ！」

闇の書の意思が発動した罠カードを確認し、鬼柳とアルフは気合を入れ直した。
一枚以上入っているとは思っていたが、まさか既に二枚目が伏せられていたとは思いもしなかった。

これにより効果モンスターの効果は無効にされ、鬼柳の場の二体のモンスターの効果も無効にされる。
こうなってしまえば、効果モンスターの効果で相手モンスターを除去するのは限りなく難しい。

一刻も早くスキルドレインを破壊し、場を整えなければ。
鬼柳とアルフは互いに視線を合わせると、どちらからともなく頷く。

「さらに伏せカード≪デストラクト・ポーション≫を発動。
自分の場のモンスター一体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分、ライフを回復する」

闇の書の意思ＬＰ２７００→５１００

「チィッ、新しいモンスターを特殊召喚する気だね」

「デッキから≪青眼の白龍≫を除外し、≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫を特殊召喚！」

「くっ！　攻撃力３０００……っ！」

闇の書の意思のフィールドに、白銀に輝くドラゴンが舞い降りる。
その攻撃力は３０００。純粋な攻撃力で超えるには、難しい数値を

叩きだしている。

「さらに手札から≪Ｄ・Ｄ・Ｒ≫を発動。
手札を一枚捨て、除外した≪青眼の白龍≫を場に呼び戻す」

「なんてこったい……！　これじゃあ、八方ふさがりじゃないか！」

アルフが悲鳴染みた声を上げた。だが、それは仕方のないことなのかもしれない。
こちらは効果モンスターの効果を無効にされ、純粋に攻撃力で勝負するしか術はない。

だと言うのに、闇の書の意思が召喚するモンスターはアルフ達の召喚するモンスターの攻撃力を、楽に越えてくる。
これが悪夢でなくてなんだと言うのだろうか。しかもスキルドレインの効果により、Ｓｉｎのデメリットも無効となっている。

「バトルフェイズ、まずは邪魔なモンスターを消させてもらう。
≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫で≪インフェルニティ・ジェネラル≫を、≪青眼の白龍≫で≪インフェルニティ・アーチャー≫を攻撃！」

「ぐわぁあああああっっ！！」

鬼柳ＬＰ４０００→３７００→２７００

二体の白亜のドラゴンから放たれたブレスが、鬼柳の場のモンスタ

ーに直撃する。
ドラゴンと対峙していた二体のモンスターは破壊され、超過ダメージを鬼柳が襲った。

凄まじいまでの衝撃波と魔力ダメージ。噂に聞く非殺傷設定は解除されている様で、鬼柳の頬に一筋の傷が出来る。
これが次元世界で主流となっているデュエルか。鬼柳はこんなときだと言うのにそんなことを思う。

なるほど。こんなにも緊迫とした中でするデュエルはさぞかし面白いだろう。
しかも本番は非殺傷設定で行う命の危険のないデュエル。まるで本当にモンスターを使役している様だ。

「私はこのまま、ターンを終了する」

闇の書の意思手札０
場　Ｓｉｎ　青眼　青眼の白龍　スキルドレイン

「アタシのターン、ドロー！」

アルフ手札３↓４

「アタシは≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を守備表示で召喚！
　カードを二枚伏せて、ターンを終了するよ！」

アルフ手札４↓１
場　クルエン　伏せ×４

アルフは手札を確認すると、自らの場の伏せカードを厚くすることを選んだ。
基本攻撃力の低い光デュアルでは、手札にオネストが無い限り状況の打破は難しい。

仮にデュアルスパークでモンスターを破壊しても、新たなモンスターを呼ばれるだけだ。
それに加え、今のアルフの手札にデュアルスパークは無い。場にも、伏せられてはいない。

ならば今は耐える時だ。このまま上手く耐えきれば、きっと状況を打破するカードが来てくれる。
アルフは自らのデッキを信じると、ターンを移した闇の書の意思を見つめる。彼女はデッキからカードをドローした。

「ドロー」

闇の書の意思手札0→1

「ほう。これは運が良い。手札から≪アドバンスドロー≫を発動。場の≪Ｓｉｎ　青眼の白龍≫をリリースし、デッキからカードを二枚ドローさせてもらう」

「くっ！　手札増強カード……！」

「そして引いたカードは――――ククッ」

「！」

闇の書の意思がデッキからカードをドローし、さぞ愉快そうな笑みを浮かべた。
どうやら、よほど良いカードをドロー出来たらしい。これは不味いか。アルフと鬼柳の顔が歪む。

「まずはデッキから≪究極宝玉神　レインボー・ドラゴン≫を除外し、手札から≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫を特殊召喚」

「攻撃力４０００……！」

「さらに手札から≪次元の裂け目≫を発動。
このカードの効果により、墓地へ行くモンスターは除外される」

「クッ！　完全なメタデッキか！」

次元の裂け目
永続魔法
墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。

「バトルだ。≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫で鬼柳　京介にダイレクトアタック！」

「させるか！　アルフ、借りるぜ？」

「おうよ！　元よりその覚悟さ」

「アルフの場の伏せカード≪リビングデッドの呼び声≫を発動！
このカードの効果により、墓地から≪インフェルニティ・アーチャー≫を特殊召喚する！」

アルフの場の伏せカードが発動し、鬼柳の場にインフェルニティ・アーチャーが特殊召喚される。
本来、タッグデュエルでは味方プレイヤーの伏せカードは使用する事は出来ない。しかし、このデュエルは別だ。

場のモンスターを味方プレイヤーの壁にすることは出来ないが、シンクロ素材や融合召喚に使用する事は出来る。
なお且つ、伏せカードは両者が共有できる仕組みだ。これにより、伏せカードが存在しない鬼柳も安心して闘うことが出来る。

「攻撃力２０００で何が出来る。攻撃続行。≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫よ。
≪インフェルニティ・アーチャー≫を破壊しろ！　オーバー・ザ・レインボー！！」

「ぐぅううっっ……！」

鬼柳ＬＰ２７００→７００

「続けて≪青眼の白龍≫で鬼柳　京介に攻撃！
滅びのバースト・ストリームッ！」

「伏せカード≪次元幽閉≫を発動！

攻撃を仕掛けた≪青眼の白龍≫を除外させてもらう」

次元幽閉
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

白亜のドラゴンが放ったブレスが、鬼柳との間に出来た隙間に吸い込まれる。
その隙間はブレスだけでは飽き足らないのか。闇の書の意思の場の青眼の白龍すら飲み込んだ。

どうやら止めを刺す事が出来なかったらしい。闇の書の意思は不満そうに、僅かに顔を顰める。
そして鬼柳はそんな闇の書の意思を見つめ、安堵したように息を吐き出した。今のはかなり危なかった。

もしもアルフとタッグを組んでいなければ。アルフが次元幽閉を伏せていなければ、自分は間違いなく負けていた。
自分一人で闘っていたらと想像し、イヤな想像が彼の脳裏を過る。
やはり無謀な特攻は命を危険に晒すだけだった様だ。

「（だが、どうする。俺の場はおろか、エクストラデッキには状況を打破できるカードはねぇ……）」

鬼柳は今までの己を戒めると、自分のデッキに投入されているカード。並びにエクストラデッキを確認する。

彼のメインデッキには伏せカードを除去するカードはあまり投入されていない。せいぜいがサイクロンやインフェルニティ・ブレイクだ。

だが、今の彼の場には伏せられていない。次のドローあたりで引ければ良いのだが、次の手が続かないのが難点だ。

さらにエクストラデッキの内容も彼の頭を悩ませる。デュエルディスクからエクストラデッキを取り出し、確認する。

彼のエクストラデッキにはインフェルニティ・デス・ドラゴン。ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン。

二体のドラゴン族シンクロモンスターが投入されている。しかし、どちらも魔法や罠に対する耐性は無い。

もしも耐性があるのならば、スキルドレインに恐れることなくシンクロ召喚できるのに。

だが、結果は変わらない。いかに蘇生に対応しているインフェルニティ・デス・ドラゴンがいようとも、肝心の効果が使えないのだから。

「（ダメだ……！　俺のカードじゃ……ヤツを突破出来ねぇ……っ！）」

ギリッと、鬼柳は苦汁に満ちた表情で呟く。出来ない。相手のカードを突破することが。

相手の展開するカードを破壊することが。自分ではダメなのか。四人を助け出すことが出来ないのか。

己の力不足に、鬼柳は手が白くなるほど握りしめる。助けたいのに。誰よりもあの四人のことを助けたいのに。
なのに、自分には力が無い。力が足りない。四人を助けるための力が。四人を護るための力が足りない。

――――力が、欲しいか

「っ！」

と、鬼柳が己の力不足に悔しさを覚えていると、不意に脳裏に何者かの声が聞こえた。
驚き、視線をきょろきょろと周囲に向ける。しかし、この場に居るのはアルフと闇の書の意思のみ。

第三者の姿はまるで見えない。もしや、先ほどの言葉は幻聴だったのだろうか。
そう思い相手と自分の場に視線を向けるが、さらに声が聞こえてくる。力が欲しいか、と。

「（力が欲しいか、だと……？　当たり前だろ……！）」

――――何故、力を求める？

「（助けたい。守りたいヤツらを護るのに、力が必要なんだよ……！）」

――――ならば力をやろう

「（――――なっ！？）」

脳裏に聞こえた見知らぬ声に、鬼柳は驚いた表情を浮かべる。
姿なき声は、鬼柳に力を授けると言っているのだ。だが、素直に喜ぶことは出来ない。

彼の脳裏には、以前の自分――ダークシグナーだった頃の自分の姿がある。
当時は神――地縛神の力を得て、遊星やジャックなど昔の仲間へと復讐に走っていた。

だが、その力は不要とされるものだった。世界にあっては成らないものだった。
その力を求めてしまったばかりに、鬼柳は元の世界へ戻ることが叶わずに、この世界に居る。

もしも今回の声の主が、以前の地縛神の様な存在だったならば。
もしもそうだったならば、自分はなのはやフェイト、はやてにプレシアを救えるのか。

もしや以前の様に狂気が暴走し、なのはやフェイト達に闘いを仕掛けるのではないか。
それを想像すると、素直に力が欲しいとは頷けなかった。力は欲しい。だが、信用できない。

――――力を得るには、それ相応の対価が必要となる

「（ッ、待て！　俺は得るなんて一言も――――――！）」

――――これを見ても、そう言えるのか？

「（なに？）」

姿なき声は鬼柳に疑問を投げかける。それにどんな意図があるのか。鬼柳が僅かに眉を顰めると、唐突に彼の右腕から赤い光が立ち上った。

「なっ！？　な、何なんだい！？」

「これは……！？」

「――――！　赤き、巫女のアザか……？」

浮かび上がったのは、まるで人間の臓器――心臓を模した様な赤きアザ。

今まで鬼柳が見てきたダークシグナーのアザとはまるで違う。神聖な力が腕に宿っている。

だが、それだけだ。腕に宿っているだけで、鬼柳に力を貸している訳ではない。

あくまで今のは、自分の存在を誇示するためのものだったのか。鬼柳はジッと、アザを見つめる。

――――力を得る対価はただ一つ。我らと共にあり、我らの力に耐えることが出来ること

「……それが出来れば、俺は、アイツらを助けられるのか」

――――それをするのは、お前だろう？　鬼柳　京介

「……ははっ」

「き、鬼柳……？」

隣でアルフが心配そうな表情を浮かべているが、鬼柳は気にせず笑みを浮かべた。

なるほど。たしかにそうだ。誰よりも大切なあの四人。助けるのは赤き巫女ではない。自分なのだ。

あくまで赤き巫女のアザは、自分に力を貸してくれるに過ぎない存在。

そんな存在に全てを丸投げするなんて、他の誰かが納得しても、自分自身が納得できない。

「良いぜ、お前の力、俺によこせ！」

――――力に耐えきれなくば、精神の崩壊。または身体が崩壊する。

構わんな？

「上等ッ！　アイツらを、仲間を助けるためなら俺は――――命すら賭けてやるぜ！！」

――――その意気やよし

鬼柳は声高らかに宣言する。以前は出来なかった誓い。
それを今度こそ成し得るために。仲間を信じ、仲間のために自分の力を尽くす。

そのためならばこの命、対価に払っても惜しくは無い。
自分は以前の世界で二度死んだ。そしてこの世界に新たに生まれ、新たな生を歩き始めた。

この世界で初めて出会った少女。高町　なのは。彼女と出会い、自分は満足を忘れずに生きていけた。
八神　はやて。彼女と出会い、自分は新しい命を謳歌しようと決めたのだ。だからこの命、満足出来るように使うのみ！

「俺に力を――――よこせぇえええええええええっっ！！」

――――耐えて見せろ。さすれば汝、新たな力を得ることが出来る

「ッ！　ぐ、ぎぁあああああああああッッ！！！！」

鬼柳が力を得ることを了承し、天に向かって叫ぶ。
そして脳裏に声が聞こえたと思ったら、同時に彼の身体にとてつもない量のエネルギーが流れ込んだ。

その量はあまりにも莫大で、激しい頭痛が鳴りやまない。胃袋はガ

ンガンと痛みを発し、今にも嘔吐してしまいそうだ。
さらに全身の筋肉を凄まじい速度で莫大な量のエネルギーが駆け巡る。まるでコップに海の水を流しこまれた様な感覚だ。

「き、鬼柳!?　どうしたんだい!」

「う、ぐ、うぁあああああああああっっ!!」

アルフが突然の鬼柳の変貌に驚き、声を上げる。しかし、鬼柳に答える余裕は無い。
右腕に浮かびあがっていた赤き巫女のアザが煌々と赤い光を発し、鬼柳の腕にアザを刻み込む。

それはまるで、焼印を入れられている様な激痛だ。脳が焼き切れそうなほどのエネルギー。
それに鬼柳は必死に耐える。負けられない。ここで負けては、大切な仲間たちを助け出すことが出来ない。

だから負けられない。耐える。耐えきって見せる!

――――この男、耐え切るか!　面白い!

「ぐぎぎっ……!　余計なこと、喋ってんじゃねぇえええええっっ!!」

――――ならば与えよう!　新たな力を!　我らシグナーの竜を!

その声が聞こえた瞬間、鬼柳のデュエルディスクから激しい閃光が飛び出した。
閃光が放たれたのは鬼柳のエクストラデッキから。元々三枚しかないエクストラデッキ。

そこに新たなカードが。新たなシンクロモンスターが現れる。
それは力に認められた証。莫大な量のエネルギーに打ち勝った者のみが得られる新たな力。

そしてエクストラデッキに新たなカードが出現したと同時、鬼柳を蝕んでいた激痛がプツリと止む。
それと同時に、今まで必死に耐えきっていた鬼柳がまるで、糸が切れた人形の様に全身を脱力させた。

全身からだらんと力を抜き、顔は俯いており、表情を伺い知ることは出来ない。
そんな鬼柳の様子を隣で見ていたアルフは、とてつもない焦燥感に襲われた。

まるで鬼柳が死んでしまった様な。そんな焦燥感を覚える。

「き、鬼柳――――――!?」

「死んだか。何が原因かは知らんが、都合が良い。私はターンを終了する」

闇の書の意思手札手札０
場　Ｓｉｎレインボー・ドラゴン　青眼の白龍　スキルドレイン

闇の書の意思が全身を脱力させた鬼柳を見下ろし、冷淡な声でそう告げた。
事実、今の鬼柳はまるで死んでしまったかのように生気が無い。立ったまま死んでしまった様だ。

そして闇の書の意思のその言葉に、アルフは目を見開く。今、闇の書の意思は何と言った？
鬼柳は死んだだと？　まだ、なのはやフェイト。はやてにプレシアを助け出していないのに死んだだと？

そんな、そんなバカな話があってたまるか！

「鬼柳！　アンタ、勝手に死んでるんじゃないよぉおおおおおっっ！！！」

アルフは怒りに身を任せ、鬼柳に向けて全力の拳を放とうとする。
正真正銘、自身の力を最大まで込めたこの一撃。当たればいかな人間でも意識を取り戻すはず。

そう思い、アルフは全力のパンチを放つ。だが、それでも尚、鬼柳は糸が切れた様に立っているだけ。
そして鬼柳の頬にアルフの拳が命中し様としたとき、その拳は

――――――鬼柳の手によって止められた。
パシンッと乾いた音が響き渡る。

「！　鬼柳！」

「ったく……。勝手に、俺を死なせるんじゃねぇ……」

鬼柳は心底疲れた様な表情で、アルフに視線を向けた。
その様子に、アルフは安堵したように息を吐く。それに鬼柳も頷いた。

「生きていたか」

「ハッ、勝手に死なせるなよ。それで、お前はターンを終了するのか？」

「そうだ」

「そうか、なら、俺のターンッ！」

鬼柳手札０→１

「俺が引いたカードは≪インフェルニティ・デーモン≫！
このカードは手札が０枚の時にドローした場合、手札から特殊召喚できる！」

「だが、効果は≪スキルドレイン≫の効果で無効だ」

「んなことは分かってるさ。だが、≪スキルドレイン≫の対象はフィールドのみだ。
つまり――――墓地を対象にしていない！」

「！」

「俺は墓地の≪インフェルニティ・ジェネラル≫の効果を発動！
このカードを除外し、墓地からレベル３以下の「インフェルニティ」と名のついたカード二体を
効果を無効にし、場に特殊召喚できる！
墓地より舞い戻れ、≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫！
≪インフェルニティ・リベンジャー≫！！」

墓地よりインフェルニティ・ジェネラルを除外したことにより、鬼柳の場に二体のモンスターが特殊召喚された。
その様子に、闇の書の意思は苦い表情を浮かべる。事実、スキルドレインの効果の対象はフィールドだけ。墓地を対象にしていない。

結果として、先ほど発動したインフェルニティ・ジェネラルの効果の発動を無効に出来なかった。
さらに相手の場にはレベル４のモンスターとレベル３のモンスター、レベル１のチューナーが揃っている。

つまり、相手の狙いはレベル４かレベル５。もしくはレベル８のシンクロ召喚だ。

「俺はレベル４≪インフェルニティ・デーモン≫とレベル３≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫に
　レベル１チューナーモンスター≪インフェルニティ・リベンジャー≫をチューニング！！」

「だが、無意味だ。≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫も≪ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン≫も効果を発動できまい！」

「そんなことは分かってる！　だから呼ぶのさ、新たなモンスターを！」

「新たなモンスターだと！？」

「地獄と天国の狭間、煉獄よりその姿を現せ！　シンクロ召喚！！」

鬼柳の背後に一つの緑色のリングが現れる。その中に整列する星の数は七つ。
背後に並ぶ星を視界の隅に捉えながら、鬼柳は視線をエクストラデッキに向けた。

感じる。新しい力がそこにあることを。新しい力が、自分に力を貸してくれていると。
だが、まだ足りない。まだ、力が足りない。もっとだ。もっと力が無くては、四人を救い出すことが出来ない。

鬼柳はグッと、拳に力を込める。
そしてまるで、それに連動するかのように、鬼柳の腕に刻まれた赤き巫女のアザは光を発した。

※

それは唐突に発生した。
遊星とのデュエルを続行していたフェイトは、己の腕に発生した変化を見逃さなかった。

「っ！　コレ……」

フェイトの右腕から、赤い輝きが放たれている。その模様は天使の羽の様な模様。
その模様が煌々と赤く輝き、フェイトに己の存在を誇示している。
まるで自分は此処に居ると。

「赤きアザ……シグナーの証、か」

「！　知ってるんですか」

「あぁ。俺も、シグナーだったからな」

と、フェイトの腕の変化に気がついたのか。隣を並走している遊星が声を掛ける。
遊星の口ぶりは、まるで赤き巫女のアザを知っている様な口ぶりだ。
気になり、フェイトは訊ねた。

そして返ってきた答えに、フェイトは納得したように頷いた。やはり、遊星はシグナーだった。
並はずれたデュエルタクティクスやスターダスト・ドラゴンを持っているのでそうだと感じていたが、本当だったとは。

「……でも、何だろう。なのはやはやてじゃない。
他の人の想いが流れ込んでくる……」

フェイトは遊星から視線を外し、煌々と煌めく赤き巫女のアザを見つめる。
そこから流れ込む想い。力が欲しい。大切な人たちを護る、力が欲しい。その想いが流れ込む。

だが、その想いの主はなのはやはやてではない。まるで感じたことのない第三者。
その人物からの想いが流れ込んでいる様だ。フェイトは静かに目を閉じ、想いの主の姿を探す。

「（――――！）」

そして脳裏に見つけたのは、傷つきながらも力が欲しいと叫んでいる鬼柳の姿だった。
彼はライフを極限まで削られながらも、なお闘志を燃やしている。
力が欲しい。大切な仲間を護り、救える力を！

フェイトはそんな鬼柳の様子に、思わず嬉しくなってしまう。自分は彼に大切にされていた。
自分の失態で闇の書の中に囚われたと言うのに、鬼柳はそんなことは関係なく、自分を救い出そうとしてくれている。

それがとても嬉しくて。
そして、ここまで一途に想ってくれる彼の心が嬉しくて、フェイトの頬は緩んでしまう。

「そろそろ、このデュエルも終わりか」

「え？」

「鬼柳が呼んでいるみたいだからな。俺たちのデュエルは、一旦ここで終わらせよう」

と、フェイトが思わずにやけてしまっていると、遊星が苦笑しながらフェイトに声を掛けた。

どうやらフェイトが誰に呼ばれているのか。それを何となく感じ取ったらしい。

それは果たして彼の勘からか。もしくは彼の腕に宿るドラゴンヘッドのアザの力か。それは分からない。

だが、遊星のその言葉にはフェイトも同意だった。そろそろこのデュエルを終わらせて、鬼柳の元へ戻らねば。

「はい！　（鬼柳、ガンバレ！）」

※

「ぬ？」

「コレ……！」

なのはの腕に起こった変化に、ジャックが驚いた様な声を上げた。
それと同じようになのはもまた、戸惑った様な表情で自らの右腕に視線を向ける。

そこにあるのは、赤く輝く自分の腕に描かれた赤き巫女のアザ。
まるで自身の存在を誇示する様に、煌々と赤い光を放ち続けている。

「ほう。赤き竜のアザ……の様なものか」

「！　もしかして、ジャックさんも」

「あぁ。赤き竜のシグナーだった。……過去の話だったがな」

ジャックは以前、赤き竜のシグナーだった様だ。懐かしそうな顔でそう語る。
なのははジャックに詳しい話を聞きたかったのだが、ふと、腕に違和感を覚えたのだ。

まるで誰かが何かを求めている様だ。急いで誰かに力を送らないといけない様な。
そんな錯覚に陥る。そしてこの感覚に、なのはは覚えがあった。以

前に一度、フェイトが求めたときの様に。

「（誰が、力を求めてるの……？）」

なのはは瞼を閉じ、力を求めている人の影を探す。誰が力を求めているのか。

フェイトだろうか。あり得る。彼女も闇の書の意思に破れ、自身と同じように囚われているはず。

脱出するために、力を求めるのは不可思議ではない。

もしや、はやてだろうか。こちらもあり得る。彼女は闇の書に意識を乗っ取られ、自我が無い。

その自我を取り戻すために力を求めているのかもしれない。そう思い、なのはは力を求める少女を探す。

しかし、いくら探せどもフェイトやはやての姿は何処にも無かった。あるのはただ、暗闇の中で力を求める鬼柳の姿。

「（鬼柳さん――――！？）」

鬼柳は暗闇の中、力を求めて叫んでいる。力が欲しいと。仲間を。大切な人を護る力が欲しいと。

そしてそれに呼応するかのように、彼の元に一人の少女の力が駆けつける。それはなのはの知る少女――フェイト。

フェイトの力が鬼柳の元へ駆けつけ、新たな力を鬼柳が得ている。

その様はまるで、背中を預けるに相応しいパートナーの様。
しかしなのははは、その様子を心中穏やかに見続けるほど大人ではない。気になる相手が別の少女とイチャイチャしている。そんな風に見えた。

「（ダメだよ、鬼柳さん。私の力も――――貸すよ！）」

半ばフェイトに嫉妬する様に、なのはもまた鬼柳へと力を送る。
私の力も使ってと。フェイトだけではなく、私の力も使って、と。
そして――――

どうか、私たちを助けて、と。そんな願いを込めながら、なのはは鬼柳に力を送った。

※

「これ……」

ぼんやりとした意識の中、はやては己の右腕に起こった変化を感じ

取った。
煌々と煌めく自身の左腕に施された赤き巫女のアザ。そこから一人の男性の意思が聞こえる。

力を貸してくれと。仲間を、大切な人たちを助ける力を貸してくれと。心の底からそう望んでいる。
彼は、誰だっただろうか。ぼんやりとした頭を動かしながら、はやてはその男性の顔を思い出そうとする。

彼はいつも、疲れた様な。擦れた表情をしていた。だけど一緒に過ごすようになってから、段々生来の明るさを取り戻したように思える。
何度も彼とバカな事をやった。彼に連れられて砂浜まで向かい、彼におぶられたり。お姫様だっこで海に入れてもらった。

デッキの構築で悩んでいた自分にアドバイスをくれ、共に力を高め合ったりもした。
その結果、自分のデッキは以前のものとは比べ物にならないほど強化された。そうだ。そして自分は満足を知ったのだ。

「（……そやな。このまま、ジッと見てるなんて、満足、でけへん……！）」

鬼柳　京介。彼の横顔と姿を思い出したとき、はやては自分の思考がクリアになるのを感じた。
そうだ。自分はこんなところで夢を見ている暇は無い。一刻も早く此処から抜け出し、守護騎士たちを救うのだ。

そして、目の前で一人悲しみを受け止めている女性―白銀の髪に、血の様に赤い瞳をした―を、満足させてあげたい。
悲しみに満ちた表情ではない。笑った顔。心行くまで満足し、心の底から浮かべた笑顔が見たいのだ。だから此処から脱出しなければ。
助けたい。消えてしまった守護騎士を。目の前で悲しみを浮かべているこの女性を助けたい。
だからはやては願う。助けて、と。誰よりも頼れる兄貴分に、彼女は縋る。助けてと。己の力を彼に送る。

「（助けて――――鬼柳兄ちゃん!!）」

※

「それは――――!」

鬼柳の腕に刻まれた赤き巫女のアザが、その姿を変える。
この場に居ないはずの三人の少女。彼女たちが持つアザが、彼の腕に集まる。

まるで彼と寄り添う様に。まるで鬼柳を支える様に、煌々と赤い光を放ち続けている。
鬼柳は一つになった赤き巫女のアザを見つめ、全身に漲る力を感じ取った。受け取った。三人から確かに力を。

これだけの力があれば、自分はきっと呼べるだろう。新たに授けられた新しい力を！
だから呼ぶ。新たな力を。彼女たちを助けるために自分は全力を出し尽くして、闘うと！

「出でよ、≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫！！」

一筋の閃光が、鬼柳の背後を打ち抜いた。そこからあふれ出るのは莫大な力。
少しでも気を抜けば、貯め込んだ力が暴走を起こしそうだ。だが、それは許されない。

そして鬼柳の背後を打ち抜いた一筋の閃光が晴れ、シンクロ召喚されたモンスターの姿が露わになる。
全身を覆う鋼の鱗。鋭角的に伸びた鱗はその鋭さを示し、荒々しいまでの力をその場に居るプレイヤーに示す。

新しい力――煉獄龍　オーガ・ドラグーン。
鬼柳の得た新しい力が、その場で力強い咆哮をあげた。

九話　「新たな力！　煉獄龍オーガ・ドラグーン！　後編」（後書き）

次回予告
仲間の絆でシンクロ召喚されたオーガ・ドラグーン。
しかし依然として闇の書の意思の脅威は続いている。

窮地に立たされる鬼柳。だが、ピンチを救うのはアルフのカードだった。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「打ち砕く槍　忍び寄る地縛神の脅威」

ライディング・デュエル　アクセラレーション！！

十話　「打ち砕く槍　忍び寄る地縛神の脅威」（前書き）

長かった……ｏｒｚ
だけどようやく、ＶＳ地縛神戦に力を入れられる。

十話　「打ち砕く槍　忍び寄る地縛神の脅威」

～海鳴市　某所～

「≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫……！」

「なんだい、こりゃぁ……」

鬼柳のシンクロ召喚した新たなモンスター。そのモンスターに、アルフ達の目が釘つけになる。
事実、鬼柳も自身がシンクロ召喚したオーガ・ドラグーンを見つめていた。これが新たに得た己の力。

「だが、いかなモンスターを召喚しようとも、効果が使えなければただのバニラだ」

「あぁ、そうだな。だが、俺は負けるつもりは微塵もねぇ！」

「戯言を」

「俺はこのまま、ターンエンドだ！」

鬼柳手札０
場　オーガ・ドラグーン　伏せ×２（アルフと共有）

鬼柳はオーガ・ドラグーンを召喚しつつも、あえてターンを終了した。
闇の書の意思の言うとおり、現状ではオーガ・ドラグーンもただのバニラに他ならない。
ならばこのターンを耐え凌ぎ、アルフがスキルドレインを破壊するカードを引くまで耐える。
そこから逆転すれば、闇の書の意思を打倒する事も出来るだろう。
だが、それは果てしなく難しい。

「悪いが、貴様には次のターンは訪れない。ドロー」

闇の書の意思手札0→1

「ぬ。≪D・D・R≫か、運が良いな。だが、それも此処までだ！バトル！」

「悪いがそうはいかねぇ！　伏せカード≪威嚇する咆哮≫を発動！このカードが発動したターン、相手は攻撃宣言を出来ない！」

「くっ。ターンを終了する」

闇の書の意思手札1
場　Ｓｉｎレインボー・ドラゴン　青眼の白龍　スキルドレイン
次元の裂け目

闇の書の意思は鬼柳の発動した伏せカードに、僅かに苛立たしさを

覚える。
ここまで抵抗するとは思ってもみなかった。これもすべて、アルフと言う使い魔のせい。
彼女とタッグを組ませたばかりに、ここまでしぶとく生き残っている。
仮に一人でデュエルを挑んでいたのならば、鬼柳は既に消えていたはずなのに。

闇の書の意思は自らの行動に若干の反省を覚えると、ターンを移した肝心の使い魔に視線を向ける。
彼女の向ける視線の先で、使い魔――アルフは勢いよく、デッキからカードをドローした。

「アタシのターン、ドロー！」

アルフ手札1→2

「このカード……」

アルフは先ほど、デッキからドローしたカードを確認し、落胆したように眉を顰めた。
彼女が引いたカードは超融合。手札を一枚コストに、融合召喚を行う特殊な融合カード。

だが、このカードだけでは状況を打破できない。Ｓｉｎレインボー・ドラゴン。並びに青眼の白龍。
そのどちらもを撃破してこそ、このカードが真価を発揮する。しか

しシャイニングでは、どちらも突破できない。

「……アルフ」

「？　き、鬼柳？　どうしたんだい？」

「その伏せカードを使え」

「！」

鬼柳の告げた言葉に、アルフは驚いた様に場に伏せられている最後の一枚に視線を向ける。
そのカードは前のアルフのターンに、彼女が伏せた罠カード。伏せられているのは無謀の欲張りだ。

だが、このカードは二枚ドローするのと引き換えに、ニターンの間ドローフェイズをスキップする諸刃の剣。
ここで使ってしまっても良いのだろうか。もしもキーカードを引けなかったら。もしも、不要なカードをドローしてしまったら。

それを想像すると、アルフは背筋が冷えるのを感じる。イヤだ。フェイトを、大事な主人を助けられずに消えるのは。
だが、アルフが浮かべる表情とは違い、鬼柳は覚悟を決めている。
恐らく、自分にターンが回ってこないことを理解しているのだろう。

「俺に次のターンが回ってくる可能性は、ほとんどない。
だったら、ここで一発逆転のカードをドローしようぜ？」

「だ、だけど……！」

「どの道、俺らにもう打つ手は無い。
だったら、とことんまで足掻いてみようじゃねぇか」

「……そうだね。意地汚く足掻いて、闘ってやろうじゃないか」

アルフは呆れた様に肩を竦めながら、鬼柳に返事を返す。そうだ。もう既に自分たちの打つ手はほぼ封じられている。ならばとことん足掻いた方が良い。

このままズルズルとターンを重ねても、状況が好転する可能性は限りなく低い。
ならば多少のデメリットには目を瞑ろう。そしてこの最悪の状況を打破するカードを手札に呼び込む。

「信じろよ、アルフ。お前が魂を込めて作ったデッキをよ！」

「ハハッ、そうだね。――――アタシは伏せカード≪無謀な欲張り≫を発動！
デッキからカードを二枚ドローし、以後自分のドローフェイズを二回スキップするよ！」

アルフ手札2→4

無謀な欲張り
通常罠

カードを2枚ドローし、以後自分のドローフェイズを2回スキップする。

「（来い……！　来い……ッ！）」

アルフは必死に念じながら、ディスクにセットされているデッキに手を置く。

お願いだ。ここでキーカードを。ハリケーンでもデュアルスパークでも、何でもいい。

引かせてくれ。そして、自分の大好きな主人を助けるための力を貸してくれ。

アルフは初めて、いないとも知れない神に向かって祈る。それほどまで、状況は切迫していた。

そしてグッと瞼を強く閉じ、まずは一枚目をドローする。アルフが引いた一枚目のカード。

ミラクル・フュージョン。その引いたカードを見て、アルフは驚きに目を見開く。引けた。状況を打破できる可能性を持ったカードを。

そして、次いで二枚目のカードをドローする。二枚目のカード――ハリケーン。

信じられないものを見た様な表情で、アルフは自らのデッキを見つめた。応えてくれた。自分の想いに、デッキが応えてくれた。

まるでデッキと自分が、一心同体になった様な錯覚に陥る。気持ちが良い。

自分の考えを読んで、状況を逆転できるカードを引く事がこれほど気持ちが良いことだったなんて。

「アタシは手札から魔法カード≪ハリケーン≫を発動！
場の伏せカードを全て手札に戻すよ！」

「ッ！　この状況で、≪ハリケーン≫を引いただと……！」

「アンタの場に≪Ｄ・Ｄ・Ｒ≫が無くなったことで≪青眼の白龍≫は自壊！
そしてフィールド魔法が無くなったことにより、≪Ｓｉｎ　レインボー・ドラゴン≫も自壊する！
さらに≪ミラクル・フュージョン≫を発動！
場の≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫と墓地の≪Ｅ・ＨＥＲＯ　アナザー・ネオス≫を除外融合！」

闇の書の意思の、驚愕する声が聞こえる。
しかしアルフには関係ない。手札、墓地、フィールド。全てが最高のコンディションなのだから。

最高だ。デッキがこんなにも応えてくれている。これで負ければ、きっと自分は脳なしだ。
あぁ、たしかに鬼柳の言うとおりだ。鬼柳に次のターンは回ってこない。何故ならば、自分がこのデュエルを終わらせるからだ！

「行くよ、これがラストターンだ！　来い、≪Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング≫！！」

「ＴＨＥ　シャイニング……！」

アルフの背後に、後光を纏った光の巨人が現れる。このモンスターこそがアルフの切り札。
しかし、今回のデュエルにおいてＴＨＥ　シャイニングは踏み台でしかない。このターンで、勝利を納めるためには。

「行くよ、闇の書！
アンタに勝って、アタシはフェイトとプレシア、なのはにはやてをを返してもらうんだ！」

※

「私、こんなん望んでないよ。貴方も、同じはずやろ？」

「私の心は、騎士たちの感情と深くリンクしています。
だから騎士たちと同じように、私も貴女を愛おしく思います。
――――だからこそ、貴女を殺してしまう自分自身が許せない」

周囲を漆黒の闇で覆われた空間。そこではやては白銀の髪を持つ女

性と相対していた。
彼女の瞳には、深い悲しみの色が浮かんでいる。彼女が言うことが本当ならば、自分は死ぬだろう。
だが、はやてに死ぬ気はさらさらない。こんなことで死んでしまっては、とても満足出来る死に方とは言えない。
自分には自分の理想とした死に方。否、自分はまだ生きたいのだ。
生きて鬼柳達とデュエルして、今の人生を満足したい。

「自分ではどうにもならない力の暴走。
貴女を侵食する事も、暴走して貴女を食らい尽くしてしまうことも――――止められない」

「……覚醒の時に、今までのことは少し分かったんよ。望むように生きられへん悲しさ。
私にも少しは分かる！　シグナム達と同じや。ずっと悲しい思い、寂しい思いしてきた……」

「っ」

はやての言葉に、白銀の髪の女性が俯く。その様子はまるで、はやての境遇に同情しているようで。
だが、はやては今までの生き方を恥じたことは無い。鬼柳と出会って変われたのだ。悲しみ、寂しさ。

それらを全て覆い尽くす暖かい気持ちを。鬼柳とバカなことをやって笑ったとき、胸が暖かくなった。
傍で誰かが笑ってくれること。それがとんでもなく嬉しくて。そし

て――とっても満足出来る事だと知って。

「そやけど、忘れたらあかん！　貴女のマスターは、今は私や。マスターの言うことは、ちゃんと聞かなあかん！　貴女は笑うべきや！」

白銀の髪の女性の頬に手を触れながら、はやては真っ直ぐ前を見据える。

そうだ。今の彼女のマスターは私。ならば、マスターである自分の言うことを聞いて欲しい。

それに、彼女はもっと笑うべきだ。こんな悲しみに満ちた表情ではない。

花が綻んだ様に浮かべる笑顔。沢山沢山笑って、これからの人生に満足して欲しい。

「っ！」

瞬間、彼女たちを中心に、白銀の魔法陣が展開される。

魔法陣からあふれ出るのは、暖かな光。まるで全てを包み込もうと言う光だ。

「名前を上げる。「闇の書」とか、呪いの魔導書なんて言わせへん。私が呼ばせへん！」

「――――っ」

その暖かな光に包まれながら、はやては目前の女性にキッパリと告げる。

すると彼女の瞳から、暖かな涙の雫が落ちた。それは頬に触れているはやての手を汚す。

だけれど、はやてはそれを嫌がらない。それどころか、更に暖かな笑みを浮かべるのだ。

彼女は悲しかっただけ。本来の呼ばれ方とは違う呼ばれ方をして。

そして望みもしないのに破壊の力を振りまいて。

闇の書。呪いの魔導書。それらがどれほど彼女の心を傷つけていたのか。それをはやてが推し量ることは出来ない。

だが、一つだけ自信を持って言えることがある。それは彼女を笑顔にして上げること。一人では難しいかもしれない。

けれど自分には友が。仲間がいる。頼りになる友達と仲間達。彼らが居るからこそ、自分は自信を持って言えるのだ。

彼女に悲しそうな顔なんて似合わない。とっても綺麗な笑顔を浮かべて、沢山沢山楽しい思い出を作って、今を満足して生きるのだ！

「私は管理者や。私にはそれが出来る！」

「無理、です……！

自動防御プログラムが止まりません。使い魔と決闘者が闘っていますがそれも……！」

「大丈夫や！　私を信じて！　貴女を満足させるまで、私は終われへんのや！」

自動防御プログラム。聞かない名称だが、彼女が言うからには厄介な代物なのだろう。
だが、問題ない。自分が助けを叫べばきっと彼が。彼女たちが自分たちを助けてくれる。

だからまずは、自分が彼女たちを助ける番だ。はやてはギュッと瞼を閉じながら、静かに願う。
――――止まって、と。

※

「さぁ、此処で一気に終わらせる！」

「！」

前方を走る遊星がそう宣言すると、一気にＤホイールの速度を上げた。

それに置いて行かれない様に、フェイトもまた飛行魔法の速度をあげる。

しかし速度を上げればあげるほど、フェイトを阻む風が猛威を振るう。

あまりに凄まじい速度。目を開けるのもやっとで、遊星を見失わないのが奇跡だ。

「行くぞ！　俺は手札から≪Ｓｐ―スピード・フォース≫を発動！
　このカードは自分用スピードカウンターが４つ以上あるときに発動！
　次の自分のエンドフェイズまで、自分フィールド上のカードは相手の魔法・罠カードの効果では破壊されない！」

Ｓｐ―スピード・フォース
通常魔法
自分用スピードカウンターが４つ以上ある場合に発動する事ができる。
次の自分のエンドフェイズ時まで、自分フィールド上に存在するカードは相手の魔法・罠カードの効果では破壊されない。

「なっ！　（≪聖なるバリア－ミラーフォース－≫が！）」

「そして≪シューティング・スター・ドラゴン≫の効果発動！
　デッキの上から5枚を捲り、捲った枚数分のチューナーの数だけ攻撃できる！」

「最大で5回の連続攻撃！？　そんな――――！」

遊星がシューティング・スター・ドラゴンの効果の発動を宣言する。
その効果とは、デッキトップを五枚捲り、引いたチューナーの数だけ攻撃できると言うギャンブル要素の強い物。

だが、その効果は絶大である。引いたチューナーの数次第では、相手にオーバーキルを与えるのは勿論。
相手の場全てに展開されているモンスターに攻撃できるのだから。
フェイトはその効果に驚きを隠せない。

「くっ、≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の効果発動！
自身をリリースすることで相手の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし、破壊します！」

「だが、≪シューティング・スター・ドラゴン≫の効果発動！
フィールド上のカードを破壊する効果が発動したとき、その効果を無効にし、破壊する！」

「っ！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫！！」

遊星のシューティング・スター・ドラゴンの効果を無効にしようとしたフェイトのスターダストが逆に破壊される。
スターダスト・ドラゴン／バスターの効果により墓地からスターダスト・ドラゴンが特殊召喚されるが、状況は不味いまま。

しかも特殊召喚されたスターダストは自身の効果を発動するタイミングを逃している。
遊星のシューティング・スター・ドラゴンの効果を無効にし、破壊

することが出来ない。
そして遊星は、自身のデッキトップから五枚を捲る。

「一枚目、チューナーモンスター≪ジャンク・シンクロン≫！　二枚目≪スピード・ウォリアー≫！
三枚目、チューナーモンスター≪ターボ・シンクロン≫！　四枚目≪ダッシュ・ウォリアー≫！
そして五枚目、チューナーモンスター≪ドリル・シンクロン≫！！」

「――――っ！　さ、三回の連続攻撃！」

「いけ、≪シューティング・スター・ドラゴン≫！
スターダスト・ミラージュッ！！」

遊星の号令と共に、上空を飛行するシューティング・スター・ドラゴンの姿が幻影の様に変化する。
増えた数は3。遊星が引いたチューナーモンスターの数と同じであり、その数だけ幻影が場に出現する。

そして最初のシューティング・スター・ドラゴンの幻影が、スターダスト・ドラゴンに突撃する。
フェイトの場のスターダストは必死に応戦しようとするが攻撃力の差と言う壁に阻まれ、返り討ちにあい、フェイトのライフを0にした。

「うぁあああああっっ！！」

フェイトＬＰ８００→０

※

「行くぞ、高町　なのはよ！」

「！」

「≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫の効果により、墓地のチューナーの数だけ
≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫の攻撃力が５００ポイントアップする！」

「ジャックさんの墓地にチューナーは3体……！　と言うことは、攻撃力５０００！？」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン
星１２／闇属性／ドラゴン族／攻３５００／守３０００

チューナー2体＋「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナーの数×５０ポイントアップする。
このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。
また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、
相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

「≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫で、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫を攻撃する！」

「っ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫！」

「バーニング、ソウルッ！！」

ジャックの指示を受け、場のスカーレッド・ノヴァがレッド・デーモンズ／バスターに攻撃を仕掛ける。
両の翼で身体を包み込み、まるで体当たりの様にレッド・デーモンズ／バスターへ突撃する。

咄嗟にレッド・デーモンズ／バスターは反撃のため拳に炎を宿らせるが、圧倒的な攻撃力の前に敗退。
激しい爆発の衝撃波を撒き散らしながら、レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは破壊され、墓地へ送られた。

「くっ……！」

なのはＬＰ４０００→２５００

「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

ジャック手札０
場　スカーレッド・ノヴァ　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

なのは手札２→３

「ジャックさん。
たしかに私じゃ、鬼柳さんの仲間として力不足かもしれません」

カードをドローしたなのはは、プレイを続行せずにジャックに言葉をかける。
たしかに今の自分では、鬼柳と肩を並べて闘うことは難しいだろう。
最悪、足を引っ張る。

だが、それでも自分は鬼柳の隣に居たいのだ。共に立って共に闘い、共に満足を共有できるような間柄に。
だから自分はきっとジャックに追いつく。そして追い越して見せる。
自分を仲間と認めてくれた鬼柳に応えるために。

「だけど私は、絶対に鬼柳さんの隣に並び立ちます！
ジャックさんを追い越して、鬼柳さんの背中に追いつきます！」

「ならばこの俺を打ち破って見せろ！」

「私は手札から、魔法カード≪簡易融合≫を発動！
ライフポイントを１０００支払って発動！　自分のエクストラデッキから、レベル５以下の融合モンスターを特殊召喚します！
ライフを１０００ポイント支払い、エクストラデッキから≪音楽家（ミュージシャン）の帝王（キング）≫を特殊召喚！」

なのはＬＰ２５００→１５００

簡易融合
通常魔法
１０００ライフポイントを払って発動する。
レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊される。
「簡易融合」は１ターンに１枚しか発動できない。

音楽家の帝王
星５／光属性／魔法使い族／攻１７５０／守１５００
「黒き森のウィッチ」＋「ハイ・プリーステス」

なのはのフィールドに、上半身裸でド派手なギターを手に持ったモンスターが現れる。
彼は凄まじい音をギターで掻きならすと、いつでも準備は出来ていると言う様になのはを見つめる。

「さらに手札から≪氷結界の術者≫を召喚！
　レベル５≪音楽家の帝王≫にレベル２≪氷結界の術者≫をチューニング！」

氷結界の術者
チューナー
星２／水属性／水族／攻１３００／守　　０
このカード以外の「氷結界」と名のついたモンスターが自分フィールド上に存在する限り、
全てのレベル４以上のモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

召喚された氷結界の術者が、二つの緑色のリングに変化する。
その中心を行くのは音楽家の帝王。彼の身体から五つの光り輝く星が現れる。

「万能なるマナ、それらを操りし魔導の賢者を今ここに！
　シンクロ召喚！　魔導の申し子≪アーカナイト・マジシャン≫！」

アーカナイト・マジシャン
星７／光属性／魔法使い族／攻　２４００／守１８００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを１つ取り除く

事で、
相手フィールド上に存在するカード1枚を破壊する。

二つの緑色のリングを打ち抜き、現れるのは白いローブを身に纏った魔術師の姿。
被ったフードの奥から覗く二つの瞳は、打ち倒すべき敵――スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを見据えている。

「≪アーカナイト・マジシャン≫がシンクロ召喚された時、このカードに魔力カウンターを二つ乗せます」

魔力カウンター０→２

「≪アーカナイト・マジシャン≫の攻撃力は、このカードに乗っている魔力カウンターの数×１０００ポイントアップ。
だけど、このモンスターで攻撃はしません！」

アーカナイトＡＴＫ４００→２４００

「ふん、賢い選択だ。
≪マジカル・コンダクター≫が居ない状況で、≪アーカナイト・マジシャン≫は攻撃できまい」

なのははジャックの言葉に、ギリッと歯を噛み締める。見透かされている。自分のデッキが。
もしも前のターンにマジカル・コンダクターを召喚していれば、マジック・テンペスターを呼べただろう。

そしてマジック・テンペスターの効果を使い、場の魔力カウンターを全てバーンに使用していれば、自分は勝てた。
だが、なのはの手札にマジカル・コンダクターの姿は無い。今はまだ、デッキの奥底で眠っている。勝てるデュエル。なのに、勝てない。

「だけど、≪アーカナイト・マジシャン≫の効果発動！
自分フィールド上の魔力カウンターを一つ取り除くことで、相手のカード一枚を破壊します！
私は≪アーカナイト・マジシャン≫に乗っている魔力カウンターを一つ取り除いて、≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫を破壊します！」

アーカナイト・マジシャンの持つ杖が光り輝き、そこから一筋の閃光が放たれる。
その向かう先は、ジャックの場のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン。
これで破壊すれば、自分の勝ちだ。

だが、ジャックは慌てた様子を見せない。それどころか、ニヤリと口元を緩め、余裕の表情を見せている。
ジャックのその表情を見たとき、なのはは酷い焦燥感に襲われた。
いけない。手を誤った。致命的なミスを犯した。

「無駄だ！　≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫は相手の魔法・罠・モンスター効果では破壊されない！」

「ッ！　そんな！　完全な破壊耐性を持ってる！？」

「さぁ、魔力カウンターは残り一つだ。俺の伏せカードを破壊するか否か。どちらか選べ！」

「くっ！　魔力カウンターを取り除き、右側の伏せカードを破壊します！」

なのはは思いもよらない効果を持ったスカーレッド・ノヴァに、苦い表情を浮かべる。
レッド・デーモンズの進化系なので、てっきり破壊効果を強化した効果を持っていると思った。

しかし、現実はまったくの逆。それどころか攻撃力アップの効果と破壊耐性により、死角がほとんど見当たらない。
恐らく破壊する難易度は自分のレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターよりも数段上だ。厄介過ぎて、打つ手がほとんどない。

「伏せカードは≪バーニング・リボーン≫。破壊される」

「私はこのまま、ターンを終了します。
さらにエンドフェイズ、攻撃宣言をしていない≪アーカナイト・マジシャン≫は破壊されます」

なのは手札１
場　レッド・デーモンズ　伏せ×１

「ふん、俺のターンッ！」

ジャック手札０→１

「俺は手札から≪デーモンの枷≫を発動！
このカードをモンスターに装備させ、装備したモンスターの攻撃力は７００ダウンし、レベルが１下がる。
俺が選ぶ対象は、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

レッド・デーモンズＡＴＫ３０００→２３００

「っ！」

「これが終焉だ。≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫に攻撃！
バーニング・ソウルッ！」

ジャックの使用した魔法カードにより、攻撃力が下がったレッド・デーモンズにスカーレッド・ノヴァが迫る。
その様子を、なのははただ見守ることしかできない。伏せカードはマジシャンズ・サークル。発動できるはずがない。

悔しい。己の力不足に、なのはの表情が歪む。強くなりたい。強くなって、ジャックに自分を認めさせたい。
だからまずは、今の実力を把握しよう。なのはは悔しさを堪えながら、必死に自分の心を諭す。そうしなければ、泣いてしまいそうだ。

そしてジャックが言っていた、荒ぶる魂（バーニング・ソウル）を会得しよう。
そうすれば少なくとも、ジャックは自分を認めてくれる。そこからジャックの上を目指せばいい。

なのはは心の内でそう決めると、グッと前を見据えた。前方には炎を纏い、体当たりをしてくるスカーレッド・ノヴァ。
その奥にはジャックの姿もあり、彼はなのはの決意に満ちた表情に満足そうに笑みを浮かべている。
なのはもまたジャックに向けて、悔しそうな笑み浮かべたのだった。

なのはＬＰ１５００→０

※

「行くよ、闇の書！
アンタに勝って、アタシはフェイトとプレシア、なのはにはやてをを返してもらうんだ！」

「っ！」

アルフのその宣言と同時、闇の書の意思の身体に変化が訪れる。
突如として身体をえび反りに歪め、ギシギシと骨がきしむ様な音が聞こえる。

それでいて、闇の書の意思の顔から表情が消えた。先ほどまでの残虐そうな表情ではない。
人形の様な。能面の様な無表情が鬼柳とアルフを見下ろしている。
これは、一体どう言うことなのか。

「な、なんだい、こりゃあ……」

『外の方……！　えっと、使い魔と、決闘者の方！
こちら、その……そこにいる子の保護者、八神　はやてです！』

「！　はやて！　無事か！」

突然の変化にアルフともども狼狽していると、闇の書の意思から声が聞こえた。
その声の主は鬼柳が心配して止まない少女のもの――八神　はやてのもの。思わず鬼柳が大声を出す。

『ほぇっ！？　き、鬼柳兄ちゃん！？　鬼柳兄ちゃんなん！？』

「あぁ！　アルフもいるぜ！」

「無事かい！？」

『は、はい！　私は大丈夫です！』

アルフと鬼柳の問いかけに、はやてが嬉しそうな声で応えた。
どうやらはやては、外で誰が闘っているのか分かっていない様だった。

しかし、闘っているのが見知った仲である鬼柳とアルフと知れば、声から緊張が取れる。
ひとまずはやての無事を確認した鬼柳とアルフは、ホッと安堵の息を吐いた。あとは三人の安否を確認しなければ。

『鬼柳さん、お願いがあるんです。なんとかその子、止めてあげてください！
魔導書本体からはコントロールを切り離したんやけど、その子が動いとると管理者権限が使えへんです。
今、そっちに出てるのは自動行動の防御プログラムだけやから！』

「つまり……どうすりゃ良い！」

闇の書の意思がはやての命令に反しているのか。必死に動き出そうとしている。
何やら管理者権限やら自動行動の防御プログラムやら難しい単語が出ているが、何をすればいいのか分からない。

それはアルフも同様な様で、もどかしそうな表情で今にも身体のコントロールを取り戻しそうな闇の書の意思を見つめている。
一体、何をどうすれば良い。もどかしげな表情で闇の書の意思を見つめる二人。だが、助言は意外なところからやってきた。

『鬼柳さん！　アルフさん！』

「ッ！　ユーノ！？」

『分かりやすく説明します！
今から言うことを上手く出来れば、はやてちゃんとなのは達が外に出られる！』

「ほ、ホントかい！？」

「それで、何をすれば良い！　なんだってする！」

声の主――ユーノは飛行魔法で彼らが決闘を行っている場所まで駆けあがると、二人に何をすれば良いのか説明する。
そしてその行動の末に手に入れられるもの――はやてとなのは達の脱出の方法に、鬼柳とアルフの顔色が変わった。

本当に、なのはやはやてを救い出せるならば。鬼柳は、アルフは。
何だってするだろう。
二人の真剣な眼差しを一身に受け、ユーノはそれに怯まずにコクリと頷く。

「デュエルで目の前の子を、魔力ダメージでぶっ飛ばしてください！
出来れば１０００ポイント以上のオーバーキルが望ましいです！
一発ド派手に、手加減なしでやっちゃってください！」

「……ハハッ、なるほどな。
やっぱり最後は、オーバーキルでやらなきゃダメってか！」

「はやてのことは心配だったけど、これで確証が出来たんだ！
ユーノ！　これではやて達が脱出できなかったら、ぶん殴るからね！」

鬼柳とアルフはユーノに向けて、笑みを浮かべながらそう答える。
もう、迷う必要は無い。
今までは本当になのはやフェイト、はやて達が戻ってくるのか心配だった。だが、ユーノの言質が取れた。

これで心置きなく、デュエルに集中できる。
闇の書の意思を倒し、なのはを。フェイトを。はやてを。プレシアを救い出す。

覚悟は決めた。倒す手段もアルフの手札の中にある。万全だ。負ける要素が見当たらない！

「アタシは≪Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング≫で相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

※

「夜天の主の名の元に、汝に新たな名を贈る。
――――強く支える者、幸運の追い風、祝福のエール――――リインフォース」

※

「負けました、遊星さん」

「ふっ。だが、やるべきことは見つかったんじゃないのか？」

デュエルで敗北した後、フェイトは暗い闇の中で遊星と相対していた。
彼女は悔しそうな表情を浮かべている。だが、同じように何処か満足そうだ。

事実、フェイトは満足なのだろう。鬼柳の仲間の実力を知れた。
自分がまだまだ未熟だと言うことを知れた。新しいスターダストの進化の形を知れた。

これだけ今回のデュエルで収穫があったのだ。悔しさもあるが、それ以上に満足できる内容だ。

「はい。もっと強くなって、アクセル・シンクロ……。それを会得して、遊星さんより強くなります！
そして、遊星さんに認めてもらえるように……！　鬼柳の隣に立てる様に、頑張ります！」

「良い顔をしている。その様子なら、鬼柳の隣にも立てるだろう。
――さぁ、そろそろ帰る時間だ。鬼柳のヤツにあったら、よろしくな」

遊星はフェイトにそれだけ告げると、赤いＤホイールをその場で反転。
フェイトに背を向けながら、出口のない暗闇を走り出していく。その背を、フェイトは見つめた。

まだまだ遠い、遊星の背中。一体どれほど強くなれば、自分はあの背に追いつく事が出来るのだろう。
そしてその先にある鬼柳の隣に並び立つと言う目標。壁はまだまだ沢山ある。だけどそのどれもが、自分の成長に必要なもの。

「はい！　――――遊星さん！
私たちＤＭミッドチルダ杯って言う大会に出ます！　そこで、強くなった私を見てください！」

フェイトは徐々に遠くなっていく遊星の背中に向けて、大声でそう叫んだ。
自分たちはいずれ、とても大きな大会に出る。その時に、成長した自分の姿を見て欲しい。

そして、認めて欲しい。鬼柳の隣に立つのに相応しいと。鬼柳の背中を預けるに相応しい力を持ったと。
遊星はフェイトのその言葉が聞こえたのか。右手を上げてグッと、サムズアップを浮かべる。それに、フェイトはニコリと笑みを浮かべた。

さぁ、後は此処から出よう。そして沢山デュエルをして、遊星に認めてもらえるほど強くならなくては。
やるべきことは一杯だ。そしてフェイトが後ろを振り返ると、眩い光がフェイトの目を襲う。咄嗟に目を瞑り、フェイトは思う。

これが、きっと外に出るための光だ、と。

※

「うにゃぁ、やっぱりジャックさんは強いなぁ」

「当然だ！　遊星には負けたが、俺はプロリーグのキングなのだからな！」

「あはは……」

デュエルが終わり、なのははペタンと床に尻もちをついた。
鬼柳の昔の仲間はやはり、強かった。今の自分が到底叶う相手ではない。

ジャックはなのはの言葉に気分を良くしたのか。腕を組んで上機嫌だ。
なのははそんなジャックの様子に苦笑い。さて、これからどうやって此処を脱出しようか。

そう考えていると、不意になのはの身体が淡く発光を始める。
それはまるで、時間が来たと言っている様だ。そしてジャックの身体も同様に発光する。

「ぬ？　もうタイムアップか」

「そうみたいですね。……ジャックさん」

「どうした？」

「私、もっともっと強くなりますから！
荒ぶる魂……バーニング・ソウルを会得して、もっと強くなります！」

「ふっ、貴様にそれが出来るのか？」

「やります！　強くなって――――ジャックさんに認めてもらえるように頑張ります！」

なのはの宣言を聞き、ジャックはポカンとした表情を浮かべる。
だが、それも僅かな間のみ。ジャックは突然、大声で笑い始めたのだ。

突然ジャックが笑いだし、逆になのはがポカンとする。
はて、何か自分は変なことを言っただろうか。内心で疑問に思う。

しかしジャックはただ笑うのみ。それが非常に居心地が悪くて。
そしてそれが非常に腹立たしくて、なのはは思わず声を荒げてしまう。

「な、なに笑ってるんですか！」

「く、ククッ。いや、俺に向かってこんなことを言ってくる女は初めて見たのでな。
驚いていただけだ」

「むぅ……」

「ククッ。鬼柳のヤツは、面白い女を見つけたのかもしれんな。
――――高町　なのはよ」

「！　は、はい！」

ジャックはクスクスと笑みを浮かべていたが、それを一転。真面目な表情を浮かべる。
その雰囲気の変わりように、なのはも思わず背筋を伸ばす。しばしなのはとジャックは見つめ合い、そして、

「俺に認めて欲しくば、今以上に強くなる事だ。
貴様が追い付くのを俺は、楽しみに待っているぞ」

「！　――――は、はい！」

ジャックは僅かに優しそうな笑みを浮かべてそう告げる。
それになのはは何を言われたのか理解したのだろう。嬉しそうな声で応えた。

そして、まるでその言葉を待っていたかのように二人の姿がその場から掻き消える。
ジャックは消えゆくなのはを一目見ると、背中を向けてその姿を闇の書内部から消したのだった。

※

「アタシは≪Ｅ・ＨＥＲＯ　ＴＨＥ　シャイニング≫で相手プレイヤーにダイレクトアタック！」

アルフの号令と共に、シャイニングが闇の書の意思に向けて飛び掛かる。
現在のシャイニングの攻撃力はアナザー・ネオスが除外されていることにより攻撃力が２９００。

到底、闇の書の意思のライフを全て奪いきるには攻撃力が圧倒的に足りない。
だが、アルフには切り札があった。この状況を打破し、確実に勝利を奪えるコンボが手札にあった。

「いっけぇえええええっっ！！　オプティカル・ストーム！」

闇の書の意思ＬＰ５１００→２２００

「くっ！　アルフ、ダメージが足りねぇ！」

「分かってるよ、そんなこと！」

闇の書の意思に向けて、アルフの持つ魔力の塊が叩きこまれる。
凄まじいまでの魔力の塊。ダメージが素通りしているせいで、ダメ

ージが大きい。

しかし、それだけだ。残るライフは２２００。このターンで削るのは不可能だ。

鬼柳の場にはオーガ・ドラグーンがいるが、オーガ・ドラグーンの攻撃権はアルフには無い。

だが、攻撃権は無い代わりに、ある権利は存在していた。

そう。パートナーの場のモンスターをシンクロ。及び融合素材にする権利を。

「さらにアタシは手札から速攻魔法≪超融合≫を発動！

手札を一枚捨て、場のカードを融合素材として新たな融合モンスターを融合召喚する！

アタシが選ぶ融合素材モンスターは――――シャイニングとオーガ・ドラグーンだよッ！」

闇の書の意思に攻撃を仕掛けていたシャイニングと。鬼柳の場の煉獄龍が上空へと舞い踊る。

そして二体のモンスターはそれぞれ光の粒子となり、新たなモンスターを形作るのだ。

融合召喚されるモンスター。手には巨大な槍を持ち、一騎当千の力を持つ波動竜騎士。

モンスターを形作った光が飛び散り、そこに一体のモンスターが召喚される。

「融合召喚！　これが新たな竜騎士の姿！
≪波動竜騎士　ドラゴエクィテス≫！」

「ドラゴ……エクィテス……！」

波動竜騎士　ドラゴエクィテス
星１０／風属性／ドラゴン族／攻３２００／守２０００
ドラゴン族シンクロモンスター＋戦士族モンスター
このカードは融合召喚でのみエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター１体をゲームから除外し、
エンドフェイズ時までそのモンスターと同名カードとして扱い、同じ効果を得る事ができる。
また、このカードがフィールド上に表側攻撃表示で存在する限り、相手のカードの効果によって発生する自分への効果ダメージは代わりに相手が受ける。

「バトルフェイズ中の特殊召喚だから、ドラゴエクィテスは追加攻撃が出来る！
　これで止めだ、闇の書！　≪波動竜騎士　ドラゴエクィテス≫の攻撃！！」

アルフの場の竜騎士が、手に持った長大な槍をまるで投擲する様に構える。
狙いは上空で滞空している闇の書の意思。これこそがアルフの用意した必殺の一撃。

残りすべての魔力を、アルフはドラゴエクィテスの攻撃に注ぐ。
これでパワーが足りなかったらお笑い草だ。他の誰が許しても、他の誰でもない。自分が許さない。

「！　き、鬼柳……？」

突如肩に手を置かれ、アルフはビクリと身体を揺する。
とても集中していたときに身体に触れられたのだ。驚くなと言う方が無理だ。

「俺の魔力も使え。……あるんだろ、俺にも魔力が」

そして視線を向ければ、そこには真剣な眼差しの鬼柳。
彼から告げられた言葉にアルフは悩む。申し出は嬉しい。だが、無理はさせられない。

「だ、だけど……」

「お前一人に無茶をさせねぇよ。俺の背中はお前が護るんだ。
なら、お前の背中は俺が守ってやるよ」

「……惚れちまいそうだね」

アルフは柄にもない言葉を口にしながら、鬼柳の魔力と己の魔力を混ぜ合わせる。
デュエリストは大抵、多かれ少なかれ魔力を持っている。それは鬼柳とて例外ではなかった。

彼が持つ魔力はなのはやフェイトと比べると少ない。だが、威力をあげるには十分すぎるほどの量だった。
二人分の魔力が混ざり合い、ドラゴエクィテスから放たれる圧迫感が強くなる。出来るだけのことはやった。

「行くよ、鬼柳！　これがアタシと――」

「俺の――――」

「「――――全力全開！　スパイラル・ジャベリンッッ！！」」

そして、ドラゴエクィテスの持つ長大な槍が、闇の書の意思に向けて放たれる。
投げた槍は凄まじい速度で、上空に滞空している闇の書の意思へと向かい、直撃。

激しい爆発が起こり、周囲に遠慮のない衝撃波を飛ばすのだった。

※

「新名称・リインフォースを認識。管理者権限の使用が可能になります」

「……ん」

「ですが、防御プログラムの暴走は止まりませ――ッ！？」

「な、なんや！？」

「いけない！　主はやて、急いで脱出を――――！！」

※

激しい爆発が海鳴市の中心街を飲み込んだ。
あまりの衝撃波に、鬼柳とアルフは両腕で顔を庇っている。
そしてようやく、衝撃波が過ぎ去ったのを確認し、二人は庇ってい

た腕を退けた。
視界に飛び込んでくるもの。それは無事、外に脱出できたなのはとフェイト。プレシアの姿。

「なのは！　フェイト！」

「プレシアッ！」

「！　鬼柳さん！」

思わず鬼柳とアルフが大声で呼びかける。
すると今までぼんやりと宙を見つめていたなのはとフェイト、プレシアの視線が二人に向けられた。

そしてなのはとフェイトが嬉しそうな声を上げると同時、まるで流れ星の様に鬼柳の元に飛来する。
鬼柳は慌てて二人を抱き止めようとするが、二人の勢いを殺しきれずに後ろへと押し倒される。ドシャッ、とイヤな音がした。

「もう。フェイトったら」

「あはは……。――――おかえり、プレシア」

「えぇ。迷惑、かけたみたいね」

「いんや。このくらい、迷惑なんかじゃないよ」

何処かしょんぼりとした様子のプレシアに、アルフは思わず笑みを浮かべる。
まるでらしくないプレシアの姿。その様子は母親に怒られるのを覚悟している子供の様だ。

さて。これでなのはとフェイト、プレシアの無事を確認した。残るははやてと守護騎士のみ――と。
アルフが視線を先ほどまで闇の書の意思が居た場所へと視線を向けると、ハッと目を大きく見開いた。

「アルフ？」

「プレシア、アレ……！」

「あれ……っ！？」

プレシアがアルフの声に釣られる様に、視線を闇の書の意思が居た場所へと視線を向ける。
するとそこには、空中から地面へと真っ逆さまに落下しているはやての姿が。受け止める者はおらず、落下し続けている。

これは不味い。そうプレシアとアルフは判断すると、急いではやてを受け止めるために空を駆る。
後ろの方からなのはやフェイトの慌てる声が聞こえたが、生憎と今は応えている暇はアルフには無かった。

「っとと。セーフ……」

「あ、アルフさん……？」

そして全力でアルフとプレシアは空を駆り、なんとかはやてを受け止めることに成功する。

はやてはパチパチと目を閉じたり開けたりしながら、現在彼女がいる場所を確認しようとしていた。

そんなはやての様子に、アルフは心の底から安堵のため息を漏らす。

危なかった。

あのまま落下していたら、ほぼ確実にはやては帰らぬ人となっていた事だろう。

「まったく。闇の書から出てくるなら一言そう言えば良いってのに……」

「むぅ。アルフさん、あの子は闇の書やあらへんよ！

あの子は祝福の風、リインフォースや！」

はやてはアルフの腕の中だと言うことすら忘れて、アルフに抗議する。

そう。もうリインフォースを闇の書だとか呪われた魔導書などと言わせるつもりは無いのだ。

ポカポカとアルフを叩き、必死に抗議する。アルフと言えばはやての抗議に折れたのか。

分かった分かったと苦笑いを浮かべながら、先ほどの迂闊な自分の発言を謝罪したのだった。

「祝福の風、ね……。一体、何を祝福していると言うのかしら……」

「え？」

そして何処か和やかになった雰囲気で、唐突にプレシアが不穏な言葉を漏らした。

何かおかしいだろうか。彼女に相応しい名だとはやては思う。彼女は全てを祝福している。

そう思い、はやてはプレシアに視線を向けた。だが、プレシアははやてを見ていない。

上空を。先ほどはやてが落下してきた場所を見上げている。どうしたのだろう。はやても上空を見上げた。

「――――っ！」

そして息を呑む。あり得ない。何故、こんなことが。はやての頭の中をその言葉が占める。

だが、いくら頭の中で否定しても現実の光景は変わらない。現に、上空には居るのだ。自分が祝福の風と言う名を贈った彼女が。

しかし、彼女の顔は能面の様に無表情。全身から禍々しい波動が流れ出し、明らかに良くないものだと理解できる。

そんな、何故。管理者権限は取り返し、事実はやては現実世界へと脱出できたのに。まるで意味が分からない。

「く、ククク……！」

「！」

「ハハハハハハハハッッッ！！！」

そして唐突に、リインフォースは笑い出した。だが、はやてはその笑みを喜べない。

何故ならば、先ほどリインフォースが浮かべた笑みが。まるで悪意に染まった様に見えたのだから。

「コレだ、この力だ！　無限再生機能！
そして転生機能！　とうとう……とうとう手に入れた！」

「り、リインフォース！？　な、何を言っとるん！？」

はやては人が変わってしまったかのようなリインフォースに、怯えた様な言葉を掛ける。

違う。あれは彼女――リインフォースではない。まるでリインフォースに誰かが乗り移った様な。

そんな感覚を覚える。そして、はやてのその勘は当たった。

上空で愉快そうに笑い転げていたリインフォースが、はやてを見下

ろす。絶対零度の冷たい眼差しで。

「リインフォース……？　そんな名など、我は知らん」

「な――――っ！？」

「我は地縛神……！　地縛神コカパク・アプだ！！」

リインフォース。否、地縛神に乗っ取られたリインフォースが手を掲げる。

そしてその腕に刻まれた模様を見て、はやてとアルフは驚愕に目を見開いた。

間違いない。以前に一度、プレシアの腕に刻まれていたアザ――「巨人」のアザだ。

一体何故、地縛神がリインフォースの身体を乗っ取ったのか。乗っ取ることが出来たのか。

その理由が分からず、茫然とアルフとはやては上空で笑い転げる地縛神を見上げるのだった。

十話　「打ち砕く槍　忍び寄る地縛神の脅威」（後書き）

次回予告
リインフォースの身体を乗っ取り、現れた地縛神。
地縛神の目的は闇の書の無限再生機能と転生機能だった。

これにより、己の存在を確立させようとたくらむ地縛神。
しかしそんな地縛神の前に、なのはとフェイト。それに鬼柳が立ち塞がる。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え」

ライディング・デュエル！　アクセラレーション！

十一話　「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え　前編」（前書き）

まずはデュエル前の説明やら状況整理やら。
本格的にデュエルが行われるのは次回から。

そして地縛神にチート機能が搭載されました。

十一話　「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え　前編」

～海鳴市　市内上空～

「我は地縛神……！　地縛神コカパク・アプだ！！」

海鳴市内の上空で高らかにそう、地縛神は宣言した。
その様子を、遠方から眺めていたギル・グレアムは驚愕に目を見開く。

何を、何を言っているのだろう。訳が分からず、グレアムは混乱した表情を浮かべる。
たしかに地縛神は告げたのだ。闇の書をこの世から消滅させてくれると。完全に破壊してくれると。

「わ、我が神！　な、何を言っているのです！」

「ククッ、何を言っているとは？」

「貴方は言ったでしょう！？　闇の書を、この世から滅すると！」

「あぁ。たしかに言ったな」

地縛神の元まで空を駆り、グレアムは狼狽した声で地縛神に抗議の声を上げる。

しかし、その抗議は地縛神のにやにやとした笑みで却下された。背中にイヤな汗が流れる。

そしてグレアムが地縛神を見つめていると、彼の手に持つ一冊の魔導書――闇の書が発光を始める。

立ち上る光は黒い光。生理的な嫌悪感が湧き出し、グレアムは僅かに地縛神から後退して距離を取った。

「これで闇の書は消えた」

「……え？」

「簡単に言ってやろう。闇の書から無限再生機能と転生機能を頂戴した。

結果として、ここに残ったのはただの魔導書――貴様ら風に言えば夜天の魔導書か」

「――――――！？　ま、まさか……！」

「良かったではないか。

これで文字通り、闇の書はこの世に存在しなくなったのだからなぁ！」

口元をこれでもかと歪めながら、地縛神はさぞ面白そうに笑う。

そして手の中にある一冊の魔導書――夜天の魔導書を無造作に放り投げた。

落下していく夜天の魔導書を、グレアムはただ茫然と見送ることし

かできない。
まさか、こんな方法で闇の書を滅するとは想像もしていなかった。
こんなことがあり得るのか。

だが、事実放り投げられた夜天の魔導書からは、以前の様な禍々しさを感じない。
つまり地縛神は、グレアムの目的を達っする事に成功したのだ。ある機能を奪うことによって。

「さぁ、後は我の力を完全なモノにするだけだ……！
始めよう、闇のデュエルを！」

「くっ！　何をするつもりだ！」

地縛神はグレアムに興味が失せた様に顔を背けると、両手を天に掲げて笑みを浮かべる。
その地縛神の元へ、アースラから転移してやってきたのだろう。クロノが大声で目的を訊ねた。

しかし、地縛神はクロノへの返答を拒絶する。両手を天に掲げ、右腕に施された巨人のアザが鈍く光を発する。
すると地上――海鳴市内に紫色の炎で何かが描かれ始めた。突然の事態にクロノは言葉を失い、眼下に見える光景を見下ろす。

「不味い！　クロノ、急いでソイツを止めろ！
このままじゃ街のヤツらが犠牲になるぞ！」

「何を――！」

「地縛神の生贄にされちまう！」

「！」

付近のビルの屋上から聞こえた声――鬼柳の声に急かされ、クロノは視線を地縛神へと移す。
先ほど聞こえた鬼柳の声。その中に聞こえた「生贄」と言うワードは、明らかに不穏なものだった。

「地縛神！　お前を拘束する！」

「無駄だぁッ！」

「！」

クロノは一言だけ警告を入れると、手に持ったデバイスを地縛神へ向けた。
そして放たれるのは非殺傷設定を付加した魔力弾。寸分の違いなく地縛神へと向かう。

しかし、地縛神に命中する寸前、命中するはずだった魔力弾が掻き消えた。
そしてクロノへ反撃する様に、地縛神がカードを投げつけてくる。
それをクロノは横へ跳ぶことで回避。

「我とて地縛神……！
伊達に神の名を冠しておらぬ！」

「くっ！」

「そして見るが良い！
闇の炎に彩られたデュエルロードを！」

地縛神の言葉に、クロノは視線を再び眼下へと向ける。そして地上の様子に目を剥いた。
眼下に見える市内には、紫色の炎で何かが描かれている。その何かを、クロノには覚えがあった。

「巨人のアザ……」

海鳴市内に描かれた炎の模様。それは地縛神の腕に施されている模様と同じ物だった。
すなわち、「巨人」を現す地上絵。紫色の炎で描かれた地上絵は、不穏なオーラを醸し出している。

「さぁ、これで準備は出来た。
残るは地上の人間の命を生贄に、我の存在を確立させる！」

※

「き、鬼柳兄ちゃん……。あ、アレ……」

「あぁ……」

紫色の炎に彩られた海鳴の街。地上の人々は逃げまどい、酷い混乱が予想される。
その光景を眼下に見下ろしながら、鬼柳はグッと拳を握る。間に合わなかった、と。

チラ、と視線をアルフの腕の中のはやてに向ければ、彼女は不安そうな表情で上空を見上げている。
その上空には彼女と共に現れた祝福の風――地縛神が高笑いを上げていた。その姿はまるで、地上に降臨した悪魔。

「って、あぁ！！　あ、アルフさん！
アレ！　アレ拾ってください！」

「え？　あ、アレって……」

と、上空のリインフォースを見上げていたはやてが、急に何かに気づき、慌て出す。
彼女は必死に上空を指差し、しきりにアルフを急かす。はやてに急かされ、アルフは上空を見上げた。

すると上空から、落下してくるモノがある。あれは何だろうか。アルフはグッと目を凝らす。
そして見えてきたもの。それは先ほどまでデュエルしていた闇の書の意思が大切そうに持っていた魔導書だった。

「ぷ、プレシア！　あ、アレ拾っとくれ！！」

「えぇ！？　も、もう！」

落ちてくるものが闇の書だと理解すると、アルフははやてを抱き抱えたまま慌てる。
あまりに慌て過ぎたせいか。隣に滞空していたプレシアを急かしてしまった。しかし、プレシアは空を駆る。

落下してくる闇の書。否、夜天の魔導書は凄まじい速度で地上に向かって落下する。
だが、なんとか一歩プレシアが間に合った。地上へ叩きつけられそうになっていた夜天の魔導書を回収する。

「ふぅ……。冷や冷やさせるわ……」

「あ、あはは……。ありがとうございます」

夜天の魔導書が腕の中にあることを確認し、プレシアがホッと安堵の息を漏らす。
その様子にはやては苦笑い。だが、プレシアから夜天の魔導書を受け取ると、大切そうに抱き抱えた。

「みんな……」

「はやて……」

はやては夜天の魔導書を抱き抱えたまま、消えたままの守護騎士を想う。
彼女たちを再び、呼び寄せることは出来ないのだろうか。疑問に思うが答えは出ない。

そしてそんなはやての様子を、鬼柳は何処か心配そうに見つめる。
どうする事も出来ない。一体自分は、はやてに対して何をしてやれるだろうか。

「さぁ、これで準備は出来た。
残るは地上の人間の命を生贄に、我の存在を確立させる！」

「……鬼柳。地縛神は、何を言っているの？」

と、鬼柳が内心で悔しい思いを感じていると、声高らかに上空の地

縛神が叫んだ。
その内容に、鬼柳は覚えがある。シグナーとのライディング・デュエルで自らを呼び出し、人々の命を貪ること。
そしてシグナーの操る竜。そしてシグナーを倒したとき、地縛神は己の存在を確立できるのだ。
そう。世界を破壊と混沌へと導くために。そんなことはさせない。
再び地縛神には、地底の奥底へ眠ってもらう。

「地縛神は……シグナーとのデュエルで人々の魂を生贄に、自らを召喚できる。
そしてシグナーの操る竜、そしてシグナーを倒したとき、初めて自らの肉体を得ることが出来るんだ」

「なんですって!?」

「人々の……命……」

プレシアとアルフが、言葉を失った。だが、それはとても理解できる。
誰だって、人々の命を生贄に捧げると言われたら言葉を失うだろう。
それも大量に。

だが、それを平気でやってしまうのが地縛神なのだ。
過去に鬼柳も、数多の人々の魂を生贄に地縛神を召喚したことがある。

当時の地縛神を召喚した時の感触を、鬼柳は生涯忘れることは無い

だろう。
アレほどイヤな感触は、二度と味わいたいと思わない。味わわない方が身のためだ。

「ヤツは伊達に神を名乗っちゃいない。
実際、人一人の命を蘇らせることすら可能だ」

「――！？　し、死者蘇生まで行えるの！？」

「それが出来るからこそ、俺はこうして生きている」

鬼柳の過去を知るプレシアは、鬼柳の説明に納得した。
たしかに鬼柳は以前、自分は二度死んだ身だと言っていた。
だが、復活した方法まで走らなかった。
まさか地縛神との契約で復活したとは思わなかったが。

「と言うことはつまり、ダークシグナーとは地縛神とパートナーの様な関係ね」

「あぁ。そして地縛神の狙いはただ一つ……！
この世界を破壊と混沌渦巻く世界にしようってことだ！」

「「「えぇ～～ッッ！？」」」

鬼柳の言葉に、なのはとフェイト。それにはやてが素っ頓狂な叫び

声を上げる。
平時ならば笑って見逃すその言葉だが、現在の異常事態を前に笑って済ますことは出来ない。

なのはとフェイトはあわあわと地上の地縛神を見上げ、はやては不安そうな表情で地縛神に憑依されたリインフォースを見上げる。
なんとか地縛神を打ち倒し、リインフォースを救出しなければ。そうしなければ、この世界は破壊と混沌に支配されてしまう。

「さぁ、まずはシグナーを生贄に捧げよう！
来るが良い、三人……いや、四人のシグナーよ！」

「っ！　……ご指名か」

「ど、どないしよう……」

「はやて、お前は残っておけ。まだ本調子じゃないんだ」

はやてが上げた不安そうな声に、鬼柳が微かに笑みを浮かべながら答える。
先ほどまではやては、闇の書に意識を乗っ取られていたのだ。かなり疲労が蓄積されているだろう。

だが、はやては鬼柳の言葉に素直に頷く事は出来ない。それはつまり、鬼柳も闘うことを意味している。
先ほどの闇の書の意思とのデュエルで、魔力を根こそぎ失った鬼柳だ。この後のデュエルを戦い抜く事は難しい。

「そ、そやけど……！　鬼柳兄ちゃんも疲れとるんやろ！？
あかんよ！　無理したらあかん！」

「そうだよ！　さっきのデュエルでアンタの魔力は空っぽじゃないか！」

はやてとアルフが鬼柳の体調を気遣い、必死にデュエルを止める様に説得する。
しかし、鬼柳とて引く訳にはいかない。大切な仲間が命を掛けて闘うのを、黙って見ている訳にはいかないのだ。

「ふっ。だが、仲間が闘ってるのにリーダーが後ろで見てるってのは良い気がしないからな」

「んな……っ！」

「安心しろよ。お前らのリーダーは、このくらいじゃやられねぇぜ」

「鬼柳兄ちゃん……」

ぽん、とはやての頭に手を置きながら、鬼柳は上空の地縛神を見上げる。
たしかにはやての言うとおり、鬼柳の身体は体力切れ間近だ。慣れぬ魔力を使ったのも疲労の原因だ。
しかし、ここで大人しく後ろに下がると言う行為だけはしたくない。

仲間を信じていない訳ではない。だが、仲間だけに重荷を背負わせることもしたくは無い。

自分は、チームサティスファクションのリーダーなのだ。仲間が背負う重荷は自分も背負う。
そして全てを分かち合って、皆で満足する。それが二代目――チームサティスファクションの新たな目標なのだから！

「まったく……。鬼柳はすぐ、無茶するんだね」

「とっても心配だよ」

「フェイト……、それになのはまで」

そしてはやての頭に手を乗せていると、鬼柳のコートを誰かが掴む。
視線を下ろしてみれば、そこには自分を見上げる二人の少女――フェイトとなのは。

フェイトは何処か心配そうな。鬼柳の体調を労わる様な表情を浮かべている。
一方なのはと言えば、無茶ばかりする鬼柳に怒っているのだろう。
ぷぅっと頬を膨らませていた。

鬼柳はそんな二人の様子に、思わず頬が緩むのを感じる。
こうやって、誰かに心配されると言うのは久しぶりだ。昔を思い出し、笑みが零れる。

「けど、そんな鬼柳だから私が一緒に居ないとね」

「ふぇ、フェイト？」

「むっ！　鬼柳さんは私と一緒に居るの！」

「な、なのは……？」

だが、鬼柳が感じた懐かしさも一瞬で霧散する。原因はピト、と身を寄せたフェイト。

彼女は鬼柳の身体にピッタリと寄り添うと、ニコ、と笑みを浮かべながら鬼柳を見上げる。

今まで見た事もない様な、優しげな笑み。思わず鬼柳は狼狽し、らしくない疑問の声を上げた。

そしてそれに同調する様に、反対側にくっついていたなのはも鬼柳の身体に身を寄せる。

その際にしっかりとコートの裾を掴むのは忘れない。ヒシッと抱き付かれ、鬼柳は狼狽してしまう。

何故このタイミングで、なのはとフェイトは喧嘩しているのだろうか。しかしそれでも、二人は相変わらず敵対心をむき出しにしている。

なのはとフェイトが互いに互いへ鋭い視線を向けて激しい攻防を行い。

その様子を見ていたアルフが胃の辺りを抑えて蹲る。曰く「鬼柳とのタッグ。バレたらアタシの命はお終い」らしい。

「ったく。お前ら、落ち着け。今はそんなことやってる場合じゃねぇだろ」

「だ、だけど～～！」

「俺たちが今やるべきことはただ一つ。地縛神とデュエルして、勝たなくちゃいけない。
アイツに負けることはつまり、この世界が破滅するってことだからな」

「破滅……」

鬼柳の言葉になのはも真剣になったのか。依然としてコートの端を掴んだまま、上空の地縛神を見上げる。
上空に滞空している地縛神は絶対零度の視線を鬼柳、なのは、フェイト、はやてに向けていた。その視線の冷たさになのはの背が冷える。

一体どんなモンスター効果を持っているのだろう。未知との相手のデュエルはワクワクするのと同時、不安を覚える。
もしもデュエルに勝てなかったら。それを想像すると、思わず逃げ出したくなる。だが、逃げることは許されない。

逃げてしまえば、この街に住む両親が。家族が。何の罪もない人たちがただ無意味に命を終わらせられてしまう。
それだけはイヤだ。この街には沢山の思いでが。なのはの宝物が沢山あるのだ。その宝物を壊させないため、なのはは闘う決意をする。

「それで、はやて」

「ふぇ？　な、なんや？」

「俺たちは、地縛神を相手にデュエルをする。
負ければこの世界は破滅。勝てばリインフォースは消えるかもしれない」

「――――っ！」

そしてなのはが闘う決意を固めている隣で、鬼柳ははやてに声を掛けた。
内容はこのデュエルの果てにあるもの。勝てばリインフォースは消えるかもしれない。

その報せは、はやての動きを止めるには十分だった。ビクリと身体を震わせ、はやては鬼柳を見上げる。
はやての瞳に浮かんでいるもの。それはリインフォースが消え去ることに対する恐怖だ。

闇の書の意思に意識を乗っ取られている間に、何があったのか鬼柳には分からない。
だが、はやてには掛け替えのない何かがあったのだろう。酷くリインフォースを心配している。

「それで、俺は何をしたらいい」

「……え？」

「リインフォース。……アイツをこのまま、消しちまっても良いのかよ」

「――――っ！　そないなことしたらあかん！　あの子は消えちゃダメなんや！　あの子はこれから、沢山笑わなあかん！！」

鬼柳の言葉に激昂したように、はやては鬼柳に食ってかかる。
そうだ。リインフォースを消滅させてはいけない。悲しみしかなかったあの子の過去。

それを今終わらせなければ。そうしなければ、また過去の繰り返しになってしまう。
それだけはダメだ。リインフォースにはこれから、沢山の嬉しい出来事が待っているはず。

それを与えないまま消滅させることなど、神が許してもこの八神はやてが許さない。

「じゃあ、俺はどうすれば良い。お前は、俺にどうしてほしい」

そして鬼柳ははやてに訊ねる。なら、自分はどうすればいい。どうして欲しい、と。
はやてはその言葉に言い返そうと口を開きかけ、鬼柳の言わんことを理解する。彼は待っているのだ。

はやてが助けを求めるのを。弱みを見せ、誰かに頼ることを期待している。
平時ならば、眉をひそめる様な行動だ。けれど、この時ばかりは、鬼柳の言葉だけは違っていた。

言ってくれ。助けてくれと。そうすれば、自らの持てる力の全てを掛けて、リインフォースを助ける、と。
言外に、鬼柳はそう言っている。はやては鬼柳のその言葉に目を見開き、次いで、決心したように真剣な表情を浮かべた。

「――――助けて。あの子を……リインフォースを、助けてぇっ！」

「分かった。リインフォースを助けて、地縛神を倒して……満足してやるぜ！」

「うん、行こう！　リインフォースさんを助けて……終わらせよう！」

「地縛神の目的を、阻止するために！」

※

紫色の炎で彩られたデュエルロード。
そこに降り立った鬼柳となのは、そしてフェイトの三人。
その前に立ち塞がったのは、意外にも黒いバリアジャケットを身に付けたクロノだった。

「待て！　君たちは一刻も早く此処から逃げるんだ！」

「クロノ君……」

「ソイツはできねぇ相談だ。
地縛神、アイツを倒さない限り、俺たちは此処から逃げられない」

クロノの至極当然な発言に、鬼柳は淡々と答える。
事実、地縛神を倒すほかにこの場から脱出する術は無い。

「だったら僕が代わりにデュエルを行う！
君たちが危険を冒す必要は無いんだ！」

「……無理だ。地縛神とのデュエル。
地縛神と闘うことが出来るのはシグナーだけ……」

「――――～～っ！」

鬼柳の言葉に、クロノは悔しそうに顔を歪める。
一般人を事件に巻き込んでしまうのがイヤなのか。クロノは悔しそうだ。

だが、鬼柳はクロノの態度に好感を覚える。なまじ知っているのがセキュリティだけだからか。
もしもクロノの様な人物に会っていたら、自分はダークシグナーにならなかっただろうか。そんな事を考える。

そして鬼柳はクロノから視線を外し、地上に置いてある自らのDホイール――ギガントLに腰掛けた。
何故ここにギガントLがあるのかは分からない。だが、恐らく地縛神が用意したのだろう。それ以外に考えられない。

「それよりもクロノ。街中に残ってるヤツらを避難させて欲しいんだが……」

「それは無理だ。ここには結界が張られている。
中に入るのは容易いけど、出るのは不可能なほど強固な結界を」

「ちっ」

クロノの説明に、鬼柳は苛立たしげに舌打ちした。まさかそこまで用意しているとは。
つまり海鳴市内に張られた結界によって、地縛神を降臨させるための生贄の確保は出来ていると言うことか。

なんとも悪趣味な事だ。色彩が変わった空や街並みを視界に捉えな

がら、鬼柳は内心でそう呟く。
ならばこのデュエル。地縛神を呼ばせるわけにいかない。呼ばれてしまえば、罪もない人々が生贄にされてしまう。
それは到底、鬼柳にとって満足出来る事ではなかった。

「……なのは、フェイト。地縛神は強敵だ。
負ける可能性の方が高い。負けたら死んじまう。……それでも、やるか？」

見慣れたヘルメットを被りながら、鬼柳は最後の確認をなのはとフェイトに取る。
もしも恐れるようならば、無理に闘わせる必要は無い。それにこれは己の罪。自らの手で尻拭いをする。

「当然だよ！　鬼柳さん一人に闘わせたりしないよ！」

「鬼柳が行くなら、私も行くよ。大丈夫、自分の身くらい、自分で守るから」

だが、返ってきたのは共にデュエルをする事を了承する言葉。
なんとも頼れる言葉に、鬼柳は口元が緩むのを感じる。自分は良い仲間を持った。

ならば後は何も言うまい。腕に付けていたデュエルディスクを外し、Ｄホイールにセットする。

一方、なのはとフェイトもそれぞれ、レイジングハートとバルディッシュをデュエルディスクモードへと変形させた。

「プレシア。アルフ。――――行ってくる」

「えぇ、行ってらっしゃい。無事に、帰ってくるのよ」

「あぁ！　フェイトに怪我させたら、ただじゃ済まさないよ！」

ライディング・デュエルの準備が完了すると、上空に滞空しているプレシアとアルフに声を掛ける。
二人はこのデュエル、共に闘うことは出来ない。今回闘えるのはシグナーのみ。シグナー以外はデュエル出来ない。

そしてプレシアはなのはとフェイト。二人と共にデュエルする鬼柳へ、笑みを浮かべながら答える。
彼女たちが負ける可能性は考えることはない。ただ彼女が望むもの。それは三人が無事に、自分の元へ帰って来てくれること。

アルフもそれは同じ様で、グッと握り拳を作りながら無事に帰ってくる様に言外に言っている。
仲間たちからの暖かい励ましの言葉。それらに鬼柳となのは、フェイトはコクリと頷くと、デュエルロードの中に入る。

そこは入ったが最後、勝たなければ脱出することは出来ない死の監獄。
空を飛んで逃げることはこの紫色の炎が許さず、強引に突破しようとすれば炎に身を焼かれる。

「ふぇ、フェイトォッ」

「!?　あ、アルフ？」

そして腕に付けたデュエルディスクにデッキをセットすると、炎の壁の向こう側からアルフが叫んだ。

一体何事だろうか。訳が分からず、フェイトはビクリと動揺してしまう。だが、アルフは気にせず叫んだ。

「あ、アタシ鬼柳とこれでもかってくらいラブラブだったよ！
そらもう、フェイトが羨むくらい！」

「あ、アルフ……？」

そしてアルフが叫んだ内容に、鬼柳とプレシアがポカンとした表情を浮かべる。

はて。突然アルフは何を言い出すのだろうか。こんな場面で、大声で告げる様な内容ではない。

だが、そんな鬼柳とプレシアの思いとは裏腹に、なのはとフェイトの周囲から真っ黒なオーラが漏れだす。

出来る限り、近づきたくない様なオーラだ。アルフは一体、何故自ら火に油を注ぐような真似をしたのか。理解できない。

しかし――――

「だ、だから！　絶対帰ってきておくれよ！
アタシにお仕置きするために、帰ってきておくれよ！」

「アルフ……」

不安に彩られた表情で叫んだアルフの言葉に、鬼柳とプレシアは納得がいった。
アルフはただ、フェイトに帰ってきて欲しいだけなのだ。命を落とすことなく、無事に自分の元へ。

そのためならば、自分がいくらお仕置きされようとも構わない。
また大好きなご主人様と一緒に笑えるならば、いくらお仕置きされようとも構わない。

フェイトもアルフの真意に気がついたのだろう。先ほどまでの禍々しい雰囲気を霧散させる。
そしてニコッと笑みを浮かべると、「当たり前だよ」と笑顔で告げた。その顔には既に、嫉妬の色は無い。

「クックッ、さぁ、始めようか。破壊と絶望の世界の幕開けだ！」

そして地上から、リインフォースの身体を乗っ取った地縛神が舞い降りる。
腕には闇の書の意思がつけていたデュエルディスクを付け、なのは達と同じように空中に滞空していた。

地縛神がデュエルロードに降り立つと、なのはとフェイトは地縛神から距離を取る。
本能的に嫌悪感を覚えるのか。鬼柳のすぐ傍にピッタリと寄り添うと、地縛神を見据えた。

「させるかよ！　俺たちの目的はただ一つ！
リインフォースを助けて地縛神、お前を封印する事だ！」

「出来るものならばやってみるが良い！
無限再生機能、そして転生機能を得た私は無敵だ！」

「なら、行くぜ……」

「「「「――――決闘（デュエル）！！」」」」

号令と共に、鬼柳の乗ったDホイールが。
なのはとフェイト、それに地縛神が空を駆り、スタートダッシュを決める。

圧倒的な早さで加速していく四人の背中。その背中を見送りながら、プレシアとアルフは不安そうな表情を浮かべる。
鬼柳の話をただの与太話だと切って捨てるほど、プレシアは鬼柳を軽んじていない。故に今回のデュエル、相応の危険はあるだろう。
帰ってきて欲しい。大事な愛娘とその親友。そして、愛娘の初恋の相手が。
もう二度と、娘を失うと言う事態だけは避けたい。フェイトまで失

ってしまえば、きっと自分は壊れてしまう。

だからどうか、フェイトを護ってと。この場で見守ることしか出来ないわが身を悔いながら。

プレシアは第一コーナーを曲がろうとしているDホイール――鬼柳の背中を見つめながら、内心で呟いた。

十一話　「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え　後編」（前書き）

次回か次々回あたりで決着の予定です。
それはそうと、マテリアルとかどうしましょうね。

十一話　「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え　後編」

～海鳴市内　某所～

「先攻は私がもらう。
そしてハンデとしてライフポイントは１２０００から始めさせてもらおう」

「くっ！」

「私のターン！　ドロー！」

地縛神手札５→６

「モンスターをセット。カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札６→４
場　セットモンスター　伏せ×１

「私のターン、ドロー！」

なのは手札５→６

地縛神Ｓｐｃ０→１
鬼柳Ｓｐｃ０→１
なのはＳｐｃ０→１
フェイトＳｐｃ０→１

「私は手札から≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫を召喚！
そしてバトルフェイズ、≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫でセットモンスターを攻撃！」

「セットモンスターは≪墓守の偵察者≫！
このカードがリバースしたとき、攻撃力１５００以下の「墓守」と名のついたモンスター一体を特殊召喚する！
フィールドに現れよ、≪墓守の偵察者≫！！」

墓守の偵察者
星４／闇属性／魔法使い族／攻１２００／守２０００
リバース：自分のデッキから攻撃力１５００以下の「墓守の」と名のついた
モンスター１体を特殊召喚する。

「さらに守備力２０００の≪墓守の偵察者≫は≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫の攻撃では破壊されない！
差分のダメージを受けてもらおうか！」

「きゃぁあああっっ！！」

なのはＬＰ４０００→３９００

なのはの攻撃が失敗に終わり、地縛神のフィールドに二体目のモンスターが特殊召喚される。
その光景を見て、鬼柳は内心で不味いと冷や汗を流した。これでは次のターン、地縛神を呼ばれてしまう。

なんとか地縛神の場に存在している墓守の偵察者二体を破壊したい

が、なのはの手札に果たして除去系のカードはあるだろうか。
無い場合、非常に苦しい闘いを強いられるのは必至だ。地縛神を呼ばせないでくれ。内心でそう願うが、無情にもなのははターンを終了する。

なのは手札６→５
場　クルエン

「私のターン！！」

フェイト手札５→６

地縛神Ｓｐｃ１→２
鬼柳Ｓｐｃ１→２
なのはＳｐｃ１→２
フェイトＳｐｃ１→２

「私は手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！
そして私の場に「ジャンク」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードを特殊召喚できる！
来て、≪ジャンク・サーバント≫！！」

なのはからフェイトへターンが移り、彼女のフィールドに二体のジャンクモンスターが召喚される。
そのうちの一体はチューナーモンスターであるジャンク・シンクロン。狙いはレベル７のシンクロ召喚だろう。

「レベル４≪ジャンク・サーバント≫にレベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！！」

鬼柳はフェイトのプレイに、内心で笑みを浮かべる。これで地縛神の降臨を妨害することが出来る、と。
そしてフェイトは自らの場のジャンク・シンクロンとジャンク・サーバントをチューニング。三つの緑色のリングが出現する。

「集いし怒りが忘我の戦士に鬼神を宿す。光さす道となれ！
シンクロ召喚！　暴れ狂え、≪ジャンク・バーサーカー≫！」

空中に浮かんだ緑色のリングを、一筋の極太の閃光が打ち抜いた。
現れるのは赤い鎧の戦士。
手には身の丈を超えるほどの大剣を携えて、破壊するべき対象である墓守の偵察者を見据えている。

これで状況は逆転できる。そう確信出来るのだが、前方を飛ぶ地縛神の表情からは余裕の笑みが消えない。
まるで攻撃されることが恐ろしくないようだ。せっかく場にリリース要員を揃えたと言うのに。イヤな汗が止まらない。

「バトルフェイズ！
≪ジャンク・バーサーカー≫で≪墓守の偵察者≫を攻撃！」

「伏せカード≪攻撃の無力化≫を発動。
相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズをスキップす

る」

攻撃の無力化
カウンター罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「くっ、カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札6→2
場　ジャンク・バーサーカー　伏せ×2

フェイトの攻撃すら失敗に終わり、とうとう地縛神の降臨が真実味を帯びてきた。
次のターンは鬼柳なのだが、生憎と彼は手札を0にしなければ効果を発動することが出来ない。

先攻1ターン目で手札を全て墓地に送ることは、よほど手札が良くない限り不可能に近いことだ。
なんとか地縛神の降臨を阻止する。そのためにも、一刻も早く手札を0にしなければ。鬼柳はデッキからカードをドローする。

「俺のターン！」

鬼柳手札5→6

地縛神Ｓｐｃ2→3
鬼柳Ｓｐｃ2→3

なのはＳｐｃ２↓３
フェイトＳｐｃ２↓３

「俺は≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を守備表示で召喚！
そしてカードを三枚伏せて、ターンエンドだ！」

鬼柳手札６↓２
場　ＩＦネクロマンサー　伏せ×３

鬼柳の場に、骸骨の姿をしたモンスターが召喚される。
このモンスターは、鬼柳のデッキの中でも重要度が高いモンスターだ。

このカードが場に存在する限り、手札を０のままにしておけば墓地からＩＦモンスターを特殊召喚できる。
しかも伏せカードは手札を二枚まで捨て、デッキから捨てた手札の枚数分だけＩＦカードを墓地に遅れるインフェルニティ・インフェルノ。

これでハンドレスへの布石は整った。だが、そのおかげで地縛神にターンが移ってしまう。
ギリッと、鬼柳は奥歯を噛み締めた。地縛神を降臨させてはいけないと言うのに、地縛神が降臨してしまう。

そして、ターンが地縛神へと移った。

「此方のターン！」

地縛神手札４→５
地縛神Ｓｐｃ３→４
鬼柳Ｓｐｃ３→４
なのはＳｐｃ３→４
フェイトＳｐｃ３→４

「ククッ、これで生贄は用意された……！
さぁ、今こそ、復活の時だ！」

「クッ……！」

「場の≪墓守の偵察者≫二体を、リリース！」

地縛神の場の二体の墓守の偵察者がリリースされ、命の様な光り輝く球が天へと上る。
だが、そこには蒼い空は無い。あるのは暗雲立ち込める海鳴の空。
そして、そこにある異質な物体。

それを見て、なのはとフェイトが戸惑った様な声を上げた。表情には嫌悪感が浮かび、上空を見上げている。
どうやら本能的に、地縛神の力を忌避したようだ。無理もない。今の鬼柳でさえ、地縛神の力に忌避感を覚えているのだから。

「！　なに、アレ……」

「街の人たちから出てる……。鬼柳さん、アレって……」

と、なのはとフェイトが上空の異質な物体に目を奪われていると、視界の隅に無数の光が映り込んだ。
アレは一体なんなのだろう。不安に仰ぐ街の住人から無数の光り輝く球が飛び出し、空に浮かぶ石の様な物で出来た物体に吸い込まれる。

その様子に、なのはとフェイトの表情が青ざめた。理由は分からないが、とにかく良く無い物だと判断したらしい。
正解だ。街の住人から抜け出ている光の球こそ人々の命。そして上空にある異質な物体の正体こそ、地縛神の心臓部分なのだから。

「アレは街のヤツらの命……魂だ」

「っ！　た、魂!?」

「そして上にある石ころみたいなヤツ。……アレが、地縛神のコアだ」

「アレが……地縛神の……」

「来るぞッ！」

鬼柳の説明に呆けていたなのはとフェイトに、慌てて声を掛ける。
場のモンスターと人々の命。それらを得ることで、地縛神は降臨出来る条件を満たした。

ドクン、と、上空にある地縛神のコアが鼓動を刻む。否応なく迫る

忌避感。
あれを召喚させてはいけない。しかし、妨害するための手立てが無い。鬼柳は悔しげに臍を噛む。
そして――――

「人々の魂を生贄に――――降臨せよ、≪地縛神　Ｃｃａｐａｃｕ≫！！」

「「――――ッ！！」」

地縛神が手に持ったモンスターカード――地縛神のカードを、空高く掲げる。
そしてそれに呼応するかのように、上空に浮かぶコアが脈動を刻み、大地にその身を下ろす。

コアが降り立った場所。その場所から、一本の巨大な腕が天を掴むように振り上げられた。
あまりの巨大な腕に、なのはとフェイトが息を呑む。しかし、それが地縛神の全身ではない。

まるで地面の中から抜け出る様に、地縛神がその姿を現す。その大きさは、周辺のビルを簡単に超えるほど。
全身に施された蒼い模様が浮かび上がり、嫌悪感を増大させる。あんなに巨大なのか。なのはとフェイトは、言葉を失った。

「アレが……地縛神……」

「怖い……！　身体が、震える……！」

召喚された地縛神。その姿を前に、フェイトが怯えた様に後ずさった。
地縛神から放たれる神のオーラと言うべきものに触れたのだろうか。
顔は青ざめている。

まるで道端に転がる石ころ。否、簡単に潰せる小さき人。その様な視線で見られ、身体が委縮してしまっている。
果たして本当に、こんなモンスターに勝てるのだろうか。フェイトは地縛神を見上げ、思わず逃げ出したい衝動に駆られる。

だが――――

『無事に、帰ってくるのよ』

『だ、だから！　絶対帰ってきておくれよ！』

「――――！」

脳裏に浮かんだ母親と使い魔の顔。二人の姿を思い出し、キッと地縛神を見上げる。
そうだ。自分はここで逃げ出す訳にいかない。ここで退いてしまえば、母や使い魔が死んでしまう。

そして何よりも、大事なリーダーを。鬼柳を残して逃げることなど、フェイトには出来なかった。

逃げちゃだめだ。フェイトはそう自分に言い聞かせると、エクストラデッキに残るカードに思いを馳せる。

自分は母親を、使い魔を。そして大切な鬼柳や仲間たちを助けたい。だから、だからどうか、自分に力を貸してほしい。お姉ちゃん、力を貸して。内心でそう呟く。

そしてそれに呼応するかのように、ポゥとフェイトのエクストラデッキに眠る一枚のカード。

スターダスト・ドラゴンのカードが光り輝いた。それはまるで、フェイトの願いに応える様に。

「バトルフェイズに移行する！
≪地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ≫で≪ジャンク・バーサーカー≫を攻撃！」

「くっ、トラップ発動！　≪ガード・ブロック≫！
戦闘によるダメージを無効にし、デッキからカードをドローする！」

そして地縛神による攻撃が始まる。まず最初にターゲットにされたのはフェイト。

地縛神が召喚した地縛神コカパク・アプの攻撃により、ジャンク・バーサーカーは破壊される。

咄嗟にフェイトは戦闘ダメージを０にしたが、それとは裏腹に鬼柳は苦い表情をしている。

何故か。それは、地縛神コカパク・アプの持つモンスター効果が厄

介極まりないものだからだ。

「≪地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ≫の効果発動！
　このカードがモンスターを戦闘破壊した場合、戦闘破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを、相手に与える！」

地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ
星１０／闇属性／悪魔族／攻３０００／守２５００
「地縛神」と名のついたモンスターはフィールド上に1体しか表側表示で存在できない。
フィールド上に表側表示でフィールド魔法カードが存在しない場合このカードを破壊する。
相手はこのカードを攻撃対象に選択する事はできない。
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「っ！　そんな！？」

「戦闘破壊した≪ジャンク・バーサーカー≫の攻撃力分、２７００のダメージを受けてもらおうか！」

「きゃぁあああああっっ！！」

フェイトＬＰ４０００→１３００
フェイトＳｐｃ４→２

地縛神の攻撃により、一気にフェイトのライフポイントが削られた。
あまりのダメージの衝撃に、フェイトの身体が大きく投げ出されてしまう。

「くっ、フェイト！」

「！　き、鬼柳！」

だが、紫色の炎の壁に頭から突っ込みそうになったフェイトを、なんとか鬼柳がキャッチする。
あと一歩遅ければ、フェイトの身体は紫色の炎に包まれていただろう。そうなれば、どれほどの苦痛を受けるのか。

「ご、ごめんね」

「気にするな。それよりも、気をつけろよ」

「うん」

フェイトは鬼柳に一言礼を告げ、前方をひた走る地縛神となのはの背を追いかける。
鬼柳は徐々に遠くなっていくフェイトの背中を見送りながら、そびえ立つ地縛神に視線を向けた。

どうやら地縛神はこの世界では弱体化しているらしい。これは地縛神がダメージを受けているせいか。

だが、それならば鬼柳にとって都合は良い。魔法・罠カードの効果を受け付けるならば、それらで破壊する手もありだからだ。

「カードを三枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札５→１
場　コカパク・アプ　伏せ×３

「私のターン！」

なのは手札５→６

地縛神Ｓｐｃ４→５
鬼柳Ｓｐｃ４→５
なのはＳｐｃ４→５
フェイトＳｐｃ２→３

「私は手札から≪Ｓｐ-サモン・スピーダー≫を発動！
自分用スピードカウンターが４つ以上ある場合、手札からレベル４以下のモンスター一体を特殊召喚できる！
私は≪氷結界の風水師≫を特殊召喚！」

Ｓｐ-サモン・スピーダー
通常魔法
自分用スピードカウンターが４つ以上ある場合に発動する事ができる。
手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚する事ができる。
（この効果で特殊召喚したモンスターは、このターン攻撃できない）

「これでレベルの合計は――――7か！」

「レベル4≪クルセイダー・オブ・エンディミオン≫にレベル3≪氷結界の風水師≫をチューニング！
万能なるマナ、それらを操りし魔導の賢者を今ここに！
シンクロ召喚！　魔導の申し子≪アーカナイト・マジシャン≫！」

なのはの後方から、白いローブに身を包んだ魔術師が姿を現す。
フードの奥から覗く双瞳は鋭く、敵である地縛神を見据えている。

「≪アーカナイト・マジシャン≫がシンクロ召喚された時、このカードに魔力カウンターを二つ、乗せるよ！
そしてこのカードに乗っている魔力カウンターの数×１０００ポイント、攻撃力がアップ！」

アーカナイトＡＴＫ４００→２４００
魔力カウンター０→２

「くっ、厄介な……！」

「≪アーカナイト・マジシャン≫の効果発動！
魔力カウンターを任意の数取り除き、相手フィールド上のカードを取り除いた数だけ破壊します！
対象は≪地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ≫と伏せカード！　ディバイィイイイン……バスタァアアアアッッ！！」

「――――！」

なのはの場のアーカナイト・マジシャンの持つ杖が、白い光を輝かせ始める。
その杖から放たれた光の球は二つ。そのうちの一つは場の地縛神に命中。地縛神を破壊する。

上手い。鬼柳は思わず、内心でガッツポーズをする。アーカナイト・マジシャンの効果ならば、地縛神を破壊できる。
地縛神を攻撃対象に出来ないのは厄介だが、魔法・罠・モンスター効果に耐性は無いのだ。いくらでもやりようはある。

「くっ、破壊されたのは≪リビングデッドの呼び声≫！」

「さらに手札から≪エフェクト・ヴェーラー≫を召喚！
そしてレベル7≪アーカナイト・マジシャン≫にレベル1≪エフェクト・ヴェーラー≫をチューニング！」

「！！」

地縛神の場に存在していた厄介なモンスター、地縛神コカパク・アプ。
そのモンスターを破壊し場ががら空きになったのを見逃さず、なのはは追撃に入る。

なのはの腕に刻まれた赤き巫女のアザが光を放ちはじめ、何のモンスターを呼ぶのかを知らせる。

それはなのはのデッキにおいて、エースの名を冠するモンスター。
緑色のリングの中に、七つの光の星が整列する。

「王者の鼓動、今ここに列をなす！　天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊し尽くして、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

「ぐっ……！」

「バトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫でダイレクトアタックッ！
アブソリュート・パワーフォース！」

その手に灼熱の炎を滾らせながら、レッド・デーモンズはプレイヤー（リインフォース）に攻撃する。
灼熱の炎に身を焼かれ、リインフォース。否、地縛神は無様な悲鳴を上げた。だが、ライフはまだ山のように残っている。

「くっ、小娘ぇ……！」

地縛神ＬＰ１２０００→９０００

地縛神Ｓｐｃ５→２

「カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

なのは手札５→１

場　レッド・デーモンズ　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札３→４

地縛神Ｓｐｃ２→３
鬼柳Ｓｐｃ５→６
なのはＳｐｃ５→６
フェイトＳｐｃ３→４

「伏せカード≪シンクロ・スピリッツ≫を発動！
自分の墓地のシンクロモンスター一体を除外して、除外したモンスターの召喚に使用したシンクロ素材を場に特殊召喚する！
現れて、≪ジャンク・シンクロン≫！　≪ジャンク・サーバント≫！！」

「くっ……！」

「そして手札から≪チューニング・サポーター≫を召喚！
場のレベル４≪ジャンク・サーバント≫とレベル１≪チューニング・サポーター≫に
レベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！！」

フェイトの場のジャンク・シンクロンが三つのリングとなって、宙を舞う。
このモンスターたちによって呼び出されるのは、フェイトと母親。
そして姉を繋ぐ絆のカード。

「集いし願いが、新たに輝く星となる！　光さす道となれ！」

フェイトの想いに応える様に、フェイトに右腕に施された赤き巫女のアザが光を放ち始める。
そして三つのリングの中央で五つの光り輝く星は一列に整列し、五つの星を極太の閃光が飲み込んだ。

「シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ、≪スターダスト・ドラゴン≫！！」

極太の先攻から現れたのは、白銀の体躯を持つ儚きドラゴン。
そのドラゴンはフェイトの後ろを追従すると、眼前を飛翔する地縛神を見つめる。

その瞳に宿るのは怒りか。もしくは本能的に覚えた敵意か。鋭い視線を地縛神に向ける。
そしてフェイトは後ろに控えるスターダストを一瞥すると、デッキトップに手を置く。チューニング・サポーターの効果が発動した。

「≪チューニング・サポーター≫がシンクロ素材となったとき、カードを一枚ドロー出来る！」

フェイト手札３→４

「さらに手札から≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動！

デッキからカードを二枚ドローし、手札を一枚捨てる！　私は≪ボルト・ヘッジホッグ≫を捨てます！」

フェイト手札４→４

「バトルフェイズ！　≪スターダスト・ドラゴン≫で相手プレイヤーにダイレクトアタック！
響け、シューティング・ソニックッ！」

「ぐぁあああああっっ！！」

地縛神ＬＰ９０００→６５００

地縛神Ｓｐｃ３→１

なのはのレッド・デーモンズの攻撃に続き、フェイトのスターダストの攻撃も直撃する。
濛々と黒煙をあげながら、前方を飛ぶ地縛神――リインフォースは悲鳴を上げた。

一見有利なこの状況に、なのはとフェイトの顔にも安堵の表情が浮かぶ。
なんだ。この程度ならば、地縛神は恐れるほどではなかったのかもしれない。

しかし、なのはとフェイトの後方を走る鬼柳は、イヤな予感を覚えていた。
あの地縛神が、なのはとフェイトに良い様にされているだけなんて考えられない。

なにか、別の思惑があるはずだ。一体どんな策略を張り巡らせているのか。
様子見している暇は無さそうだと内心で自らを戒めると、残る手札に視線を落とす。

「私はカードを二枚伏せて、ターンエンド」

フェイト手札４→２
場　星屑　伏せ×２

「俺のターン、ドロー！」

鬼柳手札２→３

地縛神Ｓｐｃ１→２
鬼柳Ｓｐｃ６→７
なのはＳｐｃ６→７
フェイトＳｐｃ４→５

「俺は伏せカード≪インフェルニティ・インフェルノ≫を発動！
手札を二枚まで捨て、デッキから捨てた枚数分の「インフェルニティ」モンスターを墓地に送る。
俺は手札の≪インフェルニティ・ジェネラル≫と≪インフェルニティ・リベンジャー≫を墓地に送り、
デッキから≪インフェルニティ・アーチャー≫、そして≪インフェルニティ・デーモン≫を墓地に送る！」

鬼柳手札3→1

「しかし、ハンドレスではないな？」

「あぁ、だが、俺には場のモンスターが居るぜ。
俺はカードを一枚伏せ、場の≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！
手札が0枚の時、墓地の「インフェルニティ」と名のついたモンスター一体を特殊召喚できる！
来い、≪インフェルニティ・デーモン≫！！」

「くっ……！」

「手札が0枚の時に特殊召喚された≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから「インフェルニティ」と名のついたカード一枚を手札に加える。俺は≪インフェルニティ・ミラージュ≫を選択。
場に召喚させてもらうぜ」

鬼柳の場に、まるでインディアンが着る様な民族衣装に身を包んだ悪魔族モンスターが召喚される。
これで地縛神のライフを削り切るシナリオは書けた。あとはそれを実行に移すのみ。

だが――と、鬼柳は前方を飛翔する地縛神の顔を盗み見る。その顔には、紛れもない余裕の表情が浮かんでいた。
まるで全てが自分の手の平の上だと言っている様な。相手を嘲る様な表情。良い様のない悪寒が鬼柳を襲う。

「（此処は……！）場の≪インフェルニティ・ミラージュ≫をリリース！
墓地から≪インフェルニティ・ジェネラル≫と≪インフェルニティ・アーチャー≫を特殊召喚！」

鬼柳が選択したのは、一刻も早く地縛神とのデュエルを終わらせることだった。
いつまでも続けてしまっていては、地縛神にどのような戦略を使われるのかは分からない。

ならば一刻も早くデュエルを終わらせ、地縛神に憑依されているリインフォースを救出する。
そうと決まれば話は早い。鬼柳は後方に控えるＩＦアーチャーとＩＦジェネラルから視線を外し、前方を見据える。

「バトルだ！　≪インフェルニティ・デーモン≫でダイレクト・アタックだ！」

「……」

地縛神ＬＰ６５００→４７００

地縛神Ｓｐｃ２→１

「≪インフェルニティ・アーチャー≫でダイレクト・アタック！」

「……ククッ」

地縛神ＬＰ４７００→２７００

地縛神Ｓｐｃ１→０

おかしい。鬼柳は攻撃を受け続ける地縛神を見つめ、内心でそう判断した。

次のインフェルニティ・ジェネラルの攻撃で地縛神のライフは０になると言うのに、この余裕は一体。

「（コイツは、不味いかもしれねぇな……）」

訳もなく、そう思う。明らかにこの状況は不味い。まるでアリ地獄に入り込んだアリの様に思える。

このまま攻撃しても良いのか。それとも攻撃を躊躇い、地縛神にターンを渡すか。僅かの間、鬼柳は逡巡する。

そして――

「くっ、≪インフェルニティ・ジェネラル≫で「トラップ発動！≪転生の予言≫！！」ッ、なに！？」

「転生の予言の効果発動！　墓地のカードを二枚まで持ち主のデッキに戻す。

私は墓地の≪地縛神　Ｃｃａｐａｃ　Ａｐｕ≫を。そして鬼柳

京介、貴様の墓地の≪インフェルニティ・リベンジャー≫をデッキに戻させてもらう」

「くっ……！」

厄介なトラップカードを伏せていたものだ、と鬼柳は内心で毒づく。
地縛神が自らのカードをデッキに戻すのは予想していたが、まさかリベンジャーまで戻されるとは思わなかった。

これでは次の自分のターン、インフェルニティ・デス・ドラゴン。
またはオーガ・ドラグーンを呼び出すことが出来ない。
一刻も早くデュエルを終わらせなければ。鬼柳は中断していたジェネラルに、再び攻撃命令を行う。

「くっ、バトル続行だ！　≪インフェルニティ・ジェネラル≫でダイレクトアタック！」

「悪いが、お楽しみはそこまでだ！
伏せカード≪栄誉の贄≫を発動する！」

「――――！　そのカードは！」

栄誉の贄
通常罠
自分のライフポイントが３０００以下の場合、
相手が直接攻撃を宣言した時に発動する事ができる。
そのモンスターの攻撃を無効にし、
自分フィールド上に「贄の石碑トークン」

（岩石族・地・星1・攻／守0）2体を特殊召喚し、自分のデッキから「地縛神」と名のついたカード1枚を手札に加える。

「贄の石碑トークン」は、「地縛神」と名のついたモンスターのアドバンス召喚以外のためにはリリースできず、シンクロ素材とする事もできない。

地縛神が発動したのは、過去に一度、ダークシグナーであるレクス・ゴドウィンがデッキに入れていたカード。

かつて鬼柳がダークシグナー時代に見せてもらったカードだ。そのカードはライフが3000ポイント以下の場合に発動し、相手モンスターの攻撃を無効。

そして場に「贄の石碑」トークン二体を特殊召喚し、デッキから「地縛神」を手札に加えるカード。

やられた。鬼柳は自らの浅はかさに内心で舌打ちする。不味い。これでは次のターン、再びコカパク・アプを呼ばれてしまう。

しかし、鬼柳は地縛神が手札に加えた地縛神のカードの違和感に気がついた。

おかしい。先ほど地縛神が手札に加えたのは、先ほど転生の予言でデッキに戻したコカパク・アプではなかった。

地縛神はそれぞれ、一体しか地縛神をデッキに入れられない。

コカパク・アプが主ならば、呼び出せるのはコカパク・アプと言う様に。

だが、先ほど手札に加わったのは最強の地縛神の一角――ウィラコチャ・ラスカだ。

一体何故、ココパク・アプがあのカードを持っているのか。訳が分からず、鬼柳は茫然とする。

「そのカードは……」

「くくっ、気がついたかね？　そう、これこそが我が新たに得た力！　転生機能だよ！」

「転生……？」

地縛神の言っている言葉の意味が分からず、鬼柳は思わずオウム返しに訊ねた。

否、それは鬼柳だけではない。鬼柳の前を飛んでいるなのはとフェイトも同様だった。

「そうだ。闇の書が破壊された時、新たな主の元へ闇の書が転生する様に……。

墓地の地縛神もまた、デッキに戻る際新たな地縛神となって我の元へ蘇るのさっ！」

「っ！　と言うことは、つまり！」

「そう。我は全ての地縛神を扱えると言う訳だ！　破壊される度に、いくらでもなぁ！」

「――――〜〜っ！」

鬼柳の表情が、サッと青ざめた。全ての地縛神を扱うことが出来る。それはつまり最強の地縛神――地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａを召喚できると言うこと。

それは非常に不味い事態だ。ライフポイントが残り僅か1になる。それはつまり、瀕死の重傷を負うことと同意。

もしもなのはやフェイトがウィラコチャ・ラスカの効果を受けてしまえば、下手をすれば二人は死んでしまうかもしれない。

「――――っ、くそっ！」

鬼柳は必死にリバースカードを確認するが、相手の行動を妨害するカードは伏せられていない。

自分ではどうすることも出来ずに、相手――地縛神へとターンが移る。地縛神はニヤリと笑みを浮かべると、ドローした。

鬼柳手札０
場　ＩＦジェネラル　ＩＦアーチャー　ＩＦデーモン　ＩＦネクロマンサー　伏せ×２

「我のターン！」

地縛神手札２→３

地縛神Ｓｐｃ０→１
鬼柳Ｓｐｃ７→８

なのはＳｐｃ７↓８
フェイトＳｐｃ５↓６

「場の贄の石碑トークン二体をリリース！
人々の命を生贄に、究極の破壊をもたらせ！
最強の地縛神！　出でよ、≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫！！」

再び海鳴市内上空に、地縛神の心臓部とも言えるコアが召喚される。
召喚されたコアはまたも海鳴市内の人々から命を吸い上げると、自身を地中へと眠らせる。

そして、地底の奥底から封じられていた古の神が蘇る。
コンドルをモチーフにした地縛神。元ダークシグナーの鬼柳でさえ最強と言わしめる最強の地縛神がここに降臨したのだ。

地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ（アニメ効果）
星１０／闇属性／鳥獣族／攻　１／守　１
このカードがフィールド上に表側表示で存在する場合、
「地縛神」と名のつくカードを召喚・反転召喚・特殊召喚する事ができない。
フィールド上にフィールド魔法が表側表示で存在しない場合、
このカードの以下の効果は無効となり、このカードはエンドフェイズ時に破壊される。
●このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
●相手モンスターはこのカードを攻撃対象にする事ができない。
●このカードは相手の魔法・罠カードの効果を受けない。
●１ターンに１度、自分のターンのバトルフェイズをスキップする

事で、相手ライフを1にする事ができる。

十一話　「ＶＳ地縛神！　祝福の風を救え　後編」（後書き）

次回予告
地縛神が得た転生機能。そして無限再生機能。
それは地縛神のデッキを強化し、最強の力をもたらしてしまう。

そして降臨した最強の地縛神により、鬼柳、フェイトと仲間たちは倒れて行く。
残る一人は不屈の心を持つ少女――高町なのは。

彼女の想いに仲間たちが応えるとき、彼女へ奇跡が舞い降りる。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン」

ライディング・デュエル！　アクセラレーション！

５／９修正

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　前編」（前書き）

今回はリインフォースの本音の回です。
ちなみにライフ1で離脱は本作の設定です。

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　前編」

～海鳴市　八神家～

「何なのよ、アレ……！」

「こ、怖い……！」

突如として街中に出現した巨大なコンドルの様なモンスター。
そのモンスターに街中から光の球が飛び出し、モンスターが吸収する様子を見て。

八神家に避難していたアリサとすずかが、身を寄せ合って震えていた。
いつも勝気なアリサでさえ、街中に出現したコンドルの様なモンスターに怯えている。

どうやら本能的に、地縛神の操るモンスターに恐怖を覚えたようだ。
必死に身体が震え出さない様に踏ん張りながら、ギュッとすずかの身体を抱き締める。

「って、アレ！」

「アレは……≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！？」

と、恐る恐る街中に現れたコンドル型のモンスターを観察していると。
不意に二人の視界の端に、見慣れた赤いドラゴンの姿が映った。慌てて目を凝らしてみる。
するとやはり、コンドルの様なモンスターと相対していたのは彼女たちの友人である少女が使役するモンスター。
その少女が二番目に信用し、背中を預けても構わないほどの信頼を預けているドラゴン――レッド・デーモンズ・ドラゴンの姿。

「やっぱり、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫だ！
じゃあ、まさかなのはちゃんがあのモンスターとデュエルしてるの！？」

「んな……！？」

なのはの使役するレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿を確認し、アリサは仰天する。
まさかあんな得体のしれないモンスターとデュエルをするなんて、何を考えているのだろう。
なんだか良く分からないが、あのコンドルの様なモンスターからは良くない力を感じるのだ。
一刻も早く、なのはとコンドルのモンスターのデュエルが終わりますように。そして、無事になのはが帰ってきますように。
アリサはそれだけを心の内で願うと、ギュッと隣で怯えるすずかの身体を抱き締めるのだった。

※

『状況、未だ収束していません！』

『住民の避難、滞っております！』

空中に浮かんだモニター。そこから流れ出てくる報告に、クロノは頭を押さえこみそうになる。
一刻も早く住民をこの結界の外に避難させたいのだが、街中に張られた結界によってそれは出来ず。

やれることと言えば、住民を街中の安全な施設へ避難、誘導するくらいだ。
しかし、街中は安全とはとても言えない。今はそこかしこに危険が広がっている。

現在管理局のスタッフが結界を解除しようと躍起になっているが、それも何時になるか。
八方ふさがりになってしまっている中、クロノは街中に出現した巨大なモンスターに目を奪われた。

「アレが、地縛神……」

クロノの視界に飛び込んできたのは、雲に覆われた空に優雅に漂うコンドルを模したモンスター。
地縛神の実物を見た訳ではないので確定は出来ないが、恐らくアレが地縛神なのだろう。イヤな雰囲気が漂う。

『クロノ君』

「！　エイミィか」

『街中に出現したあのモンスターから、かなりも魔力反応を検知！
推定Sランクオーバーだよ！』

「くっ！」

クロノが街中に出現した地縛神に目を奪われていると、眼前に展開していたモニターの一つが切り替わる。
そこに現れたのは、クロノの母艦であるアースラに乗り込んでいるクルーの一人――エイミィ・リミエッタ。

彼女の報告を聞き、クロノは苦い表情を浮かべる。あのモンスターから検知した魔力量。
それはあまりにも大きな量だった。クロノやアースラ艦長であるリンディすら上回る魔力量。

一体何をどうすれば、あれだけの魔力量を溜めることが出来るのだろうか。
クロノはエイミィとの回線を一時閉じ、視線を街中に出現した地縛神に視線を向ける。

「クロノ執務官」

「どうした」

「今回の事件の犯人――ギル・グレアム提督を拘束しました」

「！　……そうか」

地縛神を観察していたクロノの元へ、武装隊の一人の魔導師が訪れた。
彼の背後には両脇を武装隊の局員に固められているグレアムと彼の使い魔たちの姿が。

グレアムは地縛神の半ば裏切り行為により、茫然とした表情で街中を漂う地縛神を見つめている。
その隣では、彼の使い魔でクロノの師匠でもあるリーゼ姉妹が、痛ましそうな表情でグレアムの様子を伺っていた。

「グレアム提督……」

「私は、間違っていたと言うのか……。

たしかに、闇の書は消えた……、だが！　何の罪もない人々の魂を代償に支払うことになろうとは……！」

「父様……」

グレアムは依然として、街中に出現した地縛神を見つめている。
彼が何故、地縛神に協力を仰いだのか。何となくだが、クロノは理解していた。

グレアムはクロノよりも、闇の書の消滅に拘っていたのではなかろうか。クロノはそう思う。
彼は目の前で自分の父――クロノの父であるクライドを失った。それが余計に、拘らせる引き金になったのでは。

だが、闇の書はどの様な手法を用いても滅することが出来ず、半ば追い詰められていたのだろう。
そんな折、訪れた地縛神との邂逅。それにより、地縛神の力を得て闇の書を滅する。そう考えていたに違いない。

しかし、そんなグレアムの想いも裏切られた。闇の書はたしかに消えた。改悪していたプログラムは消え、夜天の魔導書になった。
だが、その代償は大きい。海鳴市内に住む一般住民。彼らの命を代償に闇の書を滅したのだから。

「グレアム提督。貴方のやろうとしていたことは、間違いじゃないのかもしれない。
だけど、こんな、一般人に沢山の犠牲が出る様なやり方はしてはいけないんだ」

「……クロノ」

「犠牲が出ない様に、僕たちが頑張る。
それが僕たち――時空管理局の仕事なんですから」

父を殺した闇の書が消え、クロノは心中複雑だ。だが、一つだけ言えることがある。
こんな救済の方法は間違っている。闇の書を滅するために幾人もの罪もない人を殺してしまうのは、間違っている。

正しいやり方は、生憎とクロノにも分からない。けれど、自信を持って言えることが一つだけある。
誰かの命を犠牲にしない様に。誰かが傷つく事が無い様に、自分たちが頑張って事件を解決する。

それが時空管理局に勤める者の責務なのだから。

※

「地縛神、ウィラコチャ・ラスカ……！」

「フハハハハッ！　見ろ、最強の地縛神の姿を！」

紫色のデュエルロード。その先に舞い降りた地縛神の姿に、なのはとフェイトの表情が強張る。
視線の先に映る新たな地縛神からは、先ほどの地縛神――コカパク・アプよりもイヤな気配を感じる。

あながち、最強の地縛神と言う名も嘘ではないのかもしれない。
一体どんな強力な効果を持っているのか。なのはとフェイトは恐る恐る地縛神を見上げる。

「……なのは、フェイト」

「！　き、鬼柳さん？」

「どうしたの？」

と、二人が地縛神を見上げていると、後ろから追いついたのだろう。鬼柳が声を掛ける。
彼の表情は真剣そのもので、下手な受け答えは出来ない。そんな雰囲気をなのはとフェイトは感じる。

「モンスター効果を無効にする魔法・罠・効果モンスターはあるか？」

「え？　え、えぇっと……」

鬼柳の言葉に、二人は場に伏せられているカード。並びに手札を確認する。

だが、生憎と二人の場・手札にはモンスター効果を無効にするカードは無かった。

恐らく、デッキに眠っているのだろう。なのははデモンズチェーンが。

フェイトの場合はエフェクト・ヴェーラーが。

鬼柳にその様に答えれば、彼はクッと苦い表情を浮かべる。

どうやら彼も場にモンスター効果を無効にするカードは無いらしい。

一体、何を警戒しているのか。

「鬼柳さん。あの地縛神のモンスター効果って……？」

「……≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫のモンスター効果。

それは、自分のバトルフェイズをスキップすることで、相手のライフを１にする」

「っ！　そんな！？」

鬼柳から告げられた言葉に、なのはとフェイトは驚愕の表情を浮かべた。

ただバトルフェイズをスキップすることで、相手のライフを１にす

る効果など聞いたことが無い。

そして何よりも厄介なのは、地縛神の共通の効果と別個の効果がシナジーを形成している事だ。

地縛神に共通する能力。相手の魔法・罠の効果を受けない。戦闘対象に選べない。これらが上手く相互作用している。

戦闘破壊する事も出来ず、魔法や罠で除去する事も出来ない。まさに最強の地縛神の名に相応しい効果だろう。

一体どのように攻略すれば良いのか。攻略する手立てが見つからず、なのはとフェイト、それに鬼柳は苦々しげな様子で地縛神を見つめる。

「さぁ、≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫の効果発動！
我のバトルフェイズをスキップすることにより、相手のライフを1にする。
効果の対象は――――フェイト・テスタロッサ！　貴様だ！」

「！　くぅっ」

「ポーラスター・オベイッ！」

地縛神の効果の対象に選ばれたのはフェイト。

どうやらフェイトの特殊なカード――セイヴァー・スター・ドラゴンを警戒したらしい。

コンドル型の地縛神の口の様な部分に光が収束し、そこから極太の閃光がフェイトに向けて放たれる。

咄嗟に回避しようとするが、地縛神はそれを許さない。結果、フェイトに地縛神の攻撃が直撃。大きく吹き飛ばされる。

「うぁあああああっっ！！」

フェイトＬＰ１３００→１

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

コースから弾き飛ばされ、フェイトは紫色の炎の壁に頭から突っ込んだ。

だが、炎の壁はまるで逃がさないと言うかのように、フェイトをコースの中へ押し戻す。

しかし、衝撃が殺しきれなかったのか。フェイトはデュエルロードの上をバウンド。

痛々しい音が響き渡り、地面の上に投げ出される。その様子に慌てて、鬼柳となのはが駆け寄った。

「ぐ、うぅう……」

「フェイト、無理するな」

「だ、だけど……」

全身を激痛に苛まれているであろう。だと言うのに、フェイトはなんとか身体を起こそうとする。
それを止めたのは鬼柳。無理にデュエルを続けさせても、フェイトの身体に多大な支障が出るばかりだ。

ならばデュエルは中断した方が良いだろう。鬼柳の言葉にフェイトは不満そうな顔をするが、鬼柳の説得に頷く。
どうやらフェイトもフェイトで、このままデュエルすることが出来ないと分かっているらしい。そして鬼柳に心配されて嬉しがっている様だ。

フェイトは自分のデュエルディスクからセットしていたカードをなのはに手渡す。
これにより、フェイトの場の伏せカードをなのはと鬼柳が使用できるようになった。

「う、くっ……。ごめんね、鬼柳」

「気にするな。後は俺たちに任せとけ」

「うん……」

なのはに伏せカードを渡すと、鬼柳がソッとフェイトのことを地面に横たえてくれる。
幸い、フェイトが身に着けていたバリアジャケットで大きな怪我などはある様には見えない。

「ほら」

「わ！　……えへへ」

だが、万が一を想定してか。鬼柳は身に着けていたコートをフェイトにかぶせる。

バサリと突然コートを被せられてフェイトは慌てるが、それが鬼柳のコートだと分かると表情を一変。

嬉しそうに頬を緩めながら、コートにクルリと包まった。先ほどまで鬼柳が身に着けていたので暖かい。

そんなフェイトの様子に鬼柳は安堵の息を漏らすと、フェイトの傍から立ち上がる。このまま立ち往生しても仕方ない。

「……って、なのは？　どうしたんだ？」

「うぅん、何でもないの」

「？」

と、フェイトをこの場に残しDホイールに乗り込もうとした鬼柳の視界に、ムスッとした様子のなのはが映る。

彼女はジィッと鬼柳のコートにくるまったフェイトを見つめ、刺々しい雰囲気を醸し出していた。

気になって訊ねてみるのだが、返ってくるのは何処か拗ねた様な返答。
一体何を拗ねているのか分からないが、今は拗ねている場合ではない。

なのはをあやす様にポンポンと頭を撫でると、若干なのはの機嫌が回復したようだ。
ピョコンッとなのはのチャームポイントであるツインテールが揺れ、表情から刺々しさが消える。

「じゃあな、フェイト。そこで待ってろよ」

「うん。鬼柳、なのは、頑張れ」

「おぅ！」

そしてフェイトから激励のエールを貰い、なのはと鬼柳はその場から再び走り出す。
フェイトはデュエルを中断してしまったので、これからは実質二対一でのデュエルだ。

苦しくなるに違いない。だが、これ以上大切な仲間を傷つけさせないために。
鬼柳はキッと表情を引き締めると、グッとアクセルを回し、大分前に行ってしまった地縛神の後を追った。

※

見える。ぼんやりとした視界の中で、軽快に空を飛ぶ己の姿を、暗闇に囚われたリインフォースは見ていた。
四肢を拘束するのは黒い霧。一重に闇と言われるものだろう。拘束を抜け出そうとするのだが、びくともしない。

そして視線を前に向けてみれば、白い靄の様な物が見える。そこには此処とは違う、景色が映し出されていた。
靄に映るのは少女と男性。そして自らの身体を乗っ取っている存在――地縛神。空を駆けながらデュエルをしている。

「（主……はや、て……）」

靄に映る景色を見つめながら、リインフォースは無事に脱出させることのできた主のことを想う。
此処に居ないと言うことは、はやては無事に脱出できたはず。あとは自身の身体を乗っ取っている地縛神を消滅させるだけ。

だが、その方法をリインフォースは思い付く事が出来ない。
闇の書――否、夜天の魔導書に記録されている魔法で、神格の存在を消す魔法は記録されていない。

一体どうすれば良いのか。一刻も早く地縛神をどうにかせねば、大事な主人であるはやて。
そして何の罪もない一般人にまで被害が及ぶ。一体、どうすればこの事態を収束することが出来るのか。

『プレシアさん！』

「（！　あれは……）」

と、リインフォースが暗闇の中で考えていると、不意に聞き慣れぬ声が聞こえた。
一体誰だろうか。疑問に想い、視線を声が聞こえた方へと向けてみる。そこには新たな白い靄が。

そこに映し出されているのは、空中に滞空し、デュエルの様子を見守る三人の女性の姿。
そして三人の元へ、見慣れぬ民族衣装の様な衣服に身を包んだ少年が駆けつける。

『ユーノ！　無事だったのかい？』

『はい、僕は大丈夫です。だけど、なのはや鬼柳は……』

『地縛神とデュエルをしているわ。
これで鬼柳達が勝てば、地縛神は消えるそうよ……』

「！」

靄に映った一人の女性――プレシアの言葉に、リインフォースの瞳は見開かれる。
デュエルで自身――地縛神が敗北すれば、地縛神は消滅する。それならば容易いことでは無いだろうか。

だが、どう言う訳かプレシアや隣に立つ女性――アルフ。そしてマスターであるはやての表情は暗い。
もしや、なにか都合が悪いことでもあるのだろうか。疑問に思うのだが、聞く事の出来ないわが身が恨めしい。

『！　じゃあ、デュエルで勝てば地縛神を！』

『……だけど、地縛神と契約した者――ダークシグナーも、共に消えてしまうと言うの。
それに今はリインフォースの身体を乗っ取っている。もしかしたら、地縛神と一緒にリインフォースまで消えてしまうかもしれない』

『ッ！』

「！　くっ……」

だが、プレシアが説明する言葉を受け、リインフォースは苦々しげに顔を歪めた。
やはり何か代償があると理解していたが、その代償がまさか自分自身の消滅だとは。

しかし、それはそれで都合が良いのも事実。自分が消えるだけで、はやてにこれ以上迷惑をかける必要は無い。
はやての未来を見守ることが出来ないのは心苦しいのだが、それでもこれ以上、はやてに迷惑をかけるよりはマシだった。

「（主はやて……。
　沢山の迷惑を掛け、それを償うことも出来ぬまま消えてしまう自分をお許しください……）」

腹は決めた。いや、無理やり決めた。消えたくない、生きたいと言う心の声を、胸の奥に封じ込めて。
今の自分の決意をはやてが知ったのならば、きっと彼女はリインフォースを説得するだろう。だが、譲れない。

ここで譲ってしまえば、はやてに沢山の迷惑がかかってしまう。
それだけではない。彼女が愛する仲間達――チームサティスファクションにも迷惑がかかる。

それだけはいけない。自分は今まで、沢山の迷惑を掛けてきたのだ。
だから最後には、キッチリとケジメをつけなければ。

リインフォースはクッと表情を引き締めると、身体のコントロールを取り戻すため、地縛神の隙を伺う。

※

「カードを三枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札３→０
場　ウィラコチャ・ラスカ　伏せ×３

「わ、私のターン、ドロー！」

なのは手札１→２

地縛神Ｓｐｃ１→２
鬼柳Ｓｐｃ８→９
なのはＳｐｃ８→９

「リバースカード≪バスター・モード≫を発動！
場の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫をリリースし、デッキから≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫を特殊召喚！」

「くっ、厄介な全体破壊効果か……」

「さらに手札から≪魔導騎士ディフェンダー≫を召喚！
そしてトラップカード≪ナイトメア・デーモンズ≫を発動！
私の場の≪魔導騎士ディフェンダー≫をリリースし、相手の場に「ナイトメア・デーモン・トークン」三体を特殊召喚します！」

「くぅっ……！」

なのはの場の魔導切りディフェンダーがリリースされ、地縛神の場に三体のデーモン・トークンが出現する。

一見すれば、相手にリリース要員。並びにシンクロ素材を与えたことになるだろう。だが、なのはの場合は別だ。

「バトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫で「ナイトメア・デーモン・トークン」を攻撃！
エクストリーム・クリムゾン・フォースッ！」

「トラップ発動！　≪ガード・ブロック≫！
戦闘によるダメージを０にし、デッキからカードを一枚ドロー！」

地縛神手札０→１

「だけど≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫の効果発動！
このカードが攻撃した場合、このカード以外のモンスターを全て破壊します！
クリムゾン・ジ・エンドッ！」

「がぁあああああっ！！」

地縛神ＬＰ２７００→３００

レッド・デーモンズ／バスターの効果により、全てのフィールドが

焼け野原になる。
鬼柳の場に存在していたＩＦモンスターたちも全滅してしまったが、鬼柳は納得済みの様だ。

コクリとなのはに向けて頷く。その様子は、なのはの行動を称賛している様で。
なのはは鬼柳に向けて頷き返すと、手札に視線を落とす。今の手札は２枚。やれることは少ない。

ならば――！

「さらにメインフェイズ２に移行！　手札から≪Ｓｐ- シフト・ダウン≫を発動！
　自分用スピードカウンターを６つ取り除き、デッキからカードを二枚ドローします！」

なのは手札２→３

なのはＳｐｃ９→３

「ターンエンド！」

なのは手札３
場　レッド・デーモンズ／バスター　伏せ×２（フェイトと共有）

「俺のターン！」

鬼柳手札０→１

地縛神Ｓｐｃ２→３
鬼柳Ｓｐｃ９→１０
なのはＳｐｃ３→４

「（くっ、どうすればいい……）」

鬼柳はデッキからドローしたカードを、腕に付けているカードホルダーに装填すると。
視線を前方をひた走る地縛神へと向けた。今の手札では、勝てる要素はある。勝利の道筋は見えている。

だが、このまま勝っても良いのかと言う想いが鬼柳の中にあった。
このまま勝ってしまえば、地縛神に乗っ取られているリインフォースは消えてしまうかもしれない。

それだけは是非とも避けねばならない事態だ。リインフォースが消える。
それはつまり、はやてとの約束を破ることになってしまう。そんな事は出来ない。

しかし、状況を好転させることが思い浮かばないのも事実。
一体どうやって地縛神とリインフォースを切り離せばいいのか。

「くっ……！」

リインフォースを救う手立てが見つからず、鬼柳はグッと臍を噛む。
自分には出来ないのか。遊星が自分を救ってくれたように、自分も

誰かを救えないのか。

「き、りゅう……京介……」

「！　お前は……」

不意に、聞き慣れぬ女性の声が鬼柳の耳に届いた。俯けていた顔を、慌ててあげる。

するとそこには、こちらを見据える地縛神の姿がある。だが、唯一違う点が一つだけあった。

それはこちらを見つめる地縛神の顔。右半分は悪意を撒き散らしている笑みだが、左半分が違う。

まるで泣き出しそうな。悲壮感漂う表情を浮かべている。地縛神とは違う顔――つまり、リインフォースの顔。

「リインフォース！」

「えぇ！？　り、リインフォースさん！？」

「鬼柳、攻撃……しろ」

「！」

声の主――リインフォースは、苦しげに顔を歪めながら、鬼柳に攻撃する様に頼む。

それになのはと鬼柳はハッと目を見開いた。知られていた？　一体どのタイミングで？　疑問が浮かぶ。

「ふっざけんな！
お前を救う手立てが見つかってないのに、迂闊に攻撃できるかよ！」

「ククッ、この状況でもそんな事が言えるのか？」

「なに！？」

だが、それでも攻撃することを鬼柳は許容できなかった。
このままリインフォースを消滅させてしまっては、約束を違えてしまう。

しかし、そんな鬼柳の怒声に応えるのは地縛神。
彼は右半分の顔でニヤリと笑みを浮かべると、場の伏せカードを発動する。

「トラップカード≪早すぎた復活≫を発動。
自分の墓地から「地縛神」と名のついたモンスターを特殊召喚する。
墓地より蘇れ、≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫！！」

「「ッ！！」」

早すぎた復活
通常罠
自分の墓地に存在する「地縛神」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻撃宣言をする事ができない。
また、この効果で特殊召喚したモンスターが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

地面が泥の様に液状化し、ゆっくりと地縛神が液状化した地面から姿を現す。
地縛神専用の蘇生カード。あるとは想定していたが、まさか既に伏せられていたとは。

再び出現した最強の地縛神を視界に納め、鬼柳はグッと顔を歪ませる。
いけない。これでは、せっかく見えていた勝利への道筋が途切れてしまう。

だが、ここで勝利へ縋りついてしまえば、目の前で苦しげな様子のリインフォースを救うことが出来ない。
一体どうすれば――。鬼柳はどうすればいいのか分からず、グッと拳を握る。このままではじり貧で負けてしまう。

「鬼柳、京介。分かっただろう？　早く私のライフを0にしてくれ」

「ッ！　リインフォース！　ふざけるな！

お前を助け出さないまま、地縛神を倒す訳に行くか！」

苦汁に満ちた表情の鬼柳に、顔の半分だけ解放されたのだろう。リインフォースが声を掛ける。

彼女は何処か諦めに似た表情で、鬼柳に自分のライフを０にする様に告げた。それが最善の手立てだと。

しかし、鬼柳はそれに反発する。まだ、なにか手はあるはずだと。

地縛神に乗っ取られたリインフォースを、地縛神から切り離すことが出来ると。

「……だが、私と地縛神を切り離す手立てが無いのだろう？
これで良いんだ。私は生きているには、手を汚し過ぎたんだ……」

「リインフォース……ッ！」

リインフォースは鬼柳の言葉に、嬉しそうな表情でそう告げた。

ここまで誰かに求められたと言うのは初めての行為。何処かむず痒いと感じてしまう。

だが、これ以上自分は生きていてはいけない。

今まで幾人ものマスターを殺し、無秩序な破壊を振り撒いた自分。

そんな自分がのうのうと生を実感できるはずなど無いのだ。

だから終わらせるように、リインフォースは鬼柳に頼む。せめて地縛神は連れて行くと。

だが、鬼柳の出した答えは――――否だった。

「ふざけるな！　そんな悲しそうな表情で……不満足そうな表情でこれで良いとか言うな！
手を汚し過ぎただと……？　なら、償えば良いだろうが！　お前は自分の罪を償うこともしないまま、消えちまうのかよ！」

「――――！」

「俺も手を汚した。罪もない奴を殺した。けど、俺は償うために生きている。
いつか友と、仲間と再会した時、胸を張って会えるように……！
胸を張って、生きれる様に！」

「鬼柳……京介……」

「お前だって出来るはずだ。生きて罪を償うこと！
そして、生きて罪を償って――――はやてと満足してくれよ！」

魂からの咆哮。まさにそう呼ぶにふさわしい声量で、鬼柳は思いの丈をぶつける。
鬼柳も以前、罪もない人――セキュリティの一人を殺した。だが、鬼柳はこうして生きている。

仲間に、友に助けられた命。自分が犯した罪を償わずに生きることなど、鬼柳には出来なかった。
そして鬼柳には一つだけ、想いがある。会えるかもわからない相手。
会えない可能性の方が高い仲間。

彼らに再びめぐり合えたとき、胸を張って会えるように。胸を張って生きたと言えるように。
自分が犯した罪を償う。それが鬼柳がこの世界に来て、密かに胸に秘めていた決意だった。

そして、その決意こそこの世界に現れたダークシグナー。彼らを救うこと。
彼らを救い、地縛神だけを封印する。やれるかどうかは難しい。それは理解している。

だが、だからこそやらなくてはならない。遊星達が仕留めそこなった相手。
それを封印することで、少しだけ彼らに対して胸を張れるような気がしたから。

「……鬼柳、京介」

「……なんだ」

そして鬼柳の方向から数分後。息が詰まる様な沈黙がデュエルロードを支配している。
その沈黙を破ったのは、今まで沈黙を守っていたリインフォース。
彼女は震える声で訊ねた。

「私は、生きていても……良いのか？」

両方の目尻に涙を溜めながら、訊ねる姿は何処か美しい。
ようやく自分の本音をさらけ出したリインフォース。彼女の質問に、鬼柳は口元を緩める。

「当たり前だろ。この世に必要とされてないヤツなんざ、居ないんだ。
お前は必要とされてる。はやてに俺……。少なくとも、二人はお前を必要としてる」

「私もだよ！」

「お前たち……」

言葉の途中で、なのはが忘れられては困ると言う表情で鬼柳の言葉に割り込む。
そう言えばそうだったな。鬼柳は内心でそう呟くと、人数の訂正を行った。

そう。少なくとも、リインフォースは必要とされている。
はやて、なのは。そして自分。これでもまだ、消滅を望むのだろうか。

「言えよ、リインフォース。お前はどうしたいんだ？
このまま地縛神と一緒に、消えちまってもいいのか？」

「……だ」

鬼柳の問いかけに、酷く小さな声が返ってくる。
良く耳を澄まさなければ聞こえない。それくらい小さな声音。

「聞こえねぇよ。聞こえなきゃ、助けられねぇぞ」

「……やだ。このまま消えてしまうなんて……イヤだ」

「……そうか」

「生きたい……、主はやてと……共に歩みたい……、私の罪を、償いたい……！」

徐々に大きくなっていく、リインフォースの助けを求める声。
意地っ張りなヤツだ。鬼柳はようやく本音を晒したリインフォースをそう思う。

だが、やるべきことは決まったのだ。リインフォースが助けを求めている。
はやての大切な家族が。はやての大切な人が。ならば自分が躊躇う理由など存在しない。

「だから、どうか――――助けてぇっ！」

「分かった！　絶対、助けて見せる！」

全力でリインフォースを助ける。それが自分にできる、精一杯のことなのだから。

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　前編」（後書き）

A'ｓ編は次回と次々回で終了予定です。
そしてA'ｓ編が終わったら空白期に入る予定。

５／１５　修正

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　後編」（前書き）

今回でようやく地縛神戦が終了です。
次回はようやくエピローグ。長かったなぁ。

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　後編」

～海鳴市　某所～

「リインフォース……！」

鬼柳が聞き出したリインフォースの本音。
それを聞き、はやてが痛ましそうな表情で空を駆ける地縛神を見つめる。

やはりいかに自らがプログラムと理解していても、死んでしまうことはイヤなのだろう。
出来る事ならば自分もリインフォースを救い出したい。リインフォースをを救い出す手助けがしたい。

けれど、今のこの身はデュエルが出来る様な状態ではない。消耗し、アルフに抱えてもらっている状態だ。
こんな状態で場に出ても、鬼柳達の邪魔にしかならない。自分に残された唯一の手段と言えば、ここで祈ることくらい。

「――――～～っ！
プレシア、なんとかリインフォースを助けられないのかい！？」

「無茶を言わないで！　精神干渉出来る様な偉大な魔導師じゃないわよ、私は！」

「うぅ～～～～っっ！　フェイトォオオオオオッッ！！」

だが、そんなはやての耳に騒がしい声が聞こえる。声の発生源は自分のすぐ上から。
どうやらアルフもリインフォースの本音に心動かされた様で、助け出したいと思っている様だ。

それはプレシアも同様で、自らと同じく何もできないわが身を悔しく思っているらしい。
拳が白くなるほどの強さで握りしめ、状況を打開できない己の無力を呪っている。

「……ふふっ。リインフォース、ここにもおるで。
リインフォースを必要としとる人たちが……」

はやてはそんな二人の様子をキョトンとした様子で見ていたが、すぐに表情を一変。
クスクスと笑みを浮かべる。あぁ、なんだ。リインフォースは自分以外にも必要とされているではないか。

リインフォースのためにここまで感情を動かしてくれる人がいる。
無力に嘆く人がいる。
それがどれほど嬉しいことか、はやては身をもって知っている。だからこそ言える。リインフォースは幸せ者だと。

だから一つだけ言うことがある。消える事なんて許さない。
リインフォースは知るべきなのだ。ここで彼女を必要とする人たち

がいることを。

「赤き巫女の伝承……！　あぁもう！　なんでこんなに虫食いなんだ！」

そしてアルフとプレシアが暴れている隣で。ユーノが空中に出したモニターを見つめていた。
書いてある内容ははやてには分からないが、ユーノの独り言から赤き巫女についての伝承らしいと分かる。

赤き巫女のアザ。自らの右腕に刻まれたそのアザを見つめながら、はやてはただ一心に祈る。
居るとも知れない赤き巫女。もしも居るのならば、自分の願いを聞いて欲しい。自分の願いを叶えて欲しい。

昔から今まで、独りぼっちで泣いている子がいる。その子の涙を止めてあげたい。
その子の涙を止めて、笑わせてあげたいのだ。沢山の幸せに囲まれて、沢山の仲間に囲まれて。

そのためには、どんなことだってする。どんな代償だって払って見せる。
だからどうか、今あそこで助けを求めて泣いている子を助けて、と。
はやては腕に刻まれたアザに祈った。

そして――

――――ドクン、と、赤き巫女のアザが脈動したように聞こえた。

※

「フハハハハッ！　ならばどうする、私を攻撃するか！？
私を倒せば、この女もろとも消えてしまうがなぁ！」

勘に障る笑い声を上げながら、鬼柳の前を地縛神に憑依されたリインフォースが飛ぶ。
鬼柳は地縛神の笑い声を無視すると、手札に残されたカードを見た。
これこそが鬼柳の切り札。

だが、すでにその切り札は意味を成さなくなってしまった。その原因は、地縛神の場に存在するモンスター。
地縛神ウィラコチャ・ラスカ。最強の地縛神の名を冠するモンスターが場に存在していては、攻撃することが出来ない。

ならば自分が出来ることは。モンスターを残し、反撃の機会を伺う

だけだ。
鬼柳は先ほどドローしたカード――インフェルニティ・ミラージュを場に召喚する。

「俺は≪インフェルニティ・ミラージュ≫を召喚！　そしてリリースし、効果を発動！」

「！　この状況で二枚目の≪インフェルニティ・ミラージュ≫だと！？」

「対象は≪インフェルニティ・デーモン≫！　そして≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫だ！
墓地より二体の「インフェルニティ」モンスターを特殊召喚！」

「くっ！」

鬼柳のフィールドに、二体の悪魔が特殊召喚される。
これこそ、鬼柳がダークシグナーになってから今まで使い続けてきた相棒とも呼べる存在。

そのうちの一体――インフェルニティ・デーモンの効果を理解しているのか。
地縛神は僅かに苦い表情を浮かべる。――だが、浮かべる表情はあくまで僅かでしかない。

なにかトラップが伏せられている。地縛神の浮かべた笑みで、鬼柳はそれを理解した。
だが――と、鬼柳は相手フィールドに伏せられたカードを見る。残

る伏せカードは一枚。

「（悪いな、なのは――――）」

恐らく、自分はここで負けるのだろう。鬼柳は何処か余裕を見せる地縛神を見て悟る。

だが、ただでは負けない。なのはに残すべきカードを残さなくては。でなければ、きっと後悔してしまう。

だから後悔しない様に。きっとなのはが、リインフォースを救ってくれることを信じて。

鬼柳はカードを託すのだ。仲間を信じ、カードを託す。それが、新たに得た仲間から学んだこと。

「俺は≪インフェルニティ・デーモン≫の効果でデッキから≪インフェルニティ・バリア≫を手札に加える！

そして手札に加えた≪インフェルニティ・バリア≫を伏せ、≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫の効果発動！

手札が0枚の時、墓地から「インフェルニティ」と名のついたモンスター一体を特殊召喚できる！」

「ふっ、御託は良い。掛かって来い」

「――――俺は、墓地から≪インフェルニティ・アーチャー≫を特殊召喚する！」

鬼柳が選んだインフェルニティと名のついたモンスター。
それは、相手にダイレクトアタックが出来る効果を持ったインフェルニティ・アーチャーだった。

インフェルニティ・ネクロマンサーの隣に円が浮かび上がり、そこからＩＦアーチャーが呼び出される。
だが、それを待っていたと言わんばかりの表情で地縛神の唇が釣り上がった。やはり罠があったか。鬼柳は顔を顰める。

「トラップ発動！　≪地縛解放≫！
相手フィールド上にレベル６以上のモンスターが召喚・特殊召喚された時に発動！
自分の場の「地縛神」と名のついたモンスターをリリースし、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

「くっ！　墓地にリベンジャーが居ても無駄だったか！」

「相手フィールド上って……私も！？」

「消え失せろ！！」

地縛神の発動した罠カードの効果により、鬼柳。並びになのはの場のモンスターが全て破壊される。
これにより、一面焼け野原。これでは次の自分のターンが来るまで、無防備なフィールドを晒さなければならない。

「くぅうっ！」

なのは　レッド・デーモンズ／バスター↓レッド・デーモンズ

地縛解放の効果により、なのはの場にレッド・デーモンズ／バスターは破壊され、レッド・デーモンズが特殊召喚される。
唯一なのはのフィールドは安全だが、相手は直接攻撃を行うことが出来る地縛神。油断はできない。

「そして破壊したモンスターの攻撃力の合計分のダメージを、相手に与える！」

「そ、そんな！」

「破壊したモンスターの攻撃力の合計――７３００のダメージを食らえ！」

地縛神の場のウィラコチャ・ラスカがリリースされ、巨大な炎の球が上空に出現する。
その攻撃対象は鬼柳。どうやらなのはにまでは効果が及ばないらしい。鬼柳はそれにホッと安堵の息を漏らす。

もしもなのはにまで効果が及んでいた場合、このデュエルに勝ち目は無かっただろう。
だが、攻撃対象は一人だけだった。ならばこのデュエル。まだ勝てる可能性が残されている。

「う、ぐぅあああああああッッ！！」

鬼柳ＬＰ４０００→０

そして放たれた巨大な炎の球。それは人一人を軽く飲み込むほどの大きさを持っていた。
放たれた巨大な炎の球は、鬼柳へ向かって放たれる。そして、それは寸分の違いなく鬼柳を直撃。

灼熱の業火に身を焼かれ、鬼柳の痛々しいほどの悲鳴が海鳴市内に響き渡った。
直撃の衝撃でか、鬼柳は乗っていたＤホイールから投げ出される。
全身を激しく打ちながら、鬼柳は地面を転がった。

「鬼柳さん！」

全身から血を流し、力なく横たわっている鬼柳の元へ、顔を青くしたなのはが駆け寄る。
そして鬼柳の容体を確認したとき、サッとなのはの顔は青くなった。
ここまでの血の量は見たことが無いのだろう。

鬼柳は頭や腕、脚や脇腹を切ったのだろう。至るところから出血していた。
バリアジャケットの恩恵を受けなかったせいだろう。先ほどのフェイトよりも大分酷い。

「あ、う……」

想い人の凄惨な姿に、なのはは頭が追い付かずにいる。
一体どうしたら。急いで病院に運ばなくちゃ。そんな思考ばかりが頭を過る。

「な……の、は……」

「！　き、りゅう……さん？」

「コレ、を……」

と、なのはが茫然自失としていると。鬼柳が弱々しいながらも、彼女に声を掛けた。
震える手に握られているのは、先ほど鬼柳が伏せたカード。それを目の前に差し出され、震える瞳で鬼柳を見つめる。

「い、け……」

「で、でも……鬼柳さんが……」

「俺の事は……気に、するな……」

「でも！」

弱々しい声で語りかける鬼柳に、知らずなのはの言葉が荒くなる。
とてもデュエルを続行できる状態ではない。だと言うのに、鬼柳は続けることを望む。

気にするなと言われても、気にしてしまう。自分の大切な友達で仲間で、想い人なのだ。
けれども鬼柳は有無を言わせない表情で、なのはに自身のカードを預ける。その目は鬼気迫る表情だ。

「この街が、どうなっても……良いのかよ」

「……良くないよ」

「泣いてる、アイツを放って……おいても、良いのかよ」

「……良くないよ」

「じゃあ、行けよ……」

「イヤだよ！　鬼柳さんがこんなに酷いケガしてるのに、いけないよ！」

鬼柳の最後の言葉に、なのはは必死で抵抗する。
こんなに血を流していてはいけないことくらい、幼いなのはでも分かる。

そんな鬼柳を置いて、デュエルを続けられない。続けられるとは思えない。

一刻も早く病院に運びたい。だけれど、ここで中断してしまえばリインフォースはどうなるのか。

逃げ出したい。だけど、逃げ出したくない。激しいジレンマがなのはを襲い、いつの間にか涙を流させる。

人前で泣くなど、久しぶりのことだ。だけどここで本音を明かさなければ、きっと後悔してしまう。それだけはイヤだ。

「わたし、どうしたら良いの!?　鬼柳さんを放っておけない……！だけど、リインフォースさんも放っておけないよ！」

「……じゃあ、簡単だな……」

「……え？」

「リインフォースを助けて、俺も助けてくれよ……。頼むぜ、なのは……」

「鬼柳さん……」

頭を抱えて叫ぶなのはに、鬼柳が苦痛を堪えながらも笑みを浮かべる。

この状況を打破する唯一の方法。それはリインフォース。そして鬼柳の二人を助けること。

頭の隅で、この方法があることは理解していた。けれども、この方法を採ることを見送っていた自分が居る。

もしもデュエルの最中に鬼柳が死んでしまったら。もしもリインフ

ォースを救うことが出来なかったら。

自分はきっと、立ち直ることが出来ないだろう。

だけれども鬼柳は笑みを浮かべながら、なのはにカードを差し出してくる。

まるで、何も心配していないと言う様な笑みを浮かべて。

「チームサティスファクションのリーダーは、そう簡単に死なないからよ……」

ニッと、鬼柳は笑みを浮かべながら告げた。この時ばかりは、痛みを覚えていないのか。

なのははそんな鬼柳の笑みを見て、心の中で「ずるい」と呟く。そんな顔をされては、しない訳にいかないじゃないか。

それに鬼柳が頼ってくれているのだ。まだ未熟で、鬼柳よりも弱い自分に、鬼柳が頼ってくれている。

ならば期待に応えたいと思う。なにせ頼ってくれる相手はリーダーで、友達で、想い人なのだから。

いつも鬼柳が格好いいところを見せている。ならば今度は、自分が格好いいところを見せよう。

そして鬼柳にアピールするのだ。自分だってこんなに頑張っているぞ、と。自分だって強いんだぞ、と。

「じゃあ、鬼柳さん。一つだけ、約束して？」

「……約束？」

「うん。このデュエルが終わった後、私と遊園地に行こう。沢山遊んで、沢山笑って……沢山、満足しよう」

「……ハハッ、良いかもな。あぁ、約束だ」

「うん、約束」

ギュッと、鬼柳の小指となのはの小指が結ばれる。それは小さなお呪い。

だけどこの時ばかりは、他の何よりも得難い約束となるのだ。ようやくなのはの顔に笑みが戻る。

そして鬼柳から残る3枚の伏せカードをデュエルディスクに挿入。

これで伏せカードは5枚となった。

なのはは伏せられた5枚のカードに視線を落とす。残された5枚の伏せカード。これは鬼柳とフェイトの絆だ。

この5枚の伏せカードがある限り、自分は負けることは無いだろう。ならば自分は闘って見せる。そして勝つ。地縛神を打ち倒し、リインフォースを救って見せる。

だから――――

「約束、絶対だよ鬼柳さん！」

今は鬼柳に背を向ける。きっと鬼柳が約束を守ってくれると信じて。

※

「ククッ。これで残るシグナーは貴様一人だ！
貴様を倒し、この世を破壊と混沌にまみれた世界にして見せよう！」

前方を飛ぶ地縛神に追いついたなのは。視界の先では、地縛神が狂った様に笑っている。
どうやら自分は先ほどの二人よりも倒しやすいと考えられている様だ。ムカムカと胸の奥が苛立つ。

「だったらそれは、私を倒してからにしてよ！」

「良いだろう！　我のターン！」

地縛神手札1↓2

地縛神Ｓｐｃ３→４
なのはＳｐｃ４→５

「カードを二枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札２→０
場　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

なのは手札３→４

地縛神Ｓｐｃ４→５
なのはＳｐｃ５→６

「くっ――――！」

なのははドローしたカードを確認し、悔しそうな表情を浮かべる。
手札の中には魔法・罠とバランス良くある。だが、攻撃を決断させることはない。

それは一重に、地縛神からリインフォースを切り離す手段がないからだろう。
一体どうやって地縛神からリインフォースを切り離せば良いのか。
その手段が思い浮かばない限り、攻撃できない。

「私はこのまま、ターンエンド！」

なのは手札４
場　レッド・デーモンズ　伏せ×５（鬼柳、フェイトの継続）

「貴様のエンドフェイズ時、リバースカード≪縛られし神への祭壇≫を発動！
　このカードは自分のスタンバイフェイズ毎にフィールド上に守備表示で存在するモンスター一体に付き一つ、
　地縛神カウンターをこのカードに乗せる。そして地縛神カウンターが四つ乗ったこのカードを墓地に送ることで、
　自分のデッキから「地縛神」と名のついたモンスター一体を特殊召喚できる！」

縛られし神への祭壇
永続罠
自分のターンのスタンバイフェイズ毎に1度、フィールド上に表側守備表示で存在するモンスター1体につき1つ、
このカードに地縛神カウンターを置く。地縛神カウンターが４つ乗ったこのカードを墓地へ送る事で、
自分のデッキから「地縛神」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。

「そんな！」

「だが、貴様の場の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫は攻撃表示。
　≪縛られし神への祭壇≫に地縛神カウンターは乗らない。良かったなぁ？」

「――――～～っ」

「我のターン！」

地縛神手札０→１

地縛神ＳＰｃ５→６
なのはＳＰｃ６→７

「手札から≪Ｓｐ- シフトダウン≫を発動！
スピードカウンターを六つ取り除き、デッキからカードを二枚ドローする！」

地縛神手札１→２
地縛神ＳＰｃ６→０

「モンスターをセット！　カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札２→０
場　セットモンスター　伏せ×２　縛られし神への祭壇

「私のターン、ドロー！」

なのは手札４→５

地縛神ＳＰｃ０→１
なのはＳＰｃ７→８

「リバースカード≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動！

自分用スピードカウンターが二つ以上ある場合、発動します！
デッキからカードを二枚ドローし、手札を一枚捨てます！　私は≪リミット・リバース≫を捨てます」

なのは手札5→6

なかなか動かないこの状況。歯がゆさを覚えつつ、なのはは相手フィールドを見やる。
相手の場には、裏側でセットされたモンスターが一体。先ほど発動したカードの布石だろうか。

何はともあれ、残しておけば再び地縛神を復活させられてしまう。
それだけは阻止しなければならない。
なのははコクリと頷くと、自分の場に滞空しているレッド・デーモンズ・ドラゴンに視線を向け、指示を出した。

「バトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫でセットモンスターを攻撃！
クリムゾンッッ、ヘルフレァアアアアッッ！！」

「トラップ発動！　≪ローズ・ブリザード≫！
自分フィールド上のモンスターが攻撃対象になったとき、
そのモンスターの攻撃を無効にし、攻撃宣言をしたモンスターを守備表示にする！」

「くっ！　これじゃ地縛神カウンターが溜まっちゃう……！」

「ターンは終了か？」

「くっ、ターンエンド！」

「貴様のエンドフェイズ時、伏せカード≪砂漠の光≫を発動！　我の場のモンスターを表側守備表示にする！
　セットモンスターを反転！　さらにセットモンスターは≪デス・グレムリン≫！
　≪デス・グレムリン≫の効果により、墓地の≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫をデッキに戻させてもらう」

砂漠の光
通常罠
自分フィールド上に存在するモンスターを全て表側守備表示にする。

デス・グレムリン
星４／闇属性／爬虫類族／攻１６００／守１８００
リバース：自分の墓地のカード１枚を選択し、自分のデッキに加えてシャッフルする。

なのは手札６
場　レッド・デーモンズ　伏せ×４

「我のターン、ドロー！」

地縛神手札０→１

地縛神Ｓｐｃ１→２
なのはＳｐｃ８→９

「このターンのスタンバイフェイズ時、フィールドに存在する表側守備表示モンスターの数だけ、地縛神カウンターが溜まる」

地縛神カウンター０↓２

「我はカードを伏せて、ターンエンド！」

地縛神手札１↓０
場　デス・グレムリン　伏せ×１　縛られし神への祭壇

「私のターン、ドロー！」

なのは手札６↓７

地縛神Ｓｐｃ２↓３
なのはＳｐｃ９↓１０

「守備表示の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を攻撃表示に変更！
そしてバトル！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で≪デス・グレムリン≫を攻撃！
クリムゾンッ、ヘルフレアアアアアッッ！！」

「くっ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの拳に灼熱の炎が宿る。
そしてその炎を感情の赴くままに、相手モンスターへと叩き付けた。

相手の守備表示モンスターであるデス・グレムリンでは到底太刀打

ちできない攻撃力。
これでなんとか相手の場に守備表示でモンスターを残さずに済んだ。
後はどうやってリインフォースを救出するか。

「私はエンドフェイズ時、手札が6枚になる様に捨てます。
手札から≪マジシャンズ・サークル≫を捨てて、ターンエンド」

なのは手札6
場　レッド・デーモンズ　伏せ×4

「クックッ、エンドフェイズ時、リバースカード≪縛られし神への供物≫を発動。
ライフポイントを半分支払い、「縛られし神への祭壇」に地縛神カウンターを2つ乗せる」

地縛神ＬＰ３００→１５０

地縛神カウンター2→4

「！　不味い、カウンターが溜まった！」

「我のターン！」

地縛神手札０→１

地縛神Ｓｐｃ3→4
なのはＳｐｃ１０→１１

「我は場の≪縛られし神への祭壇≫を墓地に送り、デッキから≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫を特殊召喚！」

再び地縛神のフィールドに、地縛神ウィラコチャ・ラスカが特殊召喚される。
何度見ても慣れぬ独特の波動に、なのはは思わず眉を顰めた。不味い。このままでは負けてしまう。

「≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫の効果発動！
自身のバトルフェイズをスキップすることで、相手のライフを１にする！
ポーラスター・オベイッ！」

「きゃぁあああああっっ！！」

なのはＬＰ３９００→１

なのはＳｐｃ１１→９

地縛神ウィラコチャ・ラスカのモンスター効果により、なのはのライフポイントが残り僅か１となる。
そしてその際の衝撃の余波により、なのはは吹き飛ばされる。吹き飛ばされたなのはがぶつかったのは、紫色の炎の壁。

「あぁあああああっっ！！」

紫色の炎に身を焼かれ、悲痛な声を上げる。全身を焼かれるような、身を切る様な痛み。
だが、すぐに気を持ち直すと炎の壁から離脱。バリアジャケットが損傷したようだが、さほどダメージは無かった。

「くっ、う……！」

「フハハハハッ！　これで我の勝利は確実だ！
貴様は我に対して攻撃宣言をする事が出来ず、我は貴様に攻撃できる！
カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

地縛神手札０→１
場　ウィラコチャ・ラスカ　伏せ×１

苦痛に顔を歪めるなのはを見て、地縛神が愉快そうな笑い声を上げる。
事実、今の状態では勝てる見込みはない。地縛神とリインフォースを切り離さない限りは。

このまま負けてしまうのだろうか。なのはは容易に想像できる未来に、グッと波を噛み締める。
そんなことはイヤだ。自分は勝ちたい。リインフォースを救って、この街を救って、満足したい。

けれど、リインフォースを救う手立てが無いのだ。リインフォースの救出。それはこのデュエルにおける第一目標。

やはり自分の力ではリインフォースを助けられないのか。なのはの心に絶望が蝕み始め、心が絶望で侵される瞬間――。

「あったぁあああああっっ！！」

――――なにかを見つけたのか。えらく興奮しているユーノの声がデュエルロードに響いた。

※

「あったぁあああああっっ！！」

「う、うわぁ！」

「ユーノ！？」

つい先ほどまで、空中に浮かんだモニターを見つめていたユーノが、大声を上げた。
その様子にアルフやプレシア。はやてが驚いた表情を浮かべるが、

ユーノは気にせず空を駆る。

目指す場所は鬼柳がクラッシュをした場所。ようやく見つけたのだ。
リインフォースを救う手段を。
そのためには、赤き巫女のアザ――その中でも、心臓のアザを持つシグナーの力が必要なのだ。そして心臓のアザを持つシグナー。

そのシグナーは、鬼柳。彼の協力が無ければ、リインフォースを救う手段が無い。
一刻も早く鬼柳に協力を願い出なければ。でなければ次のターンに地縛神にターンが移り、なのはが負けてしまう。

「鬼柳！　起きて、鬼柳！」

「う……っ、ユーノ、か……？」

猛スピードで空を駆り、ようやく鬼柳がクラッシュした場所に到着する。
後ろからユーノの異変を悟ったプレシアやアルフが付いてくるが、ユーノはそれを気にしない。

「鬼柳！　なのはに力を貸してあげて！
心臓のアザを持つシグナーの力が必要なんだ！」

「なん、だと……？」

「君は赤き巫女の力を増幅させることが出来るんだ！

人体が血液を作り出す様に、鬼柳の持つ心臓のアザは赤き巫女の力を作り出すことが出来る！」

「っ！」

ユーノの見つけた赤き巫女についての伝承。それは、赤き巫女を支えるシグナーについてだ。
その中には心臓の他にも新たなシグナーの伝承があったのだが、生憎と解読が出来ずに分からず仕舞い。

だが、今はそんなことはどうでも良い。今この場で重要なのは、鬼柳の持つアザが赤き巫女において重要な役割を示すことだ。
赤き巫女のアザ。その中でも心臓のアザを持つシグナーは、赤き巫女の使う力を作り出すことが出来る。これは他のシグナーでは出来ない。

そして力を作り出し、その力を他のシグナーに分配することが出来るのだ。
それはまるで、心臓が全身に血液を送り出すかのように。全身に力を巡り渡らせるように。

「どうすれば、良い……？」

「思いっきり願うんだ！　心の底から赤き巫女の力が欲しいって！
そうすれば、アザが――――鬼柳の持つ心臓のアザが、応えてくれるはず！」

「願う、か。随分、楽じゃねぇか」

ユーノの言葉に、鬼柳は僅かに笑みを浮かべながらも立ち上がる。
全身からの出血で血を失い、貧血を起こしていると言うのに。鬼柳は立ち上がる。

そして自分が倒れていたデュエルロードを見つめながら、この場に居ない二人の女性のことを想う。
一人はなのは。自分の代わりに地縛神と現在、激しいデュエルを繰り広げている少女。

二人目はリインフォース。地縛神に身体を乗っ取られながらも、必死に生きたいと願う孤独な女性。
助けたい――と、鬼柳は心の底から想う。一人で泣いているリインフォースを。まだ、満足することを知らない彼女を。

「っ！　……コイツが、そうか」

リインフォースを助けたい。そう願うと、鬼柳の腕のアザが輝き始めた。
そして助けたいと願う力が強くなればなるほど、鬼柳の腕のアザの輝きが激しくなる。

間違いない。これが赤き巫女の使う力だろう。確証は無いが、理解できる。この力だ、と。
だが、まだ足りない。リインフォースを救うためには。なのはに渡すだけの力が、まだ足りない。

「赤き巫女……、俺はリインフォースを助けたい……
満足も出来ずに、泣いてる……アイツを助けたいんだ！」

輝きが増す。先ほどよりも、腕のアザの輝きが激しい。だが、まだだ。まだ足りない。

「そのためには、俺は何だってする。命すら賭けてやる……。
だから、赤き巫女！　アイツを助ける力を俺に――――貸しやがれえっ！」

溢れんばかりの輝きが、鬼柳の腕のアザから放たれた。
自らの身体に、溢れんばかりの力が満ちている。これだけあれば十分だ。

後は作った力を送るだけ。なのはに、フェイトに。
そしてこのデュエルの行く末を見守っているはやてに。

鬼柳が脳裏に三人の少女を想い浮かべると、腕の輝きが徐々に薄れて行く。
どうやら無事、作り出した力が三人の少女の元へ送られている様だ。

それにホッと安堵の息を漏らすと、鬼柳はその場で意識を失う。
さすがに魔力が枯渇寸前で、体力を限界まで消費して赤き巫女の力を作り出したのだ。

倒れるなと言う方が無理だろう。だが、鬼柳が意識を失う寸前。

「頼んだぜ、なのは」と口が動いた様に見えた。

※

赤き巫女を形成する四つのアザ。

身体を構成するアザはそのアザの通り、赤き巫女の構成の元となる。
翼を構成するアザは悪しきモノからその身を守り、希望を与える象徴となる。
弓矢を構成するアザは赤き巫女の武器となる。邪悪を封じ、邪悪を切り裂く武器となる。

そして残るは心臓。赤き巫女の力を生み出し。他のシグナーへと力を渡す赤き巫女の核となる存在。
その心臓から力が渡され、デュエルを観戦していたはやてのアザが。
クラッシュし、デュエルを中断していたフェイトのアザが。

そして地縛神とにらみ合いを続けるなのはのアザが、先ほどの倍以上の輝きを発する――！
溢れださんばかりの力の奔流。先ほどの鬼柳の雄叫びを聞き、なのはは理解した。これが鬼柳から受け取った力だと。

「たしかに受け取ったよ、鬼柳さん。
そして――――フェイトちゃんとはやてちゃんの力を！」

眩いばかりの輝きを放ち、なのはの腕にあるアザが増えて行く。翼、弓矢、そして心臓のアザが。
送られてくる仲間たちの想いが、なのはに勇気をくれる。たしかな力をくれて、希望を彼女に渡している。

不思議だ。もう怖くない。三人の仲間たちの力を受け取り、なのはは頬を緩ませる。
きっと、全てが上手くいく。リインフォースを地縛神から切り離し、地縛神だけを封印することが出来る、と。

「行こう、鬼柳さん。フェイトちゃん、はやてちゃん」

そしてなのはの腕に装着されているデュエルディスクの、デッキトップが白い光を放つ。
それはまるで、希望の光。暖かな、優しい光が放たれている。きっと大丈夫。三人の想いで、リインフォースを助けられる。

「私のターン！」

なのは手札６→７

地縛神Ｓｐｃ４→５

なのはＳｐｃ９→１０

なのはは、光り輝くデッキトップからカードを一枚ドローする。
そしてドローしたカードを確認。そこに描かれたモンスターを見て、笑みを浮かべる。

これが皆から託された希望の力。
きっとこの力があれば、リインフォースを救うことが出来る。

「鬼柳さんの伏せカード≪リビングデッドの呼び声≫を発動！
墓地からフェイトちゃんの≪チューニング・サポーター≫を特殊召喚します！」

まずは手始めと言わんばかりに、なのはは墓地からチューニング・サポーターを蘇生する。
このデュエルで最後のバトル。それを勝利するためには、チューニング・サポーターの力が必要なのだ。

これこそが勝利への方程式。一つでもカードの操作を怠れば、希望は自分の手から零れおちて行く。

「伏せカード≪砂塵の大竜巻≫を発動！
≪リビングデッドの呼び声≫を破壊させてもらう！」

「さらにフェイトちゃんのリバースカード≪エンジェル・リフト≫を発動！

墓地より≪チューニング・サポーター≫を特殊召喚します！」

「バカなッ！？」

「さらに手札からチューナーモンスター≪救世竜　セイヴァー・ドラゴン≫を召喚！」

どうやら地縛神もまた、チューニング・サポーターを警戒している様だ。

だが、何度も地縛神を有利にさせたりなどしない。皆から繋いだ絆で、勝利を分かち合う。

そして地縛神の妨害を退け、なのはが場にモンスターを召喚する。

そのモンスターとは以前に一度、フェイトがプレシアを救うのに用いたカード。

皆の希望を一つに合わせた希望の竜。その名は、救世竜セイヴァー・ドラゴン。

なのはのフィールドに現れたセイヴァー・ドラゴンに、地縛神は驚愕の表情を浮かべている。

「バカな……っ！

≪セイヴァー・スター・ドラゴン≫だけでは、無かったのか！？」

「レベル８≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫とレベル１≪チューニング・サポーター≫に

レベル１チューナーモンスター≪救世竜　セイヴァー・ドラゴン≫をチューニング！！」

地縛神の浮かべる驚愕を余所に、なのははセイヴァー・ドラゴンをシンクロ素材とする。
セイヴァー・ドラゴンが空へと飛び立ち、その中をレッド・デーモンズ・ドラゴン。チューニング・サポーターが並ぶ。

「研磨されし孤高の光！　真の覇者となりて大地を照らす！
光り輝けぇえええええっっ！」

そしてセイヴァー・ドラゴンの中でレッド・デーモンズとチューニング・サポーターはそれぞれ分解される。
合計九つの光り輝く星が出現し、一列に整列。その後、極太の閃光が一列に並んだ光の球を打ち抜いた。

「シンクロ召喚！　希望の光、救世の力！
≪セイヴァー・デモン・ドラゴン≫！」

極太の先攻から現れたのは、神々しい光を撒き散らしながら出現する一体のドラゴン。
何処となくレッド・デーモンズ・ドラゴンの名残を残しており、そのモンスターがレッド・デーモンズの進化系だと分かる。

眩いばかりの輝きを放つセイヴァー・デモン・ドラゴンは上空から地縛神ウィラコチャ・ラスカを見据える。
だが、その様子はまさに王者が敵対者を見下ろすかのような存在感

を示している。負ける雰囲気は微塵も感じられない。

「≪セイヴァー・デモン・ドラゴン≫の効果発動！
１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手モンスターの効果を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分、このカードの攻撃力を上昇させる！
パワー・ゲインッ！」

「バカな……！！」

セイヴァー・デモンＡＴＫ４０００→４００１

セイヴァー・デモン・ドラゴン
星１０／闇属性／ドラゴン族／攻４０００／守３０００
「救世竜　セイヴァー・ドラゴン」＋「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
＋チューナー以外のモンスター１体
このカードはカードの効果では破壊されない。
このカードが攻撃した場合、ダメージ計算後にフィールド上に
守備表示で存在するモンスターを全て破壊する。
１ターンに１度、エンドフェイズ時まで相手の表側表示モンスター
１体の効果を無効にし、
そのモンスターの攻撃力分このカードの攻撃力をアップする事ができる。
エンドフェイズ時にこのカードをエクストラデッキに戻し、
自分の墓地に存在する「レッド・デーモンズ・ドラゴン」１体を特殊召喚する。

「ぐぁあああああっっ！！」

地縛神の場に存在する地縛神ウィラコチャ・ラスカ。
そのモンスターの効果が無効にされると同時、プレイヤーである地縛神が悲鳴を上げる。

ハッと我に返り、なのはが地縛神に視線を向けてみれば。
そこにはリインフォースの身体から抜けて行く黒い靄の様なものが見える。

瞬間的に、それがリインフォースを乗っ取っていた地縛神だとなのはは理解した。
そして吸収されていく先を見上げる。その先には、効果を無効にされ、ただのバニラと化した地縛神の姿が。

「ありがとう、≪セイヴァー・デモン・ドラゴン≫……。
……さぁ、終わらせよう！　長い時を渡って繰り返された悲劇を！」

『ヤメロォオオオオオッッ！！』

地縛神ウィラコチャ・ラスカと一体化した地縛神。
地縛神はまるで、セイヴァー・デモン・ドラゴンが恐ろしいかのように怯えた様子を見せる。

だが、ここで立ち止まってはいけない。全てを終わらせなければならないのだから。

はやてを長い間苦しめた闇の書の悲劇を。一人哀しく泣いていた夜天の魔導書の悲劇を。

そして、五千年前から繰り返されてきたシグナーとダークシグナーの因縁を、今ここで終わらせなければならない！

「≪セイヴァー・デモン・ドラゴン≫で≪地縛神　Ｗｉｒａｑｏｃｈａ　Ｒａｓｃａ≫を攻撃！

これが私の――――私たちの、全力ッ、全開ッ！！」

腕のアザを通して流れ込んでくる鬼柳、フェイト、はやての想い。それらを乗せて、なのはは地縛神に向けて打ちこむ。最高で最強の一撃を。

「スターライト・ブレイカァアアアアッッ！！」

セイヴァー・デモン・ドラゴンが集めた魔力の光。それらは極太の光の奔流となって、地縛神に放たれた。

地縛神ウィラコチャ・ラスカは咄嗟に応戦しようとするが、圧倒的な攻撃力の前には無力である。

『ガァアアアアッッ！！』

そして、地縛神にセイヴァー・デモン・ドラゴンの攻撃が直撃。

星の光に身を焼かれ、地縛神は奇怪な叫び声をあげて、その身を消滅させる。

その際に、身体を乗っ取っていたリインフォース。
並びに、ダークシグナーの契約をしていたギル・グレアムの腕から自身の証である「巨人」のアザを消して。

地縛神ＬＰ１５０→０

十二話　「救世の光　セイヴァー・デモン・ドラゴン　後編」（後書き）

次回予告

ようやく終えた地縛神との闘い。束の間の休息を、なのはたちは楽しむ。
そんななのはたちに突きつけられた別れ。罪を償うために、はやてたちは管理局へと身を預ける。

しかし、絆はそう簡単に壊れるものではない。
再び再会し、チームサティスファクションを結成する鬼柳達。

彼らは何時の日か行われるであろうＤＭミッドチルダ杯に向けて闘志を燃やす。
次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

「輝く笑顔」

ライディング・デュエル、アクセラレーション！

エピローグ　「輝く笑顔」（前書き）

今回でA'ｓ編は終了します。
次回からは空白期です。空白期は結構長いですよ。

エピローグ　「輝く笑顔」

～？？？　某所～

『お兄さん、だれ……？』

目の前に映るのは、幼い少女の姿。
栗色の髪をツインテールに結い、胡乱げな視線を鬼柳に向けている。
彼女は誰だっただろう。疑問に思うが、すぐに彼女だと理解することが出来た。
彼女は幼い頃、まだ出会ったばかりの頃のなのはだ。まだ家族が離れ離れで、寂しい時間を過ごしていたときの。

じゃあ、これは昔の記憶なのだろうか。鬼柳が内心で考え込むが、場面は移り変わっていく。
鬼柳がなのはにデュエルを挑み、切り札でありエースであるインフェルニティ・デス・ドラゴンでデュエルに勝利する。

『うそ……！』

『俺の、勝ちだな』

『――――～～っ！』

鬼柳の言葉に、なのはは踵を返して駈け出す。何処へ行くのかは、当時の鬼柳には分からなかった。
だが、今なら分かる。あの時のなのはは自宅へ帰り、自分に勝つためにデッキを改造しに戻ったのだ。

そして鬼柳がなのはと出会った公園で一夜を過ごし、夜も明けた翌日の昼ごろ。
空腹の鬼柳の元へ、デッキを改造し終えたなのはが現れたのだった。
そして、そのままリベンジマッチ。

『これで終わりだ。
≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫でダイレクトアタック！』

『きゃぁああっ！』

なのはＬＰ１４００→０

だが、結果は以前と同じだった。再び敗北し、なのはは腰掛けていたベンチから腰を上げる。
そしてそのまま、昨日と同じように公園から駈け出して行く。また、デッキを改造しに戻るのだろう。

そんななのはの後ろ姿を、鬼柳はジッと見据える。はたして彼女は、笑ってくれるだろうか。
あんな寂しい顔など。現状に満足できていない顔など見たくは無い。
見たいのはただ、満足そうに笑った顔だけ。

そしてまたも翌日。公園のベンチで空腹をやり過ごしていた鬼柳の

元へ、なのはが訪れる。
そのまま以前に二度敗北したリベンジマッチを行う。もはやこれは、恒例行事となりつつあった。

だが、この日だけはいつものデュエルとは違った。
デュエルの最中、一際大きなお腹の鳴る音が公園に響き渡る。

『……うにゃ？』

『……俺の腹の音だ。気にするな』

『……お兄さん、ご飯食べてないの？』

『金を持ってないからな』

『……』

短い問答の後、なのはは急にデュエルを中断し、またもや公園を駈け出して行く。
デッキも持たずに、一体何処へ行くのだろう。中断されたデュエルに、鬼柳はポカンとする。

そしてその十分後。手に不格好な形をしたおにぎりを持ったなのはが公園に戻ってくる。
形が歪なそのおにぎり。ラップに包まったそれを、なのはは「食え」と言わんばかりの表情で差し出す。

咄嗟に鬼柳は返そうとしたのだが、なのはも負けない。グッと自分

が握ったのであろうおにぎりを差し出してくる。
しばし押し問答をしていた鬼柳だったが、なのはの負けず嫌いなその心に自らが折れ。彼女の手からおにぎりを受け取った。

ラップを外し、パクリと一口頬張ってみる。少し塩を掛け過ぎたのか。少しだけしょっぱかった。
だが、鬼柳は文句も言わずに食べて行く。この少女が自分のために、握ってくれたおにぎり。残す訳にいかない。

そして鬼柳が全て食べ終えるのを確認すると、なのはは緊張していた顔を緩めた。
どうやら自分の料理が上手に出来ていたか心配だったらしい。そんな彼女の様子に笑みが零れる。

『さ、お腹も膨れたみたいだし、続きしよ』

『……あぁ、そうだな』

なのはの言葉に鬼柳は頷き、中断していたデュエルを再開する。
先ほど彼女が浮かべた何処か満足そうな笑顔。それを見て、鬼柳は確信していた。

きっと、この少女は満足を知ることが出来る、と。先ほど浮かべた笑顔で確信できた。
ならば自分がやるべきことはただ一つ。彼女とデュエルを続け、彼女に満足を教えることだけ。

そして時間は流れ、なのはとのデュエルが十回を超えるか超えない

かほど行った日。
なのははデュエルに敗北しながらも、ようやく満足そうな笑顔を浮かべてくれたのだった。

※

「う……」

閉じていた瞼がゆっくりと持ちあがり、視界がぼんやりながらも開ける。
まず鬼柳の視界に飛び込んできたのは、病院の天井の様な真っ白な天井だった。

「此処は……？」

自分が今居る場所が把握できず、首を傾げる鬼柳。身体を起こそうと、ベッドに手を掛ける。
だが、不意に柔らかな感触が鬼柳の手に触れた。一体何だ？　疑問に思い、視線を何かが触れた方へと向ける。

「なのは……、それにフェイトも」

するとそこには、ベッドの上ですやすやと穏やかな寝息を立てている二人の少女の姿があった。
どちらも頬や額に絆創膏を貼ってはいるが、大きな怪我を負った様子は見られない。

そして彼女たちの怪我を確認すると同時、鬼柳の身体に鈍い痛みが走る。
咄嗟に傷跡――肩の辺りに手を置き、何が起こったのかを思い出す。

「そうだ。俺は……地縛神とデュエルして……」

思い出すのは、右腕に刻まれたアザが眩いばかりの光を放ち、自らが作り出した力を他の三人の少女に送り出した場面。
三人の少女に力を送ったと思った瞬間、鬼柳は唐突に意識を失ったのだ。それからの出来事を、鬼柳は何一つとして知らない。

だが、一つだけ理解できることはある。なのはは地縛神とのデュエルに勝利することが出来たのだ。
ここで安らかな寝顔を浮かべているのが、その証拠だろう。頑張ったな。そう思いながら、なのはの髪をソッと撫でる。

「ジャマするよ～……って、あぁあああっっ！」

と、しばしなのはの髪の感触を楽しんでいると。不意に部屋の扉が開いた。
ちなみに扉が自動で開いたことから、ここは地球ではないらしい。
地球ならば手動で開くはず。

そして扉の先に居たのは、腕の中に幾つか缶ジュースを持ったアルフだった。
彼女は部屋の中を見て、ベッドから起き上がっている鬼柳を見て、大声を上げる。

「アルフ」

「き、鬼柳！　アンタ、目が覚めたのかい！？」

「あ、あぁ……」

突然のアルフの奇行に驚きながらも、鬼柳は今先ほど目が覚めたことをアルフに告げた。
するとアルフはホッと、心の底から安堵した様なため息を吐く。一体、どうしたと言うのだろう。

「一体どうした、じゃないよ！
三日も寝たきりになってて、心配しないヤツがいるかい！？」

「！　み、三日も寝たきりだったのか？」

「そうだよ！　おかげでなのはやフェイトが寝不足なんだからね！」

アルフの言葉を聞き、両隣で眠っている二人の少女の寝顔を確認してみる。
すると二人の少女の目元には、薄っすらと隈が出来ていた。本当に寝不足だったらしい。

自分のためにそんなことをするなんて――と、鬼柳は呆れた様な表情で二人の髪を撫でる。
だが、きっと逆の立場だったら二人と同じだっただろうなと容易に予想がついた。

「アルフ。地縛神は、どうなった？」

「地縛神かい？　あぁ、言うよりも見た方が早いかもね」

「？」

何処か優しい気持ちになりながら、鬼柳はアルフに倒したはずの地縛神について訊ねる。
地縛神の事について訊ねるのは、正直怖い。もしも、リインフォースが消滅してしまっていたら。

「ちょっと待っててくれよ」

と、心の葛藤を抱いている鬼柳を余所に、缶ジュースを置いてアルフは病室から出て行く。
一体何処へ行くのか。訊ねようとした鬼柳の手は、部屋から出て行くアルフの背中を引き止めることが出来なかった。

そしてアルフが戻ってくるまで、何をして時間を潰そうか。悩んでいた鬼柳の元へ、新たな足音が聞こえる。
その足音はカツ、コツと規則正しい音を立てている。恐らくこの足音の主は、几帳面な性格をしているのだろう。

「無事に、目が覚めたみたいだな」

「クロノ」

新たに病室の扉を潜ったのは、時空管理局の若き執務官――クロノ・ハラオウンだった。
彼はベッドの上に起き上がっている鬼柳の様子を確認すると、ホッと安堵の息を漏らした。

そして先ほどまでアルフが腰掛けていたイスに腰掛ける。
彼の目は鬼柳。そして、彼の両隣で眠っている二人の少女に注がれていた。

「今回の事件――闇の書事件と命名されることになったが、
この件で生贄にされた人々の魂は、無事に肉体に戻ったことを確認した」

「！　そうか、良かった……」

「まぁ、確かに良かったよ」

「？　なんだか不満がありそうだな」

そしてクロノは沈黙を破ると、今回の事件――闇の書事件についてのあらましを説明する。
彼の説明を聞く限りでは、地縛神の生贄とされた人々は無事、自分の身体へと戻ることが出来た様だ。

鬼柳はクロノのその報告に、嬉しそうに頬を緩ませる。これで少なくとも、懸念事項の一つは消えたのだ。
しかし、鬼柳の笑顔に反してクロノの表情は渋い。一体どうしたと言うのか。鬼柳はクロノへ理由を訊ねる。

「いや、ただ事後処理が面倒だっただけだ。
今回の事件で一体、どれほどの人間の記憶を操作することになったのか……」

「記憶操作って……」

「まさか、皆があの事件の記憶を持っていると思ったら大間違いだぞ」

クロノの説明によると、どうやら記憶操作を施したのは魔法に縁も

ゆかりもない一般人だけの様だ。
理由としては、魔法と言う非科学的なものを公表しても、パニックになるだけだと艦長であるリンディが決定したらしい。

たしかにあれほど強力な結界を張ることやモンスターの攻撃を実体化させることが可能としれば、パニックは必至だ。
その結果、アースラに常駐していた魔導師総出で一般人の記憶操作に走ったらしい。只でさえ少ない人員をフルに使い、クロノは疲労困憊だ。

「この世界の上層部もこちらの案を支持してくれたからな。
ただ、いくらパニックを起こさないためと言っても、簡単に記憶を操作するのはイヤな気持ちだったよ」

「……そうか」

クロノが疲れた様なため息を吐く。鬼柳はそんなクロノの様子を見て、何処か羨ましさを覚えた。
もしもネオ・童実野シティにクロノの様な捜査官がいたら。今のセキュリティに、それほど悪感情を抱かなかったのでは。鬼柳はそう思う。

「それで今回の容疑者――ギル・グレアム提督についてだが――」

「きりゅーう！　連れて来たよぉ～！」

「こ、こらアルフ！」

そして今回の事件――闇の書事件の容疑者についての説明が入ろうとしたとき。
唐突に、鬼柳の病室の扉が蹴り破られた。ドカドカと無遠慮に、アルフが押し入ってくる。

と、そんなアルフの声に続く形で、聞き慣れぬ女性の声が鬼柳の耳に届いた。
はて。今のは一体、誰の声だっただろう。以前に何度か聞いた様な声だったが。

疑問に思い、鬼柳は視線を声が聞こえた方へと向ける。するとそこには、一人の女性の姿が。
腰まで届く銀の髪。血の様に真っ赤なその瞳は、今は慌てた様な色を浮かべている。彼女は――。

「アルフ、ソイツは……」

「リインフォースに決まってるじゃないか！」

「！！」

アルフが告げた名前を聞き、鬼柳の顔は強張った。そしてベッドについていた手に力を込める。
そのまま勢いでベッドから腰を上げると、鬼柳は慌ててアルフに連れられたリインフォースの元へ駆け寄った。

後ろの方では鬼柳が飛び起きた反動でか。なのはとフェイトが目を覚ましている。
だが、今回ばかりは後回しだ。鈍い痛みを訴える身体を無視し、鬼柳はリインフォースへ駆け寄る。

「……あ」

「リイン、フォース……」

「鬼柳……京介、だな」

リインフォースはすぐ傍まで駆け寄ってきた鬼柳の姿に、頬を僅かに赤らめながら答えた。
その様子はまるで照れている様。一体何に照れているのか。理由は分からないが、今は確かめることがある。

「っ！？　な、何をする！？」

唐突に、鬼柳がリインフォースの頬に手を伸ばした。仄かな暖かさが指先に広がる。
この暖かさは、肉体を持った者のみが持つことのできる暖かさだ。間違いない。リインフォースは確かに、此処に居る。

リインフォースは突然鬼柳に頬を触れられ動揺しているが、今の鬼柳に関係のないことだった。
居てくれた。ダークシグナーの宿命ともいえる敗北による消滅。そ

れが成されなかった。思わず目頭が熱くなる。

「暖けぇ……、嘘じゃ、ない……、リインフォースは、居る……！」

「鬼柳……」

頬を触れていた手はやがて下りて行き、リインフォースの肩を掴む。
そこには確かな肉体を持った彼女。
救えた。自分は、ダークシグナーとなった者を救うことが出来た。
今まで追いかけてきたその目標を達成できた。

ようやくこれで、遊星に救われた命を有効に使うことが出来た。これで少しだけ、アイツらに対して胸を張れる。
それに鬼柳は満足感を覚え。そして、戸惑いながらも笑顔を浮かべてくれるリインフォースが居ることを、堪らなく嬉しく思う。

「うぅ～……鬼柳さん、リインフォースさんと良い雰囲気なの……」

「むぅ～……、だけど、今は割って入って良い雰囲気じゃないし……」

そして鬼柳がリインフォースの無事を確認し、密かに涙を流していると。
背後では二人の少女が鬼柳とリインフォースの様子を見て、プクリと頬を膨らませていた。

なんだか良い雰囲気な二人。思わず割って入りたい。だが、部屋の中に存在する空気がそれを邪魔している。
それは鬼柳が、リインフォースの無事を心の底から喜んでいると理解しているからだろう。どうすることも出来ず、二人は頬を膨らませる。

「う、うむ……。鬼柳よ、喜んでくれるのは嬉しいが、そろそろ離してもらわなくては、な……」

一方のリインフォースと言えば。自分に縋りついて泣いている鬼柳の様子に戸惑いながらも、離れる様に告げる。
どうやらアルフやクロノ。はたまたなのはやフェイトに見られていることに恥ずかしがっているらしい。頬が赤く染まっている。

だが、何度も鬼柳の肩に手を置くたび、どうしたら良いのか分からず再び手を離してしまう。
このままでは恥ずかしい。だけれど、こうして無事を喜んでくれる人を、そう簡単に離したくない。ジレンマが生まれる。

結局、リインフォースが鬼柳から解放されたのは、鬼柳の病室にプレシアやはやてが乗り込んでくるまで続くのだった。

※

「……そうか。はやてはそれで――良いのか？」

ようやく落ち着いた鬼柳の病室。
そこで鬼柳は、はやてのこれからについての説明を受けていた。

それと言うのも、はやてには今回の事件で被害者であると同時、加害者としても扱われている。
理由としては守護騎士たちによる決闘者、及び魔導師狩りによって他人を傷つけたことによる傷害の件だ。

クロノはそれらを全て消えてしまった地縛神に罪を被せることも可能だと告げたのだが、はやてはそれを拒んだのだ。

「うん。たしかに地縛神に全ての罪を被せたら、私はまた暮らせるようになる。
そやけど、それじゃあ守護騎士たちが傷つけた人たちに対して申し訳あらへん。ちゃんと罪は償わなあかん」

「……そうか。なら、俺は何も言わねーよ」

「ありがとな、鬼柳兄ちゃん」

はやてはあえて、罪を償うことを選んだ。たしかに地縛神に罪を被

せ、普段の日常に戻るのも悪くは無い。
だが、自分の家族のせいで傷ついた人たちがいる。悲しんだ人たちがいる。それを思うと、普通に暮らせるとは思えない。

だからこそ、はやては管理局で裁かれる。だが、そう重い物ではないとはクロノの談だ。
どうやら今回の件、はやてよりも裁かれるべき人物がいるらしい。
その人物のせいで、はやての刑は軽くなるそうだ。

「グレアム提督には、実刑判決が出ると予想している。
恐らく五年以上、彼は表の世界に出て来れないだろう」

「そうか……」

「仕方ないさ。
古の神を使役し、世界を一つ滅ぼそうとしたんだから」

クロノは努めて明るく振る舞っているが、内心は複雑なものを感じている様だ。
それがなにかは鬼柳は分からない。しかし、あえて踏み込むと言うことはしなかった。

人は誰しも、触れられたくない過去を持っている。それは鬼柳とて同じ。
だからこそ、軽々しく他人の過去に踏み入ろうとは思わない。そしてクロノは腰を上げる。

「さぁ、行こうか。君たちを海鳴市へ送らなくちゃ」

「？　はやても良いのか？」

クロノの後を追う様に、鬼柳も腰を上げる。彼の視線は、クロノの隣のはやてに向けられている。

どうやらはやても、海鳴市に帰れるらしい。だが、それでは矛盾してしまう。はやては管理局へ行くのではないのか？

「あぁ。裁判で何度かこっちに来てもらうことになるけど、実刑を受けるにはまだ早いだろうからな。

少なくとも、この世界での義務教育が済むまではこちらの世界に留まれるはずだ」

「なんだい。そうならそうと言ってくれればよかったのに！」

「アルフ、貴方はその話をしているときに眠っていたでしょう？」

「うぐっ……」

どうやらクロノが、無理をしてくれた様だ。刑を受けるのを遅くさせると言っている。

その言葉に、鬼柳は思わず押し黙る。そう言えばこちらの世界では、義務教育と言うものがあるのだった。

それを終えるまで、なのはやはやては学校に通わなくてはならない。

それはこの世界におけるルールなのだから。

後ろの方でプレシアやアルフが言い争っているが、大したことではないだろう。重ね重ね、クロノに対して申し訳なくなる。

しかし、クロノは気にしていない様な表情で足を進めた。そう。それは気にするべき事ではない。

本当に気にするべきことは、はやてについてのこれからだろう。

改悪され、失われたと思われていた夜天の魔導書。それが再び改変され、本物の夜天の魔導書となったのだ。

それを手に入れようと、管理局の上層部も動き出すかもしれない。

勧誘などは日常茶飯事だ。

だが、どうするかを決めるのはあくまではやての意思である。そこに他人が介入する場所は無い。

やるべきことは一杯だ。クロノは心の中でそう思うと、チラリと後ろを振り返る。

だが、誰一人として犠牲になることなく闇の書は消え去ったのだ。

これは誇るべきだろう。

そして彼女たちに苦労を強いてしまった代わりに、自分が彼女を護るのだ。クロノはそう気合を入れると、拳をグッと握り込んだ。

※

「――――良い天気だな」

「あぁ、本当に」

海が見える公園。そこの手すりに身を預け、鬼柳が隣に立つリインフォースに声を掛ける。

彼女も鬼柳と同様に、公園から眼下に広がる海に目を奪われていた。

白い雪と青い海のコントラスト。

鬼柳は眼下に広がる海に目を奪われているリインフォースから視線を外すと、チラ、と後ろを振り返る。

するとそこでは、夜天の魔導書から守護騎士たちを召喚しようとしているはやてたちの姿がある。

どうやら地球に残るに辺り、守護騎士たちを復活させたいとはやてがクロノに頼み込んだ様だ。

渋々と言った様子だったが、クロノはそれを了承。一般人は立ち入れない結界を張り、今は守護騎士を召喚している。

「お前の願い――確かに、叶えたぜ」

「……ありがとう」

「気にするな。はやてにも頼まれてたことだしよ」

「ふふ」

鬼柳の言葉に、リインフォースは嬉しそうに笑みを浮かべる。
その様子に、鬼柳は照れた様に頬を赤らめた。こうして誰かに感謝されることになれていない。

何処かむず痒い思いを覚えながらも、鬼柳は視線をリインフォースへと向ける。
すると、今まで海を見つめていたリインフォースの視線が鬼柳を捉えた。瞬間、二人は無言になる。

「……なぁ、リインフォース」

「な、なんだ？」

「お前、満足ってしたことがあるか？」

しばし続いた沈黙を、破ったのは鬼柳だった。彼は視線をリインフォースに固定したまま、彼女に訊ねる。
自分はこれまで、沢山満足してきた。チームサティスファクションを率いて、サテライト制覇。

そしてなのは、フェイト、はやてに満足を教え、因縁の相手である地縛神を封じることに成功した。
これほど、満足感を覚えたことはないだろう。だが、リインフォースはどうだ。満足できているのだろうか。

「多分、無いな。今までの私は、一人で泣いているばかりだったから」

「そうか。ならよ、満足する方法を教えてやる」

「満足する方法……？」

「あぁ。満足すれば、心の奥からエネルギーが湧いてくるんだ。身体中がムズムズして、思いっきり吠えだしたい様な、そんな感覚を覚える」

リインフォースの告げた、満足したことのないとの言葉に、鬼柳は身ぶり手ぶりで説明する。
身体中を駆け巡る様な、あの満足感。一度味わえば、きっと病みつきになるに違いない。

身ぶり手ぶりで説明する鬼柳の様子にリインフォースは驚いていたが、クスリと笑みを浮かべると「そうか」と応えた。
そしてチラ、と横目で鬼柳を伺う。どうやら言外に、鬼柳に先を促している様だ。鬼柳もまた笑みを浮かべ、リインフォースに説明する。

「簡単だ。笑えば良い」

「わら、う……？　そんな方法で良いのか？」

「あぁ。人は楽しい時、嬉しい時。
そして、満足したときに笑うんだ」

「だが、私は笑っても満足は……」

リインフォースが、しょんぼりと項垂れる。ただ笑っただけで、満足出来るとは思えない様だ。

だが、鬼柳には秘策がある。しょんぼりと肩を落としているリインフォースの肩に手を置き、ある方向を指差す。

その方向とは――――

「じゃあ、アレを見ても満足できないのか？」

「え？　あ――――」

鬼柳が指差した場所。それを見て、リインフォースの瞳が大きく見開かれた。

その場所には、なのはやフェイト。はやてにプレシア、アルフの姿がある。

そして他にも、召喚に成功したのだろう。はやてに抱き付いているヴィータやシャマル。

シグナムやザフィーラの姿があった。そして鬼柳が指をさすと同時、彼らは皆、こちらに視線を向ける。

「おぉ～い。リインフォース！　皆でお祝いしよー！」

「リインフォースさーん！」

「リインフォース！」

「リインフォース」

「リインフォース、行きなよ」

「くぉらリインフォース！
はやてが読んでるんだ！　早く来いよな！」

「リインフォースさん」

「リインフォース」

「リインフォース」

はやて。なのは。フェイト。プレシア。アルフ。ヴィータ。シャマル。ザフィーラ。シグナム。
この場に集まった皆が、リインフォースの名前を呼んでいる。はやてが手を差し出し、他の皆も手を差し出す。

その様子に、リインフォースの瞳が揺れた。皆から差し出された手。
はたしてそれを、受け取っても良いのだろうか。
だが、疑問に思っていると唐突に背中を誰かに押される。見るまでもない。押した犯人は鬼柳だ。思わず抗議の視線を向ける。

「行くぞ、リインフォース。皆お前のことを待ってるんだ」

「鬼柳……」

「案外、良いもんだろ？　生きてるってのもよ」

「……あぁ、そうだな」

思わず、リインフォースの顔から笑顔が零れる。今までの何処か、遠慮した笑みではない。
皆から新たに貰った名前を呼ばれ、嬉しそうに笑顔を浮かべる彼女。
その様子はまさに、満足している。

リインフォースは鬼柳から背を向け、自分のことを呼んでくれている皆の元へ駈け出した。
なるほど。たしかに鬼柳の言っていた通り、笑顔を浮かべると満足出来る。満足出来るから笑顔を浮かべられるのだから。

心の奥底から湧き上がってくる、この感情。この感情を得るために、鬼柳は頑張っていたのか。

「――――悪く、ないな」

「なにか言ったか？」

「いいや、何も言ってはいないぞ」

「？　そうか？」

「あぁ。強いて一つ言うのなら、それは――――」

皆の元へ駈け出して行くリインフォースの後を、鬼柳が追いかける。
彼は先ほど、リインフォースが小さく呟いた言葉を気にしているらしい。だが、関係ない。

自分は鬼柳に一つだけ言うことがある。
その言葉とは――――

「私は、満足したぞ」

花の咲く様な笑顔で、リインフォースは鬼柳にそう告げるのだった。

エピローグ「輝く笑顔」（後書き）

次回予告

鬼柳はなのはとの約束を果たすため、遊園地に訪れる。
なのははうきうき恋人気分。しかしそれを面白く思わない二人の少女が。

あの手この手でなのはを鬼柳から引き離そうと二人の少女は画策する。
果たしてなのはは、無事鬼柳と楽しい思い出を作ることが出来るのか。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「遊園地での攻防！」

ライディング・デュエル、アクセラレーション！

一話　「遊園地での攻防！」（前書き）

今回からはちょこちょこコメディが入る予定です。
まさしく今回はコメディ回。タイトルに偽りありかもです。

一話　「遊園地での攻防！」

～海鳴市　高町家～

「♪～～♪～♪」

ふんふんと鼻歌を歌いながら、目の前のランチボックスにお弁当を詰めて行く。
隣では微笑ましそうな笑みを浮かべる母親がおり、味に関しての心配はしていない。

そして最後のおかずをランチボックスに詰め終えると、少女――なのはは笑みを浮かべた。
今日のお弁当は会心の出来だ。もしかしたら、母親である桃子に勝るとも劣らないかもしれない。

「うん、良い感じね」

「うん！」

「さ、早く着替えてらっしゃい。鬼柳さん、もうすぐ来るわよ」

「にゃ！　そうだった！」

桃子のその言葉に、なのははドタバタと足音を響かせながら、自室

へと駈け出す。
娘の微笑ましい行動に桃子は自身の頬を緩めると、キッチンに置いてあるイスに腰掛けた。

今日は以前――昨年の十二月二十四日に鬼柳となのはが約束していたお出かけの日。
この日を待ちに待っていたなのはは、今日が来るのを指折り数えながら待っていたのだ。

今まで鬼柳と二人きりで出かけると言うことが少なかったせいだろう。
なのはは士郎や恭也が動揺するほど、今日のお出かけを楽しみにしていた。

「美由希ー！　や、やはり鬼柳さんと二人っきりと言うのはどうかと思う！」

「あー、はいはい。寝言は寝てから言ってねー。≪終焉の王デミス≫の効果発動。
ライフを２０００ポイント支払い、このカード以外のフィールド上のカードを全破壊するよ」

「ひ、卑怯だぞ美由希！　俺の≪剣聖‐ネイキッド・ギア・フリード≫が！」

「卑怯じゃないよ、戦略だよ。デミスで恭ちゃんをぽーんち☆」

「語尾の「☆」はやめてくれぇえええええっっ！！」

恭也ＬＰ１７００→０

と、桃子の後ろ――居間の方では、楽しそうにデュエルしている美由希と恭也の姿がある。
どうやら決着が着いたようで、美由希はるんるん気分でデッキをシャッフルしていた。

ちなみに同じことが桃子と士郎の間でも発生したが、デュエルによって決着はついている。
勿論それは、桃子の勝利と言う形ではあるが。相変わらずな士郎と恭也の姿に、思わず笑みが零れる。

「それじゃお母さん！　いってきまーす！」

「はーい。気を付けてね」

そして今日のために、新たに買った洋服に身を包んだなのはが、階段から下りてくる。
彼女はキッチンの母親に挨拶を告げると、作ったばかりのお弁当を持って玄関へと飛び出した。

桃子はそんな娘の様子を、微笑ましそうに見送るばかり。実際、微笑ましいのだからしょうがない。
以前までは、何処か遠慮していたなのはがこうして、元気な姿を見せてくれるのが嬉しいのだ。

だから今日は、存分に遊んでらっしゃいと、桃子は胸の内でポツリ

と呟くのだった。

※

「「えぇえええええ～～！？」」

朝食を食べ終えた八神家のリビングに、フェイトとはやての驚きの声が上がる。

突然の二人の反応に面喰い、手に持っていたコートを鬼柳はパサリと落としてしまった。

「ど、どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもじゃないよ！　今、何て言ったの！？」

「？　なのはと今日は遊園地に出かける、って言ったが……」

「ゆ、ゆ、遊園地～～！？」

落ちたコートを拾い上げながら、鬼柳は再びフェイトとはやてに向けてそう告げる。
今日は地縛神との闘いの最中、なのはと約束した遊園地へ出かける日。鬼柳は出かける準備をしていた。

だが、目の前で右往左往している二人の少女が、なかなか準備をさせてくれない。
一体どうしたと言うのか。鬼柳は訝しげな視線で二人を観察していると、背後に気配を感じる。

「！　リインフォースか」

「……出かけるのか」

「？　あ、あぁ」

「……」

「り、リインフォース？」

振り返った先に居たのは、先日の事件で新たに増えたはやての家族。だが、今のリインフォースの鬼柳を見る目は、極寒の如く寒々しかった。

つーん、とソッポを向くと、リインフォースはキッチンへと足を運ぶ。
その様子が何処か拗ねている様に見えて、鬼柳は頭の天辺に「？」を付けるのだった。

「あかんあかん……！
遊園地なんて、好感度上昇イベントが起こりやすいやんけ！」

「うぅ……、私、鬼柳に遊園地に連れて行ってもらったこと無いのに……」

「あれだけ私を求める様な事を言っておいて、他の女と出かけるなどどう言う了見だ……」

三者三様の様子を見せるキッチンを、鬼柳は何処か疲れた様な表情で見つめる。
なんだかこのまま此処に居たら、凄まじい量のストレスをため込んでしまいそうだ。

そうなってしまえば、今日のお出かけは楽しくなくなってしまうだろう。
それはいけないと言う様に、鬼柳は表情を一変。柔らかいものへと変化させた。

鏡でチェックしてみるが、何処もおかしなところは無い。
至って普通の表情だ。これでようやく、心機一転と鬼柳は気合を入れる。

そしてキッチンに広がる混沌と化した雰囲気を見事無視し、なのはと遊園地へ出かけるのだった。

「くっ、こうなったらなのはちゃんとのフラグを叩き潰すしかないで！」

「なのはばっかりずるい！」

「べ、別にこれは嫉妬などではないのだからな。そ、そうなのだからな！」

後ろから聞こえてくる、不穏な三人の会話を聞かずに。

※

「よぅ。時間どおりだな」

「あはは。お待たせしました」

市内から離れた某テーマパーク。そこに鬼柳となのはは居た。

なのははこの日のために新調したと言う白いシャツにオレンジ色のジャケット。紫のミニスカート姿。

一方鬼柳と言えば、普段通りのコート姿だった。
年が明けたばかりで、雪が止む様子を見せないのだからしょうがない。

鬼柳は事前に買っておいた入場チケットをなのはに渡すと、なのはの隣に立って歩き始める。
なのはもなのはで鬼柳からチケットを受け取ると、トコトコと鬼柳に遅れない様に歩き出した。

受付の店員にチケットを渡し、施設に入る。
するとまず視界に飛び込んできたのは、青眼の白龍を模した噴水だった。

「さすが海馬ランド。あるもの全てブルーアイズだぜ」

「にゃはは……。ここまで来ると思わず笑っちゃいますけど」

青眼の白龍を模した噴水に、なのはは思わず苦笑する。
たしかに青眼の白龍は美しいドラゴンだが、それが施設内の至るところに設置されていれば思わず笑ってしまう。

鬼柳もなのはの言葉に同意だったのか。肩を竦めると、受付で貰ったパンフレットに視線を落とす。
生まれてこの方、この様な施設に入ったことなどない鬼柳からすれば、何処へ行けばいいのか分からない。

「まずは……」

「この「青眼の流星！」って言うアトラクションはどうですか？」

「ん、そうだな。……なのははそれで良いか？」

「はい！」

「そうか。ならまずは此処に行くか」

なのはの提案に、鬼柳達は「青眼の流星」と言うアトラクションへ向かう。

パンフレットの説明書きを見るに、どうやらこれはジェットコースターらしい。

この寒空の元でジェットコースターもどうかと思うが、なのはが楽しそうならそれで良いと自分を納得させる。

そしてなのはを引きつれてアトラクションへと向かうのだが、如何せん人が多い。年始だと言うのに人でごった返している。

「（はぐれたら不味いな……）なのは」

「ほぇ？　って、わわわ！」

「はぐれるなよ」

後ろを歩くなのはの手を、離さない様にギュッと握りしめた。

人でごった返しているこの園内。下手にはぐれれば再会するのは容

易ではない。
なのはは鬼柳に手を握られ、頬を赤くして慌てている。
照れているのだろうか。可愛い奴め。鬼柳は内心で思わず笑みを浮かべた。

※

「こちらフェイト。はやて聞こえますか、オーバー」
『電波状態は良好みたいやね。良く聞こえとるよ、オーバー』

鬼柳となのはが入場した某テーマパーク。
そこに黒ずくめの衣服に身を包んだフェイトとはやてがいた。

黒いジャケットに黒い長ズボン。さらにはサングラスやシルクハットなど。
傍から見たら明らかに不審人物として通報されそうな出で立ちで鬼柳達の姿を見つめている。

「どうしてこうなった……」

「さぁ……。でもまぁ、良い取引だったから良いじゃねーか」

そしてその後ろでは、フェイトとはやて。二人と同じ服装に身を包んだ三人の女性が居た。
そのうちの二人はシグナムとヴィータ。この二人はフェイトとはやての護衛として付いてきた様だ。

そんな中、ヴィータはホクホク顔で手に持っていた双眼鏡を覗く。
それと言うのも、ヴィータが今回の護衛の依頼を引き受ける際に受け取った対価。

とあるカード――強欲で謙虚な壺――を対価として貰っているのだから、ホクホク顔もうなずける。
ちなみにシグナムは、その様な対価を要求していない。ただ単純にはやてのことが心配だからついてきただけだ。

「べ、別に鬼柳とこんなところに来たい訳では……」

そして残る一人――リインフォースと言えば。
仲が良さそうな鬼柳となのはに嫉妬している様だった。

隠れている物陰から、ゴゴゴと、怪しげなオーラが渦巻いている。
シグナムはそんなリインフォースの様子を視界に納めると、はぁと嘆息した。

闇の書の呪縛から解放されたリインフォースは、なかなか楽しそうに毎日を送っている。
一見すれば出来た女性なのだが、気になる相手にはそうはいかない様だ。俗に言うストーカーだろうか。

ちなみにアルフ曰く「ヤンデレとクールを足して2で割った感じ」らしいとのこと。
まるで意味が分からないが、なんとなく厄介そうだと言うことは理解した。事実、現在とても面倒くさい。

出来れば何事もなく、今日と言う日が終了して欲しい。
シグナムはぼんやりと空を見上げながら、心の底からそう思う。

しかし、シグナムの願いは聞き入れられはしなかった。

「あぁあああああっっ！　て、手ぇ繋いどるで！」

「し、しかもどさくさに紛れて腕まで組んでるよ！」

「くっ、やはり幼女か……、幼な妻が良いのか……！」

突如として、フェイト、はやて、リインフォースの悲鳴にも似た声が聞こえる。
視線を鬼柳達の方へと向ければ、嬉しそうに鬼柳と腕を組んでいるなのはの姿が見える。

どうやらはぐれない様に鬼柳と手を繋いでいるうちに、気が大きくなって腕を組んだと言うところか。

その様子にはやてはハンカチをグッ、と噛み締め、フェイトのツインテールがぐるぐると回転している。怪しい回転だ。

そしてリインフォースと言えば、元に戻った夜天の魔導書で幼児化する魔法を探している真っ最中だった。

幼児化したいならば、某コ○ン君に頼めば良いのに。シグナムは心の底からそう思う。

「あかん、このままじゃなのはちゃんにアドバンテージを奪われてまう！」

「だったら、アドバンテージを奪われない様に妨害しなくちゃ！」

「そ、そうですね！　まだ鬼柳を正常な道に戻すことが可能だと信じています！」

「いよっしゃ！　リ○ルバス○ーズならぬなのはバスターズ、出撃や！」

「「おぉ～～！」」

勘弁してくれ。隣から聞こえる威勢の良い掛け声に、シグナムは本気でそう言いたい。

それにリインフォースよ。正常な道とは何だ。鬼柳はロリコンだとでも言うのか。ツッコミどころは沢山ある。

だが、シグナムがツッコミを入れるよりも先にはやてたち「なのはバスターズ」はずんずんと鬼柳達の後を追いかけて行く。

言っても聞かないのだろうな。シグナムは何処か諦めた表情でそれを悟ると、肩を落としながら四人の後を追うのだった。

※

「しょぼーん……」

「そう気を落とすな、なのは」

「うぅ～……だってだってぇ～！」

ぐるぐると両腕を回転させて、なのはは鬼柳に抗議の声を上げる。それと言うのも、なのはたちは先ほど向かったアトラクション――ジェットコースターに乗れなかったのだ。

理由としてはアトラクションが不慮の事故――レールが切断されていた――で運営出来なくなってしまったからである。

その際にピンク色の髪のポニーテールを見た様な気がしたが、生憎と鬼柳の記憶にそれほど強い印象は残さなかった。

「（どさくさに紛れて抱きつこうとしたのに～……）」

桃子秘伝の恋愛指南書をパラパラと捲りながら、なのははぷぅっと頬を膨らませた。
そのノートによると、遊園地はイベントが沢山あるのだ。それも、好意をあげるような。

そのうちの一つ、ジェットコースターに乗っているとき、どさくさに紛れて抱きつく作戦。
それを実行しようとしたのだが、ジェットコースターは生憎の中止。
羞恥心を捨てて挑もうとしたのに、肩透かしも良いところだ。

「それで、次は何処に行く？」

「う～ん……お化け屋敷、かな」

「ならさっさと行くか。
混んでくるとはぐれちまうかもしれないからな」

「うん」

捲っていた恋愛指南書を持ってきていたポーチの中に仕舞うと、なのははは鬼柳と共に歩き始める。
次の目的地は遊園地の定番とも言えるお化け屋敷。ここも好感度、ならびに新密度が上昇するイベントが起こりやすい場所である。

桃子の恋愛指南書曰く、男性とは弱いもの（女性や子供）を守ろう

とする本能があるらしい。
そこでお化け屋敷でわざと怖がり、鬼柳の本能に訴えかけようと言う戦法だ。

鬼柳はなのはの狙いに気が付いていないのか。なのはの歩くペースに合わせている。
そんな鬼柳の様子を、なのはは狩人が獲物を狙う様な表情で見つめていた。

※

「……ヴィータ、私は……」

「犯罪乙」

「……」

ズーン、と重苦しい雰囲気を漂わせて、シグナムが園内の隅で体育座りをする。
その様子をヴィータは視界の隅で確認すると、視線を様子を伺っている三人の女性に向けた。

三人の女性――フェイト、はやて、リインフォースは何処かご機嫌そうな雰囲気である。
それと言うのも、先ほどシグナムによってジェットコースターのレールを斬り倒し、フラグを一つ潰したのだ。

これで本来行われる予定だったフラグの回収をさせなかった。これでなのはと鬼柳の距離が近づく事は無いだろう。
「いぇ～い！」と三人は缶ジュースで乾杯している。まるでお祭り騒ぎだ。道行く人々は奇異の視線を三人の女性に向けている。

「さて、それじゃなのはちゃんは、今度は何処へ行くんやろうね」

「あっちは――――お化け屋敷？」

「その様ですね」

グビグビと持っていた缶ジュースを煽り、密かに捕捉している目標（なのは）の行き先を探る。
そしてなのはたちの進行方向をパンフレットで照らし合わせ、次の目的地を探り当てた。

次の目的地はお化け屋敷。遊園地で向かうアトラクションとしてはベタだが、美味しいイベントも立てられる。
それに気がついたはやては、「ぶーっ！」口に含んでいたジュースを吐き出した。ゲホゲホと苦しそうに咳き込んでいる。

「あ、あかんあかん！　お化け屋敷はジェットコースターよりも不味いで！」

「そ、そうなの？」

「そや！　お化け屋敷はあかんで！　お化けに驚いたフリして、どさくさに紛れて抱きつく事も可能なんやからな！」

「えぇ！？」

はやての説明を聞いたフェイト。そして鬼柳になのはが抱き付いたシーンを想像し、頬を膨らませる。

ちなみに先ほどまでぐるぐると回転していたツインテールは、今は獲物を切り裂く様に鋭い動きを見せている。まるで武器だ。

そんなフェイトのツインテールにヴィータは興味を抱くが、生憎とフェイト、はやて、リインフォースが移動を始める。

どうやら今回もなのはのイベントを潰すつもりらしい。ヴィータは肩を竦めると、隅で落ち込んでいるシグナムを回収し、後を追うのだった。

※

「ひゃぅう～～……」

怯えた様な声を漏らし、なのはは鬼柳の腕に抱き付いた。
視界に映るのは薄暗い屋敷。現在なのはたちは、お化け屋敷の中に居た。

入る前までは意気込んでいたなのはだったが、お化け屋敷の中に入ると一転。
すっかり怯えてしまい、鬼柳の腕にくっついたままになってしまった。

それと言うのも、お化け屋敷の作りが予想以上に凝っていたせいである。
そのせいで当初の目的を達成は出来たが、達成できた喜びを実感している暇が無い。

『■■■■～～！！』

「にゃぁあああああっっ！！」

「落ち着け、なのは。ただの≪疫病狼≫だ」

「た、ただのじゃないよぉ～～～～！！」

そんな折、ガサガサと物陰から一匹の狼の様なモンスターが現れた。
全身が疫病に感染し、不気味な形相を見せるモンスター――疫病狼である。

突然現れた不気味なモンスターになのはは悲鳴を上げ、助けを求める様に鬼柳の胸に抱き付いた。
鬼柳はなのはを安心させるように背中を擦ると、シッ、シッ、っと飛び出してきた疫病狼を退ける。

「ほら、追い払ったぞ」

「うぅ～～……ほ、ホントに？」

「あぁ」

恐る恐ると言った様子で、周囲の様子をなのはは伺う。
鬼柳はそんななのはを再び安心させる様に撫でると、出口を目指して歩き出す。

なのはも鬼柳に遅れまいと、慌てて追いかけてくる。だが、繋いだ手を離そうとしない。
どうやらはぐれて一人になったら、もっと怖いことが起こると理解しているのだろう。ギュッと強く握りしめる。

そんななのはの様子に、鬼柳は苦笑を禁じ得ない。普段の様子を知っているので、こんなに怯えるなのはが珍しいのだ。
それに怯えているなのはと言うのも可愛らしいものがある。護ってあげたい様な。そんな気持ちになってしまう。

なるほど。なのはの作戦は成功しているのかもしれない。

「ん。もう少しで出口みたいだな」

「ほ、ホント？」

「あぁ。ほら、早く行くぞ」

「ま、待ってぇ～～！」

そして視界の先に見えるのは、薄っすらと灯りが見える出口。
どうやらお化け屋敷もここまでの様だ。なのはは情けない声ながらも、安堵した様な表情を浮かべている。

鬼柳もまた、そんなのはの様子に笑みを浮かべると、なのはが遅れないペースで出口を目指すのだった。

※

「ひゃぁあああっっ！！
げ、≪ゲルニア≫だよぉおおおお！！」

「ひぇえええええっっ！　ちょ、こっち来んといて！」

「きゃぁあああああっっ！！」

ドタバタドタバタ。慌ただしい足音を響かせながら、フェイト達は右往左往している。
どうやらこちらもお化け屋敷の予想以上のクオリティに、お化け達に驚かされている様だ。

既に鬼柳となのはを見失ったと言うのにも関わらず、フェイト達は前に進めない。
下手に進んでしまえば、また怖いお化け達が襲ってくるかもしれないと言う恐怖があるのだ。

「なんだかんだで楽しんでるよなー、はやてってば」

「あぁ、その様だな」

三人の後ろでは、バタバタと慌てている三人の様子に苦笑しているヴィータの姿が。
どうやらこちらはお化けがさほど怖くない様で、普段と変わらない仕草を見せていた。

『■■■■〜〜！』

「ぴゃぁあああああっっ！！」

「！　テスタロッサ！」

と、前方で新たなお化け――キラー・トマト――が現れる。
現れたキラー・トマトに驚いたフェイトが身体を思わず硬直させる。
だが、これが不味かった。良く磨かれた床のせいで、フェイトがツルリと滑ってしまったのである。
咄嗟にシグナムが駈け出し、転びそうになっているフェイトを抱き止める。幸い、地面にぶつかることは無かった。

「う、うぅ……、ありがとう、シグナム」

「いや、気にするな……」

抱き止めたフェイトを起こしながら、シグナムは彼女に視線を向ける。
すると、彼女はハッと息を呑んだ。思わず視線が眼の前のフェイトに固定される。

うるうると恐怖で滲んだ可愛らしいその瞳。迷子の子供がようやく見つけた様に、ギュッとシグナムにしがみ付いている。
今もなお「ひぇ〜！」と情けない声を上げているその姿。その様子に思わず、シグナムの頬が赤くなる。

護ってあげたい。そんな気持ちがムクムクと湧いてくるのだ。

「シグフェイ……、あり、なのか？」

一方、その様子を後ろから見ていたヴィータがボソボソと何事か呟く。

彼女は手に持ったメモ帳に不穏な単語――シグナムが攻め、フェイトが受け――などを書き込んでいく。

突如物陰から飛び出してくるお化けに怯えるはやてとリインフォース。

禁断の気持ちを抱きかけているシグナムと、お化けに怯えているフェイト。

そして最後に、不穏なキーワードをメモ帳にメモしているヴィータ。

三者三様の様子を浮かべながらも、彼女たちもまた出口へと近付いていた。

※

遊園地で遊び始めてから数時間後。
適当な広場を見つけ、なのはたちはお弁当を広げていた。

「じゃじゃーん！」

「おぉ、気合い入ってるな」

「うん！　頑張って作ったんだよ」

鬼柳の視界に入るのは、お弁当箱の中に所狭しと並べられたおかずの数々。
見た目が以前見たものよりも綺麗になっており、なのはが腕を上げたことを知る。

そう言えばこうして、外でなのはの手作り弁当を食べるのは久しぶりだな。
鬼柳は内心でそんなことを思いながら、ランチボックスの中のおかずに手を伸ばす。

まず手に取ったのは、綺麗な三角形をしているおにぎり。
少し前に初めて作ったなのはの手作りおにぎりを思い出したからか。
気になって仕方ない。

「ど、どうかな？」

「あぁ、美味い。前よりも腕を上げたみたいだな」

「えへへ。これでも頑張ってるんだよ」

頬張ってみれば塩の加減も丁度良く、ご飯の量も適量と言うこと無しの出来だった。
なのはにそう告げてみれば、頬を緩ませながら嬉しそうに笑う。彼女も彼女で努力している様だ。

そして手に取ったおにぎりを食べ終えると、次のおかずに手を伸ばす。
卵焼きやタコの形をしたウィンナー。唐揚げなど、どれも美味しいと思える出来だった。

「ふぅ……、満足、したぜ」

「お粗末さまです」

ランチボックスの中のお弁当を二人で食べ終え、施設の中を見渡す。
何処も行き交うのは家族連れの親子や恋人たちの姿。その様子に鬼柳は目を細める。

そしてランチボックスを片付けたなのはが鬼柳の隣に座ると、静かな沈黙が場を支配した。
その沈黙は、空気を悪くする様な沈黙ではない。逆に何処か暖かな空気を二人の間に作り出している。

「なのはも良い嫁さんになるかもな」

「!?　お、お嫁さん……」

「……照れるなよ、こっちまで恥ずかしくなる」

鬼柳の言葉に、未来の自分を想像したのか。ポッとなのはの頬が赤くなる。

好きな人と共に歩む未来。その未来を想像し、なのははだらしなく頬を緩める。

そしてそんななのはを見て、鬼柳もまた頬を赤く染めた。

慣れないことを言っているとは理解しているが、こんな反応が返ってくるとは。

笑い飛ばしてくれれば良かったのだが、肝心の反応は頬を赤らめると言う反応。

どうやら好きな相手がいるらしい。好きな相手が気になるが、あえて聞かないことにした。

「そ、そう言う鬼柳さんは良いお父さんになりそうだよ?」

「お父さん、な。どうだろうな」

「?」

「案外、俺は結婚しないで人生終わるかもな」

「えぇ！？」

鬼柳の言葉に、なのはは驚いた表情を浮かべる。
だが、鬼柳と言えば特に表情を変えた様子は無い。

彼の先ほどの発言。それと言うのも、両親を知らないせいである。
鬼柳は両親を知らず、サテライトで育った。親の愛情や温もりを知ることなく。

そんな自分が誰かの父親になるなど、到底考えられないのである。
それならばいっそ、気ままな一人での生活を続けた方がいいのでは。
そう思うのだ。

しかし――――

「じゃ、じゃあ、私が鬼柳さんと結婚してあげる！」

「な、なのは？」

「独りぼっちは詰まらないんだよ。二人で一緒なら、きっと楽しいよ」

なのはに告げられた言葉に、思わずポカンとした表情を浮かべた。
だが、それでもなのはは止まらない。頬を真っ赤に染めながら、鬼柳を説得している。

なまじ幼少の頃の記憶があるからだろう。なのはは独りぼっちと言

うものが嫌いだ。
だからあえて一人で居ようとする鬼柳を説得するのかもしれない。
必死に鬼柳を説得する。

「……そう、だな。独りぼっちは詰まらないよな」

「あ……」

そして必死に説得をしていたなのはの頭に、ポンっと鬼柳の手が乗せられた。
必死に説得を続けていたなのはも、鬼柳の態度に勢いが弱くなる。

鬼柳はそんななのはの様子に笑みを浮かべながら、自分の未来に付いて想像した。
今まで碌に、未来のことを考えることなどなかった。だが、自分の未来を考えるのも良いかもしれない。

誰かと共に、幸せな未来を築く。そんな未来を想像してみるのも面白いかもしれない。
だが、ただ幸せな未来を築くだけでは飽き足らない。もっと相手と満足出来る様な、そんな未来が欲しい。

「それじゃ、貰い手がいなかったらなのはが俺のことを貰ってくれよ」

「！　う、うん！」

鬼柳の言葉に、なのはが嬉しそうに笑みを浮かべる。
それと同じように鬼柳もまた、釣られる様に笑みを浮かべたのだった。

オマケ

「うぅ～～……、も、もうお化け屋敷は勘弁や～……」

「もう居ない？　もう居ない？」

お化け屋敷からよろよろと、おぼつかない足取りでフェイト達が出てくる。
どうやらお化け屋敷で、予想以上に体力を消耗したらしい。疲労困憊の体をしている。

「管理外世界のお化け屋敷も侮れないと言うことか……。くっ、屈辱だ……」

「落ち着け、私。テスタロッサは女だ。
そう、女性だ。意識をしっかり持て、常識を捨てるな……」

そんな中、元気な様子を見せているのはシグナムとリインフォース。
リインフォースはお化け屋敷で驚いたのを悔しく思っているのか。
リベンジを密かに誓っている。

残るシグナムと言えば、お化け屋敷で芽生えた気持ちに戸惑っているのだろう。
頬を赤く染め、まるで自分に言い聞かせるかのようにぶつぶつと独り言を漏らしている。

「うぅ～～……鬼柳兄ちゃんも見失ってしもたし、どないしよ」

「って、はやて。アレ！」

「！　あ、アレは……！」

フェイトが指差した方へと視線を向ける。
そこでは、鬼柳となのはが仲良くお弁当を食べている光景が見えた。

恋人の様な雰囲気ではないが、何処か立ち入ることを躊躇う様な雰囲気が漂っている。
この雰囲気の正体は何なのだろう。それが分からず、フェイトとはやてはダラダラと冷や汗を垂らしながら焦る。

そして二人が見つめる先で、鬼柳がなのはに大胆な言葉をかける。
曰く、鬼柳の結婚相手がいなかったら、なのはが鬼柳を貰うと言うこと。

普通ならば逆じゃないのかと言うツッコミが入りそうだが、生憎と

そのツッコミは入らない。
なのはは鬼柳の言葉に頬を赤くし、だが、何処か嬉しそうな笑みを浮かべている。
そして、それと同時に燃え上がる嫉妬の炎。

「そか。なら、鬼柳兄ちゃんの貰い手は私やでぇえええええ！！」

「そんなことさせない！　き、鬼柳は渡さないもん！」

「主はやて……、私の不義をお許しください」

フェイト、はやて、リインフォース。それぞれがデッキケースからデッキを取り出す。
そしてそれぞれに向けて激しい火花を散らすと、一目散に園内のとあるスペース――デュエルスペースへと駈け出した。

フェイトのデバイスはクロノに没収されており、
はやてとリインフォースは地球でデバイスを使用するためにいかないのでデュエルスペースで決着を着けるのだ。

遠ざかっていく三人の背中を、シグナムは嘆息しながら見送った。

一話　「遊園地での攻防！」（後書き）

次回予告

フェイトとのデュエルを終え、元の世界へと帰還した遊星。
遊星はフェイトに告げられた大会について調べるが、ある重大な事実を思い出す。

それはクリアマインドへの至り方。
まさかの自分のウッカリに遊星はだらだらと冷や汗を流す。

一方、それはジャックも同様で――――。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「不動遊星の憂鬱」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二話　「不動遊星の憂鬱」（前書き）

タイトルには遊星の文字が。
だけど本文中に出てくるのは最初と最後だけ（汗

二話　「不動遊星の憂鬱」

～ネオ童実野シティ　某所～

「――――っ。ここは……」

とある空間で少女――フェイト・テスタロッサとデュエルを終えた遊星。
出口であろう場所へ自らのDホイールを走らせると、見慣れた部屋の中に現れた。

その際に、乗っていたDホイールは消えてしまっている。どうやら実体をもった幻影だったようだ。
空中に投げだされた身体を捻り、空中で体勢を整える。そしてきょろきょろと、部屋の中を見渡した。

「俺の部屋か。だが、さっきのは一体……」

ここが自らの自室だと理解すると、遊星はその場で顎に手を当てながら考える。
先ほどの空間は何だったのだろうか。疑問に思うのだが、応えてくれる相手が見つからない。

何か知っているであろう赤き竜のアザと言えば、依然として沈黙を保ったままだ。

どうして再び、腕にアザが刻まれたのか。考えることは沢山あるが、まず考えるべきことが一つある。

「……“ＤＭミッドチルダ杯”、か。鬼柳も出てくるんだろうな」

それは謎の空間でフェイトに告げられた聞き慣れぬ大会の名前。ＤＭミッドチルダ杯。一体何処の都市で、どの様な規模でやるのか。

色々な考えが浮かんでは消えて行く。そしてふと、遊星は自らの手に視線を落とした。

握り込んだ拳が、ぶるぶると震えている。この震えは武者震いだろうか。まだ見ぬ決闘者と闘いたい、と。

「俺もデュエリストってところか。さぁ、まずは……」

部屋の中から白衣を取り出すと、着けていたジャケットと交代で身に付ける。

そして白衣を翻しながら、遊星は自室を出た。向かう先は市長室。イェーガーがいるであろう場所だ。

カツコツと靴音を響かせながら、遊星はイェーガーの自室を目指す。その最中、自らとデュエルした少女の顔を思い出していた。フェイト・テスタロッサ。鬼柳の新たな仲間の一人。

「フェイト・テスタロッサか。追いついてこい、クリアマインドの

境地へ……」

まだまだ未熟な少女。デュエルの腕は秀逸だったが、経験がそれに伴っていない様だった。
これで経験も伴えば遊星すら苦戦する様なデュエリストになるだろう。一体どれほど伸びるのか。

そして、その少女を伸ばす力こそが遊星の言うクリアマインドの境地。
そこへ至ることが出来れば、きっとフェイトは強くなれる。自分に勝るとも劣らないほどに。

「ブルーノ。俺も、フェイトに教え……」

と、瞼の裏にチームメイトであるブルーノの顔を映しながら呟いていた遊星の言葉がピタリと止む。
それと同時、イェーガーの自室へと向かっていた遊星の足もピタリと止まった。そして顔色が青くなる。

瞼の裏に浮かんだブルーノの顔が、険しい表情を浮かべているのが理由ではない。
理由はただ一つ。伝え忘れてしまったのだ。フェイトにとある境地への至り方――クリアマインドの。

「……」

『遊星、僕は……』

「ま、待ってくれブルーノ！
違うんだ！　忘れてた訳じゃない！」

だらだらと冷や汗を流している遊星に、瞼の裏に浮かんだブルーノが失望した様な表情を浮かべた。
それに慌てて遊星は弁解を行う。そう、忘れた訳ではない。ただ少しだけ、デュエルに夢中になっただけだ。

慌てて腕に刻まれた赤き竜のアザに、再びフェイトに会わせて欲しいと遊星は願う。
だが、遊星の腕に刻まれた赤き竜のアザはピクリともしない。イヤな汗が遊星の背中を伝う。

「……お」

『お？』

もはや脱水症状に至るのではないか。それほどの量の汗を、遊星は身体中から放出する。
そして不意に、ポツリと一言だけ遊星が言葉を漏らした。一体何だろう。幻影のブルーノが訊ねる。

「俺はどうしたらいい！
答えろ、答えてみろブルーノ！」

『まさかの逆切れだ！』

※

「Ｄホイール？」

「あぁ。ＤＭミッドチルダ杯に出るなら、用意しておいてくれ」

八神家のリビング。そこのソファに腰掛けたクロノが、リビングのメンバーに説明する。
それと言うのも、ＤＭミッドチルダ杯がこの度、大会規定などを変更する様なのだ。

主な変更点はスタンディングデュエルがライディング・デュエルへと変更されるくらい。
あとは優勝する大会の数が若干、減ったことだろう。僅かに条件が緩くなり、フェイト達は安堵する。

「何故Dホイールを？
そんなに重要なのかしら？」

そしてクロノから大会規定の変更について説明を受けていたプレシアが、疑問の声を上げた。
それはなまじ、当然の疑問。わざわざ高いお金を出して、Dホイールを購入するべきなのだろうか。

「なんでも、時空管理局に努める大会関係者が、
とある世界で行われていたライディング・デュエルの大会を観戦し、いたく気に入ったみたいなんだ。
あの感動を、興奮を是非我らのミッドチルダで味わいたい、と。
でもまぁ、無理強いはしないつもりだけどね」

「そう。そう言えば、ここにライディング・デュエルが出来る決闘者（デュエリスト）が一人いたわね」

クロノの説明にプレシアはクスクスと笑みを零すと、室内を見渡してとある人物を探す。
それは異世界からこの世界へとやってきた決闘者――鬼柳　京介。

彼の話から察するに、彼らの世界ではライディング・デュエルが一般的な様だ。
果たして、ライディング・デュエルとはどれほどのものなのだろうか。興味が湧き上がる。

「ちょわー！」

「お、良い調子みたいだな」

と、室内を見渡していたプレシアの視界に、異質な光景が飛び込んできた。
フェイトが奇怪な叫び声を上げながら、空中に浮かんだモニターをカタカタとタイピングしている。

「にゃー！」

「あんまり弄って壊すなよ」

「……何をしているのかしら」

片やなのはと言えば、フェイトと同様に空中に浮かんだモニターをカタカタとタイピングしていた。
なんだか子供っぽい二人の様子に、プレシアは動揺を禁じ得ない。
だが、それ以上にプレシアの胸をときめかせるものがあった。
それは――――

「（ツインテールが、フェイトとなのはさんのツインテールがピコピコしてる～～～！！）」

思わずプレシアは、緩んでしまう口元を必死に抑えながら、ごろんごろんとソファの上を転がった。
なにせモニターを二人がタイピングする度、二人のツインテールがピコピコと動くのだ。可愛らしいことこの上ない。

声にならない声を上げながら、プレシアはソファの上でごろごろと身悶えている。
その様子にクロノは閉口し、ソファの上に腰掛けたアルフがタハハと苦笑いを浮かべる。

「それで鬼柳。君は一体二人に何をさせているんだ？」

「赤き巫女の伝承を調べてたんだ。ただ、途中で二人が飽きちまったみたいでな」

「今ではこうして遊んでるところさ」と、鬼柳は肩を竦めながら、クロノへ説明する。
その説明を聞き、クロノは「ふむ」と腕を組んで考える姿勢をとった。

赤き巫女。それは先の闇の書事件で確認された重要な事柄だ。
地球や無限書庫で赤き巫女についての伝承を探してみるが、あるのは虫食いの伝承だけ。

しかも肝心な部分が空白だと言うのだからなお悪い。一体、赤き巫女とはどの様な存在なのか。
そして、赤き巫女に選ばれたシグナーとは他に何人いるのか。様々な疑問は尽きない。

「にゃ！　鬼柳さん！　赤き巫女の心臓のアザを持つシグナーは、赤き巫女の身体のアザを持つシグナーと結ばれるってここに伝承が！！」

と、不意に今までモニターに何かを打ちこんでいたなのはが、鬼柳との会話に割り込んでくる。
そして見せるのは赤き巫女についての伝承。そこには明らかに合成された文字で、こう記されてあった。

「赤き巫女の心臓のアザを持つシグナーは、赤き巫女の身体のアザを持つシグナーと結ばれる」と。
明らかに捏造されたその伝承に、鬼柳は呆れた様な表情を浮かべる。
どうみてもなのはのでっち上げだ。

「ち、違うよ！　こっちには翼のアザを持つシグナーと結ばれるって伝承にあるよ！」

「……やりたい放題だな」

さらにはフェイトまで割り込んできて、リビングの中が混沌と化していく。
クロノが「はぁ」と重いため息を吐いている先では、なのはとフェイトが睨みあっている。

仮にも君たちは親友だろう。クロノはそう二人にツッコミを入れた

いが、疲れてそれどころではない。
とある人物が言っていたが、ツッコミには愛と気力が必要なのだ。
今のクロノには気力どころか愛すら欠けていた。

果たしてクロノに、気力と愛が戻ってくることはあるのだろうか。
謎は深まるばかりだが、仮に戻ってきてもツッコミだけは入れるもんかと、クロノは心中で呟いた。

※

「はむはむ」

「うにゅ～～」

「は、鼻血が……！」

クロノがアースラへと帰還してから数十分後の八神家のリビング。

鼻からたらりと垂れそうになっている鼻血を、プレシアはティッシュで受け止めた。
そしてもう一枚のティッシュをくるくると丸めると、それを鼻血が

垂れている鼻の穴へと入れる。

彼女の視線の先には、美味しそうにお菓子を食べているなのはとフェイトの姿。

どうやら二人の可愛らしい仕草を見て、思わずときめいてしまったのだろう。

「桃子の新作デザートだ。
店に出すかは二人の判断次第らしい」

現在二人が食べているお菓子。それは、桃子が新たに喫茶翠屋に出す新作のお菓子の様だ。

伝言が書いてあるメモ帳を覗き込みながら、鬼柳が二人に向けて説明する。

桃子が言うのは、今のままでも経営は上手く言っているらしい。だが、そのうち飽きが来るのではないか。

それを心配している様だ。これは飲食店を経営しているお店ならば直面する問題だろう。なんとも難しい問題だ。

「そう言えば鬼柳は食べないのかい？
アンタも一応、喫茶翠屋の店員なんだろ？」

と、お菓子を食べた二人の感想を纏めていた鬼柳に、アルフの疑問の声が上がる。

アルフはソファの上で遠慮も無しに胡坐を掻きながら、ズズズとお

茶を啜っていた。

それに鬼柳はふむ、と顎に手を当てる。たしかに鬼柳も喫茶翠屋の店員の一人に違いない。

だが、仕事をする場所が違うのだ。鬼柳が主に仕事をする場所は店内。主にウエイターである。

「俺は仕事をする場所が違うからな」

「んー、そっか。そういや鬼柳がお菓子を作ってるとこなんて、見たこと無かったしね」

「悪かったね」と、アルフは笑みを浮かべながら謝罪する。それに鬼柳もまた笑みを浮かべた。

アルフのこうしてすぐに自分の非を認め、詫びると言う行為は鬼柳にとって好ましいものである。

昔の自分はこうはいかなかったな。昔の自分に、アルフの様な心根が少しでもあったのならば。

今が少しは変わっていたのではないだろうか。そんなことを、鬼柳は思う。

「ちっちっち。違うわよ、アルフ」

「んぁ？　なにが違うんだい？」

と、鬼柳が自らの心について考えていると、不意にプレシアの声が聞こえた。
視線を向ければ、プレシアは得意げな表情でなのはとフェイト。二人を見つめている。

「鬼柳のデザートはフェイトとなのはさんに決まってるじゃない。全身を生クリームでデコレートした二人を一緒に頂きま～すって……ぶほぁ！」

「うわ……。鼻血の量が尋常じゃないね」

説明している途中で自爆したのだろう。だらだらと鼻血を垂らしながらプレシアが倒れる。
あまりの出血量にアルフが顔色を青くしながら、倒れているプレシアの様子を伺っていた。

そして鬼柳はそんなアルフとプレシアを見つめながら、頭の中でプレシアの言葉をリフレインする。
全身を生クリームでデコレートした二人の少女。そしてその少女たちを美味しく頂く自分の姿。

「……ぶふっ」

「ってうわぁあああああっっ！！
き、鬼柳！？　アンタどうしたんだい！？」

鬼柳の鼻から、思わず鼻血がぴゅぅっと飛び出した。そのままバタリと倒れる。
どうやら鬼柳にとって、なのはとフェイトの生クリームデコレートは想像以上に刺激が強すぎたようだ。

「こんなんじゃ、満足……できねぇ、ぜ……」と呟きながら、徐々に意識を失いかけている。
アルフはそのまま意識を失わせては不味いと理解したのだろう。鬼柳の頬をこれでもかと引っ叩いている。

「お、起きなよ鬼柳！
寝たら死んじまうよ！」

「遊星……ジャック……クロウ……、
悪ぃな、俺は……先に行って、待ってる、ぜ……」

「何処に行くんだよぉおおおおおっっ！！」

びしばしびしばし。往復ビンタが何度も鬼柳の頬に炸裂する。
徐々に鬼柳の頬が赤く腫れあがっていくが、それでも構わんとアルフは引っ叩くのを止めない。

「生クリームデコレートでは満足できないの……？
き、鬼柳ってばえっちなんだから……ぶふっ！」

「アンタは少し黙ってな！」

そして鬼柳の先ほどの発言に反応したプレシアが、再び鼻血をぴゅうっと噴き出す。
すでにリビングの床は鬼柳とプレシアの出した鼻血で血の海だ。第三者が見たら殺人現場かと疑うかもしれない。

「うにゅ。生クリームでデコレートって、何をデコレートしたら良いんだろう？」

「えっと、お母さんから貰ったこの秘伝のノートに何か書いてあるかも」

一方、蚊帳の外と化していたなのはとフェイト。二人は一冊のノートを覗き見る。
それは先日の遊園地デートの際、なのはが参考にしていた桃子秘伝の恋愛指南書である。

フェイトと二人、ノートを覗き込むなのは。
そこには様々なためになることが書かれていた。

曰く「牛乳を持ったまま転んで牛乳まみれになるべし！　えっちなイラストになっちゃうＺＯ☆」
やら「自分の体にリボンを巻いて気になる相手に自分をプレゼントしよう！　一発で大人になれちゃうＺＯ☆」

やら、様々な事例が事細かに載せられていた。それを読み、なのはとフェイトはふむふむと頷く。
なるほど。ためになる話ばかりだ。このノートをくれた桃子には感

謝しなくてはいけないかもしれない。

二人は善は急げと言わんばかりに、まずはガサゴソとリビングの棚を漁る。

目標は全身を巻けるほど長いリボン。とりあえず自分をプレゼントしようと言う魂胆だ。

「フェイト、なのは！　アンタら何しようとしてるんだい！？
って言うかプレシア！　こっそりカメラ用意するんじゃないよ！
そんで鬼柳！　いい加減目を覚ましなよ！　帰ってこぉおおおおおいっっ！！」

そしてこの場で唯一正常な、アルフが四方八方にツッコミを入れる。

だが、その成果は微々たるものだ。なのはとフェイトはリボンを見つけ、プレシアはカメラを用意する。

なんとも混沌と化していく八神家のリビングに、アルフの悲痛な叫びが木霊するのだった。

※

「ん、なんや。何か美味しいイベントを逃した様な、そんな気がするで」

「奇遇ですね、主はやて。私もそんな事を思っていたところです」

「君たちは何を言い出すんだ……」

時空航空船アースラのとある一室で、ポツリとはやてが口を開いた。それに同調する様にリインフォースもコクリと頷く。何か大切なイベントを逃した様な。

そしてそんな二人を見て、クロノが嘆息しながら訊ねた。一体、突然何を言い出すのか。

今は大切な調書を取る時間なのだ。無駄なことに時間を費やしたくないと、誰もが思う筈である。

「まったく。時間を取られるのは君たちだけで良いって言うのに……」

「ん？　他になにか用事でもあるん？」

「ん、あぁ……。ちょっとね」

そしてクロノは曖昧に笑う。どうやら他に何か用事がある様なのだ。一体何なのだろうか。好奇心に駆られ、はやてはクロノに訊ねてみる。

「あ～……、継承の儀の一人に、選ばれたんだ」

「継承の儀？」

「あぁ。フェイト達には話したけれど、僕たち管理局には最強の三柱が居る。

≪極神皇トール≫≪極神皇ロキ≫、そして最高神≪極神聖帝オーディン≫の三柱なんだ」

「あぁ～、言っとったなぁ」

以前にフェイトから聞いた管理局最強の三柱のことを思い出し、はやては頷く。

詳しい効果などは分からないが、伊達に最強を名乗っていないのだろう。強さは間違いないと思われる。

「それで今回の事件を解決に導いたとして、僕が神を継承するに相応しいか儀式を受けるんだ」

「ほぇえええ……！　クロノ君、神様使える様になるんか！？」

「それは分からない。それに、闇の書事件は僕が解決した訳じゃないんだけどね」

はぁと嘆息しながら、クロノは物憂げに視線を空中に投げかける。

実際、闇の書事件を解決したのは鬼柳達チームサティスファクションの面々だ。

だが、管理局の上層部はそうはいかないらしい。長年追いかけてきた重要な事件。
その事件を一般人に解決させられたと言うのが気に食わないらしい。
なんとも面倒な話だ。

その結果、当時海鳴に居たクロノに目がとまったらしい。今回の事件の解決の立役者を、クロノに変更したようだ。
鬼柳達も鬼柳達で抗議するのかと思いきや、別にそんなものはいらんと無関心。結果としてクロノは辞退出来なくなった。

これから行われるであろう面倒くさい継承の儀を思い浮かべ、クロノは深々と嘆息する。
別に管理局の誇る神に興味が無い訳ではないが、せめて自分の手で掴んだ功績で継承したい。そう思うのだ。

「ただ、僕の持っているこのデッキじゃ地縛神には勝てなかった。それは事実だけど」

「えぇ～と、クロノ君のデッキの切り札は……≪ゴヨウ・ガーディアン≫？」

「あぁ。管理局から執務官に支給されているデッキでのエースだよ」

ゴヨウ・ガーディアン
星６／地属性／戦士族／攻２８００／守２０００

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、
そのモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する
事ができる。

クロノのデッキのエース、ゴヨウ・ガーディアン。
戦闘破壊したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚することが
出来る効果を持っている。

世間一般から見れば十分強力なカードだが、先の地縛神戦で役に立
つかと問われたら首を傾げるところだ。
なにせ地縛神は自らを攻撃対象に出来ないと言う強力な効果がある。
それがある限り、クロノは手も足も出ない。

やはり地位を上げ、より強力なカードを支給してもらえる様になっ
た方がいいか。
クロノは嘆息すると、ゴヨウ・ガーディアンのカードをデッキホル
ダーへと仕舞いこむ。

「そやけどクロノ君。≪ゴヨウ・ガーディアン≫は禁止やで」

「……なんだって!?」

※

「おやおや。どうしました不動博士」

自室で書類の処理に追われていたイェーガーの元へ、ふらふらとおぼつか無い足取りの遊星がやってきた。
彼は何かショックな出来事があったのだろう。顔を俯けたまま、ぼそぼそと何事か呟いている。

疑問に思ったイェーガーは腰掛けていたイスから飛び降り、遊星の元まで駆け寄ってみた。
そして彼の口元へ耳を近付ける。すると遊星の呟いていた独り言の内容が聞こえてきた。

「違うんだ、ブルーノ。俺は……忘れてたんだ……！」

「ブルーノ、俺はどうしたらいい……、答えろ、答えてみろブルーノ……！」

「……おい、デュエルしろよ」

なんとも支離滅裂な言葉を呟き続ける遊星。思わずイェーガーの頬も引き攣ってしまう。
だが、何時までもこのままと言うのも具合が悪い。此処に来たと言

うことは、何かしら用事があったのだろう。

「不動博士。一体どうしたのですか」

「――――っ！　此処は……ッ！　イェーガー！」

「やれやれ。ようやく元に戻ったのですね」

どうやら遊星は、ここがイェーガーの自室だと認識できていなかったようだ。
頻りに部屋の中をきょろきょろと見渡している。そんならしくない遊星の姿に、イェーガーは苦笑した。

「それで、私に何か御用ですか？」

「あ、あぁ……」

再びイスに腰掛け、両手をテーブルの上で組みながら遊星に訊ねる。
すると遊星も落ち着きを取り戻したようだ。一息吐いた様子で、イェーガーにとある事情を訊ねる。

「“ＤＭミッドチルダ杯”って言う大会を、知っているか？」

「“ＤＭミッドチルダ杯”ですか？　存じ上げませんねぇ……」

遊星の口から飛び出してきた聞き慣れぬ大会名。思わず首を傾げてしまう。
すると遊星は僅かに肩を落とした様子だ。彼はその大会に、何か思い入れがあるのだろうか。

「その大会が、どうかしたのですか？」

「あぁ……。昔の仲間が新たに作ったチームが出るらしい。
そのうちの一人がどれほど強くなったか、興味があるんだ」

「そう言うことでしたか。……少し待ってください」

それだけ告げると、イェーガーは何かを思い出したかのように、テーブルの上の書類を漁る。
ガサガサ、ゴソゴソ。しばらくの間、イェーガーのテーブルの上の書類を漁る音だけが室内に響く。

と、どうやら目的の品物を見つけたのだろう。書類の山から、イェーガーが顔を出した。
良く見てみれば、彼の手の中には一枚の書類がある。一体何の書類なのだろうか。遊星は疑問に思う。

「“ＤＭミッドチルダ杯”と言う大会に心当たりはありませんが、
「ミッドチルダ」と言う地名ならば聞き覚えがあります」

「なんだって？」

「次元世界、ミッドチルダ。此処とは違う、曰く異世界にある世界の事ですよ」

遊星に次元世界ミッドチルダについて書かれた書類をイェーガーは手渡す。
するとそこには、ミッドチルダについて様々な事柄が事細かに書かれていた。

デュエルモンスターズのほかに、魔法と言うオカルト的なものが発達した世界。
科学技術もこの世界と同じくらい発達しており、両方の世界にそれほどの差は感じられない。

そしてその書類の中に書かれたとある文章。「数年に一度、大規模な大会を開催しています」との文字。
恐らく、これがフェイトの言っていたＤＭミッドチルダ杯なのだろう。ようやく手掛かりをつかんだ。

「イェーガー。頼みがある」

「頼み、ですか？」

「あぁ」

遊星の言葉に疑問を覚えたイェーガー。彼に向けて、遊星はコクリと頷く。

そう。まずは本当に、ミッドチルダで行われている大会がＤＭミッドチルダ杯なのか確かめなくてはらない。

そのために遊星は、まずはイェーガーにその次元世界――ミッドチルダへ行く方法を訊ねるのだった。

二話　「不動遊星の憂鬱」（後書き）

次回予告

地縛神戦からの疲れか。鬼柳は風邪をひいてしまう。
そんな彼を看病しようと、なのは、フェイト、はやて、リインフォースが大暴れ。

果たして鬼柳は無事に風邪を治すことが出来るのか。
そしてリインフォースは既成事実を作ることが出来るのか。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「鬼柳を看病しよう」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

三話　「鬼柳を看病しよう」（前書き）

今回はギャグ（？）回です。
若干ほのぼの？　それとも甘々？

三話　「鬼柳を看病しよう」

～海鳴市　八神家～

「緊急事態や」

昼間だと言うのに、薄いカーテンが閉められた八神家のリビング。
そこに車いすの上で両手の甲に顎を乗せたはやてが、おごそかな声でそう告げた。

その言葉に反応するのは同じく室内に居たなのはとフェイト。そしてリインフォース。
ちなみに他のメンバーと言えば興味が無いのか。シグナムはデッキの調整を。シャマルはキッチンで料理をしている。

「鬼柳兄ちゃんが風邪を引いてしもた」

「うん」

「緊急事態なの」

そして告げられる緊急事態の内容。それはこの八神家に居候している青年のことについてだ。
その青年――鬼柳　京介は少し前から体調を崩した様で、今朝から自室でげほげほと咳き込んでいる。

症状からして風邪らしい。鬼柳を診断したシャマルがそう言うのだから、そうに違いないのだろう。
当初はシャマルが回復魔法を使い、身体の代謝を上げるか考えていた。しかし、それをはやてが一蹴したのだ。

曰く「看病イベント。ここで好感度を一気にあげようや！」と。
それに賛同したのがなのはとフェイト。そしてリインフォースの三人だ。

なので現在、彼女たちはリビングで看病に対する作戦会議を行っているのである。
ちなみに現在、鬼柳の自室ではヴィータが鬼柳の様子を見ていた。
この中で比較的安全そうだからと言う理由である。

「私も鬼やあらへん。
ここは平等にチャンスを与えたいと思うんや」

「うぅ、はやてちゃん女神なの！？」

「神々しく見えるよ……！」

「流石は主はやて」

はやての言葉に、他の三人が崇める様な視線をはやてに向ける。
通常この様な場合、美味しいイベントを独り占めしたいと思うのが普通。

しかし、はやてはあえて他の三人を絡めることで平等にイベントを行おうとしたのだ。
抜け駆けされかけていた他の三人からすれば、この行為ははやてを崇めるに等しい行為だろう。

「それじゃひとまず、ルール決めよか。
無秩序でやったらグダグダになるしな」

「そうだね。でも、具体的にはどうするの？」

「そやな……」

そしてはやては後ろを振り返ると、ガサゴソと何かを漁る様な行動をとる。
一体何をしているのだろうか。なのはとフェイト、リインフォースはこてんと首を傾げる。

その数分後。「あった！」と言うはやての嬉しそうな声が聞こえ、はやてがなのはたちに身体を向ける。
するとはやての腕の中に、一枚の画用紙があるのが見えた。あの画用紙を探していたのだろうか。謎は深まるばかりだ。

「はやて、それは？」

「ふふん、これが今回のイベントでのルールやで」

「これが……」

はやてが差し出した画用紙を、なのはたちはそれぞれ覗き見る。
すると白い画用紙に、はやてが書いたのだろう。マジックで文字が描かれていた。

「過度なおお触り厳禁！」「脱ぐのはブラウスまで！」
「お粥は出来たて限定！」「リインフォース以外アダルトな行為はNG！」

など、様々な注意事項が書かれている。
その中でも最後の一文――アダルト関係を見つけ、リインフォースの頬が赤くなった。

どうやら頭の中でその様な行為を想像しているのだろう。彼女の息が妙に荒々しい。
なのはとフェイトはそんなリインフォースから距離を取ると、改めて画用紙を見直した。

「ねぇ、はやてちゃん。ここに書かれてないことなら、何しても良いの？」

「えぇよ。その代り、鬼柳さんの部屋に行く人はこの隠しマイクを付けて行くのが条件や」

「あ、あくまでマイクなんだ」

はやてが取り出した小さなマイクを手に取り、あからさまになのは

がホッとする。
それと言うのも、さすがに隠しカメラを付けたまま普段通りに振る舞えるほどなのはは図太くない。

それにしても、この隠しマイク然り、妙に大人な知識など、はやては何処から知識を得るのだろうか。
なのはとフェイトは互いに顔を見合わせて「うーん」と考え込むが、いくら考えても答えは出ない。

そしてなのはとフェイトがはやての持つ知識に付いての思考を放棄したところで、全員に隠しマイクが配られる。
それをそれぞれ胸元やスカートのポケットの中。服のワンポイントなどでマイクがあることを隠す。これでばれない筈だ。

「さぁ、後はくじ引きで行く順番を決めるだけやね。
ちゃぁんとくじも作ってあるよ」

はやてが取り出した四つの割りばしを、それぞれがランダムに引いていく。
皆が割りばしへ向けるのは真剣な眼差し。そしてそれぞれが割りばしをはやての手から引き抜く。

「さっすがはやてちゃん。それじゃ、私はこれ」

「これ、かな」

「私はこれで」

「なら、私が最後に残ったヤツやね」

はやての手から割りばしを取り出すと、サッと割りばしの下の方に書いてある番号に目を通す。

なのはは3番。フェイトは1番。はやてが2番でリインフォースが4番だ。

なんとも規則性のない並び順。

一番最初のフェイトは嬉しそうに頬を緩め、最後のリインフォースはソッポを向いている。

「ん、順番決まったみたいやね。そなら、鬼柳兄ちゃんの好感度ゲットイベント！

作戦名：オペレーション・鬼柳兄ちゃんラブラブメテオを発動や！」

「……」

「……」

「……うわ」

はやてが自信満々に、今回のイベントの作戦名を三人に告げる。

だが、返ってきたのは引き攣った様な顔となのはのドン引きした様子。

それを見てはやては――――

「わーっとるよ！
自分でも「ラブラブ」はないやろ！　ってツッコミ入れてたわ！」

涙を流しながら逆ギレするのだった。

※

「じゃ、邪魔するね……」

カチャリと小さな音を立てて、鬼柳の部屋の扉が開く。
まず先陣を切るのはフェイト・テスタロッサ。手にはリンゴの乗ったお盆がある。

どうやら鬼柳にリンゴの差し入れを持ってきた様だ。
なるほど。風邪で食欲が低下している彼にこの差し入れは有効かもしれない。

「ん……、フェイト、か……？」

「わ！　だ、ダメだよ寝てないと」

と、フェイトが部屋に入ったのに気がついたのか。鬼柳がゆっくりと身体を動かす。
それに慌ててフェイトが駆け寄り、無理に起きることはしない様に告げた。

それと言うのも、部屋に入るまでは何処か浮かれていたのに、今の体調が悪そうな鬼柳を見て反省したのだ。
鬼柳をベッドに寝かしつけると、彼の額に乗っていた濡れタオルを手に取る。彼の体温でか。濡れタオルは温くなっていた。

「……風邪、移るぞ……」

「だいじょぶだよ。ちゃんとうがいもしてきたし」

鬼柳の額から取った濡れタオルを、テーブルの上にあった洗面器の中の水に浸す。
どうやら少し前まで居たヴィータが使っていたものらしい。丁度良いのでフェイトが使う。

そしてじゃぶじゃぶと簡単にタオルを洗うと、水気を切って鬼柳の額に乗せた。
すると、濡れタオルの冷たさが気持ちいいのか。鬼柳が気持ちよさ

そうに目を細めた。

「……」

「ふぅ……」

気持ち良さそうに息を吐く鬼柳を、フェイトはジッと見つめる。
今まで元気な姿の鬼柳しか見たことが無いので、元気のない鬼柳は初めて見た。

普段のクールさが漂う姿は成りを潜め、ここに居るのはただの青年の様な気がしてくる。
年相応の寝顔を見せる鬼柳の姿は何処か幼く、普段の鬼柳とはまた違った雰囲気を醸し出している。

「……それで、フェイトは何しに来たんだ？
生憎と、体調が悪くてあんまり構えないぞ……」

「あ、良いんだよ。今日は看病に来たから」

「！　……看病、か」

フェイトが今日の目的――看病の言葉を口にすると、鬼柳が懐かしそうに目を細めた。
一体何を懐かしがっているのだろう。疑問に思い、フェイトは鬼柳の瞳を覗き込んでみる。

だが、返ってくるのは穏やかな瞳。その瞳にフェイトは映るが、実際にフェイトを見てはいない。
まるでフェイトに誰かを映し出しているかのようだ。一体誰のことを思い出しているのだろう。疑問に思う。

「鬼柳？」

「……懐かしいな。
昔の仲間にも、こうして看病してもらったことが、あったっけ」

「……それって、初代チームサティスファクションのこと？」

「……あぁ」

そして鬼柳は、熱で辛いだろうに。フェイトに昔話を語って聞かせてくれる。
いかに元気な鬼柳と言えど、一度くらいは風邪を引く。そのとき、初代のメンバーに看病して貰ったそうだ。

と言うのも、サテライトでは助けあわなければその日の食事さえ取るのが困難だ。
おかげで遊星やジャック、クロウには多大な迷惑を掛けたと、鬼柳は苦笑いを浮かべながら告げる。

「色々と、バカやったなぁ、俺も」

「……楽しかったんだね」

「ん？　……そうだな。楽しかったよ」

フェイトの言葉に疑問を浮かべるが、すぐに口元に笑みを浮かべながら答えた。

紛れもなく、当時のことは楽しかった。気心の知れた仲間とバカをやる。それはとても楽しい。

「あ、そうだ。ねぇ、鬼柳。不動　遊星って言う人のこと、教えてよ」

「遊星……？　なんでフェイトが遊星のことを知ってるんだ？」

「えっとね……。前に闇の書に閉じ込められた時に会ったんだ」

そしてフェイトは、以前に闇の書に閉じ込められていた時の顛末を語る。

母親から、見知った仲間から浴びせかけられる罵声と汚物。そして現れたアリシア。

その後は遊星と出会い、流されるままにライディング・デュエルを開始。

新たな切り札であるスターダスト・ドラゴン／バスターを召喚するが、遊星の切り札には敵わなかった。

そして再び遊星と会い見えることを約束し、そのときにフェイトが

リベンジすると誓った。
そこまでを話終えると、鬼柳は「へぇ」と楽しそうな表情を浮かべる。それにフェイトは首を傾げた。

「≪シューティング・スター・ドラゴン≫、それにアクセルシンクロか。
……追いつけるのか、フェイト。遊星は大分、遠くに行っちまってるみたいだけど」

「……うん、追いつくよ。そして認めてもらうんだ。鬼柳の隣に立って歩けるように、って」

「……そうか」

フェイトのその言葉に、鬼柳が照れたようにソッポを向いた。
若干、頬が赤くなっている。それにフェイトが気づき、鬼柳に訊ねる。

「ど、どうしたの鬼柳！」

「何でもないさ。……頑張れよ」

「！　うん！」

鬼柳の言葉に、フェイトは嬉しげに声を上げた。
フェイトは看病の続きをしようと、持ってきて置いたリンゴに手を

伸ばす。

そして手に取ったリンゴを持ってきたナイフで適度な大きさに切ろうとしたとき。

――――プー！

と言う、無機質な電子音が部屋の中に響き渡った。

頭の天辺に「？」マークを浮かべる鬼柳。そして鬼柳とは対照的なフェイト。

フェイトは自分の腕に嵌めている腕時計に視線を向け、「あぅ、時間切れだ」と小さく呟いた。

一体何がどうしたのだろうか。鬼柳は疑問に思うが、フェイトはしょんぼりと肩を落としているだけ。

「じゃあね、鬼柳。私、もう行くね」

「あ、あぁ……」

「うぅ……くすん」

フェイトは相変わらず皮を剥けなかったリンゴを手に取ると、トボトボと出口に向かう。

その様子があまりに哀れで、鬼柳は「そのリンゴは差し入れじゃなかったのか」と言うツッコミを入れられなかった。

※

「くすんくすん。もう少し時間があれば良かったのに……」

場所は変わって八神家のリビング。そこへ鬼柳の看病を終えたフェイトが戻ってきていた。
彼女はリビングに戻ってくるなり、部屋の隅で体育座りで泣いている。よほどリンゴを剥けなかったのが悔しいらしい。

だが、室内に居る残りのメンバー――なのはとリインフォースはフェイトのことなど眼中にない様だった。
彼女たちが見つめるのは、リビングの中央に置かれたラジオの様なもの。ここから隠しマイクを通じ、鬼柳達の声が聞こえるのだ。

『鬼柳兄ちゃん、入るでー』

『ん、あぁ……』

ラジオの様なものから、やや不明瞭ながらもはやてと鬼柳の声が聞こえる。

その様子になのはとリインフォースはグッと息を呑んだ。一体、どの様な看病をするのか。

『じゃじゃーん！　はやてちゃん特製のお粥やってー！』

『……随分、テンションが高いな』

『テンション上げんと、鬼柳兄ちゃんのテンションがだだ下がりやからな』

「だけどそれは、テンション上げ過ぎな気がするの」

聞こえてくるはやての声に、なのはがボソリとツッコミを入れる。それにはリインフォースも同意なのか。静かに首を縦に振っていた。

「だが、お粥の差し入れは悪くないな。食欲が無い時に、無理なく食べられるからな」

「うわーん！
リンゴを差し入れた私って一体ー！？」

「フェイトちゃん……」

リインフォースの無難な言葉に、部屋の隅でフェイトがとうとう泣き出してしまう。
その様子を見て、なのはが「アハハ……」と苦笑いを浮かべた。別

にフェイトの方法が間違っていた訳でもない。
リンゴもリンゴで、食欲が無い時に食べるのに適した食べ物だ。
今回はただ、リインフォースの言葉が足りなかっただけに過ぎない。
面白いので言わないが。

『それじゃはい、あーん』

『!?　あ、あーん……?』

「「「あーん!?」」」

そしてラジオの様なものから聞こえてくる声に耳を澄ませていると、
はやてのとんでもない声が聞こえた。
スピーカーの向こうから聞こえてくる鬼柳と同様に、なのはたちも
また口を大きく開けて驚いている。

なのはは慌てて自らの動揺を抑え込むと、内心で「しまった」と言
う表情を浮かべた。
はやてはお粥の差し入れ。並びに「あーん」をしてはいけないと言
うルールは作っていない。

作ってあったのは「お粥は出来たて限定!」と言うルールだ。
そのほかの事なら、何をしても良いとはやては言っていた。つまり
気付けなかった自分たちの過失。

フェイトもそれに気がついたのだろう。部屋の隅でくすんくすんと
泣きながら、遺書の様なものを書いている。

ひとまずそれは後で没収しようとなのははは決意すると、スピーカーから聞こえてくる二人のやり取りに耳を澄ました。

『いや、でもな……』

『いやなら口移しでもえぇけど』

『じゃあ、あーんで』

「切り替え早っ！」

スピーカーから聞こえてきた鬼柳の言葉に、思わずなのはがツッコミを入れた。

だが、鬼柳の選択も妥当なところだろう。口移しで食べさせられるくらいなら、はやてに食べさせてもらった方が良い。

『えへへ。はい、あーん』

『……あーん』

「ふにゃぁあああああ！！
き、鬼柳さんがどんな顔をしているのか気になるよぉおおおおおっっ！！」

「くっ、声だけと言うのがここまでもどかしいとは……！」

スピーカーから聞こえてくる鬼柳の声は照れているのか。声が上ずっている。
それを聞き、なのはが頭を抱えながらゴロゴロと床を転がった。見たい。でも見れない。

ここに来て、初めてマイクだけでなく隠しカメラが欲しいとなのは心底思う。
見たい。頬を赤く染めて照れているであろう鬼柳の姿を。だが、聞こえてくるのは音声のみ。

これほど悔しいことはない。
それはリインフォースも同じなのか。悔しそうに拳を握っていた。

『ん、うぅ……、あ、案外恥ずかしいな』

『えへへー。私は鬼柳兄ちゃんに出来て満足やけどな』

「照れてる……声だけで鬼柳さんが照れてるのが分かるよぉ！」

頭を抱えたまま、聞こえてきた声になのはがツッコミを入れる。
隠しマイクに気づいていないせいだろう。鬼柳の声は凄く自然体だ。

故に、照れていると言うのも声を聞くだけで分かる。
今すぐ乱入して良い雰囲気をぶち壊したい。だが、それはルールで出来ない。

ラジオのスピーカーから流れてくる鬼柳の照れた声とはやての楽しそうな声。

二つの声を聞きながら、なのははどうすることも出来ずにゴロゴロと床の上を転がるのだった。

※

「今度はなのはか。今日は来客が多いな」

「えへへ……、お邪魔しまーす」

愛想笑いを浮かべながら、なのはがトコトコと鬼柳の自室に入る。すでにはやての持ち時間は終了しており、現在は三番手であるなのはの番だった。

後ろ手に扉を閉めると、トコトコと軽やかな足取りで鬼柳の寝ているベッドの隣に歩み寄る。

鬼柳も鬼柳で連続でフェイトとはやてが訪れたせいだろう。体調が悪そうにしながらも、なのはの事を迎え入れてくれる。

「寝てなくて良いの？」

「仕方ないだろ。
寝てると誰かさん達が何回も来るんだからよ」

「あぅ……」

鬼柳の言葉に、なのはがしょんぼりと肩を落とす。たしかにそれは失敗かもしれない。
一定間隔の休憩を挟めば良かったと、なのはは今さらながらにそう思う。

だが、なのはが肩を落として落胆していると。そんな彼女の頭にぽん、と手が乗せられた。
誰のものかは理解できる。なにせ、この部屋にはなのはと鬼柳しかいないのだから。

頭から伝わる若干暖かい手の温もりを感じながら、なのはは恐る恐る視線を上げた。
視界に飛び込んでくるのは、額に汗を浮かべながらも笑みを浮かべている鬼柳の姿だ。

「けど、迷惑には思ってねーよ。
一人で居るってのは、寂しいからな」

「！　うん、えへへ……」

鬼柳から掛けられた言葉になのはは一瞬ポカンとし、すぐに笑みを浮かべた。

鬼柳に気を遣われたのが分かったからと言うのもあるが、彼に迷惑じゃないと思ってくれたから。

なのははベッドの隣に腰を下ろすと、頭に乗っていた鬼柳の手をギュッと掴んだ。
するとそれに応える様に、鬼柳が少しだけ力を込めて握ってくる。
なのはもまた握り返した。

ぎゅ、ぎゅ。ぎゅ、ぎゅ。
鬼柳が握ればなのはが握り。なのはが握れば鬼柳が応える。

それがまるで、恋人同士の秘密のサインの様に思え、なのはの頬が赤く染まる。
そう言えば、こうして鬼柳の手を握ったのは何時振りだろう。もう大分、握っていない様な気がする。

「こうしてると、寂しくないよね」

「あぁ。風邪を引いたときは心細くなるって言うが、そんなことはねぇな」

「でへ」

思わず頬が、だらしなく垂れてしまう。しかし、それが気にならないほど嬉しいのだ。
なのはも以前に風邪をひき、母親や鬼柳に看病をされたことがあるので分かる。

風邪を引き、一人で寝込んでいると気持ちがどんどんとイヤな方向へと向かってしまうのだ。
治らないのではないか。症状が悪化するのではないか。友達に迷惑を掛けてはいないか、などなど。

けれど、誰かが傍に居て看病をしてくれるだけで、その不安が吹き飛んでしまう。
早く元気になって遊びたい。友達と一緒に遊んだり、遅れた勉強を取り戻すために勉強したり。

暗い感情が一気に明るくなる。ただ、誰かがすぐ傍に居ると言うだけで。
それを鬼柳もまた、感じてくれているに違いない。それを思うと、なのはの頬は緩むのだ。

「あ、これ」

「ん？　あぁ、温くなってるな」

「洗い直そっか」

なのはが気がついたのは、鬼柳の額に乗せられている濡れタオル。
恐らく、フェイトが代えてから一度も代えていないのだろう。既に温くなっている。

せっかくだし冷えた方が良いだろうなと思い、なのはは鬼柳と握っていた手を離そうとする。
けれど、手は離れなかった。鬼柳が離さなかったから。思わずなの

はの表情が呆気に取られる。

「すぐに離すなよ。……寂しいだろ」

「――――～～っ！　うにゃぁ！」

僅かに口元に笑みを浮かべながら、鬼柳がなのははにそう告げた。
鬼柳から告げられたその言葉に。向けられた表情に。なのはの頭が沸騰する。

こんな風に求められることなど初めてで、なのははどうしたら良いのか分からない。
ぐるぐると目を回しながらも、ひとまずあげかけていた腰を下ろし、鬼柳の隣に落ち着く。

するとそれだけで、鬼柳が嬉しそうに笑うのだ。それにとうとうなのはの頭が沸騰しはじめる。
こんな表情の鬼柳など初めて見る。どんな答えを返せば良いのか。
どんな対応をすればいいのか分からない。

けれどなんとなく、彼とこの時間が続けばいいとなのはは思った。
二人の呼吸が聞こえる部屋の中で、静かに鬼柳の看病が出来れば。
それだけで良い。

そして鬼柳の浮かべた笑みになのはが笑みを返そうとしたとき。
タイミングを見計らったかのように、「プー」と無機質な電子音がなるのだった。

※

「えへ、えへへ……」

「なんや、腹立つな」

だらしなく頬を緩めたなのはを、はやては若干苛立ちながら見据えた。

それと言うのも、鬼柳のなのはに対する対応だけが自分たちと違っていたのだから仕方ない。

あくまで自分たちには看病をさせてくれるが、なのはだけは違う。

なのはに看病をしてもらいたい。そんな気持ちをはやては僅かに感じ取ったのだ。

故にはやての機嫌が悪くなるのも仕方ないことかもしれない。

ちなみにフェイトと言えば、部屋の隅で不貞寝をしている。今日のイベントでは貧乏くじを引いたようだ。

『じゃ、邪魔するぞ……』

『あぁ、空いてるから入ってくれよ』

「……鬼柳さん、だんだん対応がおざなりになって来てるね」

依然としてテーブルの上に置かれているラジオの様なもの。
そこから流れる音声をなのはたちは集中して聞く。今回はリインフォースだ。

すでに三度も来訪を受け、鬼柳としても疲れている様だ。
何処か呆れた様な声音がラジオのスピーカーから聞こえてくる。

「そりゃ、休みなしで三人連続でお見舞いやからな。
キレるな、言う方が無理やろ」

「やっぱり、適当にインターバルを入れるべきだったかな」

『具合は大丈夫なのか？』

今回のイベントでの失敗。それは鬼柳を訪問するタイミングだった。
もう少し時間を置いて訪問すれば、鬼柳も落ち着いて対応できたかもしれない。

ひとまず次回からはそれに気を付けようと言う結論をはやては出す。
そして再び、ラジオのスピーカーに耳を寄せた。聞こえるのはリインフォースの鬼柳の体調を心配する声。

『あぁ。ただ、朝から汗掻いてて気持ち悪いくらいだ』

『ぬ。それはいかんな。汗を掻いたまま寝ていては、余計に悪化するぞ』

『と言っても、着替える暇がない』

『ダメだ。早く着替えないと悪くなるぞ。脱げ』

「「「ッ！！！」」」

ずどがぴしゃぁあああん！　リビングで聞いていた三人の少女の頭に、雷が落ちる。

部屋の隅で不貞寝していたフェイトも起き出し、スピーカーから流れてくる声に興味津々だ。

今、リインフォースは何と言った？　脱げって言った。はやてとなのはの間でアイコンタクトが交わされる。

そして返ってきた答えに、はやてとなのは、そしてフェイトの頬が赤く染まる。なんて美味しいイベントだろうか。

スピーカーの奥からは鬼柳の抵抗する声が聞こえるが、リインフォースの正論に勢いを削がれている。

このままでは、リインフォースに着替えを手伝ってもらうことになるだろう。それを思うとはやては悔しい思いだ。

「私はバカや！

なんで……なんで隠しカメラを買ってこなかったん！？」

「き、鬼柳さんの裸……にゃふ」

「……」

はやては思い切りテーブルに拳を振り下ろし、なのはは鼻から鼻血をぴゅうっと噴き出す。

残るフェイトと言えば、あまり見たことのない鬼柳の裸を想像しているのか。心ここに在らずだ。

『……なら、背中だけだからな』

『う、うむ』

「背中！？　なにがどうして背中なん！？」

「き、聞いて無かったから分からないよ！」

そして再び聞こえてきた鬼柳とリインフォースの言葉に、三人の少女たちは騒々しくなる。

一体なにが背中だけなのか。彼らは一体何をしているのか。映像がないので分からず、ヤキモキする。

そのうちガサゴソと衣擦れの音が響き渡り、思わず八神家のリビングに沈黙が降りた。

スピーカーから聞こえてくる衣擦れの音が酷く心を乱す。まるで今

からいけないことをする様な。そんな雰囲気だ。

そして生唾を飲みながら、スピーカーに耳を寄せる三人の少女たち。

次に聞こえてきたのはチャポンと言う水の音だった。次いで、じゃぶじゃぶと言う音が聞こえる。

『ん……、良い気持ちだ』

『そうか？　それならば良い』

「なるほど。鬼柳さんの身体拭いとるみたいやね」

「うぅ……、リインフォースさんだけの特権なの」

スピーカーから聞こえてきた水の音。そして鬼柳の口から漏れた気持ち良いという言葉。

それらから察するに、リインフォースが鬼柳の身体をタオルで拭いているのだろうと言う結論に至った。

それを聞き、なのはが悔しそうな声を上げる。なにせ今回、なのはたちに身体を拭くと言う行為は許可されていない。

これは三人よりも出遅れているリインフォースに対する救済措置なのだが、今回それが裏目に出てしまったようだ。

恐らくマイクの向こう側では、リインフォースが頬を赤く染めながら鬼柳の背中を拭っているのだろう。

それを想像するといてもたっても居られない。今すぐ部屋に乗り込みたいが、それはルールで禁止されている。

『それにしても、格好いい背中だな。
大小様々な傷は、男の勲章と言ったところか』

『そんなんじゃないさ』

『そうなのか？　だが――――』

と、そこでリインフォースの言葉が途切れる。
一体どうしたのだろう。なのはたちは耳をスピーカーに寄せる。

『お前の背中は、とても広くて頼もしいぞ』

『――――！　お、おい！　背中にくっつくな！』

そして聞こえてきた二人のやり取りに、僅かばかりなのはたちが上の空になった。
背中にくっつくな？　と言うことはつまり、リインフォースは鬼柳の背中にくっついていると言うことか。

それを想像すると、なのはの髪の毛がブワァアと逆立つ。なんて羨ましいのだろうか。
自分が体験したのはせいぜいがおんぶくらいなのだ。鬼柳の裸の背中にくっついたことなど無い。

はやてもまた、羨ましそうな表情でラジオのスピーカーを見つめる。

それにしても、リインフォースの雰囲気がおかしい。普段ならいきなり背中にくっつくと言うことはしないはず。

『良いだろう？　減るものでもない』

『ど、どうしたんだ、リインフォース。様子が変だぞ』

『変じゃない。至って普通だ』

と、今度は何処か拗ねた様なリインフォースの声が聞こえた。
リインフォースの持つ隠しマイクからは、ごそごそと衣擦れの音が聞こえる。

どうやら更に鬼柳と密着したらしい。一体二人は今どんな様子なのか。
それを想像すると、はやてたちは叫びだしたい衝動に駆られてしまう。

『む。落ち着きが無くなったぞ。どうした？』

『せ、背中に当たってるからだろ……、くそっ』

『――――～～っ！　な、おま！』

依然として様子のおかしいリインフォースが奮闘しているのか。
鬼柳が上ずった声でリインフォースに反論した。その内容になのは

たちは首を傾げる。

だが、目線をすぐ下――自分の胸元辺りに向けてみると、鬼柳の言葉の意味を理解した。

鬼柳の背中に当たるもの。それはリインフォースの胸元に実っているたわわな二つの果実のことだろう。

それを押し付けられ、鬼柳も慌てていると言うことか。意外と可愛らしい反応をする。

だが、なのはやはやては鬼柳の可愛らしさに頬を緩めることが出来ない。

「はやてちゃん、早く大人になりたいね」

「そやね。そしたら私のおっぱいで鬼柳兄ちゃんを骨抜きにしとるのに」

「鬼柳は胸は大きい方が好きなのかな……？」

三者三様の様子を見せるリビングは、既に混沌と化していた。

なのはとはやてはしみじみと早く大人になりたいと語り、フェイトは己の胸に手を這わせている。

なんともシュールな八神家のリビング。プレシアやアルフ。

それにシグナムやヴィータが居なくて正解と言うところだろうか。

『くっ！　だ、だが……遅れを取り戻すには頑張るしかない……！』

『お、おい』

そしてスピーカーから聞こえてくるのは、退いてたまるかと言うリインフォースの声。
その言葉の内容に、ようやくなのはとはやては合点が行った。

つまるところ、リインフォースはただ奪われたアドバンテージを取り戻したかっただけなのだ。
既に好感度ではなのはやフェイト、はやてには負けている。そして今回の看病イベントでも負けた。

故に、アドバンテージを取り戻すことに必死なのだろう。
その結果、鬼柳が大変なことになっているのだが。

そしてリインフォースと鬼柳の押し問答はシグナム達が帰宅するまで続き、
リインフォースの看病のせいでか。鬼柳の風邪が余計に悪化し、数日の間寝込むことになるのだった。

『こんなんじゃ……満足、できねぇ……ぜ……』

『や、やはり胸は小さい方が……！』

『……そっちの意味じゃねぇ』

三話　「鬼柳を看病しよう」（後書き）

次回予告

鬼柳の体調も回復し、とうとう次元世界の大会になのはたちは乗り込む。
だが、参加した次元世界でのデュエルは地球のデュエルをはるか上を行っていた。

フルマラソンに匹敵する距離を走りながらデュエルするランニングデュエル。
その過酷なデュエルになのは、フェイトと次々に倒れて行く。

そしてトップを独走する元気なお爺さん。
果たしてなのはたちはおじいさんに追いつくことが出来るのか。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ランニングデュエル」

ライディング……ランニングデュエル・アクセラレーション！

四話　「ランニングデュエル」（前書き）

今回は微妙にギャグ回……なのか？
ちなみにランニングデュエルの発案者はジャックじゃないかと思ってます。

四話　「ランニングデュエル」

～次元世界　某所～

「ふぅ。ようやくこの時が来たな」

普段のロングコートを身に纏い、鬼柳は眼前に広がる人の波を見つめた。
先日引いた風邪はすっかり治まり、今日は次元世界の大会に初挑戦する日なのだ。

彼の後ろには何故か体操服姿のなのはとフェイト。ちなみに何故かブルマを着用している。
後ろに控える彼女たちもやる気満々で、なのはとフェイトはそれぞれデッキの調整に余念が無い。

「それにしても、なんでフェイトとなのははブルマなんか穿いてるんだい？」

「……」

「プレシア、アンタに聞いてるんだよ！」

「えぇ！？　わ、私！？」

そしてその二人の少女の後ろでは、アルフが隣に立っていたプレシアに掴みかかっていた。
プレシアに掴みかかったアルフの瞳は烈火のごとく燃えている。だが、それは仕方のない事だろう。

何故ならば、プレシアの手には小さなビデオカメラが握られており、その視線は絶えずなのはとフェイトに向いているのだから。
アルフが何度ガクガクとプレシアを揺すろうとも、そのカメラの視線だけは決して逸れることは無い。ある意味無駄な才能を発揮している。

「やっぱり、デュエルするなら動きやすい服装じゃないと」

「ならいつものバリアジャケットでも良いだろー！？」

「……そうね。間違っていたわ」

「お、珍しく改心？」

ガクガクとプレシアの首を揺さぶっていたアルフの腕から力が抜ける。
そしてプレシアを掴んでいた腕を離すと、プレシアは静かに顔を俯かせた。

手に持っていたビデオカメラは電源を切り、持ってきて置いたポーチの中に仕舞いこむ。
これでなのはたちの映像を記録することもないだろう。アルフはホッと、人知れず安堵する。

「やっぱり、フェイトはバリアジャケットの時のあのレオタード&ぺったんこ！
そんでもってニーソックスに包まれた太股がグッジョブよね！
は、鼻血が出そうだわ！
さらになのはさんはスカート姿で空を飛ぶなんて、なんて大胆なの！？　母さんはもう鼻血が出たわぁ！」

「えぇい！　やっぱり頭はそればっかりか！
来なよプレシア！　アタシがアンタを修正してやる！」

「やれるものならやってみなさい！」

そして鬼柳達の後方で、アルフとプレシアによる二人の少女の肖像権を守る決闘（デュエル）が始まった。
アルフは序盤から融合・ミラクルフュージョンで場を圧倒し、プレシアにアドバンテージを与えない。

珍しくアルフが本気でプレシアに対して怒った様だ。プレシアは何もできずにライフを削られていく。
だが、そんな決闘も観戦者がいなければただの遊びだ。事実、鬼柳達はアルフ達から離れ大会の受付を行っている。

「……ランニング・デュエルか……」

「あぅ。わたし、走るの苦手だよぅ……」

受付で白い番号札を貰った鬼柳達。
そして聞かされたのはランニング・デュエルと言う聞き慣れぬ単語だった。

なのはは受付でランニング・デュエルの意味を聞き、がっくりと項垂れている。
ランニング・デュエル。それはDホイールがまだ浸透していない世界で行われている新たなデュエルの方法である。

と言うのも、特に難しい何かがあるわけではない。ルールは簡単。
走るだけなのだ。
自らの足で地面を駆け、ゴールを目指しつつ相手とデュエルをする。
単純明快なデュエルの方法。

だが、なのはのその表情は暗い。それは仕方のない事だろう。
何故ならば、なのはは運動が苦手なのだ。一般的に運動音痴と言われるほど。

学校の校庭を走れば一周でへろへろ。二週目以降は走ることすらできなくなる。
跳び箱を飛ぼうとすれば、飛べずに跳び箱に突っ込む始末。水泳では二十五メートル泳ぐのがやっと。

そんななのはが、ランニング・デュエルと聞いて嬉しがれるはずがなかった。
どんよりと暗いオーラを漂わせながら、ぶつぶつとデッキの調整に勤しんでいる。

「うにゅ～～……」

「？　どうしたんだ、フェイト」

「……なんだか、むずむずする」

一方、運動が苦手ではないフェイトと言えば、むずむずと両足を擦り合わせていた。
穿き慣れないブルマに手こずっているのか。眉を八の字にして困り顔を浮かべている。

鬼柳はそんなフェイトにチラ、と視線を移したが、すぐに視線をフイッと逸らした。
どうやらフェイトのブルマ姿を見慣れていないせいなのか。彼女を直視できないらしい。

「……」

ひとまず大会開始までにいつものバリアジャケットに着替えてもらおうと、鬼柳は内心でそう思う。
だが、脳裏にいつものフェイトのバリアジャケット姿を思い浮かべると、段々と言葉数が少なくなってきた。

見慣れているはずのいつものバリアジャケット。だが、意識してしまえばしまうほど鬼柳の頬が赤くなる。
身体を覆うレオタードの部分。腰回りを覆うピンク色のひらひらしたスカート。彼女の太股を覆うニーソックス。

意識すればするほど、不味い服装をしているんじゃないかと鬼柳は思う。
これは後でプレシアを修正しなければならない。鬼柳は心の中でコクリと頷いた。

「（ひとまず後で、チームサティスファクション時代に着てたジャケットでも作っておくか）」

頭の中に思い浮かべるのは昔、遊星達と着ていた茶のジャケットだった。
対戦していたデュエルギャングの面々からは「センスが無い」などと言われていたが、これはこれでアリだと鬼柳は思っている。

今度材料を買って来て皆の分を揃えようと鬼柳が意気込んでいると、盛大なファンファーレが鳴り響いた。
どうやら今から大会が始まるらしい。鬼柳は両足をもぞもぞしているフェイトと、落ち込んだ様子のなのはを連れて会場に向かう。

会場は海鳴市にあった、野球ドームほどの大きさ。そこに数々のデュエリストが勢ぞろいしていた。
首から目玉の様なマークの着いた逆三角形のアクセサリを下げている青年。ポリポリとメンマを食べている女性など様々だ。

「……ん？」

と、開会式が行われるであろう会場へと足を運ぶと、会場の片隅に口に呼吸器の様な機器を取りつけた老人が居た。
その老人も大会に参加するのだろうか。鬼柳は疑問に思ったが、その老人の鋭い眼光に思わず考えを改める。

あの眼光の鋭さは紛れもない強者のもの。恐らく自分と同等。もしくは自分よりも実力は上だろう。
コイツは面白くなってきたな。鬼柳は心の底でそう呟くと、ニヤリと口元を緩め、指定された位置へと向かうのだった。

※

「――――っと。こんなもんか」

開会式を終え、鬼柳達は今グラウンドに整列している。
それぞれ腕にデュエルディスクを装備し、いつでもデュエルが出来る状態だ。

ぐっ、ぐっと伸ばしていた足を元に戻し、鬼柳もまた腕にデュエルディスクを嵌め直す。
その後ろではなのはとフェイトも同様に柔軟運動をしており、いつ

でもランニング・デュエルが出来る。

「えっと、鬼柳」

「どうした？」

「特にルールはスタンディング・デュエルと変わらないよね？」

「……あぁ」

鬼柳の後ろでぐっ、ぐっと片足ずつ伸ばしながら、フェイトが訊ねる。

そう。今回のランニング・デュエルは変則的なスタンディング・デュエルに近い。

なのでライディング・デュエル専用の魔法カード――スピード・スペルは使用しないのだ。

結果として、鬼柳やなのはたちはいつも使い慣れたデッキで挑むことが出来る。だが、デメリットもあった。

それは「エンジェル・バトン」や「シフト・ダウン」などのドローカードを使用できないと言うこと。

手札増強カードが必要ない鬼柳は良いが、なのはやフェイトは良くデッキを調整しなければ手札が無くなる。

いかに手札を温存し、速いターンで相手を倒すか。

それが今大会においてのカギだった。

「それにしても、フェイト……」

「？　どうしたの？」

「……この大会が終わったら、新しい体操服を買いに行くぞ」

「え、鬼柳が選んでくれるの？　やったぁ！」

フェイトは鬼柳の言葉に、無邪気に笑う。
だが、鬼柳は愛想笑いしか浮かべられなかった。

何故か。それは、体操服姿のフェイトをカメラに収めようとする不埒な輩が原因だからだ。
幸いにも、不埒な輩の気配を察知したプレシアやアルフが縦横無尽に飛び回り、全てのカメラが没収されているが。

何はともあれ、いつまでもなのはやフェイトの肌を露出させている訳にもいかないと、鬼柳は思い直す。
勝つにしろ負けるにしろ、大会の後にやることは一つだけだ。腕にデュエルディスクを装着し直し、開始宣言の合図を待つ。

「……来たな」

そしてフェイトやなのはが柔軟を終え、腕にデュエルディスクを装着したとき。
会場の壇上に、長身の男が現れた。どうやら彼が今大会における、

最高責任者の様だ。

彼は壇上に姿を現すと、「スッ」と腕を空へと伸ばす。それは「用意」の合図。

知らず知らずのうちに鬼柳達は身体を沈みこませ、いつでも駆けだせる準備をする。

そして――――

――――パァン！

甲高い火薬が破裂する音と同時に、鬼柳たち決闘者（デュエリスト）はゴールを目指して駈け出した。

※

「ふぅ。よくもまぁここまでカメラを隠し持ってるねぇ……」

アルフは呆れた表情で、手に持っていたカメラをぐしゃりと握りつ

ぶした。
彼女に特に罪悪感などはない。当然だ。なにせこのカメラで彼女の主人を盗撮されたのだから。

だが、こうしてカメラを破壊すれば情報が流出する事もないだろう。
アルフははぁと重たいため息を吐き出しながら、予約しておいた観客席へと向かう。

するとそこには、既にカメラを破壊し尽くしたのだろう。プレシアの姿があった。
彼女は手に飲み物の入ったカップを持ち、スクリーンに映し出されている映像をジッと見ている。

「プレシアー。試合の様子はどうだい？」

「どうだいって聞かれても、まだ始まったばかりよ……」

アルフの言葉に、プレシアは呆れた表情でスクリーンから視線を移した。
そんなプレシアの言葉にアルフは「それもそうか」と納得すると、プレシアの隣に腰掛ける。

そして事前に買っておいたポップコーンを取り出し、もぐもぐと口に運びながらスクリーンに視線を移した。
スクリーンには、それぞれのペースで走る大会参加者の姿が見える。
なるほど。確かにまだ始まったばかりだ。

「あ、なのはがデュエルするみたいだよ」

「あら、本当？」

と、スクリーンの一角に見慣れた少女の背中を見つけた。
その少女とは、鬼柳の結成するチームサティスファクションのメンバーである高町なのは。

彼女は隣を走る少年と視線を合わせながら、軽やかな足取りで順路を駆けて行く。
片やなのはの相手である少年。彼は紅色の髪の持ち主で、左目に∞のマークの入った仮面を付けている。

『デュエルだぁ！』

「お、画面が大きくなった」

なのはと少年のデュエルが始まると、二人を映す映像が大きくなる。
どうやらデュエルをしている方から順番に映すつもりのようだ。少年の威勢のいい声が聞こえる。

スクリーンに映し出されるのは、なのはと少年――ルチアーノのバストアップの画像。
互いの初期ライフ４０００が表示され、先攻と後攻が表示される。
先攻は――――ルチアーノ。

『ボクのターン！』

ルチアーノ手札５→６

『ボクは≪スカイ・コア≫を守備表示で召喚！
カードを二枚伏せて、ターンエンド！』

スカイ・コア（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻　　０／守　　０
このカードは１ターンに１度だけ、戦闘では破壊されない。
このカードがカードの効果によって破壊された時、
自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。
その後、自分のデッキ・手札・墓地から
「機皇帝スキエル∞」「スキエルＴ」「スキエルＡ」「スキエルＧ」
「スキエルＣ」をそれぞれ１体特殊召喚する。

ルチアーノ手札６→３
場　スカイ・コア　伏せ×２

「≪スカイ・コア≫……」

少年――ルチアーノのフィールドに召喚されたモンスターを見て、
プレシアは眉を潜めた。
まったく聞かない名前のカードだ。一体どのような効果を持っているのか、予想がつかない。
ここは慎重に行った方が良い。そう思いプレシアは、画面に映るな

のはへと視線を移す。
だが、すぐにそれは無理だったと思い直す。理由は簡単。なのはがもはや虫の息だからだ。

『はふぅ、はふぅ……、わ、私の……ターン……』

なのは手札5→6

『わ、私は手札から……、≪太陽の神官≫、を……特殊召喚！』

なのはは肩で息を吐きながら、懸命にデッキからカードをドローした。
どうやら少ないなのはのスタミナが、あっという間に底を尽きそうな様だ。

『さ、さらに……≪氷結界の風水師≫……を、召喚……！』

「……後でなのはさんと運動しないといけないわね」

「そだね。走るのも苦手って……もう少し頑張ろうよ」

なのはのフィールドに、新たなモンスターが召喚される。
どうやらなのはは自身のエースであるレッド・デーモンズで勝負を決めるらしい。

たしかに、レッド・デーモンズ・ドラゴンならば戦況を有利に出来

るだろう。
だが、プレシアは自らの胸にイヤな予感を覚えた。このままシンクロ召喚させてはいけない。そんな思いが。
しかし――――

『れ、レベル５≪太陽の神官≫に……レベル３≪氷結界の風水師≫を、チューニング……ッ！』

氷結界の風水師が三つの緑色のリングとなり、場の太陽の神官を取り囲む。
その様子を見て、なのはと対戦していたルチアーノがニヤリと口元を歪めた。だが、なのはは気づかない。

『王者の鼓動、今……ここに列をなす……ッ！　天地鳴動の力を、見せてあげる……！
　シンクロ、召喚！　全てを……破壊し尽くして、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！』

『！　コイツは……！』

なのはのフィールドに、赤き悪魔が舞い降りる。その姿は「力」そのもの。
その紅魔竜を見つめ、対戦していたルチアーノが驚いた表情を浮かべた。

だが、すぐに気を取り直すと依然として余裕な笑みを浮かべる。
さぁ、早く攻撃して来い。まるでそう誘っているかのような笑顔だ。

『バトル……ッ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫で、≪スカイ・コア≫を攻撃！
灼熱のクリムゾン・ヘルフレアァァァァァ！！』

レッド・デーモンズ・ドラゴンが、ルチアーノの場のモンスターに攻撃する。
その手に灼熱の炎を宿らせて、レッド・デーモンズ・ドラゴンは渾身の一撃を叩きこんだ。

『≪スカイ・コア≫の効果発動！
このカードは1ターンに1度まで、戦闘では破壊されない！』

『だ、だけど……！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫の効果発動！
このカードが守備表示モンスターを攻撃した場合、ダメージ計算後に相手の守備モンスターを……全破壊する！
デモン・メテオ！！』

レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果により、ルチアーノのスカイ・コアが破壊される。
やはり破壊力と言う点に関しては、レッド・デーモンズ・ドラゴンは他の追随を許さない強さだ。

だが――――

『キッヒャッヒャ！　この瞬間、≪スカイ・コア≫の効果発動！
このカードがカードの効果で破壊された時、自分のデッキ・手札・墓地から
≪機皇帝スキエル∞≫、≪スキエルT(トップ)≫、
≪スキエルA(アタック)≫、≪スキエルG(ガード)≫、≪スキエルC(キャリア)≫を特殊召喚する！』

機皇帝スキエル∞（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻　　０／守　　０
このカードの攻撃力・守備力は、このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する「ワイゼル」・「グランエル」・「スキエル」と名のついたモンスターの攻撃力分アップする。
このカードは相手のカードの効果の対象にならない。
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスターを
装備カード扱いとしてこのカードに１体のみ装備することができる。
このカードの攻撃力は、この効果で装備したモンスターの攻撃力分アップする。
「∞」と名のついたモンスターは自分フィールド上に１体しか表側表示で存在できない。

スキエルT(トップ)（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻　６００／守　　０
フィールド上に「∞」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

スキエルＡ（アタック）（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻１０００／守　０
フィールド上に「∞」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

スキエルＧ（ガード）（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻　２００／守　３００
フィールド上に「∞」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。
１ターンに１度、自分フィールド上に存在するモンスターが攻撃対象に選択された時、その攻撃を無効にすることができる。

スキエルＣ（キャリア）（ＴＦ５オリジナルカード）
星１／風属性／機械族／攻　４００／守　０
フィールド上に「∞」と名のついたモンスターが表側表示で存在しない場合、このカードを破壊する。

『ふぇ？　き、機皇帝……？』

『合体しろ！　機皇帝スキエル！』

ルチアーノの手札、デッキから、まるでパーツの様なモンスターたちが特殊召喚される。
それは瞬く間にルチアーノのフィールドを埋め尽くし、ルチアーノの号令と共に合体を始めた。

それはまるで、予定調和の様に姿を作り上げていく。
その様子を妨害することが出来ず、なのははただ見守るばかり。

そして現れたのは、全身を青いパーツで構成された機械のモンスターだった。
胸のコアの部分には、不思議な光が渦巻いている。その光に、プレシアはイヤな予感を覚えた。

『ククッ、まだ君のターンだよ？』

『え、えと……、カードを伏せて、ターンエンド……』

なのは手札６→３
伏せ×１

『ボクのターン！』

ルチアーノ手札３→４

『機皇帝スキエルの効果発動！
１ターンに１度、相手の場のシンクロモンスター一体を、装備カード扱いとしてこのカードに装備できる！』

『ふぇぇえええええッッ！？』

「っ！　シンクロモンスターを吸収ですって！？
くっ、イヤな予感の正体はコレと言うこと……！」

機皇帝スキエルの驚くべき効果に、バテていたなのはの瞳が大きく見開かれた。

シンクロモンスター限定だが、相手のモンスターを問答無用で装備できる強力な効果。

こんな効果を持ったモンスターなど、なのはは見たことが無い。それは観客席のプレシアも同様だ。

それはつまり、相手のシンクロ召喚を躊躇させる。現在の主流はシンクロ召喚。それらを封じることが出来るのは強みだ。

『機皇帝スキエルで、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を吸収！』

『！！』

そしてスクリーンの先で、ルチアーノが効果の発動を宣言した。

機皇帝スキエルの胸のコアから、光の触手がレッド・デーモンズに向けて伸びる。

恐らく、それに捕まえられてはレッド・デーモンズを奪われるだろう。

なにか妨害する手立ては無いか。プレシアは祈る様な思いで、スクリーンを見つめる。

『ふ、伏せカード≪バスター・モード≫を発動！

私の場の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫をリリースし……

デッキから≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫を、特殊召喚……ッ！』

「！　上手い！」

伏せられていたカードが表にされ、レッド・デーモンズ・ドラゴンが紅蓮の炎に包まれる。
咄嗟になのはが取った行動だっただろうが、このプレイをプレシアは高く評価した。

対戦相手であるルチアーノの使役する機皇帝スキエルの効果は、「シンクロモンスター」を装備する能力。
つまり他のモンスター、「融合モンスター」や「儀式モンスター」は装備出来ないのだ。「効果モンスター」さえも。

そしてなのはが特殊召喚するレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターは効果モンスターに分類される。
つまりレッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターを奪われる心配は無いと言うことだ。事実、ルチアーノも苦い顔をしている。

しかし――――

『高町なのは　脱落！』

「……はぇ？」

唐突にデュエルの様子を映し出していたスクリーンに、文字が浮かび上がる。
それはなのはがランニング・デュエルから脱落したことを知らせる文字だ。

一体、何故なのはがランニング・デュエルから脱落したのだろうか。
機皇帝スキエルの厄介な効果を潰し、今から怒涛の攻撃を仕掛ける時だと言うのに。

失格に至る様な反則を行った気配は無い。それはプレシアの目から見ても明らかだ。
けれど、プレシアの周りで観戦していた観客たちはそれを納得している。一体、何がどうなっているのか。

「って、あぁ……なるほど」

頭の中を疑問ばかりが支配していたが、スクリーンを良く見直してみれば、答えが分かった。
何故ならば、スクリーンに映るのは地面に倒れ込んで息を整えているなのはの姿。腕がぷるぷると震えている。

どうやらデュエルの途中でスタミナが底を尽き、走ることが出来なくなったのだろう。
なるほど。相手の戦略と自分の体力を計算に入れてデュエルしなければならないらしい。

ランニング・デュエル。奥が浅い様に見えて底はかなり深かった。

「スタミナ切れ、か。仕方ないね」

「そりゃ……小学生にフルマラソンは無理でしょうからね」

「あ、フェイトがコテリと倒れた」

アルフの言葉に、プレシアもフェイトの映るスクリーンを探す。
すると、そこにはなのはと同様に地面に手を吐いて息を整えているフェイトの姿が。

傍らには、白銀色の髪を逆立てた青年がいる。
こちらの青年はルチアーノと同じような仮面を右目に付けている。

やはり小学生に、この次元世界での大会は難しかったか。
苦笑しながらプレシアはそう思った。

さて、残る一人――チームサティスファクションのリーダーはどうしただろうか。
息を整えているフェイトから視線を離し、プレシアはきょろきょろとスクリーンに視線を移す。

スクリーンには様々な選手たちのデュエルの様子が映し出されており、鬼柳を見つけるのは難しい。
だが、探し始めてから五分後。プレシアはスクリーンの一角に、見慣れたコートを翻しながら走る男性の後ろ姿を見つけた。

『機皇帝グランエルの効果発動！
鬼柳京介、お前のシンクロモンスターを吸収する！』

『ぐっ、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！！』

『そしてこの効果で吸収したシンクロモンスターの攻撃力分、

機皇帝グランエルの攻撃力が上昇する！』

機皇帝グランエルＡＴＫ２４００→５４００

『バトルだ！　機皇帝グランエルでプレイヤーにダイレクトアタック！』

『うわぁあああああっ！！』

鬼柳ＬＰ４０００→０

鬼柳と対戦相手――ホセとのデュエルを見守っていたが、こちらは敗北したようだ。

だが、仕方のないことかもしれない。鬼柳の主力はシンクロモンスター。メタされては突破できない。

鬼柳まで負けるとは、やはり世界は広いなとプレシアは思い直す。

「井の中の蛙、大海を知らず」だ。

鬼柳とホセはその場で足を止めると、互いにジッと鋭い視線を向け合う。その様子はまるで、相手のことを覚えておくための様で。

『……良いデュエルだった』

『！　……くっ』

ホセは一言だけ告げると、鬼柳に背中を向けて走り出す。

その走りはスタート時からぶれることはなく、しっかりとした走り

だった。

鬼柳はそんなホセの後ろ姿を見送ると、悔しそうに拳をグッと握るのだった。

後に分かる事だが、今大会の優勝者は鬼柳と対戦したデュエリスト――ホセだった。

数年ほど前から突然現れ、今ではこの大会の優勝を一人で掻っ攫って行ってしまうほどの腕らしい。

その強さと走る姿にホセには二つ名を付けられるほどの腕前だ。

そんな彼に付けられた二つ名は「ランナー」。まさしく彼の姿そのものだった。

どうやら彼は誰かを養うために大会で優勝している様だが、それが分かるのはまだ後のお話。

四話　「ランニングデュエル」（後書き）

次回予告

初めての次元世界での大会を敗北で終え、落ち込むなのはとフェイト。
鬼柳もまた大会を敗北で終え、悔しい思いを抱いている。

その三人の様子を見て、プレシアは気分転換を提案。
次元世界――ミッドチルダを観光し、負けた気分を払拭するのだ。

フェイト達もそれに了承。
プレシア達は一度、ミッドチルダを目指す。

そして、そこでフェイトは運命の邂逅を果たすのだった。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「クリアマインド」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

五話　「クリアマインド　前編」（前書き）

今回からちらほらとＳｔｓ編のキャラが登場します。
他にはホセ達の暮らしとかいろいろ。

五話　「クリアマインド　前編」

～次元世界　某所～

「あ～あ。結局、優勝はホセかぁ」

頭の後ろで腕を組みながら、ルチアーノがボソリと呟いた。
別段仲間が優勝するのを羨む訳ではないが、勝ちたいと思うのは決闘者の性か。

「仕方ないだろう。俺たちとホセは違うんだ」

「主に体力的な意味でな」

「あ～、はいはい」

そのルチアーノの呟きに答えたのは、彼の両隣を歩く青年――プラシドとホセ。
プラシドは呆れた様な視線をルチアーノに向け、ホセは手に持ったビニール袋を持ち直す。

ホセの持つビニール袋の中には、三日～四日分ほどの食料が入っていた。
別段、これらは彼らの食料ではない。プラシドやルチアーノは食事を取れるが、ホセは取れないのだ。

この食料を消費するのは、彼らの家に居候している三人の少女たち。
恐らく今日も、自宅でガヤガヤと騒がしい毎日を送っているのだろう。

「――――――ド」

「ん？」

と、自宅を目指して歩いている三人の前に、一軒家の屋敷が見て取れた。
その大きさは人が五～六人ほどは余裕を持って暮らせるほどの広さ。
その屋敷はホセ達が大会で優勝し、得たお金で買ったもの。
そしてその屋敷から、一人の少女が駈け出してくる。

ホセの目を捉えるのは頭の両脇で括ったツインテール。
彼女の髪は青色で、何処か神秘的な雰囲気を漂わせている。

だが、その彼女からは神秘的な雰囲気を感じない。それは主に彼女の服装のせいだ。
身体にピッチリと張り付いたレオタード。腰回りをひらひらとしたスカートが覆い、太股をニーソックスで包んでいる。

なんとも露出の激しい恰好をした少女。もしも第三者が見たならば、頬を赤らめる様な姿だろう。
だが、この場に居る三人はそれをしない。それは何故か。それは、彼女が色気よりも幼さを感じさせるからだろう。

「ッッッッッカァアアアアン！！！」

「ぐぁあああ！！」

ホセ達の自宅から駈け出して来た少女は、ホセ達の目の前で踏み切り、宙にその身を躍らせる。
そして空中で身体を捻り、勢いのある蹴りを青年――プラシドに向かって放ったのだ。

その少女の蹴りを受け、プラシドは無様な悲鳴をあげて地面を転がっていく。
それを見てルチアーノは愉快そうに口元を緩め、プラシドに蹴りを見舞った少女は満足そうに頷いた。

「って、雷刃！　貴様、俺に何をする！」

「お帰りの挨拶！」

「これは挨拶と呼ばん！」

地面を転がったプラシドがムクリと起き上がり、少女――雷刃を非難する。
だが、雷刃はそんなプラシドの言葉などどこ吹く風。ガサガサとホセの持つビニール袋を漁っていた。

ホセはプラシドが雷刃に向かって飛びかかるのを見守っていると、新たに自宅から一人の少女が姿を現す。
プラシドと同じ白銀の髪をショートカットに纏め、紫と紺色の服に自らの身体を包んでいる傲慢不遜な少女。

「ふん、ようやく帰ったか」

「ってあぁあ！　ボクのアイス！」

「ん？　あぁ、コレか」

手には冷蔵庫に入っていたのだろう。小さなカップアイスが握られている。
そしてそれを見たルチアーノが激昂する。どうやら彼のおやつだったようだ。

「返せよ！　それは最後の一個なんだぞ！」

「やかましいわ塵芥。これは我が食べる」

「ボクのだ！」

そしてルチアーノもまた、少女――闇へと飛び掛かった。
そこまでしてあのアイスが食べたいのだろうか。ホセは二人の様子を見守りながらそう思う。

ならば今度、また同じのを買ってこよう。静かにそう頷いていると、自宅に残る最後の少女の姿が見えた。
栗色の髪に青い瞳。他の二人に比べて冷静そうに見えることから、良く長女と間違えられそうになる。

彼女――星光はホセの元まで歩み寄ると、彼の手から食料の入ったビニール袋を受け取った。
ホセも特に異存は無い様で、大人しく彼女に食料の入ったビニール袋を渡す。

「御帰りなさい、ホセ」

「うむ、今帰った。特に変わりは無いか？」

「はい。相変わらずあの二人が煩いですが……」

はぁ、と星光は未だプラシド。そしてルチアーノを相手に暴れる二人の少女を見て嘆息する。
どうやらホセ達が居ない間にも、あの二人の少女は自宅で賑やかな生活を送っていたのだろう。

星光はホセから受け取ったビニール袋を持ち直すと、トコトコと自宅へ向けて歩き出す。
彼女たちこそ、ホセたち三人の元へ身を寄せている居候だ。と言っても、出会ったのはつい最近だが。

「それよりも星光よ。上手く扱えるようになったか？」

「いえ……。やはり、機皇兵は扱うのが難しいですね」

「そうか。だが、焦らずゆっくりやればよい」

「はい」

徐々に騒がしくなっていく面々を後ろに置き去りにし、ホセは星光の隣に並ぶ。

そして彼女にある事を訊ねた。それは、彼女のデッキに投入されているモンスターカード。

彼女たちはホセ達が持つ機皇帝よりも一ランク下のカード――機皇兵と言うカードを使用している。

星光が使用するのは機皇兵グランエル・アイン。雷刃は機皇兵ワイゼル・アイン。残る闇はスキエル・アインだ、

だが、その何れもが能力やステータスに難があり、なかなか上手く扱いこなせない。

それでも星光は上手くカードを活用しようと、日夜試行錯誤を繰り返しているのだった。

隣でぷぅっと頬を膨らませている少女を見て、ホセは静かに頷く。

今のまま、機皇兵を上手く扱えるようになってほしい。そうすれば、機皇帝も上手く使いこなせるだろうから。

「そう言えば星光よ。今日の大会で、お前に良く似た選手を見たぞ」

「え？」

そして自宅への道を歩いていると、不意に今日出会った選手の姿を思い出す。
その選手は高町なのはと言っただろうか。星光と外見が瓜二つで、一見したら姉妹の様だ。

だが、星光との相違点も多々見られた。あれは良く似た他人だったのか。
それとも、星光が知らない肉親だったのだろうか。

「あぁ、そう言えば俺も見たな。雷刃、お前にそっくりだった」

「そなの？」

ホセの言葉に星光が首を傾げていると、後ろからプラシドの声が聞こえた。
視線を後ろに向けてみれば、雷刃にヘッドロックをかけているプラシドの姿が。

どうやらプラシドもまた、居候している少女に良く似た少女を見つけたらしい。
それを聞き雷刃はキョトンとするが、ホセの隣を歩く星光は思案気な表情を浮かべている。

「そうですか。……」

「……会わなくても、良いのか？」

「はい。私には、ホセやプラシドたちが居ますから」

無言だった星光に、ホセは声をかける。
どうも彼女たちは、自分の身の上話をしようとはしない。
踏み込むつもりもなかったが、親や兄弟が探しているのではと思ったこともある。
だが、それらしい情報は聞いたことが無い。故に、彼女からこの様な返答が来るのは想定の範囲内だった。

「……そうか」

ホセは彼女の言葉に静かに頷くと、その大きな手を彼女の頭に乗せる。
すると星光は一瞬キョトンとした表情を浮かべたが、すぐさま笑顔を見せた。

星光のその笑顔を見て、ホセもまた口元が緩んでいるのを自覚する。
これではまるで、孫と祖父の様ではないか。今の自分の姿を客観的に見てそう思う。

だが、悪くないと思った。
こうして子供たちの笑顔を見ながら、明日を待つと言う日々は、悪

くないと。本当に思った。

※

「はぁ～～～～……」

随分と大きなため息を吐きながら、なのはが八神家のテーブルに突っ伏した。
彼女からはどんよりとした気配が漂っており、明らかに落ち込んでいるのが見て取れる。

それと言うのも、彼女が落ち込むのには理由があった。その理由とは、先日参加した大会である。
その大会ではランニングデュエルと呼ばれるデュエルの方式を取っており、なのはたちはそれに参加。

だが、結果は初戦敗退と言う散々たるもの。頼みの綱でもある鬼柳すら敗北し、初の次元世界の大会を終えたのだった。
なのはやフェイトも、大会を終えてから人が変わったかのようにデッキの改造に乗り出した。だが、それでも気が晴れることは無い。

その理由として、なのはやフェイトの体力が関係していた。
彼女たちが先日参加した大会では、この体力がかなり重要だったのだ。

しかし、なのはは運動音痴に加え、まだ身体は小学生。体力もそれほどある訳ではない。
なのはとしてもどうにかしたいと考えているが、なかなか走る気になれないのが現状だった。

「やっぱり、夜の運動をして体力を付けるべきよ！
気持ち良いし、体力もついて一石二鳥よ！」

「黙りなよプレシア！
アンタ、アタシと鬼柳に修正されときながらまだ修正されてない箇所があるのかい！？」

「ロリばんざぁあああああいいッッ！！」

そんな落ち込んでいるなのはの後ろでは、ハイテンションなプレシアをアルフがどこどこ殴っていた。
どうやらアルフの堪忍袋の緒がぶち切れたらしい。デュエルで決着を付けず、リアルファイトで決着を付けている。

それにしても、夜の運動とは何なのだろうか。なのははぐでーっとテーブルに突っ伏しながら疑問に思う。
夜にしか出来ない運動などあるのだろうか。そう言えば、以前深夜に起き出したとき、両親の寝室で両親が何かしていた様な。

「帰ったぞ」

「ただいまー！」

と、なのはがテーブルに突っ伏しながら記憶を思い返していると、聞き慣れた声がリビングに響く。

姿を見せたのは、いつものコートを身に纏った鬼柳の姿。その傍らには金色の髪の少女――フェイトの姿もある。

彼らはフェイトの新しい体操服を買いに行っていたのだ。どうやら今までの体操服は鬼柳の目には毒らしい。

そんな彼らになのはは手を振って答える。フェイトもなのはに手を振り返して答えると、嬉しそうに服の入った袋を取り出した。

そこから出てくるのは、白い運動着に紺のハーフパンツ。鬼柳の一存でブルマから変更されたのだ。

それをフェイトは嬉しそうに見つめている。鬼柳と二人きりで出かけられたのが嬉しいのかもしれない。

「御帰り、鬼柳。あぁ、それが新しい体操服だね？」

「あぁ。前のブルマは、その……な」

「……アンタも男の子だねぇ」

アルフの鬼柳を見つめる視線が生温かくなる。

鬼柳は鬼柳で、アルフの言葉に頬を薄っすらと赤く染めていた。

「でも鬼柳。なんであのバリアジャケットじゃダメなの？」

「……肌を出し過ぎだ。お前は女の子なんだから、もう少し気をつけろ」

「！　うん、えへへ……」

と、一しきり新しい体操服を見てにやけていたフェイトが、鬼柳にある事を訊ねる。

それは大会後、変更されたなのはとフェイトのバリアジャケットのデザインについて。

なのはのバリアジャケットはスカートタイプからズボンタイプへと変更され、

フェイトのバリアジャケットは鬼柳が良く着る様なデザインへと変更されたのだ。

鬼柳も遅まきながら、あのデザインは不味いと判断したのだろう。

自らを案ずる様な鬼柳の言葉に、フェイトは嬉しそうに頬を緩めた。

「それにしても、世界は広いんだな」

「どうしたんだい、藪から棒に」

「いや、な。この前の大会で、それを実感しただけさ」

ドカリとリビングのソファに腰掛けながら、鬼柳が小さな声で呟いた。
脳裏に浮かび上がるのは、鬼柳が対戦した決闘者――ホセの姿。

鬼柳に釣られる様に、なのはやフェイトもまた、対戦した相手のことを思い浮かべる。
なのはの対戦相手――ルチアーノは機皇帝スキエルと言う、対シンクロモンスターのカードを使って来た。

これまで、その様なカードは見たことが無い。
恐らくあのカードは、次元世界限定で売られているカードなのか。
だが、それにしても使用者が少ない。なのはが確認できただけでも、三人しか使っていなかった。
恐らく、あの機皇帝は特別なカードなのだろう。故に、一般には出回らないカードなのかもしれない。

「なのはとフェイトはなんとか闘えそうだったけどね」

「あぁ。だが、俺は多分相手にならないだろうな。
シンクロ召喚を封じられたら、俺には成す術もない」

鬼柳の使用する「インフェルニティ」は、その爆発的な展開力からシンクロモンスターを召喚するのに特化しているデッキだ。
故に、頼みの綱であるシンクロモンスターを封じられれば、あとはジリジリとアドバンテージを取られて敗北してしまう。先の敗北が

それだ。

強力な効果モンスターや融合モンスターを入れようかとも考えたが、デッキのバランスが悪くなるために断念。
現状としては、先攻1ターン目で「煉獄龍　オーガ・ドラグーン」を場に出しておくしか対処のしようが無かった。

「はぁ……。でもでも、私たちは闘えるかもしれないけど、体力勝負じゃぼろぼろだよぉ……」

「あぅ。私も走るの苦手……」

なのはは深いため息を吐くと、自らの体力のなさ。そして運動音痴を嘆いた。
たしかに先のデュエルで、「／バスター」を特殊召喚出来たのは上手いプレイだっただろう。

だが、その後――走りながらデュエルするにおいては、鬼柳や他の参加者の何歩も後ろを行っていた。
いくらモンスターを上手く特殊召喚出来ても、走り続けるだけの体力が無ければあの大会で優勝など出来ない。

なのははそれを思い出し、再びテーブルに頭から突っ伏す。
フェイトもフェイトでしょんぼりと肩を落としていた。

「学校の帰りとかに、ランニングとかしてみるってのはどうだい？」

「明日は筋肉痛です～～……」

「鬼柳が一緒なら良いよ」

「……」

アルフが苦笑いを浮かべながら二人にそう提案するが、案の定な答えが返ってくる。

なのはは運動が苦手で自ら運動することは稀であり、フェイトは鬼柳が一緒ならば問題ないとのこと。

しかし、鬼柳とて翠屋での仕事もある。そう何日も翠屋の仕事を空ける訳にも行かないだろう。

なんとも面倒くさい状況だ。思わずなのは、フェイト、アルフ。三人のため息がリビングに漏れる。

「はぁ、やめやめ」

「んにゅ？」

「こんな気分じゃ、良い結果なんて出ないわよ」

暗くなりかけていたリビングの空気を、壊したのはプレシアだった。

ぱんぱんと手を叩いて皆の視線を集めると、片眼でウィンクしながらそう告げる。

「と言う訳で、お出かけしない？」

「お出かけって……何処に出かけるんだ？」

どうやら皆のモチベーションの低さを懸念して、気分転換を申し出たようだ。
鬼柳もプレシアの提案に乗り、何処へ出かけるのかを彼女に訊ねる。

「ミッドチルダよ。良いカードが揃ってるカードショップも知ってるわよ」

「ミッドチルダか……」

すると、行き先はミッドチルダと言う言葉が出てきた。鬼柳は顎に手を当てて考える。
今まで行く機会に恵まれなかったが、将来参加する大会の開催地を確認するのも良いかもしれない。

それにミッドチルダでは、地球ではお目にかかれない様な特殊なカードが売っているかもしれない。
それを想像すると、鬼柳の胸はワクワクしてくる。未だ見ぬ未知のカード。それにワクワクするのは決闘者の性か。

チラ、と視線を隣へと向ければ、なのはも瞳をキラキラさせている。
彼女もまた、ミッドチルダで販売されているカードに興味が出たようだ。

「でも、良いのか？
ミッドチルダで使える金なんて、持ってないぞ」

「ちゃんと換金出来るところがあるから大丈夫よ。
それで、どう？　行ってみない？」

「それなら俺に異存はねぇ」

懸念事項である換金のことを聞き、特に問題が無さそうだと鬼柳は判断。
プレシアの提案に、彼は肯定の意を返す。そして他のメンバーはどうだろうかと、視線を巡らせた。

フェイトやアルフはプレシアの提案を蹴るつもりは無いのか。特に異存は無さそうにしている。
残るなのはと言えば、しばし考えていた様だったが、結局コクリと頷いた。どうやらお小遣いの心配をしていたらしい。

これで現在リビングに居るメンバーの了承は得られた。
ならばやることはさっさとやるのがプレシア。早速管理局のクロノへと連絡を入れる。

「じゃあ、クロノに連絡を入れておくわ」

クロノから許可を取っておけば、時の庭園からミッドチルダへ行けると言う事だろう。

なんとも抜け目のないと思いつつ、鬼柳達はそれぞれ必要なものを取りに、自らの部屋へと向かった。

※

「ふわぁあああ……！　すっごい！」

次元世界、ミッドチルダ。その店先に並んだショーケース。
そこに張り付きながら、なのはが歓声を上げた。彼女の視線の先には、地球では滅多にお目にかかれないカードが飾られている。

そのカードの名前は、氷結界の龍トリシューラ。
その強力な効果と入手難度から、現在高レートで取引されるカードだ。

他にもショーケースの中には、氷結界の龍ブリューナク。Ｅ・ＨＥＲＯプリズマーなど。
地球では滅多にお目にかかれないカードたちが飾られていた。興奮するなと言う方が無理だろう。

「トリシューラ、か……。俺のデッキなら出せるか？
いや、だが問題は金額か……」

そしてなのはの隣では、同じくショーケースを覗き込んでいた鬼柳が自らの財布を漁っている。
どうやら気になるカード――氷結界の龍トリシューラを見つけたのだろう。財布の中身と相談している。

「くっ、ダメだ。
コイツを買うには、俺の通帳から金が無くなる……！」

「最高レートの時は、この倍は高かったかしら」

「くそっ、満足できねぇぜ……」

だが、財布の中身よりもより高額な金額が必要と分かったのだろう。
鬼柳は名残惜しそうにトリシューラを見送っている。

事実、プレシアの言うとおりトリシューラは現在高レートで取引されているカード。
このカード一枚で地球ならば新車が二台は買える。それほど高額で取引されているのだ。

「来い来い来い来い来い来いッッ！！」

何処か不満足そうな表情を浮かべる鬼柳。
その隣では、アルフが夢中であるパックを開けていた。

パックの表紙に描かれているのは、Ｅ・ＨＥＲＯを代表する三体のモンスター。
その名もフェザーマン、バースト・レディ、そしてフレイム・ウィングマンだ。

アルフが何故、そのパックを買いこんでいるのか。
それは先日公表されたこのパックのカードリストにある。

「アブソルートＺｅｒｏかい、コイツは良いね！
さぁ、残るノヴァ・マスターとガイア。そんでエスクリダオを出しなッ！！」

そのパックには、「Ｅ・ＨＥＲＯ」を融合素材とするモンスターが六体収録されている。
そしてその何れもが、「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋○属性モンスターと言う条件を持っていた。

これはつまり場、並びに墓地のにＥ・ＨＥＲＯとそれぞれ適応する属性を持つモンスターを融合できるのだ。
しかもアルフは相手の場のモンスターをも融合できるレアカード―超融合を持っている。

これでアルフが全属性の融合ヒーローを入手した場合、相手の場のモンスターを除去しつつ融合できるのだ。

相手の場のモンスターを融合素材とし、自らの場に融合モンスターとして特殊召喚する。その有用性は計り知れない。

「う～ん。これでも無いのかな」

そしてビリビリとパックを開けるアルフの隣で、フェイトがパックと睨めっこしていた。
それと言うのも、フェイトはあるカードを探している。そのカードとは、シンクロチューナーと呼ばれるカードだ。

闇の書内部でのデュエルで、遊星が使って見せたシンクロチューナー――フォーミュラ・シンクロン。
それがあれば、自分もアクセルシンクロモンスターを呼べるかもしれない。そんな思いがフェイトにはあった。

だが、肝心のアクセルシンクロモンスターが収録されているパックが無いのだ。
これは一重にアクセルシンクロモンスターが収録されていないのか。未だ開発されていないのか。

そうなれば必然的に、シンクロチューナーであるフォーミュラ・シンクロンも手に入らない。
八方ふさがりのこの状況。一体どうしたら良いのだろう。思わずフェイトはため息を吐く。

「はふぅ。……アレ？」

幾つものパックが並んでいる棚から顔を離し、フェイトはふぅと嘆息する。
そして何ともなしに視線を周囲へと向けると、見慣れぬものが視界に飛び込んできた。

フェイトの視線の先には、フェンスで囲われた空き地の様な場所がある。
それは一見すればただの空き地に見えるのだが、そこに建てられている看板が目を引いた。

「入るな！」「近寄るな！」「立ち入り禁止！」
などなど。他を寄せ付けない謳い文句が幾つもの看板に描かれている。

一体、あの空き地で何があるのだろう。
疑問に思ったフェイトは、トコトコと足を空地へ向ける。

「うわ。中は意外と広いんだ」

空き地を囲うフェンスの場所まで来ると、フェイトはフェンスの中を覗き込んだ。
すると彼女の視界に広がるのは、サッカーコートほどの大きさの空き地だった。

ミッドチルダのこんな場所に、これほど大きな空き地が存在していたなんて。
意外と広い空き地にフェイトが感心していると、聞き慣れぬエンジ

ン音が聞こえてくる。

視線を聞き慣れぬエンジン音が聞こえてくる方へと向ければ、そこにはこちらへ向かって駆けてくる一台のDホイールが。

車体にある車輪は後輪だけ。それもタイヤが一つしかないと言う前衛的なもの。そして車体の先端は、何かを貫く様に鋭い。

あんな形のDホイールがあるのか。

フェイトがそう感心していると、Dホイールに乗っているDホイーラーが勢いよく腕のデッキホルダーからカードを抜いた。

――ある掛け声をともにかけて。

「アクセル、シンクロォオオオオオッッ！！」

「！　アクセルシンクロ！？」

そのDホイーラー――声からして男性だった――が叫んだ言葉に、フェイトは瞳を見開く。

彼は先ほど、たしかにアクセルシンクロと叫んだ。このミッドチルダでも発売されていないモンスターの召喚方法を。

もしや、彼もアクセルシンクロが出来る決闘者なのだろうか。

それならば、是非ともシンクロチューナーとアクセルシンクロモンスターの入手方法を訊ねたい。

青年が遠くへ行ってしまわぬうちに。フェイトは慌ててコンタクトを取ろうと、空地へ向かって駈け出す。

だが、次の瞬間には、フェイトの足が止まっていた。何故か。それは、空地の中から聞こえた派手なクラッシュ音が原因だったからだ。

――――ドガッッ！！

「ふぇぇえええ！？」

「うわぁあああああっっ！！」

派手なクラッシュ音に続き、Ｄホイールに乗っていた男性の悲鳴が木霊する。

フェイトが茫然と空き地の中へ視線を向けると、そこには転倒したＤホイールと倒れているＤホイーラー。

どうやら運転を誤って事故を起こしたようだ。Ｄホイーラーの青年は、起き上がる様子を見せない。

慌ててフェイトは開いているフェンスの隙間から空き地の内部へと入ると、倒れている青年に近寄った。

「だ、大丈夫ですか！？」

「う、う～ん……ティアナぁ……」

慌てて青年に声をかけるが、返ってくるのは気の抜けた声。

どうやら誰かの名前を呼んでいるらしい。意識不明などの重体ではなく、フェイトはホッと安堵する。

だが、これからどうしようか。頭を打っているかもしれない青年を、このまま放置するのは不味いと思う。
まずは母親であるプレシアに連絡を――としようとしたフェイトの耳に、ドタドタと聞き慣れぬ小さな足音が聞こえた。

「お兄ちゃんに何してるの！」

「え？」

フェイトが振り返ると、そこには一人の幼い少女の姿があった。
見た目はなのはやフェイトよりも幼く、まだ幼稚園くらいかとフェイトは思う。

頭の両脇で括られた橙色の髪はツインテールになっており、意思の強そうな瞳はフェイトを睨みつけている。
その小さな手にはスポーツドリンクだろうか。数本のペットボトルがビニール袋に入れられていた。

その少女はフェイトをキッと睨みつけ、フェイトはそんな少女を茫然と見つめることしかできない。
これが後にフェイトのライバルとなる少女――ティアナ・ランスターとの邂逅であった。

五話　「クリアマインド　前編」（後書き）

次回はようやく二律背反氏と出会います。
果たしてフェイトはクリアマインドを習得できるのか。

五話　「クリアマインド　後編」（前書き）

今回、ようやくブルーノ氏と邂逅しました。
けれど特に珍しいことはやっていません。

果たしてフェイトは、何話でクリアマインドを習得してくれるのか。
原作でも遊星が習得に時間かけてたしな……。

五話　「クリアマインド　後編」

～次元世界　某所～

「≪ミスト・ウォーム≫か……。なぁ、フェイト。
トリシューラとどっちの方が――って、フェイト？」

店先に飾ってあるショーケース。そこを覗き込んでいた鬼柳が声をかける。
だが、声をかけた先には目的の少女が居ない。不思議に思い、視線を周囲へと向けた。

しかし、ショップの周りにはフェイトらしき少女の姿は見えない。
店内へと視線を向けるのだが、店内にもフェイトの姿は見えない様だった。

「んぁ、フェイト？」

「フェイトちゃん？」

と、徐々にフェイトが居ないことに気づき始めたのか。
アルフが買ったばかりのカードをカードケースに納めながら。

なのはがショーケースから顔を離し、キョロキョロと周囲に視線を向けている。

三人がそれぞれフェイトの名前を呼びながら探すのだが、依然として彼女の姿は見えない。

「っ。何処に行った……！」

徐々に焦りを感じながら、鬼柳はフェイトの姿を探す。
いくら治安が良いと言われているミッドチルダでも、心配なものは心配だ。
実際――――。

「フェイトォオオオオッッ！！
何処に行ったのぉおおおおおっ！！」

「うわぁ！　な、なんなんだ一体！」

「貴方なの！？　うちのフェイトを隠した外道は！」

「はぁ！？」

プレシアが、道行く一般人に喧嘩を売っている様子から伺える。
幸いにも共にフェイトを探しているアルフが抑えているが、彼女がいなければどうなっていたか。
鬼柳はそんなプレシアから視線を外すと、今度は少しだけ捜索範囲を広げてみることにした。

もしかしたら、他のお店に行ったのかもしれない。プレシアにも告げずに行くとは考えずらいが、探さないよりはマシだ。

「くそっ。無事で居ろよ……！」

一言だけ、小さな声で呟くと、鬼柳はフェイトの姿を求めて慣れぬミッドチルダの街を駆けた。

※

「あっはっはっは。いやぁ、ごめんね」

「は、はぁ……」

「むぅ～～……」

笑顔で朗らかに笑う青年。そんな青年を見て茫然とした表情を浮かべるフェイト。

そして、その青年の膝の上でフェイトを睨みつけている幼い少女―

―ティアナ・ランスター。

三者三様のこの光景を、もしも他人が見たらどう思うのだろうか。
恐らく、大半の人物は見て見ぬ振りをするだろう。実際、フェイトもそうすると思う。

「クラッシュしたのは、これで十五回目だよ」

「じゅ、十五回も！？」

「いやぁ、十五回もクラッシュしてる自分が悪いんだけどさ」

青年――ティーダ・ランスターは包帯を巻いた頭をカリカリと掻きながら、説明する。
するとどうやら、ティーダはフェイトの目論見通り、アクセルシンクロの練習をしていた様なのだ。

だが、クリアマインドへ完全に至れていないのか。アクセルシンクロは失敗ばかり。
今回もアクセルシンクロは失敗し、借りていたDホイールがクラッシュ。地面に投げ出されたそうだ。

「（アクセルシンクロ……、やっぱり、難しいのかな）」

ティーダの話を聞いたフェイトは、密かに心の中でそう思う。
実際、それは間違いないだろう。誰もが至れる道ならば、一般的に

普及しているはず。

それが普及していないと言うことは、クリアマインドへ至る方法が困難であると言うことだ。

そしてクリアマインドへ至れないと言うことはつまり、アクセルシンクロすら不可能だと言うこと。

フェイトは目の前に、分厚い壁があるのではないかと錯覚する。

クリアマインドの境地への至り方も分からない。だが、その道ははるかに険しい。

「（……でも、決めたんだ）」

けれど、フェイトは決めたのだ。

クリアマインドを習得し、遊星に認めてもらえるように。

一度は敗北し、自分を退けた相手に同じ力で、同じ土俵で戦いたい。

負けるのは何時だって悔しい。だから自分は力を求め、遊星に打ち勝つのだ。

「あの、クリアマインドについてなんですけど……」

「興味あるの！？　良いよ、教えてあげる！」

「は、はぁ……」

フェイトがクリアマインドの話題を口に出すと、ティーダがはた目から見ても分かる様に嬉しそうに笑った。
それはもう、フェイトが思わず引いてしまうくらいに。そしてそれは、彼の膝の上に乗るティアナも同様だった。

だが、ティーダがクリアマインドについて説明しようとすると、膝の上のティアナがそれを妨害する。
主に彼の股間を蹴って。「おま……つぁ、ちょぎ……！」と、悲鳴にならない悲鳴を上げて、ティーダは地面の上で悶えた。

「お兄ちゃん！　そんなにぺらぺら喋らないの！
どうせまた、前みたいに笑われちゃうよ！」

「ぐぅ……、あ、兄の股間を蹴っておいて……その言い草は、無いよ……」

「うわぁ……」

ティーダの眼前で説教をするティアナ。
そんなティアナに、股間を抑えながら近づくティーダ。

第三者が見れば、確実に警察へ通報される様な状況だろう。
否、ここは次元世界ミッドチルダ。来るのは警察ではなく管理局だ。

フェイトはだらだらと冷や汗を流しながら、おぼつか無い足取りのティーダから距離を取る。
もしや自分は、話しかけては不味い相手に話しかけたのではないだろうか。そんな不安が頭を過る。

「……で、でも。なんで笑われるんですか？」

「ツーン……」

「あ、あはは。ティアナ……」

フェイトの問いかけに、ティアナはつーんとソッポを向いて答える。
どうやら彼女は、フェイトに事情の説明をしてくれない様だ。

残るティーダに事情の説明を求める様な視線を、フェイトは向ける。
するとフェイトの視線を受け、ティーダは一度ため息を吐くと、フェイトに話し始める。

「……クリアマインドを会得するには加速する世界でしか見出せない揺ぎ無き境地に達する必要がある。
そしてその境地に達したとき、アクセルシンクロは可能となる」

「揺ぎ無き境地……、それが、クリアマインド……」

ティーダの説明に、フェイトは感慨深そうに頷いた。
クリアマインドの会得に加速する世界が必要と言うのは初耳だ。

「けど、正確には良い心、悪い心を超越した境地がクリアマインドなんだ。

そしてクリアマインドの境地に至り、新たな可能性を見出す事でアクセルシンクロが可能になる。
そのために必要なのが、加速する世界」

良い心。悪い心。そして新たな可能性を見出すこと。
フェイトが知らなかったクリアマインドの情報が、ポンポン出てくる。

フェイトはそれらを聞き逃すまいと、必死に耳を傾けていた。
どうやら思った以上に、クリアマインドへの境地へ至るのは大変そうだ。

良い心と悪い心。それらを超越するとはどういう意味なのだろうか。
それに新たな可能性と言うのも気になる。はたして自分は、本当にクリアマインドを習得できるのか。

「？　でも、じゃあなんでさっきの笑われるって言う話が出てくるんですか？」

そしてフェイトはクリアマインドへの不安を覚えながらも、ふと感じた疑問を口にした。
それは何故、先ほどティーダが笑われると言う言葉を口にしたのか、と言うこと。

これだけを聞けば、何処も笑われる個所など無い。何処もおかしくないのだから。
だが、ティーダの表情は違う。何処となく疲れた様な。手に入らな

いものを見ている様な。そんな眼をしていた。

「じゃあ、質問。
アクセルシンクロが出来る決闘者を、君が知っている中で可能な限り答えよ」

「え？　えっと――――」

そんな中、ティーダから予想外の質問を投げかけられる。それは本当に些細なこと。
だが、フェイトはその問いに答えようと口を開こうとして、ティーダが何を言いたいのか理解した。

フェイトの周りで、アクセルシンクロを使う決闘者は存在しない。
あの鬼柳ですら、使用しているのはただのシンクロ召喚だ。アクセルシンクロではない。

以前に一度、遊星の使うアクセルシンクロモンスター――シューティング・スター・ドラゴンを見たフェイトなら分かる。
あれほど強力な効果を持ったモンスターが存在するならば、きっと鬼柳やプレシアはアクセルシンクロを使用しているだろう。

だが、彼らはそれをしていない。それは何故か。

「そう。クリアマインドの境地に至ることは、並大抵のことじゃない。
実際、クリアマインドの境地に至った決闘者はたった二人しか居

ないんだ」

「!?　たった……二人!?」

「そう。何千、何万、何億といる決闘者の中で、クリアマインドの境地に至れた決闘者は、たった二人」

「――――～～～～っ！」

フェイトは先ほどまで見えていた己に立ちはだかる壁が、一際大きくなった感覚を覚える。
いまやデュエルモンスターズのプレイヤーは、億を超える勢いだ。
そのプレイヤーの中でもほんの一握り。

たった二人しか、クリアマインドの境地へ達していない。それはもはや、砂漠に落とした石を探すのと同じくらい困難だ。
そしてそれは、不可能と呼べる領域に近い。誰が砂漠に落とした石を拾えるだろうか。そんなものは無理だ。不可能なのだ。

そして、だからこそティーダは笑われる。
不可能と呼ばれるクリアマインド。それを習得するために練習しているのだから。

出来る訳が無い。時間の無駄だ。大人しく諦めたらどうだ。
フェイトが考えただけでも、これだけの文句が出てくる。

それをティーダは、この何倍も辛い罵倒や嘲笑を受け取ったのだろう。
だから彼の妹がここまで敏感になるのも分かる。一体何度、兄の辛

い顔を見てきたのか。

「それでもキミは、クリアマインドを会得したいかい？」

そしてティーダが、真剣な眼差しでフェイトに訊ねてくる。
大人しく退くならば良し。ティーダの瞳はそう、語っていた。

実際、フェイトも逃げ出したかった。それほど難しい召喚方法があるなんて。
けれど――――。思わず逃げ出してしまいそうになるフェイトの脳裏に、浮かぶのだ。

前を歩く鬼柳の背中が。そして彼の隣を歩く遊星の背中が。
ここで逃げてしまえば、きっと鬼柳や遊星には追いつけない。

「（……イヤ、だな）」

そんなことはイヤだった。憧れた人の隣に立てないなど、悔しい以外の何物でもない。
それに、自分は決めたのだ。遊星と同じ土俵で決闘し、遊星に認めてもらうと。そして、鬼柳の隣に立つのだと。

「（……じゃあ、逃げる訳に……行かないよね）」

ならば自分に、「後退」の二文字は無い。自分は決めた。さらなる高みへ上ると。
そのために必要なことならば、クリアマインドすら会得して見せよう。不可能を可能にしよう。

フェイトの瞳に意思が宿る。それは強い思い。負けるつもりは微塵もない、徹底抗戦の意思だ。
そんな彼女の瞳を見て、思わずティーダの目が見開かれる。まさか、こんな瞳が返ってくるとは思わなかった。

これまでは、興味本位から近づいてくる相手が大半だった。
そしてクリアマインドの現状を教えると、彼らは苦笑いを浮かべて去っていくのだ。

「出来る訳が無い」、「そんなの、無理に決まってる」等と言葉を残して。
けれど目の前の少女は違う。逃げることなどせず、待っているであろう困難に立ち向かおうとしている。

今まで、こんな瞳の決闘者を見たことがあっただろうか。

「それでも私は……クリアマインドの境地に、至りたいです」

フェイトは強く、真っ直ぐな瞳で、ジッとティーダの瞳を貫いた。

※

「良く言った！」

「！　誰……？」

沈黙が流れていた街外れの空き地。そこに新たな男性の声が響く。
驚いてフェイトが声が聞こえた方へと視線を向ければ、そこには一人の青年の姿。

肩先まで伸びた髪は逆立てているのか、ピンと空を向いている。
全身を覆うボディスーツが目を引くが、何よりもフェイト目を引くのは彼の赤いサングラス。

彼は一体誰なのだろうか。正面に立つティーダに訊ねようとすると、彼は勢いよく立ちあがった。

「し、師匠！　帰ったんですか？」

「あぁ。それと、師匠と言うのは止めて欲しいんだが……」

「なに言ってるんですか。師匠は師匠でしょう？」

「～～～～っ」

サングラスを掛けた男性は、ティーダの言葉にバツが悪そうな表情を浮かべる。

意外と、師匠と言う言葉に縁が無いのかもしれない。ひとまず良い人そうでフェイトは安堵する。

そしてサングラスを掛けた男性はティーダと共に駆け寄っていたティアナの頭を撫でると、フェイトの前に相対した。

少女と男性では、身長差のせいで見下ろされる形になる。だがフェイトは、その男性から身長以上の大きさを感じ取った。

それはまるで、闇の書の中で遊星と出会ったときの様な。

超えるには、圧倒的な大きさの壁。眼の前にいる男性からは、それを感じさせる。

「キミの想い、確かに聞かせてもらったよ」

「あの、貴方は……？」

「……アンチノミー。いや、ブルーノと呼んでくれた方が良いな」

青年――ブルーノは、口元を僅かに緩めながら、フェイトに右手を差し出した。

フェイトも半ば反射的に、差し出された彼の手をギュッと握る。鬼柳と同じくらい、大きな手。

「それでキミに、一つだけ質問がある。
キミは何故、そこまでクリアマインド、アクセルシンクロにこだわるんだ？」

「……倒したい相手が、認めてもらいたい相手が、居るんです
そして、その相手が使ったモンスターが、アクセルシンクロモンスター……」

ブルーノの手がフェイトの手から離れ、彼がフェイトに事情を訊ねる。
それにフェイトは真剣な眼差しを持って答えた。脳裏を過るのは遊星の背中。

と、遊星のことをぼかして伝えると、ブルーノが驚いた様な表情を浮かべる。
そう言えばアクセルシンクロが出来る決闘者はたった二人だったっけ。フェイトはその事を思い出す。

「！　私や遊星の他にアクセルシンクロを出来る決闘者が……？」

「遊星さんを知ってるんですか！？」

そしてブルーノの口から漏れ聞こえてきた単語――遊星の言葉に、フェイトもまた驚く。
どうやらブルーノもまた、遊星を知っているらしい。ブルーノはフェイトの言葉にコクリと頷く。

「あぁ。……まさか、キミが倒したい相手と言うのは……」

「はい。不動遊星……、初代チームサティスファクションのメンバーです」

ブルーノはフェイトの言葉を聞くと、数分の間無言になる。

どうしたんだろう。フェイトが疑問に思う中、ブルーノは過去に思いを馳せていた。

アーククレイドルでのデュエルで消えるはずだった自分。だが、彼はこうして此処で生きている。

それがゾーンの思惑かどうかは分からない。しかし、一つだけ言えることはある。

それはあの絶望しか残っていなかった未来が訪れることは無いと言うことだ。

遊星とゾーンによるデュエル。その結末をブルーノは、ティーダが取り寄せてくれた情報誌で確認できた。

ゾーンの操る時械神を打ち破り、新たな境地「リミット・オーバー・アクセルシンクロ」を発現させた。

恐らくもう、あの世界の人たちは間違わないだろう。遊星もまた、正しい道へと歩んでくれるに違いない。

「えぇえぇ!?

ふぇ、フェイトちゃんは不動遊星さんと決闘したことがあるの!

？」

「え？　あ、は、はい……」

「うわぁ、すっごいなぁ！」

と、ブルーノが過去の世界のことを振りかえっていると、ティーダの興奮した声が聞こえる。

内容は、本当にフェイトが遊星と決闘したことがあるのか、と言うこと。それにフェイトはコクリと首を縦に振る。

すると一層、ティーダの興奮が強まった様に感じた。だが、それは仕方のないことかもしれない。

もはや遊星は、デュエルモンスターズをプレイする人々の間では英雄の様な存在だ。

古より続いてきたシグナーとダークシグナーの闘いを終わらせ、WRGPに優勝。

その後は突如現れたアーククレイドルに乗り込み、ネオ童実野シティを滅ぼそうとするゾーンを打ち倒したのだ。

その偉業は此処、ミッドチルダでも高く評価されている。

もはや遊星はただの英雄ではない。世界を超えた英雄となったのだ。

「そうか。なら、私は何も言わない。これを……」

「！　これは……」

ブルーノはフェイトの言葉に頷くと、腰にさげてあったケースからカードを二枚、取り出す。
そのカードを一瞥すると、彼はフェイトに手渡した。手渡されたフェイトはカードを見て、驚きの表情を浮かべる。

渡されたカードは、遊星が使っていたカード――フォーミュラ・シンクロン。
残る一枚はシンクロモンスターが描かれるはずの白い枠のカード。
ただし、モンスターは描かれていない。

このカードは一体。
そうブルーノに訊ねようと、フェイトはカードに向けていた視線をブルーノに向ける。

「そのカードは、キミがアクセルシンクロを成功させたとき、モンスターが浮かび上がる。
見つけるんだ、キミだけのアクセルシンクロを……」

「私だけの、アクセルシンクロ……」

モンスターが描かれていないカードを見つめ、フェイトは静かに呟いた。
恐らくこのカードは、以前の遊星の様にアクセルシンクロをするときのみ浮かび上がるのだろう。

果たして自分だけのアクセルシンクロを見つけられるだろうか。
フェイトの心に不安が過る。だが、もう迷わない。自分は超えて見

せる。眼前の巨大な壁を。

そして見つけて見せる。自分だけのアクセルシンクロを。

そうして自分は、遊星や鬼柳に認めてもらうのだ。共に闘う仲間だと。

「ありがとうございます、ブルーノさん」

フェイトは一言だけ、ブルーノに礼を告げると、カードを腰のデッキホルダーへと仕舞う。

恐らく、自分の不在を知ったプレシアや鬼柳が探している頃だろう。

もうこれ以上、此処に居られない。

それを察しているのか。ブルーノもフェイトの言葉に同意を示し、コクリと頷いている。

そしてフェイトはブルーノやティーダ、ティアナの三人に手を振りながら、鬼柳達の元へ駈け出すのであった。

※

「でも、師匠。良かったんですか？」

「何がだ？」

「あれ、最後の一枚だったんでしょう？　≪フォーミュラ・シンクロン≫」

フェイトが立ち去った空き地。そこでティーダは、ブルーノに訊ねていた。

彼が持っていたシンクロチューナーは、彼のエクストラデッキに入っているのを除けば先ほどのフォーミュラ・シンクロンのみ。

最後の一枚であるフォーミュラ・シンクロンを、見ず知らずの少女に渡しても良いのか。

ティーダはそう聞きたいのだろう。それにブルーノは何の逡巡もなく頷く。あれは彼女が持つに相応しい。

「あぁ、気にしてはいない。

それに、彼女ならばきっと見つけられると思う。自分だけのアクセルシンクロを」

「うぅ、師匠にそこまで言わせるなんて……」

ティーダはいじけた様に、空地の隅っこで体育座りで泣いている。

どうやらティーダは、先ほどのフェイトほどの高評価をブルーノから受けていない様だ。

そんな彼を慰めようと、ティアナが慌てて彼の元へ駆け出す。
ブルーノはそんなティアナの後ろ姿を見送ると、以前の仲間だった遊星の顔を思い出す。

「（遊星、キミが認めた相手なら、ボクは何も言わない）」

遊星は滅多なことでは、アクセルシンクロを行わない。
相手の実力を認めたとき、彼はアクセルシンクロを行う。

ならばきっと、彼女は遊星に見込まれた相手なのだろう。ならば自分に異存は無い。
それになんとなくだが、彼女はアクセルシンクロを会得しそうな雰囲気をもっている。根拠などは無い。

しかし、クリアマインドへの境地は誰にでも至ることが出来る平等なもの。
彼女が立ちはだかる壁に諦めずに立ち向かうことが出来たならば、きっと会得できるだろう。

「さぁ、ティーダ。今日は帰ろう。キミの怪我の具合も見なくちゃいけない」

「あ、はい。そうですね」

ブルーノはティーダを連れだって、厄介になっている彼らの自宅へと足を進める。

その際に、先ほどまでティーダが乗っていたDホイール――デルタイーグルの回収も忘れない。

デルタイーグルはブルーノにとって、もはや無くてはならない相棒の様な存在なのだ。

彼のデルタイーグルを触る仕草は、何処か親愛の情に溢れている。

何処か優しい手つきでデルタイーグルに触れた。

「いよっし！　俺もフェイトちゃんに負けない様に、クリアマインドを習得しないと！」

「頑張れ、お兄ちゃん」

「うん！」

そしてデルタイーグルを押しながらティーダとティアナの隣に立つと、彼らの会話が聞こえてくる。

どうやらティーダは、同じ目標を目指す少女、フェイトに少なくない対抗心を燃やしている様だ。

そんな兄を応援する様に、ティアナが笑みを浮かべながら空へと拳を掲げている。その様子は微笑ましい限り。

知らず知らずのうちに頬が緩んでいるのに気が付き、ブルーノは慌てて口元を引き締めた。だらしがないと思われたくない。

「待ってろよブレード・ガンナー！
お前を絶対、俺のものにしてみせるからな！」

口元を引き締めているブルーノの隣で、ティーダが一枚のカードを取り出す。
それは先ほど、ブルーノがフェイトに渡したものと同じ、シンクロモンスターのカードだ。

だが、こちらもフェイトと同様、シンクロモンスターは描かれていない。
ティーダがクリアマインドの境地へ至り、アクセルシンクロを成功させたとき、モンスターが浮かび上がるのだ。

すでにどの様なモンスターが浮かび上がるのかは、大方想像はついているのだろう。
ティーダは嬉しそうな表情で、何も描かれていないシンクロモンスターのカードを見つめている。

そんな嬉しそうなティーダを見て、ブルーノは人知れず願った。
どうか、彼がクリアマインドの境地へ至ることが出来る様に、と。

※

「ふぇえええ……」

ブルーノやティーダ、ティアナと別れた後、フェイトは家族の元へ戻っていた。
だが、そんな彼女を待っていたのは母親と使い魔によるお説教。かれこれ三十分は経過している。

しかも道端でフェイトは正座させられているので、周囲を歩く一般人の目が痛い。
上目遣いで止めてくれるように母親と使い魔に頼むのだが、今回の二人は真剣なのか。ふざける気配が無い。

「聞いているの、フェイト。
何処かへ行くなら、ちゃんと事前に言いなさいと言ったでしょう？」

「う、うん……」

「これから頼むよ。事前に言っててくれれば、鬼柳を用心棒代わりに着けさせるからさ」

「ごめんなさい……」

と、三十分ほど続けられたお説教も終息に向かいつつある様だ。プレシアとアルフの攻勢が弱まる。
そしてとどめと言わんばかりにフェイトが謝罪の言葉を口にすると、ようやく二人の雰囲気が弛緩した。

先ほどまでの刺々しい雰囲気は成りを潜め、今は暖かな空気が場を支配している。
もう、怒られないかな。そう思いながらフェイトは下げていた頭を上げた。すると、暖かな何かに包まれる。

「ふわ!?　か、母さん!?」

「心配かけさせるんじゃないの、まったく……」

暖かな何かは、プレシアの身体だった。母親の腕に抱かれ、フェイトの頬が赤くなる。
けれど、それも少しの間だけ。プレシアの口から漏れ聞こえた本音に、フェイトは頬を緩めた。

そして母親を安心させるように、ギュッとプレシアの身体に縋りつく。
母親の腕の中と言うのは、何故こうも居心地が良いのだろう。フェイトはそう、疑問に思う。

「よし、説教も終わったみたいだな」

「あぅ。ごめんね、鬼柳」

適度にプレシアの腕の中を堪能していると、近くのお店から鬼柳が顔を覗かせた。

どうやらフェイトの説教が行われている間、付近のお店を物色していたらしい。

彼の手には、そのお店のロゴマークが入った紙袋が握られている。

フェイトは鬼柳の姿を認めると、しょんぼりと肩を落とした。彼にもまた、迷惑をかけた。

「無事なら良いさ。ただ、これから突然いなくなるのは勘弁してくれよ」

「うん。そうする」

だが、そんなフェイトの心配をよそに、フェイトの頭にぽん、と僅かな重みが加わる。

それは紙袋を持っていない方の鬼柳の手。その手はフェイトを安心させるように彼女の頭を乱暴に撫でる。

するとようやく、フェイトの表情に笑みが戻った。皆に心配を掛けて申し訳ないと思う。

けれど、フェイトは思うのだ。こうして誰かに心配されると言うのは、すごく嬉しいことだと。

母親と使い魔に心配されて、自分がいかに大切にされているのか理解した。

鬼柳に心配されて、彼に気に掛けてもらえていると理解した。それがとてつもなく、嬉しい。

「よし、ならこれをやる」

「？　これって……」

「結構時間も経ったし、腹も減ってるだろうと思ってな」

鬼柳が紙袋から取り出したのは、ホカホカと暖かそうな湯気を立てる肉まん。

ミッドチルダにも肉まんがあったのかとフェイトは驚きながらも、鬼柳から一つ受け取った。

鬼柳も新たに紙袋から肉まんを一つ取り出すと、パクリと口に運んでいる。

その様子が何処かミスマッチで、フェイトは思わず頬を緩めた。なんだか鬼柳に肉まんは似合わない。

けれど、それをそのまま口に出すのは憚られた。

何故ならば、彼はとても美味しそうに肉まんを頬張っているのだから。

それをわざわざ壊すのは野暮と言うものだろう。それに、彼から貰った肉まんを悪く言いたくない。

フェイトはそう自分に言い聞かせると、彼から貰った肉まんを一口頬張る。すると、暖かな肉汁が口の中に溢れ出た。

五話　「クリアマインド　後編」（後書き）

次回予告

ミッドチルダから帰還した鬼柳達。
フェイトはブルーノから受け取ったフォーミュラ・シンクロンでアクセルシンクロの練習を始める。

一方鬼柳と言えば、今まで休んでいた翠屋のバイトに復帰する。
そのせいで鬼柳と過ごす時間が少なくなり、なのはたちは不満げ。

そんな折、はやてがあるイベントを思い付く。
曰く、「鬼柳兄ちゃんがバイト中に来店して接客してもらおう！」
とのこと。

果たしてなのは、フェイト、はやて、リインフォースの中で誰が一番、鬼柳に構ってもらえるのか。
くだらない様で真剣なバトルが今、幕を開ける。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「執事な鬼柳」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

六話　「執事な鬼柳」（前書き）

今回は鬼柳さんの意外な一面のご紹介。
と言っても、鬼柳さんも男の人なんだよと言う話。

それと今回は十五禁臭いです。苦手な方はご注意ください。
そして一番構ってもらえたのは四人じゃなくてあの人だったり。

六話　「執事な鬼柳」

～海鳴市　八神家～

「う～ん、う～ん……」

リビングのテーブルの上にはばらばらに解体されたフェイトのデッキ。
その解体されたデッキを見つめ、フェイトは腕を組んで唸り込んでいた。

何を抜いたら良いのか分からない。何を入れたら良いのか分からない。
そんな表情を浮かべて、フェイトは傍らに置いてあるカードの山を手に取る。

「≪チェンジ・シンクロン≫が良いのかな……？
　でも、≪グローアップ・バルブ≫もなかなか……」

フェイトが現在思案しているのは、デッキに投入すべきレベル１のチューナーモンスターである。
理由としては、先日ミッドチルダに出向いた際に入手したレベル２のシンクロチューナーの存在だろう。

そのレベル２のシンクロチューナーであるフォーミュラ・シンクロ

ンの召喚条件は少し難しい。
なにせレベル1のチューナーとレベル1のモンスター、もしくはトークンをシンクロ素材としなければならないのだから。

今までレベル2のシンクロモンスターを出す機会、それどころかレベル2のシンクロモンスターすら存在せず。
フェイトはどの様なデッキの構築にしたら良いのか迷っているらしい。二枚のカードを見つめて、睨めっこをしている。

「シンクロチューナー、≪フォーミュラ・シンクロン≫ねぇ……」

そしてそんなフェイトの様子を見つめながら、胡散臭そうな声を上げるのは彼女の使い魔であるアルフ。
彼女は手に持った一枚のカード――フォーミュラ・シンクロンを胡散臭そうに見つめていた。

どうやらこのカードで、本当にシンクロモンスター同士でのシンクロ召喚が可能か訝しんでいるのだろう。
実際、そのことを話したときはプレシアですら懐疑的であった。やはり、アクセルシンクロは普及していないのだろう。

「フェイトぉ。ホントにアクセルシンクロなんて、出来るのかい？」

「うん、出来るよ。私が頑張ってクリアマインドを会得すれば」

「クリアマインド……」

結局フェイトは、両方のモンスターをデッキに投入することに決めた様だ。
彼女のデッキから雪だるまことスノーマンイーターが抜かれ、二種類のモンスターが投入される。

そして今度は、素早くスターダスト・ドラゴンをシンクロ召喚するためだろう。
手にはデブリ・ドラゴンを持ち、どのカードと入れ変えるか思案する。

その様子を見て、アルフは嘆息しながら何も描かれていない白い枠のカードに視線を向けた。
アルフとてクリアマインドやアクセルシンクロの話は聞いている。いかに会得が難しいのかも。

それでいて、フェイトが会得しようと言うのだからアルフは驚きを隠せない。本当に習得できるのか。
そんな不安はある。しかし、フェイトは怯んだ様子を見せない。まるで大きな壁に挑む様な、挑戦する様な目をしている。

「ふぇえ……」

「うん？」

と、過去のフェイトの瞳に思いを馳せていたアルフは、フェイトの情けない声に現実に意識を引き戻された。
何を情けない声を出しているのだろう。疑問に思い、テーブルの上

に散らばるフェイトのデッキのパーツに目を落とす。

するとそこには、ぽつんと置かれた一枚のカード――スターダスト・ドラゴン／バスターのカードがあった。

このカードが一体どうしたと言うのだろうか。チラ、と伺う様な視線を、アルフはフェイトに向ける。

「す、スターダスト／バスターとアクセルシンクロの共存が出来ないよぉ～……」

「あぁ～……、まぁ、確かに」

涙眼でいじけるフェイトを視界に捉えながら、アルフはスターダスト／バスターに視線を移す。

現在のフェイトのデッキにおけるエースモンスター、スターダスト・ドラゴン／バスターは強力なモンスター。

しかし、召喚条件は難しい。バスター・モードと言う罠カードを発動しなければならないのだから。

下手をすれば伏せたターンに破壊され、バスター・モードを発動できないと言う可能性もある。罠カードはスピードが遅いのだ。

仮に発動に成功したとしても、やはりレベル2のシンクロチューナーとの共存はもはや不可能と言える。

なにせバスター・モードの効果でスターダスト・ドラゴンがリリースされてしまうのだ。場に残るのは／バスターだけ。

スターダスト・ドラゴン／バスターが戦闘破壊されれば場にスター

ダスト・ドラゴンが特殊召喚されるが、それでも難しい。
なにせスターダスト／バスターの攻撃力は３０００と大きい。これを戦闘破壊される場合、フェイトの状況は不利になっているだろう。
結局、どうすれば良いのか分からずフェイトはテーブルに頭を突っ伏してしまう。
切り札であるスターダスト・ドラゴン／バスターを抜くべきか。シンクロチューナーを諦めるべきか。

「きりゅ～……助けて、って……」

考え過ぎたのだろう。頭からしゅぅしゅぅと湯気を立ち上らせながら、フェイトは鬼柳の名を呼ぶ。
だが、リビングに鬼柳の姿は見えない。それどころか、八神家の何処にも、鬼柳の姿は見えないのだ。

「そうだった。たしか昨日からお仕事だったっけ」

「そうだよ。昨日、鬼柳が言ってたじゃないか」

フェイト達を纏めるリーダーである鬼柳は、昨日から翠屋でのアルバイトに復帰している。
それと言うのも、そろそろお店に復帰しなければ不味いと言う社会人としてはごく普通の理由だった。
なのはの母親である桃子と言えば、別に気にせずなのはと遊んでく

れと言っていた様だ。しかし鬼柳が却下した。
何故ならば、翠屋で働かなければ給料が入らず、生活に困る事態になってしまう。これは是非とも避けたい事態だ。

はやてなどは両親の遺産で鬼柳を養うなどと言っていたが、鬼柳はそれも却下した。
曰く、子供に自分の生活の面倒まで見てもらうことは出来ないらしい。鬼柳とてプライドがある。

その様な理由で、現在鬼柳は翠屋でアルバイト中なのだ。
なのはやはやてはリビングのソファにだらりと腰掛け、リインフォースはふぅふぅとお茶を冷ましている。

「……つまんないな」

一通りデッキの調整が済んだフェイトは、ぷぅっと頬を膨らませてそう、呟いた。
今までは呼べば鬼柳がすぐに自分の元に来てくれた。だが、今は呼んでも来てくれない。

それに八神家の騒がしさの中心には、いつも鬼柳が居た様な気がする。
そんな彼が居ない八神家は何処か物足りない。早く帰ってくれれば良いのに。

「そうは言ってもねぇ。鬼柳も働かないとお金貰えないんだよ」

「そうよ、フェイト。鬼柳がニートみたいになったらイヤでしょう？」

「！　母さん」

と、アルフがフェイトに言い聞かせていると、リビングに新たな女性の姿が見えた。
その女性とは、フェイトの母親であるプレシア。私服である紫のワンピースに身を包んでいる。

そして彼女はフェイトを嗜めるようにそう告げた。それにフェイトは頭の中で想像してみる。
ニートな鬼柳。働かず、部屋でごろごろとアニメばかり見ている。
実生活は二の次。アニメやゲームが命。

そんな鬼柳を想像して、

「ふ、ふぇえええ！
や、ヤダヤダ！　鬼柳がニートなんてヤダよぅ！」

鬼柳のダメダメな姿に、フェイトは涙眼でプレシアに抗議した。
そんな鬼柳なんて恰好悪くてイヤだ。いつもみたいに満足を追い求める鬼柳が良い。

「ふぅ。なら、鬼柳が働いてるのを応援しなくちゃ」

「う、うん！　鬼柳、頑張って働いて！」

プレシアの言葉に、フェイトは何処か見当違いな応援の言葉を口にする。
その様子は微笑ましく、プレシアは頬が垂れるのを止めることが出来ない。

「そやけど実際問題、鬼柳兄ちゃんが居なくて暇なのは事実やね」

と、フェイトが今ごろ汗水垂らして働いているであろう鬼柳を応援していると。
先ほどまでソファの上でだらだらしていたはやてとリインフォースが二人の会話に混ざってくる。

どうやらはやてやリインフォースも鬼柳が居らず、暇な時間を持て余している様だ。
はやてははふぅと小さなため息を吐き、リインフォースは鬼柳の隠し撮り写真をアルバムに仕舞う。

「そうですね。仕事を否定するつもりはありませんが、もう少し私との時間を増やしてくれれば……」

「リインフォース。さり気なく鬼柳兄ちゃんの恋人っぽいアピールはＮＧや」

「……ぷぅ」

はやての言葉に、リインフォースが頬を膨らませていじけた。
そんな何処か幼さを感じさせるリインフォースの仕草に、プレシアは頬を緩める。

なのはやはやて、そして愛娘であるフェイトが鬼柳に仕掛けるモーションは微笑ましい物ばかり。
そして新たに鬼柳争奪戦に加わったリインフォースの仕掛けるモーションもまた、微笑ましい物だった。

鬼柳に構ってもらえると機嫌が良くなり、なのはやフェイトに構っていれば彼女の機嫌が悪くなる。
そんな何処か子供っぽさを見せる彼女のことを、プレシアは気に入っていた。なのはたちとは違う可愛さを持つ女性だ。

「じゃあ、こっちから押しかけてみる？」

「はぇ？」

そんなリインフォースの顔を見ているうちに、プレシアは無意識にそう提案していた。
別に考えがあって言った訳ではないのだが、これはこれで面白いアイデアだと自分でも思う。

鬼柳が仕事で家を空けている。ならばこちらから出向いて顔を見れば暇も潰せるのではないか。
そう考えると、意外と良いアイデアの様にプレシアは思える。それ

に仕事中の鬼柳と言うのも見てみたい。

「「「「……」」」」

プレシアの言葉になのは、フェイト、はやて、リインフォースが宙を見つめ、考え込む。
恐らく全員が全員、仕事中の鬼柳の姿を想像しているのだろう。ある者は楽しそうに。ある者はだらしなく頬を緩める。

「そ、そやね。そう言えば仕事中の鬼柳兄ちゃんって見たこと無かったし、面白いかも」

「う、ウェイターな鬼柳……、いや、ここはホスト風な鬼柳も捨てがたいかも……」

「や、やっぱりあーんは人が居る所じゃ恥ずかしいよぉ……！」

「一緒にジュース、飲んでくれるかな？」

はやてが取り繕った様に告げれば、皆が皆賛成の意見を言い出す。
その中でも一人だけ思考が大人なリインフォースと言えば、鬼柳との甘い一夜を想像している様だ。

プレシアはそんなリインフォースを見つめ、そう言えば――と脳裏にこれまでの鬼柳の姿を思い浮かべる。
彼は出会ってから今まで、あまり女性に対してその様な視線を向け

たことは無かった。リインフォースは勿論、プレシアにまで。

もしや、鬼柳は同性愛者だったのだろうか。プレシアの脳裏に、ザフィーラと抱き合っている鬼柳の姿が浮かぶ。

だが、それはあり得ないかと脳裏に浮かんだ想像を打ち消した。プレシアはタハハと苦笑いを浮かべる。

彼は以前リインフォースに看病された時、彼女のアプローチにたじたじになったのだ。

もしも同性愛者ならば、異性からのモーションは無視するか拒絶するかのどちらかだろう。

「……ふぅむ」

「？　母さん？　どうしたの」

考え込んでいたプレシアの耳に、愛娘であるフェイトの声が届く。

どうやら考え込んでいたプレシアを心配し、声をかけてきたらしい。

「え？　あぁ、何でもないわ。それじゃ今から翠屋に行くから、準備なさい」

「はーい！」

プレシアは今まで考えていた事情を頭の隅に放り投げると、皆に出かける準備を促す。

考えていたって仕方が無い。鬼柳が同性愛者かどうかは、本人に訊ねれば良いのだから。

プレシアの鶴の一声に、なのはやはやてたちがバタバタと慌ただしく外行きの準備を始める。

そんな少女たちと一人の女性の姿を視界に捉えながら、プレシアはこっそりと鬼柳の私室に足を運ぶのだった。

※

「いらっしゃ――――あら」

「こんにちは、桃子」

「プレシアさん」

翠屋の入り口の扉を開けると、まず出迎えたのはエプロンを身に付けた桃子だった。

どうやら先ほど厨房から出てきた様で、頭には白い三角巾が巻いてある。

桃子は入口に立つプレシアの姿を捉えると、彼女の背後に控える様に立つ少女たちを見て笑みを深くした。
どうやら彼女たちが誰を目的にここまで来たのか理解したらしい。
彼女は可愛らしくウィンクを一つすると、カウンターの奥へ消える。

「うぅ。なんだかドキドキやね」

「そ、そうだね。思えば鬼柳さんが働いている所なんて、初めて見るかも」

「新しい鬼柳の一面、と言う訳ですね」

そして桃子がカウンターの奥に消えると同時、はやてが胸を抑えながら一人、そう呟いた。
はやての言葉に、なのはも頷いて同意を示した。実際、鬼柳が働いているところなど初めて見る。

今までは自分やフェイト、はやてを相手にデュエルをしたり、ヴィータやシャマルと漫才をしている場面ばかりだ。
なのでリインフォースの言うとおり、今から見る鬼柳は新たな鬼柳の一面なのだろう。それを想像すると、胸がドキドキしてくる。

そしてなのはやフェイト、はやてにリインフォースがそれぞれ胸を高鳴らせていると、カウンターの奥の扉が開いた。
そこから出てくるのは、彼女たちが探していた鬼柳の姿。出てきた彼の表情と服装を確認し、なのはたちの瞳が大きく見開かれる。

「なんだ、なのはたちも来たのか……って、おい？　どうした」

「「「「ぽかーん」」」」

カウンターの奥から出てきた鬼柳は、なのはたちの姿を捉えると笑みを浮かべながら答えた。

だが、なのはたちは誰も鬼柳の言葉に返事を返すことが出来ない。

何故か、それは彼の浮かべる表情と着ている服の違いからだ。

今の鬼柳の表情は先ほどまで仕事をしていたせいか、ピリピリとした緊張感をはらんでいる。

加えて、彼が身に付けている服は何故か執事服。しかし胸元を着崩しているせいか、不良な執事と言うイメージだ。

普段の鬼柳を知っている彼女からしたら、このギャップは凄まじい。

その内の一人――リインフォースはよからぬ想像をしたのか。鼻血を噴き出した。

「なんだか……」

「……鬼柳」

「今の恰好、カッコえぇで……！」

「ん、そうか？　ありがとよ」

自分の胸元の開き具合を確かめながら、鬼柳はなのはたちの言葉に

笑みを返す。
するとそれだけで、なのはが頭から湯気を噴き出して倒れてしまった。こちらもよからぬ妄想をしたらしい。

鬼柳はそんななのはを見て慌てると、カウンターの奥から顔を覗かせた桃子に声を掛ける。
内容は今から少しの間だけ休憩が欲しいと言うもの。それに桃子は二つ返事で頷き、カウンターの奥へ消える。

「それにしてもプレシア。
お前、フェイトになんてカッコさせてるんだ？」

「なんてカッコって……可愛いじゃない」

桃子から休憩を貰った鬼柳はなのは達を連れだって空いている席へと足を運ぶ。
既に客足のピークは過ぎた頃なのか。翠屋の店内に残っているお客さんは少ない。

そして彼の視線は、プレシアの隣で自分のことを熱っぽい瞳で見つめる少女に注がれている。
その少女とは彼女の娘――フェイト・テスタロッサ。だが、今の彼女の服装は鬼柳が言うとおりおかしな格好だった。

彼女の身に付けているのは、どう言う訳かトラをデフォルメした様な着ぐるみの様なパジャマの様な服。
ボタンを前で止める仕様なのか。フェイトの胸の前には三つのボタンがチョコンと自身の存在をアピールしている。

「ほぇ？　か、可愛くないかな……？」

「可愛いか可愛くないかの問題って……くそっ」

「？」

鬼柳の言葉にフェイトは伺う様な視線を鬼柳に向ける。だが、鬼柳はソッポを向いて答えるばかり。

自分は何か、不味いことをしてしまったのだろうか。フェイトは不安に駆られ、隣に座るプレシアを見る。

だが、彼女は普段通りの澄まし顔。そっとフェイトの頭に手を乗せると、よしよしと撫でてくれる。

母親に頭を撫でられて嬉しそうに頬を緩めていると、そんなフェイトを何処か羨ましそうな瞳で見つめる鬼柳に気がついた。

否、正確には、見つめているのはフェイトではない。彼が見つめているのはプレシア――フェイトを撫でている方だった。

何故、鬼柳がプレシアのことを見つめているのだろうか。フェイトは鬼柳のことを見つめながら、コテンと首を傾げる。

「ふふ、鬼柳はね。フェイトを撫でることが出来なくて嫉妬してるのよ」

「ふへ！？」

「っ！　プレシア！」

疑問を感じているフェイトを安心させるように、プレシアは悪戯っぽく笑いながらそう告げる。
すると鬼柳の頬がカッと赤くなった。それは怒りではなく、羞恥によるもの。訳が分からず、フェイトはプレシアを見る。

「だって、こんなに可愛いんですもの！
鬼柳だって撫で撫でしたくなるのも、無理ないわぁ！」

「わ！　わ！」

「くっ、否定できないのが辛い……！」

プレシアはフェイトをぎゅぅっと抱き締めると、見せつける様に鬼柳を見つめる。
するとそれに、鬼柳は珍しく素直な感想を口にした。どうやらフェイトの着ぐるみが功を奏しているらしい。

実際問題、今のフェイトはプレシアから見てもとても愛らしい。思わず野獣になって襲いたくなるくらいだ。
しかし、そんなことをして娘に嫌われる訳にもいかない。故にプレシアは、フェイトを抱き締めるだけに留まっていた。

「くっ、プレシア・テスタロッサ！
そんな方法で鬼柳に売り込む方法があるとは……！」

「き、着ぐるみ……！
お母さーん！　ウチに着ぐるみってあったー！？」
「ないわよー」
「がーん！」

一方、鬼柳とプレシア、フェイトのやり取りを横で見ていたなのはたちは、それぞれ焦りを覚えていた。
まさかフェイトに着ぐるみを着せることで、普段よりも可愛らしさを引き立たせるとは思いもよらない方法だった。

そのせいで、多少なりとも鬼柳の好感度を上げているのだからイヤになる。
リインフォースは自分もフェイトの後に続こうと、ぱらぱらと夜天の魔導書を捲っていた。

なのはもなのはで母親に掛けあっている様だが、期待した答えが返ってこずに肩を落としている。
くそぅ。一体どうしたらいいのか。なのはがテーブルに突っ伏していると、ぽんぽんと誰かに肩を叩かれた。

誰だろうか。疑問に思いながら顔を上げると、そこには優しげな表情を浮かべた姉――美由希の姿が。
一体どうしたと言うのだろうか。なのはが疑問を覚えていると、彼女はなのはの耳元に口を寄せてそっとアドバイスする。

最初はふむふむと感心したように頷いていたなのはだったが、次第

にその頬が赤くなっていく。
「いや、そんなバカな」、「いやいや、本当だって」などのやり取りが、姉妹の間で交わされていく。

そして美由希のアドバイスを聞き終え、なのはも決心がついたのだろうか。頬が赤いまま、彼女はグッと拳を握る。
ターゲットは鬼柳。今はフェイトの愛らしさに目を奪われている様だが、今度は自分に目を釘つけにさせてやると意気込んだ。

そして――――

「き、鬼柳さん！　私のお尻をぺちぺち叩いて！」

「何故！？」

なのはの衝撃の告白に、鬼柳はらしくないほど狼狽した。
今後、この様な鬼柳が見られることは稀だろう。それほど珍しい鬼柳の表情。

「え、えっと……男の人は女の人をいじめるとその人のことが好きになるってお姉ちゃんが――――」

「美由希、てめぇ！」

「わー！　暴力はんたーい！」

なのはの言葉を聞き、脱兎のごとく鬼柳が飛び出す。向かう先は先ほどなのはにアドバイスした美由希。
彼は咄嗟に美由希を捕まえようと手を伸ばすが、伊達に剣の練習をしていないのか。鬼柳の手を華麗に逃れる。

鬼柳が高速で何度も手を突き出すが、美由希もその早さに負けない速さで動き回り、鬼柳の腕を回避する。
それは凄いのか凄くないのか、微妙な争い。しばし彼らは争っていた様だが、美由希が捕まらずに鬼柳がとぼとぼと帰って来た。

「なのは、今の話は忘れろ」

「え？　で、でも……」

「良いから忘れろ」

「もがっ」

必死に言い募ろうとするなのはを、鬼柳は適当に手に取ったポッキーを彼女の口に入れることで拒否する。
適当に手に取ってしまったため、数本なのはの口に入れられるが、特に苦しくないのだろう。彼女はちゅぱちゅぱと舐めている。

「んふぅ。ひょこれーろ、おいしいれ」

「なに言ってるのかわからねー。いや、何となくわかるけど」

彼女の唾液によって、ポッキーにデコレートされているチョコレートが溶けだしたのだろう。
溶けだしたチョコレートを舐めることが出来て、なのははにやにや幸せ顔だ。その様子に思わず鬼柳の頬も緩む。

「はい、鬼柳！　そのままポッキーを出し入れして！」

「ん？　こうか？」

と、しばし桃色空間を作っていた二人だったが、それはプレシアの大声によって打ち砕かれた。
先ほどの指令は一体どう言う意味なのだろう。疑問に思ったが、とりあえずプレシアの言うとおりポッキーを動かす。

ヌッ。ポッキーをなのはの口の中に押し込めば、ポッキーの先端がなのはの口内にあるだろう、舌に当たる。
ヌッ。今度はポッキーを引いてみる。すると唾液によってところどころチョコレートが剥がれたポッキーが姿を現した。

それを何度か鬼柳は繰り返す。
なのはもプレシアにジッとしている様に告げられ、ポッキーをかみ砕く事もせずにジッとしていた。

「ん、はぁ……！　もっと、もっと優しくしてぇ……」

「って、プレシア！　お前謀ったな!?」

「うにゅ？」

出し入れを繰り返していると、不意にプレシアが色っぽい声を上げた。
その声をＢＧＭに出し入れを繰り返していると、鬼柳の頬がカッと赤くなる。

どうやらプレシアの声となのはの口へポッキーを出し入れする行為が、大人の行為を連想させたようだ。
彼は手元にあったポッキーの入った袋を手に取ると、プレシアに向かって投げつける。しかし、プレシアはそれを全て空中でキャッチ。

「ふふん、食べ物を粗末にしてはダメよ」

「誰のせいだよ！」

「？　おかしいわね。鬼柳ってそう言うのが好きだと思ったのだけど」

「んな――――ッ！？」

チラッと、プレシアは鞄の中からある物を取り出す。
それは鬼柳の部屋に隠された彼のお宝。別名を男のロマンと言う。
表紙に描かれているのは裸の女性。思わぬ雑誌の登場に、なのはやフェイトの頬が赤くなる。

一方お宝を持って来られた鬼柳と言えば、顔が赤くなったり青くなったり百面相している。こんな鬼柳も珍しい。

「んな！　き、鬼柳！
貴様、こんなものを読んでいるのか！」

「あら、おかしなことかしら？」

「はぁ！？
だって、こんなふしだらなものをだぞ！？」

プレシアが取り出した雑誌を見て、リインフォースが頬を真っ赤に染めて抗議する。
しかし、彼女の抗議はプレシアの不思議そうな声によって押し止められた。思わず彼女を振りかえる。

「あのねぇ、鬼柳だって男性なのよ。成人を迎えた良い男性。
そんな男性が女性の裸に興味を持たないなんて、それはそれで問題じゃない？」

「ぬっ。それは、確かに……」

「それに良かったじゃない。
鬼柳は同性愛者じゃなくて、ちゃんと異性に興味を持っている健全な男性だって分かったんだもの」

プレシアの言葉に、リインフォースはそれもそうかと納得する。
たしかにいくら言い繕っても、鬼柳とて男性。女性に興味があるのも仕方ない。

それにザフィーラや身近な男性とその様な関係になられるのも、リインフォースとしては困る。
故に、彼の精神が異常で無いことを確認でき、リインフォースとしても嬉しい。だが、釈然としないものを感じる。

そんな本を読むより、自分のことをもっと見て欲しい。
自分のことをもっと見て、沢山自分のことを知って欲しい。

「悪かった……、悪かったからもうやめてくれ……」

「鬼柳。アンタ、すっごいダメージ受けてるね」

「職場でそんな話されたら、誰だってこんな反応になるだろうが……っ！」

一方、隠していたはずの本を暴露され、鬼柳はテーブルの上に突っ伏していた。
なのはやフェイト、はやての目と耳を塞いでいたアルフは、そんな鬼柳を見て苦笑いを浮かべる。

今まで身近過ぎて気付かなかったが、鬼柳とて男性なのだ。女性の裸に興奮する事もあろう。
そして本能の赴くままに行動せず、別のものを使って発散するのは良いことだとアルフは思う。

我慢を続けると言うのも、鬼柳にとっては苦痛だろう。やはり、何かで発散するべきだった。
それに加え、今の鬼柳の居住スペースもおかしい。一軒家の中に男性は二人だけ。そのうち一人は半ば狼だ。

男性1人が女性ばかりの家に放り込まれ、今まで間違いが起きなかったことが奇跡に等しい。
鬼柳も鬼柳で頑張っていたと言うことだろうか。今後はなのはやフェイトのスキンシップをもう少し控えさせようとアルフは思う。

「ふふん、許して欲しかったらしっかりお持て成しなさい。
今日は私たちはお客さまよ」

「っ。分かったよ」

悪戯っ子な笑みを浮かべたプレシアに答える様に、鬼柳がふてくされた様に立ちあがる。
頬を赤く染め、ふてくされた様な鬼柳の姿は新鮮で、アルフは珍しく鬼柳のそんな姿に目を奪われた。

そして彼は一旦カウンターまで戻ると、伝票とメニューを片手に戻ってくる。
どうやら鬼柳の中でプライベートと仕事の時間を切り替えるスイッチが入れ変わった様だ。

先ほどまで見せていた気楽な表情はそこにはなく、そこにいるのは真面目に仕事に取り組む一人の青年。

そんな鬼柳の様子を、アルフはジッと見つめる。悪くない。いや、むしろ格好いい。アルフはプレシアの言葉に同意した。

「それでお嬢様方、なにかご注文はありますでしょうか？」

「けど、鬼柳のイメージとはちと違うね」

「分かってるよ、そんなこと。この服だって桃子に着せられたんだ」

ようやくアルフから解放されたなのはたちに、鬼柳がまるで執事の様な口調で訊ねる。

だが、それはまるで鬼柳らしくない。ボソリとアルフが呟いた呟きが鬼柳に聞かれたのか。

彼は憮然とした表情でソッポを向いた。どうやら彼の服装は桃子の一存で決まったらしい。

なるほど。元より顔の素材は悪くない鬼柳に執事服は合っているかもしれない。黙っていれば二枚目だ。

しかし、普段の鬼柳を知る者からすれば鬼柳のイメージと今の鬼柳はかなりズレが生じる事だろう。

あれほど自由気ままに生きてきた鬼柳が、こうして他人の下に着くと言うのは想像できない。故にずれが生じる。

「ねぇ、鬼柳。これはなに？」

「ん？　あぁ、それは俺が紅茶を息で冷ましてやるんだと」

「じゃあ、こっちは？」

「お客の隣に腰掛けて食事の補助とかだな」

「……メイド喫茶みたいね」

「メイド喫茶？」

プレシアは鬼柳から受け取ったメニューを捲ると、気になるメニューを一つずつ鬼柳に訊ねた。

だが、返ってきたのはどれも喫茶店で出す様なメニューではない内容。思わずプレシアが小さく零す。

それを聞き、アルフは「あぁ、そう言えば」と思い出す。都心の方に出来た話題の喫茶店にそっくりなのだ。

鬼柳はそれを聞いたことが無いのか。コテンと首を傾げている。アルフはそんな鬼柳に何でもないと言って見せた。

「き、鬼柳！　わ、私にこのふーふーをしてくれ！」

「あ、リインフォースさんずるい！」

「そなら私はあーんして欲しいで！」

鬼柳がアルフやプレシアから視線を外すと、リインフォースやなのはが鬼柳に寄って集まる。

どうやら先ほどのメニューに感じるものがあったらしい。彼女たちの目に宿るのは本気の炎だ。

四人の女性に囲まれ、鬼柳は戸惑いながらもそれぞれの注文を受け取っていく。
普段ならば照れてしない様なことでも、今回ばかりは別だろう。なにせお客とお店の関係なのだから。

リインフォースは鬼柳に冷ましてもらった紅茶を夢見心地で啜り、はやては鬼柳に食べさせてもらっている。
残るなのはとフェイトと言えば、なのはは鬼柳と身体を密着させて静かに紅茶を楽しみ、フェイトは彼の膝の上で紅茶を啜っていた。

なんとも穏やかな午後の光景。たまにはこんな鬼柳も悪くは無いかと、アルフは若干冷めた紅茶を啜るのだった。

後日、彼の秘密の本の隠し場所に、誰かが撮ったリインフォースの際どい写真が入っているのは、また別のお話。

六話　「執事な鬼柳」（後書き）

次回予告

クロノは闇の書事件の功績を受け、三極神の継承の儀を受ける。
気乗りはしないものの、クロノはクロノで全力を尽くす。

しかし、召喚された極神皇トールにより、クロノは窮地に立たされる。
果たしてクロノは、極神皇トールを倒すことが出来るのか。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「神の鉄槌」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

七話　「神の鉄槌」（前書き）

クロノのデッキは牛尾さんと同じタイプのデッキ。
正直、このデッキで神と闘うのはかなり難しかったｏｒｚ

七話　「神の鉄槌」

～時空管理局　本局～

「ふぅ……」

憂鬱そうなため息を吐いて、クロノは調整を終えたデッキを整える。
彼の視線の先には、重厚そうな装飾が施された機械的な扉。その扉を見て、再度彼はため息を吐く。

「やっはは、クロノ君。すっごい憂鬱そうだねぇ」

「それはそうだろ。なんだって僕がこんなことを……」

憂鬱そうに扉を見ていたクロノに、何処かお気楽な調子の女性の声が届いた。
振り返るまでもなく、クロノにはその声が誰のものか理解できる。
同僚であるエイミィだ。

彼女は片手に缶ジュースを持ちながら、遠慮など無用でクロノの隣に腰を落ち着ける。
そして「飲め」と言わんばかりに、クロノへ持っていた缶ジュースを突き出した。

「はぁ。本当はボクの実力で此処まで辿りつきたかったよ」

「けど、なってしまったものは仕方が無いわ。全力を尽くしなさい」

「……分かっています」

缶ジュースを口に運んだクロノへ、同じ室内に居たのだろう。母親のリンディが声を掛ける。

クロノはリンディの言葉にコクリと頷き返すと、先ほどよりもより真剣な表情で眼の前の扉を見つめた。

今日はクロノが管理局が誇る三極神を継ぐに相応しいか確認する、継承の儀が行われる日である。

この日のためにクロノはデッキの調整を行い、三極神と闘うに相応しいデッキを作り上げた。

だが、不安が残らないと言われれば、クロノは首を傾げざるを得ない。

何故ならば、それほど三極神の効果は強力なのだ。生半可なモンスターでは太刀打ちできないだろう。

そして慣れない緊張感に居心地の悪さを感じていると、不意に無機質な合図の音が聞こえた。

何だろう。疑問に思い音が聞こえた方へ、三人の視線が向かう。音が聞こえたのは、継承の儀が行われる広間の扉。

『クロノ・ハラオウン。広間へ』

「……行ってくる」

「頑張って、クロノ君！」

重厚な音を立てて、機械で出来た扉が開いていく。クロノはそれを見つめると、静かに告げた。

ここまで来たのだから、もう逃げることはできないだろう。ならば精一杯、自分のデッキで全力を尽くす。

星界の神々と謳われる三極神を相手に、自分は何処までやれるのか。何処まで闘えるのか。

こんなときだと言うのに、胸の奥がドキドキする。自分の力で辿りついた訳ではない。だが、興奮する。

「（なんだかんだ言って、僕も決闘者だったと言う訳か）」

不安に震える指先と、興奮を隠しきれない胸中を正確に分析し、クロノは冷静に判断する。

やはりいかに取り繕っても、自分は決闘者なのだろう。強い者との決闘は胸が躍る。興奮を抑えきれない。

そして薄暗い廊下を、静かな足音を立てながらただ歩く。この廊下の先に三極神のカードがある。

それを思うと、駈け出したくなる。だが、そんなことは自分のプライドが許さない。必ず、自分の手に勝利を納める。

鬼柳達の功績を勝手に奪ってしまったのだ。これくらいのことをし

なければ、とても自分を許せない。
そして薄暗い廊下を歩くこと数分後。クロノの目の前には、先ほどの扉よりも豪華な装飾が施された扉がそびえ立っていた。

「……さぁ、行くぞ」

不安と興奮でごちゃ混ぜになっている自分に言い聞かせるように、クロノは小さく呟く。
そして事前に渡されていたＩＤカードを扉の脇に設置してある端末に挿入。データの読み取りを行う。

暫しの間、端末の無機質な音が薄暗い廊下に広がった。
そしてようやく、データの読み取りが終わったのだろう。ＩＤカードが排出される。

それと同時、今まで他者を寄せ付けない様に存在していた扉が、重々しい音を立てて開いていく。
クロノは扉が全て開くまでその場で待つと、奥に見える広間へと足を運んだ。そして、三枚のカードを視界に捉える。

一枚目、極神皇トール。鋼のごとき肉体を持った、三極神の切り込み隊長。
二枚目、極神皇ロキ。人を小馬鹿にした様なその表情で、相手を惑わすトリックスター。
残る三枚目、極神聖帝オーディン。その眼光は相手の全てを映しだし、嘘も真実も見分けることが出来る管理局の切り札。

「……っ」

クロノは視線の先に置かれている、三枚のカードを見て思わず息を呑んだ。
置かれているのはただのカード。だと言うのに、自分はこの三枚から発せられる圧力に押されている。

「（これが……極神のプレッシャー……っ！）」

額に冷や汗が流れおちるのも拭わず、クロノは三枚のカードの元へ向かう。
そして所定の位置に付くと、ジッと三極神のカードを見つめた。はたして自分は、認めてもらえるのか。

クロノの見つめる三極神のカード。その何れもが、クロノに背中を向けている。
それはいわば、眼中にないと言う事だろうか。だが、まだ継承の儀は始まってすらいない。

継承の儀が始まり、クロノのことを見たカード。そのカードが、クロノを認めたと言うことになる。
はたして自分のことを真正面から見据えるのはどのカードか。トールか、ロキか。もしかしたらオーディンかもしれない。

不安と興奮が入り混じった気持ちを覚えつつ、クロノは三枚の極神のカードを見つめる。
音を立てて呼吸が出来ない様な極度の緊張感の中、クロノはキッと

三枚のカードを見据えた。

そして――――

――――ポゥ

「っ！」

クロノが三枚の神と相対してから数分後。彼の視線の先で、三枚のカードに光が灯る。

継承の儀が始まったのだ。ゴクリと生唾を飲み込み、クロノはただひたすら、三枚の神を見つめる。

はたして自分は、神に認めてもらえるのか。もしくは、認めてもらえないのだろうか。

緊張の面持ちでクロノは光が灯っているカードに視線を向ける。そして、そのときは訪れた。

「っ！　オーディン……」

動いたのは、トールでもロキでもなかった。

ゆっくりと後ろを振り返るのは、極神を束ねるオーディン。

まさか、オーディンに認められようとは。クロノは自分で自分が信じられない。

だが、そんな彼の興奮もすぐに波を引いた。何故ならば、彼は真にオーディンに認められていないのだから。

オーディンは、たしかにクロノへ視線を向けた。だが、あくまで向けたのは顔の半分だけ。
残る半分は、クロノに隠している。恐らくオーディンはクロノのことを、半分だけ認めたのだろう。

「……半分だけ、か」

クロノは詰めていた息を吐き出しながら、悔しさ半分。安堵が半分と言う様な表情を浮かべる。
最高神であるオーディンに完全に認められなかったのは悔しいが、半分は認めてもらうことが出来たのだ。

それを思うと、嬉しさが胸の奥から湧き出してくる。
このまま努力を続ければ、オーディンに完全に認められる日が来るかもしれない。

ならば自分は、このまま努力を重ねよう。そして今度こそ、オーディンに自分を見させる。
クロノはグッと、決意を新たに拳を握り込んだ。目指すはオーディンに自分を認めさせること。

『継承の儀は失敗か。クロノ・ハラオウン。退出を――――』

クロノが新たな決意を胸に秘めていると、広間に設置されていたのだろう。

スピーカーから指示が発せられる。しかし、その指示は途中で止まってしまった。

何故ならば、もう前を向くことは無いと思われていた二枚のカードのうち一枚――トールがこちらを向いたのだから。

「っ！　な、なんだ!?」

まさか。オーディンに続き、トールにまで？
そう考えていたクロノに、予想外の事態が飛び込んでくる。

それはこちらを振りかえったと思ったトールのカードが、独りでに宙を舞ったのだ。
向かう先は、広間に設置されたデュエルロボ。極神が認めた者の実力を測る際に使用するものだ。

そのデュエルロボに、極神皇トールのカードがセットされ、デュエルロボの電源がオンになる。
起動し、システムを立ち上げて行くデュエルロボ。それを見て、慌ててクロノも戦闘態勢に移った。

「……ん?」

腰に下げていたデッキケースからデッキを取り出し、腕のデュエルディスクにセットする。
そしてデュエルの用意を終えたクロノの視線の先に、デュエルを中

継するモニターが見えた。

そこに映し出されているのは、デュエルディスクを構えたクロノとトールのカードがセットされたデュエルロボ。

その内の一つ――デュエルロボが映し出されている画面に、白い無機質な文字でこう記されていた。

――――オーディンが気に掛ける相手の実力。我が確かめる。と。

「なるほど。僕はトールに認めてもらった訳じゃないのか」

クロノは僅かに肩を落としながら、トールの思惑に気がついた。

どうやらトールは、オーディンが気に掛けるクロノの実力を測るつもりの様だ。

オーディンが此方に干渉しないことからも、彼の行動を黙認している様に見える。

恐らく、もしもトールに負ける様な事があればオーディンはクロノから視線を外し、背を向けるだろう。

それはつまり、完全に見捨てられると言うこと。

せっかく気に掛けられているのだ。オーディンを自分のものにしたい。

ならばやることは一つだ。トールに勝利をおさめ、オーディンに実力を見せつける。

やるべき事は定まった。ならばそのやるべきことに向かって突き進むのみ。

「決闘（デュエル）！！」

クロノはトールのカードがセットされたデュエルロボを相手に、デュエル開始の宣言をした。

※

「先攻はボクだ、ドロー！」

手札５→６

「ボクは≪ヘル・セキュリティ≫を守備表示で召喚！
カードを一枚伏せて、ターンエンド！！」

ヘル・セキュリティ
チューナー
星１／闇属性／悪魔族／攻　１００／守　６００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキからレベル１の悪魔族モンスター１体を特殊召喚する。

クロノ手札６→４
場　ヘル・セキュリティ　伏せ×１

「此方のターン、ドロー」

手札５→６

「手札から≪極星獣ガルム≫を召喚！！」

極星獣ガルム
星４／闇属性／獣族／攻　８００／守１９００
このカードがレベル４以下のモンスターと戦闘を行ったダメージ計算後、
そのモンスターを手札に戻す事ができる。

デュエルロボのフィールドに、赤い毛並みの狼の様なモンスターが召喚される。
クロノは召喚されたガルムを見て、思わず苦い表情を浮かべた。
極星獣ガルムのモンスター効果は厄介なバウンス効果を持っている。
場のヘル・セキュリティをバウンスされれば、苦しい闘いになるだろう。

「（だが、それはさせない！）」

「バトル！　≪極星獣ガルム≫で≪ヘル・セキュリティ≫を攻撃！」

「伏せカードオープンだ！　≪進入禁止！　Ｎｏ　Ｅｎｔｒｙ！！≫発動！」

進入禁止！　Ｎｏ　Ｅｎｔｒｙ！！
通常罠
フィールド上に攻撃表示で存在するモンスターを全て守備表示にする。

「このカードの効果で、場のモンスターは全て守備表示に変更される！」

ヘル・セキュリティに攻撃を仕掛けたガルムの動きが止まった。
そしてそのまま、デュエルロボのフィールドに戻り、防御形態を取る。

先ほどクロノが発動したカードは、場の全てのモンスターを守備表示に変更するトラップ。
攻撃を妨害するカードは他にも優秀なカードが存在するが、管理局ではこのカードが支給されていた。

「カードを二枚伏セ、ターン終了」

デュエルロボ手札６→３
場　極星獣ガルム　伏せ×２

「ボクのターン！」

クロノ手札４→５

「ボクは≪サムライソード・バロン≫を召喚！
そして、バロンの効果発動！　≪極星獣ガルム≫を攻撃表示に変更し、攻撃！」

サムライソード・バロン
星４／地属性／戦士族／攻１６００／守１２００
１ターンに１度、相手フィールド上に守備表示で存在するモンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを表側攻撃表示にする。

サムライソード・バロンの効果により、守備表示のガルムが攻撃表示へ変更される。
ガルムは咄嗟に反撃に移ろうとした様だが、攻撃力の差と言う壁に阻まれ、撃破された。

デュエルロボＬＰ４０００→３２００

「この瞬間、手札の≪極星獣タングニョースト≫を特殊召喚することが出来る！
≪極星獣タングニョースト≫を守備表示で特殊召喚！！」

極星獣タングニョースト
星３／地属性／獣族／攻　８００／守１１００
自分フィールド上に存在するモンスターが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に守備表示で存在するこのカードが

表側攻撃表示になった時、
自分のデッキから「極星獣タングニョースト」以外の
「極星獣」と名のついたモンスター1体を表側守備表示で特殊召喚
する事ができる。

「くっ！　≪サムライソード・バロン≫は≪極星獣ガルム≫の効果
により、手札に戻る……。
　ボクはカードを二枚伏せて、ターンエンドだ！」

クロノ手札5→3
場　ヘル・セキュリティ　伏せ×2

「此方のターン、ドロー！」

手札2→3

「場の≪極星獣タングニョースト≫の効果を発動！
　1ターンに一度、守備表示のこのカードを表側攻撃表示に変更し、
デッキから「極星獣タングニョースト」以外の「極星獣」と名の
付いたモンスターを表側守備表示で特殊召喚する！」

「厄介な……！」

「現れよ、≪極星獣タングリスニ≫！！」

極星獣タングリスニ
星３／地属性／獣族／攻１２００／守　８００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分フィールド上に「極星獣トークン」（獣族・地・星３・攻／守

０）２体を特殊召喚する。

デュエルロボのフィールドに、新たな「極星獣」と名のつくモンスターが召喚された。
しかもこのタングニョーストは、戦闘破壊された場合トークンを二体、特殊召喚する効果を持っている。

下手にトークンを残したまま、ターンを終了することはできないだろう。
仮にターンを終了してしまえば、シンクロ召喚でトールや他のモンスターをシンクロ召喚される恐れがある。

「そして手札から≪極星獣グルファクシ≫を召喚！」

極星獣グルファクシ
チューナー
星４／光属性／獣族／攻１６００／守１０００
相手フィールド上にシンクロモンスターが表側表示で存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

「グルファクシだって！？
不味い、相手のレベルの合計は１０……！　神が、呼ばれる……！」

「レベル３≪極星獣タングニョースト≫とレベル３≪極星獣タングリスニ≫ニ、

レベル４チューナーモンスター≪極星獣グルファクシ≫をチューニングッ！！」

クロノの悲痛な声は無視され、召喚されたグルファクシは四つの緑色のリングとなった。
そのリングの中をタングニョーストとタングリスニがくぐっていく。
そして現れる星の合計は６。

四つのリングと六つの星。その合計は十であり、レベル十のシンクロモンスターは限られている。
とうとう現れるか。額を伝う冷や汗を拭うこともせず、クロノは目を細めながらことの成り行きを見守った。

「星界の扉が開くとき、古の戦神（いにしえのいくさがみ）がその魔鎚を振り上げん。
大地を揺るがし轟く雷鳴とともに現れよ！　シンクロ召喚！　光臨せよ、≪極神皇トール≫！」

「ッ！！」

シンクロ召喚の口上が読み上げられると、広間の上空にソリッドビジョンで作られた雷雲が現れる。
その雷雲の大きさは、この広間全体を覆ってしまうほどの大きさだ。
そしてその雷雲の中から現れるモンスターがある。

それこそが極神皇トール。手には稲妻を象徴する槌を持ち、立ち塞がる強敵をことごとく粉砕する。
ソリッドビジョンと言えども、神の放つプレッシャーは相当のもの。

思わずクロノの足が一歩、後退した。

「≪極神皇トール≫の効果発動！
　１ターンに一度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターの効果を無効にし、このカードの効果として使用できる！」

極神皇トール（原作効果）
シンクロ・効果モンスター
星１０／神属性／幻獣神族／攻３５００／守２８００
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、そのターンのエンドフェイズ時にこのカードを墓地から特殊召喚する。
この効果で特殊召喚に成功した時、相手ライフに８００ポイントダメージを与える。
１ターンに１度、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の効果を無効化し、このカードの効果として使用できる。

「バカな……っ！　相手モンスターの効果を吸収だって！？」

「行け、≪極神皇トール≫！　≪ヘル・セキュリティ≫に攻撃！」

「くっ、トラップ発動！　≪セキュリティー・ボール≫！
　相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターの表示形式を変更する！」

大槌を振り上げたトールの腕が、振り下ろす寸前で止められる。どうやら攻撃を上手く回避できたらしい。

額を伝う冷や汗を拭うと、クロノは安堵の息を漏らした。危なかった。危うくモンスターをリクルート出来ずに処理されるところだった。

極神皇トール、やはり厄介だなとクロノは胸中で思う。自ターン限定とはいえ、効果を封じるのは強力だ。

なんとかトールをフィールドから除去したいが、トールの攻撃力がそれを許さない。攻撃力３５００の壁はとてつもない。

この状況を打破するためには、上手くトールを除去するしかない。除去しない限り、クロノに勝利は訪れないのだ。

「ターンを終了」

デュエルロボ手札２

場　極神皇トール　伏せ×２

「ボクのターン、ドロー！」

手札３→４

「このカード……」

クロノはドローしたカードを、難しい表情で見つめた。

先ほどドローしたカードは、なのはも入れていたナイトメア・デーモンズ。

相手フィールド上にナイトメア・デーモン・トークンを作ることが

出来る優秀なカードだ。
しかもそのトークンを破壊した場合、１体に付き相手に８００のバーンダメージを与えることが出来る。

なのはの戦術を取り入れ、クロノもまたデッキに投入してみたカードだ。
はたして今ドローしたこのカードが、クロノに希望を与えるのか。
絶望を与えるのか。

「っ！　ボクは手札から≪スナイプ・ストーカー≫を召喚！
そしてスナイプ・ストーカーの効果発動！　手札を一枚捨て、相手の場のカード一枚を選択しサイコロを一回振る。
その出た目が１か６以外が出た場合、選択したカードを破壊する！　ボクは手札を一枚捨て、対象をトールに選択！」

スナイプ・ストーカー
星４／闇属性／悪魔族／攻１５００／守　６００
手札を１枚捨て、フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
サイコロを１回振り、１・６以外が出た場合、選択したカードを破壊する。

クロノのフィールドに光線銃の様な武器を持った、一体の悪魔族モンスターが召喚される。
このカードはクロノのデッキに置いて、相手のカードを除去うする重要な位置に居るモンスターだ。

クロノが手札から一枚を墓地に送ると、モンスターの持つ光線銃がピカピカと光る。

そこに描かれているのは1から6の数字。クロノは息が詰まる様な思いで、光線銃を見守った。

そして、出た目は――――

「出た目は3！　よって、≪極神皇トール≫を破壊する！」

出た目は3。これにより、トールを破壊する効果が発生した。スナイプ・ストーカーの持つ光線銃から光の弾丸が放たれ、トールを粉砕する。

眼前にそびえ立っていた巨大な壁を打ち壊すことに成功した。クロノの顔は安堵に緩む。

だが、このまま安堵ばかしもして居られない。まずやるべきことは勝つことだ。それを目標にしなくては。

「そしてレベル4≪スナイプ・ストーカー≫にレベル1≪ヘル・セキュリティ≫をチューニング――――」

「リバース発動！　≪月の書≫！

このカードの効果により、場のモンスター一体を裏側守備表示に変更する！

対象は≪ヘル・セキュリティ≫！」

「くっ。≪月の書≫か……。

ならば攻撃だ！　≪スナイプ・ストーカー≫で相手プレイヤーにダイレクトアタックッ！」

「くっ……」

デュエルロボＬＰ４０００→２５００

「カードを1枚伏せて、ターンを終了！」

クロノ手札１

場　ヘル・セキュリティ　スナイプ・ストーカー　伏せ×２

「お前のエンドフェイズ時、≪極神皇トール≫は墓地より蘇る。フィールドに舞い戻れ、≪極神皇トール≫！」

「厄介な自己再生能力……っ！　やはり、強大だ……！」

「そして自身の効果で特殊召喚に成功した場合、相手プレイヤーに８００ポイントのダメージを与える」

「ぐぁあああああっっ！！」

クロノＬＰ４０００→３２００

極神皇トールの効果により、クロノに効果ダメージが与えられた。その量は８００と大きく、クロノのライフが早くも五分の一ほど削られた。

ソリッドビジョンによる衝撃ではない、本物のダメージにクロノは思わず膝を着き掛ける。

やはり極神とは侮れない相手であったのだ。生半可なカードでは、トールを撃破することすら難しい。

「此方のターン！」

手札2→3

「≪極神皇トール≫で≪スナイプ・ストーカー≫に攻撃だ！
滅せよ、サンダー・パイルッ！」

デュエルロボの指示を受け、トールが手に持った巨大な槌を振り上げた。
その目標はクロノの場のスナイプ・ストーカー。もしも攻撃を素通りさせれば大ダメージを貰う。

出来ればスナイプ・ストーカーの撃破は遠慮したいが、それを打破するカードをクロノは伏せていない。
ならばどうするか。簡単だ、スナイプ・ストーカーを守れば良い。
幸い、クロノは防御カードを場に伏せている。

「トラップ発動、≪セキュリティー・ボール≫！
相手モンスターの攻撃宣言時、そのモンスターを守備表示に「手札から速攻魔法発動！」っ！」

「≪最後の進軍≫！　自分フィールド上の「極神」と名のついたモンスターを対象に発動！
そのモンスターの効果はエンドフェイズまで無効化され、このカ

ード以外の魔法・罠の効果を受けない！」

「なんて効果だ、くそっ！」

「粉砕せよ、≪極神皇トール≫！！」

「ぐぁあああああっっ！！」

クロノＬＰ３２００→１２００

トールの振り下ろした巨大な槌が、スナイプ・ストーカーを粉砕する。

その際の衝撃の余波を煽り受け、クロノは広間の壁際まで吹き飛ばされた。

間近でトールの攻撃を受けたせいだろう。

ふらつく頭を抑えながら、クロノはよろよろと立ちあがる。

「（これが、神の力……、なんて、強大なんだ……）」

眼前にそびえ立つトールを見据え、クロノは心の中でそう弱音を漏らした。

今までは上手く支給されたカードを使えば大抵の相手とのデュエルは勝利出来た。

だが、目前に控えるトールに勝てる気はしない。圧倒的な攻撃力と効果。

それがクロノに絶望を与えている。倒しても倒しても蘇る悪夢。これが悪夢でなくて何なのか。

「（だけど……）」

しかし、クロノはグッと拳を握る。このまま神の力に怯えるのは自身のプライドが許さない。
相手が何者であろうとも、自分は自分のデュエルをするだけだ。それがたとえ、神と呼ばれる存在でも。

そしてオーディンに自分のことを認めさせる。クロノの父親ですら出来なかった偉業。
それを成し遂げるために、クロノは自らの足に力を込め、よろけるかと言わんばかりの形相で身体に力を入れた。

「その意気やよし。こちらはこのまま、ターンエンド」

デュエルロボ手札2
場　極神皇トール　伏せ×1

「ボクの、ターンッ！」

手札1→2

「（来た――――ッ！！）」

クロノはつい今しがたドローしたカードを見つめ、内心で激しく動揺した。
彼が先ほどドローしたカードは、ほぼ全てのデッキに投入されるであろうカード――死者蘇生。

まさかこのタイミングでドローすることになろうとは、クロノ自身も想定していないに違いない。
だが――と、クロノは疑いの眼差しをオーディンに向ける。はたしてこれは、自らの力でドローした結果だろうか。

もしもこれが、オーディンによる作為的なドロー操作だったとしたら――――。しかし、クロノは頭を振る。
オーディンは恐らく、その様なことはしないだろう。仮にするとしても、こちらの戦略を確かめるためにするか。

ならばそれでもかまわない。トールに勝利するため、そしてオーディンに認めてもらうため。
これで、彼が予測する勝利条件は整った。だが、果たして彼の読みは何処までトールに対抗できるのか。

もしかしたら、全て読み切られているかもしれない。あまつさえ反撃のカードを伏せられているかもしれない。
イヤな予想はどんどんとクロノの頭を埋め尽くしていく。しかし、かといってこのままで居る訳にもいかないのだ。

「……面白いじゃないか。ボクとトール、どちらの読みが優れているか、勝負だ！」

「仕掛けてくるか！」

「手札から≪サムライソード・バロン≫を召喚！」

クロノのフィールドに、先ほどガルムの効果でバウンスされたバロンが現れる。

今度は再び手札に戻されない様に警戒しているのか。鋭い視線をトールへと向けていた。

「さらに自分の場のモンスター一体をリリースして≪ナイトメア・デーモンズ≫を発動！

相手の場に「ナイトメア・デーモンズ・トークン」三体を攻撃表示で召喚する！

ボクは場の≪サムライソード・バロン≫をリリース！」

「つまらん。ナイトメア・デーモンズ・トークンを破壊し、バーンで決着を付けるつもりか」

「まさか。ボクはオーディンに認めてもらうため、トール！

貴方を超えて見せる！」

「なにを――――」

「魔法カード≪死者蘇生≫を発動！　墓地より≪スナイプ・ストーカー≫を特殊召喚！」

目前に光る円が描かれ、そこから先ほど戦闘破壊されたスナイプ・

ストーカーが現れる。
先ほどのトールによるダメージがまだ残っているのか。頭や身体は包帯だらけの姿だった。

「裏側守備表示の≪ヘル・セキュリティ≫を反転召喚！
そしてレベル４≪スナイプ・ストーカー≫にレベル１≪ヘル・セキュリティ≫をチューニング！」

「っ！　何を呼ぶつもりだ！」

「恐ろしいのは外見だけ。けれど、その心は弱者を守る正義の味方！　シンクロ召喚！
現れろ、≪ヘル・ツイン・コップ≫！！」

ヘル・ツイン・コップ
星５／闇属性／悪魔族／攻２２００／守１８００
悪魔族チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、このカードの攻撃力をバトルフェイズ終了時まで８００ポイントアップし、
もう１度だけ続けて攻撃する事ができる。

シンクロ召喚されたのは、明らかに改造されているバイクに乗った悪魔族モンスターだ。
召喚されたヘル・ツイン・コップはやかましくクラクションを鳴らしながら、トールを威嚇している。

そう。これこそがクロノの切り札。ゴヨウ・ガーディアンが禁止さ

れた現在でのクロノの相棒だった。
クロノはチラ、と召喚したばかりのヘル・ツイン・コップに視線を向ける。すると彼もまた、コクリと頷き返した。

「バトルだ！　≪ヘル・ツイン・コップ≫で「ナイトメア・デーモン・トークン」を攻撃！」

「クッ。だが、たかがダメージは１０００――「さらに墓地からトラップ発動！」なに！？」

「≪スキル・サクセサー≫！
　墓地からこのカードを除外することで、ボクの場のモンスター一体の攻撃力が８００ポイントアップする！」

スキル・サクセサー
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。
このターンのエンドフェイズ時まで、
選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップする。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の
攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで８００ポイントアップする。
この効果はこのカードが墓地へ送られたターンには発動する事ができず、
自分のターンのみ発動する事ができる。

ヘル・ツイン・コップＡＴＫ２２００→３０００

「バカな、何時の間に……！
≪スナイプ・ストーカー≫の効果で捨てていたか！」

「大当たりだ。さぁ行け、≪ヘル・ツイン・コップ≫！」

『■■■■～～～～ッ！！』

クロノの指示を受け、ヘル・ツイン・コップが相手の場のトークンに攻撃を仕掛ける。
だが、いかにトークンと言えど攻撃力の高さに敵う筈もなく、呆気なくトークンのうち一体は破壊された。

そしてトークンが内蔵している効果により、デュエルロボにダメージが襲う。

「ぐぅううっっ！！」

デュエルロボＬＰ２５００→７００

「そして場の≪ヘル・ツイン・コップ≫の効果発動！
このモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊し墓地へ送ったとき、攻撃力を８００ポイントアップさせ、追加攻撃が出来る！」

ヘル・ツイン・コップＡＴＫ３０００→３８００

「ッ！　と言うことは、トークンを攻撃されれば――――負けだと

？」

デュエルロボを操作しているトールが、茫然とした声音で呟いた。
無理もない。
たかが子供と侮っていた。クロノの実力を侮っていたのだ。そのショックは計り知れない。

咄嗟にトークンを守るカードは伏せられていないかと伏せカードを確認するが、そんなものは伏せられていない。
よもや侮っていた相手に負けるとは。最後がバーンダメージであるのが癪だが負けは負けだ。大人しくクロノに従うとしよう。

しかし、そう心に決めたトールの耳に、信じられない言葉が飛び込んできた。

「攻撃対象は、≪極神皇トール≫！」

「ッ！？　バカな、トークンを戦闘破壊するのではないのか！？」

「言ったはずだ！　ボクは貴方を倒し、オーディンに認めてもらうと！
それにこんな勝ち方は、ボクは納得できない！　貴方を真正面から打ち破って見せる！」

「わざわざ勝利を棒に振ると言うのか……ッ！」

「貧乏くじは慣れてるよ。――――行け、≪ヘル・ツイン・コップ≫！！」

墓地から発動したトラップカード。そして自身の効果により、ヘル・ツイン・コップの攻撃力は大幅に上昇した。
今ならば、最高神であるオーディンといい勝負を出来るかもしれないと、クロノは密かに心中で思う。

だが、それもここまでだ。すでにクロノの手札は0。場に伏せカードも無ければ、場にはヘル・ツイン・コップが一体だけ。
大人しくトークンを攻撃していれば良かったかなと僅かに思うが、やはりソレは無いなとクロノは頭を振った。

トールにも言った様に、そんな勝ち方は自分は納得できない。
正々堂々正面からトールを打ち破り、自分を認めさせたい。そんな思いがあった。

そのために確実だった勝利を棒に振るのは頂けないが、満足出来るデュエルが出来たのだ。
今はこれで良しとしよう。そして再び力を付けたとき、今度こそオーディンに認めてもらうのだ。

そして、ヘル・ツイン・コップとトールの攻撃がぶつかり合う――――。

※

「ははっ、あんな大口を叩いた割に、呆気なかったな」

デュエルディスクを待機状態へと変形させ、クロノは広間に腰を下ろしていた。
先ほどのデュエルの勝敗は、クロノの敗北だ。そのターンのエンドフェイズ、トールは蘇ってしまった。

やはり自分には戦略やカードが全然足りないと、クロノは今回のデュエルの内容を反省する。
だが、反省するのと同時、得るものもあったとクロノは思った。何度倒しても復活する不死身の相手。

そんな相手とデュエルし、いかに不死身のモンスターを突破するか。そして手札や場のカードに考えを巡らせ、いかに状況を打破するのか。そんな力が付いた様に思う。

「さて、帰ってシャワーでも浴びよう。汗で身体がベタベタだ……」

下ろしていた腰を上げ、クロノは広間から退出しようとする。
だが、そんな彼の視界の隅に光るものが見えた。何だろうと視線を向ける。

「！　――――トール、それにロキも」

視界の隅で捉えた光るもの。それは、極神が描かれている二枚のカードだった。
光っていたカード――トールとロキのカードに視線を向けると、クロノは驚いたように目を見開く。

何故ならば、先ほどまで背を向けていた二体の神が、こちらを。クロノを見つめていたからだ。
先ほどクロノとデュエルをしていたトールもまた、背を向ける気配を見せない。

「まさか……認めて、くれた……のか？」

『これは……、クロノ・ハラオウン。トールとロキのカードを』

スピーカーから響く声も、クロノと同様に呆気にとられている様だ。
クロノは恐る恐ると言った様子で、光を放ち続けている二枚のカードの元へ向かう。

依然として、オーディンのカードは半分だけクロノを見つめるだけ。
どうやらオーディンには依然として、認めてもらった訳ではないらしい。

「ボクで、良いのか？」

訊ねる様に、クロノは小さな声で呟いた。
それに呼応するかのように、広間に設置されたモニターが光る。

――貴様はオーディンに認められれば良い。我の事は、この者に――と言う相手に渡せばよかろう

――ヒッヒ。面白そうだからな。お前はオーディンに認められろ。俺は気になる相手にでも渡しておけ

「……そうだな。ボクが認められる相手は、あくまでオーディンと言う訳か」

こちらを正面から見据えるトールとロキのカードを手に取ると、クロノはほぅと安堵の息を漏らした。
なにはともあれ、これで継承の儀は終了。結果はオーディンに半分ほど認められ、ロキとトールを手に入れることが出来た。

だが、肝心のオーディンに認められていない。クロノはキッと鋭い視線を、オーディンのカードに向ける。
今はまだ、自分が未熟だと理解している。しかし、力を付け、オーディンを持つに相応しいと判断した時には。

そのときには、オーディンに認めてもらう。クロノはそう、決意を新たにした。

「疲れたな……、ちょっと、眠ろう……」

そして安堵した拍子に、今まで貯め込んでいた疲労が溢れ出たのだろう。
クロノはその場に崩れ落ち、瞼が半分ほど下りてくる。

待っている母親やリンディに悪いが、少しだけ眠らせてもらおう。
そんなことを考えながら、クロノの意識は徐々に眠りに落ちて行くのだった。

七話　「神の鉄槌」（後書き）

次回予告

リハビリも順調に進み、はやては小学校へ編入できるようになる。
はやては初めての学校に緊張気味の様子。そんなはやてをなのはたちはフォローする。

そして向けられるのは怒涛の質問。はやては子供たちのパワーに圧倒される。
けれども、長年欲していた学生生活を楽しもうとはやては心に決め、今を楽しく生きようとする。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「はやて、学校へ」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

八話　「はやて、学校へ」（前書き）

今回は珍しく（？）タイトルに偽りありです。
ホントは学校に編入時の様子を書きたかったんですが、こうなりました。

子育てって難しいですね。
それと鬼柳さんのキャラ崩壊気味です。

八話　「はやて、学校へ」

～海鳴市　海鳴大学病院～

「ホンマですか！？」

海鳴市内に建てられているとある大学病院。
その病院のとある診察室。そこから、はやての嬉しそうな声が響いた。

嬉しそうな彼女の前に座るのは、今まではやての主治医を務めた石田医師。
彼女もはやてにこの事実を打ち明けるのは嬉しいのか。普段よりも表情は明るかった。

「えぇ。足のリハビリも順調だし、小学校への編入も考えないとね？」

「学校かぁ……」

はやてがぼんやりと、宙を見つめながら呟く。
今まで一度も行ったことのない学校。そこは未知の領域だ。

どんな風にして過ごすのだろう。どんな人たちが居るのだろう。
今まで学校と言う施設に行ったことのないはやては、嬉しそうに妄

想を掻き立てる。

それと言うのも、はやての足の麻痺が取れ、順調に歩けるようになったのがそもそもの始まりだ。
今までは足の麻痺で満足に移動する事も出来ずに、自宅と図書館。
そしてスーパーを往復する日々が続いていたのだ。

だが、彼女の足の麻痺が闇の書の仕業と判明。闇の書が地縛神により、夜天の魔導書に戻ったことではやての身体が正常に戻ったのだ。
今までは闇の書に魔力を奪われ、はやての身体は衰弱していくばかりだった。だが、夜天の魔導書に戻ったことにより、それも無くなった。

故に、リハビリを続ければ再び自分の両足で立てることが判明。はやては懸命にリハビリに努めた。
そして今日。はやては主治医の「学校に行っても良い」と言う言葉に、年相応の様子ではしゃぐのだ。

「友達百人出来るかな!?」

「ふふ。はやてちゃんが頑張れば大丈夫よ」

目をキラキラと輝かせて訊ねてくるはやてに、石田医師は笑みを浮かべながら答える。
今まで何処か沈んだ様子を見せていた少女が新たに浮かべる満面の笑みは、石田医師を明るくする。

自分の力ではやてのことを治してあげられなかったのは残念だが、

彼女はこうして嬉しそうに笑っているのだ。
ならば自分が出来ることは、はやてを笑顔で退院させてあげること。
それが彼女に出来る最良の治療なのだから。

「あ、そやけど……」

「うん？　どうかしたの？」

「学校行ってもうたら、鬼柳兄ちゃんと一緒にいられへんなぁ」

「鬼柳兄ちゃん……、あぁ、あの人ね」

はやての言葉に、石田医師は脳の片隅からある男性の姿を掘り起こす。
その男性とは、しばらく前にはやての保護者として現れた長身の男性の事だ。

はやては彼女を「鬼柳兄ちゃん」と呼び、仲の良さを石田医師にアピールしていた。
当初こそ石田医師は「鬼柳兄ちゃん」なる男性を警戒していたが、彼と接することで警戒を解いた。

それと言うのも、彼は純粋にはやての身体のことを心配していたのだ。そしてはやてが一人で暮らしていると言うことも。
だから彼は、時折はやてと自宅や公園で遊んでいる。はやてもはやてで彼と遊んでもらえるのが嬉しいのか、彼に非常に懐いていた。
故に、はやてが危惧していることも分かる。彼女が小学校へ行くこ

とで、件の彼との時間が減ると思っているのだろう。
それにはやての家に新たな同居人が増えたことも、その不安に一役買っているのだからしょうがない。

「なのはちゃんとフェイトちゃんに抜け駆けされんようにするには、どうしたらええんでしょう？」

「……」

はやての真剣な眼差しに、石田医師は何とも言えない表情を浮かべた。
まさか彼女も、小学生に恋愛相談を持ちかけられるとは思わなかっただろう。

最近の小学生は早熟と聞くが、まさかここまで早熟だとは想像もしていなかった。
ここは真剣に答えるべきか。はたまた「はやてちゃんにはまだ早いわよ」と諭すべきか。

石田医師は頭の中で、必死に思考する。だが、それは無意味なことかもしれない。
もしも一般常識を持った人物ならば、そこは微笑ましい恋を応援するだろう。それも、夢を壊さない程度に。

小学生と青年の恋が実るはずもない。それは誰よりも社会を知っている石田医師も理解している。
故に、石田医師はこう告げる。一足早く社会に出た先輩からの忠告。
そう。なにせ石田医師は一般常識を持った女性なのだから――――

「なら、既成事実を作るしかないわね」

訂正。ここに一般常識を持った大人は何処にもいなかったようだ。

※

「学校！？」

はやてから小学校の話を聞き、まず真っ先に食いついたのはヴィータだった。

彼女はガバッとテーブルの上に乗り出すと、はやての顔にこれでもかと顔を近づける。

そんなヴィータの様子にはやては若干引きつつも、コクリと頷く事で返事を返した。

するとはやての動作にヴィータは納得したのだろう。「そっかぁ」と呟き、ソファに腰掛ける。

「どしたん、ヴィータ。
私が学校に行ったら、なにか不味いことでもあるんか？」

「ある。アタシのデュエルの相手が居ねぇ」

「あ、あはは。なるほど。それは深刻な問題やな」

泣きながら縋りついてくるヴィータを引き剥がしながら、はやては頭の中で他のメンバーを思い浮かべる。
彼女の脳裏に浮かび上がるのは、シグナムやシャマル、ザフィーラにプレシアなど、この八神家に住む大人たち。

しかし、ある一定の人物以外はヴィータがデュエルするには荷が重い相手が揃っていた。
まず真っ先に候補に挙がるのはシャマル。彼女はシモッチバーンなるデッキを使い、ヴィータを1ターンでキルする。

二番目の候補であるシグナムと言えば、圧倒的な戦闘力を持つドラグニティでヴィータを粉砕する。
ヴィータのデッキは長所は無く、逆に短所もない器用貧乏なデッキ。故に他のメンバーに挑んでもヴィータの勝率は低い。

「アルフさんとやればええんでない？」

「……ダメなんだ。シャイニングとか、ヒーローのモンスターを見ると、何故か身体が震えて……」

「マンマミーヤ！って言わなくちゃならなくなる！」と、ヴィータは涙ながらに語る。
そんなヴィータの話を聞き、ヒーローを相手取るには不足は無いデッキのはずなのにとはやては首を傾げた。

「（それにしても、学校かぁ）」

適当にヴィータを落ち着かせると、はやては車いすの背もたれに背を預ける。
物思いに耽りながら、彼女が想像するのは病院で聞かされた学校への編入のことだった。

実際問題、はやてとしては学校に興味がある。それはとても強い興味。興味津々だ。
だが、今のこの家族と離れたくないと言うのもはやての本音の一つである。

騒がしくも楽しい毎日。これがどれほど掛け替えのないものか、はやては理解していた。
故に、学校に通わずにこのまま自宅で皆と遊んでいた方がいいのでは。はやてはそんな事を思う。

「（そやけど、鬼柳兄ちゃんは絶対反対なんやろなぁ）」

しかし、それは確実に実行できないだろう。何故ならば、この家に

は鬼柳が居る。
彼は別の世界からこの世界にやってきた異世界人で、この世界のことを高く評価していた。

小学校に通い、6年間の教育を義務とする義務教育。彼はとくに、これに興味を示した。
鬼柳から聞いた話から察するに、どうも彼がいた場所では教育が満足に受けられなかった様なのである。

文字の読み書きや数字の計算などは、すべてデュエルモンスターズのカードで補われていたそうだ。
それはとても大変な勉強法で、実際鬼柳も凄く苦労したと笑っていた。故に、彼ははやてたちに勉強させようとする。

勉強をやらないよりはやった方が良い。少しでも知識を付けた方が良い。それははやてとて理解している。
けれど、この騒がしくも温かい家族と離れたくないと言うのも本音だ。鬼柳の言うことを聞くか。我がままを押し通すか。

「別に勉強なんかしなくてもさ、生きていけるんだから良いじゃんよー」

と、はやてが内心で考え込んでいると、ヴィータの気の抜けた様な声がリビングに響く。
顔を上げてみれば、ソファに腰を下ろしているヴィータの姿。彼女はドカッと背もたれに背を預けた。

「そうは言うけどね、ヴィータちゃん。お勉強は必要な事なのよ。将来社会に出て行くときに、絶対必要になる事なの」

「プレシアさん……」

ヴィータの言葉にどんな言葉を返そうか。はやてが頭を悩ませていると。

彼女の耳に聞き慣れた女性の声が聞こえた。安堵の表情を浮かべ、彼女を見る。

だが、プレシアの姿を捉えたはやては、ピタリとその場で停止してしまう。

一体どうしたのだろうか。疑問に思いヴィータもそちらを見てみれば、彼女もはやて同様に身体を硬直させた。

何故ならば――――

「うぅ～～！！」

「うぅ、か、可愛い……」

どう言う訳か、旅行鞄の中から顔を出しているフェイトがいたからである。

彼女はなんとか旅行鞄の中から脱出しようともがいているが、留め金が開かずに苦戦している。

フェイトがもぞもぞと動くたび、彼女の詰められている旅行鞄が右

に左に揺れる。
その様子を見て、プレシアは恍惚とした表情でフェイトの様子を見守っていた。

「鬼柳！　鬼柳！　どうかしら！　リアルゼニ〇メよ！」

「ポ〇モンの話は……って、フェイト、か？」

「た、助けてぇ～！」

テンションの上がったプレシアが、リビングにやってきた鬼柳に声を掛ける。
彼はプレシアの言葉に面倒くさそうに反応したが、旅行鞄に詰められているフェイトを見て表情を一変。

もぞもぞと身体を揺らしているフェイトを、茫然とした表情で見つめていた。
どうやら、いかな鬼柳と言えども今のフェイトは予想だにしていないことだったのだろう。

わしゃわしゃと動くフェイトを、鬼柳はただジッと見つめている。
と、しばしフェイトに見入っていた鬼柳に動きがあった。彼はフラフラとした足取りでフェイトの元へ。

「うわ！　き、鬼柳……？」

「――――～～～っ！」

「ひゃぁあああああっっ！！」

グリグリグリグリ。フェイトに近づいた鬼柳は、無造作に彼女の頭を撫でまわした。
その度にフェイトの頭が、面白い様にぐるぐると動く。目を回しているのか、彼女はあぅあぅと小さく呻いた。

「……良いな」

「！？　き、鬼柳さん！？」

「こう、なんて言うんだ……、もっと苛めたくなるっていうか……」

相変わらず手を動かし続け、鬼柳はフェイトの目を回させる。
そして思わず零れたのだろう。小さな本音が彼の口から飛び出した。

彼の呟きにはやてが問い詰めるが、彼は依然としてフェイトにちょっかいを出している。
フェイトもフェイトで完全に目を回したのか。彼の手にされるがままとなっていた。

「くふっ。これで鬼柳もロリの道に目覚めたわね」

「確信犯やんけ！？」

「さぁ、鬼柳。二人でロリロリハンターズを結成しましょう！」

相変わらずフェイトにちょっかいを出している鬼柳に、プレシアは悪くどい笑みを浮かべた。
以前から鬼柳をロリの道へ引きずり込もうと画策し、今回、ようやくそれが成されたのだから。

実際、鬼柳はくるくると目を回しているフェイトに夢中だ。若干、彼の頬も赤い。
このままいけば、彼も紳士として振る舞えるだろう。それを思うと、プレシアの鼻も高い。

「ロリロリハンターズ、か。おもしれぇ。
なら、俺はロリロリハンターズで満足してやるぜ！」

「鬼柳兄ちゃんがロリコンに覚醒したー！？」

「じゃあ、フェイトは持ち帰る」

「ちょお待てー！　何処へ連れ込む気や！？
イエスロリータ、ノータッチ！　の紳士としての精神はどうしたんや！？」

旅行鞄に詰め込まれたフェイトを抱え、鬼柳がガチャリとリビングの扉を開けた。
いそいそと出て行く鬼柳の腰に縋りつき、なんとかはやてが鬼柳の脱出を妨害する。

まさかここまで、鬼柳に対してロリの呪いが進行していたなんてはやては思いもしなかった。
今の鬼柳の目はヤバい。確実に大人と子供の第一線を踏み越えてくる。もはや笑えないレベルだ。

「まずはスクール水着に着替えさせないとな。勿論旧式タイプだ。
それで次はメイドインプレシアのメイド服か。メイドだけにメイドインってか」

「ちょおちょおちょお！　鬼柳兄ちゃんのキャラがゲシュタルト崩壊しとるで！？
なんでそんなマニアックな知識を持ってるん！？　そんで最後のジョークは寒すぎるで！」

「お医者さんごっこも外せないな」

「お巡りさーん！　お巡りさんは何処ーー！？
ここに性犯罪者がおるでー！　鬼柳兄ちゃんを元に戻してやー！」

色々と不味い知識を披露する鬼柳に、はやてはくっ付きながら必死にツッコミを入れる。
だが、いかにツッコミの上手なはやてと言えど、鬼柳の怒涛なボケに対してツッコミきれていないのが現状。

ヴィータに助けを求めようとはやてはヴィータが腰掛けていたソファに視線を向けるが。
すでにそこにヴィータの姿は無かった。どうやら鬼柳の豹変を察知

し、リビングから戦術的撤退を果たしたのだろう。

「ヴィータに裏切られたー！？」

「ん……？　それはそうと、はやても良い身体してるよな」

「！？　き、鬼柳兄ちゃんの目が捕食者の目にィ！？」

「はやて、俺と一緒に満足しようぜ」

「な、なにでや！？」

「勿論、ナニで決まってるだろうが」

「下ネタ反対やーーーーッッ！！」

そしてヴィータが戦術的撤退を果たしたリビングからは、はやての大きなツッコミの声が響いていた。

※

「はぁ、ぜぇ……」

「それで、落ち着いたかしら」

鬼柳の怒涛のボケにはやてがツッコミを入れ終えた八神家のリビング。

はやてはふかふかと座り心地の良いソファに腰掛けながら、息を整えていた。

そんな彼女の眼の前では、プレシアが優雅に紅茶を啜っている。

まったく。誰のせいでこんなに暴れてしまったのか。はやては問い詰めたい思いだ。

「うきゅ～……」

「ん」

はやてはひとまず言いたい事を胸の内に留めると、チラ、と視線をもう一つのソファに向ける。

するとそこには、ソファの上に寝かされているフェイトの姿。彼女は依然として眼を回していた。

そしてそんな彼女の額に冷水で冷やしたタオルを乗せているのは鬼柳。

どうやら先ほどまでの彼は冗談だったらしく、今は真面目に看病に勤しんでいた。

「――――はぁ。それでプレシアさん。
なしてあんな冗談を鬼柳兄ちゃんと仕掛けたんです？」

「え？　だって、悩んでいたのでしょう？
学校に行くか行かないか。違うの？」

「――――っ！」

嘆息しながら訊ねた質問に、予想外の返答が返ってきた。
思わずはやては息を呑む。まさかそんなことまで見透かされているとは。

慌てて隣のソファでフェイトを看病している鬼柳に視線を向ければ。
彼ははやての視線に気がつくと、ニコッと笑って再びフェイトの看病に戻った。

どうやら鬼柳もまた、はやての異変に気づいていたらしい。
そのせいで、はやてに対してドッキリとも取れる行動を取ったのだろう。

「ん～～、まぁ、そうなんですけどね」

「何が不満なの？
石田先生の話だと、通う小学校は選べるんでしょう？」

「なのはさんやフェイトの通う小学校じゃイヤ？」と、プレシアは首を傾げながらはやてに訊ねる。
プレシアのその返答に、はやては首を横に振る。そんなことはない。なのはとフェイトのことをはやては気に入っている。

「えぇっと、な？　……皆と離れたく、ないんや……」

はやての口から漏れ出たのは、彼女の偽らざる本音。
母親の様なプレシアが居て、父親の様な存在の鬼柳が居る。

他にも姉の様なシグナムや、妹の様なヴィータなど。
はやてはこの家に住む者たちを家族と捉え、誰とも離れたくないと切に思っていた。

今までずっと一人で生活してきた反動か。はやては独りぼっちになるのを酷く怖がる。
最近は守護騎士やプレシア達のおかげで改善されてはいたが、それでも彼女の根底には孤独を怖がる心が存在していた。

「……そっか」

はやての小さな言葉に、プレシアもまた静かな声音で答えた。
そしてテーブルの上に置かれていた紅茶の入ったカップに手を伸ばし、一口啜る。

プレシアもまた、はやての置かれている状況を理解していた。

鬼柳やなのはの話を聞いて知ったのだが、はやては家族の暖かさに飢えている。

それが今回、学校に行くのに不明瞭な返事を返した原因だろう。

家族に飢えていたはやてが、長年欲していた家族の温かさを覚えたのだ。

それを手放したくないと思うのは当然の反応なのかもしれない。

「（はやてちゃんの気持ち、分からなくもないのよね……）」

プレシアは口の中に含んだ紅茶を舌で転がしながら、胸の中でひとりごちた。

家族と離れたくないと言う気持ち。それはプレシアも幼少の頃に体験した気持だった。

大好きな母親と離れたくない。大好きな父親と離れたくない。それは子供ならば誰もが持つ気持ち。

けれど、時が経つにつれて子供は大人へと成長していく。徐々に家族から離れ、社会に出る準備を始めるのだ。

だが、はやてはそうもいかない。彼女は家族と触れ合う時間があまりにも少なすぎた。

両親と死別して、鬼柳と出会うまではこの広い家の中で独りぼっちで生活していた。それはどれほど寂しいか。

故に、いくら大人びていようが彼女は未だ子供なのだ。家族と離れるのを怖がる子供。

その気持ちは小学生になれば自然と消えるものだが、はやてにそれは通用しない。

小学生の心に、幼い自分の気持ちが混ざり合っている。

――――彼女の心は歪だった。

「えとっ、別にな？　学校がイヤなわけや無いで？
なのはちゃんやフェイトちゃんとの学校生活、とても楽しみや。
そやけどな、まだ皆と一緒に居たいって言うのも私の心の本音なんや」

「はやてちゃん……」

「あ、あはは。ホント、困ってまうな。
わたし、どないしたらえぇんやろ……」

はやては泣き笑いの様な表情を浮かべる。
彼女もまた、自らの心の歪さを理解しているのかもしれない。

しかし、それを知ってもなお彼女は家族と離れたくないと言っている。
それは紛れもなく、彼女の心の本音。それを言われてしまえば、プレシアは強く言えない。

はやてを学校に通わせるのは簡単だ。はやての意思を無視して手続きを済ませれば良いのだから。
だが、それでは意味が無い。逆にはやての家族への依存心が悪化してしまうかもしれない。

そうなってしまえば、はやては学校に行かなくなるだろう。学校へ行くのを拒否し、家に引き籠るかもしれない。
それだけはさせてはいけない。プレシアは心の中でそう決意する。
はやてが楽しい人生を歩めるように、自分たちが手助けしてやらねば。

「（それにしても、子育てはやっぱり大変ね……）」

まずはどう落とし所を着けようか、プレシアは考える。
そして落とし所を考えつつも、彼女は別の事も考えていた。

それはやはり、子育ては難しいと言うこと。
本や教育番組を見て知っていたが、ここまで難しいだなんて思いもしなかった。

アリシアやフェイトは、なんとか上手に育てることが出来たとプレシアは思う。
しかし、はやては別だった。はやての抱える問題は、プレシアが経験したことが無いもの。

故に、プレシアも手探り状態ではやての抱える問題を解決しなければならない。
それはさながら、攻略本の無いゲームを攻略する様なもの。一歩間違えばゲームオーバー。

その際に代償として支払うものは、幼いはやての精神と人生。
それだけは、是非とも払う訳にはいかない。故にプレシアは考える。

どうやってはやてを学校に行く気にさせるか。

「（鬼柳を学校の用務員にする？
……ダメね。採用されるかもわからないし、不採用の可能性が高いわ）」

「（シグナムを体育の教師として送り込む？
……無理ね。そもそも彼女が教員免許を持ってる訳無いし、持てる訳無いし）」

「（シャマルを調理師として送り込む？
……無理、と言うか却下ね。小学校が地獄と化すし……）」

「（ヴィータは体格的に無理ね。逆にいえば学生として送り込めそうだけど）」

「（ザフィーラを野良犬と称して学校に預ける？
……下手すれば保健所行きね。それは流石に可哀そう過ぎるか）」

様々な考えが、プレシアの頭に浮かんでは消えて行く。中には失礼なものが幾つか。
だが、いくらプレシアが考えても、良い考えが浮かばない。どうすればはやては学校に行ってくれるだろう。

ここまで考えたのは、最後に手掛けた研究以来かもしれないと、プレシアは若干頭痛を覚えながら思う。

考え過ぎて知恵熱が出たのだろうか。くらくらする頭を手で押さえながら、何か良い案は無いかと考える。

「あはは、無理せんでえぇですよ。プレシアさん。
わたし、ちゃんと学校行きますから。ちょっぴり寂しいけど、平気です」

プレシアの考えを読み取ったのか。はやては微かに笑みを浮かべながら答えた。
彼女とて理解している。先ほどの彼女の言い分が、ただの自分の我がままだと言うことくらい。

けれど、今の自分は小学生なのだ。そろそろ大人になるための準備を始めなければならない。
故に心にある寂しさを抑え込みながら、はやては笑うのだ。皆と離れるのは寂しい。けど、我慢しなくては。

「はやてちゃん……」

はやての言葉にプレシアは言葉を失う。いけない、これは良くない兆候だ。
せっかく彼女が本音を打ち明けてくれたと言うのに、彼女は本音を打ち消そうとしている。

そうなってしまえば、彼女は寂しいと言う心を押し隠して学校に通うことになるだろう。

今まではやては独りぼっちの生活を我慢してきた。今回も我慢して、学校に通うかもしれない。

だが、どんな入れ物にも許容量と言うものがある。どんなに大きな器にも、限界はあるのだ。

はやては今まで一人で生活し、心に少なからずストレスを与えていたはずだ。そこへさらにストレスを加えれば。

今度こそはやての心と言う入れ物は壊れてしまうかもしれない。

我慢に我慢を重ね、はやての心が壊れるかもしれない。それだけは絶対に阻止しなければ。

「――――っ」

けれど、今のプレシアにはやてを諭す様な言葉は浮かばない。

そんなことは言わないで欲しい。その寂しさは、口に出していいことだから。

そうはやてに告げたいのだが、「では、どうすればいいか」と言う問題に直結する。

学校に行かなければならない。しかし、家族と離れたくない。この矛盾を解決する方法はあるのか。

「――――ならよ」

「き、鬼柳？」

と、プレシアが必死に頭を回転させていると、フェイトの看病をしていた鬼柳の声が聞こえた。
一体どうしたと言うのだろう。疑問に思いながら、プレシアは鬼柳へと視線を向ける。

そして視線を向けながら、彼女は密かに期待していた。
彼ならば、この矛盾を解決する方法を知っているのではないか、と。

そして彼は告げる。プレシアが解けなかったその矛盾を解決する方法を。

「学校、休んじまえよ」

「「――――はぁ！？」」

彼の口から飛び出してきたあまりの答えに、はやてとプレシアが同時に口を開いた。
それはあまりにも単純な手段。一体そんなことをして、どうやってはやての孤独を癒せるのか。

「鬼柳、あのねぇ……、学校を休んだくらいでどうにかなる問題じゃないでしょう？」

「なんでだ？」

「はぁ？」

「聞いてれば、はやてはシグナムやリインフォース達と離れたくないんだろ？」

プレシアが言い聞かせようとするが、鬼柳はそんなことはお構いなしに続ける。
その際にさり気なく自分のことを省いていたが、プレシアはあえて指摘しなかった。

「じゃあ、学校に行きたく無ければ行かなきゃいい。
行きたくなったら行けばいいだろ。出席日数が減ったくらいで、俺はガタガタ言わねぇよ」

「で、でも……！　そないなことしたら鬼柳兄ちゃん達に迷惑掛かるんとちゃう？」

「そのくらい、迷惑なんかじゃねぇよ。逆に、無理に学校に行く方が迷惑だ。
せっかくの人生なんだからよ、自分のやりたいようにやって満足した方が良いぜ」

「……」

なんてことは無さそうな表情で、鬼柳はプレシア達に語って聞かせる。

たしかにその方法は、プレシアも一度考えついた方法だ。だが、学校を休めば授業に遅れる。

それはどうするのか。プレシアは鬼柳の言葉に待ったを掛けた。

「そいつはプレシアやシャマルが教えればいいだろ？
プレシアは元研究者みたいだし、頭は良いはずなんだろ」

「あぁ、そう言えばそうだったわね。忘れてたわ、わたし……」

鬼柳の言葉に、プレシアはどんよりとした表情で答えた。

あぁ、たしかにそうだ。プレシアは元々研究者。頭が良いのは実証済み。

故に、どうして自分がはやてに勉強を教えると言う方法を思い付かなかったのだろうと不思議に思う。

恐らく視野が狭くなっていたのかもしれない。はやてを学校に行かせることばかり考えて、その方法を思い付かなかった。

「……アレ？　そうなると、何も問題は無くなるわね」

「だろ？」

「ぷ、プレシアさん！？」

「勉強はテキストを買ってきて私たちで教えれば良いし、体育はシグナムやザフィーラに教われば良いし……。
なーんだ、難しく考える必要は無かったわね」

はやてがプレシアの言葉に驚いているが、プレシアははやての発言をスルーする。
考えれば考えるほど、何の問題も無いではないか。プレシアはようやく安堵のため息を吐いた。

今までは学校で勉強をさせることだけに重きを置いてきたが、別に学校にこだわる必要は無かった。
勉強は学校で無くても出来る。学校はあくまで学歴を取得するのに利用する。こう考えれば楽ではないか。

「はやてちゃん」

「ほぇ？　ど、どないしました？」

「学校の件、どうする？
はやてちゃんが望めば、好きなだけ休めるように学校に掛けあえるけど」

「！」

プレシアの言葉に、はやては驚いたように目を見開いた。まさか、そんな事が出来るのだろうか。
だが、実際に出来るのだからしょうがない。はやてが学校を休むための口実はいくらでも用意できる。

リハビリが依然として必要で、数日の間学校を休むかもしれない。こう言えば、幼いはやての事情を知っている学校もうるさく言わないはずだ。

はやてはプレシアや鬼柳の言葉におろおろしていたが、プレシアの言葉に顔を俯かせる。
どうやら彼女は考えているのだろう。プレシアや鬼柳に迷惑を掛けても良いか。寂しさを押し殺すか。

けれど、プレシアは確信している。彼女はきっと、自分の心に素直になると。
なにせ鬼柳が教えたのだ。自分の心を素直に吐き出せと。そうすれば、自分たちが答えると。

ならば、プレシアが返すべき答えは決まっている。

「き、鬼柳兄ちゃん。プレシアさん……。ホンマに、迷惑やないですか？」

「なに言ってるの。全然、迷惑なんかじゃないわよ」

「あぁ。逆に思う存分迷惑掛けてやれよ。誰かの尻拭いは慣れてるからな」

「……あはは」

顔を俯かせたまま、はやては鬼柳とプレシアに訊ねた。それは最後の確認。

だからプレシアは彼女を安心させるように、笑顔を浮かべてそう告げる。迷惑などではない。

鬼柳もまた、プレシアと同様に笑みを浮かべながら答えた。

どうやら彼も誰かの迷惑を受け止めるのは慣れているらしい。頼もしい笑みが返ってくる。

そして、そんな二人の返答を聞き、はやては俯かせていた顔を上げ、笑顔でこう告げるのだった。

「――――なら、存分に迷惑かけさしてもらいます」、と。

八話　「はやて、学校へ」（後書き）

次回予告

はやてが小学校へ編入し、二年の月日が流れる。
徐々にはやても学校に慣れ、楽しい生活を送っている。

そしてそんな彼女たちの前に現れるのは、フェイトにＤＭを教えた使い魔。
使い魔――リニスはフェイトの実力を確かめるため、彼女にデュエルを申し込む。

果たしてフェイトはリニスの期待にこたえることが出来るのか。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「リニス、襲来」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

九話　「リニス、襲来　前編」（前書き）

今回はリニスが登場しました。
そしてリニスのキャラがぶっ壊れ。
半ばオリキャラ状態となっています（汗

九話　「リニス、襲来　前編」

～海鳴市　八神家～

「ふぅ。疲れたぁ」

カリカリと、それまでリビングに響いていたシャープペンの音が止む。
そしてソファの上で、ぐっとなのはは背筋を伸ばした。ポキポキと小さな音が鳴る。

「あら、一段落したのね。紅茶でも飲む？」

と、なのはがソファの上で背筋を伸ばしていると、リビングに新たな人影が現れる。
その人物とは、この八神家において保護者の立場に居る女性――プレシア・テスタロッサのもの。

彼女は勉強が一段落した様子のなのはにほほ笑むと、すぐそこのキッチンにウィンクを飛ばす。
なのはもプレシアの視線を追ってキッチンに視線を向けるが、何となく今日はコーヒーの気分だ。それをそのまま告げる。

「あ、じゃあコーヒーが嬉しいです」

「大人っぽいもの飲むのね。少し待ってて頂戴」

なのはの大人っぽいチョイスに、プレシアは何処か呆れ顔だ。
「にゃはは」とプレシアに向けて愛想笑いをするが、プレシアはそれを了承したのか。

なのはに背中を向けると、彼女はキッチンへ向かう。
そのすぐ後、水道の音がなのはの居るリビングまで聞こえた。

「鬼柳さんはまっだかな～」

プレシアが向かったキッチンから視線を外し、なのはは玄関へと視線を向ける。
今日は鬼柳がアルフを誘ってデュエルモンスターズの大会に向かったのだ。そろそろ帰宅する頃だろう。

早く帰ってこないかなと即興で思い付いた歌を歌いながら、なのはは鬼柳とアルフの帰りを待つ。
その際に、一段落した勉強の道具をしまうのも忘れない。プレシアに買ってもらったテキストや学校のプリントを仕舞う。

「ふにゃ。疲れた……」

「手首がこれでもかってくらい痛いでぇ～……」

「フェイトちゃん。それにはやてちゃんも」

と、なのはが勉強道具を学校で使用している鞄に仕舞うと、リビングに二人の少女が現れる。
それは見間違えるはずの無いなのはの親友――フェイト・テスタロッサに八神　はやての二人だった。

二人とも自室での勉強が一段落した様で、揃って疲れた様な表情を浮かべている。
大方、途中でデッキの改造に意識が向いてしまったのだろう。なのはも同様で、デッキの改造に精を出してしまった。

「ん。なんや鬼柳兄ちゃんとアルフ姉ちゃんはまだ帰っとらんの？」

「そうみたいだよ。うぅ～……私も大会に出たいよぅ」

「そりゃ無理な話やね」

この場に居ない二人の人物をなのはは羨むが、はやての言葉に一蹴されてしまった。
だが、今のなのはたちがデュエルモンスターズの大会に参加するのは、どうしても不可能なのだ。

何故ならば、これにはデュエルモンスターズの大会の参加日時が影響している。
今日のデュエルモンスターズの大会は午後一時から。ちなみに今日は水曜日で平日だ。

そんな日の大会に、出場しようと言うのは無理以外の何物でもない。しかし納得できないのか。なのはとフェイトはぷぅっと頬を膨らませて抗議する。

「学校休んで何が悪いのぉおおおおおっ！？」

「のぉおおおおっ！？」

「逆ギレすんなぁあああああっっ！　休む方が悪いに決まっとるやん！」

どんどんどんどん。テーブルをこれでもかと連打しながらなのはが抗議する。

自分だって鬼柳と大会に出たい。一緒にお散歩に行きたい。色々とやりたいことはあるのだ。

しかし、それが出来ずにストレスが増えてしまう。それもこれも、この腕のアザが原因だとなのはは視線を向けた。

なのはの腕――右腕に刻まれた赤きアザ。なのはとフェイトが学校を休む理由は、このアザにあったのだ。

当初はさほど気にならなかった彼女たちの腕に刻まれたアザ。だが、周囲はそれを放っておいてはくれなかった。

まずアザに注意が向き始めたのは、衣替えが行われる夏。長袖から半袖へと制服が変わり、腕が露出してしまったのがそもそもの始まり。

腕に刻まれているアザを見た教師が、なのはたちにそれは何だと訊ねたことで一気に事情はややこしくなっていく。
この世界では、あくまで赤き巫女の伝承はおとぎ話。実在する伝承だと考えるものが、極端に少ないのだ。

故に、教師たちにこれが赤き巫女のアザだと告げても、色よい返事が返ってこないのも仕方ない。
その内、徐々にプレシアや鬼柳の元へなのは達の腕に刻まれたアザへ追及の手が伸びる様になったのだ。

「帰ったぜ」

「たっだいまー」

「あ、鬼柳だ！」

「鬼柳兄ちゃーん！」

と、なのはが過去の記憶に思いを馳せていると、いつの間にか鬼柳が帰宅していた様だ。
フェイトとはやてが一目散にリビングを飛び出していく。

内心で出遅れたかと思いつつ、なのはもまた鬼柳達を出迎えるために玄関へ向かう。
するとそこには、普段身に付けているロングコートを羽織った鬼柳の姿が。相変わらずな彼の姿に思わず苦笑する。

「お帰りなさい、鬼柳さん」

「あぁ、ただいま」

「はぁ～、今日はホントに疲れたよ」

なのはと鬼柳が微笑ましい雰囲気を作っている隣で、アルフが無遠慮に腰を落とす。

それほど疲れる様なデュエルをしたのだろうか。気になったなのはは、視線で鬼柳に訊ねた。

「まぁ、アルフの言うことも一理あるな。学園都市だったか？そこから遠征に来た学園都市第一位とデュエルすることになったんだ。確か名前は一方――――」

「ストォオオオオップだよ鬼柳！ほのめかすくらいなら良いけど人名はアウトだよ！」

「……なら、腹ペコシスターとか……どうだ？」

「ギリギリセーフだね」

色々と思い出したくない相手なのだろうか。アルフが必死の形相で制止している。

相変わらず仲が良いなぁとなのはは鬼柳とアルフを見つめるが、フェイトやはやてはそうもいかないらしい。

まるで拗ねた様な視線を、アルフと口論（？）している鬼柳に向けている。
自分のことを見て欲しい。自分に構って欲しい。まるで視線でそう言っているかのようだ。

「ほらほら貴方達。玄関先で喋ってないで、リビングに行きなさい」

と、鬼柳とアルフの漫才が一段落したところで、廊下の奥からプレシアが顔を出す。
すると鬼柳もそろそろ場所を変えようと思っていたのか。「それもそうだな」と腰を上げた。

そして鬼柳とプレシアを先頭に、一行は先ほどまで集まっていたリビングへと向かう。
リビングへ到着すると、フェイトは鬼柳を連れてソファに向かい、はやてはそんな鬼柳の後を追う。

「えへ」

鬼柳をソファに座らせると、その隣にフェイトが腰掛けた。
まるで猫の様に、スリスリと鬼柳の腕に頬を寄せる。その表情はだらしない。

「む！」

と、その様子を見ていたはやても嫉妬に駆られた様だ。
負けるものかともう片方の腕に抱きつくと、フェイト同様スリスリを開始する。

「うぅ～～～～……」

「むぅ～～～～……」

「……」

今の鬼柳の状態は両手に花と言ったところだろうか。
一見すれば微笑ましいのだが、二人の少女から放たれる雰囲気が凶悪だ。

思わず普段冷静な鬼柳ですら、ダラダラと冷や汗を流している。
まるで蛇に睨まれた蛙の様だと、なのははこっそりソファに腰掛けながら思う。

「それにしても珍しいわね。なのはさんが鬼柳に擦り寄らないのは」

「え？　あ、あはは……」

プレシアの何処か面白がるような言葉に、なのはは愛想笑いを浮かべた。
本当はなのはだって今すぐ彼に抱き付きたい。けれど、羞恥心が邪

魔をするのだ。

フェイトやはやてと出会ってから早二年。これでも女の子らしく成長してきたとなのはは思う。

初めての生理（初潮と言う）も来たし、身体もだんだん女性らしくなってきた。故に、羞恥心を覚えた。

その影響でか、今までの様に鬼柳と接することが出来ないのがなのはの現状。

本当は傍に行きたいのに、変に意識してしまいそうで。頬を膨らませてむぅむぅ唸る。

「羞恥心を覚えたのかしら……？」

「当たり前じゃないですか。

そろそろフェイト達も大人になろうとしているんですよ」

「それもそうよ――――ッ！？」

ギョッと、プレシアが突然リビングに響いた聞き慣れぬ声に表情を強張らせる。

なのはもプレシアと同様に、その身を強張らせた。今の声は誰だろう。声からして女性だったが。

そしてなのはとプレシアが声が聞こえた方へと視線を向ければ、そこにはズズズとお茶を啜っている一人の女性。

年齢はアルフと同世代だろうか。すらりとした体躯に、出るところは出ているそのスタイル。そして頭に生えた猫耳。

今の自分が持っていない要素を全て凝縮した様な女性を見つけ、なのははむぅっと小さく唸る。
何もここまで望んではいないが、彼女の様な姿は可愛らしい。なのはは彼女の姿に目を奪われる。

「あー！　リニスだ！」

「ほぇ？
フェイトちゃん、あの人のこと知っとるん？」

と、なのはとプレシアが女性を見てフリーズしていると。
鬼柳の隣に腰掛けてはやてを牽制していたフェイトが驚いた様な声を上げた。

彼女――リニスはフェイトの呼びかけに、笑みを浮かべて嬉しそうに答える。
鬼柳の隣からリニスに向かってぴゅぅっと駈け出し、フェイトは勢いよくリニスに抱き付いた。

「えへへー。リニスは私のデュエルモンスターズの先生なんだよ」

「ほぇえ。そうなんですか」

「改めて。リニスです。プレシアの使い魔も担当していますけれど」

「ね？」と、リニスは楽しそうにプレシアへ向けて、ウィンクを一つ。
するとそこで、ようやく警戒を解いたのだろう。プレシアの身体から力が抜けた。

そしてプレシアの警戒が解けたのを確認し、リニスはリビングに居るメンバーに向けてペコリと頭を下げる。
その際にしっかりと自己紹介するのも忘れない。彼女の言葉から察するに、リニスはプレシアの使い魔でもある様だ。

「何時帰ってきたの？」

「つい先ほどですよ。ヒッチハイクを繰り返して、ようやく地球までやってきました」

「え。次元世界の間をヒッチハイクで移動できるん？」

「転送ポートまではね。移動するのには身分証明書が必要よ」

「国外旅行みたいな感じやね」

嬉々としてフェイトに近況報告をするリニス。
と、そんな彼女の発言に興味を持ったのだろう。はやてがプレシアに訊ねる。

実際、次元世界を移動するのにヒッチハイクは有効な手段だ。
だが、あくまで乗せてもらえるのは転送ポートがある場所まで。そこからは自分の身分証明書を使用しなければならない。

それをはやてはこの世界の旅行に置き換えたのだろう。事実、さほど間違ってはいない。
はやてはそんな波乱万丈な旅をしてきたリニスを、憧れの眼差しで見つめていた。

「うぅ。フェイト分が補給できなくて、何度も死にかけました」

「えぇ！？　だ、大丈夫だったの！？」

「えぇ、それはもう。
懐に忍ばせておいたフェイトの寝顔写真や笑顔の写真。
泣いている写真に怒っている写真など合計百八の写真を見てエネルギーを回復していましたから」

「なにそれこわい」

リニスの口から飛び出した衝撃の事実に、なのはがビクビクと怯えながら鬼柳の服の裾を掴む。
それははやても同様なのか。「うわぁ」と言う何処か残念な人を見た様な表情をリニスに向けていた。

プレシアはリニスの突き抜けた様子に、一体何処で使い魔の育て方を間違えたのだろうと首を傾げる。
彼女が使い魔に施した教育と言えば、フェイトの可愛さを教えるために十二時間連続でビデオを見せ続けただけと言うのに。

ちなみに、そのビデオを見せてからだった。リニスがおかしくなっ

たのは。
寝ているフェイトの寝顔に欲情したり、フェイトの脱ぎ散らかした服の匂いを嗅ぎ始めたのは。
本当に、何処で教育を間違えたのだろうか。
プレシアはリニスの姿を見て、コテンと首を傾げる。

「そしてな・な・なんと！
今日はフェイトにお土産があります！」

「お土産！？」

「はい。フェイト専用のＤホイールです。わーぱちぱち！」

「わー！」

「……あかん、フェイトちゃんあかんよ。物に釣られとるで」

リニスのテンションと同じように上がっていくフェイトのテンション。
その様子を鬼柳の隣でジッと見つめていたはやてが、ボソリとそう称した。

しかし、あながち的外れではないだろう。物に釣られていると見えなくもない。
現在フェイトはリニスに抱き抱えられ、俗に言う「高い高い」をされている。まるで幼児の様だ。

「そう言えばなのはさんやはやてちゃんのDホイールも注文しなくちゃね。
後でカタログ出してあげるわ」

「え、ホンマですか！？」

「勿論。今後ライディング・デュエルが主流になるでしょうからね」

「持っていても、損は無いでしょ？」とプレシアはウィンクしながらなのはとはやてに訊ねる。
二人はプレシアの言葉に呆気にとられた様だが、すぐに嬉しそうな表情を浮かべた。

どうやら鬼柳一人がDホイールを持っているのを、羨ましく思っていたのかもしれない。
何処かそわそわした様子で、プレシアのことをなのはとはやては見つめている。

「――――ふぅ。これくらいフェイト分を補給出来れば、私は後三十年は闘えます」

「随分燃費が良いんだね……」

「何を言いますか。フェイト分は私の命ですよ。切れたら死にます。
……さて、そろそろ本題に入りましょうか」

「？　本題？」

フェイトを抱き抱えて踊っていたリニスが、不意に真面目な表情を浮かべた。
抱えていたフェイトを床に下ろすと、リニスはキッと鋭い視線を鬼柳へと向ける。

そこに含まれるのは相手を値踏みする様な高圧的な視線。
思わず居心地が悪くなり、鬼柳は憮然とした視線をリニスへ返す。

しかしリニスは鬼柳のジトっとした視線を気にも留めず、彼の身体を四方八方から観察する。

「ふぅむ。顔の造形は悪く無いですね。８０点と行きましょうか」

「……８０点？」

「服のセンスは……まぁ良いでしょう。若干痛々しい気がしますが７５点です」

「あ、あの。リニス？　何してるんだい？」

そして行われるのは、何故か鬼柳への点数付け。
点数を付けられている鬼柳は何処か居心地が悪そうで。

残るなのはやはやて、フェイトはそんな二人の様子を茫然と見守っていた。
一体リニスは何をしているのだろう。その疑問を抱いたのは、何も

アルフだけでは無かった様だ。

「何をとは心外ですね。未来のフェイトの旦那様の品定めです」

「「「「「「「「ぶふぅっ！！」」」」」」」」

リニスの口から放たれた衝撃的な発言に、リビングに居た全員が盛大に咽た。

普段は冷静な鬼柳ですら咽たのだから、今のリニスの発言の強力さが分かるだろう。

えほえほと皆咳き込みながら、必死に息を整えようとしている。

そんな中、リニスは鬼柳の元まで歩み寄ると、くんかくんかと匂いを嗅ぐ。

そして一言「汗臭くない。８０点」と告げる。

「り、り、り、り、リニスぅ！？　な、な、何を言ってるの！？」

「何を、とは？　フェイトが気になる男性が居ると言うので検分しに来たのですが」

「ふぇえええええっっ！！！」

ポンっ、とフェイトの頬が真っ赤に染まり、そのままコテリとフェイトは倒れた。

どうやら彼女の羞恥心の限界を突破してしまったらしい。しゅうしゅうと頭から湯気が立ち上っている。

しかし、その表情が何処か嬉しそうで。面白く無くて、思わずなのははプニッとフェイトの頬を突いた。

と、なのはがフェイトの頬を突くと同時、反対側からも誰かの人差し指が伸びる。誰だろう。視線を隣へと向けた。

「……むぅ」

「……はやてちゃん」

なのはが突いた方の反対側を突いていたのは、鬼柳の隣に腰掛けるはやてだった。

彼女もまた、面白くなさそうな表情でフェイトの頬をむにむにと突いている。

そしてはやてもなのはの視線に気づいたのだろう。

二人は互いに見つめ合うと、お互いに向かってサムズアップ。黙認である。

なのはとはやてが協定を結んでいる間にも、リニスの追及は留まる事を知らない。

「恋人の有無」や「フェイトを恋愛対象として見れるか」など、様々な事柄を訊ねている。

あまりのリニスの壊れっぷりに、久方ぶりに彼女と再会したアルフはぽかーんとしている。

鬼柳も鬼柳でリニスの追及にぽかーんとしたかった様だが、彼女の追及の前でそれは許されない。

「なんだか危機感を感じてやってきました」

「リインフォース！」

そして新たにリビングに現れるのは、腰まで伸ばした白銀の髪が特徴的な女性――リインフォース。

彼女は鼻息荒くリビングで突貫してくると、キッと視線をリニスに詰め寄られている鬼柳へと向ける。

「む、鬼柳！　貴様、また新しい女性を……ッ！
もうこれ以上は許さんぞ！」

「何の話だ……っ！　と言うか近い！
リニスの顔が色々と近いだろ……ッ！？」

「初心ですね。これは初々しい未来が想像できそうです。９０点。ただし他の女性に好かれやすい様なので減点です。６５点としましょうか」

「は、離れろぉおおおおおっっ！！」

リインフォースは鬼柳にくっ付いている（と彼女からは見えた）リニスを確認すると。

鬼柳から彼女を引き離そうと、背中に黒い翼を発現させて飛び掛かる。その動作には無駄が無い。

しかしそんなリインフォースに気が付いているのか、居ないのか。リニスはリインフォースのことなど気にも留めず、鬼柳の検分を続行するのだった。

※

「はふぅ、はふぅ……、て、手ごわかった……」

「実力行使はいけませんね。マイナス２０点です」

「私にも点数がつけられるのか！？」

リニスとリインフォースの激しい攻防を終えた八神家のリビング。ようやく嵐が過ぎ去ったかと、鬼柳達は家具の影からリビングの中央を見つめる。

するとその中央部では、激しい闘いを終えたリインフォースとリニ

スが居た。
リニスは何やら、リインフォースに思うところがあるのだろう。手帳に何かメモしている。

「当たり前でしょう？
ライバルの情報は多いに越したことはありません」

「ら、ライバル……」

「――――～～ッ！」と、リインフォースはリニスの発言に頬を赤く染めて悶える。
どうやらリニスにフェイトの脅威と認識されていることが嬉しい様だ。頬がにやけている。

「それにしても、リニスの帰還の目的がフェイトの恋人の検分だったなんて……」

さも意外そうに、プレシアは静かにお茶を啜っているリニスのことを見つめる。
てっきりフェイトに好きな人が出来たとしれば、問答無用で暗殺なりなんなりすると思っていたのだが。

と、リニスはそんなプレシアの視線に気がついたのだろう。
ジトっとした視線をプレシアに向けながら、自分の意見を口に出す。

「別に私は、フェイトを私だけのお人形にしようとは思いませんよ。フェイトに好きな人が出来たなら、しっかり背中を押して応援してあげます」

「リニス……」

「ただし、身体目的やフェイト個人を見ていないのなら話は別です。問答無用でＫＩＬＬです。東京湾に沈めます。チェーンソーで全身をバラバラにしたりトンカチで頭を叩き割ったり……」

「リニスさんって、随分猟奇的なんやな……」

真顔のリニスから飛び出してくる猟奇的な言葉に、先ほどの言葉の感動も霧散してしまう。

だが、彼女が心の底からフェイトを大切にしていると言うのは理解できた。心底愛されているなと思う。

そしてリニスに愛されているフェイトが、はやては羨ましく感じる。自分もプレシアや鬼柳に愛されているとは思うが、ここまでの愛情を感じたことは無い。

鬼柳やプレシアとは知り合いなのだからしょうがないと思うが、時折愛情が恋しくなるのだ。

チラ、と視線を隣へと向ければ、そこにははやてと同じようにフェイトを羨ましそうに見つめるなのはが。

大方、彼女もリニスに心底愛されているフェイトが羨ましいのだろう。

なんだか似た者同士で、思わず面白く感じてしまう。ふとした拍子に笑ってしまいそうだ。

「え、えぇっとそれでですね……。
き、鬼柳さんはリニスさんから見てどんな感じなのでしょうか？」

そして場が一段落したのを見計らい、なのはがおずおずとリニスに訊ねた。
リニスはなのはの言葉にお茶の入った茶碗を茶うけに置くと、パラパラと手帳のページを捲くる。

「そうですね。総合点数８０点と高得点です。
フェイトのことを妹的なポジションで見ているのはいささか不満ですが。
ですが、言いかえればフェイトのことを一人の女性として見ている様ですから特に不満は無いですね。
定職についているのもポイントが高いです。フリーターなんて言われた日には、総合点数マイナス５０点にしているところでした」

「ふにゃ……」

「あ、フェイトちゃんが真っ赤になってもう一回倒れた」

リニスの冷静な言葉に、再び耐え切れなくなったのだろう。
フェイトが耳まで真っ赤に染めて、ぱたりとソファの上に崩れ落ちる。

「そしてライバル情報で、まずはなのはさん。
強敵度は９５とかなり強敵です。かなり手ごわい相手ですね。
昔から鬼柳氏の身近に居たと言うのはそれだけアドバンテージがあります。
今は昔ほど彼に甘えられていない様ですが、成長してどんどんアピールすれば彼もコロリと行くかもしれませんね」

「にゃ～～～～ッ！？」

「次にはやてさん。こちらも強敵度９０とかなり強敵です。
顔の造形はなのはさんやフェイトに若干劣りますが、それを補って余りある可愛らしさを持っています。
まずその関西弁。どうしてこう、女性の関西弁は可愛らしいのでしょうか。思わず漫才をしたくなりますね。
そして時折見せる心の弱さ。普段の姿を知っていれば、弱さを見せたときのギャップが激しいはずです。萌えます。
最後に豊富な家事スキル。料理洗濯掃除と何でもござれ。家事が出来る女は貴重ですよと私は思います」

「こ、ここまで冷静に診断されると恥ずかしいなぁ……」

「次にリインフォースさん。こちらの強敵度は６５と若干低めです。
年齢によるアドバンテージは大きいでしょうが、問題はその性格でしょうか。
俗に言うツンデレでしょうね。鬼柳氏に向けてツンツンしていることが多々ある様です。
しかし、そのせいで鬼柳氏がリインフォースさんに好意を向けられていると気づいていません。

ツンデレは適度なデレを見せないといけませんよ。ツンツンし過ぎては、好意が伝わりませんから。素直になりましょう」

「な、何故私はアドバイスを貰っているのだ……」

「そして最後にまさかの大穴でアルフです。強敵度９９のもはやラスボスです。

普段から鬼柳氏と行動している様なので彼の好みを把握しているのは大きいでしょう。

がさつに見えてさり気ない気遣いが出来る女は良い女ですよ。これからもがんばってください。

それにタッグデュエルでの息もピッタリ合っている様ですね。鬼柳氏がタッグデュエルの大会にアルフと良く参加するのがその証拠。

鬼柳氏の多大な信頼を得ている証です。このままいっそゴールインしてしまえばどうですか？」

「なぁ――――――!?」

パタンと、メモ帳の内容を読み終え、リニスはふぅと小さく息を吐いた。

彼女としては、ライバルは三人の女性だけだと思っていたのにアルフまで参戦しているのは予想外だ。

しかもそのくせ、件のフェイトの好意を向ける相手から多大な信頼を得ているのだから性質が悪い。

予想通り、フェイトは「うぅ～」と唸りながらアルフを見つめ、残る三人の女性は殺意の籠った視線をアルフに向けている。

そしてこれまでのなのは達の情報を、同じくリビングで聞かされて

いた鬼柳は頬をこれでもかと赤く染めている。
こんなにも堂々と好意を向けられるのに慣れていないのだろうか。
そわそわと落ち着きが無くなり、視線をきょろきょろと動かしている。

「あらあら。鬼柳ってば照れてるのね」

「うっ……！　……し、仕方ないだろ。
こんな風に言われたのは、初めて……なんだからよ」

「ふふ。見た目不良っぽいのに初心だなんて、可愛いわぁ」

「――――～～～っ！」

プレシアの言葉に、鬼柳の顔がさらに赤くなる。限りなく照れている様だ。
そんな鬼柳の様子が可愛らしくて、プレシアはまたも鬼柳をからかう。

アルフが四人の女性に囲まれている脇で行われている初々しいからかい。
その様子を見て、「新たな強敵の出現ですね」とリニスがペンを取ったことを、プレシアはまだ知らなかった。

九話　「リニス、襲来　前編」（後書き）

訂正、次回はリニスとデュエルします。
果たしてフェイトはリニスに強さを見せられるのか。

九話　「リニス、襲来　後編」（前書き）

今回はリニスとのデュエルパート。
ちなみにあのデュエルディスクは当作品ではリニスの自作です。

九話　「リニス、襲来　後編」

～時の庭園　某所～

八神家のリビングから場所を移し、鬼柳たちは時の庭園へと移動していた。
これから行われるのは、フェイトが以前からどれほど力をつけたかを測るデュエル。

故に、八神家のリビングでは少々手狭になってしまう。故に、場所を時の庭園へと移したのだ。
時の庭園にある原っぱの様な場所で、フェイトは己のデッキのシャッフルを終える。既に準備は完了だ。

「では始めましょう。フェイト、これを」

「！　っとと。うわぁ、これ懐かしいな」

互いにデッキのシャッフルを終えると、リニスがフェイトに何かを放る。
それは一見すれば拳銃に見えなくもないが、よく見てみれば精巧に作られたデュエルディスクだった。

フェイトはリニスから放られた拳銃型のデュエルディスクを、懐かしそうに眺めている。
アレは一体何なのだろうか。気になった鬼柳たちは、チラ、と視線

をプレシアへと向けた。

「あぁ、アレ？　あれはリニスが自作した拳銃型のデュエルディスクよ。
　デュエルしても良し、鉄砲ごっこをしても良し。一粒で二度美味しい代物ね」

「鉄砲ごっこって……、あはは」

プレシアのウィンク混じりの説明に、なのはが乾いた笑いを浮かべる。
一粒で二度美味しいと言うのは理解できるが、何故そこで鉄砲ごっこなのだろう。

疑問に思うが、楽しそうに件のデュエルディスクを弄っているフェイトを見ると思わず口を噤んでしまう。
恐らく、以前のフェイトは鉄砲ごっこなど身体を動かす遊びが好きだったのだろう。その名残があのデュエルディスクに違いない。

フェイトは新たにリニスから放られたホルスターを受け取ると、慣れた手つきで腰に下げる。
そしてリニスから受け取った拳銃型のデュエルディスクを、そのホルスターの中にセットした。

相対しているリニスもまた、腰からホルスターを下げてデュエルディスクをその中にセットしている。
その姿はさながら西部劇に登場する賞金稼ぎだろうか。カウボーイハットがあれば、雰囲気が出たかもしれない。

「さぁ、行きますよ。フェイト」

「うん、いつでも良いよ！」

そして辺りに、緊張感に包まれたリニスの声が響く。
フェイトもそれを了承しているのか。真剣な面持ちで頷いた。

「「――――決闘（デュエル）！！」」

『ッ！』

デュエル開始の宣言と共に、フェイトとリニスの手が素早く動いた。
向かった先は、互いの腰にぶら下がっているホルスターの中のデュエルディスク。

両者は素早い動きで拳銃型のデュエルディスクをホルスターから引き抜くと、左腕に装着する。
そして瞬く間に、拳銃の形をしていたデュエルディスクが、従来のデュエルディスクの姿へと変形する。

銃身が横に展開し、その中に五つのモンスターカードゾーン。そして魔法・罠ゾーンが出現する。
その一連の二人の動きに、鬼柳やなのは、はやては驚いた表情を浮かべた。まるで無駄が無い二人の動き。

「――――ッ！」

拳銃型からデュエルディスクへと変形を終えると、フェイトとリニスはデッキから手札を五枚抜き取る。
抜き取った五枚のカードを素早く左手へと持ちかえると、右手で抜き取った五枚の手札を素早く展開した。

その結果、先に展開したのは――――

「私の方が、早かったみたいだね」

「そうですね。まったく、相変わらずフェイトは上手です」

「えへへ」

フェイトだった。彼女はリニスの言葉に嬉しそうな笑顔を浮かべる。
そんな中、まるで展開に付いて行けていない鬼柳達は、何をしたのかをプレシアに訊ねた。

「プレシア。フェイトたちは何をしてたんだ？」

「さっきのは先攻、後攻を決めるジャンケンみたいなものよ。
先にデュエルディスクを展開し、手札を先に展開した方が先攻。
我が家ならではのルールなの」

「へぇえ～～～～！　た、楽しそう！」

プレシアの説明に、なのはの瞳がきらきらと輝く。
大方、フェイトとリニスの持つデュエルディスクが羨ましいのだろう。

それにあの様な先攻、後攻を決めるシステムも悪くないと、鬼柳は内心で思う。
普段はデュエルディスクに表示されるが、それは無機質で何か味気ない。しかし、先ほどのは違う。

お互いが真剣に、先攻と後攻を奪い合うのだ。
胸の内に眠る本能を刺激される様な、スリリングなシステムに鬼柳の頬も楽しげに歪む。

「じゃあ、私のターンから。ドロー！」

フェイト手札5→6

「私は手札の≪ボルト・ヘッジホッグ≫を墓地へ送り、≪ワン・フォー・ワン≫を発動！
デッキまたは手札からレベル1のモンスター1体を場に特殊召喚するよ！」

ワン・フォー・ワン
通常魔法
手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。
手札またはデッキからレベル1モンスター1体を

自分フィールド上に特殊召喚する。

「わたしはデッキから≪チューニング・サポーター≫を特殊召喚！」

「へぇ、上手い手だな。墓地肥やしをしつつ、デッキ圧縮もするなんて……、やるじゃねぇか」

「ここ最近、フェイトのデッキのレベルは上がってきているわよ」

フェイトのフィールドに特殊召喚されたモンスターを捉え、鬼柳が感心した様に呟く。

以前までは相手の攻撃を耐える様な戦術だったが、ここ暫くのフェイトのデッキは違う様だ。

それはプレシアも実感しているのか。娘のデュエルの成長を目の当たりにし、嬉しそうに頬を緩めている。

これならば、何時の日か遊星と再会したときにも、良い勝負が出来るかもしれない。今度は勝ってほしいものだと思う。

「そして私は手札から≪デブリ・ドラゴン≫を召喚！
さらに私の場にチューナーモンスターが存在する場合、墓地から≪ボルト・ヘッジホッグ≫を特殊召喚！」

「ッ！　しばらく見ない間に、随分と成長したようですね、フェイト」

「えへへ。それなら嬉しいな。まだまだ強くなりたいから」

リニスの惜しみない称賛に、フェイトは嬉しそうな笑みを浮かべる。
以前までは高速で場にモンスターを揃えることが出来なかった。だが、今は出来る。

それが昔の自分と今の自分との違いの様で、フェイトはなんだか嬉しく感じた。
だが、それもここまで。今はリニスに成長した自分の力を見せるのが先決。フェイトはキッとリニスを見据える。

「私の場の≪チューニング・サポーター≫はシンクロ召喚に使用する際、レベルを2としても扱うことが出来るよ」

「えぇ!?　と、と言うことは1ターン目でいきなり≪スターダスト・ドラゴン≫を呼べるんとちゃう!?」

「フェイトちゃんの狙いは……≪スターダスト・ドラゴン≫の高速召喚!?」

「レベル2の≪チューニング・サポーター≫とレベル2の≪ボルト・ヘッジホッグ≫に
　レベル4の≪デブリ・ドラゴン≫をチューニング！」

はやてやなのはの驚きに満ちた声が聞こえたが、フェイトは気にせずデュエルを進める。
フィールドに存在していたデブリ・ドラゴンが4つの緑色のリングとなり、そのリングの中を二体のモンスターが潜る。

リングの中を潜っているモンスターから現れるのは、合計４つの光る星。
それらはリングの中で一列に整列すると、一筋の極太の閃光がリングの中を貫いた。

「集いし願いが、新たに輝く星となる。光さす道となれ！
――――シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ、≪スターダスト・ドラゴン≫！！」

フェイトの背後に、閃光から一体のドラゴンが飛翔する。
それこそがフェイトとプレシアを繋ぐ絆のカード――スターダスト・ドラゴン。

白銀に輝くそのドラゴンは相対するリニスを見据えると、静かな声で「グルル……」と唸った。

「シンクロ素材に使用された≪チューニング・サポーター≫の効果で、私は１枚ドロー！」

フェイト手札３↓４

「カードを１枚伏せて、ターンエンドだよ」

フェイト　手札４↓３
場　スターダスト　伏せ×１

「では、私のターン。ドロー」

リニス手札5→6

「私は手札の≪金華猫≫を墓地に送り、≪虚栄の大猿≫を特殊召喚します」

金華猫
スピリットモンスター
星1／闇属性／獣族／攻　400／守　200
このカードは特殊召喚できない。
召喚・リバースしたターンのエンドフェイズ時に持ち主の手札に戻る。
このカードが召喚・リバースした時、
自分の墓地に存在するレベル1のモンスター1体を
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上から離れた時、
この効果で特殊召喚したモンスターをゲームから除外する。

虚栄の大猿
チューナー（効果モンスター）
星5／地属性／獣族／攻1200／守1200
このカードは通常召喚できない。
手札から獣族モンスター1体を墓地へ送った場合に特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、
墓地へ送った獣族モンスターのレベルを確認し、
次の効果から1つを選択して発動する事ができる。
●そのレベルの数だけこのカードのレベルを上げる。
●そのレベルの数だけこのカードのレベルを下げる。

「このカードは墓地に送ったモンスターのレベル分、このモンスターのレベルを増減できます。
ですが、今は特に増減はしません。増減すれば、この危機を脱却出来そうにありませんからね」

リニスは穏やかな声で、フェイトに説明する。
フェイトはリニスの説明を聞き、僅かに身を強張らせた。

どうやら成長していたのは、なにも自分だけでは無かったようだ。
リニスもまた、以前よりも力を着けている。一体、リニスはどんな戦術を遣うのか。

「私は、手札から≪マイン・モール≫を召喚！
そしてレベル3≪マイン・モール≫にレベル5≪虚栄の大猿≫をチューニング！」

「――ッ！　来る！」

「駆けよ稲妻！　疾風を切り裂き紅蓮の炎を！　シンクロ召喚！
気高き獣の王者≪ライトニング・トライコーン≫！」

マイン・モール
星3／地属性／獣族／攻1000／守1200
このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。
このカードが獣族モンスターのシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、
自分のデッキからカードを1枚ドローする。

このカードが相手のカードの効果によって
フィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

ライトニング・トライコーン
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／獣族／攻２８００／守２０００
チューナー＋チューナー以外の獣族モンスター１体以上
このカードが相手によって破壊された場合、自分の墓地に存在する
「サンダー・ユニコーン」または「ボルテック・バイコーン」
１体を選択して自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

合計５つの緑色のリングを閃光が貫き、リニスの場にモンスターが
召喚される。
金色の体躯に、蒼い盾髪。そして全身から生える赤い角。それはま
さに神話に出てくる獣の姿。

「す、凄い……！」

「１ターン目から二人の場にレベル８のシンクロモンスターが並ん
だ……！」

そしてその様子を観戦していたなのはとはやては、驚いた表情を浮
かべている。
リニスの実力を知らぬ二人だが、彼女がやわな決闘者でないことは
理解した。

先攻1ターン目でレベル8のシンクロモンスターを召喚するのは難しい。
しかしこの二人は、難なくレベル8のシンクロモンスターを並べて見せた。
果たしてリニスは、どんな手段でフェイトを打ち破ると言うのだろうか。
そしてフェイトは、そんなリニスの猛攻をいかに凌ぐのか。興味がそそられる。

「≪マイン・モール≫が獣族モンスターのシンクロ召喚に使用された場合、
デッキからカードを1枚ドロー出来ます」
リニス手札3→4
「さて、では攻めさせてもらいます。
≪ライトニング・トライコーン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫を攻撃！」
「っ！」

リニスの傍らに控えていたトライコーンが、フェイトのスターダスト目がけて駈け出す。
その駆ける早さはまさに雷。あまりの速さに、思わずフェイトが息を呑む。しかし――――

「リバースカード、≪バスター・モード≫を発動！」

「ッ！　≪バスター・モード≫……？」

「自分フィールド上の≪スターダスト・ドラゴン≫をリリースし、デッキから≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫を特殊召喚するよ！」

「これは……ッ！」

スターダストに向かって駆けていた、トライコーンの足が止まった。その視線の先で、スターダストは疾風にその身を包まれている。

胸に埋め込まれたのは、全身に力を供給するためのエネルギー源。いかな戦闘にも耐えうる鎧を四肢に纏い、スターダスト・ドラゴンは姿を進化させる。

「なんて猛々しい……！
これは、スターダストの進化系……？」

「さぁ、バトルは巻き戻されたよ。どうする、リニス」

「くっ、バトルはキャンセル！　カードを二枚伏せて、ターンを終了します」

リニス手札４→２
場　トライコーン　伏せ×２

「私のターン！」

フェイト手札３→４

「バトル！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫で、≪ライトニング・トライコーン≫を攻撃！　アサルト・ソニック・バーン！」

「させません！　リバース発動！　≪次元幽閉≫！　攻撃宣言をした相手モンスター１体をゲームから除外します」

スターダスト・ドラゴン／バスターの放ったブレスが、次元の裂け目に飲み込まれる。

そして現れた次元の裂け目は、攻撃を仕掛けたスターダスト・ドラゴン／バスターを飲み込もうとした。

「≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の効果発動！　自身をリリースすることで、魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊する！」

「！？　破壊効果だけではない！？　厄介な……！」

「私はカードを二枚伏せて、ターンを終了！　そしてエンドフェイズ、効果でリリースされたスターダストは場に舞い戻る！」

「ならばスターダストが場に特殊召喚される前に、伏せカード≪幻獣の角≫を発動！」

フェイトの場に、リリースされたスターダストが特殊召喚されようとする。
しかし、／バスターへと進化したスターダストを脅威と感じ取ったのか。リニスが伏せカードを発動した。

「発動後、このカードは攻撃力８００ポイントアップの装備カードとなります。
　対象は勿論、≪ライトニング・トライコーン≫！」

幻獣の角
通常罠
発動後このカードは攻撃力８００ポイントアップの装備カードとなり、
自分フィールド上に存在する獣族・獣戦士族モンスター１体に装備する。
装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し
墓地へ送った時、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

ライトニング・トライコーンＡＴＫ２８００→３６００

「ッ！　攻撃力が、スターダストを上回った！？
　くっ、ターンエンド！」

フェイト手札４→２
場　スターダスト／バスター　伏せ×２

「私のターン、ドロー！」

リニス手札２→３

「私はモンスターをセット。そしてバトルフェイズに入ります！」

「ッ！」

「≪ライトニング・トライコーン≫で≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫に攻撃！
貫け、疾風迅雷！」

リニスの号令と共に、ライトニング・トライコーンがフェイトの場に目がけて駈け出す。
スターダスト／バスターの攻撃力を上回ったライトニング・トライコーンの攻撃を耐える術はない。

「きゃぁあああああっっ！！」

フェイトＬＰ４０００→３４００

「くっ、≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫が破壊された時、墓地から進化元である≪スターダスト・ドラゴン≫を特殊召喚することが出来る！」

「――――！　自己再生！？」

ライトニング・トライコーンの攻撃により、スターダスト／バスターが黒煙に包まれる。
しかし、その黒煙を両の翼で薙ぎ払い、通常形態へとモードチェンジを果たしたスターダスト・ドラゴンが現れた。

リニスはフェイトの場に特殊召喚されたスターダスト・ドラゴンを驚愕の表情で見つめる。
あれだけ強力な効果を持っていながら、破壊された場合にも後続を用意する効果があったなんて。

フェイトもまた、己と同じように強力なカードを手にしたのだろう。
そしてその効果を、存分に発揮している。それは先生として、嬉しいことだ。

「ですが！　相手モンスターを戦闘で破壊し、墓地へ送ったとき。≪幻獣の角≫の効果で、私はカードを1枚ドローします！」

リニス手札2→3

「私はこのまま、ターンエンド！」

場　ライトニング・トライコーン　セットモンスター　幻獣の角

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札2→3

「私は手札から速攻魔法≪ダブル・サイクロン≫を発動！
自分の場のカード1枚と相手の場のカード1枚を選択し、選択し

たカードを破壊する！
　私は場の伏せカードを！　リニスの場のカードは≪幻獣の角≫を選択！」

「？　わざわざ自分の場のカードを破壊した？」

フェイトの奇怪な行動に、リニスは思わず眉を顰める。
おかしい。フェイトがあの様な、アドバンテージを失う戦略を取ることは無い。

ならばあの行動には何の意図が？　疑問に思うが、思いあたるカードは無い。
そしてフェイトとリニスの場に二つの竜巻が発生する。その竜巻はフェイトが宣言したカードを破壊した。

リニスの場の幻獣の角。そしてフェイトが伏せていたカード――リミッター・ブレイクを。

「墓地へ送られた≪リミッター・ブレイク≫の効果発動！
　自分の手札・デッキ・墓地から≪スピード・ウォリアー≫1体を特殊召喚するよ！」

「墓地へ送られたことをトリガーにして起動するトラップ！？」

「お願い、≪スピード・ウォリアー≫！！」

リミッター・ブレイク
通常罠

このカードが墓地へ送られた時、
自分の手札・デッキ・墓地から「スピード・ウォリアー」1体を特殊召喚する。

フェイトの場の伏せカードを破壊した竜巻の中から、スピード・ウォリアーが現れる。
攻撃力は900と心許ないが、フェイトのデッキにおいては重要なアタッカーを務めている。

不味い――と、リニスは心の中で臍を噛んだ。このままフェイトに主導権を握られるのは不味い。
それに伏せカードが無いと言うことも、リニスに焦りを覚えさせる。
恐らくフェイトは、シンクロ召喚を行う筈。

「そして私は手札から≪ジャンク・シンクロン≫を召喚！
≪ジャンク・シンクロン≫が召喚に成功したとき、
墓地からレベル2以下のモンスター1体を効果を無効にして特殊召喚するよ！
対象は、≪チューニング・サポーター≫！」

「――――！」

フェイトの場に召喚されたガラクタの戦士。
その戦士が手を振るうと、先ほどシンクロ召喚に使用されたモンスターが特殊召喚される。

恐らく、フェイトの狙いはレベル5かレベル6のシンクロ召喚だろ

う。
レベル５にはジャンク・ウォリアーがいたが、レベル６の方は見当もつかない。

「レベル２≪スピード・ウォリアー≫とレベル１≪チューニング・サポーター≫に
　レベル３≪ジャンク・シンクロン≫をチューニング！」

「レベルの合計は６……、一体、どんなモンスターが？」

「手にした盾は仲間を護る絶対の盾。
　不退の戦士よ、我が元へ出でよ！　シンクロ召喚！」

「――――っ！」

「絶対なる守護者、≪ジャンク・ガードナー≫！」

ジャンク・ガードナー
シンクロ・効果モンスター
星６／地属性／戦士族／攻１４００／守２６００
「ジャンク・シンクロン」＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、相手フィールド上に存在するモンスター１体を選択し、
表示形式を変更する事ができる。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。
このカードがフィールド上から墓地へ送られた場合、
フィールド上に存在するモンスター１体を選択し、
表示形式を変更する事ができる。

３つの緑色のリングを潜り、召喚されたのは両手に盾を持つ鋼の戦士だった。
ジャンク・ガードナー。リニスが教えていたころには、フェイトが持っていなかったカード。

ガードナーとあるからには、守りに関係する効果のはずだ。
一体どのような効果を持っているのだろうか。リニスは慎重に観察する。

「≪チューニング・サポーター≫がシンクロ召喚に使用された時、私はデッキからカードを１枚ドロー！」

フェイト手札１→２

「そして≪ジャンク・ガードナー≫の効果発動！
１ターンに１度、相手フィールド上のモンスター１体を選択し、表示形式を変更できる！
対象は≪ライトニング・トライコーン≫！　守備表示へ変更！」

「ッ！　そんな効果が……！」

「そしてバトル！
≪スターダスト・ドラゴン≫で≪ライトニング・トライコーン≫を攻撃！
響け、シューティング・ソニック！」

「くぅううっ！」

スターダスト・ドラゴンの放ったブレスが、守備表示のライトニング・トライコーンを粉砕する。
ライトニング・トライコーンには特殊効果が存在するが、墓地に対象となるモンスターが居ないせいで不発。

リニスのフィールドは、スターダスト・ドラゴンの攻撃により更地と化した。
何も無くなったリニスのフィールド。その様子に、フェイトはホッと安堵の息を吐く。

あのままライトニング・トライコーンを残しておくのは大分不味かった。
けれど、戦闘破壊出来たのは素直に嬉しい。このままペースを掴めれば良いな。胸中で呟く。

しかし――――

「（ッ！？　リニス、笑ってる……？）」

フェイトの心の中にあった余裕も、リニスの浮かべる笑みによって消え去った。
フィールドに伏せカードも無く、モンスターも存在しない状況で。
リニスはクスクスと笑みを浮かべている。

なにか、とてつもなくイヤな予感がする。
フェイトは背筋をゾクリと振るわせ、相対しているリニスを見つめた。

「ダメですよ、フェイト。獣たちを怒らせてしまっては――――」

――――ズズゥウウン……

「な、なに？」

リニスがフェイトを嗜めるように口を開けば、それと同時に地響きが聞こえた。

先ほどの地響きは一体何なのだろうか。フェイトはおろか、観戦していた鬼柳達も辺りを見渡している。

そして、地響きを発生させていた原因が、姿を現した。

「――――森の、ハンターがやってきますよ」

「――――～～～～ッ！　い、イエロー・バブーン！？」

「私の墓地の獣族を二体除外し、≪森の狩人イエロー・バブーン≫を特殊召喚」

森の狩人イエロー・バブーン
星７／地属性／獣族／攻２６００／守１８００
自分フィールド上に存在する獣族モンスターが
戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地に存在する獣族モンスター２体をゲームから除外する事で、

このカードを手札から特殊召喚する。

リニスの背後に控える森。そこから姿を現したのは、獣人のハンターだった。
その巨大な体躯はまるで小さな山の様。手には荒々しく作られた手製の弓矢を持っている。

忘れていた。獣族には、厄介な狩人と番人が存在すると言うことを。
フェイトは茫然と、リニスのフィールドに特殊召喚されたイエロー・バブーンを見上げる。

「どうしました、フェイト。まだ貴方のターンですよ」

「！　くっ、私はこのまま、ターンを終了！」

フェイト手札２
場　スターダスト　ジャンク・ガードナー　伏せ×１

「私のターン、ドロー」

リニス手札２→３

「私はセットしていたモンスターを反転召喚。
セットモンスターは≪モジャ≫です」

「≪モジャ≫、何時の間に！？」

「私は場の≪モジャ≫をリリース！

そして手札から≪キング・オブ・ビースト≫を特殊召喚します！」

キング・オブ・ビースト
星７／地属性／獣族／攻２５００／守　８００
自分フィールド上に表側表示で存在する「モジャ」１体をリリースして発動する。
このカードを手札または墓地から特殊召喚する。
「キング・オブ・ビースト」はフィールド上に１体しか表側表示で存在できない。

先ほどイエロー・バブーンが姿を出現させた森の中から、新たな獣が姿を現す。
その姿は見るもおぞましい姿だが、キングの名に相応しい存在感を場に与えている。

フェイトはリニスのフィールドに存在する二体のモンスターを見つめ、冷や汗を流した。
この流れは間違いなく悪い物だ。この流れに乗っていては、まず間違いなく自分は負けてしまう。

「（そんなこと、イヤだ！）」

けれど、そんなことはイヤだと、フェイトは内心で頭を振った。
強くなった自分をリニスに見てもらうのだ。そのためにこのデュエル、何が何でも勝たなくては。

「では、バトルフェイズ！　速攻魔法≪百獣大行進≫を発動！」

百獣大行進
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターの攻撃力は、エンドフェイズ時まで自分フィールド上の獣族モンスターの数×２００ポイントアップする。

「自分フィールド上に表側表示で存在する獣族モンスターの攻撃力は、
　エンドフェイズまで自分フィールドの獣族モンスター×２００ポイントアップします！」

イエロー・バブーンＡＴＫ２６００→３０００
キング・オブ・ビーストＡＴＫ２５００→２９００

「リニスのフィールドには2体の獣族。と言うことは攻撃力は４００上昇！？」

「行きます！　イエロー・バブーンで≪ジャンク・ガードナー≫を攻撃！」

リニスの背後に控えるイエロー・バブーンが、手に持った弓矢を構える。
しかし、引き絞られた矢が、放たれることは無かった。フェイトがジャンク・ガードナーの効果を発動させたのだ。

「≪ジャンク・ガードナー≫の効果発動！
1ターンに1度、相手の場のモンスターの表示形式を変更できる！
対象は≪森の狩人イエロー・バブーン≫！」

「ですが、まだ≪キング・オブ・ビースト≫の攻撃が残っていますよ！」

「くっ！」

「≪キング・オブ・ビースト≫で≪ジャンク・ガードナー≫を粉砕！」

「きゃぁあああああっっ！！」

キング・オブ・ビーストが口から放った光弾に、ジャンク・ガードナーが倒れる。
幸い、ジャンク・ガードナーは守備表示で特殊召喚しておいたので、ダメージは無い。

しかし、ボードアドバンテージはリニスに傾いたままだ。
なんとかこのターンを凌いだが、次のターンも凌げるとは限らない。
ならば、やるべきことは1つだけ。

「（リニスに勝つ！　絶対に、勝ってみせる！）」

「≪ジャンク・ガードナー≫の効果発動！　このカードが場から墓地へ送られた時、

フィールド上のモンスター1体の表示形式を変更できる！　対象は≪キング・オブ・ビースト≫！」

フェイトは己を奮い立たせると、急いでジャンク・ガードナーのもう1つの効果を発動させる。
その効果とは、ジャンク・ガードナーが場から墓地へ送られた場合、場のモンスター1体の表示形式を変更できると言うもの。

この効果により、リニスのフィールドに残された2体のモンスターは守備表示へと変更された。
これでフェイトのターンに、高攻撃力のモンスターが残される心配は無くなった。

「なかなか厄介な効果を持つ……、私はこのままターンエンド！」

リニス手札1
場　イエロー・バブーン　キング・オブ・ビースト

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札2→3

「（足りない、まだカードが……）」

ドローしたカードを見つめ、フェイトは胸の内で苦い表情を浮かべた。
先ほどドローしたカード。確かに良いカードなのだが、使うタイミ

ングは今ではない。

もしもここで使ってしまえば、恐らくリニス相手に勝利するのは不可能だろう。

慎重に、慎重に。フェイトは己に言い聞かせるように深呼吸をすると、ドローしたカードを手札に加える。

「伏せカード≪奇跡の軌跡（ミラクル　ルーカス）≫を発動！

私は場の表側攻撃表示のモンスター1体を選択し、相手に1枚ドローさせることによって発動するよ」

奇跡の軌跡

通常罠

自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するモンスター1体を選択して発動する。

相手はデッキからカードを1枚ドローする。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は１０００ポイントアップし、

1度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃する事ができる。

そのモンスターが戦闘を行う場合、

相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは0になる。

リニス手札1↓2

「？　わざわざ相手にハンドアドバンテージを与えるとは？」

「そうだね。このままじゃアドバンテージを失ってる。けれど！

≪奇跡の軌跡≫の効果発動！　私が選択したモンスターの攻撃力

は１０００ポイント上昇し、
１度のバトルフェイズ中に2回までモンスターに攻撃が出来る！」

「！　連続攻撃……！　くっ、不味い……！」

「けど、相手プレイヤーのが受ける戦闘ダメージは0になる。
お願い、≪スターダスト・ドラゴン≫！　2連続シューティング・ソニック！」

「くぅううっ！！」

スターダスト・ドラゴンの放った音速のブレスが、リニスの場のモンスターを粉砕する。
元より守備表示のため超過ダメージは存在しないが、ソリッドビジョンの余波がリニスを襲う。

わざわざ相手に1枚ドローさせ、戦闘ダメージが0になるのは痛いほどのデメリットだった。
けれど、リニスのフィールドをがら空きにすることが出来た。ようやく、フェイトにも勝機が見えてきた。

「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札2
場　スターダスト　伏せ×1

「くっ、私のターン！」

リニス手札2→3

「私は手札から≪おとぼけオポッサム≫を召喚！」

おとぼけオポッサム
星2／地属性／獣族／攻　８００／守　６００
自分のメインフェイズ時、このカードの攻撃力よりも高い攻撃力を持つモンスターが
相手フィールド上に表側表示で存在する場合、
フィールド上に存在するこのカードを破壊する事ができる。
また、自分のスタンバイフェイズ時、このカードの効果で破壊されたこのカードを
墓地から特殊召喚する事ができる。

「あれ？　なんだか可愛い……」

「見た目に騙されてはいけませんよ。
自分のメインフェイズ時、≪おとぼけオポッサム≫よりも
攻撃力が高いモンスターが相手フィールド上に存在するとき、このカードは破壊されます」

「ふぇ？　じ、自壊？」

「はい。――――ただし、ただの自壊とは限りませんけれど」

「！」

ゾクリ、と、フェイトは先ほどイエロー・バブーンが召喚された際に感じた寒気を覚える。
間違いない。先ほど召喚されたおとぼけオポッサムはリニスの次の

一手に間違いない。

自壊することで、発動条件。もしくは召喚条件を満たすモンスターはいただろうか。

フェイトは思わず眉を顰めながら、条件に当てはまるモンスターを探し出す。そして、彼女は見つけた。

「ま、まず……！」

「私の場の獣族モンスターが破壊され、墓地へ送られた時。
１０００ライフポイントを支払い手札、または墓地からこのカードを特殊召喚します。
来なさい、≪森の番人グリーン・バブーン≫！！」

森の番人グリーン・バブーン
星７／地属性／獣族／攻２６００／守１８００
自分フィールド上に存在する獣族モンスターが破壊され
墓地へ送られた時、１０００ライフポイントを払って発動する事ができる。
このカードを手札または墓地から特殊召喚する。

リニスＬＰ４０００→３０００

リニスの背後の森の中から、先ほどのイエロー・バブーンと瓜二つのモンスターが現れる。
先ほど召喚したイエロー・バブーンと違い、こちらは手に棍棒を持っていた。

これこそが、森の守護者と呼ばれるモンスター――グリーン・バブーン。
特殊召喚の条件は中々厳しいが、墓地からも特殊召喚出来る優れた効果を持っている。

「バトルフェイズ！
グリーン・バブーンで≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！」

「ッ！　スターダスト！」

フェイトの咄嗟の呼びかけも虚しく、スターダスト・ドラゴンは棍棒の餌食となってしまう。
グリーン・バブーンの攻撃により、フェイトの場のモンスターは０となった。かなり苦しい状況である。

「くっ」

フェイトＬＰ３４００→３３００

しかし、フェイトは諦めずに前を見つめる。
久しぶりに会えたデュエルの師匠に、自分の成長した姿を見せるため。

リニスもフェイトがまだやれることを確認したのか。
微笑ましげに笑みを浮かべると、ターン終了の宣言を行う。

リニス手札1
場　グリーン・バブーン

「私の、ターン！」

リニスからターンが移り、フェイトのターンへと移行する。
恐らく、ここが勝てるかどうかの瀬戸際だろう。起死回生のカードを引けるかどうか。

もしも起死回生のカードを引けなかった場合、じり貧で負けるとフェイトは予想する。
互いにエースが出尽くした様だが、まだ油断はできない。リニスのデッキは以前のものと違うのだ。

故に、勝負を決めるならばこのターンで決着を着ける。
これ以上無駄にターンを重ねては、リニスがどんどん有利になるだけ。

「（お願い、来て――――！！）」

そして、フェイトは胸の内で願うと共に、デッキからカードをドローした。
勢いよく振り抜いたそのカードを、チラリと横目で確認。次いで、彼女の口元に笑みが浮かぶ。

「っ！」

「私は自分の墓地の≪バスター・モード≫を除外して、伏せカード≪Ｒｅ－ＢＵＳＴＥＲ≫を発動！
自分フィールド上のモンスターを全て破壊し、墓地から「／バスター」と名のついたモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚！」

「「／バスター」専用の蘇生カード！？」

「うん。だけど、効果は無効化されて、リリースする事も出来ないよ」

Ｒｅ－ＢＵＳＴＥＲ
速攻魔法
自分の墓地に存在する「バスター・モード」１枚をゲームから除外して発動する。
自分フィールド上に存在するモンスターを全て破壊し、
自分の墓地に存在する「／バスター」と名のついた
モンスター１体を召喚条件を無視して特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化され、
リリースする事もできず、フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

フェイトの足元の地面が盛り上がり、地中からスターダスト／バスターが姿を現す。
全身に纏った鎧はボロボロになっているが、未だその瞳には闘志が宿っていた。
その姿はまさに不屈。いくら破壊されようとも、何度でも墓地から

蘇ってくる。
土壇場で蘇生されたスターダスト・ドラゴン／バスターに、リニスは苦い表情を浮かべた。

「さらに手札から≪星屑のきらめき≫を発動！
自分の墓地のドラゴン族シンクロモンスターを選択し、そのモンスターのレベルと同じレベルになる様に、墓地のモンスターを除外する。
私の選択するモンスターは≪スターダスト・ドラゴン≫！
墓地の≪ジャンク・ガードナー≫と≪スピード・ウォリアー≫を除外し、選択したモンスターを特殊召喚！」

星屑のきらめき
通常魔法
自分の墓地に存在するドラゴン族のシンクロモンスター1体を選択して発動する。
そのモンスターのレベルと同じレベルになるように、選択したモンスター以外の自分の墓地に存在するモンスターをゲームから除外し、
選択したモンスターを墓地から特殊召喚する。

次いで、スターダスト／バスターの隣にスターダスト・ドラゴンが飛翔する。
こちらも先の戦闘で負った傷なのだろうか。全身がボロボロに傷ついてしまっている。

けれどスターダスト・ドラゴンもまた、不屈の闘志でその身体を浮かせる。

主人が勝利を望むのならば、僕である自分たちは倒れていられるはずもない。

「バトル！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫でグリーン・バブーンを攻撃！
アサルト・ソニック・バーンッ！」

「くぅううっっ！！」

リニスＬＰ３０００→２６００

森の番人グリーン・バブーンが戦闘破壊され、、余波がリニスを襲う。
なんとか後続のスターダスト・ドラゴンを耐え切ることが出来るが、正直厳しいのが現状だ。

「続けて≪スターダスト・ドラゴン≫でリニスにダイレクトアタックッ！」

「で、ですが私のライフは１００残りますよ！」

「そんなことは百も承知だよ。だから、待ってたんだ。
このカードが来るのを！　手札から速攻魔法≪イージー・チューニング≫を発動！」

「ッ！　そのカードは！」

「自分の墓地のチューナー1体をゲームから除外して発動！
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスターはゲームから除外したチューナーの
攻撃力分、その攻撃力を上昇させる！　私がゲームから除外するのは≪ジャンク・シンクロン≫！」

スターダスト・ドラゴンＡＴＫ２５００→３８００

イージー・チューニング
速攻魔法
自分の墓地に存在するチューナー1体をゲームから除外して発動する。
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体の攻撃力は、発動時にゲームから除外したチューナーの攻撃力分アップする。

フェイトの掲げた魔法カードから光が放たれ、フェイトの場のスターダスト・ドラゴンを強化する。
上昇値は１３００とそれなりに多い。ジャンク・シンクロンから力を貰い、スターダストは力強い咆哮をあげる。

リニスは攻撃力が上昇したスターダスト・ドラゴンを、茫然とした表情で見つめていた。
忘れていた。フェイトの持つシンクロモンスターは、いずれもパワーが低い物ばかり。

故に、その攻撃力を上昇させるカードが投入されていることを忘れていた。
そしてフェイトは、傍らに控える白亜のドラゴンに指示を出す。

「響け、シューティング・ソニック！」

「――――きゃぁあああっ！」

そして、スターダスト・ドラゴンから放たれたブレスがリニスを襲う。

あまりに大きな衝撃波に、思わずリニスは地面に膝を突いた。それほどの衝撃だ。

これはそろそろ、フェイトの先生と言う職業も辞め時なのかもしれないな。リニスは内心でそう思う。

けれど、それに悔いは無かった。フェイトは強くなった。デッキを信じ、カードと互いに信頼し合っている。

ならばもう、自分に教えることは何もないはず。それを思うと、リニスは穏やかに笑えた。

今まで手塩にかけて育ててきたフェイトが巣立っていくのは寂しいが、立派な決闘者になれたと自身を励ます。

「――フェイト。強く、なりましたね」

「リニスのおかげだよ。――――ありがとう、リニス」

「……ふふ。どういたしまして」

リニスＬＰ２６００→０

九話　「リニス、襲来　後編」（後書き）

次回予告

幼いティアナに突きつけられた、唐突の兄の死。
兄が死ぬ間際に残したデッキを胸に、ティアナは兄の意思を継ぐ。
兄が成し遂げられなかった境地――クリアマインドへ至ることを。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「託されたデッキ」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

十話　「託されたデッキ」（前書き）

なんだか今回はイマイチなクオリティかも。
自分的には納得しているけど、読者的にはどうだろう？

そして最後にあの人の登場フラグが立ちました。

十話　「託されたデッキ」

～次元世界　某所～

その日、ティアナはすこぶるご機嫌だった。
テレビの占いでは最高の運勢を叩きだし、珍しく兄がクラッシュする事も無い。

近年稀に見る幸運が、ティアナに降りかかっていたのだ。
それに加え、その日は兄が非番の日。管理局に所属している局員に、休みは少ない。

だと言うのに、それらが偶然とはいえ合わさったのだから、ティアナの機嫌が最高潮に達するのも無理は無い話だった。
大好きな兄と尊敬する同居人に連れられて、ティアナはその日を思う存分遊び倒した。日が暮れるまで、街を駆け回った。

「楽しかったね、お兄ちゃん！」

「そうだね。ティアナが楽しそうでボクもご機嫌だよ」

「えへへ～～」

兄の言葉に、ティアナは嬉しそうに兄と繋いだ手をぶんぶんと振り回す。
ティアナに手を振りまわされる度、ティーダは苦笑しつつもぶんぶ

んと応えてくれた。
そしてその様子を、後ろから眺めるのは同居しているブルーノ。
赤いサングラスで瞳の様子は分からないが、微笑ましい様子を映しているのは違いない。

「ティーダ、折角だ。今日は何処か外で食べよう」

「あ、それ良いですね！
いよっし、今日は豪華に外食と行きますか！」

「わーい！」

ブルーノが気を利かせ、外食するのを勧める。
3人揃って、こうして出かけることが珍しいのだ。思い出作りには丁度いい。

ティーダが賛成の声を上げると、ティアナも嬉しそうに両手を上げる。
そんなティアナをティーダは抱き上げ、ぐるぐると回転。嬉しそうに笑っている。

ティアナも、ティーダも。そしてブルーノも、この時ばかりは笑顔を浮かべていた。
けれど、この3人の笑顔はもう、見ることは出来ない。否、出来なくなってしまった。

――♪♪♪

「ん？」

ティーダやティアナと遊びに出かけた翌日。
ランスター家のリビングでデッキを組んでいたブルーノの耳に、電話の着信音が聞こえた。

チラリ、と視線をリビングの中へと向けてみれば、そこにはティアナの姿は無い。
恐らく何処かへ遊びに出かけているのだろう。時折、ティアナは近所の子供たちと遊んでいる。

ティアナの姿が無いことを確認し、ブルーノは腰掛けていたソファから腰を上げた。
この時間に掛かってくる電話と言えば一体何なのだろうか。疑問に思いながら、ブルーノは電話を取る。

「（そう言えば、ティーダが珍しく財布を忘れていたな。後で届けに行こう）」

ブルーノは電話を取りながら、頭の中では別のことを考えていた。
今朝、ティーダが管理局に出勤する際、珍しく彼は財布を忘れて出かけたのだ。

その財布の中には幼いティアナと取ったツーショット写真が共に入っており、彼はお守りだと言っていた。

そんなものを忘れるなんて、明日は雨なのだろうか。そんな他愛のないことを考えながら、ブルーノは電話に出た。

――――そして、電話の向こうから聞こえてきた声に茫然。

手に持っていた電話の子機を取り落とし、彼は外で遊んでいるティアナの元へ駈け出した。

※

「――――な、んで……？」

茫然とした面持ちで、ティアナは目の前に置いてある四角い箱を見つめた。

その箱は縦に長くなっており、人が一人入れそうなほどの大きさをしている。

それは一般に――棺桶と呼ばれている箱だった。

そして、中に入っているのは彼女の兄――ティーダ。

彼はまるで、眠っているかのような表情で、棺桶の中に納まっている。

目尻に涙を溜めたティアナからは、それはまるで眠っている様に見えた。

けれど、彼の胸は上下していない。心臓の鼓動は止まり、生命活動が停止している。

彼が目を覚まし、ティアナの名を呼ぶことは、もう二度と――無いのだ。

「追跡中の犯人を追いかけているとき、Dホイールの運転を誤ってクラッシュしたようだ。

道端から飛び出してきた子供を避けようとして――――」

「――――～～ッ！」

ティアナが兄の眠る棺桶を見つめているその後ろで、ブルーノはティーダの同僚の局員から事情を聞いていた。

どうやら、彼は何かの事件で犯人を追跡していたのだろう。Dホイールを駆り、犯人にライディング・デュエルを行った。

だが、ライディング・デュエル中に道の端から飛び出してきた子供を避けようとして運転を誤り、クラッシュ。

犯人は逃走。ティーダは打ち所が悪かったのか。頭部から激しい出血を起こし、そのまま帰らぬ人となった。

ティーダの同僚の局員から話を聞いたブルーノは、やりきれない思いで彼のデッキを受け取る。

それはティーダが愛用していたデッキ。ブルーノが愛用するデッキと同じ「TG（テッグーナス）」と呼ばれるデッキだった。

「これは、ティーダのDホイールから発見された最期のデュエルだ。
――ハハッ、アイツすげぇよ。あと少しでアクセルシンクロ、成功させるところだった」

ブルーノは、局員から手渡されたディスクを見つめる。
そのディスクには、彼が言っていたティーダの最期のデュエルが映っているのだろう。

ティーダの同僚の局員はブルーノにそれだけ渡すと、墓地を後にする。
そしてその場に残されたのは、棺桶に納められたティーダ。その様子を見つめるティアナ。

ティーダの棺桶を地中に埋めるための作業員。死者の魂を鎮めるための神父。
――そして、ティーダの上司である管理局の上司だった。

「――航空隊の魔導師としては、あるまじき失態だ」

「状況に混乱し、あまつさえ目標すら取り逃すとは」

彼らは小声で、呟くように会話をしているのだろう。けれど、ブルーノの耳には確かに聞こえた。
そして彼らの声は、ティーダの納まる棺桶を見つめるティアナの耳

にも届いたのだろう。ティアナの方が揺れている。

チラ、と視線を周囲へ向ければ、ティアナとブルーノ。そして先の局員を除く全員が同じ見解だったようだ。

彼らの口々から、ティーダを罵る声が聞こえる。その度に、幼いティアナの方が揺れた。それを見て、ブルーノは思わず声を上げる。

「止めてください」

「ん？」

「此処は死者が眠る場所です。
陰口なら――聞こえないところでやってください」

何も出来ない自分が歯がゆく、ブルーノはグッと拳を握った。

もしも此処で、局員に手を出す様な事態になればティアナの世間体が悪くなる。

本当は今すぐ殴ってでもその不愉快な言葉を取り消させたいが、それは出来なかった。

それに加え、彼らは管理局の上層部の局員たち。彼らがその気になれば、あらぬ噂を流されるかもしれない。

自分なら良い。けれど、幼いティアナには耐えられないだろう。

故に、ブルーノは拳を握る。しかし、その拳を振り上げることはしない。耐えるために、握りしめる。

「――――ふん」

先ほどまでティーダを罵っていた局員たちは興が削がれたのか。
彼らはブルーノを一瞥すると、踵を返して墓地の出口へと足を進める。

そして墓地に彼らの姿が無くなり、ティーダの埋葬が始まる。
数人の作業員たちがスコップを使い、土砂を棺桶に振りかけて行く。

その作業は、ものの三十分ほどで終了した。
そして足早に、作業員と神父は墓地を立ち去る。

残されたのは、ブルーノとティアナ。

「――――ティアナ。帰ろう」

しばし沈黙が続いていたが、それに耐え切れなくなったのか。
ブルーノが兄の墓の前で体育座りをしているティアナに声を掛ける。

しかし、ティアナからの返答は無い。ただ茫然と、兄の眠る墓を見つめている。
そんな様子のティアナを痛まし気に見つめ、ブルーノはチラ、と視線を周囲に向けた。

墓地に当たる太陽の光は、徐々にオレンジ色になっている。そろそろ日が暮れる頃だろう。
そろそろ自宅へ帰宅せねば、この墓地は真っ暗になってしまう。

無理やりティアナを自宅に連れて行くのは気が引けたが、ブルーノは意を決すると。
墓前に座り込んでいるティアナの肩に手を置き、一緒に帰ろうと彼女に告げたのだった。

※

「――――次元犯罪者グループ、か」

先ほどまで読んでいた資料をテーブルの上に乱雑に置き、ブルーノは呟く。
その資料には、ティーダが死の間際にデュエルをしていた犯罪者の資料が記載されていた。

どうやらティーダが取り逃がした犯罪者は、グループで動いている規模の大きな集団らしい。
リーダーなどの風貌は分からないが、デュエルや魔導師としての実力は高いのだろう。そう結論付ける。

「……」

ブルーノは資料を一瞥すると、今度はパソコンにディスクを挿入する。
それは墓前で、ブルーノが手渡されたティーダの最期のデュエルを記憶したディスクだった。

カリカリとディスクを読み込む音が、ランスター家のリビングに響き渡る。
ディスクを読み込み終えるまでの合間に、ブルーノは視線をリビングの中に移した。

リビングの中には、ティアナの姿は無い。兄の急な死と言うことで、心の整理が出来ていないのだろう。
今は彼女の自室で休んでいる。まるで魂が抜けてしまった様なティアナの様子を思い出し、ブルーノは僅かに嘆息した。

「（……どうしたら良いんだろう）」

ティアナを元気づける方法を、ブルーノは知らない。
以前住んでいた世界。否、未来では仲間が死ぬことなど日常茶飯事だった。

故に、この様に落ち着いて心の整理をすると言うことは初めての体験だ。
どんな言葉を掛けて、ティアナを慰めれば良いのか分からない。元

気づければいいのか分からない。
何もできない自分に嫌気が差し、ブルーノはグッと拳を握る。
と、そんなときパソコンのディスクの読み込みが終了したようだ。
モニターに映る、ウィンドウが切り替わる。

『――、のターン！』

「ノイズが酷いな。……よほど、激しくクラッシュしたのか」

ウィンドウに映し出されたのは、ノイズの走っている映像だった。
映っているのはカードを勢いよくドローしたティーダ。生憎と対戦相手は見えない。

『手札から≪ＴＧ　カタパルト・ドラゴン≫を召喚！　そしてカタパルト・ドラゴンの効果発動！
自分の手札からレベル３以下の「ＴＧ」と名のついたチューナー１体を特殊召喚出来る！　来い≪ＴＧジェット・ファルコン≫！』

『チィッ！』

『レベル２≪ＴＧ　カタパルト・ドラゴン≫にレベル３≪ＴＧ　ジェット・ファルコン≫をチューニング！
リミッター解放、レベル５！　ブースターランチ、ＯＫ！　インクリネイション、ＯＫ！
グランドサポート、オールクリアー！　ＧＯ、シンクロ召喚！

カモン、≪ＴＧ　ワンダー・マジシャン≫！』

合計３つの緑色のリングを潜り、可愛らしい女性型のモンスターがティーダの場に召喚される。
これこそがティーダ、並びにブルーノの所持するシンクロチューナー「ＴＧ　ワンダー・マジシャン」である。

ティーダの場にはワンダー・マジシャンのほかに、パワー・グラディィエイターと呼ばれるモンスターが存在している。
対して、対戦相手の場にはモンスターが１体だけ。状況は圧倒的にティーダが有利に進めていた。

『行ける！　これなら……！　レベル５≪ＴＧ　パワー・グラディエイター≫に
　レベル５シンクロチューナー≪ＴＧ　ワンダー・マジシャン≫をチューニングッ！』

『ッ！　バカな！　シンクロモンスター同士でのシンクロ召喚だと！？』

『リミッター解放、レベル１０！　メイン・バスブースター・コントロール、オールクリアー！
　無限の力、今ここに解き放ち、次元の彼方へ――――――！？』

ティーダの場のワンダー・マジシャンが５つの緑色のリングへと姿を変える。
その中心をＤホイールに乗ったティーダとパワー・グラディエイタ

ーが突き進んだ。

映像からだけでは分からないが、恐らく、ティーダはクリアマインドに至ったと確信したのだろう。

故に、このタイミングでギャンブルとも言えるアクセルシンクロに手を出した。しかし、その口上も途中で止まる。

「（確か、此処で子供が飛び出してきたと言っていたな）」

瞬間、スピーカーから聞こえてきたのは耳を覆いたくなる様なクラッシュ音。

Dホイールからティーダが投げ出され、彼は地面に衝突。バウンドしながら地面を転がる。

一方、その様子を克明に記録していたDホイールは、スピンしながらも周囲の映像を記録していた。

茫然とした様子で、地面に衝突したティーダを見つめている幼い少年。そして驚愕に目を見開いていた犯人。

「（アレは……≪ロングバレル・オーガ？≫）」

僅かに映った犯人の映像。

犯人と共に映っていたモンスターは、見慣れぬモンスターだった。

だが、あの特徴的なロングバレルは目立つ。

マイナーなカードだが、ブルーノはすぐに思い出すことが出来た。

なるほど。ロングバレル・オーガは守備力が３０００とかなり厄介な壁モンスターだ。
それに加え、相手の場の攻撃力の１番高いモンスターを破壊し、そのモンスターの攻撃力の半分を相手に与える効果を持っている。

この効果は１ターンに２度まで発動できるのだ。
そんな強敵を相手に、ティーダは優位に闘い、後一歩のところまで追い詰めた。

「――――ティーダ」

プツリと映像を切り、ブルーノは両手で顔を覆う。
こちらの世界にやって来て、初めて出来た友人を失ったのだ。そのショックは計り知れない。

確かにティーダの友人であると言う局員の言うとおり、ティーダは後少しでアクセルシンクロを成功させるところだった。
しかし、失敗してしまった。様々な不幸が、重なってしまったのだろう。犯人に出会わなければ。管理局に出勤しなければ。

そんな後悔が、ブルーノの脳裏を占める。

「……ティアナのことは、任せてくれ。
やれることは少ないだろうけど、惜しみない援助をするつもりだ」

そして暫し後悔に浸り、ブルーノは現実へと意識を向けた。
このまま、後悔し続けても何も変わりはしない。ならば、未来へ意識を向けなければ。

なんとか気を持ち直したブルーノは、ひとまずティアナのことは任せろとこの場に居ない友人に告げる。
幼いティアナを、1人にさせる訳にいかなかった。親類に預けると言うことも考えたが、その考えはすぐに却下される。

今のティアナは、自分の気持ちの整理を着けるのに必死なのだろう。
そんな時にもはや他人と言える親類と暮らせと言われ、戸惑わない方がおかしい。

ならば自分と暮らすべきだろうか。考えるが、その案も微妙だとブルーノは渋い表情を浮かべる。
今までティアナは、自分とティーダと3人で暮らしてきたのだ。それが唐突に2人に減ってしまった。

ほんの些細な出来事から、3人で暮らしていた頃の記憶を思い出すかもしれない。
悲しみに打ちひしがれ、泣きじゃくってしまうかもしれない。そんなティアナを見るのはイヤだった。

「しばらくは、ティアナと一緒に暮らしてみるよ。
大変だろうけど……前を向いて歩いて欲しいからね」

だからブルーノは決心する。ティアナが泣くのはイヤだ。
ならば、自分がティアナと共に暮らし、ティアナの心を癒してやる

べきだと。

兄を失ったと言う傷は深いかもしれない。しかし、傷はいつか癒えるものだ。

ならば傷が少しでも早く癒える様に、ブルーノは最大限の助力をする。

それがブルーノに出来る、ティーダに対する最高の恩返しだと思った。

そして腰掛けていたソファから、ブルーノは腰を上げる。向かう先はティアナの部屋。

これからのことについて、色々と考えなければならないことがあるからだ。

※

「っ！」

真っ暗なティアナの私室。中の様子に、ブルーノは思わず息を呑んだ。

部屋の中は、まるで物盗りにあったかの様に物が散乱しており、足の踏み場が無い。

恐らく、兄が死んだことを受け止められないティアナがやったのだろう。

件の彼女と言えば、部屋の隅で毛布に包まっている。泣いているのか。肩が小刻みに震えていた。

「……ティアナ」

投げ捨てられたティアナの私物を壊さない様に注意しながら、ブルーノは部屋の中に足を進める。

そして近づくにつれ、ティアナの様子が明らかになった。彼女は一旦ブルーノに視線を向けると、毛布に顔を押しあてる。

僅かな間とは言え伺うことが出来たティアナの顔は、泣き腫らしたのか。目が真っ赤になっていた。

それに加え、大好きな兄の死が彼女を憔悴させている。このままでは、ティアナの身体に悪影響が出るだろう。

何もできない自分がイヤになりつつも、ブルーノは懸命にティアナに声を掛ける。

まずはこの部屋を出て、顔を洗ってご飯を食べよう。それからだ。

先の話をするのは。

「ティア「ねぇ、ブルーノ……」！　……どうしたんだ」

と、ブルーノがティアナに声を掛けると、彼女がブルーノの言葉を遮った。
まさか言葉を遮られるとは思わず、ブルーノは思わずたじろいでしまう。だが、すぐに気を取り直した。

「お兄ちゃんは、ホントに……アクセルシンクロ、成功……させたの……？」

「……ティーダは……出来た、はずなんだ」

魂の抜け殻の様なティアナに心痛めながら、ブルーノは応える。
下手に此処で出来たと言ってしまえば、ティアナの大切な部分が壊れるかもしれない。そんな予感を伴って。

故に、ブルーノは包み隠さず。正直に答えた。確かにティーダは、アクセルシンクロを成功させられたはず。
しかし、予想外のアクシデントでアクセルシンクロは失敗。そのまま帰らぬ人となった。

「――――っ」

それを告げると、ティアナが息を呑む音が室内に響く。
やはり、兄を失ったティアナにこれを教えるのは酷だっただろうか。

だが、そう思ったのも束の間。ブルーノの耳に、ある音が聞こえて

きた。
それは何かを堪える様なティアナの声。真っ暗な部屋の中でも何を堪えているのか、ブルーノにも分かる。
――涙だ。

「っく……！　なら、なんであんな酷いことを言うの!?
お兄ちゃんはアクセルシンクロを成功させられたんでしょ!?
世界で三人目のアクセルシンクロを成功させようとしたんでしょ!?
なのに、なんであんな酷いことを言うのッ!?」

「ティアナ……」

涙をボロボロと垂れ流しながら、ティアナはブルーノに掴みかかる。
彼女の言う酷いこととは、墓前で聞いたティーダの上司の暴言だろう。

その言葉に。兄を罵倒するその言葉に、彼女は心を痛めている。
そんな彼女の様子がとても痛ましく、ブルーノは咄嗟に彼女を抱き締めた。

ちょっと力を入れれば、簡単に折れてしまいそうな華奢な身体。
それがどうしようもなく愛おしくなり、ブルーノは彼女の身体を抱き締める。

「お兄ちゃんは出来たのに、なんで……なんで……」

徐々に小さくなっていくティアナの叫び。
そして今まで暴れまわり、彼女の心と体も疲れていたのだろう。
ゆっくりと、彼女の瞼が降りて行った。

※

「……ふぅ。やはり、上手くいくはずもないか」

ティアナの自室を出て、ブルーノは一人呟く。
本当はもっと上手にティアナを慰めてあげたかった。
しかし、自分にその様な経験は皆無。仕方なく、ティアナが眠るまで抱き締め続けた。
彼のその行動に安心したのか。ティアナは先ほど静かに眠りについたのだ。
先ほどの彼女の寝顔は、涙を流しつつも。何処か安らかに見えた。

「けど、ティアナが前を向く意思を見せた。
なら、ボクはボクで出来ることをするだけだ」

ティアナが眠りに落ちる間際、彼女が呟いた言葉を思い出し、ブルーノは嬉しく思う。
動機はどうであれ、ティアナが前を向く意思を示したのだ。兄の死を、必死に乗り越えようとしている。

ならば、自分に出来ることと言えばティアナがその目的を達成できるようにすること。
その目標――自分がティーダの代わりにアクセルシンクロを成功させ、ティーダの偉業を認めさせると言うこと。

ティアナはまだ、デュエルモンスターズを詳しく知らない。
まずは基本的な知識を教えるのが優先だろう。やるべきことは沢山ある。

ひとまず現状は、ティアナの心身の状態を整え、健やかな生活を送ることが目標だろう。
その後はティアナがデュエルモンスターズを覚えられるように、デュエルモンスターズの学校に通わせる。

そうすることで一歩一歩。確実に前に進んで行けるのだから。
さぁ、そうと決まれば話は早い。ティアナが目を覚ましたときに備えて、美味しいご飯を作ろう。

ブルーノは自らにそう言い聞かせると、廊下からキッチンへと足を向けた。

ティーダが追跡していた犯人。彼について、現状では情報が限りなく少ない。
しかし、分かっていることは少なからずあった。まず、その犯人の所属する犯罪集団。

彼らは人身売買や違法研究など、様々な分野において勢力を伸ばしているらしい。
今はまだ小さな組織だが、行く行くは大規模な組織になるのでは。
そう危惧する局員も多い。

そしてその犯人に付いて分かっていることは、たった二つだけだ。
一つ目は使うデュエルモンスターズの種類。彼はガトリング・オーガやロングバレル・オーガなどのバーンモンスターを使用する。

そして最後に二つ目。それは彼の名前だった。
それが偽名なのか本名なのか。それは誰にも分かっていない。

しかし、一つだけ彼に付けられた名前があった。
――――ロットンと言う、名前だ。

十話　「託されたデッキ」（後書き）

次回予告

何度もアクセルシンクロの練習をするが、
依然としてクリアマインドに到達出来ないフェイト。

スピードの世界にどうやって到達しようかと、フェイトは頭を悩ませる。
そんな折、彼女はあることを思い付いた。もっと早く飛べば、スピードの世界に到達できるのでは？と。

そして彼女は即実行する。極限まで装甲を薄くし、速さを追い求めた形態。
――――ソニックフォームを。だが、これが彼女にある悲劇をもたらす。

一方。フェイトと再び接触を図ろうとする遊星達。
なんとかミッドチルダへ到着するが、何処にもフェイトの姿は無く
――

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ソニックフォーム」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

十一話　「ソニックフォーム」（前書き）

今回で一旦、ほのぼのは終了。
次回からはシリアス編に突入します。

十一話　「ソニックフォーム」

～時の庭園　某所～

なのはたちの暮らす地球とは別の次元に存在する時の庭園。
そこに、なのはやフェイト。そして鬼柳やプレシア達が居た。

彼らは思い思いの場所で、デュエルや読書。時の庭園の風景を眺めたりしている。
しかし、そんな彼らの中で1人だけ、別の行動を取っている者が居た。

金色のツインテールをぴこぴこと揺らし、羽織ったマントがひらひらと揺れている。
それは1人の少女。この時の庭園の主――プレシア・テスタロッサの愛娘。フェイト・テスタロッサだ。

「んにゅぅうううう～～～～っっ！！」

彼女は凄まじい速度で、時の庭園の内部を飛翔している。
真正面からぶつかる風が凄まじく、まともに目を見開くことすら出来ない。

だが、それでいて彼女の飛翔する速度は落ちることは無かった。
逆に彼女の飛翔する速度が上がり、さらに不明瞭な悲鳴が彼女の口から漏れる。

何故、彼女があれほどの速度で時の庭園を疾走しているのか。
それは彼女が目指す新たな戦術――クリアマインドが関係していた。

「あ、あくせ……！
あくせ、あく……！　――――あばばばばば！」

何度もフェイトはアクセルシンクロに挑戦しようとするが、彼女の口から漏れるのは意味の分からない単語。
どうやらフェイト的に、「アクセルシンクロ」と叫ぼうとしている様だ。

だが、風の抵抗が凄まじく、まともな言葉を発音できない。
ついには気力が途切れてしまったのか。ひゅーんと言う間抜けな音を立てて、彼女は原っぱに不時着した。

「フェイトちゃん。大丈夫？」

「うきゅぅ～～……」

「ダメだね、こりゃ」

原っぱに不時着したフェイトの元へ、なのはやアルフが集まってくる。
くるくると目を回している彼女は可愛らしいのだが、そろそろ見飽きてきたのも事実。

そろそろ休憩にしよー、と言うなのはの掛け声が響き渡り、鬼柳達がその場に集まってきた。
どうやら鬼柳とプレシアはお互いにデュエルをしていたらしく、ぶつぶつと何事か考えている。

最近では鬼柳の使用するインフェルニティの攻略法が見えてきた様で、プレシアは彼に善戦していた。
しかし、インフェルニティが全力で回ると手がつけられなくなるのも事実。相変わらず考えることはある様だ。

「あらあら。こんなに顔を泥だらけにして」

「女の子の顔じゃありませんよ」

原っぱの上で目を回しているフェイトの顔を覗き込み、プレシアとリニスが一言。
実際、彼女の顔にはあちこちに泥が付着しており、年頃の少女の顔にしては汚れていた。

鬼柳もプレシアやリニスの言葉に同意なのか。僅かに笑みを浮かべると、コートのポケットに手を伸ばす。
中から取り出したのは地球で購入したウェットティッシュ。それを一枚取り出し、フェイトの顔に付いた泥を拭う。

「相変わらず、お父さんみたいなことやってるんだね。鬼柳は」

「父親、か……。案外、悪くないかもしれないな」

フェイトの顔の泥を拭っている鬼柳を眺めながら、アルフがポツリと呟く。

彼女の世話をしている鬼柳の表情は優しく、まるでフェイトの父親の様に見えた。

咄嗟に否定するかな、とも思ったのだが、予想に反して鬼柳は満足げ。

それが気に入らないのか。なのはが彼の後ろで頬をプクリと膨らませた。

「あら。じゃあ、私と一緒になる？　歓迎よー？」

「観察結果その1。プレシアはまだまだ女性として現役」

まるで家族の様な鬼柳フェイト。そしてアルフの様子を見守っていたプレシアが不意に訊ねる。

悪戯を思い付いた悪ガキの様な表情を浮かべ、ウィンクを行いながら鬼柳を誘惑。

だが、それに鬼柳が答えるよりもさきにリニスが相槌を打った。

予想外の彼女の発言に、プレシアは頬を真っ赤に染める。

「って！　なにを観察しているのよ！？」

「プレシアの鬼柳氏への好感度調査です。
プレシアも鬼柳氏に少なからず好意を抱いている様なのでリサーチ中です」

キラン、と瞳を輝かせながら、リニスはプレシアに言い放つ。
先日の一件で、プレシアが鬼柳に少なからず好意を抱いているのは確認していた。

だが、果たしてそれが恋愛に関する好意なのか。友人に対する好意なのか。
それが判別できず、リニスはこうして調査を行っている訳だ。

そしてもしもこの調査で、プレシアが鬼柳に恋愛に関する好意を持っていると知れれば不味いことになる。
母親と使い魔。二人がフェイトの壁として立ちはだかるのだ。その双璧を打ち崩すのには、多大な知恵と労力が必要だろう。

「えぇ！？　ぷ、プレシアさんまで参戦するの！？
こ、これはかなり苦しい闘いを強いられることになりそう……！」

「あのねぇ……」

リニスの告げた観察結果を聞いたなのはが、驚愕の表情を浮かべてプレシアを見る。
現状、リインフォースやアルフと言う対抗馬が居るのに、これ以上増えるのは勘弁願いたい。

だが、一方のプレシアと言えば困った様な表情を浮かべ、草の上に寝転がるフェイトの頭を撫でる。
フェイトの頭を撫でるプレシアの手つきは優しく、彼女を労わる様に。ゆっくりと動いていた。

「たしかに私は鬼柳のことは好きだけれど、あくまで友人としてよ。
この年のおばさんが若い男性に言い寄っても、相手に迷惑に思われるだけでしょう？」

やはり鬼柳ほどの男性ならば、自分の様な年齢を重ねた女性よりも。もう少し若い女性の方が好みなのかもしれない。それに、好きの意味も違う。

なのはやフェイトの鬼柳に向ける好きは異性に向けるもの。
しかし、プレシアの鬼柳に向ける好意は友人に対するものなのだ。

故に、プレシアはこの場の雰囲気を流そうと、苦笑いを浮かべながら口にする。
だが、それがアルフの琴線に引っ掛かってしまったようだ。ジロリとした視線を向けられる。

「……プレシア。今、全国のおばさんたちに喧嘩売ったよ」

「えぇッ！？」

「アンタ、どんな外見してると思ってるんだい！
一児の娘持ちなのにその肌とツヤ、アンタ世の女連中に喧嘩売っ

てるんだろ!?」

「え？　いや、その……」

「それにこの胸！　こんなデカイのぶら下げてて、迷惑だぁ!?
ふざけるんじゃないよ！」

「あ、アルフさんが暴走した……！」

プレシアの言葉に、アルフの心の何処かがプツリと音を立てて切れた。
うがーっと雄叫びを上げながら、アルフはジロジロとプレシアの身体を観察する。

見た目二十代後半から三十代ほどだが、それを感じさせない肌の若さを感じる。
それに加え、プロポーションも悪くは無い。否、この年齢にしては良い方だと思う。

それなのに、言い寄られても迷惑だと思っているのだから性質が悪い。
自分だってプレシアほどのプロポーションになれるか不安なのに。
アルフの不満が爆発する。

「ふぅむ。アルフも自分の身体に不満を持っている様ですね。
今度からご飯の度に牛乳を用意しましょうか……」

「……」

「……モテモテですね」

「!?　な!」

そしてアルフの暴走を視界に捉えながら、冷静に判断するのはリニス。

どうやら今後、アルフの飲み物は牛乳に固定される様だ。リニスがメモを取っている。

そして、彼女の後ろで頬を赤く染めているのは鬼柳だ。

前半は自分に対する好意について。後半は女性らしい自分の身体についての話題。

意識するなと言う方が無理だろう。前半の会話で鬼柳は頬を赤く染め。

後半の会話で彼は居心地が悪そうにしている。なんとかこの話題が終わって欲しい。切にそう思う。

「ときに鬼柳氏。貴方は巨乳と貧乳どちら派ですか?」

「な、なんでそこで巨乳や貧乳が関係してくるんだ!?」

「いえ。今後の参考のために」

だが、そうは問屋が卸さんとばかりにリニスがずずいと顔を近づける。

彼女から訊ねられた質問の内容に、鬼柳の頬は先ほどよりも赤くなった。

ただでさえ、女性の前でこの様な猥談はしたことが無いと言うのに、知り合いの前で。

こんなことをさせられれば、大抵の男性は顔を赤くするだろう。鬼柳とてその一人だった。

そしてリニスが鬼柳を問い詰めようとしていると。不意に一人の少女がリニスの元へ歩み寄る。

その少女とは、先ほどまで鬼柳の後ろでフェイトの様子を観察していたなのは。不意にリニスと鬼柳の会話に混ざる。

「そ、そう言えば鬼柳さん。最近一緒に寝てくれなくなったの」

「ほうほう。と言うことは貧乳に脈ありですかね」

「あ、でもアルフさんとも仲良しさんだよ。良く一緒にお出かけするし」

「アルフの胸も中々の大きさですしね。巨乳に一票。……どう言うことですか鬼柳さん！

巨乳派なのか貧乳派なのかハッキリしてください！」

「ハッキリするの！」

「なんでなのはまで参加してるんだ！？」

謂れのない非難を浴び、鬼柳は目を丸くする。
しかし、それでなのはとリニスの追及が弱まる訳ではない。

助けを求めようとプレシアとアルフに視線を向けるが、相変わらずアルフがプレシアを問い詰めている。
他のメンバーに助けを求めようと視線を動かすが、現在時の庭園にいるのはテスタロッサ家のメンバーとなのは、鬼柳のみ。

シグナムやヴィータ、シャマルの援護は期待できない。せめてフェイトが復活してくれれば。
そんなことを願いつつ、鬼柳はフェイトに視線を向けるのだが彼女は依然として目を覚ます様子を見せない。

結局、フェイトが起きたのは今から三十分後のことだった。

※

「ふぅむ……」

わざとらしくため息を吐きながら、フェイトはその細い腕を組んだ。
彼女の視線の先に置いてあるものは、バラバラに解体された彼女の

デッキ。

新しくデッキを組み直してから試行錯誤を繰り返し、ようやくフォーミュラ・シンクロンを召喚できるようになった。
これで残るはアクセルシンクロを成功させるのみ。だと言うのに、肝心のアクセルシンクロが成功できない。

やはり問題はデッキよりも、自分の心の持ちようなのかもしれないと、フェイトは僅かに思う。
そしてデッキに問題点が無いことを確かめると、彼女はバラバラに解体していたデッキを1つに纏めた。

「やっぱり、鍵はスピードの世界……かな」

異世界、ミッドチルダ。そこで出会った青年――ティーダの言葉を思い出しながら呟く。
クリアマインドに至るためには、スピードの世界へと至らなければならないらしい。

だが、肝心のスピードの世界がどう言うものなのか。フェイトには想像もつかなかった。
故にフェイトはまずはスピードの世界を知覚しようと、自身の出せる最高速度で空を駆る。

「風の抵抗を打ち消す魔法は、要らないだろうし……」

だが、何度空を駆けてもスピードの世界を知覚することは出来なかった。
一体何がいけなかったのだろうか。フェイトは反省をすると共に、ある仮説を打ち立てる。

それは、風の抵抗を打ち消す魔法がスピードの世界を知覚するのを邪魔しているのでは、と言う仮説だ。
飛行魔法で空を飛べば、どうしても風に阻まれ満足に息を吸うことや、視界を確保することが出来なくなる。

だが、それを逆に可能とするのが風の抵抗を打ち消す魔法だ。これがあれば、飛行中に息を吸うことや視界の確保も楽になる。
しかし、それでは身を切る様な速さのスピードを体感できない。そう感じたフェイトは、風の抵抗を打ち消す魔法の使用を中断したのだ。

なので現在、フェイトの身体には数多の擦り傷が出来ていた。風の刃によって作られたかすり傷。
1つ1つはさほど痛くは無いのだが、複数もあると痛みも増す。ズキズキと、身体中が痛みを発していた。

しかし、フェイトはアクセルシンクロの練習を止めようとはしない。絶対に遊星に追いつき、彼に認めてもらうと。そう願ってやまないのだから。

「ったく。こんなに沢山擦り傷作りやがって」

「うわ！」

と、フェイトが内心で決意を新たにしていると。
彼女の背後から聞き慣れた声が聞こえた。慌てて後ろを振り返る。
するとそこには、呆れた様な表情で彼女を見下ろす男性――鬼柳の姿が。
彼の手には消毒液の入ったボトルと絆創膏が握られている。

大方、フェイトの身体に出来た擦り傷の手当てに来たのだろう。
それを思うと、フェイトは思わず頬を緩めてしまう。身体の痛みも気にならない。

「こっちに来いよ。手当てしてやるぜ」

「うん！」

鬼柳はフェイトから少し離れた地面に腰を下ろすと、おいでおいでと手を振る。
それにフェイトはコクリと首を縦に振ると、トテテと彼の元へ駈け出した。

そして勢いよく、彼の膝の上に飛び乗る。鬼柳の膝の上はフェイトの指定席だ。
暖かな鬼柳の身体に包まれ、フェイトは嬉しげに目を細める。やはり、鬼柳の膝の上は居心地が良い。

まるで包み込んでくれる様な。そんな暖かさに満ちている。
もしも父親が居るのならば、きっとこんな感じなのだろうな。フェ

イトはそう思う。

「沁みるぞ」

「あぅ！　い、痛いよぉ～……」

「我慢だ」

「ひぇえ～～……」

そして適度に彼の膝の上を楽しむと、消毒液がフェイトの傷口に降りかかる。
丁度、消毒液が降りかかった場所は傷が出来たばかりだったのか。
ジンジンと痛んだ。

上目遣いで優しくしてくれる様に頼むが、鬼柳はそんなフェイトの頼みをスルーする。
どうやら手早くフェイトの傷の手当てを行うようだ。優しくされなくて、フェイトはちょっとしょんぼりする。

そしてフェイトは沁みる傷口から意識を逸らそうと、きょきょろと視線を周囲に向けた。
彼女たちが居るのは、時の庭園にある宮殿の様な建物の中。その玉座の様な場所に鬼柳達は居た。

「ふんふんふんふんふんふんふんふんっっ！！」

「なっ！　デン○シーロールを習得したと言うの！？」

「そして止めの波導拳！」

「ぐはぁっ！」

ちなみに彼女たちのすぐそばでは、アルフがプレシアに殴りかかっていたり。

「この体勢を十秒間維持してください」

「う、うなぁあああ！！」

「悲鳴を上げていても始まりませんよ！
目指せ巨乳！です！」

なのはとリニスが一緒に豊胸体操を行っていたりする。
あの体操、やったら胸が大きくなるのかな。フェイトは疑問に思った。

「っと。これで終わりだ」

「あ、ありがとう。鬼柳」

「ん」

と、周りの様子を観察していると、いつの間にか手当てが終わった様だ。
視線を自分の腕や両足に視線を向けてみれば、幾つもの絆創膏の姿が視界に入る。

こんなにも沢山の傷を文句も言わずに手当てしてくれて。
それがなんだか嬉しくて、フェイトは笑みを浮かべてお礼を言う。

「あんまり無理するなよ。
大怪我して苦しむお前なんて、見たくないからな」

「えへへ。気を付けるよ」

すると、ぽふぽふと鬼柳がフェイトの頭に手を乗せた。
そしてそのまま、グリグリと乱暴に撫で回される。

当初は目を回していたフェイトだったが、最近では目を回さないようになってきた。
せっかく鬼柳が本音を出してくれているのだ。それを聞き逃すのはもったいないと言うもの。

そしてフェイトは鬼柳の胸に背中を預けると、しばしぼぅっと周囲に視線を向けてみる。
地球に来るまでは見慣れていた場所のはずなのに、鬼柳の膝の上から見た玉座の様な場所は一味違って見えた。

「んふぅ」

鬼柳の膝の感触に満足すると、フェイトはぶらぶらと足を揺らす。
その度に自分の頭に乗っている鬼柳の手も動き、まるで撫でてもらっている様な感覚を覚える。

それがなんだか嬉しくて、フェイトはぶらぶらと足を動かすのだった。
こうして、誰かの膝の上に乗ると言うのはとても気分が良い。思わず鼻歌を歌いたくなる。

「そう言えば最近、シャマルとのデュエルで勝率が上がってきたみたいだね」

「ん？　あぁ。新しいインフェルニティのカードを入れたからな」

上機嫌な様子で鬼柳の膝の感触を楽しんでいると、不意にフェイトが鬼柳に訊ねた。
その内容とは最近、鬼柳がシャマルとのデュエルに勝利する確立が上がったと言うもの。

現段階で、暫定的に最強を名乗っているのは他でもないシャマルなのだ。
そんな彼女を相手に、勝利を収めるのは中々に大変な作業と言えるだろう。

しかし、鬼柳とて決闘者の端くれ。何時までも負けっぱなしは性に

合わない。
故に彼はデッキを改造し、シャマルに勝利するためのカードを投入し、彼女から勝利を収めたのだ。

これにより、シャマルとデュエルした際の将率は6割を超えている。
残るはザフィーラの除外軸のデッキのみ。どの様に攻略しようか腕が鳴る。

「むぅ。鬼柳に追いつくのはまだまだかな」

と、ザフィーラとのデュエルに想いを馳せている鬼柳を見て、フェイトは面白くなさそうに鼻を鳴らす。
今は自分が彼の膝の上に乗っているのだ。自分のことをもっと見て、構って欲しいと言うのは傲慢なのだろうか。

だからなんとか彼の意識を自分に向けようと、フェイトは自信なさげに呟く。
たまにはデュエル以外のことにも目を向けて欲しい。自分のことも見て欲しい。

そんなことを思いながら、拗ねたように呟く。
すると、ぽふんと彼女の頭の上に鬼柳の手が乗せられた。

わしゃわしゃと乱暴に撫でられる。

「ゆっくり追いついてこい。俺は逃げないで待ってるぜ」

「――――えへ」

そして鬼柳に構ってもらえていると理解すると、フェイトの頬は緩んでしまう。
妹の様な扱いは不満が残るけれど、こうして一人の人間――女の子として扱ってもらうのは嬉しい。

自分はクローンだけど、それ以前に一人の女の子なのだ。
だから好きな人に構ってもらえれば嬉しいし、構ってもらえなければ寂しい。

「っと」

ぴょんっ、とフェイトは、鬼柳の膝の上から飛び出した。
そしてその場でクルリと一回転。鬼柳の顔を真正面から見つめる。

さらさらとした薄水色の髪に、顔の右側に施された黄色いマーカーが目を引く。
今は自分と鬼柳の二人きり。ならば存分に鬼柳に構ってもらう。

そう決心したフェイトは、ここ数日の間に考えついたある物を披露することにした。
それは、新たなデザインのバリアジャケット。限界まで空気抵抗を少なくし、速さを追い求めた姿。

「そう言えば鬼柳。新しいバリアジャケットを思い付いたんだ」

「新しいバリアジャケット？」

「うん。スピードの世界を体感するには、もっと速さが必要だと思ったから」

「待っててね」と一言告げ、フェイトはポケットの中から待機状態のデバイスを取り出す。

そして待機状態のデバイスを起動。左腕にデュエルディスクが展開され、バリアジャケットが展開される。

現在の彼女のバリアジャケットは、鬼柳の要望により変更されたものだった。

出来る限り露出を控え、なお且つデザインのセンスが悪く無い物。

黒い長ズボン。白いシャツに、その上に羽織られている黒いジャケット。

以前までのバリアジャケットの流れを取り込んだデザインのバリアジャケットだった。

そして彼女は、デュエルディスクと化したデバイスを操作する。

一応、鎌の様な形態もあるのだが、この形態が一番フェイトは操作しやすい。

若干、デバイス――バルディッシュが落ち込んでいた様だが、フェイトには関係が無かった。

「どう、かな……？」

「どうって……」

そしてデュエルディスクの操作を終え、バリアジャケットのデザインが変わる。
先ほどまで羽織っていた黒いジャケットが消え、上半身は白いシャツのみ。

羽織っていたマントすら消え、穿いていた長ズボンも半ズボンへと変更された。
先ほどまでとは違う。若干露出の増えたバリアジャケットに、鬼柳は思わず口ごもる。

「……まぁ、良いんじゃないか？　似合ってると思うぜ」

「ホント！？　えへへ、嬉しいな」

けれど、鬼柳の口から飛び出したのは似合っていると言う言葉。
恐らく彼は、半ズボンほどの露出ならばさほど大胆だとは思わないのだろう。

半ズボンくらい、世の女性だって穿いている。鬼柳はそう、自身に納得させる。
だが、ちらちらとどうしても視線が彼女の足に向いてしまった。柔らかそうなその太股。

それに加え、半ズボンに変更したついでに新たに追加したのか。黒

いニーソックスを穿いている。
それが以前のバリアジャケットを思い出し、鬼柳の頬は赤く染まっていた。ニーソックスとズボンの間の素肌が眩しい。

「ソニックフォームって言うんだ。でも、欠点があるんだよね。極限まで装甲を薄くしちゃったから、防御力が凄く弱いんだ」

「って、おいおい。大丈夫なのかよ」

「大丈夫だよ。安全運転で飛ぶから」

「高速で飛ぶことを目的としているのに、安全運転なんて出来るのかよ」

と、鬼柳がフェイトのズボンとニーソックスの間にできた絶対領域に目を奪われていると。
フェイトは憮然とした表情で、自身の見に付けている白いシャツを伸ばしながら呟いた。

彼女のその言葉に、鬼柳は思わず心配になる。極限まで装甲を薄くしたとは、思いきったことをした。
どの程度薄くしたのかは分からないが、下手に事故を起こせば死んでしまうかもしれない。

それどころか、些細な接触で怪我をしてしまうレベルかもしれない。
それを思うと鬼柳は心配になる。
ここまで過保護だったかと内心で思うが、心配なものは心配だ。フェイトが苦しそうな表情を浮かべるなど見たくない。

否、フェイトだけではない。なのはやはやて。アルフにプレシアなど、身近な人たちの苦しむ姿を、鬼柳は見たくなかった。

「あんま、危ないことはするなよ。怪我なんてして欲しくないからな」

「気をつけまーす」

「ったく」

だからせめて、念には念をと注意を促す。しかし、フェイトから返ってきたのはニコニコ笑顔。

どうやら、それほど自分の魔法操作に自信があるらしい。これに関しては、鬼柳は何も言えなかった。

基本的に、鬼柳は魔法に関しては門外漢なのだから仕方ない。せめて彼女が怪我をしないことを祈りつつ、鬼柳は地面から腰を上げた。

けれど、鬼柳のこの願いは叶えられることは無かった。

※

「ここが次元世界、ミッドチルダか」

転送ポートから降り、ミッドチルダの街並みを見て一言。
それが彼――ジャック・アトラスの次元世界での初の言葉だった。

ジャックはキョロキョロと、興味深そうに周囲の街並みを見て回る。
だが、その様子は田舎から都会へ出てきた田舎者の様に見えた。だが、ジャックは気づいていない。

「凄いな。ここまで科学技術が発達しているとは……」

「あぁ。俺たちの世界の科学技術も、あとどれほど掛かればこの世界に追い付くのか……」

そんなジャックの背後から、聞き慣れた声が聞こえた。
声の主は彼の生涯のライバルにして親友――不動　遊星のもの。

彼もまた、興味深そうにミッドチルダの街並みを観察している。

遊星は科学者としての好奇心からか。とりわけこの世界の科学技術に興味を持っていた。

「ひっひ。そう言ってもらえるならば、連れてきた甲斐があると言うものです」

「あぁ、感謝するイェーガー。異世界は初めての体験だからな」

そして最後に登場するのは、彼らをこの世界に連れてきた張本人であるイェーガー。
彼は普段の市長服に身を包んでいる。遊星はそんな彼に感謝の言葉を掛けながら、街の様子に目を離せないで居た。

「ですが不動　遊星。そしてジャック・アトラス。
貴方達は観光にこの街にやってきたのではないでしょう？」

「あぁ、そうだったな。すまない、街の様子に目を奪われていた」

「まぁ、それも仕方のないことでしょうけれどね。
私も実際、この街並みに目を奪われていますから」

と、イェーガーは街並みに目を奪われている2人に注意を促す。
そう。今回彼らは、この街に観光にやってきたわけではないのだ。

今回の目的は彼らがとある空間で出会った2人の少女。
高町　なのはとフェイト・テスタロッサに出会うことが目的なのだ。

「だが、どうやって高町を探すのだ？
これほど巨大な街で見つかるとは思えないが」

「まずは時空管理局に行ってみましょう。
時空管理局ならば住人についてのデータベースもあるでしょうから」

ジャックの言葉に、イェーガーは答える。
実際、時空管理局ならば簡単に見つかるだろう。

誰が何処に住んでいるのか。それはデータベースで管理されている。
そう簡単に見せてもらえるとは思えないが、それでも訊ねてみる価値はある。

「だが、そうも簡単にデータベースを閲覧させて貰えるものなのか？
個人情報はそう簡単に見せてもらえるとは思えない」

「難しいでしょうねぇ。ですが、伝手があるんですよ」

「伝手だって？」

当然それを疑問に思った遊星がイェーガーに訊ねる。
だが、イェーガーにはミッドチルダを掌握する時空管理局に伝手があった。

それは彼がこの世界――ミッドチルダを認知するのに一役買った少年。

あの少年は、あれからどれほどの成長を遂げたのだろうか。疑問に思いながら、彼はその名前を口にする。

「クロノ・ハラオウン執務官。時空管理局の若きエースですよ」

十一話　「ソニックフォーム」（後書き）

ソニックフォームを纏い、アクセルシンクロを練習するフェイト。
だが、高速移動中に彼女は不意に意識を失ってしまう。

そして彼女は大けがを負い、入院。
プレシアや鬼柳達はフェイトの回復をただ祈る。

一方、管理局で再会を果たしたクロノとイェーガー。
イェーガーは早速クロノになのはたちについて調べてもらおうと頼む。

だが、彼女たちはミッドチルダに居ないことをクロノに言われ――。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「子の想い　母の想い」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

次回予告

十二話　「子の想い　母の想い　前編」（前書き）

今回はイベント発生編。
次回はデュエルです。対戦カードはプレシアｖｓ？？？さん

十二話　「子の想い　母の想い　前編」

～海鳴市　八神家～

「ありゃ」

フェイトの持っていた茶碗が地面に向かって落下し、パリン、と乾いた音を立てる。
なんとか怪我をする事は無かったが、一体どうしたんだろうとフェイトは首を傾げた。

今日は朝から、変なことが続いている。靴の紐が切れたり目の前を黒猫が通ったり。
さらには「不幸だぁあああ！」と叫びながら走る黒髪のツンツン頭の少年も見かけた。

なんだか今日は朝から変なことばかりだ。
もしかしたらよくないことが起こるのだろうか。フェイトは首を傾げる。

「どうした、大丈夫だったか？」

「あ、うん。怪我は無いよ」

と、フェイトが取り落として割ってしまった茶碗を見つめていると。

キッチンに長身の男性が現れる。その男性は見慣れた鬼柳の姿だった。

フェイトはハッと我に返ると、慌てて床に落とした茶碗の片づけを行う。

だが、それは鬼柳によって遮られた。「触ると危ないぞ」の声と共に、鬼柳がてきぱきと拾っていく。

「えへへ。ごめんね」

「気にするなよ。怪我が無くて良かったぜ」

大体の破片を取り除くと、鬼柳が床から視線を上げる。

フェイトはそんな鬼柳に笑みを返すと、トタタとキッチンの奥に引っ込んだ。

そして持ってくる物はガムテープ。大まかな破片は取り除いたとは言え、細かい破片があるかもしれない。

ガムテープを適当な大きさで切り取ると、ペタペタと床に貼り付け、一気に引き剥がす。これで細かい破片も取れただろう。

「それにしても、今日はどうしたんだ？
朝からぼーっとしてるように見えるが……」

「んー、なんだか変なことばっかり起きてるんだ」

「変なこと？」

「うん」

コクリと鬼柳の言葉に頷くと、フェイトは今朝から続いている怪奇現象について語る。
自分のスニーカーの靴ひもが切れたり、フェイトの目の前を黒猫が横切ったり。不幸な少年が横切ったり。

鬼柳はフェイトの話を聞き終えると、「ふぅむ」と顎に手を当てた。
どうやら鬼柳でも、この怪奇現象の原因は理解できていない様だ。
なんだか不安になる。

「あぅ。なにかイヤなことが起こるのかな？」

「さぁな。ただ、注意はしておいた方が良いかもしれないな」

「そうだね。よぅし、そうと決まれば今日は鬼柳と一緒に居よう！」

鬼柳の忠告を胸に留めつつ、フェイトは元気よく握った拳を天井に向けた。
今日はかねてより予定していた学校を休む日。一日中、鬼柳の傍に居ることが出来る。

ちなみになのはとはやては学校。守護騎士メンバーはそれぞれシグナムは近くのデュエル塾へ講師として招かれ、ヴィータはゲートボール。

シャマルはお料理教室に、ザフィーラは山へ芝刈りへと出かけている。
若干、数名の出かける場所がおかしい様な気がしないでもないが、まぁ良いかとフェイトは片付けた。

「ふふん、甘いですよテスタロッサ。今日は私も居ますから」

「！　り、リインフォース！」

「ふふっ。……な、なぁ。鬼柳。
ちょっと作ってみたんだが、食べてくれないか？」

そして唐突にキッチンに現れるのは、守護騎士を纏めるリーダーの様な存在――リインフォース。
彼女はフェイトを圧倒するように鼻を鳴らすと、頬を赤く染めてもじもじと鬼柳にある物を差し出す。

それは彼女が作ったと思われる料理――サンドイッチ。
見た目は少し不格好だが、初めて作ったにしては上手に出来ていただろう。

「いや、あのな……」

「食べて……、くれないのか？」

「くっ」

しょんぼりとした様子を見せるリインフォースに、鬼柳は何と声を掛けたら良いのか分からない。
以前のリニスによる大暴露大会によって、彼女が自分に好意を向けていることを鬼柳は知っていた。

だが、彼は好意を向ける彼女にどう接したらいいのか分からない。
思春期は仲間たちと共にデュエルギャングを狩っていたせいだろうか。

異性との接し方があまり良く、理解できていなかったようだ。
それに加え、恋愛などしたこともない。そんなことをしているならデュエルをする。

見事に恋愛に疎くなる様な英才教育を施されていたのだ。
故に、鬼柳は戸惑ってしまう。どんなことをすれば良いのか。どんな言葉を掛ければいいのか。

「（リインフォースの作ったヤツを食べれば良いのか？
……だが、後ろから凄い形相でフェイトがこっちを睨んでやがる……）」

チラ、と鬼柳は後ろを振り返る。そこには、鋭い眼差しでリインフォースを見つめるフェイト。
どうやら彼女は、自分に食事を差し出したリインフォースが気に入らない様だ。敵意をこめた視線で彼女を見ている。

丁度小腹も空いていたし良いかな、と思っていた鬼柳だったが、フ

ェイトの様子を見て断念した。
リインフォースの機嫌を損ねてしまうことになるだろうが、今日はフェイトから離れる訳に行かない。

今朝から妙なことが続いているフェイトを1人にしてはいけない。
直感だろうか。鬼柳のデュエリストとしての本能が、そう、頭に訴えかけている。

「悪いな。今はそんな気分じゃないんだ」

「ぬっ。それじゃ、仕方ないな……」

案の定。鬼柳が彼女の好意を断ると、リインフォースはしょんぼりした様子を見せる。
その様子に鬼柳の良心がチクチクと痛んだが、心を鬼にしてなんとか堪える。

「えへへ。じゃ、行こうっ！」

「あ、おい。こら！」

そして間髪をいれず、フェイトが鬼柳の手を取った。
トタタと軽やかな足音を響かせ、鬼柳をリビングへと連れて行こうとする。

ぐいぐいとフェイトに引っ張られ、鬼柳は転ばない様に彼女の後を

追いかけた。
鬼柳の腕を掴んで走るフェイトの表情は年相応の子供のもの。それを見ると、鬼柳の心が温かくなる。

この気持ちは何なんだろうか。
疑問に思いながらも、鬼柳はフェイトに引っ張られる形でリビングへと向かった。

※

「なるほど。厄介ですね」

プレシアから手渡された資料に目を通し、リニスは嘆息しながら呟いた。
彼女が手にしている資料とは、なのはやフェイトが学校を休む理由を記した大切なもの。

「そうなのよ。まさか、ここまで大事になるとは思いもしなかったわ」

「ミッドならば、多少は融通も効きますしね」

プレシアはリニスの言葉に同意を示すと、嘆息しながらイスに腰を下ろした。
現在、プレシアとリニスが居る場所は時の庭園。その中でも、昔プレシアが研究室に使用していた部屋だ。

若干薄暗い室内だが、プレシアやリニスは特に気には留めていない。むしろ、プレシアにとってこのくらいの暗さは落ち着くのだ。昔を思い出すのだろう。

「“赤き巫女のアザ”ね。ホント、困ったわ」

プレシアが心底困った様な声を出すが、リニスはそれを無視して資料を改めて読み直す。
そこに記されている内容とは、なのはとフェイト。それにはやての腕に刻まれたとあるアザのことだった。

現在、なのはとフェイト。それにはやての右腕には、赤き巫女のアザと呼ばれるアザが刻まれている。
これは何も、プレシアや高町夫婦が意図して刻んだものではない。
ある日、唐突に彼女たちの右腕に現れたのだ。

まだフェイトが幼かったころは大して気にも留めていなかったプレシアだが、ここ数カ月でそれは一変する。
3人の少女たちが通う小学校から寄せられたのは、「あのアザは何だ」、「何故刻んだ」と言うある種真っ当な疑問。

一応この世界にも赤き巫女のアザについての伝承は少なからず残っている。だが、それは所詮おとぎ話。
そう考える大人は後を絶たない。故に、なのはたちの腕に刻まれたアザが本物だと理解してくれないのだ。

故に、あのアザはプレシアや鬼柳が無理やり刻んだのではないか。
その様に思われている。
プレシアとしては甚だ不本意だが、納得させるだけの理由が無いのも事実。

これがもしもミッドチルダだったならば、多少腕に変なアザがついているくらいで煩く言われない。
その世界その世界で、様々な習慣や習わしがあるせいだ。故に、ミッドチルダならばここまで大事にはならなかった。

「クラスメートから奇異の視線で見られ、教師からは哀れみの視線で見られる……。
遣る瀬無いですね」

「私だってなんとかしたいのよ！」

ドンッ、とプレシアは乱暴に机を叩いた。ジワリと痛みが手に広がる。
だが、そんなものはプレシアに取ってみれば、些細な痛みでしかなかった。

突如腕に浮かびあがったアザのせいで、なのはやフェイトが苦しい

思いをしている。
それを思うと、プレシアは胸の奥が苦しくなるのだ。一生に一度の学生生活。それを台無しにしたくはない。

「ならば、やはりミッドチルダの学校に編入すべきでは？　クロノ・ハラオウン執務官でしたか。彼に話を通せば、多少は融通してくれそうですが」

「……出来れば、それは遠慮したいのよ。
あの学校にはなのはさんのお友達――アリサさんやすずかさんがいるもの」

リニスの提案に、プレシアは首を振って答える。
転校すると言う選択肢も考えたが、彼女はそれを却下した。

せっかく出来た友達から引き離すのは、可哀そうだと思ったのだろう。
リニスもプレシアの言葉に納得したようで、頭の痛みを堪える様に手を当てる。

「八方ふさがりですね」

「――くっ」

どうすることも出来ない状況に、プレシアはギリッ、と口元を歪める。

どうにかして、フェイト達に掛けられた疑いを晴らしてやりたい。
だが、現在の地球の科学技術ではそれを証明するのは不可能なのだ。
一体どうしたら良いのだろう。一体どうすれば、あの子たちはまた学校に通えるのか。

「シャマルに相談してみましょう。
認識阻害魔法に頼るほかありませんね」

「……そうね。一旦、頭を冷やすべきだわ」

ひとまずこの場を収めるために、リニスがシャマルに相談してはどうかと持ちかける。
そう言えば、シャマルは補助魔法が得意だったなとプレシアは思い出した。

他にも、ジュエルシード探索の際に知り合った少年――ユーノも居る。
彼らに応援を仰げば、なにか手が見つかるかもしれない。

そうと決まれば話は早い。まずはユーノに連絡を取るためにプレシアは席を立つ。
と、そんな彼女の視線の先に、１つのウィンドウが浮かび上がった。

「あら。これは……」

「フェイトが遊びに来たみたいですね。鬼柳氏も一緒の様です。

どうしますか、プレシア」

ウィンドウに映るのは、鬼柳の手を引いて楽しそうに走り回っているフェイトの姿。
学校で受ける様々な視線から解放された今の姿は、とても生き生きとしている。

無邪気に笑顔を浮かべながら、鬼柳の手を引っ張る姿は年相応の子供の様に見えた。
プレシアはウィンドウに映るフェイトと鬼柳の姿を一瞥すると、部屋の出口へと向かう。

「そうね。まずはユーノに連絡を取ってからフェイトと合流するわ」

「了解しました。私は先にフェイト達の元へ向かいます」

リニスの言葉にプレシアは頷くと、部屋の扉を開けてその場を後にした。

※

「相変わらず、気持ちが良い場所だな」

「そうだね」

時の庭園に訪れた鬼柳達は、原っぱの様な場所で日向ぼっこをしていた。
近場の公園でも日向ぼっこは出来るが、人の目があるためにあまり横になることが出来ない。

だが、この時の庭園は話が別だった。住んでいる人間。否、此処に来れる人間は一握りの者だけ。
故に横になったとしても、誰にも咎められることは無い。鬼柳がゴロリと横になると、フェイトもころりと横になる。

「ぬふ～。ぬくぬくだ～」

フェイトはその場でころころと転がりながら、草の感触を楽しんでいる。
平時ならば地面で寝転がらない様に鬼柳も注意はするが、今この瞬間は別だった。

ポカポカと暖かな日向で、心地よい草の感触を楽しめるのだ。
注意をしたく無くなると言うのも分からなくもない。

そしてしばしフェイトがころころと草の上を転がっていると。

その場に新たな人物が現れる。特徴的な猫耳に穏やかな性格の女性――リニスだ。

「ふふ。フェイト、そんなに転がっていては見えてしまいますよ？」

「うにゅ？　見え――――――！？」

リニスの言葉に、フェイトは頬を赤く染めて慌てて起き上がった。そして急いでばふばふと穿いていたスカートの裾を直す。そう、彼女はスカートを穿いていた。

故に、地面を無防備に転がれば、中の下着も見えてしまう。果たして、見られてしまったのだろうか。恐る恐るフェイトは鬼柳の顔を覗き込んだ。

だが――――――

「……すぅ……すぅ……」

「って、寝てるー！？」

返ってきたのは、穏やかな様子で眠る鬼柳の顔。

どうやらこちらは、穏やかな日差しの誘惑に負けてしまった様だ。

見られなくてホッとしているのと同時、フェイトはなんだかもやもやとしたものを感じる。

そりゃ、こんな日差しで眠くならない方がおかしい。だけど隣に自分が居たのだ。意識してくれても良いではないか。

内心でそんなことを呟きながら、フェイトはジィッと鬼柳の寝顔を見つめる。

彼の寝顔は子供っぽく、安心しきって意識を手放している様に見えた。その様子に思わずフェイトの頬が緩む。

「なんだか可愛いな」

「そうですね。それには同意します」

安心しきって眠っている鬼柳の寝顔を見つめ、フェイトはリニスに同意を求める。

普段のクールな彼も素敵なのだが、こうして無防備な寝顔を晒している鬼柳もまた、素敵だと思う。

ツンツン、と彼の頬っぺたを突いてみれば、意識が覚醒しかけているのか。

「うぅん……」と鬼柳は身じろぎする。それがなんだか、とても嬉しくて楽しい。

鬼柳のこんな姿を知っているのは自分だけなんだぞ。誰にも見せないぞ。

内心でそんなことを思いながらも、フェイトは鬼柳の頬にツンツン、と悪戯を続ける。

そしてとうとう、彼の意識が再覚醒する。

「ん、うぅ……」

「あ、起きちゃった……」

「そりゃ、アレだけツンツンしたら起きるでしょう」

リニスが嘆息しながら、フェイトに相槌を返す。
なにせフェイトは、休憩なしでひたすら彼の頬をツンツンしていたのだ。

起きるな、と言う方が無理だろう。はたして彼は、怒っているのだろうか。
チラ、と横目で寝起きの鬼柳を観察する。どうやらフェイトも気になる様で、こっそり確認していた。

「ん……、ふぁ」

「うわ。すっごい無防備」

「完全に寝ぼけていますね」

そして彼女たちの視界に映るのは、寝起きでぼんやりしている鬼柳。
瞼が半分閉じかけており、時折あくびをしてはぐしぐしと口元を拭っている。

完全に寝ぼけている様子の鬼柳に、リニスは珍しいものを見たと言う様な表情を浮かべた。
普段のクールさは成りを潜め、今の彼はまるで子供の様な顔をしている。正直、とても保護欲を掻き立てられた。

思わず鬼柳を捕まえようとリニスの手が彼に向って伸びるが、不意にパシッと手を叩き落とされた。
自分の手を叩き落とした相手に、リニスはジロッとした視線を向ける。その視線の先に居たのはフェイトだった。

フェイトはぷぅっと頬を膨らませると、慌てて鬼柳の元まで駆けて行く。
そして彼女の指定席である膝の上に飛び乗ると、まるで意識を覚醒させるように前後左右に身体を揺すった。

「起きてよぅ。一緒にアクセルシンクロの練習しようよ」

「んぅう〜……、そう、だな。――っと、よし」

フェイトの動きに覚醒を促され、鬼柳の意識は完全に覚醒した。
パンパンッと両の頬を叩き、眠気を完全に追い出す。それにフェイトはご機嫌な笑みを浮かべた。

もう少し鬼柳の寝顔を観察していたかったリニスとしては不本意だが、まぁ良いかと納得する。
どうやらフェイトたちは、時の庭園でアクセルシンクロの練習を行うらしい。

たしかに、この時の庭園ならば周りに人はおらず、障害物も少ないので絶好の練習場になるだろう。
ならば後は、事故に気を付けてもらうだけ。ひとまず水分不足になられてはいけないと、リニスは腰を上げる。

目指すはキッチン。一応そこに、冷やしている麦茶のストックがあったはずだ。
適当に休憩を挟みながら、フェイトのアクセルシンクロの練習を見守ろう。

「よし、フェイト。安全運転で頼むぞ」

「りょーかい！」

チラ、と視線をフェイトたちに向ければ、可愛らしくフェイトが敬礼している姿が見て取れた。
どうやらリニスがこの場を離れる間、鬼柳がフェイトの練習を見てくれるらしい。

ならばひとまずは安心だろうか。リニスはそう納得すると、麦茶の用意のためにキッチンへと向かう。

この選択が、後に誤りだったと気付かぬまま。

※

「んぅ～～～～ッ！！」

猛スピードで空を駆けながら、彼女は必死にスピードの世界を感じ取ろうとする。
だが、どれほどスピードを上げてもスピードの世界を知覚することは、彼女には出来なかった。

速さを上げれば上げるほど、まるで拒絶するかのように風がフェイトの邪魔をする。
それを無理やり突き進むようにフェイトは駆けるのだが、それでは余計に身体に傷を作るだけだった。

「も、もうダメ～～……」

空を飛ぶためにどれほど魔力を使用したのか。
フェイトが疲れた声を上げて、原っぱに不時着する。

ジクジクと身体に出来た小さな傷が痛むのだが、今はそんなことは気にならなかった。
彼女の全身から、疲労感がこれでもかと放出されている。腕を曲げることすら億劫になっていた。

だが、それも仕方のないこと。まるで押し戻される様な風の中を、フェイトは全力で駆けるのだ。
それはどれほど、身体に負担を掛けることなのだろうか。正直、疲労で倒れない方が不思議だった。

「おーい、フェイト。そろそろ休憩にしないか？」

と、フェイトが原っぱに不時着したままの体勢で居ると。
彼女の後方から鬼柳が灰色のロングコートを翻しながら駆けてくる。
どうやら彼女に休憩を勧めるため、わざわざ迎えに来てくれた様だ。
彼のそんな気遣いに嬉しいと感じつつ、無様な姿を見せたままで良いのかとフェイトは思う。

好きな人には、自分の良いところを見せてあげたい。
その気持ちは何も、男性だけが持つものではない。女性もまた、持つものなのだ。

故にフェイトは両腕に力を込めて、身体を起こす。せめて最後に１回だけチャレンジしたい。
成功できなくても良いから、せめて綺麗に着地して鬼柳と向きあいたい。そう、心の中で思った。

「うんー！　あと１回だけやってからー！」

「無理はするんじゃねーぞ！」

「分かったー！」

そしてぴょんっ、とフェイトは原っぱから身体を起こす。
これが今日の最後の挑戦。出来ても出来なくても、全力でやるだけだ。

「いよぅし。最後はソニックフォームでチャレンジ！」

そして折角なのだからと、フェイトはバリアジャケットを変更する。
多少防御力が高かった通常のバリアジャケットから、装甲が限りなく薄いソニックフォームへと。

若干露出は多くなってしまうが、この程度ならばフェイトは気にならない。
手足を伸ばして調子を確かめると、腕に装着したデュエルディスクを確認する。

彼女の腕に装着されたデュエルディスクには、2枚のシンクロモンスターが存在していた。
1枚目は彼女の切り札――スターダスト・ドラゴン。2枚目は新たな希望――フォーミュラ・シンクロン。

それらのカードがしっかりとデュエルディスクに装着されていることを確認すると、フェイトはキッと前を向く。
彼女の前方には、木々の生い茂る林が見えた。と言っても、まだまだ大分離れている。ソニックフォームでも問題ないだろう。

「それじゃ最後のチャレンジ。れっつ、ごー！」

掛け声とともに、フェイトは空中へと飛び上がる。
そしてまるで、ロケット花火の様な速さで林へ向かって発進した。

びゅうびゅうと風が耳元で唸り、彼女を拒絶するように風の壁が立ちはだかる。
だが、彼女とて負ける訳にはいかない。この壁を打ち崩し、絶対にアクセルシンクロをモノにするのだと。

「んぅう……！」

一段階ほど、フェイトの速さが上がる。
その途端、彼女を阻む風が一段と強くなった。

だが、負けるものかとフェイトは自身の速度を上げる。
もっと。もっと速く。いっそ、光よりも速く、と。彼女は願う。

しかし、それがいけなかった。

「（ッ！？　あ、れ……？）」

不意に、彼女の意識が遠のいた。一体どうしたんだろう。

疑問に思うが、徐々に意識が遠のく感じは変わらない。

一体、何がどうしたと言うのだろうか。

訳が分からぬまま、フェイトはひとまず減速しようと操作を行う。

しかし、減速するための操作を行おうとした瞬間、ズキリと彼女の頭に痛みが走った。

まるで脳を、直にギュッと締められたような感触。予想外の痛みに、フェイトの視界が明滅する。

「（い、いけな――――！）」

チカチカと明滅する視界の中、見えたのは目前に迫る木々だった。

どうやら気づかぬままに、終点である林の入口へと差しかかっていたらしい。

後方から、鬼柳の叫び声が聞こえる。

大方、何時まで経っても減速しないフェイトを不審に思ったのだろう。

慌ててフェイトも減速しようと試みるが、僅かに一歩だけ遅かった。

「――――あ」

目の前には、がっしりとした体格の木が待ち受けている。

もはや目と鼻の先。スピードの減速はおろか、コースの変更さえま

まならなかった。

彼女の脳裏を、プレシアやアルフ。鬼柳やなのはなど、大好きな人たちの顔が流れて行く。

それはまるで走馬灯の様で。もしかして、死んじゃうのかな。フェイトはそんなことを思いながら、ギュッと瞼を閉じた。

「フェイトッ！」

鬼柳の叫び声が聞こえたと同時、ゴシャッ！と言う凄まじい音と。

凄まじいまでの衝撃と痛みがフェイトを襲い、彼女の意識を刈り取った。

十二話　「子の想い　母の想い　前編」（後書き）

フェイトが気を失った原因などは次回で明らかになる予定です。
それまで、どうかお待ちください。

十二話　「子の想い　母の想い　中編」（前書き）

なんだか長くなってしまったので中編と分けます。
次回は完全にデュエルパート。

十二話　「子の想い　母の想い　中編」

～時の庭園　某所～

「ふぅ……」

ため息を吐きながら、プレシアはカツコツ、と靴音を響かせる。
先ほどまで彼女は、通信用の設備を使い、友人であるユーノに連絡を取っていたのだ。

ユーノは別の次元世界では、多少なりとも名の知れたデュエリストとなっている。
だが、その噂はいずれも悪い物ばかり。一体どうしたと言うのだろうかと、プレシアは疑問に思う。

しかし、ユーノが力を貸してくれることに、それらの悪評は関係ない。
まずはなのはやフェイト、はやてが元気に学校に通えるようになること。それが第一だ。

「？　なんだか騒がしいわね」

と、フェイト達が練習しているであろう。原っぱへと足を進めていると。
不意にプレシアの耳に、人が動き回る様な物音が飛び込んできた。

フェイトがアクセルシンクロの練習をしているのだから、物音くらいはするだろう。
そう考えるのだが、この物音はそれとは違う印象をプレシアに与えた。

数名の人間が、慌てて地面を駆けている様な。大慌てで、何かの処置をしている様な。
そんな印象を受ける。たしかこの時の庭園に居るのは自分を含め、3人だけのはず。

一体何が？　プレシアは疑問に思いながら、物音が激しい場所へと向かう。
そして、彼女は目撃した。

「――――え？」

「フェイト、目を開けてください！　フェイトっ！」

「おい、フェイト！　起きろッ！」

プレシアの視界に飛び込んでくるのは、バタバタと慌てている1組の男女。
その男女は見慣れた鬼柳とリニスのもの。そして、彼らの足元に1人の少女が倒れている。

グッタリと青白い顔色で地面に横たわっているのはプレシアの愛して止まない娘――フェイト。

だが、今の彼女は健康からは程遠い様相をしていた。その原因は、彼女の頭部からの激しい出血。

一体、どれほどの血液を失ったのだろうか。フェイトの額を血に染め、さらに顔まで血で染めようとしている。

リニスは慌てて時の庭園に施された居住スペースから毛布やらタオルなどの止血に用いる道具を取り出し。

鬼柳はリニスから受け取った止血用の道具でフェイトの頭からの出血を必死に止めている。

だが、いくら彼がフェイトの頭にタオルを当てようとも、すぐにそのタオルは出血によって赤くなってしまう。

一体、何が起こったと言うのだろうか。

目の前の光景が現実だと認識できず、プレシアはゆるゆると思考する。

だが、頭のどこかでこれが現実だとプレシアは理解していた。

フェイトの倒れている場所の、すぐ傍に生えている木。そこに血が大量に付着している。

恐らく、フェイトはアクセルシンクロの練習中。誤って木に激突したのだろう。

そのせいで、あんな大けがを負ったのだ。頭ではそう理解しているのに、心がなかなか納得しない。

嘘だ。嘘だ。嘘だ。こんなこと、嘘だと、プレシアの心が現実を拒絶しようとする。

しかし、そんなプレシアの逃避を彼女は――リニスは許さなかった。

「ッ！？　プレシア！　急いで病院に搬送してください！
一刻を争います！　プレシア、急いでッ！」

「リニ、ス……？　一体、何を……」

「フェイトが事故を起こしました！
意識不明！　失血死の可能性すらあります！」

「――――ッ！」

リニスの魂からの叫びに、プレシアの身体がようやく動き出す。
がむしゃらに地面に倒れ伏した愛娘の元まで、プレシアは駆けた。
顔色は青白く、ひゅぅひゅぅと弱々しい呼吸音がプレシアの耳に聞こえる。
思わずフェイトを揺り起そうと手が伸びかけたが、それはしてはいけないとなんとか理性が働いた。
頭部に怪我を負った際、頭を揺らしていけないのはもはや常識と化している。
下手に頭を動かし、頭部に余計なダメージを与える訳に行かないからだ。

プレシアは震えてへたり込みそうになる己の身体に叱咤しながら、デバイスを起動させる。
起動形態は常時使用しているデュエルディスクモードではなく、魔法を使用するための杖の形態。

それを手に持ち、何事か呟くと、地面に倒れていたフェイトの身体が青白く発光する。
これはプレシアが覚えている中でも、最も効果の高い治癒魔法の１つ。だが、大して効果は見られない。

「くっ！」

その後も幾つか治癒魔法を行使するのだが、目に見えて効果が表れるものは無かった。
ならば自分にできることは少ない。プレシアはフェイトを宙に浮かせると、脱兎のごとく時の庭園内部の建物へと向かう。

その中ならば、転送ポートも用意してある。一刻も早く、ミッドチルダの病院に搬送しなくては。
そしてプレシアが転送ポートへ駆けだすと同時、彼女の後ろを鬼柳とリニスもまた、追従するのだった。

※

「――――ッ！？」

八神家のリビングにて。
鬼柳に振られたリインフォースを慰めていたアルフが、何かを感じ取った。

それは彼女の背筋を凍えさせるほどの何か。得体の知れない悪寒に、背筋が湧き立つ。
一体、今の悪寒は何なのだろうか。背筋をブルリと震わせながら、アルフは周囲を観察する。

だが、別段変わった様子は見られない。
しかし、あえて変わったところを上げるのならば。

「（そう言えば、今朝はフェイトが変なことに遭遇してたねぇ。
取り越し苦労じゃなけりゃ良いんだけど――――ッ！？）」

今朝がたのフェイトとの会話を思い出していたアルフだが、唐突にソファから立ち上がった。
そうだ。今朝の出来事だけじゃない。現在進行形で、変わった出来事が発生しているではないか。

一体何故、こんなことにも気が付かなかったのか。自分で自分を憎く思いながら、アルフはリビングを飛び出す。
アルフが感じた違和感。それは、主人と使い魔とのライン――精神リンクから漂ってきている。

精神リンクとは、主人と使い魔との間に引かれたラインの様なもの。

フェイトとアルフは潜在的に繋がっているのだ。
普段は精神リンクを繋げているのでフェイトの感情や気分がある程度理解できる。だが、今のアルフにそれは分からなかった。

「（精神リンクから流れ込んでくるのは痛み、苦しみ……ッ！
一体何が起こったって言うんだよぅ！）」

そんな中、アルフに伝わってくる主人（フェイト）の感情が幾つかある。
痛みや苦しみ。恐怖など、言わば負の感情と呼ばれるそれらの感情だ。それが、アルフに伝わってくる。

おかしい。今日は一日中鬼柳の傍に居ると豪語していたフェイトだ。
こんな感情を抱く様な出来事には遭遇しないはずだとアルフは自身に言い聞かせる。

だが、現実に精神リンクからはそれらの感情が流れ込んでいる。
ならば、予想外のアクシデントが発生したと見て良い。そのアクシデントのせいで、フェイトが怖い思いをしている。

ならば使い魔たる自分の役目はただ1つ。
一刻も早くフェイトの元へ行き、彼女を護る事だ。

そのためにも、まずは時の庭園へと向かわなければ。
一体どんなアクシデントが発生したのか。それを考えながら、アルフは八神家のプレシアの部屋を目指す――――。

※

その場所――手術室前の廊下は、痛いほどの沈黙に包まれていた。
廊下に居るのは、現在手術室で1人、孤独な闘いを強いられている少女の母親――プレシア。

そして搬送された彼女を心配して着いてきた使い魔――リニスと鬼柳の2人だった。
プレシアは手術室の前の扉を苛立たしげに歩きまわり。鬼柳とリニスは廊下に置いてあるイスに腰掛けている。

だが、かと言って彼らが落ち着いていると言う訳でもない。
鬼柳やリニスもまた、落ち着かない様子で「手術中」と表示されたランプを見つめている。

「ッ！　俺の、せいだ……！」

そして唐突に、沈黙を破る者が現れた。
沈黙を破ったのはイスに腰掛けていた男性――鬼柳。

彼はガックリと項垂れながら、自分を責める様に言葉を続ける。
半ば懺悔と言える鬼柳の言葉。それを聞きながらも、プレシアは歩

みを止めなかった。

リニスから事の一部始終を聞いたプレシアは、鬼柳が悪いとは思っていなかった。

多少、監督責任は問われるだろうが、それでもそれは些細なもの。

彼が気に病むほどではない。

しかし、彼は自分で自分を許さないのだろう。防げたはずの事故。

傍に居たはずなのに、守ることが出来なかった。鬼柳は自分で自分を責める。

「俺が、俺が傍に付いていたはずなのに……ッ！

あのとき、無理にでも休ませておけば……ッ！」

「……鬼柳氏。過ぎたことは、悔やんでも遅いです。

まずは現状で、出来ることを考えなければ」

「だけど！　俺の、俺のせいでフェイトは……」

「黙りなさい！」

人気のない廊下に、リニスの鬼柳を一括する声が響く。

あまりの彼女の声の大きさに驚いたのか。鬼柳はポカンとした表情を浮かべた。

一方、大声を出したリニスもリニスで。そこまで大きな声を出そうと思った訳ではないのだろう。

ハッと我に返ると、コホンコホンとわざとらしく咳払いをして場を

和まそうと努力する。

だが、先ほどの大声のせいでそれも不可能。
リニスはバツが悪そうな表情を浮かべると、ポツポツと言葉を吐き出した。

「後悔は、私だってしていますよ。
鬼柳さん、貴方だけが悔しい思いをしている訳ではないのです」

「リニス……」

「私もまた、後悔しています。
だけどまずは、あの子の無事を祈りましょう」

「――ッ、あぁ。悪かったな、取り乱しちまってよ」

「ふふ。お互い様です」

どうやらリニスもまた、フェイトの事故を防げなかったことを悔やんでいるらしい。
彼女の言葉に持ち直した鬼柳は、祈る様な視線で「手術中」と点灯中の赤ランプを見つめている。

リニスは落ち着いたらしい彼の様子にホッと笑みを返すと、鬼柳と同様に祈る様な視線をランプへと向けた。
プレシアはそんな2人の様子を視界に納めながらも、落ち着きのない行動を繰り返す。自分だって鬼柳の気持ちは分かる。

きっと、自分と鬼柳の立場が逆だったならば、自分だって死ぬほど後悔するだろう。
もしかしたら、鬼柳よりもみっともなく取り乱していたかもしれない。また、娘を失うかもしれないからだ。

「（フェイト……、フェイト……、フェイト……ッ！）」

祈る様に娘の名前を心の中で唱えながら、プレシアは点灯中の赤ランプを見つめる。
自分はもう、既に愛娘を失った。あのときの胸がえぐられる様な。大切な人を失った喪失感は味わいたくない。

それに、もう娘を失いたくないのだ。手塩にかけて育ててきた大事な娘。
目に入れても痛くないほど可愛がってきた娘を、もう二度と、失いたくない。

そのためならば、どんなことだってする。だから、もしも神と言う存在が居るのならば。
どんなことだってする。どんな代償だって払って見せる。だからどうか、自分の願いを叶えてくれないか。

自分の最も大切な娘――フェイトを、どうか生きて自分の元へ返してくれ。
プレシアは、心の底からそう願う。願いを込めて、閉じられたままの手術室の扉を見つめる。

そして、「手術中」と点灯していた赤ランプが――消えた。

※

「……すぅ……すぅ……」

穏やかな寝息を立てながら眠るフェイト。額には真新しい包帯が巻かれている。

結果から言えば、手術は成功した。鬼柳とリニスの迅速な応急処置が功を奏したのだろう。

大量に血液を失い、失血死の可能性はあったが、そこはプレシアの治癒魔法が効果的だった様だ。

だが、フェイトの眠る病室に居るメンバー、プレシア、リニス、鬼柳の3人の表情は暗い。

「……意識が、いつ戻るか分からない……」

ポツリと、沈黙が支配していた空間にプレシアの声が響き渡る。
そう。フェイトの意識が何時戻るのか。彼女の治療を担当した医師にも分からなかったのだ。

今は麻酔の影響で眠りについているが、本格的に意識を取り戻すのが何時かは、分からない。
果たして今日か、明日か。一週間後か、一ヶ月後か。はたまた、一年後と言う可能性もあるのだ。

そんな状況で、気分を上げられるものはいなかった。
誰もが皆、ベッドで眠っているフェイトを見つめている。

「……なぁ、フェイト。早く起きてくれよ」

そして、まず声をかけたのは鬼柳。
彼はベッドの隣に腰掛けると、眠りに付いているフェイトに向けて言葉を掛ける。

早く起きてくれ。そして、事故を未然に防げなかったことを謝罪させてくれ。
眠り続けるフェイトの頬を撫でながら、鬼柳は続ける。その様子は、何処か泣くのを我慢している様な。

そんな感覚を、プレシアは覚えた。

「鬼柳！
フェイトが怪我したってのはホントーーーーー！！」

病室に、新たな乱入者が現れる。乱入者の正体はフェイトの使い魔――アルフ。
彼女はプレシア達を探して時の庭園を探し回ったのだろう。はぁはぁと肩で息を整えている。

しかし、プレシアは時の庭園には書き置きを書いておいた。アルフはその書き置きを見たのだろう。
そしてアルフは、部屋の中で眠り続けるフェイトを見つけると慌てて両腕を使い、自分の口を抑えた。

フェイトを起こさない様にと思ってのことだろう。だが、プレシアはそんなことはして欲しくなかった。
逆に、いつもの大声で騒いで欲しかった。そうすればひょっこり、フェイトが起きてくれる様な。そう思ったから。

「き、鬼柳。フェイトは一体……」

「あ、あぁ。実は……」

アルフはチョコチョコと鬼柳の元まで歩み寄ると、事の次第を鬼柳に訊ねた。
話の内容は、プレシアがリニスから聞いたものと大して変わらないもの。

だが、フェイトが意識を失う原因は判明していた。
その原因とは何の変哲もない疲労。それが彼女の意識を奪った根源だった。

単に疲労と言っても、疲労はバカにならないほど身近に潜む不調の原因となる。
下手に疲労を放置してしまえば、いかな人間と言えども倒れてしまうのは無理もない話。

フェイトの場合は、極度の疲労状態で高速移動を使用したため、一時的に脳に血液が供給されなくなったせいだろう。
と言うのが、フェイトの治療を担当した医師の見解だ。プレシアもその医師の言葉には思わず同意を示したくなる。

フェイトは数年ほど前から、クリアマインド、アクセルシンクロを会得し様と様々な練習を行っていた。
毎日適度に休憩を挟んでいたのだが、度重なる疲労は塵の様に積み重なっていったのだろう。

そして、積み重なった疲労が牙を剥いた。最悪のタイミングで。
プレシアはギリッ、と歯を噛み締める。自分がしっかりと、フェイトの不調に気付けていれば。

「（……ダメね、こんな調子じゃ。
一旦、外の空気でも吸ってこようかしら）」

プレシアは徐々にネガティブな方向へと向かい始めていた自分の思考に気がつくと。

ゆるゆると首を振り、まずは気分を変えようと思い立った。このまま此処で、フェイトを見ている気にはなれない。

それに、フェイトが起きたとき、辛気臭い表情で彼女を出迎えたくないと言う気持ちがあった。

フェイトが起きた時は、笑顔で無事を喜びたい。それが自分にできる、精一杯の看病だと思ったから。

そうと決まれば、プレシアは座っていたイスから腰を上げる。向かう先はこの病院の屋上だ。

そこならば見晴らしも良く、気分転換には丁度良いだろう。そして病室の入り口で、プレシアは一旦立ち止まった。

ガサゴソと、何かを探る様に自身のスカートのポケットを漁る。そして、目的のものを発見したのだろう。

彼女はフッと柔らかな表情を浮かべると、扉を開けて屋上へと足を動かした。

プレシアの様子を背後から見つめていた、己の使い魔に気づかぬまま――――。

※

「ふぅ……」

屋上へと出たプレシアは、肺に貯めていた空気をこれでもかと吐き出した。
どうやら自分は、無自覚の緊張状態にあった様だ。手がぷるぷると震えている。

無理もない。一度ならず、二度までも自分の娘を失うことに成りかけたのだ。
もしも手術が失敗していたら。もしもフェイトが目を覚まさなかったら。思うことは多々ある。

「大丈夫。
フェイトはきっと、目を覚ましてくれる」

だが、プレシアはあえて前向きな言葉を口にした。
こうでも言わなければ、自分はきっと後ろ向きなことばかり考えてしまう。

そんなことはいけない。フェイトを笑顔で迎えてあげられないから。
だからプレシアは笑顔を浮かべる。きっとフェイトが目を覚ましてくれると願いつつ。

「――ふふっ。それにしても、鬼柳の慌てぶりは見物だったわよ。
フェイトの傍を離れようとしないものだから、思わず妬けちゃっ

たわ」

そして自分の気分を上げようと、無理に明るい声で独り言を口にした。
内容はフェイトが事故を起こしてから今までの、鬼柳やリニスの様子ばかり。

やれ鬼柳がどれほど狼狽していたか。やれリニスがどれほど鬼柳を叱咤したか。
数え上げればキリがないほど、普段の彼らからは垣間見ることが出来ない表情を見ることが出来た。

「――――ッ！」

けれど、その景色の何処にも、彼女の愛娘たる少女の姿は無い。
プレシアの脳裏に浮かぶのは、血に濡れてグッタリとしている娘の姿。

思わずギュッと胸元の服を掴み、崩れ落ちそうになる膝に力を入れる。
大丈夫。きっと大丈夫だから、フェイトはまた目を開けてくれる。
笑いかけてくれる。

自分にそう、プレシアは言い聞かせた。
でなければきっと、此処で見っとも無く泣いてしまうだろうと思ったから。

「……」

そしてプレシアは、スカートのポケットからあるカードを取り出す。
それは今回の事件における元凶となったカード――フォーミュラ・シンクロン。

プレシアは取り出したそのカードを、無感情な瞳でジッと見つめた。
このカードが無ければ、フェイトは事故を起こす事も。アクセルシンクロの練習をする事もなかった。

命を失い掛けることも。命が危機に脅かされることも。
それを考えると、プレシアは手に持つこのカードが憎く思える。

このカードさえ無ければ、このカードさえ見つからなければ。
もう二度と、娘を失うことに耐えられない。故に、プレシアはこのカードをこっそりと持ってきた。

「……そうよ。
　このカードがあるから、フェイトは……」

プレシアは新たにポケットから、何処にでもある様なライターを取り出す。
もう二度と、娘を失うことはごめんだ。だからフェイトがアクセルシンクロをしない様、このカードを燃やそう。

フェイトが気がついたときには、なくしてしまったと嘘を吐けばい

い。
彼女に嘘を吐くのは気が引けるが、再びアクセルシンクロの練習をされるよりはマシだ。
そして、プレシアがカチッとライターを操作し、ライターから火柱が立ち上る。
その火柱にフェイトのカード――フォーミュラ・シンクロンを翳そうとしたとき――
「プレシア。何をしているんです」
彼女の背後から、聞き慣れた使い魔の声が聞こえた。

ハッとプレシアは我に返り、慌てて背後を振りかえる。

するとそこには、先ほどまで病室でフェイトを見ていたはずのリニスが居た。

彼女はこれまでプレシアに見せたことが無い様な、鋭い視線をプレシアへと向けている。

その視線は、彼女の持つカード――フォーミュラ・シンクロンに向けられていた。

なんとか場を誤魔化すために、プレシアは苦笑いを浮かべる。だが、それよりも先にリニスが口を開いた。

「そのカードはフェイトのもの……。
何故、アナタが持っているんですか」

「何故って、おかしなことを言うのね。
娘が持っているカードを、母親が預かっちゃダメなの？」

「ただ預かるだけならば、ライターなど必要ないと思いますが？」

「――――っ！」

リニスの言葉に、思わず手の中に隠していたライターが零れ落ちる。

見られていた。フォーミュラ・シンクロンのカードを燃やそうとする自分を見られていた。

プレシアはリニスの言葉と態度から、それを察した。故に、彼女は

敵意を向けているのだろう。
このカードはフェイトが望んで手に入れたもの。それを第三者が勝手に燃やすなど、誰にも許されるものではない。

「――――さい」

けれど、プレシアとて引き下がれなかった。
このカードのせいで、フェイトが怪我をしたのだ。

「――うるさい」

女の命である顔に傷を負った。下手をしたら傷跡が顔に残るかもしれない。
それどころか、フェイトが自分のすぐ傍から居なくなってしまうかもしれなかった。

「うるさいっ！」

もう二度と、娘を失いたくない。あんな悲しい思いはもう沢山だ。
故に、プレシアは自分を阻もうとするリニスをキッと鋭い視線で睨みつける。

「このカードのせいでフェイトがあんな大けがをしたのよ！

このカードが無ければ、フェイトは怪我をする事もなかった！」

「だからと言って、無断でフェイトのカードを燃やすのですか」

「仕方ないじゃない！　私はもう、二度と娘を失いたくないの！
もうイヤなのよ！　私の大切な人が、私の前から消えるのがっ！
居なくなるのがッ！」

感情が高ぶったせいか。プレシアの両方の瞳から、ボロボロと涙が零れる。
脳裏に浮かぶのは、アリシアを失った日の自分の姿。娘の遺体を抱き、自分は泣いた。

心がとっても痛くて。心が悲鳴を上げて。頭がめちゃくちゃになって。
プレシアの世界は色あせた。世界から色が消え、この世界で生きる意味を失った。

だが、プレシアはこうして生きている。新たな生きる意味――フェイトを得たから。
けれど、もう1つの生きる意味まで失ったら？　自分の大切な人が、再び自分の前から消えたら。

そんな事はイヤだった。まだ、フェイトと一緒に暮らしたい。
フェイトと沢山、楽しい思い出を作りたい。それはプレシアの心からの願い。

故に、その願いを壊そうと言うものがあるのなら、プレシアは全力で打ち壊す。

相手が誰だろうと関係ない。自分のささやかな願いを壊そうと言うものがいるなら、自分が全力で相手をする。

それがたとえ、勝手知ったる己の使い魔であろうとも――――。

「けれど、だからと言ってフェイトの選択肢を奪って良い理由にはなりません。

――――来なさい、プレシア。私が貴方の目を、覚ましてあげます」

「私の邪魔は誰にもさせない……！　大好きなフェイトともう、離れたくない……！

だからリニス！　私は貴方に、負ける訳にはいかないのッ！」

そしてプレシアとリニス。

二人は同時にデバイスをデュエルディスクモードへと移行させる。

「「決闘（デュエル）！」」

十二話　「子の想い　母の想い　中編」（後書き）

病みプレシアさんが発生。
そしてそろそろプレシア母さんが本気を出します。

十二話　「子の想い　母の想い　後編」（前書き）

次回からはいろいろと長丁場になる可能性が。

十二話　「子の想い　母の想い　後編」

～次元世界　某所の病院　屋上～

「先攻は私です、ドロー！」

リニス手札5→6

「私は手札の≪モジャ≫を墓地に送り、手札から≪虚栄の大猿≫を特殊召喚！」

リニスがデュエルディスクにカードをセットすると。

彼女のフィールドに、1体の猿の姿をしたモンスターが現れる。

だが、その背後に見えるのは凶暴な形相をしている影の様な存在。

大方、その影の様な存在が虚栄と呼ばれる所以だろう。大猿は鋭い視線をプレシアへと向ける。

「≪虚栄の大猿≫は手札から獣族モンスターを捨てた場合、特殊召喚出来ます。

その場合、このカードのレベルを捨てた獣族モンスターのレベル分増減できます。

ですが、今は良いでしょう。さらに≪マイン・モール≫を召喚！」

新たにリニスのフィールドに、工事用のヘルメットの様なものを被

ったネズミが召喚される。
平時ならば、可愛いと思えるモンスター。だが、今はリニスとプレシアから発せられる雰囲気に呑まれているのか。
真剣な表情で、相対しているプレシアをジッと見つめていた。

「レベル3≪マイン・モール≫にレベル5≪虚栄の大猿≫をチューニングッ！」

「お得意のレベル8シンクロかしら？」

「駆けよ稲妻！　疾風を切り裂き紅蓮の炎を！
シンクロ召喚！　気高き獣の王者、≪ライトニング・トライコーン≫！」

5つの緑色のリングを潜り、姿を見せたのはリニスのデッキにおける切り込み隊長。
蒼い盾髪を棚引かせ、真っ直ぐの瞳をプレシアへと向けている。その様は、まさに王者のよう。

「≪マイン・モール≫が獣族モンスターのシンクロ召喚に使用されたので、私はデッキからカードを1枚ドロー！」

リニス手札3→4

「カードを2枚伏せて、ターンを終了」

リニス手札４→２
場　ライトニング・トライコーン　伏せ×２

「私のターン、ドロー」

プレシア手札５→６

「私は手札から≪インヴェルズの先鋭≫を召喚」

「≪インヴェルズの先鋭≫……、厄介ですね」

リニスはプレシアのフィールドに現れたモンスターを見て、思わず唸る。
プレシアが召喚したモンスターは、墓地へ送られた時、場の儀式・融合・シンクロモンスターを破壊する効果を持つ。

もしもこのモンスターをリリースされてしまえば、リニスのライトニング・トライコーンは成す術なく破壊されるだろう。
せっかく呼んだレベル８の上級モンスター。ただで失うには惜しい存在だ。

「さらに手札から≪二重召喚≫を発動。
このカードの効果により、私はこのターン、もう一度通常召喚が出来る。
私は場の≪インヴェルズの先鋭≫をリリース！」

「くっ、やはり召喚権を増やすカードを投入していましたか……！」

「私を阻むものに、悪魔の鉄槌を！
≪インヴェルズ・ギラファ≫を表側攻撃表示で特殊召喚！」

インヴェルズ・ギラファ
星７／闇属性／悪魔族／攻２６００／守　　０
このカードは「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体をリリースして
表側攻撃表示でアドバンス召喚する事ができる。
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した時、
相手フィールド上に存在するカード１枚を選択して墓地へ送り、
自分は１０００ライフポイント回復する事ができる。

プレシアのフィールドに存在していた先鋭が消え、代わりに一体の悪魔族が召喚される。
その姿はまるでクワガタ虫。しかし、黒と金の色合いが、そのモンスターの凶暴性を引き立たせていた。

「リリースされた≪インヴェルズの先鋭≫の効果発動！
場の儀式・融合・シンクロモンスターのいずれかを破壊する！
対象は≪ライトニング・トライコーン≫！」

「くっ、かなりの痛手です……！」

リニスのフィールドに存在していた、ライトニング・トライコーン

が破壊される。
手札を数枚消費して召喚したモンスターを、こうも簡単に除去されるのは悔しい物がある。
だが、悔しがるのはまだすべき事ではない。今、リニスが出来ること。
それは、この決闘でプレシアに勝利し、彼女の目を覚ましてやることなのだ。

「さらに「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてこのカードのアドバンス召喚に成功したとき、
相手フィールド上のカード1枚を墓地に送り、私は1000ポイント、ライフを回復する！
対象は私から見て、右側のカード！」

「――――くっ！」

アドバンス召喚されたギラファから、眩いばかりの光線が放たれる。
放たれた光線はリニスの場の伏せカードを貫き、発動を許さぬまま墓地に送られた。

墓地に送られたカードは幻獣の角。獣族モンスターの攻撃力を上げるカードだが、今は発動できない。
リニスは下唇を噛み締めながら、若干、分が悪い戦況を見つめる。
状況は圧倒的にリニスの不利だった。

こちらの場のモンスターは破壊され、伏せカードは残り1枚と心許ない状態。

それに加え、相手の場にはレベル7の上級モンスターがいる。

プレシアLP4000→5000

「さらに私は、手札から≪ワン・フォー・ワン≫を発動！
手札のモンスターカード1枚を墓地に送り、デッキからレベル1
モンスターを特殊召喚させてもらうわ」

プレシア手札3→1

「この状況でレベル1……？　次のターンへの布石でしょうか」

リニスはプレシアの行動に疑問を覚える。この状況で、わざわざ手札を減らすだろうか。
通常、デュエルモンスターズのみならず、カードゲームでは手札の枚数が大きくゲームに作用する。

手札があればあるだけ、可能性が広がるからだ。鬼柳の様な特殊の場合を除き、常に手札は多めに持ちたい。
だが、プレシアはあえて手札を捨てた。もしや、彼女の手札には新たな上級モンスターが居るのだろうか。

「私は手札から≪インヴェルズの斥候≫を墓地に送り、デッキから≪グローアップ・バルブ≫を特殊召喚」

「ッ！？　い、「インヴェルズ」でチューナーを採用している！？」

グローアップ・バルブ
チューナー（効果モンスター）
星１／地属性／植物族／攻　１００／守　１００
自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

プレシアのフィールドに、花の苗の様なモンスターが特殊召喚される。
一見すればただの下級モンスターだが、このカードは「チューナー」を持っていた。

アドバンス召喚を常とするインヴェルズには、基本的にチューナーは入らない。
それはインヴェルズ自身がシンクロ召喚を否定しているからだろう。
だが、プレシアはあえてチューナーを投入した。

これではテーマを否定していることになるだろうが、
生憎とテーマデッキにチューナーを入れてはいけないと言うルールは無い。

「そう。「インヴェルズ」はアドバンス召喚が主体だけれど、シンクロ召喚をしてはいけないと言ってはいないわ。
　私は場のレベル７≪インヴェルズ・ギラファ≫にレベル１≪グローアップ・バルブ≫をチューニング！」

「レベル８……ッ！　一体、何が来る……！」

「暗黒より誘われし悪魔よ、紅蓮の炎で我が敵を燃やしつくせ！
シンクロ召喚！　深淵より来たりし、≪メンタルスフィア・デーモン≫！」

メンタルスフィア・デーモン
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／サイキック族／攻２７００／守２３００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの元々の攻撃力分だけ自分のライフポイントを回復する。
サイキック族モンスター１体を対象にする魔法または罠カードが発動された時、
１０００ライフポイントを払う事でその発動を無効にし破壊する。

緑色のリングを潜り抜け、プレシアのフィールドに新たな悪魔が召喚される。
その姿は、まさに「デーモン」と呼ぶに相応しい。さしずめ、上級悪魔と言うところか。

召喚されたメンタルスフィア・デーモンは、ギロリと光る双眸でリニスを見つめる。
その姿は、まるで獲物を狩るハンターの様に見えた。リニスは思わず身震いする。

「（くっ、≪メンタルスフィア・デーモン≫とは……！

なかなか、厄介なモンスターを召喚してくれますね）」

相対しているデーモンを睨みつけながら、リニスは心の中で悪態を吐く。

メンタルスフィア・デーモン。厄介さではフェイトの持つスターダストに次ぐ厄介さだ。

なにせ、メンタルスフィア・デーモンはサイキック族モンスター1体を対象にする魔法・罠カードを無効にし、破壊することが出来る。守る対象こそ狭まっているが、それでもサイキック族モンスターを守れるのは心強い。それに加え、自身がサイキック族でもある。

つまり、自身の効果は自身にも適用できると言うこと。採用されやすい次元幽閉などを気にせず攻撃できるのだ。

それに加え、戦闘で破壊したモンスターの元々の攻撃力分、ライフを回復する効果を持っている。

こちらはライフの消費が激しいインヴェルズにとって、メリットとなる効果だ。

攻撃力も高く、サイキック族限定だが対象を取る効果には滅法強い。

かなり厄介な相手だ。

「さぁ、バトルフェイズよ！

≪メンタルスフィア・デーモン≫でリニスにダイレクトアタック！」

プレシアの場のデーモンが、その手に紅蓮に燃える火球を発現させ

る。
轟々と勢いよく燃えているその火球は、まさに地獄の業火と呼ぶに相応しい姿だ。
そしてプレシアの命を受け、手に持った火球をリニスに向けて全力で投げつける。
リニスは咄嗟に身構えるが、それでも着弾による衝撃波は防げなかったようだ。苦悶の声が上がる。

「くぅう……！」

リニスＬＰ４０００→１３００

「私はこのまま、ターンエンド」

プレシア手札１
場　メンタルスフィア・デーモン

「私の、ターン……」

リニス手札２→３

「くっ……！」

リニスはデッキからドローしたカードを手札に加えると、キッと相対しているプレシアを見つめる。
彼女の前に相対しているプレシアは、並々ならぬ雰囲気でリニスとのデュエルに臨んでいる。

それほどまで、フェイトの持つカード――フォーミュラ・シンクロンが憎いのだろう。
リニスとて、あのカードに良い思い出がある訳ではない。だが、あのカードはフェイトが望んで手に入れたもの。

それを母親の、プレシアの我がままで取り上げるのはどうか。リニスは疑問に思う。
フェイトにだって、選択する権利はあるはずなのだ。カードを手放すか、手放さないかと言う。

もしも手放すと言えばそれで解決だが、恐らくフェイトの事だ。手放す可能性は限りなく低い。
逆に、アクセルシンクロの練習に再び熱中してしまうかもしれない。
リニスはそう、心の中で危惧する。

「（ですが、それで良いじゃないですか。
　子供は様々なことを経験し、学んでいくのです。成長するのです）」

だが、リニスは心の中で頭を振る。そう、子供は成長していくものだ。
今回の怪我を反省し、これからは休みを多く取ってくれるかもしれない。

少しでも体調に異変を感じたら、練習をやめてくれるかもしれない。
それはあくまで可能性の話。だが、フェイトはそこまで愚かではないだろう。

前回の失敗を反省し、次に活かすことが出来るはずだ。
故に、危険だから。危ないからと頭ごなしに、彼女の大切なものを取り上げることは許される事ではない。

「（フェイトは、貴方のお人形じゃありませんよ、プレシア！）」

危険だからと何でもかんでも取り上げてしまえば、それではただのお人形ではないか。
フェイトは1人の人間だ。自分で考えて、行動出来る1人の女の子だ。決して、プレシアの人形などではない。

彼女の意思を、ないがしろにして良いはずが無い。
故にリニスは闘う。フェイトの意思をないがしろにしようとするプレシアに怒りを覚えたから。

「負けて、やるもんですかあッ！」

※

「はふぅ」

何もない真っ暗な空間。以前に一度、来たことのある空間に彼女――フェイトの意思はあった。
きょろきょろと周囲を確認してみるが、以前の様に真っ暗で周囲には何もない。

此処は一体、どの様な場所なのだろうか。疑問に思うが、心当たりが無いので堂々巡りになる。
いい加減、この真っ暗な空間から外へ出たい。早く起きて、プレシアや鬼柳、アルフを安心させてあげたい。

フェイトはそう、ごろんと寝転がりながら考える。

「――ん？」

と、フェイトが真っ暗な空間で寝転んでいると。不意にトタタ、と言う足音が響いた。
もしや、またも遊星がこの空間にいるのだろうか。疑問に思いながら、フェイトは足音が聞こえた方を向く。

「――――ッ！」

そして、足音の持ち主――こちらに向かって駆けてくる少女を見て、

フェイトは目を見開いた。
その少女の年齢は、自分よりちょっとだけ下。自分とそっくりの顔に、もはや同じと言って良いレベルの金色の髪。
頭には花飾りを乗せ、柔和な雰囲気を醸し出している少女。
フェイトは知っていた。彼女のことを。当然だ。自分の元となった少女なのだから。

「あ、ありし「とりゃー！」うわぁ！」

と、フェイトが驚いた表情を浮かべていると。
こちらに向かって駆けていた少女が、唐突に跳躍する。
向かう先はフェイトの胸。どうする事も出来ず、フェイトは少女を抱き止めた。
すると、自分の胸の辺りから良い匂いが漂ってくる。太陽の匂いと言うのだろうか。
化粧品などの匂いではない。草や花。自然から発せられる匂いが、少女の身体から漂っている。
まるでこの少女は原っぱの様だ。なんだか気持が良くなって、フェイトは少女の肩に顔を埋める。

「えへへ。元気だった、フェイト？」

「うん、お姉ちゃん」

少女――アリシア・テスタロッサは、笑みを浮かべながらフェイトに訊ねた。
フェイトもまた、アリシアの問いかけに笑顔で応える。すると、アリシアは一層ほほ笑んだ。

「前に会ったときから大分経ってたから、背が追い越されちゃったね」

「し、仕方ないよ。お姉ちゃんは、その……」

「そだねー。私は一生幼児体型だねー……」

ズーンと、アリシアが空間の隅で体育座りを行う。
何処となく彼女の背から、重い雰囲気が漂って来た。

思わぬ地雷を踏み抜いてしまい、フェイトはあわあわと慌てて慰める。
妹が姉を慰めると言う一見すれば珍妙な光景だが、少女たちは楽しそうに笑う。

「お胸の方はどうなんじゃ？　げっへっへ」

「ふぇえ!?　お、お姉ちゃん!?　はやてみたいだよ!?」

「ママが隠し持ってる雑誌を見て勉強してた！」

そしてアリシアは立ち直ると母親の秘密を暴露する。それを聞き、フェイトに絶望が襲った。
前々から母親や使い魔が変だと思っていたが、まさか姉まで変だとは思いもしなかった。

アリシアはイヤらしく手をわきわきさせながら、フェイトの胸部をロックオンする。
その姿はまさに興奮したはやてのよう。フェイトは慌ててアリシアから距離を取った。

それにしても、アリシアは一体いつ頃勉強したと言うのだろうか。
死んでから勉強など出来る筈もない。ならば死ぬ前に勉強したと言うのだろうか。

若干9歳にして、えっちな知識を保有する少女。
様々な意味でイヤすぎる。フェイトの背を、ダラダラと汗が流れた。

「お、お姉ちゃん!?　勉強って……」

「鬼柳さんだっけ。
その人からママが秘密の本を拝借してたから、私が精霊（スターダスト）になってこっそり読んでたんだよ」

「まさかの能力の無駄使いだった!」

ガビーン!と、フェイトをかつてないほどの衝撃が襲った。
鬼柳の隠し持っているえっちな本を拝借する母親も母親だが。

精霊の力を使ってその本を隠れて読む姉も姉だと、フェイトは心の底からがっかりする。
まさか自分の元となった少女は、こんなにもフロンティア精神溢れる持ち主だったとは思わなかった。

だが、スターダストがこっそりと本を読むシーンを想像し、フェイトは赤面する。
パタパタと翼をはためかせながら読んでいたのだろうか。意外と可愛らしいかもしれない。

その後、フェイトとアリシアはこの真っ暗な空間で、わーきゃーと遊び回る。
フェイトは楽しそうにこの空間を走り回り、アリシアは会えなかった寂しさを晴らすかのように走り回った。

「はふぅ、はふぅ……」

「つ、疲れたねぇ……」

そして走り回ること数十分後。ごろりと床に、フェイトとアリシアは寝転がっていた。
2人とも体力を使い切ったのか。はぁはぁと肩で息を整えている。

以前に一度、同じ様な空間で出会っているからだろうか。
すぐにアリシアと意気投合することが出来た。これは、彼女にとって珍しいこと。

フェイトは生まれてから鬼柳達と出会うまで、時の庭園から出たことは無かった。
いつも傍に居るのは母親と2人の使い魔。それがフェイトが知る世界だった。

故に、フェイトは少しだけ人見知りするところがある。初対面の人には、どうしても緊張する。
なのはや鬼柳と初めて会ったときは敵同士だと思い、それほど緊張はしなかったが。

なのでこうして、すぐにアリシアと遊んでいる自分がすごく珍しいのだ。
やはり、生まれは違えど姉妹と言うことだろうか。他人の様な気がしないのだ。

「……ねぇ、フェイト」

「どうしたの、お姉ちゃん」

そして呼吸も整い一段落したころ。不意にアリシアが口を開く。
一体どうしたんだろう。疑問に思いながら、フェイトは彼女に訊ねた。

「まだ、アクセルシンクロの練習をするの？」

「――――ッ！！」

そして、アリシアの口から飛び出してきた言葉に、思わず息を呑む。
そうだ。つい忘れてしまっていた。自分が何故、こんなところにいるのかを。

自分はアクセルシンクロの練習を行い、練習中に意識を失って事故を起こしたのだ。
詳しい理由などは分からないが、自分は生きてプレシアたちに再会出来るのだろうか。

もしも、もしも生きて再会出来なかったら。

「――――ぁ」

それを想像すると、フェイトの身体がブルリと震えた。
もう、大好きな人と会うことが出来ない。大好きな家族と会うことが出来ない。

それは、どんなに悲しいことなんだろう。それはどんなに寂しいことなんだろう。
フェイトの脳裏を、今まで出会った人たちの顔が通り過ぎて行く。
皆が皆、笑顔を浮かべていた。

「大丈夫。フェイトは生きてるよ。
私がお願いして、フェイトの意識を此処に留めてるだけ」

「ふぇ？」

「フェイト、もうやめない？
これ以上フェイトが怪我するところ、私は見たくないな」

フェイトが不安に怯えていると、アリシアがコテンと首を傾げながら告げる。
彼女の言葉を信じるならば、自分は助かったらしい。だが、何故自分はここに居る？

その理由は恐らく、アリシアがフェイトに訊ねたかったのだろう。
また、アクセルシンクロの練習をするのかと。彼女は自らの耳で答えを聞きたかった。

「一杯痛い思いをしたよ。沢山傷を作ったよ。
ねぇ、もう止めようよ。フェイトが傷つくことなんて、無いよ」

「ぅ、あ……」

アリシアが、フェイトの瞳を見つめながら言葉を掛ける。
その言葉のどれもが真実の様に思えて、フェイトは思わず口ごもった。

アリシアの言うとおり、沢山痛い思いをした。身体には沢山傷が出来た。
今回の事故で、身体に大きな傷跡が出来たかもしれない。障害が出来たかもしれない。

もう、止めた方が良いんじゃないか。もう一人のフェイトが、心の内でフェイトを誘う。
その誘いはとても魅力的で、辛くて苦しいことばかりだった練習よりも非常に魅力的に思えた。

プレシアに甘えて、鬼柳に構ってもらって、アルフにじゃれついて。
なのはやはやて、アリサにすずかと仲良く学校生活を満喫して。そんな生活を送ろう。

思わず、フェイトの心が揺れる。痛かった。事故で大けがをしたとき、すごく。すっごく痛かった。
思わず泣き出してしまうほど。思わずもう、練習を止めたくなるくらい、痛かった。

もう、諦めても良いんじゃないか。いつもの生活に戻れば良いんじゃないか。
もう一人のフェイトが、そう誘ってくる。もう、苦しいことが無くなる。

それはとても、良い考えの様に思えた。誰だって痛いことや苦しいことはイヤだ。
また、前の様に鬼柳達と過ごせばいいじゃないか。フェイトの心が思わず傾く。

しかし――――

『……アンタは、これで満足なのかよ?』

「――――ぁ」

不意に、脳裏に鬼柳の声が聞こえた。以前、母親に向けて言われた言葉。
その言葉を思い出し、フェイトは自分の意識がハッキリと覚醒するのを感じる。

頭に掛かっていた靄が消え、思考がクリアになる。傾いていた心が、元に戻っていく。
そうだ。なにをしていたんだ自分は。諦めるなんてそんなこと、出来るはずないじゃないか。

「そう、だった……。わたし、まだ満足してない……」

自分が何故、アクセルシンクロを練習しようと思ったのか。それは、自分が満足するためだ。
アクセルシンクロを会得し、遊星に認めてもらい。そして、鬼柳と肩を並べて一緒に満足するため。

そのために自分は、辛くて苦しいアクセルシンクロの練習をしていたのだ。
弱音を吐いている暇は無いはず。もしも諦めてしまえば、一生後悔することになるだろう。

まだ自分は満足していない。鬼柳と肩を並べ、共に満足すると言う誓いを成せていない。
なのに、此処で諦めてしまうとは何事か。自分は満足したい。新たなステージへと足を踏み出したい。

「私は、自分が満足したいから……練習してるんだった……」

いつの間にか、目的を見失っていた様だ。思わず口からポロリと零れる。

だが、仕方が無い。今までは遊星に追いつき、アクセルシンクロを会得する事ばかりに目が行っていた。

しかし、本来の目的は違う。アクセルシンクロを会得すること。それはあくまで手段であり、目的ではない。

自分の目的は、満足すること。アクセルシンクロを会得し、鬼柳と肩を並べて闘えるようになること。それこそが本当の目的。

自分はまだ、満足していない。鬼柳と肩を並べて闘えるほど、強くなっていない。

なのに、諦めてしまうのはどう言う了見だろう。とてもではないが、許可できない。

傷つく事がどうした。苦しいことがどうした。

自分はその先に待っている、満足感のためにしているのだ！

「まだ練習、するんだね？」

「――うん、するよ。お姉ちゃん」

アリシアの問いかけに、フェイトはコクリと頷く。

するとアリシアは諦めた様に、はぁと小さく嘆息した。

どうやら、フェイトに練習を止めて欲しいと言うのは彼女の本音なのかもしれない。

だが、フェイトは引き下がるわけにはいかなかった。まだ、満足していない。ならば満足するまでやるだけだ。

「ふぅ。しょうがないなぁ。
じゃあ、お姉ちゃんから1つアドバイスだよ」

「ほぇ？　あ、アドバイス？」

「自分だけが出来ることを見つけて。
そうすれば、きっと道は開けるはずだから」

アリシアのその言葉に、フェイトの視界を光が覆っていく。

どうやら、アリシアがフェイトの意識を手放した様だ。徐々に意識が遠くなる。

先ほどのアリシアのアドバイスを考える暇すらない。恐らく、現実世界で考えろと言うことか。

ならばひとまず、早く起きて鬼柳やプレシアを安心させなければ。

さぞ、心配を掛けた事だろう。

そして、自分だけが出来ることを見つけよう。

フェイトはそう、心に決めると、遠のく意識に身を任せた。

※

「くっ……！」

フェイトのために頑張ると自身を叱咤したリニス。
だが、戦況は悪いままだった。

相手のフィールドには、メンタルスフィア・デーモンが健在である。
他に、インヴェルズの斥候をリリースし召喚されたインヴェルズ・マディスがいた。

一方、リニスのフィールドにはボルテック・バイコーンが守備表示で召喚されている。
ボルテック・バイコーンとメンタルスフィア・デーモンではメンタルスフィア・デーモンの方が上。

故に、守備表示で召喚するほか無かった。

「終わり、の様ね」

「ぷれ、しあぁ……ッ！」

そして、リニスに死刑宣告が言い渡される。
リニスの場には、モンスターを護る伏せカードは存在しない。
守りの要であるボルテック・バイコーンを破壊されれば、ダメージが素通りしてしまう。
しかも、相手の場にはモンスターが2体。どうあがいても、一方のモンスターの攻撃は受けてしまう。

「くっ！」

リニスは己の不甲斐なさに、思わず下唇を噛み締める。
なんたる無様か。愛する少女のため、自分は勝利すら与えられないと言うのか。

手が白くなるほど拳を握るが、それでどうにか成る訳ではない。
そしてプレシアは無感動な瞳でリニスを見つめると、モンスターに指示を出す。

「≪メンタルスフィア・デーモン≫で≪ボルテック・バイコーン≫を攻撃！」

「きゃぅう……ッ！」

とうとうボルテック・バイコーンを破壊され、リニスを護る壁が存

在しなくなった。
彼女の残りライフポイントは１３００。どう足掻こうとも、彼女の敗北は決定していた。
だが――――

「止めよ！　≪インヴェルズ・マディス≫で「♪～～♪～♪」ッ、この音色は……！」

「これは……ハーモニカ？」

不意に、プレシアとリニスの耳に聞き慣れぬハーモニカの音色が聞こえた。
一体誰が吹いているのだろうか。プレシアも思わず攻撃を中断し、辺りを見渡す。

そして、ハーモニカの音色が聞こえてきた方向を見つけた。それは、この屋上への入り口。
カツ、コツ、と靴音を響かせて、その人物は階段をゆっくりと上がってくる。

肩先まで伸びた薄水色の髪。顔の右半分に施された黄色いマーカーが両者の目を引く。
身に付けているのはグレーのシャツに、同色のロングコート。そして同色のズボンと言う灰色尽くし。

その人物――プレシアとリニスにとって見慣れた男性は、二人を視界に捉えると吹いていたハーモニカの演奏を止めた。

そして、茫然としている二人に向け、彼は笑みを浮かべる。まるで、決着をつけるにはまだ早いと言っている様に。

「よぅ。悪いが、デュエルは中止だ」

十二話　「子の想い　母の想い　後編」（後書き）

次回予告

プレシアとリニスとのデュエルを中断させた鬼柳。
彼は二人に吉報を持ってくる。
「フェイトが目覚めた」と。

そしてプレシアはフェイトにアクセルシンクロの練習を続けるか否かを問う。
だが、フェイトの答えは当然イエス。その答えに、プレシアは納得できない。

そこでプレシアは彼女にデュエルを持ちかける。
自分が勝てば、アクセルシンクロの練習を止めること。
フェイトが勝てば、練習に関して黙認すると。

フェイトはこれを了承。そして、母と娘の闘いの火蓋が切って落とされる。

次回満足伝記～リリカルな世界で満足しようぜ～
「譲れない想い」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

十三話　「譲れない想い」（前書き）

次回からフェイトｖｓプレシアに入ります。
それにしても、最近暑かったですね

十三話　「譲れない想い」

～時空管理局　某所～

「すまない、遅れた」

謝罪の言葉と共に部屋に入ってくるのは、一人の少年だった。
ツンツンと跳ねた黒髪に、髪と同じ色の服――バリアジャケットを身に纏っている。

「いえいえ。忙しい中、私たちのために時間を割いていただきありがとうございます」

「そう言ってくれると助かるよ」

彼――クロノの言葉に答えたのは、ソファに腰掛けて紅茶を楽しんでいたイェーガーだった。
イェーガーの傍らには、彼と同じくソファに腰掛けて紅茶を飲む遊星。彼らとは逆に、ふんぞり返っているジャックの姿もある。

どうやら気分を悪くされていないとクロノは察すると、笑みを浮かべながら室内に入った。
この部屋は外部からの人間と応対するための客室。一通りの備品などは揃っている。

「ふん、遅れたくせに良い度胸だ」

「ジャック」

「ふん」

クロノがソファに腰掛けると、ジャックが視線で威嚇しながら訊ねる。

以前の闘いで軟化していたと思われていたジャックだが、依然としてプライドは高い様だ。

彼は遊星の言葉に鼻を鳴らすと、我が物顔でカップに紅茶を注いでいる。

何とも扱いづらい人間だと、クロノは内心で嘆息する。だが、この手の手合いは慣れていた。

「それでイェーガー市長。
ボクに何か用だと聞いたんだが」

「えぇ。探して欲しい人物が居るのです」

「その探して欲しい人物とは、このミッドチルダにいるのか？」

そして肝心の質問。クロノがイェーガーに呼び出される疑問を訊ねる。

イェーガーの口から返ってきた答えに、クロノは首を傾げながら聞

き返した。

どうやら彼らは誰かを探しているらしい。だが、何処に住んでいるのか分からないと来た。

仮にここミッドチルダにいるのならば、クロノの権限で探すことは出来るだろう。だが、場所を教えることはできない。

いくらイェーガーと顔見知りであるとは言え、むやみやたらに第三者に情報を提供する訳に行かないのだ。

「それは分かりません。何分、異質な場所で出会った様ですので」

「異質な場所？」

と、クロノがイェーガーの話を聞いていると。不意に違和感を覚えた。

出会った場所が異質とは、一体どう言うことなのだろうか。

一応、様々な次元世界にも異質な場所と言うのは存在する。

それは木々が鬱蒼と生い茂る森林だったり、神秘的な湖だったり。

だが、イェーガーの口ぶりから察すると、その様な場所ではない様だ。

何か事件が起こったのかもしれない。クロノは気持ちを入れ変え、イェーガーの話に耳を傾ける。

「はい。周囲を暗闇に覆われた空間、だそうです」

「……その口ぶりからすると、貴方は見たことが無いのか？」

「はい。その場所に行ったのは此処に居る不動　遊星。そしてジャック・アトラスなのです」

イェーガーの言葉を受け、クロノはチラ、と視線を遊星とジャックに向ける。

すると遊星はイェーガーの言葉を肯定するように頷き、ジャックもまた、真剣な表情で頷いたのだった。

「出会ったのは何もない空間だった。

だが、デュエルを始めようとすると景色が変わった」

「俺の場合は違う。

何処かの民家の様な場所で俺はアイツに会った」

「ん？　ジャック、キミが探し人と出会った場所は特に異質じゃないんじゃないか？」

遊星とジャックが、探し人に出会った場所について語りだす。

だが、ジャックが告げた場所は何の変哲もない民家の様だ。それが異質とは思えない。

ならば一体、何が彼に異質と言わしめているのだろうか。

それをジャックに訊ねると、彼は「ふん」と鼻を鳴らして続きを語る。

「あぁ、確かに俺が高町と出会った場所はただの民家だった。
だが、デュエルを始めると周囲の景色が抜け落ちた。世界から色が無くなる様に、な」

「なるほど」

ジャックの話を詳しく聞くことにより、その空間の異質さを認識する。
デュエルを始めようとすると、周囲の景色が変わる空間。そんな場所など聞いた事もない。

一体、遊星とジャックは何処で探し人と出会ったのだろうか。
と、クロノが内心で疑問に思っていると、不意に聞き慣れた単語が聞こえた。

「それにしても……高町？」

「！　高町を知っているのか？」

クロノの思わせぶりな態度に、ジャックがぐわっと顔を近づける。
突然自分の顔のすぐ近くにジャックの顔が出現し、流石のクロノも僅かに引いた。

「君の知っている高町と同一人物かはさておき、ボクの知り合いに

も高町と言う人物が居る」

「ソイツの特徴は？」

「≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を使う」

「うむ」

「白いバリアジャケット」

「ぬ。確かに高町は白い服を着ていたな」

「なのー」

「うむ。高町だ」

クロノとの問答を終え、ジャックが満足そうに頷いた。
どうやらクロノの知る高町――高町　なのはで合っているらしい。
世間は狭いと良く聞くが、まさかそれを自ら目の当たりにするとは思わなかった。
ジャックは探していたであろうなのはの情報に喜びを隠し切れていない様だ。

「今ので分かるのですか……」

「なのー、か。ジャック、俺の知らない場所に行ってしまったんだな」

その一方で、先ほどの2人の問答に納得していないイェーガーと遊星。
最初の2つは何となくわかるのだが、最後の「なのー」とはどう言う意味だろうか。

イェーガーはがっくりと肩を落とし、遊星は何処か遠くに行ってしまったライバル兼友人を生温かく見守る。
鬼柳に続き、ジャックまで自分の知らない場所へ行くとは。もしかしたら、今度はクロウが行くかもしれない。

これもまた、選択肢の1つなのだろう。
何となく、釈然としないものを感じるが。

「それで遊星。君が探している人物とは、もしやフェイト・テスタロッサか？」

「！　そうだ」

「そうか。やっぱりな」

ジャックの探している人物の特定を終え、今度は遊星の探し人を訊ねる。
だが、もはやクロノには誰を探しているのか理解できていた。

今から2年ほど前、なのはの友人であるフェイトがこう言っていたのだ。

「遊星さんに認めてもらい、鬼柳の隣で闘う」と。恐らく、遊星とは彼のことを指すのだろう。

そして彼女が遊星のことを言い出した当時のことを思い出す。あれは丁度、闇の書事件のころだ。

あの事件の際、なのはとフェイトの2人が闇の書の内部に閉じ込められると言うアクシデントを襲った。

そして事件解決後、彼女たちの口から定期的に「遊星」や「ジャック」と言う単語が聞こえてきた。

恐らく、遊星達は闇の書の内部で彼女たちに出会ったのだろう。でなければ、結びつくものがあまりにもない。

「俺の知るフェイト・テスタロッサは≪スターダスト・ドラゴン≫を使用していた」

「そうか。やはり……」

遊星にフェイトに関する質問をし、返ってきた答えにクロノは頷く。やはり彼が探している人物はフェイト・テスタロッサで間違いなかったようだ。

「だが、規則で教えることが出来ないんだ」

「っ、なんとかならないのか？」

「これも規則なんだ。無理を言わないでくれ」

しかし、彼女たちの情報をそう簡単に、第三者に教えることは出来ない。
これは別段、クロノが意地悪をしている訳ではない。個人情報を簡単に明かせないだけだ。

もしも個人情報が簡単に第三者に明かすことが出来たなら、様々な犯罪が横行するかもしれない。
それを防ぐための規則であり、義務なのだ。こればかりはいくらイェーガーからの頼みと言え、口にする事が出来ない。

しかし――――

「……そうか、すまない」

「……君たちは、しばらくミッドチルダに滞在するのか？」

「？　あぁ、少しの間だけ。観光みたいなものだ」

管理局員としてのクロノ・ハラオウンではなく。
一個人としてのクロノ・ハラオウンは、教えたいと思っている。

折角2人を探しに、わざわざミッドチルダまで出向いてきたのだ。
無駄足にさせたくはない。それに遊星とジャックは世界を救った決闘者の1人。憧れの人の役に立ちたいとも思う。

「そうか。なら、病院を回ってみると良い。なるべく大きな病院だ」

「？　病院？」

「あぁ。そこでもしかしたら、会えるかもしれないな」

「――――！」

故にクロノは、遊星達にぼかしながら伝えた。
さすがに彼らに直接、彼女が入院している病院を教えられない。
だが、ある程度のヒントは出すことが出来る。
遊星もクロノの言わんとしていることを理解したのか。僅かに頭を下げた。

「それじゃあ、君たちはロビーで待っていてくれ。
ボクはイェーガー市長と話がある」

「あぁ。行こう、ジャック」

「あぁ！」

クロノは部屋の雰囲気を変えるため、遊星とジャックに退室を促す。
ひとまず、当面の目的を彼らに与えたのだ。一刻も早く近場の病院を探したいだろう。
それに遊星とジャックは特に気を悪くした様子もなく、クロノに一

礼――ジャックはしなかった――して退室する。
そして部屋に残されたのはイェーガーとクロノのみ。幾分人口密度の少なくなった部屋で、クロノは肩を解した。

「さて。それではハラオウン執務官に頼んでおいた資料を渡してもらいましょうか」

クロノが肩を解し終え、一息ついたとき。イェーガーが真剣な表情でクロノに声を掛ける。
それにクロノは肩を竦めて答えると、自身の目の前にモニターを呼びだした。それらをタッチしながら答える。

「まったく。これを探すのに結構労力を使ったんだが？」

「それに対する対価も用意してありますよ」

「……そうだったね」

クロノの呆れた様な声に、イェーガーは涼しげな様子で答えた。
相変わらず、重要な役職に就く人間との話し合いは骨が折れると、クロノは内心呟く。

だが、イェーガーの方が普段会う局の上司よりも接しやすいのは確かだ。
今回イェーガーがクロノに調査を依頼したのは、とある神を祀る世界があるかどうか、と言うもの。

それに対する報酬も、イェーガーはきちんと用意してある。
それは彼らの世界で使われているデュエルディスクやDホイールに使用されているモーメント。

それらの技術を一部、管理局に与えることが今回の取引における報酬だ。
自分は何でも屋じゃないんだけどなとクロノは内心呟きつつ、調べ上げた世界の名を告げる。

「第〇×管理外世界。そこにあったよ。地縛神スカーレッド・ノヴァにたずさわる部族が」

※

「よぅ。悪いが、デュエルは中止だ」

唐突に、プレシアとリニスの対決に水を差したのは病室に居るはずの鬼柳だった。
彼は先ほどまで吹いていたハーモニカから口を離すと、視線をプレ

シアとリニスの2人に向ける。

「中止？　冗談を言わないで。
リニスとの決着を着けるところなのよ」

だが、そんな鬼柳の言葉に納得を示さない者が居る。
今までデュエルを優勢に勧めていたプレシアだ。

彼女はギロリ、と見るものを怯ませる様な視線を鬼柳に向ける。
だが、鬼柳とてそう簡単に怯むことはない。彼女の視線をジッと受け止め、口を開く。

「フェイトが目を覚ました、と言ってもか？」

「！　ふぇ、フェイトが目を覚ましたと言うの!?」

「あぁ。ついさっきだ」

「――――――～～ッ！」

鬼柳の言葉に、プレシアは居ても経っても居られないと言わんばかりに駈け出す。
向かう先は屋上からの出口。恐らく、駆け足でフェイトの入院している病室へ行くのだろう。

バタバタと慌ただしく飛び出して行ったプレシアを見送り、鬼柳の

顔に笑みが浮かぶ。
そしてようやくデュエルが中断されたことを知り、リニスがホッと嘆息しながらデュエルディスクを変形させる。

「助かりました、鬼柳。
あのまま続けていれば、自分は負けていたでしょう」

「気にすんな。それよりも、なんでプレシアとデュエルしてたんだ？」

デュエルディスクを待機モードへ変形させると、リニスは鬼柳に話しかけた。
だが、その話の内容に鬼柳は首を傾げる。彼としては、リニスを助けた覚えは無いのだ。

「あぁ、そう言えばそうですね。実は――――」

リニスは鬼柳の言動に納得すると、これまでの経緯を説明した。
プレシアがフェイトのデッキからカード――フォーミュラ・シンクロンを抜き取ったこと。

そのカードを廃棄しようとしたとき、リニスが乱入し強引にデュエルに持ち込んだこと。
だが、プレシアが本気を見せ、リニスは成す術なくデュエルに敗北しかけたことを告げる。

鬼柳はリニスの説明を聞き、なんとも複雑そうな表情でリニスを見つめた。
無理もない。プレシアの言い分も分かるし、リニスの言い分も分かるのだろう。
どちらか一方の味方をする事など、出来はしない。

「そう。今回のデュエル、プレシアは悪くは無いのです」

「……プレシアだって親なんだ。
子供を大事に思うのも無理は無いしな」

「えぇ。ですが、あの子の選択肢を狭めて良い理由にはなりません」

リニスの言葉に、鬼柳は静かに嘆息した。そう、今回のデュエルはどちらも悪くない。
プレシアとリニス。2人ともフェイトを想って行動したのだ。どちらもフェイトを大切に思うからこそ。
なんとか落とし所は無いものかと鬼柳は考えるが、なかなか難しい問題だと再認識する。
無理に問題を片づければ、必ずどちらにも遺恨を残すことになるだろう。それは出来る限り避けたい事態。

「……鬼柳、無理に解決しようとしなくても大丈夫ですよ」

「だが、フェイトのこれからが掛かってるんだぜ？　心配にもなる」

「ふふ。貴方は優しいのですね」

笑みを浮かべながら掛けられた言葉に、鬼柳の頬が僅かに赤くなる。
こうして誰かから優しいなどと言われるのに、彼は慣れていないのだ。

リニスは頬を赤く染めてそっぽを向いた鬼柳に微笑ましげな視線を向ける。
その様子はまるで、手のかかる弟を持った姉の様だ。何処か優しい雰囲気が漂う。

「そ、それよりもフェイトのところに行った方が良いな。
プレシアが何を言い出すのか、分かったもんじゃない」

「ふふ、そうですね」

「――――――～～ッ！」

鬼柳はその場の雰囲気を誤魔化す様に、慌てて話題を変える。
まずは一刻も早く、フェイトの元へ戻りプレシアを説得しなければならない。

フェイトのことを大事にしているプレシアだ。強硬手段には出ないだろう。
だが、万が一という可能性もある。鬼柳はリニスに視線で合図を送ると、屋上の出口へと向かう。

「……プレシア」

鬼柳が消えた屋上で、リニスはポツリと主人の名を呟く。
そのまま、視線を空へと向けた。何処までも広がる青空が広がっている。

そしてふるふると弱く頭を振ると、鬼柳の後を追うべく屋上の出口へと足を進めた。

※

「フェイトッ！」

バンッ！と、勢いよくフェイトの入院している病室の戸が開いた。
そして慌ただしく病室の中に入るのはプレシア。長い距離を走ったのだろう。息が乱れている。

彼女の視線の先には、鬼柳の言う通り目を覚ました様子のフェイト

が。
フェイトはベッドの上に腰掛け、心配していたのだろう。アルフに笑いかけている。
突然の母親の来訪に、目覚めたばかりのフェイトとアルフが目を丸くした。
だが、やってきたのが大好きな母親だと理解するとフェイトは嬉しそうな笑みを浮かべる。そして笑顔で母親を呼んだ。

「母さん！」

「フェイト……ッ！　あぁ、もう……！
こんなに心配を掛けて……！」

「うわぁ！」

ポロポロと、両目の端から涙を零しながら、プレシアはフェイトを抱き締めた。
フェイトは突然のプレシアの抱擁に驚いた様子だが、すぐに大人しくなる。
フェイトの額に巻かれた包帯が痛々しい姿を作る。
事故の際、彼女は額に傷を負った。下手をすれば、傷跡が残る様な傷を。
そんな傷を作ったフェイトが悲しくて、何もできなかった自分が悔しくて。
プレシアは目の端からボロボロと涙を零す。何もできない、無力な

自分が悔しい。

一方、プレシアに抱かれているフェイトももフェイトで、プレシアに迷惑を掛けたと思っているのだろう。
母親に身を預けながらも、母の温もりを確かめる様にプレシアの胸の感触を確かめる。

「えへへ。迷惑かけて、ごめんね」

「うぅ……、フェイトぉ……！」

母親の痛いまでの心配に、フェイトは思わず笑みが浮かんでしまう。
こんなに心配してくれるほど、プレシアは自分のことを大事に思ってくれている。

それがとんでもなく嬉しくて、フェイトは頬が緩むのを抑えきれない。
それにさっきは鬼柳がプレシアと同じくらい、フェイトの目覚めを喜んでくれたのだ。

これで嬉しくない訳が無い。

「はふぅ。あ、母さん」

「っく……。ど、どうしたの、フェイト」

「私のエクストラデッキ、知らないかな」

そしてプレシアが一段落したのを確認し、フェイトがプレシアに訊ねた。
訊ねたものは彼女の所持するデッキの一部。通常、エクストラデッキと呼ばれるものだ。

このエクストラデッキには、通常メインデッキに組み込まれない融合やシンクロモンスターが分類される。
先ほどプレシアが来るまでにメインデッキは見つけたのだが、エクストラデッキだけは見つけられなかったのだ。

プレシアはフェイトの疑問に思わず身体をビクリと振るわせる。
だが、自身を落ち着かせるように深呼吸をするとベッドサイドを指差した。

大丈夫。フェイトのエクストラデッキからフォーミュラ・シンクロンのカードを抜き取ったことは、黙っておけばばれるはずは無い。
フェイトには事前に考えていた通り、フォーミュラ・シンクロンのカードは無くしたと嘘を吐けばいい。それでフェイトは諦める。

「ん～と……」

フェイトはプレシアに教えられたとおり、ベッドサイドに置いてあったエクストラデッキを見つけた。
そしてカサカサと、カードを捲りながら欠けたカードなどは無いか、念入りに確認する。

プレシアはそんなフェイトの様子を、何処か落ち着かない様子で見つめていた。
娘に嘘を吐くのは心苦しい。だが、こうでもしなければフェイトはまた、アクセルシンクロの練習をする。
それだけはダメだ。
これ以上、フェイトの命を無意味に危険に晒す必要は無い。

「あれ、≪フォーミュラ・シンクロン≫がない……」

そしてとうとう、フェイトがフォーミュラ・シンクロンのカードが無いことに気がついた。
慌てた様子で、パラパラと何度もエクストラデッキの中身を確認する。しかし、一向に出てこない。

当たり前だ。そのカードは現在、プレシアのスカートのポケットに納まっているのだから。
プレシアは慌てた様子のフェイトを見て、すぅはぁと落ち着くために深呼吸をする。

落ち付け。動揺を悟られてはいけない。あくまで自然に、カードを無くしたことにする。
そしていざ、プレシアがフェイトにカードを無くしたと告げようとしたとき。

この病室に、新たな乱入者が姿を現した。

「≪フォーミュラ・シンクロン≫ならば、プレシアが持っていますよ、フェイト」

「ッ！　り、リニスッ！」

「あ、リニスだ！」

乱入者――リニスは、病室の入り口に立ち、フェイトに笑みを浮かべている。
そんなリニスの登場にプレシアは眉間の皺を増やし、フェイトは嬉しそうな表情を浮かべた。

リニスもまた、フェイトが元気そうでホッと安堵の息を漏らす。
そしてチラ、と伺う様な視線をプレシアへと向けた。

「プレシア。そのスカートのポケットに入っているカード、フェイトに渡したらどうですか？」

「……っ」

リニスの言葉に、プレシアはゆっくりと従う。
ごそごそとスカートのポケットを漁り、取り出すのは1枚のカード。

それは紛れもない、フェイトのカードであるフォーミュラ・シンクロンだった。
大事なカードを無くさずに済んでか。フェイトはホッと、安堵の息を吐いている。

だが、プレシアは「はい、どうぞ」とフェイトにカードを手渡すことが出来ない。
プレシアはカードを持ったまま、フェイトに視線を向ける。プレシアから向けられる真剣な視線。
それに思わずフェイトは姿勢をただした。

「……フェイト」

「な、なに？　母さん」

「貴方、まだアクセルシンクロの練習をするつもりなの？」

「！」

プレシアから投げかけられた言葉。その内容に、フェイトは息を呑む。
その言葉は、夢の中でアリシアに言われた事と同じだったからだ。
咄嗟に夢の中での記憶が蘇るが、もう迷わないとフェイトは頭を振る。
痛い思いをした。苦しい思いも、辛い思いも沢山した。だが、止まる訳に行かない。
何故ならば、自分はまだ、満足していないからだ。
自らを満足させられず、誰を満足させられると言うのだろうか。

「うん、母さん。私、まだ練習するよ」

「――っ！　フェイト！
もう、練習を止めて！　これ以上したら、フェイトが死んじゃうかもしれないのよ！」

プレシアは必死の思いで嘆願する。これ以上、娘を命の危険に晒したくなどない。
どうしてフェイトはこんな危険なことをするのだろう。いつもの様に、楽しくデュエルが出来れば良いではないか。

プレシアは必死にそう説得するのだが、フェイトは首を縦に振ろうとはしない。
ふるふると首を横に振ると、屹然とした様子でプレシアに練習の続行の意思を告げる。

「それでも、私はやりたいんだ。私はまだ、満足できていないから。
ここで諦めたら、私はこれからも肝心な時に逃げちゃう。そんな気がするんだ」

「そんな……！」

フェイトの宣言に、プレシアはガックリと項垂れる。
母親のそんな様子に、フェイトはチクリと胸が痛んだ。

彼女の大好きな母親に、これだけ心配を掛けて。

これからも、もっと沢山の心配を掛けようとしている。
自分がやろうとしていることは、そう言うことだ。

「（でも、私は諦めない。満足してないから）」

だが、それでもフェイトは歩みを止めようとしない。
自分の前に立ちはだかる2つの大きな壁。それを乗り越えて、自分は満足出来るのだから。

「――――ない」

「ほぇ？　か、母さん？」

「納得なんて、出来るはずない！」

だが、そんな彼女の想いも母親の出したヒステリックな声に霧散する。
ギョッと目を見開き、フェイトは母親に視線を向けた。そして視界に飛び込んできたもの。

それは、顔を俯かせて涙を堪えようとしているプレシアの姿だった。
どうしてもフェイトに練習をさせたくない。フェイトに危険なことをしてほしくない。

本心から、そう思っているのだろう。

フェイトの目の前に居るプレシアから、彼女の想いがひしひしと伝わってくる。

「うん、納得してもらえないのは分かってる。
でも、それでも私はアクセルシンクロの練習をしたい。
それで満足して、鬼柳の背中に追いつくんだ」

そしてフェイトは、心からの想いを母親にぶつける。
これが正真正銘、今のフェイトの本心だ。そこに嘘いつわりなど無い。

納得してもらえないのは分かっている。非難されるのも分かっている。
だけどそれでも、自分は辿りつきたいのだ。自分の前を走る、大好きな人の背に。

「――――ッ！　なら！
フェイト、私とデュエルなさい！」

「え！？」

「貴方が勝てば、練習は認めてあげる！
だけど私が勝てば、そのカードを没収するわ！」

だが、当然納得できないプレシアがヒステリックに叫ぶ。
そして彼女から提案されたのは、フェイトのこれからを決めるデュ

エル。

フェイトがプレシアに勝てば、アクセルシンクロの練習を認めてくれる。

これは素直に嬉しい。母親はきっと、納得していないだろうけど、認めてはくれるのだ。

だが、逆にフェイトが負けた場合のペナルティが大きい。

フェイトが敗北した場合、そのカード――フォーミュラ・シンクロンは没収される。

フェイトのことを第一に考えているプレシアの事だ。

2度とフェイトに返すことは無いだろう。

「（……母さんは、強い）」

フェイトは母親との戦力差を、冷静に分析する。

シンクロ召喚が主流となっている現在、アドバンス召喚で結果を残しているプレシアだ。

そのデュエルの腕前は、自ずと分かってくるだろう。

それにプレシアはリニスの主人。主人が使い魔よりも弱いなどと聞いたことが無い。

このデュエル、負ける確率は高そうだ。しかも相手は本気の母親。

恐らく、生半可な気持ちで挑めば敗北は必至だろう。

「（でも、負けないよ！）」

だが、フェイトは立ち向かう決心をする。
ここで逃げてしまえば、自分は自分を許せない。自分の行いに満足できない。

それに自分が追いかけているのは鬼柳と遊星の背中。
母親に立ち塞がられただけで、到底諦めることなど出来ない。

故に、フェイトはキッと真剣な表情でプレシアを見つめ返す。
プレシアもまた、真剣な眼差しでフェイトのことを見据えている。

「――――分かった。やろう、母さん。
私と母さんの、本気の勝負」

そしてフェイトは、プレシアの挑戦を受けて立った。

十三話　「譲れない想い」（後書き）

次回予告

とうとう開始されたプレシアとのデュエル。
プレシアが召喚するインヴェルズ達に、フェイトは苦戦を強いられる。

頼みの綱のスターダスト／バスターも破壊され、絶体絶命の大ピンチ。
だが、そんなフェイトを現地に集まった鬼柳やなのはたちが後押しする。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「覚醒する魂」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

十四話　「覚醒する魂　前編」（前書き）

フェイトのデッキの内容がちょこちょこ変わるなぁ。
ライディングデュエル、現実でもやってみたいです。

十四話　「覚醒する魂　前編」

～海鳴市　八神家～

「えぇ！？
そ、それって本当なの！？」

「あぁ」

一度、ミッドチルダから地球へと帰還した鬼柳は、八神家を訪れていた。
ひとまず現状とこれからの事について、なのはやはやてに説明を行うためである。

だが、鬼柳のその説明を聞き、なのはやはやてが驚いた様な声を上げた。
無理もないか、と鬼柳は驚いた様子の2人を見つめ、思う。

今から3日後。フェイトは母親であるプレシアと本気で決闘（デュエル）するのだ。
しかもフェイトが負けた場合、失うものはアクセルシンクロに必要なシンクロチューナー。

絶対に負けることが出来ないデュエルに、フェイトは現地でデッキの調整を行っている。
勝てるのだろうか。プレシアの実力を知る鬼柳は、複雑な表情を浮かべ、調整を行っているであろうフェイトを想った。

「そっか……」

「プレシアさんも、リニスさんの言い分も分かる。
……辛いデュエルになりそうやね」

「……あぁ」

苦い表情を浮かべるはやてに、鬼柳は同意を返した。
リニス、それにプレシアの言い分はどれも正しい様に思える。

母親は大切な娘の命を守りたいがために娘の大切なカードを奪い。
娘と母親の使い魔は、子供の意思を尊重すべく母親と対立している。

その双方、どちらにも非は見られない。
どちらの言い分も、ただ娘を心配しているだけなのだから。

「それでどうする？
フェイト達のデュエル、見に行くか？」

事情を説明し終わったところで、鬼柳はなのはとはやてに訊ねた。
そもそも、今回鬼柳が地球に帰還したのは、このことをなのはたちに訊ねるためだ。

さすがに守護騎士たち全員を連れて行くことは出来ないだろうが、
なのはとはやてくらいならば良いだろう。

鬼柳の話を聞き、なのはとはやては互いに「うーん」と考える。しかし、すぐに答えが出たのか。勢いよく手を上げた。

「私は行くよ！
フェイトちゃんとプレシアさんのデュエル、見届けないと！」

「そやね。勿論、私も行くで。
フェイトちゃんの気持ち、見届けなあかん！」

「そうか。分かった」

返ってきた答えは、当然同行すると言うもの。それに鬼柳はホッと息を吐く。
来てくれないかとも思ったのだが、どうやらその心配は杞憂に過ぎなかったようだ。

詳しい日程を説明すると、鬼柳はふかぶかとソファに背中を預ける。
背中から感じるソファのふかふかとした感触に、自然と鬼柳の瞼は閉じかかっていた。

「んにゃ？　鬼柳さん、もしかしてお疲れ？」

「ん……。フェイトが運ばれてから、そんなに寝てないから……な……」

鬼柳はフェイトが病院に搬送されてからこれまで、碌に睡眠を取っ

ていなかった。
フェイトが大変な時に眠るのはどうかと思い、フェイトの容体が落ち着くまで起きて看病していたのだ。
そのツケが、恐らく今、こうして鬼柳に降りかかっているのだろう。
ソファに背中を預け、眠そうに船を漕いでいる鬼柳を見て、なのはは笑みを浮かべる。

「鬼柳さん。はい」

「ん……？」

「膝枕だよ」

ぽんぽん、となのはは自身の膝を叩いて鬼柳を呼ぶ。
無意識の行動ゆえか、羞恥を覚えている様子は見られない。
鬼柳もまた、非常に強い眠気に襲われて羞恥を覚える暇もないだろう。
結果、鬼柳はゴロンとソファの上に横になる。当然、頭はなのはの膝に乗せて。

「ぐぬぬぬぬ……！
一歩出遅れてしもた！」

なのはの膝の上に頭を乗せると、鬼柳はすぐに穏やかな寝息を立て

始める。
それを見たはやては、ギギギ……！　とハンカチを噛み締めながら、凄い形相でなのはを見た。

彼女の瞳に宿るのは嫉妬の炎。どうして気付かなかったのだろう。
膝枕を提案することを。
なのはよりも早く提案していれば、自分があああして膝枕をしていたことだろうに。

「お疲れ様、鬼柳さん」

そして一方、なのはと言えば笑みを浮かべながら、鬼柳の髪を手で梳かしていた。
彼のサラサラとした銀の髪は、手触りがよく、いつまでも触っていたい気持ちになってしまう。

それに加え、今までほとんど眠らずにフェイトの看病をしていたと聞き、なのはは嬉しかった。
彼は依然として、自分やフェイト達を心の底から大切にしてくれている。それが間接的に知れて、なのはは嬉しさを覚えた。

フェイトばかり構って、と言う嫉妬も心の中にはあるが、フェイトの無事を喜ぶ感情の方が大きい。
無事にフェイトが退院できたならば、今度は自分に構ってもらおう。
鬼柳の髪の毛を梳きながら、なのはは思う。

そして約束通り3日後。
鬼柳となのは、それにはやてたちは、ミッドチルダにある病院の中庭に立っているのだった。

※

「身体の調子は……うん、良いみたい」

グッ、グッと身体の調子を確かめたフェイトが、そう独りごちた。
依然として彼女の身体には、あちらこちらに真新しい包帯が巻かれている。

今日はプレシアと約束していたデュエルの日。今日のために、フェイトは体調を万全にしていた。
手術後のため、傷口などに痛みはあるが、担当の医師に無理を言って鎮痛剤を打ってもらっている。

故に痛みのせいで、判断が狂うことは無い。
身体が鈍っている様子もなく、フェイトは微かに笑みを浮かべる。

「……お願い。力を貸して、私のデッキ」

体調を整え終えたフェイトは、次にデッキの確認に移る。
3日前、フェイトは鬼柳が地球に帰還してからデッキの調整に勤しんでいた。

生半可なデッキでは、プレシアにやられてしまうことだろう。
故にフェイトは、デッキを完全なものにすべく、調整を行っては調整と繰り返していた。

今、この場にあるのは現在のフェイトが考えうる限り、最高のデッキである。
これが今のフェイトの実力。この全力のデッキで、フェイトはプレシアと闘うのだ。

「行くよ、バルディッシュ」

『イエッサー』

相棒であるバルディッシュの応答を聞き、フェイトは笑みを浮かべた。
そして背中に羽織るのは、新たに調整された漆黒のマント。彼女の足もとまでをマントが覆う。

フェイトはマントを翻しながら、中庭へと続く道を歩く。

すでにその瞳に迷いは無い。あるのはただ、母親を打倒すると言う決意のみ。

そして、中庭へと到着する。すでにそこには、母親と彼女の使い魔。他、アルフや鬼柳、地球から駆けつけたなのはやはやての姿があった。

フェイトが中庭に到着すると、それを察知した母親の使い魔――リニスが駆け寄ってくる。

「フェイト。本当にやるのですね？」

「うん、リニス。私は悔いのない様にやりたい」

「そうですか……」

リニスはフェイトの告げた言葉に、悲しげに眉を潜めた。だが、それも無理のないことかもしれない。何故ならば、今回のデュエル。

それはフェイトの希望でライディングデュエルとなっているからだ。当然、母親やリニスは難色を示した。だが、フェイトは負けるものかと必死に説得。

そして粘りに粘り、見事プレシアからライディングデュエルの許可を取りつけたのだ。

だが、当然条件もある。それは通常の強度のバリアジャケットを纏うこと。そして一定以上の速度を出さない事だ。

フェイトはプレシアの提案を了承。
そして今日、フェイトの希望通りライディングデュエルが行われることになる。

「分かりました。くれぐれも、無理はしませんように」

「分かってる。大丈夫だよ」

フェイトはリニスに頷いて答えると、腕に装着したデュエルディスクにデッキをセットする。
そして自動でセットしたデッキがシャッフルされ、デュエルがいつでも開始できるようになった。

準備が完了したのを確認し、フェイトは中庭に一歩歩み出る。
そして相対するのは、露出の激しいワンピースの様なバリアジャケットに身を包んだ母親。

普段は柔らかな笑みを浮かべるその顔は、今は暖かさを感じさせない冷たい物となっている。
その表情は、以前に地縛神に精神を乗っ取られていた頃の様だ。思わずフェイトは足が竦んでしまう。

「フェイト、頑張って来いよ」

「頑張って！　フェイトちゃん！」

「応援しとるで！」

だが、足が竦みそうになったフェイトの背中を、鬼柳達ニ代目チームサティスファクションが後押しする。

掛けられた暖かい声に、フェイトは思わず笑みを浮かべた。そして一歩、足を踏み出してプレシアとの距離を詰める。

「……準備は、良いのね？」

「うん、母さん。私の準備は万全だよ」

「そう。なら――――」

フェイトの準備が完了しているのを確認すると、プレシアもまた、デバイスを起動させる。

自動でプレシアのデッキもシャッフルされ、先攻、後攻が自動的に決定される。

そして先攻に選ばれたのはプレシア。後攻はフェイトと言う順番だ。

デバイスによって決められた順番に異存は無いのか、フェイトとプレシアは頷く。

そして2人は、中庭を散策する散歩道に立つ。

2人の視線の先に広がるものは、大小様々な木が生えている気持ちの良い中庭。

この中庭を舞台に、フェイトとプレシアはライディング・デュエル

を行う。
プレシアとフェイト。2人の準備が出来たことを察知し、リニスがサッと手を上げた。

「「ライディングデュエル――――」」

リニスの手が、振り下ろされる。

「「――――アクセラレーション！」」

リニスの手が振り下ろされ、掛け声が重なったとき。
フェイトとプレシアは、スタート地点から中庭のコースを目指し、飛び出していた。

※

「先攻は私から、ドロー！」

プレシア手札５→６

「私は≪インヴェルズの斥候≫を守備表示で召喚！
　カードを１枚伏せて、ターンを終了！」

プレシア手札６→４
場　インヴェルズの斥候　伏せ×１

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札５→６

プレシアＳｐｃ　０→１
フェイトＳｐｃ　０→１

「私は≪ボルト・ヘッジホッグ≫を守備表示で召喚！
　カードを２枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札６→３
場　ボルト・ヘッジホッグ　伏せ×２

お互いに１ターン目は、盤石に守備を固めることに専念したようだ。
プレシアとフェイト。両者のフィールドには、守備表示のモンスターが並んでいる。

一見すれば動きそうにないこの状況だが、所詮は最初の１ターンのみ。
２ターン目からはスピードカウンターも溜まり、両者ともに激しい攻防を繰り広げるだろう。

そして、プレシアが動く――――

「私のターン！」

プレシア手札４→５

プレシアＳｐｃ　１→２
フェイトＳｐｃ　１→２

「私は場の≪インヴェルズの斥候≫をリリース！
そして手札から≪インヴェルズ・モース≫をアドバンス召喚！」

インヴェルズ・モース
星６／闇属性／悪魔族／攻２４００／守　０
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した時、
１０００ライフポイントを払う事で、
相手フィールド上に存在するカードを２枚まで
選択して持ち主の手札に戻す。

インヴェルズの先鋭をリリースされ召喚されたモンスター。
それは、まるで蛾の様な容姿をした悪魔族のモンスターだった。

さっそく召喚された上級モンスターの姿に、フェイトは僅かに臍を噛む。
インヴェルズの上級モンスターはどれも厄介な効果を持つ。このモ

ンスターもそうだろう。

「「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚されたこのカードの効果発動！
１０００ポイントのライフを支払い、相手フィールド上に存在するカード2枚までを持ち主の手札に戻すことが出来るわ！」

プレシアＬＰ４０００→３０００

「っ！　バウンス効果！」

「対象は伏せカード2枚よ！　手札に戻りなさい！」

「くっ！」

プレシアの召喚したモンスターが、背中に生やした羽を羽ばたかせる。
すると、先ほどまでフェイトの場に伏せられていたカードがフェイトの手札に戻った。

バウンス効果とは厄介なもので、攻撃反応型の罠カードでは対応できないのである。
フェイトもまた、攻撃反応型の罠を伏せていたのだろうが、モンスターの効果により不発に終わった。

「そしてバトル！　≪インヴェルズ・モース≫で≪ボルト・ヘッジホッグ≫を攻撃！」

「くぅううっっ！！」

ボルト・ヘッジホッグが破壊され、攻撃の余波による衝撃波がフェイトを襲う。
いくら鎮痛剤を打っているとは言え、彼女の身体は依然として傷ついている。

僅かに顔を顰めながら、フェイトは体勢を立て直した。
そして前方を飛翔している母親の背中を見つめる。

今のプレシアとフェイトの距離は、さほど離れているとは言えない距離を保っていた。
だが、フェイトの目からはプレシアの背中が驚くほど遠い。戦略、経験。全てがプレシアより劣っている。

だが、負けるつもりは微塵もない。
自分にプレシアと同等の戦略や経験が無いなら、プレイングでカバーするのみ。

「私はこのまま、ターンエンド！」

プレシア手札５→４
場　インヴェルズ・モース　伏せ×１

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札５→６

プレシアＳｐｃ　２→３
フェイトＳｐｃ　２→３

「（いける――――！）」

フェイトは先ほどデッキからドローしたカード。
さらに、手札のカードを見合わせて、コクリと首を縦に振った。
すでに手札には彼女の切り札――スターダスト・ドラゴンを呼ぶ準備が出来ている。
ならば彼女がすべきことは、一刻も早くエースを召喚し、フィールドを圧倒する事だ。

「私は手札から≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動！
デッキからカードを2枚ドローし、その後手札から1枚捨てる！
私はデッキからカードを2枚ドロー！　そして手札から≪シールド・ウィング≫を捨てます！」

フェイト手札６→６

「そして私は≪デブリ・ドラゴン≫を召喚！
召喚に成功した≪デブリ・ドラゴン≫の効果により、墓地から≪シールド・ウィング≫を特殊召喚！
さらに私のフィールドにチューナーモンスターが存在する場合、墓地より≪ボルト・ヘッジホッグ≫を特殊召喚！」

「≪スターダスト・ドラゴン≫ね……」

フェイトのフィールドを、低レベルのモンスターたちが埋め尽くす。
この戦法は以前、リニスとの手合わせでフェイトが行った戦法だ。
高速でスターダストを召喚するための。

大方、今回もスターダストの高速召喚を行うためのものなのだろう。
しかし、それでも良いとプレシアは思う。フェイトのエースを打ち倒し、彼女からカードを没収するのだから。

「レベル２≪シールド・ウィング≫とレベル２の≪ボルト・ヘッジホッグ≫に
　レベル４チューナーモンスター≪デブリ・ドラゴン≫をチューニングッ！」

デブリ・ドラゴンが４つの緑色のリングとなり、２体のモンスターを包み込む。
そのリングの中央で整列する星の数は４。リングの数と合計すれば、丁度８となる。

「集いし願いが、新たに輝く星となる！　光さす道となれ！
　シンクロ召喚！　天駆ける翼となれ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

そして４つの緑色のリングを光の奔流が打ち抜き、フェイトのエースが姿を現す。

白銀の体躯をした、星屑のドラゴン。スターダスト・ドラゴンは誕生の雄叫びを上げた。

※

「スターダストを2ターン目でシンクロ召喚するとはな……」

「フェイトちゃんのデュエルタクティクス、大分上達してる……！」

鬼柳達は病院の屋上から、中庭でのライディングデュエルを観戦していた。

今は丁度、フェイトが高速でスターダスト・ドラゴンをシンクロ召喚したところである。

なのははフェイトがライディングデュエルで高速でスターダストを召喚したことに驚いた様子だ。

何故ならば、ライディングデュエルは通常のスタンディングデュエルとは大分異なっていることが原因である。

ライディングデュエルではスタンディングデュエルで使えた魔法カードが使えない。

専用の魔法カード――スピード・スペルを使用しなければならないからだ。

スピード・スペルはいずれもクセが強く、そう容易く使いこなすことはできないだろう。

しかし、フェイトはその扱いづらいスピード・スペルを使いこなしている。

なのははライバルであり親友の少女のデュエルの戦略が自分よりも上と知り、僅かに焦燥を募らせた。

このまま自分は、のんびりしていて良いのだろうか。フェイトに先を追い越され、フェイト達の背を負うことになるのだろうか。

「私はカードを3枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札5→2
場　スターダスト　伏せ×3

「フェイトちゃんの伏せカード、十中八九≪バスター・モード≫やね」

「だろうな。この状況、伏せない方がおかしいぜ」

鬼柳の隣で、同じくデュエルを観戦していたはやてが呟くように口に出す。

恐らく、先ほどフェイトが伏せたカードの内、1枚はバスター・モードだろう。

相手はフェイトよりも格上の存在なのだ。全力でぶつからねばすぐに負けてしまう。
故にフェイトは、全力の証である／バスターを特殊召喚するはずだ。

「（――――だが、イヤな予感がする）」

しかし、イヤな予感がすると鬼柳は内心で思う。
あの厄介なモンスターを、プレシアが何の対策も施さないものだろうか。

現に、プレシアの表情には依然として余裕の表情が浮かんでいる。
フェイトの戦略を読み、その上で／バスターを破壊するつもりなのだろうか。

「貴方のエンドフェイズ時、伏せカード≪侵略の波紋≫を発動。
５００ライフを支払い、墓地からレベル４以下の「インヴェルズ」を特殊召喚するわ。
フィールドに≪インヴェルズの斥候≫を特殊召喚」

プレシアＬＰ３０００→２５００

「くっ――――！」

「何もないなら、私のターン、ドロー」

プレシア手札４→５

プレシアＳｐｃ　３→４
フェイトＳｐｃ　３→４

「母さんのドローフェイズ時、伏せカード≪バスター・モード≫を発動！
　私の場の≪スターダスト・ドラゴン≫をリリースし、デッキから≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫を特殊召喚！」

「来たっ！　フェイトちゃんの切り札モンスター！」

はやてが歓声を上げると同時、フェイトの場のスターダストを疾風が包み込む。
そして疾風をその身に纏ったスターダストは、その姿を通常形態から戦闘形態へとモードチェンジさせる。

胸に埋め込まれたのは、莫大な力を供給するためのエネルギー源。
四肢に装着された鎧は強靭で、並大抵の攻撃では破壊されることは無いだろう。

「……私は手札から≪Ｓｐ- エンジェル・バトン≫を発動。
　デッキからカードを2枚ドローし、手札を1枚墓地に捨てる。
　私が墓地に送るカードは≪ゾンビ・キャリア≫よ」

ゾンビ・キャリア
チューナー（効果モンスター）
星2／闇属性／アンデット族／攻　４００／守　２００
手札を1枚デッキの一番上に戻して発動する。
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

この効果で特殊召喚されたこのカードは、
フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

プレシア手札5→5

「っ！？　チューナーモンスター！？」

プレシアが墓地に送ったカードが意外だったのか。なのはが驚いた声を上げた。
一体何を驚いているのだろうと鬼柳は疑問に思ったが、先日のデュエルをなのは達は見ていないのだったなと思い出す。

そこで鬼柳は、プレシアの新たなデッキ――シンクロを混ぜたインヴェルズについて説明した。
と言っても、さほど難しい説明はしていない。自己再生が得意なチューナーを多く採用している、と言ったところか。

「ふぇえ……！　プレシアさん、構築センスもだけど引き運も強いんだね」

「そやね。欲しいカードを手札に自在に持ってくる……。どんな化け物やねん」

だが、いくらプレシアがデッキにチューナーを入れていると言っても、せいぜいが2～3枚ほど。
そのうちの大半は、デッキに眠っている事だろう。だが、プレシアはそのデッキの中から見事引き当てて見せた。

それがどれほど凄いことか、鬼柳にもよく分かる。
もしも自分の欲しいカードが自在にドロー出来たならば。
それはきっと、デュエルモンスターズの頂点に立つと言っても過言ではない。

「私は手札を1枚デッキトップへ送り、墓地から≪ゾンビ・キャリア≫を特殊召喚。
どう？　／バスターの効果で無効にするかしら？」

プレシア手札5→4

「くっ……！　うぅん、しないよ」

「そう。なら私は、場の≪ゾンビ・キャリア≫と≪インヴェルズの斥候≫をリリース！」

「っ！　上級モンスター……！」

「来なさい、≪インヴェルズ・ホーン≫！」

インヴェルズ・ホーン
星9／闇属性／悪魔族／攻3000／守　0
「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして
このカードのアドバンス召喚に成功した場合、以下の効果を得る。
1000ライフポイントを払う事で、
フィールド上に存在するモンスター1体を選択して破壊する。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

ゾンビ・キャリアとインヴェルズの斥候。
２体をリリースして召喚されたのは、カミキリムシをモチーフにしたモンスターだった。

２体のモンスターをリリースとして要求しているだけあり、攻撃力は３０００と高い。
他にも所持している効果が優秀で、他のインヴェルズとは違う、起動効果を持っていた。

つまり、自ら効果を使用しない限り、スターダスト／バスターで破壊されないと言うこと。
現れた厄介なモンスターに、鬼柳達の表情は苦くなる。かなり厄介なモンスターが現れた、と。

「私はカードを2枚伏せて、ターンを終了」

プレシア手札３→２
場　インヴェルズ・モース　インヴェルズ・ホーン　伏せ×２

「くっ、私のターン、ドロー！」

フェイト手札２→３

プレシアＳｐｃ　４→５
フェイトＳｐｃ　４→５

「不味い状況だな」

「……うん。スターダストが破壊されたら、かなり苦しいよ」

苦しい状況に立たされているフェイト。彼女を気遣う様に、鬼柳が呟く。

なにせ、プレシアの場には攻撃力２４００と３０００のモンスターが存在している。

どちらか片方の攻撃を通しただけで、大ダメージを負う必要があるのだ。

故に、ここは慎重にならなければならない。守備を固めるか。あえて闘いを仕掛けるか。

どちらも正しい様に思え、そのどちらも間違っている様に思える。

果たしてフェイトは、この状況で正解を見つけることが出来るのだろうか。

「バトルフェイズ！

≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫で≪インヴェルズ・モース≫に攻撃！」

「攻撃力の低いモンスターを破壊するみたい」

「アサルト・ソニック・バーン！」

フェイトの後ろを追従するスターダスト／バスターの口から、白いブレスが放たれる。

それは寸分の狂いなく、プレシアの場のインヴェルズ・モースを破壊しようとした。しかし――

「伏せカード≪聖なるバリア－ミラーフォース－≫を発動。相手モンスターの攻撃を無効にし、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊するわ」

「させない！　≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫の効果発動！自身をリリースすることで、相手の魔法・罠・モンスター効果を無効にし、破壊します！　ヴィクテム・サンクチュアリ！」

モンスターを護る様に張られたバリア。それをスターダスト／バスターが無効にする。なんとかスターダスト／バスターが破壊されずに済み、鬼柳達はホッと安堵の息を漏らした。

「ミラーフォースか、随分厄介なカードを伏せてやがったな」

「そやね。そやけど、これでミラーフォースはもう伏せられてない！」

「安全に攻撃できるの！」

先ほどプレシアが使用したミラーフォースは制限カードに指定されている。

制限カードはデッキに1枚しか入れることが出来ないので、プレシアはもう発動できない。

故にこれからは、他のモンスターを攻撃表示で召喚しておくことも可能となる。

だが、あのプレシアが何の考えも無しにミラーフォースを使うとも限らない。

一体何を考えているのか。それが推測できず、鬼柳は苦い表情を浮かべる。

「くっ、ターンエンド！
そしてエンドフェイズ時、≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫はフィールドに舞い戻る！」

フェイト手札３
場　スターダスト／バスター　伏せ×２

「私のターン、ドロー」

プレシア手札２→３

プレシアＳｐｃ　５→６
フェイトＳｐｃ　５→６

「さぁ、そろそろ邪魔なモンスターを破壊させてもらうわ」

「――――ッ！」

「≪インヴェルズ・ホーン≫で≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫を攻撃！」

「プレシアのヤツ、相討ち狙いか！」

プレシアの後ろを追従していた、カミキリムシの様なモンスターが動く。

対象はフェイトの場のスターダスト／バスター。こちらもまた、対象を捉えたようだ。

どうやらプレシアは、スターダスト／バスターとインヴェルズ・ホーンを相討ちさせるつもりらしい。

だが、相討ちさせてどうするつもりなのだろうか。／バスターは破壊されても、墓地から進化元のモンスターを蘇生させる効果を持つ。

つまり、プレシアはモンスターを1体分損している訳だ。

それに加え、残るインヴェルズ・モースでは蘇生されたスターダストを破壊出来ない。

一体、何を考えている――。

「くぅううっっ！

す、≪スターダスト・ドラゴン／バスター≫が破壊された時、墓地から≪スターダスト・ドラゴン≫を場に特殊召喚！」

鬼柳がプレシアの思惑を考えている間に、インヴェルズ・ホーンの

攻撃はスターダスト／バスターに炸裂。
進化元であるスターダスト・ドラゴンがフィールドに舞い戻る。

「続けて≪インヴェルズ・モース≫で≪スターダスト・ドラゴン≫を攻撃！」

「えぇ！？　攻撃力の劣っている≪インヴェルズ・モース≫で！？」

「そしてトラップカード≪侵略の手段≫を発動！
自分のデッキから「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を墓地に送り、
私は場に表側表示で存在する「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を選択。
選択したモンスターの攻撃力を８００ポイントアップさせるわ。
対象は≪インヴェルズ・モース≫！」

インヴェルズ・モースＡＴＫ２４００→３２００

「う、嘘！　攻撃力がスターダストを上回った！？」

「地に伏しなさい、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

攻撃力が大幅に上昇したインヴェルズ・モースの攻撃がスターダストに迫る。
咄嗟に反撃しようと口内にブレスを集めるが、その圧倒的な攻撃力の前に成す術もない。

「くっ、伏せカード≪ガード・ブロック≫を発動！
戦闘によるダメージを無効にし、私はカードを1枚ドロー！」

フェイト手札3→4

「っ！　スターダストが破壊されちまった……！」

「そっか。≪侵略の手段≫を伏せていたから、あえて相討ちを狙ったんだ」

スターダストが破壊され、圧倒的な不利に立たされたフェイト。
それを観戦していた鬼柳達は、中庭でデュエルしているフェイト同様、手に汗を握っていた。

なのはの言うとおり、プレシアはあえてスターダスト／バスターを相討ちに持ち込んだのだろう。
スターダスト／バスターが居る状態で先ほどのカードを使えば、スターダスト／バスターは無効にするはず。

それではいつまでも厄介なスターダスト／バスターを場に残してしまうことになる。
故にプレシアは、インヴェルズ・ホーンによる自爆特攻を選んだのだろう。

「そしてメインフェイズ2！　私は手札から≪Ｓｐ- シフト・ダウン≫を発動！
自分用スピードカウンターを6つ取り除き、私はカードを2枚ドロー！」

プレシア手札３→４

プレシアＳｐｃ　６→０

「そして場の≪インヴェルズ・モース≫をリリース！
来なさい、≪インヴェルズ・マディス≫！！」

場のインヴェルズ・モースをリリースされ、新たなモンスターが召喚される。
それは以前、プレシアとのデュエルの際に見かけたモンスターだった。

わざわざ攻撃力の低いモンスターを召喚するとはどういう事だろうか。
鬼柳となのは、それにはやては首を傾げる。だが、すぐにプレシアの狙いに気がついた。

「「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースして、アドバンス召喚されたマディスの効果！
１０００ポイントのライフを支払うことで、墓地から「インヴェルズ」と名のついたモンスター１体を特殊召喚するわ！」

プレシアＬＰ２５００→１５００

「ッ！　やられた！　プレシアは最初から自爆特攻なんてしちゃいねぇ！」

「≪インヴェルズ・ホーン≫を特殊召喚！」

プレシアの狙いに気がついた鬼柳が叫ぶが、すでに遅い。
先ほど戦闘破壊されたインヴェルズ・ホーンが場に特殊召喚されている。

プレシアは先ほど、何の考えも無しにインヴェルズ・ホーンを相討ちさせた訳ではない。
墓地より特殊召喚するカード――インヴェルズ・マディスが手札に存在していた故、気にすることなく特攻させたのだ。

マディスの効果で特殊召喚されたホーンは効果が無効になってしまう。
だが、現在大切なのは効果ではない。「インヴェルズ」と言う名称と攻撃力３０００と言う圧倒的な力が大切なのだから。

「フェイト、諦めなさい。
この圧倒的な不利を、どうすることも出来はしないわ」

背後に2体の上級モンスターを従えたプレシアが、フェイトに視線を向けながら、告げた。

十四話　「覚醒する魂　前編」（後書き）

次回はとうとうクライマックス、かな？
次話はちょこっとだけ遊星やジャックが登場予定です。

十四話　「覚醒する魂　後編」（前書き）

ようやくこのお話を書けました。
長かったなぁ。

十四話　「覚醒する魂　後編」

～ミッドチルダ　某所～

「どうだ、ジャック」

「ダメだ。この病院でもないらしい」

病院の受付から戻ってきたジャックの言葉に、遊星は頷く。
彼らは現在、此処ミッドチルダである聞き込み調査を行っていた。
その調査の内容とは、ある少女――フェイト・テスタロッサと高町なのはの所在についてである。
先日、クロノ・ハラオウン執務官と面会した際、彼から彼女たちは病院に居るとアドバイスを受けたのだ。
そのアドバイスを元に現在、遊星とジャックはミッドチルダ中の病院を回っているのである。
かれこれこれで、6件目だろうか。そろそろ見つかっても、おかしくは無い数の病院を回っている。

「くっ、本当に高町はこの世界に居るのか？」

「恐らく、な。今はクロノの言うことを信じるしかない」

「くそっ！」

苛立たしげに、ジャックは手近にあった壁を、力任せに殴りつける。壁を殴った痛々しい音が病院の待合室に響くが、ジャックはそんな事は気にしない。

遊星はジャックと連れだって病院から出ると、一昨日、イェーガーから貰った地図に目を落とす。
その地図はこのミッドチルダ近郊について描かれており、幾つか「×」マークが地図のあちこちについている。

この「×」マークがついてある場所が、今まで遊星とジャックが当たった病院だ。
残すところ、病院もあと3つほどしかない。クロノの言うことが本当ならば、そろそろ会えるだろう。

「ジャックはこの左の方の病院を見てくれ。
俺は地図のこの右の病院から、見て回ってみる」

「分かった」

遊星は地図を指差しながら、ジャックに指示を出す。
残っている病院は、ここから丁度中央、右、左の位置に1つずつ。

このいずれかになのはとフェイトが居るのだろう。
ジャックも遊星の言葉に落ち着いたようで、冷静に頷いて見せた。

「（……それにしても）」

地図を折り畳み、持ってきていた鞄に仕舞うと。
遊星は先日のクロノの言葉を思い出す。

クロノはなのはとフェイトを探すならば、病院を当たれと言った。
通常、その様な場合は住んでいる大体の地域を言えばいいのではないだろうか。

規則で禁じられていると言っても、なぜ病院などと言う大雑把な表現をしたのか。

「（もしかして、フェイトかもう1人が怪我をして入院しているのか？）」

そこで遊星は、ある1つの可能性に辿りつく。
それはフェイト。もしくはなのはと呼ばれた少女が入院している可能性だ。

これならば何故、クロノが病院を当たれと言ったのかも理解できる。
2人ともクリアマインドとバーニングソウルと言う、次元の違う力を手にしようとしているのだ。

怪我の1つや2つ、するのだろう。
もしもそうなれば、怪我の程度はどの程度なのか。

遊星は内心で想像しながら、先ほどまで聞き込みを行っていた病院

から離れる。
考えていても埒が明かない。まずは一刻も早くフェイトとなのはを見つけ出し、事情を聴かねば。

「……雨が降りそうだな」

どんよりと暗い空を見上げ、遊星はポツリと呟いた。

※

「フェイト、諦めなさい。
この圧倒的な不利を、どうすることも出来はしないわ」

フェイトの目前にそびえ立つように存在する、2体のモンスター。
彼女の切り札は既に倒され、彼女の身を守るモンスターは存在しない。

そんな圧倒的不利な状態に、フェイトの前方を飛翔するプレシアが告げた。

彼女が従えているのは、攻撃力２２００と３０００の高攻撃力を持ったモンスターたち。

明らかに不利なこの状況。だが、フェイトにサレンダーを行うと言う選択肢は無かった。

「うぅん、母さん。私は諦めないよ。
こんなところで諦めちゃったら、私は満足できないもの」

「――っ、なら、この状況を打破して見せなさい！
私はカードを１枚伏せて、ターンエンド！」

プレシア手札３→２
場　マディス　ホーン　伏せ×１

「私の、ターン！」

フェイト手札４→５

プレシアＳｐｃ　０→１
フェイトＳｐｃ　６→７

「くっ……！」

フェイトはドローしたカードを見て、僅かに顔を顰めた。
彼女がドローしたカードは速攻のかかし。相手の攻撃を防ぐ防御モンスターだ。

だが、このカードだけでは現状を打破できないのが現実。
溜まったスピードカウンターを消費しデッキからカードをドローしたい。

しかし、ドローするためのスピードスペルが依然としてデッキに眠っている。
この状況は限りなく不味い。一刻も早く体勢を立て直すため、フェイトはカードを伏せる。

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

フェイト手札5→3
場　伏せ×3

「私のターン、ドロー」

プレシア手札2→3

プレシアＳｐｃ　1→2
フェイトＳｐｃ　7→8

「私は場の≪インヴェルズ・マディス≫をリリースして、≪インヴェルズ・ギラファ≫をアドバンス召喚！」

「くっ……！　早く体勢を立て直さないと、フィールドがめちゃくちゃに荒らされる……っ！」

「「インヴェルズ」と名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚に成功したギラファの効果発動！

相手フィールド上のカード1枚を墓地に送り、私はライフを１００ポイント回復する！
対象は中央の伏せカード！」

プレシアＬＰ１５００→２５００

「――――っ！」

アドバンス召喚されたギラファの効果により、フェイトの伏せカードが墓地に送られる。
墓地に送られたカードは「くず鉄のかかし」。強力な防御力を持ったカードだが、墓地に送られれば無力。

しかも残りの伏せカードは防御カードではない。
プレシアの罠を判別する恐るべき嗅覚に、フェイトは冷や汗を流す。

「バトルフェイズ！
≪インヴェルズ・ギラファ≫でフェイトにダイレクトアタックッ！」

「きゃぁあああっっ！！」

フェイトＬＰ４０００→１４００

フェイトＳｐｃ　８→６

そして防御カードを破壊したプレシアが、モンスターに指示を出す。

彼女の指示を受け、動き出すのはインヴェルズ・ギラファ。
あえて攻撃力の低いモンスターから攻撃すると言うセオリー通りの動きだ。
しかし、これがフェイトに逆転のチャンスを与えることになる。
それは、フェイトの伏せたもう1枚のカード。

「り、リバースカードオープン！
≪活路への希望≫！　自分のライフポイントが相手よりも少ない場合、
ライフを１０００ポイント支払って発動できる！　お互いのライフポイントの差１０００ポイントに付き、
私はデッキからカードをドロー出来る！　母さんのライフとの差は２１００！　よって2枚ドロー！」

活路への希望（アニメ効果）
通常罠
自分のライフポイントが相手のライフポイントよりも少ない場合、
１０００ライフポイントを払って発動する。
相手と自分のライフポイントの差１０００ポイントにつき1枚、
デッキからカードをドローする。

フェイトＬＰ１４００→４００

フェイト手札３→５

「っ！　手札増強のトラップカード！　だけど……っ！
≪インヴェルズ・ホーン≫でダイレクトアタック！　これでお終

いよ！」

手札を補強したのも束の間、プレシアが止めと言わんばかりに攻撃を仕掛ける。
目前に迫るインヴェルズ・ホーン。この攻撃を貰えば、フェイトは負けてしまうだろう。

だが、これ以上のライフをプレシアにあげることなど、フェイトには出来なかった。
多大なダメージを負ってまで手札を増強したのだ。折角のチャンス、無駄には出来ない。

「相手モンスターの直接攻撃時、手札から≪速攻のかかし≫を捨てるよ！
これにより、バトルフェイズを強制終了するよ！」

速攻のかかし
星１／地属性／機械族／攻　　０／守　　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「くっ、伊達に防御を重視していないと言うことね……。
私はこのまま、ターンを終了」

プレシア手札２

場　ギラファ　ホーン

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札４↓５

プレシアＳｐｃ　２↓３

フェイトＳｐｃ　６↓７

「来た――――！」

プレシアのターンが終了し、フェイトはデッキからカードをドローする。

そしてドローしたカードを確認すると、口元を僅かに緩ませた。

先ほどドローしたカードは、手札補充兼墓地肥やしを行う２枚目のエンジェル・バトン。

目的のカードをなかなか手札に呼び込むことが出来なかったフェイトにとって、逆転のチャンスとなる物だった。

「私は手札から２枚目の≪Ｓｐ-エンジェル・バトン≫を発動！
私はデッキからカードを２枚ドローし、その後手札を１枚捨てる！」

エンジェル・バトンの効果の使用を宣言すると、フェイトはデッキからカードをドローした。

ここで起死回生のカードをドロー出来なければ、恐らくプレシアに

勝利することは限りなく無理だろう。
勝ちたい。勝たせてくれ。そう心の底で願いながら、フェイトはデッキトップのカードに手を掛ける。
そして、フェイトは願いを込めながら、デッキのカードをドローした。

「ッ！　来たっ！　私は≪スターダスト・ファントム≫を守備表示で召喚！
　さらに手札から≪Ｓｐ- サモン・スピーダー≫を発動！　手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚できる！
　来て、≪エフェクト・ヴェーラー≫！」

スターダスト・ファントム
星１／光属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
自分フィールド上に存在するこのカードが相手によって破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」１体を選択して表側守備表示で特殊召喚する事ができる。
また、墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、
自分フィールド上に表側表示で存在するドラゴン族のシンクロモンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターは１ターンに１度だけ戦闘では破壊されず、この効果を適用したダメージステップ終了時に攻撃力・守備力は８００ポイントダウンする。

フェイトのフィールドに、背に羽の生えた少女の様なモンスターが

出現する。
このモンスターは、先ほどのエンジェル・バトンの効果でドローしたモンスターだ。

もう少し早くにドロー出来ていればとフェイトは思うが、そんな「もしも」を考えても仕方が無い。
切り札である「／バスター」は破壊されてしまった。ならば後は、アクセルシンクロに頼るほかない。

しかし――――

「（私に、アクセルシンクロは……出来るの？）」

びゅうびゅうと肩で風を切って飛翔するフェイトはそう自問する。
ブルーノからシンクロチューナーを受け取って以来、ほぼ毎日練習してきた。

だが、その何れも成功したことがない。今まで一度も、成功したことが無いのだ。
そんな当てもないものに、自らの運命を賭けてしまっても良いのだろうか。フェイトは疑問に思う。

「（けど、ここで出来なかったら私はダメになる……！
私は母さんに勝って、鬼柳の背中を、遊星の背中を追いかけるんだ！）」

しかし、フェイトは自らの疑問をぶち壊した。キッと目を細め、前方を走る母の背を追う。
母の背中は遠い。すぐ近くに見えて、その実かなり遠いその背中。すこし目を離せば、見えなくなりそうだ。
だが、フェイトは諦めない。誰よりも憧れた背中を。好きな人の背中を追いかける決意をしたのだ。
こんなところで、母親の背中を見失う訳にも行かない。母の背中を追い越し、その先に待っている背中を追いかけるのだ。

「さらにリバースカード≪リミット・リバース≫を発動！
私の墓地に存在する攻撃力１０００以下のモンスター１体を蘇生するよ！
墓地より≪速攻のかかし≫を特殊召喚！」

「レベル１のチューナーとレベル１の非チューナー……！
まさか……ッ！」

「レベル１≪速攻のかかし≫にレベル１≪エフェクト・ヴェーラー≫をチューニング！」

プレシアがフェイトの意図に気がついたのか。ハッと表情を強張らせる。
だが、フェイトはそんなプレシアを無視すると速攻のかかしにエフェクト・ヴェーラーをチューニングした。
エフェクト・ヴェーラーが緑色のリングへと姿を変え、その中央を速攻のかかしが潜り抜ける。

2体のモンスターのレベルの合計は2。このレベルを持ったシンクロモンスターは、1体しか存在しない。

「集いし願いが新たな速度の地平へ誘(いざな)う。光さす道となれ！
シンクロ召喚！　希望の力、シンクロチューナー、≪フォーミュラ・シンクロン≫！」

そして光の緑色のリングを、白い光の奔流が打ち抜いた。
現れるのは、まるでレーシングカーの様な姿をしたモンスター。

だが、ただのシンクロモンスターではない。
このモンスターはシンクロモンスターでありながら、チューナーを持つ稀有な存在なのだ。

「≪フォーミュラ・シンクロン≫のシンクロ召喚に成功したので、私はデッキからカードを1枚ドロー！」

フェイト手札2→3

「カードを2枚伏せて、私はターンエンド！」

フェイト手札3→1
場　フォーミュラ　星屑影　伏せ×2

「私のターン、ドロー！」

プレシア手札2→3

プレシアＳｐｃ　３→４
フェイトＳｐｃ　７→８

「私のメインフェイズ１の開始時、私の場に伏せカードが存在しない場合、
　墓地から≪インヴェルズの斥候≫を特殊召喚出来るわ！　来なさい、≪インヴェルズの斥候≫！」

墓地より蘇生されるのは、小さな虫の様なモンスターだった。
だが、侮ってはいけない。このモンスターは名に「インヴェルズ」を持っている。

それに加え、自己再生を行えると言う厄介さを持っていた。
状況次第では何度も蘇る壁やリリース要因となる。厄介なことこの上ない。

「シンクロチューナー……！　目の前から葬り去ってあげる！
≪インヴェルズ・ホーン≫で≪フォーミュラ・シンクロン≫を攻撃！」

「くっ……！　きゃぁあああっっ！！」

放たれたインヴェルズ・ホーンの攻撃により、フォーミュラ・シンクロンが破壊される。
守備表示でシンクロ召喚していたためダメージは無い。それに蘇生手段も豊富に用意してある。

攻撃による衝撃波で吹き飛ばされた身体を立て直しながら、フェイトは必死に思考する。
これで残る心配はスターダスト・ドラゴンの蘇生のみ。だが、その心配も間もなく無くなるだろう。
何故ならば――――

「そして≪インヴェルズ・ギラファ≫で≪スターダスト・ファントム≫を攻撃！」

「くっ、破壊された≪スターダスト・ファントム≫の効果発動！
このカードが相手によって破壊され、墓地へ送られたとき、墓地から≪スターダスト・ドラゴン≫1体を
フィールドに表側守備表示で特殊召喚することが出来る！　フィールドに舞い戻れ、≪スターダスト・ドラゴン≫！」

「ッ！　≪スターダスト・ドラゴン≫のサポートカードだと言うの！？」

白い鎧を身に纏った戦士が消え、代わりにスターダスト・ドラゴンが現れる。
一度破壊され、墓地より蘇ったせいだろうか。翼や身体のあちこちに、無数の傷が出来ている。

けれど、その瞳に宿る戦意だけは消えてはいなかった。
自身の白い翼で身を守る様に、自身の身体を包んでいる。

「……ターンエンド」

プレシア手札３
場　ギラファ　ホーン　斥候

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札１→２

プレシアＳｐｃ　４→５
フェイトＳｐｃ　８→９

「私は伏せカード≪エンジェル・リフト≫を発動！
墓地よりレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚するよ！
来て、≪フォーミュラ・シンクロン≫！！」

そしてフェイトのターンに移り、彼女はとうとうアクセルシンクロを実行する。
そのためにまず、墓地に眠るフォーミュラ・シンクロンをカードの効果で蘇生させた。

こちらもスターダスト同様、墓地から特殊召喚したせいだろうか。
身体のあちこちには幾つもの傷が出来ており、満身創痍の様子を伺わせる。

「っ！　スターダストにシンクロチューナー！？
フェイト、あなたアクセルシンクロを！？」

「レベル８≪スターダスト・ドラゴン≫に
　レベル２≪フォーミュラ・シンクロン≫をチューニング――――！」

フェイトは母親の驚愕の声を振りきる様に、シンクロ召喚の合図を行った。
そして彼女の言葉に従う様に、フォーミュラ・シンクロンが２つの緑色のリングとなる。

通常、シンクロ召喚に使用される緑色のリングはモンスターのみを対象にしている。
しかし、今回のリングは違った。フェイトの進行方向に向かって伸びると、そのままフェイトすらも潜らせる。

するとアクセルシンクロを行うための影響だろうか。徐々にフェイトの飛翔速度が速くなっていく。
びゅうびゅうと耳元で風が唸り、フェイトの身体に風との摩擦で出来た擦り傷が出来る。

するんだ、アクセルシンクロを。勝たなくちゃ、母さんに認めてもらえない。
胸中で必死に自分を鼓舞しながら、フェイトはシンクロ口上を名乗り上げようとする。

しかし――――

「――――ッ！！！」

不意に、脳裏に先日の事故の様子が浮かんだ。
ぐんぐんと加速する身体は止まらず、木に衝突する凄まじい衝撃。

当時の出来事をありありと思い出してしまい、フェイトは思わずぎゅっと瞼を閉じてしまう。
もう二度とあんな痛い思いは、怖い思いはごめんだ。そしてフェイトは、恐怖を振り払う様に叫ぶ。

「あ、アクセルシンクロ――――!!」

「！　失敗……？」

だが、フェイトが叫ぶと同時、フェイトとスターダストを包んでいた緑色のリングが消滅した。
それと同時、フェイトのフィールドにシンクロ素材とされていたフォーミュラ・シンクロンが舞い戻る。

プレシアはアクセルシンクロが失敗に終わったことを悟り、安堵したように呟いた。
良かった。また、以前の様な失敗をされては、自分の命がいくつあっても足りはしない。

「――――ッ！」

そして一方、フェイトは苦汁に満ちた様子で自らのフィールドを見つめた。
条件は揃っていた。なのに、アクセルシンクロを成功させることは出来なかった。

「（やっぱり、私には出来ないの……！？）」

グッと下唇を噛み締めながら、フェイトは胸中で呟く。
あれだけ練習したのに。あんなに心配を掛けたのに、自分は成功できない。

自分で自分がイヤになると、フェイトは心の中でそう思った。
やはり、紛いものの自分ではダメなのだろうか。自分では、辿りつけないのだろうか。

失意のまま、フェイトはカードを伏せる事も、攻撃宣言をすることもなく、ターンを終了してしまう。
これで恐らく、勝敗は決してしまったのだろう。すぐにスターダストは破壊され、フォーミュラ・シンクロンも破壊される。

何が鬼柳の背中を追いかけるだ。何が遊星に認めてもらうだ。全然だめではないか。
悔しさで視界が滲み、視界がぼんやりとする。自分は、チームサティスファクションに必要無かった。

――――やっぱり、私は必要なかったんだ

そう、心の中で認めかけたとき。不意に遠くから。

自分の名を呼ぶ声が。聞き慣れた声が自分を呼んでいるのに、気がついた。

※

「フェイトォオオオッ！
何してやがる、しっかりしろ！」

「フェイトちゃーん！」

「フェイトちゃん、しっかりせぇ！」

「フェイトォッ！」

「鬼柳、なのは、はやて……それに、リニスも……」

茫然とした様子で、フェイトは自分の名を呼ぶ鬼柳達を見つめた。
さきほどまで病院の屋上に居たと言うのに、今は中庭まで降りてきている。

そして必死な様子で、鬼柳達はフェイトに声援を送っていた。

なりふり構わず、必死な様子で。それを見て、フェイトは思わず動揺する。

何故、何故鬼柳達はあんなに必死に応援しているのだ。
自分は所詮、約束も守れない情けない自分で、必要とされることなんてなくて。

徐々に自分の思考がネガティブになっていくのが分かる。しかし、その考えを止めることが出来ない。
なぜなら、それは酷く自分のことを現している様に思えたのだ。約束も守れない、必要とされていない。

しかし、そんなフェイトの気持ちを、鬼柳達は打ち砕く。

「お前とスターダストは俺たちのチームに必要不可欠なんだよ！
こんなところでつまずくなんて、俺は許さねぇぞ！」

「そうだよ、フェイトちゃん！
フェイトちゃんが居なかったら、私たちは全力を出せないよ！」

「そやから諦めんと！　頑張りやぁ！」

「鬼柳、なのは、はやて……！」

必要としてくれている。約束も守れない、こんな情けない自分を。
それが酷く嬉しくて、思わず目尻から涙が零れる。嬉し涙が、頬を汚す。

「ニ代目の初期メンバーが欠けるなんて、俺は許さねぇぞ！」

そうだ。自分はニ代目チームサティスファクションの初期メンバーの1人。
こんなところで負けてチームを抜けるだなんて、カッコ悪くてとっても恥ずかしい。

自分は鬼柳や遊星の様に。そして前方を飛翔する母親の様にカッコいい決闘者になるのだ。
だと言うのに、こんなところで負けて良い理由など無い。必ず勝ち、皆の背中に追いつくのだ。

そして、自分にできることをする。そして、チームに貢献するのだ！

「（私が出来ることは、鬼柳達から受け取った想いを次のメンバーに渡すこと……！
　無様に負ける事じゃない！）」

瞬間、フェイトの腕のアザが光り出す。
まるでそれが正解だと言う様に。ようやく正しい道を見つけたと言う様に。

「ふん、いくら声援を送っても無駄よ！
　フェイトは此処で負けて、二度とアクセルシンクロの練習なんてさせないわ！」

プレシア手札３→４
プレシアＳｐｃ　５→６
フェイトＳｐｃ　９→１０

「≪インヴェルズ・ホーン≫で≪スターダスト・ドラゴン≫に攻撃！」

だが、そんなフェイトの集中を途切れさせる様に、プレシアの怒声が響いた。
彼女は一刻も早く勝負に蹴りを着けるように、控えていたインヴェルズに指示を出す。

指示を受けたインヴェルズ・ホーンがスターダストへ向け、攻撃を放った。
あの攻撃がスターダストに命中すれば、きっとこのデュエル、勝つことはできない。

急がなくては。だが、そう思うと同時、腕のアザが輝きを放ち始める。
そして流れ込んでくるのは、鬼柳やなのは、はやての想いと力。

彼女たちの腕のアザも発光しているのだろうか。ハッキリと流れ込む力を感じる。
怖くない。まるで自分のすぐ傍に、鬼柳達が居る様な雰囲気をフェイトは錯覚する。

そして、フェイトを押し戻そうと吹き荒れていた風が変わる。
先ほどまでフェイトを拒絶する様に吹いていた風が、フェイトの事を受け入れる。

スピードが上がる。速度を上げた訳ではない。
ただ風がフェイトを後押ししてくれている。もっと速くと、風がフェイトを追いたてる。

「あ――――」

そして徐々にフェイトの意識が薄れて行く。恐怖は無い。
彼女の胸の中にあるのは、ただ漠然とした安心感と好奇心。

きっと瞼を閉じれば、新しい世界が見えているはず。
そしてそれが、スピードの世界と言うことをフェイトは理解していた。

こんな土壇場でスピードの世界を知覚するなんて。
そう思いながら、フェイトはゆっくりと瞼を閉じる。

そして、目の前に広がる光景に言葉を失った。
彼女の視線の先に広がるのは、何処までも続く白い景色。

否、それはただの白ではない。視界の脇を通り過ぎるのは景色だった。
何処かの街並みや森林。それら1つ1つの景色が、凄まじいスピードで通り過ぎて行く。

しかし、怖くは無い。否、何処か居心地の良さをフェイトは覚える。
まるでこの場所を知っているようで。まるで以前、この場所に来たことがある様で。

「おめでとう、フェイト。ようやく此処に来たんだね」

「って、ひゃぁっ！？」

そして掛けられた声に、フェイトは声が聞こえた方へと視線を向け

た。
視線の先には、服を身に纏っていない全裸のアリシアの姿がある。
チラ、と自分の姿も見てみるが、自分もアリシア同様全裸だった。
思わず驚いてビクリと身体を震わせてしまうが、周囲に誰も居ないことを確認して一安心。
頬を赤らめて周囲をきょろきょろするフェイトが面白いのか。アリシアはクスクスと笑っている。
フェイトはそんなアリシアを恨めしげな視線で見つめながら、なんとか彼女の元まで飛翔した。
「アリシア、此処は……」
「そう、此処がスピードの世界。
クリアマインドに達したものだけが来れる、新たな境地」
「これが……」
「ほら、フェイト」
「？」
アリシアに告げられた言葉を実感していると、不意にアリシアがある方向を指さす。
その方向とは、フェイトとアリシアの前方。そこに1枚の白いカードが浮かんでいた。

そのカードは、シンクロモンスターが描かれているはずのカード。
だが、浮かんでいるそのカードの何処にも、シンクロモンスターは描かれていない。

不審に思い、フェイトがジィッと何も描かれていないカードを見つめていると。
急にフェイトたちを包み込むように広がっていた景色が白くなっていく。

徐々に景色が無くなり、白ばかりの空間が広がっていく。
そしてそれと同時、何も描かれていなかった白いカードにモンスターが浮かび上がる。

浮かび上がったモンスターはドラゴン。全身を白い鱗で多い、力強い姿をフェイト達に見せる。
それがどの様な名前のカードなのか、フェイトには分かった。そして思わず、フェイトの瞳から涙が零れる。

――シューティング・スター・ドラゴン

ようやく自分は、遊星の背中に追いつく事が出来たとフェイトは思う。
けど、このままではダメだ。遊星の背中を追い越し、鬼柳の背中に追いつくためには。

フェイトはキッと、真剣な眼差しでシューティング・スター・ドラゴンのカードを見つめる。
アリシアはそんなフェイトを横目で見つめると、ニコリと笑みを浮かべた。

「さぁ、呼んで、フェイト。
貴方に与えられた、たった1枚のカードだよ」

「アリシア……」

「それで、母さんに認めてもらおう？
大丈夫だよ。私も、鬼柳さんたちもついてるよ」

アリシアの言葉に、フェイトはコクリと頷き返す。
そして徐々に、フェイトの意識が現実世界へと引き戻される。

大丈夫、自分はもう、あのドラゴンを呼ぶことが出来る。
アリシアの魂が宿ったあのカードを、呼び出すことが出来るのだ。

そして母親に認めてもらう。否、もう認められる必要は無いのかもしれない。
何故ならば、自分は既にクリアマインドの境地に達しているのだから。

――――そして、フェイトの耳に水が水面に落ちる音が聞こえる。

瞬間、フェイトはカッと目を見開いた。

「――――クリアマインドッ！」

「なっ！？」

スピードの世界から意識が帰還し、フェイトはクリアマインドに覚醒したことを伝える。
だが、プレシアから返ってくるのは戸惑いの声。プレシアはフェイトの言葉が信じられないのかもしれない。

当然と言えば当然だ。誰がこの状況で、クリアマインドに覚醒すると思うだろうか。
しかし、それでも良い。自分はこのデュエル、母に勝ち自らの目的を達成するのだから。

「伏せカード≪緊急同調≫を発動！
このカードの効果により、バトルフェイズ中のみシンクロ召喚を行うことが出来る！
レベル8シンクロモンスター≪スターダスト・ドラゴン≫に、レベル2シンクロチューナー≪フォーミュラ・シンクロン≫をチューニングッ！」

「くッ！？　サクリファイス・エスケープ！？」

緊急同調
通常罠
このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができる。
シンクロモンスター1体をシンクロ召喚する。

スターダスト・ドラゴンに命中しようとしていた攻撃が、寸前のところでキャンセルされる。

そしてそのまま、フォーミュラ・シンクロン再び2つの緑色のリングとなり、フェイトとスターダストを包み込んだ。

先ほどまで、フェイトを蝕んでいた恐怖は存在しない。あるのはただ、漠然とした確信だけ。

呼べる。必ず呼べる。鬼柳達に助けてもらい、アリシアに見届けてもらったあのカード。必ず呼ぶことが出来ると。

そして、シンクロ口上を名乗り上げる。

「死者と生者、ゼロにて交わりし時、虚無の彼方より流星は降り注ぐ！　光さす道となれ！」

グンッ！とフェイトのスピードが1段階上がる。

ゆっくりと前方を飛翔するプレシアの背中に追いつこうとしている。

だが、追いつくのではダメだ。プレシアの背中を追い越し、自分はプレシアに勝利する。

そしてフェイトは、エクストラデッキから1枚の白いカードを抜き放った。

「アクセル、シンクロォオオオオッッ！！」

「ふぇ、フェイト！？」

瞬間、フェイトの身体がその場から掻き消える。

そして残されたのは、プレシアの動揺した声のみ。

きょろきょろと周囲を見渡しながら、消えてしまったフェイトを探す。

だが、何処にもフェイトの姿は見えない。先ほどの行動は、一体どういうことだ。

「ッ！？」

と、周囲の様子を伺っていたプレシアは、不意に前方に気配を感じた。

まるで何かがワープしてきた様な。そんな感覚を、その気配から覚える。

しかし、そんなことはあり得ない。ワープなど、未だ誰も成し遂げられていないのだから。

では、一体誰が。そう思い、プレシアは気配の原因へと視線を向けた。そして、彼女は眼を見開く。

何故ならば彼女の視線の先には、先ほどプレシアの背後から掻き消えた少女――フェイトの姿があったのだから。

「彼方より来たれ、≪シューティング・スター・ドラゴン≫！！」

そしてフェイトの後ろから追従する様に現れる、白く美しいドラゴン。

そのドラゴンはフェイトを追い越すと、どんどんとその身を上空へと躍らせる。

フェイトを追い越したドラゴンは、その身から発せられる白い輝きで上空に立ちこんでいた雨雲を吹き飛ばしていく。
その姿はさながら、天より舞い降りた神の使い、と言う言葉が相応しいだろうか。何処か神聖さを感じさせるその行為。

中庭、病院、病院の周辺で観戦していた者たち皆が、その姿を捉える。
フェイトが召喚したそのドラゴンの姿を確認し、知らず皆が息を呑んだ。

「これが私の新しい力だよ、母さん！」

新しい力――シューティング・スター・ドラゴンを従えたフェイトは、そう声高らかに宣言した。

十四話　「覚醒する魂　後編」（後書き）

次回予告

ようやくクリアマインドの境地に達したフェイト。
シューティング・スター・ドラゴンと言う力で、フェイトはプレシアに勝利する。

母親にも認められ、これから明るい未来に向かうのかと思いきや。
フェイトの前に幾人もの報道陣が現れる。

「新たに出現した2人目のクリアマインド覚醒者」として報道されるフェイト。
このまま捕まってしまうのはいけないとばかりに、フェイト達はミッドチルダを脱出する。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「決着」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

十五話　「決着」（前書き）

今回はプレシアさんとのデュエルの決着です。
そして後半、まさかの展開が……。

さすがは伝説のサティスファクションのリーダーだ！

十五話　「決着」

～ミッドチルダ　某所～

「此処でもないか」

ジャックと別れた後、遊星は自分が向かう病院から出てきた。
どうやら此処にも彼の目的の人物であるフェイト・テスタロッサは居ない様だ。

一体何処へ居るのか。不安と焦燥が募り、らしくもなくイライラとする。
後はジャックからの連絡と、残る1つの病院だけ。このどちらにもいない場合、どうする事も出来ない。

――PiPiPi

「ん」

と、遊星が病院の入り口で行き先を決めようとしていると。
事前にイェーガーから渡された電子端末から呼び出し音が響いた。

一体誰が？　疑問に思いながら、遊星は電子端末を手に取る。
ディスプレイに浮かびあがっている名前はジャック。ライバルの名に、遊星は通信を受け取る。

「ジャック、どうした？」

『遊星か。こちらの病院も外れだ。
残る１つの病院がそうだろう』

「そうか……」

端末から聞こえてきたジャックの声に、遊星は静かに頷いた。
何となく、予想はしていた。残る最後の病院。そこにフェイトが居ると。

ならばやるべきことは決まった。一刻も早く、最後の病院へと向かうべきだ。

「分かった。なら、最後の病院へ行こう。俺も今から移動――！」

『ぬっ！？　こ、これは一体！？』

遊星がジャックに最後の病院へ向かうと連絡しようとしたとき。
不意に、遊星――ジャックの動揺した声も聞こえたのでジャックも同様か――の腕が輝きだす。

彼の腕から立ち上る光は赤。以前に何度も見慣れた、赤き竜のアザだった。
そして不意に、遊星は視線を空へと向ける。彼が見つめる先は、雨雲立ちこめる空。

だが、彼が視線を向けると同時、雨雲が発生していた空に、一筋の輝きが立ち上る。
その輝きは何処までも続く様な白。その輝きの中を、一体の白いドラゴンが上っていく。

「アレは……」

『遊星!?　どうかしたのか!?』

「至ったのか、クリアマインド……」

空高くへと飛翔するそのドラゴンを見て、知らず遊星の口から言葉が漏れ出ていた。
ジャックが端末の向こうから怒鳴っている様だが、今の遊星にそれに対応するだけの余裕は無い。

突如現れた――否、召喚されたと言った方が正しいか。召喚されたドラゴンに、遊星は見覚えがあった。
自分が以前ブルーノに導かれ、至った境地。クリアマインド。そこで得た力と同じ姿をしたモンスターだったからだ。

――シューティング・スター・ドラゴン

それは遊星のデッキにおけるエースモンスター。
そのモンスターが、他の人物の手によって召喚されたのだ。

クリアマインドに覚醒したものは、遊星やブルーノを除いて他には

居ない。
そしてブルーノは他界しており、アクセルシンクロを出来るのは現段階では遊星だけ。

だが、遊星はアクセルシンクロをしていない。今回、アクセルシンクロをしたのは第三者。
そして召喚された場所は、最後の病院がある位置と一致している。
間違いない。呼んだのだ、彼女が。

「……ジャック」

『ぬ。どうした、遊星』

「俺は必要無かったみたいだ。
見つけたみたいだ、自分だけのクリアマインドを」

『……そうか』

遊星の言葉に、ジャックは静かに頷いた。
どうやら多く語る事なくとも、彼らは通じ合えるらしい。

電子端末の通信を切ると、遊星はジャックと落ち合うポイントへと移動する。
自分は今回、必要無かったようだ。ならば今後、再び出会ったときのために力をつける。

再び相見えたとき、フェイトはどれほど強くなっているのだろうか。
待ち遠しくなる様な未来に期待を覚えつつ、遊星は帰路に着いたの

だった。

※

「これが私の新しい力だよ、母さん！」

「こ、れが……」

背後に白く輝くドラゴンを従え、フェイトは母親にそう宣言する。
力強く発達した四肢。ジェット機の翼の様な形状をした新たな両翼。
それら全てを併せ持った白銀のドラゴンは、金色の瞳でプレシアを見下ろした。
並々ならぬ存在感。ドラゴンから発せられるプレッシャーに、プレシアの声が僅かに震える。

「綺麗……」

「あれがフェイトちゃんの新しい力……」

そして離れた位置で観戦していた鬼柳達。彼らからは、感嘆の息が漏れ出ていた。
なのはは新たに召喚されたドラゴンに瞳を奪われ、はやてはそのドラゴンに圧倒される。

離れているこの場ですら、あのドラゴンの存在感を感じるのだ。
現場で直接、相対しているプレシアが受けるプレッシャーはどれほどのものか。

思わず、はやての手が隣に立っている鬼柳の腕へと伸びる。
鬼柳はそんなはやての手を握ると、そっと握り返した。

「フェイト、見せてやれ！
お前の新しい力ってヤツをよ！」

はやてを励ます様に手を握ると、鬼柳はフェイトに向けて声援を飛ばす。
どうやら超えなければならない壁は越えたようだ。ならば後はただ、プレシアを倒すだけ。

フェイトもそれを理解しているのか。鬼柳の声援にコクリと頷き返す。
その頼もしい様子に、鬼柳はニッと笑みを浮かべた。

「さぁ、母さん。攻撃を続行するの？　それともしない？」

「くっ、攻撃はキャンセル！　カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

プレシア手札４→３
場　ホーン　ギラファ　斥候　伏せ×１

「私のターン、ドロー！」

フェイト手札３→４

プレシアＳｐｃ　６→７
フェイトＳｐｃ　１０→１１

「私は手札から≪Ｓｐ- シルバー・コントレイル≫を発動！
　自分フィールド上の風属性モンスター1体の攻撃力をこのターンのバトルフェイズの間、１０００ポイントアップさせる！」

シューティング・スター・ドラゴン
シンクロ・効果モンスター
星１０／風属性／ドラゴン族／攻３３００／守２５００
シンクロモンスターのチューナー1体＋「スターダスト・ドラゴン」以下の効果をそれぞれ1ターンに1度ずつ使用できる。
●自分のデッキの上からカードを5枚めくる。
このターンこのカードはその中のチューナーの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。
その後めくったカードをデッキに戻してシャッフルする。
●フィールド上のカードを破壊する効果が発動した時、その効果を無効にし破壊する事ができる。
●相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、相手モンスター1体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

Ｓｐ- シルバー・コントレイル
通常魔法
自分用スピードカウンターが５つ以上ある場合に発動する事ができる。
自分フィールド上に存在する風属性モンスター１体の攻撃力をこのターンのバトルフェイズの間１０００ポイントアップする。

シューティング・スターＡＴＫ３３００→４３００

「攻撃力……４３００!?」

「さらに≪シューティング・スター・ドラゴン≫の効果発動!
１ターンに１度、デッキの上からカードを５枚捲り、捲ったチューナーの数だけ攻撃することが出来る!」

「!?　れ、連続攻撃!?」

「答えて、私のデッキ。
私は母さんに勝って、母さんに認めてもらいたい!」

グッと、デッキの上から５枚のカードを握り、フェイトは告げる。
すでにクリアマインドへと至った。残る障害は、母親に認めてもらうこと。

故に、このデュエルで敗北と言う結果だけは許されない。
必ずやこのデュエルで勝利を収め、母親や鬼柳達に認めてもらうのだ。

そして万感の想いをこめ、彼女はデッキの上から5枚のカードを捲る。

1枚目、スピード・ウォリアー。

2枚目、ジャンク・シンクロン。

3枚目、チェンジ・シンクロン。

4枚目、ガード・ブロック。

そして5枚目――グローアップ・バルブ。

――合計、3回の連続攻撃。

「私の捲ったチューナーの数は3枚！
よって3回の連続攻撃を行うよ！」

「――――ッ！！」

「スターダスト・ミラージュ！」

フェイトの攻撃宣言と同時、彼女に追従していたシューティング・スターの姿がぶれる。
上空で姿がぶれたシューティング・スター・ドラゴンは、計3つの幻影となり、プレシアに襲いかかる。

まず最初に向かったのは、圧倒的な攻撃力を持つインヴェルズ・ホーン。
しかし、生まれ変わったフェイトとシューティング・スターの前には、無力も同然だった。

「くぅううっっ！！」

プレシアＬＰ２５００→１２００

「続けて2撃目！　攻撃対象は≪インヴェルズ・ギラファ≫！
お願い、≪シューティング・スター・ドラゴン≫！！」

「くっ、伏せカード≪デストラクト・ポーション≫を発動！
自分フィールド上のカード1体を破壊し、破壊したモンスターの攻撃力分のライフを回復するわ！
対象は≪インヴェルズ・ギラファ≫！」

プレシアＬＰ１２００→３８００

プレシアは咄嗟に、自らのモンスターを破壊し己のライフを回復した。
インヴェルズ・ギラファを戦闘破壊されれば、プレシアの敗北は確定だ。

だが、たとえライフを回復しようが、プレシアの敗北は揺るがなかった。
インヴェルズ・ギラファがプレシアの手により破壊されたため、シューティング・スターの攻撃はまだ2回残っている。

最後の砦であるインヴェルズの斥候を破壊したとしても、あと1回の直接攻撃が残っているのだ。
攻撃力４３００のダイレクト・アタック。伏せカードが存在しないプレシアに、この攻撃を防ぐ手立ては無い。
故に、プレシアの敗北はフェイトがシルバー・コントレイルを使用し、
チューナーを3枚引いていた時点で確定していたのだ。

「攻撃対象を≪インヴェルズの斥候≫へ変更！」

「きゃぅうっっ！！」

「そして、母さん。これが私の、嘘偽りない気持ちだよ」

最後の壁であるインヴェルズの斥候を破壊され、プレシアの守りが無くなる。
もはやシューティング・スター・ドラゴンの攻撃を阻むものは、もはや存在しない。
そしてフェイトは、そんなプレシアに止めの一撃を打ちこむ。
たとえ危険なことだろうと、自分はそれを受け入れて進む。フェイトは言外に、プレシアにそう告げていた。

「――そう。これが、貴方の本音なのね、フェイト」

「うん、母さん」

「分かったわ。貴方の気持ち、しかと受け取ったわ」

「ありがとう」

プレシアはフェイトの言葉なき声を聞き取り、静かに頷いていた。
その瞳に映っているのは、先ほどまでの狂気に取りつかれた瞳ではない。

あるのはただ、娘の無事を心配している母の深い愛情だけ。
フェイトはそんなプレシアに申し訳なさを覚えつつ、感謝の言葉を口にする。

ありがとう。自分の我がままを許してくれて。
大丈夫。必ず、母さんの元へ戻ってくるよ。フェイトはそう、心の中で呟いた。

そして、最後の一撃がプレシアへと炸裂する――――

「うぁあああああっっ！！！」

プレシアＬＰ３８００→０

※

「――――っ」

ライフポイントが0になり、プレシアの身体が空中に投げだされる。
娘との本気のデュエル、勝利をもぎ取ったのは娘の方だった。

全力を出しつくし、全力で娘とぶつかり合ったのだ。
この勝敗に、悔いは無い。あるのはただ、一抹の寂しさだけ。

娘が。何よりも大切な娘が自分の元から巣立って言った様な。
そんな喪失感を味わう。そして、そんな喪失感を覚えながらプレシアは、茫然と視線を前に向けた。

彼女の視線の先には、微かに笑みを浮かべている己の使い魔の姿がある。
その使い魔は両手を広げ、まるで自分のことを受け入れる様にプレシアの事を待っていた。

「ご苦労様です、プレシア」

「んっ」

プレシアは、そんな使い魔の胸に飛び込んだ。ふわりと、柔らかな香りが鼻につく。
先ほどまで急加速でデュエルしていたせいだろう。プレシアの勢いを殺すため、リニスが足に力を入れる。
そしてようやく勢いを殺し終えると、プレシアはリニスの胸に顔を埋めた。
きっと今の自分は、酷い顔をしている。そんな顔を、使い魔に見せる訳にはいかない。
恐らく、リニスもそれを理解しているのだろう。
何も言わず、プレシアを受け入れている。
リニスの身体から伝わる温もりが心地いい。
自分は負けた。故に、フェイトの願いを聞き入れよう。そう、プレシアは思う。
そして、そんな彼女たちの前に、激闘を潜り抜けたフェイトが降り立った。
「母さん……」
「……っ、えぇ。フェイト。分かっているわ」
フェイトの呼びかけに、プレシアはリニスの胸から顔を離し、答えた。
彼女の表情には依然として不安の影が着き纏っている。しかし、それはごく僅か。

今のプレシアの表情には、立派に成長した娘に対する誇らしさが浮かんでいる。
辛い想いをさせてしまった娘が。悲しい出生を持つ娘が、こうも立派に育ってくれた。
それは、何よりも。母親としては限りなく、嬉しいことだとプレシアは思う。

「頑張りなさい、フェイト。あなたはもう、立派な決闘者よ」

「うん、母さん」

「そう。なら、早く貴方達のリーダーに勝利の報告をしてらっしゃい」

「！　うん！」

プレシアの言葉を聞き、フェイトはクルリと踵を返して鬼柳の元へ駈け出す。
きっと鬼柳もまた、フェイトの成長を喜んでくれる事だろう。それを思うと嬉しくなる。

フェイトがその場から立ち去るのを確認すると、プレシアはデュエルディスクを待機状態へと移行させた。
そして先ほどまで、何も言わずに自分を抱き止めてくれていたリニスへ視線を向ける。すると、彼女の暖かな瞳とぶつかった。

「プレシア。貴方の娘は、本当に立派に成長しましたね」

「えぇ、そうね。私とのデュエルで、最後の殻を壊せたのね」

「ふふ。ようやく、いつものプレシアが戻ってきました」

コロコロと、リニスは嬉しそうに笑った。それにつられ、プレシアも笑みを零す。

あぁ、たしかに自分は自分らしからぬデュエルをしていたのかもしれない。

娘が自分の元へ戻ってこないのでは。そんな恐怖に侵され、ただ我武者羅に喚いていた。

そんな自分は、自分らしくはない。自分が思う自分らしさとは、娘の成長を一歩引いた場所で見守る事だ。

「さぁ、行きましょうプレシア。

貴方に勝ったフェイトを褒めてあげなくてはいけません」

「そうね。――っと。そう言えば」

「？　どうしました？」

「デュエルが終了したら、フェイトは病室よ。

まだ無理をさせるには大分速いんだから」

「……そうでしたね。フェイトはまだ、病人でした」

プレシアの言葉で思い出したのか。リニスがテヘヘと笑みを浮かべる。
そんな何処か、元通りの雰囲気に満足しながら、プレシアもフェイトの元へ足を進めた。

※

「鬼柳～～！」

「うぉっと！」

トタタと駆けてきたフェイトが、ピョンっと鬼柳の胸元へダイブする。
鬼柳はそんなフェイトを危なっかしく抱き止めると、ニッと口元に笑みを浮かべた。

「やったな、フェイト。
アクセルシンクロ、出来たじゃねぇか！」

「うん！　えへへ、鬼柳やなのは。
はやてたちのおかげだよ」

「だが、成功させたのはお前だ」

フェイトは鬼柳の胸の感触を堪能しながら、勝利報告を彼に行う。
ようやくリーダーである鬼柳に対して、誇れるような勝利を飾れたのだ。

どうしようもなく、フェイトのテンションも上がってしまうだろう。
それに加え、チームのメンバーの勝利を我がことの様に喜ぶ鬼柳のこと。

こちらもフェイトの勝利が嬉しくて堪らない様子だ。
結果として、鬼柳とフェイトは2人きりの空間を作ってしまう。

「やったじゃねぇか」「えへへ。ありがとう」。何度この応答が行われただろうか。
そのせいか、遅れてやってきたなのはとはやては鬼柳とフェイトに向け、羨ましそうな視線を向けている。

「むぅー。フェイトちゃんばっかりずるい！」

「くぅっ！
こうなったら私らもパワーアップイベントとかクリアせなあかんのか！？
と言うかアレ！？　私、どないしてパワーアップすればえぇんや

！？」

お互いに黒いオーラがダダ漏れなのが分からないのか。
なのはとはやてはただ、ジッと鬼柳とフェイトの事を見つめている。

そのうち、なのはは鬼柳に抱かれるフェイトの事を二重の意味で羨ましく思っていた。
1つ目は今現在、鬼柳のことを独占していることについて。これはほぼ嫉妬と言って差し支えない。

だが、残る1つ。フェイトがとうとう、鬼柳のいるステージに進んだことに対して、羨望の感情を抱いていた。
自分は現状のデッキで満足していた。しかし、フェイトは違う。現状に満足せず、新たな力を独自に追い求めたのだ。

その結果が、先ほどのデュエル。召喚されたシューティング・スター・ドラゴンだろう。
これでフェイトは、ニ代目チームサティスファクションのメンバーとして恥ずかしくない力を示した。

「（じゃあ、私はどうなんだろう？）」

だが、なのは自身は鬼柳にニ代目チームサティスファクションに力を示せていない。
そのことがズシリと、なのはの胸にのしかかる。イヤな気持ちだ。
まるでまた、過去に戻ったかのような。

また、自分は独りぼっちに戻ってしまうのだろうか。鬼柳は自分の元から離れて行くのだろうか。
あり得ない妄想だと理解しつつも、なのははその想像を止めることが出来ない。皆と、離れたくない。

「（鬼柳さん。また、私に手を差し伸べてくれるかな？）」

もしもまた、独りぼっちになったとき。鬼柳は以前の様に手を差し伸べてくれるだろうか。
また、以前の様に「デュエルしようぜ」と誘ってくれるだろうか。
なのははは鬼柳の事を見つめ、考える。

「（大丈夫。きっと、鬼柳さんは手を差し伸べてくれる）」

そして辿りついた答えに満足すると、なのははやてを伴って鬼柳の元へ駆け出した。
きっと鬼柳はまた、以前の様に自分に手を差し伸べてくれるはず。
根拠は無いが、そう思える。

独りよがりかもしれないが、鬼柳の優しさがそれを許してくれると思う。
だから今は、鬼柳にくっ付いているフェイトをどうにかしよう。
そう思うと、なのははフェイトと鬼柳の元へ駆け出した。

※

「さて。そろそろフェイトは病室に戻らないとな」

フェイトと勝利の喜びを分かち合い、その後なのはやはやてに乱入され。
終いにはプレシアやリニス、アルフが乱入し混沌と化した中庭で、鬼柳が声を掛ける。

既にデュエルが終了してから３０分以上経過しており、勝利報告は十分に済んだ事だろう。
しかし、フェイトはまだ満足していないのか。ぷっくりと頬を膨らませ、鬼柳の腕に抱き付いている。

「もうちょっと一緒に居ようよ」

「とは言われてもな。まだフェイトは病人なんだ。
大人しく寝てないと、傷の治りが遅くなるぞ」

「むぅ～～」

唇を尖がらせて、フェイトは不機嫌そうに唸る。
なにせ折角堂々と鬼柳に構ってもらえていたのだ。不満になるのもしょうがない。

だが、鬼柳の言うことも正論である。今日は先のデュエルで身体を酷使しすぎた。
そろそろ休憩を与えなければ、傷の治りや体調に影響が出る事だろう。

鬼柳の言葉に渋々ながらも納得し、フェイトは同意の言葉を示す。
それに鬼柳は頷き、さぁ病室へ戻ろうとしたとき。彼らに「すみません」と言う言葉が掛かった。

「ん？」

「私たちミッドチルダ中央ステーションの者なのですが」

「ミッドチルダ、中央ステーション……？」

彼らに声を掛けてきたのは、見慣れぬ2人組の男女だった。
一体彼らは誰だろう。疑問に思いながら答えると、聞き慣れぬ単語を口にする。

言葉の意味から察するに、どうやらテレビ局の様なところだろうか。
そんなところが、自分たちに一体何の様なのだろう。プレシアと鬼柳は疑問に思う。

「先ほど召喚された白いドラゴンについてお聞きしたいのですが。あのドラゴンを召喚されたのはどなたですか？」

「え？　えっと、私だけど……」

「まぁ！　こんな女の子がクリアマインドを！？」

「「「「ッ！！」」」」

そのうちの女性――キャスターだろうか――は、先ほどのデュエルについて訊ねる。

特に問題ないと判断したのだろう。フェイトがコクリと首を縦に振りながら、答えた。

だが、そう答えると女性の雰囲気が一変する。

彼女の雰囲気が明らかに興奮したものに変わり、一緒に居た男性がカメラを回し始める。

突然の女性の雰囲気の変化に面喰いながらも、鬼柳やプレシア。

そしてリニスとアルフの大人たちが警戒を露わにする。なんだか面倒事の匂いがする。

「待て。何故、クリアマインドに至ったと分かった」

「簡単です。先ほど召喚されたのは≪シューティング・スター・ドラゴン≫。

かの英雄、不動　遊星がアクセルシンクロの末に召喚したと呼ば

れたモンスターだからです」

「そうなのか？」

「うん。遊星さんも、≪シューティング・スター・ドラゴン≫を召喚してたよ」

女性の言葉の裏を取る様に、鬼柳がフェイトに訊ねる。フェイトは鬼柳の言葉を肯定した。
そう言えば以前、遊星がシューティング・スター・ドラゴンを呼んだとフェイトに聞いたことがある。

そして今回、フェイトが同じモンスターを召喚したのだ。
しかも、現在確認されているアクセルシンクロモンスターはシューティング・スター・ドラゴンのみ。

特定できない方がおかしいだろう。

「しかも今現在、管理世界、管理外世界をくまなく探しまわっても、
アクセルシンクロを出来る決闘者は不動　遊星だけなんです！
もしも本当にこの子がアクセルシンクロを出来たなら、
史上２人目のクリアマインド到達者と言うことになるんですよ！
とっても凄いことじゃないですか！」

「？　２人目……？」

フェイトにインタビューしていた女性が、瞳をキラキラと輝かせな

がら力説する。
彼女の話によると、現在アクセルシンクロを出来るのは遊星のみと言うことらしい。

しかし、鬼柳はそんな女性の言葉に疑問を覚える。
フェイトは以前、遊星以外にもアクセルシンクロが出来る決闘者が居ると言った。

だが、彼女の口から出てきたのは遊星のみと言う言葉。
彼女が嘘を吐いているのだろうか。それとも、2人目は実在し、わざと公表していないのだろうか。

色々と疑問に思うことはあるが、現在鬼柳の胸中をある1つの感情が支配している。
その感情とは――――

「……あぁ～～……、なんだ。凄く厄介事の匂いがぷんぷんするんだが……」

「奇遇ね、鬼柳。私も凄く同感よ」

虫の知らせ、と呼ばれる感情で、鬼柳やプレシア。リニスはだらだらと冷や汗を流している。
史上2人目のクリアマインド到達者。話題にならない方がおかしいだろう。

しかも若干12歳にしての偉業だ。もしかしたら、遊星の偉業を超えることかもしれない。

召喚したモンスターも遊星と同じドラゴンと言うことで、様々なデュエルチームからお呼びがかかるかもしれない。

それに先ほどから、病院の入り口がガヤガヤと騒がしいのは気のせいだろうか。

明らかに不味いこの状況。打破するには、一体どうしたら良いのだろうか。

フェイトはフェイトで、女性の質問にコクコクと頷いている。

終いにはシンクロチューナーを見せている始末だ。

「……プレシア」

「えぇ、把握しているわ」

そしてこの状況を打破しようと、鬼柳はプレシアにアイコンタクトを送る。

プレシアも鬼柳の言わんことを理解しているのか。コクリと彼の視線に頷いた。

次いで、彼はリニスとアルフへと視線を向ける。

こちらからも、同意したと言う返答が返ってきた。

どうやら彼らの意思疎通は完璧らしい。

ならばやるべきことは決まった。1、2……と鬼柳は胸中でカウントダウン。

そして、カウントが5になると、鬼柳はフェイトの元へ駈け出した。

その背後では、アルフがはやてとなのはを肩に担いでいる。リニスはプレシアを御姫様だっこだ。

「えっと、≪シューティング・スター・ドラゴン≫をアクセルシンクロするときは――――」

「行くぞ、フェイト！」

「ほぇ？」

「あぁ！　な、何を!?」

鬼柳は興奮気味に語っているフェイトを、ひょいっと抱き上げた。肩に担ごうとしたがフェイトの身体を案じて、今回はプレシア同様お姫様だっこだ。

突如鬼柳に抱き上げられ、フェイトはキョトンと目を丸くしている。そしていざ、病院から脱出しようと踵を返したとき、彼の耳に女性の声が響いた。

「逃げるんだよ！　厄介事は勘弁してくれ！」

「はうっ……」

「っておい、フェイト!?」

背後に大きな声で怒鳴りながら、鬼柳は足を動かすのを止めない。
あのまま現地にとどまれば、大勢のマスコミに囲まれることだろう。
そうなってしまえば、フェイトの身体に障る。それだけは避けたい。
それに加え、フェイトがここに入院していると知られれば張り込む輩も出てくる。

とても落ち着いて休める状況ではない。
それならばいっそのこと、地球で治療した方がましだ。

「待ちなさーい！　まだインタビューが済んでないんですよー！　こらー！」

彼の耳に女性キャスターの制止する声が聞こえるが、鬼柳は足を止めようとはしない。
そしてそのまま、鬼柳達はフェイトが入院していた病院から脱出することになるのだった。

※

「ふぅ。助かったぜクロノ」

「まったく。君たちは本当に型破りだな」

病院から脱出した鬼柳達は、クロノの元に匿われていた。
現在いる場所は、クロノが用意したホテルの一室。そこそこな値段のする部屋だ。

そこでようやく、鬼柳達はホッと一息吐いているのである。
子供たちやプレシアを抱えて走った使い魔たちは安堵の息を漏らし、鬼柳はどさっとソファに腰を下ろした。

「それよりも、どうして俺たちのことだと特定できたんだ？」

「管理局に情報が寄せられたんだ。
ある病院で、見慣れぬドラゴンが召喚された、ってね」

「なるほどな。それですぐにマスコミが動いたのね」

プレシアの言葉に、クロノは「そうだ」と同意を示す。
どうやら病院でのデュエルを観戦していた誰かが、管理局やテレビ局に情報をリークしたのだろう。

結果として、あの病院に大勢の新聞記者やインタビュアーがやってきたと言うところか。
やはり厄介事になったかと、鬼柳やプレシア。そしてリニスはソファの上で頭を抱えている。

「きゅぅう〜〜……」

「むぅ〜！　私も鬼柳さんに抱っこされたい！」

「私も抱っこしてぇな！！」

その一方、先ほどまで鬼柳にお姫様だっこされていたフェイトは、ソファの上で目を回していた。
異性。それも好きな相手に抱っこされたせいか。頬がこれでもかと赤く染まっている。

そんなフェイトの様子になのははだんだんと地団太を踏み、はやては羨望の眼差しを鬼柳に向けている。
記者も記者だが、なのはやはやての機嫌を取るのも難しいものだ。
世知辛い世の中に、鬼柳は思わず嘆息する。

「恐らく、これからフェイトのところに大勢の記者やデュエルチームの関係者が押し寄せることだろう。
原因は分かっているな？」

「えぇ。史上2人目のクリアマインド到達者、話題にならない方がおかしいわ」

「そうだ。それとお見合いの話も増えることになる」

「？　お見合い……？」

クロノの告げた言葉の内容がよく理解出来なかったのか。鬼柳が首を傾げる。
チラ、と周囲を見渡してみれば、アルフやなのはも同様だった。これは一体どう言う事だろうか。

「プレシア、なんでお見合いが増えるんだ？」

「クリアマインドに到達するのは、とても難しいことなの。
1人1人に平等にチャンスが与えられているとは言え、到達できるのは一握りの人間。
この辺りは分かるわよね？」

「あぁ」

鬼柳は疑問に思い、事情を知っているであろう。プレシアへと訊ねた。
彼女は鬼柳の疑問にコクリと頷くと、ゆっくりと順序立てて説明を行う。

その説明によると、クリアマインドに到達できる者は全体のデュエリストのごく僅か。
いくら平等にチャンスが与えられているとは言え、全ての人間がクリアマインドに到達できる訳ではない。

故に、彼ら（この場合はお見合いをする相手）はクリアマインドに到達した者の血が欲しいのだと言う。

少なくとも、クリアマインドに到達できた者の血を入れた方が到達できる可能性が高くなるだろうと言う話だ。

その他にも、仮にクリアマインドに到達できなくとも、その他の人間から一目置かれることになる。

俗に言うアクセサリの様な物だろうか。自分の家にはクリアマインド到達者が居る。世間にそう自慢したいようだ。

だが、当然鬼柳はそんな話を黙って聞いていられない。

フェイトの都合を考えないのもそうだが、モノの様に扱うその姿勢が気に入らなかった。

「ちっ、胸糞悪い話だな……」

「仕方ないさ。クリアマインド到達者と言うのは、それだけで貴重なんだ」

「……鬼柳」

プレシアの説明に憤りを感じ、鬼柳はグッと拳を握りしめる。

そんなもののために、フェイトはクリアマインドに到達したのではない。

ただ、全力で戦うため。全力で遊星と闘うために、その力を得たのだ。

断じて、赤の他人のアクセサリになるために力を得たのではない。

そして、その話を偶然聞いていたのか。フェイトがキュッと鬼柳の

コートを握りしめる。
自分が新しい力を得たせいで、鬼柳やプレシアに迷惑がかかっていると思っているのだろう。

ちなみに、フェイト溺愛者の1人であるリニスと言えば、ぶんぶんとチェーンソーを振りまわしている。
どうやらフェイトをモノ扱いする一部の人間に憤りを感じているらしい。こちらは現在、アルフと交戦している。

「ただ、その分ある特典が受けられる」

「？　特典？　なんだ、そりゃ」

「簡単に言えば、重婚。
また、幼いうちから結婚、婚約が出来る様になる」

「「「「え？」」」」

鬼柳、なのは、フェイト、はやての素っ頓狂な声が室内に響いた。
明らかに今、クロノの口から出てはいけない様な言葉が飛び出した様な気がする。

鬼柳は一旦ソファに深く座り直すと、先ほどのクロノの話を頭の中で反芻した。
幼いうちから結婚、婚約が出来ると言うのには納得しよう。貴重な覚醒者だ、無理もないと思う。

だが、重婚が可能と言うのは一体どう言うことなのだろうか。

チラリ、と鬼柳が事情を説明する様にクロノに視線を向ければ、彼はポツポツと言葉を漏らす。

「結婚、婚約に関してはまぁ説明を省くぞ。
その様子じゃ重婚の方に納得がいかないみたいだからな」

「あぁ。そもそも、なんで重婚が可能になるんだ？
クリアマインドに到達しただけで、なんでそこまで得点を受けられる」

「簡単だ、クリアマインドに覚醒したものの血が欲しいんだよ。
男性が覚醒した場合は1人でも多くその男の血を受け継いだ子供が欲しい。
逆に女性の場合は好きな相手と結婚出来る。それがたとえ、既婚者であろうとも」

「……」

「そんな目でボクを見ないでくれ。
ボクが決めた法律じゃないんだから……」

依然として納得していないのか。鬼柳がジッとクロノを見つめる。
クロノはそんな鬼柳の視線を受け、思わず嘆息しながら呟いた。

そう。何もその法律は、クロノが決めた訳ではない。
今よりも数年ほど前、不動　遊星がクリアマインドに覚醒したことが切欠なのだ。

当時はクリアマインドと言う未知の技術に驚愕したが、後に召喚されたモンスターの効果も話題になった。
アレほど強力なモンスター。何処を探しても見つからないだろう。
故に様々な世界やチームが彼を引き込もうと躍起になった。

だが、どの国や世界、チームも彼を引きこめるほど魅力的な条件を揃えることが出来なかった。
いくら大金を積もうが、遊星は首を縦に振らない。いくら権力を与えようが、彼は首を縦に振らない。

不動　遊星を自らの世界、国、チームに引きこむことは無理だと、彼らは判断したのだろう。
ならばせめて、2人目の不動　遊星が現れたときのため、自分たちの世界に抱きこむために新たな法律を作った。

それが先ほどクロノが告げた重婚、幼いうちからの結婚、婚約の法律だ。
他にも別の世界では特別な権力を与える世界や、報奨金を与える世界もあるらしい。

「色々と無茶な話だが、納得はできるな……」

「まったくだよ。おかげでさっきから、ボクの携帯端末が鳴りっぱなしだ」

ブブブ、と振動している携帯端末を取り出し、クロノはため息を吐く。
どうやら彼がフェイトと接触している事を、管理局は掴んでいるら

しい。

お見合いやチームへの入団希望の話が、後を絶たないのだろう。
なんとも面倒な事になったと、鬼柳は頭を抱える。どうにかならないものか。

「えと、ごめんね、鬼柳。
私のせいでこんなことになっちゃって……」

「フェイトのせいじゃない。だからそう落ち込むな」

「うん……」

しょんぼりと肩を落としながら、フェイトが鬼柳に謝罪する。
どうやら彼女は彼女なりに、今回の件に関して責任を感じている様だ。

ひしひしと、肩を落としているフェイトから申し訳なさそうなオーラが漂っている。
鬼柳はそんなフェイトの様子に苦笑しながら彼女の頭を撫でると、さぁどうするかと考えた。

恐らく、フェイトが誰か相手か入団の意思を示さない限り、今回の騒動は収まらないだろう。
だが、フェイトをモノの様に見ている相手にフェイトを渡したくないのも事実である。

さて、どうやってこの騒動を収めるべきか。

顎に手を当てて考えていると、不意にプレシアの声が室内に響いた。

「そうよ。そうするべきよ」

「ん？　どうしたんだ、プレシア」

「鬼柳。貴方、フェイトと結婚なさい」

「――――――――は、ぁ？」

プレシアが告げた言葉の意味がよく理解できず、鬼柳の返事が遅くなる。
一体、先ほどプレシアはなんと告げたのだろうか。考え過ぎてぼぅっとしていた。

「悪い、プレシア。もう一回言ってくれ」とプレシアに訊ねるが、返ってきたのは同じ一言。
鬼柳。貴方、フェイトと結婚なさいと言う一言だけ。どうやら聞き間違いではなかったようだ。

実際、プレシアのその言葉を聞いたのだろう。なのはとはやてからは表情が消え去り。
フェイトはきょとんとさせていた表情を、ポンっと頬を赤くさせている。その様子は可愛らしいの一言。

だが、待って欲しい。一体何がどうして結婚と言う事実に結びついたのだろうか。
内心で動揺しつつも鬼柳は、プレシアへと事情の説明を頼んだ。

「だって、フェイトをモノの様に扱う連中にフェイトを渡したくないじゃない。
それに比べれば、貴方の方が何倍もマシよ。それに貴方の人となりは分かっているし、フェイトも好いているしね」

「いや、な……？　えっと……」

「それともなあに？　貴方はフェイトをモノの様にしか見ていない相手にフェイトをあげるの？
それに貴方はフェイトをキズものにしたのよ？　ちゃんと責任を取ってもらわないと」

「き、キズもの！？」

「あれ」

「ん？　あ……」

プレシアが指差した方へ、鬼柳は視線を向ける。
すると視界に飛び込んできたのは、頭に包帯を巻いたフェイトの顔。
真新しい包帯がフェイトの額の辺りを覆い隠し、痛々しい姿を晒している。
そんなフェイトの傷ついた姿を見て、鬼柳は先ほどまで動揺していた心が冷静になるのを感じた。
そうだ。元はと言えば、自分の監督不行き届きのせいで、フェイト

があんな傷を負ったのだ。
せめて自分がもう少しフェイトの体調に気を配っていれば、フェイトがあんな怪我を負うこともなかった。

なるほど。たしかにプレシアの言うとおりだ。
自分のせいでフェイトがキズものになった。ならば責任を取らねばいけない。

それにフェイトをモノの様に扱う連中に渡すのも胸糞悪い。
ならばいっそ、自分がフェイトの面倒を見よう。これから先、ずっと。

「よし、分かった。俺がフェイトの面倒、これからずっと見てやるぜ」

「ほぇ？　え、えぇえええええっっ！？」

「「き、鬼柳さーん（兄ちゃーん）！？」」

そして気がつけば、いつの間にかそんなことを宣言していた。

十五話　「決着」（後書き）

次回予告

突如フェイトと婚約した鬼柳。
一体どうしてこうなったと、後日彼は語っている。

だが、フェイトを一生面倒みると決めたのも事実。
故に彼はフェイトを養うため、頑張って仕事に精を出す。

一方、なのはやはやて、リインフォースは黙っていられない。
なんとか彼を自分に振り向かせようと、様々な策略をめぐらせる。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

2003

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　前編」（前書き）

意外とシリアスになってしまった様な気が……。
でもまぁ、妻を持った男性がデートすると言うのはそう言うことなんでしょうね。

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　前編」

～ミッドチルダ　某所～

フェイト・テスタロッサがクリアマインドに覚醒してから一週間。
管理世界や管理外世界の情勢は、著しく変化を始めていた。

世界で2人目のクリアマインド覚醒者の確保に、各世界が動き始めたのである。
様々な世界の重鎮、関係者がミッドチルダ、地球に殺到しようと動き始めた。

しかし、そんな彼らに待ったを掛ける様に発表されたとある事実。
それはフェイト・テスタロッサの婚約と言う、とてつもなく衝撃的な事実だった。

相手は地球に籍を置き、彼女が所属しているチームのリーダーである鬼柳　京介。
今まで無名だった彼の名前と彼の作ったチームの名前は、飛躍的に広がることとなる。

だが、そんな発表を聞いて納得できない者もいる。否、半ば大半の者がそうだった。
そこで彼らは、フェイト・テスタロッサに与えられた権利の1つである「重婚が可能」と言う権利に目を着ける。

なんとか愛人のポジションでも良いのでどうか、と彼らはフェイトと彼女の旦那である鬼柳に頼み込んだ。

だが、返ってくるのは「拒否」の一言。私の旦那は1人で良い。と言う、フェイトのハッキリとした拒絶の意思だった。

尚も言い募ろうとする彼らだったが、そこにフェイトが籍を置くミッドチルダが介入する。
地球に籍を置いてある彼女だが、ミッドチルダにも同様に籍が置いてあったのだ。

フェイト・テスタロッサの機嫌を損ねない様にか。ミッドチルダは彼らの今後の介入を認めない考えを取る。
下手に機嫌を損ねられ、ミッドチルダでの籍を取り消されては敵わないからだ。

故に、ミッドチルダは本腰を入れてフェイト・テスタロッサの保護に身を乗り出す。
各管理世界、管理外世界の重鎮たちはミッドチルダの本格的な介入を良しとしなかったのか。

その矛を収めた。
それから1週間後、場面は鬼柳に縁のある者たちへと移り変わる。

※

「おぉーい、遊星ぇ！」

バタンッ！と勢いよく、時計屋の地下室が開かれた。
聞き慣れた声に、遊星は調整していたDホイールから顔を上げる。

すると彼の視界に飛び込んできたのは、ツンツンと跳ねる様に伸びている橙色の髪の毛だった。
次いで、遊星の視線はその人物の顔に目が引かれる。顔のあちこちに施されたマーカー。中でも額のマーカーが目を引く。

彼――クロウ・ホーガンの姿を認めると、遊星は口元を僅かに緩めた。

「クロウ、どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもあるかー！
おい、鬼柳のヤツが結婚ってホントなのか！？」

「あ、あぁ……。本当みたいだ」

懐かしい仲間の姿に遊星も嬉しそうだが、クロウはそうもいかないらしい。
鬼柳の結婚の報を聞き、事実確認のために、遊星の元へやってきたのだろう。

そして遊星がコクリと、彼の疑問を解消する。既にその発表は遊星

の耳に届いていた。
まさかあの鬼柳がと思うと同時、何処か嬉しいと遊星は感じる。

ようやく彼が抱いていた怒りが誤解だと分かり、彼も新たな人生を歩み始めたと言うところか。
だが、１２歳の花嫁と言うのは一体どう言うことなのだろうか。ちょっと花嫁にするには早いんじゃないのか。

遊星は密かに思う。

「……く、クロウ？」

そしてクロウの声が聞こえないことに気がついた遊星は、ハッと我に返った。
視線を先ほどまでクロウが居た場所へと向けてみれば、そこには膝をついて四つん這いになっているクロウが。

しかも何処か打ちひしがれた表情を浮かべており、真っ白な灰と化している。
よほど鬼柳の結婚がショックだったのだろう。浮いた噂の無いクロウの様子に、遊星は苦笑いを浮かべる。

「ちくしょう……、結婚とか早過ぎだろぉが……。
遊星にはアキが居るし、ジャックにはカーリーも居るし……。ちくしょう」

「く、クロウ……」

クロウの口から漏れる、壮絶な言葉に遊星は彼に掛ける言葉が分からない。
そう言えば鬼柳の結婚の報せから少しして、アキがこちらに戻ってくる様な事を言っていた。

その際に「大事な話がある」とも言われていたなと、遊星は今さらながらに思い出す。
大事な話とは何なのだろう。病院の経営が上手くいっていないのだろうか。遊星は首を傾げる。

「だ、大丈夫だクロウ。お前にもきっと良い人が見つかるさ」

「ちくしょう！
その優しさが痛いんだよぉおおおおーーーーっっ！！」

「クロウ！？」

ボロボロと悔し涙を流しながら、クロウは地下室を駆け出して行く。
大方、孤児の元へ慰められに行ったのだろう。不憫な親友の姿に、遊星は涙を禁じえない。

だが、いつか本当にクロウにも良い人が現れてくれると遊星は思っている。
身寄りのない孤児たちのために、クロウは命を掛けて全力で頑張れる。

これほど義理人情に厚い人物を、遊星は数えるほどしか知らない。
だから何時か、きっと良い人を捕まえられることだろう。

遊星は走り去った不憫な親友のこれからを願いつつ、来訪するアキのために室内を片付けるのだった。

※

「はぁ……」

慣れないため息を吐きながら、現在次元世界の渦中の人物である鬼柳は、トボトボと家路に着いていた。
背中から漂う哀愁は涙を誘うほどであり、とても次元世界の話題を掻っ攫っている人物には、到底見えそうもない。

普段は彼の身体から発せられている「満足オーラ」も、今回ばかりは打ち止めだった。
今の彼の姿は、まるで残業で疲れたサラリーマンの様にも見える。
それほど彼は疲れ切っていた。

「くそっ、恭也の野郎……」

肩を落としながら歩いていた鬼柳だったが、なんとか頭を持ち上げる。
そして先ほどまで勤務していた喫茶店の従業員――高町　恭也のことを思い出し、憮然とした表情を浮かべた。

「別にフェイトとまだ、そう言うことした訳じゃねぇのに……。
人をまるで性犯罪者みたいに言いやがって」

彼の口から漏れてくるのは、不満や愚痴と言った数々。
しかし愚痴を呟く彼も、半ばそれに納得しているのだった。

なにせ彼はつい先日、婚約発表をしたばかり。
それに相手は、僅か１２歳の幼い少女だから驚きだ。

当然、この事実を知っている人間は地球ではごく僅かである。
しかし、この事実を知っている人間が、彼にとっては頭痛のタネとなっていたのだった。

士郎や恭也は鬼柳から遠ざける様に、なのはに帰宅の命を出したり。
美由希は鬼柳に先を越されたのが悔しいのか。先日はやけ酒をして二日酔いになっていた。

少し前からはすっかり変わってしまった鬼柳を取り囲むこの環境。
鬼柳の元気のなさを心配してか。喫茶翠屋の常連からも気を遣われる始末だ。

『大丈夫。ロリコンなきりゅうを私は応援している』

『エロスはほどほどにな』

「……ちくしょう」

常連のうちの何人かの言葉が脳裏に蘇り、鬼柳の瞳から涙が零れる。泣いてんかない。これは雨なのだ。空は快晴だが、鬼柳限定で雨なのだ。

他人の優しさが胸に沁みる。だが、それもここまでだと鬼柳は目元を擦った。

そう。過程はどうであれ、自分は既に嫁を貰った立派な旦那。これ以上情けない姿は見せない。

フェイトと一緒に居ることは嫌いではない。否、何処か心地良いとすら思える。

だから恥ずかしがるのは此処までだ。これからはフェイトを養っていくため、今以上に仕事に精を出す。

「……さぁてと。まずは飯だな」

気を取り直した鬼柳は、視線を上にあげた。

すると視界に飛び込んでくるのは、見慣れた八神家の玄関。

彼とフェイトは、結婚しながらも依然として八神家の世話になっていた。
なんとか新しいマンションやアパートを借りようと思うのだが、なかなか資金が溜まらない。

故に資金が溜まるまで、鬼柳とフェイトは八神家の居候を続けているのだった。
だが、変化が無い訳ではない。鬼柳とフェイトの寝る部屋が一緒になったりなど、様々な変化が起こっている。

そして八神家の玄関に立ち、彼は服装を整えた。
何処もおかしくないことを確認し、鬼柳は玄関の扉に手を掛ける。

「あ、鬼柳。お帰り！」

「あぁ、ただいま」

そして開かれた扉の向こうから聞こえた彼の嫁の声に、鬼柳は表情を緩めるのだった。

※

「うぬぬぬぬ……！」

「うぐぐぐぐ……！」

「ぐぎぎぎぎ……！」

ある者は歯ぎしりしながら。ある者は箸をかみ砕きながら、食事を進めていた。

今の時刻は夜の7時。丁度陽も落ち、夕食時にはもってこいの時間帯である。

今は八神家に住む全ての住人がキッチンで食事を取っているのだが、機嫌の悪い者が3人ほどいる。

その3人とは何を隠そう、この家の家主である八神　はやて。そしてリインフォースに高町　なのはの3人だった。

何も彼女たちが食べている食事が美味しくない訳ではない。

この食事はプレシアとはやての合作であり、味に問題などあるはずがなかった。

ならば何故、彼女たちが歯ぎしりしながら食事を続けているのか。

それはリビングから聞こえる、何処か初々しいカップルの声が原因だったからだ。

「えへへ。はい、鬼柳。沢山食べてね」

「お、おう。悪いな……」

誰も居ないリビングで食事を取っているのは、先日結婚した鬼柳とフェイト。
鬼柳の目の前には、プレシアとはやてが作った料理ではない、別の料理が並べられている。

不格好な切り方をされ、味付けも微妙な肉じゃが。少しばかりしょっぱい味噌汁など。
これらは全て、フェイトの手作りによって並べられた手料理なのだ。
その証拠に、彼女の指には絆創膏が張ってある。

どうやらこれはプレシアがけし掛けたことらしい。
お嫁さんが旦那さんに、手料理の1つでも振る舞えないとはどう言う了見だ、と。

フェイトはそんなプレシアの言うことを真に受け、少し前から料理の勉強をしている。
今はまだあまり上手とは言えないが、あと一週間もすれば少々マシになるかもしれない。

「はい、あーん」

「あ、あーん……」

恥ずかしそうにあーんをしているフェイトと鬼柳の様子に、なのはが手に持っていた箸が砕け飛ぶ。

その隣でははやてがまるで、呪い殺しそうな目でフェイトに視線を向け、リインフォースはブツブツと何事か呟いていた。

「ど、どうかな……。美味しい？」

「ん、あぁ。少し前よりは上手くなってるぜ」

「ホント、良かったぁ」

パァッと、フェイトの顔に笑みが浮かぶ。それを見て、鬼柳もまた恥ずかしそうな笑みを浮かべた。
すっかり初々しい新婚ほやほやの雰囲気を作り出す彼らの様子に、なのは達は嫉妬を隠し得ない。

鬼柳の隣は私の席なのに。あーんは私の役目なのに。等など、不平不満が飛び出してくる。
本当ならば今すぐにでも2人の間に飛び込んで、仲睦まじい雰囲気をぶち壊しにしてやりたい。

だが、それをしないのは一重に。鬼柳とフェイト。2人の浮かべる笑顔が嬉しそうだからである。
あんなに楽しそうに。嬉しそうに笑みを浮かべられては、邪魔をするにも出来なくなる。

なのでなのはやはやて、リインフォースは、
チラチラと視線を鬼柳とフェイトに向けながら、食事を続けるのだった。

「うぅ～～……」

「あら、どうしたの。アルフ」

「んぅ～……、なーんかイライラするんだよねぇ」

と、奇妙な緊張感が漂うキッチンで、不意にプレシアがアルフに声を掛けた。

今のアルフはなのはやはやてと同様に、チラチラと鬼柳とフェイトの様子を盗み見ている。

その様子はまるで、大好きなご主人様を横取りされてしまった忠犬の様で。

思わずクスクスとプレシアは笑ってしまう。そんなプレシアから、アルフはフイッと視線を逸らす。

「フェイトが幸せなら、アタシは良いんだけどさぁ……」

「あら。ならフェイトにヤキモチ？
鬼柳を横から掻っ攫われてヤキモキしてる？」

「んなぁ！？　ば、バカなこと言ってんじゃないよ！」

プレシアのからかう様な言葉を真に受けて、アルフが顔を真っ赤にして叫ぶ。

久しぶりに見るアルフの取り乱した姿に、プレシアはこれはもしや、

と内心で思った。

もしかしたら、あながちヤキモチを焼いていると言うのは的外れでは無いかもしれない。
2年前から鬼柳とアルフは互いの背中を預け合うパートナーとして互いを信頼してデュエルしていた。

だが、そんな相手が突然結婚し、その結婚相手とタッグデュエルを組むことになったのだ。
今まで鬼柳とタッグを組んでいたアルフにとって、それは面白いものではないだろう。

本来ならば鬼柳を奪った相手に怒りをぶつければ良いのだろうが、その相手は彼女の敬愛する主人。
故にアルフは、どうやってストレスを発散すれば良いのか分からないらしい。

「依然として、アルフの強敵度は下がりませんね」

「怒りたくても怒れない……、なんて可愛いのかしら」

「正直、グッときます」

チラチラと恨めしそうに鬼柳達を見つめるアルフを観察しながら、プレシアはリニスと秘密話。
どうやらフェイトと鬼柳の結婚と言うイベントは、少なからずアルフにも影響を及ぼしたものらしい。

普段通りに接することが出来ないアルフの様子は、なんだかとてもそそられるモノがある。
どうしてこう、自分たちの周りに居る女性たちは可愛らしいのだろう。プレシアとリニスは半ば真剣に悩む。

「えへー」

「ん、ご馳走様」

「お粗末様でした」

と、プレシアとリニスが自分たちの周囲に居る女性達について悩んでいると。
リビングから鬼柳とフェイトの穏やかな声が聞こえた。どうやら食事が終わったらしい。

こっそりとキッチンからリビングの様子を覗いてみれば、鬼柳の身体に寄りかかっているフェイトの姿が見て取れる。
鬼柳も鬼柳でフェイトのことを受け入れているのか。身じろぎもせず、2人で穏やかな食後の時間を過ごしていた。

結婚すると、男性はあぁも変わるモノなのだろうかとプレシアは疑問に思う。
少し前まで恥ずかしがっていたのに、今では慣れた様子でフェイトとの時間を大切にしている。

「茶碗洗ってくるね」

「あぁ、それくらいなら俺がやる。
それよりもフェイトは先に風呂に入ってろよ」

「うぅ～ん、分かった。それじゃ先にお風呂入るね」

「その後鬼柳もお風呂だよー」と告げながら、フェイトは2階の私室へと移動する。
どうやら素直にお風呂に入浴するらしい。なんとも微笑ましい会話に、プレシアの頬がにやける。

そしてパタパタと言うフェイトの足音が聞こえなくなったと思うと、キッチンに鬼柳が姿を見せた。
何処か嬉しそうな表情を浮かべ、手には空になった食器が幾つか乗せられている。

どうやら余程、フェイトとの食事が楽しかった。もしくは嬉しかったらしい。
今の彼の身体からは、俗に言う「満足オーラ」が溢れ出ていた。

「ふふ、鬼柳。なんだか嬉しそうね」

「ん？　そう見えるのか？」

「えぇ。凄く嬉しそう」

カチャカチャと食器を洗う鬼柳の背中に、プレシアは笑みを浮かべ

ながら言葉を掛けた。
今の鬼柳は以前よりも、何処か嬉しそうにフェイトと接している様に見える。

一見すれば幼いフェイトとの結婚に興奮しているのかとも思うが、どうも方向性が違うようだ。
まるで欲しくて欲しくてたまらなかったものがようやく手に入った様な。何処か子供っぽい雰囲気が見て取れる。

「何ていうか……今まで気づかなかったフェイトを見れて嬉しいんだな。多分」

「たとえば、どんなところが気が付かなかったの？」

「そうだな……。意外とフェイトは野菜好きで、おかずに野菜が多くなったりする、とかだな」

「あら。ちゃんとフェイトのこと見てるのね」

こちらに背中を向けているせいで鬼柳の顔は良く見えない。
だが、彼の声音から、鬼柳が笑みを浮かべていることがプレシアには分かった。

どうやらフェイトを「お嫁さん」と言う特別な目線で見ることで、新たなフェイトの一面が知れたのだろう。
その新たな一面を知ることが出来、鬼柳はとても嬉しそうだ。

プレシアもプレシアで、自慢の娘を褒められて悪い気はしない。

思わずそのままフェイト談義に華を咲かせようとしたのだが、プレシアは思わず口をつぐむ。

「「「はぁ～……」」」

何故ならば、彼女の視線の先には肩を落とし、これでもかと言うくらい重いため息を吐いている3人の女性が居たからだ。
ただでさえ鬼柳とフェイトが結婚し、仲睦まじい様子を見せられてダメージを負っていると言うのに。

これ以上の追い打ちは流石に可哀そうだとプレシアも空気を呼んだのだろう。
不審そうにしている鬼柳に「何でもないわ」と告げ、会話を断ち切る。

鬼柳は僅かに不審そうにしていたが、すぐに興味を失ったようだ。
ガチャガチャと茶碗洗いに精を出している。

そして鬼柳がお風呂から上がったフェイトに声を掛けられるまで。
キッチンは何処か重苦しい雰囲気で包まれているのだった。

※

「はい、注目！」

鬼柳とフェイトが共に寝室に引っ込んだ八神家のリビング。
そこにプレシアの大声とパンパンと言う手を叩く音が響いた。

そして手を叩いて注目を集めるのは、リビングで沈んでいる3人の女性。
その女性とは他の誰でもない、なのはとはやて。そしてリインフォースの3人だった。

「まったく。貴方達、少し落ち込み過ぎよ」

「落ち込むな、と言う方が無理だろう……。
12歳で結婚などと、早すぎるだろう……」

ぷぅっと頬を膨らませてプレシアが発破を掛けるが、大して効果は無い様だ。
リインフォースがどんよりと落ち込んだ雰囲気を漂わせながら、プレシアに反論する。

たしかに12歳で結婚など、早いと言えば限りなく早い結婚の報せ。
それに気になる相手が話題の鎮静化のためとは言え、結婚したと言うのもショックを受ける。

それでいて初々しそうな結婚生活を見ると、さらにショックを受けるのだからしょうがない。
自分が今のフェイトの位置にいたかった。自分が彼と共に、一緒の人生を歩んで良ければ良かった。

リインフォースは、心の底からそう思う。
そしてそう思っているのは何も、リインフォースだけではなかった。

「あぁ～……、くそぅ、悔しいなぁ……」

「鬼柳さん、とっても楽しそう……」

ズーン、と暗い雰囲気を漂わせているのは、はやてとなのは。
どちらの瞳も潤んでおり、まるで泣くのを無理やり我慢している様な。そんな気がする。

明らかに諦め切れていない3人の様子に、プレシアは人知れず息を吐いた。
どうやら娘の結婚に浮かれ過ぎていたらしい。身近な3人の女性のことを忘れていた。

なんとかして彼女たちにも幸せになってもらいたいが、まだ彼女たちは鬼柳を諦め切れていない。
そんな状態で、新しい恋に踏み出せるはずなど無いだろう。何とも言えないジレンマに、プレシアはもどかしそうだ。

フェイトの幸せだけを願うならば、彼女たちの幸せなど踏みにじれば良いのだろう。

だが、プレシアは長い時間を彼女たちと過ごし、彼女たちにもフェイトと同じ様な気持ちを抱いてしまった。

フェイトと同じように、彼女たちにも幸せになってもらいたい。
その想いは、まるで母親が娘に向ける暖かな気持ちと同じだった。

故に、そんな彼女たちが辛そうにしているのがとても心苦しい。
なんとかして手助けしてやりたいと、プレシアはお節介を焼きたくなる。

「ふぅ。なら、貴方達が鬼柳を振り向かせなさい」

「「「え？」」」

「鬼柳を自分に夢中にさせなさい。
フェイトのことが目に入らないくらい、ゾッコンに」

そして気がつけば、そんなことをプレシアは口走っていた。
ソファで聞き耳を立てていたリニスが、驚いた様子でプレシアを見つめている。

だが、誰よりも驚いているのは先ほどの言葉を告げたプレシア本人だった。
どうしてこんな言葉が出てきたのか。まるで娘を泣かせる様な、そんな言葉が。

しかし、彼女は非情に成りきれなかった。彼女の心の内に眠る優しさが、それを邪魔した。

故にプレシアの口からその言葉が出るのは、半ば仕方のないことだったのだろう。

「ただし、チャンスは1度きりよ。
このチャンスを逃したら、この恋はスパッと諦めなさい」

「「「……」」」

プレシアの発した「恋」と言う単語に反応するかと思ったが、彼女たちにどってはそれどころではなかった様だ。
3人とも、真剣な表情で考え込んでいるのが見て取れる。プレシアから与えられたチャンス、掴むべきか悩んでいるのだろう。

プレシアとリニス。2人がジッと見つめる中、カチコチと時計の針が進む音だけがリビングに響く。
簡単に身じろぎ出来ない様なこの緊張感。それを打ち破ったのは、なのはの「うん！」と言う元気を取り戻した声だった。

「私、プレシアさんの提案に乗ります！
鬼柳さんのこと、私に振り向かせて見せます！」

「そう。はやてさんとリインフォースはどうかしら？」

「……そや、な。折角やし、振り向かせて見せよか」

「やらぬ後悔より、やって後悔した方が良いですからね……」

なのはの言葉に、僅かに元気を取り戻したはやてとリインフォースが続く。
彼女たちの瞳には鬼柳を振り向かせると言う、並々ならぬ情熱の炎が煌めいていた。

どうやら3人は、この1度のチャンスに己が全てをつぎ込むらしい。
ようやく立ち直った様子の3人を見て、プレシアはようやく笑みを浮かべた。

「プレシア、それで本当に良いのですか？」

「……本当は、ダメなんだけどね。
あの娘たち、泣かせたくなかったのよ」

「それは男性の台詞ですよ」

リニスの問いかけに、プレシアは苦笑いを浮かべながら答えた。
フェイトと同じくらい大切な娘たち。彼女たちを、プレシアは泣かせたくなかった。

それがどうしても不可能であることくらい、当に理解しているはずなのに。
リニスはそんなプレシアの返答に、ジトっとした視線を向けて非難してくる。

「フェイトを泣かせたいんですか」

「そんなはず無いわ。それに、彼女たちに申し訳なかっただけ」

「？　申し訳ない……」

首を傾げ、疑問を浮かべているリニスにプレシアは説明する。
今回の結婚は、半ば流されて行われた様なものだった。

フェイトの身の安全を確保することに目が行き、なのはたちを蔑にしていた。
本来ならばもっと時間を掛けて、ゆっくりと愛情を育んでいくはずだったのに。

今回の事件のせいで、彼女たちの意中の相手はフェイトを伴侶とする事になった。
それは到底、納得できるものではないだろう。故にプレシアは、先の言葉を撤回しなかった。

「まったく。貴方と言う人は……」

「嫌いになったかしら？」

「そんなこと言われたら、嫌えないじゃないですか」

ため息を吐いているリニスに、プレシアは訊ねる。
妻を持った夫に、他の女性とデートしろと言っているのだ。

明らかに社会的におかしい行動。だが、リニスはそんなプレシアに文句を言わない。
どうやら彼女も、多少なりともなのはたちに罪悪感の様なモノを持っているのだろう。

無理やりフェイトとの結婚を推し進めた、罪悪感の様な物を。
故に彼女たちにチャンスを与える。それが成功するかどうかは彼女たち次第。

仮に3人のうち誰かに心動かされる様な事があれば、鬼柳の気持ちは所詮その程度だったのだろう。
だが、逆に心動かさなければ鬼柳のフェイトへの気持ちは本物だと言うことになる。

果たしてどんな結末になるのだろうか。
期待と不安が半々と言った様子で、リニスとプレシアはなのは達へ視線を向けた。

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　前編」（後書き）

次回はなのは、はやて、リインフォースとのデート編。
それが終われば時間が経過して数年後へとワープする予定です。

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　後編」（前書き）

今回で小学生編は終了です。
次回から中学生編に突入予定です。

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　後編」

～海鳴市　八神家～

「ったく。プレシアの野郎ぉ……」

ブツクサと、自身の嫁の母親に対する愚痴が漏れ出てしまう。
普段ならば彼の嫁に気を遣いあまりこんなことは言わないのだが、今回ばかりは別だった。

実際、彼の嫁である少女――フェイト・テスタロッサ。
否、フェイト・T・鬼柳は、ぷぅっと頬を膨らませて明らかに怒っている。

何故、彼らが不満なのか。
それは今日、鬼柳が3人の女性とデートすることになったせいだ。

「むぅ～……」

「そんなにむくれてるんじゃねぇよ。
今度、別の場所に連れてってやるから、機嫌直せ」

「約束だよ？」

「あぁ」

ご機嫌が斜めのフェイトを宥めながら、何故こうなったと鬼柳は振り返る。
思い出すのは今から3日ほど前。唐突になのは、はやて、リインフォースを連れ、デートしろと言われた時のこと。

当初プレシアにその旨を告げられた際、何の冗談かと思ったのは仕方が無いだろう。
既に彼は1人の妻をもち、彼自身も彼女の夫と言う自覚を持って、生活を送っていた。

だが、そんな鬼柳にプレシアが突如として、デートしろと言ったのだから意味が分からない。
散々自分と娘をくっつける様に動いていたと思えば、今度は娘を泣かせる様な行動をするのだから。

そんなちぐはぐな行動をするプレシアを不審に思うが、約束は約束だ。
普段身に纏っている灰色のコートを身に纏い、寝癖が無いかを鏡で確認する。

いくら乗り気ではないとは言え、身なりを気にするのは当然だろう。
服装や髪形に特におかしなところがないか確認すると、彼は鏡から視線を外した。

「こんなもんか……。それじゃ行ってくるぜ」

「あ、うん……、ええぇ～と……」

「ん？」

フェイトに家を出ることを告げ、間借りしている八神家の玄関へ向かおうとする。

だが、そんな鬼柳の耳に彼の足を止まらせる様な、何処か顔色を伺っている様なフェイトの声が聞こえた。

一体、何故顔色を伺っているのか。気になった鬼柳は、視線をチラ、とフェイトに向ける。

するとフェイトは、鬼柳が視線を向けただけでポンっと頬を真っ赤に染めた。

そして、おずおずと鬼柳の反応を伺う様に、ボソボソと何事か呟く。

「え、えと……あの、ね？」

「ど、どうしたんだ？　腹でも痛いのか？」

「う、うぅん！　そうじゃなくて……！」

「？　じゃあ、なんだ？」

「い、いってらっしゃいの……き、き、き……キスぅ～～～――――！！」

ボンッ！と、先ほどよりも2割増しほど、フェイトの頬が真っ赤に染まった。

次いで、鬼柳の頬にもカッと、赤みが差す。ソレは今まで、彼女に要求されたことのない行為。

結婚して、いくら寝室が同じになろうとも。キスや性行為は今までしたことがない。

いつかはしたいと考えていたが、それはまだまだ先の予定だった。

故に、突然キスを強請られ、鬼柳も動揺してしまう。彼女居ない歴＝年齢は伊達ではない。

咄嗟に、「キスはまたの機会にな」と誤魔化してしまおうとも考えたが、フェイトの顔を見てその案を却下した。

今のフェイトの表情には、ハッキリとした不安の色が見て取れる。

鬼柳が他の3人の女性と過ごすのがイヤだ。独りぼっちはイヤだ。

――他の3人に心変わりされるのがイヤだ。

そんなフェイトの不安を感じ取り、鬼柳は思わずため息を吐いた。

たしかにフェイトと結婚して一カ月も経っていない。故に、信じろと言う方が無理だろう。

だが、こうも信頼されていないのは地味に彼のプライドを傷つける。

たとえフェイトを護るための結婚であろうと、自分は簡単に心変わりする様な男ではない、と。

「フェイト」

「き、鬼柳？　――――！」

グイッとフェイトの顎を掴んで、強引にこちらに視線を向けさせる。
そして彼女がこちらを向いた一瞬の隙を狙い、ちゅ、と触れるだけのキスをする。

触れたのは時間にして、１秒も経過していないだろう。だが、キスはキスだ。
フェイトは当初何をされたのか理解できなかったようだ。ぼんやりと鬼柳を見上げている。

だが、徐々に頭が覚醒し、何をされたのか理解したのだろう。
ボンッ！と先ほどの１０割。顔を完全に真っ赤にさせ、頭から湯気を立ち上らせている。

「あぅ、あぅ、あぅ、あぅ……」

「信じられないのも分かるけどよ」

「あぅ、あぅ、あぅ、あぅ、……ふぇ？」

「お前の旦那、そう簡単に浮気はしねぇよ」

と、鬼柳は苦笑しながらフェイトに告げた。こちらの頬も赤く染まっている。
どうやら自分からキスをすると言う行為が彼にとっても予想以上に恥ずかしかったらしい。

赤くなっている顔を見られない様にか。グシャグシャと乱暴にフェイトの髪の毛を撫でる。

今までとは違う、照れ隠しのその行為に、フェイトは「わきゃー」と目を回した。

だが、目を回している彼女の表情は明るい。

えへー、と何処かだらしない笑顔を浮かべながら、鬼柳にされるがままとなっている。

多少なりとも、フェイトを安心させられただろうか。

今の明るい様子のフェイトを見て、鬼柳は内心で考える。

であれば、嬉しいことだ。こんな自分でも、嫁を安堵させることが出来る。

「さ、さて。行ってくるぜ」

「あ、うん！　行ってらっしゃい！」

そして適当に頭を撫でるのを切り上げ、彼は逃げる様に玄関へと向かう。

赤くなっている顔を他の誰か――特にフェイトに見られるのは恥ずかしいものだ。

そしていそいそと玄関へ向かう彼の背中に、フェイトの明る気な声が届く。

何処か嬉しそうな。何処か安堵した様な彼女の言葉を聞き、鬼柳は人知れず笑みを浮かべるのだった。

※

「よう。待たせたか？」

「う、うぅん。時間どおりなの……」

「そ、そうか……」

フェイトとのスキンシップ―傍から見ればイチャつき―を終え、鬼柳が玄関に現れる。
すると既に、玄関先には今日のデート相手であるなのは、はやて、リインフォースの３人が勢ぞろいしていた。

本来ならば、男性が少し先に来て待つのがセオリーなのだろう。
しかし鬼柳にその様な知識は無い。故に時間どおりに来るのも無理は無い話だ。

だが、仮に鬼柳にその知識があったとして、彼は恐らく謝罪の言葉を口に出来なかっただろう。
その原因とは、彼を待っていた３人の女性の服装。皆、明らかに衣服や髪形に力を入れているのだ。

なのはは普段はツインテールの髪を解き、肩まで伸びている髪をストレートに下ろし。
はやてはあまり身につけない様なミニスカートを穿き、可愛らしいポシェットを肩から掛けている。

残るリインフォースと言えば、白銀に輝く髪をポニーテールに纏め、普段とは違う落ち着いたロングスカート。
皆が皆、普段のイメージとは違う姿で現れたのだ。驚くな、と言う方が無理な話だろう。

しばし皆のイメージの変化に戸惑っていた鬼柳だが、慌てて我に返る。
そして取り繕う様に、遅れてきたことをなのはたちに謝罪した。

「わ、悪いな。待たせてよ」

「う、うぅん」

「それで、な。今日は何処へ行くのだ？」

「あぁ。今日はブラブラと街中を歩いてみようと思う」

鬼柳は今日のデートコースを3人に説明する。
今日は俗に言う、ウィンドウショッピングを行う予定だ。
女性は買い物が好き、と言うプレシアのアドバイスを聞き、実行したのだ。
一応映画や水族館なども候補に上がったが、まだフェイトと行った

ことのない場所に行くのは気が引けた。
故に今日は、大人しくウィンドウショッピングに落ち着いたのだ。
なのはたちも特に異存は無いのか。笑みを浮かべて「早く行こう」と言っている。
鬼柳はそんな3人に苦笑しながら、3人を連れて八神家を出るのだった。

※

リインフォースは鬼柳に連れられて海鳴の街を歩きながら、ある事を考えていた。
想い人が12歳の少女と結婚したとか。鬼柳の好みはやはり年下の女の子だったとか。
そんな思考がチラチラと彼女の脳裏を過る。
もしも自分が姿を少女に変えたなら、彼は気にとめてくれるだろうか。
「（いぃや、違うな。今、考えるべきはそれではない）」

ふるふると頭を振り、先ほどまで考えていた思考を頭の中から追い出す。
そう。今考えるべき事柄は、鬼柳の好みや性癖の話ではない。
リインフォースはふぅと小さなため息を吐くと、そっと視線を上げた。
すると視界に入るのは、自分の前を歩く鬼柳の大きな背中。灰色のコートが歩く度に揺れている。
ゆらゆらと揺れるコートと彼の髪の毛をぼんやりと視界に納めながら、リインフォースは思った。
ウィンドウショッピングは中々に良い案だとリインフォース自身も思う。出来れば映画館などが良かったが。
だが、そんな考えは既に意味のないものだ。
折角のウィンドウショッピング、思う存分楽しまなければならない。
そう。それがたとえ――――カードショップを見て歩いていても、だ。
「ナチュビめっけぇ！　って、ぎゃぁあああああっ！
たっか！　めちゃくちゃ高いんやけどぉおおおおおっ!?」
「ご、≪強欲で謙虚な壺≫……！　ひぃ、ふぅ、みぃ……。
だ、ダメぇ！　手持ちのお金じゃ手が届かないよぉ！」
「何故こうなった」

ガックリと地面に手をついて、リインフォースはズーン、と落ち込む。
鬼柳はそんなリインフォースに哀れんだ表情を浮かべたが、グイッとはやてに引き寄せられた。

見目麗しい女性が地面に手をついていると言うシュールな状況に、彼女の周りから人が居なくなる。
だが、リインフォースはそんなことは気にしていなかった。普通ならば、デートの定番は服屋などだろう。

以前はやてが読んでいた漫画から得た知識を思い出しながら、心の中でそう力説する。
そう、デートの定番と言えば服屋などのショッピングモールだ。カードショップではない。

では何故、彼女たちがカードショップに居るのか。
それは鬼柳と手を繋ぎ、行き先を決める2人の少女が原因だった。

『鬼柳さん、カードショップ見に行こう?』

『やっぱり、デートと言ったらカードショップやろ!』

『あぁ。それじゃまずはカードショップからだな』

『えっ』

それからあれよあれよと言う間に、鬼柳とリインフォースはカードショップまでやって来ていた。
そして彼らを連れてきた張本人である2人の少女と言えば、目をキラキラと輝かせて展示されているカードに見入っている。

それぞれ、欲しいカードを見つけた様だ。だが、金額が高すぎて購入できないらしい。
なまじ彼女たちが欲しがっているカードは汎用性があり、どのデッキでも投入が検討できる。

しかもそれに加え、入手難度が高いことが金額の高額化を後押ししていた。
せめてもう少し入手難度が低ければ、金額も低くなるだろうに。彼女たちは悔しさを隠しきれない。

「やっぱり、デートにカードショップはダメだったか？」

「ダメ、と言う訳ではないが……。出来れば、避けて欲しかった……」

がっくりと床に手をついているリインフォースの元に、苦笑いを浮かべた鬼柳が歩み寄る。
どうやら彼も彼で、デートでカードショップに行くのはどうかと思っていた様だ。

リインフォースとて決闘者。カードには興味があるのだが、せめてデートの時は別の店にして欲しいと思う。
贅沢は言わない。せめてもう少しムードのある場所に行きたかった。

ガックリと項垂れながら、リインフォースは思う。

「……悪かったな。ほら、これで機嫌直せ」

「？　これは……」

と、床に手をついて項垂れていたリインフォースに、鬼柳があるモノを差し出す。

それはとあるデュエルモンスターズのカード。気になったリインフォースは、鬼柳からカードを受け取る。

受け取ったカードは「闇の誘惑」。強欲で謙虚な壺ほどではないが、高レートで取引されるカードだ。

そんなカードを渡されて、リインフォースは目を丸くする。こんな高価なカード、受け取る訳に行かない。

「き、鬼柳。お前の好意は嬉しいが、このカードを受け取る訳には……」

「良いから、貰っておけよ。デートスポットらしくない場所に誘っちまったお詫びだ」

「ぬ。だが……」

尚もリインフォースは鬼柳にカードを返そうとするが、鬼柳は頑なとして受け取ろうとしない。

終いにはリインフォースが折れ、大人しくカードを受け取る始末だ。
リインフォースは嘆息しつつ、笑みを浮かべる。

お詫びの印とは言え、こうして想い人から贈り物をされるのは素直に嬉しい。
しかもこのカードはリインフォースのデッキとの相性も良く、素直にデッキに投入できる。

鬼柳から貰ったこのカード。デッキに入れたら、鬼柳が傍に居てくれる様な。
そんなことを考えながら、彼女は受け取ったカードを持ってきていた鞄に仕舞った。

「さて。それじゃなのはとはやてと合流して、別の店に行くか」

「う、うむ。そうだな……」

鬼柳がこの店を出ることを告げ、なのはとはやてを呼び戻そうとする。
と、咄嗟にリインフォースの手が伸びた。まるで、離れて行く鬼柳を自分の元へ繋ぎ止めようとする様に。

だが、彼女の手が鬼柳の手を掴もうとした瞬間――――、

「っ」

不意に、鬼柳が手を引いた。まるで彼女の手から逃れる様に。
もしかしたら、彼が無意識に手を引いたのかもしれない。ただの偶然なのかもしれない。

だが、この時のリインフォースにはそうは思えなかった。
彼に拒絶された様な気がして、ズキズキと彼女の胸の奥に痛みが走った。

※

「ほぇ～……」

「可愛い服が一杯やなぁ！」

海鳴市内にある、とある洒落た服屋の店内に、鬼柳達は場所を移動していた。
この様な店に来るの久々なのか。はやては目をキラキラと輝かせて興奮している。

「な、なに！？

こ、こんな露出の激しい服まで売っているのか……」

そしてそんなお子様2人の隣には、はやてと同じくらい興奮しているリインフォースが居た。
やはり女性と言うものは、綺麗な服と言うものが好きなのだろうかと、鬼柳はぼんやりと考える。

サテライトでは男ばかりでこの様な店に入ったことは、こちらの世界に来るまでは一度もなかった。
ちなみに鬼柳がダークシグナー時に着用していたTシャツは、同じくダークシグナーだったミスティの手作りである。

「（それにしても……）」

懐かしくも忌まわしい記憶を思い出しつつ、鬼柳ははぁと小さくため息を吐く。
そう。今は昔の記憶に浸っている場合ではない。だが、少しだけ浸らせて欲しいと思う。

それは何故か。その理由は、店内に男性客の姿がほとんど見えないことが原因だった。
どうやらこの店舗は衣服のほかに下着も売っているせいか、男性客の姿は鬼柳のほかに見えない。

それだけで居心地が悪いと言うのに、チラチラと女性客の伺う様な視線が鬼柳を追い詰める。
この店は男性客はＮＧだったのだろうか。事前にリサーチしていな

いツケが此処で回ってきた様だ。

「はぁ」

「あ、このスカート可愛いよ！」

「このワンピースもえぇ感じやなぁ」

「てぃ、Ｔバック……」

居心地が悪くため息を吐く鬼柳。だが、他の３人の女性は水を得た魚の様に元気だ。
服屋と言うホームグラウンドに来たせいか。様々な服を眺めては、
「あれが似合う。これが似合う」と批評している。

そんななのはやはやての姿は年相応。もしくは少しだけ早い様に鬼柳には思えた。
だが、もしかしたらこの世界ではこのくらいの年頃の少女は皆、こうなのかもしれない。

なんとも言えないジェネレーションギャップに、鬼柳は戸惑うばかりだ。
それはそうとリインフォースよ。いい加減に下着売り場から帰って来いと鬼柳は内心思う。

「でも鬼柳さん、ホンマにえぇの？
私たちに服を買っても」

「下着以外なら買ってやるよ。
……流石に下着は勘弁してくれ」

「了解や。そならちょろ～っと見てくるで」

はやては鬼柳に手を振りながら、その場を駈け出して行く。
どうやら気になる服があったらしい。その服を見に行くのだろう。

鬼柳は駆けて行くはやてを見送ると、傍でスカートを見ていたなのはの元へ向かう。
はやては1人でも大丈夫だろう。年の割に、しっかりとしているはやてのことだ。

そうそう、厄介事に巻き込まれるはずは無い。そしてなのはの元へ歩み寄る。
するとなのはは、どうやら2つのスカートを見て悩んでいる様だった。うーん、と眉を八の字にしている。

「決まらないのか？」

「あ、鬼柳さん。
えっと……、うん。どっちも可愛くて」

えへへと苦笑いを浮かべるなのはから視線を外し、彼女の持つスカートに視線を向ける。
2つのスカートは丈の長さも違えば、色合いも違う。まったく別の

イメージを鬼柳に与えていた。

片や丈の短いピンク色のスカート。そうそう下着は見えないだろうが、思わず心配になる長さだ。

そして片やオレンジ色のロングスカート。足首まで隠すほどの丈の長さは、何処か落ち着いた雰囲気を漂わせる。

なのはが持つ2つのスカートに、鬼柳もまた「ふぅむ」と顎に手を当てた。

中々難しい選択だと、内心鬼柳は思う。どちらのスカートも、なのはの良さを殺していない。

故にどちらか片方を選ぶことが出来ない。

女性物の服のコーディネイトはこうも難しいのかと、鬼柳は戦慄する。

「そう、だな。どっちも似合ってるしな」

「にゃ!?　え、えへへ……。照れちゃうよ」

鬼柳の言葉に、なのはは頬を真っ赤に染めて照れ隠し。

だが、それでいて嬉しそうな雰囲気は隠せていないところが可愛らしい。

鬼柳も鬼柳で、女性にこんなことを言うのは慣れていないのか。

なのはほどではないにしろ、頬を赤くして照れている様子だった。

「ね、ねぇ鬼柳さん！　ど、どっちが似合うかな？」

何処かもどかしい雰囲気を漂わせている鬼柳となのは。
そんな雰囲気を打ち壊したのは、頬を真っ赤に染めたなのはの一言だった。

先ほどまで悩んでいたスカートを鬼柳に見せながら、どちらが似合うか訊ねる。
どうやら、鬼柳に選んでもらおうと考えた様だ。どちらを選ばれても、なのはに不満は無い。

だが、逆に困るのは訊ねられた鬼柳である。
男性の衣服に関する知識はあれども、女性の衣服に関する知識は無い。

故に今回の選択は、完全に鬼柳の好みで選ぶほかない。
どちらがなのはに似合うだろうか。しばしジィッと2つのスカートを見つめる。

「ひそひそ」

「ひそひそ」

大の大人が少女の持つ2つのスカートを真剣に見つめているせいか。
店内のあちらこちらから、ひそひそと小さな囁き声が聞こえる。

そんな視線に晒されてなのはと鬼柳は恥ずかしげに頬を赤く染めた。

何時までもこのままでいるのは恥ずかしい。故に、鬼柳はスパッと答えを出す。

「こっち、だな」

「このミニスカート？」

「あぁ」

鬼柳が選んだのは、丈の短いミニスカートだった。
特に深い意味合いなど無かったが、なんとなくこっちが似合うと思ったのだ。

なのはは鬼柳が選んだスカートをまじまじと見つめていたが。
すぐに納得したのか。パァッと笑みを浮かべて、「ありがとう！」とお礼の言葉を告げた。

笑みを浮かべ、大切そうにスカートを抱えるなのはの姿に、鬼柳は思わず苦笑する。
こんな些細なことで喜んでくれるとは思わなかった。今度はフェイトに新しい服を買ってやろうか。

内心でそんなことを考えながら、鬼柳はなのはと共に。
店内に散らばったはやてとリインフォースを探すために歩みを進めるのだった。

※

「思ったよりも時間が掛かっちまったな」

夕焼けの広がる空を仰ぎ見ながら、鬼柳は感慨深げに呟いた。
昼ごろから始めたデートだが、既に時刻は夕方。時間が過ぎるのはあっという間だった。

肝心のデートと言えば、服屋の他にも数店ほど他にも足を伸ばしたせいか。
充実したものになっただろう。ただし、体力的にはもう既に限界の領域だが。

そして現在、鬼柳達がいるのは海鳴市内の海岸付近にあるとある公園だった。
この公園からは海鳴に広がる蒼い海が見渡すことが出来、デートスポットにも最適なのだと言う。

海に向かって落ちて行く夕焼けが幻想的で、思わずその光景に鬼柳は見惚れていた。
本来はこの景色を意中の相手と見られれば最高なのだろう。しかし、今回ばかりは違った。

「……」

「……」

「……」

チラリと鬼柳が後ろを振り返れば、そこには夕焼けに負けないほど頬を赤くしている3人の女性の姿が。

その3人とは何を隠そう、今日のデート相手であるなのは、はやて、そしてリインフォースの3人だった。

その3人が、まるでタイミングを計るかのようにチラチラと鬼柳の方へと視線を向けている。

良い景色が見える場所で、赤い顔をした女性。伺う様に見つめる相手は自分。これから行われることを連想するのは簡単だ。

さて。自分が言い出した方が良いのか。それとも相手が口を開くのを待った方が良いのか。

視線を海に落ちて行く夕焼けに戻しながら、鬼柳は内心で自問する。

その間、誰も口を開こうとはしない。

「き、鬼柳さん……！」

そして、その沈黙が10分ほど続いたとき。不意になのはが口を開いた。

とうとう来たかと内心で思いつつ、鬼柳は後ろを振り返る。そして

視界に入るのは、真っ赤な顔のなのは。

彼女は今日、鬼柳に買ってもらった服の入った紙袋を両手でギュッと握りしめながら。

真剣な様子で鬼柳に視線を向けている。その様子は幼いながらも、何処か女らしさを鬼柳に連想させた。

そしてなのはに続く様に、はやて、リインフォースと口を開く。

そのいずれの誰もが頬を真っ赤に染めて、なのはと同じように真剣な眼差しをしている。

「……どうしたんだ」

「えと……」

「鬼柳兄ちゃんが、フェイトちゃんと結婚したのは知っとる。フェイトちゃんと仲良う暮らしとるのも、もちろん知っとる」

「それでも私たちは、お前に言いたい事があるのだ」

言葉が詰まってしまったなのはを引き継ぐように、はやてとリインフォースが続ける。

そしてその会話の内容に、鬼柳はここ数週間ほど続けてきたフェイトとの結婚生活を思い出していた。

朝、目が覚めると自分の目の前にフェイトの顔がある。

目と鼻の先にあるフェイトの顔にビックリしたのを覚えている。

食事はフェイトの手作りのものを食べ、何をするにもフェイトが後ろをついてくる。
そして鬼柳が構ってやれば嬉しそうに微笑み。構ってくれと言わんばかりに飛び込んでくることもある。

仲良く一緒にお昼寝をしたこともある。フェイトを連れ、外へ散歩に出かけた事もある。
初めて自分にできた、お嫁さん。自分だけの特別な人の存在に、鬼柳は確かに喜んだのを覚えている。

今の自分は幸せだ。ニ代目チームサティスファクションを結成し、フェイトと言う特別な人も得た。
故に、彼女たちへ告げなければならない。自分の、正直な気持ちを。

――――そして、彼女たちが揃って口を開く。

「好きだよ、鬼柳さん」

「好きや、鬼柳兄ちゃん」

「お前の事が……好きなんだ」

※

「ただいま――――うぉっと！？」

ガチャリと扉を開けた鬼柳の元へ、黄色い何かが飛び込んでくる。
腹へ与えられた衝撃に鬼柳は思わずタタラを踏んだ。黄色い何かへと視線を落とす。

「フェイトか。どうしたんだ」

「――――～～～～っ」

飛び込んできた黄色い何かとは、どうやらフェイトだった様だ。
だが、彼女は鬼柳の言葉に答えようとはせず、グリグリと頭を鬼柳のお腹に押し付けている。

その様子がまるで、不安で不安でしょうがないと言っている様に見えて。
鬼柳は思わず息を吐いた。そして安心させるように、ぽんぽんと彼女の頭に手を乗せる。

「うぅ～……、き、鬼柳ぅ～……」

「情けない顔してるなよ」

すると安心したのか。伺う様にフェイトは顔を上げた。
今の彼女の顔は情けなく、瞳にはウルウルと涙が零れんばかりに溜まっている。

そこまで心配を掛けさせてしまったかと思うと同時、ここまで心配してくれたのかと鬼柳は思う。
フェイトが自分に好意を向けてくれているのは知っていた。それがここまでだとは想像もしなかった。

何処か暖かな気持ちになりながら、鬼柳は彼女の目尻に溜まった涙を拭う。
いくら出がけに安心させたとはいえ、やはり不安だったのだろう。

依然として、不安そうな瞳が鬼柳を見上げている。

「な、なのはたちは……？」

「そんなの、決まってるだろ」

おずおずと、今現在最も気になっていることをフェイトが訊ねてくる。
鬼柳が心変わりしてしまえば、もう自分と鬼柳は夫婦ではないのだから。

不安そうに揺れる瞳が、ジッと鬼柳を捉えている。
鬼柳は不安を覚えているフェイトに笑みを浮かべると、安心させるように告げた。

「断ったに、決まってるだろ」

※

「あっはははは～……惨敗、やなぁ」

「そだねー……」

日が暮れ、徐々に暗くなり始めたとある公園のベンチ。

そこに腰掛けていたはやてが、先ほどの告白を思い出し、笑みを浮かべた。

だが、その笑みは普段の快活としたものではない。
まるで泣くのを無理やり我慢している様な。何処か無理をした笑みだ。

その隣では、なのはが目元をグシグシと擦っている。
こちらの目元は赤い。どうやら先ほどまで泣いていた様だ。

「けど、スッキリしたなぁ」

「……うん、そうだね」

彼女たちの一世一代の告白は、玉砕と言う結果に終わった。
彼女たちの意中の相手は彼女たちに靡くことなく、真剣に返事を返してくれた。

「なのは、はやて、リインフォース。ありがとな、俺の事好きでいてくれて。
けど、俺は断るよ。流された結婚とは言え、俺にはもう家族が居るんだ。
ソイツを――――フェイトを、悲しませる訳にいかないからな」

彼は笑みを浮かべながら、正直に答えてくれた。
その返事を聞いて悲しいと思うが、逆に良かったと思える。

好きになった相手が、簡単に相手を変える様な人では無くて。

1人のことを真剣に愛してくれる様な。そんな素敵な人で良かったと2人は思う。

もしもあの場で告白を受け入れられたとしても、何処か釈然としない気持ちを覚えていただろう。

自分たちのリーダーは簡単に相手を変える様な男だったと。心のどこかで、そう思っていたかもしれない。

「お待たせしました、主はやて」

「ありがとな、リインフォース」

「高町も」

「ありがとうございます」

そして2人の元に、最後の1人であるリインフォースが戻ってくる。

彼女の手には缶ジュースが3つほど。先ほどまで彼女はジュースを買いに行っていた。

リインフォースから缶ジュースを受け取り、それぞれ無言でプルタブを開ける。

なんだか胸の奥がポッカリと開いてしまった様な印象だ。何処か胸の奥が空虚に覚える。

「さて。それじゃやるかぁ！」

「そうですね。玉砕した者同士、仲良く飲みましょう」

「飲むのー！」

3人は胸の奥に覚えた空虚さを紛らわせるように、カラ元気ながらも声を上げた。

それぞれ手に持った缶ジュースをぶつけ合い、簡易的な乾杯を行う。

カチン、と小気味いい音がその場に響くと、それぞれグビッと缶ジュースを煽った。

しばしその場を、彼女たちがジュースを飲む音だけが支配する。そして皆、同時に缶から口を離した。

「うぅ～……、負けてもうたな」

「けど、これで良いの！」

「そうですね。簡単に相手を変えられるよりは、ずっとマシでしょう」

そして3人の口から聞こえてくるのは、今回の告白についての個人の感想。

玉砕したのは悲しい。けど、簡単に相手を変える人じゃなくて良かった。様々な感想が出てくる。

他にも返事を濁したまま関係を続けるよりはマシ、や、浮気をするよりもマシ。などと言った言葉が出てくる。

それぞれが同じ人を好きになり、同時にその恋が終わった。そのせいだろうか。いつもより、会話が弾むように思える。

陽が暮れてもう周囲は真っ暗だと言うのに、彼女たちはその場を離れようとはしない。

否、離れられないのだ。ここで八神家に帰ってしまえば、再び鬼柳と出会うことになる。

そんなとき、どんな顔をして会えば分からないのだ。

故にここで、傷を癒してから帰る。それまではとても、顔を合わせられない。

そしていつの間にか、会話の内容が変化する。

最初は告白を断られたことについてだったのだが、次第に鬼柳の何処に惚れたか語っていく。

やれ、独りぼっちな自分に手を差し伸べてくれた。やれ、消えかけていた自分を必死に求めてくれた。

彼女たちの知らない鬼柳を、彼女たちが補っていく。そうすることで、心の安定を図っているのだろう。

そしてそれぞれの手に握られていた缶ジュースが3本目に突入しようと言うとき。

ようやく落ち着いてきたのか。ふぅと会話が一段落する。それぞれ一緒のベンチに座り、空を見上げた。

「……あかんなぁ。こないな話されてもうたら、未練が残るやないか」

グスッと鼻を鳴らしながら、はやてが呟く。
顔は夜空を見上げており、生憎と伺うことはできない。

「本当は、早くふっ切らねばなたないのでしょうが、ね……」

リインフォースの、何処か上ずった声が公園に響く。
こちらもはやてと同様、空を見上げているせいで顔は見えない。

「こんなんじゃ……満足、できないよ……」

なのはの震える声が、最後に公園に落ちた。
彼女の顔もはやて達と同様、夜空を見上げているせいで伺うことが出来ない。

夜空を見上げながら、彼女たちは今が夜で良かったと内心で思っていた。
何故ならば。今が夜ならば、両方の瞳から零れ落ちる涙を見られることがないからだった。

十六話　「ミッション！　鬼柳を振り向かせろ！　後編」（後書き）

次回予告

初恋が破れてから2年。なのはたちは中学2年生になった。
なのはたちは新しい恋を探そうとするも、中々良い人に巡り合えない。

そんな中、リニスは再び修行の旅に出る。
アクセルシンクロと言う力を得たフェイトの師匠として相応しい強さを得るために。

そして次元世界を放浪中、彼女はとある少年と出会った。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「孤独な少年」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

十七話　「孤独な少年　前編」（前書き）

今回は軽く現状説明などの回です。
そして次のお話では、とある少年が出てきたり。

ちなみにオリキャラとかクロスキャラではないです。

十七話　「孤独な少年　前編」

～海鳴市　八神家～

3人の女性の初恋が破れてから、約2年ほどの時が流れた。
その時間の中で、新たな道へ進む者。己の目的を突き進む者。

様々な者が現れる。それは得てして、高町　なのはや八神　はやても例外ではない。
彼女たちは場所を小学校から中学校へと移し、それぞれの進むべき道を模索している最中だ。

級友であるアリサ・バニングス。そして月村すずかと共に、デュエルの腕を磨き上げる。
恋が破れ、せめてチームに相応しい仲間であるために。その目的を軸に、彼女たちは進む。

そして、変わっているのは何も彼女たちだけではない。
ニ代目チームサティスファクションリーダーである鬼柳　京介。その妻フェイト。

他にも、プレシア・テスタロッサやリニス。アルフ。八神　はやての守護騎士たち。
さらにはティアナ・ランスター。ブルーノ。イリアステルの三皇帝。
そしてマテリアル。

その何れもが、新たな道へと足を踏み出す。
これは、その物語のとあるワンシーンである。

※

「≪ヴァンパイア・ロード≫で相手モンスターを攻撃！」

漆黒のマントを羽織った、貴公子の様なモンスターが攻撃する。
咄嗟に相手モンスターは迎撃しようと攻撃を繰り出そうとするが、
その攻撃力の前に霧散する。

鋭い爪による一撃が相手モンスターを切り裂き、超過ダメージを相
手プレイヤーに叩きこんだ。
そして設置されている大型ディスプレイに映る相手プレイヤーのラ
イフポイントが減少する。

先ほどの相手のライフは残り５００ほど。
その残りのライフを奪いきったのか。相手プレイヤーのライフが０
になった。

『決まったー！　勝者はチームサティスファクション所属の月村
すずか～～～～ッ！』

試合を解説していた実況が、高らかな声で決闘者――すずかの勝利を宣言する。
その直後、大歓声が広場を包み込んだ。その歓声はいずれも、すずかの勝利を称えるもの。

「え、えぇっと……！　えぇっと……！
あ、ありがとうございます！」

そのあまりの歓声に委縮してしまったのか。すずかがぺこぺこと頭を下げる。
だが、依然として歓声は止まない。一体どうすればいいのか分からず、すずかはおろおろと涙眼だ。

「すーずかー！　シャンとしなさいよー！」

「ふ、ふぇえええ……！　だ、だってぇ～！」

「あぁん、もう！」

そんな涙眼のすずかに声を掛けたのは、後ろでデュエルの様子を観戦していたアリサ。
すずかはアリサの声に一瞬安堵するのだが、すぐに涙眼に戻ってしまう。

どうやら大勢の人間に称賛されると言うことになれていないせいだろう。
相変わらずと言えば相変わらずな友人の姿に、アリサはため息を禁じ得ない。

「にゃはは……。すずかちゃーん！
お疲れ様ー！　戻って来てー！」

アリサの隣に腰掛けていたのは、髪をサイドポニーに纏めたなのは。
彼女はアリサやすずかの相変わらずな様子に苦笑すると、すずかに戻ってくる様に声を掛ける。

すると、すずかが待っていましたと言わんばかりの様子で後ろの控室へと戻ってくる。
なのはとアリサはそんなすずかを笑顔で出迎えると、先ほどのデュエルの勝利を称えるのだった。

彼女たちが参加している大会は、海鳴市内で開催されている中でも大きな大会だ。
この大会に参加するには、少なくとも3回以上、優勝を経験しなければいけないほど難しい。

このメンバーで3つの大会を制覇することに骨は折れたが、言葉では言い表せない充実感があった。
司会を務めていた男性に促され、彼女たち3人は中央の表彰台へと向かう。これから優勝者へトロフィーなどが授与される。

これでようやく4つめかとなのはは内心で思いながら、現在この場

に居ないメンバーについて、想いを馳せた。
残るメンバー。リーダーである鬼柳　京介。それにフェイト、プレシア、リニス、アルフ、はやて、守護騎士たち。

彼らは現在、それぞれ別の場所で、別の大会に参加しているところだ。
はやてと守護騎士に関しては大会の警備と言うところだが、残るメンバーは完全に参加者。

鬼柳とフェイトはあちこちの次元世界から引っ張りだこで、暇な時間が無いほど忙しいらしい。
これはフェイトが習得したクリアマインドが関係しており、皆がアクセルシンクロを見たいのだと言う。

故に、フェイトとその旦那の鬼柳に様々な大会からオファーが来ているのだ。
今から約1年後まで大会参加のスケジュールが埋まっていると言う。
以前そう、プレシアが話していた。

では何故、参加を拒否しないのか。それは一重に、大会で得る賞金が関係している。
オファーが来る大会の賞金は高額で、得ることが出来れば生活を豊かにすることが出来る。

翠屋でのバイトだけでは限界を感じていた鬼柳は、この賞金に目を付けた様だ。
彼の妻であるフェイトは今の生活でも満足している様だったが、彼は少し違った。

せっかく出来た自分の嫁。少しでも楽な生活をさせたいと思ってい

るのだろう。
なんだかんだで夫婦生活をしている2人の様子を思い出し、なのは
は「はぁ」と嘆息した。

「（そ、そりゃあ羨ましいと言うか何と言うか。
イチャイチャして良いなぁ、って思うんだけども……）」

いくら初恋が敗れたとはいえ、2人のイチャイチャとした様子を見
るのは耐えられない。
心に負った傷は幾分癒えたのだが、やはり2人が仲良くしている様
子を見るのは複雑な心境だった。

「なーにしかめっ面してるのよ、なのは」

「あにゃ？　あ、アリサちゃん？」

「そんな顔して、表彰式に出るつもりなの？」

「え？　あ……！」

アリサの言葉にハッと我に返り、なのははきょろきょろと周囲を確
認する。
すると会場に居たほぼ全員の視線が、なのはに注がれていた。
どうやら先ほどまでの自分の百面相は、しっかりと見られていたら
しい。

それを自覚すると、なのはの頬が羞恥によってボッと赤く染まる。

「ったく」

「あはは。アリサちゃん、仕方ないよ」

なのはが我に返ったことにより、周囲の視線から固さが取れた。
それにホッと安堵の息を漏らすと、すずかがなのはをフォローする。

アリサもアリサで、なのはの挙動不審な行動の原因を知っているせいか。
特に問い詰めることもせず、ただ静かに、表彰式が行われるのをすずかとなのはと共に待った。

※

「たっだいまーっと」

「あら、お帰りなさい。リニス。それにアルフも」

ガチャリと八神家の玄関の扉が開き、出かけていたアルフとリニスが戻ってくる。
彼女たちはなのはやフェイトと同様に、先ほどまで次元世界で開催されている大会に参加していたのだ。

数年ほど前まで、次元世界で修行していたリニスは特に疲れた様子は無いが、アルフは別だった。
どうやら次元世界でのデュエルのレベルの高さを知ったらしい。目に見えて疲労しているのがよく分かる。

アルフはふらふらとおぼつか無い足取りでリビングへと向かうと、倒れ込むようにソファに腰掛けた。
その様子は、擬音を使うならば「ぐで～ん」だろうか。彼女はだらしなく、ソファの上で横になる。

「やはりアルフは鬼柳氏とタッグを組んでいた方が実力を出せていた様ですね。
今日のデュエル、貴方らしくないミスが幾つか見受けられましたよ」

「そーは言ってもさー……」

ごろんとソファに寝転がるアルフに、リニスから幾つか注意が向けられた。
それと言うのも今日のデュエル、アルフがらしくないミスを行ったのだ。

あえて手札を捨てる様なカードを場に伏せたり。デッキから墓地にカードを落とす罠カードを伏せたり。
明らかに鬼柳をパートナーとして意識したデュエルの展開だった。
故に幾つかのカードは腐ってしまい、厳しい戦いを強いられた。

アルフも自分のミスを把握しているのか。頬を膨らませながら抗議の視線を向ける。
いくらあれから時間が経ったとしても、あれほど背中を任せられる存在は居なかったのだ。

まるで息を吸うかの如く、ピッタリと合わさったコンビネーション。
たとえ場が空になろうとも、ドローしたカード次第で場を持ち直せるポテンシャル。

あれほど信頼を預けられる相手を、アルフは鬼柳以外知らない。
故に無意識のうちにデッキを弄ってしまうのだ。鬼柳とタッグを組んだとき用に、と。

「はぁ。まぁ、そんなアルフに朗報よ。
今日はフェイトと鬼柳が帰ってくるみたい」

「え！？　それホントなのかい！？」

「えぇ。ついさっき連絡があってね。
今日の分の大会が終わったから、こっちでゆっくりするって」

「いよっし！　そうと決まれば話が早いよ。
早速デッキ調整してタッグの準備しないと！」

プレシアから鬼柳とフェイト帰還の報を聞き、アルフがドタバタと自室へと引き返す。
そんな現金なアルフの姿にプレシアとリニスは苦笑いを浮かべた。
あれではまるで恋する乙女の様だ。

リニスはアルフがリビングから出て行ったのを見送ると、静かにソファに腰を下ろした。
ギシッとスプリングの音が僅かに響き、沈み込む様な心地よい感触にリニスは身を任せる。

「そう言えば鬼柳。そろそろ一線は越えたかしら？」

「ぶふぅっ！」

そしてホッと一息吐いたところに、プレシアの衝撃発言が飛び出した。
まったく想定外の言葉を掛けられて、リニスはえほえほと珍しく咽ている。

だが、プレシアはまったく意に介していない様だった。
それどころか、早く孫の顔が見たいわね。等、楽しそうに将来設計を語っている。

「プレシア！　フェイトはまだ中学生ですよ！」

「？　それがどうかしたのかしら。

早い子じゃ、もう経験してるって聞いたのだけれど……」

「それは、まぁ。否定はしませんけれど……」

コテンと首を傾げられながら訊ねられたプレシアの疑問に、リニスは言葉を濁す。

今のフェイトの年齢は１４歳。そろそろ身体も出来あがってくる頃だろうか。

たしかにこの年頃の少女が初体験を済ませていると言う話は、よく聞く。

だが、その話をフェイトに当てはめると言うのはどう言う事だろう。

リニスは非難する様な視線をプレシアに向けながら、人知れずため息を吐いた。

プレシアも一児。否、二児の母。孫の顔が見たいと言うのも、分からなくもない。

しかし、それにしたって早すぎる。せめて高校生くらいにあがってから。

と言うのはリニスの考えが古いのだろうか。ズキズキと痛む頭に、リニスは手を当てる。

「……ま、まぁ。初体験はまだ、済ませていないと思いますよ。なにせキスですら照れる様な2人ですからね」

「この間ようやく、鬼柳のことを「京介」と呼ぶようになったのに……」

プンスカと頬を膨らませながら、プレシアが不満を露わにする。
以前リニスが調査した鬼柳についてのデータは、どうやら正確だったらしい。

結婚してから2年が経つと言うのに、キスから先に進めていないのが現状なのだ。
しかもフェイトが奥手だからなのか知らないが、ようやくフェイトは鬼柳の事を名前で呼べるようになった。

えらく時間が掛かったものだと、プレシアはある種の清々しさを覚える。
自分がフェイトくらいの年頃のときは、普通に異性の名前を呼んでいたと言うのに。

「まぁ、良いじゃないですか。
見ているこちらが赤面してしまう様な、初々しい結婚生活で」

「はぁ～……、そうよね。私も新しい旦那が欲しいわ……」

リニスはさほど心配していないのか。笑みを浮かべながらフォローする。
たしかにあの2人の結婚生活は、見ていてこちらが赤面する様に初々しい。

一緒に寝た（性的なことは無し）だけで、朝は2人とも顔を真っ赤に染めて。

この2年で料理の腕が上達したフェイトが料理を作れば、「美味しい美味しい」と桃色空間を作り上げる。

見ているこちらがお腹一杯になる様な様子に、プレシアは思わずゲンナリする。

たしかに娘に幸せになって欲しいと思っていたが、ここまで桃色オーラが全開だとこちらが困ってしまう。

ヴィータはこの2人の桃色オーラにやられてしまったのか。近頃は小学校の男子をハントし始め。

シャマルは出会いの無い己の不運に毎夜、やけ酒を繰り返している。

このままでは、被害が増大するばかりだ。

「ジェイルさんはダメなんですか？」

「ダメ、と言う訳ではないのだけれど……。

なんとなく、違うのよね」

リニスは八神家の面々の様子を思い出しながら、ある人物の名を口にする。

その人物の名前とは、現在次元世界にその名を知らしめているとある科学者。

ジェイル・スカリエッティと言う科学者の事だ。

このジェイルと言う男。Dホイールを作らせたら右に出るものは居ないほどの腕を持つ。

彼が作るDホイールは性能が良く、そのくせコストが安いのが話題

となっている。
故に彼が経営するDホイールの制作会社は、毎度てんてこ舞いの忙しさを見せている様だ。

プレシアはそのジェイル・スカリエッティと交友があり、時折連絡を取り合う仲らしい。
ちなみに2年ほど前、リニスがフェイトに贈ったDホイール。これはジェイルの会社で作ったものだ。

「中々難しいですねー」

「なのよー」

良い相手が見つからないリニスとプレシアは、ぐったりとソファに背中を預ける。
やはり生涯の伴侶を選ぶと言うのは、そうとう難しいことなのだろう。

果たして自分にも、そんな人物が現れるのだろうかと、リニスは思案する。
顔も想像できぬ様な男性の隣で、笑顔を浮かべている自分。生憎と想像することが出来ない。

やはり自分に、結婚など無理な話だったのだろう。
リニスはそう結論付けると、依然としてソファの上でごろごろしているプレシアを尻目に。

近いうちに帰ってくる娘夫婦のために腕によりを掛けて、ご馳走を

作る準備を進めるのだった。

※

「久々の我が家にー！　フェイトがー！　帰って来たー！」

「我が家つっても、はやての家だけどな」

久しぶりの帰宅に興奮したのか。フェイトのテンションが若干高い。
鬼柳はそんなフェイトの発言にツッコミを入れると、ガチャリと玄関の扉を開けた。

彼らがこうして八神家に帰ってくるのは1カ月ぶりだろうか。
それほどの長い期間を、彼らは次元世界で過ごしていた。

様々な風景や街並みを見せる次元世界。観光したかったと言う想いはある。
しかし、彼らに観光などしている暇は無かった。あるのはただ、デュエルをする事だけ。

せめて何日か観光したかったなと鬼柳は内心で思いつつ、玄関の戸

を潜る。
その後ろをフェイトがちょこちょことついてきた。そして慣れた様子で靴を脱ぐ。

「おっかえりー！　鬼柳、待ってたよー！」

そして鬼柳とフェイト。2人が靴を脱ぐと、廊下の奥からドタバタと騒がしい足音が聞こえた。
その足音の正体は約1カ月ぶりにその顔を見せるアルフ。顔には喜びの色が浮かんでいる。

「よぅ、アルフ。久しぶりだな」

「アルフだー！」

いの一番で飛び出してきたアルフに、鬼柳とフェイトは笑みを浮かべる。
やはりこうして、見知った人物に会うと心が安らぐ。ホッと安心するのだろう。

そして鬼柳がようやく八神家に帰って来た実感を得ている間、フェイトがアルフに抱き付いている。
2人とも再会が嬉しいのか。「わー！　きゃー！」と興奮しっぱなしだ。微笑ましい光景に、鬼柳の頬も緩む。

「お帰りなさい、鬼柳さん」

「……久しぶりだな」

「おう。なのはにリインフォース」

そして新たに現れたなのはとリインフォースに、鬼柳は笑みを浮かべた。

相変わらず、元気な様子で安心する。若干、リインフォースの表情は硬いが。

いくら失恋の傷が癒えたとはいえ、完治した訳ではない。

どうしたものかと内心で考えながら、鬼柳はフェイト達を伴ってリビングを目指す。

玄関からリビングへの距離はさほど離れていない。

歩いて1分もしないうちにリビングへ鬼柳達は到着する。

そしてリビングに揃っている見慣れた家族の姿に、鬼柳はホッと安堵の息を漏らすのだった。

※

「ふふ、聞いたわよ。調子良いんですって？」

鬼柳達がリビングへ到着してから行われた歓迎パーティ。
その途中、ほろ酔い加減のプレシアが、ズズイと鬼柳に身を寄せながら訊ねた。

彼女自身は意識してそうした訳ではないが、まるっきり誘っている様に見える。
実際、その様子を見ていたフェイトの視線が険しくなった。鬼柳は思わずゲンナリする。

「そりゃ、出場した大会じゃほとんどがベスト４入りしてるしな。優勝した回数も結構多いが……」

「へぇ～。次元世界のレベルに適応してきたのかしら」

ぐいぐいと身を寄せるプレシアを引き剥がしながら、鬼柳がプレシアに答えた。
実際、鬼柳とフェイトのタッグの勝率はそれほど悪くない。逆に相性が良い様にも思える。

なまじ低レベルモンスターの蘇生が得意なフェイト。そして低レベルモンスターを墓地に貯めるのが得意な鬼柳。
この２人が手を組めば、どんどん墓地からモンスターを蘇生させることが出来るだろう。その後は得意のシンクロ召喚だ。

しかもそれに加え、フェイトが新たに得たシューティング・スター・ドラゴンも居る。
これで初戦敗退などしたら、恥以外の何物でもないだろう。

「つってもよぉ。次元世界の大会って、みんなあんななのか？」

「あんなって、どんななんだ？」

「興味があるな」

鬼柳は何処か満足げな表情を浮かべるプレシアに訊ねる。
彼とフェイトが参加した大会と言うのは、どれも鬼柳の常識を打ち破っていた。

当時の様子を思い出し、ゲンナリする鬼柳。
そんな鬼柳の言葉に食いついたのは、ヴィータとシグナム。

どうやら鬼柳の含みのある物言いに興味を引かれた様だ。
丁度いい機会だしと、鬼柳はこれまで参加した大会に付いて語って聞かせる。

ある大会では、トライアスロンをしながらデュエルをした。
水泳が終わればデュエル。自転車で指定の距離を走り終えたらデュエル。マラソンをしてデュエル。

また、ある大会ではロッククライミングをしながらデュエルをした。
切り立った垂直の岩壁を上りながらのデュエルは中々にスリリング

で、二度と体験したくない。

他の大会では、スカイダイビングをしながらデュエルをした。
風でカードがバラバラになったことが何度もある。その度に拾い集めるのは苦労した。

それら各次元世界で体験したデュエルの様子を、鬼柳は何処か遠い眼をしながら語る。
トライアスロンデュエルは本当に死にかけた。あそこまで追い詰められるデュエルはそうそうない。

『……す、凄いな（わね）（ですね）』

「おかげで体重が減ったんだぜ……。
一時期は飯が喉を通らなかったくらいだ……」

そして鬼柳の感想を聞き終え、皆が一斉に告げた言葉が先ほどの言葉だった。
とてもではないが、そんな大会に参加しようとは思えない。命が無くなってしまいそうだ。

うっかり聞いてしまったことを後悔しているのか。ヴィータとシグナムがぺこぺこと頭を下げる。
シャマルとザフィーラは遠い目をしている鬼柳を案じてか。美味しそうな料理をお皿に取り分けたりしていた。

皆の優しさが本当に胸に沁みると、鬼柳は感動を禁じ得ない。
本当に、帰ってこれて良かったと鬼柳は心の底から思う。うっかり

死ぬなんて真っ平御免だ。

「京介ー。一緒に食べよ？」

「ん……、あぁ、そうだな。一緒に食うか」

そんな何処かしんみりとした雰囲気を打ち壊す様に、フェイトが現れる。
手には料理を取り分けた皿を持ち、ぴょんっと鬼柳の隣に腰掛けた。
しばしトリップしていた鬼柳だったが、我に帰るとフェイトに笑みを返す。
そして始まるのは初々しいカップルの食事風景。お互いに食べさせ合いながら、２人だけの空間を作っていく。

「うぉ！　なんだかアタシらって邪魔もの扱いか？」

「恐らく、な」

あっという間に桃色空間を作り上げたことに、ヴィータが驚いている。
他人の目がある中で、２人だけの空間を作り上げるのは凄いことだからだろう。
ヴィータの言葉に肯定を返したザフィーラも、ゲンナリしながら２人の様子を見ている。

件の2人と言えば、身を寄せ合って微笑ましい雰囲気を作り出していた。正直、居づらいと言うのが本音である。

そしてその様子を見て、「うぬぬ……！」と歯ぎしりするのはリインフォースやなのは。

やはり以前の意中の相手が女性とイチャイチャしているのが気に食わない様だ。

ザフィーラはそんな3人の様子を視界に納めながら、はぁと小さくため息を吐いた。

報われぬ恋など、しない方が良い。待っているのはどちらも傷つく未来だけなのだから。

新しい恋に踏み出せればいいのだが、まだそこまで踏ん切りもついていない様だ。

早く普段の3人に戻って欲しいと思いつつ、ザフィーラは自分の分の料理にかぶり付くのだった。

※

ぎゃあぎゃあと騒がしい様子を見せる八神家のリビング。

久しぶりに帰って来た娘夫婦を見つめながら、リニスはある事を考

えていた。

フェイトは自らの意思で新たな力を獲得し、デュエル界で注目の的として活躍している。
デュエルの腕も悪くなく、己の実力とパートナーである鬼柳とでデュエル界を生きていけるだろう。

すっかりフェイトが自分の元から巣立って行ったのを確認し、リニスは寂しい気持ちを覚える。
少し前までは自分の後をちょこちょこと追いかける彼女に、デュエルの指導をしていたと言うのに。

そんな愛弟子が、実力を認められつつあるのだ。嬉しくない訳がない。
だが、では自分はどうかとリニスは思案する。フェイトの師として、自分は恥ずかしくない実力を得ただろうか。

それを考えると、リニスは首を傾げざるを得ない。
自分の実力はフェイトに劣っている。これでは自分が納得できない。

「……そう、ですね」

「？　リニス、どうしたの？」

「プレシア。お願いがあるのですが」

リニスはとある決心を固めると、プレシアへあるお願いをした。
こうして主人であるプレシアにお願いするのは2度目だな、とリニ

スは思う。

以前にお願いした時は、フェイトやアルフに泣いて止められた。
果たして今度は、皆はどんな反応をしてくれるか不安を覚えながらも楽しみで仕方ない。

もしかしたら、プレシアやフェイトに却下されるかもしれない。
ようやくテスタロッサ一家が揃ったのだ。わざわざバラバラになることはない。

しかし、それでもリニスはあるお願いをしたかった。
フェイトの師として恥ずかしくない力を持ちたい。フェイトの誇れる師匠になりたい。

そう考えると、リニスは黙って居られなかった。
そして彼女は、首を傾げてリニスの言葉を待っているプレシアに言い放つ。

――――また、次元世界で修行がしたいです。と。

十七話　「孤独な少年　前編」（後書き）

鬼柳さんは人類ビックリショーに出演している様です。

十七話　「孤独な少年　後編」（前書き）

今回、サブタイの少年が登場しました。
そしてそろそろなのはが覚醒します。

十七話　「孤独な少年　後編」

～海鳴市　八神家～

まさかこうもあっさり決まってしまうとは。
内心でプレシアの返事に驚きつつ、リニスは荷物をリュックの中に入れる。

彼女が行っているのは、これからの旅で必要になると思われる荷物をリュックに詰めることだった。
先日、愛弟子であるフェイトとその旦那である鬼柳が帰宅した際、リニスはプレシアにこう頼んだのだ。

――次元世界へ、再び修行の旅に出たい。と。

てっきりプレシアに止められると思っていたリニスだったが、現実は違った。
「そう。行ってらっしゃい」と、プレシアは僅かな逡巡を見せることなくリニスの旅を許可したのだ。

これにはさすがのリニスも動揺を隠しきれない。
まったく。自分の主人は一体何を考えているのだろう。

リニスは内心でぶつぶつと考えながら、代えの服や下着をリュックに詰める。
出来る限り、荷物を増やさないのが上手に旅をする秘訣だ。着替えなどは必要最低限しか詰めない。

――コンコン

「？　誰ですか？」

と、リニスが自室で旅支度を整えていると。
不意に彼女の部屋の扉が何者かにノックされた。

一体誰なのだろうか。リニスは返事をしつつ、チラリと時計に視線を向ける。
壁に掛かった時計が指す時刻は朝の６時半。まだまだ早朝と言っても良い時間帯だ。

「はぁい、リニス。私よ」

「プレシア」

そしてガチャリと扉を開け、入ってきた人物を認める。
するとリニスは柔らかな笑みを浮かべ、来客――プレシアを出迎えた。

今の彼女の服装はいつもの部屋着であり、灰色のブラウスに濃紺のロングスカートと言う出で立ちだった。
髪もきちんと整えているのか、寝癖などは見当たらない。普段通りの、綺麗な黒髪のロング姿だ。

プレシアはリニスに向けて笑みを返すと、足音を立てぬように部屋

に入る。
どうやら他に起き出している人物は居ないらしい。周囲の人間を配慮しての事だろう。

「そろそろ旅支度も終わるのかしら？」

「えぇ。必要最低限のものは詰め終えました。
デッキはケースに入れて、ズボンのベルトに通せば良いだけですしね」

プレシアの言葉に答えながら、彼女は愛用のデッキを取り出した。
それはフェイトと出会う以前から、彼女を支え続けてきたリニスの相棒たるデッキ。

幾つもの闘いを共に勝ち抜き、苦楽を共にしたまさに掛け替えのない戦友だった。
そんな大切なデッキを、リニスは愛おしげに見つめる。それはまさに、親が子を見る様な表情だった。

そして一通りデッキを眺め終えたリニスは、視線をプレシアに戻しながら訊ねる。

「それよりもプレシア。本当に良いのですか？
もう一度、次元世界へ修行の旅に出ても」

「前に一度、我がままを押し通した貴方がソレを言う？」

「うぐ……」

プレシアの告げた事実に、リニスは思わず言葉が詰まってしまう。
そう。以前に一度、自分はプレシアに我がままを押し通した経験があるのだ。

当時は今よりも実力の低かったフェイトに負けたのが悔しくて。
そして心のどこかでフェイトの事を侮っていた自分を鍛えようと半ば強硬策で旅に出たのだ。

旅に出ると告げた当初はプレシアも反発していたが、リニスの鬼気迫る様子に負けたのだろう。
渋々と彼女の旅に許可を出していた。その当時のことを思い出し、リニスの頬がカァッと赤くなる。

「……まぁ、貴方の気持ちも分かるもの。
師匠の貴方が、弟子のフェイトよりも弱いのが悔しいのよね」

「……」

「ふふ。本当に、使い魔と主人は似るものね」

クスクスと、愉快そうにプレシアは笑う。それに釣られ、リニスも苦笑いを浮かべた。
そう。これでもリニスはフェイトの師匠なのだ。その師匠が、弟子のフェイトよりも弱いのは悔しい。

これがただの我がままだと言うことは百も承知しているが、彼女の心が納得しなかった。
いつもフェイトの目標でありたい。彼女の道しるべとなる存在でありたい。そんな気持ちがある。

だが、自分はフェイトに敗れてしまった。現在よりも弱い状態の、フェイトに。
それが酷く、彼女には我慢ならなかったのだ。フェイトよりも強くと言う我がままは言わない。

しかし、せめて対等の位置に居たかった。彼女と同じステージで、彼女と同等の力を持って。
それがいかに難しいことか、リニスは理解している。フェイトと同じステージに立つのは並大抵の事ではない。

「（それでも、私は……）」

だが、リニスはやると決めたのだ。フェイトに追いつき、肩を並べて見せると。
それに加え、今や次元世界の話題の中心と言えるフェイトの師匠が、あまりに弱いのはお話にならない。

もしも自分のことを聞き付けた愚か者が、愚かにもフェイトの実力も大したことが無いと言ったなら。
それは到底、許せるものではない。そんなことを言った愚か者と、そう思われるほどの強さしかない自分を。

故に、リニスは修行の旅に出るのだ。力を付け、フェイトと対等の

存在で居られるように。
力を付け、フェイトが誇れるような師匠になる様に。そのための苦難、喜んで受け入れて見せよう。

「……ん、そろそろ皆、起きてくる時間ね」

「そう、ですか」

そしてリニスが決意を再び固めた瞬間、頃合を見計らったかの様にプレシアが声を上げる。
チラリとプレシアの言葉を確かめる様に視線を壁に掛けてある時計に移せば、時刻はそろそろ7時と言う時間。

どうやら思った以上に、プレシアとの会話や思考に没頭していた様だ。
手早く支度を済ませ、皆との食事を済ませなければ。リニスは慌てた様に荷物を詰める。

そしてそれから10分ほど経った後、旅支度を終えた彼女はこれからしばらくの間楽しめない、皆との朝食を楽しむのだった。

※

『パパ、ママ……！』

『止めて……、止めてください！』

灰色の景色に浮かび上がるのは、少し前に行われた日の光景。
見知らぬ黒服の男たちに手を引かれているのは、「此処」に来る以前の自分。

そしてそんな自分を必死になって引き止めようと、手を伸ばしているのは母親だ。
その後ろには父の姿も見え、母親と同様。黒服の男たちに鋭い視線を向けて牽制している。

『くっ、お前ら！　一体、何の権利があって！』

『それはこちらの台詞でしてね』

『っ！？』

自分を助けてくれる。そう信じていた父の言葉が、不意に詰まった。
そして黒服の男たちに囲まれるように屹立する１人の白衣を纏った男がニヤリと口元を歪める。

『モンディアル家のご子息、エリオ君はすでに病気で無くなられている』

『……ぇ』

白衣の男が告げた言葉が信じられないのか。黒服の男に手を掴まれていた少年の抵抗が止んだ。
モンディアル家の子息、エリオとは自分の事だ。両親の間には、自分以外の子供が居ない。

では、その肝心の息子である「自分」が死んだとは、一体どう言うことなのだろう。
エリオは死んだと言う。では、ここで息をして、必死に抵抗している「自分」は何だ？

疑問に思った少年は、縋る様な視線を。不安げな様子をはらんだ視線を両親へと向ける。

『そしてこの子は、亡くなった息子さんの特殊クローン。
プロジェクトF。忌まわしき生命創造技術で生み出された、忌まわしき劣化コピーです』

『は、ぇ……？』

少年の顔の隣に、不意にパソコンのウィンドウの様な物が現れた。
そして、そこに表示された資料を読みとるうち、少年の表情が青ざ

めて行く。

そこに映し出されているのは、自分ではない自分が楽しげに両親と遊ぶ姿。
公園で楽しげに両親と遊び、笑顔を浮かべている画像。そして、他にも画像データは表示されている。

その表示される画像データの意味が分からなくて。少年は戸惑いに満ちた表情で両親を見やる。
こんなの嘘だと。何かの間違いだと言って欲しくて。縋る様な視線を両親に向ける。

しかし、少年に返ってきたのは――――

『――――～～～っ』

『っ！？』

何も言い返さぬまま、項垂れる両親の姿だった。
黒服の男に腕を掴まれている少年は、その両親の姿に戸惑う。

なんで。どうして。それではまるで、本当に「エリオ」は死んでいるみたいではないか。
そんなはずはない。「エリオ」は此処に居て、きちんと息をしているのに。どうして諦めた様な表情をするの。

心の中でそう必死に両親に訴えるが、両親は少年を助けようとはしてくれない。

そして、その両親の反応で少年は知ってしまった。。自分は「エリオ」と言う少年を元に作られた、クローン人間で。

元となった少年は死んでいて。自分は、その少年の身代わりとして作られた存在なのだと。

※

「ん……」

不意に少年の意識が覚醒する。
なんだか、懐かしい夢を見ていた様だ。

いつの間にか両の瞳から零れていた涙を拭い、少年は周囲を見渡す。
だが、彼の目に飛び込んでくるのは代わり映えのしない景色。

少年の周囲を取り囲むのは、決して少年の力では壊すことのできない強化ガラス。
そのガラスの向こう側では、白衣を纏った研究員たちが忙しなくデスクの周囲を動き回っている。

「……」

少年は、その変わり映えのない景色を、何の感情も籠っていない様な瞳で見つめた。
そう。自分は生まれた家から引き離されて、この研究所の研究生物（モルモット）となっているのだ。

プロジェクトFと言う研究の成功体が珍しいせいだろう。
少年は日夜、研究員たちによりありとあらゆるデータを取られている。

今日は一体、どんなことをさせられるんだろう。
以前は延々と走りまわさせられ、その前は延々と問題を解かされ続けた。

しかも走るのを止めたり。問題を解くのを放棄すれば、すぐさま電撃が少年を苛む。
故に少年が取れる行動はただ一つ。それは研究員たちの研究生物として彼らの言うことを聞くことだけだった。

『検体番号-ＸＸＸ。実験を開始する。速やかに準備しろ』

「……」

そして少年が起きたことを察知したのか。強化ガラスの向こう側から白衣の男が声を掛ける。

この強化ガラスは並みの攻撃では破壊できない。声すら遮断してしまう。先ほどの声は、室内に据えられたスピーカーから聞こえたものだ。

少年は毎日の変わり映えのしない研究員の声を聞きながら、ノロノロと衣服を身に付ける。
と言っても、それは簡素なTシャツとハーフパンツ。その他は特に用意されない。

当然だ。彼らにとって少年とは、ただの研究生物なのだから。
たかが研究生物に娯楽の金を与えるのは、意味のない行為だからだ。

少年は衣服を身に付けつつ、今日はどんなことをするのだろうとぼんやりと考える。
今日は薬物投与の実験だろうか。それとも体力データの測定だろうか。

「（……なんでも、良いよ）」

ふるふると頭を振りながら、少年は脳裏に浮かんだ思考を消した。
考えても意味のないこと。これから先、少年はずっと研究生物として生かされるのだから。

そして全ての衣服を身に付け、少年は生気のない瞳をガラス越しに研究員に向ける。
今日は一体、どんなことをするのだろう。痛いのや苦しいのは、もうやりたくないな。

そうだ。少し前にやった、デュエルモンスターズをもう一度やってみたい。
失敗すれば電撃を食らうけど、あれは他の実験に比べて楽しかったな。

出来れば、もう一度あのデュエルモンスターズをやってみたい。
少年は内心でそんなことを思いながら、研究員の指示を待つ。

――――だが、少年の運命はここで変わる。

――――不意に少年や研究員たちの耳に聞こえたのは、けたたましい警報の音。

――――聞こえてくるのは、楽しげな男たちの笑い声。

――――「デュエルギャングだ！」。そう叫んだのは誰だっただろう。

――――そしてバタバタと、慌ただしい足音が少年と研究員たちの元へ向かってくる。

――――その足音が切欠になる。その足音こそ変わり映えのしない少年の運命が、変更された音だった。

※

「ふぅ。さて……」

ドサリと背に背負っていたリュックを地面に置き、リニスは腰に手を当てた。

彼女の周囲に広がる景色は、何処までも広がる木々が占めている。

ここはとある管理外世界の辺境。周囲に人工物の気配は微塵も感じられない。

そんな、まるで無人の世界に来てしまった様な場所で、リニスはふぅと息を吐く。

そして一言。

「此処は何処……」

ダラダラと冷や汗を流しながら、リニスは青白い顔で呟いた。
この世界の名称などは、来る前に調べてある。だが、現在地が知れない。

一体どうしてこうなったのかと、リニスはため息を吐きながら思い出す。
そう。あれは家を出る際にリニスに同行したプレシアの悪ふざけが原因だった。

『そうだわ。行き先をダーツで決めましょう』

『は？　だ、ダーツ、ですか』

『えぇ。少し前に日本列島ダ○ツの旅って言う番組を見てね』

「やってみたくなっちゃたの」と笑みを浮かべながら告げるプレシアを、どうして必死になって止めなかったのか。
リニスは今でも疑問に思う。あのとき全力でプレシアの悪ふざけを止めていれば、こんな場所に来ることなど無かったはず。

「（でもまぁ、後悔していても仕方ありませんか）」

リニスはため息を一つ吐くと、地面に置いていたリュックを背中に背負った。
何時までもここで落ち込んでいる訳にもいかない。今日の寝床や食料を確保しなければ。

これではとても、修行どころの話ではない。その日の宿の確保すら困難だ。
リニスは木々の中を歩き回りながらそう思う。せめてこの世界の現地人とコンタクトを取らなければ。

「ふぅ、ふぅ……。何と言うか、本当に辺境に来てしまった様ですね」

そしてこの世界に来てから３０分ほど歩きまわるが、依然として人と出会う気配は無い。
しかもリニスは依然として林の中をトコトコと歩き回っている。これでは人と出会うことも難しい。

これはもしや、迷ってしまったのだろうかと、リニスは不安に思う。いざとなれば飛行魔法を行使すれば楽に脱出できるが、それは最後の手段だ。

それに加え、この世界は管理外世界。
厄介なトラブルに巻き込まれる訳に行かない。

その様な理由から、リニスは極力飛行魔法を行使するのを避けた。
時折額に浮かぶ汗をタオルで拭いながら、リニスは出口を目指してさ迷い歩く。

せめて今日中にはこの林の中から脱出したい。
そう思いながら足を進めていると、不意に甲高い破壊音が耳に飛び込んできた。

「この音は……？」

不意に彼女の耳に飛び込んできた破壊音に、リニスは身体を強張らせる。
そして次の瞬間には、全身を臨戦態勢にして、周囲の気配を全力で探った。

先ほどの音がただの採掘作業などで使われた爆薬の破壊音ならば良い。
だが、もしも犯罪集団やテロリストが無差別に周囲を破壊していたら不味い。

下手をすれば犯罪集団やテロリストと戦闘を行う可能性すらある。
出来る限り、その様な危険は回避したいと言うのがリニスの本音である。

「（ひとまず、音の発生源を確認せねば……）」

まずは音の発生源を確かめようと、リニスはその場から動きだす。
出来れば杞憂であって欲しいが、念には念を入れておいて損は無いだろう。

出来るだけ足音を消し、気配を押し殺しながらリニスは林の中を移動する。
そして見えてきたのは林の出口。その視線の先には、見慣れぬ建物が見えた。

「研究所……？」

その建物は、まるで意識的に人里から離れた場所に建てられている様だ。
周囲の様子を伺うのだが、何処にも人里や民家の姿は見えない。

もしややましい研究をしている研究所なのかと、リニスは思案する。
そう言えば以前、リニスが旅をしているときにこの様な噂を耳にした。

管理世界。管理外世界の何処かに、ミッドチルダの法で違法とされる研究がおこなわれている、と。
その違法な研究の種類は様々で、人工的に人間を創造する研究や人間を機械に変える様な研究もされているらしい。

そのいずれもが胸糞悪くなる様な実験で、リニスも良い感情を抱かなかった。
彼女の視線の先に映る研究所。あれはもしや、違法研究所なのだろうか。不安が募る。

そしてリニスは暫し、林の中に身を隠しながら研究所を伺う。
これがただの研究所ならば良し。そのまま立ち去ることが出来る。

だが――――

「っ！？　アレは……」

リニスの視線の先。不審な研究所で動きがあった様だ。
爆発音と共に、建物の入り口が吹き飛ばされる。そして中から数人の男が飛び出してきた。

その男たちは何れも首元に赤いスカーフを巻いており、腕にはデュエルディスクを付けている。
首元に赤いスカーフと言う特徴的な容姿の男に、リニスは思わず目を見張った。

「デュエルギャング……！
今、次元世界を騒がせている犯罪者集団……」

彼らは恐らく、デュエルギャングと呼ばれる集団の一員だろう。
彼らの何れもが、慌てた様子で周囲の様子を確認している。

リニスは物陰に身を隠しつつ、まさかこんなところでデュエルギャングに遭遇するとは思わなかったと、内心で呟いた。
デュエルギャングの発祥の地はかの英雄、不動　遊星の世界で生まれたものだ。それと同時、様々な世界にデュエルギャングは発生した。

不動　遊星のいる世界でのデュエルギャングたちはあらかた撲滅されたが、他の世界では未だ健在なのである。
その中でも、ある人物をリーダーとしたデュエルギャングが今現在、最も勢力を伸ばしていると言う話をリニスは聞いていた。

そのリーダーとは、バーン効果を持つ効果モンスターで相手を1ターンで倒す実力の持ち主。
いくら腕の立つ決闘者がデュエルを挑んでも、先攻。後攻問わず1ターンで倒されてしまうほどだ。

そのリーダーの名前は、ロットン。
詳しい人相などは分からないが、その集団のメンバーは全員、首元に赤いスカーフを巻いているらしい。

「不味い集団と当たってしまいましたね。
ロットンが出てきたら、私ではどうにもなりません……」

ギリッと歯を噛み締めながら、リニスは悔しげに呻く。
今は下っ端しかいない様だが、仮にリーダーであるロットンが出てきたら。

まず間違いなく、自分は手も足も出ずに倒されるだろう。
それほど、ロットンの持つモンスターカードは厄介なのだ。

このまま林の中に身を引き返した方が安全なのでは。
リニスはそう判断すると、林の中に身を隠そうと踵を返そうとする。
だが、そんな彼女の足が止まった。リニスの視線が、ある一点に向

けられる。
そのある一点とは、先ほど下っ端たちが出てきた研究所の入口。そこに新たに1人の男が現れていた。

――――赤い髪をした少年を、無理やり引きずりながら

「こ、ども……！？」

「今回のターゲット、プロジェクトFの遺産は手に入れたぜ。早くずらかるぞ」

「ッ！？　プロジェクトF！？」

男に引きずられるように出てきた少年に、リニスは目が釘つけになる。
そして茫然としていたリニスの耳に、男たちの会話の一部が飛び込んできた。

その話によると、この少年はプロジェクトFの研究により生み出されたクローン人間だと言う。
今回彼らがこの研究所を襲ったのは、ここで実験対象にされていた赤髪の少年を捕えることだったそうだ。

だが、何もそれは善意によって行われた事ではない。他の研究所もまた、クローン人間に興味があった故だそうだ。
彼らはその研究所に金で雇われ、ここで軟禁されていた少年を奪いに来たらしい。その話を聞いていたリニスは、グッと拳を握りしめる。

「（こんな……子供を……ッ！）」

リニスの胸の中を、マグマの様な灼熱の怒りが支配していた。
許せない。こんな子供を研究対象としか見られない研究者たちが。
ただの金儲けの道具としか見ていない彼らが。

プロジェクトFと言う単語に、リニスは覚えがあった。否、彼女にとって、それは身近な言葉だった。
フェイト・テスタロッサ。他の誰でもない、リニスの弟子がその研究によって生み出された存在なのだから。

故にリニスは彼らの行いを許すことが出来ない。まるでフェイトがその様な目で見られている様で。
まるでフェイトという個人を見ないで、研究対象としてしか見られていない様で。リニスは自身の怒りを抑えることが出来ない。

そして怒りに震えるリニスの視線の先で、彼らは逃走するのだろう。
少年を抱え上げようとする。
しかし、そうはさせるものかとリニスはその場を駈け出した。逃がす訳に行かない。あの少年は連れて行かせない。

その少年は道具ではないのだ。研究対象でもない。
この世に生を受けた、たった1人の人間なのだ。そんな彼の尊厳を、誰にも踏みにじらせはしない。

「待ちなさい！」

そして、リニスが吠えた。

※

「待ちなさい！」

赤いスカーフを首に巻いた男に手を引かれる少年、エリオ。
見知らぬ彼らに連れられ、他の場所へ移されようとしているとき、
不意にその声は響いた。

エリオの腕を掴んでいた男と、周囲の男たちが一斉に声が聞こえた
方へと視線を向ける。
エリオもまた、その声の持ち主に興味があったのか。視線を声が聞
こえた方へと移動させた。

そして、視界に飛び込んできたのは1人の女性の姿だった。
旅でもしているのか。動きやすい軽装に身を包み、腕にはデュエル
ディスクを装着している。

それは一見すれば、ただの旅人の様に見えただろう。
だが、エリオは彼女のある一点に目が釘つけになっていた。
旅人であろう女性の頭と腰のあたりに、おおよそ似つかわしくない猫の耳としっぽの様なものが存在している。
あれはまるで使い魔の様だと、エリオはおぼろげな知識でそう判断していた。使い魔、初めて見る存在である。

「何もんだ！」

「どっから出てきやがった！」

と、エリオが突如乱入してきた女性をぼぅっと見つめていると、周囲の男たちが騒ぎ出す。
どうやら彼らにとって、この女性の乱入は予定になかったようだ。
動揺しながらも、剣呑な視線を向けている。

ただの一般人ならば、その眼光だけで腰が引けてしまいそうなほどのその眼光。
だが、彼らの前に立つその女性は怯える様子を見せない。逆に、ハッキリとした口調で告げてくる。

「その子を置いて消えなさい。さもなくば、容赦はしませんよ」

「舐めてるんじゃねぇぞ！」

「舐めているのは、どちらですか……！」

不意に、エリオは疑問に思った。あの女性は何故、あれほど怒りを覚えているのかと。
彼女の瞳に宿る怒りの炎は、彼女から離れた位置に居るエリオですら容易に感じ取ることが出来る。

それに加え、先ほどの発言も要領を得ない。一体、彼女は何を言っているのだろう。
エリオの周囲を囲む男たちも女性の要領を得ない発言に疑問を抱いたのか。訝しげな視線を彼女に向ける。

エリオと男たち。彼らの視線が集まる中、乱入してきた女性は大声で怒鳴る。

「その子は道具でも、クローンでもありません！
この世界に生を受けた、たった1人の掛け替えのない人間なんですよ！」

「！」

「貴方たちこそ、その少年を舐めるのも大概になさい！」

その女性の一括に、エリオは大きく目を見開いた。自分は、たった1人の人間。
その言葉が、エリオの胸の奥に突き刺さる。この研究所に来てから、そう考えたことは無かった。

自分は研究材料になるためのただの道具で、元となった人物の劣化コピーとしか思っていなかった。
これから先、自分はずっと研究の道具として生きて行くと思っていた。だが、目の前の女性がそれを却下する。

自分はこの世に生を受けた1人の人間だと。掛け替えのない1人の人間だと。
目の前の女性がそう、言ってくれた。そんな彼女の言葉が、エリオの胸の奥に響いて行く。

「おもしれぇ！　その減らず口、すぐに黙らせてやるぜ！」

「っ、来なさい！」

そしてエリオの視線の先で、女性と男のデュエルが始まる。
その隙にエリオの腕を掴んでいた男は逃げだそうとしたが、無理だった。

不意にエリオの腕を掴んでいる男に放たれるのは、手錠の様な物体。
それが腕を掴んでいる男のデュエルディスクに装着されると、男は身動きが取れなくなった。

「逃げようとしても無駄ですよ。彼の次は貴方なんですから」

「クソがっ！」

エリオの腕を掴んでいる男は、必死にデュエルディスクに装着された手錠を外そうとする。
だが、どの様な構造になっているのか。デュエルディスクに絡みついた手錠は外れる気配を見せない。

そして男が手錠を外そうと躍起になっている隣で、女性と別の男のデュエルが開始された。
男がモンスターで守備で固め、時間を稼ごうとしている。だが、女性はそれを良しとしない。

あっという間にレベル8のシンクロモンスター、ライトニング・トライコーンを召喚すると怒涛の攻撃を男に仕掛けた。
男は必死に耐えようとするのだが、ライトニング・トライコーン。
そしてバブーンの攻撃を受け、デュエルに敗北してしまう。

この間、僅か4ターンの出来事だ。あまりに早く、スピーディなデュエルにエリオは驚きを隠せない。
あれほど早く、華麗に相手を倒すデュエルを、エリオはまだ知らなかった。故に彼女の姿がやけに印象に残る。

そして2人目の男とすぐにデュエルに突入し、再び速攻でデュエルにけりを付けた。
圧倒的な早さで相手を圧倒し、反撃すら許さない。その姿はまさに鬼神と呼ぶに相応しい強さだ。

2人の男が倒され、残るデュエルギャングはエリオの腕を掴んでいるこの男しか存在しない。
彼の腕を掴んでいる男はその女性の圧倒的な強さに怯えたのか。腰を抜かし、座り込んでいる。

連続のデュエルを終えた女性は彼とデュエルする必要は無いと悟ったのか。
勢いよく右手を振り被ると、渾身の一撃をエリオの腕を掴んでいた男の鳩尾に叩きこんだ。

あまりに生々しい打撃音が周囲に響き渡り、エリオの腕を掴んでいた男の身体から力が抜ける。
どうやら気を失ってしまった様だ。圧倒的な強さを見せる目の前の女性を、エリオは茫然と見上げる。

自分や研究者たちが手も足も出なかった男たちを、この女性はあっという間に倒してしまった。
それはさながら、物語に出てくる様な王子様の様で。それはまるで、自分をどん底から引き上げてくれる天使の様で。

この人なら、自分が生きるのを良しとしてくれるのだろうか。
自分の事を1人の人間として、見てくれるのだろうか。そう思いながら、エリオは目の前の女性を見上げた。

十七話　「孤独な少年　後編」（後書き）

次回予告

リニスが次元世界でデュエルギャングと闘っていた頃。
プレシアは鬼柳とフェイトにある相談を持ちかけられる。

彼らの相談の内容に、プレシアは頭を悩ませるばかり。
だが、彼女は彼女なりの答えを鬼柳達に示す。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「夫婦の悩み」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

十八話　「夫婦の悩み」（前書き）

今回は若干十五禁くさいかもです。
ひとまず、鬼柳さんは頑張れと言うことで。

十八話　「夫婦の悩み」

～海鳴市　八神家～

「母さん、どうしよう……」

リニスがとある次元世界でエリオと名乗る少年と接触していたころ。
朝食を食べ終え、リビングで寛いでいたプレシアの元をフェイトが訪れていた。

だが、今の彼女の表情は不安に彩られており、普段の可愛らしい表情は見られない。
一体どうしたと言うのだろう。読んでいた本をパタンと閉じ、プレシアはフェイトに訊ねる。

「ど、どうしたの？」

「わたし、京介の傍に居て良いのかな……」

「……詳しく聞かせなさい」

何処かしょんぼりとした様子のフェイトに、プレシアの顔が真剣になる。
なにせ彼女の一番大切な愛娘が不安がっているのだ。真剣に対応しなければ不味い。

ひとまずプレシアはフェイトをソファに座らせると、詳しい事情を彼女から訊ねる。
その内容とは、鬼柳が自分に釣りあっていないと言う心ない批判。
どうやら先日、とある大会に参加した際に対戦相手にそれを告げられた様だ。
他にも金を積まれたのか。弱みを握られたのかなど、心ない言葉が彼女を傷つけた。
何の実績もない、聞いたことのないチームのリーダーと結婚したのを相手は疑問に思っていた様だ。
そんな無名の相手とじゃ釣り合わない。君は自分と結婚するのが幸せだ。そんな、好き勝手な事を言われた。

「良し、分かったわ。ちょっとぶち殺してくるわ」

「だ、ダメだよ！　実力行使は待ってぇえええええっ！！」

ズリズリと、部屋を飛び出そうとしているプレシアの腰にフェイトが抱き付き、プレシアを止める。
たしかに不快な思いをしたが、実力行使の手段に出るのは得策ではないと理解しているのだろう。

フェイトに抱き付かれつつも、プレシアは尚も次元世界へ出かけようと足を動かす。
そんなプレシアを、フェイトは彼女の腰に抱き付きながら必死に説得を行った。

そしてプレシアが理性を失ってから１０分ほど経ったころだろうか。
ようやく暴走状態のプレシアに、理性が戻ってくる。それと同時、
フェイトはホッと安堵の息を漏らした。

「はふぅ。母さん、ちょっとは落ち着いてよ」

「ごめんなさいね。フェイトが虐められていると思ったら、我慢で
きなくなっちゃった」

てへ、と言わんばかりに、舌を突き出しながらプレシアが笑う。
フェイトもそのプレシアの笑みに釣られたのか。クスリと柔らかな
笑みを浮かべた。

「それでね、母さん」

「？　どうしたの」

そして一しきり２人は笑いあうと、ようやく本題に入るのか。
フェイトが笑顔から一転、不安げな表情を浮かべて疑問の内容を話
す。

それは先ほど、２人の話題に出てきたとある決闘者が告げたことに
関係している。

「わたし、京介のお嫁さんだよね……？」

「？　当たり前じゃないの。籍も入れたし、何を不安がっているの？」

「だって、だって……！」

不安に身体を震えさせながら、フェイトが不安の原因をプレシアに言う。

結婚してからこれまで、鬼柳から好きだ、などの愛の言葉を彼女は聞いたことが無かった。

それどころか、ハグやキスなどのスキンシップもほとんどされたことはない。

いつも自分から抱き付くばかりで、彼からしてもらったことなど一度もないのだ。

故に、フェイトは不安に思う。自分は本当に、鬼柳のお嫁さんなのだろうか、と。

なにも四六時中、愛の言葉を囁いて欲しいなどとワガママは言わない。けれど、ときおり言って欲しいのだ。

好きだ、と。傍に居てくれて嬉しい、と。

それだけで、自分は胸を張って彼のお嫁さんだと言えるのだから。

「……そう。不安だったのね」

「っく……、ぐす……」

プレシアはフェイトが抱えていた不安を知り、そっと彼女を抱き寄せた。
いつまでも子供だと思っていたのに、いつの間にか大人の階段を上っていたらしい。

好きな人に必要とされない悲しみ。それはプレシアにも覚えがある。
そんな悲しみを、娘は味わっているのだろうか。内心でプレシアは思った。

彼女の胸に抱かれているフェイトと言えば、自分の不安を言葉にしたせいか。
感極まった様に泣いている。今まで誰にも相談できなかったのだろう。心が限界だった様だ。

「……そうよね。いくら強引な結婚とは言え、キスや愛の言葉は欲しいものね」

泣いているフェイトの頭を優しく撫でながら、プレシアが確認する様に訊ねる。
するとフェイトも同じ意見だったようだ。プレシアの胸に顔を埋めながら、コクコクと首を縦に振る。

いくら自分が相手のことを好きでも、相手が自分のことを好きで居てくれなくては意味が無い。
そんな一方通行な恋はイヤだ。愛したいし、愛されたい。フェイトは愛に飢えていた。

「よぅし。お母さんに任せなさい。ガツンと鬼柳に言ってあげるから」

「……ぐす。ホントに……」

「えぇ。だけど、助けてあげるのは今回だけよ。
次からは、アナタがキチンと鬼柳に言いなさいね？」

「……」

プレシアの諭す様な言葉に、フェイトはコクリと首を縦に振る。
そう。彼女は形はどうあれ鬼柳の嫁なのだ。嫁が旦那に意見出来ないなどおかしい。

故に、フェイトを助けるのは今回だけだ。
次からは自分で解決しなければならない。なにせこれは、夫婦の問題なのだから。

それから暫しの間、八神家のリビングにフェイトの啜り泣く声が響き渡る。

※

「プレシア。少し良いか？」

プレシアがフェイトを慰め終わって少しした後。
どの様に鬼柳に告げようか考えていたプレシアの元へ、渦中の人物である鬼柳が現れる。

どうやら彼も彼で、プレシアに相談があるらしい。
丁度いい機会だとばかりに、プレシアも彼の相談に乗る。

「えぇ、良いわよ。私も貴方に言いたい事があったし」

「そうか。なら、部屋を移すか」

「分かったわ」

プレシアは鬼柳に連れられるまま、場所を鬼柳とフェイトの私室に移す。
と言っても、部屋の中はリニスがこれまで掃除をしていたために綺麗なままだった。

鬼柳とフェイト。２人ともモノを置かない性格のせいか。
部屋の中は小ざっぱりとしている。小さな雑貨類はほとんどない。

「それで、どうしたの？」

「……あぁ」

「？」

適当にベッドに腰掛けると、プレシアは早速本題に入る。
まずはこちらが先に言っても良いが、鬼柳の相談も気になった。

彼は彼で、どんな相談事をしてくるのだろう。
これでフェイトと同じ様な内容だったら、笑うしかない。

しかし、そんなプレシアの反応に対して鬼柳の反応は薄い。
まるで言いづらいことを言い出そうとしている様で。プレシアとしては首を傾げるばかりだ。

「……」

「……」

「……」

「……」

それから暫しの間、部屋の中を2人の沈黙が支配する。
その間プレシアは身じろぎすることなく、鬼柳の言葉を待った。

もしやフェイトとの話の中に出てきた決闘者とは別の決闘者から陰口を言われているのでは。
いや、もしかしたら嫌がらせを受けているのではないだろうか。靴に画鋲が入れられているのだろうか。

鬼柳が口を閉じている間、プレシアは心の中でその可能性を浮上させる。
もしもフェイトが気に入らないならば、自分とリニス。そしてアルフが黙ってはいないだろう。

フェイトにちょっかいを出したことを後悔させてやる。
人知れず海に沈めてやろう。プレシアは1人、心の中でそう決意を固める。

「……この前、よ」

「！」

そして10分ほどの沈黙が、鬼柳が不意に発した言葉によって壊された。
ようやく来たか。誰がフェイトを虐めている。やられたらやり返すぞ。内心、プレシアはそう思っている。

だが、鬼柳はそんなプレシアの内心など知らない。
ただ、苦汁に満ちた表情を浮かべ、言葉を選ぶように続けている。

「対戦相手のヤツに、言われたんだ」

「何を言われたと言うの？　フェイトが分不相応？　可愛くない？　気持ち悪い？　それとも虐められてるの？　さぁどれ？」

「？　い、いや。そんなことは無いんだが……」

「あら？」

鬼柳のキョトンとした表情に、プレシアの勢いも弱まった。
詳しい話を鬼柳から聞いてみると、どうやらフェイトは虐められていないらしい。

それどころか、ＶＩＰ待遇で対等に接してくれる存在があまり居ないと言うのが現状だそうだ。
それはそれで問題なのだが、娘が虐められていないと知り、プレシアはホッと安堵の息を漏らす。

鬼柳はそんなプレシアの不審な様子に首を傾げていたが、すぐに気を取り直した様だ。
先ほどのプレシアとのやり取りでか。若干柔らかくなった表情でプレシアに事情を話す。

「いくら積んで、フェイトをモノにしたんだ。
それとも権力か。無理やり犯したのか……ってよ」

「良し決めた。ぶち殺し確定ね」

「まぁ、話は最後まで聞いて行け」

ボカリ、と鬼柳は部屋を出て行こうとしたプレシアの頭を乱暴に叩く。

あまり女性を傷つける様なことは推奨されないが、これぐらいは良いだろうと鬼柳は思う。

なにせあのままプレシアを放置していたならば、その決闘者の元へ殴りこみに行きそうだったからだ。

下手に殴りこみを仕掛け、問題になったら不味い。出来る限り、厄介事に巻き込まれたくは無い。

プレシアは鬼柳に叩かれたところを擦りながら、渋々とベッドに座り直す。

どうやら不満げな様子だ。だが、自分だってあの対戦相手の物言いは不満なのだ。我慢してもらおう。

「こんなやっかみが出ることくらい、想定の範囲内だろうが」

「それはそうだけど、やり切れないのよ！」

「まぁ、その点は同意だけどよ……」

ガルルと歯ぎしりをしながら、プレシアが鬼柳に向けて吠える。

いくらやっかみや批判が来ることは分かっていても、必ずしも耐えられる訳ではない。

今すぐそんなことを言った対戦相手を八つ裂きにしたい。
身の程を弁えさせ、二度とフェイトの前に立たせない様にしたいのだ。

だが――と、プレシアはそこで一たび落ち着く事にする。
当事者ではない自分が、いくら騒いだところで無駄なのだ。いくら母親と言えど、当事者ではない。

それに、プレシアの前に座る鬼柳はきっとプレシア以上の怒りを覚えているのだろう。
なにせ自分の嫁であり仲間を侮辱されたのだ。仲間想いな鬼柳が黙っていられるはずが無い。

「俺は気にしてないんだが、フェイトが気に病んでる可能性がある。……落ち込んでるようなら、慰めてやってくれ」

「あら。でも、それは貴方の仕事でしょう？」

ようやくプレシアが落ち着いたころ、鬼柳が落ち込んだ様子でプレシアに告げた。
その話の内容を聞き、プレシアは真剣な眼差しで鬼柳を見つめる。
そう。それは鬼柳の役目だ。

すでに親の元を離れ、鬼柳という旦那がフェイトのすぐ傍に居る。
そんな彼が、傷ついているフェイトを慰めないでどうすると言うのだろう。

「それもそうなんだが、他にも事情があってな……」

「事情？　……はっ、まさか……！
フェイトが虐められていると言うの！？　ぶち殺し確定！？」

「いい加減、そこから離れろよ……」

先ほどまでの頼れる大人と言う雰囲気を霧散させ、プレシアが鬼柳に詰め寄る。
これがテレビで言っていたモンスター・ペアレントかと、鬼柳は内心で納得した。

ひとまずプレシアを落ちつけようと、どぅどぅと彼女に声を掛ける。
そんな鬼柳の言動が気に入らなかったのか。「私は牛じゃないわよ」とプレシアは愚痴っていた。

だが、そんなやり取りのおかげでプレシアにも心のゆとりが出来たらしい。
先ほどよりも弛緩した雰囲気の中、鬼柳が衝撃の爆弾を投下する。

「……フェイトが1人で、夜中にその……してるんだよ」

「？　してる？　デッキ調整？」

「そうじゃねぇ！　じゃなくて、その……」

「？」

頬を赤く染めながらぼそぼそと告げる鬼柳に、プレシアは頭に「？」を浮かべる。
どうにも鬼柳の様子がおかしいのだ。言いたい事があればスパッという鬼柳が、これは珍しい。

両耳で鬼柳の要領の得ない言葉を聞きつつ、プレシアは頭の中で思考する。
鬼柳の話を聞く限り、フェイトが夜な夜な何かをしている様だ。

まず真っ先に候補に浮かぶのがデッキ調整なのだが、それではないと鬼柳がダメ出し。
では、他になにをしているのだろう。これと言った理由が浮かばず、プレシアは疑問を覚える。

「自分を……指で慰めてるんだよ」

「……あぁ。なるほってえぇえええええっ！？」

しかし、疑問を覚えていたプレシアも、鬼柳の口から飛び出した衝撃発言に目玉を飛び出さんばかりに驚く。
いや、そんなまさかと言う想いがプレシアの頭の中を支配していた。
まだまだそう言う行為は早いと思っていたのに。

はっ、そう言えば近頃は性の低年齢化も進んでいたとテレビで見ていた記憶を思い出す。
まさか性の低年齢化がフェイトにまで及んでいたなんて。プレシア

は混乱しつつ、ショックを受ける。

「は、早くないのかしら！？」

「お、俺が知るかよ！
だからプレシア、お前に相談してたんじゃねぇか！」

「私だってフェイトくらいの歳で自分の慰め方くらい……知ってたわね」

「っ！？」

あわあわと混乱する鬼柳とプレシア。
もしもこの光景を第三者が見ていたならば、クスリと笑みを浮かべるだろうか。

鬼柳とプレシア。２人とも普段のクールな仮面を投げ捨て、驚くほど狼狽している。
それほど、フェイトの夜中に行う秘め事が衝撃的だったのだろう。

今の鬼柳とプレシアの様子は、初めての子育てに四苦八苦している父親と母親の様だ。
それほど自分の娘（または嫁）の行為が衝撃的だったらしい。

「エッチな本を近所のゴミ捨て場から拾ってやり方覚えたし……」

「……」

「友達と一緒に見ながらきゃーきゃー言ってたわね」

「……」

プレシアは顎に手を当てながら、自らの幼少時代を振り返る。
そう言えば自分がフェイトと同じかそれよりも小さい頃、そんな本を読んだ覚えがある。

内容が中々に過激で、しばらくの間頭の中から離れなかったなとプレシアは遠い眼だ。
そうか。思えばフェイトもそう言う時期なのだろう。娘の成長を、自らの常識で否定してしまっていた。

なんてダメな母親だと、内心でプレシアは自身を嘲笑する。
フェイトにはフェイトなりの成長の仕方があるのだ。それが早いか遅いかは当人次第なのだから。

そんな中、一方の鬼柳と言えば心当たりがあるのか。無言で記憶を振り返っている。
彼がその様な本を読んだのは初代チームサティスファクションを結成したときだ。

捨てられていた雑誌を持ち返り、クロウと2人で読んだ記憶がある。
ちなみに遊星とジャックは読んでいない。遊星は機械に夢中で、ジャックは興味がなさそうだった。

「――――と言うことで、結論としてはそんなに早くないのでは。

という結論に達したわ。
　というか、ぶっちゃけ少し遅いくらい？　その辺りは個人差によるわね」

「そうか。ひとまずホッとしたぜ」

「そもそも。少しずつ身体が大人になっていくのだから、仕方ないと言えば仕方ないわね」

「女の子にだって性欲はあるし」と、プレシアは自身が出した結論をそう締めくくる。
プレシアの出した結論に納得したのか。鬼柳はふぅむと難しそうな表情を浮かべて頷いた。

彼としては、何時までも子供だと思っていたフェイトがいつの間にか成長しているのに気付かなかったのだろう。
そう言えば先日、身長が少し伸びたと嬉しそうに語っていたな。と、以前のフェイトとのやり取りを鬼柳は振り返る。

自分が年を取る様に、フェイトも歳を重ね、成長しているのだ。
それを忘れていたなと、鬼柳は苦笑しながらそう思う。

「でも意外ね。あの子、そう言うのに興味薄そうだったのだけれど……」

「そうなんだよな。俺としても心当たりはない……。なのは辺りに聞いてみるか？」

「そうね。なら、それは私の役目になるわ。
女の子のプライベートな話に、首を突っ込んじゃいけないんだから」

片眼でウィンクを行いながら、暗に首を突っ込むなと鬼柳に告げる。
これぱっかりは女の子同士のプライベートな話なのだ。男性の立ち入りは禁止である。

鬼柳もそれは分かっているのか。苦笑いを浮かべながら「了解だ」とプレシアに告げた。

「そう言えば鬼柳。貴方、週に何回フェイトとしてるの？」

「……なにか、イヤな予感がするんだけどよ。
というか、フェイトと何をするんだ？」

「良いから早く答えなさい。夫婦がする事と言えば1つでしょうが」

「……」

そして今度はプレシアが一転、攻勢に転じる。
十分鬼柳の悩みは聞いた。だから今度はフェイトの悩みを打ち明ける。

プレシアの何処までも追及する瞳が、ジィッと鬼柳を睨みつけた。
鬼柳はしばしプレシアのその瞳を見返していたが、根負けしたのか。

嘆息しながらプレシアの質問に答えた。

「性行為だろ？　一回もしてねぇよ」

「じゃあ、ハグやキスのスキンシップは？
フェイトに「好き」って何回言ったのかしら？」

「覚えてない……、と言うか、1回キスしただけだ」

「なるほどね、原因は貴方よ」

鬼柳に幾つか質問すると、プレシアは得心が言ったとばかりに頷いた。
なるほど、フェイトが自らを慰めることに走る原因がこんなに近くに居たとは。

鬼柳の傍に居て良いのか不安で、自分を自分で慰めていたのだろう。
どっちみち、鬼柳の自業自得なのだ。

プレシアははぁと嘆息しながら、チラリと横目で鬼柳を見やる。
大方、この男は自分が原因だとは気付いていないのだろう。彼は鈍感さんだから。

一方の鬼柳と言えば、プレシアの呆れた様な視線が癇に障ったのか。
何処か釈然としない様子で、ジッとプレシアをにらみ返している。

「原因って、何だよ」

「フェイトが自分を慰める原因よ！　そもそも貴方が元凶なの！　何なの？　お嫁さんにキスやハグもしないで、あまつさえ「好き」も言ってないですって！？　ふっざけんじゃないわよ！　自分が釣った魚には餌を与えなさいって、誰かに言われなかったの！？」

「……」

あまりのプレシアのマシンガントークにか、鬼柳の勢いが殺される。事実、ここまでプレシアが感情を露わにするのは珍しいことだ。

だが、逆を返せばそれだけ鬼柳に怒っているのだろう。

鬼柳とて、フェイトに「好きだ」などの言葉を贈らないことに罪悪感を覚えていた。

あれだけ自分に好意を示してくれているのに。自分は何も返せていない。

それがどれだけ心苦しいことか、鬼柳は身を持って経験している。

「えぇ、今回の結婚が半ば政略結婚なのは重々承知しているわ。けどね、せめて傍に居てくれて嬉しいとか言いなさいよ！　フェイトは不安なのよ、貴方が何も言ってくれないのだから！　自分が貴方にどう思われてるのか不安で、傍に居て良いのか分からなくて。

それで自分を慰めてるのよ！　分かってるの！？」

「そう、なのか……」

「……言葉にしなきゃ、伝わらないことってあるのよ。分かってるんでしょ？」

「……あぁ、そうだな」

怒涛のマシンガントークが止み、プレシアの諭す様な言葉が鬼柳の耳を打つ。

そうだ。忘れていた。言葉にしないと伝わらないことがある。どうして忘れていたんだろう。

自分はサテライトでの遊星とのデュエルで、それを悟ったはずではなかったのか。

それがいつの間にかフェイトが傍に居ることが当たり前になり、感謝の言葉を忘れていた。

それに加え、半ば強引な結婚だったのも鬼柳が積極的になれなかった原因かもしれない。

フェイトを護るためとはいえ、強引に彼女と結婚した。それが精神にストッパーを掛けていたのかもしれない。

やはり、自分はまだまだだなと鬼柳は思う。これでは到底、満足させてやることが出来ない。

フェイトを。なのはを。はやてを。ニ代目チームサティスファクションのメンバーを。

「（だから、此処までだ）」

だから、これまでの恰好悪い自分とはここでお別れだ。
自分は嫁と皆を護る、頼れるリーダーにならなくてはならない。

今まで心に掛けていたストッパーも外そう。
強引な結婚とは言え、フェイトは自分の嫁だ。もう不安になどさせない。

皆が心の底から笑って、満足出来る様なチームを目指す。
それがニ代目チームサティスファクションを結成した理由なのだから。

「悪かったな、プレシア。おかげで目が覚めた」

「ふふ。なら、私よりも行くところがあるんじゃないかしら」

「そうだな。フェイトのところに行ってくる」

そして心機一転させた鬼柳は、腰掛けていたイスから腰を上げた。
彼のその表情には、先ほどまで浮かんでいた不安な様子は見受けられない。

ようやく吹っ切れたらしい。彼の顔を見て、プレシアは心の中でそう思う。
これならば、フェイトが不安になる事もないだろう。彼女は彼に必要とされるのだから。

「っと。これを持っていきなさい」

「っ！」

と、部屋を出て行こうとした鬼柳を呼び止め、プレシアはあるモノを投げる。

プレシアが投げたあるモノは放物線を描き、スポンと鬼柳の手の中に転がり込んだ。

これは一体？　鬼柳はプレシアから受け取ったモノをジィッと見つめる。

「避妊はしっかりね」

「……」

「なんなら、いきなり孫が出来ても良いけど」

受け取ったのは男性が使用する避妊具。

どうやら、最後はキッチリと締まらなかったようだった。

鬼柳はプレシアから受け取った避妊具を微妙な表情で見つめつつ、ポケットに入れる。

そして一刻も早くフェイトの元へ急ごうと、自室を飛び出しフェイトの元へと向かった。

一方プレシアは部屋を飛び出し、フェイトの元へ向かう鬼柳の様子を思いながら考える。
ひとまず、今日の夕飯はお赤飯で決定だ。もしかしたら、近いうちに孫が見られるかもしれない。

これで少しは2人の夫婦仲が良くなったなら嬉しいなと、プレシアは笑みを浮かべながらそう思った。

そして翌日。嬉しそうに鬼柳の腕の中にフェイトがいるのはまた別のお話。

十八話　「夫婦の悩み」（後書き）

次回予告

ブルーノの元でデュエルモンスターズを教わるティアナ。
兄が死んでから数年が経ち、デュエルの腕もある程度は上達した。

だが、それでもまだまだ未熟。
故にブルーノは彼女を学校に通わせようと決意する。

一方、とある次元世界では騒がしい毎日を送るイリアステルの三皇帝とマテリアルの姿が。
だが、そんな騒がしい毎日に暗雲が立ちこみ始める。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「修行」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

十九話　「修行」（前書き）

サブタイトル詐欺です。
そして彼らに異変発生。

十九話　「修行」

～次元世界　某所～

「う～ん……、厳しいなぁ」

パラパラと複数枚のカードを捲りながら、少女――ティアナ・ランスターはため息を零す。
彼女の目の前に広げられているカードの束は、現在彼女の手によって解体されている彼女のデッキ。

かれこれ３０分以上悩んでいるだろうか。それほど、彼女はデッキの構築に頭を悩ませていた。
それと言うのも、理由は複数ある。たとえば納得のいくデッキにならない。余分なカードを入れてしまった。

デッキを構築する者として、半ば必然的にぶつかる壁に彼女はぶち当たっているのである。
決闘者が構築するデッキは千差万別。同じ物は１つも存在しないと言われているほど膨大だ。

「やっぱり、≪貪欲な壺≫が制限って言うのはなぁ」

しばし頭を悩ませていた彼女だったが、集中が途切れてしまった様だ。

手に持っていたカードを放り投げ、グッタリとテーブルの上に突っ伏す。

そして視線をチラ、と前方に移せば、不快な表情をした壺が描かれたカードがある。

これこそが、現在もっともティアナの頭を悩ませているカード――貪欲な壺と呼ばれるカードだ。

この貪欲な壺と呼ばれるカードは、墓地に存在する5枚のカードをデッキに戻し、

シャッフルした後、カードを2枚ドローする効果を持つ。墓地アドバンテージを失うが、手札増強が出来るカードだ。

元々、ティアナの持つ「TG（テッグーナス）」と呼ばれるデッキは墓地が肥えやすい。

これは一重に、ある特定のモンスターが持つリクルート機能が関係していた。

TGストライカー。TGサイバー・マジシャン。TGワー・ウルフ。TGラッシュ・ライノ。

これらのカードは破壊され、墓地へ送られた場合デッキから破壊されたカードとは別のTGをサーチ出来る。

この効果により、絶えずTGモンスターを手札に持って来られるのだ。

戦況に対応したモンスターを持って来られるのは、またとない利点である。

しかし、そのせいでデッキの中のTGモンスターが無くなりやすい。

デッキが圧縮される利点はあるが、サーチ出来るモンスターが居な

いと言う事態は避けたかった。

「しかも≪ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン≫が制限カードに……。
うぅ、仕方が無いと言えば仕方が無いけど……」

ひとまず意識を貪欲な壺から離すと、ティアナは別のカードに視線を向ける。
そのカードとは、彼女のエクストラデッキに投入されているあるシンクロモンスターだ。

白いローブの様なものを身に纏い、丸い眼鏡を掛けて手には一冊の魔導書の様な本を歩つモンスター。
ＴＧハイパー・ライブラリアンと呼ばれるカードだ。ティアナのデッキに置いて、このカードは重要な役割を持つ。

元々、ティアナのデッキではシンクロ召喚が容易に行いやすいのだ。
それぞれサーチ効果を持ったモンスターを使い、手札にチューナーと非チューナーを集められる。

それらを用い、２体同時のシンクロ召喚と言うのはザラなのだ。
だが、そんなことをすれば手札があっという間になくなってしまう。

手札とは戦略の幅を広げるためのもの。少なくなるのは出来る限り避けたい。
そして、そんな事態を回避するためのモンスターがハイパー・ライブラリアンなのである。

このモンスターは表側表示で存在するときに相手、または自分がシ

ンクロ召喚に成功した場合、
ハイパー・ライブラリアンをコントロールしているプレイヤーは1枚デッキからカードをドロー出来るのだ。

モンスターをシンクロ召喚するだけで、デッキからカードを1枚ドロー出来るのは大きい。
シンクロ召喚によるディスアドバンテージを取り戻せるのだから。

だが、そんな強力な効果を持ちながら、シンクロ素材に制限を掛けなかったのがいけなかったのだろう。
ハイパー・ライブラリアンは来月から制限カードになってしまう。
それがティアナの頭痛の種だった。

「KC……！
ちゃんと素材に制限くらいつけなさいよー！」

うがー！　っと、ティアナの怒りが暴発する。
せめてハイパー・ライブラリアンにTGのチューナーが必要と言う制限が掛かっていれば。

そうすれば、制限カードになることもなかったのに。
どれもこれも、素材の制限が無いのがおかしい。トリシューラにしてもそうだ。

氷結界の龍グングニールにならい、トリシューラも水属性のチューナーが必要ならば良かった。
だが、肝心のトリシューラのシンクロ素材の制限は無い。せいぜいが非チューナーが2体必要と言うところだ。

故に、トリシューラはほとんどのデッキに入るようになり、猛威を振るったのだ。
トリシューラの悪夢を、ＫＣは学習していないのか。ティアナはふつふつと怒りに震える。

「ティアナ。何を騒いでいるんだ？」

そしてティアナが怒りに震えていると、室内に新たな人影が現れる。
その人影とは、現在ティアナの保護者を担っている男性――ブルーノだ。

蒼い鮮やかな髪を逆立て、目元を隠す様に赤いサングラスを掛けている。
彼の身体を覆っているライダースーツは、風の抵抗から彼の身体を護る物だ。

「ＫＣに対して、ちょっと怒りを覚えていたのよ」

「？　そ、そうなのか」

ティアナはブルーノの姿を認めると、ため息をつきながら身体を起こす。
いくらＫＣに文句を言っても仕方が無い。今あるカードでこれからを乗り越えなければ。

ぷんすかと頬を膨らませながら、ティアナはエクストラデッキから他のカードを取り出す。
ティアナのエクストラデッキに残されているのは、ハイパー・ライブラリアンを除き3枚のカード。

TGパワー・グラディエイター。そして半ばTG専用のシンクロチューナーと化しているTGワンダー・マジシャン。
この2枚。否、ハイパー・ライブラリアンを合わせれば3枚だろう。
そして残された1枚のカード。

それは、絵柄も効果も何も描かれていない、ただシンクロモンスターの証明である白い枠だけのカード。
このカードは、ティアナがクリアマインドの境地に至ったときにだけ、モンスターカードが浮かび上がることになっている。

ティアナはエクストラデッキから取り出した白いカードを見つめ、物想いに耽る。
クリアマインド。そしてアクセルシンクロは彼女の兄の悲願だった。
だが、それはもう叶わない。

「（お兄ちゃん……）」

ティアナの兄であるティーダ・ランスターは数年前にこの世界を他界した。
次元犯罪者との抗争に巻き込まれ、帰らぬ人となったのだ。

ティアナは兄が死んだことを信じられなかった。誰よりも大好きな兄が死んだことを。

そして、兄の遺体の埋葬の日。参列した管理局の局員の言葉が、ティアナの心を決めた。

アクセルシンクロだなんてやはり無理だったのだ。

――違う。兄はクリアマインドの境地に達していた。

あの土壇場でアクセルシンクロを行おうとするとは。とんだ無能だ。

――違う。兄はアクセルシンクロを成功させることが出来た。子供が飛び出してこなければ。

兄に張られた不名誉なレッテル。それを剥がすために、彼女は兄のデッキを継いだのだ。

自分の兄は無能などではない。クリアマインドの境地に達し、新たな可能性を得ることが出来たと証明するために。

「？　デッキの構築をしていたのか？」

「うん。だけど、≪貪欲な壺≫が制限カードになってどうしようかなって悩んでて……」

ティアナが脳裏で決意を新たにしていると、テーブルを覗き込んだブルーノが訊ねてくる。

どうやらバラバラに解体されたデッキに目を止めたらしい。ティアナはブルーノの問いに答えると、ガックリと項垂れる。

やはり貪欲な壺の制限化は厳しい。

ライトロード・ハンター　ライコウを積んでいるティアナのデッキならば尚更だ。

ライコウの効果により、墓地にカードを3枚落とすことになる。
この3枚と言うのが曲者で、制限カードなどの強力なカードすら容赦なく墓地に落としてしまう。

故に、墓地からデッキ。または手札へ回収するカードは必要不可欠なのだ。
しかし、肝心の回収カードである貪欲な壺が制限化である。

運よく手札に引ければ良いが、下手をすればライコウの効果で墓地に落ちてしまう。
そうなってしまえば回収することは不可能。故にティアナは頭をフルで悩ませているのだ。

「≪ＴＧＸ３－ＤＸ２≫は入れないのかい？」

「入れても良いんだけど、こっちは罠カードだしね……。
ちょっと、発動するタイミングが難しいのよ」

「だが、ライディングデュエルではスピードスペル以外の魔法カードは使えない。
十分選択肢の中には入るんじゃないか？」

「……そうね。採用を検討しましょうか」

ＴＧＸ３－ＤＸ２
通常罠
自分の墓地に存在する「ＴＧ」と名のついたモンスター3体を選択

して発動する。
選択したモンスターをデッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

ブルーノの提案をティアナは採用し、ガサゴソとストレージの中から目当てのカードを探す。
このＴＧＸ３－ＤＸ２と言うカードはＴＧ専用の貪欲な壺と言ったところだろうか。

だが、発動条件はＴＧモンスター3体と、貪欲な壺よりも緩くなっている。
発動条件事態はこちらの方が満たしやすいのだが、罠カードと言う点でティアナは躊躇していた。

手札に来ればすぐに発動できる魔法カードと、一旦伏せなければならない罠カード。
どちらを取るかと問われれば、大抵の人間は魔法カードを選択するだろう。

魔法カードの場合は発動するターンは基本的に自分のターンのみ。
故に妨害されることはあるが、発動するタイミングを自分で選ぶことが出来る。

しかし、罠カードの場合は場に伏せて、1ターン待つ必要がある。
もしも伏せたターンの間に破壊されてしまえば、結果的に損をしているのだ。

だが、もしも1ターン凌ぐことが出来れば恩恵は多大だ。
相手の除去カードにチェーンする形で発動すれば、こちらが得をする事になる。

これが魔法カードと罠カードの難しいところだ。
十分に準備してから魔法カードを発動するか。リスクを背負いながら罠カードを伏せるか。

「（それにしても……）」

ガサゴソとストレージを漁っているティアナを見つめながら、ブルーノはふと思う。
脳裏に浮かぶのは数年前、自分と今は亡きティアナの兄、ティーダの前に現れた1人の少女の事だ。

彼女との出会いは偶然で、ほんの些細な物だっただろう。
だが、今になってブルーノは思うのだ。あれは偶然ではない。必然だったと。

少女――フェイト・テスタロッサは自らに会うべくして出会うことになっていた。
そして、ブルーノがシンクロチューナーを渡すことすら必然だったに違いない。

故に、彼女は世界の表舞台へと立つことになった。彼女の悲願としていた力を得て。
世界で2人目（正確には4人目）のクリアマインド覚醒者と言うのは、世界に衝撃を与えた。

それは勿論、ブルーノの視線の先でストレージを漁っているティアナも同様だ。

フェイトがクリアマインドに覚醒したと知った当初、ティアナは荒れに荒れたのだ。

――なんで、どうして自分の兄よりもあの少女が先に覚醒したのだ。――どうしてあの少女が世界から喝采を浴びている。あれは兄が浴びるはずだったのに、と。

その間、ブルーノはひたすらティアナの傍に居て話を聞いてやることしか出来なかった。

何故ならばティアナの嘆きに、多少なりともブルーノが共感してしまったせいもある。

自分の師事の元、修行を積んだ弟子が志半ばで倒れたのだ。

しかも、その後に出会った年端もいかぬ少女が、弟子の悲願を達成した。

悔しくないかと問われれば、ブルーノは悔しいと首を縦に振るだろう。

故にブルーノはティアナを説得することが出来なかった。彼女を止めることすなわち、それは自分を止めることと同意だからだ。

「（フェイト。君は遊星と同じステージに立ったと思っているだろう。

だが、そこはまだ通過点に過ぎない。遊星はまだ、君のずっと先を行っているよ）」

だが、フェイトはまだ知らない。アクセルシンクロはただの通過点でしかないことを。

すでに不動　遊星は自らが知らぬ境地――オーバー・トップ・クリアマインドへ到達しているのだ。

その領域へ至ることは、恐らく自分では不可能だろう。そして、新たに覚醒したフェイトも。

それほど、遊星は突き抜けた存在へとなってしまったのだ。誰も至れぬ境地へ、仲間の想いと共に。

もしかしたら、フェイトも仲間の想いを繋ぎ、新たな境地に達することが出来るかもしれない。

だが、そうするには遊星と同じくらい。それ以上の絆を紡ぐ必要がある。はたして、彼女に出来るのか。

「とりあえずティアナ。デッキからライコウは抜いてみよう。下手にライコウを積んでしまえば、キーカードが墓地に落ちるかもしれない」

「それもそうなんだけどね……。やっぱり、3枚の墓地肥やしは魅力的なのよ」

ひとまず頭の中に浮かんだ考えを停止させると、ブルーノはティアナに提案する。

やはりライコウのランダムでカードが墓地に落とす効果はデメリットにも成りうる。

1枚1枚のカードが勝敗を分けることになるTGでは、出来る限りキーカードを手札に持ちたい。

ティアナもそれが分かっている様だ。だが、ライコウの優秀な墓地

肥やしに未練を感じているらしい。

ブルーノはそんなティアナを見つめ、人知れず嘆息した。
出来るならば、組んだばかりのデッキは他人とのデュエルで調子を見るのが良い。

足りないカードや余計なカードなど、構築段階で見えてこなかったものが見えるのだ。
だが、この場にブルーノ以外の他人は存在しない。自宅の近所に住む住人もそうだった。

どうもフェイトよりもティーダが先にクリアマインドに到達したとティアナが強調したせいか。
ティアナは周辺の地域から孤立している様に見えるのだ。話しかけても避けられているのを、以前に見た。

デュエルで強くなるためには、他人とのデュエルが必要不可欠なのだ。
故に、ティアナが強くなるにも他人とのデュエルで経験値を稼がねばならない。

「（やはり、これしかないか……）」

ブルーノは小さなため息を吐くと、おもむろに一冊の小冊子を取り出した。
その小冊子の表紙には、デカデカと近代的な建物――何処となく学校に見える――が写っている。

これは、ブルーノが元々住んでいた世界にあったと言われている教育機関――デュエルアカデミアだ。
どうやらデュエルアカデミアの存在を知ったミッドチルダの高官が、デュエルアカデミアを模して作ったものらしい。

ここでは日夜、デュエルのプロフェッショナルとなるべく様々なカリキュラムが組まれていると言う。
デュエルモンスターズに関する基本的な知識から、デッキの構築における注意点。初手にあるカードで戦略を立てる観察力。

そして、生徒同士でデュエルをさせ、実力を高め合う実技授業があると言う。
普段ブルーノとばかりデュエルをしているティアナにとって、またとない環境と言えるだろう。

しかし、問題点がある。それはティアナがブルーノの元から離れるか否か、と言う点だ。
彼女は未だ、しっかりと兄から受け継いだＴＧデッキを使いこなせている訳ではない。

行いやすいコンボを見つけると、場の状況を確認せぬままコンボを開始しようとしてしまう。
デュエルにおいて、視野狭窄に陥るのだろう。だが、無理は無いかとブルーノは内心で一人思う。

「（ティアナはまだ１０歳……。
　周りが見えないのも、無理は無いか）」

いくらティアナが大人びていようが、彼女はまだ１０歳の子供なのだ。
その子供に、視界を広く保ち、絶えずフィールドと手札を把握しろと言うのは厳しいものがある。

やはり、教育機関で専用の教育を受けた方が良いだろう。
ブルーノは内心でそう決めると、デュエルアカデミアのことを伝えるべくティアナに向かって口を開いた。

※

「いやっほぅ！　気分が良いや」

ふんふんと気分が良さそうに、鼻歌を歌いながら赤毛の少年――ルチアーノが歩く。
彼の後ろには仲間であり家族であるホセとプラシドの姿もある。プラシドも同様に機嫌が良さそうだった。

彼らは先ほど、とある大会に参加していたのだ。と言っても、別段珍しいデュエルをした訳ではない。
今回彼らが参加したデュエルとは、２対２の平均的なタッグデュエ

ル。今回はルチアーノとプラシドがタッグを組んだ。
彼らは挑んでくる対戦相手に一歩も引かず、否、彼らを圧倒する様なデュエルの腕前を見せた。
そして大会は見事に優勝。優勝賞金も見事手に入り、それぞれ好物の品物を買った彼らはこうして上機嫌と言う訳である。

「くくく……。この鮭の色、ツヤ……堪らんな」

「どうしようホセ。プラシドが怖い」

「んぅ……」

プラシドは先ほど、1時間かけて選んだ鮭を見て上機嫌の様子だ。
生前、そして復活したプラシドがこれほどまで鮭に入れ込んだことがあっただろうか。

ビニール袋の中に仕舞われている鮭を覗き込むプラシドの様子に、ルチアーノが怯えた様子を見せる。
だが、無理もない。ビニール袋の中を覗き込み、怪しい笑いを浮かべる人物を見たら他人はどうするだろうか。

恐らく、大半の人間が素早く警察。もしくは時空管理局へ連絡するだろう。
それほどまで、今のプラシドは周囲から浮いていた。何処となくホセも他人のフリをしている。

「プラシド。悦に浸るのは良いがその顔は止めろ。
不審者と間違われて通報されるのも面倒だ」

「くくく……、はっ！　わ、分かった」

「うわ、半分トリップしてたよ」

仕方なくホセが注意するも、先ほどの注意に一体どれほどの効果があっただろう。
ひとまず意識が現実世界に戻ってきたプラシドの様子に、ホセとルチアーノはため息を吐く。

そして歩くこと約１０分。彼らの視線の先に、見慣れた一軒家が姿を現した。
それと同時、家の前を竹ぼうきで掃除をしている少女の姿も目に入る。

その少女――星光は帰ってきたホセ達の気配に気がついたのか。
ほうきに向けていた視線をホセ達に向けると、にっこりと笑みを浮かべた。

「お帰りなさい、ホセ、ルチアーノ、プラシド」

「たっだいまー。珍しいじゃん、雷刃のヤツが来ないなんて」

何処か安心感を抱かせる星光の笑顔に、自然とルチアーノも笑みを浮かべる。

そして普段、彼らが帰宅すると真っ先にやってくる少女の姿が無いことに疑問を抱いた。

彼女――雷刃は、いつもホセ達が大会から帰宅すると待っていたかの様に現れるのだ。
それでいて、お土産に買ってきた食べ物をカラスの如く持ち去っていくのだから性質が悪い。

しかし雷刃も本気でやっている訳ではないらしく、すぐに持ち去ったお土産を返してくる。
どうやら、ルチアーノやプラシドに構って欲しいだけらしい。なんともお子様な雷刃の様子に、星光はため息を吐く。

「雷刃ならば、疲れたのか眠っていますよ。
そうですね……、あと1時間は眠っていることでしょう」

「そっか。つまんないの」

そして雷刃が寝た時間と普段のお昼寝で眠る時間を計算し、あとどれくらいで起きるかをルチアーノに答えた。
するとルチアーノは面白くなさそうに頬を膨らませる。なんだかんだで、彼も雷刃に構うのを楽しんでいたらしい。

何処か期待が外れた様な彼の表情に、思わず星光の顔に笑みが浮かぶ。
まるで仲の良い兄妹の様だ。彼らの関係を表すのに、ピッタリの言葉だろう。

「ほう、ルチアーノ。雷刃が恋しいのか？」

「んなっ！？　そ、そんなバカなことがあるもんか！」

「それほど慌てると、変に勘ぐってしまうぞ」

「ホセまで！　くっそー！　何なんだよ、もう！」

プラシドにからかわれ、ホセにまで茶化される始末。

ルチアーノは頬をこれでもかと赤く染め、悔しそうに地団太を踏んだ。

いつも斜に構えた姿の彼が、こうして感情を露わにするのは珍しい。

なんとも微笑ましい彼らの光景に、星光はクスクスと穏やかな笑みを零す。

と、家の前でワイワイと騒いでいたせいだろうか。ガチャリと家の扉が開いた。

そして中から出てくるのは、件の雷刃とは別の少女――闇である。

彼女は玄関の扉を開けてキョロキョロと周囲に視線を向けると。

騒いでいたルチアーノたちを見つけたのか。不機嫌そうな表情を浮かべた。

「やかましいぞ塵芥ども。

我の安眠を妨害するとは良い度胸だ」

「うるさーい！
今はボクの社会的地位が脅かされているんだぞ！」

「心底どうでも良いわ」

深々と、闇がため息を吐き出す。その様子に我慢ならないのか。
プラシドとホセからターゲットを変え、ルチアーノは闇に突っかかる。

ルチアーノが子供の様に闇に突っかかり、闇は面倒くさそうにルチアーノを受け流す。
このやり取りも、既に見慣れた光景だ。ルチアーノに絡まれなくなったからか、プラシドが僅かに息を吐く。

「それにしても闇のヤツは、あれで満足なのか？」

「？　満足、とは？」

「なんだ、星光。気が付いていないのか？」

「？　？　？」

プラシドの物言いが気になったのか。星光が首を傾げる。
何処か、闇とルチアーノのやり取りでおかしいところがあるだろうか。

チラリと視線を未だ言い争いをしている2人に向けるが、どこもお

かしくはない。
強いてあげるとすれば、何処となく闇の浮かべる表情が嬉しそうである。と言うところだろうか。

まるでルチアーノが構ってくれるのが嬉しい。こうして彼とお喋りするのが楽しい。
何処となく、そんな風に見て取れる。もしや闇も雷刃と同様、彼に構ってもらいたいのかもしれない。

なるほど。その様な視点で彼らのやり取りを見ると、微笑ましさが込み上げてくる。
今の闇は末っ子にばかり構っている兄が気に入らない次女の様なポジションだろうか。何処となく可愛らしい。

「むにゃむにゃ……、うるさいよぉ～……」

「！　雷刃、良いところに！
ちょっとコイツをどうにかしてよ！」

「やかましいわ！　雷刃、大人しく寝ていろ」

そして闇とルチアーノの甲高い声のせいで、とうとう雷刃すら起き出した様だ。
どんな寝方をしたのか。髪には寝癖がついており、口元には涎の後が付いている。

完全に寝起きの子供の姿。あとで髪の毛をブラッシングしなければと星光は内心で思う。

そして内心で星光が決意を新たにしていると、ルチアーノに絡んでいた闇の様子が変わった。

彼女の口調は普段は傲慢なのだが、今回は何処となく敵意が滲んでいる様にも見える。

まるで仲良く遊んでいた兄を取られたくない様なその反応。星光は再び僅かに嘆息する。

やはりなんだかんだ言って、彼らはルチアーノと遊ぶのが好きなのだろう。

あぁして楽しそうに言い争いをしているのが良い証拠だ。

寝起きの雷刃にルチアーノは助けを求め、闇はそんな彼を面白くなさそうに見つめている。

何処となくルチアーノが嬉しそうなのはどうしてだろう。そんな彼と比例して不機嫌になっていく闇も良く分からない。

「焦らずとも良い。ゆっくりと理解すれば良いのだからな」

「！　ホセ……」

「ルチアーノたちは、暫しあのままで良いだろう。
我らは先に家の中に戻るとしよう」

「そうですね。分かりました」

しばし考え込んでいた星光だったが、彼女の頭に乗せられた感触で考えを打ち消した。

彼女の頭に乗せられたのは、大きな大きなホセの手の平。その大きな感触に、星光は笑みを浮かべる。

ホセの手は大きくて、撫でられると安心感を覚えるのだ。
まるで父親の様な、とでも言えばいいだろうか。自分たちに父親は居ないが。

だが、得も言われぬ安心感があるのは事実。
そして、ホセから与えられるその安心感が心地いいのも同様だ。

自分たちに両親は居ない。だが、ホセ達が居る。これだけで良いと星光は思う。
さぁ、まずは家の中へはいって夕食の準備をしよう。ホセの手を引きながら、星光は歩き出す。

「ぬっ！？」

と、勢いよく引っ張ってしまったせいか。ホセがバランスを崩した。
傾くホセの巨体。思わず星光は目を見開き、迫りくるホセの身体を注視する。

このまま立ち止まっていれば、星光はホセに押し倒されていただろう。
しかし、彼女は押し倒されることは無かった。

「無事か、星光。ホセ」

「あ、プラシド……」

「すまん、プラシド。助かった」

倒れ込もうとしていたホセの腕を掴み、引き止めたのはプラシドだった。

彼は呆れた様な視線をホセと星光に向ける。そんな彼の瞳に、星光は慌てて我に返った。

あわあわとホセの身体を抱き起こそうとする。

プラシドも彼女を手伝い、ホセは倒れかけていた己の身体を元に戻すことに成功した。

「すみません、ホセ……」

「構わん。それよりも食材が潰れてしまったかもしれん。先に行って、見て来てはくれんか？」

「はい、分かりました」

しょんぼりと己の非を認め、星光はホセに謝罪する。

だが、彼はさほど気にしていないのか。食材の入ったビニール袋を彼女に手渡した。

星光は何処となく沈んでいた様子だったが、すぐに気を取り直すとビニール袋を持って自宅へと駆けて行く。

その様子を、ホセとプラシドは遠くを見る様な瞳で見送っていた。

そして、プラシドが口を開く。

――――あと、どれくらいで自分たちはダメになる。と。

十九話　「修行」（後書き）

次回予告

エリオを保護したリニスは、一路時空管理局へ向かう。
ひとまず時空管理局で保護してもらおうと言う魂胆だろう。

しかし、エリオは時空管理局に保護されるのを拒否。
リニスの傍に居たいと彼は訴える。

リニスはエリオのその願いを聞き、頭を悩ませる。

一方、未だオーディンに認められないクロノ。
彼は一体、どうすればオーディンに認められるのか頭を悩ませる。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「温もり」

ライディングデュエル・アクセラレーション！

二十話　「温もり　前編」（前書き）

今回はホセ達の情報報告。
そして元に戻った鬼柳とフェイトの生活の様子です。

二十話　「温もり　前編」

～次元世界　某所～

深夜のホセ、ルチアーノ、プラシド宅。
真っ暗なリビングの中に彼ら、イリアステルの三皇帝の姿があった。
彼らの何れもが、真剣な眼差しで互いに見つめ合っている。
しかし、星光の購入した花柄パジャマを着ているせいか、雰囲気をぶち壊しにしていた。

「ホセ、大丈夫なの？
そろそろタイムリミットも近いんでしょ？」

「うむ……。股関節、膝、肩……。
関節を司るパーツが軒並み劣化している様だ」

「やはり、ゾーンのメンテナンスを受けられないのは厳しいか……」

ルチアーノが僅かに心配を含ませた声でホセに訊ね、ホセが神妙な面持ちで頷く。
ここ数日、彼ら――中でもホセにある異常が発生していた。
普段ならば、星光ほどの少女に引っ張られても揺らぐことのないホセの身体。
しかし、先日件の星光に腕を引っ張られた際、彼は体勢を崩してし

まったのだ。

星光は特に気にしてはいない様子だったが、ホセ達にとってこれは一大事だ。

どうやら、ゾーンによるメンテナンスを受けないせいで、身体のパーツが劣化してきているらしい。

ゾーンもここまで長期間、ホセ達が稼働するとは想定していなかったのだろう。

彼らの身体に使用されているパーツが徐々に劣化し始め、日常行動に支障をきたしていた。

「しかも、この世界にはゾーンと並ぶほどの技術者も居ない……。八方塞がりと言う訳か」

プラシド達もただ、手をこまねいていた訳ではない。

なんとか自分たちの身体を直そうと、様々な世界の技術者の情報を集めた。

しかし、いずれの技術者もゾーンに比べれば実力が低いと言うのが現実だ。

唯一可能性がありそうだったのはジェイル・スカリエッティと言う科学者だが、現在彼はDホイールの制作に携わっている。

彼の経営するDホイール制作会社は大忙しの様で、彼らの頼みを聞き入れてくれる暇は無いだろう。

自分たちはこのまま、ゆっくりと朽ち果てる運命なのだろうか。真っ暗なリビングに、痛いほどの沈黙が降りる。

「だが、我らの役目はすでに果たしている。
……このまま、朽ち果ててしまっても問題は無かろう」

「だが、な……」

「うぬ……」

ホセが雰囲気を一変させようと話題を振るが、すぐに沈黙が降りてくる。
そう。彼らがこの世界で、3人だけで暮らしていれば、こんなことを思うこともなかっただろう。

しかし、彼らは3人でこの家に住んでいるのではない。
ある日、この家から少し離れた場所にある森の中で、見つけた少女たちと暮らしているのだ。

星光、雷刃、闇。彼女たち3人の少女が、ホセ達をそう簡単に朽ち果てることを許さない。
彼らがこのまま朽ち果ててしまえば、3人の少女に生きる術は無い。
生きる術を持たせぬまま、放り出す訳に行かなかった。

「これも罰なのか……、
未来に絶望し、ネオドミノシティを破壊せしめんとしようとした我らの……」

朽ち果てるのも運命。だが、その運命に抗いたいと言う自分も存在する。
そんなジレンマに揺さぶられながら、ホセはポツリと言葉を漏らした。

元より、彼らの命は彼ら3人が合体したアポリアがアークレイドル内に落下した時点で終わっていたはずなのだ。
それが何の因果か、彼らはネオドミノシティの存在しない別の世界で目を覚ますこととなったのだ。

当然、目を覚ました当初彼らは混乱した。
彼らが居るのはアークレイドルでもなければ、彼らの身体は合体していたアポリアでもない。

なんとか混乱を鎮め、情報収集を行い、そしてようやくここがネオドミノシティの存在しない世界だと判明したのだ。
その後はゾーンの託した未来を見届けるために生きようとしたのだが、その折に、星光たちマテリアルを拾ってしまう。

行く当ての無かった彼女たちを家に招き、共に生活するようになった。
誰かと共に食事を食べ、誰かと共に会話をし、笑みを浮かべる。それが酷く、懐かしかった。

故に、彼らは抱いてしまった。彼女たちマテリアルに、「情」と言う感情を。
このまま死んでしまうのも悪くは無い。だが、彼女たちを残したまま死ぬのは後味が悪い。

「なんとかパーツのメンテナンスさえ受けれれば良いのだが……」

「そこで腕の良い技術者が居ないって言うループにハマっちゃうんだよ」

「くっ」

プラシドも最近は肩の調子がおかしいのか。肩の調子を確かめながら何気なく呟く。

しかし、いくら問題点を挙げてもそれを解決できる技術者が居ないのだ。どうする事も出来ない。

ネオドミノシティが存在する世界に行けば、不動　遊星などの腕の良い技術者が居るだろう。

だが、表だって会うことはできない。なにせ彼らは1つの都市を破壊しようとしたテロリストの様なもの。

いくら生死不明とされていても、そんな人間が表だって遊星に会うこともできないだろう。

「……これもまた、運命か」

「こんな運命など、俺は認めんがな」

※

「はぁ～～～～～～……」

これでもかと言うほどの重いため息を吐きながら、リニスはベンチに腰掛けていた。
現在彼女がいるのは、時空管理局本局内部のロビー。その広いロビーで彼女はポツンとイスに腰掛けている。

何故、彼女が時空管理局の本局に居るのか。
それは先ほどまで彼女の隣に居たある少年が原因だった。

「仕方が無いと言えば、仕方が無いんですけどね……」

チラリと、リニスは少年――エリオが入って行った部屋の扉を見つめながら呟く。
現在、エリオは別室で主にこれからについての説明を管理局員から受けていることだろう。

彼は移住を望んでやってきたのではない。
ある次元世界の違法研究所に囚われていたところを、リニスが偶然発見。救出したのだ。

その際にデュエルギャングと戦闘を行ったりしたが、そこはさほど問題ではない。
その後は通報を受けた管理局がリニスとエリオを保護し、彼女たちを本局へ移送したのだ。

本来ならば管理局にエリオを引き渡した時点でリニスの役目は終わっていたのだが。
生来の世話好きのせいか。彼女はここまでエリオの付き添いとしてやってきたのである。

しかし、それがいけなかったのか。エリオはリニスに懐いてしまったのだ。
よもや連れ去られ、また苦痛の日々を味わうところを助けられたのだ。仕方が無いと言えば仕方が無い。

「ふぅ……」

リニスはため息を吐きながら、手元にある1枚の紙に視線を落とした。
彼女の手の中には、「保護同意書」と記された紙が握られている。

この同意書にリニスの名前を記し、エリオの名前も記せば、晴れてエリオはリニスの保護下に入る。
普段はこの様なことは行われないのだが、エリオが望んで行っているので今回は特別ということらしい。

リニスは同意書を見つめながら、「むむむ……」と小さく唸る。
別段、彼女としてもエリオと共に暮らすのも構わないと思っている。

今までエリオは、クローンと言うことだけで辛い生活を味わって来た。
そんな彼に、様々な世界を見せてあげたいと言うのも事実。だが、それをするのはリニスでなくても良い。
管理局に保護を依頼し、そのまま管理局の保護下に入ると言う手段もある。
現状、これが一番の手段にリニスは思えた。管理局と言う巨大な後ろ盾は心強い。
しかし、リニスは一歩を踏み出せないで居た。
別室に移動する際の、エリオの縋る様な瞳がリニスの胸を穿つ。
「（……悩んでいても仕方がありませんね。プレシアに相談しましょう）」
考えていても埒が明かないと判断したのか。リニスはイスから腰を上げた。
そして向かう先は、ロビーに設置してある通信端末。特に使用制限などは設けられていない。
慣れた手つきで機器を操作し、モニターを立ち上げる。
通信を入れる相手は彼女の主人たるプレシア。保護するにしても、主人の了解を得なければならない。
『あら、リニス？　どうしたの』

「プレシア。相談したい事があるのです」

そして数分ほど経ち、モニターに八神家にいるであろう、プレシアの顔が表示される。
今は優雅にティータイムでもしているのか。彼女の手元にはお茶の入ったティーカップが置いてある。

『相談？　それって長くなりそう？』

「？　え、えぇ。少しばかり」

『分かったわ。場所を移しましょうか』

「すみません、プレシア」

彼女はリニスの真剣な表情から何かを感じ取ったのか。場所を移動する提案を行って来た。
別段プレシアの居場所が変わろうが、相談する内容は変わらないのでリニスとしては異論は無い。

そしてプレシアは腰掛けていたソファから腰を上げ、場所を以前までリニスとプレシアが使用していた部屋へと移す。
モニター越しに見る自分たちの部屋は相変わらず綺麗なままで、定期的にプレシア。もしくははやてが掃除しているのが見て取れた。

『ふぅ。お待たせ。それじゃ話を聞きましょうか』

「はい。実は――――」

そしてリニスは、プレシアが一段落したのを見計らい、これまでの出来事を大まかに伝えた。
プレシアがランダムに選んだ場所で、違法研究所を見つけたこと。
そのとき偶然、研究所を襲ったデュエルギャングと遭遇したこと。
デュエルギャングがエリオを連れ去ろうとしていたのと止めるため、デュエルしたこと。
そして現在、エリオを引き取るかどうか。悩んでいることを包み隠さず、リニスはプレシアに打ち明けた。

プレシアはリニスのこれまでのことを聞き終えると、神妙な面持ちで目を閉じる。
リニスはそんなプレシアの様子を、ただジッと見つめていることしか出来ない。

なにせ、いくらリニスが保護を訴えようが、結局はプレシアの一存で全てが決まるのだ。
いくらプレシアが使い魔を対等の存在として扱っていようが、結局プレシアはリニスの主人。
主人の決定に、リニスは逆らうことが出来ないのだ。

『リニス。聞きなさい』

「……はい」

『貴方が単純に、善意で引き取ろうと言うのなら、私は反対するわ』

そして長い沈黙を破り、プレシアがリニスに言葉を告げる。
それは突き離す様な冷たさを持った言葉だった。思わず、リニスの呼吸が止まる。

まるで自分の心を見抜かれた様な感覚だと、リニスは内心で思った。
エリオを見捨ててはおけない。そんな感情のまま、リニスはプレシアに話したのだから。

咄嗟に言い返そうとプレシアの映るモニターに視線を向けるが、返ってくるのはプレシアの冷たいほどの眼差し。
まるで他者を寄せ付けない様な、絶対零度の視線だった。こんなプレシアの姿を、リニスは長らく見たことはない。

『情で引き取ろうと言うのなら、私は貴方を軽蔑するわ。
リニス、貴方は私に何を求めているの？』

「そ、れは……、エリオを引き取るかどうかの、決断を……」

『そう。ならキッパリ断言してあげる。却下よ』

プレシアの何処までも冷淡な声に、リニスは自然と身体が震えるのを感じる。
まるで狼の尻尾を踏んでしまった様な、本能的な恐怖がリニスを支

配していた。

そして振り絞る様に、リニスがプレシアに訊ねる。しかし、その言葉も一蹴された。

モニターに映るプレシアは、腕を組み、真剣な眼差しでリニスを見つめている。

その瞳は、一切の嘘を許さないと書かれていそうなほどの強い眼差しだった。

『エリオ君はペットじゃないの。
彼に同情してエリオ君を引き取ろうと言うのは、傲慢よ』

「私は！　そんなつもりなんてありません！」

『では、なんで貴方は私に決断を委ねたの？
同情などで無いのなら、キッパリと彼を引き取ると言いなさい』

「――――っ！」

プレシアの言葉に、徐々にリニスのボルテージが上昇していく。

知らず、声が大きくなってしまうが関係ない。ここまで言われっぱなしと言うのは癪に障る。

しかし、プレシアの言うこともっともだとリニスは頭のどこかで理解していた。

自分は心のどこかで、エリオの境遇に同情していたのかもしれない。

彼自身を見ていなかったかもしれない。

故に、傲慢だと言われるのも理解できる。そして、キッパリと決断できない自分を情けないと思う。
たしかにプレシアの言うとおり、本気でエリオを引き取るつもりならば決断を委ねない。自分で決断を下している。

「同情などではありません！　私は、彼の一生を背負えるか不安で――――！」

『人一人背負えないのなら、安易に引き取ろうと言うのは止めなさい』

「！」

『貴方には背負えるの？　エリオ君の全てを。
私は背負っているわ。フェイトの全てを。アルフを、貴方達の全てを』

プレシアの告げたその言葉に、リニスは言い返すことが出来なかった。
エリオの全てを背負えるか不安で、彼女はプレシアに引き取るかどうかの決断を委ねた。

自分がエリオの全てを背負えるか、不安だった故に。
だが、それではダメだった。背負えるか不安では、いけないのだ。

エリオの人生を、全てを。それら全てを背負う覚悟をして、ようやく決断を下せるのだ。

現に、プレシアは背負っている。フェイトを。アルフを。そして自分と言う存在の全てを。

人一人の人生や運命。それら全てを背負えるか不安だった自分が、敵う相手ではなかった。

モニターの向こう側からこちらを見つめる真剣な眼差し。リニスはその眼差しから、母親の強さを思い知る。

『まぁ、答えを出すのはそう簡単なことではないわね。

存分に悩みなさい。貴方が心の底から望む答えが出たそのときは

――――』

――――彼を連れて、家に帰ってきなさい

その言葉を最後に、リニスが使用していた通信用のモニターからプレシアの姿が消えた。

※

ふぅ、と面倒くさそうなため息を吐きながら、プレシアはベッドに腰を下ろした。
慣れない行動で疲れてしまった様で、じんわりと足や腕から疲労が感じ取ることが出来る。

何時ぶりだっただろうか。あんなに真剣に、リニスと会話を交わしたのは。
ごろんとベッドに横になりながら、プレシアはふと考える。随分と長い間していない様に思えた。

「存分に悩みなさいな、リニス。貴方が何時までも“使い魔”のままじゃ困るのよ」

ベッドの上で仰向けになりながら、プレシアは真っ白な天井を見つめながら呟く。
そう。リニスには今のまま、「使い魔」のままで居られるのは困るのだ。

時に自分に苦言を呈し、間違った道へ進もうとしている自分を止めてくれる。
そんな対等な「パートナー」になってもらわなくてはならない。

それでようやく、自分たちは1つのステップを駆けあがることが出来るのだから。
だから今は、存分に悩んで欲しいとプレシアは思う。それがこれからの彼女たちの礎となるのだから。

「えへへへー」

と、プレシアがベッドの上に横になっていると。
トタトタと部屋の前をフェイトが駆けて行く足音が聞こえた。

その際に嬉しそうに笑った声を出していたので、大方鬼柳と出かけるのだろう。
以前の様なすれ違いから解放され、フェイトと鬼柳は日々を楽しそうに過ごしている。

今までは言えなかった愛の言葉や、する事の無かったスキンシップを鬼柳は行い。
そしてフェイトと言えば、堂々と胸を張って、彼のお嫁さんだと言える様になっていた。

ずれていた歯車が元に戻り、プレシアは安堵した様な笑みを浮かべる。
これでフェイト達は大丈夫だろう。これから、彼女たちは幸せな未来を築いていくはず。

「フェーイト」

「！　母さん！」

頭の中で未来のことを想像していると、無性にプレシアはフェイトに会いたくなった。
横になっていたベッドから身体を起こし、出かける準備をするであろうフェイトを捕まえる。

プレシアがフェイトの名前を呼べば、フェイトは一瞬驚いた表情を浮かべ、すぐに笑みを浮かべた。
柔らかな笑顔を浮かべるフェイトの様子に、プレシアは安堵しつつ内心で首を傾げていた。

そろそろフェイトにも、反抗期と言うものが来てもおかしくない年頃だ。
いくらフェイトが大人しい性格と言えど、そろそろ親の顔が鬱陶しくなるはず。

しかし、フェイトはプレシアを鬱陶しがるどころか、逆に嬉しそうに駆け寄ってくるのだ。
これにはさすがのプレシアも面喰う。育児情報誌などで反抗期に対する知識を仕入れていただけに、肩透かしを食らった様な物だ。

「どう？　似合うかな？」

「えぇ。とても似合っているわ」

プレシアが内心でポカンとしているのを尻目に、フェイトがその場でクルリと回転する。
今、彼女が身に付けているのは黄色と白の縞々模様のシャツ。その上から黒いジャケットを羽織っている。

腰回りを覆うのは白いフリル付きのスカートで、フェイトがクルリと回転すると、ふわりとスカートがまくれ上がった。
どうやらフェイトの服装は、お出かけ用の衣服の様だ。派手すぎず、地味すぎない落ち着いた印象をプレシアに与えている。

そして、プレシアが似合っていると素直に感想を告げると、フェイトは「にへ」と嬉しげに笑みを浮かべるのだった。

「えへへ。これ、京介が選んでくれたんだよ」

「あら、そうなの？」

「うん。おかげで昨日は凄かったんだよ……」

楽しげにプレシアに報告していたフェイトだが、徐々に声が小さくなっていく。
それと同時、彼女の頬も真っ赤に染まっていった。その様子を見て、プレシアは何事か悟る。

大方、フェイトの新しい姿を見て鬼柳も興奮したのだろう。昨夜の夫婦の夜の営みは激しかった様子だ。
そもそも、男が異性。それも嫁に服をプレゼントする理由は他にはない。

昔、ある人物はこう言ったものだ。
――――男が女に服をプレゼントするのは、着せたいからではなく脱がせたいからだ、と。

どうやら鬼柳もその例に漏れなかった様で、昨夜は随分と頑張ったらしい。
今までフェイトに手を出すことを躊躇していたのが嘘の様だ。

だが、一旦腹を決めれば何処までも行くことが出来るのが鬼柳の良いところである。
今では暇があれば、フェイトの横に居るのが日課になっている。人間、変われば変わるモノだ。

「あら、良いじゃない。愛されてる証拠だわ」

「うぅ、でもでも！　一晩中は流石に疲れるんだよぅ」

「若いのだから、頑張りなさい」

「さり気なく見捨てられた！」

フェイトの半ば愚痴の様な言葉にプレシアがクツクツと笑みを浮かべる。
いつかする事とは思っていたが、まさかこんなにも早く娘と夫婦の夜の営みについて語るとは思わなかった。

果たしてこれで良いのかと言う不安と共に、娘の成長を喜んでいる

自分が居るのも事実。
これからのフェイトの人生がどうなるかは分からないが、彼女のすぐ隣には頼れる旦那が居るのだ。

そうそう、厄介な事にはならないだろう。ならば自分は娘の幸せを望むことにする。
そしてフェイトの「見捨てられた！」と言う声に反応したのか。鬼柳が現場に到着するまであと１０秒。

※

「……」

プレシアとの通信を終えたリニスは、ジィッと目の前の通信機を見つめていた。
そこに映っているのは、真っ暗な画面の向こう側からこちらを見つめ返している自分自身の姿。

自分自身の姿を見つめながら、リニスは先の通信の際、プレシアに告げられた言葉を思い出していた。
自分は心のどこかで傲慢だったのだろう。エリオを勝手に可哀そう

な子供と決めつけ、自分の思う幸せを押し付けようとした。

だが、そんな幸せに意味は無い。誰かに与えられた幸せは、人から努力する力を奪っていく。

幸せは与えられるものではない。自分が手を伸ばし、掴み取るモノなのだ。それを、リニスは忘れていた。

人間の両手は、何か―シアワセ―を掴み取るためにあるのだから。

「ふふっ、まさか私がプレシアに説教をされるとは思いませんでしたよ」

胸に溜めていた息を吐き出し、リニスは口元に笑みを浮かべる。

先ほどまでの不安に彩られた笑みではない。何処か安心感を抱かせる、頼れる笑みを浮かべている。

「そうですね。プレシアは、背負っている。

私やフェイト。アルフのことを」

プレシアは、リニスの言うとおり3人の人間をその背中に背負っていた。

なまじフェイトの出生が特殊と言うこともあったのだろう。その決意は並大抵ではない。

もしもエリオの出生が、普通の人間だったならばここまでの決意はしなかっただろうか。

否、結局出生がどうであれ、自分がこの選択を迫られるのは半ば当然だった。

エリオはプレシアの言うとおり、誰かのペットではない。
善意を押し付けてしまえば、エリオは真の幸福を得られないだろう。

それではダメだ。彼にだって、自分の幸せを掴み取る権利だってあるはずだ。
それを可哀そうだから。哀れだからと言う理由で、取り上げてしまって良い理由は無い。

「あ、リニスさん！」

と、リニスが決意を新たにしていると、甲高い少年の声が耳に届いた。
声が聞こえた方へと視線を向ければ、慣れないながらも笑みを浮かべているエリオの姿が。

どうやらプレシアとの通信が、思ったよりも長引いてしまったらしい。
エリオはトタトタとリニスの元まで走り寄ると、微かに嬉しげな笑みを浮かべた。

「エリオ。もう終わったのですか？」

「はい。主な説明は受けました。
……それで、ボクは……」

不意に、エリオの表情が曇った。無理もない。
本来ならば、エリオはこのまま管理局の保護下に入る予定なのだ。

だが、エリオがリニスと共に居ることを望んでいるため、それは一時保留中である。
リニスが保護をするか、しないか。それが決まらない限り、エリオは管理局の保護下に入れないのだ。

エリオはもぞもぞと言いづらそうにしながら、縋る様な視線をリニスに向けている。
リニスの傍に居たい。彼女の傍で、暮らしたい。そんな雰囲気が手に取る様に分かった。

エリオのその様子に、リニスはクスッと笑みを浮かべる。
素直に好意を示せないのは、今までの境遇のせいだろうか。

「……そうですね、エリオ。一回、私とデュエルしましょう」

「え？　でゅ、デュエルですか？」

「はい。ルールに何も変わりは無い、ただのデュエルです」

リニスは思わず同情してしまいそうになったが、無理やりその心を押し止める。
そして代わりに、彼にデュエルをしようと申し出た。リニスの提案に、エリオはポカンとしている。

大方、なぜこのタイミングでデュエルをしようと言われるのか理解できていない様だ。
しかし、リニスにも狙いがある。デュエルをすれば、相手の事が良く分かる。

少しでもエリオの事を知り、保護するかどうか。それを決めようとリニスは思っていたのだ。
幸い、エリオのデッキ（違法研究所で彼が使用していたもの）は管理局で保管されている。
あり合わせのカードでデッキを作ると言うことにはならないだろう。

「それは良いですけど……」

「ふふ、勿論ただのデュエルじゃありません。
そのデュエルの内容次第で、エリオ君を引き取るかどうかを決めたいと思います」

「！　ほ、本当ですか！」

「はい。本当です」

リニスの言葉に、当初は乗り気ではなかったエリオにも火がつく。
このデュエルに勝てば、リニスと共に居ることが出来ると思っているのだろう。

調子に乗せた様で気分が悪いが、これでデュエルをする事が出来る。

そうと決まれば話は早い。局内に居る局員に話を通し、エリオのデッキとデュエル場を貸してもらわなければ。

果たして自分は、エリオのことをどれだけ理解することが出来るのだろう。

一抹の不安を胸に抱きながら、リニスはエリオを引き連れて局内のロビーへと足を進めた。

二十話　「温もり　前編」（後書き）

プレシアさんは家族の皆を背負っている様です。
だけどときどき、背中から下ろしてあげるのも良いかもです。

次回はリニスｖｓエリオのデュエルとクロノについて少しやります。

二十話　「温もり　後編」（前書き）

地味に今回のデュエルは短いです。
ちなみに、エリオのデッキはリアルで私が組んでるデッキだったり。

二十話　「温もり　後編」

～時空管理局　某所～

時空管理局の本局の地下に造られたとある一室。
三十人以上の人間が入れるほどの広さを持つその部屋に、クロノの姿はあった。

彼は部屋の中央に置かれたテーブルの前に立っており、真剣な眼差しでテーブルを見つめている。
否、正確にはテーブルを見つめている訳ではない。テーブルに置いてある1枚のカードを見つめていた。

「まったく。あれから大分経ったと言うのに、僕はまだ認めてもらえないのか」

ため息交じりに、テーブルの上のカードを見つめながらクロノは呟く。
彼の視線の先にあるのは、顔が横半分だけ描かれている1枚のシンクロモンスターの姿が。

このカード―極神聖帝オーディン―に半ばほど認められ、一体どれほど経っただろうか。
当に1年以上経過し、クロノの年齢もそろそろ成人へと近づいてきている。

だが、どれほど年月を重ねようと、オーディンは未だ、完全にクロノを認めた訳ではなかった。
半分ほど、彼の実力や人柄を評価したのだろうか。数年前から今まで、顔を横に向けたままだが。

「クロノくーん」

「エイミィか」

と、何処かしみじみとした雰囲気を作っていると。不意に部屋の入口が開く。
入ってきたのは同僚であり、同じ船に乗る仲間――エイミィ・リミエッタその人だ。

元々、この部屋には許可を貰った人間しか入ることが出来ない様になっている。
エイミィも以前は、その許可を貰っていなかった。しかし、現在彼女は入れるようになっている。

「はいこれ。クロノ君のデュエルディスク、調整が終わったみたいだよ」

「ありがとうエイミィ。それと、君の方の調整は良いのか？」

「ん。アタシのロキも調子良いみたいだよ」

ニカッと気持ちの良い笑みを浮かべながら、エイミィがクロノにデュエルディスクを手渡す。
彼女がこの部屋に入れるようになった理由とは。それは、彼女が三極神のうちの一柱――極神皇ロキに認められたからだ。

元々、クロノは以前のトールとの戦闘の折、トールとロキのカードを預かっている。
これらはクロノが「これぞ」と思う相手に渡せと言われていたが、ロキが我慢できなかったのだろう。

勝手にクロノの知り合いから適合者を決めてしまい、それ以来ロキは彼女の元にある。
クロノとしてはもう少し慎重に選びたかったが、意外と相性が良かったのか。エイミィはロキと仲良くやっている様だ。

「それにこのルーンの瞳だっけ。
邪気眼！　みたいでカッコ良くない？」

「僕には良く分からない」

グッとエイミィが目に力を入れると、彼女の左目に不思議な紋章が浮かび上がる。
これは通称、ルーンの瞳と呼ばれるもので、ロキ、トール、オーディンの所持者の目に浮かびあがるモノだ。

これが浮かんでいる限り、彼女はロキを所持することが出来る。
明確な証が刻まれたことにより、彼女は正真正銘ロキの主となったのだ。

「クロノ君はまたオーディンのとこに居たんだ。
飽きない？」

「飽きないさ。こうして此処に居るだけで、色々考えられるんだ」

エイミィは一旦瞳からルーンの文字を消すと、クロノの隣に立ち並ぶ。
そしてクロノの視線を追う様に、テーブルの上に置かれたオーディンのカードを見つめた。

彼女がロキに認められているせいか。エイミィから見て、オーディンは正面を向いている様に見える。
しかし、クロノは依然としてオーディンの横顔しか伺い知ることが出来ない。

「（やっぱり、神様に認められるって難しいのかな……）」

隣に立ち並ぶクロノの横顔をチラリと盗み見ながら、エイミィは内心でそう思った。
彼女は半ば、強引にロキに選ばれた様なもの。認められる難しさが理解できるはずもない。

だが、何年もオーディンに認められるために行動し、生活を送ってきたクロノがこうも認められないのだ。
これはかなり、難しい試練なのではないか。エイミィは今さらなが

らに、極神に認められることの厳しさを思い知る。

「（それに比べてアタシのは……。ま、仕方ないかな。
ロキって元々、イタズラするのが大好きな神様みたいだし）」

エイミィは一旦クロノから視線を外すと、自分のデッキのエクストラデッキに眠るカードに思いを馳せた。
ずる賢そうな外見とは裏腹に、大分強力な効果を持ったロキ。そのカードの由来に、思わず苦笑いを浮かべる。

ロキが北欧神話の同名の神を模して造られたカードだとは理解していたが、性格も似るとは思ってもみなかった。
何も礼儀正しい性格を望んでいた訳ではないが、こうも釈然としないのは何故だろう。エイミィは思わず首を傾げる。

「――と。そう言えばエイミィ」

「ん？　どうしたの、クロノ君」

「エリオ・モンディアルだったか。
彼の保護を決めるデュエルがそろそろ始まるのか？」

「うん、そうだよ。リニスさんって人が保護するか決めるみたい」

しばし物思いに耽っていると、不意にクロノがエイミィに訊ねた。
内容は先日、管理局に連れてこられたクローンの少年のことだ。

彼の扱いは局の中でも難しくなっている。理由としては、彼が保護を拒否しているのだ。
どうやら彼は、共に同行していたリニスと言う使い魔に懐いてしまった様子なのだ。

故に、彼はその使い魔――リニスの元から離れたがらない。
局としてもクローンの成功体に興味はあるのだが、無理強いが出来ないのだ。

それに加え、彼にはどうやら管理局が自分を拘束していた研究所と被って見えるらしい。
そのせいもあってか。エリオは管理局にあまり良いイメージを持てないのだろう。

「それじゃあ、僕も見学させてもらおうかな」

「そうだねー。リニスって人の人柄も確認しておきたいし」

エイミィから確認を取ったクロノは、テーブルの上のオーディンに背を向けて歩き出す。
向かう先は部屋の出口。そしてエイミィもデュエルを見学するのか、クロノの背中を追いかけた。

元々、クロノは努力家である。デュエルの腕前を磨くため、他人のデュエルを良く見学するのだ。
そこでカードのプレイングや戦略などを磨き、様々なカードの種類と効果を自分の頭に叩き込んでいく。

それは一体、どれほどの努力だろうか。
だが、そんな努力を得て彼は、若くして執務官と言う地位に昇り詰めたのだ。

彼らが向かう先は、デュエルを見学するために造られた別室である。
そこからならば彼らの姿は見ることが出来ないので、余計な緊張を与える事もない。

そうして部屋を出て行くクロノとエイミィの背中を、テーブルの上のオーディンは興味深そうに見つめていた。

※

「うわー！　凄い、広いや！」

「これほどとは……」

専用のデュエルリングに連れて来られたエリオとリニスは、目を大きくして驚いていた。
彼らが連れてこられたのは、管理局内部にあるデュエルリング。そ

のうちの1つを貸してもらった。
中は時の庭園にある宮殿の玉座ほどの広さ。
この広さならば、多少暴れても問題は無いだろう。

しばし部屋の様子に茫然としていたリニスだったが、ここに来た目的を思い出したのか。
ハッと我に変えると、あまりの広さに驚いているエリオに声を掛けた。

「エリオ。はしゃぐのは構いませんが、そろそろ準備をしましょう」

「あ、はい。分かりました」

「よろしい」

エリオの素直な返事に、リニスは思わず笑みを浮かべてしまう。
どうやら幼い頃のフェイトと重ね合わせているのだろう。彼女の表情は柔らかい。

そして互いに離れた位置に立つと、腕に付けたデュエルディスクを展開させた。
リニスとエリオが腕に付けているのは、管理局から貸し出された専用のデュエルディスク。

どうやら内部テロなどを警戒している様で、殺傷設定に設定を変更することはできない。
そして無骨な黒いデザインのデュエルディスクに、リニスとエリオ

はお互いにデッキをセット。

シャ、シャ、シャと小気味いい音を響かせて、セットされたデッキが自動でシャッフルされる。

「さぁ、行きますよエリオ。貴方の全てを、私に見せてください」

「は、はい。よろしくお願いします！」

「えぇ。――――それでは」

「「決闘（デュエル）！！」」

リニスＬＰ４０００
エリオＬＰ４０００

「ボクの先攻から、ドロー！」

エリオ手札５→６

エリオとリニス。２人の合図とともに、デュエルが開始された。
まず先攻を取ったのはエリオ。彼は勢いよく、デッキからカードをドローする。

「よし、悪くない手札だ……。僕は手札から≪ソニックバード≫を召喚！

このカードが召喚、反転召喚されたとき、デッキから儀式魔法カード1枚を手札に加えます！」

「儀式デッキ？　また珍しいデッキを使いますね」

「僕はデッキから≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫を手札に加え、カードを2枚伏せてターンを終了します」

ソニックバード
星４／風属性／鳥獣族／攻１４００／守１０００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、
自分のデッキから儀式魔法カード1枚を手札に加える事ができる。

エンド・オブ・ザ・ワールド
儀式魔法
「破滅の女神ルイン」「終焉の王デミス」の降臨に使用する事ができる。
フィールドか手札から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように
生け贄を捧げなければならない。

エリオ手札６↓４
場　ソニックバード　伏せ×２

「私のターン、ドロー」

リニス手札５↓６

「（エリオが手札に加えたのは≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫……。
　ならば手札かデッキには≪終焉の王デミス≫が眠っている可能性が高い……）」

終焉の王デミス
儀式・効果モンスター
星８／闇属性／悪魔族／攻２４００／守２０００
「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。
フィールドか手札から、レベルの合計が８になるようカードを生け贄に捧げなければならない。
２０００ライフポイントを払う事で、
このカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する。

リニスはデッキからカードをドローしつつ、エリオのデッキタイプの特定に急ぐ。
相手が初手からソニックバードを召喚したので儀式デッキを使うことは分かったが、サーチされた魔法が厄介だ。

相手がエンド・オブ・ザ・ワールドを手札に加えた場合、十中八九終焉の王デミスが呼ばれる。
これは終焉の王デミスの効果が優秀であり、制圧力を持っているせいだろう。

エリオのデッキは恐らく、【デミスドーザー】か単純にデミス特化型のデッキだろう。
そうと決まれば話は早い。デミスの召喚を阻止しつつ、デミスを召喚する隙を与えないようにすればいい。

「私は手札から≪ビーストライカー≫を召喚！
そして手札を1枚捨てて、デッキから「モジャ」一体を場に特殊召喚します！」

ビーストライカー
星4／地属性／獣族／攻1850／守　400
手札を1枚捨てて発動する。
自分のデッキから「モジャ」1体を特殊召喚する。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

リニスは手札の状況から、現在取れる手段で最良の選択を選び取る。
彼女の手札には、ビーストライカーとキング・オブ・ビーストが存在していた。

ビーストライカーの効果を使用すれば、デッキからモジャを場に特殊召喚することが出来る。
そして場に特殊召喚されたモジャをリリースし、手札からキング・オブ・ビーストを特殊召喚すれば良い。

それを考えて、リニスはビーストライカーを召喚した。
しかし――――

「リバースカードオープン！　≪天罰≫！
僕は手札を1枚捨てて、相手の発動したモンスター効果の発動と効果を無効にし、破壊します！」

「っ！？　あえて手札を捨てた！？」

「僕は手札から≪儀式魔人プレサイダー≫を捨てます」

天罰
カウンター罠
手札を１枚捨てて発動する。
効果モンスターの効果の発動を無効にし破壊する。

儀式魔人プレサイダー
星４／闇属性／悪魔族／攻１８００／守１４００
儀式モンスターの儀式召喚を行う場合、
その儀式召喚に必要なレベル分のモンスター１体として、
墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事ができる。
このカードを儀式召喚に使用した儀式モンスターが
戦闘によってモンスターを破壊した場合、
その儀式モンスターのコントローラーはデッキからカードを１枚ドローする。

エリオ手札４→３

リニスの召喚したモンスターが発動した効果は、エリオの罠カードにより防がれる。
まさか初動を妨害されるとは思ってもいなかったのだろう。リニスは僅かに動揺していた。

だが、その動揺もすぐに彼女は収める。
初動を潰されたのは痛い。だが、それを挽回する手段もまた、手札にあった。

「くっ、私は場の獣族モンスターが破壊され墓地へ送られたとき、
１０００ライフポイントを払って発動！　手札から≪森の住人グリーン・バブーン≫を特殊召喚します！」

リニスＬＰ４０００→３０００

リニス手札６→３

「ぐ、グリーン・バブーン……！」

リニスのフィールドに、丸太ほどの大きさの棍棒を持った森の住人が姿を現した。
その大きさは、まるで小さな山の様にも見える。その森の住人が、静かにエリオを見下ろした。

完全に初動を潰したと思っていたのだろう。エリオの動揺はリニス以上に酷い。
だが、彼も彼でデュエルの訓練を受けていたせいか。すぐに気を取り戻し、場に意識を向けた。

「バトルフェイズ！　グリーン・バブーンで≪ソニックバード≫を攻撃！
　粉砕しなさい！」

「くっ、うわぁあああっ！！」

エリオＬＰ４０００→２８００

「私はカードを2枚伏せて、ターンエンド！」

リニス手札３→１
場　グリーン・バブーン　伏せ×２

「くっ、ボクのターン、ドロー！」

エリオ手札３→４

エリオがダメージを受け、苦しそうにデッキからカードをドローする。
少なくない、精神的圧力がエリオに降りかかっているのだろう。

「（！　ドローしたカードは≪強者の苦痛≫……！
　良いカードだ、ここはこのカードで凌ぐしかない！）」

「僕は手札から≪強者の苦痛≫を発動！
　相手の表側表示モンスターはレベル×１００の値だけ、攻撃力が下がります！」

強者の苦痛
永続魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力はレベル×１００ポイントダウンする。

グリーン・バブーンＡＴＫ２６００→１９００

「さらに二体目のプレサイダーを守備表示で召喚！
カードを1枚伏せて、ターンエンド！」

エリオ手札4→1
場　プレサイダー　強者の苦痛　伏せ×2

エリオの状況は厳しいままだった。切り札であるデミスを引けないのか。
体勢を立て直せないままでいる。だが、リニスにとって、これは好機であった。

デミスが召喚されないならば、このまま攻撃を続行すれば良い。
しかも手札には、運よくとあるカードが紛れ込んでいる。

これならば次のターン、エリオはデミスを召喚したとしても効果を使えまい。
リニスはエリオのエンド宣言を耳に入れると、デッキからカードをドローした。

リニス手札1→2

「エリオ、貴方は何故、私に保護を訴えたのです？」

デッキからドローしたカード。それを確認し、リニスは静かにエリオに訊ねる。
まるで勝利が確定し、驕っている様にも見えるその仕草。だが、彼

女の姿から嫌みは感じられない。
どうやらリニスは心の底から、エリオにその疑問をぶつけたかったのだろう。
厳しい戦況に苦い表情を浮かべていたエリオは、リニスの疑問に微笑みを返す。

「だって、初めてでしたから」

「？　初めて？」

「はい。初めて、ボクのために怒ってくれた人だから……」

エリオは微かに、嬉しそうに微笑みながらリニスに告げた。
そして彼の言葉に、リニスは先日の一件――デュエルギャングに啖呵を切ったときのことを思い出す。

――その子は道具でも、クローンでもありません！
――この世界に生を受けた、たった1人の掛け替えのない人間なんですよ！

――貴方たちこそ、その少年を舐めるのも大概になさい！

「パパもママもボクの事を諦めたけれど、リニスさんはボクの事を諦めてくれなかったから。
だから僕は、リニスさんの傍に居たいんです」

「ですが、それで貴方が幸せになるとは限りませんよ。
不幸になるかもしれない。それでも、良いんですか？」

笑みを浮かべながら告げるエリオに、リニスはまるで最後通告の様に訊ねた。
そう。たとえエリオがリニスの元へやってきても、幸福になるとは限りはしない。

不幸になるかもしれない。それどころか、以前よりも厳しい生活になってしまうかもしれない。
そんな不安定な暮らしをさせるくらいならば、管理局に保護をしてもらった方が良いのではないか。

リニスは心の底で、そう訊ねる。
だが、エリオはリニスの問いかけに首を縦に振り、肯定した。

「はい。それでたとえ今よりもっと不幸になっても。
傍にリニスさんが居てくれたら、僕は他に何も要りません」

「……まったく。最近の子は……」

リニスを捉えたのは、どこまでもまっすぐに見つめるエリオの視線だった。
そこには、不確定な未来に怯える色は見えない。あるのはただ、リニスと共に居たいと言う願望だけ。

正直、ずるいと思った。これではまるで告白ではないか。

しかも告げられた言葉が、向けられている瞳が。リニスを捕えて離さない。

何処までも愛情に貪欲なその瞳は決してリニスの顔から外れることは無く。

ただ、彼は一途に、リニスの愛情を欲していた。まるで迷子の幼子が、ようやく母親を見つけた様な。

自分はこんなにも愛情に飢えている少年を引き剥がすのか。リニスは内心で自問する。

しかし、その自問自答はすぐに終了した。そんなこと、出来る筈が無いと言う答えが出たことによって。

ただでさえ、彼は出生に問題を抱えている。様々な研究機関が彼に目を付けているだろう。

そんな彼を、このまま放っておくことなど無理だった。守りたい。

迫りくる悪意から、彼を護りたい。

リニスはこのとき、初めて心この底からそう思った。

「ならば、私に勝ってみなさい！　私は手札から≪激昂のミノタウルス≫を召喚！

　このカードがフィールド上で表側表示で居る限り、私の場の表側表示の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターは貫通効果を得る！」

「っ！　貫通効果……！」

「グリーン・バブーンでプレサイダーを攻撃！」

激昂のミノタウルス
星４／地属性／獣戦士族／攻１７００／守１０００
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上の獣族・獣戦士族・鳥獣族モンスターは、守備表示モンスターを攻撃した時にその守備力を攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

リニスのフィールドに現れた牛の戦士。
彼がその身から不気味な波動を放出すると、グリーンバブーンの身体が淡く色づく。

そしてミノタウルスの加護を得たグリーン・バブーンは、その手に持った棍棒を勢いよく振り下ろした。
凄まじいまでの破壊音がデュエルリングに響き渡り、もうもうとソリッドビジョンによる煙幕が巻き起こされる。

グリーン・バブーンが振り下ろした棍棒の下には、ぺしゃんこに潰れたプレサイダーの姿が。
棍棒によって叩き潰されたプレサイダーは光の粒子となって消え去ると、超過ダメージをエリオに与えた。

エリオＬＰ２８００→２３００

「続いてニ撃目！　≪激昂のミノタウルス≫でプレイヤーにダイレクトアタック！
　さらに攻撃宣言時、伏せカード≪幻獣の角≫を発動！　ミノタウルスに装備し、攻撃力を８００ポイント上昇させます！」

「させない！　伏せカード≪魔宮の賄賂≫を発動！
相手の発動した魔法・罠カードの発動を無効にし、破壊します！」

「それにチェーンして≪盗賊の七つ道具≫を発動！
相手の発動した罠カードの発動と効果を１０００ライフと引き換えに、無効にして破壊します」

魔宮の賄賂
カウンター罠
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
相手はデッキからカードを１枚ドローする。

盗賊の七つ道具
カウンター罠
１０００ライフポイントを払って発動する。
罠カードの発動を無効にし破壊する。

リニスＬＰ３０００→２０００

ミノタウルスＡＴＫ１３００→２１００

「――――～～～～っ！？」

「ミノタウルスの攻撃を食らいなさい！」

「うわぁあああああっ！！」

エリオＬＰ２３００→２００

数々の罠による妨害を潜り抜け、ミノタウルスが手に持った斧を振り下ろす。
振り下ろされた斧はエリオに多大なダメージを与え、エリオを壁際まで吹き飛ばした。

すでにエリオの残りライフポイントは２０００を下回っている。
これでは終焉の王デミスを呼んだとしても、効果を発動することは出来ない。

勝敗は決した。そう思い、リニスは視線を壁際まで吹き飛ばされたエリオに向ける。
彼の心根は聞いた。自分の心の底からの願いは聞いた。ならば、あとは実行に移すのみ。

せめてこのデュエルでは勝利をもぎ取って欲しかったが、それは無理な注文だろう。
リニスは静かにため息を吐くと、壁際に倒れ込んでいるエリオの元まで歩みを進める。

しかし、彼女の足の歩みは不意に止まった。

「まだ、ですよ……。ボクのライフ、残ってるじゃないですか……」

「！　ですが、勝敗は決しましたよ！
貴方がたとえデミスを呼んでも、逆転する手立ては無い！」

リニスはエリオに言い聞かせるように叫ぶ。これ以上、デュエルを続ける意味は無い。
だが、エリオはそうもいかない様だ。リニスの呼びかけにも応じず、首を横に振って見せる。

「たとえ残りのライフが１００になっても、決闘者なら諦めちゃいけない……。
そうじゃ、無いんですか……？」

「そ、れは……」

「それに」

「――――誰が、ボクの切り札がデミスだと言いました？」

「え？」

「ボクのターン、ドロー！」

エリオ手札１→２

エリオの不意の呟きに、リニスが思わず呆気に取られる。
だが、エリオはリニスの行動を歯牙にもかけていない。
そして意味深な言葉と共に、彼はデッキからカードをドローする。
彼のそのドローはとても綺麗で、まるで逆転の切り札を引き当てた様な。
そんな印象を、リニスに与えた。

「僕は手札から≪マンジュ・ゴッド≫を召喚！
このカードが召喚・反転召喚に成功したとき、デッキから儀式モンスター、または儀式魔法１枚を手札に加える！
僕がデッキからサーチするのは――――≪破滅の女神ルイン≫！」

「ッ！？　ルインですって！？」

マンジュ・ゴッド
星４／光属性／天使族／攻１４００／守１０００
このカードが召喚・反転召喚に成功した時、
自分のデッキから儀式モンスターまたは
儀式魔法カード１枚を手札に加える事ができる。

破滅の女神ルイン
儀式・効果モンスター
星８／光属性／天使族／攻２３００／守２０００
「エンド・オブ・ザ・ワールド」により降臨。
フィールドか手札から、レベルの合計が８になるよう

カードを生け贄に捧げなければならない。
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、
もう1度だけ続けて攻撃を行う事ができる。

デッキからサーチされた儀式モンスター。その名前を聞き、リニスは驚きに目を見開く。
破滅の女神ルイン。それは、終焉の王デミスと同じ儀式魔法を持ちいて召喚されるモンスターの名だ。

ルインの効果は相手モンスターを戦闘破壊した場合、続けて2回目の攻撃が出来ると言うもの。
効果は優秀なのだが、攻撃力の低さも相まって使われにくいのが現状だ。

だが、エリオはルインをサーチした。
自らのデッキの切り札と告げ、彼はルインを手札に加えたのだ。

「そして手札から≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫を発動！
墓地の≪儀式魔人プレサイダー≫2体をゲームから除外することにより、
儀式魔法のリリースとして使用する！」

「！？　しまった！
プレサイダーをもっと疑ってかかるべきだった……！」

エリオの墓地から、2体の儀式魔人がゲームより除外される。
これにより、除外された儀式魔人のレベル分、儀式魔法のリリース

を肩代わりすることが出来る。

除外した儀式魔人のレベルは４。
２体を除外したことにより、レベル８の儀式モンスターを召喚できる。

リニスはエリオのフィールドに現れた巨大な魔法陣を、半ば茫然とした表情で見つめていた。
彼が天罰で儀式魔人を捨てたとき、もっと疑っておくべきだった。
何故、プレサイダーなのかと。

他にもレベル４の儀式魔人は存在する。何故、そちらを使用しなかったのかと。
だが、既にその思考は遅いものとなっていた。エリオのフィールドに、破滅の女神が舞い降りる。

「破滅を司る女神よ、相手に絶望を与え、勝利を我が手に！
儀式召喚！　出でよ、≪破滅の女神ルイン≫！！」

溢れんばかりの閃光が、エリオの宣言と共にフィールドに溢れだす。
その光は２人きりのデュエルリング全体を包み込み、凄まじいまでの発光を見せた。

リニスは咄嗟に目を庇いながら、エリオのフィールドに視線を向ける。
するとそこには、美しい１体の女神が存在していた。

腰まで届く白銀の髪。ノースリーブの様なワンピースには、複雑な

模様が描かれている。
そんな中、リニスの目を引いたのは彼女が手に持つ戦斧だった。女神に似つかわしくない、無骨な戦斧。

「バトルフェイズ！
≪破滅の女神ルイン≫で≪激昂のミノタウルス≫を攻撃！」

「防ぐ手段が……っ！　くぁあああ！」

リニスＬＰ２０００→１８００

ルインの振り下ろした戦斧が、ミノタウルスを縦に真っ二つに引き裂いた。
身体を縦に引き裂かれたミノタウルスは断末魔の叫びをあげ、爆散。
激しい衝撃を与える。

「プレサイダーをリリースして儀式召喚されたモンスターの効果発動！
　相手モンスターを戦闘破壊した場合、デッキからカードを１枚ドロー出来る！」

エリオ手札０→１

「やられた……っ！」

もうもうと立ちこめる爆煙を手で払いながら、リニスは内心で毒づ

いた。
プレサイダーとルイン。こうまで相性が良いとは予想だにしていなかった。

プレサイダーの効果を付与されたルインがモンスターを倒せば、自分は1枚カードをドロー出来る。
それはつまり、儀式召喚で失ったアドバンテージを取り戻すのに最適な相互効果だ。

唯一の問題点であるルインの戦闘力の低さは、現在場に出ている強者の苦痛で解決できる。
舐めていた。攻撃力の低い連続攻撃モンスターと、ルインのことを舐めてかかっていた。

「続けて2撃目！　そしてダメージステップに入ります！」

「っ！　このタイミングでダメージステップに入る宣言……？
――――まさか！」

「ボクの場の光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ。
手札から≪オネスト≫を墓地に送ることにより、エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力は
戦闘を行う相手モンスターの攻撃力分の数値だけ上昇します！
よってルインの攻撃力は４２００！」

「超過ダメージが……私のライフを上回った……」

「いっけぇえええええっっ！！　グリーン・バブーンを攻撃！」

オネストの恩恵を受けたルインが、その手に持った戦斧を振り上げる。
エリオの勝利を望んでいたリニスだが、こうも華麗に逆転されるとは思ってもみなかった。

だが、これで良いのかもしれない。これで、エリオは全ての条件を満たしたことになる。
デュエルの腕前も悪くない。否、それどころか逆にセンスがあるくらいだ。

これは、自分の修行の旅は終わりかもしれないなとリニスは思う。
こうまで強い、若い決闘者が出てきたのだ。もう、自分はお役御免かもしれない。

なら、エリオを引き取った後はどうやって暮らそうか。
僅かに早い未来予想図を描きながら、リニスのその身に戦斧が振り下ろされた。

リニスＬＰ１８００→０

二十話　「温もり　後編」（後書き）

次回予告

鬼柳とフェイトの仲のよさそうな姿を見ると、胸が引き裂かれんばかりに痛むなのは。
プレシアはそんななのはを励まそうと、再びミッドチルダのカードショップへ彼女を誘う。

その折、彼女たちのもとにボロボロに傷ついた少女が現れる。
少女に何かあったのか。なのはたちは彼女を保護しようとするが……。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ヴィヴィオ」

ライディングデュエル、アクセラレーション

二十一話　「ヴィヴィオ　前編」（前書き）

時系列を無視してサブタイトルの少女が出ます。
また、本編中でエクシーズなどの名前が出ますが、名前だけです。
作中で使用することはまずありません。

二十一話　「ヴィヴィオ　前編」

～海鳴市　八神家～

「♪～～♪～」

ふんふんと鼻歌を歌いながら、なのはは栗色の髪をサイドテールに纏める。

幼い頃から伸ばしてきた自慢の髪の毛は、頭の片側で纏められるほどボリュームに溢れていた。

1階にある洗面台で、鏡に自身の姿を移しながら身だしなみを整える姿はまさに大人の女性のもの。

数年前まで小学生だった彼女も、徐々に成長していると言うことなのだろう。「良し」となのはは頷く。

「（えへへ。しばらく鬼柳さんと一緒。嬉しいな）」

髪を整え終えたなのはは、ニコニコと嬉しげな笑みを浮かべながらキッチンへと向かう。

彼女の自宅は高町家なのだが、今ではすっかり八神家が彼女の自宅と化してしまっていた。

故に、彼女が本来の自宅である高町家に戻ることが稀になってしまっている。

そのことを彼女の父親と兄は寂しがっていた様だが、母親と姉は快く送り出してくれた。

そんな彼女が八神家に半ば居候状態になっている理由。
それは、この家に同様に居候している1人の青年が原因である。

その青年の名前は、鬼柳京介。
幼い頃になのはと出会い、それ以来の付き合いをしている青年だ。

なのはと鬼柳が出会ったのは、なのはの父親が病院に入院し、家族がとても大変な時だ。
母親は入院している父親のお見舞いや、当時開業していた喫茶店の営業などでてんてこ舞いの忙しさ。

兄や姉もそれぞれ母親や父親のお見舞いに精を出していたのだが、なのはだけはさせてもらえなかった。
幼いなのはに、苦労をさせたくなかったのだろう。彼らは自宅でなのはが楽しく遊んでくれることを望んだ。

しかし、それが結果的になのはを追い詰める結果になった。
自分も家族の一員なのに。どうして皆の手伝いをさせてくれないの？

幼い頃のなのはは、幼いなりに母親や姉が自分を心配してくれているのを理解していた。
だが、彼女だって家族の助けになりたいと思っていた。だが、家族はそれを良しとしてくれなかった。

故に、なのはは孤独を感じていた。広い高町家の一室は、なのはに多大な孤独感を感じさせた。
彼女は逃げる様に、デュエルモンスターズの大会に参加した。自分

も、家族の助けをする事が出来ると。

「（そんなときだったなぁ、鬼柳さんと出会ったの）」

丁度、そんな折だ。なのはが自宅の近くの公園で、鬼柳と出会ったのは。
当時負けなしだったなのはに鬼柳は勝負を挑み、なのはは鬼柳に敗北してしまう。

それまで負けなしだったなのはは、この事実が信じられなかった。
その後、その場から駈け出し、なのはは自宅へ飛ぶように帰宅する。

そして真っ先にしたことは、負けたショックに打ちひしがれることでも、泣くことでもなかった。
自分のデッキを改造すること。出来る限り無駄を省き、より効率的にデッキを回転させられる様に工夫を施した。

なのはが持っていたカードを総動員して改造した新たなデッキ。そのデッキで、なのはは再び鬼柳に挑んだ。
しかし、結果は前回と同じ敗北。自分が本気で改造したデッキが相手にならなかった。その事実が、なのはの心に火を付けた。

それからなのはは、毎日の様にデッキを改造しては鬼柳にデュエルを挑んだ。
毎回負けては、デッキの改造の繰り返し。それがいつしか、なのはの日課になっていた。

当時は負けるのが悔しくてデッキを改造し、デュエルをしていた。

1度でも良いから、勝ちたいと。
だが、そんな思いと裏腹に、なのはの心は満たされていた。自分と同等。否、それ以上の実力を持つ決闘者。

彼とデュエルしている間、なのはは孤独を忘れられた。自分の我がままを許されていた。
故に、なのはは恐れた。父親が退院し、鬼柳との日課が終わりを迎えることを。

このまま鬼柳と別れてしまえば、自分はまた良い子を求められる。そんなものはイヤだ。そんな窮屈で退屈なこと、とてもではないが許容できない。

そんな幼い下心を持ちながら、なのはは鬼柳に一緒に暮らそうと提案する。
初めて自分を支えてくれた男性。自分の我がままを、文句を言わずに受け入れてくれる男性。

彼を離したくは無かった。そして、鬼柳がなのはの提案を了承し、共に暮らすようになってから。
なのはの鬼柳へ抱いた想いは、徐々に大きくなっていった。それは半ば、仕方のないことだったかもしれない。

日常生活で少し疲れた時は、彼の傍で一休み。
普段見せることの出来ない我がままを、彼にだけは見せることが出来た。

その幼い気持ちが、「恋」と言う感情に変わるのも半ば当然だったろう。
けれど、彼女の初恋は、それを自覚する前に終わってしまった。

「あ、鬼柳さん……」

「ん。よぉ、なのは」

「おはよ、なのは」

「おはよう……」

キッチンに入ると、テーブルの一角を占領している想い人の姿があった。

彼――鬼柳の姿は数年前から変わることは無く、愛用の灰色のシャツを身に付けている。

そして、そんな彼の隣に腰掛けているのは彼の妻である少女――フェイト・テスタロッサ。

彼らは仲が良さそうに肩を寄せ合いながら、テーブルの上にあるバラバラに解体されたデッキを見つめていた。

朝一番から鬼柳の顔を見られて嬉しいと同時、なのはは心の奥がドロッと濁る感覚を覚えた。

その感情の矛先は、鬼柳の隣に腰掛けているなのはと同じ年頃の少女――フェイトへと向けられている。

先ほどまで鼻歌を歌うほどのテンションだったにも関わらず、今のなのはのテンションは一気に下降していた。

早くご飯を食べて学校に行こう。これ以上鬼柳とフェイトの仲の良い姿を見ていては、自分の心がおかしくなってしまいそうだ。

「（……どうして、フェイトちゃんなの……）」

自分の席に腰掛けたなのはは、何処か機械的な仕草で朝食を取り分けると、それを口に運ぶ。
手や箸はもくもくとご飯を口に運んでいるのだが、彼女の視線だけは固定された様に動かなかった。

なのはの視線が固定されている先は、肩を寄せ合いながらデッキの構築をしている鬼柳とフェイト。
とりわけ、フェイトに固定される。本来ならば、あそこに座っているのは自分のはずなのに、と内心で思いながら。

鬼柳京介は数年前、高町なのはの友人でもある少女――フェイト・テスタロッサを嫁にした。
そこに多少なりとも、彼女を護ると言う気持ちがあったのは否定できないだろう。半ば政略結婚だ。

もしも鬼柳とフェイトの夫婦生活が、何処かギクシャクしていたならばなのはもこんな感情を抱かなかっただろう。
やっぱり、鬼柳さんとフェイトちゃんは相性が良くないんだ。自分にもチャンスがある。そう、自分を慰めることが出来た。

だが、現実は違った。
一時期は彼らの関係もギクシャクしていたが、それ以来彼らは此方が恥ずかしくなるほどの熱々っぷりを披露している。

普段の夫婦生活は勿論、先日はとうとう夜の夫婦生活にも手を出し

た様だ。
鬼柳への気持ちを諦めたと思っていたなのはだが、やはり彼女はショックを受けた。

「（私よりも鬼柳さんと過ごした時間が短いのに……！
どうしてフェイトちゃんが……っ！　どうして……、どうして……ッ！）」

これがもしも、自分と同じくらいの時間を過ごしたはやてであったならば、まだ我慢は出来た。
だが、フェイトが違う。自分たちよりも後に現れて、あっという間に鬼柳を掻っ攫って行ってしまった。

とても大切にしていた宝物を、横から奪われてしまった様な。そんな状態なのだろう。
故になのはは、フェイトにあまり良い感情を抱けない。自分から好きな人を奪った嫌な女。そう思っているのだろう。

「？　なのは、大丈夫か？」

と、不意に噛んでいた箸が「バキッ」とイヤな音を立てた。
どうやら知らず知らずのうちに、強く噛み過ぎていたらしい。

なのはの異変を感じ取ったのか。テーブルの上から鬼柳が顔をあげる。
彼の顔に浮かんでいるのは、様子がおかしいであろうなのはを心配

している表情。

なのははそんなちょっとした出来事で、僅かに心に安定をもたらすことが出来た。
鬼柳が見てくれた。心配してくれた。それが堪らなく嬉しくて、思わず頬がにやける。

「え？　あ、うぅん。だいじょぶだよ」

「そうか？　なら良いけどよ。あんま無理するんじゃねぇぞ」

「あにゃははは……」

なのはの言葉に納得しつつも、鬼柳は彼女に心配の言葉を掛けることを忘れない。
どうやら彼は、なのはが勉強で夜遅くまで起きていると思っているのだろう。

実際はそんなことは無いのだが、こうして心配してくれるだけでなのはの心は明るくなる。
これで今日も一日頑張ることが出来るだろう。にへへと笑みを浮かべながら、そう思う。

けれど。そんななのはと鬼柳の様子を面白く無さそうに見ているフェイトの顔が視界に入り。
なのはの浮かれていた心が、一気に急降下してしまうことになった。

※

結局その後。フェイトは鬼柳をなのはから奪う様に彼に甘えた。
彼も彼で特に抵抗などしないのか。フェイトの我がままをすんなりと受け入れている。

なのはは徐々に2人だけの空間を作り出そうとしている鬼柳達から逃れる様に、自分の部屋へと駆けこんだ。
バタンッ、と少々乱暴な音を立てて、なのはの自室の扉が閉じられる。そしてそのまま、閉じた扉になのはは背中を預けた。

「無理、だよぅ……。諦められないよぉ……」

そしてずるずると床に腰を下ろしていく。ドスンッと、お尻が床に落下した。
なのははそのまま体育座りを行うと、立てた膝に顔を埋めて泣き出してしまった。

いくら自分の恋に決着をつけ様とも、彼女の心が。本心が納得していなかった。
自分の方が長い間慕い続けていたのに。自分の方が彼のことをずっ

と好きだったのに。

溢れだした彼女の本心は、涙の雫となって溢れだす。
それは到底、彼女の意思によって止められるものではない。

どうして。どうして自分じゃなかったのだろう。
自分がもう少し早くこの気持ちに気づいて、行動していれば何かが変わっただろうか。

そんな意味のない問答を胸中で行いつつ、なのはは静かに啜り泣く。
と、そんなとき。不意に、なのはの部屋の扉がコンコンとノックされた。

「!?」

「なのはさん？　私だけど……。今、良いかしら？」

「ぷ、プレシアさん!?
え、あ……！　ちょ、ちょっと待ってください！」

ノックの主は、どうやらプレシアだった様だ。突然のプレシアの来訪に、なのはは驚く。
だが、いつまでも驚いている訳にもいかないのが現状。泣き顔を見られるなんて恥ずかし過ぎる。

なのはは慌てて扉から背中を離すと、バタバタと部屋の中を駆けずり回った。
まず探すのはウェットティッシュ。泣いてべちゃべちゃになった顔

をどうにかしなければならない。

「よ、良しっと。顔はこれでオッケー！」

見つけたウェットティッシュで顔を拭うと、なのはは部屋の扉の元まで足を進める。
本来は赤くなった目もどうにかしたかったが、あまりプレシアを待たせるのも悪いと思う。

故になのはは赤くなった目を隠すこともせずに、プレシアを迎えるために部屋の扉を開いた。
扉の向こう側に居たプレシアは相変わらず優しげな笑みを浮かべ、穏やかな雰囲気をその身に纏っている。

今ではなのはにとって、プレシアは第二の母親だった。
そのせいだろう。プレシアの顔を見て、なのはは思わずホッとする。

「ご、ごめんなさいプレシアさん。ちょっとバタバタしちゃってて……」

「良いのよ。元はと言えば、押しかけたこちらが悪いのだし」

待たせてしまったことを謝罪するのだが、プレシアは特に気にしていない様だ。
それどころか、逆にプレシアが謝ってくる始末。これにはなのはも居心地が悪くなる。

ひとまずどちらも悪かったと言うことで決着をつけると、なのははプレシアを部屋の中へ招き入れた。
その際に赤くなった目の事を訊ねられるかとも思ったのだが、あえて見逃したのか。プレシアは話題にしなかった。

「ねぇ、なのはさん。ちょっと今日、付き合って貰っても良いかしら？」

「？　付き合うって……何処かに出かけるんですか？」

「ミッドチルダよ。今日、新しいパックが入荷するって聞いてね」

プレシアの話に、なのはは「へぇ」と驚いた様な声を上げた。
この時期、この世界で新しいパックが出ると言う話を聞いたことは無い。

だが、次元世界の中心であるミッドチルダは違ったようだ。
新しいパックに収録されているカードとは、一体何なのだろうか。

僅かばかり、なのはも興味が出てくる。

「良いですよ。でも、学校どうしましょう」

「休んじゃえば良いじゃない。そんな雰囲気で、学校に行くつもり？」

「……そう、ですね」

なのはもミッドチルダに同行したいが、生憎と今日は登校日である。果たして、学校を休んでも良いものなのだろうか。なのはは僅かばかり思案した。

だが、そんななのはの考えをプレシアがあっけらかんと打ち砕く。それに何より、なのはたちは数年前から学校が苦手なのだ。さほど罪悪感は無い。

プレシアはなのはのその返答に満足したのか。笑みを浮かべながら部屋を出る。
その際に「1時間後にリビングに集合ね」と言う伝言も忘れない。

「……気を遣ってもらっちゃったのかな」

そしてパタンと部屋の扉が閉められた室内で、なのはがポツリと呟いた。
なにせプレシアがやってくるタイミングがあまりに良すぎたのである。

大方、なのはの元気が無い現場を見られていたのか。
はたまた、なのはの様子を心配した鬼柳がプレシアに告げたのかもしれない。

どちらにせよ、心配をかけてしまったことには違いが無い様だ。
それが何処か申し訳なく感じると同時、嬉しくも思える。

「うぅ～……よしっと！
なら、今日は目一杯プレシアさんに甘えちゃおう！」

そうと決まれば話は早い。なのはは早速着ていた制服を脱ぎ捨てると、新たな私服に身を包む。
せっかくプレシアが気を遣ってくれたのだ。気分転換をして、気分を入れ変えるのも悪くは無いかもしれない。

どの服が良いのかな～と僅かにテンションを上げながら、なのはは着て行く服を選ぶのだった。

※

「ふぅ、今日もダメ……と」

管理局でも限られた者しか入ることを許されない一室。
星界の三極神が安置してある一室から、疲れた様子のクロノが顔を覗かせた。

どうやら彼は、今日も今日とて足しげく、オーディンの元へ通っていたらしい。
しかし、結果は依然として良くないままの様だ。彼は未だ、オーディンに所有者として認められていない。
諦めてしまうのも1つの方法だが、せっかくならば認めて欲しいと思うのも事実。
はてさて。一体どうすれば認めてもらえるのか。それを考えながら、クロノは足を進める。

「あ、クロノくーん！」

「エイミィか。どうかしたのか？」

と、そんな彼の元へ、1人の女性がパタパタと足音を響かせて駆けてきた。
彼女はエイミィ・リミエッタ。クロノと同じ船に乗る仲間であり、ロキに認められし者である。

クロノは笑みを浮かべながらこちらに駆けてくるエイミィに向け、苦笑しながら訊ねた。
彼女と共に行動する様になってから大分長いのだが、彼女の子供ッぽいところは健在だった様だ。

「第〇〇管理外世界って分かるよね？」

「第〇〇管理外世界だって？　あぁ、知っている」

エイミィはクロノの元まで駆け寄ってくると、ある世界の名前を口にする。

その世界の名前とは、一時期クロノが必死になって探していた次元世界の名前だ。

「例の子がいなくなったんだって。
聞いた話じゃ、デュエルギャングに狙われてるって話だよ」

「……なんだって？」

神妙な顔つきになったエイミィが、クロノに事情を説明する。

話の渦中である子供が行方不明となり、デュエルギャングに狙われている。

それだけで、クロノの表情が険しくなるのも無理は無かった。

それは何故か。その理由は、デュエルギャングに狙われている子供に理由がある。

２人の会話に出てきた第〇〇管理外世界。そこはある神の存在が認められている世界だった。

その神とは、スカーレッド・ノヴァと呼ばれる古の神。ある世界では、地縛神スカーレッド・ノヴァと呼ばれている。

なんでもその管理外世界では、数百年に一度。

その神――スカーレッド・ノヴァの力を宿した子供が１人、生まれ

るらしい。

これがもしも普通の神ならば、その子供は偉大な神をその身に宿した聖人として扱われるだろう。

だが、スカーレッド・ノヴァは違う。スカーレッド・ノヴァははるか昔、１つの世界を滅ぼしかけた邪神なのだから。

ならば当然、その世界の者たちにとって、スカーレッド・ノヴァの力を宿した子供は恐怖を覚える存在だ。

故にその世界では、昔からスカーレッド・ノヴァの力を受け継いだ子供にある名前を付け、その世界から追放するらしい。

その名前とは――ヴィヴィオ。

その土地に伝わる古い言葉で、災厄の意味を持つ言葉だ。

「そのヴィヴィオって子なんだけど、スカーレッド・ノヴァの力が狙われてるみたい」

「無理もない話だな。古の神、それも１つの世界を滅ぼそうとした神の力だ。

　狙われない方が逆におかしいだろう」

エイミィの言葉に、クロノは首を縦に振って肯定の返事を返した。

本当かどうかはわからないが、その身に古の邪神の力を宿しているのだ。

欲しがる研究機関などは多々あるだろう。

ただの出まかせと言う説もあるが、何があるか分からないのが次元

世界だ。

ある1つの世界が古の神によって滅ぼされるなど日常茶飯事である。
となれば、この子供の身にスカーレッド・ノヴァの力が宿っている可能性は高い。

「早急に捜索チームを決めるか。下手をすれば、あの力は世界を滅ぼす。
生けるロストロギアみたいなものだし、早急に保護した方が良いな」

「了解。早速人員を手配してくるよ」

「頼む」

ひとまず今後の対策を決めると、エイミィが人員の手配のためにその場を駆けだす。
クロノはそんな彼女の背中を見送ると、静かにため息をついた。

「地縛神、スカーレッド・ノヴァがこうも早く表舞台に出てくるとは……。
イェーガー市長はこうなることを予測していたのか？」

クロノの脳裏に浮かび上がるのは、奇抜なフェイスペイントの小柄な市長の姿。
彼は数年前、次元世界に地縛神スカーレッド・ノヴァに関する情報

が無いかの探索をクロノに頼んだのだ。

表向きは地縛神スカーレッド・ノヴァに関する情報収集だろうが、実際は違うのだろう。

実際は地縛神スカーレッド・ノヴァの力を封印。もしくは一時的に封じるのが目的に違いない。

いくらかの世界の英雄――ジャック・アトラスがその身に宿しているとは言え、危険なモノに違いは無い。

ならば最初の発見者として、封印しなくてはならないと考えているのだろう。なんとも真面目なことだとクロノは嘆息する。

「ま、そんなところに好感が持てるんだけどね」

クロノはニッと唇の端を釣り上げると、その場から駈け出す。

目指すは会議室。そこで今回の事件で配備される局員に事情を説明するのだ。

※

「ふぇえええ～～……！」

瞳をキラキラと輝かせて、なのははペッタリとショーウィンドウに張り付いた。
両手でしっかりとガラスに触っているせいか。店員の視線が何処となく厳しく感じる。

しかし、なのははそんな店員の視線に気がつくことなく、ガラスケースを見つめていた。
そのガラスケースの中には、1枚のカードが収められている。このカードは、とても貴重なモノらしい。

「これが新世代のモンスターカードか～！」

「モンスター・エクシーズ。実際に販売されるまで、何年かかるかしらね」

なのはの視線の先にあるカードとは、カードの周りの部分が黒いモンスターカードだった。
そのカードをもしも鬼柳が共に見ていたら、ダークシンクロモンスターだと勘違いしただろう。

しかし、実際は違う。このカード――モンスター・エクシーズはデュエルを彩る新たなモンスターなのだ。
召喚条件や召喚方法などは未だ不明だが、なのはの心は未だ見れぬモンスター・エクシーズに囚われていた。

だが、プレシアの言うとおりモンスター・エクシーズが一般に販売されるまでまだ先のことだろう。
このモンスター・エクシーズがデュエルモンスターズにどんな変化を与えるのか。なのはは楽しみでならない。

「プレシアさん！　今日は連れて来て貰ってありがとうございます！」

「そう言ってもらえると嬉しいわ。丁度、気分転換になったみたいだし」

興奮冷めやらぬ様子で、なのはがプレシアにお礼を言った。
どうやらプレシアはパックを買うついでに、なのはにこのモンスター・エクシーズを見せたかったらしい。

なのはもなのはでモンスター・エクシーズを見て興奮しているのか。すっかり先ほどまでの陰鬱な表情は影を潜めていた。どうやら立ち直った様だ。

「あにゃはは……。やっぱり、気が付いてました？」

「そりゃもう。あれだけ「私悲しんでますオーラ」出されたら、いくら鈍感さんでも気づくんじゃないかしら」

「あぅ。鬼柳さんにも心配かけちゃったかな……」

プレシアから笑いながら告げられる言葉に、なのははガックリと項垂れる。
どうやらプレシアにフォローを頼んだのは鬼柳だった様だ。なのはの異変をしっかり捉えていてくれたらしい。

フェイトだけでなく自分も見てくれていて嬉しいとなのはは思うが、同時に悲しくもあった。
また、彼の胸の中に行きたい。自分の全てを許してくれる、大きな胸に抱かれたい。そんな願望があった。

そしてなのはとプレシアは目的を達成したのか。カードショップを出て付近の公園に足を進める。
その公園は穴場の様な存在だったのか。他に人影も見えず、内緒話をするには持ってこいのスポットだった。

「さ、プレシアお母さんに話して御覧なさい。
誰かに相談すれば、多少なりともスッキリするわよ」

「あはは……。……それじゃ少しだけ、独り言呟きますね」

「了解」

なのはの言い回しが面白かったのか。プレシアはクスクスと笑みを零す。
釣られる様になのはも笑みを零しつつ、今まで胸の内に秘めていた想いをプレシアにぶつけた。

数年前に鬼柳に振られたけど、未だ諦め切れていないこと。

なんとか心を納得させようとするのだけれど、心が。理性が納得していないこと。

フェイトに対する羨望。嫉妬。それらがごちゃ混ぜになり、黒い感情を抱くこと。

それら全てを包み隠さずに、なのははプレシアに向けて吐き出した。

話の最後には、彼女は泣いていた。

自分の心の醜さと、好きな人を諦めきれない弱い自分に対する情けなさと、

愛しの彼を横から掻っ攫って行ったフェイトに対する怒りとで。彼女の心はぐちゃぐちゃだった。

こんな情けない自分。恰好悪い自分をプレシアはどう思っただろうか。

きっと、情けないと思っているに違いない。こんな恰好悪い自分、とっても情けない。

きっとプレシアに嫌われちゃったな。両の瞳からボロボロと零れる涙を拭いながら、なのはは思う。

けれど、彼女のその想いはプレシアの行動によって打ち砕かれた。

プレシアの両手がなのはへと伸び、彼女を捕まえるとなのははプレシアに引き寄せられる。

そして引き寄せられたなのはの頭が当たったのは、丁度プレシアのふくよかな胸の辺り。柔らかな感触が、なのはの頭に当たる。

「プレシアさ「ごめんね、なのはさん」え……？」

「貴方の好きな人を、横から奪ってしまってごめんなさい」

「――――っ！」

プレシアの胸に抱かれたまま、なのはは息を呑んだ。

そして次の瞬間には、プレシアの胸に抱かれたままワッと泣き出してしまう。

枯れたとばかり思っていた涙の雫が、止め処なくなのはの瞳からあふれ出た。

プレシアの言うとおりだった。好きな人を奪われて、辛くて、苦しくて、悲しかった。

もしかしたら、心のどこかでプレシアを恨んでいたかもしれない。

想い人と娘をくっ付け様とした張本人だと言うことで、心のどこかで恨んでいたかもしれない。

けれど、彼女の謝罪を聞いたことで、なのはのプレシアへの恨みは多少なりとも消えていた。

彼女も辛かったのだ。皆に慕われている鬼柳を、フェイト1人が独占することに申し訳なさを感じていた。

そんなプレシアの心が理解できたせいで、なのはもまた大泣きしてしまう。

プレシアもプレシアで、苦しんでいたのだ。自分のせいで、小さな恋の花を摘んでしまったことを。

そして、それから十分ほど。

人気のない公園に、なのはとプレシアの啜り泣く声が響き渡る。

※

「はぁ、はぁ……！」

薄汚い布を纏った少女は駆ける。薄暗い森の中を、幼い両足を必死に動かしながら。

チラリと後ろを振り返ってみれば、怒声をあげながら追いかけてくる複数の男性の姿が。

彼らの腕にはデュエルディスクが装着されており、彼らはモンスターを召喚して少女を追い詰めている。

――デュエルギャング。彼らはとある世界の人々から、その名前で呼ばれていた。そして、彼らのターゲットは逃げる少女。

捕まっては堪らないと、少女は更に早く足を動かす。

すでに何十分も後ろの男たちとおいかけっこをしているせいか。

肩はすっかりと上下し、荒々しいまでに呼吸が乱れていた。

これ以上は、遠くへ逃げることは難しいかもしれない。

だが、捕まってしまえば何をされるか分からないのが現状なのだ。
自分を追いかけてくる彼らによれば、研究所へ売られるのか。はたまた変わった趣味の人物の元へ売られるのか。

どちらにせよ、少女にその未来を選ぶことは出来なかった。故に彼女は足を必死に動かす。
少女の視線の先には、森の出口が広がっていた。少しばかり離れているので、そこが何処に繋がっているのか分からない。

だが、このまま森の中で追いかけっこをしているよりも状況は好転するだろう。
上手く通行人や観光客を見つけることが出来れば、自分を匿ってもらえるかもしれない。

けれど、長い間走ったせいで足に疲労が蓄積していたのだろう。少女の足がもつれ、その場に転んでしまう。

「あぐっ！」

必死に両手で身体を起こそうとするのだが、全身に酸素が回っていない身体が動くはずもない。
未だ幼い彼女の二の腕がぷるぷると震えるばかりで、少しも少女の身体が持ち上げられることは無い。

「いまだ、捕まえろ！」

「逃がすなよ！」

少女の後ろから、追いかけてくる男たちの声が聞こえる。
背後から聞こえる男たちの声に、少女は焦りを覚えながら視線を前方に向けた。

森の出口までは、あと僅か。あと少し走るだけで、現地の人に助けを求められる。
だが、少女の腕や脚は動くことを拒否していた。必死に力を入れるのだが、動く気配が微塵もない。

「――――けて」

少女は必死に腕や足に力を入れながら、森の出口へ向けて言葉を絞り出す。
そこに人が居るとか、聞こえているかなどと言うことは考えていない。

今は少しでも多くの手札を切らなければ、危機を回避することは出来ないからだ。
だが、やはり長い間、長距離を走ったせいなのか。喉が枯れ、満足に叫ぶことすらままならない。

掠れた声で何度も助けを求めるのだが、枯れた声では聞こえる訳もない。そもそも、出口に人が居るかも怪しい。
そして、少女が必死に助けを求めているそのとき、とうとう少女を追いかけていた男たちが少女の元へ辿りついた。

「はぁ、はぁ……！　ようやく捕まえたぜ！」

「危うくボスに怒られるところだ」

「あぅ！」

少女の元へ辿りついた男たちは、それぞれ少女の右腕と左腕を拘束する。

必死に逃れようと彼女は身を捩るのだが、少女と成人男性では成人男性に分があった。

故に、少女は呆気なく男たちの手に落ちる。

両腕をロープで縛られ、腕を拘束された。

「早いとこ戻ろうぜ。この前のポカのせいで、ボスの機嫌が最悪だ」

「ったく。クローン一体満足に捕まえられないとはな」

男たちは少女を捕まえたことで、多少なりとも心にゆとりが出来た様だ。

愚痴る様に、彼らの所属するチームのリーダーや仲間への愚痴を呟いている。

「（い、痛いよぅ……、だけど……！）」

男たちに身動きを封じられていた少女は、必死に気配を殺して周囲の状況を伺っていた。
今の彼女は腕を縛られているだけで、口に猿ぐつわを噛まさせられている訳ではない。

だが、いつ男たちが気がつくか分からない。故に、チャンスを逃すことは出来なかった。
もしも下手を打てば、自分は研究所に売られてしまう。そんなことはイヤだ。自分は生きたい。

「――――なのは――――ったら」

「――プレ――――もですよぅ」

「！」

と、機を伺っていた少女の耳に2人の女性の声が届いた。
良かった。丁度、近くを誰かが通りかかった様だ。ならば有りっ丈の声で助けを求める。

喉の調子がどうかは良く分からないが、このまま手をこまねいているよりは大分マシだ。
そして少女は、大きな声で叫んだ。これほどの大声を、彼女はこれまで叫んだことがあっただろうか。

薄暗い森の中に、少女の悲痛な助けを求める叫びが響き渡った。

「お願い、助けてぇえええええっっ！！！」

二十一話　「ヴィヴィオ　前編」（後書き）

次回はデュエルに入るのかな。
そしてなのは覚醒編へと続きます。

二十一話　「ヴィヴィオ　後編」（前書き）

今回はなのはのデュエルパート。
相手のデッキは微妙に現実世界のモノとは違います。

二十一話　「ヴィヴィオ　後編」

～ミッドチルダ　某所～

「お願い、助けてぇえええええっっ！！！」

なのはがその声を聞いたのは、丁度涙を流し終えた頃だった。
思いっきり涙を流したことで心が軽くなったのだろう。思わず笑みを浮かべていた。

そのまま適当にプレシアと軽口を叩き、公園を出ようとしたとき。
公園の側面に位置している木々の中から、年端のいかぬ少女の叫び声が聞こえたのだ。

「っ！　プレシアさん！」

「ええ、後を付いてきなさい！」

「はい！」

プレシアの指示に従い、なのははプレシアの背中を追いかける。
こんなときのプレシアの背中は非常に大きくて、とても頼りがいがあった。

ガサガサと周囲の木々を揺らしながら、プレシア達は声が聞こえた

場所へと足を進める。
そして不意に開けた場所に出た。そこにいた見慣れぬ3人の男女の姿を、プレシア達は捉えた。

1人は少女。髪は金色で、腰の辺りまでストレートに伸ばしている。この少女が先ほど大声を出したのか。身体のあちこちには擦り傷が出来ていた。

そして残る2人の男。こちらは見るからに粗暴な顔つきで、無理やり少女を地面に押し倒している。
どうやら2人の男が不審者で、抑えつけられている少女が被害者なのだろう。プレシアは素早く判断した。

「貴方達、そこで何をしているの！」

「ちっ、一般人に見つかっちまった！」

「やるしかねぇか！」

「っ！」

プレシアとなのはの姿に気がついたのだろう。
金髪の少女を抑えつけている男たちは、懐から何かを取り出す。

それは手錠の形をしたデバイス。
男たちはそれぞれ取り出すと、そのデバイスをプレシア達に向かって投げた。

放たれたデバイスは空中で円を描きながら、プレシア達の元へ飛来する。
その際にガチャッ、と小気味いい音を響かせてプレシアとなのは、2人の腕に装着された。

咄嗟にプレシアは外そうと試みるのだが、そう簡単に外すことはできない様だ。
男たちはそれぞれ手錠の反対側を自らの腕に嵌めると、デュエルディスクを起動させる。

「ソイツは特別製でな。俺たちとのデュエルに勝たない限り、外れることはねぇ」

「あら。ならば貴方達に勝てば良いのね」

男たちはこの様なデュエルに慣れているのか。
余裕そうな姿を崩そうとしない。

しかし、それはプレシアも同じだった。彼女もまた、余裕を崩そうとはしない。
下手に時限爆弾などが取り付けられていたら厄介だが、どうやらそう言うことは無さそうだ。

ならばデュエルで相手を叩きのめしてしまえばいい。
プレシアはそう判断すると、待機状態のデバイスを起動させる。

「なのはさん、いける？」

「は、はい！　私も大丈夫です！」

プレシアがデバイスを起動させると同時、なのはもまた、デバイスを起動させた。
彼女のデバイスたるレイジングハートがその姿をデュエルディスクへと変え、なのはの腕に装着される。

そしてなのはは、チラ、と視線を向けてきたプレシアに、元気よく頷くことで応えた。
自分が負ける可能性は考えない。それに今は、男たちに捕まっている少女を救出するのが先なのだから。

「お前の相手はこの俺だ！」

「っ！　負けない……！」

「「決闘（デュエル）！！」」

なのはＬＰ４０００
男１号ＬＰ４０００

「俺のターンだ、ドロー！」

男１号手札５→６

そしてなのはと少女を拘束していた男の内の１人と。

プレシアと残る男とのデュエルの火蓋が、ここに切って落とされた。
それぞれがデュエル開始宣言の合図を行い、デッキから手札を5枚ドローする。
なのはの相手である男は、どうやら先攻だったようで1枚多く、デッキからカードをドローした。

「≪神秘の代行者アース≫を通常召喚！」

「アース……？　もしかして、代行天使!?」

「アースの効果により、デッキから≪創造の代行者ヴィーナス≫を手札に加えさせてもらう」

神秘の代行者アース
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／天使族／攻１０００／守　８００
このカードが召喚に成功した時、
自分のデッキから「神秘の代行者アース」以外の
「代行者」と名のついたモンスター1体を手札に加える事ができる。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、
代わりに「マスター・ヒュペリオン」1体を手札に加える事ができる。

創造の代行者ヴィーナス
効果モンスター
星３／光属性／天使族／攻１６００／守　０
５００ライフポイントを払って発動する。

自分の手札またはデッキから「神聖なる球体」1体を
自分フィールド上に特殊召喚する。

「さらにフィールド魔法≪天空の聖域≫を発動し、ターンエンドだ
！」

男1号　手札6→5
場　アース　天空の聖域

天空の聖域
フィールド魔法
このカードがフィールド上に存在する限り、
天使族モンスターの戦闘によって発生する天使族モンスターの
コントローラーへの戦闘ダメージは0になる。

「私のターン、ドロー！」

なのは手札5→6

「（相手は代行天使……、厳しい闘いになるかもしれない）」

デュエルディスクからカードをドローしたなのはは、相手のデッキ
タイプを特定する。
相手が召喚したモンスターにより、相手のデッキが「代行天使」と
言うカテゴリーだとは理解した。

しかし、理解したからと言って状況が良くなることは無い。否、逆

に悪いくらいだ。
相手のデッキが代行天使と言うことは恐らく、十中八九マスター・ヒュペリオンがデッキに入っているだろう。

マスター・ヒュペリオンの効果は強力で、墓地の天使族モンスター1体を除外し、相手のカードを破壊する効果を持つ。
しかもフィールドに天空の聖域が張ってあれば、その対象を2枚まで増やすことが出来るのだ。それでいて、打点も十分ある。

それに加え、既存の天使族モンスターのサポートも受けられるのだ。
サーチ、特殊召喚が容易に行えるヒュペリオンは、厄介なモンスターと見て良いだろう。

「でも！　私は手札から、≪太陽の神官≫を特殊召喚！」

「！　太陽の神官……、【インティ・クイラ】か？」

「残念、違うよ！　さらに私は≪氷結界の術者≫を通常召喚！」

なのはのフィールドに、異国の神官と顔を隠した術者が召喚される。
それらのモンスターに共通するモノは無く、バラバラの印象を相手に与えている。

だが、共通点は存在していた。名称でも、属性でもない。種族が一致していた。
太陽の神官と氷結界の術師はどちらも魔法使い族。この統一された種族は、なのはのメリットになる。

「氷結界の術師だと！？」

「レベル５≪太陽の神官≫にレベル２≪氷結界の術師≫をチューニング！
　万能なるマナ、それらを操りし魔導の賢者を今ここに！　シンクロ召喚！」

なのはの対戦相手である男の、驚愕した声が響き渡る。
しかし、なのはは答えない。すでにこのやり取りは、何度も経験したものだから。

氷結界の術師が変化した２つの緑色のリングが、太陽の神官を包み込む。
そして太陽の神官が５つの星に分解され、緑色のリングの中で一列に整列した。

「魔導の申し子、≪アーカナイト・マジシャン≫！」

「っ！　厄介なモンスターを呼ばれた……っ！」

「≪アーカナイト・マジシャン≫がシンクロ召喚された時、このカードに魔力カウンターを２つ乗せるよ。
　そしてこのカードの上に乗っている魔力カウンターの数×１０００ポイント、攻撃力が上昇！」

アーカナイト・マジシャン　魔力カウンター０→２
ＡＴＫ４００→２４００

２つの緑色のリングの中から現れたのは、全身に白いローブを纏った魔導師の姿だった。
フードの奥底に隠された２つの瞳は、値踏みする様にフィールドに存在しているアースを見つめている。

「≪アーカナイト・マジシャン≫の効果発動！
　このカードの魔力カウンターを任意の数取り除くことで、取り除いた魔力カウンターの数だけ相手の場のカードを破壊できる！
　私が破壊するのは、≪神秘の代行者アース≫と≪天空の聖域≫！
　貫け、ディバイン・バスタァアアアッッ！！」

「がぁっ！」

アーカナイト・マジシャンの掲げた杖から、二筋の閃光が相手フィールドに放たれた。
放たれた２つの閃光は、寸分の違いなく相手フィールド上のカードを破壊する。

その際の衝撃波を食らってしまったのか。
プレイヤーである男は苦しげな声を上げた。

「そして私はカードを２枚伏せて、ターンエンド！」

なのは手札６→２
場　アーカナイト　伏せ×２

「ちっ、俺のターンだ！」

男1号手札5→6

「≪創造の代行者ヴィーナス≫を召喚！
さらにライフを1500ポイント支払い、デッキ、手札から≪神聖なる球体≫を3体、場に特殊召喚するぜ！」

男1号LP4000→2500

創造の代行者ヴィーナス
星3／光属性／天使族／攻1600／守　0
500ライフポイントを払って発動する。
自分の手札またはデッキから「神聖なる球体」1体を
自分フィールド上に特殊召喚する。

神聖なる球体
星2／光属性／天使族／攻　500／守　500
聖なる輝きに包まれた天使の魂。
その美しい姿を見た者は、願い事がかなうと言われている。

男が召喚したヴィーナスの効果により、デッキ、手札から神聖なる球体が現れる。
現在、男のフィールドにはモンスターが合計4体。ボードアドバンテージでは男の方が上だった。

「さらに≪馬の骨の対価≫を発動！
俺のフィールドの効果モンスター以外のモンスター1体を墓地に送り、デッキからカードを2枚ドローする」

男1号手札4→5

「ドローブースト……、ちょっと、厄介かな」

「おっと、こりゃついてるぜ。さらに2枚目の≪馬の骨の対価≫を発動だ。
場の≪神聖なる球体≫を墓地に送り、さらにデッキからカードを2枚ドロー」

男1号手札5→6

なのはの対戦相手であるデュエルギャングは運が良かったのか。さらにカードをドローした。
これによりボードアドバンテージを失ったが、ハンドアドバンテージは回復している。

墓地を肥やされ、手札を増やされたことにより、なのはは劣勢へと追いやられていた。
まずい。このまま守りに入っていては、マスター・ヒュペリオンを呼ばれてしまう。

そして、なのはのその不安は的中した。

「行くぜ、俺は墓地の≪神秘の代行者アース≫をゲームから除外し、

手札から≪マスター・ヒュペリオン≫を特殊召喚する！」

「っ！　出た、代行天使のエース……！」

マスター・ヒュペリオン
星８／光属性／天使族／攻２７００／守２１００
このカードは、自分の手札・フィールド上・墓地に存在する
「代行者」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、
手札から特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する
天使族・光属性モンスター１体をゲームから除外する事で、
フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。
フィールド上に「天空の聖域」が表側表示で存在する場合、
この効果は１ターンに２度まで使用できる。

「≪マスター・ヒュペリオン≫の効果発動！
墓地の光属性天使族モンスター１体をゲームから除外し、相手フィールド上のカード１枚を破壊する！
俺は墓地の≪神聖なる球体≫１体を除外し、≪アーカナイト・マジシャン≫を破壊する！　食らいやがれ、ジャッジメント・レイ！」

「くっ、伏せカード≪ディメンション・マジック≫を発動！
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが居る場合、モンスター１体をリリースして手札から魔法使い族モンスター１体を
特殊召喚することが出来る！　私は場の≪アーカナイト・マジシャン≫をリリースし、手札から≪氷結界の風水師≫を特殊召喚！」

「サクリファイス・エスケープか。厄介なテクニックを使いやがる」

ディメンション・マジック
速攻魔法
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが
表側表示で存在する場合に発動する事ができる。
自分フィールド上に存在するモンスター1体をリリースし、
手札から魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。
その後、フィールド上に存在するモンスター1体を破壊する事がで
きる。

マスター・ヒュペリオンから放たれた閃光が、アーカナイト・マジ
シャンに直撃し様と言うとき。
不意に現れた棺の様なモノが、マスター・ヒュペリオンの放った閃
光からアーカナイト・マジシャンを守った。

そしてそのまま、フィールドに現れた棺の様なモノにアーカナイト・
マジシャンは入る。
そして次の瞬間には、棺の様なモノからアーカナイト・マジシャン
とは違うモンスター、氷結界の風水師が現れた。

このディメンション・マジックの効果により、アーカナイト・マジ
シャンは効果破壊されない。
逆に、相手の効果を1回ほど余分に使わせることが出来た。結果を
見れば、上々といったところか。

「さらに≪ディメンション・マジック≫の第二の効果発動！
手札から魔法使い族モンスターを特殊召喚した後、フィールド上
のモンスター1体を破壊することが出来る！
私は効果の使用を選択！　対象は勿論、≪マスター・ヒュペリオ

ン≫！」

「ちぃっ！」

「天からの鎖！」

そしてディメンション・マジックの第二の効果により、マスター・ヒュペリオンが破壊される。

この破壊効果はフェイトの持つスターダスト・ドラゴンでも無効化することはできない厄介な効果。

フェイトやはやてとデュエルをして数年。

なのはもまた、フェイト達の対策カードをデッキに入れていた様だ。

「なら俺は≪地砕き≫を発動！　さっき召喚した≪氷結界の風水師≫を破壊させて貰うぜ」

「くぅっ！　これは、かなり不味いね……！」

「さらに≪巨大化≫をヴィーナスに装備！　俺のライフはお前よりも低い。

よって、ヴィーナスの元々の攻撃力が2倍となる！」

「――――～～～っ！」

巨大化

装備魔法

自分のライフポイントが相手より下の場合、

装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を倍にした数値になる。
自分のライフポイントが相手より上の場合、
装備モンスターの攻撃力は元々の攻撃力を半分にした数値になる。

しかし、いくら相手のエースを破壊したとしても、なのはの危機は続いていた。
せっかく召喚した氷結界の風水師を破壊され、厄介な装備魔法カードを発動される。

巨大化は装備魔法カードの中でも、比較的初期に登場したメジャーなカードだ。
しかし、自分のライフポイントの量で上昇値が上昇したり減少するので、あまり投入されないカード。

なのはの対戦相手はデッキに入れていた様で、一気に攻撃力を上昇させてくる。
装備されたヴィーナスの攻撃力は１６００。効果で２倍になり、３２００となった。

「バトルフェイズ！　≪神聖なる球体≫で攻撃だ！」

「くっ……！　ここは通すしかない……！」

「無いなら続けて２撃目！　ヴィーナスのダイレクトアタックだ！」

「あぁあああっっ！！！」

なのはＬＰ４０００→３００

相手モンスターのダイレクトアタックが2回とも素通りし、なのはに大ダメージが与えられる。
咄嗟に伏せカードを発動しようとしたのだが、発動したとしても破壊される故、発動することは無かった。

全身に黒い煤を付けながらも、なのははなんとか立ち上がる。
思っていた以上に、目の前の決闘者はやる様だった。認識を改めねばならない。

「これで俺のターンは終了だ。
それとヴィーナスの攻撃力は元々の攻撃力の半分の値になる」

男1号手札6→3
場　ヴィーナス　神聖なる球体　巨大化

「くぅう……！　私のターン、ドロー！」

なのは手札1→2

「ねぇ、なんでこんなことをするの？
どうしてその女の子に酷いことをするの？」

起死回生のチャンスを伺うためか、なのははドローしつつ男に語りかける。
語りかけるのは、なのはの本心。何故、男たちは少女を捕え、連れて行こうとするのか。

どうしてこんな酷いことをするのか。なのはは理解することが出来ない。
ただ、みんなでデュエルして。毎日楽しく暮らせればそれだけで満足ではないのか。

一方、なのはに言葉を掛けられた男は一瞬、動揺した表情を浮かべる。
しかし、すぐにその表情は掻き消えた。男の顔に浮かんでいるのは、残酷そうな笑み。

「なんでかって？　そんなの、金になるからに決まってるだろ？
コイツは世にも珍しい神の力を宿した疫病神。コイツの世界の住人は手放したが、
コイツを実験したい、研究したいって言う科学者どもはうようよいやがるんだぜ？」

「そんな……っ！　でも、おかしいよ！　こんなこと！」

「おかしくなんてないさ。科学者どもは実験動物が欲しくて、俺たちは金が欲しい。
なら、俺たちが実験動物を手に入れて金を貰う。これもビジネスの形の一つさ」

「間違ってる……！　そんなの、絶対間違ってるよ！
その子はモノなんかじゃない……！　生きている人間だよ！」

なのはは叫ぶ。そんなことはおかしいと。人間はモノなどではない

と。
それを分からせるために、なのはは伏せカードを操作する。
もしも負けてしまえば、男たちに捕まっている少女がどうなるか分からないのだ。
人間の尊厳を剥奪されて、研究生物の様な毎日を送る。それは到底、許される事ではない。

「いいや違うね。こいつらは俺らにとって、ただの商品だ。
レアスキル持ち、クローン人間、そいつらを人間扱いしてどうするってんだ！」

「っ！　クローン人間だって、生きているよ！
ちゃんと呼吸して、毎日を精一杯生きているよ！」

「本当にか？　作り物の身体に心、そいつらは本当に生きていると言えるのか？」

「――――っ！」

なのはの脳裏に、自分の愛しい人を奪った少女――フェイトの影がちらつく。
なのはの対戦相手である男性は、クローン人間に人権は無いと言っていた。
作り物の身体に心。それらで作られているクローン人間は、本当に人間なのかと。
その男の言葉に、なのはは僅かに動きが止まる。その言葉はまるで、

正論を言っている様で。

「（そうだよ。フェイトちゃんは人間じゃない。だから、鬼柳さんを奪えるよ）」

そして、同時になのはの心の中でもう一人の悪しき自分が、なのはに向けて囁く。

フェイトはクローン人間だ。人間ではない。故に、鬼柳を奪うことが出来ると。

まるで悪魔の囁きの様な、甘い誘惑。それになのはは折れてしまいそうになる。

しかし、それと同時に今までフェイトと過ごしてきた日々が思い出された。

共に泣き、共に笑い、共に満足を分かち合ったあの輝かしい日々を。

故に、なのははこう言える。人によって作られた命だって、生きているんだと。

「生きている……生きているよ！　フェイトちゃんだって、生きているよ！

伏せカード≪リビングデッドの呼び声≫を発動！

自分の墓地から、≪アーカナイト・マジシャン≫1体を表側攻撃表示で特殊召喚！」

「ふっ、たかが攻撃力４００でどうするってんだ！」

「まだだよ、私は手札から≪エフェクト・ヴェーラー≫を通常召喚！
そしてレベル7の≪アーカナイト・マジシャン≫にレベル1の≪エフェクト・ヴェーラー≫をチューニング！」

「っ！　新たなシンクロ召喚だと！？」

目の前の男への怒りを覚えながら、なのははシンクロ召喚を行う。
と、なのはの怒りに呼応するかのように、彼女の腕に刻まれたアザが赤く発光する。

しかし、その様子は誰にも気づかれてはいない。
ぼんやりと己の存在を誇示する様に、赤いアザは発光を続ける。

「王者の鼓動、今ここに列をなす！　天地鳴動の力を見せてあげる！
シンクロ召喚！　全てを破壊し尽くして、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

「っ！　コイツは……！　ジャック・アトラスの魂のカード……！」

そして緑色のリングを潜り抜け、赤き悪魔がフィールドへとその姿を現した。
その巨体から放たれる圧力は相手を怯ませるのに十分で、王者の風格が漂っている。

赤き悪魔が見つめる先には、低攻撃力を晒している2体の天使モンスター。
その様子はさながら、天界を蹂躙する悪魔の様だった。

※

「あれって……！　スカーレッド・ノヴァ？」

一方。男たちに腕と足を拘束されたままの少女は、茫然とフィールドを見上げていた。
彼女の視線の先には、並々ならぬプレッシャーを放っているレッド・デーモンズ・ドラゴンの姿。

その堂々たる存在は、彼女の故郷に古くから伝えられている邪神、スカーレッド・ノヴァに瓜二つだ。
このモンスターは一体……、と少女がなのはのレッド・デーモンズ・ドラゴンを見つめていると。

「きゃぅッ！？　うぅっ、これって……！？」

不意に、少女の胸の辺りが苦しくなる。慌てて少女は、両手で胸元を抑えた。

そして両手が胸元を抑えたとき、少女は自身の身に起こっている変化に気がつく。

まるで自身の心臓から伸びる様に、赤黒いアザが全身に行き渡っていた。

そのアザを流れるのは、心臓から生み出された莫大なエネルギー。

今まで生きてきた中で、この様な変化は起こったことが無い。

初めて経験する想像を絶する苦痛に、少女は顔を歪めながらもレッド・デーモンズを見つめる。

「スカーレッド・ノヴァが、共鳴しているの……？」

※

「さらに伏せカード≪バスター・モード≫を発動！

私の場の≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫をリリースし、デッキから／バスターを特殊召喚！」

自身の腕の状態や、男たちに囚われている少女の変化に気づかぬま

ま、なのははプレイを進める。
せっかく召喚したレッド・デーモンズ・ドラゴンをリリースして召喚されるのは、戦闘態勢へと姿を変えたレッド・デーモンズだった。
全身に赤い鎧を身に纏い、腹部には悪魔が口を開けた様な装飾が施されているその姿は、まさに上級悪魔。
姿を戦闘態勢へとモードチェンジさせたレッド・デーモンズ／バスターは、天へ轟かんばかりに咆哮を轟かせる。

「コイツは……！」

「バトルフェイズ！
≪レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスター≫で≪神聖なる球体≫に攻撃！
エクストリーム・クリムゾン・フォースッ！！」

「う、うわぁあああああっっ！！！」

男1号ＬＰ２５００→０

レッド・デーモンズ・ドラゴン／バスターの放った渾身の一撃が、目の前の男に叩きこまれる。
攻撃が命中した際の衝撃波でか、デュエルをしていた男は吹き飛ばされ、背後の大木に背中を強く打ちつけた。

すると男はそのままグッタリと動かなくなる。
てっきり打ち所が悪かったかとなのははは慌てるが、寝息が聞こえてきたので気絶したのだろう。

「はふぅ……わたし、ダメだな」

男が気絶したことにより、なのはの腕に装着されていた手錠型のデバイスが解除される。
そしてデッキをデッキケースに仕舞い、レイジングハートを待機状態に戻すと、なのはは深いため息を吐いた。

いくらフェイトを妬んでいるとは言え、クローンに人権は無いと言う言葉に同意してしまいそうになるとは。
たしかにフェイトは自分から鬼柳を奪った張本人だが、彼女だって生きているのだ。決して、彼女はモノなどではない。

自分が自分で許せなくて、なのははポカポカと頭を軽く叩く。
いけない。こんな心理状態では、到底フェイトと鬼柳に会うことはできない。

「あ、そうだ！　女の子は……」

そして一しきり自分の先ほど覚えた感情に落ち込むと、なのはは当初の目的を思い出す。
きょろきょろと周囲に視線を走らせれば、隅で身を縮こまらせている金髪の少女の姿があった。

どうやら無事な様で、見たところかすり傷がいくつかあるくらいで、他に傷は見当たらない。

なのははホッと安堵の息を漏らすと、身を縮こまらせている少女を怯えさせない様に歩み寄った。

「大丈夫だった？　怪我は無い？」

「え、あ……！　う、うん……」

「そっか。良かった」

少女は僅かに怯えた様子を見せたが、なのはが自分に害をなす存在ではないと判断したのか。
幾分、表情を明るくしながらなのはに答えた。その様子になのはもまた、ニッと笑みを浮かべる。

そして少女の無事を確認し終えたなのはは、プレシアの戦況はどうなっているのか確認しようと視線を向けた。
プレシアと残るデュエルギャングのデュエルは終盤に差し迫っており、プレシアがフィールドを優位に進めている。

メンタルスフィア・デーモン。そしてインヴェルズ・ギラファ。
この2体のモンスターに並ばれては、男にはどうすることも出来ない様だ。

「っと。あれ？」

と、プレシアのデュエルの様子を観察していると。

不意になのはの身体に、何かが寄りかかってきた様だ。

一体何だろう。疑問に思いながら、なのはは視線をそちらに向ける。するとそこには、危機を脱して安堵したのだろう。くぅくぅと寝息を立てている少女の姿が。

なのはは一瞬呆けてしまうが、すぐにニッコリと笑みを浮かべると、少女の身体を抱き締めた。

今までずっと、怖い思いをしてきたのだ。少しくらい休んだって、罰が当たることは無いだろう。

眠っている少女を安心させるように、なのはは少女の背中を擦りながらデュエルの様子を見守る。

その姿はまるで、幼い娘をあやす母親の様にも見える。少女はすっかり安心し、なのはもまた、笑みを浮かべている。

そしてそれから数分後、デュエルギャングとのデュエルをプレシアが勝利で収めた。

二十一話　「ヴィヴィオ　後編」（後書き）

次回予告

無事、デュエルギャングから少女を守ることに成功したなのはとプレシア。
２人は少女を連れ、ミッドチルダで情報の整理を行う。

そこで得られた情報に、なのはとプレシアは憤りを隠せない。
だが、そんな彼女たちにさらなる追撃が迫る。

デュエルギャングの親玉――ロットンの出撃。
次元世界、ミッドチルダでデュエルギャングの激しい攻防が始まる――！

次回、満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防！」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十二話　「起こりつつある変化」（前書き）

またもやサブタイトル詐欺が発生しました。
と言っても、今回だけですので大丈夫でしょう。

二十二話　「起こりつつある変化」

～海鳴市　八神家～

「昨夜はお楽しみでしたね」

目の下に真っ黒な隈を作った鬼柳を出迎えた言葉が、先の言葉だった。
言ったのはニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべたヴィータ。思わず鬼柳の額に青筋が浮かぶ。

「うるせぇよ……、そもそも、昨日はそんなんじゃ……」

「じゃー何してたんだよー。一晩中フェイトとわーきゃー言っといて何事もなかったのかよ」

ぶらーん、と鬼柳の背中に貼り付きながら、ヴィータが昨夜の真相を鬼柳に訊ねる。
鬼柳は背中に張り付いたヴィータを鬱陶しそうに見つめるが、引き剥がす事もなく洗面所へ足を運んだ。

バシャバシャと冷水で顔を洗いつつ、鬼柳は昨夜の出来事を思い出す。
昨夜、否、昨日はなのはをプレシアに預けた後、鬼柳とフェイトは自室に籠っていたのだ。

と言っても、何もいやらしいことをしていた訳ではない。
していたことと言えば、新たなコンボの開発だ。

数カ月に一度新たなカードが発売されるデュエルモンスターズは、戦略に無限の可能性がある。
４０枚のデッキ全てをモンスターで埋めるモノ。逆に魔法・罠だけで固め、バーンダメージを狙うモノなどだ。

そんな訳で、新たなカードが発売されると、そのカードを使って新たな戦略を生み出そうと言う者は少なくない。
事実、鬼柳とて新たに発売したカードをデッキに投入し、新たなコンボの発見に勤しんでいた訳である。

とりわけ、昨日はフェイトも共に居たせいだろう。
夜中までコンボの開発に夢中になり、気が付いたら明け方だったのだ。

「（前々から集中すると周りが見えなくなることはあったが……、フェイトと一緒で歯止めが効かなかったか）」

冷水で頭をシャッキリさせながら、以前の自分を思い出してそんな感想を零す。
初代チームサティスファクション時代は遊星やジャック、クロウと共に３日ほど徹夜する日もあった。

こちらの世界に転移してからは頻度が減ったのだが、四六時中傍にフェイトが居るせいだろう。

久しぶりにその悪い癖が出てしまった様だ。ちなみに件のフェイトと言えば、鬼柳のベッドで居眠り中である。

「とりあえず≪ヘルウェイ・パトロール≫は却下だ」

「≪ヘルウェイ・パトロール≫？　管理局の局員に支給されてるカードじゃねーか。
どうやって手に入れたんだ？」

「クロノから流してもらった。エイミィ……ってやつが前まで使ってたらしい」

顔を洗い、意識がハッキリとした鬼柳はヴィータを伴い、リビングまで歩みを進める。
昨夜はクロノから送られてきたカードをデッキに投入しようかどうかを考えていたのだ。

ヘルウェイ・パトロールの効果は優秀で、手札にモンスターが溜まった場合の保険になってくれる。
だが、そもそも鬼柳は手札にあまりモンスターを溜める様な事は無い。たとえあったとして、全弾発射で吹き飛ばしている。

故に、ヘルウェイ・パトロールの採用は思案中なのだ。無理に入れる事もないだろう。
それに現在のデッキのモンスターカードは、すべて「インフェルニティ」で統一しているのだ。

そこにポツンと、ヘルウェイ・パトロールを投入することは憚られ

る。
それに別の理由もあり、ヘルウェイ・パトロールのデッキ投入は却下になった。

「ダグレとかいれねーのかよ」

「……≪ダーク・グレファー≫は趣味じゃねぇな。効果が優秀なのは分かるんだが……」

適当にソファに腰掛け、ヴィータに相槌を打っていた鬼柳の耳に聞き慣れた単語が聞こえた。
ダーク・グレファー。その身を闇に落としてしまった哀れな戦士のことである。

このダーク・グレファーと言うモンスターは、闇属性モンスターを墓地に落とすことに優れている。
手札の闇属性モンスター1枚を墓地に送り、デッキから1枚、闇属性モンスターを墓地に送ることが出来るのだ。

墓地が肥えると言うことは、それだけ出来ることが多くなると言うことである。
墓地にモンスターを落とし、エンジンを掛けるインフェルニティには最高の相性と言えるだろう。

しかし、鬼柳はデッキにダーク・グレファーを投入しようとは考えていない。
それと言うのも、鬼柳はインフェルニティ・デーモンの様なクリーチャーの様な外見をしたモンスターを好む。

そんなデッキに、ヘルウェイ・パトロールやダーク・グレファーを投入しようとは思わない。

「んじゃ、アイドルカード」

「インフェルニティ・リベンジャー」

「あぁ、なんか分かる」

そして次にヴィータが振ってくる話題とは、アイドルカードと言う一種の遊びの様なカードだ。
デュエルモンスターズのカードには、可愛らしい女性型モンスターや可愛らしい外見のモンスターが数多く存在している。

ある特定の決闘者は、1部のそのモンスターをデッキに入れ、デッキの花としていることがある。
鬼柳としても、彼らの考え方は分からなくもない。せっかくソリッドビジョンと言う魅力的なアイテムがあるのだ。

現実ではお目にかかれない、可愛らしいモンスターを呼び出したいと言う気持ちもあるのだろう。
しかし、鬼柳はあまりデッキにアイドルカードを入れようとしない。
遊星やジャック、クロウでさえ入れていると言うのに。

例:
遊星↓エフェクト・ヴェーラー
ジャック↓ダーク・リゾネーター

クロウ→疾風のゲイル

「まぁ、女性型モンスターは入れないな。デッキに入れるとフェイトが拗ねるんだよ。
部屋の片隅で体育座りで5時間拗ねられたときは、さすがに良心が痛んだぜ……」

「なにそれこわい。と言うか、なに入れようとしたんだよ」

「ちょっとからかって≪プリーステス・オーム≫を入れようとしたんだ。
そうしたら凄い落ち込んでたぞ。なんか女性型モンスターらしいな、アレ」

デッキにアイドルカードを入れない理由を、鬼柳はヴィータに説明する。
と言っても、アイドルカード自体を禁止されている訳ではない。女性型モンスターの投入が禁止されているのだ。

しかし、それで鬼柳が困ったことは今のところはない。むしろ今のままでよく回っているのだ。
すこし冒険したいとも考えているが、フェイトの機嫌を取るのが大変なのでなかなか冒険できないのが現状だ。

「あぁ、なんか化粧がケバそうなあのカードか」

「なんとなくプレシアに似てるんだと。

私よりも母さんが良いの!?　って血の涙を流しながら迫られた時は冷や汗を流した」

「……ん、そう言われれば、プレシアに見えなくもない……のか？」

ヴィータと2人、ソファの上で頭を抱える。別段そこまで、プレシアに似ている様には見えない。
せいぜいがプレシアと同じくらいの外見年齢と言ったところか。年齢に嫉妬する様になるとは、フェイトも嫉妬深くなった。

「けどなんとなく、プレシアっぽいカードは後々出てきそうだぜ。
８３番目のギャラクシー的なカードで」

「なんのことだ？」

「いや、気にすんな」

ヴィータが何か、良く分からないことを口走った。
８３番目のギャラクシーとは一体何なのだろうか。

なんとなく「正義の大判振る舞い」等と言う言葉が鬼柳の脳裏に浮かんだが、関係は無いかと記憶から消す。
そしてヴィータと八神家のリビングで適当に雑談をしていると。眠りから目覚めたのだろう。フェイトが顔を見せた。

「うぬぅ……くわぁぁ……」

「ちょ、凄い可愛いんだけど！　持ち帰って良いか？」

「俺と闘って勝てる自信があるなら良いぜ」

ふわふわとおぼつか無い足取りのフェイトは、ポスンと鬼柳の隣に腰掛ける。
そして可愛らしい欠伸を1つ。むにゃむにゃと、未だフェイトは夢うつつの様子だ。

そんなフェイトの姿がヴィータの琴線に引っ掛かったのだろう。ヴィータの雰囲気が変わる。
だが、鬼柳もヴィータに負けていない。可愛いのは同意するのだが、持ち帰ると言う言葉は却下だ。

「きょーすけ……、ひざ……」

「ほら、横になれよ」

「うぅん……」

ヴィータと鬼柳。2人の決闘者が敵意に満ちた視線で睨みあっている中。
夢うつつなフェイトはこっくりこっくりと舟を漕ぎながら、鬼柳の膝を所望した。

ときおり、フェイトはこうして鬼柳の膝に頭を預けて眠ることがあ

る。
その度に鬼柳が膝を提供し、彼女が眠り続ける間、鬼柳はフェイトの寝顔を観察するのだ。

フェイトは差し出された鬼柳の膝の感触を確かめると、頭を預けて眠ってしまう。
「くぅくぅ」と穏やかな寝息を立てながら眠る彼女の姿に、鬼柳の目尻も思わず下がった。

「まるで小動物だな。鼻ちょうちんとか出ねーのか？」

「出たら不味いだろ。主にプレシアの鼻血的な意味で」

「把握した」

依然として眠りこけているフェイトを観察しつつ、鬼柳とヴィータが同意する。
もしも彼女の鼻から鼻ちょうちんが出た場合、間違いなくプレシアは鼻血を噴き出すだろう。

元よりフェイトの事を溺愛している彼女の事だ。下手をしたらビデオカメラで保存するかもしれない。
そんな彼女の恥ずかしい映像を、未来にまで残しておくべきではないだろう。故に、このことは鬼柳とヴィータの秘密だ。

「それにしても、なのはのヤツもそろそろ吹っ切れないのかね」

「……昨日のことか？」

「あぁ。アイツ、まだまだお前に未練たらたらだぜ？
ついでに言えば、はやてとリインフォースもか。罪作りなヤツだぜ」

「……」

そして唐突に、リビングに広がっていた空気が変わった。
先ほどまで広がっていた暖かな空気ではない。何処か重い、暗い空気だ。

自身の膝の上にあるフェイトの頭を撫でながら、鬼柳は先日のなのはのことを思い出す。
フェイトと触れ合っているだけで、悲しげな。怒りに満ちた様な表情を浮かべたなのはの姿。

鬼柳はなのはのあんな表情を知らない。出会ってからこれまで、一度も見たことが無い表情だ。
だが、逆を返せばあの表情を浮かべさせるほど、鬼柳がなのはにとって大切な存在だったと言うことだ。

「（どうすりゃ良いんだよ……）」

鬼柳は内心で、ポツリとため息を吐いた。解決法など、彼は知らない。
出来ればもう二度と、なのはのあんな表情は見たくは無い。しかし、

解決法が無い。

もしも自分と一緒になることで解決するのならば、鬼柳は考えてしまう。

それも悪くは無い、と。だが、所詮は考えるだけだ。結論は既に出ている。

高町なのはは鬼柳京介のものにはならない。

八神はやてやリインフォースも同様だ。

既に彼は既婚者。一夫多妻など認められていない。

仮に一夫多妻が認められていれば、多少は変わっただろうか。それに、彼は妻であるフェイトを悲しませたくなかった。

なんとか皆が納得できる解決法が欲しい。

しかし、いくら頭を捻っても解決法など出て来ることは無かった。

「こんなんじゃ、満足でき……」

ソファの背もたれに寄りかかりながら、鬼柳はお馴染みの台詞を吐こうとした。

だが、彼の言葉が途中で止まる。鬼柳は思わず目を見開き、天井に視線を固定した。

鬼柳の言葉が途中で止まったのを不審に思ったのだろう。ヴィータから視線が飛んでくる。

だが、鬼柳はヴィータの視線を気にしてはいなかった。頭を何かでガツンと叩かれた様な、そんな衝撃を覚えていた。

『どうやったって、俺たちはサテライトから逃げる事は出来ない。
――――だったら、ここで満足するしかねえ！』

『このサテライトでドでかい事をやって、満足しようぜ！』

その言葉は自分がまだ、過ちを犯す前に仲間に告げた言葉。
限られた環境の下で妥協せざるを得ない状況の中、それでも現在の境遇を受け入れて自らを満足させるための言葉。

今の自分は、まるで昔の自分とそっくりではないか。鬼柳はふと、そう思う。
フェイトと言う妻が居る状態で、なのはたちと一緒にいることはできない。ならば、その境遇を受け入れよう。

そしてその境遇を受け入れて、自分を満足させるために。自分は新たな努力をする。
どうすれば良いのかは未だ不明。だが、やるべきことは見つかったと思う。

――――また、アイツらと満足してぇな

「……そう、だよな」

「？　鬼柳、どうしたんだよ」

「こんな状況、満足できねぇぜ！」

仲間とのギクシャクした関係。なのはやはやてが浮かべる悲しげな笑顔。
そんな状況、とてもではないが鬼柳は納得できない。また、以前の様に彼女たちと笑いあいたい。

ならば、それを出来る様に鬼柳は努力をする。また、以前の様に笑いあうために。
以前の様な関係に戻るのは難しいかもしれない。しかし、何もしないままと言うのは気に食わない。

対面のソファに座るヴィータは鬼柳の変化に戸惑いを隠せない様だが、その口元には笑みが浮かんでいる。
どうやら鬼柳の雰囲気が変わったのを感じ取った様だ。

「そうと決まればはやてやリインフォースと会わないとな。
悪いがヴィータ。フェイトのこと、頼んだぜ」

「何するつもりかは知らねーが、了解だ。
上手くやって来いよ、はやてを悲しませたら承知しねーかんな」

「あぁ」

そして鬼柳は決意を新たにすると、膝の上で眠っているフェイトをヴィータに預ける。
今やれることは、今やった方が良いに決まっている。時間が経てば経つほど、状況は悪化するばかりだ。

ひとまずはやてとリインフォース。
どちらから先に訊ねようかと内心で考えつつ、鬼柳はリビングを出るのだった。

※

「はふぅ……」

本日の雑務を終えたのか。クロノ・ハラオウンは小さく息を吐いた。
彼の手元には先ほどまで纏めていたであろう、幾つかの書類の姿がある。

書類仕事で凝り固まった肩を解しながら、クロノは今後の予定を考えた。
今日はこの後、特に予定と言った予定は入っていない。完全にプライベートな時間だ。

「デッキの調整でもしようかな。
オーディンがあの調子じゃ、今しばらくこのデッキを使うことに

なりそうだし」

しばし考えていたクロノだが、結局デッキの改造と言う結果に落ち着いた。
いくらオーディンに認められかけているとは言え、現在の主力デッキを蔑ろにするわけにいかない。

ひとまず管理局の購買で幾つかパックを購入していこうか。扉に向かいつつ予定を立てる。
しかし――――

「クゥロォノォォオオオオクゥウウウウンッッ！！」

「うわぁっ！？」

部屋の扉が開いた瞬間、金色の何かがクロノ目がけて迫ってきた。
しかもおどろおどろしい声のオマケ付き。思わずクロノも悲鳴を上げる。

しかし、それで金色の何かは止まってはくれない様だ。
金色の何かはクロノの元まで凄まじい早さで歩み寄ると、両手でグッと彼の両肩を掴む。

「どぉおおおおして僕が大会に参加しちゃいけないのさぁあああああっっ！！」

「ゆ、ユーノ、か？」

クロノの両肩を掴んだ金色の何かとは、どうやらユーノ・スクライアだった様だ。
久しい友人（知人？）の登場に、クロノは狼狽を隠せない。一体何故、こんな登場をしたのだろう。

「それに、大会……？」

相変わらず、ユーノはクロノの両肩を掴んだまま、魂の叫びの様な雄叫びをあげている。
クロノはそんなユーノを視界から外すと、先ほど彼が叫んだ言葉の内容を反芻した。

ユーノは先ほど、何故自分が大会に出てはいけないのか、とクロノに聞いてきた。
はて。一体どのような理由でユーノが大会に参加できないのだろうか。クロノは思わず疑問に思う。

そしてユーノの声を無視しつつ、ひとまず彼の参加した大会などでの結果を見ることにした。
空中にモニターを呼び出し、執務官権限でユーノのデュエリストライセンスを検索する。

ユーノは中々優秀な決闘者だったはずだ。そんな彼が、大会に参加できないなどあり得ないだろう。

しかし、そんなクロノの思いもユーノの参加した大会を洗えば洗うほど、打ち砕かれていく。
対戦相手は何も問題ない。至って普通の決闘者だ。大会の規定、ジャッジなども何も問題は無い。
だが、問題があるものが1つだけあった。それは、ユーノの使用するデッキ。

「ユーノ」

「うぅう……！　ど、どうしたんだよクロノ」

「参加出来なくて当たり前だろう！？
こんなデッキ使い続けていれば大会のブラックリストにだって載るさ！」

クロノはユーノに呼びかけると、先ほどまで自分が閲覧していたモニターを彼に見せる。
そこには以前撮影したのだろう、ユーノのバストアップの写真と使用デッキ、主な戦績などが記載されていた。
その中でも、特にクロノの視線を奪ったのが彼の主に使用するデッキ。
ユーノは主に3つのデッキを使用している。しかし、この3つのデッキが諸悪の根源だった。

「【図書館エクゾ】に【チェーンバーン】、果てには【ロックバー

ン】だ！

こんなの大会に参加できなくても仕方が無いだろう！」

ユーノが大会で主に使用する3つのデッキ。それらはほぼ1ターンで勝敗が決する極悪なものだった。

図書館エクゾ、チェーンバーン、そしてロックバーン。これらは大会で最も嫌われるデッキと言っても過言ではない。

そのうちの1つ、図書館エクゾは特に凶悪で、手札次第では先攻1ターン目で勝負がついてしまう。

それも勿論、ユーノの勝利と言う結果だ。大会のブラックリストに載るのも、半ば仕方が無いだろう。

ちなみにこの図書館エクゾとは、王立魔法図書館と言うモンスターを使い、エクゾディアを集めるデッキだ。

このデッキを構成する主なカードは魔法カード。その大量の魔法カードと王立魔法図書館を用い、大量にドローするデッキである。

大量ドロー事態ならば特に嫌われる要素はないのだが、デッキに投入されているエクゾディアが嫌われる原因だ。

エクゾディアとは通称であり、「封印されし――」と名のついた5枚のカードのことを指す。

これら5枚のカードを手札に集めることにより、無条件勝利が約束されるのだ。

しかも図書館エクゾの回し方は半ば決まっており、回すのに大分時間がかかってしまう。

そんな理由のせいで、図書館エクゾは大分嫌われてしまっているの

だ。
魔法カードがデッキのほとんどを占めるので事故率も高いのだが、嫌悪する決闘者は少なくない。

「だって仕方ないじゃないか！
≪王立魔法図書館≫を見たらどうしても使わなきゃいけない気になったんだよ！」

「それならせめて≪ＴＧハイパー・ライブラリアン≫にしておけ！
あっちは制限カードだが、【図書館エクゾ】よりは大分良心的だ！」

ユーノがドバドバと血の涙を流しながら、クロノに向かって叫ぶ。
そう。何故かは知らないが、彼が王立魔法図書館のカードを見たとき、無性に使わなければならない気になったのだ。

そして王立魔法図書館を用いて勝つデッキを模索し、気が付いたら図書館エクゾになっていた。
何故こうなったと当初は首を傾げたが、意外と回るのでユーノは好んでこのデッキを使っていた。

「うぅ……、もう大会関係者のゴミを見る様な視線が辛いんだよぅ……。
露骨に舌打ちなんかされるとボクのガラスのハートにヒビが入るんだよぅ……」

「普通の決闘者に対してだったら注意しないといけないが、君の場

合は自業自得だ」

部屋の隅で体育座りを行うユーノに視線を向けつつ、クロノは「はぁ」と嘆息する。
露骨な舌打ちは考えものだが、ユーノの使用するデッキを知ったせいだろう。同情しか浮かばない。

そう言えばユーノが参加した大会で、彼はどれほどの実績を上げているのだろうか。
気になったクロノはユーノから視線を外すと、先ほどまで出現させていたモニターに視線を向ける。

そして、そこに映し出されていた情報に、彼は思わず頭を抱えてしまった。

「大会に参加した数、約１０００。そのうち優勝が７５０以上。
うち図書館エクゾが半数以上……、無理だな、僕でも参加してほしくない」

ユーノが参加した大会は多いが、それでも優勝が半数以上と言うのは異常だった。
しかもユーノは決闘者になってからまだ４年ほどしか経っていない。
そんな彼がこれほどの優勝を果たしたのだ。

運もあるのだろうが、彼のデッキ構築のセンスもかなり良い様だ。
一体どれほどの決闘者が、彼との決闘で涙を飲んだのだろうか。

「そもそも、参加数と優勝数がおかしいだろう。
大会日程などスケジュールの変更を考えないといけないかな？」

次にクロノは、ユーノが優勝した大会数などについて意見を纏める。
４年で参加数１０００と言うことは、ほぼ毎日大会に参加していたことになる。

恐らく、ユーノは次元世界を渡り歩いて大会に参加していたのだろう。
規模が小さい大会に重点的に参加し、規模の大きな大会にちょくちょく現れる。

まるで獲物に群がるハイエナの様だ。
やはり大会の日数などの変更を考えないといけないらしい。

「はぁ、やることが山積みだよ。まったく」

これから考えなければならないことを脳内でシミュレートし、クロノは思わず深いため息を吐いた。

※

「……んぅ」

瞼の裏に暖かな光を感じ取り、ヴィヴィオの意識が覚醒する。
ゆっくりと開けられた彼女の視界に映り込むのは、見慣れぬ部屋の天井。

ここは何処なのだろうか。ぼんやりとした頭で思考しつつ、きょろきょろと周囲に視線を向ける。
自分が寝かせられているのは、何処の病院だろうか。清潔そうな真っ白なシーツがヴィヴィオの視界に止まる。

しかし、部屋の主は退出でもしているのか。部屋の中にヴィヴィオ以外の人間が居る様子はなかった。

「――――～～～～っ！」

と、部屋の中を観察し終えたヴィヴィオは、意識を失う前の記憶を思い返す。
自分に向けられた暖かな笑顔。そして温もり。それらを思い出し、彼女の心に焦燥感が生まれる。

また、自分の事を抱き締めて欲しい。あの暖かな温もりが欲しい。
自分の事を抱き締めてくれた女性――高町なのはのことを思い出し、

ヴィヴィオは心の中で願う。

けれど、すぐにヴィヴィオの思考に陰りが差した。その願いは叶うことは無いだろう。

何故ならば、自分はその身に古の邪神を宿した存在なのだから。そんな自分を、抱き締めてくれる存在などいない。

「……」

浮ついていた自分の心が沈んでいくのを、ヴィヴィオは感じる。

そうだ。結局自分の正体を知れば、あの女性はヴィヴィオを奇異の視線で見るのだろう。

自分の事を守ろうと必死に闘ってくれた女性。あんな人、自分は初めて出会った。

だが、そんな女性からの侮蔑の視線は耐えられない。正体が知られる前に、此処を出て行こう。

ヴィヴィオはひとまずこれからのことを決定すると、そそくさとベッドから抜け出し、旅支度をする。

幸い、意識を失うまでヴィヴィオが身に着けていた衣服はすぐ傍の椅子の上に、丁寧に折り畳まれていた。

元々、彼女の持ち物は少ない。イスの上にある衣服と、雨風をしのぐためのマントの様なボロ布。

お金などは持っておらず、森の中で採った木の実や果実で飢えを凌いでいた。

「これで……よしっと」

ヴィヴィオは自分の衣服を身に着けると、どこもおかしくないことを確認する。
そして残りの持ち物であるボロ布をその身に纏うと、部屋を出ようと扉に向かって歩き出した。

自分を助けてくれた人たちにお礼が出来ないのは心苦しい。
だが、自分の正体を知ればきっと彼女たちも自分が出て行くことを了承するだろう。否、追い出されると言った方が良いか。

先ほどまで友好的だった瞳が、侮蔑の色に変わる瞬間を、ヴィヴィオは幾度も見てきた。
もうあんな瞳はこりごりだ。どうして自分だけこんなに辛い目に会うのだろう。自分を護ってくれる存在に会いたい。

「（……でも、泣かないもん）」

けれど、そんな存在が居ないことは百も承知している。
誰が邪神を宿した自分を、暖かく迎え入れてくれようか。

内心で諦めに似た気持ちを覚えながら、ヴィヴィオは扉の前に立つ。
その際に助けてくれた2人の女性に対するお礼は忘れない。無人の部屋に向き直り、お礼を一つ。

「助けてくれて、ありがとう」

「うぅん、どう致しまして」

「――――!?」

無人のはずの部屋から、居るはずのない人間の声が聞こえた。
否、声はヴィヴィオの背後から聞こえる。慌ててヴィヴィオは振り返った。

するとそこには、自分を助けてくれた栗色の髪の少女――なのはの姿がある。
その後ろにはなのはと同様に自分の事を助けてくれようとしたもう1人の女性の姿も。

一体何故、彼女たちはこの場にいるのか。訳が分からず、ヴィヴィオは混乱した。
だが、すぐにハッと我に変えるとヴィヴィオは怯えた様子を見せる。
また、突き飛ばされるのだろうか。

デュエルギャングに追いかけられていたときは、第三者に見つけて欲しくて見つけて欲しくて仕方が無かった。
しかし、今は第三者の視線が怖い。自分に向けられる侮蔑の視線が、恐怖の視線が、怖くて怖くて仕方が無かった。

「ちゃんと、眠っておかないとダメだよ?
すごく身体が疲れてるって、お医者さんも言ってたよ」

「あ、でも……、わたし、大丈夫だから……」

「子供が無理をしないの。事情があるくらい、分かっているから」

なのはの言葉にオズオズと返答するが、もう1人の女性がそれを許さない。

たしかに今のヴィヴィオの身体は疲労などでボロボロだ。休めと言うのも無理は無い。

しかし、ヴィヴィオは素直に言うことを聞くことが出来ない。一刻も早く、逃げ出したかった。

※

目の前で完全に怯えた様子を見せる少女の様子に、なのはは激しい憤りを感じていた。

勿論、憤りを覚える相手は少女ではない。この少女を追いかけ、売り飛ばそうとしていたデュエルギャングのメンバーに対してだ。

彼らが違法な行為をしているとはプレシアから聞いていたが、人身

売買までとは想像もつかない。
だが、証拠は彼女の目の前にある。完全に怯えた様子を見せる少女、それを見て、なのはの心が紅蓮に燃える。

「（死んじゃえば良いのに……）」

なのはは心の中でポツリと呟き、次いで、先ほど自分が胸中で呟いた言葉に愕然とする。
自分は今、何を思った？　少女の心に深い傷を負わせたデュエルギャングに、何を思った？

唐突な自分の思考の変化に、なのはは驚きを隠せない。
何故、こんな考えが自分の頭に浮かぶのか。それが理解できない。

「（そう言えば、あの時も……？）」

そしてなのはが思い出すのは、デュエルギャングとのデュエルの際に行った会話。
そこでなのはは不意に、フェイトに人権は無いのではとあり得ない考えを持ってしまった。

たしかにフェイトには妬みの様な感情を持ってはいるが、彼女を物扱いするほどではない。
それに何より、彼女と過ごした４年の記憶は、なのはにとって掛け替えのないものだ。

そんな思い出を共有している少女から、無意識に人権を奪うと言うのはどう言う事だろう。
なのはは自分が考えたことなのに、自分が自分では無い様な感覚を覚える。

自分は一体、どうしてしまったのだろう。
自分が何か、良く分からないものに支配されていく様な。そんな感覚を、なのはは覚える。

「なのはさん」

と、自分の思考の変化に動揺しているなのはの元に、プレシアの声が掛かる。
恐らく、プレシアはなのはの変化に気が付いていないのだろう。いつもと変わらぬ声だ。

一瞬、プレシアに助けを求めてしまいそうになるが、彼女の視線がそれを許さなかった。
プレシアの視線の先にあるのは、不安に怯えている少女の姿。なのはもまた、不安に怯えるヴィヴィオを捉える。

「貴方が安心させてあげなさい」

「え？　で、でも……」

「大丈夫。貴方の温もりに安堵したのでしょう？
なら、なのはさんならあの子を安心させることが出来るわ」

プレシアの優しげな笑みに、なのはも僅かに心を落ち着けることが出来た。
そうだ。まずは目の前の少女を安心させることが先決。自分の思考の変化はその後で良い。

未だ自分の思考の変化に恐怖を覚えるが、それで折角助けた少女を怯えさせるのもいけない。
なのはは意を決し、自分の内に湧き出た恐怖を抑え込む。そして目の前で怯える少女に歩み寄った。

「ひぅっ……！」

「――――っ」

なのはが一歩歩み寄る度、少女が怯えた様に一歩後ずさる。
その瞳に浮かんでいるのは恐怖。そんな少女の様子に、なのはは再び怒りを覚える。

こんなにこの少女を傷つけて。こんなにこの少女を怯えさせて。こんなにこの少女を痛めつけて。
そんなことをしたデュエルギャングの面々を、なのはは許すことが出来ない。黒い思考がなのはの頭に生まれる。

逆にお前たちを痛めつけてやろうか。逆にお前たちを傷つけてやろうか。
なのはらしくない思考が、彼女の頭を支配する。だが、今はその思

考を頭から追い出す。

そしていつの間にか、部屋の隅まで歩き続けていた様だ。

壁に後ろへ逃げることを阻まれ、少女の瞳に特大の恐怖の色が浮かぶ。

なのははそんな少女を慰めようと、ギュッと彼女の身体を抱き締めた。

「ごめんね。大丈夫だよ。わたしたちは、貴方の味方だよ」

「――――っ」

なのはの言葉を聞き、抱き締めた少女の身体がビクリと震える。

次いで、不安に揺れる瞳がなのはの視線とぶつかった。

少女の瞳に浮かんでいるのは、先ほどまでと同じ恐怖の色。

だが、今は僅かに違う感情が浮かんでいた。

それは、迷子の子供が母親を求める様な、助けを求める色だ。

不安に怯える少女の瞳に、なのはは守らねばと使命感に似た何かを覚える。

助けてあげたい。自分に声にならない声で助けを求めているこの少女を。

そして守ってあげたい。今まで沢山傷ついたであろう、この少女のことを。

「もう、大丈夫だよ」

なのはは胸に覚えた保護欲の様なものを感じ取りながら、少女にそう言葉を掛けた。

そして、なのはに抱き締められた少女はその言葉に安堵したのだろうか。

少女はなのはの胸に顔を埋め、大声を上げて泣きだすのであった。

二十二話　「起こりつつある変化」（後書き）

次回は恐らく、当初予定していた「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防」です。
なので今しばしお待ちを。

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　前編」（前書き）

今回から、ようやくロットン編に入ります。
それと鬼柳さんがある目的のために動きだしました。

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　前編」

～次元世界　某所～

「なんだとぉっ！？」

とある次元世界の、廃墟の様な一角で。
数人の部下の男の報告を聞いたリーダー格の男――ロットンが怒声を上げた。

ロットンの怒りの声に怯えたのか。
彼に報告を行った数名の部下が一斉に身を竦ませる。

「ターゲットに逃げられた上に、逆に返り討ちだぁ！？
舐めた報告してんじゃねぇぞ？」

「め、滅相もないです！」

「あの2人の女が出て来なきゃ、捕まえられ「言い訳は聞きたくねぇ」ぼ、ボス！」

部下の必死の言い訳も、ロットンの前には無力だった。
ロットンは尚も言い募ろうとする部下を追い払うと、ドカリと適当な瓦礫の上に腰を下ろす。

まさかこんな簡単な仕事に躓くとは思いもしなかった。
ターゲットである少女を捕え、依頼のあった研究機関に売り払うだけの簡単な仕事のはずなのに。

「（だが、問題はターゲットを保護した2人組の女か……）」

足を組み、ロットンは思案する様に報告の内容を思い出した。
捕獲しようとしたターゲットを庇った謎の2人組の女。どちらも実力者の様だ。

しかも片方は次元世界の英雄の1人、ジャック・アトラスの魂のカードを使用したと言う。
これは中々不味い事態になってきた様だ。レッド・デーモンズ・ドラゴンを従えているならば、一筋縄ではいかないだろう。

「ちっ。だが、やることは一つか……。
おい、テメェら！　管理局のヤツらに保護される前に確保するぞ！」

「り、了解っす！」

しかし、ロットンのやることは変わらない。
早急にターゲットを手中に収め、以来のあった研究機関に売り払うのだ。

下手に時間を掛けてしまえば、時空管理局まで出てくるかもしれな

い。
今はまだ管理局の手から逃れられているが、いつまで続くかロットンにも分からなかった。

そしてロットンの号令と共に、集めていた残りのメンバーが慌てて駈け出して行く。
この場に居ないメンバーに指示を伝えに行ったのだろう。ロットンはそれを見送ると、ズボンのポケットからあるモノを取り出す。

それは、中に液体―酒―の入った瓶だった。それをロットンはグビッと一口煽って飲み干す。

「ついでに≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫も頂くか。
金の価値は勿論、戦力にもなるだろうしな」

酒を一口煽ったロットンは、景気良さ気に呟いた。
たしかにレッド・デーモンズ・ドラゴンを従えている者は強敵だろう。

だが、ロットンは自分の敵ではないと判断した。
当然だ。いくら強力なモンスターを並べ様が、ロットンの持つあるカードの前には無力なのだから。

ロットンはズボンのポケットに先ほど煽った酒の入った瓶を押し込むと、腕のデュエルディスクに視線を向ける。
そしてデュエルディスクから自身のデッキを外し、ある一枚のカードを取り出した。

そのカードこそが、ロットン率いるデュエルギャングが、今まで好きに暴れられたカードだ。
腹部に巨大なガトリング砲を埋め込んだ、亜人の様なモンスター。

「俺の≪ガトリング・オーガ≫の前に敵は居ねぇ」

※

「はぁ……」

自分に与えられた八神家の一室。
そこでリインフォースは憂鬱なため息を吐いていた。

彼女の視線の先には、数年前に想い人である男性から受け取った大切なカードがある。
テーブルの上に置かれたそのカードを見て、リインフォースは再度、憂鬱そうなため息を吐いた。

「（このカードを、手放したら楽になれるのだろうか……）」

心のうちでポツリと呟きながら、リインフォースはカード――闇の誘惑を手に取る。
闇属性モンスターを多く抱えるデッキでは多大な効果をもたらすカードだが、リインフォースはデッキに入れるのを躊躇っていた。

デッキに入れてデュエルした際、このカードをドローして自分は平静でいられるだろうか。
それを思うと、リインフォースは鬼柳から受け取ったカードをデッキに入れられずにいたのだった。

「まったく。ずるい奴だな、本当に……」

一旦カードから視線を外し、リインフォースは備え付けのベッドに腰を下ろした。
そして愚痴る相手は、自分の心を綺麗に掻っ攫って行ってしまった憎いあんちくしょう。

これだけ自分は想っているのに、相手は別の女性と既に結ばれてしまっている。
それがどうしようもなく悲しくて、リインフォースは三度、深いため息を吐いた。

と、そんなとき。

――コンコン

不意に、部屋の扉をノックする音が聞こえた。
一体誰が来たのだろうと、リインフォースは首を傾げる。

「誰だ？」

「俺だ。鬼柳　京介だ」

「っ！　鬼柳！」

扉の向こう側から聞こえた男の名前に、リインフォースが反応した。
慌てて部屋の扉を開ければ、そこには先ほどまで想い浮かべていた男性――鬼柳の姿が。

夢破れたとはいえ、想い人の姿を見ることが出来、リインフォースの機嫌も良くなる。
彼の傍らに妻である少女もいないので、機嫌はさらに上昇する。

しかし、良くなった機嫌はすぐさま急降下することとなった。
何故か。それは、鬼柳の傍らに立つ１人の少女が原因だったからだ。

「主はやて……」

「ん。お邪魔するで、リインフォース」

鬼柳とはやては一言リインフォースに断りを入れると、部屋の中へ入ってくる。
咄嗟にリインフォースは部屋の中が散らかっていないか確認するが、時すでに遅い。
そわそわと落ち着かない様子で、リインフォースは部屋の中に入ってきた鬼柳とはやてを見つめる。
一体、彼らは何の用で自分の元を訪れたのだろうか。目的がハッキリしないまま、リインフォースは視線を鬼柳に向ける。

「……それで鬼柳よ。一体、何の用だ？」

「あぁ。これを見てくれ」

リインフォースが鬼柳に訊ねると、彼はコートのポケットから分厚い冊子を取り出した。
その冊子はどうやら次元世界でのデュエルモンスターズの大会に関係する資料の様で、リインフォースにも見覚えがある。
そのうちの幾つかには黒い斜線が引かれており、どうやらそれらの資料は関係ない様だ。
一体、この資料がどうしたと言うのだろうか。はやてとリインフォースの不思議そうな視線が鬼柳に向かう。

「これは、次元世界の大会についてか？」

「あぁ」

「うわ、次元世界の大会ってこんなにあるんや……」

リインフォースの問いかけに、鬼柳は肯定の返事を返した。
どうやら鬼柳の用事とは、次元世界の大会についての事らしい。

だが、次元世界の大会が鬼柳や自分たちにどう影響を及ぼすと言うのだろう。
イマイチ実感の掴めないリインフォースは、訊ねる様な視線を鬼柳へと向ける。

そして次の瞬間、思いもよらない言葉が鬼柳の口から飛び出してきた。

「はやて、リインフォース！
俺たちと一緒に、この紙に書かれている次元世界の大会を制覇しようぜ」

「「……はぁ？」」

鬼柳が告げた自信満々なその言葉。
だが、意味が良く分からずはやてとリインフォースは呆気に取られる。

リインフォースは混乱する自分の頭をなんとか冷静に保ちながら、先ほどの言葉を頭の中で反芻した。
するとどうやら、鬼柳はリインフォースとはやて、その他の人物で

次元世界の大会を制覇しようと言うらしい。

ここまでなら、リインフォースも理解できた。次元世界の大会には参加したいと彼女も思っている。

だが、「この紙に書かれている次元世界の大会」を制覇しようと言うのはどう言う事だろう。

リインフォースは茫然とした様子のまま、鬼柳が先ほど出してきた資料に再び視線を落とす。

その資料は国語辞典ほどの幅を持っており、１０００ページや２００ページでは済まされないだろう。

これは何かの冗談ではないのか。鬼柳なりのジョークなのではないのか。

リインフォースは必死にその可能性を頭の中で考えつつ、鬼柳の顔を伺う。

しかし、返ってくるのは鬼柳の自信満々な顔。

その顔を見て、リインフォースは理解した。――――鬼柳は、本気だと。

「俺たちの目的は次元世界踏破だ。今にコイツを黒く塗り潰す」

「ちょ、ちょ、ちょ！　ちょっと待ってや鬼柳兄ちゃん！
ちょ、意味が分からないんやけど！」

「そ、そうだぞ鬼柳！　順序立てて話してくれ！」

自信満々な様子の鬼柳に、はやてとリインフォースが慌てて話を遮った。
もしもあのまま話を続けさせていれば、鬼柳と共に次元世界へ出かけていた事だろう。

一体何故、鬼柳がこの様なことを言い出したのか。
それを理解しないことには、彼の言う次元世界踏破に賛成できない。

「そもそも、フェイトちゃんは許可しとるんか？
明らかにフェイトちゃんの怒りの種になりそうやで？」

「っ。……そう、ですね」

はやてが鬼柳を宥めようとして告げたその言葉。それにリインフォースは僅かに顔を歪める。
そう。これは明らかにあの少女の怒りを買いそうな行為だ。これを彼女が許可しているとは思えない。

だが、鬼柳から返ってきた答えは予想外の答えだった。

「許可は取ってねぇ。
だが、フェイトも連れて行くから問題ないだろ」

「はぁ!?　え、ちょ!?　許可取ってないん!?
フェイトちゃん、めっちゃ怒らへん!?」

「怒られるのは覚悟の上だ」

「「っ！」」

鬼柳の真剣なその言葉に、思わずリインフォースとはやては息を呑んだ。
こうして真剣な表情を浮かべる鬼柳を見るのは久しぶりで、自然と彼女たちも真剣になる。

だが、それでいて2人の頬が赤くなるのは御愛嬌と言うものだろう。
夢破れたとはいえ、想い人の真剣な表情と言うものは、彼女たちを虜にする。

しかし、それに気が付いていない鬼柳は、何故か頬を赤らめている2人を見渡して説明を始める。
何故、自分が今回の件――次元世界踏破などと言う行為を思い付いたのかを。

「数年前、俺はフェイトを嫁にした。そのとき、お前たちの想いにも気がついた。
はやてとリインフォース。それになのはたちの気持ちは嬉しかったんだ。だが、俺はそれでもフェイトを嫁にした」

「……そやね。あぁ、もう。胸がもやもやするなぁ」

鬼柳の話に、はやては複雑な表情を浮かべて同意する。
自分の好意を知られているのはむず痒く感じるが、現実を目の当たりにさせられるのは辛い。

それは彼女の隣に立つリインフォースも同様なのか。
嬉しがれば良いのか。それとも悲しめば良いのか。リインフォースは複雑な表情を浮かべている。

「それで今まで、俺はフェイトとの生活を送ってきた。
けどよ、あることに気がついたんだ。今の生活と昔の生活で、違うことがあるんだ」

「？　それって次元世界の大会のこと？
それならまぁ、仕方ないと思うんやけど」

「いや、違う。確かに俺とフェイトの生活の中心に、次元世界の大会があることは否定しないさ」

はやての疑問に、鬼柳が首を横に振って答える。どうやら大会の事ではない様だ。
では、一体何なのだろうか。鬼柳が次に何を告げるのか分からず、2人は自ずと口数が少なくなる。

そんな2人に、鬼柳は「――――けどよ」と言葉を続けた。

「お前たちが、居ないんだ」

「え？」

「今の生活に、お前たちが居ないんだよ。

俺の今の世界はフェイトとプレシア。大会関係者で構成されてるんだ」

鬼柳が寂しそうな表情で、そうポツリと呟いた。
その表情を見ていたはやてとリインフォースは呆気に取られる。

たしかに鬼柳の言うとおり、はやてやリインフォースとの時間は無くなった。
その時間をフェイトとの生活に変えているのだから、当たり前と言えば当たり前である。

しかし、鬼柳はそれに納得していない様だ。
それは何故か。それは、彼がニ代目チームサティスファクションを結成した理由があるからだ。

「たしかに俺は今の生活には満足してるさ。
年下とは言え、可愛い嫁さんを貰った。以前とは違う、充実した生活を送ってる」

「な、ならそれでええんやないの？　無理に私らに合わせる必要は……」

「けどよ、それじゃダメなんだ。
俺とフェイトばっかりが満足してちゃ、いけないんだよ」

「何故だ？　お前の第一目的と言えば、自らを満足させることだろう？
それを達成した今、お前は何を望むのだ？」

「なのは、はやて、リインフォース。お前たちが満足する事だ」

鬼柳が顎の下で手を組みながら、はやてとリインフォースを見つめながらそう告げた。
その想いもよらない言葉に、はやてとリインフォースの2人は思わず息を呑む。

それは到底、成し得ることが出来ないことだからだ。
なのはやはやて、リインフォースたちが満足することなど。

現段階で彼女たちが真に満足することと言えば、鬼柳を自分のモノとすることだろう。
彼女たちとて女性。好きな男と一緒になりたいと言うのは、半ば当然の感情と言うものだ。

しかし、それは到底叶わぬ夢となっている。
なぜならば、既に彼は妻を迎えているからだ。

もしや一夫多妻を目指しているのかと思えば、それはそれで違うとはやては思う。
今の彼の顔に浮かんでいるのは、なのはとはやて。そしてリインフォースを満足させることだ。

その表情に、はやてたち3人を自分のモノとしようとする感情は見受けることが出来ない。
実際問題、鬼柳もはやてたち3人を自分のモノにしようとは考えていなかった。

彼の頭にあるのは別の事。
自分と結婚すること以外のことで、彼女たちを満足させることだ。

「俺は二代目チームサティスファクションを結成するとき、決めたんだよ。
なのはやはやて、リインフォース達を満足させてやりたいってな」

「……そやな。あのときは、そないなこと思ってたな」

「私は初耳なのですが」

鬼柳とはやてが以前の記憶を掘り返している中、一人省かれたリインフォースがジト目で見つめる。
件の二代目チームサティスファクションに関しては鬼柳から聞いていたが、結成目的に関しては聞いていなかった。

だが、それを踏まえて考えると今回の鬼柳の行動にも理解が追い付いてくる。
恐らく、鬼柳はこう考えているのだろう。なのはやはやてのことも、満足させてやりたいと。

そしてその上で、自分のことを忘れてくれれば良い。ふっ切ってくれれば良いと。
不器用な彼なりの行動に、リインフォースは口元が緩む。まったく、相変わらずだなと。

しかし、これが鬼柳の良いところなのだ。
そんな彼だからこそ、自分は彼を好きになったのだから。

「（それに何より、彼とまた一緒に居られる方が嬉しいか）」

リインフォースは鬼柳の気遣いに感謝しつつも、心の中で浅ましい欲望を覚える。
以前までは普通に彼の傍に居ることが出来たのだが、彼が結婚してからはそうはいかない。

フェイトと結婚してしまった彼に対し、複雑な感情を持つが故だろう。
そのせいでリインフォースやはやて、なのはたちと鬼柳との間に、溝の様な物が出来てしまった。

しかし、今回は彼が自ら溝を壊しに来てくれている。自分のせいではないのにだ。
それが思わず、リインフォースを笑顔にさせる。また、彼と一緒に行動が出来ると。

そうなると、リインフォースに鬼柳の提案を却下すると言う案は無くなる。
フェイトのジャマなどが入るだろうが、また以前の様な関係に戻れるのでは。

リインフォースはそう、期待した。

「私は構わないぞ。また、前の様にバカをやろうじゃないか」

「バカって……、そこまでバカなことしてたか？」

「少なくとも、古の邪神相手に喧嘩を売るヤツはバカだと思うが？」

「……」

リインフォースの挑発する様な言葉に、鬼柳は思わず黙り込む。
それは彼とて理解しているのだろう。古の邪神――地縛神に喧嘩を売るのがどれほど命知らずなことか。

だが、鬼柳は間違ったことはしていないと心の中で自負している。
そして喧嘩を売って、良かったとも思っていた。
何故なら、彼らが地縛神に喧嘩を売った結果、リインフォースが生き延びることが出来たのだ。

もしも喧嘩を売らずに逃げていれば、きっと彼女はここにはいなかった。
それどころか、海鳴の町そのものが消えて無くなっていたのかもしれないのだから。

「――だが、悪くは無いな」

「リインフォース？」

「また、以前の様なバカ騒ぎをやれると思うと、私は嬉しく思える。
お前の提案、是非受けさせてくれ」

そして、リインフォースは鬼柳の提案を了承する。
また、彼の傍に居られると言うのもあるが、また以前の様なやり取りが出来る。

それを思うと、リインフォースの心が幾分軽くなるのだ。
もう、自分は彼を手に入れることは出来ない。だが、傍に居ることは出来ると。

それに何より、自分は昔のあの雰囲気を気に入っていた。
誰が鬼柳の心を射止めるのか互いにけん制し合いながらも、楽しくやっていた日々を。

はやてはリインフォースの言葉にポカンとした様子だったが、すぐにリインフォースと同じ気持ちに至ったのだろう。
クスリと笑みを浮かべると、「それもそうやな」と彼女はリインフォースの言葉に同意を示した。

「そうか。なら、次元世界に乗り出すぜ」

「えぇで。またフェイトちゃんと一緒に大会に出れるの、楽しみやからな」

「あの頃の私のままではないことを、お前に教えてやらねばな」

「くくっ。なら、俺はフェイトに怒られてくることにする。
そうしたら、なのはにもこの事を言って、次元世界を踏破するぜ」

「了解や。あぁ、デッキ調整が楽しみやなぁ」

はやて、リインフォースの許可を取り、鬼柳が楽しげに笑みを浮かべた。
どうやら彼も彼で、ニ代目チームサティスファクションのメンバーで動くのを楽しみにしているらしい。

ならばこうしては居られないとばかりに、はやては自室にいの一番に駆け込む。
やるべきことは1つ。次元世界の猛者たちに負けない様に、デッキを調整しなければならない。

まだ見ぬ強敵とのデュエルに心を躍らせながら、彼女は自分のデッキに手を伸ばした。
しかし、その数時間後。はやてやリインフォースたちを、思いもよらない報告を襲うのだった。

※

「あぅう……」

頬を真っ赤に染めて、ヴィヴィオは照れた様な視線をなのはへと向

けていた。
今まで、こうして誰かの胸で泣くことが稀だったせいだろう。思い切り号泣してしまった。

だが、彼女が現実に帰還してみれば自分を待っているのはこれ以上ないほどの羞恥心。
多少なりともヴィヴィオも早熟だった様で、人の前で泣いたことを恥ずかしがっているらしい。

「どうしましょう、なのはさん。すっごく可愛いわ」

「あはは……、それには同意しますけれども」

一方。照れたヴィヴィオを見つめて鼻息を荒げているのはプレシアだ。
やはり幼い子供のコロコロと変わる表情は見ていて飽きないのか。
プレシアは絶えず悶えている。

そしてなのはと言えば、頬を赤く染めて照れた様子のヴィヴィオの頭を、よしよしと優しく撫でていた。
ヴィヴィオが落ち着いてからは、先ほどの様な急激な思考の変化は起こっていない。故に、今は正常に判断できる。

「（一体、さっきのは何だったんだろう？）」

ヴィヴィオの頭の感触を確かめながら、なのはは心の中で首を傾げ

た。
どうも、先ほどまでの自分は暴力的な思考に支配されていた様に思える。
考えること全てが物騒で、自分が別の何かに塗り替えられていく様な。そんな恐怖があった。
しかし、現在その変化は沈静化している。一体、何が原因で思考が暴力的になったのか。なのはには分からなかった。

「さて、ヴィヴィオちゃんを愛でるのはこれくらいにして」

「は、恥ずかしいよぉ……！」

「――――ごっふ」

気を取り直して場の雰囲気を整えようとしていたプレシアだが、それは呆気なく無駄に終わった。
ヴィヴィオがなのはに助けを求める様に縋り、うるうると潤んだ瞳でプレシアを見上げたのが原因だろう。

美少女＋涙目＋上目遣いと言う強力なコンボをその身に受け、プレシアは撃沈。
何処からか、デュエルディスクから発せられるライフが尽きたときの音声も聞こえてくる。

彼女の愛娘に勝るとも劣らない可愛さだろう。プレシアは息を吹き返す様子を見せない。
なのはは相変わらずなプレシアの様子に苦笑いを浮かべるが、いつ

までもここに居るつもりはないのか。

地面に倒れ伏し、鼻血をダクダクと垂れ流しているプレシアを起き上がらせる。

「危なかったわ。危うく魔法少女の契約をしてくるところだったわ」

「その契約はしない方が良いと思います……」

「おもいますー！」

鼻血をティッシュで拭いながら、プレシアが身体を起こした。

その際に良く分からないことを呟いていたが、さり気なくなのはがツッコミを入れる。

どう言う訳か、なのはの脳裏に白い怪しげな生物が浮かんだのだ。

その姿はフェレット形態のユーノと同じようなマスコットなのだが、本能が告げているのだ。

契約をしてはいけないと。故に、彼女はプレシアの独り言にさり気ないツッコミを入れる。

それとは別に、プレシアの場合は魔法熟女ではないのだろうかと言う疑問を思い浮かべながら。

そしてなのはがツッコミを入れている隣で、ヴィヴィオが勢いよく手を伸ばした。

どうやら先ほどの羞恥は回復した様で、今はなのはのツッコミに勢いよく同意している。

なのはの胸で号泣し、なのはとの壁を壊したせいだろうか。
幾分、明るい表情が見受けられた。

「はふぅ……。それでプレシアさん。
まずはヴィヴィオちゃんをクロノ君のところに連れて行きますか？」

「そうね。デュエルギャングなんて厄介なモノに追われているんだもの。
保護してくれると言うのなら、そちらを頼った方が良いわね」

先ほどまで緩んでいた空気を引き締めて、なのはがプレシアに訊ねた。
現状、彼女たちにとって一番良いのはクロノにヴィヴィオを保護してもらう事だろう。

大分長い付き合いになるせいか、クロノについては人格面や人柄などで安全だと判断出来る。
それはプレシアも同意なのか。特に反論することなく、なのはの提案に賛成した。

なにせヴィヴィオを追っているのは次元世界の一大勢力であるロットン率いるデュエルギャング。
リーダーであるロットンの強さのせいもあり、次元犯罪者の中ではかなり厄介な部類とされている。

だが、そんな彼女達の会話に納得できない者が約1名ほどいる。

「うにゅ……」

「っと。ヴィヴィオちゃん？」

その人物――ヴィヴィオは不安な表情を浮かべ、なのはの服の裾を掴んだ。

不意に服の裾を引っ張られ、なのはが不思議そうな表情を浮かべる。

だが、ヴィヴィオはなのはの服の裾を離そうとしない。逆に、さらに強く握りしめる始末だ。

一体どうしたのだろうとなのはは疑問に思うが、ヴィヴィオの瞳に浮かぶ不安の色でようやく理解する。

恐らく、ヴィヴィオは不安なのだろう。なのはやプレシアから引き離され、見知らぬ場所に預けられるのが。

今まで独りで様々な次元世界を放浪してきたことも、ヴィヴィオの不安を加速させている。

ようやく信頼できる人物と出会えたのに、こうもすぐに引き離されてはヴィヴィオも堪ったものではないだろう。

「あにゃ……、でも、どうしよう……」

なのははヴィヴィオを安心させるように抱き寄せると、うーんと難しい表情を浮かべた。

ヴィヴィオの安全を確保するため、時空管理局を頼りたい。だが、ヴィヴィオがそれを拒否している。

時空管理局は膨大な数の次元世界を観測している組織。その影響力は大きいだろう。

だが、その組織のバックアップを受けられないと言うのは中々厳しいものがある。

果たしてヴィヴィオを守り切ることが出来るのだろうか。

なのはは珍しく、不安を覚えた。

「（鬼柳さん、は……）」

ふと、なのはの脳裏に想い人であり、所属しているチームのリーダーの顔が浮かぶ。

いつも冷静な戦術でなのはたちを翻弄し、彼女たちに数多の敗北を与えてきたリーダー、鬼柳。

不意に、なのはの中に彼を頼ろうとする感情が生まれた。

ハンドレスコンボと言う強力なコンボを使い、幾つもの大会で勝利を収めた彼なら、きっと守ってくれると。

だが、不意になのはの脳裏に鬼柳とは別の人物――フェイトの顔が思い浮かぶ。

するとどうだろう。なのはの胸の中を、彼女の心から生まれたどす黒い感情が満たした。

きっと、フェイトはヴィヴィオを保護することを快く思わないだろ

う。鬼柳との時間が潰れるから当然だ。
きっと、鬼柳はフェイトの言うことを聞くだろう。フェイトには結構甘いところがある彼の事だ。なんだかんだで聞き入れるに違いない。

普段の彼らの様子を知るなのはだったら、思い浮かばない様な悪い考えが浮かんでいく。
鬼柳達はダメだ。ヴィヴィオは自分が、自分の手で守りきらなければならない。なのははそう、心に誓う。

「っ！？　あ……」

そして一方。急激に雰囲気が変わったなのはに疑問を抱いたヴィヴィオが、なのはの顔を覗き込んだ。
するとその瞬間、ヴィヴィオは思わず息を呑んだ。なのはの瞳に浮かんでいるもの、それは何処までも続く奈落の闇。

その闇の中で、轟々と燃える黒い炎の様な物が見えた。瞬間、ヴィヴィオは理解する。
魅入られてしまったと。ヴィヴィオの心の内に眠る、古の邪神に魅入られてしまったんだと。

ヴィヴィオは咄嗟に、ギュッとなのはの腕を掴んだ。何処へも離れて行かぬように、強く握りしめる。
それでどうにかなる訳ではないが、なのはの雰囲気が緩んだことだけはヴィヴィオにも理解することが出来た。

なのははニッと優しげな笑みを浮かべ、ヴィヴィオを安心させるよ

うにヴィヴィオの頭を撫でている。
そんななのはの様子を伺いながら、ヴィヴィオは心の中で決心した。
早く、自分はなのはの元から離れようと。

このまま彼女と共に居れば、きっと彼女の心は闇へと堕ちてしまう。
そうなれば、きっと助けることはできないだろう。
だが、それをヴィヴィオは許しはしない。生まれ故郷を出てから、
初めて優しくしてくれた人。

そんな彼女を、自分の都合で闇へ落として良い理由など、何処にも
なかった。
故に、ヴィヴィオはもう一人の女性――プレシアへと話しかける。

なのはの心を護るため。優しくしてくれた、優しい人を護るために。

――――私を、そのクロノと言う人のところへ連れて行って、と。

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　前編」（後書き）

次回はロットンと遭遇するかもです。
それと、二十三話はかなり長くなる予定。

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　後編」（前書き）

今回はちょっと話の展開が急すぎたかもしれません。
ただ、あまり長くやるのもあれなのでどうしても展開が早くなるかもしれませんが。

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　後編」

～ミッドチルダ　某所～

「ふぅむ……」

ミッドチルダのメインストリートを歩きながら、プレシアは顎に手を当てた。
現在、彼女の顔には疑問の色が浮かんでいる。チラリとプレシアは後ろを振り返った。

そして視界に入ってくるのは、何処か暗い雰囲気を醸し出しているなのはとヴィヴィオ。
どちらも醸し出している雰囲気は同じなのだが、感情のベクトルがそれぞれ別の方へ向いている様だ。

ヴィヴィオと手を繋いでいるなのはと言えば、ブツブツと何事か呟きながら視線を地面に向けている。
時折、彼女の口から「どうしよう」や「ヴィヴィオを護らなきゃ」などの言葉が漏れ出ている。

どうやらなのはは、ヴィヴィオを護るための方法を思案しているらしい。
しかし、なのはに手を引かれているヴィヴィオはどうやら違う考えを持っていた様だ。

そわそわと周囲に視線を向けながら、しきりになのはの様子を伺っ

ている。
構ってくれて嬉しいのかと思いきや、どうやらそう言う訳ではない様だ。

ならば一体、ヴィヴィオはなのはの何を観察しているのだろう。
プレシアは2人の前を歩きつつ、後ろの様子を横目で観察している。

と、微妙な歩幅を維持しながらプレシアが歩いていると、とある建物が視界に入った。
その建物を見たプレシアはふと、数年ほど前から頼んでいたあるモノについて思い出す。

思わず、彼女は声を上げた。

「あ、そう言えば」

「……っ、どうしたんですか、プレシアさん」

プレシアの微妙にわざとらしい声に遅れること僅か、なのはが反応を返した。
どうやら現在、自分たちが何処にいるのか把握していなかった様だ。

もしも自分が迷っていたらどうするつもりだったのだろうと内心で思いつつも。
プレシアは視線の先にそびえるとある1つのビルを指差す。

「ちょっと、寄って行っても良いかしら？

預けていたモノを引き取らないといけないし」

「？　預けていたモノ、ですか？
別に構いませんけれど……」

なのはは不思議そうな表情を浮かべているが、何処か嬉しそうに微笑んでいる。
どうやら、ヴィヴィオと離れることにならずに済んで、ホッとしている様だった。

一方、肝心のヴィヴィオと言えば、相変わらず表情が強張っている。
プレシアはそんなヴィヴィオの表情に疑問を抱くが、すぐにヴィヴィオの表情の変化に当たりを付けた。

「大丈夫よ。会うのは1人だけだから」

「えぅ！？　あ、う、うん……」

プレシアはヴィヴィオを安堵させるように声を掛けるのだが、効果は逆効果だった様だ。
ヴィヴィオはプレシアに言葉を掛けられ、これでもかと身体を縮こまらせている。

てっきり知らない人に会うのが怖いとばかり思っていたのだが、どうやら違うようだ。
ならば一体、何に怯えていると言うのだろう。プレシアはそれが分からず、思わず首を傾げる。

「プレシアさん、ヴィヴィオちゃんが怯えてますよ。
早いところ、預けていたモノを引き取りに行きましょう？」

「え？　あ、あぁ。そうね。こっちよ」

と、プレシアが身体を縮こまらせているヴィヴィオの様子に首を傾げていると。
プレシアとヴィヴィオの間に割り込むように、なのはが2人の間に割って入った。

口調事態は普段と同じなのだが、彼女から発せられる雰囲気がいつもとは違う。
何処か刺々しい、ピリピリとした敵意の様なものを感じるのだ。これは一体、どう言う事だろう。

依然としてこちらに敵意を飛ばしてくるなのはに注意を払いつつ、プレシアは2人を伴って歩き出す。
と言っても、歩いて数分で到着する距離だ。ほどなくして、プレシアたち御一行は目的のビルへと到着する。

「「スカリエッティ工房」……？」

「えぇ。Dホイールの大手メーカー、ジェイル・スカリエッティの経営する会社よ」

プレシアが目指していたのは、ミッドチルダでも有数の大企業――スカリエッティ工房である。
この会社はプレシアと交流のあるとある科学者――ジェイル・スカリエッティが経営するDホイールの会社だ。

プレシアは数年前、このスカリエッティ工房になのはとはやて専用のDホイールを注文していたのである。
特に制作日数などに指定はしなかったが、出来る限り高品質のDホイールを注文していた。

そのせいで完成が大幅に遅れてしまったが、スカリエッティからしても納得のいくモノが出来たらしい。
今回、その完成した2人のDホイールを受け取るために、プレシアはこの会社に立ち寄ったのだ。

「なのはさんやはやてさんのDホイールも完成したしね。
引き取って、ライセンスを取れば自由に乗って構わないわよ」

「ライセンス……、何と言うか、ありがとうございます」

プレシアの言葉に恐縮した様に、なのはがペコリと頭を下げた。
Dホイールの相場が分からないなのはだが、相当高いことは理解できる。

しかし、特に代金を請求することなくポンと出してくれる辺り、プレシアには頭が上がらない様だ。
プレシアはそんななのはの様子に「気にしないで」と笑みを浮かべながら告げると、1人会社の中へ入っていく。

どうやら、配達サービスを使って地球に送るらしい。
さすがにDホイールを持ったまま、転送魔法は使えないからだ。

「……はふぅ」

そしてプレシアがDホイールの手続きのため、一旦目的地であるビルへと入っていく。
すると、その場を何とも言えない様な沈黙が支配した。

なのはとヴィヴィオ。
2人ともお互いの様子を伺っているが、声を掛ける素振りは無い。
なのははチラチラとヴィヴィオの様子を観察しつつ、どうやってヴィヴィオを地球まで連れて行くか頭の中で考え。
一方のヴィヴィオは、目的地である時空管理局へ早く着かないかと、内心でヤキモキしながらなのはの様子を伺っていた。

「――――うん？」

「？」

と、プレシアの帰りをその場で待っていると。
不意になのはが疑問の声を上げ、視線をキョロキョロと動かした。

一体どうしたのだろう。ヴィヴィオは疑問に感じ、なのはの視線を

追いかける。
するとヴィヴィオの視線の先に、数人の男性が集まっているのが見て取れた。

その何れの男性も、肩や頭に赤いスカーフを巻いており、西部劇に出てくる様なシャツとズボン。
ヴィヴィオは視界に入った数人の男たちを見て、ビクリと身体を大きく震わせた。

見覚えがある。あの赤いスカーフに特徴的な服装。
なのはとプレシアに保護されるまで追いかけられていたデュエルギャングだ。

「――――っ！！」

ヴィヴィオはその男たちを認めると、半ば反射的にその場を駈け出していた。
なのはが咄嗟に「ヴィヴィオ！？」とヴィヴィオの名を叫ぶが、構っている暇は無い。

なのはとヴィヴィオが捉えていたデュエルギャングの男たちも、ヴィヴィオが動いたのを確認したのか。
「居たぞ！」「追えっ！」などの声を上げながら、その場から駈け出したヴィヴィオの後を追いかけてくる。

街中の通行人を必死に避けながら、ヴィヴィオは当初の目的地――時空管理局を目指す。
幸い、この場所から時空管理局まではそう離れていない。先回りさ

れない限り、逃げ切れる可能性はあるだろう。
それに何より

「ヴィヴィオ！」

後ろから、突然走り出した自分を追いかけてくる少女――なのはを巻き込む訳に行かない。
少しの間だけとはいえ、自分を甘えさせてくれた大切な人。そんな彼女を、自分の都合で巻き込む訳に行かない。

それに何より、自分はもう彼女の傍に居てはいけないのだ。
これ以上彼女の傍に居続けると、きっとなのはに良くないことが起こる。

そんなことはイヤだった。彼女には暖かい、日だまりの中が似合うのに。
わざわざ自分を追いかけて、地獄の底までついてくる必要など無い。

だから、なのはとは此処でお別れだ。
ヴィヴィオはなのはを振り切る様に頭を振ると、全力でその場を駆けだした。

※

「うっひゃぁ。痛そうやなぁ」

「凄まじいまでの、抗議の痕ですね」

フェイトの説得に向かってから1時間後の八神家のリビング。
そこで鬼柳は、顔中に出来た引っかき傷をはやてとリインフォースに治療されていた。

ちなみにこの引っかき傷を作った張本人は、自室でプンスカと頬を膨らませている。
どうやら自分に断りなく、はやてやリインフォースを同行させることに対して怒っている様だ。

だが、ずっとこのままと言う訳にもいかない鬼柳にとって、今回の事件は避けて通れない。
故に多少のフェイトの怒りは承知の上で、今回の件――次元世界踏破をフェイトに提案したのだ。

「ちちち……、とは言え、フェイトの了解も取れたしな。
これで後はなのはを誘うだけだ。早いとこ傷を治さねぇとな」

「あ、フェイトちゃん許してくれたんや」

「あぁ。デートの回数を増やして、はやてやリインフォースと2人きりにならないで。
そんで後は、夜の方を頑張れば良いらしい。身体が持つか、甚だ疑問だがな」

引っかき傷に消毒液が沁みるのか。鬼柳が情けない声を上げる。
しかし、引っかき傷を作った甲斐があったのか。なんとかフェイトの許可は取れた。

だが、少なくない代償を支払ったのは事実。具体的にはデートの回数を増やすこと。
なのはやはやて、リインフォースなどの鬼柳に好意を持つ女性と2人きりにならないこと。

そして最後は夜の夫婦生活を頑張ることだ。これら3つの条件が、鬼柳に課せられた。
傍から見ればかなり大変そうな条件だが、1つ目と2つ目に関しては、鬼柳はさほど心配していない。

元々、次元世界の大会に出ずっぱりのせいで、フェイトとあまりデート出来なくなっていたのだ。
今回の提案で、再びフェイトとデート出来るならば儲けもの。彼も彼なりに、フェイトとのデートを楽しんでいる。

そして2つ目の提案は、仕方が無いモノと鬼柳は考えている。
元々、独占欲の強いフェイトのことだ。このくらいの条件は見えている。

それに加え、なのはやはやてが依然として鬼柳に好意を持っている

のが原因の1つとなっていた。
これがアルフやプレシアだったならば、フェイトも多少は安心しただろう。だが、この3人は違う。

隙あらば鬼柳との距離を縮めてくるのを、フェイトは理解していたのだろう。
故に鬼柳を取られぬよう、あらかじめ予防線を張っておいたに違いない。

「（ただまぁ、問題は3つ目なんだがな……）」

適度に引っかき傷に消毒液を吹きかけ終えると、鬼柳は残る3つ目の条件に思いを馳せる。
3つ目、夜の夫婦生活とは鬼柳の考えている通り、性行為のことだ。
思わず鬼柳は嘆息する。

やはり次元世界の大会などで、昼も夜もフェイトに構えていなかったのが堪えているのだろうか。
ときおりフェイトがその様なモーションを掛けてくるが、忙しさにかまけてあまり相手をしてやれていなかった。

フェイトもフェイトでそろそろ我慢できなくなってきたと言うところか。
それに鬼柳も鬼柳で、最近は我慢が効かなくなっている。フェイトと事に及ぶのも悪くは無い。

これからの夜の夫婦生活を想像し、鬼柳の頬に僅かながら赤みが差す。

「んん？　鬼柳兄ちゃん、頬っぺた赤くなってるで？
もしかして興奮しとるんか？」

「んな！？　ば、バカなこと言ってるんじゃねぇ！」

「なに、そうなのか？
ふふ、やはり鬼柳も私の身体に欲情するのだな」

鬼柳が頬を赤らめているのに目ざとく気がついたはやてが、にやにやと笑い掛ける。
その言葉に咄嗟に反応すると、リインフォースもはやてと同じようにニヤニヤと笑いだした。

どうやら、普段構ってもらえなかった意趣返しの意味も込めているらしい。
何処か面白がっている様な笑みが、その証だろう。

「ま、まぁたしかにリインフォースの身体は魅力的だが……」

「！？」

しかしその笑みも、鬼柳の言葉ですぐに消え去ることとなる。
鬼柳は頬をポリポリと掻きながら、自分が素直に思ったことを口にした。

事実、リインフォースの身体はスタイルが良く、出るところも出て引っ込むところは引っ込んでいる。
正常な男性ならば、魅力的だと感じるスタイルだろう。鬼柳もその例に漏れず、リインフォースを魅力的に感じている。

しかし、戸惑ったのはその言葉を口にしたリインフォースだった。
まさかこうもストレートな返事が返ってくるとは想定していなかったのだろう。

頬をカァッと真っ赤に染め、あぅあぅと期待を込めた視線を鬼柳へと向けている。

「きょーすけ！！」

「！　フェイト、どうしたんだ？」

と、何処かもどかしげな雰囲気がリビングに漂っていると。
不意にドタドタと激しい足音を響かせながら、リビングに少女――フェイトが駆け込んできた。

突然の少女の乱入に、リインフォースやはやては「ちっ」と舌打ち。
片や彼女の夫である鬼柳と言えば、首を傾げながら突如現れた少女に声を掛ける。

「なんだか京介に悪い虫が付きそうだったからやってきた」

「悪い虫って……、それは俺が心配しなきゃいけないんだけどな」

フェイトはトタトタと鬼柳の元まで歩み寄ると、彼の腕を掴んで抱き寄せる。
彼は自分のモノだと、リインフォースやはやてに見せつける様に。
そんなフェイトの様子にはやてとリインフォースが不機嫌になるが、フェイトは気にしない。
それどころか、鬼柳がボソリと呟いた言葉に頭をコテンと傾げる始末だ。

「？　どうして京介が心配するの？」

「どうしてって、そりゃあ。フェイトは可愛いからな。
フェイトに変な虫が付かない様に俺が気を張らなきゃいけないからな」

「！」

フェイトが訊ね、返ってきた答えに頬を赤らめながらも、満足そうな顔をする。
鬼柳としても、フェイトに変な虫が付かない様に気を張らなければならないのは事実なのだ。

せっかく出来た自分の嫁。独占したいと思うことは、どこもおかしくはないだろう。
そしてフェイトは鬼柳の言葉に満足したのか。「にへへ」と笑みを浮かべながら鬼柳の隣に腰を下ろす。

そして甘える様に、鬼柳の肩に頭を預けた。
鬼柳も鬼柳で、そんなフェイトを受け入れている。

唐突に出来あがった桃色の空間に、はやてとリインフォースはゲンナリした。
夫婦仲が良いのは大変よろしいのだが、惚気話などは他でやって欲しいと言うのが彼女たちの思いである。

――ＰｉＰｉＰｉ

「あ、通信だ。ちょっとごめんね」

と、八神家のリビングに出来あがった桃色の空間を壊すかの様に、広間に無機質な音声が響く。
発生源は、フェイトの目前に現れた一つのウィンドウ。大方、次元世界からの通信だろう。

そう言えばそろそろ休暇も終わる頃だったか。鬼柳はソファに座り直しながら思う。
せめてフェイトを何処か楽しい場所へ連れて行ってやりたかったが、それもどうなるか分からない。

また、フェイトに寂しい思いをさせるのか。そう鬼柳が心の内で悲しんでいると。
不意に彼の隣に腰掛けるフェイトが「えぇっ！？」と素っ頓狂な声を上げた。

「フェイト、どうしたんだ？」

「えと……、あのね？
なのはがヴィヴィオって子と迷子になっちゃったんだって！」

「？　ヴィヴィオ……？」

フェイトの動揺した声に誘われたのか。
先ほどまで蚊帳の外だったはやてやリインフォースも集まる。

そして彼女たちが集まるや否や、フェイトが事情を説明した。
どうやら先ほどの通信は、現在ミッドチルダに居るプレシアからのものらしい。

プレシアの簡単な説明によると、ヴィヴィオと言う少女を管理局へ連れて行く途中。
ふと目を離した隙になのはと件のヴィヴィオと言う少女が居なくなってしまった様なのだ。

なのはが居るからと油断していたのだろう。
ウィンドウに映るプレシアの顔には、後悔の色が浮かんでいる。

『それに状況はもっと悪いわ。デュエルギャングが絡んできているの』

「っ！　デュエルギャングだと！？」

『えぇ。彼らの狙いはヴィヴィオよ』

プレシアの説明の中に、鬼柳は目を離せないものを覚えた。
それはデュエルギャングと言う単語。彼にとって、忘れようとも忘れられない言葉である。

そして鬼柳がデュエルギャングと言う単語に動揺している横で、事情の説明が勧められる。
するとどうやら、ヴィヴィオは特殊なレアスキルを持っているらしい。それをデュエルギャングに目を付けられた様だ。

てっきり遊星達とチームを組んで居た際、デュエルギャングは全て潰したと思っていたのだが。
どうやら次元世界のあちこちにも、鬼柳の様な考えのものは居たらしい。鬼柳は思わず臍を噛む。

まるで自分の不始末を見せつけられたかの様だ。
どうしようもない不甲斐なさが、鬼柳の胸に湧き立つ。

「分かった。俺らも今からそっちに向かう」

『えぇ。ごめんなさい、巻き込んでしまって』

「気にするな。プレシア達の厄介事は、俺らの厄介事だからな」

そして鬼柳が答えると、プレシアは安堵したようにほほ笑んだ。
鬼柳もまた、プレシアを安堵させるようにほほ笑むと、空中に浮か

んでいるウィンドウを消滅させる。

やるべきことは決まった。即座にミッドチルダへ向かい、なのはとヴィヴィオと言う少女を確保する事だ。

現地では時空管理局にも動いてもらう様だが、どのくらい時間がかかるかは未知数だ。早く動いた方が良いだろう。

「フェイト。はやて――っと」

「えへん、もう準備完了だよ」

「私もやで」

「私の準備も、既に完了した」

鬼柳がフェイト達に呼び掛けようとすると、威勢の良い声が聞こえてくる。

声の発生源は勿論、先ほどまで鬼柳と同じウィンドウを見つめていた3人の女性たち。

彼女たちはそれぞれ腕にデュエルディスクを展開し、いつでも行動出来る体勢を整えていた。

自分が告げるよりも早くに準備を終えられ、鬼柳は僅かに呆気に取られる。だが、すぐにその顔に笑みを浮かべた。

てっきりフェイト辺りがごねるかと思ったが、それも無さそうで安心だ。

これは今回の事件が収束した後、フェイトにご褒美の一つでも上げ

ねばなるまい。

「そうか。なら、チームサティスファクション、行くぜ！」

「「「おー！」」」

鬼柳の号令に、フェイト、はやて、リインフォースの声が続いた。

※

「はぁ、はぁ、はぁ……っ！」

荒い息を吐きながら、ヴィヴィオは重くなった足を引きずる様に駆けていた。

何十分も走りまわったせいだろう。重くなった身体を、路地裏の適当な物陰に隠す。

そして周囲の様子を観察し、ヴィヴィオはようやく安堵した様に息を吐き出した。

今まで何度も追われているとは言え、依然として追いかけられるのは精神衛生上よろしくない。

すでに場所を表通りから裏路地へと変え、ヴィヴィオは疲労困憊の様子だ。

「――――くぅ！　はぁ、はぁ、はぁ……！」

荒い息を必死に整えながら、ヴィヴィオはいかにこの場を切り抜けるか考える。

なんとかデュエルギャングの目が届かぬ場所まで逃げ切れれば良いが、それは希望的すぎるか。

それにいくら頭を回転させようとも、ヴィヴィオの年齢は未だ5～7歳ほど。

経験が圧倒的に足りていない今、この現状を打破できる方法をヴィヴィオは考えつかなかった。

「ヴィヴィオ」

「――――ッ！？」

と、必死に息を整えていたヴィヴィオに、不意に声が降りかかる。

もしやデュエルギャングに発見されたのか。心臓を跳ね上げながら、ヴィヴィオは慌てて後ろを振り向いた。

だが、そこにいた人物の顔を確認し、ヴィヴィオは思わずホッと安堵の息を漏らしてしまう。
ヴィヴィオの視線の先に居た人物。それは先ほど、ヴィヴィオが振り切ったと思った少女――なのはだからだ。

「はふぅ、はふぅ、だ、大丈夫？」

「あ、う、うん。大丈夫」

「そっか。良かった」

なのはもヴィヴィオを探すためにあちこち駆けずり回ったのか。
彼女は肩で息をしながら、ヴィヴィオに怪我が無いかを確かめている。

ヴィヴィオはそんななのはの気遣いを嬉しいと感じると同時、巻き込んでしまったことへの後悔を感じていた。
せっかく、なのはと離れるチャンスだったのに。自分の足が遅いから。自分の隠れる技術が下手だから。

また、なのはに見つかってしまった。それにヴィヴィオは寂しさを覚える。
どうして自分は、大好きな彼女から逃げなければいけないのだろう。
逃げたくないのに、逃げなければならない。

そんなもどかしい矛盾が、ヴィヴィオの頭を支配する。
しかし事態は、一刻の猶予も与えてはくれない。

「居たぞ、囲め！」

「道を全部塞げ！　今度こそ捕えるんだ！」

「――――っ！」

どうやら、現在隠れている場所も見つかってしまった様だ。
こちらを包囲する様に、大声でデュエルギャングの数名が大声を出している。

咄嗟にヴィヴィオはその場を駈け出そうとしたが、周囲の様子を確認し、思わず足を止めた。
ヴィヴィオが捉えた視線の先。そこには、物陰からこちらの様子を伺うデュエルギャングの姿が見て取れたからだ。

どうやら、すでに自分たちは袋のネズミと言う状態らしい。
完全に包囲され、八方ふさがりと言う状況下。

「くっ、こうなったらデュエルで強行突破するしか――――」

圧倒的不利を悟ったのか。なのはが腕にデュエルディスクを装着させる。
白銀に輝くデュエルディスクは美しく、彼女の気高さを表しているかの様だ。

デュエルディスクを展開したなのはを見て、ヴィヴィオは思わず安

堵する。
なのはのデュエルの腕は、すでに確認済みだ。生半可なことでは、負けることはまずないだろう。
そして次の瞬間には、ホッと安堵した自分をヴィヴィオは責めた。これ以上、なのはと共に居続ける訳に行かない。これ以上は、どんな悪影響が出るか分からないのだ。

「――おぉっと、やめときな嬢ちゃん。返り討ちが関の山だぜ」

「っ、誰!?」

そしてなのはの言葉を遮る様に、聞き慣れぬ男の声がその場に響き渡る。
その声を聞いた者の反応は極端で、今までなのはたちを囲んでいたデュエルギャングたちには安堵の色が広がり。

片や初めて聞く男の声に、なのはとヴィヴィオは警戒心を最大まで上げて警戒した。
そして2人の視線の先、とある路地から、その男は姿を現す。

まず視界に入るのは白いシャツと薄いくたびれた茶色のズボン。
腰には拳銃か。はたまた拳銃を模したデュエルディスクが下げられ、さながらカウボーイの様なファッションになっている。

その男は浅黒い肌に肩先まで伸びた黒い髪をポニーテールで纏めている。
なのはたちを取り囲んでいる男たちの様子から察するに、そうとう

高い地位にいる相手だろう。
油断はできない。

「貴方は……」

「俺の名はロットン。
悪いが嬢ちゃん、そこのガキと≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫のカードを置いて消えてくれねぇか？
そうすりゃ嬢ちゃんは見逃しても良いんだけどよ」

「誰が……ッ！」

突如現れた男――ロットンの小馬鹿にする様な言葉に、なのはは思わず激昂する。
冗談ではない。ヴィヴィオをこんな得体の知れない相手に預けるなど、とてもではないが出来ない。

それになのはは誓ったのだ。ヴィヴィオを護ると。
どんな手段を用いても、ヴィヴィオの事を護ってみせると。

一方、敵意剥き出しなのはの様子に、ロットンは小さく肩を竦めた。
半ば予想どおりな返答だ。否、そうではくては面白くないのだが。

「なら、コイツで決めようじゃねぇか！」

「！　それは……デュエルディスク！」

そしてロットンはおもむろに、腰に下げていたホルスターから一丁の銃を取り出す。
否、それは銃などではない。銃を精巧に模して造られた可変型のデュエルディスクである。

「お前が勝てば、お前ら2人とも見逃してやるよ。
ただし俺が勝った場合、そのガキと≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫のカードは頂く」

「っ！」

「さぁ、どうする!?
賭けに乗るか？　それとも降りるか!?」

ロットンは腕にデュエルディスクを展開させながら、なのはに迫った。
別に乗るなら乗るで面白い。どれほど粘るか、興味があるのだから。

だが、逃げると言う選択肢はいただけない。
せっかくここまでお膳立てして、逃げる様なへっぴリ腰では話にならないのだから。

一方、ロットンに勝負を仕掛けられたなのはは頭の中で勝率を弾きだすのに必死だ。
相手は未知の相手。どんなカードを使うのか知らないが、この余裕

は強者の余裕故なのか。

だが、どちらにしろ勝負を受けるほかない様だ。
すでに周囲をデュエルギャングのメンバーに囲まれており、逃げることなど出来ない。

ならば取れる選択肢は一つ。
ロットンとのデュエルに勝利し、ヴィヴィオを連れて逃げること。

「分かりました。デュエルしましょう」

「はっ、それでこそ俺が出てきた甲斐があるってもんだ。
――おい、てめぇら！　余計な手出しはするんじゃねぇぞ！　コイツは俺の獲物だ！」

なのはの了承の声にロットンは満足げな表情を浮かべると、響き渡る様な大声で叫んだ。
それと同時、なのはたちを囲んでいたデュエルギャングのメンバーが、２人から距離を取る。

ロットンの勝負に余計な手出しは無用と言う言葉は本当だった様だ。
どうやらこれはロットンなりの、誠意の見せ方なのかもしれない。
なのはは思わず、目の前の男を見直す。

だが、ヴィヴィオを違法な研究機関に売り飛ばすなど到底許されぬことである。
やるからには、全力で行く。なのはとロットンは腕にデュエルディスクを展開すると、お互いに睨みあった。

そして、決闘開始の宣言が放たれる――――！

「「決闘（デュエル）！」」

二十三話　「ロットン出撃！　ミッドチルダでの攻防　後編」（後書き）

次回予告

とうとう始まったロットンとのデュエル。
なのはは先攻1ターン目で切り札であるレッド・デーモンズを召喚するが――？

一方、ミッドチルダに到着した鬼柳達はプレシアとの合流を目指す。
果たして鬼柳は無事、なのはを護ることが出来るのか？

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ガトリング・オーガの脅威」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十四話　「ガトリング・オーガの脅威」（前書き）

次回からちょこちょこチームサティスファクションの面々が頑張る予定。
それとヴィヴィオの特殊能力（？）は結構オリジナルです。

二十四話　「ガトリング・オーガの脅威」

～次元世界ミッドチルダ　某所～

「まったく。どうしてこう、物事は悪い方向へとばかり進むのか。
誰か僕に説明してくれないか」

時空管理局本局より呼び出され、プレシア達からことの事情を聴いたクロノの感想がそれだった。
クロノは重いため息を深々と吐き出すと、チラ、と視線を現在集まっている5名の男女へと向ける。

5名の男女とは他でもない。彼をこの場に連れてきた張本人であるプレシア・テスタロッサを筆頭に。
ニ代目チームサティスファクションリーダーとして次元世界にその名を広めつつある男性――鬼柳　京介。

そして彼の妻フェイト。チームサティスファクションに所属している八神　はやてとリインフォースだった。
彼らはクロノの凄まじいまでの落ち込みぶりに、どうしたものかと顔を見合わせている。

「やはり、デュエルギャングは厄介な存在なの？」

「……まぁ、たしかにデュエルギャングは厄介な存在さ」

このままでは埒が明かないと判断したのか。プレシアがクロノに訊ねた。
デュエルギャングはさほど強くは無いが、何度捕まえても再び集まってチームを組むのが厄介だ。
その様な理由でクロノが憂鬱なのだと思ったのだが、どうやらそうではないらしい。
クロノは一旦息を吐いて場の雰囲気を整えると、今回の事件についての詳細を話し始めた。
追われている少女――ヴィヴィオに課せられた重い運命。
そして件のヴィヴィオを追っているデュエルギャングのリーダー、ロットンについて。
中でも、ヴィヴィオの内に眠る邪神の存在が印象に残ったのだろう。
場の空気が重苦しいモノへと変化している。
「地縛神、スカーレッド・ノヴァ……」
「あんな強力なモノを、一人で抱え込んどるんか……」
はやてが悲しげな表情で、地縛神の力を宿したヴィヴィオを想う。
自分とて闇の書と言う存在に運命を翻弄された身だ。ヴィヴィオの苦しみも分かるのだろう。
「ヴィヴィオがその身に宿している地縛神の力は、観測されている

方でも強力な方だろう。
次元世界の英雄――ジャック・アトラスがその身に宿しているモノと同等、もしくはそれ以上だ」

「っ！　ジャック以上の力だって言うのかよ……！」

「地縛神、スカーレッド・ノヴァに関しては伝承が曖昧でね。
これは恐らく、一体の地縛神が様々な世界にその力を封じられたせいだろう」

クロノの説明によると、地縛神スカーレッド・ノヴァとは次元世界各地を暴れ回る邪神だった様だ。
その力は他の地縛神と一線を隔しており、当時の次元世界の住人達は成す術もなく破壊を甘んじるだけの様だった。

だが、このままではいけないと幾つもの次元世界の巫女や神官が立ち上がり、スカーレッド・ノヴァの力を封じることを選択したらしい。
ただし、完全に封じることは出来ない。故に各次元世界ごとに、スカーレッド・ノヴァの力を少しずつ封じ込めていった様だ。

ある世界では地底の奥底にスカーレッド・ノヴァの力を封じ。
ある世界では一人の巫女がその身にスカーレッド・ノヴァの力を封じ込め。

ある世界では石像に。ある世界では古の魔法陣にスカーレッド・ノヴァの力を封じ込めたらしい。
その結果、スカーレッド・ノヴァの力は著しく弱体化し、本体をとある世界の遺跡に封印することに成功した。

それがどこの世界の遺跡かは判明してはいないが、分からないままの方が次元世界のためだろう。
下手にパンドラの箱を開いて、次元世界を絶望の淵に追いやることなど、してはいけないことなのだから。

「なにか、ヴィヴィオちゃんに悪影響とか出てないんか？
そんな強力な力を宿しとったら、悪影響の一つや二つ、出てきそうやけど」

クロノの説明を聞き終えたはやてが、疑問に思ったことをクロノに訊ねる。
強い力には、それ相応のデメリットが存在する。彼女が持っていた闇の書もまさにそれだ。

「ヴィヴィオの故郷の村の長に聞いたところ、負の感情を増幅させる効果がある様だ」

「負の感情……？　怒りや憎しみとか、そんな感じの感情か？」

「そうだ。あとは一定の人物の精神に干渉し、好意を持たせる効果があるらしい」

「一定の人物？」

クロノの説明によれば、その一定の人物とはヴィヴィオが信頼を預

けた人物。
もしくはヴィヴィオに好意を寄せた相手にのみ、発揮される効果を持っているらしい。

宿主であるヴィヴィオが傷つかぬように、スカーレッド・ノヴァが相手の精神に干渉するのだ。
その結果、精神を干渉された者はヴィヴィオに強い愛情と信頼を寄せ、ヴィヴィオの意のままに動く人形と化すらしい。

これはヴィヴィオが意識して行使出来る能力ではないと言うのが救いだろうか。
だが、長い間傍に居続ければ、精神への干渉が大きくなり、対象者への悪影響が出るのは間違いない。

「ヴィヴィオちゃんに、そんな秘密が……」

「故に、ヴィヴィオは貴方にそう進言したんだろうな。
長時間自分の傍に居れば、自分の事だけを考えてくれる最高の理解者が出来る。
だがそれは、他者への関心を一切失った盲目的な従者に他ならない。
だから、自分をボクの元まで連れて行って、と」

「そんな……そんなこと……！」

プレシアの漏らした呟きに、クロノが冷静に返答を返す。
彼はすでに、プレシアからこれまでの出来事を聞き出していた。

故にヴィヴィオがプレシアに言い出した言葉の意味も、理解できる。
ヴィヴィオは怖かったのだろう。自分に好意を寄せてくれる人を、操り人形の様にしてしまうのが。

その結果、ヴィヴィオはプレシアに進言したのだ。自分をクロノの元まで連れて行ってと。
そうすれば、なのはやプレシアに危険が及ぶことは無い。操り人形になる可能性がなくなるのだから。

「事態は緊急を要する。
僕もこれから、部隊を編成してヴィヴィオの保護に乗り出すことになる。
一刻も早く彼女を保護しなければ、どんな事態になるか分からないからな」

黒いバリアジャケットを翻し、時空管理局の本局まで戻ろうとするクロノ。
そんな彼を、鬼柳が呼び止めた。チラリと、クロノが肩越しに鬼柳の姿を見つめる。

「待て、クロノ！　なら俺たちも一緒に探す。
そうすれば早く見つかるかも「残念だが、それは許可できない」っ！？　クロノ！？」

「これは危険な任務だ。下手に一般人が首を突っ込めば、どんな犠牲が出るかも分からない。
だからこれは、僕たち管理局員の仕事だ。君たちは共に行方不明

になっている高町　なのはの無事を祈っていてくれ」

「っ！」

クロノの冷徹ともとれるその言葉に、鬼柳はグッと奥歯を噛み締める。

たしかにクロノの言うとおり、今回の事件はかなり危険な事件なのだろう。

下手をすれば罪もない人間が心を弄られ、操り人形の様にされてしまう。

故にクロノたち時空管理局の人員を動かすと言うのも理解が出来る。

だが――――気に入らない。

「待ってられるかよ！　なのはは俺の大切なメンバーだ。

ソイツが危険な状況なのに指咥えて待ってられる訳無いだろ！」

「じゃあ君は、最悪の事態になっても良いんだな。

たとえば君がヴィヴィオの操り人形にされたとしても、何の問題もないのか？」

「仲間を助けられなくて、リーダーなんて「じゃあ、彼女はどうするんだ」彼女……？　――――っ！」

クロノと白熱した言い争いを続ける中、不意にクロノが第三者のことを口にした。

仲間を助けられるならば、己の命すら投げ打っても良い。そう考え

ていた鬼柳の頭が冷静になる。
そしてクロノの言葉に従う様に、彼は後ろを振り返った。そして、息を呑む。

「京介……、ダメ、だよ……」

「フェイト……」

彼の視線の先には、ポロポロと涙を零している愛しい妻の姿があった。
そして、そんな彼女の泣いている顔を見て、冷水を浴びせられた様に身体が冷える。

もしも自分に何かあったとき、彼女は泣くだろう。その可愛らしい顔を歪めて、泣くだろう。
もしも自分の命が不慮の事故で潰えたとき、彼女は壊れるだろう。自意識過剰でも何でもなく。

ただ、現実としてそうなることが分かるほど、今の彼女は悲しんでいる。

「京介が……、私の傍からいなくなっちゃうなんて……イヤだ！　私は！　京介のお嫁さんでしょ！？　京介は私を一人にするの！？」

「俺、は……」

ポロポロと涙を零しながら、フェイトは鬼柳の胸に顔を埋める。
咄嗟に鬼柳は彼女の肩に手を置くが、その小さな肩が震えているのに気がついた。

いつもとは違う、完全に弱り切った姿を見せるフェイトに、鬼柳は言い様のない悲しみを覚える。
彼女をこんなに傷つけたのは自分だ。自分の配慮に欠けた物言いが、これほど彼女を傷つけてしまった。

それがどうしようもなく申し訳なくて、鬼柳は思わず自分の胸の中で泣いている彼女を抱き締める。
普段は自分を包み込んでくれそうなほどの優しさを見せる彼女の姿が、この時ばかりは小さく震える、迷子の少女に見えた。

「お願いだから……、良い子にするから……！
わたしを、わたしを独りぼっちにしないでぇ……！」

「――――～～～～っ！
独りぼっちになんて、するわけないだろ……！」

勢いは完全に削がれ、鬼柳はフェイトをギュッと抱きしめる。
もうすでに、鬼柳の身は彼一人の身体では無くなっていた。彼の帰りを待つ、家族が出来ていたのだから。

そんな家族を無視して、自分の命を危険に晒せるはずもない。
それになにより、彼女を。フェイトを泣かせたくなかった。

「鬼柳……」

「……それじゃ、僕は行くよ。くれぐれも、大人しくしていてくれ」

その場を重苦しい雰囲気が支配する中、クロノが時空管理局へと帰還する。
その際に申し訳なさそうな表情を浮かべていた様だが、すぐにその表情も引っ込んだ。

空を舞い、時空管理局へ向かうクロノを、プレシアは複雑な表情で見送る。
たしかにクロノの言うことは正論だ。だが、このまま指をくわえてジッとしている訳にもいかない。

それになにより、自分が少し目を離した隙になのはとヴィヴィオは行方不明になったのだ。
このまま黙っていることなど、プレシアには出来なかった。故に、プレシアは腹を括る。

鬼柳が出来ないならば、自分がやる。
それがチームであり、メンバーを救うことになるのなら。

「鬼柳、フェイト。貴方達はここにいなさい」

「プレシア……、お前はどうするんだ？」

「……なのはさんを、探しに行くわ」

「「「っ！」」」

泣いているフェイトを慰めている鬼柳に、プレシアは静かにそう告げた。

すると、フェイトとはやて、それにリインフォースが息を呑んだ音が聞こえる。

だが、プレシアは彼女たちに視線を向けることなく、待機状態のデバイスを起動させる。

眩いばかりの光が周囲に放たれ、プレシアの腕に展開され、デュエルディスクとなったデバイスが装着された。

「ま、待って母さん！　あ、危ないんだよ!?」

「えぇ、知っているわ。覚悟のうえよ」

「そ、そんな……！」

そして今にも空へと飛び立とうとしているプレシアを、フェイトが呼び止める。

愛娘の声に引き止められたのか。プレシアは視線を空から愛娘であるフェイトへと移した。

だが、彼女の瞳に映るのは決意の色。自分の不注意で起こった不手際、他人に任せるわけにいかない。

フェイトもプレシアの決意に染まった瞳を見たのだろう。一気に勢いが弱くなる。

プレシアはそんなフェイトの様子にクスリと笑みを浮かべると、静かに彼女に語りかけた。

「大丈夫よ。なのはさんとヴィヴィオちゃんを迎えに行くだけだから」

「で、でも！　母さんが居なくなるのはイヤ「ダメよ、フェイト」……え？」

「そろそろ私から卒業しないとね、フェイト」

ニコッと笑みを浮かべながら、プレシアはフェイトに語りかけた。フェイトは自分を心の支えにしてくれている。だが、それももう終わりだ。

彼女にはもう、彼女の心を支えてくれる大切な存在――鬼柳が居る。いつまでも自分に寄りかかっていてはダメだろう。そろそろ、自分の足で立たねばなるまい。

「貴方には鬼柳がいるでしょう？　辛いとき、悲しい時は彼を頼りなさい。

彼だって貴方の旦那さんなのよ？　自分のお嫁さん一人、受け止められないはずがないわ」

「でしょう?」と、プレシアは悪戯っぽくウィンクする。
それに鬼柳はコクリと首を縦に振って頷いた。
鬼柳とて流された結婚と言えど、フェイト一人背負えないほど軟弱ではない。
自分の大切な人が悲しんでいるとき、苦しんでいるとき。全力で受け止めることが出来るのだから。

「それじゃあ、はやてちゃん、リインフォースさん。
貴方達もここで「ちょい待ち、プレシアさん」……はやてさん?」

「私らもついて行くで。乗りかかった船やしな」

「主はやてが行くのなら、私も付き従います」

そして残るはやてとリインフォースへ別れの言葉を告げ、プレシアは空へ飛び立とうとする。
しかし彼女のその行為は、再び引き止められることとなった。引き止めた張本人は、件の八神　はやて。

彼女とリインフォースは共に、腕にデュエルディスクを装着させ、プレシアの両隣へと並び立つ。
プレシア一人を危ない目に合わせることはない。自分とリインフォースが行けば、無事に帰れる確率が高くなるのだから。

「で、でも!」

「友達一人迎えに行けんで、何が友達やねんな」

「！」

咄嗟に引き止めようとしたプレシアだったが、はやての呟く様なその言葉に反論を封じられる。
なにもはやては義務感でプレシアに付き従う訳ではない。ただなのはを、友達を迎えに行くのだから。

縋る様な視線をリインフォースへと向けるが、リインフォースもはやての言葉に同意なのか。
意見を改めるつもりは無い様だ。なんとも強情な二人の様子に、プレシアは思わず深いため息を吐く。

だが、悪くは無いとプレシアは思った。友達のために行動を起こせる。
それはとても当たり前で、納得のいく同行の理由だったからだ。

「そう。なら、危ないと判断したらすぐに逃げなさいね？」

「了解です。ただ、逃げるときは意地でもなのはちゃんを連れて行きますけどね」

「ふふ、主はやてらしい」

故に、せめて危険と判断した場合、即座に撤退する様にプレシアは

伝える。
ヴィヴィオの力は未知のモノ。どんな異変でも、軽視してはいけないのだから。

そしてプレシアの忠告にはやてとリインフォースが答えると、プレシアは視線を愛娘へと向ける。
彼女は依然として不安そうな表情を浮かべているが、先ほどの様にプレシアを引き止めようとしていない。

鬼柳を信じているのか。無事に帰ってくることを信じているのか。
それはプレシアには分からない。だが、一つだけプレシアにも言えることがある。

それは――――

「プレシア……！」

「母さん……！」

互いに寄り添い、自分を見つめる鬼柳とフェイトの姿。
そんな彼らの姿は、何処までも夫婦らしかった。

※

「「決闘（デュエル）！」」

なのはＬＰ４０００
ロットンＬＰ４０００

威勢のいい掛け声とともに、なのはとロットン。
両者は左腕に装着されたデュエルディスクから手札となる5枚のカードをドローした。

先攻はなのは。チラ、と手札に視線を落とし、初ターンで取れる最善の策を考える。

「私のターン、ドロー！
私は手札から≪召喚僧サモンプリースト≫を召喚！
このカードは召喚に成功したとき、守備表示になります」

召喚僧サモンプリースト
星４／闇属性／魔法使い族／攻　８００／守１６００
このカードはリリースできない。
このカードは召喚・反転召喚に成功した時、守備表示になる。
１ターンに１度、手札から魔法カード１枚を捨てる事で、
自分のデッキからレベル４モンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは、そのターン攻撃する事がで

きない。

「さらに手札の魔法カード一枚を捨てることで、デッキからレベル４モンスター一体をフィールドに特殊召喚します！
私は手札の魔法カード一枚を捨て、デッキから≪フレムベル・マジカル≫を特殊召喚！」

フレムベル・マジカル
チューナー（効果モンスター）
星４／炎属性／魔法使い族／攻１４００／守　２００
自分フィールド上に「Ａ・Ｏ・Ｊ」と名のついたモンスターが存在する限り、
このカードの攻撃力は４００ポイントアップする。

なのはのフィールドに、一度に二体のモンスターが召喚された。
片や何か呪文めいたことを呟いている異形の僧侶。そして片や炎を操る魔術師。

それらはレベル４の非チューナーとチューナー同士。
この二体を使用すれば、即座にレベル８のシンクロモンスターを召喚できるだろう。

だが、ロットンの顔からは余裕の表情が伺える。

「ほう。レベル４の非チューナーとチューナーが揃ったって言う訳か」

「レベル４≪召喚僧サモンプリースト≫にレベル４≪フレムベル・マジカル≫をチューニング！
　王者の鼓動、今ここに列をなす！　天地鳴動の力を見せてあげる！　――シンクロ召喚！」

合計４つの緑色のリングを、異形の召喚僧が潜り抜ける。
その際に召喚僧から発生した星の数は４。それらが一列に並び、極太の閃光がリングの中を焼いた。

「全てを破壊し尽くす――≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

そして焼かれたリングの中から現れるのは、紅蓮の力を見に纏った悪魔龍。
猛々しいまでの敵意に満ちた視線を、眼前に立つ小さき決闘者へと向けている。

恐らく、並々ならぬプレッシャーがロットンを襲っているだろう。
しかし、ロットンに委縮した様子は見られない。それどころか、彼の瞳が妖しく光る。

その光はまるで、獲物を前に舌舐めずりをする狩人の姿に見えた。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド！」

なのは手札６→３

場　レッド・デーモンズ　伏せ×1

「（私の伏せたカードは≪バスター・モード≫。
　そう簡単に≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫を破壊されることは無いはず）」

なのははターンエンドの宣言を行うと、先ほど自分が場に伏せたカードへ視線を向けた。
彼女が伏せたカードは、場のレッド・デーモンズを戦闘体勢へとモードチェンジさせる罠カード。

これならば魔法・罠の効果の対象になったとしても、サクリファイス・エスケープでレッド・デーモンズを守れる。
仮に攻撃力を上回れたとしても、／バスターへ進化させることでレッド・デーモンズが場からいなくなると言う事態を避けることが出来る。

これが初ターンで取れるなのはの最善の策だった。
出来ればバスター・カウンターが欲しかったと思うが、無い物ねだりは出来ない。

そして、ロットンがカードをドローする。

「俺のターン、ドロー」

ロットン手札5→6

「……くくっ」

「？」

「くっはははははははっ！！」

と、ロットンがデッキからカードを手札に加えると、唐突に彼は笑いだした。
まるで全てが面白くて堪らない。その様な感じを、なのははロットンの笑みから察する。

もしや手札事故だろうかとなのはは思案するが、ロットンの表情を見てそれは無いと判断した。
ロットンは笑っている。まるで勝利を確信した様な。欲しいカードを手札に呼び込んだ決闘者の顔をしている。

「おいおい、どう言うことだよ」

「？　一体、何を……」

「これじゃ俺の勝ちじゃないか！」

「！？」

「俺は手札から≪ガトリング・オーガ≫を召喚！」

ロットンの様子に疑問を抱いていたなのはだが、ロットンの召喚したモンスターに気を取られた。

召喚されたモンスターは、腹部に巨大なガトリング砲を取りつけられた一体のオーガの姿。

大した攻撃力は無さそうだが、イヤな予感がなのはの警戒の金を鳴らす。

あれをあのまま、放置していてはダメだ。理由は分からないが、本能がそうなのはに告げている。

「そして弾を装填する」

「っ！　手札を全て伏せた!?」

そしてロットンは残る手札5枚を、全て伏せると言う衝撃的な行動を行う。

これにはさすがのなのはも面喰った。手札を全て伏せるとは、一体何を狙っているのか。

鬼柳との対戦で、何度か手札を全て伏せる事態には慣れている。

だが、インフェルニティ以外で手札を全て伏せる意図が分からない。

相手の意図が読めないが、ここは慎重に行くべきだろう。

なのははそう決意すると、頭が冷静になる様に深くため息を吐く。

だが、その行為は無駄だった。

「≪ガトリング・オーガ≫の効果は、セットした魔法・罠カード一枚を墓地に送ることで、

相手に８００ポイントのダメージを与える！」

ガトリング・オーガ（アニメオリカ）
効果モンスター
星３／炎属性／悪魔族／攻８００　／守８００
自分フィールドの魔法・罠ゾーンにセットされている罠カード１枚を墓地へ送る事で、
相手ライフに８００ポイントダメージを与える。

「バーン効果！？　しかもダメージが８００……っ！　嘘！」

「全弾発射！　ガトリング・ファイア！」

ロットンがフィールドに伏せた全ての伏せカードを墓地に送る。
これにより、ガトリング・オーガの恐るべき特殊能力発動される。

伏せカードを任意の枚数墓地に送ることで、相手に墓地に送った数×８００ポイントのバーンダメージを与える。
それはつまり、合計５枚もの伏せカードを墓地に送れば、いかに強力な相手と言えど、１ターンでライフを削り切ることが出来るのだ。

そしてガトリング・オーガがロットンの指示により、腰の脇に装着された取っ手をグルグルと回す。
するとそれにより、ガトリング・オーガの腹部に装着されているガトリング砲が火を噴いた。

なのはは咄嗟に防御出来ないか場のモンスター、伏せカード、そして手札に視線を向ける。

だが、防ぐ手立ては無い。場のレッド・デーモンズ・ドラゴンは戦闘破壊以外の効果を持っておらず、伏せカードは意味が無い。

残る手札と言えば、モンスターが1枚に魔法・罠カードが2枚と言う状態だった。

しかもいずれの手札も、手札誘発のカードは存在しない。つまり、なのはに防御する術は無いのである。

「きゃぁあああああっっ！！」

なのはＬＰ４０００→０

そして吐き出された弾丸が、一発残らずなのはの身体を打ち抜いた。

いかに非殺傷設定と言えども、なのはに与える魔力ダメージは大きい。

数多もの弾丸にその身を打ち抜かれ、なのははその場から吹き飛ばされた。

なんとか彼女は身を起こそうとするのだが、全身に与えられたダメージが大きすぎて身体を起こせない。

そして身体を起こそうと四苦八苦しているなのはの元へ、デュエルを終えたロットンが歩み寄る。

「分かったか。これが俺の≪ガトリング・オーガ≫の力だ」

「くっ……！　バーンダメージでライフを０にするなんて……」

「バーンでライフを0にしちゃいけないルールなんて、何処にもないぜ。
それよりも、敗者のルール。覚えてるんだろうな」

「っ！　待って！」

なのははロットンを睨みつけようとするが、それよりも先にロットンが動いた。
彼はなのはのデュエルディスクにセットされたレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードを素早く抜き取る。

咄嗟になのはは取り返そうと手を伸ばすが、ロットンに振り払われ、その行為は無駄に終わった。
なのはは自分の手から離れたレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードを悔しげに見つめる。

なんとしてでも、取り返さなければならない。だが、今は身体へのダメージが大きく、立ち上がることすら困難だ。
なんとか、なんとかしてレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードを取り返さなければならない。

「な、なのはお姉ちゃん！」

「！　ヴィヴィオ！」

と、なのはがなんとかロットンからカードの奪還を考えていると。

その場に幼い少女の叫び声――ヴィヴィオの声が響き渡る。
なのはは慌てて思考を中断すると、声の発信源へとその視線を向けた。
するとそこには、複数のデュエルギャングに身体を抑えつけられているヴィヴィオの姿がある。

咄嗟になのははヴィヴィオ救出に向かおうと、力の入らない両腕に力を込める。
だがそれは、腹部へ与えられた強い衝撃によって無駄となる。

「あうぅっ！」

「これ以上騒ぎを大きくすると、時空管理局がうるせぇんでな。
いくぞ、野郎ども。ついでにこの嬢ちゃんも連れて行け」

ロットンに蹴られたのだろう。
腹部へ与えられたダメージになのはが悶絶していると、複数のデュエルギャングがなのはの元へ集まってくる。
咄嗟に集まってきたデュエルギャングを振り払おうとするが、腹部へのダメージと全身へのダメージが大きくて抵抗することが出来ない。

それに下手に抵抗すれば、ヴィヴィオがどうなるか分からないのだ。
動くに動けないこの状況に、なのはは今さらながら後悔する。

相手を侮っていた。まさかこんな戦法で自分を撃破する者が現れようとは思いもしなかった。

次にデュエルするときは、必ずこの屈辱を返して見せる。なのははそう決意しながら、静かに瞼を閉じた。

腕に装着されているデュエルディスク。

レイジングハートのコアが点滅しているのに気付かぬまま。

二十四話　「ガトリング・オーガの脅威」（後書き）

次回予告

ロットンとのデュエルに敗北し、囚われたなのは。
彼女を救出するため、はやて、リインフォース、プレシアが動き出す。

一方、鬼柳はフェイトを慰めるのに時間を費やしていた。
だが、彼の心にあるのはその場に居ないなのはたちメンバーのこと。
そんな彼の様子に気づいたフェイトは、鬼柳に自分を一人にしないでと縋り付く。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　前編」

今回は緩い（？）暴力表現があります。
苦手な方はご注意ください。

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　前編」

～ミッドチルダ　某所～

ミッドチルダの上空を飛翔しながら、プレシアは視線を眼下へと向けていた。
びゅうびゅうと風が耳元で唸りを上げてはいるが、防護魔法のおかげで風の影響は無い。

そして彼女が探しているのは勿論、現在行方不明となっているなのはとヴィヴィオだ。
二人は現在、デュエルギャングにその身を追われている。一刻も早く、二人の身の安全を確保しなければならない。

でなければ、ヴィヴィオは様々な次元世界にあるとされる、違法研究所へ売買されることになる。
年端のいかぬ少女を、その様な違法研究所へむざむざ渡す真似は出来ない。彼女には幸せになる権利があるのだから。

「あのー、プレシアさん」

「？　どうしたの、はやてさん」

と、眼下へ鋭い視線を向けているプレシアに、背後から彼女に追従している少女――はやての声がかかる。
掛けられたはやての声は困惑や不安などを孕んでおり、彼女が不安

な様子がその声から見て取ることが出来た。

「なのはちゃんの居場所、見当がついとるんですか？」

「いいえ、何処へ行ったか皆目見当がつかないわ。
そのせいで、こうして空から地上を探しているのよ」

「さいですか」

はやての質問に、プレシアは僅かに目を伏せながら答える。
そう。現在、なのはとヴィヴィオの現在地をプレシアは掴んでいない。
せめてド派手にデュエルなどしてくれていれば居場所は簡単に判明するのに。
と、プレシアがはやてにそう説明すると、はやてはプレシアの背後で「はぁ」と嘆息する。

「どうしたの、はやてちゃん。そんなため息を吐いて」

「どうしたの、って……。
そりゃ、この光景を見たらため息も吐きたくなりますやん」

はやてのその言葉に、プレシアは沈黙ではやてへの返事とした。
だが、いつまでも現実から目を逸らしている訳にもいかない。

プレシアは恐る恐ると言った様子で、背後を振り返る。
するとまず視界に飛び込んでくるのは、お馴染みのバリアジャケットに身を包んでいるはやてとリインフォースの姿。

二人の背には黒い翼が展開されており、その羽の色が白色だったならば天使と呼ばれてもおかしくはない姿だった。
だが、プレシアの視界には二人の他にも、数名から数十名ほどの空を駆ける魔導師の姿も見える。

その何れもが管理局――時空管理局に所属する空戦魔導師の姿だ。
そんな彼ら空戦魔導師の姿こそ、はやてのため息の原因なのである。

それは何故か。
その理由とは――――。

「前の所属不明の魔導師、止まりなさい！
市街地では緊急時を除き、飛行魔法の使用は許可されていない！」

「ただちに停止しなければ、デュエルで拘束することになる！」

「そやね……、緊急時以外でミッドの空は飛べへんもんね」

プレシアは背後から聞こえた魔導師たちの制止の声と、はやての嘆息した様子に思わず苦笑いを浮かべる。
そう。ここミッドチルダでは、落下事故や建造物・航空機との衝突を避けるため、緊急時以外市街地での飛行は禁止されているのだ。

そして現在、プレシア達が飛翔しているこのエリアこそ、ミッドチ

ルダの市街地なのである。
故にミッドの法を犯したプレシア達を時空管理局の局員が捕えに来るのは、半ば当然のことだった。

「それと主はやて。管理局に我らの顔がばれるのは色々と都合が悪いのですが……」

「そりゃ、管理局預かりの魔導師が管理局の法を破ったらそらあかんやろ」

「闇の書事件での被害者からの風当たりも強くなりそうですよ……」

何処か乾いた笑いを浮かべるプレシア、はやてヘリインフォースがさらなる忠告を行う。
はやてとリインフォース。彼女たちは時空管理局にその身を預ける魔導師なのだ。

そんな彼女たちが、自ら管理局の法を犯すなど、それはあってはならない事実。
それに加え、もしもこの件が公表されたら闇の書事件の被害者からの風当たりがさらに強まることになるだろう。

はやてに直接の罪は無いとは言え、守護騎士たちは無断でリンカーコアの蒐集を行った犯罪者。
そんな彼女たちを家族と扱っているはやては、闇の書事件で家族を亡くした被害者からあまり良い感情を抱かれていない。

故にここで、はやてたちの身元がばれることは不味いのだ。

下手に悪感情を持たれ、周囲の人間へ迷惑がかかることは是非とも避けたい。

『マスター』

「ん？」

後方から追ってくる時空管理局の局員にどう対処しようか。

対応に頭を悩ませていたプレシアの耳に、腕に装着されたデバイスが呼びかけた。

デュエルディスクのコアの部分がピカピカと光り、デバイスは何か情報を与えてくれる。

『北北西のエリアでレイジングハートの反応をキャッチしました。救難信号も同様に出ている様です』

「！　そう。なら、話は早いわね」

その情報――なのはの現在地特定の報に、プレシアは安堵の表情を浮かべた。

具体的な距離や場所は分からないが、ひとまずなのはの居場所を特定することが出来たのだ。

あとはクロノ達が来る前になのはたちを救出し、クロノ達に合流すれば良い。

プレシアは安堵の息を吐きつつ、念話と呼ばれる通信手段ではやてとリインフォースにこの事を説明した。

『そうなんですか。はぁ、良かったわぁ』

『ですが、救難信号が気になります。早急に救出に向かわねば』

『えぇ。急ぐわよ』

プレシアが新たに得た情報を説明すると、はやてとリインフォースも安堵の息を漏らす。

だが、依然として予断が許さない状況が続いており、まだまだ気は抜けない。

二人はすぐに顔を引き締めると、チラ、と依然として追跡を続けている局員へ視線を向ける。

このまま鬼ごっこを続けていれば、徐々にこちらは追い込まれるだろう。そうなる前に逃げ切らねばならない。

しかし、上手く逃げ切る方法が浮かばないと言うのも事実。

下手に攻撃する訳にもいかず、はやてとリインフォースはうーんと頭を抱えた。

「（仕方ないわね）」

一方。後ろから追跡を続ける局員たち。そして彼らの様子に頭を抱

えている二人を見て。
プレシアはふっと息を漏らす。いつまでも時間をロスし続けるわけにもいかない。

プレシアはその場で反転。突如として後ろを振り向く。
その様子に彼女の後ろを追従していたはやてとリインフォースが驚いた表情を浮かべた。

「ちょ、プレシアさん!?　なにしてるんですか!?」

「私が時間を稼ぐわ。その間に、なのはさんとヴィヴィオをお願い」

「!?　む、無理ですってば!
あの人数はちょっと多すぎやよ!?」

はやてとリインフォースもプレシア同様にその場で制止すると、局員を引き止め様とするプレシアを説得する。
いくらデュエルの腕前が達人クラスのプレシアとて、あの人数を一度に相手取るのは中々厳しいものがあるだろう。

だが、プレシアははやての提案に耳を貸さない。
ふるふると頭を横に振ると腕に装着していたデバイスを操作する。

「私のデバイスが感知した、レイジングハートの位置情報を送るわ。
これで二人の居場所は分かるはずよ」

「そ、そやけど!」

「それに、貴方達は管理局に顔がばれるのが不味いのでしょう？
この場は私に任せて、行ってきてちょうだい」

「――――～～っ！」

はやては尚も必死に言い募ろうとするが、そろそろタイムリミットが迫っているのに気付く。
彼女――プレシアの背後には、間近に時空管理局の空戦魔導師の姿が見て取れた。

このまま、その場にとどまれば、はやてたちもろ共時空管理局のお縄になることだろう。
そうなれば、当初の目的を達成することは出来ない。刻々と迫るタイムリミットに、はやてはギリッと歯噛みした。

「む、無理はせんといてください！」

「えぇ、分かっているわ。リインフォース、はやてちゃんをお願いね」

「言われなくても」

そしてはやてとリインフォースは、その場にプレシアを残し空を駆る。
背後からは依然として管理局員の制止の声が聞こえてくるが、それを無視して飛翔した。

※

「落ち着いたか？」

「うん……、だけど、もう少しだけこうさせてて」

「……あぁ」

キュ、と鬼柳の右腕のコートが強く握られ、次いで暖かな温もりが鬼柳を襲った。
その温もりの正体とは、現在彼に身体を預けている少女――フェイトのもの。

彼女はまるで鬼柳を離してたまるかと言う様に、彼にくっついたまま離れようとはしない。
それはまるで、一人になることを恐れた子供の様にも見えて。

普段とはまったく違う様子の彼女の姿に、鬼柳はただ胸を痛めるだけだった。

「（あの時のこと、まだ気にしてるのか……）」

そっとフェイトの肩に手を伸ばすと、鬼柳は数年前の記憶に思いを馳せる。

鬼柳の言うあの時のこと。それは、鬼柳とフェイトが出会ってまだ間もない頃の話だった。

フェイトと出会った当初、彼女は偽りとは言え、プレシアから虐待を受けていた。

それは身体中に惨たらしい痕を作るほどの凄惨さである。今なお、当時のことは頭から離れない。

しかしそんな虐待を受けてもなお、フェイトはプレシアの傍を離れようとはしなかった。

それは一重に、プレシアのことが大好きだった。プレシアにまた、笑って欲しかった。そんな簡単な理由だ。

だが、そんな優しい少女の心にヒビが。心が砕け散りそうになるほどの大きなヒビが入ってしまう。

身体を地縛神に乗っ取られていたとは言え、大好きな母親に拒絶された。それが彼女の心を酷く傷つけた。

なんとかそのことについては鬼柳がフォローすることが出来たが、その後もプレシアに嘘とは言え拒絶されている。

それがフェイトの心にトラウマを作ったのだろう。大好きな人に拒絶されたくない。大好きな人に離れて行って欲しくない。

そんな当たり前のことを、酷く彼女は恐怖する様になった。

そして今回。鬼柳があえて危険な場所に足を踏み入れようとしたことで、そのトラウマが再発したのだろう。

彼女は酷く怯え、鬼柳を離して堪るものかと凄まじいまでの強さで彼の服を掴んで、離さなかった。

「大丈夫だ。俺がずっと、傍に居る」

「うん……」

未だ小さく震える彼女の肩を抱き締め、安心させるように彼は呟く。一人にされる恐怖や寂しさ。それは鬼柳にも、身に覚えがある感情だ。

今まで仲良くバカをやっていた友人たちが、自分の傍から離れて行くのが怖い。

独りぼっちにされるのが怖い、寂しい。当時自分が味わった恐怖と同等、否、それ以上の恐怖を味わっているのだろう。

当時は間違えた自分だが、今回は間違う訳に行かない。

あんなに苦しく、辛い思いを味わうのは自分一人で十分だ。

彼女にそれを強いる必要など、まるで無いのだから。

そして徐々に落ち着いてきたのか。フェイトの呼吸が安定してきた。

それと比例するかのように、先ほどまで小さく震えていた肩の震えが納まっていく。

「大丈夫か？」

「うん。ありがとう、ずっと抱きしめててくれて」

震えが納まったフェイトに、鬼柳は心配そうな表情で訊ねた。
無理をしているのではないか。まだ精神が参っているのではないか。
様々な不安が彼の胸の中を駆け抜けて行くが、どうやらそれは杞憂であった様だ。
フェイトにニコリとほほ笑まれ、彼も安堵の息を吐く。それは紛れもないフェイトの笑顔。
それに鬼柳は幾分心が軽くなるのを覚えながら、そっと彼女を抱き寄せた。
ふわりとフェイトの温もりと香りが彼の鼻にまで届き、鬼柳の口元が思わず緩む。

「当たり前だろ。離してたまるかってんだ」

全身で彼女の存在を確かめながら、鬼柳はフェイトにそう答えた。
そう。離してたまるものか。籍を入れ、初めて好きになった人をそう簡単には離さない。
たしかに鬼柳とフェイトの結婚は、流されたモノだ。
互いに相手を好いてはいたが、鬼柳がフェイトに抱いていた想いはあくまで友達や妹へむけての「好き」である。

その想いが変化したのは、何時頃からだろうか。
友達や妹へ向けていた「好き」の種類が変わったのだ。

変化した理由は分からない。だが、一つだけ確かに言えることがある。
それは、鬼柳　京介はフェイト・テスタロッサを愛していると言う事実だけだ。

「あぅう……」

そして一方。鬼柳の熱烈な愛の言葉に、フェイトは頬を赤らめながらも満足そうな表情を浮かべていた。
こうして彼からストレートな愛の告白を聞くのは久しぶりだ。ちゃんと自分が愛されていると分かり、気分も良い。

鬼柳の前でまるで駄々っ子の様に彼に縋りついてしまった。
もしかしたら呆れられたかもしれないと思ったのだが、そうではない様で一安心する。

フェイトは赤い頬を隠す様に鬼柳の胸に顔を押し付けると、鼻で思い切り彼の匂いを確かめる。
女の自分とは違う、汗の匂いがする。もしも他者の男性の汗の匂いならば忌避していたが、鬼柳のものならば別だった。

彼とデートした後、鬼柳の胸に抱かれた時。情事の後、思い切り彼に抱き締められた時。
そんなときに鬼柳の匂いを嗅ぐと、フェイトは安心できるのだ。自

分が大好きな人の匂いに包まれ、心の底から安心できる。

今回のそれもまさしく同じで、彼の匂いや温もりに包まれて。
先ほどまでの恐慌状態が嘘の様に、フェイトは心に安定を取り戻していた。

「（これでフェイトは一安心か。だが……）」

フェイトの顔から強張りが消え、安心した様子を見せる彼女に鬼柳は安堵の息を吐く。
そして次に思い浮かべるのは、現在この場にいない３人。否。４人の女性たちの姿だった。

今回のデュエルギャングの事件で、ヴィヴィオと言う少女と共に行方をくらましているなのは。
彼女は果たして無事なのだろうか。ヴィヴィオと呼ばれる少女の内に眠る力に、操られてはいないか。

色々と、不安に思うことは多々ある。そして不安を覚えると、彼はこう思うのだ。
一刻も早く、助けてやりたい。なのはに、自分の大切な人に危険が迫っているなら、助けてやりたいと。

だが、それが出来ない。

「んぅ……」

自身の腕の中にある少女――フェイトの姿を、鬼柳は見つめた。
己の腕の中に包まれている彼女は、心底安堵した様子を見せている。
きっとこの少女は、自分が怪我をすれば悲しむだろう。
いや、怪我で済むならばまだ良い方だ。もしも自分が死ねば、どうなるか。
それを想像すると、胸の辺りがぎゅっと締めつけられる様に痛む。
先ほどのやり取りであれほどの恐慌状態に陥ったのだ。結果は押して測るべしだろう。

「――――っ」

しかしそれでも、彼はなのはの救出に駆けつけたかった。
損得勘定など抜きにして、ただ大切な友人の少女を助けたかった。
だがそれは、腕の中で安堵の笑みを浮かべている彼女を傷つける行為になる。
怪我をしないで欲しい。自分の傍に居て欲しい。そんな彼女の願いを踏みにじる行為だ。
フェイトを泣かせたくない。だが、なのはを助けたい。
二つの相反する気持ちに挟まれ、鬼柳の表情が僅かに歪む。
そして、その変化をフェイトが見逃しているはずもない。

「ダメだよ、京介」

「っ！」

「私を独りぼっちにしないで……」

ぎゅぅっと、鬼柳を離してたまるかと言うかの様に、フェイトが彼の服を掴んだ。
そして掴んだ服の裾を、腕の中に抱きこむ。離さないで。置いて行かないで。そう願う様に。

母親の言うことも分かる。いつまでもプレシアにおんぶに抱っこと言うのは格好が悪い。
しかし、鬼柳まで自分の傍から離れて行ったなら、自分はどうすれば良いと言うのだろうか。

以前に母親に拒絶された様に、人の温もりの無い布団の中で嗚咽をあげながら泣き喚けばいいのだろうか。
それとも見っとも無く、捨てないでと縋りつけばいいのだろうか。

自分を支えてくれて、自分が支えてあげたいと思う人。自分を愛してくれて、自分が愛したいと思う人。
恋人を通りこえ、初めて出来た大好きな夫を。彼女は離したくなかった。他の誰かに、取られたくなかった。

「独りぼっちになんて、するかよ」

そして鬼柳から返ってきたその言葉に、フェイトは安堵したようにほほ笑んだ。
あぁ、やっぱりだ。鬼柳は自分が素直に思ったことを口にすれば、それを受け止めてくれる。
彼の前でなら、変に取り繕う必要が無い。あるがままの本心をさらけ出せる。
鬼柳の胸の感触を確かめながら、フェイトはそう思う。自分の思いが鬼柳を引き止めることが出来て、気分が良い。

「――――けどよ」

だが、そんな彼女の気分の高揚もここで終わる。
告げられた言葉は、フェイトを不安にさせる言葉。
思わず、フェイトの身体がビクリと震える。

「ここで行かなかったら、きっと後悔すると思うんだ」

「……なんで？　母さんやはやてたち、それにクロノが助けに行ったんだよ？
心配する事なんて、何もないよ？」

グッと、フェイトの身体を抱き締めている鬼柳の腕に、力が込められる。
それはまるで、今すぐ駈け出したいのを無理やり抑え込んでいる様

にも見えて。

そんな今にも駈け出しそうな彼を、フェイトは引き止める様に言葉を紡ぐ。

そう。心配する事なんて、何もない。プレシアやはやて、クロノ達が救出に向かったのだから。

だが、鬼柳のフェイトを抱き締める腕から、力が抜けることは無かった。

「……京介は、私よりもなのはの方が大事なの？」

「そんな訳あるか。フェイトが大事に決まってるだろ」

「……じゃあ、なんで行くの？」

「仲間が危ない目にあってるからに決まってる」

「……危ない目にあうかもしれないんだよ？」

「そんなこと、今さら慣れっこだぜ」

鬼柳に言葉を投げかける度、躊躇うことなく返事が返ってくる。

だが、その返事の中にフェイトが望むものはない。

知らず、フェイトの手に力が籠る。掴んでいた鬼柳のコートが僅かに皺になる。

だが、それを気にする様な素振りを二人は見せない。気にする必要

は何処にもないのだから。

「……死んじゃうかも、しれないんだよ」

そして、いつの間にかフェイトの目尻の端に溜まった涙が、溢れだす。
自分の口で言葉にして、フェイトはとてつもない恐怖をその身に覚えた。

今、自分を抱き締めてくれる鬼柳が死んでしまうかもしれない。
もう、自分を抱き締めてはくれない。もう、自分に笑いかけてくれることは無い。

もう、この世の何処にも存在しない。

それがとてつもなく怖く思えて、両の目から溢れだす涙をフェイトは止めることが出来ない。
何処にも行かないで。自分の傍に居て。――――独りぼっちにしないで。

思わず肩が小刻みに震えだし、大声で見っとも無く泣き喚いてしまいそうになる。
そしてそんなフェイトに、鬼柳の優しげな声が降りかかる。

「死なねぇよ。フェイトみたいな可愛い嫁さん残して、死ねるわけないだろうが」

「それに、まだまだやりたいことは沢山あるしな」と、鬼柳は頬を赤く染めながら告げる。
だが、そんな彼の表情に不安の色は見えない。まるでフェイトの元へ帰ってくるのが、半ば当然の事実として告げている。
当たり前だ。まだ、フェイトとしていないことが山ほどある。
それをやり残したまま、おちおち死んでいられる訳が無いのだから。

「……京介のバカ」

「悪いな。でも、これが俺なんだ」

「……知ってる」

そして鬼柳のその宣言にも似た言葉を聞いたフェイトは、鬼柳と同じく頬を赤く染めていた。
本当に、どうしてこんなときにそんな照れるような言葉を言うのだろう。しかも、そんなに堂々と。

思わず頬が赤くなってしまう。そして赤くなった頬を隠す様に、フェイトは鬼柳の胸に顔を埋めた。
そして思い出す。彼は自分が仲間と認めた者のためならば、平然と危険の中に飛び込む様な男性だったと。

プレシアが地縛神に囚われていたとき。リインフォースが地縛神に乗っ取られていたとき。
彼は平然と、危険を顧みずに飛び込んだ。そして時には大けがを負

いながらも、彼女たちを救って来た。

きっと、鬼柳は今回も救うのだろう。

自身の命を危険に晒しながらも、なのはを無事に救い出す。

今さらながらに、フェイトはその事を思い出していた。

「けど、一つだけ約束する。俺は絶対に、フェイトのとこへ戻ってくる」

その言葉と同時に、フェイトの唇が暖かい感触で塞がれる。

視界一杯に広がった鬼柳の顔を見て、フェイトは内心で「京介のバカ」と呟いた。

そして、すぐにフェイトも目を閉じる。

唇に触れる、鬼柳の感触を確かめるかのように――――。

※

「うぅ……？」

ジクジクと痛む腹部の痛みに、今まで意識を失っていたなのはが覚醒する。
ゆっくりと頭を振りながら瞼を開けば、そこは暗く、薄汚い倉庫の様な場所だった。

――――ここは一体？

そう頭の中で疑問符を浮かべるなのはだが、すぐに意識を手放す前の状況を思い出す。
見慣れぬモンスターから発射された幾つもの弾丸。それらは余すことなく、なのはの身体に命中した。

無様に地面に這いつくばる自分。そして自分を見下ろす相手の決闘者――ロットン。
敗者と勝者。どちらがそうなのかは、火を見るよりも明らかだった。

「――――～～～～っ」

ギリッと、なのはは奥歯を噛み締める。守ることが出来なかった。ヴィヴィオを。守るべき少女を守ることが出来なかった。そんな自分がイヤになる。

絶対に守ると誓ったのは、果たして誰だったのだろうか。
――――自分である。自分で誓った誓いすら、満足に守ることが出来ない。

それが酷く、なのはを苛立たせた。

「取り合えずヴィヴィオを――――!?」

と、ヴィヴィオの安否を確かめようとしたなのはだが、満足に動けないことに気付いた。
両足と両腕を縄の様なもので縛られている。必死に揺すって縄の拘束から抜け出そうとするが、上手くはいかない。

「っ！　外れろ、外れろっ！」

解けぬ拘束。安否が分からぬヴィヴィオ。そして敗北した事実。
それらの要素が加わり、なのはの瞬く間に増えて行く苛立ちを抑えることが出来ない。

そしてそんなのはの苛立ちと呼応するかのように、なのはの瞳が怪しく輝きだす。
茶の瞳は消え失せ、血の様な真っ赤な瞳が現れる。そして何時しか、言葉使いすら荒くなる。

「うるせぇぞ！」

「っ！」

と、苛立ちのままに叫んでいたなのはの耳に、聞き慣れぬ男の声が聞こえた。
てっきりこの場には一人きりだと思っていただけに、第三者の登場はなのはを驚かせる。

だが、現れた男の姿になのはは目を細めた。なのはの前に現れた男。それはなのはにとって、怒りを覚えるに相応しい相手だったからに他ならない。

くたびれたジーパンに、同じくくたびれたTシャツ。そして首元に巻かれた赤いスカーフ。
間違いない。先ほどのデュエルで自分に敗北をくれた男――ロットンの率いるデュエルギャングのメンバーだ。

「ったく。大声で喚きやがって。
ちったぁ静かにするってことを知らねぇのか？」

「ヴィヴィオは何処？　無事なの？」

「答えると思うか？」

「答えろっ！」

男の挑発する様な言葉に、なのはの頭に血が上る。
普段ならば、絶対に発しない様な怒声だ。だが、それになのはは気付かない。

そして一方、なのはに怒声を叩きつけられた男の雰囲気が一変する。

身動きの取れないただの捕虜に、命令される様な声で怒鳴られたのが気に障ったのだろう。

男の顔から表情が消え、男は一歩、一歩となのはとの距離を詰めてくる。

「どうやら自分の立場っつうものを、理解出来てない様だな」

「なにを……！」

「ボスから手を出すなって言われてたが、このくらいなら良いだろ」

「――――きゃぁっ！？」

男が拳を振り上げ、なのはの頬に向けて振り下ろす。

避ける暇もなくなのはの頬に男の拳は突き刺さり、なのはの悲鳴が上がった。

しかし、男に殴られても依然として、反抗的なのはの視線は消えない。

彼女は殴られた頬を腫らしながらも、「ヴィヴィオは何処？」「答えろ！」と大声を出す。

明らかに尋常ではないなのはの様子に、もしも男が普通だったならば手を引いただろう。

しかし、今の男は反抗的ななのはの様子に酷く立腹している。大抵の捕虜は殴れば黙るのに、なのはは違う。

それが酷く、男の癪に障った。

「いい加減に、黙り、やがれっ！」

「がっ、ぐっ、うぐぅっ！」

二度、三度と男の拳がなのはの頬に突き刺さる。
その度になのはの顔が、右へ左へと上下左右に揺れた。
何度も殴られたせいでか。なのはの両頬は酷い有様と化している。
彼女の両の頬は人前に出るのを躊躇うほど、酷く腫れ上がっていた。

しかしそれでいてもなお、なのはの叫びは止まない。
「ヴィヴィオは何処だ！」「ヴィヴィオに手を出したらタダじゃ済まさない！」など。

男に殴られるのに比例して、なのはの言葉づかいがどんどんと荒くなっていく。
そして輝く赤い瞳。なのはは気付かない。自分が徐々に、スカーレッド・ノヴァに精神を犯されていることを。

否。もしかしたらもうすでに、なのはの精神は暗い闇へ囚われているのかもしれなかった。

「この、クソ野郎がっ！」

そして何度もなのはを殴り続けた男の拳が、大きく振り上げられる。
恐らくその拳の威力は、先ほどまでなのはを襲っていた拳の威力よりも上だろう。

もしもその拳が振り下ろされれば、なのはの顔にどんな傷跡が出来るか予想できない。
しかし、それでいてもなお、なのはは叫ぶことを止めない。身体を左右に滅茶苦茶に動かしながら、叫ぶ。

そして、そんななのはの顔面に男の拳が振り下ろされようとしたとき。
建物の何処かで、何かが壊れる様な音がした。そして僅かに、男の拳の動きが止まる。

「なのはちゃん、大丈夫か？　助けに来たで！」

「高町、無事か！？」

壊れる様な音がしたのはなのはと男、二人の頭上から。
倉庫の天井に巨大な穴が開き、そこから二人の女性が姿を現す。

舞い降りてくる二人の女性の姿に、なのはは見覚えがあった。
その二人は今まで共に生活をし、友情を育んできた仲間なのだから。

そして、なのはが二人の名を告げる。

「……はやてちゃん、リインフォースさん……」

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　前編」

次回はデュエルパートになると思われ。
そしてそろそろなのはの精神がヤバい……。

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　後編」

今回でＶＳロットンへの導入部は終了。
次回からＶＳロットン戦へと入ります。

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　後編」

～ミッドチルダ　某所廃倉庫～

「なのはちゃん、助けに来たで！」

突如として廃倉庫の天井を打ち破り、はやてとリインフォースが舞い降りる。
先ほどまで良い様に殴られ続けていたなのはと、なのはを殴っていた男も茫然とした様子で二人を見つめていた。
そして瓦礫が重量を伴った騒音を辺りに響かせると同時、二人の魔導師は廃倉庫の中へ降り立つ。
二人とも腕には黒いデュエルディスクを装着し、いつでも臨戦態勢に入れる状態だ。

「な、なんだお前ら！」

恐慌状態から立ち直った男が、はやてとリインフォースを見て叫ぶ。
だが、男の叫びに対する返事は二人の鋭い視線だった。

「酷いな、なのはちゃん……、こない、顔を腫らして……」

「すぐに治療を」

二人は男へ向けていた視線を外すと、今もなお茫然としているなのはへ視線を向けた。
そして何度も殴られ、赤く腫れているなのはの頬に治癒魔法を展開する。

リインフォースがなのはを治療しているのを眺めながら、はやては怒りに震えていた。
女の命とも言える顔。はやてから見ても可愛らしいと思える顔を、よくもここまで醜く出来たものだと。

はらわたが煮えくり返って、叫びだしてしまいそうだ。
しかし、はやては何とかその怒りを胸の内に押し止める。

そうだ。今は感情を爆発させるときではない。
なのはを奪還し、ヴィヴィオを救出した後。そのときに、感情を爆発させれば良い。

「さぁ、仲間呼びぃや。アタシらが相手したるで」

「た、たった二人で俺らを相手出来るってのかよ！
言っとくが、こっちにはリーダーだって「えぇから、はようしぃや」――～～っ！　敵襲だ！」

はやてが男へ軽い挑発を行うと、男はすぐに仲間を呼び寄せた。
どうやら、目の前にいる男はチームの中でもデュエルの腕前は低いらしい。

そんな相手にあれだけの怪我を負わされたのかと思うと、酷くはやてを苛立たせた。
腕が良ければ良いかと言う話ではないが、それでもやりきれないものをはやては感じる。

そして男の放った集合の合図と共に、倉庫の中へ他のデュエルギャングのメンバーが姿を現した。
おおよそで十五人弱人と言ったところか。よくもまぁこれだけの人数のデュエルギャングがいたものだとはやては感心する。

「意外と多いなぁ。リインフォース、自信のほどは？」

「当然。あの程度の人数、さほど問題ではないでしょう」

「となると。問題はなのはちゃんを打ち破ったって言うリーダーか」

周囲を取り囲むように動くデュエルギャングたちに視線を向けながら、はやては治療を終えたリインフォースへ話しかけた。
なのはが負けた相手のことは、プレシアのデバイスから受け取った情報で既に把握している。

恐らく、現在はやてたちを取り囲んでいる下っ端たちは通常のビートダウン系のデッキだろう。
次元軸のビートダウンのデッキとは相性が悪いが、その他のビートダウンと相性が良いのがはやてのＢＦ（ブラフアタザー）だ。

久方ぶりに行う本気のデュエルを前にして、はやての心臓もドクドクと早鐘を鳴らす。
制限改訂や新たに発売されたカード。それらを考慮したうえで組んだ新たなデッキが何処まで出来るか。
はやては純粋に気になっていた。

「……今だけ、力を貸してくれ」

そして一方。リインフォースはデッキケースから取り出したあるカードを見つめていた。
それは数年前、はやてたちと共に鬼柳とデートした際に、彼から貰った大切なカードである。

今までは未練が残るだろうと思い、デッキに入れてはいなかった。
だが、今回は違う。なのはの顔に拳を叩きこんだ男が許せない。彼女の顔を傷ものにした彼らが許せない。

故に彼女もまた、本気で彼らと闘う。
本気で闘うために、鬼柳から貰ったカードをデッキに入れる。

約四十枚のデッキの中に、たった一枚別のカードが入ったところで、大して変わりはないだろう。
しかし、リインフォースにはそれだけで、デッキが変わったと思えた。デッキの雰囲気が、普段とは違う。

まるでそこに鬼柳が居て、自分を見守ってくれている様に思えて。
それだけで自分が、無敵の存在になった様に錯覚する。

「さぁて、黒い翼の的にされたいヤツは掛かってきぃや！」

「私たちは絶対に」

「「――――負けない（へんで）！！」」

※

「何だ、やけに騒がしいな」

なのはが囚われている廃倉庫とは別の倉庫の中。そこにロットンは居た。

適当に用意した木箱の上に腰を下ろし、ズボンのポケットから取り出した瓶に口を付ける。

瓶の中身は酒。グビッ、グビッと瓶の中身を煽るたびに、喉元を熱い液体が通り抜けて行く。

そして耳に届く不快な叫び声をシャットアウトすると、視線を廃倉庫の一室へと向けた。

そこにあるのは、猛獣を捕えるために使用されるであろう鉄で出来た檻。
だが、その檻の中に居るのは猛獣ではない。猛獣とはかけ離れた存在である、一人の少女の姿がある。

両腕を後ろ手に縛られ、両足も同様にロープで縛られている年端もいかぬ少女。
少女――ヴィヴィオは恐怖と不安の入り混じった視線を、恐る恐るロットンへと向けていた。

「へっ」

ロットンはこちらの様子を伺うヴィヴィオを一瞥すると、再び一口、瓶の中の酒を煽った。
いくらヴィヴィオがどうこうしようが、鋼鉄製の檻から脱出できるとは到底思えない。

なにせデュエルディスク兼デバイスであるレイジングハートは、この倉庫の中に保管してある。
そう簡単には見つからないだろうが、念には念を入れ、同じく捕えた少女を別の倉庫――と言っても隣だが――に押し込んである。

当然、ヴィヴィオやなのはには気付かれない様にだ。
それにこの場は人気のない廃墟。助けが来るはずもない。

「とっととこのガキを売り飛ばして、ずらかりたいところだぜ。

割に合わない仕事を引き受けちまったもんだ」

一口酒を煽ると、ロットンは誰にともなく独り言をつぶやき始める。
そう、彼が今回の仕事を受けたのは、楽に大金が手に入りそうだったからだ。

たかが一人の少女を指定の研究所に売り飛ばすだけで、莫大な報酬がもらえる。
腕に覚えのあったロットンはその話に飛び付き、件の少女を捕えようとしていた。

だが、そこで二人の女性の妨害にあい、次元世界へ絶大な影響力を持つ時空管理局まで出しゃばって来てしまった。
時空管理局と言えば、次元世界全体に対し、多大な影響力を持つ組織だ。

そんな組織と事を構えるなど、リスクが大きすぎてやっていられない。
なんとか時空管理局との正面衝突はやり過ごしたが、気を抜けないのが現状だ。

「リーダーっ！」

「何だ」

と、ロットンがこれからどの様に活動を行おうか脳内でシミュレートしていると。

不意にドタバタと騒がしい足音を響かせながら、ロットンの居る廃倉庫へ部下の一人が駆け込んできた。

駆け込んできた男は顔中にびっしょりと汗を掻き、相当焦っていることが見て取れる。
また厄介なことが転がり込んできたのかとロットンは嘆息しつつも、男へ事情を訊ねる。

「み、見慣れない女二人が乗り込んできて……！
人質を返せって、もう一つの倉庫で暴れてるんです！」

「見慣れない女だぁ……？」

ロットンは男の報告に、微かに眉を潜めた。
自分が相対したうちの一人――なのはは捕えることに成功した。

故に、残っているのはもう一人――プレシアだけなのである。
もしや仲間が居たのかとロットンは考えるが、今は考えるよりも動かなくてはならない。

いくら人の気配が無いとは言え、むやみやたらと暴れられたら折角潜伏しているのが水の泡となってしまう。
「ちっ」と舌打ち一つ打つと、ロットンは木箱の上から腰を上げた。
そして自身の愛用するデュエルディスクを腕に装着する。

「仕方ねぇな。煩いガキには、相応のお仕置きが必要、ってな」

腕にデュエルディスクを装着し、デッキホルダーに自身のデッキをセットする。
それだけでロットン。否、決闘者の戦闘態勢は終わりを迎える。

決闘者にとって、デュエルこそが勝敗を分ける戦闘手段。
魔法戦闘はいまや、時代遅れの産物となり果ててしまった。

シャ、シャ、シャと小気味いシャッフル音を聞きながら、ロットンは廃倉庫を後にする。
ようやく一仕事を終え、気持ちを落ち着かせていたところを邪魔されたのだ。相応の仕置きを覚悟して貰おう。

そうして廃倉庫を後にするロットンの様子に、報告を行った下っ端はホッと安堵の様子を見せる。
そして倉庫を出て行ったロットンを追いかける様に、下っ端も倉庫から姿を消した。

そして、その数分後。廃倉庫の中へ、新たな人影が降り立つ。
その人物の数は二名ほど。それぞれコートとマントを纏い、身体を隠している。

コートを身に纏っている方は、背丈や肩幅からどうやら男性であると判断出来る。
そしてもう一方のマントを見に纏っている方と言えば、頭の両脇で髪をツインテールにしていた。

大方、女性であろうヘアスタイルだ。
コートを身に纏った男とマントを身に纏った女。

二人は暗闇の倉庫の中を、足音を忍ばせながらあるモノを探していた。
真っ暗で視界が確保できない中、二人は倉庫の中を探し歩く。

そして二人は、檻の中に捕えられている少女――ヴィヴィオと、厳重に保管されているなのはのデッキとレイジングハートを見つけた。

※

「っ、ヴィヴィオ！」

腕を拘束していたロープを解き、なのはは立ち上がると周囲へ視線を走らせた。
彼女の周囲では未だ、はやてとリインフォースが集まったデュエルギャングたちとデュエルをしていた。

「≪ＢＦ‐アーマード・ウィング≫で相手プレイヤーにダイレクト・アタックや！」

「うぐぁあああっっ！！」

「フィールドの「ｓｉｎ」と名のついたモンスターが破壊されたことにより、手札から≪ｓｉｎトゥルース・ドラゴン≫を特殊召喚する！

場を制圧しろ、≪ｓｉｎトゥルース・ドラゴン≫！！」

「な、何だ！　このモンスターは！」

はやてたちはそれぞれ、デッキの切り札を召喚し、かなり優位にデュエルを進めている。

これならば彼女たちが負ける可能性はほとんど無いだろう。故に、なのはは見当たらぬヴィヴィオを探す。

自身の顔へ付けられた傷や痛みなど、すでになのはの頭の中には存在していない。

今、彼女が優先するのはヴィヴィオの安否だけ。焦燥の色が、なのはの顔に浮かんでいく。

「居ない……っ！　ここじゃないの！？」

しかし、いくら倉庫の中を探してもヴィヴィオの姿を見つけることは出来なかった。

焦燥と不安が入り混じった表情を浮かべ、なのはは最悪の事態を想

定する。

もしや、ヴィヴィオは既に自分の手の届かぬ場所へ連れて行かれてしまったのではないか。

もしもそうならば、事態は大分悪い方向へ転がっている。違法研究所の場所など、なのはに見当もつかない。

「くっ！」

そして舌打ち一つ打つと、彼女は我武者羅に出口へ向けて駈け出す。

このまま此処でジッとしているより、我武者羅でもヴィヴィオを探した方が得策だと判断したのだろう。

出口へ向かって駈け出すなのはに気がついたデュエルギャングの下っ端たちが、なのはの行く手を遮る。

行く手を遮られ、なのはは僅かに目を細めた。だが、駆けるスピードは変わらない。全力で彼らの元へ向かって駆ける。

「なのはちゃん！？」

「高町！？」

後ろからはやてとリインフォースの驚いた声が上がるが、なのははそれでも足を止めなかった。

今ははやてやリインフォースに構っている暇は無い。ヴィヴィオの安全を第一に考えなければならないのだから。

だが、そんな絶対に止まることはないであろうなのはの足が止まった。
その場にピタリと足を止め、瞳を大きく見開いている。
口は僅かに開き、そこからは「はぁはぁ」と乱れた呼吸の音が聞こえた。
彼女の視線の先には、一人の男の姿が見える。褐色の肌に、肩甲骨の辺りに下げられたポニーテール。
西部劇で見る様なズボンとシャツ、それに茶色のジャケットを見に纏い、腕にデュエルディスクを装着した人物。
その男の名はロットン。先のデュエルでなのはを相手に、ワンターンキルを成功させた男の名前である。

「なのはちゃ……、何者や、アンタ……」

「お気を付けください、主はやて。他の者と雰囲気が違います」

なのはがロットンを前に歩みを止めていると、後ろからはやてとリインフォースが追い付く。
どうやら、大方のデュエルギャングを倒した様だ。彼らは皆、その場で蹲っている。

「ほう。俺が見たのとはまた、随分違うヤツが助けに来たじゃねーか」

「違うヤツ……？　もしかして、プレシアさんか？」

ロットンはなのはの傍に集まったはやてとリインフォースを観察すると、そう口にした。
年頃の男性が女性に向ける様な舐める様な視線ではない。ただ単純に、実力を把握し様と言う視線だ。

はやてとリインフォースはロットンのその視線を身体に浴び、腰を落として僅かに身構える。
彼女たちの前に立ち塞がるロットンから放たれるのは、明らかに強者のプレッシャーだ。

先ほどまで自分たちが相手をしていた様なデュエリストではない。
自分たち。否、鬼柳と同等。もしくは彼以上の腕を持ったデュエリストだと判断する。

「だが、やることは一つだ。おいテメーら。お仕置きの時間だ」

「やれるもんならやってみぃや！　アタシらを舐めたらあかんで！」

「っ！　主はやて！」

ロットンの挑発の声に、はやてがいきり立つ。
咄嗟にリインフォースが諌めようとしたが、それは無駄に終わった様だ。

ロットンとはやて。両者は腕に装着したデュエルディスクを構え、

デュエルの構えを取る。
すでに何戦もデュエルを行い疲れているであろうはやては、特に疲れた様子を見せなかった。

『お気を付けください。恐らく、彼がバーンを操る者かと』

『うん、わーっとる』

デュエルを中断させるのが無理だと判断したリインフォースは、念話ではやてに注意を促す。
ここに来るまでに、レイジングハートから出された救難信号で事の次第は確認済みだ。

その中で、なのはがバーン効果を持つモンスターにやられたと言うのも把握している。
故に、今回のはやてのデッキにはバーンに対するメタカードが数枚搭載されていた。

問題は、上手くそのメタカードを引けるかどうかに掛かっている。

「「決闘（デュエル）！！」」

はやてＬＰ４０００
ロットンＬＰ４０００

「私の先攻、ドロー！」

はやて手札5→6

「私は手札から≪ＢＦ－精鋭のゼピュロス≫を通常召喚！
さらに私のフィールドに「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、手札から≪ＢＦ－黒槍のブラスト≫を特殊召喚できる！」

ＢＦ－精鋭のゼピュロス
星４／闇属性／鳥獣族／攻１６００／守１０００
このカードが墓地に存在する場合、
自分フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を手札に戻して発動する。
このカードを墓地から特殊召喚し、自分は４００ポイントダメージを受ける。
「ＢＦ－精鋭のゼピュロス」の効果はデュエル中に1度しか使用できない。

ＢＦ－黒槍のブラスト
星４／闇属性／鳥獣族／攻１７００／守　８００
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「そして私はカードを伏せて、ターンエンドや」

はやて手札6→3
場　ゼピュロス　ブラスト　伏せ×1

はやてのフィールドに、黒き羽を持つモンスターが二体、フィールドに召喚される。
いずれのモンスターも効果は強力なのだが、先攻一ターン目では全力を発揮することはできない。

しかし、状況を打破出来るカードは既にはやての手にあり、現在フィールドに伏せられている。
これで恐らくはバーンダメージを無効に出来るはずだ。はやてはゴクリと、生唾を飲み込む。

「俺のターン、ドロー」

ロットン手札5→6

「俺は≪ガトリング・オーガ≫を召喚！」

「っ、アレか……？」

ロットンのフィールドに召喚された、腹にガトリング砲を埋め込んだモンスター。
そのモンスターに、はやては目を細める。あれがなのはを敗北へ追いやったカードなのだろうか。

一体どんな手段でなのはを敗北させたのかは分からないが、自分はそう簡単には負けない。
すでに準備は終えてあり、次のターンから怒涛のシンクロ召喚を行

い、場を制圧すれば良いのだから。

「（……ちっ）」

一方、エースであるガトリング・オーガを召喚したロットンは内心で舌打ちした。
その理由とは、ガトリング・オーガを召喚した際にはやてが発した「アレか？」と言う言葉。

あの言葉から察するに、恐らくこちらの手の内はバレていると考えて良いだろう。
ガトリング・オーガの効果はいかな決闘者と言えど、一ターンで決着をつけてしまう強力なモノ。

それを前に、あの余裕の表情。
恐らく、ガトリング・オーガに対する対策がしてあるのだろう。

「ちっ」とロットンは再び小さく舌打ちを行うと、手札のカードに視線を移す。
早急にはやてたちを倒しておきたかったが、伏せを除去しない限り、倒すことは難しいだろう。

「俺は手札のカードを3枚伏せる」

「（罠カードか……？　なんや、厄介そうなカードや……）」

「そして伏せたカードを墓地に送り、≪ガトリング・オーガ≫の効

果発動！
　フィールドにセットされたカードを任意の枚数墓地に送り、送った枚数×８００ポイントのダメージを相手に与える！」

「っ、なんやて！？」

「ファイアッ！」

ガトリング・オーガの肩に装着された弾倉に弾が装填され、それらが一斉に放たれる。
はやての視界に映るのは、視界を埋め尽くさんばかりに放たれた弾丸の数々。

これらをすべて食らえば、大ダメージは必至。
はやては咄嗟に、伏せていたカードを発動させた。

「≪エネルギー吸収板≫発動！
　相手のカードによって受ける効果ダメージを無効にし、無効にした数値だけライフを回復する！」

エネルギー吸収板
通常罠
相手がコントロールするカードの効果によって自分がダメージを受ける場合、
そのダメージを無効にし、無効にした数値分だけ自分はライフポイントを回復する。

はやてＬＰ４０００→６４００

「ちっ、やっぱりな」

ロットンの初撃を防ぎ切り、はやてはホッと安堵の息を漏らした。
なるほど、あれがなのはを一ターンで沈めたカラクリか。はやては内心で納得する。

たしかにあんな強力な効果を持ったカードを使われれば、なのはと言えど一ターンで沈むだろう。
だが、すでに相手の手札は残り二枚。バーンではやてを倒すことは出来なくなっている。

「俺は手札から魔法カード≪埋葬呪文の宝札≫を発動！
自分の墓地の魔法カード三枚を除外し、デッキからカードを二枚ドローする」

埋葬呪文の宝札　（アニメオリジナルカード）
通常魔法
自分の墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外して、自分のデッキからカードを2枚ドローする。

ロットン手札2→3

「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

ロットン手札1
場　ガトリング・オーガ　伏せ×2

「私のターン、ドロー！」

はやて手札３→４

「一気に攻めさせてもらうで！　手札から≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を特殊召喚！
　このモンスターはフィールド上に「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、特殊召喚することが出来る！」

「レベル３のチューナーか。狙いはレベル７のシンクロ召喚ってところか」

「レベル４≪ＢＦ－精鋭のゼピュロス≫にレベル３≪ＢＦ－疾風のゲイル≫をチューニング！
　黒き翼よ！　天空へと駆けあがり空を舞え！　シンクロ召喚！」

合計７つの星が緑色のリングを通過し、極太の閃光が緑色のリングを焼いた。
そして現れるのは、全身を鎧に身を包んだ翼人の姿。そのモンスターこそ、はやてのデッキのエース。

「舞いあがれ疾風！　≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫！」

「ちっ、攻撃力２５００……、かなり厄介なモンスターだな」

「バトルフェイズ！　≪ＢＦ－黒槍のブラスト≫で≪ガトリング・オーガ≫を攻撃！
　デス・スパイラル！」

エースであるアーマード・ウィングを召喚し、はやてが一気に攻勢に出た。
先鋒は黒槍のブラスト。こちらは貫通効果を持っており、守備表示のモンスターには抜群の相性を誇る。

黒槍のブラストはその手に持った、自身の名前と同じ黒い槍を手に持つと、一気にガトリング・オーガへと肉薄した。
その手に持った黒い槍を構え、一気にガトリング・オーガを破壊しようとする。

だが、それを許すほど、ロットンは甘くは無かった。

「伏せカード≪バックアタック・アンブッシュ≫を発動！
このカードは相手が攻撃を宣言した時に発動。バトルフェイズを強制終了し、相手フィールド上のモンスターの数だけ、
俺のフィールドに「アンブッシュ・トークン」を特殊召喚する。
お前のフィールドにモンスターは二体。
よって俺のフィールドには、アンブッシュ・トークンが二体特殊召喚される」

バックアタック・アンブッシュ（アニメオリジナルカード）
通常罠
相手モンスターが攻撃してきた時に発動する事ができる。
バトルフェイズを終了し、自分フィールド上に「アンブッシュ・トークン」（戦士族・地・星１・攻／守１００）を、
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターの数だけ特殊召喚

する。
「アンブッシュ・トークン」１体を特殊召喚時にリリースする事で、相手ライフに５００ポイントダメージを与える。

ロットンの発動した罠カードの効果により、バトルフェイズが強制終了される。
このバトルフェイズを強制終了させる効果は意外と厄介で、他のモンスターで攻撃することが出来ない。

エースでありアーマード・ウィングによる攻撃を見事に防がれ、はやては苦い表情を浮かべた。

「ちっ、しかもトークンまで残されてしもたか……。これはちと、厄介なことになりそうやな」

「さぁ、まだテメェのターンだぜ？　カードを伏せるか、エンド宣言を行いやがれ！」

「くっ、ターンエンド」

はやて手札３
場　アーマード・ウィング　ブラスト

「俺のターン！」

ロットン手札１→２

「俺は場の二体のアンブッシュ・トークンをリリースし、手札から

≪ロングバレル・オーガ≫をアドバンス召喚！」

「上級モンスター……っ！」

ロットンのフィールドに現れたのは、長大なスナイパー・ライフルを携えた獣人の姿だった。

召喚された相手モンスターは守備表示であり、相手の守備力は３００と高い。

まず戦闘破壊することは無理だろう。

しかし、アーマード・ウィングの効果ならばロングバレル・オーガを倒すことが出来る。

この勝負、貰った。はやては内心で、ニヤリと会心の笑みを浮かべた。

「≪ロングバレル・オーガ≫の効果は相手フィールド上の攻撃力のもっとも高い攻撃表示モンスター一体を破壊し、
そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを、相手に与える」

「なっ……！　と言うことは……！」

「≪ロングバレル・オーガ≫！　≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫を打ち抜け！
グレートスナイプ・ファーストショット！」

「――――～～～ッ！」

ロングバレル・オーガがその手に携えたライフルの照準を、アーマード・ウィングに合わせる。
そして照準を合わせられたライフルから、一発の弾丸がアーマード・ウィング目がけて発射された。

戦闘に対して滅法強いアーマード・ウィングだが、効果による破壊への耐性は何一つとしてない。
その結果、ロングバレル・オーガから放たれた銃弾により、アーマード・ウィングはその場で爆散する。

「くぅううっっ！！」

「主はやて！」

「っ！　なっ！？」

アーマード・ウィングが破壊され、はやての周囲に黒煙が立ち上る。
咄嗟に腕で目を庇っていたはやてだったが、リインフォースの警告の声に顔を上げた。

「≪ＢＦ‐アーマード・ウィング≫の攻撃力は２５００。その半分のダメージをくらいな！」

彼女の視線の先には、空中でその姿を止めている先ほど放たれたライフルの弾。

はやてがその姿を捉えたと同時、弾丸ははやて目がけてその身を躍らせた。

「うわぁあああっっ！！」

はやてＬＰ６４００→５１５０

「はっはっはっ！　どうしたお嬢ちゃん、ギブアップにはまだ早いぜ！」

その身に突き刺さる様なダメージを耐えたはやてに、ロットンの愉快そうな声が掛かる。
実際、はやてのライフは未だほとんど削られてはいない。先ほど回復したライフがいくらか無くなっただけだ。

はやては鈍痛を覚える身体を無視すると、鋭い視線をロットンへと向ける。
ロットンはこちらに向いたはやての目を見つめると、ニヤリと笑みを浮かべた。

「な、何を……！」

「≪ロングバレル・オーガ≫の効果は１ターンに二度まで行えるんだよ！」

「んなっ！？」

ロングバレル・オーガ（アニメオリジナルカード）
属性不明／★７／種族不明／攻　不明／守３０００
相手フィールド上に攻撃表示で存在する攻撃力が一番高いモンスター１体を破壊し、
そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手ライフに与える。
この効果は１ターンに２度まで使用できる。

「対象は≪ＢＦ‐黒槍のブラスト≫！
グレートスナイプ・セカンドショットォッ！」

ロングバレル・オーガが再び、その長大なライフルをはやての場のモンスターへ向けた。
そして放たれるのは二発目の弾丸。咄嗟に場のモンスターを守ろうとするが、守る手段が存在しない。

その結果、黒槍のブラストはその身に銃弾を浴び、先ほどのアーマード・ウィングと同じように爆散。
濛々と黒煙が周辺へと立ち上り、はやてたちの視界を埋め尽くす。

「そして破壊した黒槍のブラストの攻撃力の半分、８５０のダメージを受けな！」

「っ！　きゃぁあああっっ！！」

はやてＬＰ５１５０↓４３００

そしてアーマード・ウィング。黒槍のブラストを貫いた弾丸が、はやての身体を貫く。
幸いにも非殺傷設定のおかげで身体への直接的なダメージは無いが、精神的余裕は消え失せていた。

せっかく召喚したエースモンスターは早々に破壊され、あまつさえ自分のフィールドにモンスターは０。
このままターンを終わらせる訳にいかない。はやては被弾した痛みをそのままに、伏せていたカードを発動させる。

「くっ、モンスターが全滅か……っ！　手札も残り三枚、これはちと厳しいで」

「くくっ、俺の場に≪ロングバレル・オーガ≫が居る限り、お嬢ちゃんに逆転の手立ては無いぜ？
俺はこのままターンエンドだ」

ロットン手札１
場　ガトリング・オーガ　ロングバレル・オーガ

「くっ、私のターン、ドロー！」

はやて手札３→４

「（よっしゃ、来た！）」

はやてはデッキからドローしたカード――黒い旋風の姿に、会心の笑みを浮かべる。

このカードがあれば、デッキから新たな「ＢＦ」と名のついたモンスターをサーチする事が出来る。

現在の手札は黒い旋風を合わせて四枚。
状況を打破するには、十分すぎるほどあった。

「いくで！　私は手札から≪黒い旋風≫を発動！
そして≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫を通常召喚！　≪黒い旋風≫の効果を発動するで！」

「ちっ、モンスターをサーチするカードか。厄介だな」

「私はシュラよりも攻撃力の低い≪ＢＦ－月影のカルート≫を手札に加える」

はやて手札４→３

はやてが手札に加えたカードは、ＢＦ専用のオネストである月影のカルート。
これにより、ＢＦと名のついたモンスターが戦闘で破壊されることは、まず無くなった。

そして残る攻め手だが、はやては迷うことはない。
既に彼女の脳裏には、勝利への方程式が組み上がっているのだから。

「さらに自分の墓地に存在する≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を選択し、≪アゲインスト・ウィンド≫を発動！

私は選択したモンスターの攻撃力分のダメージを受け、そのモンスターを手札に加えることが出来る！」

はやてＬＰ４３００→３０００

「んな！？　ま、まさか二体目のアーマード・ウィングがいやがるって言うのか！？」

「≪ＢＦ－疾風のゲイル≫を特殊召喚！
そしてレベル４≪ＢＦ－蒼炎のシュラ≫にレベル３≪ＢＦ－疾風のゲイル≫をチューニング！
黒き旋風よ！　天空へ駆けあがり空を舞え！　シンクロ召喚！
舞いあがれ疾風、≪ＢＦ－アーマード・ウィング≫！」

※

「これは……貰った！」

はやてのフィールドにシンクロ召喚された二体目のアーマード・ウィング。
その姿に、リインフォースは勝利を確信した笑みを浮かべる。

たしかにロングバレル・オーガは高い守備力を持つ厄介なモンスターだ。
並大抵のモンスターでは戦闘破壊することは難しいだろう。

しかし、はやての手札には場の「ＢＦ」と名のついたモンスターの攻撃力を上昇させる月影のカルートがいる。
その上昇値は１３００。アーマード・ウィングにその数値を加えることで攻撃力は３８００となり、ロングバレル・オーガを破壊できる。

「いっけぇ、アーマード・ウィング！　≪ロングバレル・オーガ≫を――」

そしてはやてが攻撃宣言を行おうとする。既に相手の手札は残り１枚。
鬼柳の様なデッキで無い限り、ほぼ勝負が決まったと言える状態だ。

だが、ロングバレル・オーガへ向かったアーマード・ウィングがピタリとその場に制止する。
そのアーマード・ウィングの突然の行動に、リインフォースは驚いた表情を浮かべた。

何故、戦闘を続行しないのか。
ここで攻めずにいては、ジワジワと追い詰められていくと言うのに。

「おっと、動くなよ？」

「！！」

と、リインフォースがはやてに視線を向ければ、ライフルの銃口を向けられたはやての姿が。
否、はやてだけではない。良く良く周囲を見渡してみれば、自分やなのはにまでライフルの銃口が向けられているではないか。

「っ、貴様それでも決闘者か！」

「リアリストだ」

はやてが怒りを込めた瞳でロットンを睨みつけるが、ロットンはどこ吹く風と言う様子だ。
実際、ロットンがしたと言う指示の内容を、リインフォースは聞いてはいない。

しかし、ロットンが危機に陥ったとき、この様に動くことを指示されているのだろう。
なんとも卑怯なロットンの行動に、はやてとリインフォースは怒りを堪えるのに必死だ。

「それと、ヴィヴィオだったか。アイツがどうなっても知らねぇぞ？」

「っ！？　ヴィヴィオに何かしたら、ただじゃ済まさない！」

「だったらそこで、大人しくしておきな」

「くっ」

周囲をライフルで囲まれ、下手に動けが人質が危険なこの状況。
はやては止むなく、ロットンへターンを回す。

迂闊だった。まさかこの様な暴挙に出る決闘者がいるとは思わなかった。
決闘者の風上にも置けない様なロットンの行動。到底許すことはできはしない。

しかし、もうどうする事も出来ない。手札にあるモンスターカードはヴァーユのみ。
残る一枚は緊急同調。とてもこの手札で、相手の猛攻を凌ぎ切ることは出来ないだろう。

勝てるデュエルを落としてしまった。
それどころか、なのはやリインフォースまで危険に晒してしまった。

とてもではないが、鬼柳やプレシアに顔向けできない。
そしてロットンがデッキからカードをドローする――――。

ロットン手札1→2

「俺は≪ロングバレル・オーガ≫の効果発動。
相手フィールド上の攻撃力の一番高いモンスターを狙撃！　グレートスナイプ・ファーストショット！」

「くぅううっっ！　アーマード・ウィング……ッ！」

はやてＬＰ３０００→１７５０

ロングバレル・オーガの効果により、はやてのアーマード・ウィングが再び破壊される。

そして与えられるダメージに、はやてはなんとか痛みを堪えた。

残る蒼炎のシュラが破壊されても、なんとかライフポイントは残るだろう。

だが、もしもロットンの手札が魔法・罠カードだったら？　それを想像すると、はやての背筋が冷たくなる。

なんとかリインフォースやなのはを逃がしてやりたいが、こう周囲を囲まれていては逃がすことはできない。

万事休すか。はやては悔しげに唇を噛み締める。

そして、二発目の弾丸が放たれようとしたとき――――不意に、倉庫の中を爆発が襲った。

「な、なんだ！？」

「う、うわぁ！」

「主はやて！」

廃倉庫の中を激しい揺さぶりが襲い、誰一人として立ったままで居られる者はいない。
それぞれが床に手を着き振動が納まるのをその場で待っていると。
廃倉庫の中、緊迫した状況下で、天へ轟かんばかりの竜の咆哮が響き渡る。

「っ、何者だ、テメェ……！」

そして竜の咆哮が響き渡ると同時、廃倉庫の中に第三者の靴音が響き渡った。
その靴音はカツ、コツと静かな音を立てつつ、はやて達――ロットンの元へ向かっていく。
そして、靴音の主が口を開いた。

「お前の相手は俺だ。――――バーン野郎」

「っ、テメェは……！」

暗闇の中から姿を現したのは一人の青年。
薄水色の髪を肩先まで伸ばし、顔の右半分には黄色いマーカーが刻まれている。
それはとある世界では犯罪者の証。しかし、その青年は堂々とした歩みでロットンへ向かう。

カチャ、と彼の首から下げられたハーモニカが微かに揺れた。首から下がっているハーモニカは、鈍い光を放ち存在を誇示する。

ロットンにとってはまったく素姓の分からぬ第三者。
だが、はやてやリインフォース達は違う。彼の正体を、彼の実力を知っている。

はやては廃倉庫の中に、突如として現れた頼れるリーダーの姿に歓喜の笑みを浮かべる。
彼が来てくれた。彼が来れば、この窮地を脱することが出来ると確信できる。

そして、はやてがその青年の名前を呼ぶ。

――――鬼柳兄ちゃん！　と。

「チームサティスファクション・リーダー、鬼柳　京介。
――満足させてくれよ？」

現れた青年――鬼柳はニヤリと笑みを浮かべると、頼もしい笑みを浮かべてそう告げた。

二十五話　「なのはを奪還せよ！　チームサティスファクションの絆！　後編」

次回予告

廃倉庫の中へ姿を現した鬼柳。
彼の前に、ガトリング・オーガを従えるロットンが立ち塞がる。

鬼柳はなのはとヴィヴィオを奪還すため、ロットンとのデュエルを行う。
しかし、そのデュエルの途中、突如としてなのはとヴィヴィオに異変が起こる。

果たして、彼女たちの身に起こった異変とは一体？

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「ライフ０！　極限でのデュエル！」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　前編」（前書き）

デュエルすると言っておきながらデュエル無し。
次回からホントにデュエルしますのでどうかお待ちを。

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　前編」

～ミッドチルダ　某所～

「はぁあああ……」

憂鬱そうなため息を吐きながら、一人の少女がミッドチルダのメインストリートを歩く。
年のころは５～６歳ほどだろうか。まだ、小学校にも通っていないくらいの年頃だ。
彼女が歩くたびに、頭の両脇で結った橙色の髪がピョコピョコ揺れる。
そしてそんな彼女の隣を歩くのは、赤いサングラスを掛けた一人の青年だった。

「ティアナ。何をそんなにため息を吐いているんだ？」

「だって、当たり前でしょ？　私はブルーノに教えてもらえれば良かったのに……」

青年――ブルーノの問いかけに、橙色の髪の少女――ティアナがブツクサと答える。
彼らが言い争っている話の内容とは、ティアナの持つデュエルモンスターズの知識が関係していた。

ティアナは兄とブルーノとのデュエルを見ていたが、デュエルモンスターズはごく基本的な知識しか知らない。
これは一重に、ティアナがデュエルモンスターズに興味を示さなかったせいだろう。そのせいで、基礎的な知識しか持っていなかった。

だが、そんなティアナに転機が訪れる。
それは早すぎる兄の死。

そして兄が墓場に埋葬される際に聞こえた、心ない暴言がティアナの心に火を着けた。
兄が辿りつけるはずだったクリアマインドの境地。そこへ至り、兄が無能で無かったことを証明する。

そう決意したティアナは、同居していたブルーノの知恵を借り、デュエルモンスターズについての知識を吸収していった。
幸いにもアドバンス召喚や融合召喚、さらにシンクロ召喚などは兄のデュエルを通じてティアナは知っている。

だが、それだけで勝てるほどデュエルモンスターズは甘くは無い。
魔法や罠、モンスターをバランスよく投入したデッキの構築力。相手のデッキを観察し、それに対する適切な判断を下す判断力。

それら――主に経験がティアナには不足していた。

そこで今回、ブルーノがティアナにデュエルモンスターズの経験を積ませるために、
ミッドチルダにあると言うデュエルモンスターズ専用のスクール――通称、デュエル・アカデミアに通わせることにしたのだ。

現在、彼らはデュエル・アカデミアで編入試験を受けるために移動中なのである。

「いいや、私だけでは、ティアナにデュエルモンスターズの全てを教える事なんて不可能だ。
幸い、デュエルモンスターズについて学べる施設があるんだ。使える物は使っておいた方が良い」

「それはそうなんだけどさぁ……」

「そもそも、リクルーター相手に連続で攻撃を仕掛けるモノじゃないとアレほど……」

「うぅわぁあああっ！　ストップ！　ブルーノストップ！」

ブルーノが語りだした苦々しい思い出に、ティアナが頭を抱えてゴロゴロと地面を転がる。
もはや先の思い出は、忘れ去りたいほどの黒歴史なのだ。リクルーター相手に何度も殴りかかることなど。

クリッターなどの強制効果でない限り、リクルーターは魔法や罠・モンスター効果で潰すのが基本だ。
下手にリクルーターを戦闘破壊して厄介なモンスターを特殊召喚されたら目も当てられない。（例・真紅眼の不死竜など）

事実、ティアナはリクルーターに迂闊にも攻撃を仕掛け、ブルーノの手札にＴＧのモンスターを呼びこませてしまった。
そのせいで、何度ブルーノから注意を受けたのか分からない。注意

された回数を思い出し、ティアナは再度、憂鬱なため息を吐いた。

「……うん？」

と、ティアナが自分の経験の少なさ、実力の低さ、判断力の低さ。
これら三つの絶望を味わい、地面に倒れ伏していると。

不意に、ブルーノが声を上げた。

「？　どうしたの、ブルーノ」

「……いや、騒がしいなと思って」

「あぁ、ホントだ」

ブルーノに誘われるまま、ティアナは視線を空へと上げる。
すると上空では、空を飛行して逃げる魔導師と、その魔導師を追跡をしている管理局の局員の姿があった。

どうやら、ミッドの空を無断で飛んでしまったらしい。
管理局の局員が空を飛ぶのを見ているが、こうして取物になっているのは珍しい。

「くっ、≪インヴェルズ・ギラファ≫をアドバンス召喚！」

「インヴェルズ……？　聞いたことが無いテーマだな」

ティアナが茫然と上空で繰り広げられている大取物を見ていると。
不意に彼女の隣で、逃げる魔導師が召喚したモンスターを見たブルーノがポツリと呟いた。

ブルーノのその呟きを聞き、「そう言えば」とティアナも納得する。
自宅には兄が集めたデュエルモンスターズのカードが多々あるが、インヴェルズは見たことが無い。

よほど珍しいテーマなのか。それともたまたま兄が入手していなかっただけなのか。
どちらなのかは分からないが、どんな傾向を持ったテーマなのかは興味がある。

特殊召喚を多用するデッキなのか。サーチ手段を多く持つデッキなのか。
傾向を知れば知るほど、対策を立てやすくなる。

その判断力を養うために。
ティアナは上空でデュエルをしている魔導師と、管理局員のデュエルを見やる。

「さて、ティアナ。見ていたい気持ちは分かるけど、そろそろ行こう。時間に遅れてしまう」

「あぅう……、はぁ～い」

だが、そんな彼女の想いも空しく。
ブルーノに声を掛けられ、彼女たちはその場を後にする。

他人のデュエルをもっと見ていたいと言う心残りはあるが、まぁ良いかとティアナは内心で納得した。
どうせデュエル・アカデミアに編入すれば、他人のデュエルをイヤと言うほど見ることが出来るだろう。

ならばそこで、出来る限り自分を成長させれば良い。
ティアナは自身をそう納得させると、未だ見ぬデュエル・アカデミアへ向けて足を進めた。

そして、そこでティアナは出会うことになる。

自分の背中を預けるに相応しい相手を。自分のパートナーとして申し分ない相手を。

ブルーノや自分とチームを組み、次元世界の大会へ乗り出すことになるであろう人物との出会いを。

ティアナは、まだ知る由もなかった。

※

「鬼柳、さん……？」

突如として現れた頼れるリーダーの背中に、なのはは茫然とした視線を送っていた。
すでに憎悪や怒りに支配されていた頭は急激に冷やされ、彼女の頭は真っ白になっている。

何故、彼がここに居るのだろう。なのはは疑問に思った。
彼にとって、フェイトが一番大切な人のはずなのだ。自分ではない。
なのに何故、彼がこの場に居るのだろう。
なのはは混乱する頭で必死に考えつつ、鬼柳の背を見つめる。

「無事か、なのは、はやて、リインフォース」

「鬼柳兄ちゃん！　助かったで！」

「危機一髪だったぞ……」

そしてなのはに見つめられているとは知らない鬼柳は、怪我のない

なのは達の様子に安堵の笑みを浮かべた。
久しぶりに見る鬼柳のその笑顔に、なのはは僅かに心が晴れる思いを抱く。

今までは彼のすぐ傍には、金色の髪の少女が張り付いていた。故に、彼の笑顔を見ても気分が沈んだ。
けれど、この時ばかりは違う。件の金色の髪の少女の姿は無い。ようやくまっすぐに、鬼柳を見つめることが出来た。

「（う、ん……？）」

と、鬼柳の頬もしい笑みに目を奪われていると。
なのはは不意に、自分の胸に宿る違和感を覚える。

何故か唐突に、彼を手に入れなければならない様な。そんな気がしてならないのだ。
いつも彼の傍に居る少女はいない。チャンスだ。この機会に、彼を奪ってしまえば良い。

なのはの心の内に眠る何か。そう。
まるでもう一人の自分が、なのはに妖しく囁いてくる。

それはさながら、闇の誘惑と言ったところか。

「何者だ、テメェ……」

そしてようやく恐慌状態から立ち直ったのだろう。
ロットンが敵意に満ちた視線を、新たに現れた鬼柳へと向ける。

だが、それと時を同じくして。
なのはやはやてたちを囲んでいたデュエルギャングの下っ端たちが、不意に激しい衝撃で吹き飛ばされた。

そして同時に廃倉庫の中に響き渡るのは、気高き竜の咆哮。

「なっ！？　こ、コイツは……！」

「んふぅ。邪魔な人たちは片付けたよ、京介」

「おう。助かったぜ、フェイト」

廃倉庫の中に現れた、白銀に輝くドラゴン――スターダスト。その姿にロットンの目が奪われた。
そしてその足元からこちらに向かって駆けてくるのは、なのはに嫉妬を抱かせる原因の少女。

腰の辺りまで伸ばした金色の髪はサラサラと揺れ、彼女が駆ける度にツインテールがピョコピョコ揺れる。
こちらに駆けてくる少女が浮かべる笑みは、たった一人に向けられたとびっきりの笑顔。

少女――フェイト・Ｔ・鬼柳の登場に、なのはは思わず息を呑んだ。

「――――っ」

「フェイトちゃんも来たんか！」

「えへ。京介が心配だったから」

鬼柳の元まで駆け寄ったフェイトは、なのはに気づく様子を見せずに無邪気に笑った。

それが酷く、なのはの心の中をかき乱す。やめろ、そんな笑顔を彼に向けるな。そう叫びだしたい。

だが、その言葉を叫ぶよりも先に状況が動いていた。

「ゴチャゴチャ騒いでんじゃねぇ！」と、ロットンの怒声が廃倉庫の中に響く。

「よくもデュエルの邪魔をしてくれたな。
どう落とし前、着けてくれるんだ？」

「笑わせるな。アレがデュエルだって？
ふざけるのも大概にしろ」

鬼柳の挑発する様なその言葉に、ロットンの眉がピクリと動いた。どうやら先のデュエルの一部始終は、鬼柳達に見られていた様である。

ロットンは思わず「ちっ」と舌打ちすると、敵意の籠った視線を鬼柳にぶつけた。

鬼柳もまた、ロットンから向けられる敵意の籠った視線を、同様に見つめ返す。

鬼柳とロットン。両者が睨みあい、廃倉庫の中にピリピリとした緊張感が生まれた。

下手に誰かが物音を立ててしまえば、この張り詰められた緊張の糸は切られてしまうだろう。

誰一人動かぬこの静寂。

だが、いつまでも動かないままと言う訳にもいかない。

それぞれがどう先手を打つか読みあい、互いに互いの思考を読みあう。

暫しの静寂の後、先に動いたのはロットンだった。

「……そう言えばテメェの顔、見たことがあるぜ。
クリアマインド覚醒者であるフェイト・テスタロッサの旦那――
鬼柳　京介だろ？」

「へぇ。俺も随分、有名になったもんだ」

ロットンの確かめる様な声に、鬼柳は微かに顔を歪めながら答えた。

事実、彼もそう思っているのだろう。ここまで有名になるとは思いもしなかった。

だが、クリアマインド覚醒者と言うネームバリューはそれほど凄いらしい。

そして鬼柳の言葉に納得したのか。ロットンはニヤリと笑みを浮か

べる。

「そうか。なら話は早い。
鬼柳、お前……、そこの女のデッキとテメェの嫁が持ってる≪スターダスト・ドラゴン≫のカードを賭けて、俺とデュエルしな」

「「「なっ！？」」」

ロットンから提案された衝撃の提案に、なのはとはやて。そしてリインフォースが息を呑んだ。
それもそうだろう。わざわざ不正を働く決闘者相手に、賭けデュエルに乗る者はいないはず。

しかし、ロットンが提案した取引の内容が、有無を言わさぬモノとなっていた。
鬼柳が勝利した際に得られるもの。それは現在、なのはの手から離れている彼女の魂のデッキ。

だが、鬼柳が敗北すれば彼の妻であるフェイトの持つスターダスト・ドラゴンが奪われてしまう。
決闘者の魂と呼べるデッキを勝手に賭けて行われる非道なデュエル。
その行為に、なのはの頭を怒りが支配する。

そしてなのはの怒りに呼応するかの様に彼女の瞳が赤く輝き、心を憎悪が支配する。

「くくっ、俺は良いんだぜぇ？

そこの女の持ってるデッキがズタズタに切り裂かれちまってもよお？」

「貴様！　決闘者としてのプライドは無いのか！？」

ロットンのわざとらしい挑発に、怒りに燃えたリインフォースが叫ぶ。

しかし、ロットンが動揺した様子は無い。それどころか、どうする？　と言う視線を鬼柳に向けている。

「「「……」」」

ピリピリとした緊張感が、再び廃倉庫の中を包み込んだ。

なのはとはやて、リインフォースが見つめるのは話題の中心となっている人物――鬼柳。

鬼柳が受けるか否かで、なのはのデッキの未来が決まってしまう。

受けて欲しい。そして自分のデッキを取り返して欲しい。

頭を怒りに支配され、心を憎悪に支配されたなのはが心の中でそれを望む。

デッキとレッド・デーモンズ・ドラゴンが帰ってくれば、あのクソ野郎をぶちのめすことが出来るのに。

そして次の瞬間、鬼柳が口を開く。

「――――悪いが、俺は拒否するぜ」

出てきたのは、拒絶の言葉だった。

※

「まったく。プレシア、貴方は何をしているのですか」

「し、仕方が無いじゃない！」

時空管理局本局のとある一室。

そこでプレシアとリニスは、久方ぶりの再会を果たしていた。

しかし、プレシアの手には拘束魔法であるバインドが掛けられている。

彼女はつい先ほどまで管理局員約十名ほどと連続でデュエルを行い、敗北し捕えられたのだ。

ちなみにプレシアの罪状は無許可でのミッドチルダ上空の飛行、及び公務執行妨害となっている。

だが、誰かが怪我をした訳でもなく。公務執行妨害もそれほど重い妨害をした訳ではないと言うことで。

現在彼女はリニスとの面会が許されていた。

「はぁ……、まったく。
貴方は感情的になると、周りの物事が見えなくなる癖をどうにかした方が良いですよ」

「うぐっ……」

リニスの呆れた様なその呟きに、プレシアは息を詰まらせる。
良く良く思い返してみれば、確かに感情的になると周囲が良く見えなくなることがあった。

彼女の記憶の中で比較的新しいモノと言えば、フェイトが事故を起こしたときのモノである。
当時はもうこれ以上フェイトにアクセルシンクロの練習をさせぬため、キーカードであるフォーミュラ・シンクロンを燃やそうとしたのだ。

他にもこれまでの記憶を思い返してみれば、感情的になると碌な事が起こっていない気がする。
フェイトをこれ以上傷つけさせぬためとはいえ、彼女を拒絶してみたり。闇の書の意思に追いかけ回されたり。

どうやら自分が感情的になると、何かしらアクシデントが発生する様だ。

まるで呪われているかのようなこの状況に、プレシアは深いため息を吐く。

「はぁ。まぁ、終わったことをぐちぐち言っていても仕方がありませんしね」

「そ、それもそうね」

と、ようやくリニスの小言が終了し、プレシアはホッと安堵の息を吐いた。

助かった。これ以上言われ続けていたら、精神的に大分凹んでしまうところだった。

「幸い、なのはさんの救出にはクロノ執務官自らが出向いている様です。

ですので、さほど心配は無いと思いますけれど……」

「……問題は、ヴィヴィオちゃんの方ね」

そして部屋の空気がピンと張りつめたモノへと変わる。

先ほどまで両者の顔に浮かんでいた笑みは、もうどこにもその姿を見ることが出来ない。

そこにいるのは、先ほどまでの優しい、けれど何処か抜けているお母さんではない。

大魔導師として名を馳せた実力者――プレシア・テスタロッサがそ

こに居たのだから。

そしてそれはリニスも同様。

弟子を溺愛する使い魔と言う仮面を取り、主人であるプレシアをサポートする右腕としての仮面を着ける。

「地縛神……、あんなものが、まだ存在しているとは……」

そしてプレシアがリニスへ現状の説明を行う。

彼女の口から返ってきた答えは、半ば予想通りのモノだった。

プレシアが地縛神に相対したのは、過去に二度だけ。

その際に受けた重圧や恐怖は、これまで体験したことがないほど。

あんな危険なモノが、ヴィヴィオの身体の中に封じ込められていると言う。

リニスでなくても、顔を顰めるのは半ば仕方がないことだろう。

「しかも、ヴィヴィオちゃんに悪影響は出ず。

逆に彼女が好意を持った相手や、ヴィヴィオちゃんに好意を持った相手に悪影響が出ると言うオマケ付き」

「……たしか、なのはさんがヴィヴィオちゃんと共に居るのですよね？」

「えぇ、そうよ。恐らく、なのはさんに何かしらの悪影響が出ていると考えて良いわね」

「……」

プレシアのその言葉に、リニスが顔を歪める。
悪影響については、先の話の折にプレシアから聞いていた。

どうやらこれまでの地縛神とはタイプが違う様だが、それ故厄介なモノとなっている。
なのはに出ていると思われる悪影響。負の感情を増幅し、ヴィヴィオに盲目に近い愛情を覚えると言うそれ。

「負の感情が増幅されているとなると、フェイトに危害が出かねませんよ」

「そうなのよねぇ……」

そう。なのはの負の感情が増幅されているならば、フェイトは危険に晒されている。
なにせフェイトは、なのはからすれば好きな人を横から奪った憎い相手なのだ。

表面上は穏やかに見えても、心の内では嫉妬に狂っているかもしれない。
なんとも厄介な状態になったものだと、リニスは思わず嘆息する。

一体何時から、この次元世界はこうも邪神が闊歩する様な世界になったのだろう。

今後は是非ともご遠慮願いたい。神経をすり減らす思いは、もう十分だ。

「……ここは、大人しくクロノを頼りましょうか」

「……仕方が、無いわよね……」

リニスはため息を吐きながら、妥協案をプレシアに提示する。
それはなのはに悪影響が出るよりも先に、ヴィヴィオとなのはを保護してもらうこと。

もしもなのはが何かしらの悪影響を受けていれば、早急に治療を施してもらえばいい。
幸い、鬼柳達は現場に向かう様子は無かったようだ。故にこの場はクロノに頼ることとする。

プレシアは仕方が無いと言わんばかりだが、なのはやヴィヴィオの身の安全には代えられない。
なんとか無事に帰って来て欲しいと願いつつ、プレシアはソッと瞼を閉じた。

※

「な、んだと……？」

「き、鬼柳さん……！？」

廃倉庫の中に、ロットンとなのはの驚愕の声が響き渡る。
否、ロットンとなのはだけではない。はやてとリインフォース、こちらも驚愕の表情を浮かべていた。

彼らはてっきり、ロットンの提案を鬼柳は受けるものとばかり考えていた。
スターダスト・ドラゴンが賭けられているとは言え、鬼柳が勝たなければなのはのデッキはどんな扱いを受けるか分からない。

切り刻まれるのか。それとも燃やされるのか。踏まれるのか。
そんな心の底から震えあがる様な想像に、なのはは身体が震えるのを覚える。

「っ、テメェ……！　そこの女のデッキがどうなっても良いのか！？」

そしていち早く硬直から抜け出したロットンが、鬼柳を威嚇する様に怒声を上げた。
恐らく、ロットンはこう思っていたのだろう。決闘者にとって魂と呼べるデッキ。

それを賭けの対象にすれば、鬼柳は乗ってくると。
だが、彼の読みは外れた。鬼柳はロットンの提案を蹴り、拒絶の意思を見せた。

「き、りゅうさん……？　わ、私の……デッキは……？」

そして次に硬直から抜け出したのはなのは。彼女は縋る様な視線を鬼柳へと向けている。
すでに彼女の心は、デッキがどうなるか分からないと言う恐怖に支配されていた。

先ほどまで心を支配していた怒りや憎悪も、何処かへと姿を晦ましてしまっている。
現在この場にいるのは、長年共に闘い続けたデッキが無くなってしまうことに恐怖を覚えている一人の少女の姿だった。

そしてなのはが縋る様な視線を鬼柳へと向ければ、彼はなのはのその視線を真正面から見つめ返してくれる。
まるでなのはを安心させる様な。何も心配することは無いと言っている様な、彼の瞳がなのはを見据えた。

「あぁ。なのはのデッキなら――――――此処にあるぜ」

ロットンとなのは。はやてにリインフォースの視線を集めつつ、鬼柳はコートからある物を取り出す。

それは見慣れたカードの束。正面にあるのは紛れもなく、なのはのデッキに投入されているカード――レッド・デーモンズ／バスター。

自分のデッキの無事な姿になのはは安堵したように、地面にぺたりと座りこんだ。

そして鬼柳と相対しているロットンからは、驚きの声が上がる。

「っ、バカな！　そのデッキは俺が隠しておいたはず……っ！」

「生憎と、俺は鼻が利くんでな。
何処に大切なモノを隠すか、お見通しってわけだ」

ロットンの動揺する声に、鬼柳は笑みを浮かべながら答えた。

実際、彼はデュエルギャングが大切な物を何処に隠すかの見当はついていた。

伊達にチーム・サティスファクションと言うデュエルギャングを率いてはいない。

デュエルギャングの行動は、鬼柳には手に取る様に分かるのだ。ロットンは悔しげに顔を歪める。

「あぁ、それと。ヴィヴィオとか言う子供も保護させて貰ったぜ」

「な、なのはお姉ちゃん！」

「っ！　ヴィヴィオ！」

そして止めと言わんばかりに上がる、ヴィヴィオのなのはを呼ぶ声。
声が聞こえた方を見てみれば、フェイトのスターダストの背にヴィヴィオの姿がある。

どうやら怪我をしている様子は見られない。
埃などで多少汚れてはいるが、元気な姿そのものだった。

「どうした、ロットン。これで俺たちを縛る鎖は、何もないぜ」

「き、鬼柳ぅううううっっ！」

まさに形勢逆転。有利な状況から不利な立場に転落し、ロットンが悔しげに顔を歪める。
人質を奪われ、奪っておいたデッキも奪還された。これで残るは、ロットンの捕縛のみである。

ロットンは悔しげに顔を歪めながらも、キョロキョロと視線を周囲へと走らせた。
何か、何かないか。起死回生の一打となる様な何かが。

下っ端たちは無理だ。全員が先のスターダストの攻撃により、地面に倒れ伏している。
ならば逃走はどうかと頭を働かせるが、逃げてもスターダストが自分を追ってくるだろう。

万事休すか。ロットンの額に冷や汗が流れる。

「くはっ」

――――しかし、ロットンは見つけた。起死回生となるある物を。

「？　何がおかしい」

ロットンが奇怪な笑い声を上げ、鬼柳が訝しげな視線をロットンへ向ける。

しかし、ロットンはその視線に答えない。彼は口元に浮かぶ笑みをそのままに、腕のデュエルディスクへと手を伸ばした。

そしてそのエクストラデッキから、あるカードを取り出す。

ロットンのデッキにおいて不要なカードでありながら、この場を打開できるたった一枚のカードを。

「なら、コイツはどうだ？」

「っ！　それは……」

ロットンが取り出したある一枚のシンクロモンスターの姿に、鬼柳達は驚愕する。

だが、無理もない。何故ならばそのカードは本来、なのはのエクストラデッキに入っているべきカードなのだから。

そのカードに描かれているのは、紅蓮の業火を背にした一体の悪魔竜。
その強大なパワーは、とある世界のキングが魂としているカード。
その名を――――レッド・デーモンズ・ドラゴン。
なのはのエースにして切り札であるカードが、ロットンの手に握られていた。

「この≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫とテメェの嫁の持つ≪スターダスト・ドラゴン≫を賭けてデュエルと行こうぜ？
ちなみに拒否した場合、このカードがどうなるか分からねぇがな」

「くっ、ロットン！」

「テメェが勝てば、このカードは返してやる。
だが俺が勝ったら、スターダストとそこのガキは頂くぜ？　さぁ、どうする？　乗るか、乗らねぇか！？」

ロットンの非情な問いかけに、今度は一転。鬼柳が悔しげに顔を歪める。
スターダスト・ドラゴン。レッド・デーモンズ・ドラゴン。
どちらも二人の少女にとって、大切なカードである。
もしも下手をして負けてしまえば、フェイトのスターダストは奪われる。

しかし、このまま見逃せばレッド・デーモンズを奪われる。

ならばどうすれば良い。簡単だ。このデュエルに勝てば良い。

しかし、フェイトにとって大切なカードであり、彼女のデッキのエースを賭けるのは躊躇われた。

「大丈夫だよ、京介」

「っ、フェイト？」

だが、デュエルをするのを躊躇っている鬼柳の背中を、優しく押したのは彼の妻だった。

彼女は自身のエクストラデッキから、大切にしているであろうカード――スターダスト・ドラゴンを取り出す。

そして取り出したそのカードを、優しげな笑みを浮かべて手渡した。

鬼柳はフェイトの突然の行動に面喰い、茫然としたまま彼女のカードを受け取る。

「賭け札に使って？　京介、なのはのカードを取り返したいんでしょ？」

フェイトは鬼柳にカードを手渡すと、ニッと笑みを浮かべながらそう告げた。

なのはのカードを取り戻したい。それは紛れもなく、鬼柳の本音そのものだった。

「っ。でも、だからってフェイトのカードを「大丈夫」……フェイト？」

咄嗟に鬼柳は、スターダストをフェイトに返そうとする。
下手を打てばスターダストを奪われるかもしれない危険なデュエルだ。

そんな危険に、フェイトを巻きこむ訳に行かない。
しかし、フェイトが鬼柳の声を遮った。そして向けられるのは、絶対の信頼。

「京介は負けないって、信じてるから」

何処までも優しさに溢れた笑顔で告げられ、鬼柳の毒気が抜かれる。
そして次の瞬間には、彼はフェイトと同様に笑みを浮かべていた。

こうまで信じられてしまったら、もう逃げる訳に行かないではないか。
ある種の諦めを覚えつつ、しかしそれでいて、どうしようもない愛しさをフェイトに覚える。

真っ直ぐな信頼が心地良い。
彼女から真っ直ぐに向けられる信頼に、どうしてでも答えてやりたい。

「（そう言えば……）」

そしてふと、鬼柳は昔を思い出す。
遊星やジャック、クロウと共に初代チーム・サティスファクションを率いていた頃を。

あのときは皆が皆、互いを信頼し合い、背中を預けてデュエルをしていた。
仲間のフォローは率先して自らが引き受け、どんな窮地ですら切り抜けることが出来た。

そうだ。あの感覚だ。遊星が、ジャックが、クロウが。
自分を信頼し、背中を預けてくれているときの感覚に似ているのだ。

「……そうか。なら、やるっきゃねぇな」

ならば自分がここで引くわけにいかない。
仲間の期待に答えずして、何がリーダーだと言うのだろう。

フェイトから受け取ったスターダスト・ドラゴンのカードを自身のエクストラデッキに仕舞う。
それは鬼柳がロットンの賭けデュエルを了承したことを示す行為だ。
ロットンもまた、自身のエクストラデッキにカードを仕舞う。

ロットンと鬼柳。二人は互いにデュエルディスクを構え、オートシャッフルの機能を始動させた。
自動でデュエルディスクにセットされたデッキがシャッフルされ、

デュエルの準備が整う。

「俺が勝ったら、なのはの≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫は返してもらうぞ」

「あぁ。だが、俺が勝ったら≪スターダスト・ドラゴン≫とそのガキをもらう」

「そうか。なら――――」

「「――――決闘（デュエル）！！」」

逃げ場のない、真剣勝負の火蓋がここに切って落とされた。

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　前編」（後書き）

リアルでアンティデュエルはダメ、絶対。

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　後編」（前書き）

ＶＳロットンはこのお話で半ば終了かも。
アニメやとある幻想入り動画の様に行く訳にもいかないので。

それとロットンの使うとあるカード。
テキストとロットンの台詞が違う……。ロットンェ……

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　後編」

～ミッドチルダ　某所～

「まったく。予想外に時間が掛かった！」

耳元で風が唸りを上げる中を、クロノは猛スピードで飛翔していた。
向かう先は高町　なのはの持つデバイス――レイジングハートから出ている救難信号の元。

本来ならばとっくに現場に到着していてもおかしくなかったのだが、予想外の妨害に会ってしまった。
それはなのはの良き理解者であり、彼女が第二の母親と慕っている女性――プレシア・テスタロッサである。

彼女は本来ならば緊急時以外飛行できないミッドチルダの空を飛び、今の今まで管理局の局員に追われていたのだ。
クロノとしては彼女の捕縛を他の局員に任せたかったが、彼女の実力の前ではそれも無力。

プレシア・テスタロッサはその実力を如何なく発揮し、迫りくる管理局員をばっさばっさと殴り倒すのである。
そこでこの場に一番近いと言う理由で、クロノにお鉢が回ってきたのだ。

そのせいで現場へ向かう時間が遅くなり、クロノはこうして猛スピードで現場へ急行しているわけである。

『クロノ君！』

と、クロノが猛スピードで空を駆けていると。
不意に彼の顔の脇にモニターが表示され、同僚であるエイミィの顔が表示される。

「っ、エイミィか。どうした？」

『レイジングハートのポイントにはやてちゃんの夜天の魔導書の反応があるよ！
それとフェイトちゃんのバルディッシュの反応も！　はやてちゃんたち、もうすでに合流したみたい！』

「そうか。まったく、無茶をしてくれるな……」

エイミィの報告を聞き、クロノは思い切り深いため息を吐いた。
今回の事件に関して、民間人（はやてとリインフォースは除く）は関与が禁じられていると言うのに。

はやてやリインフォースはまだ良いが、フェイトまで巻き込むと言うのはどう言うことだ。
あまりの彼女たちの予想外の行動に、クロノはズキズキと頭痛を訴える。早く頭痛薬を飲みたい。

だが、今は予断を許さぬ状況だ。

頭痛薬を飲みに管理局へ戻ることなど許されない。

『うぅ～……、ホントは私が出られれば良かったんだけどね……』

「仕方がないさ。許可が出なかったんじゃ仕方が無い」

クロノが現状に対してため息を吐いていると、エイミィが申し訳なさそうに謝る。

それと言うのも、彼女は星界の三極神のうちの一柱――極神皇ロキを所持しているのである。

ロキの効果は強力で、ロキだけで戦局を覆すことすら可能とする力を秘めている。

そんな彼女が出撃すれば、容易にデュエルギャングを圧倒できるだろう。

だが、強い力には相応の責任が求められる。

今回の件もまさにそれで、エイミィの出撃が認められなかったのだ。

なにせ今回、敵と認識されているのは地縛神を宿した少女を誘拐したデュエルギャング。

彼らを相手に管理局の誇る最終兵器を出撃させる訳にはいかなかった。

『レイジングハートからの情報じゃ、相手はバーン効果を使うみたい。

デッキの調整は終わってるの？』

「勿論だ。ただ、パワー不足な感は否めないよ」

『あはは……、それは私も使ってて思ったかも』

クロノは今回、相手がバーン効果を持つ決闘者だと聞き、対バーンデッキ用にデッキを調整している。

と言っても、ベースは相変わらず管理局から支給されているポリスデッキ。下級モンスターから上級まで、火力不足が否めない。

なにせ切り札が攻撃力２３００のヘル・ツイン・コップだ。

条件付きで攻撃力が３０００ポイントまで上昇するが、それでも火力不足は否めない。

なのはの持つレッド・デーモンズ・ドラゴンの様な。フェイトの持つスターダスト・ドラゴンの様な。

鬼柳の持つインフェルニティ・デス・ドラゴンの様な。そしてエイミィの持つ極神皇ロキの様な。

安心してフィールドを制圧できるモンスターが、クロノのデッキには存在しなかった。

「――けど、愚痴ってても始まらない。

ボクは今、手元にあるカードで勝利を掴む。それがボクの勝ち方だから」

だが、それでデュエルを諦めるほど、クロノは落ちぶれていなかっ

た。
火力が足りないならば、頭を使えば良い。今手元にあるカードで、最高のフィールドを作り出せば良い。
切り札であるヘル・ツイン・コップが全力を発揮できるような。そんなフィールドを自分自身で作り出せばいいのだ。そしてそれを行うだけの腕が、クロノにはある。

『うん、そうだね。じゃあ、クロノ君。頑張って！』

「あぁ！」

そしてエイミィが激励の言葉と共に、モニターの画面から姿を消した。
恐らくクロノをサポートするために色々とサポートしてくれるのだろう。

なんとも心強い仲間の声援に背中を押されながら、クロノはレイジングハートの救難信号が出ているポイントまで急いだ。

その際に自身の左目が僅かに発光していることに、彼は気づかぬまま。

※

「「決闘（デュエル）！」」

同時に放たれたデュエル開始の合図。
それと時を同じくして、鬼柳とロットンはデュエルディスクから手札を抜き取った。

今回のデュエル、負ける訳に行かない鬼柳は特に念を入れて手札を見つめる。
相手はバーンモンスターを使用する決闘者だと言うのは分かっている。油断できない。

「先攻はいただくぜ！」

そして鬼柳が手札を抜き取ると同時、ロットンの威勢の良い声が響き渡る。
ハッと我に返り、視線を正面のロットンへと向けてみれば。そこにはデッキトップに指を置いているロットンの姿。

チラ、とデュエルディスクに設定されている先攻、後攻を決めるウィンドウにも、鬼柳が後攻だと表示されていた。
どうやら今回、鬼柳はロットンのバーンダメージを手札にあるカードだけで防ぎ切らねばならないらしい。

「（……面白れぇ）」

しかし、鬼柳の顔に不安の色は無かった。
この極限状態の中、ロットンを相手に勝利を収める。
もしもそうすることが出来たならば、とても満足出来る事ではないか。
鬼柳はロットンがカードをドローするのを見つめながら、そう思う。

ロットン手札5→6

「鬼柳兄ちゃん、気を付けてやー！
相手は「おっと。はやて、そこまでだ」き、鬼柳兄ちゃん……？」

と、ロットンが手札からカードをプレイしようとしたとき、はやての声が鬼柳に向けられる。
どうやら対ロットンについての忠告を鬼柳に行おうとしたようだ。
しかしそれを、肝心の鬼柳が遮る。

当然助言しようとしたはやてとリインフォースは訝しげな視線を鬼柳へと向けていた。

だが、鬼柳は二人の視線はどこ吹く風。普段の自然体な様子で、ロットンと相対している。

「デュエル中の助言はルール違反だぜ」

「そ、そやけど……！」

「大丈夫だ。俺は負けない」

「……そ、そか！　なら、がんばりぃっ！」

はやては納得していなかった様子だが、鬼柳のその自信に溢れる言葉に矛を収める。
そして再び廃倉庫の中に静寂が舞い戻ると、ロットンが手札から一体のモンスターを召喚した。

そのモンスターは、なのはやはやてを窮地に追い込んだ凶悪なモンスター。

「俺は≪ガトリング・オーガ≫を召喚する！」

「っ。それがお前の切り札か……」

「そして、弾を装填！」

ガトリング・オーガが召喚され、フィールドに五枚の魔法・罠カー

ドがセットされる。
これでガトリング・オーガの効果を使用し、セットした五枚のカードを墓地に送ればロットンの勝ちだ。

「（――――だが）」

しかし、ロットンは鬼柳の手札を警戒する。
はやてに己の手の内がバレていた様に、鬼柳にもバレていると考えた方が自然だ。

恐らく、バーン効果をメタする様なカードがデッキに投入されているであろう。
中には手札から奇襲してくる厄介なカードがあるかもしれない。自ずと、ロットンも緊張する。

「（ここは安全策を取るか）」

様々なパターンを考慮したうえで、ロットンは安全策を取ることにした。
それは最初に三枚のカードを墓地に送り、ガトリング・オーガの効果で２４００ポイントのダメージを与えること。

これでもしもバーン効果を封じる様なカードが発動されれば、残った手札でガトリング・オーガを護る。
仮に何もなければ、再びガトリング・オーガの効果を使用し、鬼柳のライフを０にすれば良い。

そして待っているのは、現在次元世界で最も名が広まっていると言っても過言ではないカード。
このデュエルの先を想像し、ロットンはニヤリと笑みを浮かべる。

「≪ガトリング・オーガ≫の効果発動。
場の三枚のカードを墓地に送り、鬼柳。貴様に２４００ポイントのダメージを与える！」

「くっ」

「ファイアッ！」

フィールドに伏せていた三枚のカードを墓地に送り、ガトリング・オーガの効果が発動される。
ガトリング・オーガの腹部から突出していたガトリング砲から、数多もの弾丸が鬼柳に向けて放たれた。

「ぐっ……！」

鬼柳ＬＰ４０００→１６００

それら全ての弾丸をかわすことなく、鬼柳はその身に浴びる。
既にライフを半分以上削られ、二枚のカードを効果で送られただけで敗北する。

だと言うのに、鬼柳は何かアクションを起こそうとはしなかった。

「き、鬼柳兄ちゃん！？」

「≪エフェクト・ヴェーラー≫の様なカードは無いのか！？」

鬼柳が手札からカードを発動しなかったことが意外だったのだろう。
はやてとリインフォースが悲鳴に近い声を上げながら、必死に警告を促す。

だが、それでも尚、鬼柳はノーリアクション。
ただただ敵意が籠る視線を、ロットンへ向けているのみである。

「き、鬼柳さん……？」

そして一方。この状況を不安げな様子で見つめるのは鬼柳の背後に立つなのは。
彼女は不安げな表情で、こちらに背中を向ける鬼柳を見つめる。

彼は本当に、自分の大切なカードを取り戻してくれるのだろうか。
もしかしたら、何も出来ずに敗北するのかもしれない。そんな不安がなのはの胸の中を占める。

負けないで。レッド・デーモンズ・ドラゴンを取り返して。
必死にそう願いながら、なのはは鬼柳の背中を見つめる。

そして、そんな彼女にフェイトが声をかけた。

「大丈夫だよ、なのは」

「ふぇ、フェイトちゃん……？」

「京介、負けないから」

にへ、と力の抜けた笑顔を、フェイトはなのはへ向ける。
それはまるで、鬼柳が勝利するのを確信している様に見えて。

なのははそんな笑顔を浮かべるフェイトに、確かな嫉妬を覚える。
自分もフェイトの様に鬼柳の勝利を確信したい。全幅の信頼を預けたい。

だが、それは出来なかった。
理由は自分を安心させるようにほほ笑んでいる少女。

信じるな。鬼柳を信じて良いのは自分だけだ。
なのはの心の中で、黒い欲望が燃え上がる。

「ふっ、手札からの奇襲カードは無い様だな」

そして場面は再び、ロットンの元へ戻る。
ロットンは鬼柳が何もカードを発動しないのを確認し、安堵の息を吐いた。

先ほど鬼柳の仲間の女が叫んだ様に、エフェクト・ヴェーラーの様な奇襲型のカードが厄介だ。
迂闊に効果を使用すれば、逆にこちらが追い詰められてしまう。精神がすり減りそうな心理戦に、冷や汗が出る思いだ。

「だが、ここは堅実に攻めるとするか。俺は伏せカード≪埋葬呪文の宝札≫を発動！
墓地の魔法カード三枚を除外し、デッキからカードを二枚ドローする！」

ロットン手札０→２

「そしてカードを一枚伏せ、セットした残りのカード二枚を墓地に送る！
これで与えるダメージは鬼柳！　お前の残りライフと同じ数値の１６００！　テメェの負けだ！」

「撃てるもんなら、な？」

「良いぜ、その余裕をぶっ壊してやるよ！　≪ガトリング・オーガ≫の効果発動！
セットしていた二枚のカードを墓地に送り、１６００ポイントのダメージを与える！」

鬼柳の挑発に乗り、ロットンはガトリング・オーガの効果を発動させた。
すでに鬼柳の手札にバーン効果を無効にするカードがないことは確

認済みである。
ならば何も恐れることはない。

「鬼柳兄ちゃん！」

「鬼柳！」

そして無慈悲な死刑宣告に、はやてとリインフォースが半ば悲鳴に近い叫び声を上げる。
効果ダメージを防ぐカードがないのはもはや明白。防御することが出来ない以上、鬼柳の敗北は揺るがない。
そして、ガトリング・オーガの効果が発動する。

「ファイアッ！」

ガトリング・オーガの腹部から突き出たガトリング砲が火を噴いた。
狙う先はデュエルディスクを構えている鬼柳。彼に向け、数多もの弾丸が降り注ぐ。

防御しなければ、彼のライフは０になり敗北してしまう。
そうなれば、彼の妻であるフェイトのスターダスト・ドラゴンが奪われる。
それは彼でなくても、避けたい事態だろう。

そのためにも彼は、バーン効果を無効にしなければならない。
しかし、彼はバーン効果を無効にすることはしなかった。

「ぐっ――――！」

「「「鬼柳（兄ちゃん）（さん）！！」」」

放たれた数多もの弾丸は鬼柳の身体を打ち抜き、その衝撃で彼は後方へと吹き飛ばされる。
そして響き渡るのは、彼のライフが尽きた音――――。

鬼柳ＬＰ１６００→０

※

「くっくっく……、デカイ口叩いてた割には、呆気なかったな」

対戦相手である鬼柳にダメージを与え、勝者となったロットン。
彼は口元をニヤリと歪めながら、震える様な興奮をその身に覚えていた。

これでフェイトの持つスターダスト・ドラゴンは彼のモノ。
拒否権などありはしない。すでに彼女がこのデュエルを承認していたのだから。

「そ、んな……」

「嘘やろ……？」

そして一方、沈黙が支配しているのははやてやリインフォース達である。
彼女たちは鬼柳の勝利を疑ってかからなかった。必ず勝って、鬼柳がカードを取り返してくれると信じていた。

しかし、現実は違う。
鬼柳は地に伏し、決闘者にとっての命であるライフが尽きている。

それは紛れもなく敗北の証。
鬼柳は必ず勝ってくれる。その願いが打ち砕かれてしまった。

片や勝利の余韻に浸り、満面の笑みを浮かべるもの。
片や敬愛する者の敗北に、茫然自失とするもの。

そんな独特の雰囲気の中で一人。
フェイトだけがニコニコと笑みを浮かべている。

「ねぇ、はやて。リインフォース」

「ふぇ、フェイトちゃん……？　ど、どないしたん……？」

鬼柳が負けて、茫然自失としているはやてにフェイトが声をかけた。
彼女の口調は普段通りそのもの。鬼柳が負けて落ち込んでいる様子は見られない。

はやてはそれが不思議だった。
鬼柳が負けて、何よりも悔しいのは彼女のはずなのに。

なのに。どう言う訳かフェイトは笑みを浮かべている。
それはまるで、まだデュエルは終わっていないと言外に告げている様だ。

「忘れちゃったの？
私たち、次元世界で色んな大会に出てたんだよ？」

フェイトから投げかけられる疑問に、はやてとリインフォース。そしてなのははは眉を潜めた。
そんなことは百も承知している。でなければ鬼柳達が、八神家を一月近く空けることなどありはしない。

一方、フェイトは自分の狙いに気づいてくれないはやてたちに、少し困った顔をする。

少し考えれば分かりそうなものだろう。次元世界には独自のルールや環境が存在している。

そう。時にはマイナーだがバーン効果が主流の環境だってありはした。

そんな中でも、鬼柳とフェイトは優勝と言う勝利を収めることが出来たのだ。

「色んな世界には色んなルールや環境がある。
中にはバーン効果が主流なところもあったんだよ。
だけど、私たちは優勝することが出来た。なんでだと思う？」

「なんでって……そんなん、相手のカードの発動を無効にしたとか、そう言うんでないの？」

はやての答えはもっともだと思う。
バーン効果の発動を無効にすれば、ダメージは発生しない。

それに鬼柳のインフェルニティには、ありとあらゆる魔法・罠・モンスター効果を封じるカウンター罠もある。
それらのカードを駆使して、勝利をもぎ取ったと思われたのだろう。
だが、実際は違う。

「うぅん、違うよ。私たちはそれらのカードの発動を、一切無効にしなかったんだ」

「い、一切！？　そ、そなら一体、どないしてそんな相手に勝った

ん？」

「チェーンバーンやロックバーンは、効果を使えばバックのカードが剥がれて行く。
最終的に伏せカードが０で手札が一枚とか言う状況になっちゃうこともある。
私たちはそうなった相手に一撃必殺の攻撃を御見舞したんだ」

フェイトが言葉を続けると、はやてがポカンとした表情を浮かべる。
なまじ、それは仕方が無い反応だろう。それではまるで、ライフが尽きてもデュエルをしたと言っている様な物だ。

そんなことは到底、叶わない現実。
ライフが０になってしまえば、敗北は必至なのだから。

――――しかし、この世には存在する。
たとえライフが尽きようとも、敗北にならないカードが。

「見せてあげてよ、京介。私たちのとっておき」

「あぁ、分かってる」

「「「「っ！！」」」」

フェイトの声に答える様に、地面に倒れ伏していた鬼柳が声を上げた。

そして彼は、ゆっくりと地面から腰を上げる。それは到底、理解できない現状。

ライフが0になり、敗者となったものは再び立つことは許されない。なにせ勝敗は決しているのだから。敗者が勝者と対等になることなど、出来はしない。

しかし、鬼柳は立ちあがる。

身体中から青紫色に光る、不可思議なオーラを身に纏いながら。

「そんな、なんで……」

「どうなってやがる！」

なのはの悲鳴と、ロットンの驚愕に満ちた声が廃倉庫の中に響き渡る。

もしもなのはが悲鳴を上げなかったら、恐らくはやてかリインフォースが代わりにあげていただろう。

それほど、今の状況は異様だった。

敗者が立ちあがり、デュエルを続行しようとする。

デュエルモンスターズのルールに、真っ向から喧嘩を売っているのだから。

「くくくっ」

「っ、なんだ、そのモンスターは！」

そして立ちあがり、ロットンを見据える鬼柳の身体から、青紫色のオーラが離れる。
離れたそのオーラは彼の背後である姿を形作った。それはまるで、異国の銅像の様な姿だった。

「効果ダメージによって俺のライフが０になった時、
こいつ以外の手札を全て捨てて、この≪インフェルニティ・ゼロ≫を守備表示で特殊召喚できる。
≪インフェルニティ・ゼロ≫がフィールド上に存在する限り、俺はライフが０になっても敗北とならない。
……だが、ダメージを５００ポイント受ける毎にデスカウンターがカウントされ、３つ溜まった時、
≪インフェルニティ・ゼロ≫は破壊されて、俺は負ける……」

インフェルニティ・ゼロ（アニメオリジナルカード）
星１／闇属性／悪魔族／攻　０／守　０
このカードは通常召喚できない。このカードの効果でのみ特殊召喚することができる。
このカードは、効果ダメージによって自分のライフが０になる場合、このカード以外の手札をすべて捨てる事で手札から特殊召喚することができる。
このカードが自分フィールド上に存在する限り、自分はライフポイント０でも敗北とはならない。
このカードは戦闘では破壊されない。
自分への戦闘ダメージ５００ポイント毎にデスカウンターをこのカードの上に１つ置く。

デスカウンターが3つになった時、このカードを破壊する。

「≪インフェルニティ・ゼロ≫……！」

「ライフが0になっても敗北しないだと!?
そんなインチキカード、あってたまるか！」

鬼柳のフィールドに特殊召喚されたインフェルニティ・ゼロの恐るべき特殊能力に、はやてたちが驚愕する。
ライフが0になっても敗北しない。つまりまだ、鬼柳は敗北した訳ではない。デュエルを続行できるのである。

これこそがフェイトの言っていたとっておきかと、はやては内心で納得した。
確かにこのモンスターならば、ピンチから一転反撃に転じることが出来るだろう。

初見殺しも良いところだ。

「さぁ、まだテメェのターンは終了してないぜ?」

「くっ、カードを一枚伏せ、ターンエンドだ」

ロットン手札0
場　ガトリング・オーガ　伏せ×1

「俺のターン！」

鬼柳手札０→１

そしてターンはロットンから鬼柳へと移る。
フェイトの言うとおり、ロットンの伏せカードはたった一枚。
明らかにチャンスなこの状況で、鬼柳がカードをドローする。
ドローしたそのカードを見て、鬼柳はニヤリと笑みを浮かべた。

「俺は、≪インフェルニティ・デーモン≫を特殊召喚！
手札が０でこのカードをドローしたとき、特殊召喚する！」

鬼柳がドローしたカードは、インフェルニティにおける逆転のカード。
彼のフィールドにヤギの様な顔をした悪魔が召喚され、そのモンスターの効果が発動される。

「そして特殊召喚に成功した時、デッキから「インフェルニティ」と名のついたカードを一枚、手札に加える事が出来る！
俺は手札に加えた、≪インフェルニティ・ミラージュ≫を召喚！
自分の手札が０のとき、≪インフェルニティ・ミラージュ≫をリリースすることで、
墓地からインフェルニティモンスター二体を場に特殊召喚することが出来る！」

「バカな……！　二体のモンスターを蘇生するだと！？」

「墓地より蘇れ、≪インフェルニティ・ビースト≫！　≪インフェルニティ・ビートル≫！！」

鬼柳のフィールドには新たに、犬の姿を模したＩＦビーストとカブトムシを模したＩＦビートルが特殊召喚される。
たった一枚のドローから、これほどまでモンスターを展開する爆発力。これこそが八神家で鬼柳が最強と言われる所以である。

「そして≪インフェルニティ・ビートル≫の効果発動！
≪インフェルニティ・ビートル≫をリリースすることで、デッキから≪インフェルニティ・ビートル≫を
二体まで特殊召喚することが出来る！　デッキから≪インフェルニティ・ビートル≫二体を特殊召喚！」

「凄い……、たった一枚のドローカードで、モンスターカードゾーンが全て埋まった……」

鬼柳のフィールドを埋め尽くすインフェルニティモンスターたち。
最初から存在していたゼロを除き、残る四体のモンスターはこのターンに召喚されたモンスターだ。

やはり、伊達に八神家最強を名乗ってはいないと言うことか。
リインフォースは鬼柳のインフェルニティの爆発力に背筋を冷やしつつも、頼もしさを覚える。

「いくぜ、俺はレベル４≪インフェルニティ・デーモン≫にレベル２≪インフェルニティ・ビートル≫をチューニング！」

「出てくるモンスターのレベルは６。なんや、鬼柳兄ちゃんはブリューナクでも持っとるんか？」

鬼柳の背後に、二つの緑色のリングが出現した。
それはシンクロ召喚を行う際に出現するモノとまったく同じ物。

はやては合計されたレベルに、どんなモンスターが出てくるか予想を行う。
しかし、予想したモンスターであるブリューナクでこの状況を打破できるとは思えない。

ブリューナク――氷結界の龍ブリューナクは手札を一枚捨てることで、場のカード一枚をバウンスする効果を持つ。
効果は非常に強力なのだが、手札コストが掛かるのが厄介だ。そして今現在、鬼柳の手札に手札は一枚も存在しない。

ならば一体どんなモンスターが呼ばれるのか。
はやては出現するモンスターに興味を持つ。

「大地を駆ける疾風！　その手に持った槍で敵を刺し穿て！
シンクロ召喚！　駆け抜けろ≪大地の騎士ガイアナイト≫！！」

「ガイアナイトやて！？」

大地の騎士ガイアナイト

シンクロモンスター
星６／地属性／戦士族／攻２６００／守　８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

シンクロ召喚されたのは、シンクロモンスターの中でもかなりメジャーなカード。
恐らく、決闘者ならば少なくとも一枚は持っているであろうカードだ。

大地の騎士ガイアナイトは効果こそ持っていないが、攻撃力２６００とバカに出来ない攻撃力を持っている。
しかし、この状況を打破できるようなカードではないだろう。一体どの様な狙いがあってこのカードをシンクロ召喚したのか。

「なんだ、そんなモンスターじゃ俺のライフを０には出来ないぜ」

一方。鬼柳の召喚したモンスターの姿を見て、安堵したのはロットンだ。
どんなモンスターが出てくるか冷や冷やしたが、ガイアナイトならば問題は無い。

「（それに伏せてあるのは≪メタル・コート≫。≪ガトリング・オーガ≫を戦闘破壊することは出来ない）」

メタル・コート（アニメオリジナルカード・アニメ効果仕様）
通常罠

このカードは発動後自分フィールド上のモンスター1体の装備カードとなる。
装備モンスターが戦闘によって破壊される場合、このカードを墓地へ送る事によって戦闘による破壊を無効にする。

それに加え、伏せてあるカードはモンスターの破壊を無効にするメタル・コート。
効果による破壊には無力だが、現在の鬼柳のフィールドならば恐れるものは何もない。

「あぁ、分かってる。ガイアナイトはただの繋ぎだ」

「繋ぎだと？」

「！　そっか、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫やね！」

しかし、どうやら実際は違ったようだ。
彼ははやての言葉に答えぬまま、ガイアナイトをシンクロ素材にする。

「レベル6≪大地の騎士ガイアナイト≫にレベル2≪インフェルニティ・ビートル≫をチューニング！
地獄と天国の狭間、煉獄よりその姿を現せ！　――――シンクロ召喚！」

二つの緑色のリングを極太の閃光が焼き、凄まじいまでの光が廃倉庫の中を照らし出す。
そして現れるのは彼のエースであるインフェルニティ・デス・ドラゴンではない。
赤き巫女のアザと契約を行い、新たに手に入れた鬼柳のエースモンスター。
「出でよ、≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫！！」
現れたシンクロモンスター、オーガ・ドラグーンが天へ轟かんばかりに咆哮を上げる。
見たこともないシンクロモンスターの姿に、ロットンの目が驚愕に見開かれる。
こんなモンスターを自分は知らない。こんなモンスター、見たことも聞いた事もない。
しかし、現実としてオーガ・ドラグーンはロットンの前に立ち塞がっている。
「コイツがフェイトのスターダストを護る砦、オーガ・ドラグーンだ。
果たして、お前にコイツが倒せるかな？」
鬼柳はオーガ・ドラグーンを信頼しているのだろう。
その顔には余裕の笑みが浮かんでいる。

そう。このモンスターこそがフェイトのスターダストを護る砦。
オーガ・ドラグーンが破壊されたならば、自分は一転ピンチに陥るだろう。

しかし、負けるつもりは無い。負けてやるつもりもない。
何よりも大切な少女のカードが懸かっているのだ。負ける理由は何処にも存在しなかった。

そして、鬼柳がその宣言を終えた直後。フェイトの隣にいたなのはに異変が起きる。
彼女の瞳は炎の如く真っ赤に染まり、腕に現れていた赤き巫女のアザが妖しく輝きだす。

しかし、その変化を確認できたものはなのは以外、誰も居なかった。

二十六話　「ライフ０！　極限でのデュエル！　後編」（後書き）

次回予告

デュエルの最中に起こったなのはの異変。
それは地縛神スカーレッド・ノヴァの復活の兆しだった。

彼女は意識を地縛神に奪われ、周囲へ破壊を撒き散らそうとする。
そんな彼女を止めようとするのは現場に乱入してきたクロノ。

彼は自身の管理局デッキでなのはに挑むが、なのはのモンスターに手も足も出ない。
あわや敗北かと思われた時、彼に力強い味方が現れる。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　前編」（前

なのはとクロノのデュエルは今回で終了の予感が。
ひとまず次回はクロノと鬼柳さんが頑張ります。

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　前編」

～ミッドチルダ　某所の廃倉庫～

「――――～～～～っ！」

彼女の心は、真っ黒な嫉妬の炎で埋め尽くされていた。
妬ましい。羨ましい。そんな真っ黒な感情が、彼女――なのはの頭を埋め尽くす。

鬼柳が負けないと心の底から信じているフェイトが。
そして、そんなフェイトに応えようとする鬼柳の姿が羨ましくて、妬ましくて仕方が無い。

「う、うぅ……っ！」

そして嫉妬の炎が完全に彼女の頭の中を埋め尽くしたとき、彼女の身体に異変が起こる。
最初の変化は瞳。彼女の藍色の瞳が、一部の隙もなく真っ黒な瞳へと変化を遂げる。

次に起こった変化は彼女の腕で淡く輝いていた赤き巫女のアザ。
本来ならば赤く発光するアザが、この時ばかりは濃紺に妖しく輝いている。

明らかに良くない状態だと、誰もが分かるだろう。
しかし、誰もがなのはの変化に気づかない。
皆の視線は鬼柳のデュエルへと向けられ、なのはの変化に気づく者はいなかった。
そして――――、悪魔が誕生の雄叫びを轟かせる。

「アァアアアァァアアアッッッ！！！」

『ッ！？』

響き渡ったのは、なのはの怒りの雄叫び。それは天へと届かんとする咆哮。
とても少女の口から飛び出たモノとは思えない声量に、皆が一斉になのはを振り返る。

「な、なのはちゃん！？」

「どうし――――っ、なんだ、それは」

振り返ったはやてとリインフォース。
彼女たちが捉えたのは、真っ黒なオーラを身に纏うなのはの姿。
瞳や彼女の腕に刻まれているアザは同様に黒く輝き、明らかに良くない状態だと分かる。
一体何がどうなっているのか。皆が突然の事態に戸惑い、行動を鈍

らせる。

「アァアアアアァァアアアッッッ！！！」

なのは以外が動きを止めたこの世界で、なのはの血を吐き出さんばかりの叫びが轟く。
叫ぶと言うこと以外を知らないのか。ただひたすらに、なのはは喉が枯れるほどの大きな声で叫ぶ。

一体何が起こったのか。それを把握できていない鬼柳達は、動くに動けない。
そして誰もが動けないこの状況下で、不意に破壊音が響き渡る。音の発生源は――天井。

「時空管理局のクロノ・ハラオウン執務官だ！　武器を捨てて大人しくしろ！」

「クロノ！」

廃倉庫の天井を破壊し、姿を見せたのは黒いバリアジャケットに身を包んだクロノの姿だった。
彼は手に持った杖――デバイスを素早くロットンに向け、警告の言葉を発する。

「くっ！」

それと同時、駆けだす者が居た。
それは他の誰でもない、ロットンである。

このままここにいるメリットはもう存在しない。
デュエルはなのはの異変とクロノの乱入により成立しなくなった。

スターダスト・ドラゴンとヴィヴィオを回収できなかったのは心残りだが、捕まるわけにいかない。
ここはレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードで妥協するとしようと、ロットンは内心で考える。

「待ちやが――――――！」

この場から逃走しようとするロットンを追いかけようと、鬼柳が駆けだす。
ロットンをこのまま逃がす訳に行かない。彼はなのはの大切なカードを未だ所持したままなのだ。

だが、クロノが彼を制止させようとするよりも先に。
ロットンの腕に装着されているデュエルディスクに異変が起こる。

「な、なんだこりゃあっ！？」

ロットンのデュエルディスクに起こった異変。

それは彼のエクストラデッキを黒い靄の様な物が包み込んだのだ。
それはまるで、なのはが自らの周囲に形成していた黒いオーラの様にも見える。
もしやなのはが何かやっているのだろうか。

鬼柳が慌てて視線をなのはへと向ければ、なのははロットンへ向けて右手を差し出していた。
彼女の右手にあるのは、ロットンのエクストラデッキを包み込む物と同じ黒い靄。

やがてロットンのエクストラデッキから何かを抜きだしたのだろう。
彼女の手の中にある黒い靄が変化を始める。

不定形な形をしていた靄はなのはの手の中である形を作り始める。
それは小さなカード。そう。まるでデュエルモンスターズのカードの様だ。

そして形成されたカードに絵柄が浮かび上がる。
浮かび上がった絵柄は、業火を背にした紅蓮の悪魔竜の姿。

シンクロモンスターを現す白い枠ではなく、黒い枠で彩られたレッド・デーモンズ。
その姿は今のなのはの様子と相まって、限りない不気味さを押し出していた。

「っ、カードをコピーしたのか！？」

なのはの手の中に現れた不気味なカードを目撃し、リインフォースが叫んだ。
恐らく、リインフォースの言うとおりだろうと鬼柳は内心で同意する。

でなければカードの枠の色が変化するなどと言う話を、彼は聞いたことが無い。
そして彼は思考する。明らかに不味いこの状況で、なのはの様子を確かめれば良いのか。ロットンを確保すれば良いのか。

しかし、それも僅かな間に選択を決定する。

「（選択肢なんかとっくに決まってる！　なのはの安全が先だ！）」

彼が選んだのは、なのはの安全の確保。
ロットンとのデュエルを放棄することになるが、なのはの無事には代えられない。

そしてなのはの元へ駆けだそうとする鬼柳の目前を、凄まじいまでの爆風が凪いだ。

「――――～～～～っ！」

「京介！？」

突然の爆発音と共に、鬼柳が吹き飛ばされる。

廃倉庫の中にフェイトの悲鳴が響き渡り、一気に廃倉庫の中が騒々しくなる。

全身を激しく地面に打ち付け、苦痛の声を漏らす鬼柳。
そんな彼の耳に、ロットンの耳障りな声が響き渡る。

「コイツは置き土産だ！
ありがたくレッド・デーモンズは頂いて行くぜ！」

「――――っの野郎ぉッ！」

爆発音の正体は、廃倉庫の至るところに仕掛けられていたダイナマイトだった。
ロットンは遠隔操作用のリモコンのスイッチを押し、手当たり次第に爆発させたのだろう。

それはなにも、ロットンが自棄になった訳ではない。
廃倉庫の中は埃と煙が蔓延し、碌に視界が確保できていない。

クロノや鬼柳から逃れるための当然の策だったのだろう。
鬼柳はロットンの無茶苦茶な手段に、思わずカッと頭に血が上る。

「鬼柳京介！」

「クロノか！？」

そして廃倉庫の奥へ逃げて行くロットンを見送りながら、クロノが鬼柳に声を掛けた。
彼の表情は戸惑いに満ちており、現在の状況がどうなっているのか、正しく理解できていない様子だ。
だが、そんな彼にもなのはの様子が不味いと言うことだけは理解できているのだろう。
油断なくデバイスを構えながら、クロノは鬼柳へと言葉を続ける。
「ロットンを追ってくれ。僕も追いかけたいが、なのはを放っておく訳にいかない」
「っ、だけど！」
「ロットンを逃がしたら、他の誰かが彼らの犠牲になるかもしれないんだ！
――――頼む」
「っ」
クロノの真剣な眼差しに、鬼柳は思わず息を呑んだ。
みすみす目の前でロットンを取り逃がし、彼は悔しがっているだろう。
もしもなのはに異変が起きていなかったら、彼は間違いなくロットンを追っただろう。
だが、彼はこの場に残った。何よりも状況が悪化しているであろう、なのはを止めるため。

故に、大物であるロットンの捕縛を鬼柳に頼んだのだ。
鬼柳の実力は次元世界の大会などで把握済み。問題は無い。

「分かった。なのはのこと、頼むぜ」

「あぁ。君の信頼に応えるよ」

鬼柳はクロノの真摯な瞳を信頼してか。この場をクロノに預けることにする。
そして彼は廃倉庫から逃走したロットンを追いかけるため、この場を駆けだした。

「京介！」

そして廃倉庫を飛び出す鬼柳の後ろを、フェイトが慌てて付いて行く。
フェイトも居るならば、彼は負けることはまずないだろう。クロノはそう判断した。

「……クロノ君」

「話は後だ。まずはやるべきことをやる」

鬼柳とフェイト。それにロットンが姿を消した廃倉庫に、はやての申し訳なさそうな声が響く。
どうやらクロノの言いつけを守らずにこの様な事態を引き起こしたことに、責任を感じているのだろう。

だが、その話はまた後でだ。
今やるべきことが、クロノやはやて。そしてリインフォースにあるのだから。

「っ」

彼らの視線の先には、真っ黒なオーラを身に纏っているなのはの姿が。
瞳はまるで闇の底を現したかのような暗い色をしている。

恐らく、これが地縛神スカーレッド・ノヴァの影響を受けた姿なのだろうとクロノは判断した。
でなければ、これほど邪悪な雰囲気をなのはから感じることはないだろう。

「――――シテ」

「？　なんだ？」

と、遠目に異変が起こったなのはの様子を観察していると。
不意になのはが、片言でなにかを呟いた。何を呟いたのか分からず、

クロノは首を傾げる。
そして、なのはの絶叫が廃倉庫に響き渡った。

「カエシテヨォッ！
ワタシノ、ワタシノキリュウサンヲカエシテヨォオォオオオッ！」

「「「――――――～～～～っ！！」」」

真っ黒な怒りに染まった少女が、喉が枯れるほどの声量で叫ぶ。
それは嫉妬の炎に身を焼かれたとある少女の成れの果て。

あまりの不気味さに、クロノとはやて。リインフォースは身震いをする。
そんな中、はやてはなのはの絶叫を聞き、思わず顔を歪めていた。

やはりなのはは、鬼柳の事を諦め切れていなかったようだ。
今回の彼女の心の叫びは、はやてにその思いを抱かせるに十分すぎるほど。

鬼柳の傍に居られるフェイトが羨ましい。彼に愛の言葉を囁いてもらえるフェイトが羨ましい。
そんな積りに積もった嫉妬の炎が、地縛神の力を借りて噴き出したのだろう。これほどまでとは思わなかったが。

「……まったく、鬼柳はとんだ罪作りな男だな」

「あっはは。それは同感やね」

なのはの絶叫を聞き、動きを止めていたクロノがポツリと呟く。
はやてはそんなクロノの愚痴に似た言葉に、苦笑しながらも頷いた。
そうだ。鬼柳はとんだ罪作りな男なのだ。
自分たちの心をいとも簡単に奪って行ったのに、当の本人は別の女性と結ばれたのだ。

悔しくて悔しくて仕方がないだろう。それははやてにも身に覚えがある。
でもだからこそ、なのはを止めなくてはならない。こんな恰好悪い姿、彼に見せる訳に行かないのだから。

「アァアアアァァアアアッッッ！！！」

「くっ、ひとまず彼女の相手は僕がする。君たちはその少女を連れて避難してくれ」

「そ、そやけど……！」

そしてなのはが再び咆哮を上げる。
クロノはそんななのはから視線を外さぬまま、はやてに指示を出した。
指示の内容は、フェイトが居なくなり、スターダストの加護が消え

たヴィヴィオを保護すること。
ダイナマイトで廃倉庫の至るところが破壊され、なのはに異変が起きているこの状況で、取るべき正しい選択だ。

だが、はやての表情には戸惑いが浮かんでいる。
彼女の視線の先には、黒いオーラを身に纏うなのはの姿。

どうやらはやてもはやてで、なのはのことをどうにかしてやりたい様だ。
しかし、それを許可できるほどクロノは優しくない。厳しい口調で、はやてに言い付ける。

「君たちはたまたま、巻き込まれただけなんだろう!?
だったら早く逃げてくれ!」

「たまたまって……、そないなこと「主はやて」っ、リインフォース!?」

「ここはクロノ執務官の指示通りに。
この事件に積極的に私たちが関わっていると知れると不味いです」

クロノは必死に、はやてをこの場から逃がそうと声を張り上げた。
ただでさえ今の彼女は、元闇の書の主と言うことで周囲から向けられる視線が厳しい。

故に、クロノは“たまたま”はやてたちが巻き込まれたと言う形にしようとしているのだ。
もしも積極的に関わっていると知れたなら、世間の目が厳しくなる

ことは間違いない。

もしや八神はやては邪神の復活を行おうとしているのか。怪しげな儀式を行おうとしているのか。

そんな噂が流れるかもしれないのだ。それは彼女にも、そして守護騎士たちにとっても、良いものではないだろう。

はやてもリインフォースとクロノの言葉の裏に隠された真意に気づき、顔を悔しそうに歪めながらも頷く。

これではやてたちはこの廃倉庫から逃げてくれるだろう。ようやく状況整理が一段落し、クロノは安堵の息を吐く。

「さて、ボクの相手は君だ」

だが、彼はこの場から逃げ出す訳に行かなかった。

彼の視線の先に居る少女――なのはをどうにかするまで、この場から離れるわけにいかない。

クロノは手に持っていたデバイスを腕に当て、デュエルディスクモードへと変形させる。

デッキの中身を変更できなかったのは厳しいが、せめて応援部隊が到着するまで時間を稼がなくては。

地縛神スカーレッド・ノヴァがどれほどの力を有しているのか知らないが、負けるつもりは無い。

そして、複製した自身のデッキとデュエルディスクを構え、なのはが宣言する――――。

「「決闘（デュエル）！！」」

※

「イヤッホォオオオォオオッッ！！」

ダイナマイトでの爆発の影響だろう。
濛々と煙が立ち込める廃倉庫の中から、ロットンが飛び出した。

彼は周囲の状況へ目もくれることなく、一目散に廃倉庫から距離を取ろうとする。
管理局の局員が来たと言うことは、近くまで管理局が迫って来ているかもしれない。

下手に囲まれてしまえば、ロットンと言えど脱出は不可能だ。
そうなる前に少しでも、廃倉庫から遠く離れた場所まで逃げなくてはならない。

しかし――――

「フォトンランサー！」

「っ、ぐぉおっ！」

背後から少女の声が聞こえたと思った瞬間、ロットンの背中に何かが命中する。
ロットンの背中に当たった何かは激しい速度でロットンの背中に命中し、ロットンは地面につんのめる。

「あ、当たったー！　良かったぁ！」

「上出来だぜ、フェイト」

そして地面に無様に倒れ込んだロットンの元へ、男性――鬼柳が追い付いた。
鬼柳の背後にはデバイスであるバルディッシュをサイズフォームに変形させたフェイトの姿もある。

大方、誘導弾でロットンを狙い撃ったのだろう。
魔法をあまり警戒していなかったことが裏目に出たか。ロットンは思わず舌打ちする。

「っ、鬼柳……！」

「さぁ、デュエルの続きだ」

鬼柳はロットンの舌打ちの声を無視しつつ、デュエルディスクを展開する。
どうやらこの期に及んで、まだデュエルで決着を着けようと言うらしい。
見上げた決闘者精神に、さしものロットンも苦笑いを隠せない。

「はっ、そう素直に俺が受けると思ったのか？」

「デュエルに勝てば、お前は見逃してやる。管理局にも手出しはさせない。
だが、俺が勝ったら約束通りなのはのレッド・デーモンズは返してもらう。さぁ、どうする」

鬼柳の真っ直ぐな視線が、ロットンを貫く。
咄嗟にロットンは「そんなこと出来るか」とこの場から逃げようと画策する。

だが、逃亡するのは躊躇われた。理由はこちらを見つめる鬼柳の瞳。
彼の瞳は怒りの炎によって真っ赤に染まっていた。轟々と燃える紅蓮の炎がこちらを見つめる。

大方、デュエルを受けなければリアルファイトでレッド・デーモンズを奪おうと言う算段だろう。
鬼柳の喧嘩の腕がどれほどのものか知らないが、ロットンにリアルファイトを挑むくらいだ。腕に覚えはあるのだろう。

「――――分かった」

故に、ロットンは鬼柳の提案を受けることとした。
リアルファイトでは鬼柳の他にもフェイトがいるので分が悪い。
ならば多少状況が不利でも、デュエルで決着をつければ良い話だ。
幸い、ロットンの伏せカードは「メタル・コート」。戦闘破壊は免れるはず。

そして鬼柳とロットン。両者は互いの正面に立つと、デュエルディスクを再び起動させる。
ロットンの背後に現れるのはガトリング・オーガ。攻撃力８００と言う低攻撃力を晒している。

対して、鬼柳のフィールドには三体のモンスター。インフェルニティ・ゼロ。インフェルニティ・ビースト。
そして見慣れぬドラゴン――煉獄龍　オーガ・ドラグーンの姿がある。

「俺のターンからの続行だ。メインフェイズを終了し、バトルフェイズに入る」

「あぁ、構わないぜ」

デュエルを再開し、ターンプレイヤーである鬼柳がフェイズの確認を行う。
先ほどのデュエルが中断だったせいで、こうしてフェイズを確認しなければならない。

鬼柳はメインフェイズを終了しバトルフェイズへ入る宣言をすると、ふむと内心で考えた。
現在、彼のフィールドにはオーガ・ドラグーンとインフェルニティ・ビーストが存在している。

これらのモンスターでロットンへダメージを与えても、ライフは0にならないだろう。
ならばどうするか。鬼柳は視線をガトリング・オーガから場に伏せられている伏せカードへと移した。

「（アレが攻撃反応型か。もしくはフリーチェーンの罠ならば都合が良いんだがな）」

自分の場に存在しているオーガ・ドラグーンの特殊能力を思い出しながら、鬼柳は考える。
そう。ロットンの場に伏せられているカードが攻撃反応型、もしくはフリーチェーンのカードならばこの攻撃だけでデュエルは終了する。

だが、ブラフなどの通常魔法カードだった場合は相手に一ターンの猶予を与えてしまう。
たかが一ターンと侮るなかれ。たった一ターン目を離しただけでも、フィールドは様変わりするのだから。

「まぁ、良い。俺は≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫で≪ガトリング・オーガ≫を攻撃だ！」

鬼柳はこのターンをどうするか決定すると、まずオーガ・ドラグーンで攻撃宣言をした。
インフェルニティ・ビーストでは相手の魔法・罠カードの発動を無効にしてしまう。
それは出来る限り、避けなければならない。

「っ！　トラップ発動！　≪メタル・コート≫！」

そして鬼柳の思惑通り、ロットンが伏せカードを発動した。
種類はフリーチェーンのトラップカード。ニヤリと、鬼柳の口元に笑みが浮かぶ。

「無駄だ！　≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫の効果を発動！」

「っ！？　コイツは！？」

「自分の手札が0枚の時、相手の発動した魔法・罠カードの発動を無効にし、破壊する」

「なんだと！？」

ロットンの場に伏せられていたカードが表になるが、それと同時にオーガ・ドラグーンの尾により発動を封じられる。
これこそが鬼柳の新たなエースモンスターである、オーガ・ドラグーンの特殊能力である。

だが、これだけではない。
オーガ・ドラグーンにはもう一つ、特殊能力が存在するのだから。

「そしてオーガ・ドラグーンはこの効果によってカードを破壊したとき、攻撃力を５００ポイントアップさせる」

煉獄龍　オーガ・ドラグーン（漫画オリジナルカード）
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守３０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター一体以上
自分の手札が０枚の場合、１ターンに１度だけ、相手の魔法・罠カードの効果を無効にして破壊することができる。
この効果を発動した時、このカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

オーガ・ドラグーンＡＴＫ３０００→３５００

「バカな……っ！　それじゃあ、俺の負けじゃないか！」

頼みの綱であるメタル・コートが破壊され。
それればかりかオーガ・ドラグーンの攻撃力まで上昇し。

ロットンにもはや、成す術は無かった。
仮にインフェルニティ・ビーストで先に攻撃していれば、ライフは２００残っただろう。
しかし、先に攻撃してきたのがオーガ・ドラグーンだった時点で、ロットンの敗北は決定していた。

ロットンの伏せていたカードを破壊し、新たに力を吸収したオーガ・ドラグーンは轟く様な咆哮を上げる。

「そう言う訳だ。≪煉獄龍　オーガ・ドラグーン≫で≪ガトリング・オーガ≫を攻撃！」

「くっ！」

鬼柳の場のオーガ・ドラグーンの口腔に、光が収束されていく。
その姿はまるで、罪人に裁きを下すかの様にも見える。

集められた光の粒子はどんどんとその数を増して行き、オーガ・ドラグーンの口腔に溢れそうになったとき。
それらは一斉に、ロットンのフィールドに存在しているガトリング・オーガへと向けて放たれた。

「がァアアァアアッッ！！」

ロットンＬＰ４０００→１３００

「これで止めだ！　≪インフェルニティ・ビースト≫でダイレクトアタック！」

満身創痍なロットンへ、止めと言わんばかりに鬼柳のモンスターが迫る。
手札は０枚。場に置かれているカードも０枚。もはやロットンに、インフェルニティ・ビーストの攻撃を防ぐ手段は無い。

そして、インフェルニティ・ビーストから止めの一撃が放たれる――

「ぐぁあああああっっ！！」

ロットンＬＰ１３００→０

※

「僕の先攻、ドロー！」

クロノ手札５→６

「僕は≪ヘル・セキュリティ≫を守備表示で召喚！
カードを二枚伏せて、ターンエンドだ」

クロノ手札6→3
場　ヘル・セキュリティ　伏せ×2

なのはとクロノ。
二人のデュエルがクロノの先攻でデュエルがスタートする。

クロノはまずは様子見と言うことで、守備モンスターと伏せカードが二枚と言う定石通りの動きをする。
下手に多くの罠や魔法カードを伏せても、大嵐などで破壊されては目も当てられない。故に、ここは慎重に行く。

「私ノターン！」

なのは手札5→6

「手札カラ≪太陽の神官≫ヲ特殊召喚。ソシテ≪氷結界の風水師≫ヲ通常召喚！」

「っ。なのはのレッド・デーモンズを呼ぶためのモンスターは整った……！」

「レベル5≪太陽の神官≫ニレベル3≪氷結界の風水師≫ヲチューニング！
ソノ身ヲ悪魔ヘト捧ゲタ魔竜ヨ！　怒リノ炎ヲ纏イテ敵ヲ食ライ

尽クセッ！
　――――シンクロ召喚！　深淵ノ支配者≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

場の太陽の神官。そして氷結界の風水師をシンクロ素材とし、なのはの切り札であるドラゴンが召喚される。
だが、召喚されたドラゴンは彼女の本来召喚すべきドラゴンからは、決して及ばぬ雰囲気をその身に宿していた。

その身は黒を宿しながらも、何処か気高さを感じさせた身体は怒りのどす黒い黒へと染まり。
そして誇りに満ちた金色の瞳は、濁った赤い色を宿していた。あれが気高き竜の姿だと言うのだろうか。

「ソシテ私ノ場ニ≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫ガ存在スル場合手札カラ≪クリムゾン・ヘル・セキュア≫ヲ発動！
　相手フィールド上ニ存在スル魔法・罠カードヲ全テ破壊スル！」

クリムゾン・ヘル・セキュア
通常魔法
自分フィールド上に「レッド・デーモンズ・ドラゴン」が表側表示で存在する場合のみ発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「っ、なんだって！？」

「消エロォオオオオオッッ！！」

レッド・デーモンズがその手に邪悪な黒い炎を宿し、腕を掲げる。
そして腕が振り下ろされ、地面に叩きつけられた炎が一直線にクロノのフィールドへ向かった。

対象はクロノの場に伏せられている二枚のカード。
発動するタイミングを確認するが、いずれも相手モンスターの攻撃宣言時のみ。

発動することはできない。

「くっ、≪次元幽閉≫と≪セキュリティー・ボール≫が！」

「ソシテバトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫デ≪ヘル・セキュリティ≫ヲ攻撃！
サラニ≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫ガ相手ノ守備表示モンスターヲ攻撃シタ場合、
ダメージ計算後相手ノ守備表示モンスターヲ全テ破壊スル！　デモン・メテオ！」

「≪ヘル・セキュリティ≫まで……！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンの効果により、ヘル・セキュリティが破壊される。
ヘル・セキュリティには自身が戦闘で破壊され墓地へ送られたとき、レベル１の悪魔族をリクルート出来る効果がある。

だが、それは所詮戦闘で破壊された場合のみ。
今回の破壊はレッド・デーモンズの効果による破壊のため、モンスターをリクルート出来ない。

クロノのフィールドにクロノを護るカードは無くなり、無防備な状態をクロノは晒す。

「メインフェイズ2ニ移行シ、手札から≪紅蓮魔竜の壺≫ヲ発動！
デッキカラカードヲ二枚ドローシ、一枚カードヲ伏セテターンヲ終了スル」

なのは手札3
場　レッド・デーモンズ　伏せ×1

「くっ、僕のターン！」

クロノ手札3→4

圧倒的に状況が悪くなり、クロノの額に冷や汗が浮かぶ。
なのはとは対戦する機会がなかったが、これほどまで強いとは思いもしなかった。

クリムゾン・ヘル・セキュア。そして紅蓮魔竜の壺。どちらも絶大な効果を持つ。
そしてそれらのカードを手札に呼び込む彼女の引き運。彼女の引き運は恐らく、自分よりも上だろう。

クロノは密かにそう思う。

「だが、好き勝手もそこまでだ！　僕は≪スナイプストーカー≫を召喚！
　そして≪スナイプストーカー≫の効果発動！　手札を一枚捨て、相手のカード一枚を選択する。
　僕は今からサイコロを一回振り、出た目が１・６以外ならば選択したカードを破壊する！
　対象は≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

クロノが新たに召喚したのは、玩具の光線銃の様な物を手に持った悪魔族モンスターだ。
だが、見た目とは裏腹に効果は非常に強力である。博打要素が強いとは言え、モンスター・魔法・罠を問わず破壊できる。

そしてクロノが手札を捨て、効果を発動しようとしたとき。
クロノと相対しているなのはが、ニヤリと口元を歪めた。

「コノ瞬間、伏セカード≪闇の幻影≫ヲ発動！
　フィールド上ニ表側表示デ存在スル闇属性モンスターヲ対象トスル効果モンスターノ効果・魔法・罠カードノ発動ヲ無効ニシ、破壊スル！」

闇の幻影
カウンター罠
フィールド上に表側表示で存在する闇属性モンスターを対象にする効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。

「なっ！？」

場のレッド・デーモンズへ向け、光線銃を構えたスナイプストーカーが破壊される。
スナイプストーカーの効果を妨害し、逆に破壊したのはなのはの伏せていたカウンター罠。

そのカウンター罠は対象を取る効果。
そして闇属性限定とはいえ、ノーコストで発動を妨害出来る。

なのはのデッキ構成上入っている可能性が低いと見ていたが、とんだ見当違いだ。
クロノは思わず顔を歪める。

「くっ……、≪スナイプストーカー≫の手札を捨てる効果はコストのため、僕は手札を一枚捨てる」

クロノ手札3→2

そしてさらに、クロノは手札を失うことになる。
スナイプストーカーの手札を捨てる効果は、彼の言うとおりコスト。

故に発動を妨害されてもなお、手札を捨てなければならない。
しかし、彼はこの効果を逆手に取る。手札から墓地へ、とあるカードを捨てる。

そのカードは、ヘルウェイ・パトロール。

「僕は墓地に存在する≪ヘルウェイ・パトロール≫の効果を発動！
このカードを墓地から除外することで、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター一体を特殊召喚する！
手札から≪ディスクライダー≫を守備表示で特殊召喚！」

ヘルウェイ・パトロール
効果モンスター
星４／闇属性／悪魔族／攻１６００／守１２００
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×１００ポイントダメージを相手ライフに与える。
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外する事で、手札から攻撃力２０００以下の悪魔族モンスター１体を特殊召喚する。

ディスクライダー
効果モンスター
星４／風属性／悪魔族／攻１７００／守１５００
自分の墓地に存在する通常罠カード１枚をゲームから除外し、このカードの攻撃力は相手ターンのエンドフェイズ時まで５００ポイントアップする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

クロノ手札２→１

このまま無防備でいるのは不味いと判断し、クロノは壁モンスター

を召喚する。
これんらばレッド・デーモンズ・ドラゴンの他にモンスターを召喚されてもライフは残る計算だ。
だが、言い知れぬ不安がクロノを包み込む。
本当にこの戦術で良かったのか。召喚したカードに間違いは無いか。
本能がクロノへ警告を促している。

「カードを一枚伏せ、ターンエンド！」

クロノ手札０
場　ディスクライダー　伏せ×１

「私ノターン！」

なのは手札３→４

「ク、クカカカカッッ！！！！」

「っ！？」

なのはがデッキからカードをドローすると、不意に彼女は笑いだした。
その笑い声はいつものなのはのものとは違う。邪悪な笑い声と呼ぶに相応しい笑いだ。
クロノはなのはのその様子に、内心で不味いと判断する。

恐らく、何かキーカードをドローしたに違いない。
これ以上戦況が悪くなることは避けたいが、防ぐ手立てがクロノにはなかった。

「手札カラ≪マジカル・コンダクター≫ヲ通常召喚！
ソシテ手札ノ≪氷結界の術師≫ヲ墓地ニ送リ、≪ワン・フォー・ワン≫ヲ発動！
デッキカラレベル１モンスター≪エフェクト・ヴェーラー≫ヲ場ニ特殊召喚スル！
サラニ≪マジカル・コンダクター≫ノ特殊能力！
自分、マタハ相手プレイヤーガ魔法カードヲ発動シタ時、コノカード二魔力カウンターヲ二ツ置ク！」

マジカル・コンダクター
効果モンスター
星４／地属性／魔法使い族／攻１７００／守１４００
自分または相手が魔法カードを発動する度に、
このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンターを任意の個数取り除く事で、取り除いた数と同じレベルの魔法使い族モンスター１体を、手札または自分の墓地から特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

魔力カウンター０→２

「≪マジカル・コンダクター≫だって！？
不味い、≪アーカナイト・マジシャン≫か≪マジック・テンペスター≫を呼ばれる……！」

「マダコノ程度デ満足サレテハ困ル！　手札カラ≪愚かな埋葬≫を発動！
　デッキカラ≪ナイトエンド・ソーサラー≫を墓地ニ送ル！　ソシテ≪マジカル・コンダクター≫ニカウンターヲ二ツ置ク！」

なのは手札1↓0
魔力カウンター2↓4

魔力カウンターが、墓地に眠る氷結界の風水師を呼びだす数値を超えた。
ここからが正念場だと、クロノは内心で冷や汗を流す。

アーカナイト・マジシャンでディスクライダーを破壊されるならばまだ良い。
問題は伏せカードを破壊されることの方だ。この伏せカードが破壊されれば、クロノは完全に無防備。

それに加え、彼の手札は0枚。
鬼柳のインフェルニティでもない限り、逆転はほぼ不可能だ。

故に、クロノは緊張する。伏せカードが破壊されなければ、まだ逆転の手立てはある。
だが破壊されてしまえばクロノの敗北は確定だ。心臓の鼓動がバクバクと煩い音を立てる。

だが、現実はクロノの予想よりも悪いものとなってしまう。

「≪マジカル・コンダクター≫ノ効果発動！
自身二乗ッテイル魔力カウンターヲ三ツ取リ除クコトデ、取リ除イタ数ト同ジレベルノモンスターヲ
手札、マタハ墓地カラ特殊召喚スル！　墓地ヨリ蘇レ、≪氷結界の風水師≫！！」

「これで……≪アーカナイト・マジシャン≫のシンクロ素材が揃った……！」

「ククッ、悪イガ≪アーカナイト・マジシャン≫ハ呼バン」

「……なに？」

「呼ブノハ他デモナイ、我ダ！
レベル８≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫二
レベル３≪氷結界の風水師≫トレベル１≪エフェクト・ヴェーラー≫をダブルチューニング！！」

なのはが呼びだすのは、エースたるアーカナイト・マジシャンではなかった。
クロノはなのはの告げた「ダブルチューニング」と言う言葉を聞き、大きく目を見開く。

ダブルチューニング。それは、一人を除き、今まで誰も成し得ることの出来なかった召喚方法だ。
まさか。そんな、と言う思いがクロノの頭を支配する。だが、現実は残酷にもクロノの期待を裏切った。

なのはのフィールドに存在するレッド・デーモンズを包み込むのは

四つの炎のリング。
それらがレッド・デーモンズを新たな姿へと強化させ、進化させる。

「悪魔ヘトソノ身ヲ捧ゲタ竜ハ闇ヘト堕チ、地獄ノ底デ悪魔ト交ワリテ破壊ノ産声ヲ上ゲル！
コノ世ニ破滅ト終焉ヲ！　――――シンクロ召喚！」

「バカな……！」

「破壊ノ化身≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫！！」

そしてなのはのフィールドに降臨する紅蓮魔竜。
それは一人の決闘者――ジャック・アトラスの切り札と同じ姿をしていた。

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　前編」（後

いろいろ超展開だけど、構わないよね（´・ω・`）

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　後編」（前）

今回でようやくクロノの切り札が登場しました。
そしてあと二話ほどでなのは覚醒編は終了する予定です。

ちなみに前編後編合わせて一話ですよ（´・ω・）

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　後編」

～ミッドチルダ　某所の廃倉庫～

「あぅうっ！」

「ど、どないしたん!?」

煙や爆発が何度も引き起こされている廃倉庫からの脱出の途中。
はやてが手を引きながら走っていた少女――ヴィヴィオが、急に胸を抱いて倒れ込んだ。

突然のヴィヴィオの急変に、はやては慌ててヴィヴィオの元へ駆け寄る。
煙や爆発の影響で体調に異変が起きたのだろうか。だが、実際は違っていた様だ。

「っ、なんや、コレ……」

「これは……高町と、同じ……？」

胸を抱いて地面に蹲るヴィヴィオ。彼女の身体に、ある異変が起きていた。
その異変が発生しているのは、ヴィヴィオの両の瞳である。

本来は赤と翠のオッドアイの彼女の瞳が、両方とも真っ赤に染まっていたのだから。
それはまるで、先ほど様子が急変したなのはの様にも見える。
そしてはやては、ここへ来る前の会話。
クロノからの忠告を思い出していた。

「まさか……共鳴しとるんか？
なのはちゃんと、ヴィヴィオちゃんが……」

地縛神スカーレッド・ノヴァは、ヴィヴィオが好意を寄せた相手。
そしてヴィヴィオに好意を寄せた相手に対し、精神干渉を行うと言っていた。
それは言ってしまえば、相手を意のままに動く人形へと変えるモノ。
先ほどのなのははどの程度まで影響を受けているか分からないが、相当不味いことが分かる。
なのはに現れた反応が、こうしてヴィヴィオに発生しているのだ。
もしかしたら、なのはの精神は既にスカーレッド・ノヴァに支配されているかもしれない。

「っ。待っててや、なのはちゃん！
絶対なのはちゃんのこと、助けたるからな！」

はやては何も出来ぬ自分に悔しさを滲ませるが、すぐにヴィヴィオ

を抱いて走り出す。
そう。今は自分に出来ることをやるのだ。それが現場で闘っているクロノ。
ひいては、暴走しているなのはを助けることになると信じて。

※

「バカな……っ！　このモンスターは……っ！」

眼前に降臨したモンスターの姿に、クロノは大きく目を見開いた。
彼の目前にそびえ立つのは、たった一体のドラゴン族モンスターである。

だが、そのモンスターこそがクロノをここまで動揺させている要因だ。
悪魔の角の様に曲がった特徴的な赤い角。そして背中には赤と黒のコントラストに彩られた翼が生えている。

そのモンスターを、クロノは見たことがあった。

実物をでは無い。画像データや映像記録からではあるが。

「≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫……っ！」

そのモンスターの名は、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン。
とある世界に君臨するキング、ジャック・アトラスの切り札たるカードだからだ。

「クハハハハッッ！！　最高ダ、気分ガ良イ！
力ヲ解放出来ルノガ、コウモ気分ガ高揚スルトハッ！！」

クロノが茫然としている視線の先で、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを召喚した決闘者。
高町なのはが両手を掲げながら高らかに笑う。しかし、その笑いには何処か邪悪なモノが含まれていた。

どうやら先のなのはの言葉を聞く限り、現在喋っているのは地縛神スカーレッド・ノヴァと言うことになる。
やはり精神干渉を受けたかとクロノは臍を噛むが、今はそれどころではない。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンをどうにか打倒し、なのはに勝利を納めなければならないのだから。

「サテサテ。マズハ邪魔ナ貴様ヲ倒シ、フェイトト言ッタカ。

アノ少女ヲ血祭リニ上ゲルコト二シヨウ」

「っ。待て！　何故フェイト・テスタロッサを襲う！」

「簡単ダ。コノ身体ノ持チ主ガ言ッテイルノダヨ。
アノ少女ガ羨マシイ。アノ少女ガ妬マシイ、トネ。
故二肉体ヲ有リ難ク貰イ受ケタノダ。願イグライハ叶エテヤロウト思ッテナ」

「っ、そんな事……！」

地縛神に乗っ取られたなのはの口から飛び出してくる言葉に、クロノは顔を歪める。
なのはがフェイトを恨む気持ちも分からなくもない。もしも自分だったら、なのはと同じに思うかもしれない。

だが、何時かはけじめをつけなければならないのだ。
いつまでも過去に縋りついていては、拾える幸せも拾えなくなってしまう。

時間はかかるかもしれない。だが、歩みを止めてはいけないのだ。

クロノは頭を振る。なのはは幸せになるべき人間だ。
こんなところで。こんなところで地縛神の操り人形になっていて良い訳が無い。

「――――絶対に、させはしない！」

故に、クロノは吠える。絶対になのはを助け出すと。
この場から鬼柳とロットンを追い、姿を消したフェイトに指一本触れさせないと。

その瞳に宿るのは不退の色。何があっても、自分はこの場を動かない。
そう決意を固め、クロノはなのは。否、地縛神スカーレッド・ノヴァに相対する。

「ヤレルモノナラバヤッテミロ！
≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫ノ特殊能力！
自身ノ墓地二存在スルチューナーノ数ダケ、攻撃力ガ５００ポイントアップスル！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン（ＯＣＧ効果）
シンクロ・効果モンスター
星１２／闇属性／ドラゴン族／攻３５００／守３０００
チューナー２体＋「レッド・デーモンズ・ドラゴン」
このカードの攻撃力は自分の墓地に存在するチューナーの数×５００ポイントアップする。
このカードは相手の魔法・罠・効果モンスターの効果では破壊されない。
また、相手モンスターの攻撃宣言時、このカードをゲームから除外し、
相手モンスター１体の攻撃を無効にする事ができる。
エンドフェイズ時、この効果で除外したこのカードを特殊召喚する。

スカーレッド・ノヴァＡＴＫ３５００→５５００

地縛神スカーレッド・ノヴァの墓地に眠るチューナーの数は四体。よって、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力が２０００ポイント上昇する。

その攻撃力は５５００。もはや戦闘破壊することは不可能な数値を叩きだしている。

ならば効果や魔法・罠による破壊はどうか。だが、これもまた不可能な話だった。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは相手プレイヤーの魔法・罠・モンスター効果による破壊を無効にする効果を持っている。

それは完全な破壊耐性。バウンスや除外に弱いと言う弱点はあるが、一切破壊効果を受け付けない凶悪なモンスターとなっている。

そしてクロノのデッキに、除外やバウンスを行うカードは二枚しか入っていない。

「バトルッ！　≪マジカル・コンダクター≫デ≪ディスクライダー≫を攻撃！
　アクセルシューター！」

そして地縛神がバトルフェイズに入り、マジカル・コンダクターが攻撃を仕掛けてくる。

大方、クロノを一撃で倒そうと言う魂胆なのだろう。だが、そう簡単に自分は負けてやるつもりは無い。

「ぐっ……！」

「ソシテ無防備トナッタ相手プレイヤー二≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫デダイレクトアタック！」

壁モンスターであるディスクライダーが破壊され、クロノのフィールドは無防備となる。

伏せカードが一枚存在しているが、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは恐れずに飛び込んでくる。

なまじ絶対的な戦闘破壊体勢を持っているからだろう。

炸裂装甲や万能地雷グレイモヤが伏せられていても、恐れずに攻撃できる。

だが、今回ばかりは違った。クロノが伏せていたカードは攻撃反応型の罠ではない。

それでいて、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを除去する次元幽閉などでもなかった。

クロノが伏せていた伏せカード。

それは、墓地から壁となるモンスターを蘇生させるカードだった。

「伏せカード≪リビングデッドの呼び声≫を発動！

墓地から≪ディスクライダー≫を攻撃表示で特殊召喚する！」

クロノが伏せていたのはリビングデッドの呼び声。墓地からモンス

ターを蘇生させるカードだ。
本来ならばレッド・デーモンズの攻撃を耐え切った後、ドローしたカードで場を立て直す予定だった。

だが、予定はなのはの場にスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが召喚されたことで崩れる。
攻撃力５５００と言う圧倒的な数値を、そのまま受け止める訳にもいかない。

攻撃を受けることになるディスクライダーには悪いが、壁になってもらう他なかった。

「構ワン！　戦闘ヲ続行スル！
バーニングッ、ソウルッ！！！」

墓地よりディスクライダーが蘇生するが、地縛神スカーレッド・ノヴァは攻撃を中断しない。
当然だ。止める理由が無いのだから。故にスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンへ攻撃命令が続行される。

攻撃命令を受けたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは、その身を丸め。
全身を火の玉の様に燃やしながらクロノのディスクライダーへとその身を突貫させる。

それはさながら、大砲から発射された規格外の弾丸の様だった。

「うわぁあああああッッ！！！」

クロノＬＰ４０００→２００

そして一方。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃を防ぎ切ったクロノ。

だが、その身に受けた衝撃は計り知れず、堪らずその場から吹き飛ばされた。

非殺傷設定でデュエルをしていると言うのに、クロノの身体は先ほどの衝撃でボロボロ。

どうやらこのデュエル、強制的に非殺傷設定が解除されているらしい。ダメージが現実のものとなっている。

クロノのバリアジャケットはあちこちがやぶけ、額からは廃倉庫の破片で切ったのか。

タラリと幾筋もの血液が流れ落ちていた。流れ落ちる血が目に入らぬ様に、クロノは目を細める。

地縛神スカーレッド・ノヴァ。

そして地縛神が従えるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン。どちらも相当に厄介な相手だ。

恐らく、自分のデッキでは太刀打ちが出来ないだろう。

デッキの調整を施せばどうにかなるがしれないが、今はデュエル中。

それにここでデュエルを中断すると言うことは、地縛神の歩みを許すことになる。

そうなれば、待っているのはフェイト・テスタロッサへの身の危険。

ひいては次元世界の危機だ。

こんなところで、倒れていて良いはずが無い。

額から流れ落ちる自身の血を乱暴に拭うと、彼は足に力を入れる。

「――――～～～っ、くっ！」

しかし、立ちあがろうとするクロノだが、立ちあがることが出来なかった。

一体何故。何処か負傷したのかとボロボロの身体へ視線を向け、クロノは愕然とする。

地面に力なく投げ出された彼の両手や両足は、小さくも小刻みに震えていた。

それは相対している相手への恐怖なのか。はたまた従えているモンスターへの恐怖なのか。

だが、それも仕方のないことかもしれない。なにせ相手は古の邪神。現代の人間が使うことすら出来ない様な禁忌とされる様な特殊能力をその身に宿しているのだから。

下手にデュエルを続ければ、自身の命が失われてしまうかもしれない。

尊敬する母親に。大切な同僚にもう二度と会えないかもしれない。

その不安や恐怖は、いくら訓練しても慣れることはないだろう。

「ククッ。貴様ハソコデ無様ニ震エテイルガ良イ」

と、クロノが自身の内に発生した恐怖を自覚していると。
彼の視線の先で、デュエルの構えを解いた地縛神が嘲る様にそう言い放った。

このまま此処で震えていれば、自分は助かるだろうか。ふと、そんな邪念が生まれる。
そうだ。こんな怪物を相手にする必要なんてない。応援部隊に全てを任せ、力尽きてしまえばいい。

何処からか現れたもう一人のクロノが、クロノの脳裏に語りかけてくる。
その声に思わず、クロノは従ってしまいそうになる。

だが彼は――、それを良しとはしなかった。

「ふざ、けるな……っ！」

小刻みに震える両足に力を入れ、クロノは立ちあがる。
依然として相対している地縛神への恐怖はある。しかし、それ以上に負けられない。

「僕は、時空管理局所属、クロノ・ハラオウン執務官だ……っ！」

未だ震える両足で大地を踏みしめ、クロノは相対する地縛神の瞳を見据えた。
真っ赤に染まった瞳は生理的な嫌悪感を催すが、クロノはそれを無視して睨みつける。

額から流れ落ちる血が目に入るが、構わない。
真っ赤に染まった視界で、クロノは地縛神スカーレッド・ノヴァを睨みつける。

「僕の後ろには……、護るべき、人たちが居る……っ！」

クロノの後ろには誰も存在しない。だが、確かにその存在を確かめることが出来る。
フェイトが。鬼柳が。はやてが。リインフォースが。そして次元世界に暮らす人々がクロノの後ろに居るのだ。

そんな彼らの元へ、地縛神が近づくのを許容できるのか？
災厄が近づくのを彼は、クロノは許容できるのか？

否。そんなモノ、断じて許容できるものではない。

「ホウ……」

クロノの瞳に宿った猛々しいまでの決意の色に、地縛神に感心の表情が浮かぶ。
まさかこんなところで、これほどまでの精神の持ち主に出会うとは思いもしなかった。

心意気や良し。覚悟も十二分に足り得る。中々見つかることのない、稀有な人間だ。
だが、彼には圧倒的に力が足りていなかった。地縛神たる自分と、対等に戦うだけの力が。

故に、地縛神スカーレッド・ノヴァは惜しいと思う。
目の前に立つ一人の人間。否、クロノ・ハラオウンが力を持たぬことが。

彼が相応の力を持っていれば、もしかしたら自分を打倒することが出来たかもしれない。
本当に、惜しい人間だと地縛神スカーレッド・ノヴァはこちらを睨みつけてくるクロノを見つめる。

そして、クロノが吠えた。

「僕は僕の大切な人たちを護る……！
だから！　ここから一歩も先には！　通さないッ！！！」

瞬間、クロノの左目が激しい発光を始めた。

※

時空管理局本局の地下にある特別室。

そこに安置されているカードに、異変が起こっていた。

異変が起こったのは、顔が半分だけこちらを向いていると言う珍しい絵柄のカード。

否、それは元からその様に印刷されたのではない。カードが自分の意思で身体を傾けているのだ。

――――覚悟は良し。心根も十分。

その声は異変が起こっているカードから聞こえてくる。

異変が起こっているカード――極神聖帝オーディンが満足そうな顔でこちらを見つめる。

資格者であるクロノ・ハラオウンの決意と勇気は十二分に伝わってきた。

彼は自らの護りたい人たちのために闘う。知人のため、家族のため。

そしてこの世界に住む人々のため。

今どきこれほどの少年を見つけることは難しいだろう。

だが、現にクロノはいた。そして認められることが出来た。

星界の神々を束ねる最高神――オーディンに。

――――力が足りぬと言うのなら、我が力を与えよう

クロノにはオーディンの言うとおり、力が絶対的に不足していた。

自らを従えるだけの力を、クロノは持っていなかった。だが、関係ない。

トールが力を。ロキが知略を重視する様に。オーディンもまた、精神を重視する。

そこに資格者の力などは必要ない。資格者の心の在り方。それだけがオーディンには必要だった。

そしてクロノは先の宣言で認められた。正式なオーディンの所有者へと。

故に、オーディンは力を貸す。力が足りないと言うのなら、自らの持てる力の全てを資格者へと。

――――さぁ、我を使いこなせ。クロノ・ハラオウン

※

「っ、なんだ!?」

突然の左目の発光に、クロノは思わず動揺した。

てっきり地縛神からの特殊な攻撃かとも思ったが、どうやらそうではないらしい。

なにせ相対している地縛神もまた、クロノの様に目を丸くしているのだから。

故に、クロノは事態を把握することが出来ない。一体、自分の目には何が起こっているのか。

「！　なっ……！」

そしてクロノが事態の把握に努めていると。

彼の目の前に二人の小柄な女性が降り立った。否、それは人間なのか。

片方は蒼い髪の少女。白の丈の長いスカートを着用し、腰には一振りの剣が差してある。

片方は黒い髪を腰の辺りまで伸ばした女性。手には鎌を持ち、足の脇にスリットが入ったスカートを着ている。

だが、どちらの女性の背にも人のモノとは思えぬ。立派な白い翼が存在していた。

もしも彼女たちが天使だと言われたならば、素直に信じてしまいそうだ。

そしてそんな突然の事態にクロノと地縛神が動きを止めている中。

空から降り立った二人の女性は、クロノの目前まで歩み寄ると片膝をついた。

それはまるで、彼女たちがクロノへ服従を示したかのようにも見える。

「我らが神は、貴殿――クロノ・ハラオウンを主と認めました」

「よって、我らはこれより、クロノ・ハラオウンの元で力を振るいます」

放たれたのは、意味が分からない言葉の数々。
我らが神？　主とは何だ？　クロノは理解が追い付かず、混乱する。
だが、蒼い髪の少女から差し出された一枚のカードを見て、クロノは大きく目を見開いた。
その少女が持つカードは、これまでクロノが認められ様と必死に努力してきたカードだったのだから。

特異な形をした帽子。顎から生えた髭は胸の辺りまで生えている。
そして手に持った槍に隻眼。間違いない。このカードこそ、神――極神聖帝オーディンのカードである。

「僕は……認められることが、出来たのか？」

「はい。貴殿の勇気、決意、しかと神は見届けられました」

「故に貴殿の左目にはオーディンを現すルーン文字が刻まれております」

クロノは茫然と、正面を向いたオーディンのカードを受け取る。
すると瞬間、彼の左目が激しく輝いた。

もしも第三者がクロノの瞳を覗いたならば、驚愕に目を見開いただろう。
彼女たちの言うとおり彼の瞳には、オーディンを現すルーン文字が刻まれているのだから。

「さぁ、振るいなさい。我らの力を」

「貴殿が力を欲するならば、我らがその剣（つるぎ）となりましょう」

そしてクロノの元へ降り立った二人の女性はその言葉を最後に、自身の身体を輝かせる。
光の粒子となった二人の女性は、螺旋を描きながらクロノのデッキへと混ざり合う。

瞬間、クロノのデッキに異変が起こった。
クロノのデッキに投入されているあらゆるカードが、別のカードへと変化を遂げて行く。

ディスクライダーが。スナイプストーカーが。ヘル・セキュリティが。
それらのカードが全て、クロノの見たことが無いカードへと姿を変えて行く。

しかし、不思議と不安や嫌悪感は存在しない。
あるのはただ、自身のデッキからあふれ出る莫大な力のみ。

「……そうか。僕は、護ることが出来るんだな……」

クロノは二人の女性が消えたことを確認すると、静かに呟いた。
彼の言葉に応えるものはいない。だが、不思議とそれを確信することが出来た。

自分は神から力を与えられた。莫大な力を。
デッキを通じ、神の力が流れ込んでくる。負ける気は無い。

「――イイ目ヲシテイル」

そして先ほどのやり取りが終わるまで口を閉じていた地縛神が、静かに口を開いた。
それはまるで、相手の成長を喜んでいる様にも見える。否、実際地縛神は喜んでいた。

目の前の相手が力を手にし、自らと同じ土俵に上がったことに。
自らが全力を出し、打倒するに相応しい相手になったことに。

「サァ、デュエルヲ始メヨウ。クロノ・ハラオウン。
ソシテフェイト・テスタロッサノ夫ヨ」

だが、それも此処までだ。
地縛神は僅かに緩んでいた顔を引き締めると、視線を廃倉庫の入口へと向ける。

そこには爆風でコートをボロボロにしながらも、懸命にこちらに向かってくる鬼柳とフェイトの姿があった。
見ると彼の手には、白いモンスターカード――レッド・デーモンズ・ドラゴンのカードが握られている。

どうやらロットンから無事、レッド・デーモンズ・ドラゴンを奪い返したらしい。
地縛神スカーレッド・ノヴァはクロノと鬼柳。二人の決闘者に宣戦布告をする。

「一対一でなくて良いのか？」

「ソレデモイイガ、フェイト・テスタロッサノ旦那二逃ゲラレル訳二行カヌノデナ。
悪イガ二対一で相手ヲシテヤル」

クロノの確認する様な声に、地縛神は視線を鬼柳へ向けながら答えた。
このままクロノと全力で戦うのも一興だが、鬼柳に逃げられる訳には行かない。

彼を自らの内に取り込むこと。
それこそが高町なのはの願いなのだから。

「クロノ……」

「鬼柳、手伝ってくれ。なのはを助ける」

そしてクロノと地縛神の会話が途切れたタイミングを見計らい、鬼柳がこちらへやってくる。

彼は伺う様な視線をクロノへ向けるが、クロノは力強い声で鬼柳に応援を要請した。

神の力を得たとは言え、自分はまだ完全にオーディンの力を使いこなせる訳ではない。

ならば戦力は他にもいた方が良いだろう。危ない橋を渡るより、堅実に言った方が今回は良い。

「……あぁ」

鬼柳は僅かに思案げな表情を浮かべていたが、クロノの真剣な声に背中を押されてか。

コクリとタッグデュエルの申し出を受けた。そして彼もまた、デュエルディスクを展開する。

「ククッ、我二本気ヲ出サセタ事ヲ後悔スルガイイ！」

「生憎と、僕は後悔する訳に行かないんでね！」

「悪いが、なのはは返してもらうぜ！」

地縛神スカーレッド・ノヴァをクロノと鬼柳が。
クロノと鬼柳を自縛神スカーレッド・ノヴァが睨みつけながら。

三人は一斉に、デュエル開始宣言の合図を行った。

「「「「――――決闘（デュエル）！！」」」」

二十七話　「地縛神覚醒　現れるスカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　後編」（後

次回予告

クロノとタッグを組み、地縛神に挑む鬼柳。
だが地縛神の操るスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの前に成す術もない。

しかし、クロノが召喚するオーディンが活路を開く――――！

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

「途切れぬ絆」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

二十九話　「途切れぬ絆」（前書き）

上手く行けば、あと二話でなのは覚醒編は終了かも。
ひとまず一話に時間を掛けてでも、覚醒編を終了させる。

二十九話　「途切れぬ絆」

～ミッドチルダ　某所の廃倉庫～

「先攻は俺が貰うぜ、クロノ」

「あぁ」

「ドロー！」

鬼柳手札５→６

鬼柳とクロノ。そして地縛神による二対一と言う変則的なデュエルが開始される。
まず先攻の権利を得たのはクロノと鬼柳のタッグ。手札を確認し、鬼柳が先攻を取った。

「≪インフェルニティ・デーモン≫を召喚。
そしてカードを三枚伏せて、ターンエンドだ」

鬼柳手札６→２
場　インフェルニティ・デーモン　伏せ×３

鬼柳はまず、自分たちの壁となるモンスターを召喚する。

以前の様なタッグとは違い、このデュエルはパートナーのモンスターにも攻撃権が存在する。

だが、伏せカードの発動はそのターンプレイしているターンプレイヤーしか発動することはできない。
故に鬼柳がカードを捨てようとインフェルニティ・インフェルノを発動しても、ターン次第ではクロノが捨てることになる。

俗に言うタッグフォースルールだ。
両者のライフは４０００と少なく、それがより緊張感を生み出している。

ちなみに注意点は以下の通りだ。
・ライフポイントは鬼柳とクロノは共有。
・モンスター、魔法・罠ゾーンは二人で合計五枚まで。
・味方のモンスターで攻撃、シンクロ・融合素材に使用可能

と言った点である。
迂闊なカードは伏せられないと、鬼柳は気を引き締める。

「此方ノターン、ドロー」

地縛神手札5→6

そしてターンが地縛神へと移り、デッキからカードをドローする。
基本的な構築はなのはのモノと同じ様だが、油断することはできない。

「手札カラ≪簡易融合（インスタフュージョン）≫ヲ発動。
ライフヲ１０００ポイント支払ウ事デ、エクストラデッキカラレベル５以下ノ融合モンスター一体を場二特殊召喚スル。
エクストラデッキヨリ≪音楽家（ミュージシャン）の帝王（キング）≫ヲ特殊召喚！」

地縛神ＬＰ４０００→３０００

地縛神のフィールドに、上半身裸の派手なギターを持った男性型のモンスターが現れる。
攻撃力は１７５０と微妙な値だが、このモンスターに求められるのはステータスではない。

「ソシテ≪氷結界の風水師≫ヲ召喚！
レベル５≪音楽家の帝王≫二レベル３≪氷結界の風水師≫ヲチューニング！」

「っ、来るぜクロノ！」

「分かってる！」

合計三つの緑色のリングが浮かび上がるのを確認しつつ、鬼柳は警戒の声を上げる。
これより召喚されるのは、なのはのエースモンスターだったカードだ。

その破壊力は鬼柳が良く知っている。さらにその進化先のカードも。

故に彼が警戒する声を上げるのは仕方が無い。

しかし、クロノも無警戒なままではない。

つい先ほど、レッド・デーモンズの最終形態をその目で見たのだ。

油断など出来る筈もない。

「ソノ身ヲ悪魔ヘト捧ゲタ魔竜ヨ！　怒リノ炎ヲ纏イテ敵ヲ食ライ尽クセッ！

――――シンクロ召喚！　深淵ノ支配者≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！！」

そして現れるのは、全身を闇で染め上げたかの様に真っ黒な姿をしたレッド・デーモンズの姿。

誇りに燃える金色の瞳は、今は禍々しいまでの赤い瞳が煌めいていた。

「バトルフェイズ！　≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫デ≪インフェルニティ・デーモン≫ヲ攻撃！

灼熱ノクリムゾン・ヘル・フレアァアアアッッ！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴンを召喚した地縛神は、そのまま攻撃へと移行する。

どうやら先ほど発動した魔法カード「クリムゾン・ヘル・セキュア」は手札に無かったようだ。

それにクロノはホッとしつつ、鬼柳のモンスターへ攻撃を仕掛けるレッド・デーモンズへ視線を移す。
インフェルニティ・デーモンは攻撃表示で召喚されている。このままなら効果で破壊され、ダメージを受けてしまうだろう。

一体鬼柳はどうするのか。
クロノが見つめる先で、鬼柳は伏せカードを発動する。

「リバースカードオープン！　≪デプス・アミュレット≫！
　手札を一枚捨てることで、相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

デプス・アミュレット
永続罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
手札を1枚墓地へ捨て、相手モンスター1体の攻撃を無効にする。
このカードは発動後3回目の相手のエンドフェイズ時に破壊される。

鬼柳手札2→1

「フム、戦闘無効ノ罠カードカ……。ナラバ≪紅蓮魔竜の壺≫ヲ発動。
　デッキカラカードヲ二枚ドローシ、カードヲ三枚伏セテターンエンドダ」

地縛神手札5→2
場　レッド・デーモンズ　伏せ×3

デプス・アミュレット0→1

「僕のターン、ドロー！」

クロノ手札5→6

地縛神がターンエンドの宣言を行い、クロノへとターンが移行する。
モンスターも生存し、伏せカードが三枚と言うある種最高のコンディションだ。

まずはスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを呼ばれる前に決着をつけなくては。
クロノはそう決意すると、新たに加えられたモンスターにその手を掛けた。

「僕は手札から≪極星霊リョースアールヴ≫を召喚！」

召喚されたのは、緑色の身体を持った不可思議なモンスター。
見た目はふわふわとした風船の様で、あまり強そうには見えない。
だがこれこそが、クロノの新たに得た力――神を召喚する一手である。

「≪極星霊リョースアールヴ≫が召喚に成功したとき、このカード以外の自分フィールド上の表側表示モンスター一枚を選択する。
そして手札から選択したモンスターのレベル以下の「極星」と名

のついたモンスター一体を特殊召喚することが出来る！」

「俺のモンスターを利用するか。流石だぜ、クロノ」

「手札から≪極星天ヴァルキュリア≫を特殊召喚！」

極星霊リョースアールヴ
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／攻１４００／守１２００
このカードが召喚に成功した時、
このカード以外の自分フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターのレベル以下の「極星」と名のついたモンスター１体を
手札から特殊召喚する。

極星天ヴァルキュリア
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／天使族／攻　４００／守　８００
このカードが召喚に成功した時、相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にこのカード以外のカードが存在しない場合、
手札の「極星」と名のついたモンスター２体をゲームから除外して発動する事ができる。
自分フィールド上に「エインヘリアル・トークン」（戦士族・地・星４・攻／守１０００）２体を守備表示で特殊召喚する。」

鬼柳の称賛の声を浴びながら、クロノはデュエルディスクにカード

を叩き付けた。
そして召喚されるのはつい先ほど、クロノの前に片膝を着いた美しき天使のモンスター。

召喚されたヴァルキュリアはキッと視線をレッド・デーモンズへと向けると、その手に持つ剣に力を込めた。

「鬼柳、君のモンスターを借りるぞ！
僕はレベル４≪インフェルニティ・デーモン≫とレベル４≪極星霊リョースアールヴ≫に
レベル２≪極星天ヴァルキュリア≫をチューニング！」

「っ！？　レベル１０のシンクロモンスターだと！？」

クロノの場の極星天ヴァルキュリアが空へと飛翔し、二つの緑色のリングを剣で描く。
その中へ吸い込まれるように消えて行く二体のモンスターを見送りながら、鬼柳が驚いた声を上げた。

だが、それも仕方のないことかもしれない。
彼はクロノがオーディンを継承したとは露も知らないのだから。

「北辰の空にありて、全知全能を司る王よ！　今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！
シンクロ召喚！　天地神明を統べよ！　最高神、≪極神聖帝オーディン≫！」

そしてシンクロ口上を読みあげ、クロノがエクストラデッキからオーディンのカードを取り出す。
それと同時にして、頭上で円を描いていた緑色のリングを極太の閃光が貫いた。

その閃光は、これまで見てきたどのシンクロ召喚のモノよりも巨大で召喚されるモンスターの力が表わされている。
鬼柳はまさかの神の登場に大きく目を見開き。彼らと相対する地縛神は興奮に口元を歪ませている。

そして、緑色のリングを貫いていた閃光が晴れた。
現れるのは周辺の建造物よりも巨大なモンスターの姿。
最高神、極神聖帝オーディンの姿があった。

「ソレカ！　貴様ノ新タナ切リ札ハ！」

「デけぇ……！」

見上げるほどの大きさの神を前に、興奮する地縛神。そして逆に茫然としている鬼柳。
彼もまさか、神の姿をこんなところで見ることになるとは思いもしなかっただろう。

だが、何も大きいのは図体だけではない。その攻撃力、そして効果を取ってしても。

クロノの召喚したオーディンは、規格外だった。

「≪極神聖帝オーディン≫の効果を発動し、バトル！
≪極神聖帝オーディン≫で≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫に攻撃！　ヘヴンズ・ジャッジメント！」

クロノの背後に控える巨大な神が、その手に持った槍を天へと掲げた。
そして掲げられた槍に光が集まり、それらが一斉に地縛神の元へ放たれる。

攻撃力は十分。
これでレッド・デーモンズを破壊出来ればスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの高速召喚を防げる。

上手くいってくれ。クロノはそう願いつつ、戦況を見守る。

「罠発動！　≪聖なるバリア－ミラーフォース－≫！
攻撃表示モンスターヲ全テ破壊スル！」

「無駄だ！　オーディンが表側表示で存在するとき、
幻獣神族モンスターは魔法・罠カードの効果を無効にすることが出来る！」

「バカナッ！？」

「っ！？　なんて効果持ってやがる！」

極神聖帝オーディン（アニメ効果）
シンクロ・効果モンスター
星１０／神属性／幻獣神族／攻　４０００／守　４０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター二体以上
このカードがフィールド上に存在する限り、幻神獣族モンスターは魔法・罠カードの効果を無効にすることが出来る。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた場合、
そのターンのエンドフェイズにこのカードを墓地から特殊召喚する。
この効果で特殊召喚に成功した時、自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。

オーディンを迎え撃つように放たれたバリアが、いともあっさり無効化される。
それに驚愕するのは地縛神だけではない。効果を知らぬ鬼柳までも、驚いた様子をしている。

たしかに魔法・罠カードの効果を受けないと言うのは鬼柳からすればインチキ効果にも見えるだろう。
だが実際には、オーディンと同等。もしくはそれ以上に強力な効果を持ったモンスターもこの世には存在している。

「グァアアアアッッ！！」

地縛神ＬＰ３００００→２０００

そしてレッド・デーモンズ・ドラゴンが破壊され、地縛神へダメージが与えられる。
その数値は１０００と、決して少なくは無い。すでに初期ライフの四分の一を削ったことになる。

だが、決して油断はできない。目の前の地縛神は、力で。
この神を凌駕してくるかもしれないからだ。

「さらに僕はカードを二枚伏せて、ターンエンド」

クロノ手札６→２
場　オーディン　伏せ×４（鬼柳と共有）

故にクロノは守りを固めることにした。
幸い、守備用のカードは幾つか彼の手札に舞い込んでいる。

そして、地縛神がデッキの一番上のカードへ手を掛けた。

「ドロー」

地縛神手札２→３

「ククッ、≪極神聖帝オーディン≫カ。
ナルホド、強大ナ力ヲ得タト言ウ訳ダナ」

地縛神はデッキからカードをドローすると、プレイを続行せずにクロノへ語りかける。
それはさながら、相手の成長をただ一途に喜んでいる様にも見える。
だが、そうではない。

クロノと鬼柳は、そう確信していた。
相手はただ、喜んでいるだけではないと。

理由は簡単だ。クロノが強力な力を手に入れれば、相応の力を地縛神も解放せざるを得ない。
地縛神はそれを喜んでいるのだ。故に、ここからが正念場。クロノと鬼柳の手の平に、じっとりと汗が滲む。

そしてその確信は現実のものとなった。

「リバースカード≪リビングデッドの呼び声≫ヲ発動！
墓地ヨリ≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫ヲ特殊召喚スル！」

「くっ、オーディンの効果は自身への魔法・罠効果のみしか妨害出来ない！」

「墓地ヨリ舞イ戻レ、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！」

地縛神のフィールドに、墓地よりレッド・デーモンズ・ドラゴンが帰還する。
折角レッド・デーモンズ・ドラゴンを破壊したと言うのに蘇生されるとは。

「手札カラ≪エフェクト・ヴェーラー≫ヲ通常召喚。
ソシテ≪死者蘇生≫ヲ発動！　墓地ヨリ≪氷結界の風水師≫ヲ特殊召喚！」

「っ、気を着けろ鬼柳！　地縛神が力を解放する！」

「分かってる！」

相手のフィールドに揃ったモンスターを見て、クロノが鬼柳に警戒を促す。
自分はまだ見ている分対策を練ることが出来るが、鬼柳はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを見ていない。
故にここは鬼柳にも警戒させ、全力でスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに備えるべきだ。
幸い、クロノと鬼柳のフィールドには鬼柳のデプス・アミュレットが存在している。
攻撃を防ぐことは可能だ。

「悪魔ヘトソノ身ヲ捧ゲタ竜ハ闇ヘト堕チ、地獄ノ底デ悪魔ト交ワリテ破壊ノ産声ヲ上ゲル！
コノ世二破滅ト終焉ヲ！　――――シンクロ召喚！」

そして四つの炎のリングがレッド・デーモンズ・ドラゴンを包み込み、新たな姿へとその身を変える。

周囲に轟くのは炎のリングの中で姿を変えているレッド・デーモンズ・ドラゴン。

身体が竦み上がりそうな咆哮を前に、鬼柳とクロノが顔を強張らせる。

「破壊ノ化身≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫！！」

「っ、コイツは……！」

新たに召喚されたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの姿に鬼柳が目を見開いた。

まさかレッド・デーモンズが地縛神の力を借りて進化するとは思いもしなかっただろう。

鬼柳とクロノ。

二人の前に相対している紅蓮の悪魔は、感情の読めない視線を二人に向けている。

「≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫ハ墓地二存在スルチューナーノ数ダケ、自身ノ攻撃力ヲ５００ポイントアップサセル！」

スカーレッド・ノヴァＡＴＫ３５００→４５００

「攻撃力がオーディンを上回っただと！？」

「≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫ヨ、目障リナ神ヲ打チ倒セ！

バーニング、ソウルッ！」

自身の召喚した神の攻撃力を超えられ、クロノの顔が歪む。
分かり切っていた事だ。先のデュエルで、スカーレッド・ノヴァの攻撃力は５０００を超えていた。

故に攻撃力が僅かに１０００ポイントしか上がらなかったのは、逆に良い事だろう。
５５００などの攻撃力を叩きだされていたら、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを倒すのは難しかったかもしれない。

そして神へと向け、地縛神が攻撃を命令する。

「リバースカードオープン！　≪極星宝メギンギョルズ≫！」

だが、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃がオーディンに命中する寸前。
クロノが伏せていたカードを表にする。現れたのは神々が身に付ける宝具の一つ。

「≪極星宝メギンギョルズ≫は自分フィールド上に表側表示の「極神」または「極星」と名のついたモンスターを選択し、発動！
選択したモンスターの攻撃力を、元々の数値の二倍にする！」

極星宝メギンギョルズ

通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する
「極神」または「極星」と名のついたモンスター1体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力・守備力は元々の数値の倍になる。
このターン、選択したモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃をする事はできない。

「バカナッ!?」

「倍……と言うことは、攻撃力８０００!?」

表になったカードから現れた宝具がオーディンに装着され、淡い光がオーディンを包み込む。
だが、見た目とは裏腹に効果は非常に強力で、オーディンのパワーが他の追随を許さないほどにまで膨れ上がる。

これにはさすがの地縛神も面喰った様で、大きく目を見開いていた。
そして迎撃のため、オーディンがその手に持った槍を振り上げる。

「クッ、ソノカードノ発動ニチェーンシテ≪亜空間物質転送装置≫ヲ発動!
　場ノ≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫ヲゲームカラ除外スル!」

亜空間物質転送装置

通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、発動ターンのエンドフェイズ時までゲームから除外する。

「っ、逃げたか」

オーディンの掲げた槍から放たれた閃光がスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに命中し様としたとき。
目前まで迫っていたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンがフィールドから除外される。

さすがにスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを除去されるのは地縛神にとっても厳しいのだろう。
その顔には苦々しい表情が、これでもかと浮かんでいる。

「我ハコノママ、ターンエンド。
ソシテコノエンドフェイズ、≪亜空間物質転送装置≫デ除外シタ≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫ハフィールド二舞イ戻ル」

地縛神手札1
場　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

デプス・アミュレット1→2

「俺のターンだ、ドロー！」

鬼柳手札1→2

「俺は手札から≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫を墓地へ送り、≪ワン・フォー・ワン≫を発動！
デッキ、または手札からレベル１モンスター一体を場に特殊召喚する！
デッキから≪インフェルニティ・ミラージュ≫を特殊召喚！」

自身の発動した魔法カードにより、鬼柳はハンドレスを完成させつつ、場を整える。
すでに墓地には数体のインフェルニティモンスターが眠っている。
これで後はインフェルニティ・デス・ドラゴン。ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン。
煉獄龍オーガ・ドラグーンを呼んで場を固めればいい。
だが――、と鬼柳は苦い表情を浮かべる。

「（地縛神のフィールドには完全な破壊耐性を持った≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫がいる。
≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫じゃ破壊出来ず、戦闘でもパワーが圧倒的に負けてる……！　くそっ！）」

そう。鬼柳の持つ３体のドラゴンでは、いずれもスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを破壊することは出来ない。
魔法・罠・モンスター効果による破壊を無効にする効果は厄介で、エースであるインフェルニティ・デス・ドラゴンは当てにできない。

かと言って戦闘で破壊しようにも、攻撃力４５００と言う高い壁が立ち塞がっている。
まず突破できないこの状況に、鬼柳はギリッと顔を歪めた。

「ククッ、鬼柳　京介ヨ。悔シイカ？　仲間ヲ救エナイ己ノ無力ニ」

と、鬼柳がフィールドと墓地のカードを確認していると、地縛神が鬼柳に声を掛けてくる。
それはまるで、鬼柳のことを嘲笑っているかのようで。鬼柳のことを哀れに思っている様で。

だが、事実鬼柳としては凄まじく今の状況は悔しいものだ。
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは完全にクロノ任せ。自分は場を整えることしかできない。

無理に鬼柳が場を掌握しなくても良いのだが、やはりなのはは自分の手で助けたかった。
彼なりのプライドなのだろう。悔しさに真っ赤に燃えた瞳が、地縛神の真っ赤な目を見返す。

「それがどうした……っ！」

「我ノ中二来イ。ソシテ高町ナノハト一ツ二混ザリ合エ」

その言葉の直後。

地縛神のフィールドのスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに異変が起こる。

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは何を思ったのか。
自身の腹を自ら食い破ったのだ。血液の代わりに光が飛び散り、鬼柳とクロノは目を見開く。

だがそれ以上に。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの蛮行以上に、鬼柳達の目を引くモノがあった。
それは食い破られたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹の中にある。開かれたその腹の中は漆黒の闇。

だがその闇の中にポツンと、浮かび上がるモノがあった。
その浮かび上がったモノを視界に納め、鬼柳とクロノが一斉に叫ぶ。

「「っ、なのは！」」

食い破られた腹の中にいたのは、紛れもなく鬼柳達が探し求めていた少女の姿だった。
だが、彼女は鬼柳達の声に耳を傾ける様子が無い。彼女は腹の中で一人、膝を抱えて蹲っている。

「どうした、返事しろ！」

「無駄ダ。ソノ少女ハ自ラノ殻ニ閉ジ籠ッテイル。
イクラ言葉ヲ掛ケヨウガ、反応スルコトハナイ――イヤ、貴様ガ腹ノ中ヘ入レバ話ハ別カモ知レンナ」

鬼柳の叫びに答える様に、地縛神が現在のなのはの状態を説明した。
そして地縛神からなのはの状態を聞き、鬼柳は悲しげに表情を歪める。

まさか。フェイトと一緒になることで、ここまで大事になるとは思いもしなかった。
これは一重に、なのはと言う少女の気持ちを無視した結果なのだろうか。そうだとすれば、自分はまた間違えたのか。

不意に鬼柳の脳裏に、過去の出来事が思い出される。
遊星達を勘違いとは言え、憎むようになったあの忌まわしい事件。

当時の様に、自分は間違えたのか。
また、誰も幸せになれない様な選択をしたのか。

「京介！」

徐々に思考がネガティブなモノへと変わりそうなとき。
絶妙なタイミングで傍で観戦していた彼の妻――フェイトが声を張り上げた。

ハッと我に返り、鬼柳は視線をフェイトへ向ける。
普段は力強い彼の瞳が、この時ばかりは縋る様なモノへ変わっていた。

「京介は自分の心の思うとおりに行動したんでしょ！
だったら胸を張ってよ！　私が……私が京介のお嫁さんだって言うことを否定しないで！」

「フェイト……」

フェイトの血を吐く様な叫びに、鬼柳の瞳に生気が戻る。
そうだ。思い出した。自分は自分の心の思うとおりに行動したのだ。
護るために彼女と一緒になった。だが、今は自分から傍に居たいと思っている。
結婚してからこれまで過ごしてきた日々はいずれも、後悔する様なものではなかった。

故に、鬼柳は胸を張れる。フェイトと一緒になったことは間違いではなかったと。
自分はこの選択をして良かったと、鬼柳は胸を張って言える。掛け替えのないパートナーを得たのだから。

「そう、だな……。
危うく自分の選択を後悔するところだった」

なのはやはやて、リインフォースから告白された日。
彼は三人の告白を断った。彼女たちに恨まれるのは承知していた。
だが、彼は自信を持って断れたのだ。

その自信の根幹に、フェイトの姿があったことは否定できない。

彼女の浮かべる様々な表情が、仕草が。彼の自信をより強固なモノに出来たのだ。

だからここで、当時の選択を否定すると言うことは、フェイトへの気持ちを否定することになる。
それではダメだ。自分はもう、すっかりフェイトに骨抜きにされている。自分の気持ちに嘘など吐けない。

自分はフェイト・テスタロッサが好きなのだから。

「悪いが地縛神、返事はノーだ。俺は俺の手で、なのはを救い出す。自分の殻に閉じこもってるなら、俺が無理やりその殻を壊して外に引きずり出す」

「ククッ、吠エルナ。心意気ヤ良シ。ナラバ行動デ示シテミヨ」

地縛神のその言葉と同時、食い破かれたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹が修復される。
恐らく、もう彼らの意思で開かれることは無いだろう。他の誰かが無理にでもこじ開けない限り。

「分かってる。俺は≪インフェルニティ・ミラージュ≫の効果発動。自身をリリースすることで、自分の墓地からインフェルニティモンスター二体を、場に特殊召喚する。
≪インフェルニティ・ネクロマンサー≫と≪インフェルニティ・デーモン≫を特殊召喚！」

鬼柳の場のインフェルニティ・ミラージュが消滅し、新たに二体のモンスターが蘇る。
先ほどオーディンを呼ぶためのシンクロ素材となったデーモン。そしてワン・フォー・ワンのコストになったネクロマンサーだ。

「そして手札が0枚のときに特殊召喚に成功した≪インフェルニティ・デーモン≫の効果発動！
デッキから「インフェルニティ」と名のついたカード一枚を手札に加えることが出来る。
俺は手札に加えた≪インフェルニティ・リベンジャー≫を召喚！」

場に一気に三体ものモンスターが展開される。
これこそが鬼柳の武器である爆発力。その凄まじさは、他の追随を許さない。

そしてフィールドにシンクロ素材のモンスターが揃ったことにより、鬼柳はシンクロ召喚が可能となる。
だが、彼が呼びだすモンスターでは地縛神のスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを破壊することは不可能だ。

ならばどうするか。
決まっている。自身の頼れるエースを呼ぶだけだ。
それがたとえ、状況を打破することが出来なくても。

「レベル4≪インフェルニティ・デーモン≫とレベル3≪インフェ

ルニティ・ネクロマンサー≫に
レベル1≪インフェルニティ・リベンジャー≫をチューニング！」

「呼ぶのか、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫を」

「あぁ。死者と生者、ゼロにて交わりしとき、永劫の檻より魔の竜は放たれる！
シンクロ召喚！　出でよ、≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！！」

クロノの問いかけに答えつつ、鬼柳がシンクロ口上を読み上げる。
そして放たれる極太の閃光。閃光の中から現れたのは、鬼柳の頼れる相棒の姿だった。

インフェルニティ・デス・ドラゴン。
不気味な見た目からは想像しづらいが、鬼柳のデッキのエースを担っている。

その効果は手札が0枚のとき、相手の場のモンスター一体を破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与えると言うモノ。

これは裏側表示のモンスターも関係ない。
だが、その場合はバーンダメージを与えられないが。

「これで俺はターンエンドだ」

鬼柳手札0

場　インフェルニティ・デス・ドラゴン　極神聖帝オーディン　伏せ×3（クロノと共有）

鬼柳もそれを承知しており、インフェルニティ・デス・ドラゴンの効果を使用することは無い。
そして特に何かカードを発動することをせず、大人しくターンを地縛神へと渡す。

一見すれば鬼柳が諦めた様にも見えるだろう。だが、鬼柳の瞳がそれは違うと物語っている。
彼の瞳に宿るのは不屈の闘志。何が何でも、なのはを救い出すと言う決意の表れだった。

「此方ノターン、ドロー」

地縛神手札1→2

「サテ。此方ノ提案ニ乗ッテ貰エナイノデハ、生カシテオク理由ハ無イナ。
バトルフェイズ！　≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫よ！
≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫を粉砕セヨ！　バーニング、ソウルッ！」

鬼柳が提案に乗らぬと分かると、地縛神は一気に勝負を決めに掛かってくる。
オーディンはどうとでもなると判断しているのか。先に鬼柳のデス・

ドラゴンに攻撃を命ずる。

地縛神の命を受けたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンはその身を炎で包み込むと、
インフェルニティ・デス・ドラゴン目がけて体当たりを行う。かなりの攻撃力を伴った体当たりを。

「っ、鬼柳！」

そして地縛神の攻撃宣言に、クロノが焦った声をあげる。
鬼柳の場には現在、デプス・アミュレットが表側表示で存在している。

だが、デプス・アミュレットの効果は手札が無ければ効果を発動することはできない。
現在の鬼柳の手札は０。つまりスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃を受け止めるしかない。

攻撃が通れば、多大なダメージが鬼柳達を襲うだろう。
しかしそれでも、鬼柳は伏せカードを発動しようとはしない。

「悪いな、クロノ。少しライフ貰うぜ」

「何を――」

「≪インフェルニティ・デス・ドラゴン≫！
≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫の腹を食い破れ！」

「んなっ！？」

鬼柳の驚きの命令に、クロノが目を大きく見開く。
だが、鬼柳はクロノの反応に視線を向けず、腕からデュエルディスクを外した。

カシャッと小気味いい音を響かせ、デュエルディスクが鬼柳の腕から外れる。
そして解除されたデュエルディスクを地面に置くと、鬼柳は視線を前方――インフェルニティ・デス・ドラゴンへと向けた。

『■■■■■～～～～ッッ！！』

『■■■■■～～～～ッッ！！』

鬼柳の命令に従ってか。
インフェルニティ・デス・ドラゴンは持ちこたえている。

自身の四つの腕でスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃を耐えてはいるが、
その圧倒的な攻撃力の差は如何ともしがたい様だ。徐々にインフェルニティ・デス・ドラゴンが押されてくる。

そして未だ粘るインフェルニティ・デス・ドラゴンに業を煮やしたのか。
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが止めの一撃を叩きこもうと大き

く口を開く。
だが、それよりも先に、
『■■■■■■～～～～ッッッ！！！』
インフェルニティ・デス・ドラゴンの方が先に動いた。
デス・ドラゴンはその巨大な口を大きく開き、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹に噛みつく。
まさかのインフェルニティ・デス・ドラゴンからの手痛い反撃に、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは苦悶の咆哮を上げた。
『■■■■■■■～～～～ッッッ！！』
しかしその咆哮も束の間。すぐにスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが反撃に移る。
その巨大なアギトを持って、インフェルニティ・デス・ドラゴンへ止めと言わんばかりに噛みつきを行う。
それにとうとう耐え切れなくなったのか。インフェルニティ・デス・ドラゴンは爆散。
インフェルニティ・デス・ドラゴンとスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力の差分のダメージが鬼柳達に与えられる。
鬼柳＆クロノＬＰ４０００→２５００

そして鬼柳達に戦闘ダメージが与えられると同時、その場を駆けだす者が居た。
その人物――鬼柳は灰色のコートを翻しながら、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンに向かって駆ける。

「鬼柳、何をするつもりだ！」

そんな鬼柳の様子に気づいたのだろう。クロノが大きな声を張り上げる。
しかし、鬼柳の足は止まらない。彼の視線の先にはスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが。

否、インフェルニティ・デス・ドラゴンの攻撃により、
腹を食い破られたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの姿がある。そして腹の中には、他でもないなのはの姿が。

「なのはを連れ戻してくる！
すぐに戻ってくるからよ、耐えてくれ！」

「んな……っ！　む、無茶苦茶過ぎるぞ！？」

鬼柳はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの元まで駆けながら、クロノへそう叫ぶ。
彼の目的はなのはの奪還。今はデュエルよりも、なのはの奪還の方が彼の優先度を上回ったのだ。

彼は恐らく、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹の中に乗り込み、なのはを連れ戻すつもりなのだろう。
無事に帰ってこれるか分からない様な、危険な賭けだ。そんな無茶苦茶な鬼柳の行動に、クロノが頭を抱える。

「頼む！　ほんの2、3ターンで良い」

「――――――～～～～っ！　それ以上過ぎたら承知しないからな！」

だが、それを知ってか知らずか。鬼柳は真剣な声でクロノへ頼みこんだ。
口ではそう言っているが、何ターン掛かるかなんて彼にも分からないだろうに。

クロノは鬼柳を引き止めたかったが、引き止めることは出来なかった。
ここでクロノまで鬼柳を引き止めに向かってしまえば、デュエルを棄権と判断されてしまう。

そうなれば、地縛神の歩みを引き止める存在は誰も居ない。
それはつまり、犯罪者を次元世界に解き放つと言う意味になってしまう。

そんなことは断じて許されない。
故にこの場でクロノが取れる行動は、鬼柳に悪態を吐くほかなかった。

「京介！」

そしてスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの元まで駆け寄った鬼柳の背に、フェイトの声が届く。

チラ、と視線を声が聞こえた方へと向けてみれば、不安そうに彼を見つめるフェイトの姿が。

無事に自分の元へ帰って来てくれるか。フェイトは心配なのだろう。鬼柳はそんなフェイトを安心させるようにニッとほほ笑むと、笑みを浮かべながら宣言する。

「ちょっとなのはを迎えに行ってくる。
少し遅くなるかもしれないが、必ず戻ってくる」

「――――約束だよ？」

「あぁ」

交わされた言葉の数は少ないが、それで彼らの意思は通じ合った。フェイトは鬼柳のその言葉に不安そうな表情を浮かべながらも、「いってらっしゃい」と告げる。

そして鬼柳はそんなフェイトの声に「おう」と応えると、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹の中へその身を躍らせた。

二十九話　「途切れぬ絆」（後書き）

次回予告

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの体内に侵入した鬼柳。
見渡す限り闇の中、彼は膝を抱えて蹲るなのはの姿を見つける。

そして彼は聞く。
出会ってからこれまで、なのはが抱いてきた気持ちの全てを。

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

「想い」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

三十話　「想い」（前書き）

かなり長くなってしまったので、一旦分けます。
と言うか此処で此処で一旦切っておかないと、話のテンポが悪くなるので。

三十話　「想い」

～ミッドチルダ　某所の廃倉庫～

「ククッ、自ラ高町ナノハノ闇ニ飛ビ込ムカ」

先ほどまで対戦相手として相対していた鬼柳が消えた廃倉庫の内部。
そこで対戦相手の地縛神スカーレッド・ノヴァは、愉快そうな笑みを浮かべた。

どうやら鬼柳は彼の告げた通り、自らの手で道を切り開き、なのはの元へ向かったようだ。
入れば戻ってこれるか分からない恐怖。二度と好きな相手に会えない恐怖。それらを全て置き去りにして。

まったく。どうしてこう、自分の元へ現れる人間はこうも気持ちの良い精神の持ち主なのだろうか。
ヴィヴィオの内から目覚めて間もない地縛神スカーレッド・ノヴァは、本気で首を傾げたくなる思いだ。

「閉ジロ、≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫」

そして地縛神は隣に控える赤と黒の魔竜に、そう指示を出す。
すると先ほどまで大口を開けていたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹部が、あっという間に修復されていく。

ほんの僅かな間でスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹部は修正し、そこには傷一つない魔竜の姿がある。
依然として戦闘続行が可能な相棒の姿に、地縛神はニヤリと笑みを浮かべた。

「サァ、続ケヨウカ、クロノ・ハラオウン。ドチラカガ力尽きるまで」

「……良いだろう。相手をしてやる」

訊ねる様に声を掛けたのは、もう一人の対戦相手であるクロノ・ハラオウンへ向けてのもの。
鬼柳がデュエルを中断したとはいえ、もう一人の決闘者がこの場に残っているのだ。

デュエルを続行するのは当然の答えである。
地縛神はチラ、と視線を己の手札に向けると、ターンのエンド宣言をした。

地縛神手札2
場　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン

※

「っ、此処は……」

一方。スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹の中に飛び込んだ鬼柳。
彼は目の前に広がる、圧倒的な闇の深さに思わず息を呑んでいた。

視線の先には、何処までも続いているかのような深い闇が広がっている。
後ろや頭上を見上げてみても、光はどこにも存在しない。まるで闇の中を泳いでいる様だ。

「……行くか」

だが、何処までも続く闇に驚いている暇は無い。
今は一刻も早く、この闇の中に居るであろうなのはを救出しなければ。

鬼柳は本来の目的を思い出すと、闇の中を一歩一歩、確かめる様に足を進める。
一体どのくらい歩けば、なのはの姿を見つけることが出来るのだろう。そんな不安を覚えながら。

だが、そんな彼の不安は杞憂に終わった。歩いて五分ほど経った頃だろうか。
彼の視線の先に、闇とは違う。別のものが映り込んだのは。

「……なのは」

そこに居たのは、真っ暗な闇の中で膝を抱えて蹲っているなのはの姿だった。
こちらに背中を向けていて顔の様子を伺うことは出来ないが、怪我をしている様子は無いので一安心である。

しかし、鬼柳が安堵したのも束の間。
彼は僅かに呼吸を整えると、真剣な眼差しをなのはへ向けた。

「なのは、俺だ」

「……」

そして目の前に居る少女に呼び掛ける。だが、反応は無い。
彼女はただ、ひたすらに膝を抱えて蹲っている。此方の声に反応する様子は無い。

鬼柳はそんなのはの様子に表情を歪めながら、何度もなのはの名前を呼んだ。
その一方で、彼の脳裏には地縛神の告げたある言葉が思い出されていた。

地縛神は鬼柳に告げた。なのはは自らの殻に閉じ籠っていると。
その殻を壊さない限りは、なのはは元の少女に戻ることは無いと言うことを。

果たして自分は無事、なのはの殻を壊せるのか。
そんな不安を覚えつつも、鬼柳は何度もなのはに呼び掛ける。

必ずなのはを、この真っ暗な空間から連れて帰ると心に誓いながら。

「……き、りゅう……さん……？」

「っ、なのは！」

そしてとうとう、鬼柳の声になのはが反応を返した。
どこか虚ろな声ではあるものの、反応してくれたことに嬉しさを覚える。

だが、その嬉しさもすぐに霧散することとなった。
原因は鬼柳に名を呼ばれ、振り返った際に見えた彼女の瞳である。

今、鬼柳を見据えているのは空っぽになった様な、何処までも空虚な瞳だった。
魂を抜かれていると言えば、思わず信じてしまいそうなほど、その瞳は何も映してはいない。

「――――っ」

その空虚なのはの瞳を見て、鬼柳の顔が思わず歪む。
他でもない、悲しみによってだ。

まさか自分のあの選択が、ここまでこの少女を傷つけることになるとは。
なのはと接してきた時間が長いだけに、鬼柳は悲しみを押し殺すことが出来ない。

そして鬼柳がなのはの変貌に沈黙していると、なのはが首を傾げながら言葉を掛けてくる。

「きりゅうさん……、遅い、よ……？
ご飯、冷めちゃうよ……？」

「な、なのは？　何を言って……」

「きりゅうさんの、大好きな料理……、沢山、作ったんだよ？」

なのはは首を傾げながら、茫然と立ち尽くしている鬼柳の手を引いた。
そして鬼柳はなのはに手を引かれ、なのはの隣へと腰を下ろす。

鬼柳が自分のすぐ傍に来てくれたことが嬉しいのか。
なのはの顔に僅かだが笑顔が浮かんだ。だが、その笑顔はぎこちない。

「はぃ、これ……」

「っ、これは……」

そしてなのはが、闇の中から何かを取り出す。
鬼柳はなのはが手に取った何かを見て、思わず息を呑んだ。

なのはが手に取ったのは、真っ黒な固形物質。
一体何でできているのだろうか。食べたら身体に悪影響が出そうだ。

しかし、なのははそれに気が付かないのか。はたまた、別のモノに見えているのか。
ニコ、と微かな笑みを浮かべると、それを鬼柳に差し出した。

「えへへ、プレシアさんに……習ったんだよ……？
フェイトちゃんに、羨ましがられたけど……」

「……プレシア、に？」

「うん……、お嫁さんが旦那さんに……お料理作れないの、イヤだもん……」

なのはのその言葉に、鬼柳は現状をなんとなく把握することが出来た。
なるほど。なのはは自らの殻、否、妄想の中に囚われていると言ったところか。

そしてその妄想の中での彼女の配役は鬼柳の嫁。そして自分はなのはの旦那と言うところか。
たしかにそれは、なのはが夢見た光景だろう。好きな人と一緒になり、共に生活を送ると言うことは。

いつの間にか周りの景色は暖かなクリーム色へと姿を変え、穏やかな雰囲気を形作っている。
これが大方、なのはの思い描く夫婦像と言うものなのだろう。なのはらしい、暖かな雰囲気だ。

「……そうか」

鬼柳はなのはの手から黒い固形物質を受け取ると、視線をなのはへ向けた。
彼の視線の先には、依然として空虚な瞳をしたなのはがいる。だが、何処か嬉しそうだ。

そんな彼女の浮かべた微笑に鬼柳は笑みを零すと、そっとなのはの手を握る。
久しぶりに触れた彼女の手は冷たくて、まるで氷の様だった。

鬼柳はそんな冷えてしまったなのはの手を包み込むように両手で握ると。
なのはの手が暖かさを取り戻す様に、ゆっくりと彼女の手を擦る。

「えへへ……、鬼柳さんの手は、暖かいね。

もう少ししたら……、一緒に……お風呂、入ろうね」

鬼柳に両手を温めてもらって嬉しいのか。なのはがニコ、と笑みを零す。

そしてなのはは鬼柳に手を握ってもらいながら、一緒にお風呂に入ろうと告げた。

否、お風呂だけではない。食後は一緒にゴロゴロしよう。お洗濯もしなきゃいけない。

それに新しい下着も買ったんだ。可愛い姿、鬼柳さんに見てもらいたいな。そんな言葉を告げてくる。

鬼柳はそんななのはの言葉を、ただ静かに聞いていた。

その間、なのはは上機嫌でこれからの予定を組み上げていく。

――ゴロゴロするときは、何かテレビでも見ようか。それとも耳掃除が良いか。

――明日は大会なんだから、あんまり遅くまでエッチは出来ないよ。

等など。

それらを楽しそうに。

時に頬を赤く染めながら、なのはは鬼柳に告げる。

「……」

けれどそんななのはの言葉に、鬼柳は何も返事を返してくれない。

そして上機嫌だったなのはの様子が、目に見えて落ち込んでいくの

が分かる。

――疲れてるの？　それとも迷惑だったのかな。

――ご、ごめんね。気がつかなくて。お湯沸かしてくるから、早くお風呂に入って寝よう？

そう、なのはは提案してくる。

何処か怯えた様な。伺う様な視線を鬼柳に向けながら。

「――――ふぇ？」

そしてなのはが慌てて腰を上げようとした瞬間、彼女は腕を引っ張られた。

誰に引っ張られたのかなんて、とうに答えは出ている。彼女の視線の先には他でもない、鬼柳が居る。

そしてなのはは何処か間抜けな声を上げながら、鬼柳の腕の中に納まった。

鍛え上げられたたくましい胸板に、男性特有の汗のにおいがなのはの鼻に漂ってくる。

当初こそキョトンとしていたなのはだが、鬼柳の腕の中に居ると知ると。

浮かべていた笑顔からぎこちなさが消え、ようやく本来のなのはの笑顔が僅かに浮かんだ。

「ごめんな、なのは」

「ふぇ？　き、鬼柳さ――――」

「お前を、幸せにしてやることが出来なくて」

「――――ッッ！！」

だが、浮かんだ笑顔が凍りつく。

他でもない、鬼柳の告げた言葉によって。

何を言っているのか分からない。分かりたくない。

なのはの顔に浮かんでいる表情は、一言で表すならそれだろう。

「な、なに言ってるの……、鬼柳さん……。

わたし、幸せ……だよ？　鬼柳さんと一緒に居られて……」

「なのは……」

なのはは表情を強張らせながら、必死に心の安定を図ろうとしている。

そう。自分は幸せなのだ。鬼柳と一緒になることが出来て、幸せな家庭を築くことが出来て。

だが、そんなのはの必死な訴えは鬼柳の悲しげな視線で却下されてしまう。

そして鬼柳は尚も必死に言い募ろうとしているなのはを抱き寄せると、そっと彼女の頭を撫でた。

「気づいてるんだろ、なのは。
これは夢。お前の……妄想なんだ」

「も、妄想じゃ……ないよ！
ほら、プレシアさんやフェイトちゃんもこっち見て……！」

妄想に囚われている彼女に、現実を直視させるのは心が痛む。
だが、いつまでも妄想の中に囚われていては困るのだ。故に鬼柳は、心を鬼にする。

すると最初こそはここは妄想ではないと叫んでいたなのはだが、徐々に勢いを無くしていった。
見る見るうちに元気が無くなり、今は啜り泣いているかのように肩を小刻みに震わせている。

そんな彼女の姿が、何時の日か公園で見た少女の姿と重なり、なのはを抱き締める腕に力がこもる。
なのはを泣かせたのは自分。傷つけたのも自分。故に鬼柳は逃げることなく、なのはを受け止めようとする。

「……なのは」

「酷い、よぉ……」

「……」

そしてなのはが落ち着いた頃を見計らい、鬼柳は肩を震わせているなのはに声を掛けた。
だが、彼女の口から返ってくるのは鬼柳を責める声。思わず開いていた口を閉じ、彼女の言葉を受ける。

「ずっと……ずっと、好きだったのに……っ！
なんで、なんでフェイトちゃん……なのぉっ！？
私の方がずっと鬼柳さんと一緒に居たのに……！　私の方が好きだったのに……！」

「……」

「大切な人に……鬼柳さんの大切な人になれたらって……ずっとずっと思ってたのに……！
なんでフェイトちゃんなの！？　どうして、どうして私じゃないの！？　酷い！　ずるい！　なんで……なんでぇっ！」

ポロポロと涙を零しながらの、なのはの本音を鬼柳は受け止める。
一人の少女の何処までも真っ直ぐな気持ちは、鬼柳に眩しさを覚えさせるほど。

こんな自分の何処が良いのか疑問に思うが、誰かに好かれて悪い気はしない。
そして同時に鬼柳は思う。どうして自分は、腕の中で泣いている彼女の願いを叶えてやることが出来ないのだろうと。

肩を震わせて、啜り泣くなのはの姿は見た目よりもずっと幼く見え

る。
それこそ、親とはぐれて迷子になった幼子の様だ。
そんな彼女の姿を見て、鬼柳は思う。
泣かないで欲しい。笑って欲しい。と。
けれど、彼女の願いを叶えてやることは出来はしない。
すでに自分には妻が居る。彼女の願いを受け止めることはできない。

「鬼柳さんに喜んでもらおうと思って、お料理の勉強もしたのに……！
いつでも可愛い姿を見て欲しかったから、毎日身体を綺麗にしたのに……！」

「着る服にも気を付けた……！
可愛い、綺麗。特別な目で見て欲しかった！」

そして鬼柳が静かになのはの頭を撫でている中、涙を流しながらなのはが叫ぶ。
それは幼い少女が懸命にしていた鬼柳へのアピール。気づいて欲しい。見て欲しい。

そんな一抹の期待を込めてのモノ。
けれど、そんな彼女の頑張りは無駄に終わってしまった。

もう、彼は自分の手の届かない場所へ行ってしまった。
ずっと自分の隣に居て欲しかった。ずっと自分を見ていて欲しかった。

そんな心に溜まった不平不満を、なのはは吐き出す。

「なのにどうして……！？　どうして私じゃないの……！？
どうして……、どうしてフェイトちゃんなの……！？」

そして全ての不平不満を吐き出し終えたのか。
なのはは鬼柳の胸に顔を埋めて、泣きじゃくる。

鬼柳はそんななのはに何か言葉を掛けることなく、ただ彼女の頭を撫で続けた。
辛い思いをさせてごめんな。悲しい思いをさせてごめんな。内心でそう、彼女に謝りながら。

そして彼は心底思う。どうして自分は、なのはの望みを叶えてやることが出来ないのか。
出来る事なら、自分の持てる力全てを使って、彼女を幸せにしてやりたい。望みを叶えてやりたいと。

けれど、彼にそれを行うことはできない。
彼にはフェイトが居る。自分の傍で屈託のない笑顔を浮かべてくれる彼女が居る。

そんな彼女を悲しませることなど、彼には出来なかった。

「……なのはが不平不満を言うのも、俺には分かる。
誰だって、好きなヤツを横取りされたら、そりゃ悲しいよな」

なのはが本音を吐き出し、今度は鬼柳が本音を告げる番になった。
彼は胸の中で泣いている彼女に言い聞かせるように。このクリーム色の空間に視線を走らせながら告げる。

フェイト以外で誰かを好きになった経験など、彼は持っていない。
だが、それでも彼女の苦痛や悲しみを想像することはできる。

あくまで想像なだけで、実際の痛みを彼は知らない。
けれど普段、泣き顔を見せることが無い彼女がこうして泣き顔を見せているのだ。

それは一体、どれほどの苦痛だったのだろうか。悲しみだったのだろうか。
こんなとき、相手の苦痛や悲しみを理解できない自分の身が恨めしい。

「けどな。俺はそれでも、フェイトの傍に居たいんだ。
そりゃ、最初はたしかに違和感があった。けど、今はもう考えられないんだ」

「き、りゅうさ……」

「アイツの傍から、離れるなんて」

鬼柳がその言葉を告げた直後、なのはが顔を俯かせて肩を震わせる。
心に傷を負った少女にするとは思えない、追い打ちとも取れるその

言葉。

しかし、ここでキチンと自分の意思を告げなければ、余計に彼女を傷つける。

一時の感情に身を任せて甘い言葉を吐くことは簡単だ。だが、後になってしわ寄せが発生する。

その時に彼女を泣かせたくない。辛い思いをして欲しくない。

故に鬼柳は、ここでなのはを拒絶する。もうこれ以上、傷つかなくても良い様に。

「……そっか」

そして長い沈黙の後、ポツリとなのはが掠れた声で鬼柳に答える。

あまりに涙を流し過ぎて、喉が枯れてしまったようだ。普段の声とは全く違う。

鬼柳はそんななのはの声に意識を向けながら、視線をなのはへ向けた。

視線の先では、涙で瞳を真っ赤にしたなのはが、悲しみを抱えた表情でこちらを見ている。

抱きしめてやりたい。優しい言葉を彼女にあげたい。

だが、それをすることは決してしない。

「もう、鬼柳さんの心の中に、私の居場所は無いんだね……」

ニコ、とぎこちない笑顔を浮かべながらも、なのはは告げた。
すでに鬼柳の心の中を支配しているのは自分ではない。フェイトだ。
故にもう、彼の心の中に自分の居場所なんて存在しない。
それに現実だってそうだ。すでに彼の隣はフェイトが独り占めしている。

もうどこにも、なのはの居場所なんて無かった。
それが、なのはの心に絶望を与える。

好きな人の隣にも、好きな人の心の中にも居場所が無い自分は何処へ行けばいいのだろう。

そして、そんな絶望を覚えた彼女の脳裏に、聞き慣れぬ悪魔の声が響く。
――簡単だ。堕ちてしまえばいい。誰の手も届かぬ、真っ暗な闇の中へ――と。

なのはは脳裏に浮かんだその声に、思わず苦笑いを浮かべる。
あぁ、確かにそれが一番かもしれない。何処にも居場所が無いなら、消えてしまえば良い。

現実からも、妄想の世界からも。何処からも。

――――ゴゴゴゴゴ……！

「っ。なんだ、この地鳴りは！？」

なのはが脳裏に浮かんだ声に同意すると同時、淡いクリーム色の空間を地響きが襲った。
突然の地響きの音に、鬼柳が警戒した様子で視線を周囲へと走らせる。

だが、それでいてなのはの手を離そうとしないのは彼の性格が故か。
こんなときだと言うのに自分を護ってくれようとする鬼柳に、なのはは思わず笑みを零す。

「さよなら、鬼柳さん」

そしてなのはが謝罪の言葉を告げた瞬間、彼女の足元がパックリと割れ、何処までも続く奈落の闇が姿を現す。
恐らくこれが、自分をこの世から消し去ってくれるモノだとなのはは直感的に理解した。

そして鬼柳が繋いでいてくれた手を振り払い、なのはは足元に開いた奈落へとその身を躍らせた――――。

※

場所は変わり、廃倉庫での地縛神とクロノのデュエルの様子。
鬼柳が居なくなり圧倒的不利を強いられたクロノが、地縛神の猛攻を耐えている。

鬼柳のターンは彼が居なくなったことで飛ばされ、地縛神にターンが連続で回る様になっていた。
その結果、地縛神の手札は増え、様々なサポートカードを駆使してクロノを追い詰めている。

すでにクロノ達のライフは残り１０００を切っている。
これ以上長引かれては、デュエルの勝敗にも影響しかねない。

「ククッ、ドウシタ。ライフガ心許ナイ様ダガ？」

「くっ、そんなことは百も承知さ！」

クロノ&鬼柳ＬＰ１０００

地縛神ＬＰ２０００

クロノ手札３
場　極神聖帝オーディン　伏せ×２（鬼柳と共有）

地縛神手札２
場　スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン　最終突撃命令

幾度も地縛神の猛攻に晒され、すでにクロノの黒いバリアジャケットはボロボロだ。
頬や顔にも幾筋の切り傷が出来ており、薄っすらと出血さえしている。

だが、それでも彼は逃げようとする素振りを見せない。

何が何でも耐え切って見せる。
そんな心意気が、クロノのデュエルからは見て取れた。

「京介……っ！」

そんな圧倒的不利なデュエルを、フェイトは手をこまねいて見ていることしかできない。
鬼柳のデッキでデュエルに割り込もうとしたが、鬼柳のデッキを操ることは難しいと断念していた。

鬼柳の操る「インフェルニティ」デッキは、手札０と言う特殊な状況を要求するデッキだ。
故に構築センスや高度なプレイングが問われるデッキでもある。そんな特殊なデッキを、上手く回せる自信は無い。

故にフェイトは、ただクロノ達のデュエルをもどかしく見ていることしかできなかった。
京介、早く帰って来て。そしてあの、地縛神をやっつけて。両手を握りながら、フェイトは鬼柳に願う。

そしてフェイトが願った瞬間、彼女の腕に刻まれている赤き巫女のアザが、淡く発光しはじめた――――。

※

「きゃっ」

ガクン、と身体が大きく揺さぶられ、なのはは悲鳴を上げた。
次いで右手から伝わる痛いまでの力が、なのはの意識をそちらへ向かわせる。

視線を上げた先にあったモノ。
それを見て、なのはの瞳が大きく見開かれた。

彼女の視線の先に見えたのは、闇の淵に手を掛けて自分の手を握っている鬼柳の姿。
唯一の足場は彼が掴んでいる闇の淵。その淵から手を離せば、自分と鬼柳は闇へと真っ逆さまだ。

「き、鬼柳さん!?　は、離して！　落ちちゃうよ!?」

「そんなこと、出来る訳ないだろ！」

「っ！」

あまり聞くことは無い、鬼柳の怒りに満ちた声。
彼から発せられる怒気に思わず、なのはは首を竦めた。

こうして鬼柳に正面から怒られるなんて、久しぶり――否、初めての事だ。
いつもはやんわりとなのはを諭してくれる鬼柳が、こうして怒りを露わにしている。

平時ならば、とても珍しい光景だ。
こんな状況でなければ、しげしげと観察したいくらいに。

「――ったく。勝手に自己完結してるんじゃねぇよ」

そしてなのはが黙ったのを確認したのか。ため息を吐きながら鬼柳が呟いた。
だが、その言葉に思わずなのはの表情が暗くなる。

だって、仕方ないじゃないか。
自分の好きな人の心や傍には、もう自分の居場所なんて無いんだから。

「お前の居場所はあるぜ。勝手に無いとか決めつけるな」

「だって、だって……！
もう、鬼柳さんの心の中にも、隣にも私の居場所は無いんだよ！？」

悔しさからか。なのはの瞳から再び涙が溢れだす。
もう自分の事を意識して貰えない。特別な目で見てくれない。
それが悲しみとなって、なのはの心の中に溢れだす。

「あるさ」

「何処に――――」

「俺の隣だ」

「――――っ」

鬼柳の告げたその言葉に、キッとなのはは口元を歪めた。
違う。もうすでに、その場所は彼女が、フェイトが独り占めしている。

そこに自分の居場所なんて存在していない。
鬼柳は気づいていないのだろうか。そこに既に、先約が居ることに。

「……ダメだよ、鬼柳さん。
そこは……フェイトちゃんの、場所だよ……」

「そうだな。俺の隣は既にフェイトの場所だ。
けど、反対なら空いてるだろ？」

「それは……」

どうやら鬼柳は、フェイトの存在を忘れてはいなかった様だ。
相変わらず大切に思われているフェイトに、なのはは思わず嫉妬する。

だが、次に言われた言葉に、思わず口を噤んだ。
たしかに鬼柳の言うとおりだろう。あくまでフェイトが独り占めできるのは片方の隣。

もう片方は必然的に空いてしまうことになる。
けれど、それは屁理屈の様にも聞こえてしまうのは僻みが入っているせいだろうか。

素直に彼が提示してくれた居場所を、受け入れることが出来ない。

「それに俺の心はフェイトに独り占めされちゃいねぇ。
なのはやはやて、リインフォース。アイツらみんな、俺の心の中にちゃんといる」

「鬼柳さん……」

「俺は幸せなんだ。以前に一度間違えた俺が、こうしてなのはたちと笑いあえるのが。
だから俺は――――！」

鬼柳はその言葉と共に、なのはを掴んでいた手に力を込める。
何をするつもりなんだろう。なのはは疑問に思うが、すぐにその疑問は解消された。

「絶対に！　お前たちを！
諦めてなんか……やらねぇぞっ！」

「にゃ、にゃぁあああっっ！！」

己を叱咤する様に。なのはを叱咤する様に鬼柳は喝を入れると。
その手で掴んでいたなのはを、力の限り上空へと放り投げた。

鬼柳の言葉に感動していたなのはは突然の事態に、情けない悲鳴を上げながら宙を舞う。
鬼柳の心の中や隣に自分の居場所があったのは嬉しいが、こうして投げ飛ばされるのは如何なものか。

しかしそれも束の間。ドシン、とお尻を強打しながらも、なのははクリーム色の空間に帰還することが出来た。

「あつつ……！　き、鬼柳さん！
もうちょっと優しく――――」

着地した際にお尻を強打し、お尻を擦りながらなのはが抗議の声を上げる。
だが、そこにあるのはもはや先ほどまでの暗い感情に支配されていたなのはではない。

鬼柳の心の中や隣に居場所があることを示され、なのはの精神は安定している。
また、以前の様に笑いあうことが出来る。甘えることが出来る。それを確認することが出来て、なのはは頬が緩むのを抑えられない。

そして照れ隠しの様に鬼柳に抗議しようとしたとき。
彼女に向かって、一枚のカードが飛来した。思わずなのはは飛来したカードをキャッチする。

そのカードは――――

「っ、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫……！」

なのはのデッキの切り札たるカード――レッド・デーモンズ・ドラゴン。
このカードはロットンに奪われていたのだが、こうして手元にあると言うことは鬼柳が取り返してくれたのだろう。

大切なカードが手元に戻って来て、なのはの心に安堵が浮かぶ。
返って来てくれてありがとう。どうかまた、自分に力を貸してほしい。

大切な物を、護るために――――と。

「居場所が無いって感じたら、俺に言え。
そうすれば俺がちゃんと、なのはの居場所を教えてやるよ」

「鬼柳さん……」

「なのはの気持ちを受け取ることは出来ない……。
けどよ、なのははフェイトとはまた違った意味で大切なヤツなんだ」

「……うん、そうだね」

鬼柳が黒い闇から抜け出し、カードを抱いているなのはへ声を掛ける。
何度目になるか分からない鬼柳の拒絶。だが、今回は不思議とショックを覚えなかった。

鬼柳に居場所を教えてもらい、フェイトとは違う意味で大切と言われたからだろうか。
そのおかげで、なのはは久しぶりに穏やかな笑顔を浮かべることが出来た。

今まで隠し、表に出すことを避け続けていた本音を吐き出し、なのはは満足感を覚える。
そして今になって思う。自分の本音を全て曝け出していなかったから、心のどこかで不満を覚えていたのだと。

故にこうして本音を全て。洗いざらい吐き出すことで、なのはの心はすっきりした。
依然としてフェイトに対する嫉妬はあるが、それは当初よりもずっと少ない。

自分の全ての本音に、鬼柳も全力で本音を返してくれたおかげだろう。
満ち足りた思いが、なのはの心を満たしていく。

――――だが、いつまでもこの場に留まる訳に行かない。

「さぁ、帰るぜなのは。地縛神に決着を着けなくちゃな」

「うん、そうだね。鬼柳さん」

床に腰を下ろしていたなのはに手を差し出しながら、鬼柳は告げる。
それになのはも同意を示しながら、差し出された鬼柳の手を掴んで彼女は腰を上げた。

そしてなのははは想う。ヴィヴィオは無事だろうか、と。
否、それだけではない。プレシアにも心配を掛けてしまった。

もしかしたらそれ以上の人たちにも心配を掛けてしまったかもしれない。
ならばやるべきことはただ一つ。いち早く現実世界へと帰還し、皆に無事を知らせなければならない。

「行こう、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！
私を、私と鬼柳さんを元の世界に戻して！」

なのはは鬼柳から受け取った、灼熱の悪魔が描かれたカードを掲げる。
そしてそれに呼応するかのように、彼女の腕に刻まれた赤きアザが発光を始めた。

集まってくるのは、フェイトやはやて。そして鬼柳の腕に刻まれた残りのアザ達。
それらが一つに合わさり、祈りを捧げている巫女の姿を現すと。

なのはが掲げていたレッド・デーモンズ・ドラゴンのカードが激しい発光を始める。
そして響き渡るのは気高き王者の咆哮。真の主に返還された竜が、歓喜の咆哮を上げたのだ。

「お願い、≪レッド・デーモンズ・ドラゴン≫！
灼熱のクリムゾン・ヘルフレアァアアアアアッッ！！」

召喚された灼熱の悪魔に、なのはは指示を出す。
全ての本音を曝け出し、己の殻を破った彼女にもはや、怖いモノなど存在しない。

そしてそんな彼女の叫びに呼応するように、レッド・デーモンズもまた拳を振り上げる。

その手に宿るのは紅蓮の炎。紅蓮に燃える炎を纏った右手で、レッド・デーモンズ・ドラゴンはこの空間へ拳を打ちこむ。

そして、クリーム色の空間にヒビが入った。

※

「！　赤き巫女のアザが！」

クロノと地縛神のデュエルを観戦していたフェイトは、己の腕に起こった変化に気がついた。

彼女の腕に刻まれた赤きアザが、淡く発光しているのである。それと同時、流れ込んでくる想いを感じた。

――力を貸して。

――鬼柳さんと自分を、現実世界に戻すために力を貸して。

と言う、恐らくはなのはが力を求める声だ。

なのはの力を求める声の中に自分の夫の名があったことにフェイトはムッとするが、同時にホッとしていた。

どうやら鬼柳は無事、なのはの殻を打ち破る事に成功したようだ。
ならば後は帰還するだけ。そのために力が必要と言うのならば、喜んで力を貸そう。

「京介……っ！　なのは……っ！」

フェイトは淡く発光しているアザを手で覆いながら、必死に二人の名を呼ぶ。
無事に帰って来て。鬼柳もなのはも。どちらもフェイトに取って、掛け替えのない人たちなのだから。

そしてフェイトの祈りが天に通じたのか。
地縛神のフィールドで神を圧倒していた悪魔竜が、不意に動きを止めた。

「ヌ？　≪スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン≫……？」

「一体どうしたんだ……？」

不意に動きを止めたスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンを不審に思ったのか。
デュエルを中断し、地縛神とクロノが訝しげな視線をスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンへ向けている。

だが、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンは主である地縛神に答えることが出来ない。

明らかに異常事態だ。そして地縛神がスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの異変を確かめようとしたとき――――

『■■■■■■～～～～ッッッ！！！』

「うぉおおおっっ！！」

スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの腹が内側から破壊され、中から鬼柳が姿を見せた。
鬼柳はスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンが空中に浮いていたせいで、ドチャリと地面に落下してしまう。

だが、紛れもなく無事な鬼柳の姿に、フェイトは思わず安堵の笑みを零した。
ちゃんと約束通り、無事に帰って来てくれた。鬼柳が自分を独りぼっちにしなかった。

それが何よりも嬉しい。

「んな！？　き、鬼柳！？」

「京介！」

クロノが驚いた表情を浮かべているが、フェイトは気にしない。
慌ててその場から駈け出すと、地面の上で蹲っている鬼柳の元へ向かう。

するとフェイトの駆け寄る気配に気づいたのだろう。
鬼柳はフェイトの姿に気がつくと、笑みを零しながらフェイトの事を胸に迎え入れてくれた。

「京介ぇ～～！！」

「心配かけて悪いな。俺はこの通りだ」

鬼柳の胸に顔を埋め、フェイトは安堵から思わず涙を零してしまう。
独りぼっちにならなくて良かったと言う安心感と、鬼柳の無事を知らせる暖かさに。

何処となく彼の胸元からなのはの匂いが感じられるが、それは今のところ無視しておこう。
フェイトは鬼柳の暖かさや匂いをその全身で確かめながら、先ほど思ったことをそっと胸の内に仕舞う。

「遅いぞ、鬼柳」

「悪いな、遅くなった」

「まぁ、なんとかギリギリってところか」

そして鬼柳が泣いているフェイトを慰めていると。
今まで地縛神とデュエルをしていたクロノが鬼柳に声を掛ける。

何処か呆れた様な視線を鬼柳に向けているが、無事に帰還したと言う安堵の色も見て取れた。
色々なヤツに心配を掛けてしまったな。鬼柳はフェイトの頭を撫でながら、心の中でそう思う。

「なのは、そっちは平気か？」

「う、うん！　大丈夫！」

フェイトとクロノ。二人に無事に帰還した様子を知らせると、鬼柳はなのはへ声を掛けた。
彼の視線の先には、地面にお尻をペタンと下ろして自分の身体を確かめているなのはの姿がある。

どうやらなのはの精神が帰還したせいで、なのはの身体を乗っ取っていた地縛神が外へ弾きだされた様だ。
地縛神が先ほどまで腕に付けていたデュエルディスクは、なのはの意識が復活したことで消滅してしまっている。

これで無事に決着か。そう鬼柳が安堵の息を吐こうとしたとき。
その場に似つかわしくない、憎悪に満ち溢れた声が響き渡る。

「オノレ、オノレェエエエエエッッ！！」

「ふぇ！？　ヴぃ、ヴィヴィオ！？」

その場に現れたのはヴィヴィオ。だが、彼女の口調は普段の彼女らしくないモノだ。
突然のヴィヴィオの変貌になのはが驚いた様子を浮かべるが、鬼柳とクロノは逆に納得していた。

大人しく終わるはずはないと思っていたが、まさか宿主であるヴィヴィオの精神すら乗っ取ってしまうとは。
それほど地縛神の力を解放し、この世に破滅と混沌をもたらしたい様子だ。

「ちっ、今度はヴィヴィオの心を乗っ取ったってのかよ！」

「え、えぇえ！？　ヴぃ、ヴィヴィオ！」

鬼柳の悪態にも似た呟きに、なのはが驚愕の表情で現れたヴィヴィオを見た。
だが、どうやら鬼柳の言うことは本当の様で、ヴィヴィオはヴィヴィオらしからぬ表情をしている。

なのははそんな、地縛神に乗っ取られたヴィヴィオの姿を見て怒りを覚えた。
ヴィヴィオはもう十分苦しんだのに、なんでこれ以上苦しませる様なことをするのだろう。

もう良いではないか。沢山辛い目や酷い目にあって、もう沢山ではないか。
彼女を解放して欲しい。地縛神の呪縛から、地縛神の運命から。

しかし、それを地縛神は許そうとしない。

「皆殺シダ！
地上ノ人間――否、世界ノ全テヲ破滅サセテヤル！」

「っ、そんなこと――「そんなこと、させない！」っ、なのは!?」

なのはは地縛神の身勝手な願いに、怒りを覚えながら叫ぶ。
そんなこと、ヴィヴィオは望んでなどいない。彼女はただ、静かに暮らすことを望んでいる。

故になのはは許せない。そんなヴィヴィオの願いを踏みにじる様な地縛神の言葉が。
彼女は落ちていたデュエルディスク――形状からして鬼柳のモノ――を腕に装着すると、地縛神と相対する。

鬼柳が自分を闇の奥底から引きずり上げてくれたように。
自分もまた、ヴィヴィオを絶望の底から引きずり上げなければならない。

それは義務であり、責任であり、――――なのはの願望である。

「ククッ、面白イ！
ナラバデュエルノ続キト行コウデハナイカ！！」

そしてなのはの叫びに応える様に、地縛神もまた。
消滅していたデュエルディスクを新たにヴィヴィオの腕に復元する。
現れるのはなのはと鬼柳が現れる直前のデュエルフィールド。
スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンがその姿をフィールドに出現させ、
いつでもデュエルが再開できる。

鬼柳とクロノは突然の流れに驚き言葉を失っているが、そんな中。
鬼柳の胸に抱かれて泣いていたフェイトが、慌ててなのはを押し止めようとする。

「な、なのは!?
京介の「インフェルニティ」デッキは、使うのがとっても難しいんだよ!?」

「大丈夫だよ。鬼柳さんのデッキ、何度か使ったことがあるから」

フェイトの言うことは最もだろう。
手札アドバンテージを放棄するなど、正気の沙汰とは思えない。
だが、なのははは鬼柳の使うインフェルニティを手にしながら、不安を感じさせぬ笑顔でこう告げた。

「それに、鬼柳さんが付いててくれてるから。だから、大丈夫」

「なのは……」

ニコッとほほ笑みを浮かべながら告げられた言葉に、鬼柳は思わず嘆息する。
たしかになのははは以前に何度かインフェルニティを使ったことはあるが、回数は少ない。

しかし、なのはの顔には微塵の恐怖も浮かんではいなかった。
浮かんでいるのはただただ、鬼柳の操るデッキと鬼柳に全幅の信頼を寄せている笑顔だけ。

そこまで信頼を寄せられていては、口出しする方が野暮と言うものだろう。

「……分かった。なのは、俺のデッキを使え」

「きょ、京介!?」

「ただし、一つだけ頼みがある」

「……なに？　鬼柳さん」

「絶対勝てよ」

故に鬼柳は条件――絶対に勝利しろと言う条件を提示し、なのはにデッキを貸す。
その条件になのはは笑みを浮かべてコクリと首を縦に振り、フェイトは驚いた様子で鬼柳を見つめる。

こちらを見つめるフェイトの瞳は、雄大にこう物語っていた。
――それで良いの？　と。

それに鬼柳は、首を縦に振って肯定の返事を返す。
自分の殻を打ち壊し、自らの闇から脱出したなのはに怖いモノなど一つもない。

フェイトは納得していなかった様子だが、鬼柳が何も言わないせいか。
プックリと頬を膨らませながら、視線を自縛神となのはへ向けた。

そして、デュエルが再開される。

三十話　「想い」（後書き）

次回予告

己の本音をすべて吐き出したなのはの前に、もはや敵はいない。
眼前にそびえ立つスカーレッド・ノヴァ・ドラゴンになのはは立ち向かっていく。

そして皆の絆が一つに合わさり、召喚される希望の竜。
そのドラゴンの力を持って、なのはは地縛神の呪縛を打ち破る――！

次回満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～
「絶望を打ち砕く希望の光」

ライディングデュエル、アクセラレーション！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8156p/

満足伝記　～リリカルな世界で満足しようぜ～

2011年11月3日03時21分発行